昭和二年二月二十日印刷
昭和二年二月二十三日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第六卷

編輯兼發行者　國民圖書株式會社
東京市麴町區內幸町一丁目六番地

右代表者　野中次郎
東京市麴町區內幸町一丁目六番地

印刷者　井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　國民圖書株式會社
東京市麴町區內幸町一丁目六番地
電話銀座二一八八番
　　　　七八八三番
　　　　三六八六番
振替東京五二二九八番

〔れそ〕（冥途飛脚）七一九頁　「それ」（其れ）の倒詞。「それ」を「れそ」といひ、「これ」を「れこ」と隱語的に倒詞を用ゐる。蓋し或物について其の名を明らかに言はないでも、「れそ」「れこ」と言へば話相手の者に其の意通じる時に用ゐる粹言葉である。冥途飛脚の爰の文の「れそ」は、八右衞門と情交ある遊女をいうたのである。

〔ろませ、さい云々〕（冥途飛脚）七二四頁　「ろませ」は六、「さい」は掛聲、「とうらい」は十、「さん[illegible]」は三、「はま」は八、「さん」は三、「きう」は九、「ごう」は五、「りう」は六、「すむゐ」は四であつて、本拳にいふ唐音又はその訛りである。

〔わせる〕（嵯峨天皇甘露雨）九八九頁　「おはせる」（御座）の約(つゞま)つた語。ござる。來(こ)られる。

〔わや〕（雪女五枚羽子板）三四七頁　無茶。無茶苦茶。この語現今も中國地方で無茶の意に用ゐ、岐阜縣加茂郡東白河村地方では無分別の意にいふ。

〔藁を焚く〕（冥途飛脚）七二九頁　難癖をつけて貶(けな)すをいふ。俚言集覽に、「むだ口をいふ事、又古道具を買ふに色々惡しく言つて直(ね)ぎるをいふ。」と見えてゐる。

〔わるごう〕（雪女五枚羽子板）三二六頁　「わるごと」の義。いたづら。わるでんごう。

〔わんざん〕（薩摩歌）二八三頁　和讚に「ん」の増加した語。さかしら。

〔牡鹿(をじか)の園(その)の法(のり)の導(みちびき)〕（心中二枚繪草紙）四二三頁　妻戀ふる牡鹿に鹿苑をいひかけて、法の導といひつゞけたのである。鹿苑は釋尊成道して佛陀伽耶の道場を離れて、最初に說法された靈跡の地である。

註釋　終

ラウマシ」をきかせた謎である。

〔桃園（もゝその）〕（雪女五枚羽子板）　三五四頁　貞純親王をいひ、清和天皇の第六皇子である。其の邸京都の桃園にあつたによつて桃園といふ。貞純親王の子經基に姓を源氏と賜はつた。これ清和源氏の祖先である。

〔やいとぎやう〕（今宮心中）　六四〇頁　（灸饗）灸をすゑた時に食ふもので、霰（餅を采目に刻んで炒つたもの）と熬米と熬豆（黒豆を熬つたもの）とを交へ、これに山椒または生薑を加へ、砂糖で固めたものをいふ。關西地方でこれを「おいり」といふ。

〔やぼてりがき〕（心中重井筒）　二九七頁　古淨瑠璃助六心中（蟬のぬけがら）道行の文に、「やぼてんじんからつじんか。」とあるを取つて、「やぼてりがきか薄柹か。」としたもので、濃い澀染の意にいうたのである。

〔やもじ〕（賀古教信七墓廻）　二三二頁　やみの文字詞。闇。文字詞は足利時代皇室式微の際、女官達がその名を言ふを忌みて何文字といふた隱語より起つたものだといふ。

〔讀賣（よみうり）〕（卯月絶）　四六一頁　觸賣とも繪草紙ともいひ、天災地變や敵討葛藤の類や役者評判情死罪人の仕置など、總てその當時起つた世上の珍聞異事を拙劣な繪畫に描き、小割書をした所謂瓦版印刷物で、僅か一二枚の粗惡な小册子である。

〔らむうげんだ〕（心中重井筒）　二九九頁　「らむ」は以呂波順の音を言うて、「う」につゞけたまでである。うげんだはおやま形（女形）の俳優山下右源太をいふ。

〔りうくわう〕（當流小栗判官）　一二三頁　（流黃）玉の名。辭源に、「流黃。玉也。（淮南子）流黃出而朱草生。」

〔歷節風〕（嵯峨天皇甘露雨）　九八〇頁　れきせつふうは痛風とも稱し、關節の疼痛激甚な病氣であつて、その病狀恰も白虎に咬まれるやうに疼むものを白虎歷節風といふ。

親王の敵山彦皇子に一味し、吹目の術というて己が兩眼を虚空に飛ばす魔法を行ひ、花人親王の館を探つて其の狀況を報告した、なほ心中二枚繪草紙のこのあたりにあるまのの長者、花人親王など皆用明天皇職人鑑の中にある人物である。

〔松浦潟〕（嫗山姥）八〇八頁　肥前國松浦郡の濱邊をいふ。欽明天皇の朝、大伴狹手彥高麗征伐に出征するを、その妻佐用姬別れを悲んで、松浦の山に登り領巾を振つて歎いたが、その一念化して石となつたと云ふ。

〔丸太〕（吉野都女楠）七七六頁　丸太とは小唄を便りに色を賣る比丘尼をいふ。丸太は卽ち圓木で、僧を木の端といふより、比丘尼をも圓木の意にとりなした稱である。

〔萬年草〕（心中萬年草）五三二頁　紀州高野山などに自生する苔類である。本朝世事談綺に「萬年草——高野山の御廟にあり、一とせに一度日あつてこれを採ると云ふ、此の枯れたる草を水に浮めて他國の人の安否を見るに、存命なるは草水中に活きて生ひたるが如し、亡したるは枯葉そのまゝなり。」と見えてゐる。

〔蟲籠〕（堀川波鼓）四八九頁　蟲籠窓の畧。大屋根と小屋根との間に造れる格子窓をいふ。

〔明解〕（賀古敎信七墓廻）二一八頁　京普光寺の詩僧なり。明解歿して其の親知の夢に、明解が地獄に墮して詩を作り、供養を賴むを見たといふ。

〔めいよ〕（氷の朔日）六五八頁　名譽である。ほまれの義より轉じて、奇妙、かはつたこと、奇怪、不思議の意にいふ。「めいよ」は「めいよう」「めんよう」などと訛つてもいふ。

〔もがり〕（心中重井筒）三〇三頁　垣のやうに竹を立て竝べた紺屋の物干。

〔餅屋のお福〕（傾城反魂香）四〇六頁　往時餅屋の看板に、馬の面にお福の面を被せたものをした。蓋し「ア

字なり、すゝむとつゞけんが爲に君の字を一字加へて云ふなるべし。」と見えてゐる。

〔べうの湯元〕（心中二枚繪草紙）四二二頁　別府（べふ）温泉の湯元である。別府を犬の鳴聲「べう」にいひかけたのである。犬の吠える聲を「べう」というた例は狂言犬山伏などにも見えてゐる。

〔卞和〕（雪女五枚羽子板）三四七頁　支那春秋戰國時代楚の卞邑の人である。玉璞を楚山中に得て之を厲王に獻じた。然るにこれは玉でなく石だ、王を誑したものとして卞和の左足を刖つた。武王の時卞和またその玉を獻じた。この時も石だとして卞和の右足を刖つた。文王の世となつた時卞和其の璞を抱いて、楚山の下で哭したといふ。

〔ほじそあかなる顔付〕（心中萬年草）五二二頁　般若心經呪文句の菩提娑婆訶（ボジソハカ）に、赤なる顔付（怒つて顔色赤くなる）をいひかけたのである。

〔細谷川（ほそたにがは）の丸木橋、ふみかへれとぞ祈りける〕（心中萬年草）五一四頁　飛脚の九兵衛が心細くなるを細谷川にいひかけ、そして源平盛衰記なる平通盛の歌「我が戀は細谷川の丸木橋、ふみ返されてぬるゝ袖かな。」に據つたもので、踏みかへさるを文返さるにきかせたのである。

〔ほでてんごう〕（丹波與作）五四六頁　「ほでてんご」ともいふ。ていたづら（手惡戲）。「ほで」は手をいふ。俚言集覽に、「ほでてんがう。いたづらをする事、京にていふ。」と見えてゐる。

〔まぎら〕（心中重井筒）三一二頁　糊塗。ごまかすこと。紛らかすこと。和訓栞に、「まぎらはし。紛をよめり、目霧合の義なるべし、はし反ひなり、俗に含糊の意まぎらといふも同じ。」と見えてゐる。

〔ますら〕（心中二枚繪草紙）四二六頁　巣林子作用明天皇職人鑑の中にある惡外道の名である。この外道は花人

敵を附狙ふ芝居で、元文元年に文耕堂の作つた敵討襤縷錦はこの非人敵討を淨瑠璃に作つたものである。この文は、非人敵討の芝居はこの當時名高かつたによつて、これを勝二郎のもとの手代新七に當てて罵詈したのであつて、「どこぞでそこらの橋の下新七居やらぬか。」は荒木與次兵衛の口吻を傳へたものである。

〔びやくらい〕（歌加留多）九七二頁　（白癩）天刑病即ち癩病である。神佛の冥加に盡きた者がこの病に罹るといふ迷信よりして、僞るに於ては白癩に罹る法もあれの義にて、自誓の詞に用ゐたものである。

〔ひよんな〕（卯月絶）四五四頁　凶な意にいふ。忌々(いまいま)しい。變な。

〔ひわづ〕（賀古教信七墓廻）二〇四頁　弱々しきをいふ。尩弱。和訓栞に、「ひわづ。源氏物語に見ゆ、尩弱の意にいへり、或は嫋人をひわづひととよめり。」

〔豐干禪師が四睡〕（傾城反魂香）三八四頁　豐干禪師と寒山と拾得と虎と皆睡れる故事に據つたのである。下學集、數量門に、「四睡。寒山、拾得、豐干、虎、四個相依打睡、其趣可レ愛、後人寫以爲二四睡圖一云々。」

〔梟(ふくろ)松桂の枝に鳴き、狐蘭菊に隱れ栖んで〕（雪女五枚羽子板）三三四頁　荒涼たる地と變じて、松桂蘭菊の叢中に梟や狐の棲處となるの意。白氏文集に、「梟鳴二松桂枝一、狐藏二蘭菊叢一。」謠曲殺生石に、「梟松桂の枝に鳴きつれ、狐蘭菊の花に隱れ住む。」

〔ふりばり〕（丹波與作）五五二頁　「ふんばり」ともいふ。總嫁。立君。

〔船のせんの字を君(きみ)にすゝむと書きたり〕（今宮心中）六二九頁　この文句謠曲自然居士に見えてゐる。謠曲拾葉抄に注して、「說文曰、前(セン)ハ本(モト)作レ歬(セン)、不レ行而進(スゝ)ム謂二之歬一、从三止在二舟上一、徐曰、坐而至者舟也、私云、前の字又歬(セン)とも云ふなり、舟のせんの字と云は歬(セン)の字を云ふなり、すゝむとよめり、君にすゝむとは君は添(そへ)

をいふ。半四郎の心中狂言とは、大阪道頓堀岩井半四郎座で寶永三年夏上演した鳥部山心中狂言をいうたのである。「半九郎お染」「四郎五郎」を見よ。

〔半兵衛〕（心中刃は氷の朔日）六八四頁　傳奇作書附錄中の卷、心中情死人名錄の中に、小菊半兵衛の名が載つてゐる。蓋し呉服屋の手代半兵衛は池田屋の遊女小菊と馴染み、主家の呉服物を取出して費用に充て情交を續けてゐたが身のたちどころなきに至つて、遂に相共に刃に伏して情死した者である。

〔ひがやす〕（卯月絶）四五一頁　「ひがいす」「ひがへす」ともいふ。痩せ細つて弱々しきをいふ。この語蓋し魚の名「ひがい」から出た物であらう。海錄に、「ヒガイスと云ふ詞。淡海魚譜云、ヒガイ漢名未だ詳ならず、鰲魚の類なり云々、（頭書カマツカ、一名タケヲ、スナフキ、ダンキボウ、漢名鰲魚なり。）肉性味鰲魚に同じ、食法も又同じ、其形痩せて骨高きを以て土俗の諺に瘠人をヒガイスと云、この魚譜は渡邊幸輔作なり。」と見え、橋守部の俗語考に、「東國にて、ひはづに瘦みたる小兒などをヒガイスと云ふ。」と見えてゐる。

〔瓢穎川に口漱ぎ〕（大覺大僧正御傳記）三八頁　堯帝の世の隱士許由山中に隱れ、所持したものは一瓢のみであつた。堯帝が已に國を讓らうとすることを聞いて、耳の汙れとして穎川で耳を洗つたといふ。

〔ひし〕（心中重井筒）二四五頁　三〇九頁　ひしぐ（拉）義。碎けること。破滅。

〔ひしる〕（大覺大僧正御傳記）三九頁　「ひぞる」の義であらう。立腹する。怒る。

〔ひだの掾〕（心中重井筒）三一七頁　山本飛彈掾をいふ。手妻人形操の名人である。

〔非人敵討〕（淀鯉出世瀧德）六〇二頁　俳優荒木與次兵衛の當り藝であつた歌舞伎狂言「非人敵討」をいふ。この狂言は春藤治良右衞門、同新七の兄弟が非人となつて

を食つて世を渡る者、即ち詐欺師。妖巫の類である。

人倫重寶記卷之五に、「鳩の飼とて順禮をうたひて門々をあるき、女ばかりのさびしさうなる所にては茶煙草を所望し、それよりとり入れ、四國西國をめぐりて恐ろしき事殊勝なる事とりまぜてかたりて錢銀をとる。……熊野の新宮本宮の事をかたりては、鳩の飼料をしんぜられよとて錢をとりしより、鳩の飼といふ名はつけたり。」と見え、また和訓栞に、「はとのかひ。妖巫の類をいふ、八幡神に託し鳩の飼料をむさぼる義にや、或は鳩の卵と書けり。」と見えてゐる。

〔婆羅僧揭諦〕（心中萬年草）　五二二頁　般若心經の眞言呪。

〔半九郎お染〕（卯月艶）　四四九頁　實事譚に見聞覺知の所說として記してある梗概を述べれば、若侍菊地半九郎が京都二條城普請奉行の附人として江戸から上り滯在中に祇園の茶屋娘お染と馴染をかさね、半九郎公用濟んで江戸に歸らねばならぬ事になつたので、兩人互に別れを悲しみ、遂に寛永十三年九月二十九日の夜鳥部山で情死したといふ。但し卯月艶のこゝにいへるは、寶永三年の夏道頓堀の岩井半四郎座で上演した半九郎お染の心中狂言をいうたのである。これは前述の事柄を更に脚色したものである。その狂言の梗概は、半九郎とお染といふ若い男女が情交密であつた。或日半九郎がお染を順禮の女であると僞つて、己が兄の篠塚孫太郎の内に引入れて共に宿つたが、軈て孫太郎は兩人の關係を嗅付けて怒り、お染を戸外に放逐した。半九郎その夜家を忍び出で、お染と共に無常の山に行つて情死した。この時浮氣男の車屋七兵衞が茶屋女まつと心にもあらぬ情死を約して無常の山に來て、半九郎お染の情死を見て、俄に怖氣が付いて逃げ出したといふ仕組である。「四郎五郎」をも見よ。

〔半四郎〕（卯月艶）　四四九頁　大阪の名優岩井半四郎

こそと人も見るらん世を、ねばらかたらねちみやくするは、鬼も笑はんあすの事。」と見え、また、和訓栞、ねちるの條に、「ねちみやくといへる俗語も熱脈なるべし。」と見えてゐる。

〔寶所〕（讃歌加留多）九六四頁　寶所とは、珍寶の所の義。以て安樂所の意にいふ。法華經化城喩品に、「欲下過二此道一至中珍寶所……若能前至二寶所一亦可レ得レ去。」と見え、「寶所在レ近、此城非レ實。」とも見えて、無上正覺をいうたのである。

〔白駝王〕（嵯峨天皇甘露雨）一〇一六頁　白駝王は、印度波羅奈國の王で、鬼を搦めた剛勇の神である。安倍宗任松浦譽に、「波羅門、白駝、四天王、韋駄天、班足王、軍多利夜叉、提婆達多。」と見えてゐる。縛多王また白澤王といふも同じものであらう。

〔ばくらう〕（曾根崎心中）二三七頁　獏に博勞をいひかけ、博勞町の稲荷の神社にいひつゞけたのである。獏は支那で想像の獸名、熊に似て犀目象鼻牛尾虎脚で、惡夢を食ふといふ。白居易の獏屛贊并序に、「獏者象鼻犀目牛尾虎足、生二南方山谷中一云々。」と見えてゐる。後漢書禮儀志に、「莫奇食レ夢。」とある莫奇は、獏だとの説もある。

〔はしり〕（今宮心中）六五三頁　（走）物を洗った水を走り流すよりの名、臺所のながしのことをいふ。この語現今も福山市地方で用ゐてゐる。

〔はすは〕（曾根崎心中）二三七頁　（蓮葉）女の心の輕佻なるをいふ。人なれてなまめきたること。

〔はちげん放つ〕（吉野都女楠）七七五頁　「はちげん」は「はつげん」（發言）の轉訛。「はちげん放つ。」は言ひ放つを強めていへる言葉である。宇治加賀掾正本の鴈金文七に、「主人へ言譯すべいとて、はちげん放つてわめきける。」と見えてゐる。

〔はとのかひ〕（讃歌加留多）九六八頁　譃(うそ)を吐いて財貨

げた利益によつて、後に花氏城に於て正法王となり、阿恕伽と號したといふ。

〔年ばい〕（心中重井筒）　二九九頁　相當の年配。世の經驗を積んだ五十前後の年頃。

〔途方に暮れて〕（傾城反魂香）　四一〇頁　どうしてよいか分別を失ふ。「とはう」は途方か。或は十方か。曆日の語に、「十方暮れ。」といふもある。

〔とぼしたて〕（心中二枚繪草紙）　四二八頁　色事に耽るをいふ。とぼすとは房事を行ふをいふ。

〔內縛外縛の印〕（嵯峨天皇甘露雨）　一〇二二頁　十指を外方に組む印契を外縛印といひ、內方に組む印契を內縛印といふ。

外縛印　內縛印

〔梨も礫もうたんせぬ〕（曾根崎心中）　二三八頁　礫を打つて合圖する事も無いの義。音沙汰無きをいふ諺。梨は無の借字。

〔二月堂の牛王〕（薩摩歌）　二七一頁　二月堂の牛王のお祓札の當時配布された物には、「南無頂上佛面除疾病　二月堂　南無最上佛面願滿足。」と書いてあつた。

〔如渡得船〕（大覺大僧正御傳記）　四四頁　衆生が佛に逢うて濟度されるを、渡しに船を得たのに喩へたのである。法華經藥王品に、「如子得母、如渡得船、如病得醫。」

〔女人は地獄の使、よく佛の種を絕つ〕（大覺大僧正御傳記）　四四頁　女人は罪業深く、五障あつて地獄の使である、能く佛性を斷絕させるものである。

〔ねちみやく〕（心中萬年草）　五二三頁　ぐづ〱とねついこと。執著。今樣二十四孝（寶永六年刊）に、「花もさ

菩二」と見えてゐる。

〔つうづ〕（雪女五枚羽子板）　三五九頁　通途であらう。普通。有觸れ。

〔づくにふ〕（嵯峨天皇甘露雨）　九七七頁　「ずくにふ」で、俗入道の畧訛であらう。蛸入道。蛸坊主。

〔つこうど〕（丹波與作）　五三八頁　「つこど」ともいひ、「つきごと」（突言）の約訛であらう。とがりごゑ。腹立おげな無愛想聲。語錄字義（元祿七年刊）に、「鶻突。ヤサシゲモナキ事ナリ、俗ニツカフドナルト云ふ是ナリ」と見えてゐる。

〔頭破作七分如阿梨樹枝〕（大覺大僧正御傳記）　五六頁　法華經陀羅尼品に、「若不レ順ニ我呪一、惱ニ亂説法一者、頭破作ニ七分一、如ニ阿梨樹枝一」とあるに據つたのである。

〔壺の印〕（傾城反魂香）　四一九頁　狩野元信の印は壺の中に元信としてある。

〔てみそ〕（嵯峨天皇甘露雨）　九八九頁　「てみそか」（手密）の畧。人に見られないやうに隱密にする手わざ。骨牌（かるた）をごまかす手わざをいふ。

〔てんがう〕（心中重井筒）　二六五頁（薩摩歌）　三〇七頁（寶述飛脚）　七二九頁　戲謔。じやうだん。いたづら。「てんがう」の語源に就いては古來諸説あつて確かでない。按ずるに令義解に、「癲發時臥レ地吐ニ涎沫一無レ所レ覺、狂或自欲レ走、或自高稱ニ聖賢一也。」とあるやうに、「てんがう」は癲狂の呉音で、もと病名である。又關西地方で古くから、子供などが親の仕事の手傳をせうとして却つて邪魔をするを「てごうをする」といふ。「てごう」は手事である。この手事と癲狂とこんがらがつた語ではあるまいか。

〔でんど〕（卯月絶）　四五一頁　「でどころ」（出所）の訛畧。公儀。公衆の見る所。

〔徳勝童子〕（賀古教信七墓廻）　二三一頁　徳勝童子が土をもつて麨を爲して遊戲せる時、釋尊に逢うてこれを捧

〔代待〕（今宮心中）六四六頁　「だいまつり」（代祭）のつまつた語。二十三夜の月の深更にのぼるを代拜さすを二十三夜の代待といふ。日次紀事正月の條に、「毎月毎ニ神社會一、其身有ニ故障一、則倩ニ山伏行人一、令レ詣ニ其社一、是謂ニ代參一、或日待月待庚申待之類亦稱ニ代待一、故到ニ其時一則代參代待者、高聲呼ニ街衢一、則入ニ人家一而請ニ米錢一。」と見えてゐる。

〔竹本頼母（たけもとたのも）〕（冥途飛脚）七二五頁　竹本筑後掾の高弟で美聲を以て聞えた淨瑠璃かたりである。正德五年に國性爺合戰の九仙山をかたつて好評を博した。其の家は大阪新町西の大門口にあつて、鬢附香油などの化粧店を出してゐた。そして彼は竹本座に勤める暇には、揚屋色茶屋にまねかれて淨瑠璃を語つてゐたのであるから、冥途飛脚のこゝの文は、竹本頼母樣借つて來い。」と言へるも情味深い文である。「鬢附買ふとて聞きましたが。」といふ文も、竹本頼母の店で買物したことが知れるし、頼母が遊女等と知合が多かつた事も知れる。

〔玉の緒〕（大覺大僧正御傳記）三八頁　玉を貫く緒である。命をも魂の緒というて玉の緒に通はせたのである。新古今集戀の部の歌に、「玉の緒よ絶えなば絶えね、長らへばしのぶることのよわりもぞする。」

〔斷金（だんきん）の契り〕（雪女五枚羽子板）三三五頁　極めて親密な交はりをいふ。金は固い物であれども、二人心を同じうするときは、その堅いことは金をも斷つべき程であるとの意。易經繫辭上傳に、「二人同レ心、其利斷レ金。」

〔斷末魔（だんまつま）〕（曾根崎心中）二五一頁　梵語 Marmacchid であらう。Marmacchid は、Marman と Chid との合字であつて、Marman は支節の義で、Chid は切斷する義である。Marman を訛つて末魔と音寫し、Chid の義の斷と合して斷末魔となつた語で、この世から氣息を引取る最期、即ち生から死に移る悶絶の眞際といふ語である。顯宗論に、「傷ニ害人心一者、臨終受ニ斷末魔

〔そんなつぎ〕（堀川波鼓）　四七九頁　後を繼ぐ義。遺傳を繼ぎ襲ふ。（これと反對に、血統を引かないことを孫外れといふ。）貝原好古編の諺艸に、「孫。其の人の苗裔と云ふ事を其の人の孫と俗にいへり。」と見えてゐる。

〔太阿上市〕（堀山姥）　七九七頁　太阿も上市も支那古代の名刀である。越絶書云、「妙王召二風湖子一、令下之二吳越一見中歐冶子干將上、使三之爲二鐵劍一三枚一、一曰二龍泉一、二曰二太阿一、三曰二上市一。」

〔だい市之丞〕（心中刃は氷の朔日）　六八三頁　市之丞は天和頃に居た大阪の遊女である。その市之丞と長右衛門といふ男とが大阪の生玉で天和三年五月に情死した。それが直に道頓堀の芝居に上演された。これが心中狂言の最初であつたであらうから、心中はそれが初めの第一といふに市之丞をいひかけたのである。

〔大溫の物〕（今宮心中）　六三九頁　大溫の物とは大いに溫度を高める物といふことである。當流節用料理大全（正德四年刊）に、諸鳥、魚類、獸物類、干物類の能毒を記すに一々その物の名を擧げて、その下に、「へいの物」或は「ひえの物」又は「うんの物」「大うんの物」「かんの物」「れいの物」とそれ〴〵記してある。「へい」は平、「ひえ」は冷、「うん」は溫、「大うん」は大溫、「かん」は寒、「れい」は冷であつて、これ等總てその物を食ふによつて生じる體溫の關係をいうたものである。今宮心中の爰の文は、灸をする時は溫熱が加はるによつて、「ひえの物」を食ふべきである。然るに鰯などの大溫の物を食うては、更に溫熱が加はるによつて身體の害になるから、そんな物は食うてはいけないと、かねて申しおいたとの意である。

〔大黑舞〕（雪女五枚羽子板）　三三七頁　大黑天の面を被り、頭巾を著、その一人袋を持ち他の一人三味線を持ち、民間の門々に唄ひ舞うて、米錢を貰うた物貰ひの一種であつたが、文政以前既に廢つた。

路、浮世小路、衣張小路、お前小路の四小路があつた。これ等の小路には小色茶屋類のものが建ちならんでゐた。殊に浮世小路は新町通ひの駕籠の立場でもあつたし、立君も出沒し手代の隱し宿も多かつたのである。さればこゝに「小路隱れ」と云へるは、浮世小路をぞめいて色遊びをすることを云うたものであらう。

〔せかいらぎ〕（長町女腹切）八四四頁　（春梅花鮫）鮫皮精義に、「春カイラギは春通りにずらと地より大きなる粒の頭より尾まであるがゆゑに、春カイラギといふなり、長さ三尺より六尺許もあるものなり。」と見えてゐる。柄に春梅花鮫を卷いて作つた刀。

〔瀨戶の染飯〕（丹波與作）五三九頁　瀨戶は駿河國志太郡にあつて島田町と藤枝町との間にある小邑である。染飯はこの地の名物である。東海道名所記に、「瀨戶の染飯は此所の名物なり、その形小判ほどにして强飯に山梔子をぬりたり、うすきものなり。」と見えてゐる。

〔懺法〕（賀古敎信七墓廻）二一八頁　懺悔法、即ち伏歎して善法を勤修するを誓ふ法である。天台大師撰の法華懺法などはこれを記した書である。

〔卽身成佛〕（大覺大僧正御傳記）四四頁　法華經提婆達多品に、「佛告二諸比丘一、未來世中、若有二善男善女人一、聞二妙法華經提婆達多品一、淨心信敬不レ生二疑惑一者、不レ墮二地獄餓鬼畜生一、生二十方佛前一云々。」とありて、龍女も妙法の經力にて卽身成佛してゐる。

〔染川〕（心中重井筒）三一七頁　染川重郎兵衞といひ、寶永初年頃上方で名高かつた俳優である。熊坂今物語に、「片岡仁左衞門存命の折からあまたある狂言の中に熊坂今物語……其の年其の座につらなりし役者は誰々にておはしけるぞ、まづ篠塚次郎左衞門、染川重郎兵衞、杉山勘左衞門、女形には袖崎歌流。」と見えてゐる。

〔それしや〕（心中重井筒）三〇九頁　（其れ屋）遊女屋を「それ屋」といひ、遊女を「それ者」又は「しや」というた。

に扮し、松といふ茶屋女と心にもあらぬ情死を約し、女に引かれていや〳〵ながら情死に出で、無常の山に來て半九郎お染の情死を見、俄に怖氣が付いて逃げ出したことを演じて好評を博した。こゝの文に、「四郎五郎が不心中。」とあるは、これを云うたものである。役者稽古三味線、立役之部に、「上上宮。中村四郎五郎。」とありて其の藝評に、「津川殿太夫婆道中の時、下男となりて提灯持ちての供、くつわの後家かもん殿密通し白小袖著て心中せうといはるゝ時、嫌がるゝ顔付いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ去々年大阪にて鳥べ山の不心中にて大當し給ふ、其うつり故手に入つた藝此所大でけ、只今では諸藝大きに上り、仕殘さるゝ事なし、其内あら事の武道得物、上上白吉引合、當年の當りを見、來年は御一分に黑吉に成り給へ。」と見えてゐる。(序に云ふ。寶永五年刊の役者稽古三味線に「去々年大阪にて鳥べ山の不心中。」とあるからには、卯月紅葉の上演も寶永三年であつたことを立證するもので、外題年鑑に寶永四年上演したことを記せるは誤りと斷ずべきである。)

「しんぞ」(曾根崎心中)　二三六頁　「神ぞ」で、即ち「神ぞ照覽あれ。」の畧されたもので、僞を申すに於ては、神の照覽ましますによつて、直に神罰を蒙る法もあれとの意で、自誓の詞である。

「すがる」(心中二枚繪草紙)　四二三頁　縋り合ふ意に鹿をきかせたのである。鹿をすがるといふは、古今集の歌に、「すがる鳴く秋の萩原朝立ちて云々。」とあつて、舊說及び顯注密勘などに「すがる」を鹿の事とした臆說に據つたものである。

「すし」(曾根崎心中)　二三五頁　好(すし)の義、色好みなるをいふ。また轉じて野暮(やぼ)の意にいふ。色道大鑑に「すし」を解釋して、「此方にてはさまで思はぬに、先方より馴れ親しみて言ひ寄るを惡みていふ詞。」と見えてゐる。

「小路隠(せうぢがく)れ」(卯月紅葉)　四五五頁　昔時大阪には淀屋小

て、霸王樹に「さちらさつぼ」と傍訓してある。

〔しゆきん〕（賀古教信七墓廻）　二二二頁　（手巾）長さ五尺ばかりの布帛である。その布帛を絎けて帶にしたものを手巾帶といふ。僧尼がこれを衣の上から纏ひ、前で結んだによつて手巾の上帶ともいうた。手巾帶或は手巾の上帶といふを畧して手巾ともいうた。紅梅千句に「をどりに出さぬうら盆の宿、花染の五尺の布や惜しむらん。」とある五尺の布は卽ち手巾であつて、踊に用ゐたのである。好色貝合に、「紫縮緬のくけたをしゆきんにしめ、帳一つ持つて。」分里艷行脚に、「此の尼大きに取亂し、薄化粧目に立ち、藤鼠のあはせに繻子の手巾、次第に募りて此の庵を立ち出で。」と見えてゐる。

〔しゆらい〕（二枚繪草紙）　四二九頁　（氷の朔日）　六八二頁　（集禮）飮食物などの諸式勘定。もと習禮の字で、史記孔子世家に「孔子去レ曹適レ宋、與二弟子一習二禮大樹下一。」と見え、禮式を稽古することをいうたのであるが、轉じて集禮と書いて、飮食物などの諸式勘定のことをいひ、上方言葉である。

〔しよげる〕（吉野都女楠）　七七七頁　「しげる」の訛り。「しげる」を見よ。

〔諸餘怨敵皆悉摧滅〕（大覺大僧正御傳記）　四一一頁　法華經藥王菩薩本事品に、「汝今已能破二諸魔賊一、壞二生死軍一、諸餘怨敵皆悉摧滅、善男子百千諸佛、以二神通力一共守二護汝一。」と見えてゐる。

〔素きを後〕（傾城反魂香）　三七三頁　論語八佾篇に、「繪事後レ素。」とあるに據つたのである。傾城反魂香は繪師に關する淨瑠璃であるによつて、冒頭から繪に關する故事を用ゐたのである。

〔四郎五郎〕（卯月絶）　四四九頁　上方で立役の名優であつた中村四郎五郎を云ふ。寶永三年の夏道頓堀の岩井半四郎座にて、お染半九郎の心中狂言（卽ち鳥部山心中）を上演した時、四郎五郎が浮氣男の車屋七兵衞

樂しむ料金である。往來の男を見かけて袖を引き、淫を賣る女、卽ち辻君を十文色といふ。當世娘氣質に、總嫁の事を記して、「往來の袖をひかへて十文づゝに情の切賣。」と見えてゐる。五十年忌歌念佛に云へるは、土百姓の野夫だけに、辻君の淫賣行爲を目擊して男女が喧嘩をしてゐるものと察したのである。

〔此妙法蓮華經者、本地甚深之奧藏也、三世如來之所證得也〕（大覺大僧正御傳記）　三一頁　此の妙法蓮華經は諸佛出世の本懷として、佛と佛とのみ證智し、三世如來の證得された甚深祕妙の眞理なるによつて、卽ち奧藏である。法華經安樂行品にも、「此法華經諸佛如來祕密之藏、於二諸經中一最在二其上一。」と見えてゐる。

〔それ釋尊は母の御爲切利天に昇り、一夏九旬摩耶報恩經を說き給ふ〕（大覺大僧正御傳記）　三一頁　釋尊摩利天に昇り、一夏九旬（四月十六日より七月十五日まで其の日數九十日）の間、母摩耶夫人の爲に法を說いて證果を得させられた。その經を佛昇切利天爲母說法經といひ、摩訶摩耶經とも摩耶報恩經とも云ふ。

〔章甫の冠〕（雪女五枚羽子板）　三三三頁　章甫は殷の時の冠の名。賈誼の弔屈原賦に、「章甫薦レ履兮、漸不レ可レ久。」

〔しやちらごはい〕（傾城反魂香）　三八二頁　やたらに硬い。むやみに強く固い。「しやち」は刺多くて手のつけやうなく煩はしいことを言うたのが、轉じて「やたら」「むちやくちや」の意になつたのであらう。

〔しやちらさんばう〕（心中刃は氷の朔日）　六六二頁　やたら。むちやくちや。「さんばう」は三寶で「いきなり三寶」「南無三寶」などに聯想されて附いた語であらう。覇王樹を「さちらさつぼ」と云ふのも、刺多くて手のつけやうなく煩はしいから附いた語であらう。猫耳（享保十四年刊）に機石の跋文に、「つら〳〵の椿の言の葉しげり、覇王樹のむづかしき編集の姿なればこ。」とあつ

次郎左衞門を云ふ。寶永六年頃まで敵役を勤めて後に立役になつた。役者謀火燵（寶永七年刊）立役之部に、「上上當。篠塚次郎左衞門。今難波の當り男は篠塚、諸人に可愛がられ、實悪にして片岡殿よりよい〳〵との評判、諸見物手を入れ、なんなく實方になりすまされた。……去年まで實悪で黒吉の御位、當年より立役故白吉、やせ肉な音羽殿と引合、大兵なれば引取つて來年は黒吉。」と見えてゐる。巣林子作今宮心中に、「篠塚次郎左を見る時は大佛島を思ひ出す。」とあるは、篠塚次郎左衞門が大兵なるによつて、奈良の大佛をきかせて大佛島と云うたのである。

〔師走油（しはすあぶら）〕（今宮心中）　六五二頁　殃禍（わざはひ）の意にいふ。師走（陰暦十二月）に油をこぼせば火に祟るといふ。

〔十二燈〕（嫗歌加留多）　九六八頁　十二燈は十二銅ともいふ。燈明料として賽錢十二文を白紙に包み、捻りて神佛に捧げる。これをお十二銅といふ。十二文は十二箇月即ち一年間に當てたわけである。色里三所世帶、京の卷に、「然も今年は正月に閏ありて、……淸水寺の子安塔に十二銅の絶ゆる間もなく、當年の包紙十三文づゝ、目に見えて一文づゝの德。」と見えてゐる。增補俚言集覽に、「十二銅はもと十二灯にて、燈明を奉る料なるべし。」とある。

〔十枚糊の付紙臺〕（堀川波鼓）　四八六頁　銀十枚と書いた包紙を糊で臺に貼付けたもの。貞丈雜記に、「今時付臺とて黃金一枚銀子一枚などと書きたる包紙を臺に糊にて貼付けて、金銀をば別に包みて遣す事あり、古は付臺と云ふ事なし、要脚何疋とて鳥目（てうもく）にて遣しけるなり、殿中にて鳥目など懸二御目一事はなかりしなり、付臺と云ふ物後世し出したる物なり。」と見えてゐる。巣林子作薩摩歌に、「大鯛、昆布、柳樽、五色の縮緬、紅眞綿、付紙臺、三荷に擔はせ。」ともある。

〔十文（じふもん）〕（五十年忌歌念佛）　五七二頁　總嫁即ち辻君を買うて

さである。この反には古來異說があつて、或は一段が今の六十間に當るといひ、或は六間といひ、或は五間（佈の一段が三丈であるから）といふ說などもある。

〔三度〕（冥途飛脚）七一五頁　三度飛脚の畧。三度飛脚は、元和元年より大阪城の定番の諸侍等が東海道各驛の驛長等と相談して、其の家隷を飛脚として、毎月三度日數八日を限つて東海道を往復せしめたに起つた。後には大阪飛脚は其の出發を毎月二日、十二日、二十二日と定めた。

〔山路の道行〕（心中二枚繪草紙）四二二頁　花人親王が玉世姫と戀仲となり、山彦王子の亂を避けて、玉世姫の父の豐後眞野の長者の内に養はれ、山路と替名して草刈となり、草刈笛を吹いて一時世を忍ばれた。「山路の道行」は、用明天皇職人鑑（淨瑠璃近松作）にある「山路玉世の姬道行」を云うたのである。

〔しかけ〕（堀川波鼓）四八一頁　（仕掛）手管。手練。「しかけでやる」とは、手管でごまかして支拂ふの意。

〔じがげ〕（大覺大僧正御傳記）三二頁　（自我偈）法華經壽量品に、「爾時世尊欲重宣此義、而說偈言。」と云ひ、「自我得佛來、所經諸劫數、無量百千萬、億載阿僧祇云々。」とありて、總て二十五句偈ある。其の最初の二字を取つて自我偈といふ。

〔しげる〕（今宮心中）六五〇頁　（五十年忌歌念佛）五七七頁　（茂）こもる（籠）義で、即ち男女籠る事で交媾をいふ。「しげる」は訛つて「しよげる」ともいふ。

〔四土不二〕（賀古教信七墓廻）二二五頁　天台宗にては、凡聖同居土、方便土、實報土、常寂光の四土を立つ。されど圓融の理から觀れば四土總て不二である。

〔四とん八辯〕（蟬丸）一七四頁　釋尊の說法に能辯なのをほめて四辯八音といふ。それを前後してかくいうたのである。

〔篠塚〕（心中重井筒）三一七頁　大阪の歌舞伎役者篠塚

〔酒には濱松〕（傾城反魂香）三七四頁　當時酒宴のときに、「濱松の音はざゝんざ。」といふ唄を謡ふことが流行つたので、酒宴には濱松といふたのである。

〔さそく〕（薩摩歌）二六二頁　（左足）左足を踏むなどいふは、長刀などで突いてかゝる時に左足を踏み出すをいふ。謡曲「熊坂」に、「いらつて熊坂左足を踏み、鐵壁も徹れと突く長刀を。」と見えてゐる。

〔佐渡島傳八〕（淀鯉出世瀧徳）六〇一頁　道化方の名優である。三國役者舞臺鏡（元祿十二年刊）に、「天然とあがりたる道外、元來顏付やみらみつちやとし、目耳鼻の附け所違うた樣な、我が身ながらも、惡いと思はるゝやら、又しても一番がけに顏の事を罵らるゝ、此の人よい人の側を去らず、何やらをなさるゝ事上手ぢや、さるによつて、寸暇なくして、彼所の此所のと引張太鼓のうはもりなり、それ故御內證あたゝか饅頭に暮さるゝ事その隱れなし。先諸藝いやしく、何を言はるゝと思へば、食ひ物の事ばかりを大事さうに申さるゝ。」と見えてゐる。

〔さよがうし〕（心中二枚繪草紙）四三八頁　（小夜格子）靑樓の二階窓の竹格子をいふ。南水漫遊に、「島之內六軒町といふは塗屋町なり、重井筒の戲文中の卷に、月ははやわたりぞめして中橋や、六軒町の小夜格子とて、娼家の二階窓の竹格子をいふ。」と見えてゐる。

〔讃對揚（さんたいやう）の次第書〕（賀古教信七墓廻）二一八頁　法會に散華の式を行ふとき、散華の偈を終へてから、佛法世法の常住安穩なるを希ふ偈文を擧げて佛德を讃嘆すること。其の儀式の次第を書いたものを讃對揚の次第書といふ。

〔三反〕（娌歌加留多）九七二頁　今昔物語に出てゐる話が、其の後にできた宇治拾遺物語に載つてゐて、今昔物語に丈とあるのを反に書替へてあるので、反と丈とは同じ長さであることが知れる。即ち三反は三丈の長

〔こづか〕（卯月潤色）四五一頁　髻（もとゞり）をいふ。「かみづか」（髪束）を「かんづか」「からづか」といひ、「こづか」と轉訛したので、「かみより」（紙縒）を「からより」といひ、「こより」といふも同じ類である。かた言（慶安三年刊）に、「からづかをこづか。」

〔戀路の闇のくらがりと〕（堀川波鼓）四七四頁　八百屋お七の歌祭文の中にある文句である。紀海音撰の八百屋お七の中に八百屋お七江戸櫻といふ歌祭文が載せてある。その中に、「哀れなるかなお七こそ、戀路の闇のくらがりに、よしなきことをしいだして云々。」とあるは、其の頃謠はれたお七の歌祭文に據つたものであらう。

〔ごまのはひ〕（歌加留多）九六八頁　騙者（かたりもの）。旅人を欺いて掠奪する無頼漢。これと同意義の語に「とつこ」といふがある。蓋し眞言宗で行法に用ゐる護摩、または獨鈷を以て、人を騙して財貨をむさぼる者をいうたことから起つた語であらう。和訓栞に、「こまのはひ。護摩の灰なり、さるを無賴の徒に呼ぶは、之をもて人を騙して錢貨をむさぼりしよりいひ出でたるなるべし。」と見えてゐる。昔時護摩の灰、雲助の類は、旅客の財貨を掠奪し、金錢を强請し、傳舍に亂入し、什器を破壞するなど、最も旅人を苦しめるものであつた。

〔御物上（ごもつあがり）〕（雪女五枚羽子板）三五〇頁　男色關係で主君から寵愛を受けた美少年上り。

〔さいたら畠〕（雪女五枚羽子板）三五三頁　小才の利いたこと。または小才の利いて間が拔け、智愚どちらつかずの意にいふ諺。

〔さが〕（夕霧阿波鳴渡）七〇二頁　性、ならはしの義から轉じて、惡性、惡、瑕、險難の意に用ゐる。易林本節用集に、「無レ惡（ナシサガ）。」

〔さきゆき〕（淀鯉出世瀧德）六一二頁　（先行）前途の意より轉じて後の榮えることにいふ。

いの訛りであらう。思懸けも無いの意にいふ。貝原好古撰諺草に、「權輿。今俗に始めもなく不圖出來たる事をけんよもなきといへるは此の字なり。」といひ、その正譌の條に、「無ニ懸念一。思懸けなきなり、けんによもないは誤り。」と見えてゐる。

〔けんねじ〕（丹波與作） 五四八頁 互に握拳を突き出して掌中の物の數を當てて勝負をする戯れであつて、博奕の一種である。

〔憲法染〕（傾城吉岡染） 八七三頁 附子鐵漿を原料とした る黑茶染。京雀（寛文五年刊）に、「綾小路下るけんぱう町。なか頃けんばうの某とかや云ふもの黑茶染を仕出しけり、此のゆゑにけんばうぞめといふとにや、この町に住みければ町の名とす。」と見えてゐる。憲法は兼房とも書き、通稱を吉岡仁左衞門といひ、吉岡流劍道の祖とつたへられてゐる。このひとの發明した憲法染は明曆から延寶にかけて大いに流行した。傾城吉岡染に、石川五右衞門と師弟の關係があつたことに書いてあるは、無論事實ではなうて、全くの他人の間柄である。

〔こうたう〕（五十年忌歌念佛） 五八一頁 （公道）はなやかならぬ事。ぢみ。著實。俚言集覽に、「公道。おとなしきことは物の公道なる心なれば、花やかならぬをいふなるべし。」と見えてゐる。

〔御器の實〕（丹波與作） 五五二頁 御器とは椀のこと。空穗物語に、「黃金のごきよきまゐりもの。」と見えてゐる。御器の實とは、椀に盛る飯のことをいふ。

〔御けん〕（心中萬年草） 五一七頁 （御見）御見參の畧。おめみえ。女の手紙文に多く用ゐられた。またもじ言葉に「ごけんもじ」とも言うた。

〔五湖〕（大覺大僧正御傳記） 三八頁 范蠡が越王勾踐を輔け、吳王夫差を滅ぼして功成つて後、職を辭し、扁舟に乘つて五湖に浮んだ故事。

條に見え、第九の羅刹女を皐諦と名づけ、譯して何所といふ。この羅刹女は天上人間來往自在であり、若し歸佛の後に從はば則ち諸法皆空無染にして、住著する所なきによつて何所といふたのである。

〔くわいけい〕（今宮心中）　六三一頁　歡び。歡樂。「くわつけい」（活計）の延びた語であらう。和訓栞に、「活計はもとすぎはひの事なるを、歡樂する意に、太平記にも左京の大名衆を結んで茶の會を始め、日々寄合ひ活計を盡すと見えたり。」と出てゐる。

〔月支の遺龍〕（賀古敎信七墓廻）　二三三頁　月支國の遺龍が國王の敕命によつて法華經の外題六十四字を書く間に、其の字六十四體の佛となつて、遺龍の父が落ちてゐる地獄に行つて、父の苦患を救つたことを遺龍が夢に見たといふ。

〔げんことり〕（丹波與作）　五五六頁　昔時東海道の道中筋で賣つた一箇五文の餅である。げんこは五の符牒である。夏山雜談卷之三に、「五つの數をげんこと云へるは、五は阮古切なればなり。」と見え、御前獨狂言（寶永二年刊）卷之二に、「こびんさきはげぢ〳〵にねぶられ、げんこ餅ほどはげたるを手作のなべすみべつたり。」と見えてゐる。

〔劍尺〕（長町女腹切）　八五二頁　（劍尺）刀劍佛像などを度るに用ゐた物差。博物筌に、「劍尺一名玉尺といふ俗名けん尺と云ふ、吉の字もとは本に作る。凡そ刀劍佛像のたけ門戸のはゞに皆これを用ゐ、當る所の吉凶圖の文字の如し、且八卦の文字を添ふ、今用ゐるもの昔の寸と違ひあり、今用ゐるたけは曲尺一尺二寸を八段とし、一段一寸五分に當るなり

財	病	離	義	官	劫	害	吉
福德	遊魂	絕體	遊年	天醫	絕命	禍害	生家

」と見えてゐる。

〔けんによもない〕（賀古敎信七墓廻）　二一二頁　懸念も無

てゐる。

〔がひやう〕（大覺大僧正御傳記）　五四頁　がひやう（餓莩）は孟子に出てゐる語で、餓死者をいふ。（莩は草、菱は落の義、されば餓莩は餓菱の傳寫の誤りであらう。）

〔鷗尻（かもめじり）〕（丹波與作）　五五四頁　鷗が水に浮んだ時、尻の羽が上の方に撥（は）ねてゐる、それのやうに上の方に撥ねてゐる事。刀劍の尻が上へ反（そ）つてゐるやうに佩くを、鷗尻に佩くと云ひ、秤竿の尻の上へ撥ねる程秤目を十分に取るを、鷗尻に取ると云ひ、又萬治享保にかけて若衆の髮の髱（つと）を出し反（そ）らしたのを鷗髱と云うたのも、これ等皆鷗の尻の撥ねてゐる緣によつた言葉である。

〔がんひの筆〕（傾城反魂香）　三八五頁　（顏輝之筆）輝は唐音 hui である。卽ち其の音を傳へたものである。顏輝の筆とは顏輝の筆寫をいふ。易林本・節用集に、「顏輝、元朝人、畫二達磨一」と見えてゐる。顏輝字を秋月と云ひ、好んで道釋人物を描いた。匏菴家藏集には、鬼を書くことが妙であつたと見えてゐる。

〔九字護身法（くじごしんほふ）〕（心中萬年草）　五一七頁　密教に行ふもので、臨兵鬪者皆陣列在前の九字呪を唱へながら、不動小刀の印を結び、指頭で空中に四横線を引き、又九縱線を引く法である。このことは眞俗佛事編、三才圖會などにも見えてゐる。

〔くじのみやの〕（淀鯉出世瀧德）　六〇二頁　「くじみや」を「くじのみやの」と分けて言うたのである。鬮は宮から出ればとて鬮宮（くじみや）といひ、鬮と公事（くじ）と同音であるので、公事の義に取つて、「くじみや」といふて訴訟のことにいふ。

〔弘誓（ぐぜい）の櫓拍子〕（曾根崎心中）　二三五頁　佛が衆生誓願を立て給ふによつて、衆生臨終の際二十五菩薩が弘誓の舟に櫓拍子立てて、極樂の彼岸に渡し給ふ。

〔くみやうかうたい〕（大覺大僧正御傳記）　五五頁　九名皐諦は法華經陀羅尼品の中の十羅剎女のことをいうてある

〔かいらぎ〕（賀古教信七墓廻）　二二八頁　〔梅花皮刀〕合類節用集に「梅華皮(かいらぎ)」とある。地粒總て荒き鮫皮を云ひ刀劍の柄を卷くに用ゐる。黒川道祐撰の雍州府志七、土産門下服器部に、「凡鮫魚皮、阿蘭人齎二來長崎港一、京都二條商賈行買レ之、歸二二條店一、浸レ水數日、而纖細割レ竹尺許、以二麻苧一結二束之一、是稱二編竹一、以レ是洗二鮫皮於水中一則其色潔白、其礫砢狀大、而其粧相齊者粧二刀柄一。是謂二柄鮫一、又粧間交二花點狀一者謂二梅花鮫(カイラキ)一」

〔格子祝(かうしいはひ)〕（心中重井筒）　三〇八頁　女郎屋（置屋）の表作(おもてづくり)は格子になつてゐる。遊女がこの格子の內に出張つてゐても、客が無い時に、客があればよいにと思うて、近邊などを出步くこと。南水漫遊に、「倡家の女郎に格子祝といふ事をなすは、馴染の客も知る知らぬ客の呼出しもなくて、寂しき夜は近邊などをちよと步けば、必ずその夜に客來るとて、往古の女郎はかかる事をなしたりと見えて云々。」と見えてゐる。

〔肩の好(よ)い〕（心中萬年草）　五二五頁　運の好いといふ意の詞。籠耳（貞享四年成）に、「運のよいわるいといふべきを、肩がよい惡いとはいふべき詞にあらず、肩に棒おく商人、駕籠舁、乘物舁より起りたる詞なり。」と見え好色萬金丹卷一に、「吉凶は痃癖の如し、二つながら人の肩にあるものから、好き事のみも續かず、又惡い事ばかりもないもの。」と見え、風流誂平家卷一に、「貧福は痃癖の如し、是非とも人の肩によるべし。」と見えてゐる。

〔かた岡〕（心中重井筒）　三一七頁　元祿寶永頃に於ける歌舞伎名優片岡仁左衞門を云ふ。元祿太平記卷之八に「片岡仁左衞門、敵役にしては三國無雙、第一男振大位にして勿體あり、然し物言ひじゆつなさうに聞ゆ、濡事實事思はしからず。」と見え、名人忌辰錄に、「元藤川伊三郎とて三味線彈なり、中年に俳優となり片岡と改む、享保元申年二月三日歿す、歲四十四。」と見え

はせ、杯の相手になつて、日頃の手並にいきつかして下んせ。」と見え、心中二枚繪草紙に、「駕籠の長介來り私が請合の菱屋の花代、津の國屋の料理代、合はせて三百四十五匁六分、扠も〳〵せがまれます。」とある抔は、これ等の消息を語るものである。駕籠舁を卸といふ名義に就いては詳かでない。一目千軒に、「中頃名高き大盡（だいじん）ありて、女郎になづみ通ふ事繁く、これが爲に駕の者三人抱置き日毎に赴く、或時出口にて駕を卸して、是れより歩行にてお出遊ばせと駕籠舁言ひければ大盡大きに氣色を損じ、行けと言はば何處までも行くべし卸せと言はば卸せよと言ひしより、駕舁く者を卸と異名するなり。」とあれど、附會の說で信ずるに足らない。嬉遊笑覽に、「おろせの名義いとをかし、按ずるに卸は駕籠に乘るは侈奢の至りなれば、駕籠舁と稱ふるを憚りて異名を呼びしものなり。字書に舍レ車解レ馬脫レ衣解レ甲皆曰レ卸、今舟人出載亦曰レ卸など見えたり。總て積み載せたる物を下す事なれば、唯荷物の樣におぼめかしいへるにこそ。」とある說も如何。野良蟲（萬治二年刊）の序文に、「芝居終れば東山にともなひ、あんだ乘物に載せられて、はい〳〵おろせ〳〵と勇み進む。」と見えてゐれば、おろせは駕籠舁の一種の掛聲であつたのが、駕籠舁をいふことになつたのであらう。

〔おんでもない〕（今宮心中）六五四頁　當然である。勿論である。言ふまでもない。按ずるに、「おん」は「恩がまし」「恩がらす」などいふ恩であつて、「おんでもない」は卽ち「恩でも無い」の義である。この詞狂言笠の下などにも見えてゐる。

〔かい〕（心中重井筒）三〇四頁　かひ（開）でもあらう。開に入つて邪魔となること。

〔界如三千〕（大覺大僧正御傳記）四四頁　十界と十如とを界如といひ、これ等が各十界三種世界を具備するにより界如三千となる。

條にも、「女房共赤前垂して緣の端に立ち出で、泊りぢやないか泊らんせ、此の雪は暮方程積ります、日高なりとも泊らんせ、水風呂沸いてござんす火燵も夜著も布團も貸しましよ、寒か抱いて寢ましよ、酒のよい所にまづお泊りなされませい、内が綺麗でお内儀樣の美しい所に泊らんせ。」と見えてゐる。いかにも往時の悠長な有樣を見るやうである。

〔おつう〕（心中刃は氷の朔日）　六八四頁　元祿年間千日の墓所で半七と心中した三勝の女の名。

〔おはつ〕（心中二枚繪草紙）　四二一頁　・巢林子作の曾根崎心中に見える人物である。

〔おひずる〕（嵯峨天皇甘露雨）　一〇一〇頁　（笈摺）巡禮者が背に著る。一種の衣である。もと笈を負うて背の摺れを防ぐ爲に著るより起つた名。羽織に似て袖なく、兩親在る者は兩側を赤地、中部を白地にし、兩親なき者は兩側を白地、中部を赤地にした。

〔おへ樣〕（心中萬年草）　五二〇頁　「おいへさま」、御家樣）の畧。中流以下の人の妻の敬稱。おかみさま。浪花方言（文政二年成）に、「お家さん。まづ大體通例此の通り唱ふ、江戸にてかみさまといふに同じ。」

〔おほぬさ〕（心中重井筒）　三一二頁　大幣は祓する時に用ゐる串にさした四手である。祓果つれば各引き寄せて撫でるものなれば、引く手數多と續けていふのである。以て彼方此方の數多の人々から引つ張られて靡く事にいふ。伊勢物語に、「大幣の引く手あまたに聞ゆれば、思へどえこそ賴まざりけれ。」と見えてゐる。

〔おろせ〕（心中二枚繪草紙）　四二九頁　駕籠舁をいふ。色町通ひの駕籠舁は、遊女とは特別の懇意があつたので、座敷に出て客をとりもつたり、客の遊興費時借の保證人になつたり、置屋や揚屋や遊女などの使となつて用聞きをする場合もあつた。生玉心中に、「これ駕籠の衆賴みます、私は雨氣で頭痛がして休んでゐると間に合

呼ぶ稱。女重寶記（元祿十五年刊）卷之一、女しなさだめの條に、「大名のを奥樣といふ、百姓のを御方とも又閙鞋ともいふ。」

〔おこゞ〕（心中刃は氷の朔日）六六〇頁　「おくご」（御供御）の轉訛。畿内地方言であつて晝飯をいふ。

〔お島の心中〕（心中重井筒）三一七頁　お島はもと初音と名乘つて京の島原に勤めた時、京の室町御池の邊の呉服商某の次男新八と馴染み、兩人倶に驅落して大宮まで逃げたのを、追手の者に發見されて捕はれ、新八は錢千貫の科料を取られ、初音は浪華の太左衞門橋井筒屋の勤女に賣られてお島と名乘つた。その後新八江戸から下つて、井筒屋に登りお島と邂逅し、以前の事を思ひ出して互に懷かしがり、新八は井筒屋に足繁く通うたが、兩人共に金に窮し、儘ならぬ身を嘆き、遂に談合して正月十六日生玉で情死した。この事は永井正流撰の本朝濱千鳥（寶永四年刊）卷之四、都の初音難波の心中、（附たり）死に生玉曙の條に見えてゐる。

〔おそめ〕（今宮心中）六五二頁　（阿染）大阪東堀瓦屋橋通り油屋新五郎の娘で、二歲の時丁稚久松に連れられて川邊に行き、誤つて水死した。それが爲久松は新五郎に叱られて縊死したのを、情死したやうに作り替へられたとの說があれども、思ふにお染久松情死の事實があつたのであらう。

〔おぢやれ〕（丹波與作）五四六頁　街道なる旅籠屋の下婢の稱で、旅人を泊めて夜の伽をも勤めたのである。出女とも云ふ。旅籠屋の下婢が門口に立つて、旅人を見ては客引かうとして、おぢやれ〳〵（おいでなされの意。）と呼んだのから起つた名である。おぢやれが赤前垂をして、客を招く言葉は丹波與作の中に、「これ泊りぢやないかえ、泊りなら泊らんせ〳〵、旅籠安うて泊めませう云々。」とあり、井原西鶴撰の浮世花鳥風月（好色四季ばなしの改題）月影うつす龍宮のすぎやきの

本永代藏には家主に「いはらじ」と傍訓してある。

〔うそまつかいさま〕（曾根崎心中）二四五頁　「うそまつかへさま」（譃眞返樣）の訛りで、眞實を裏返して譃を言ふこと。

〔歌比丘尼〕（九十年忌歌念佛）五八九頁　もと熊野比丘尼と稱したもので、佛法に歸依し熊野權現の事觸れめいたことをしてゐた。五十年忌歌念佛のはこんなことをして遊歷しただけであるが、一體歌比丘尼も時勢の推移につれて、隱し白粉薄紅を附けて伊達な姿となり、歌念佛または流行節を歌ひ、小歌を便りに色を賣る尼となつた。これを「びくに」「びくにん」「まるた」ともいひ、舟に乘つて色を賣る者もあつた。七枚起請などの誓紙に用ゐる午王の羣烏の紙などはこの比丘尼が賣り配つたものである。歌比丘尼の事は好色一代男卷三木綿布子もかりの世の條、好色一代女卷三、調謔歌船（たはれのうたふね）の條、殘口之記、人倫訓蒙圖彙卷七などにくはしう記してある。

〔うづく〕（薩摩歌）二五九頁　疼痛を感じる。ひゞき痛む。

〔宇都の山邊の十團子〕（丹波與作）五三九頁　宇都の山は駿河國安倍郡にあつて岡部と鞠子との間。十團子はこの邑の名物である。

〔卯腹辰股（うはらたつもゝ）〕（傾城反魂香）三九七頁　灸の忌日で、卯の日には腹に灸をするゑず、辰の日には股に灸をするゑず。

〔雨寶童子（うほうどうじ）〕（吉野都女楠）七九四頁　天照大神をいふ。右手は金剛寶棒に支へ、左手は掌上に寶珠をとりて立ち、頂上五輪塔婆ある姿を、天照大神日向不生の像としてゐる。合類大節用集（享保二年刊）神祇門に、「雨寶童子。俗云日神垂迹、本地大日。」

〔えん正すけさだ〕（傾城反魂香）三八九頁　「えん正」は山城の刀鍛冶永昌。「すけさだ」は永昌の弟子祐定。

〔おかた〕（丹波與作）五五四頁　（御方）農家で人の妻を

「まが」などといふ類である。いたはしい。ふびんな。あはれな。

〔稲負せ鳥〕（丹波與作）五六二頁　古今集祕傳に入つてゐる三鳥の一である。巣林子は天鼓に「鳥の中にもいなおほせ、妹脊をしへし。」と書き、日本振袖始に、「かの鶺鴒を庭來鳴鳥庭叩鳥戀敎鳥ともいふぞとよ。」と書いてゐるを見れば、鶺鴒のこととしてゐる事は明らかである。巣林子の樣に鶺鴒とした說は、藤原定家や加茂眞淵などもその說である。（按ずるに、安齋雜考下卷に、「吳竹抄第十に、近年ある人安藝國に罷れりけるに、はたゝきおりゐてなきけるを、女のありけるが見て、いなおほせ鳥よといひけるを聞きて、など此の鳥をいなおほせ鳥とはいふぞと問ひければ、此の鳥來り鳴く時、田より稲を負ひて家々に運びおけば申すなり云々。」と見え、秋に田の畔などで鳴く鳥であらう。）巣林子が丹波與作に「いなおほせ鳥」と云うたのは、古說に、「いなおほせどりを馬であらう。」と云うた其の緣によつたものである。

〔稲荷小路〕（夕霧阿波鳴渡）七〇二頁　往時大阪玉造稲荷附近の裏屋小路は淫賣女の巣窟であつた。

〔岩井の半四郎〕（心中重井筒）三一七頁　二代目の岩井半四郎を云ふ。（初代の半四郎は元祿十三年に歿した。）大阪道頓堀歌舞伎芝居の座元となり、若衆女方に扮して好評を博した名優であつた。役者二挺三味線に、「女房若衆方を勤めすまされ、當顏見世より角前髮似合ひまして、嘸や古半四郎草の陰にて御滿足と存ずるは、打續いての座元云々。」と見えてゐる。

〔いはらじ〕（丹波與作）五五四頁　「いわらじ」とも書いてある。女重寶記（元祿九年刊）に、「大名のを奧樣といふ、百姓のをお方とも又藺鞋ともいふ、下女には藁鞋をはかするの義なり。」と見えてゐるから、農家の主婦をいふ。但しいわらじは藺鞋であるとの說は如何。日

作日本武尊吾妻鑑には、「雲居をこゝにあまさかる、九州二島の浦々まで。」と書いてゐる。

〔菖蒲草〕（心中重井筒）三二七頁　歌舞伎役者芳澤菖蒲をさしたのである。元祿十六年女形の第一位に上り、享保二年には古今無類の名優と評されてゐる。

〔ありべかかり〕（曾根崎心中）二四五頁　あり體(てい)の通りといふ意である。普通なみの所作。形(かた)の通りする事。手島堵庵の著に「ありべかかり」といふ本がある。人としてあつて然るべき修養法を記したので、かかる書名にしたのである。現今も福山市あたりで、「ありがまゝをいふ」といふことを、「ありべ通りをいふ」といふ。ありべ通り」の「ありべ」も、「ありべかかり」の「ありべ」も同じ語である。

〔あんだら〕（傾城吉岡染）一九一九頁　「あだ」に撥音「ん」及び「ら」の添加した語であらう。癡。愚鈍。越谷秀眞編の物類稱呼の五に、「おろかにあさましきを京大阪にてアンダまたアンダラとも云ふ。」と見え、永代節用集に、「暗惰懶。無能。」と見え、和訓栞に、「あんだら。鄙俗の語なり、あだを強くいふ語なるべし、あだ口をきく事をあんだら口を叩く抔といへり。」と見えてゐる。

〔鹽梅よし〕（傾城吉岡染）八七八頁　按排好とも鹽梅好とも書き、田樂豆腐をいふ。元祿から正德頃にわたつて、上方では田樂を賣るに、「蒟蒻豆腐の鹽梅よし。」と聲立てて賣り歩いたので、おのづとこの物の名になつたのである。傾城禁短氣第三編に、角行燈に、「酒小賣所、あんばいよし。」と書いた書が載つてゐる。

〔一二九十は七七の、七つの知死期〕（心中刃は氷の朔日）六八三頁　俗説に人の死ぬる時刻は自ら定まつてゐるもので、概して潮汐の退く時刻に於て死ぬといふ。下句では一二九十は、七寅七申四巳四亥となつてゐる。

〔いとしぼげに〕（曾根崎心中）二四五頁　「いとほしず」（悼）が轉換した語で、緣起(えんぎ)を「ぎえん」、茶釜(ちやがま)を「ちや

間の山を唄ひ、往來の人から錢などを貰ふ袖乞の一種の者がゐた。京阪地方にも間の山を唄ふ物貰ひが居て三味線の代りに胡弓を用ゐた。神都名勝誌四に、「間の山節。往古僧行基の兩宮に參詣せし時、世人に無常を示さんとて唱歌數首を綴り、比丘尼に唄はせしが初めなり、寛文延寶の頃に兩間の山の路傍に小屋を作り、女は紗綾縮緬を纒ひ、三絃を彈き、男は編笠を被り簓をすり、子兒を踊らせ錢を乞ひき、其の諷ふ歌いと哀れにして、文句も能く聞分けられたるよし。」と見え、日本永代藏卷四に、「相の山袖乞までも心ながく、道者の機嫌を取りて餓ゑず寒からず、身に絹布をかざり、連れ引きの三味線に乘せて、あさましや心一つといふ一ふし、いつ聞きてもかはらず。」と見えてゐる。間の山の歌詞は一樣でないが、落葉集(元祿十七年刊)卷七に、間之山念佛の唄を載せてあり、又巢林子作の夕霧阿波鳴渡、傾城反魂香、生玉心中に引いてあるは、巢林子が多少改作したものである。間の山は物哀れな節であるので、長くは流行しないで廢つた。今も淨瑠璃に間の山の音節があるのは、この手の殘つてゐるのである。

〔天川珊瑚珠〕(傾城反魂香)　三九五頁　阿媽港から渡來した珊瑚珠、阿媽港を天川と書いたもので、即ち支那の澳門である。長崎蟲眼鏡(元祿十七年刊)下卷、日本渡海御停止國々の條に、「阿瑪港」に「あまかわ」と傍訓してある。澳門はアウムンの發音である。土人阿媽港と呼べるを、葡人聞き傳へてマカヲと言うた。蓋し阿媽港の名は、阿媽といふ一豪傑を敬慕して命じた物で、阿媽は日本から來たものといひ傳へられ、現今もなほバラ塔下の神として祀られてゐる。

〔あまさかり〕(心中二枚繪草紙)　四二二頁　正しくは「あまざかり」で、天離即ち遠方の意。「さかる」は離れる意をしめす「さく」といふ語に對する自動詞である。巢林子

いふ跡あり。」と見え、謠曲熊坂にも、「さて北國には、越前の淺生の松若、三國九郎、加賀には熊坂の此の長範。」と見えてゐる。

〔あだて〕（丹波與作） 五四七頁（心中刃は氷の朔日） 六六二頁 「あんだて」（立案）の「ん」の脱落した語であらう。もくろみ。腹案。商人職人懷日記（正德三年刊）卷四に、「このしんしやう一貫目が物はあるなし、今更誰か一錢取替ふべきあだてもなく。」と見えてゐる。なほこの語は近松作中、丹波與作、心中刃は氷の朔日の他に、傾城吉岡染の中にも用ゐてある。

〔あつたぼこしゆもない〕（丹波與作） 五三八頁 「あつた。」は、嫌忌の意をなす「あた」と云ふ語に、音便で促音の加はつたものである。「ぼこしゆもない」は「ぼつこしゆもない」「ぼこしもない」とも言ひ、「からばしうもない、おもしろうもない」といふ意。

〔穴一〕（心中萬年草） 五一三頁 「あなうち」（穴打）の訛りであらう。意錢の事で、小兒の遊戲である。地に線を書し、錢を打つて勝負するもの、近代では錢を用ゐないで骰子を用ゐた。日次紀事、十一月の條に「自二此節一兒童掘レ地爲二小穴一、各以レ錢投レ穴、以二其近レ穴爲二一二次第一、其後毎二一人一出二錢或二錢或三錢一、各集レ錢一手握レ之、則投二前一穴邊一、然各指二點所レ撤之內一文錢一請レ之、使下其撤レ錢人擊上レ之、其人以二別錢一枚一擊レ之、其中下所二散在一錢上者爲レ勝、悉取納下所二聚投一之錢上、是稱二穴一一、不レ中レ錢者爲レ負、不レ能レ納二取之一、而與二奪其一二之次人一、又如レ此、是後京極攝政良經公御記、所謂意錢、而中華擊壤之類也、」と見えてゐる。

〔阿波座の野良烏〕（淀鯉出世瀧德） 五九九頁 大阪新町をぞめく遊冶郎をいふ。阿波座は新町廓通りの名。

〔相の山〕（夕霧阿波鳴渡） 七〇九頁 間の山節の畧。人生の無常をうたうた俗曲である。寛文延寶頃伊勢國尾上坂及び浦田坂の間の山で、簓を摩り三味線を彈いて、

註釋

本文中*印のある語句に就き五十音順によつて索出する

［あかう］・（雪女五枚羽子板）三三七頁　（雀榕）本邦の暖地に自生する常綠喬木で、其の質堅硬緻密、木理錯綜して頗る美觀を呈し、挽物細工や漆器製造などの料に用ゐる。巢林子の文に「あかうの胴」とあるは、雀榕の木で造つた小鼓の胴である。

［あけすけ］（娥歌加留多）九三七頁　「あけすき」（明透）の義であらう。物をつゝみ隱さぬこと。心底を隱さず打明けること。助六心中弁せみのぬけがら（古淨瑠璃）に、「よろづ屋の助六とて、男自慢にのぼされて、今はしんだいすつきりすけ六。」とある「すけ」も、透いてゐる意を助六の名にいひかけたのである。

［葦屋釜］（傾城反魂香）四〇五頁　葦屋釜は土佐光信が都の亂を避けて、筑前蘆屋の里に下り住んだ時、其の里人の製造する釜の下繪を描いて、其の模樣を入れて燒かしたものである。蘆屋釜の下繪を蒐集したものに『蘆屋のけふり』と云ふ本があつて、嘉永五年頃に出版されてゐる。黑川道祐撰、雍州府志卷七、土產門下に「釜。煮レ湯之具也、中古於二筑前葦屋里一所レ鑄、號二葦屋釜一、……今有二狩野探幽幷永眞等之下畫一也。」と見えてゐる。

［あそふの松若］（傾城反魂香）三七四頁　「あさふの松若」とすべきである。「あさふ」は越前足羽郡麻生津鄕をいひ、松若の屋敷跡がある。松若は盜賊の名である。歸鴈記に、「淺水里（あさふづ）に松若と云ひし盜賊の住所なりしと

藤、仲經蓑笠脱ぎ棄てつゝと出で、兩方より兩腕確乎と取る。班足王の力を出し、捥ぎ放さん捥ぎ放さんと、すれどもいつかな動かせず。「我々爲には親の敵、舅の敵。天下萬民の恨みの劍受取れ。」と、刺し通しく、首かき斬つて、「朝敵退治御代萬歳。」と呼ばはる聲、重賞恩賞飽き滿ちて、悦びの聲勇む聲、士農工商隔てなく、樂しむ聲や松竹に、千代の聲あり萬代も、絶えぬ此の御代、此の秋より五穀富饒ぞ續きける。

嵯峨天皇甘露雨 終

の護摩の壇上に、落つると等しく其の姿、猪甘の連が俤の、忽然として立ち居たり。大師金剛合掌あり。「汝五百生の輪廻を四百九十六度生じて、今四生を殘し煩惱の闇に迷ひしに、眞言祕密の功力に引かれ、惡右馬の尉が暫しの蘇生に魂を移し、直に刃にかゝつて、修羅道の因果を滅し、樫原の牛の腹に宿つて、守敏に殺され、畜生道を果し、其の後大炊の介が一子と生まれ、乳房に饑ゑて痩せ衰へ、餓鬼道の苦しみも此の時に消滅せり。いま又繪に描ける龍に一念を移し、雨を降らし國土を惠み、天上の果を得たり。卽ち修羅、畜生、餓鬼、天上の四生を頌して、東寺の門前に墳をつき、四つ塚と名付け、末世に佛種を結緣すべし。四百九十六度に今の四生を都合して、五百生の生死の絆、阿字の一刀にて打切つたり。殊には二人の女、四國遍路八十八箇所を順禮し、我が親の爲、我が子の爲と、渴仰供養の功德力、親となりしも汝が魂、子と生まれしも汝が魂。皆一筋の廻向となつて、彌勒を待たず、只今卽身成佛す。」と心月輪の祕印を結び、佛眼眞言を唱へ給ふ。御息は三寶護念の雲と棚引き、ありつる姿を打乘せて、內證利生の光を放ち、虛空に上ると見えけるが、白雲變じて密嚴華藏、大覺圓明の佛體と顯はれ、無量の如來影向あり。龍燈天燈光を挑げ、散花、音樂、伽陀の聲、法の功德ぞ有り難き。時を移さず二人が妻、大夫親子、濱賴も、天皇を供奉し參る所に、何時の間にかは入りたりけん、王子、守敏が壇の下より躍り出で、天皇目掛け討つてかゝる。參詣の中より、勝

と、大金輪大水輪の、印を結んで金剛合掌、施甘露法繰り掛け責め掛け祈誓ある。梵磬、錫杖、鈴の聲、上は有頂、下は阿鼻獄に響き渡つて、眞言陀羅尼の梵音聲、賴もしくも又有り難き。妙なる御法の其の驗、東寺の方より靈雲棚引き、猪甘が魂星の如く虚空を飛んで、繪に描ける龍に移ると見えけるが、忽ち眞の龍王と、九萬九千の鱗を立て、雲を起し霧を捲き、「今天上の果を受けし。」と、言ふ聲高き天つ空、登ると等しく天樂、天鼓、蒼天俄に掻曇り、平等一味の甘露の雨、草木國土潤ひ渡り、萬民悦び舞ひ踊り、「寶降り來る金が涌く、打出の小槌、隱蓑、隱笠。」とぞ謠ひける。守敏大きに怒りをなし、「エ、うそつきの大日如來にだまされ、今までうか〱眞言を學びたる口惜しや。今日より魔法を行ひ金翅鳥となる。待つて居れ龍神めら。四大海を干潟となし、天を暗まし地を覆し、此の仇を報ぜん。」と、獨鈷、三鈷、鈴、花皿、ぐわらり〱と取つて投げ、机、禮盤踏み割り〱、虚空を睨んで立つたる所に、震動雷電頻りにて、黑雲一叢渦卷く中より、ありつる龍王舞ひ下り、守敏が五體を十重二十重、くるり〱としがらんで、頭の鉢にしつかと喰ひ付き、牙を研いだる其の光、倶利伽羅不動と謂つつべし。守敏は一世の力を出し、「えいや〱。」と、揉めども押せども神變力、尾先の劍にて五體を劈き切り裂かれ、「エ、苦しあら苦し、苦し。」くる〱締め付けられ、血肉ながれ骨碎け、遂に敢なくなりにけり。龍は逆立つ鱗を和げ、形はもとの繪に殘り、魂は拔け出でて、大師

より守敏百日以前より、四大海の龍王龍神、殘りなく水瓶に封じ込めたる上、「今日空海が雨乞。世界は火輪に焦るゝとも、守敏かくてある中は、雨は一滴も降らせじもの。」と廣言吐き、緋の衣、緋色の袈裟、壇も朱塗に火を表し、その身も日傘さしかけさせ、覽字の祕文を繰り掛け〳〵火の印を結んで祈りければ、空に一點の雲もなく、大地も裂けて照り渡り、恐ろしなんども愚かなり。弘法大師は天竺將來の御袈裟衣。御弟子二人に灑水させ、壇に上らせ給ひければ、老若男女羣集して、或は蓑笠、高足駄、天を禮し地を拜し、「あはれ大師の御祈りに、天神地神力を添へ、雨を降らしてたび給へ。若し守敏が勝となるならば、數萬の參詣一人も生きては歸らじ。」と、共に肝膽碎きしは、殊勝にもまた哀れなり。大師暫く御目を塞ぎ、「空海苟も三寶の敕使として、明らかに是れを知る。かるが故に三界の諸天を驚かし、敬つて此の理を啓し、四趣の龍神にむかつて此の恨みをなす。若しそれ八恒河沙の水神、龍神、惡僧邪法に惱まされ、雨を降す力なくとも、地に水輪あり。星に水曜北方一德の水あり。天に銀河、天の川、苗代水にせき下せ、天降ります神々たり、佛々たり。四生、六道、二十五有一切、含識、中有の魂魄、今こゝに來現して、時を移さず日を待たず、甘露の雨を國土に降らして、萬木千草を潤し、五穀五果を實らせ給へ。山野の禽獸羽毛をのばし、江河の魚鼈鱗をとゝのへ、國には九年の糧を蓄へ、萬民五袴の悦びに耽り、國土安穩ならん事、決定して疑ひなし。唵阿毘羅吽欠。」

河海の鱗まで、此の苦患幾何ぞや。空海これを救はずんばあるべからず。御邊早く立ち歸り、此の趣を王子に訴へ、日限を定め、神泉苑の東西に、壇を二箇所に構へ、守敏に旱を祈らせられよ。空海は雨を祈つて、守敏や勝つ、空海や勝つ。法の邪正、修行の淺深、其の時にこそ顯はるべけれ。はや歸られよ。」と、御數珠にて摩頂あれば、筋骨緩み足立つて、元の如くになりにけり。各「あつ。」と頭を垂れ、「眼前の不思議を見て、何しに疑ひ奉らん。雨の祈りある樣に言上致し候べし。さりながら、若し守敏勝つて候はば、大師、守敏が弟子と成り給ふべきか。」「中々の事。」「扨又大師の御勝にて雨降る時は、守敏を御弟子とし給はんか、御望みのこと承らん。」と申しければ、「オ、空海が勝つ程ならば、弟子にするまでもなく、諸天善神よも生けて置き給はじ。守敏が命は、其の日を限りと思ふべし。」と宣へば、百姓どもも聲々に、「今まで世界の人民を惱ましたる守敏坊主、佛神助け給ふとも、皆寄つて打殺さう。雩の御訴訟も五畿内五箇國總百姓、一統しての言上、叶はぬ時は一人も生きて歸らぬ。」「オ、合點。一人は死なぬ。」「オ、合點、相手は合點か。」「オ、〳〵。」王子の館に詰め掛くる。不仁非道の惡王も、萬人の訴へ爲方なく、弘法大師、守敏僧都、行法を比べ試さるべしと、神泉苑の南に樓臺高くしつらはせ、正面に青龍王の繪馬を掛け、王子の代官として、百寮百官我も〳〵と參詣あり。西の壇には西寺の守敏、雜學僻見の我僧數十人相具し、壇上に上らる丶。固

給へども、嵯峨の天皇未だ都近くに坐す。地に二人の王あるは、天に二つの日あるが如し。殊に空海といふ惡法師の邪法を信じ給ふ故、天帝水神怒りをなし、天下旱魃の愁へとなる。さるによつて天皇を、壹岐の島へ流罪せよとの仰せなり。天皇を流しなば、空海が邪法自ら力盡き、風雨隨時に治まり、目出度き御代となるべき由、守敏僧都の考へにて、只今天皇追立てのむかへの牢輿、そこ立ち退け。」と呼ばはりける。大師木陰に立ち寄り、「衆怨悉退散、急々如律令。」と、繰り返し〳〵、※内縛外縛の印を結んでかけ給へば、大將大納言を始め、警護の兵士雜人まで、俄に筋骨強張つて、手足もつれて蜘蛛のいに、搦みし蟲の如くにて、蠢き廻るぞ不思議なる。大納言大聲上げ、「あら痛や堪へ難や、千筋の繩に締め付けらるゝ如くにて、骨も碎くる許りなり、方々は何とある。」「何ぢやは知らず、體を取つて行く樣な、あ痛〳〵。」と泣き居たり。「ヤアあれに空海の見え給ふ、道理こそ〳〵、何事もお慈悲の上、さりとては御助け。」と、五體をなげうち詫びければ、大師近づき寄り給ひ、「然らば御身に言ふことあり。今年天下旱して、萬民苦しみ愁ふる事、皆守敏僧都が仕業なり。空海が學行に劣つたるを猜み、上界下界の八大龍王、百千眷族の龍神を封じて、水瓶に祈り込めたる故、水神龍神苦しみ怒つて、雨降らすべき力なし。これを天皇の不德の科に取り成し、遠國に流し奉り、空海をも世に在らせじとの惡心は、智見の鏡に明らかなり。世界の苦しみ、人間は言ふに及ばず、山野の鳥獸、

く、映せば映る一念に、善あり智あり慈悲心ある、驗もありや有明の、月は胎藏、日は金剛、兩部に漏れぬ御法ぞと、彌渇仰なしにける。

第五

阿字の殿上には、自性の月高く晴れ、光明の閣閒には、微細の霧殘らず。弘法大師の御法力、四海に輝き、玉體安全の御加持に、高野山より嵯峨の離宮へ、毎日通はせ給ひしか、人目には緩々と、歩ませ給ふと見えながら、三十餘里の長途を、行きて歸らせ給ふこと、只半時には過ぎざりけり。頃は弘仁八年丁の酉、天下大きに旱して、土乾割れ石燒け、草木枯れて焦せる如く、大河小河に流れ盡き、船は陸地の見物となる。上一人より公卿大夫、下黎民に至るまで、天に雩、地に祈り、海神河伯を祭りても、猶一滴も降らざれば、渇魚の泥に喘ぐが如く、苦しみ歎く許りなり。大師嵯峨野を通らせ給へば、近鄕の土民羣集して御衣に縋り、「慈悲第一の大師樣、斯程まで一天下水に渇る、耕作農業叶はぬを、よそに御覽候かや。雨を祈り國土を潤し、助けさせたび給へ。」と、野原にひつしと臥し轉び、聲を齊へて歎きしは、千草の蟲に異ならず。かかる所に、大海原の王子の出頭、百濟の大納言牢輿先に押立てさせ、兵士數多召し具し、「ヤァ〳〵土民等道を退け。今度大海原の王子帝位に卽かせ

爲とぞ見えにける。大夫もほうど爲方盡き、「人力にては叶ふまじ。眞言祕密の御法力、驗を見せさせ給へや。」と、「不空羂索、千手千眼、願はくは千の眼を顯はし、千の御手を伸べ給ひ、眞言の行者に力を添へ給へ。じんばらはらはりたやうん。」と、責めかけ〳〵祈りければ、不思議や俄に鳴動して、家内の諸道具手足を生じ、或は一眼或は兩眼、星の如くに煌いたり。圍爐裏に据ゑたる五德の鐵輪、眼はあれにあら釜の、鋼鐵を鳴らし、三足の爪を蹴立てて歩み寄る。王子あざ笑ひ、「正法に奇特なし、何事かあらん。足無き物の歩くならば、不思議ともいふべきが、五德に三本の足あり、サア歩め見物せん。」と、恐るゝ氣色もなき所に、湯殿の隅より行水盥、三尺四方の面魂、足を宙に飛び廻り、はつたと睨み喚く聲、煮湯を流す如くにて、流石の王子氣を奪はれ、つつ立ち上れば、小晒ひらりと飛び退いたり。「己盥め、打ち碎かん。」と互に追ひ立て追ひ込む。黃粉にしてくれんと石臼が、くわと見開くめつきり〳〵、挽木の片手を三間許りぐつと延べ、王子の太刀を奪ひ取り、宙を拂ひ、裾を薙ぎ、左右を捲いてくる〳〵〳〵、ひらり〳〵とはためき渡る。太刀は稻妻、鳴る音は、雷なんどの如くなり。眞言加持の法力に、王子も今は爲方盡き、「空海が法力に此の度は負くるとも、我又守敏の行力にて、一天下に憂き目を見せ、邪正を思ひ知らせん。」と、八方を睨み付け、躍り上り飛びあがり、牙を噛んで立ち歸る。大夫親子は眞言の、法力行力佛力や、信心力に勇力も、なほます鏡曇りな

銚子引くまいぞ。お肴は何故遅い、嵯峨の汲鮎は、道が遠うて間に合ふまい。東寺の水菜を一走り取り寄せ、ついざつく／＼と切るに隙はいらぬこと。エ、油斷な、お肴はやう。」と、氣を揉みける。「いや油斷はせねども、使も未だ戻らず、嵯峨、東寺は埒明くまい、如何にしても殘念。我々がこの手料理のお肴で、たつた一獻思入れの杯。こつちへ退け。」と招かれて、娘も心得、膝枕そつと外しは外せしが、うはがひの褄肩に敷かれ、引けども／＼骨太き、大の男の寐入つて、重き藤葛を引く如く、父母あせつて、「切つて退け／＼。」と、そつと投げ出す脇差、おつ取り立つ所に、王子むつくと起き直り、敷いたる小褄しつかと取る。娘は脇差後手に、がた／＼顫ふ危さよ。王子から／＼と笑ひ、「ヤイ酒の五斗や一石で、王子が性根みだるべきか。うぬらが心底見ん爲の空寐入り。嵯峨、東寺の肴とは勝藤、大炊の介がこと。來れがな、よい肴、一咬にせんものを。親子の奴ばら今生の名殘、先づ娘から仕舞はん。」と、引き寄せんとする所を、小晒脇差取り直し、うはがひさつと切り放し、ひらりと退いたる早業に、王子驚き大音上げ、「ヤア糟禰宜めは敵一味に極まつたり。討ち取れやつ。」と呼ばはれば、取り捲いたる軍兵ども、我も／＼と亂れ入る。稻荷講中十人ばかり、親子三人一手になり、追つつ返しつ斬り拂ひ、小晒取つて返し、「王子やらぬ。」と斬り掛くる。「しや物々し。」と、小腕取つて足の下にどうど踏み、「一人宛は事むづかし。皆々一度に踏み殺さん。掛れや掛れ。」と怒りしは、鬼神の所

る物ぞ。」「サアそれが定なら契約の杯取り交さん。なう母樣、寺朋輩の友達衆に、酒一つ盛る爲銚子、杯頼みまする。」「おう。」と答ふる母の聲、しすましたりと用意の銚子、大杯をぞ出しける。「先づそれからと申すはずなれども、ちと心入も候へば、私たべて。」と手酌にて、たぶ／＼と受くるを見て、色に引かるゝ色好み、「扠氣味のよい杯、それを御身がみな呑むか。」「何のいの、すけて貰ふ人あり。」と、ちよつと口つけ、さしければ、「ハア、一天の君に付け差とは、うい奴め、面白い。」と、ついと乾し、「すけ三杯。」と、引き受け一刻呑み。「サアさいた。」「おさへましよ。」「一天の君におさへるか、面白い。」と、又傾くるその隙に、勝手より母は心得、代銚子そつと出せば、「是れ申し銚子のつぎめ請取られぬ。」と突きもどす。「一天の君に銚子のつぎめが面白い。」と、つがせてはついと乾し、差せば、「さはつた、任せて置け。」「數が惡い、今一つ。あんまり見事今一つ。」の、一つ／＼が數重なり、舌も縺れ目も坐り、「如何な一天の君ももうならぬ。」と、とんと娘が膝枕、前後も知らず寐入るゝ。大夫夫婦は手足も空に、嵯峨と東寺へ人走らせ、二人を遲しと待つ程も、屋敷の三方軍兵にて取り卷いたり。此の間に醉ひ醒めて、取り逃しては不覺なりと、座敷を覗けば高鼾、死人を斬るも同然。「勝藤がな歸られかし、大炊の介歸られかし。一層討つてや仕舞はん。」と、太刀ひつそばめ、女房は長刀横たへためらへば、娘は王子の鼻に手を當て、頭振を振り、「いや／＼御酒が足らぬさうな、粗忽にお

早う男が持ちたい。こちの父樣母樣は、いくつで夫婦にならしやんして、思ひやりのない事。男持つたら嬉しからうな、うにや〱〱。」と言ひ消せば、「是れはどうもたまられぬ。寐言いふには問ひ樣で、返事する呪ひあり。」と、左の袂を打被き、袖口より顏出し、「是れ男持たせう。色白に美しう、きやしやな男が好きであらう。」と、言ひかくる。「いやぢや〱〱いや〱。色白な男は、姫瓜の樣にぬつぺりとして、勢がない。色淺黑う、底赤光のあるがよい。」「それでも髭は嫌であらう。」「嫌でない嫌でない。摺頬の後がひり〱して、後のかたみ忝い。」「ム、ウ注文に合うて、此方も忝い。扨又脊は高いが好きか、低いが好きか。」「脊の低いは口吸ふに不自由な。目元口元きつとして、脊と鼻とは高いが好きぢや、ぐぢや〱〱。」と言ひければ、王子ぞく〱たまりかね、「御好きの男是れにあり。」と、ひつたりと抱き付く。「ア、怖何者ぢや、女子の部屋へ不遠慮。」と、逃げて入るを引き留め、「男の欲しい心底も、好きな男の風俗も、寐言にとつくと聞き澄ました。一天の主大海原の王子、不足があるか。」と手を取れば、「ハア扨は寐言に、思ふことを申せしか、常々父母の、寐言いふとて叱られしが、心を見られて面目ない。此の上は何とせう、人に沙汰せまいなら、どうなりともぢやが、男の癖、あそこの娘を寐言から附け込んでの、助兵衛の何のと沙汰があるなら、妾やいやぢや、エ、恥かしや。」と、顏に當てたる兩袖に、戀と色とを包みけり。「ハテ斯うなる上は朕が后、何の沙汰をす

稲を荷ふと書いて、いなりと讀ませ、御本地辨財天五穀の福神と崇め、我々社人等弘法大師の御弟子となり、眞言の法を專らとして、神を祭り候。」と言はせもはてず、「ム、よめた〳〵。汝が師匠の空海より預つた、兩人の客人に對面せん、是れへ呼べ。」大夫そらさぬ顏にて、「ハアウ此の山花紅葉の頃は、客人も候へども、只今の客人とは男か、但し女中方にて候か。」「いやとぼけまい、勝藤、大炊の介がこと。それ込み入つて家搜しせよ。」と、まつ先に立ちければ、供奉の公卿、冠裝束脱ぎ棄て脱ぎ棄て、下には鎧腹卷して、我も〳〵と込み入りける。「汝等は南の野原東西を固めよ、表一方は我が一人に任せよ。」と、※白駝王の荒れたる勢ひ、遣戸、障子を蹴破つて、奥の一間につつと入れば、娘が向ふ姿見の、姿は見えず鏡の中、脇息に打靠れ、眠れる花は古いこと、何に譬へん衣裳繪を、物の上手が白鑞玉に、作り入れしが如くなり。王子驚き、「これは見事、天から映る天人か。」と、あこがれ見とれて現を拔かし、「透寫より正筆をちと拜見。」と、取つて除けたる屏風の陰、小晒はなほとろ〳〵と、眠る目元のあてやかさ、「百の媚ある頰先へ、ほつかりと喰ひ付かうか、姿の美景抱き付かうか、どうせうと此方のまゝ。エ、甘い所。」と、ちよつと手を付け、ちよつと撫で、君が脣我が指に附けて、「眠りもまだ覺めぬ。」髪のつや〳〵紺瑠璃の、玉にころ〳〵唐猫の、そばえ狂ふに異ならず。花の顏容光り合ひ、陰脣を動かすは、「ヤア寐言さうな。」と、耳を傾け能く聞けば、「ア、持ちたい〳〵、

語、忍ぶ程こそ忍ぶべけれ。顯はるゝ上は、よき討ち時節到來とは思へども、折しも惡う兩人は他行の留守。難儀は某一人。さりながら此の兩人は、弘法大師より御賴みの人々。たとへ此の大夫が一命は果すとも、師の爲と思へば惜しからず。陳ずる程は陳じて見て、叶はずば飛び掛り刺し違へる覺悟、御身達は足手まとひ、何方へも立ち退け。生き延びたらば又逢ふべし、先づ今生の暇乞、疾々落ちよ。」と言ひければ、娘の小晒さか〳〵しく、「ア、愚かな父樣。御兩人をかくまへしと、王子の耳へ入るからは、富樓那の辯舌で陳じても、あたゝかに聞き入れうか、死ぬるもほんの犬死。音に聞えた色好み、口惜しながら親のため、自らが身を棄て、面の皮厚うしかけて、酒にどれさせ、よい時分に合圖せん。大炊の介樣は東寺參、勝藤樣は嵯峨の御所お見舞。人を走らせ呼び返し、討たする思案に極めたまへ。」と言ひければ、大夫夫婦悅び、「天晴でかした、分別といひ剛の者、武士の娘にも劣るまい。然らば其の手筈にして、用心の爲稻荷講中の氏子のうち、健氣者をすぐつて賴むべし。」といふ所へ、「行幸。」と呼ばはる聲、「扨こそ。」と、妻子を奥に忍ばせ、引繕うて出迎へば、王子態と車を下り、公卿許り左右に連れ、悠々たる顔付にて、「ヤァ大夫。當社はもと唯一の神道なるに、此の頃兩部習合と名付け、眞言の法にて行ふは、如何なる故ぞ。」とありければ、「さん候。弘法大師入唐の時、唐土にて大明神、稻を荷ひし翁と現じ、永く眞言の守護神となるべしとの、御契約ありしより、文字にも

文。右の外に、うぬ等が物何を取つて、取上婆とは奇怪千萬。一々に元首捩ぢ切り、命をも取り上げん。それ蹈み付けて搦め取れ。」と、車の前板割るゝ許りに蹈み鳴らし、四方を睨め付け怒りしは、千里の車に乘つだりし、婆羅門王とも謂ひつべし。町人共顫ひ出し「ア、御勿體ない、何しに誹り奉らん。恐れながら、お聞き樣の惡い故に御立腹。世の中の人間の生まれ出づると申すこと、父母の力許りでは、彼の難所を念もない事。皆取上婆の御恩とて、禮物祝儀の何のかの、六日だれの忌明の、誕生日の食初のと、取つて〳〵取上婆同然、御恩深き王子樣に申す譬へに候。」と、間に合はせて言ひければ、王子すこし面を和げ「父母の恩にも勝つたるとの譬へなれば、ゆるし置く。以後にも惡口いふ奴原、きつと曲事たるべきぞ。扨かく京中を巡る事、遊山許りと思ふかや。橘の勝藤竝に大炊の介兩人、忍んで朕を狙ふと聞く。別して稻荷の宮の社人めらは、空海が眞言傳授、師弟の筋目ある山なれば、今日直に穿鑿すべし。汝等も二人が在家、見付け次第聞き付け次第訴人せよ。月一貫の課錢を免し、頭數に百文づゝ、毎月永代取らすべし。」とありければ、「有り難いお優しや。此方から百出して、王子樣のお面を、摩つて上げたい事かな。」と呟き、皆々立ち歸る。王子は五條の直道を、横に車や稻荷山、大明神の社人竈の大夫、社の御番より立ち歸り、女房、娘を近づけ「我等が方に勝藤、大炊の介をかくまへ置きしこと、王子聞き付け、詮議の爲只今是れへ來るよし、參詣の人樋かなる物

簾取放し、往來の人に羨ませ、威勢を見せてぞ通らるゝ。供奉の公卿御車を止めさせ、「ヤア〱町人共、直に宣旨の事あり。町々宿老、行事、組頭、一人も殘らず罷り出でよ。」と呼ばはれば、「如何なる詮議か言付か、又何ぞ上げませぬか。」と、古羽織の裏の町、袴の腰の横町まで、殘らず集ひ這ひ蹲ひ、地に鼻付けてぞ蹲る。王子寬々と打眺め、「彼等は京の町人な。此の度嵯峨の天皇を追退けし上は、普天の下、率土の濱、空飛ぶ鳥、蟲螻まで、皆朕がまゝにてある。何と嵯峨の代の政道と、朕が今の政道と、何れが善惡萬民の取沙汰、僞りなく眞直に疾々申せ。」と仰せける。町人ども返事にしかね、前の御代より善しといふは腹の立つ事。惡しといふも恐ろしく、「先づ上の町から申し上げや。」「先づ其方から。」「いや其方から。」と、互にぬすくり合ふ所に、五十許りの繰鬢親仁罷り出で、「嵯峨の天皇樣は、世界の民を我が子の如く御惠み。それ故民の父母に譬へ奉り、王子樣は取上婆ぢやと申しまする。」と言ひければ、王子大きに怒つてぬつと立ち、四角の眼八角に見出し、「オ、それを聞かん爲、此の王子を取上婆とは、何時何を取り上げた。地子年貢は我が地にけつかる冥加の爲、賣買三分一の運上は我が酒宴遊宴の料。これ又上を慰めの爲、毎月門並一貫文は、よき女とあるからは、嫁、娘は言ふに及ばず、たとへ面々が本妻なりとも、差上げよと觸れたるに、或は病者と僞り、又は空海坊主が始めたる、四國遍路にかこつけ、他國へ退け、花の都に美女なき樣にしなしたる、其の過怠の一貫

國分寺。六十五番三角寺。是れよりさきは讃岐路と、こゝに札うつ石槌山、小松尾山を見わたせば、國々島々目の下に、爰も蒼海曼荼羅寺。現世の夫は、武夫の道に功ある丸龜の、天王山と白峯の、望みは高き百餘丈、兒が嶽には及ぶとも、四國遍路の御方便、思ふ矢壺は梓弓、八栗、屋島の八栗山。南無や志度寺の、觀音薩埵の力を合はせ、大悲の縁に大窪寺、拜み納め打ち納め、巡り納めてかぞふれば、阿波に二十三所の靈地、土佐國に十六箇所、二十六箇所伊豫國、讃岐に二十三箇所と、合はせて八十八箇所は、大師の巡りそめ給ひ、二世の大願成就を教へ導き給ふぞと、思へば旅も苦にならず。心まめしく足輕く、舟さへ輕き海の面、追手の風に法を得て、都に上りたまひけり。牧野に戈を倒にすと傳へし先言、耳に萬里を隔て、大海原の王子義を損ひ、善を損じ、天皇を嵯峨の離宮に押し籠め奉り、自ら十善萬乘の天子と稱し、民を貪り虐ぐり、洛中家並に色よき女一人づゝを貢物。叶はぬ者は毎月一貫文の課錢をかけ、其の身は瓊宮瑤臺の綾錦に纏はれ、酒を池とし、色々の肴の林、美食の山。筋なき者も美女の縁にて、公卿大臣の位を許し、驕奢日々に盛んにして、都の町々遊覽の行幸ごと、廻らす玉の御車も、流石に牛の恨みの報い、後怖くや思はれけん。牛をばかけぬ牛の角、跳元結の笄髷、二十を頭に十人許り、車の轅軋らせて、脫掛小袖薫物の、香ひと色の花に挽かする花車、えい〳〵と押せども女力の、汗の白玉、花の露かと蝶鳥も、口紅吸うて轟かす。物見の

だ黒谷に墨染の袖、五番に地藏寺。六道能化の地藏大菩薩、導く玉の數々に、繋げ十づゝ十樂寺。十里十ヶ所足輕く、若い身にさへ修行とて、白粉もせず紅附けず、日に燒け山の嵐に、髪をとかせてさつと梳かせて、しやんと插さばや笄に、楊枝の柳陰深く、梢に銀のせみが端、ぱつと白鷺立江寺。北に星谷、鏡石、嬰子生んだ身も生まぬ身も、胎内潛り一代の、灌頂が瀧見上ぐれば、鶴の林をつるつると、昇る朝日か朝月か、いや日に三度現じ給へる不動が瀧。是れまでは阿波の國界、早行く先は土佐の海、八濱濱中、八坂坂中さつ〳〵。我は子故に、我は父故母川の、水の恩德法勝の、室の御崎寺、津照寺。それかと人に唐の濱。拾へど土の蛤の、不思議を今もみつがしら。爰は日本一の宮、景も景色も清瀧寺に、入海近き渡守。月の誘はば自ら、舟も漕がれて出づらん、舟人も漕がれ出づらん。焦るゝ物は我よりも、妻戀ふ牧の土佐駒の、あれ〳〵花になづみて花薄、歌 一本薄やいつかいつかこの、穗に出て亂れ合を、穗に出ていつかやいつ、三か四かいつかいの。穗に出て六日の晩に廻り逢を。逢はぬ夜は只泣き明す、蹉跎寺に手をすりて、拜む御寺は寺山院。是れから先は伊豫簾、かかる不思議や一年に、例七度なる栗の、佛木寺名もたかく、音に聞えし菅生山。伊豫の小富士や松山の、松の調べか三味線か、のせて一ふし淨瑠璃寺。道後の湯入り伊達そめ浴衣、裾に名所の正月櫻、しやなら〳〵〳〵、柔かな手でちよいと招く。誰が石手寺と名付けけん。三島、佐禮山、

底如何に。」と言ひければ、「面白き料簡。助太刀までもなく、御邊の親の敵なれば、我がためには舅の敵。」「オ、それよ〳〵、此の花世が爲にも親の敵。」と、勇みをなせば、濱頼はなほ涙に咽び、「我は討つべき敵もなく、一子の爲には命の敵。是非に自害。」と押取る刀、大炊の介押止め、「いや〳〵一子を害せし其の時に、胸の中より、鏡の如き光を放ち雲に入る。成佛に疑ひなし、佛に敵あるべきか。大海原の王子は此の子が爲にいはば、祖父の敵にて佛敵なり朝敵なり、押廣めては天下の敵。心を合はせていざ討たん。先づそれまでは互に竊かに世を忍び、誠の心は狀文。」の、明けぬ先にとたち歸る。恨み開けて梅の花、しら〳〵しらむ朝日影、涙の氷打解けて、結ぶは夫婦父子兄弟、五つの道も孝行を、本の契りとなりにける。

四國遍路

歸るさ知らぬ旅ごろも、〳〵、法のためとは糊つけて、張りて乾してはつばなかし、肩に笈摺同行二人、誓ひの舟にまかせ行く、世はあだ浪の浮きしづみ、阿波、土佐、讃岐、伊豫國、四國遍路と思ひ立ち、大炊が妻は我が子の菩提、勝藤が妻は父のため。それよりもなほ一筋に、夫々の此の世の願ひ、巡る利生は自ら、身の德島に舟寄せて、拜み始むる靈山寺。こゝが此の世の極樂寺。菩提は山の小牡鹿の、招けど更に金泉寺。煩惱は家に飼ふ犬伏村や吹田村眺むれば、月白妙の夜半なれや。た

え、消え入り〳〵泣きければ、大炊の介聲を荒らげ、「ヤ誰に歎つ其の涙。但し人々を迷惑がらする涙か。何時ぞや濱頼殿奪ひ取りし時、妹が孝行奇特にも哀れにも、思ふに忍びず、妹になりかはつての志なれば、恩にかける方もなく、禮を受くる人もなし。死骸を見て悔しくば、山に棄てよ。」と叱りける。「いや悔みは致さねど、一昨日より泣きたいを、怺へ〳〵して包みしもの。これ程は泣かせて下され。」と、抱き付けば大炊の介「それなら我も今少し。」と、夫婦死骸に抱き付き、聲も惜しまず歎きしは、ことわり過ぎて哀れなり。濱頼むつくと居直り、「扨此の爺が身に附いたる肉は、あの子の肉よな。幼いを餓鬼道に墮し、喰らひ太つてなにかせん、冥土にて返辨せん。」と、胸おし寛げ、傍の刀押取れば、勝藤止めて、「暫く〳〵。我に先だち給ひては、大炊の介の志に背く道理。我が最期を見屆け、其の後の御自害。これ大炊の介、此の上は首差伸べて討たるゝとも、よも討ち給はじ。尤も勝負はなほ爲難し、夫婦これにて刺し違へん。首を討つて親の敵、本望を遂げ給へ。サア來い女房、只今。」と刺し違へんとする所を、大炊の介取つて押し退け、「これ勝藤。首差伸べて討たれんとなれば、御邊の命は、この大炊の介が取つたる同然。扨我が親は二代に二人の敵あり。前の生は惡右馬の尉仲成、敵は御邊。たゞ今一太刀討つて、卽ち命を取つたれば、これ本望は遂げたるぞ。次の生は、牛の體に魂宿つて、大海原の王子に殺さる。然れば王子は、我がための親の敵。助太刀を頼みたし。心

呑む乳房、朝夕我に含めらる。樣々辭退し斷りても、呑まねば却つて恨みの色。是非なく乳房に命を繫ぎ、老の憂き身を長らへたり。其の證據には、此の爺が肌膚は斯樣に潤ひて、幼い子は骨と皮、異國の崔南が妻の、乳にて養ひし、それは姑、是れはまんざら他人なり。他人の親を憐ぶも、我が親に孝行の、深きが上のあまりかや。我に何の好みはなし。敵が討ちたい〳〵と、たゞ一筋の思入り。斯樣の武士には一禮述べ、首差伸べて討たれてこそ、天の惠みもあるべきに、寐込に踏ん込む此の慮外、武運に盡きたる淺ましや。」と老の繰言繰り返し、口說き立てて泣きければ、勝藤も咽び入り、「恥かしき御心底、眞平御免。」とばかりにて、泣くより外の事ぞなき。花世泣く〳〵手を合はせ、「其のお心の兄上に、手を負はせしは天罰か、此の子の乳にて爺樣を養ひ給ふ志、何とお禮申すべき。いとしや此の子の窶顏見せてたべ。」と、抱き起さんとする所、女房押へて、「いや〳〵見れば淚の種。」と、押し隱すを押し取つて、抱き上げ見ればこは如何に、餓鬼の樣なる嬰子の、喉吭を一刀突殺したる死骸なり。「ヤア此の子は斬られて死んでぢやが、父御母御は知らずか。」と、狼狽へ歎けば勝藤親子、「これは如何に。」と立ち騷ぐ。女房「わつ。」と聲を上げ、「深う隱し置きしもの、由ない事を見給ひし。妾はかよわき生まれ付き、一人にさへ足らぬ乳を、此の子が呑みたい〳〵と、夜晝分かず泣き喚く。嫌しても、たらしても乳は細し、爲方なく父御前の手にかけて、一昨日の暮方。」と、かつはと伏して身悶

大炊殿討たれたまはば、己が元首取つて押へ、お内儀に首討たせんと、空寐入して控へたり。誠や鳥にあらざれば、鳥の心を知らず。魚にあらざれば、魚の心を知らねども、人の心は人が知る。おのれ父濱頼を討つたりとの高札を見て、只今斬つて入つたる心、嘸無念にありつらん。我が身の無念を知るならば、大炊殿の父仲成を、汝に討たせし此の年月の無念さを、何故思ひやらざるぞ。疾つくに出合ひ、大海原の王子を亡ぼすまでは、君に擲つ大事の一命。其の間の命を預け置かれよと、尋常にことわらば、兩方の心ばせ世の聞えも見事なり。我も奪ひ取られし時、死なんとすれど刃物は隱す、舌を嚙まんも齒とてはなし。縊れ死なんとせし所を、夫婦の衆が縋り付き涙を流し、「これは勝藤を釣り出すまでの囮なり。親の敵が討たれぬとて、敵の親を殺して、さもしき大炊の介が意趣返し、人違へ同前のうろたへ者、武士に似合はぬ仕方と、笑はれては侍の名を朽す。隨分老體の身を大事に賴み入ると、起き臥しまでの心付け。此の寒夜にあれ見よ。其の身は赤裸、妻子まで肌薄に、我に許り物取り著せ、誠の親より深切の、志は淺からねど、此の爺が身になつて見よ。我許り暖かにあらうものか、あるまいか、身を切り裂くがごとくなり。されども是れは大事なり。若し年寄の風引いて、煩ふか凍え死んでは、大炊殿の惡名立つと思ふ許りの身養生。ヤレ死なう〳〵と思ふより、生けう生けうと思ふのが、年寄はなほ苦しいぞや。殊に此の齒拔けが食物、貧家の爲方なきまゝに、一人の子の

みにて、障子一重の竹縁。「これ究竟。」と、飛び上り〱、障子を一度にはらりと明くる。女は著の儘一子の添乳、男は色々とり重ね、寒氣をふせぎ頭を包み、雪に油斷の深寐入。天の與へとにつこと笑ひ、胸板に乘掛り、刀を差し當て、「これ大炊の介、橘の勝藤なり。鹽漬の親の首、汝が首一所に請取らん。」と、引き起せば白髮の老翁、「南無三寶人違へ。」と、ためらふ所に、丸裸に肌襦袢、太刀拔きそばめ、「大炊の介是れに待ち受けたり、親の敵。」と、勝藤が左手の肩先、切先下りに斬り込んだり。花世すかさず、「舅の敵。」と、兄が眞甲耳際まで斬り付くれば、女房も起き合はせ、花世を確乎と抱き止むる。各血に染みながら、勝藤聲を掛け、「きたなし大炊の介。我其方と出合はぬを臆病と思ふかや。大海原の王子を亡ぼすまでは、私ならぬ命。それをも察せず、老鼠の穴に隱るゝなんどと惡口し、剩へ九十に餘る老父を殺すなどとは、女童の意趣返し、きたなしさもし。賣人土民にも劣つたる仕方。人でなしの手にかゝりし、父が不運是非もなし。親の敵。」と討つてかゝれば、濱賴牀を這ひ出で、「其の刀で我を斬れ、サア我を斬れ勝藤。」と、むしやぶり付いたる顏を見て、勝藤夫婦は、「はつ。」と許り、あきれて詞もなかりけり。父は物を言ひたげに、頭を振り胸を摩れども、齒の無き口は氣息漏るゝ、思ひに老を嚙み交ぜて、暫し涙にくれけるが、「ヤレ某が起き合はぬを、寐入りたりと思ふかや。なま〱起きては事やかまし。勝負を見屆け、己が討たれば、續いて我も自害せん。若し

の事。」と、雪に喰付き泣きけるが、「いや〳〵愚かな、泣く事も何もいらぬ。嬉しと刀は差いて居る、舅の敵、たつた今お禮申さう。」と、獨言して身拵へ、たち寄る軒の木陰の雪、白小袖の高紮げ、大小ほつこみ來る者あり。「すは曲者。」と飛び退れば、勝藤も柄に手をかけ身構へして、互に氣を付け眼をくばり、睨み合うたる雪の光。「ウムウ離別の女房花世か。」兄と心を合はせ、父を討つて餌にかひ、我を釣り寄せ本望遂げん志、神妙々々。さりながら兄と一所に勝負はせず、女の腕一人しては危なもの。されどもそれも心次第、サァ來い。」と拔かんとす。「ア、これ〳〵始終を御存じあるまい。父御を我が庵にて、はごくみ介抱致せしを、兄大炊の介が奪ひ取り、敢なく討つて棄てたる由、たつた今札を見付け、舅の敵斬り入らんとする所。此の上は離別も入らず、サァ一所に入つて本望遂げん。エ、お年寄をやみ〳〵と殺させ、面目ない口惜しい。」と、齒嚙をなして身をふるはし、涙は霰のごとくなり。「ム、大炊の介と我とは、兩方親の敵にてあひ狙ひ、其方は格別、夫は親の敵にて、兄は舅の敵なり。親が重いか舅が重いか、重いかたへ附け。」といふ。「はて男子の身には親が重し。女は親より舅なり。」「尤も〳〵其の念は變らぬな。」「いや〳〵飜す事はない。」「オ、賴もしい、夫婦一所に斬り入らん。氣息を限りに働くぞ、咽潤せ。」と雪を摑んで口に入れ、目釘はよいか帶締めよ。」と、頷く薄枯れ殘り、雪に傾く槿垣押し破り〳〵、荒れたる庵の要害、見れば彼も貧家の松の破れ戸、後は藁塀賴

見えず。在所の人々鉦、太鼓。狐のわざか天狗の所爲かと、稻荷の山は夜なく〳〵、愛宕、高尾の山の奥、比良や横川の奥まで、殘る隈なく尋ぬれど、今宵まで四十餘日、それかと似たる影もなし。今は此の世に亡き人の、直にその日を命日と、思うても思はれず、返せ〳〵と呼び歩く。今日は極月の寒の入り、手足も凍え氣息切るゝ。なう修行者。」と取り付けば、朽ち殘る秋の案山子の鳥威。「ハア我も狐に魅されしか。夫に別れ舅を失ひ、孝行かへつて不孝となる、因果な身ともなつたよな。こゝは所も狼谷、せめて誠の狼が、喰ひ殺してもくれよかし。」と、太鼓も鉦も打棄てて、雪の上にかつぱと伏し、足ずりして泣く涙、袖の氷柱と凍りけり。「ア、寒や。あの人家を叩き、溫湯一つ所望せん。」と雪打拂ひ、蹈み分けて立ち寄れば、門の前用ありげなる高札。「ハアもし舅御を見付け置いたる知らせか。」と、雪の白みに讀みて見れば、「橘の武者所勝藤、親の敵たる條、倶に天を戴かざるの恨み。身を風塵にかけ狙ふと雖も、勝藤臆病にして、老鼠の穴にかくれ逃げ迷ふ、卑怯至極の侍なり。これによつて、親濱賴を奪ひ刺し殺し、首を鹽に漬け置き畢んぬ。勝藤人間の心あらば、尋ね來つて親の首を請取り、速かに勝負を決すべき者なり。惡右馬の尉仲成が孝子、大炊の介仲經宿所。ハア、扨は兄の大炊の介、我が留守に奪ひ取り、討つて棄てたか。エ、情なやおいとしや、さもしい心の兄めかな。其の時早う戾つたら、兄であらうが鬼であらうが、生けて戻しはせまいもの。因果な身とはこ

や。」と、泣き叫べは、口を抑へ、「ヤレ目が覺める、聲立てな。慈悲も情も知つたれども、親の敵にかへられず。殊に殺すことでもなし、敵を釣り出す人質の囮。そこ退け。」と、つつと入つてしつかと抱く。「心得たり。」と、枕の刀に手をかくる。「これ申し、卒爾はいたさず、仔細あつてお供申す。委しき次第は宿所にて、家名を名乘れば得心の筈、尋常に出られよ。」と、抱き起せば摑み付き、「エ、無念無念。」と、齦を嚙んで怒れども、力なぎさの枯木の松、根ながら引けや荒磯波の、表の枝折戸しつかと取り、「こゝで殺せ〳〵。」と、意地張つたり。「いや〳〵殺さぬ。貴殿を同道申さねば、侍のすたること。我が武士を立ててたべ、賴み申すたのみ入る。」賴むと聞いてさすがにや、少し心もしなり戸を、もぎはなし引抱へ、暮るゝ深山の道もなき、谷を分け行く。三重「なう〳〵あれなる道行き人。桂川には渡舟の候ふべきか、何夜更けてはあるまいとや。木幡の關は通さうか、何これもはや戸を鎖さうとや。悲しやな今宵のうちに、宇治、御室、淀、一口、八幡、山崎をも尋ねんと思ひしに、道さへ埋む今宵の雪、跡は塞がり先見えず。」空はこぼすが如くにて、松の吹雪はばう〳〵と、返せ〳〵と呼ぶ聲も、鉦も太鼓も屆くまいとは思へども、返せと呼ぶが力なり。「返せ〳〵、子供も同じ老の身の、行方知れぬは迷子よ、迷子返せ。」ヤ其の笠被て立つたるは修行者か。修行者ならば、野山をも廻る人、九十餘りの老人の、若し死骸でも見たまはぬか。尋ぬるは我が舅、過ぎし十月二十六日、夕暮方より影

へ人質に取つて置くならば、いやでも敵、名乘りて出ねばならぬ所。いかゞ思ふ。」といひければ、「オヽそれはよい智略なれど、聞けば孝行な妹御、易々と渡しはなされまい。」「はて妹が爲にも親の敵。道理を詰めて言ひ聞かせ、渡さずば妹を、討つて棄つるまでの事よ。」といふ所へ、京の方より山賤ども、馬追ひ連れて歸り來る。大炊の介袖を控へ、「粗忽ながら此所に、もとは武士の奥樣、連合と離別し、舅をはごくみ居る人は、御存じないか。」と問ひければ、「オヽ、それはお花のこと、即ち此の家。それそこへ戻られう、一門衆なら貢ぎでも召されし。奇特な人で、毎日京へ商ひに出て、百許りな舅を樂樂と養はるゝ。舅に齒は一枚もなし、結構な甘い菓子を毎日買うて戻らるゝ。辛い身過ぎの商ひは山椒の皮、扠は鞍馬の火打石、膝の皿から火が出る。」と、語り散らして通りけり。夫婦悦び頷き合ひ、庵の戸口そつと明け、差覗けば實に誠、月もる程のあばら屋の、嵐を防ぐ便りかや。女の小袖にて、障子をはつて一間に圍ひ、舅と思しき老人の、思ふ事なき樂寐入、枕もとに色々の、菓子、熟柿を盆に盛りそへ、壺に白蜜甘蔓ねり、竹の筒に菊紅葉、老をいさむる孝行の、心の色を染めなして、見るに哀れぞ優りける。大炊の介も氣後れせしが、「いや〳〵願うてもない所。あののものの言はんより、引抱へて退くべし。」と、入らんとするを女房止めて、「ア、あの孝行な仕樣ども、妹御が歸つて見て、歎きの程がいとしい。まそつと待つて合點のうへ、預つて行たがよいわいの。エヽ、情を知らぬお人ぢ

通り、離別の女、夫の留守に立ち入るは道にあらず。とかく老人が心を養ひ、壽命を保つ爲なれば、望みに任せ女が宿に誘ひ、心の儘にいたはるべし。」との敕諚。「あつ。」と二人は手を合はせ、嬉し涙に沈みけり。「それ〳〵引出物せよ。」との宣旨。內侍の局硯の蓋に黃金入れ、卷絹添へて、「これは上より下さるゝ。」又このおあし一筋は木の實の代物。これは御祈禱の供物なれば、格別なり。」と渡さるる。花世額を地に付けて、「冥加に餘る畏さ。夫に去られて、此の方の思ひも晴れし悦び、申し上げん詞もなし。さりながら此のおあしは、木の實の代物、いかにも申し受くる筈。黃金、卷物頂きては、妾がはごくむ道立たず、御辭儀申し參らする。御惠みには明日より、木の實も柴もお得意に召して下され。いざお暇。」と手を引くや、舅の年も百近き、錢差し結び腰に付け、籠うち擔げ頰被、形も構はず人目をも、恥ぢぬ我が身の嵯峨の御所、お暇申し立つ月日、早神無月末つ方、霙交りの初時雨、冬編笠に世をしのぶ、大炊の介仲經か夫婦の中に、男子をまうけ寵愛の、子を持つて知る父母の恩。親の敵勝藤を一太刀と心がけ、夫婦うき身を碎けども、更に行方知れざれば、なほも野山に枕して、苦勞のなかに乳呑兒を、妻の背中の重荷さへ、いとしさ故か荷にならぬ、二の瀨村にぞ著きにける。「これ女房、爰へ來て思ひ出したり。妹の花世、敵勝藤とは離別し、なほも貞女の道を立て、舅濱賴をはごくみ孝行盡す、住家はたしか鞍馬道、二の瀨村と聞きたるが、いざ尋ねて妹を賺し、其の親を此方

や嫁の事、左程に思召さるゝか。これ嫁の花世ぞ。」と頰被取りければ、「ヤア嫁御か、懐かしや。」と、御前も忘れすがりつき、手を取り交し泣きければ、六位の官人仕丁ども、「勝藤離別の女房は、朝敵仲成が娘。如何なる工みか、油斷すな。」と、桿棒並べて押取り卷く。「マア申し〳〵狼藉致す女でなし。お公家樣、上﨟樣不便とも思召せ。父仲成は朝敵故、夫勝藤が討取る。此の上は親の敵なりと、義理を立て去られしが、我等には大炊の介仲經といふ兄もあり。退き去りしても馴染み中、討たれもせず添はれもせず、磯へも沖へも寄る邊なき、憂き身は一人にとゞめたり。御恩ふかき舅御の病み煩ひも餘所に聞き、生死も知らず暮すかと、おもへば悲しさやる方なし。五年跡に八十四で、過ぎ行きたまふ姑御。嫁姑中よいはもつけの內との世の譬へ。お身にかへての不便がり、腹はかさねど娘ぞや。爺樣の事頼むとの御遺言、骨身にしみて忘られず。お顏なりとも見度けれども、去られし女が夫の家へ蹈込むは憚りと、賤の女に交り、此の間氣を盡せし志、天道の憐み、只今相見る有り難さ。鐵の鎖で繫いでも、限りの知れた御老體。せめて寢臥のだき抱へも、お心置きなき樣の宮仕へ申したく、勝藤殿の留守の中、我等が柴の庵に預け置かれ候樣に、奏問して給はれ。」と誠を盡し泣きければ、濱頼も涙にくれ、「可愛き嫁が心根、彼が宿にて一日も介抱受けたく候。」と咽び入りたる嫁舅、哀れといはぬ人もなし。天の御階に出御あり。「無二の孝心哀れにも奇特にも、感じても餘りあり。彼が申す

きて、花梨、榲桲、玄圃の梨、梅津の梅、桃園の桃、李、杏子は時過ぎて、身をもゆりかけ櫻桃、別れは恨み有の實も、解けて逢ふ夜は隔てなし。何時青梨と引締めて、肌のよいのは姬胡桃、肌理の粗いは山核桃。夏過ぎ秋も末廣の扇に似たる銀杏の實、石榴が笑める口元に、紅付けたとて笑ふ毬栗、鐵漿付けし柴栗小栗繰り返し、絲に縋れや佛の手、花柚、香橙、蔓葡萄、柹は木醂、八王子、初霜寒く置きそめて、色づく木練、君遷子、その品々は筆柹も、書き盡されず。」と賣りにけり。上臈達、殿上人、「ヤア何時もの商人、今日は何とて遲かりしぞ。これは大事の御祈禱の供物、每日百種の木の實入ることとなり。早々これへ。」と、三方にとり〳〵淸め盛り給ふ。中にも頰被せし女、濱賴を懷かしげにつく〳〵と打守り、「ア、貴方はいかいお年寄、百にも遠うはあるまい。お齒が無うて物の味、さこそと思ひおいとしや。お毒にならぬ此の熟柹慮外ながら上げましたい。山家の賤が志。」と、木の葉に載せてぞ出しける。思ひがけなく濱賴は、物をも言はず居たりしが、「扨々奇特な人があるよなう。此の爺は酒飮まず、甘い物を好めども、今は齒ばつかり、萬心に任せず。此の春までは孝行な嫁を持ち、手づから食物すり刻み、樣々調味し養ひしが、侍の義理爲方なく、倅と厭かぬ別れして、嫁に離れてめた〳〵と、身に皺も寄る腰屈む。何かに思ひ出す折から、そなたが志過分におぢやる、戴きます。これに付けても、嫁は何とかしつらん。」と御前を憚る老の淚、包めども包まれず。「有り難

官濱賴年積つて九十三、烏帽子の額地に傾き、腰も撓の梓弓、家を忘れぬ太刀刀、鳩の杖に縋りよろよろと、御前と見るより杖を棄て、打咳きて畏まり、「誠に我等近年倅勝藤に官職を讓り、隱居仰せ付けられ、老の身を安樂に暮す朝恩、何を以てか報じ奉らん。天晴大海原の王子と引組んで、刺しちがへんとは存ずれども、耳も眼も正しからず、腕弱つて弓引かれず、足立たねば馬にも乘られず、奥齒向齒落ち果て、食物は赤子同然。役に立たぬ此の爺め、御宿直申すこともなく、生きたる甲斐も候はず。」と、老拜みてぞ申しける。天皇感じ思召し、「汝が一子勝藤、舅仲成を討つて、最愛の女房を離別し、猶王子を討たん爲、九十三の親を振り捨て、諸國に身を窶す。かかる忠節の者の親、何時までも生けて置かまほし。勝藤が立ち歸り、親子伴ひ參內の姿を見せよ。」と敕諚あれば、上臈達、「これ年寄は御免あり。足の痛いにゆるりと居て、此の嵯峨の秋の色、ながめてお伽申されよ。あれは淸瀧、嵐山、是れは槇尾、栂尾。」と、指さす方の奥の山道だつつくりぼつつくり、小石まじりの崖道を、しやならしやな／＼打連れて、男まさりの擔ひ賣り、山家なれども京近く、振も會釋もよい女房の、肩に棒おく露がおく、在所は何處、梅が畑とて香に匂ふ、物賣聲も冱え／＼と、「月輪山の梢には、木の實數々鳴瀧山の、果物召せ／＼召されよや。持ちし木の實は何々、櫟、橿、榛、榧、柑子、金柑、馬手葉椎、栃や無花果、胡頽子、棗、千代の苔むす岩梨の、岩にも花の松の實や、唐木の種を誰が蒔

逃げ入りけり。「サア此の上は王子をぼつかけ討つべきか、現在の敵妹聟勝藤を討つべきか。イヤ王子をや討つべき、勝藤をや狙はん。」と、峯に登り谷に下り、行きつ戻つつ思案分別、二つに別るゝ牛の角、牛の亡骸うち擔げ、「よし此の度は助くるとも、遅牛も淀早牛も、廻る報いの車牛、恨みの劍一太刀。」と、女房を先に立て、谷川山川飛び越え跳ね越え、岩壁岩角とう〳〵〳〵〳〵、とう〳〵どうど岩倉山、歸るもうし歸らぬも、牛の亡骸泣く〳〵も、擔ひて我が屋に歸りけり。

第三

天照御神、素盞嗚尊の所業あぢきなく、岩戸に籠り給ひけん、例さがなき嵯峨の山。勿體なくも天皇は、大海原の王子、守敏僧都を語らひ、玉體を調伏し、世を傾くる惡逆、宸襟を惱まされ、北嵯峨の假御殿に忍び移らせ給ひける。野宮近き黒木の御所、小柴垣し渡して、伺候の公卿上﨟達、都をよそに廣澤の、月の鏡も小倉山、枕に近き鹿の聲、慣はぬ山路の宮仕へ、中々叡慮も慰むべし。弘法大師は上の山、一叢しげる森の中に壇を構へ、玉體安全の御祈り、孔雀王經、七佛藥師、一字金輪、虛空藏、六字河臨、八字文殊、普賢延命の法、丹誠を凝らし修し給ふ。陀羅尼眞言、鈴の聲、絶えず御耳に觸れければ、如何なる惡魔怨敵も、近づくべうはなかりけり。こゝに橘の勝藤が父、前の判

ちのもの。ヤイまいす坊主、王子は俗體、惡事を思ひ立ちたまふとも、敎化をもすべきところ。オ、結構な御出家、守敏が眞か、茶瓶が眞か、守敏でも茶瓶でも、叩き碎いてくれんず。」と、夫婦拔き連れ喚いて蒐る。さしも嶮しき岩倉山、追ひ登し追つ下し、火水になれとぞ斬りまくる。王子は郞等數多討たせ、「最早構ふな左衞門、とかく油が大事の物。きやつには構はず、壺を持つてはや立ち退け。」と、下知し給ふ。「どつこい〱さうはさせぬ。點し油さへ高直の世の中、我が親の油、かこひはさせぬ。」とぼつかくる。難なく追ひ詰め、壺かたげたる左衞門が首打ち落し、奪ひ取り、元の所に立ち歸り、「これ女房。此の油にて一萬燈をたて、帝を始め諸人ともに調伏とや。いま打割つて棄つるは、人を助くる大善根。」と岩手に打ち當て、どう〱〱と流るゝ油の中よりも、父が魂現はれて、女房が懷に入つて、我が子と生まるゝも眼に見えず、心にも知るべき樣こそなかりけれ。これを見て守敏僧都、天魔の荒れたる面魂、「己この法師を茶瓶とは、どの頰桁からぬかいた。」と、切り倒したる大木を引つかたげて、會釋もなく打つてかゝる。ひらりと外し、しつかと取り、「えいやうん。」と、一ねぢ捩ぢて捥ぎ奪り、どうど棄て、つつと入り、大の法師をさまたにかけて引摑み、目より高く差し上げ、「茶瓶坊主の割れ物がいはれぬ働き。打碎くも易けれども、流石に法師、死なぬほどに思ひ知らせん。」と、「えいやつ。」と投げ付くれば、切株にて打ち當てられ、腰を摩り膝を揉み、はふ〱山路に

父仲成が忠義に免じ命は助くる。重ねてかかる慮外せば、うでぼし捥いで捥ぎ折らん。」と、首筋摑んで引立つる。「ヤア愚かなり。命生きんと思ふにこそ、畜類に生は代へたれども、現在の我が父、目の前に殺されながら、何面目に立ち歸らん。親の敵一寸も引かせじ。」と、又飛びかゝるを取つて伏せ、「はて扠生も懲もない馬鹿者とは其の事。己が父を討つたる、誠の敵は外にあるを知らざるか。おのれ勘當せられて後、橘の武者所勝藤といふ者を壻と取り、妹花世をめあはせ、親子の因はなしたれども、天皇の味方に武士立して、壻勝藤が討ち取つたり。是れ程正しき親の敵はさし置き、此の王子を敵とはうろたへ者。但し勝藤が怖いか、地腰拔け。」と、言ふより仲經胸にこたへ、「扠は父は妹壻が討つたるな。然れば二人まで親の敵を持つたる身の、然も敵に組み敷かれ、無念の死を遂ぐるかや。せめて小刀一本持つたらば、王子は扠置き、鬼神なりとも犬死はせじ物を。」と、土に喰ひ付き怒りをなす。王子空嘯いて、「ハテ腹のへるに圖なう踠く奴かな。殺すも無益の殺生。跳ね廻つて喧しし。縛り付けて歸るべし、それはや繩。」といふ所へ、何としかは聞き付けけん。女房大小かいこんで、木の根に取り付き、山路に分け入り、それと見るより、「南無三寶。」と、王子を目掛けて、一文字に討つてかゝる。さすがの王子もたまりかね、ひらりと飛んだる其の隙に、仲經むつくと立ちあがり、「やれやれ嬶がよい所へ來てくれた。あれ見よ、牛を殺されたり。此の刀がほしかつた、サア是れからがこつ

か。おつつけ天の責を受け、恥を死後に曝し給はん。あさましさよ笑止さよ。」と、齒嚙をなして身を悶え、大聲上げてぞ嘆きける。王子なほも怒りをなし、「扨は己は仲經よな。倅の時にかはらぬ頤、生意見聞きたくなし。己とは事かはり、親仲成は忠義のもの。生き代り死に代り、某に力を添へんと、日頃の詞を違へず、今また牛と生を代へ、身の油を我に與へ、天皇調伏の加勢をなすこと、古今稀なる忠臣。牛を助けば、却つて仲成が志を背くに似たり。急いで油を取るべし。」と、詞の下より早雄の侍ども、斧鉞にてえい／＼聲、枯木を切り伏せ打ち倒し、周圍には柴薪、山の如くに積み重ね、十方より松明雨霰と投げ付くる。折節谷風どう／＼／＼、颯と吹き上げ吹き下せば、煙は空に舞ひあがり、猛火熾んの其の中に、牛は黄なる涙を流し、頭を振つて喚く聲、十萬の法螺貝を一度に吹くかとあやまたれ、山河も崩るゝ其の響、大炊の介は父が苦しみ、思ひやらるゝ胸の火は、猛火にも十倍して、大地を叩き我が身を嚙み、叫べと甲斐も嵐に連れ、なほも焰立ちのぼり、八億四千の毛穴より、流るゝ油は峯に降積む白雪の、朝日に解けて岩間水、谷に落つるもかくやらん。銅の壺にとう／＼と流れ込みし有様は、阿鼻地獄の苦しみにも、勝つつべうぞ見えにける。守敏きつと見、「サア牛はくたばつたり、火を鎭めよ侍ども。早大望は成就したり。」と、大聲上げてのゝしれば、王子につこと打笑ひ、「オ、心地よしいさぎよし。見物したるか大炊の介、おのれ捩ぢ殺すは易けれども、

聲を上げ、「よし〳〵きやつに構ふな。それ火炙の用意せよ。」「承る。」と遙か梢に大綱下げ、牛の四足を搦め付け、眞逆樣にぞ釣り上げたる。仲經見るに心消え、起き上らん、跳ね返さんと、牙を噛んでもがけども、大磐石を押すごとく、心ばかりは早瀨川、網代の魚のごとくなり。王子から〳〵と笑ひ、「ヤアもがくまい〳〵。我が足下に蹈まへしもの、摩利支天がかゝつても、びくとも動かす事でなし。親兄弟を害せられゝば悲しむも道理。いはば畜類牛一匹に、おのれが命を代ふるか、うろたへ者。」と睨め付くれば、無念涙をはら〳〵と流し、「ォ、親親類を殺され、悲しむ道とは御邊も能く知つたるな。やれ其の牛は孕牛、胎内へ宿りし小牛こそ御身が家臣、惡右馬の尉仲成が魂魄。かくいふは嫡子大炊の介仲經、父が惡事を諫めかね、十歳の昔勘當受け、土民となつて數年なれば、面忘れは尤も、御邊の逆心露顯によつて、父は刃に相果てしと傳へ聞く。然るに此のほど夜な〳〵、父仲成が魂魄夫婦の枕に立ち寄り、娑婆の惡念畜類の果を受け、汝が手飼の黃牛の胎内に宿る由、夫婦七夜の現夢の告。悲しきかなや、父仲成が刃の死も、今畜類に生まるゝも、もとは御身の逆心に組せしより起つた事。我こそ惡しみ深くとも、父は御邊の忠義の者。昔の好みを思はれば、あの牛の命を助け、惡しと思す大炊の介、炙りなりと刻みなりとも、すき次第にさいなまれよ。エ、扠情なや、惡の報いは目の前に、父が牛となつたりし、これ此の證據を見ながら、惡念とゞめて逆心を、翻さうとはおぼさぬ

と退つて頂戴し、「コハ有り難き仕合。賤しき者の手飼の牛、天子の御用に相立つ事、冥加に叶ひ有り難し。」と、一禮述ぶるその間に、守敏つつ立ち、牛の角兩手に摑んで引伏せ、若者原に眴せすれば、手々に大繩提げ〳〵、情なくも牛の四足搦めんとする所を、「南無三寶。」と飛び掛り、先に立つたる奴原蹴倒し、蹈み退け、守敏が前にどつかと坐り、「こりや何をする捨坊主、禁裏御用の牛なるぞ。芥子程も過ちあらば、坊主頭はつて〳〵、はり碎くが合點か。」と、せきにせいて詰め掛くる。守敏からからと笑ひ、「いやはや見事なうつけ者。大内の御用とは僞り、あれに渡らせ給ふは大海原の王子。かくいふは守敏僧都とて、御祈りの師。此の度君の御謀反によつて、嵯峨の天皇調伏の爲、此の奥山に三七日籠り祕法を修す。丑の年の丑の月の、丑の日の丑の時に、出生したる黄牛の油を取り、一萬の燈明を挑げ、大威德の法を行ひ、天子を始め、卿相雲客皆殺し、日本の地は悉く王子の御手に入ること。サア其のまゝに牛を置いて歸ればよし。意地張らば先づ一番に、己から締め殺すが、何と何と。」と詰め掛くる。又二郎大地を打つて齒嚙をなし、「エ、たばかられし無念さよ。此の牛の油にて帝を失ひ、天下國土を亂さんとや。たとへ骨は拉がれうが、身は八つざきに裂かれうが、いつかな〳〵わたさぬ。エ、今日に限つてこの丸腰。かたはし摑み殺さん。」と、守敏を目掛け走りかゝるを、王子怒つて岩を飛び下り、小腕片手に摑んで、「えいやつ。」と打ち付け、脊骨も折れよと蹈み付くる。守敏

只今牽かねばならぬ。」といふ。「ム、それはあんまり急なこと、在所の衆何とせう。」「ハテそれが思案の入る事か。牛も成佛、そなたも果報のつき時。錢や小判の摑み取り。」取り〳〵藁屋の戸を開き、牽き出す牛の胎内に、宿りし父が惡業は、晴るゝ世難き樫原、牽いて都に上りけり。されば其の頃守敏僧都とて、我慢邪慾の惡僧あり。空海に法力の超えられたるを憤り、大海原の王子の師檀となり、天下を覆し、恨みを空海に報ぜんと、さしも險しき北岩倉、人も通はぬ深山に、王子諸共引籠り、三七日がその間、大威德の法をぞ行ひける。鈴の響、數珠の音、嵐に靡く護摩の煙は、黑雲棚引く白雨に、雷なんどの落つるかと、身の毛もよだつてすさまじし。多治見左衛門春國は、牛を牽かせ立ち歸る。又二郞、左衛門が袖を控へ「昨日は内裏と仰せられしが、物すごき深山へ、此の牛の御用とは心得難し。」と尋ぬれば、「エ、譯を知らぬ土民よな。畏くも一天の君の御車を挽く牛、すぐに大内へは叶はず。深山にて、貴き聖七日七夜の祈りあり。今四五町も來るべし。」と、先に立つて行く程に、伐木丁々として山さらに幽なる、鳥の啼く音も嵐吹く遙かの谷へぞ分け入りける。守敏待ちかね、「ヤア多治見歸つたか、首尾はいかに。」と尋ぬれば、「さん候。召し連れし男は樫原の土民又二郞。牽いたるこそ彼の牛にて候へ。」と申し上ぐれば、王子大きに悅び、「ム、聞き及びし樫原の土民、又二郞とは汝よな。無雙の牛を得させせし事大慶。それ〳〵褒美取らすべし。」と、黃金千兩前に置けば、「あつ。」

れたる武士、案内もなくつつと入る。又二郎見咎め、「ア、御歴々の、賤しき在家へ如何なる御用ぞ。」と尋ぬれば、「オ、不審尤もなり。さ言ふは此の村の土民又二郎な、汝が手飼に丑の年の丑の月、丑の日の丑の時に、生まれたる黄牛ありと傳へ聞く。買ひ求めたき望みあり。價は汝が所望次第に任すべきわ。」と言ひければ、「ハア委しう御存じなされしな。仰せの如く牛一匹もつては候へども、孕牛と申し、殊に深き仔細あつて、賣る事はなり難し。外の牛を御詮議あり、御求め下さるべし。」といへば、「否々私事ならず。某は多治見左衛門春國といふ撿非違使、敕諚によつて、其の牛求めに來りたり。知らずは言つて聞かせん、慥かに聞け。總じて天子崩御の時、御葬禮の御車を挽く牛を位牌額と名付け、又目出度き行幸の御車を挽く牛を、天人牛と名付く。卽ち丑の年の丑の月、丑の日の丑の時に生まれたる、黄牛ならずして外の牛はなり難けれども、さりとては世に稀なり。汝が牛は天人牛といふ事かくれなく、求め取るべしとの敕命。急いで禁裏へ差上げば、汝等一家一門とも、うかみ上るのみならず、牛も天子の御用に立てば、畜類の果も遁るゝ事。」と、いふを聞いて女房、夫の袖を引き、「あれ〳〵今の詞を聞かずか。こちと妻夫が出世より、あの牛が畜生の果を遁るゝとの勅諚。これは佛のひき合はせ。早うお請け申さつしやれ。」「オ、さうぢや〳〵。いかにも差上げ申さんが、孕牛と申し、懐いた牛に名殘も惜しし。二三日中に私牽いて參るべし。」「いや〳〵明日行幸なれば、

吊ひもせざりしに、此の程夜な〱不思議の夢。父の仲成枕に立ち、我大海原の王子の謀反に組し、敢なく刃に身を失ふ。婆婆の悪業悪縁を引き、汝が家の孕牛の胎内に生を享くる。生まるゝ子牛は父仲成、汝が家にて育ててくれよ。人界、畜類、生は二つにかはるとも、孝子の汝が手にかゝらば、苦しみの中の樂しみぞと、まざ〱しき夢の告。夫婦おなじく七日まで見しに違はず。牛は孕む。此の頃人の目に、牛の玉と見えたるは、正しく親の魂。かくまで重き罪業、人々に懺悔して弔ひ受けん志。因果の報いを思ひ遣り、念佛申して給はれ。」と、語りもあへずかつぱと伏し、夫婦諸共泣き叫ぶ。在所の者ども手を打つて、「さりとは不思議の物語、笑止ともいたはしとも、挨拶すべき樣なし。」と、皆々涙を流しける。中にも與茂作、「何れもよう聞いて、悪い心お持ちやんな。これについても、うららが父生世の時は博打好き、一昨年の九月、莊屋殿の日待に、骨牌打ち〱つい轉り。臨終はそれもましなれど、此の世の手みその報いで、若し青馬の腹へ抔生まれては行かれぬか。但し釋迦になられたか。いちかばちかが知りたい。」といへば、九郎右衛門噴き出し、「いやはや臍がお茶をひく。わごりよが親父は、村一番下拔の名人。そんな悪い根性で釋迦所へ行く事か。馬の腹は扠置き、今頃は豚の腹へ生まれてわせるであらうまで。念佛講で弔ふとも敲鉦は無用にしや。はりが強くば又目を廻して、地獄の釜へ七ほん〱と落ちられう。笑止さよ。」とぞ笑ひける。話半ばへ表より、供人數多連

地體あの牛は隱れもない事、丑の年の丑の月、丑の日の丑の時に生まれた、大吉相の牛なりと、三ケ村が集まつて、我買はう人買はうと、七兩二步まで直上りしたを、あの和郎がついちよろり、三兩二步に買ひ取り、內へ引いて歸るや否や、吹き付くる仕合。ころぶ所が錢儲け、內證には牛の寢た程、金もつくねて居るげな。又其の上に、牛の玉の出る孕牛繫いで、又其の子が何百兩にならうやら。總じて牛の玉と馬の角は結構な寶物、田地買ふ端、倉建てる端。ヤ箸の次第に氣が付いた、お箸なされ、何れも。」と、汁椀、壺皿、平皿の蓋、とり〴〵不思議な顏付の、中にも太次兵衞膳突き出し、「これや何ぢや又二郎、在所の者なぶるか。茄子汁に豇豆の浸物、燒豆腐の煮物。鯉一疋するゑぬはお齋か非時か、眞言宗なりや念佛講でもあるまい。喰ひたい飮みたいではなけれども、在所では此の連衆、歷々の鼻毛をよんで遊ぶな、サアよまりよわい。幾筋ある、よんで見よ。」と、腕捲りしてかゝれば、夫婦は目と目を見合はせて、「それかうあらうと思うた、早う言譯さつしやれ。」といへば、夫はしくしくと、淚にくれて居たりしが、「オ、腹立尤も。なる程これは非時の心。恥かしき因果物語聞き屆けて御免あれ。某が父は隱れもない、大海原の王子の家臣、惡右馬の尉仲成、親ながらも世に知れた無道人。我十歲の時、幼心にこれを歎き、數度の意見憎しとて、此の樣に勘當受け、十餘年の今日が日まで、音信も絕え果てしが、聞けば父は病死とも、刃の死とも取沙汰あり。實正を知らぬ故、とひ

三界六道の中、生きとし生ける數々より、草木國土に至るまで、形あれば魂も、有明かたぶく※西の岡、樫原の土民の軒、曉ごとに輝くは、星か螢か憧れ出でて、昔と今を娑婆と冥土に行き通ふ、其の魂とは人知らず。空吹く風に飄颻と、光は生けるごとくにて、消えみ消えずみゆら〳〵〳〵、ゆら〳〵と行く方の、光の後に尾を引いて、牛繫ぎ置く廐に入れば、見る人毎に、「こりやこの牛の玉見た、我も見た。目出度い寶。」と在所中、賑ひ渡る悅びの、あたり鄰へ酒一つ、森際の與茂作、色も眞黑九郎右衛門、二人は莊屋脇ぞとて、先へ太次兵衛、千松後家、辰巳角の道雲まで、十五六人どやどやと入り集ひ、「なう又二郎。何やらわけは知らぬが、地下の若い衆が又二郎にもめさする、目出度い事があるとおしやる故、誘ひ合うて參つた。目出度いと聞けば嬉しい。さりながら構へて造作入らぬこと。何なりと魚澤山に、味噌濃い汁一色でおきめさ。サア皆下に。」と擧足の、又二郎夫婦前垂掛け、「オ、たま〳〵のこと。馳走の仕樣も知つたれど、二反一畝の下作では、鋤鍬うつても手が屆かず。先づ悅んで下されわ、こちの黄牛に牛の玉が出るとて、在所の衆が見付けて、身共にも見せらる。其の上にあの牛が孕んだ、何やかや惡うはない事。日ぐらしに話さう爲、今朝人をまはした。どれどれも缺けずにようこそ、サア先づろくに。」と挨拶も、角取折敷、獻立は、一汁三菜仔細顏、夫婦が心ありたけなり。地下の者ども手を打つて、「兎角わごりよは果報者。其の牛の玉はこちとも見た。

た去つた。」と、言ひければ、「いや未練ではなけれども、お年寄つた父御樣の御恩深く蒙つて、明暮お側を離されず。お袋樣の御臨終頼むとのお詞故、誠の親よりおいとしく、大事にかけし舅御に、何と離れて退かれうぞ。夫婦の緣を切らば切れ、下種、下女と思召し、お側にて御奉公頼み入る。」と泣きければ、はつたと睨んで、「男と添うての舅にて、退けばあかの他人なり。何のかのと自言辭は、敵討が恐ろしいな。腰拔け女はなほ添はれず、來世までの離別ぞ。」と、取つて突き退け、「今まで腰拔けの女と知らで添うたるは、勝藤が色にまよひ、眼くらみと指さるゝが口惜しい。」とて、はら〳〵降るは涙か春雨の、萎るゝ花世も氣を取り直し、「是れ腰拔け女に添うたりとの、夫に恥辱は與へまじ。情は情、恨みは恨み。親の敵はこの花世が討つ。」「オ、頼もしし、必ず討てよ。」「オ、討つ。」討てよ現も時の間に、夢となしたも妹背の中、今朝の比翼の朝居の牀、連理の枕忘れかね、たちかへりては涙ぐみ、又たち返り目を見合はせ、睨み合うても憎からぬ、中を別るゝ武夫の、夫も夫、妻も妻、思ひ切つたり、言ひ切つたり、夫婦の契り修羅の緣、同じ蓮を引換へて、刃を磨く心の玉、淸き名をこそ照らしけれ。

第　二

成透垣を跳ね越え、思ひも寄らぬ後より、「勝藤やらぬ。」と斬り付くる。さしつたりとかい潛り、腕首摑んで捩ぢ上げ、太刀もぎ棄てて顏を眺め、「扠念の入つたる惡人かな。總領大炊の介とやらんは、幼少より勘當とや。男子にも女子にも我が妻花世一人の子、かはゆくは惡念飜されよ。命を助け恩賞を申し與へん。」と言ひければ、「ヤイ現世は天輪淨王の果報を受け、未來黄金佛になるとても、一念は飜さぬ、鈍な事ぬかすな。」と、言はせも果てず一捻り、大地へどうど打ち付け、水もたまらず首打ち落す。片時の程の魂は、假の宿りと去りにけり。あたりも響く大音上げ、「朝敵大海原の王子一味の張本、惡右馬の尉仲成を橘の勝藤討取つたり。」と呼ばはる聲に、さしもの王子荒肝取られ、八方に敗軍して、行方知らず落ち失せけり。花世は夫の聲を慕ひ走り寄れば、飛びしさり、「これ〳〵侍の女房は持つにも義あり、去るにも義あり、言はずとも合點ならん。去るといふは此の時、暇のしるしは是れなり。」と、首投げ出し立ち出づる。袂に縋つて、「ムウこれ故の離別か。夫は親の敵なれば、緣を切つて狙へとのお心。其の外見落しとてもなく、厭きも厭かれもなされぬの。」「ハテ見落しあれば今まで待たず、當座に去る。」「ア、それなれば有り難い、離別せいでも濟む事。我には大炊の介仲經といふ勘當の兄上あり。總領といひ男の役、親の敵は兄が討つ。離別に及ばぬ事。」といへば、「シテ兄があれば、妹は敵を討たぬ法か。縱ひ此方からやらずとも、其方から取る暇。近比未練千萬、去つ

執晴らして得させん。成佛せよ。」と呼ばはる聲、仲成聞くより、「何我が君の御出陣とや、心地よし。ひとたび死したる某、たつた今蘇生仕る。病み拔いたれば足手も達者。軍のお供し、聟めを始め、殿上人も大臣も、撫斬にしてくれん。それ具足、兜、弓よ箙。」と立ちあがる。母も花世も足手にすがり、「たつた今無常を見て、その涙も乾かぬに、日本の主の王樣を失はんとの惡心。なう一度よみがへれば、も死なぬ事と思うてか。其の身の罪業許りか、妻子に當る報いの罰、不便と思ふ氣はないか。」と、泣き叫ぶを突き退け〳〵、「エヽ、阿房くさい。善をなしても一代、惡を作つても一代。閻魔王さへ手を措いて戻された此の仲成、一度死んだれば結句心太くなる。どうやら我が惡心に、加勢の副うたる心地にて、氣は百倍強うなつた。」と、太刀押取つて躍り出で、王子の陣にぞ加はりける。其の隙に勝藤、妻戸の陰にて身繕ひしてつつと出で、「ヤァこれ〳〵、内裏へ寄せらるゝまでもなし。嵯峨の天皇の瀧口、御番の預り橘の武者所勝藤是れにありあうたり。宗徒の一味は舅殿、たつた今蘇生り、案内巧者の冥土の道、王子をはじめ諸軍勢の導きせよ。一日に二度三度、娑婆と冥土の上下の旅は、達者な病人、無類な惡人業人罪人。現世は牢獄、未來は墮獄。三國一の聟が手並を受けて見よ。」と、太刀眞甲にさしかざし、一千餘騎を左右に受け、初瀨の嵐、吉野の吹雪、花を飛ばして戰ひける。利慾を貪る我利武者ども、素肌の勝藤たゞ一人に斬り立てられ、しどろになつて見えたる所に、舅の仲

らせのありければ、壻の勝藤取敢へず驅け付けて、「舅殿は病死とな。人死して目出度いとは此の事、此の人無事にて王子の謀反に組し、すは合戰といふときは、人手にはかけさせず、舅の首は此の壻が討つ所、互に本意ならぬ事。よき時分の病死、その身も我も仕合。王子の謀反の自ら鎭まつて、天下の靜謐、萬民の喜び。朝敵の名を取らぬ間の病死、世間晴れて憚りなし。親子の禮儀に葬送せん、いざ暇乞の廻向を。」と、夫婦諸共香を燒き、手向くる露も涙の數珠、四百九十七生の猪甘が魂魄、その業報の因緣の廻り〳〵て、仲成が中有に迷ふ魂と、一つに結ぶ惡と惡、舊の體に納まりて、凡夫の目にはそれぞとも、よもや黃泉を立ち歸る。「あれ〳〵父のお顏にほつこりと色が出た、これは不思議。」と手を當てて、「なう溫まりがきたわいの。」と勇めば、氣息をほつとつき、「水一つ。」と目を開く。「やれ蘇生り。夢か誠か有り難い。」と、家內喜びざゞめき渡り、「もう死んで下さるな。」と、抱き付くやら摩るやら、嬉し泣こそ道理なれ。挨拶不和の勝藤は、對面して無益と思ひ、妻戶の陰に身を忍び立ち歸らんとせし所に、大海原の王子錦の鎧直垂、一味の武夫一千餘騎、華やかに出立たせ、門外につつと立ち、「仲成終に病死とや、後家、娘の力落しさこそ〳〵。賴み切つたる仲成、我も兩腕打ち落されたる如くなり。何時の時をか期すべき。仲成が弔ひ軍、直に內裏へ押寄せ、一番に武者所と、廣言吐く勝藤が首取つて、公家ばらを斬り散らし、天皇を捕つて流し者。我十善の位に卽き、冥途の妄

に籠め置かれし、無惡善の額を引き出せしより事顯はれ、味方の難儀は壻めがわざ。これが舅へ孝行かヤイ。己が兄に大炊の介仲經といふ奴ありしが、五常だてを耳にはさみ、身の慾知らぬうつけ者。十歳の時、ちつさいざまで、親に意見が面憎く、勘當して遂ひ失ひ、己を育てて壻を取り、男子持つたと樂しみしに、舅に敵するは親に敵たふ不孝者。ア、腹が立つわい憎いわい、エ、息せい張つて胸苦し。仲成が最期只今、臨終に物寂しく、もし善心も起つて、極樂の入口を覗かんかと按ぜしに、瞋恚を燃して、直に地獄へたんだ走り。せめてもうぬらが孝行、ヤレ妻の女房、下人ども、我寃しくなるとても、經もいや追善いや。一味の軍兵に力を付け、大海原の王子を帝位に卽け奉り、空海坊と壻勝藤が首討つて、墓の前に供へなば、苔の下にも悅びて、地獄の呵責も忘るべし。」と、刀抜いて逆手に取り、脉にがはと突き立て、から〳〵と打笑ひ、其の儘氣息は絕えてけり。花世も母も、「はつ。」と許り、死骸に犇と抱き付き、前後不覺に泣きけるが、母は泣く〳〵聲を上げ、「善人も惡人も百年生きぬ體を持ち、今死ぬる今までも、惡といふ惡作りつめ、未來の程がいとしい。」と嘆けば、娘は、「これ母樣うろたへてか、死人に意見がいることか。私や惡人でも業人でも、何時までも置きましたい、呼び助けて下され。父上なう、父樣なう仲成殿。」と、呼べどその甲斐なき骸は、次第〳〵に冷えきりて、色かはれども、魂は我が屋を去らず、永く輪廻に迷ふとは、人知らぬこそ哀れなれ。かくと知

勝藤殿は情も仁義もある侍。世間を見れば舅に恨みありとては、十人が九人女房去る。此の勝藤はさうでない。總じて女が夫に添へば、誠の親は他人にて、夫の親を親とする、是れ烈女の道なれば、その方より暇取らば取れ。たとへ舅仲成と刺しちがへて死するとも、其方とは二世まで緣切らぬと、なほも隔てぬ親しみ。かうした屆いた夫の心、有樣は殘り多く離れ難さも第一で、退き去りせぬを不孝者と、末期の湯水取ることも、かなはぬ程の身の因果。深き望みを申すにこそ、花世と許り御最期の御詞一つ下され、なうコレ、憎い子になす慈悲が、誠の親の御慈悲。」と、あひの妻戶をうち叩き、縋り焦れて嘆きける。仲成耳をそばだて、「ヤア次の間でとこぼえるは女郎めか。きやつら夫婦は病の神、あれ引きずり出せ。いで臨終の善根に、摑み出して取らせん。」と、起き上らん〳〵とする所に、母縋り付き、「なう花世、お氣に障る。先づ歸りや、御臨終も程あるまい。此の世の孝行思ひ切り、跡の弔ひ廻向して、孝行盡しや。」とありければ、「母樣、悲しいこと許り。弔ひは弔ひ、位牌に詞はかはされぬ。二度と見られぬ親の顏、今一度見たい。」と走り入り、父にかつぱと抱き付き、聲を上げて泣きければ、むく〳〵と起きて小腕取り、妻戶にどうど打ち付け、齒をがた〳〵と身を顫はし、「エ、業曝しの不孝者。今年五十八まで、思ひ立つ事飜さぬ此の仲成、大海原の王子に御謀反勸め、王位を覆さんと企つるに、己が夫が意見面、一味せぬさへ奇怪なるに、嵯峨の天皇調伏のため、賀茂の社

如何なる者の體をもかつて出生し、五百生滿つる時、寶篋印陀羅尼神呪を修行せば、人天の善果をうくる必ず疑ふ事なかれ。」と、幽靈の額に外五鈷智拳印の祕印を結びかけ給へば、「あら有り難や。」といふ聲許り、翁は消えて金色に文字殘つて、苔むせる五輪の石となりにける。空より出でて火、風、空、地、水の泡のうたかたの、假に結びつ假に消え、緣にふれつゝ樣々に、生まれ出づるも世のなかや、千差萬別の人心。大海原の王子の家臣、惡右馬の尉仲成といふ老武者あり。橘の勝藤が舅なれども、聟には引代へ、途轍もなき無法者。今度王子の御謀反、聟勝藤は仁義の勇者、諫言を加ふれども、舅は主君の惡心に覆輪かけたる鐵鎚の、無地に道理を辨へず、挨拶不和になりけるが、生老病死は人界の四苦、鬼をも拉ぐ仲成難病に冒され心熱炙るが如く、身體痛み苦しむ事、白虎骨を咬み拉ぐ※歷節風ともいひつべく、妻の女房、家内の男女、味方の士卒心を碎き、藥療、針、灸手を盡し、看病更に驗なく、今日を限りと見えにける。娘花世も夫につれ、父が對面許さねば、夜詰め日詰めも、勝手から覗けば、顏も窶れ果て、目はぎろ〳〵と頰骨荒れ、色も黑みし惡相の、「ヤレ苦しや骨痛や、あら熱や。」と身を悶え、呻き叫ぶ苦痛の聲。花世今はこらへかね、「なう父樣。他人の上さへ、病む目より見る目とは申さぬか。現在親の死病、覗いて悲しむ子の心、可愛とも思うて下されぬ。我が夫勝藤殿に恨みあるは、それこそ親の、くわうげん取りかやしたがよいわいの。夫を譽むるでなけれども、

此の世を去つて四百年、三惡道を行き廻る。我世にありし昔は、大和國猪甘の連とて、朝家に仕へし者なるが、其の時の帝顯宗天皇、大初瀬の惡王子に襲はれ、御流浪ありし時、勿體なくも僅かの御糧を盜み剝ぎ取り參らせ、憂き目を見せ奉つたる科によつて、御即位の後、首を此の所に刎ねられ、兩足兩手を五畿內五所に切りさばかれ、直に地獄に墮落して、今日まで無數の責を受くる。今の世には大海原の王子の家臣、惡右馬の尉仲成と申す者、我が末孫にて候へども、四百年前の先祖は名も知らず、年忌命日も弔はず、無緣法界の廻向さへ、罪深ければ受けられず、苦患に苦患を增す許り。あはれ大師の御慈悲に、高野山に戒名立て、罪を助けおはしませ。」と、又淚にぞ沈みける。大師暫く御目を塞ぎ、「淺ましや、汝は四百年以前の、人間一生と思ふかや。おことが先生は億萬劫の過去の昔、拘留孫佛の衆生なりしが、大乘般若祕密經を誹謗したる罪によつて、五百生六道に沈み、こゝに生まれかしこに死し、或時は人と生まれ、又或時は鳥類、畜類、魚類とも生まれ、四百九十六度目が、彼の四百年以前の汝、猪甘の連にてありしなり。これより後に今四度、若しは善緣によつては善人と生まれ、又惡緣に引かれては、惡人の魂とも生を受け、或は牛とも馬とも生き替り死にかはり、五百生の都合生死の業を果さねば、廻向も通ぜず、弔ひ却つて無間の業。佛說何ぞ虛妄ならん。さりながら、娑婆を離れて四百年、生まれ出づべき緣切れたり。いで空海が四大五蘊の結緣して得さすべし。

士だてするとも、摑み殺して棄てんず。」と、足手を張つて働けども、光明骨を摑むが如く、眼を見出し拳を握り、踏み立つれば踏み挫き、「エ、無念口惜し。」と、心許りは上見ぬ鷲、綱に掛りし有樣にて、はふ〱館へ歸らるゝ。卽心祕密ぞ有り難き。炎光雲居にをさまれば、何時の間にか空海は、もとの如く御階の下に、默然として坐し給ふ。天皇褥を下りさせ給ひ、「誠の大日如來ぞ。」と、掌を合はせ給ひければ、諸卿各合掌し、隨喜の思ひ淺からず。卽ち弘法大師と直宣旨。「朱雀門の東、鴻臚館を東寺と名付け、眞言の靈場とし、國土安穩の御祈念あるべし。」と、山鳩色の御衣、手づから下し賜はりし。袈裟は九條の名にし負ふ、東寺の塔の彌高き、御法の威德や有り難き。されば先佛既に去り、後佛は未だ世に出でず中間有爲の夢さむる、其の曉と說き置きし、法の敎へぞ賴もしき。弘法大師は洛陽靜謐の御祈り、都の廻りを只一人、行道の月澄み渡る鈴の聲、蟲の聲々うちしきる、車大路の藪陰より、「なう〱和上、物申さん。」と呼び掛くる。誰なるらんと見給へば、翁さびたる麻衣、袖も朽木の杖を立て、「此の度開基し給ふ高野山は、卽身卽佛の靈場、彌勒出世の値遇とかや。此の尉も參詣は望みなれども、嘸な微妙の橋柱、重き罪障覺束なし。大師慈愍を垂れ、我を誘ひたび給へ。」と、思入りたる氣色なり。大師やゝ觀念あり。「いや〱詞に僞りあり。おことは此の世の者ならず、娑婆を去つたる幽靈よ。懺悔すべし。」と宣へば、尉は暫く潸々と泣いて、「懺悔申すも轉てやな。

善の字に又十二畫、三字合はせて三十五畫、三十五本の大釘にて打つたる體。當年聖壽三十五歳にならせ給ふ。御年の數引結んで、嵯峨の天皇なくばよからんと、賀茂の社に祈誓し、玉體に釘打つて、御命を失ふ調伏の隱語。此の頃の天變このしるし。逆臣征罰あらずんば、天晴天下の御大事。」と、見通す如く述べ給ふ。天皇を始め奉り、堂上堂下舌をまき、恐れ給ふぞ道理なる。大海原の王子すつくと立ち、「ヤア空海。かくむづかしき文字の裁き、舍利弗、文殊の智慧にても、卽座にやはか解くべきか。和僧が辯舌立板に水、さら〳〵さつと判じたるは曲もの。これ皆己が作よな。入唐とやら渡天とやら、唐土へ渡り、異國の王に頼まれ、日本の忠臣共を逆臣と難をつけ、死罪流罪に失ひ、天皇を亡ぼし、此の日の本を毛唐人のやつことなさん企て。逆臣とはづくにふ己が事。大海原が手にかけ、朝敵坊主締め殺さん。」と飛びかゝれば、空海の御姿はつと消えて、久方の日輪の中に、安祥と阿字觀に住し見え給ふ。御聲はなほ近々と、「本有毗盧の法身、大日覺王如來の加護、金剛不壞の御手を伸べ、日輪の中へ抱き取られし空海、太刀も鉾も及ぶべきか。誰ぞとさして言はずとも、逆臣はあらはるべし。懺悔々々。」と教化ある、聲の中より光明一筋、焰の如く、王子の頭を照らせしが、五體にこたへて、熱きこと熱鐵に燒き付けらるゝ如くなり。されども王子齒をくひしばり、ぢだんだ蹈み、「エ、空海坊よりにつくい奴は勝藤め。え知れもないことを見付け出し、時の騷動己がわざ。武者所とて武

王位を傾け犯すべき天の告あなかしこ。御愼み。」とぞ奏せらる。詞もいまだ終らぬに、瀧口の武者所橘判官勝藤、旅出立ちにて參內し、無惡善といふ三字、大筆にて書きたる額御階に差上げ、「某本國江州に下り、只今歸京の序、賀茂の明神へ社參致せしに、何者の業にや、御寶殿に打付けたり、願主の名字無ければ繪馬にもあらず。神號ならねば額とも見えず。流石に賀茂は王城の鎭守、事を好む國賊の、世上を諷する仕業と存じ、釘こじはなし、叡覽に供へ候。」と言上すれば、卿相雲客、「けに珍らしき熟字や。」と、各不審晴れやらず。大海原の王子、えせ笑ひ、「ヤァ何れも學問なき故に、さしてもない事に不審立つ。無惡善の文字に點を付くれば惡無うして善と讀む。御代政正しく、惡しき事なく善なりと、帝を祝ひ譽めまゐらせたる判じ物。それ〳〵公家達、御賀の御酒を勸められよ。」と、顏色とけてぞ見えにける。天皇御簾をかゝげさせ、「如何に空海。王子の判斷さることなれども、なほも深き義理やある。考へ申せ。」と宣旨あり。空海謹んで、「さん候。世俗に文字謎判じ物など申せども、もと隱語とも造語とも申す。文字にて謎を作ること、史記の滑稽傳、左傳、漢書を始め、唐土の書にまゝあること。凡そ此の無惡善の三字は、御代を呪詛し、君調伏の隱し詞と考へ候。其の故は、我が君、北嵯峨に離宮を經營ましく〳〵て、嵯峨の天皇と稱し奉る。然るに惡の字をさがと讀む訓あり。これにて讀めば、さが無くば善からんとの隱し詞、扨無の字に十二畫、惡の字に十一畫、

嵯峨天皇甘露雨

第一

十萬里程多少難、五天到る日頭白かるべしと、渡天の人を嘆美せし、月は落つる長安半夜の鐘、遠く日本に響き來て、入唐求法の眞言祕密、君が祈りの御修法の護摩、金胎二器の加持香水、王化に潤ふ秋津民、つきぬ五つのたなつ物、をさまる千代のふる道や、嵯峨の天皇のしろしめす、安國ぞ殊に平らけき。弘仁格式の掟、聖代の古風を仰ぎ、佛法に御歸依あり。慈悲を叡慮にまつりごち給へば、士農工商朝野遠近靡かぬ方もなかりしが、太上天皇の第二の宮、大海原の王子とて生年二十三歳、人我の相面にあらはれ、董卓が眼、祿山が髭、放逸無慙の驕り人、「我當今の從弟なれば、王位を踐まんに何條事かあるべき。」と、屢大内に徘徊し、三公の上に威を振ひ、逆心の萠あらはなり。こゝに大法師空海あわたゞしく參内あり。「抑愚僧先年入唐、渡天、文殊の淨土に到り、眞言祕密の奧藏を究め、大同年中に歸朝致せし其の口より、玉體安全鎭護國家の御祈念、怠らず候所に、此の頃打續き朝日夕日に不思議の光現じ、白虹日を貫く事なゝめならず。空海倩考ふるに、都の内に逆臣起り、

に乘りかゝり、とゞめの劒さし通し、悦び勇み立つ所に、齋藤左衛門越中の次郎兵衛、「小松殿より歸參の奉書、本領安堵の御朱印。」と、聲を上げ扇を上げ、招きよせて頂戴す。夫婦兄弟親子の奇緣、忠孝の德和歌の德、神の威德や神かぐら、太鼓はてん〳〵から辛崎の、松は萬代横笛の、竹は千歳の若綠、さか行く家こそめでたけれ。

娥歌加留多　終

らみしか。左京之進義次、お局もかくまへたり。長く惡業さらさんより、腹をきれ。」と呼ばはつて、各あらはれ出で給へば、「エ、たばかられし無念やな。たとへこの湖千尋萬尋深くとも、渡りつきて舳先に取りつき、ひつくりかへしてくれんず。」と、裾ねぢからげ腕まくり、身づくろひする所を、瀧口横笛遙かに見つけ、瀧口いつさんに驅けつけ、後よりとあしをかいて、眞逆樣にどうど伏せ、背骨にどつかと乘りかゝれば、横笛はあたまをはり、足を抓つて責めさいなむ。「エ、小冠者めに組みしかれ、一生の不覺取つたり。」と、手足をもがくぞ心地よき。義次聲をかけ、「殺すな〳〵。上御慈悲にて助けおかせ給ふを、我々殺すは私なり。同類を待ち受け、討つて捨てよ。」と、舟さしよせとびあがり、手足一つに搦めつけ、口にねぢわらおし込み〳〵、手拭にてぐる〳〵まき、乘物に取つて投げ入れ、「サア大惡の御本社をしめたれば、末社々々は今のま。」と、社の陰にぞ忍び寄る。程なく無藏源九郎、大息ついて馳せ歸り、「旦那も見えずさん〴〵の仕合。先づこの婆めが不吉者、しまうてのけん。」と、乘物の兩方に立ち別れ、簾越に刀に突込み、「えい〳〵。」と思ふ樣につき通しさし通し、金がなくとも何ぞはあらう、懐さがせ。」と引きずり出し、朱になつたる死骸を見れば、南無三寶師高なり。「無藏ぬかるな。瀧口か義次か、こゝらにをるは極まつたぞ。油斷するな。」といふ所へ、「オ、よい推量。左京之進義次齋藤瀧口是れにあり。」と弓手右手より切り掛け〳〵、打ち伏せ〳〵、二人が二人

面倒な。」と、乗物の戸を引つたくれば、思ひもよらぬ刈藻の前、「ア、はづかしい師高様。」と、しをしをとして出でければ、さすがの師高ぎよつとして、「これはどうぢや。」とばかりなり。「今更悔んでかへらねども、一とせ嬉しいお詞を、無下にしたる人罰にて、左京めに捨てられ、あまつさへ悋氣するがにくいとて、この湖へ沈めにかけんと申せしを、漸う逃げてせん方なく、あき乗物を幸ひに、前後わかずにこの通り、どうぞ昔のお心が、半分殘つてあれかし。」と、おもはゆげにぞ仕かけける。「扨は姉めは逃げをつたか、姉千人ともかへはせぬ。昔の心半分とはつらい仰せ。その時より百倍まし、身の上萬端予が請込み、少しひねてしんめうくれ、女房ぶりがあがつて、いとゞ思ひはますほの薄、殺しくされ。」と抱き付く。「あれ人が見るわいの。あの舟借つて沖中で、人目厭はずしつぽつてはなんとあろ。」「びやくらい女房があがれば智慧もあがる。これ船頭、最前は捨舟かとおもひしに、その方が舟よな。石山まで貸して乗せまいか。」「オ、ちよつと見るより戀と見た。船頭は戀の渡守、運賃もかまはぬ。戀にこがるゝ浮舟、サア召せ〳〵。」といひければ、「これこそほんの渡に舟。」とのらんとするを、「是れ〳〵岸が高い、危い〳〵。一人づゝ女中からサアござれ。」と、刈藻を抱いてどうど乗せ、さを取りなほし、「えい〳〵、」聲、「これは〳〵。」といふうちに、三反ばかりさし出す。師高大きに腹を立て、「一人買船か盗人め。」と、淺瀬を尋ねかけ廻る。義次蓑笠取つて捨て、舟縁につつ立ち、「天罰に眼く

とふりかへり、「あの乘物の内さうな。」「オ、こゝぢや〳〵。刈藻殿なつかしや、これへ〳〵。」と呼ぶ聲に、したがひ立ちより戸を明けて、「ヤァお局樣か、この姿は何事ぞ。淺ましやおいとしや。」と、抱きおろして繩を解き、たゞ泣くより外のことぞなき。戸無瀨やう〳〵涙をおさへ、「横笛瀧口はいづくにぞ。上よりそもじ達の行方を尋ね召しかへせと、神々へ御代參の折から、弟の惡人め、御扶持をはなされ盜賊となり、斯樣に搦め置いたるが、おつつけ是れへ來るべし、恐ろしや〳〵、いざ歸らぬそのさきに、一まづ都へ同道せん、早う〳〵。」とせき給へば、義次打笑ひ、「我々參りあふからは、何事か有るべき。瀧口横笛もおつつけ、參詣致す筈、都へのぼるは四人一所、暫く是れに待ち給へ。もし師高が立ちかへらば、御身乘物に入りかはり、左京之進に捨てられしと辯舌を以てたらしこみ、あの舟へつれてのれ。我船頭のふりをして、ずんどよい思案あり。」といへば、刈藻心得て、「高をさへのみこめば、その上は時の才覺、手つがひようし給へ。」と、乘物に入りければ、「オ、ぬかりはせぬ。」と龜若をかき抱き、戸無瀨の局諸共に、舟引きよせて打ちのり〳〵、舟底に二人をかくし、上に苫を打ちおほひ、その身は蓑笠ふか〴〵と、空ねぶりしてゐたりけり。程なく師高大汗になつて走り歸り、乘物叩いて、「是れ姉ぢや人、大津の宿でもしるしがなうては渡さぬ筈。晝中にどや〳〵と押入もなるまい。金銀衣服わたす樣に、しるしを渡すかサアどうぢや〳〵。」と、いへどもさらに返答なし。「エイ

皆ちり〲にぞ逃げにける。戸無瀬、「わつ。」と聲を上げ、「何者かと思ひしに弟の畜生めか。お主には御苦勞かけ、多くの人をそこなひ、すでに落ちるその首が、誰がかげで胴に付いて有る。この姉が陰といふも、中宮樣の御慈悲。御恩報じ罪ほろぼし、出家沙門ともなりはせず、その態になつてもまだ合點がいかぬか。地獄の釜の釜焦め。」と、はがみをなして泣きたまへば、「コレその合點がいくほどなれば、このざまにはならぬ。姉弟の情に命は助けた。おのれが身代知つてゐる。五兩や三兩は懷にも有る筈。サア出せ〱、出さねば殺す。」とねぢふする。「ヤイさもしい根性な。おのれが氣に引きあてて、金出させねば殺すとは、縱へ千兩萬兩でも、命にかへて惜しまうか、中宮御所の局ともいはるゝ身が、懷に金銀をたくはへて何にせう。殺さば殺せ。」と泣き給へば、「ム、これはかう、懷には有るまい、大津の宿に有るはず。取つてくるまで動くな。」と、用意の早繩取り出し、蹈みつけ〱縛り上げ、乘物に取つて打込み、「サア來い兩人。七日逗留の用意なれば、金銀はしつぼり。扨は葛籠挾箱、著換から夜の物、見事な事。」とかけ出す、身の行末ぞ恐ろしき。左京之進義次は、夫婦の中に子をそだて、世に不足はなけれども、今ひとたび都に出で、主君の恩を報ぜずば、人たる道にあらずとて、親子三人日參の、志賀辛崎の大明神、松の名におふ小松殿、をがむ心と頭をたれ、祈る姿ぞ殊勝なる。かたはらより誰とはしらず、「なう刈藻殿義次樣。」と、呼ぶ聲頻りにきこえたり。「不思議や。」

御代參の仰せをかうぶり、大津の町に宿をとり、山王と辛崎へ、七日詣の乗物に、供人少々召し具して、辨當小筒さゝ波や、志賀辛崎の一つ松、木陰に乗物たてにけり。局あたりを見廻し、「ハアいつもの禰宜樣、三太夫は見えぬか、尋ねて見よ。」とありければ、無藏心得、「いや　私卽ち三太夫が親。お神樂でも十二燈でも、仰せ付けられ。」と出でければ、「扨々三太夫は、もはや六十の上とも見える。その親には若いなう。」「いや〳〵三太夫は親で、その子の二太夫と申す者。」「ム、ウ三太夫の息子か、これこゝへ〳〵。」と招きよせ、「みづからは忝くも都中宮樣の御代參。三太夫の話あつたかしらねども、横笛刈藻といふ女中、戀故流浪ありし事、御不便に思召し、この志賀のほとりにその男、左京瀧口といふ人一緒にある由お耳に立ち、『尋ね出し參れ。』との仰せにて、山王樣とこの神樣に願をかけ、大津の町に宿を取り、七日參の今日五日目。もし左樣の人聞き及びもない事か。行方の知れるその祈念ひとへに賴む。」と、神前を一心不亂に禮拜ある。師高編笠傾け、參詣のふりにて後に立つて聞きすまし、飛び掛つて局のもと首ひつゝかみ、仰向けにひつかへす。「なう悲しや何者ぢや。」と、「わつ。」とさけべば若黨六尺、「盗人め逃すな。」と、ばら〳〵と取りまはせば、「ヤア寄るまい〳〵うず蟲めら。あれ撲ち伏せて引剝げ。」「心得たり。」と源九郎、舟よりあがつて切つてかゝれば、無藏も拔いてひらめかす。此の勢ひに恐れをなし、いふにかひなき若黨中間、「晝強盗よ追剝よ。出あへ〳〵。」を力にて、

君の御恩の有りがたさ。」と、各一度に手をつきて、都の方を禮せらる。主君は親なり佛なり。かりそめながらしばしが程も、身を墨染の衣の恩、導き給ふ御身は釋迦、むかへあひたる我等は彌陀、願ふ都は西の空、かへり入るべきつき弓の、引矢の家督子寶と、育てて時をぞ待ちにける。

第五

勸善懲惡は國政の始めとかや。加賀の郡司師高、惡事讒言あらはれ、死罪に行はるべかりしを、姉戸無瀬の局が緣といひ、慈悲を表の政、命ばかりを助けられ、帝都追放せられしかば、すでに朝夕にせまり、一とせ舟岡山にて害せられし、岩村源五が一族岩村源九郎、鎌須の無藏、彼等をかたらひ、路頭にさまよひ、或は騙りはとのかひ、追剝押入ごまのはひの強請取り、その日〳〵の氣轉の身過、これよき事と思ひ込み、見えぬ我が身の志賀の浦、辛崎邊に徘徊す。師高二人を木陰に招き、「今日は申の日、山王まゐりも有るべし。あれに捨舟あり。源九郎はあの舟に乘つて、船頭になり人をのせて、沖中で剝いでとれ。明神の拜殿に、禰宜の烏帽子裝束あり。無藏はあれを著て社人にばけて、初穗賽錢十二燈をしてやれ。我は道にぶらついて、うつかりづらの旅人の、腰の廻り懷、念がけるとこつちの物。サアめん〳〵油斷すな。」と、うなづきあうてぞ別れける。戸無瀬の局は中宮の、御願

に落ちけるか、なんの罰ぞ報いぞや。法體の父に還俗させ、常精進をおとしたる、佛の咎めましまさば、我が父この五年、發心出家の功德を捨てさせ給ふかや、情なや恨めしや。やれ横笛、瀧口がかはゆくば、たつた一言我が夫と、言うてくれよ。」と許りにて、空しき死骸を抱きしめ〳〵、聲も惜しまず歎きしは、目もあてられずいたはしし。義次夫婦はかきくれて、身にもかへんと歎きしが、「あまり本意なき最期なり。この上の念はらし、焚火にあてて、五體を暖め見るべし。」と、山柴くゆらせ額をおさへ手足をなで、様々看病いたはれども、さらに驗はなかりけり。刈藻は取りわけ、幼きより中宮の御側にて、共にそだちし傍輩の、過ぎし昔を思ひつゞけ、せきくる涙のひまよりも、守袋をひらき、「是れは藥王香と申す名香、唐土の帝より、後白河の法皇様へ參らせられ、中宮様へ傳はり、三國無雙の寶なるを、横笛とみづからに、二世までも主從のしるしなりとて、中宮様よりいたゞき、この人の守にも有るべけれど、みづからが二世を伴ふ約束の燒香、中宮様のお志。」と、おし戴きて焚くとひとしく、匂ひ家内に薫じ渡り、横笛が肌あたゝまり、ほつと息つぎ目を開き、「なう瀧口様か。」といふ聲に、人々驚き、「ヤアよみがへり。」と悦びの、皆よみがへりし心地にて、夫婦々々がすがりあひ、つらさと今の嬉しさと、泣くも笑ふも道理なる。「只今息も絶えはてて、夢ともわかぬその中に、名香の薫して、中宮様の御聲にて、横笛〳〵と召さるゝとおもふより、二度此の世に立ちかへる。主

上に降り埋み、夜はしけ〱と更け渡り、打拂ふ雪は幣とちり、袖のつらゝはがら〱と、神樂の鈴に異ならず。遙か向うに幼聲、「なう〱旅人、主は是れへ。」と呼ばはる中、二人づれにて立歸る。「宿借りたいとは此方か。」「いかにも我等。主殿とは、ヤア瀧口か。」「なんと義次。是れは〱不思議の對面。先づ〱大事の預り物、是れこそ御邊が胎内にて別れし子よ。なう刈藻殿。」と呼ばはれば、夢かとばかり走り出で、「是れぞ我が子よ。」「父なるか。」と、すがりつけば抱き上げ、顔を見合はせ手を取りかはし、親子三人聲を上げ、悦び泣くこそ道理なれ。「これ程緣のあふものか。いで義次が土産には、是れ横笛を伴うたり。」「それは深切、朋友の誠あらはれし。是れ横笛々々。」と、ゆりおこせども音もせず。雪打拂ひ抱きおこせば、身もすくみて息絶えたり。人々あわて立ち騷ぎ、くひつめたる齒をこじ明け、藥さま〲吹き入れても、脈の玉の緒切れはてて、この世の緣は絶えにけり。瀧口は前後にくれ、膝に抱き上げ我が身の肌に肌をつけ、「さても〱淺ましや。如何なる宿世の惡緣にて、互に思ひそめけるぞ。我は彼故身を苦しめ、彼は我故憂きめに逢ひ、せめて一日半時も、夫よ妻よと世間はれ、一家にすまひし夜半もなく、五年此の方在所も知らず、一生物を思ひつめ、一生人目を忍びつめ、今宵といふ今宵、わが夫の門とも知らず迷ひ來て、詞もかはさず不便にも、内に焚火のまざまざと、あるを見ながら凍え死したるよな。餓鬼は水を火と見るとや。御身は又火を見ても、八寒地獄

きな慈悲になる事。その中あるじのお歸りならば、我々言譯いたすべし。是非々々賴み奉る。」「いやなんぼでもなりませぬ。」「然らばその湯を一つお振舞に預りたし。」「いや〳〵これは湯ではない、これは藥。一番煎じがまだあがらぬ。」「扨はこれにも御病人あるかや、御病人とはどなたかは。」といひければ、「されば我が母樣久しい御煩ひ、あの障子の中に、夜も晝も寢てばつかり。朝晩のまゝも、皆御坊樣の手わざ。今宵もそこな茨川まで、藥取りに。」といひければ、「然れば主の御留守でも、お袋があるからは、この通り申して、平に一夜の御無心が申したし。」「いや〳〵あの母樣を大事にかけ、人が連れていなうかとて、『留守の間は誰がきても入れるな。』とのいひつけ。それ故ならぬ。」といふ所に、奧より女の聲細く、「なう龜若、旅のお方の宿かりたいとや。この冷えるにおいとしや、その中主もお歸りならん、先づ呼び入れよ。」とありけれども、童心の一筋に、「いや〳〵たとへ見知つた人なりとも、『留守の間は門明けな。』とのいひつけ。つい呼んで參らん。」と、壁にかけたる竹笠を、取つて被くもいたいけに、締緒結ぶもしどけなく、宵よりつもる大雪に、姿は半ば隱されて、笠の步むが如くなり。「ム、主は出家と見えたれば、妻をかくすも尤も〳〵。子は弟子とがないひなすらん。この間にそつと内に入り、橫笛を先づ火にあて、我も寒氣を凌がうか。いや〳〵主が歸つて不興せば、一夜の宿を借りそこなふ。まそつとの堪忍。」と、なやみふしたる橫笛に、二人の笠をうちきせて、掩ふが

もりし雪に息もきれ目もくらみ、明日まで生きんと思はれず。お情には念佛すゝめ、未來を夫の瀧口と、ひとつ蓮に往生させてたび給へ。」と、はやたえ〴〵の息づかひ、かつぱと伏して泣き給ふ。同じ思ひの義次も、共に心は亂るれど、病者に氣をつけんと聲をあららげ、「エ、曲もなき横笛殿。刈藻が事をも思ひやりたまふ程ならば、など心を取りなほし、雪氷はおろか、火の中にも分け入つて、瀧口にめぐりあひ、三人一緒に刈藻が行方、尋ねてくれんと思ふ心はないかいの、エ、いひがひなし。」とひつ立つれば、今を限りの横笛も、「ア、あやまつたり。我ながら心弱し。」とゆふ闇の、さきはそこと白妙の、雪の光をしるべにて、足に任せて三童人里は、まだ遙かなる一つ屋の、雪にふすぶる焚火の影、幽かに見ゆればたどりつき、内をのぞけば來迎の三尊、燈明細くねぶたげに、五六歳なる童の、柴折りくぶる圍爐裏には、湯のにえたつも羨ましく、心までこそ凍りけれ。これぞ寶所の宿と思ひ、「ちと頼みませう、頼ませう。」といひければ、童伸び上り、「誰ぢや、何者ぢや。」「ア、苦しからず。今宵の雪に道蹈み迷ひし旅の者、連とても只兩人。その片隅に夜明まで、休ませて下されかし、頼みまする。」といひければ、「易いことなれど、こゝの亭主の御坊樣のお留守。『必ず門を明けるな。』とのいひつけ。なりませぬ。」とぞしをらしし。「オ、いづかたも用心時、御尤もなれども、つれと申すは女なり。殊に煩うてゐる者、盜みなどいたす樣な者でなし。おとなにいふ樣に不調法な事ながら、大

る方より凍りきて、道は劒を踏むごとく、比叡の根颪ばう〳〵と、横ぎる風に横笛は、この頃いたはる身のつかれ、頼むは義次たゞ一人、頼まるゝ身も只一人、藥あたへん手だてもなく、「これ病氣には氣遣ひない、追付瀧口に逢はせう。」と、詞を耆婆とも扁鵲とも、力をつけていふ聲も、「ア、忝し。」といふ息も、共に嵐の吹きとぢて、口もこゞえし雪の暮、あゆみかねたるばかりなり。「道理〳〵。せめて二三日宿を取り、雪の晴間養生と存ずれども、時分がら師走の空、ひとり坊主ひとり女、一夜を貸す人もなく、百日許り野山のおきふし、幼きより柔かに御所そだち、思ひやりていたはしや。「半道ほど行くさきは志賀の里、家さへ見たらば泣きくどいても、今宵はあかさせ參らせん。歩みたまへ。」とひつ立つれば、横笛も行かんとするに足すくみ、たじ〳〵よろ〳〵と、どうどふして泣きけるが、「扨も〳〵忝や。御身の上にも尋ぬる人、憂き苦の積りし御身にて、年月の御介抱、達者な身でも有る事か、死に掛つてる者を、不承な顏も見せ給はず、他國三界この雪に、御身にかけてのいたはりは、先の世の親か兄弟か、たゞの御緣と思はれず。御身樣とは緣あつて、二世とかけたる瀧口樣、かくまでめぐりあはざるは、ア、あやにくの世の中や。中宮樣の勿體ない、御身にかへての御あはれみ、冥加につきたる天罰かや。我が身のうさにつまされて、思ひやればいたはしや、刈藻殿は懷妊、それよりは早五年、御身樣の物案じ、刈藻殿の心根、思へばこれも病の一つ。我が身の上人の上、つ

れ身を投げるわ。ありや／＼投げるわ／＼。」と、呼ばはる聲に主の僧、あわてさわぎて走り出で、錠ねぢ切つて抱きとむれば、「なう瀧口樣か。」と抱きつく。「エ、是れ／＼瀧口ではないわいの。」「いやさうはいはせぬ。」と、なほ取り付くを引き放し、「ヤァ横笛殿か。」「左京樣か、あら悲しやうらめしや。中宮樣の御情にて、うき命たすかりしも、瀧口殿に今一度と、思ふばかりの嬉しさなるに、この頼みも切れ果てしか。殺してほしい左京樣。」と、衣の袖にすがり付き、又むせ返り歎かるゝ。義次も涙にくれ、「我等も主君小松殿の仁心にて、不慮に存命いたし、遁世の身とはなつたれども、心に起らぬ道念、忘れぬは刈藻が事。御身が體を見るに付け。不便や刈藻がまつその如く、我をしたひ歎くべし。瀧口も亦我等が如く、御身を慕ひ歎くべし。現世にてさへ別れ／＼の四人の中、未來の一蓮思ひもよらず。一所不住はこゝが德。庵へも入らず御身を伴ひ尋ねなば、瀧口とても刈藻とても、みな思ふ者持つたる者、遠國へはよも行くまじ。この一念の響は、太鼓鉦にて尋ぬるにも勝るべし。」と、庵は下僧にゆづり捨て、「佛は何國も一佛にて、行くさき同じ佛なり。いとま申すに及ばず。」と、悟りは重く身は輕く、心も輕き墨の袖、行方さだめず三重しるべなく、何國泊りとあてもなく、夫にはなれし鴛鴦と、妻にわかれし野邊の雉子、つれて音を啼く風情にて、我が妻ならぬ旅衣、袖に涙を拂はまし。花の吹雪と詠じけん、志賀の山路に著きにけり。頃は極月初めつかた、空もとゞろにふる雪の、つも

すがら、袖乞どもにとらせしが、何なりとも欲しいもの、今度持て來てやらうぞえ。」「あのさだめし鼻紙はあるで有らう。」「オ、〳〵その樣な物手拭などは持ち合うた、どうぞ賴みます。」「まかせておけ。」といひ捨てて、飛んで庵に入りにけり。下々程正直に、愚かなるものはなし。我がための結ぶの神、今宵はこの庵にて、夜すがら積る事どもをと、思へば嬉しさ氣はすゝむ。顏の見たさに氣もせきて、そゞろ顫うて待ち給ふ。稍あつて道心、すご〳〵として立ち出づる。「なうどうぞいの〳〵。」「どうはふつつり埒明かぬ。假令知つても知らいでも、女子といふ名が付けば、人間は扠置き女犬でも雌鳥でも、物もいふ事かなはぬと、誓文立てていひきられた。袱紗一つ棒に振つたと思召せ。」といひければ、横笛とかうのこともなく、「わつ。」と許りにむせび入り、土の上にかつぱと伏し、消え入り〳〵泣き沈み、「變ればかはるものよなう。互に焦れ慕ひしを、二年三年は耳なれて、淺はかな樣なれど、日數は千々の夜晝を、思ひくらし泣きあかし、又なれそめては世をつゝみ人目を忍び、七生も變るまいぞや變るなと、契りし中にあすか川、せめては波の聲なりとも、聞かせてたべ。」とかきくどき、柴の編戸にすがり付き、聲もをしまず泣き給へど、あはれ事とふものもなし。「ア、愚癡なげくまじ。夫ひとりを樂しみの、夫に捨てられ世に存へ、月も花も何かせん。あの川に身を沈め、せめて夫の往來の影、うつるを未來の樂しみ。」と、思ひ定むる思ひの數、千鳥が淵へとたどらるゝ。道心驚き、「や

ば、明後日おぢや。」といひければ、「つがもない、それは何の事ぞいの。もとからお心の一道なも知つてゐる。お目にかゝればあなたも合點。たゞ一言傳へてたべ。」「ム、扨は馴染か、とうからさう言うたがよい。まちつとそこに待つてや。」と、走つて庵に入りにけり。跡見送つて、「常々瀧口樣、氣に入りの草履取ありと宣ひしが、共に道心起せしか。しをらしや殊勝や、下々には奇特な主思ひ。」と、深く感じ給ふ所へ、「なう怖や〳〵。」と飛んで出で、「御上臈待つてか、あゝら怖やの。右の通り申したれば、叩鉦程な目をぐつと見出して、やいそこなうつけ者、その樣な使する物か。此所へ引き込んで、振袖でも詰でも、いつよんだ事が有る。先づ第一に金がない。おのれが好きな任せに、女子を見ればびろ〳〵と、鰻を見ればぬら〳〵と、ぬらつく物に持ちあぐんだ。重ねて使しをるなと、撞木おつ取り、この頭こん〳〵〳〵こんどござれ。」といひければ、「げに實、みづからが言ひ樣のわるい故、聞きまがひ有るは尤も。大儀ながら今一度、中宮の御所樣から參つた女子と傳へてたべ。それであなたに御合點。」「いかな〳〵。中宮はさて置き、内宮でも外宮でも、のみこまるゝ顏でなし。又頭くはされう。一度の懲せず二度のかけ、あらいやや。」とかぶりふる。「なうそもじも見れば今道心、嘸つむりが冷えさうな。ア、頭巾がやりたい、これこれなりとも。」と、袂より袱紗物取り出し、垣越にひらりと投げ給へば、道心被つて見て、「ヤア表は縮緬、裏は紅裏、中に包んだ物はなかつた。」「オ、それは道

しや。流るゝ水はとう〳〵と、鳴瀧川にぞ三重著き給ふ。嵯峨の奥、あそこの谷々こゝの峯、世を捨て人の隠れ家の、庵數々多ければ、いづれかわが夫瀧口の住家ならんと、行き暮れたゝずむ細道や、里の女の菜をつみて、畠づたひを歸りくる、袖を控へて「なう姉御、このあたりに都方の若侍、御出家有りておはします、庵室はどこの程ぞ。」と宣へば「ハァ、御侍の果てとは、それはどれぢやな。念西坊は獵師の果て、道らん坊は切のはてなり、毎日京へはつち詣ふ、七に出られた道さい坊は投げらるゝ。オ、それ〳〵、近き頃平家方の御侍、この往生院と申す寺にて髪をそり、あれあの見越の松の下道を、二町程その先に、念佛の鉦の音、それをしるべ。」といひ捨てて、しやな〳〵振りでぞ歸りける。横笛嬉しさかぎりなく「平家方の侍の、この頃の發心とは、夫の瀧口にまがひなし。」と、ならひし道を走りつき、庵の編戸にやすらへば、鉦の音幽に念佛の聲、なほも飛び立つ心地して、編戸を敲き「なう申し、此の庵のあるじ様に申したき事あり。錠明けてたべこゝ明け給へ。」と、垣も編戸も打敲き、聲をはかりによび給へば「おゝい。」と答へて、四十ばかりのみそかす坊主、絲鬢の跡髭の跡、青布子きて垣越に「ワァちがうた。油掛から明日のお齋米、持つてかと思うたれば、齋にも非時にもはづれた。食ひかけんな夜食が來た。是れお住持は若けれど、下地が武士でずんと堅い。なんぼ甘う持ちかけても、いかな蓋も取る人でない。おららも今日明日は精進ぢや。きりぐらゐで合點なら

第四

横笛道行

尋ね行く、哀れなるかな横笛は、あや菅笠にて顏隱し、忍び居たりし花山をば、まだ夜をこめて出で給ふ。鳥がなく／＼、音羽の山をあとに見て、歩みもならはぬ黑土を、たどろ／＼と行く程に、愛宕の寺をばたてになし、南を遙かにながむれば、稻荷の山の薄紅葉、靑かりしよりとよみ給ふ、和泉式部のながめある。そなたの空も薄霞、かの深草の少將の、その名ばかりやァ、殘るらん。加茂川こえて見渡せば、五條あたりを車が通る。誰そと夕顏の　唄やんれ花車、花見車はおもしろや。しるしはこゝぞ古の、光源氏の物語、思ひつらねて行く程に、夫にはいつか大内の、山又山に出づる月、雲の林にやどるらん。御室の里の吳竹の、うきふししげき世の中を、何を小鹽の岩倉の、名も良峯と聞くからに、賴みてしばし松のをの、千代もとむすびしかね言の、あだになり行く朝顏の、花の上なる露よりうすき契りをば、ア、恨めしやいとほしや。扨我が夫の浮世をすてて衣手の、森のしげみをわけ行けば、匂ひも深き梅津川、渡りの舟に棹さして、筏を下す大堰川、その水上は淸瀧の、高根は地藏大權現、よそながらも伏し拜む。北に向へば高尾山、紅葉の御遊の古を、思ひ出づればなつか

その功徳は小松殿、中宮の御所御兄弟にとゞまつて、六萬恒沙の佛を作り、阿僧祇劫がその閒、百萬僧の供養にも、人の命をたすくる功徳、勝ると聞きし御慈悲心。これ盛次よその事と思はれな。弟の命我が子の命、弟娵、總領娵、四人の命給はりし、御恩は何と報ぜん。」と、さしも剛なる弓取ども、手に手を取組み聲をあげ、小松殿の御方と、中宮の御方と伏し拜み〳〵、感涙更にせきあへず。戸無瀬もともに涙にくれ「恥かしやこれにつけ、大惡人は只一人、申さぬとても御推量。父母のなき我々が、弟は子も同然、不便とは私ながら、かくまで敏く御利發の、中宮樣小松樣、お目にあまらで有るべきか。妾も同罪とのおぼしめしは、必定と覺悟は極め候へども、六親眷族諸共に、奈落に沈む誓ひにかけ、妾が露ちり存ぜぬこと。亡き跡までも上つ方の、御疑ひの悲しさを、推量あれ。」と泣きければ、勝頼も盛次も、ともにあはれむ心の底「我も人も世の中の、子の心親しらず、弟の心兄しらず。君君たり天天たり。日月は心中に、神こそおはします鏡、ゆがんで向へばゆがんで映り、すぐに向へばすぐなる影。御前とても其の通り、たゞまつすぐに御披露あれ。」と、しるしの首桶取りかはし、いとま申して立ちかへる。禮義亂れぬ白絲の、瀧口歌口横笛の、よゝに聞えし御政道、太刀取恨みず繩取も、恨みなき世ぞありがたき。

廣廂にぞ畏まる。「扠横笛を中宮樣御手にかけられ、御自身首桶に封をつけられ、左京之進が首をあらため請取り、横笛が首をも渡し申せとの仰せなり。」と述べければ、畏まつて左衛門、小刀拔いて首桶の封ふつつときり、蓋を開けばこはいかに、首にあらで義次が髻を切つて重しに石を入れられたり。各「はつ。」と驚けば、戸無瀬の局もさすがをもつて封おし切り、蓋をとればこれも又、首にはあらぬ笛竹を、歌口かけて二つに切り折り、おもりに土を盛られたり。三人一度に手を打つて、「これはこれは。」とあきれしが、中にも左衛門とつくと思案し、「ハッハいやしき我等が詞をかけ、申すも恐れ多けれども、あつぱれ小松殿御兄弟、天のなせる賢人、地に奉ぜる賢女かな。御兄弟の御仁心、いつ言ひ合はせ給はねども、竹をわつて合はせし如く、寸分ちがはせ給はぬは、尊くもありがたし。義次をうち給へば、刈藻もたすけおかれぬ法、髻を切つてその身を落し給ひし事、出家は生死の世間をはなれ、法名つけば死人なり。重りの石は標の石。手にかけ給ふ理は同じく、命たすかる事はすぐれ、理同事勝の法門に、かなはせ給ふ御心。中宮もその心、横笛を討ち給はば、瀧口ながらへ有るべきか。笛竹に十二律、五行五音の理をそなへ、笛に聲有り魂有り、名は體をよぶこの横笛、御手にかけて討ちたまひ、重りの土の苔の下、今はこの世になき人と、いばんに誰が非をうたん。命一つと思召せども、たすかるは二人なり。二人と思へば四人なり。親有り兄有り一門有り、縁類ゆかりの悦びの、

げてぞ歎きける。「いや〳〵女なれどもみづからが側の者、男なれば腹切らする。そのかはりには、我が手にかゝるを本意とせよ。」と、御衣の褄かいはさみ御袴のそば高々と、かひ〴〵しげなる御姿、日の守の御劍を取つて、弓手の小脇にかい込んで、「最期場は殿上の櫛形、サア來れ。」と宣ひて、横笛を先に立て、しづ〳〵として入り給ふ。世を恨みたる御腹立、御顏ばせにあらはれて、御いたはしくも勿體なく、見る人身をぞひやしける。兩人とつくと伺ひ聞き、「何と左衞門。只今中宮の御振舞御詞、小松殿の御沙汰とは、雲泥裏表の相違なり。これはまさしく中にて、迷はし僞りたる讒言ありと覺ゆるぞ。御邊と我とが意地ばりあふも私事。又瀧口義次が身の上とても輕き事。上と上との御不快、御中絶とある時は、大事の基亂れの端。いざ和睦して詮議をとげ、事の筋をあきらかに、聞きわけまいか。」といひければ、左衞門うなづき、「オ、我もさこそ思ふ所。先づ御分と和睦して、諸人に氣をつけ心をつけ、油斷するな。」と兩人が、四方を見まはす面魂。師高座にもたまられず、「あいた〳〵サア〳〵持病の疝氣さし起つた。ア、痛いわ〳〵、どうもかうもたまられぬ。御兩人頼み入る。この通りよい樣に〳〵。あいた〳〵。」と顏しかめ、腹をかゝへて歸りけり。二人は跡をきつと見て、「きやつはこの御所支配の役人、かかる大事の御用の時節、持病とはくせ者。」と、おくを見やつてひかへし所に、戸無瀨の局首桶かゝへ立ち出で、「いづれも是れへ。」とありければ、「あつ。」とこたへて兩人は、

よび出せ、物ごしに自ら言ひ聞かする事どもあり。師高もそれにてきけ。」と、御涙おしのごひ、御氣色正しく、貝桶に腰打ちかけさせ給ひしは、氣高くも美しく、空恐ろしくぞ見えたまふ。取次の小上臈、「二人の武士お次まで。」と披露あれば、中宮御聲高々と、「小松殿は自らが兄なれども、今にては臣下なり。されども位は内大臣の身をもつて、義次を手討とは、狂氣とならでは思はれず。その上こゝも雲の上、横笛を討たせんと、太刀取檢使に蹈み荒させ、雲居の庭に血をあやし、汙れもはゞかり給はずや。可愛や不便や、横笛が振袖白齒の昔より、側去らず使ひし者、情なくもやみ／＼と、武士の手にかけさせうか。女なれどもみづからも、弓矢の家に生まれて、大相國清盛の娘。人切る樣はならはねども、討つに討たれぬ事有るまじ。横笛を手討にして、首を檢使に見せんぞや。盛次とやらん、檢使の作法知つたらばよう見て語れ。義次が首もその時見ん。やれ横笛、斯くまで心を碎けども、とても逃れぬ命ぞや、これへ出でよ。」とばかりにて、猛く勇める御目元に、御涙をはら／＼とうかめ給ふぞあはれなる。伏籠おしやり横笛も、涙にひたれさしうつぶき、「須彌より高き御厚恩、海より深き御情、何と報じ奉らん。御手をけがし申さん事、天の咎め未來の罰。この上の御慈悲に、太刀取の手にかけてたべ。八つ裂になるとても、浮世に恨みは殘らねど、夫には來世で添ふ世もあり、七たび生まれ代つても、又逢ひ難き御情の、御主に別るゝ悲しや。」と、御前にかつぱと伏しまろび、聲をあ

これを制し給はねば、武家の法ともいひがたし。たとへ如何なる科のあるとても、奉公において露程も、おろそかのない横笛、何故に殺させう。主と頼み下人となるも三世の縁。みづからが中宮の位にかへ、身にかへても思ひもよらず、殺させぬ。」と、御手を廻し伏籠の下、横笛が手をしかと取り、「今日よりみづからは、横笛がためには姉と思へ母とも思へ。娘は殺させぬ、妹は殺させぬ。よい様にいひ直し、たすけてくれよ師高。」と、御涙せきあへさせ給はねば、横笛は有り難さ、冥加につきる勿體なさ、身の悲しみより悲しさの、御手にすがりおしいたゞき、もだえなげくぞ道理なる。師高猶も心強く、「太刀取檢使つめかけ候上は、すご〳〵とは歸り候まじ。横笛が命は中宮樣の御をしみ、瀧口を深し出し、その方にて首討たれよと申すべきか。」といひければ、横笛堪へかね、衣おしのけて出でんとするを、中宮は御涙の袖を人めのまがきにて、おししづめ〳〵、とゞめ給へばのびあがり、御耳に口をよせ、「御慈悲を無下になす、御にくしみはゆるさせ給へ。我が命助かれば、夫の命とらるるとや。我を渡して瀧口をたすけさせましませ。」と、歎くも道理、止むるも御理に、さゝやきの聲も涙もるゝやと、おもひ伏籠のそらだきの、共にこがるゝばかりなり。やゝ有つて中宮居直らせ給ひ、「扨は横笛か瀧口か、二人の内一人は、命をとれとの小松殿の仰せよな。よし〳〵心得たり。齋藤左衛門、越中の次郎兵衛、太刀取檢使として來りしとや。それ〳〵女房達、二人の武士を次の間まで

て、さあらぬ體にておはします。程なく師高打萎れたる體にて罷り出で「小松殿より是非もなき御使御座候。左京之進義次、刈藻と不義の密通にて、刈藻懐妊致せし故、この御所御暇取り候こと、重盛公のお耳に立ち、左京之進を御手討になされ、首を中宮に御覽に入れ申せと、齋藤左衞門勝頼持參仕る。それさへ有るに、瀧口をも同罪と思召せども、遁世して行方知れず、その代りに横笛を討つて參れ。もし中宮より横笛を御渡しなくば、瀧口をさがし出して討つべき間、その通りを中宮へ申し上げ、横笛が首討つて參れとて、太刀取は則ち齋藤左衞門、檢使には越中の次郎兵衞盛次、兩人中門に伺候仕る。小松殿には似合はざる、情もしらぬ御仕置。出家の瀧口を討たせんより、横笛を引き出し、首討たせ候べし。御奉公もよくつとめし者、かはゆき事に候。」と、そら泣してぞ申しける。中宮はつと御胸塞がり、やゝ御いらへもましまさず。横笛は伏籠の下、聞くより心きえ〴〵と、はつともあつとも聲立てられず、袂を口に押入れて、落つる涙は村時雨の、軒の雫にあらそへり。中宮御涙にくれながら、「御兄ながら、小松殿は狂氣ばしし給ふか。主有る人に通ふこそ、佛もいましめおき給ふ。戀は心の誠のもと、歌の道にも戀の歌を手本として、在原の業平は二條の后に忍びあひ、齋宮の女御に通ひ給ひしも、歌の情にゆるされし。その例あれば公家の仕置ともいひがたし。和泉式部、小式部、紫式部、赤染衞門、思ひ〳〵に忍び男の有りしかども、その時の武將頼光頼信など、

前大僧正行尊、諸共にあはれと思へ山櫻。この下の句は自らが、すぐに合はせて取るぞ。」とて、「花より外に知る人も、なしとないひそ諸共に、あはれを知るはみづからよ。やよ横笛。」とかほばせを、つく〴〵と御覽ありければ、憂さも忘るゝ忝さ、いとゞ涙の種ならし。「サア〳〵早う急いでとれ。柹の本の人丸、あしびきの山鳥の尾のしだりをの。」「ハテ取つてつらいはいつまでか、長々し夜を獨寢せうか。」「サア謙德公。哀れともいふべき人はおもほえで。下の句取つたは小萩か。まだ十三や十四で、身のいたづらになるまいぞ。中納言家持、かさゝぎの渡せる橋におく霜の。」下の句とつたる小侍從が、「南無三寶、毎夜々々のお夜詰がねぶたいに、白きを見れば情ない、また夜がふけう。」とうち笑ふ。「サア崇德院、せをはやみ岩にせかるゝ瀧川の、瀧といふ字も面白し。いは岩石にせかれても、われても末に逢ふ下の句、とつたる者は諸願成就。あれが見えぬかあれ〳〵。」と、横笛に御目を替し、御顏にて教へ給へば、横笛飛び立つ嬉しさの、女中おしのけおよびごし、「サア取つた。せかるゝ瀧と横笛と、われても末に逢ふよ。」とて、抱いて悦ぶ歌がるた、おぼしめしやる中宮も、共に奥にぞ入り給ふ。かかる所に表使の老女あわたゞしく、「加賀の郡司師高、急にお直に申し上ぐる事ありとて、只今是れへ。」と被露する。「ハア局を以ていはざるは、何事か氣遣はし。先づ横笛はしばしこれに隱れよ。」と、伏籠に深く忍ばせ、「聲ばし立てな音すな。」と、緋の御衣を打ちかけ、御そばに引きよせ

はせてとれ。その歌の心にて、めん／＼その身の願ひ事、かなふかかなはぬか、住吉玉津島に立願かけ、御くじの心のつゝい松ぞや。サア上の句讀むぞ。蟬丸、これやこの行くも歸るも別れては。これは横笛に取らせたい、人にとられな、隨分に目をきかせよ。」誠にこの下の句は、しるもしらぬもあふ坂の關。別れし人に逢ふ歌、この横笛が願ひぞと、心に樂しみ目をくばる間に、お腰元の小櫻が、小賢しげに小さし出て、「これ／＼こゝに。」と、合はせてとるこそ本意なけれ。「サア藤原の實方の朝臣、斯くとだにえやはいぶきのさしも草。」「コレさしもしらじなもゆる思ひは。」と、合はせてとつたる十六夜が、心の願ひは明日か明後日お暇申し、灸するゐんと存ぜしに、伊吹艾の諸願成就。」と悦べば、「サア伊勢大輔、いにしへの奈良の都の八重ざくら。これはめでたい下の句、次第に花の色をまし、けふ九重に匂ふとは、末に願ひのかなふ歌。それ横笛。」「あい。」といふ間にまんがちの、おし合ひせり合ひ、右近が取つて、「嬉しやこの暮の衣配りのおしきせを、いくへも／＼七重八重、けふ九重とのねがひぞや。」「コレ大中臣能宣の朝臣、御垣守衞士のたく火の夜はもえて。」せめて一首と横笛が、たまたまとつたる下の句も、今の憂き身に吟ずれば、「ひるは消えつゝ物をこそ、思へ。」ば我に思へかや。「サア右大將道綱の母、なげきつゝひとりぬる夜のあくるまは。」つゞけてこれも横笛が、合はせて取りし下の句の、いかにひさしきものとかは、その身ならずばしる人も、よもあるまじと涙ぐむ。「これこそ

盛次もづつと立ち、「これ左衛門、御邊はあつとお請を申すが、見事我が弟の首實檢の御使を致し、横笛が首を討つべきか。」「オ、してまた御分は、檢使を見事つとむべきか。」「問ふまでもなし、我は檢使をして見せう。若しお使の仕様、首の討ち様わるければ、御邊をこの盛次がのがさぬが合點か。」「オ、若し又御分、檢使の仕様わるければ、此の勝頼がのがさぬが合點か。」「オ、言葉をつがうた忘るゝな、サア來い。」「いけ。」と肱をはり、兩方にらんで連れだちしは、老木若木の巖の松、風にもみあふ 三重

中宮歌がるた

夕されや〳〵、時雨まじりの初霰、御庭の梢落葉して、菊もうつろふ御徒然、中宮の御遊び、「雙六は采の目の、心に合はぬもねたましく、偏突はむつかしし、貝被ひは手もつめたし。いざ續松の歌がるた、いかゞあらん。」と宣へば、「げに賑やかなるお慰み、早はじめん。」と、若き女中の座をくみて、手箱の蓋をとり〳〵に、文字に目じるしのゝめけば、横笛はあけくれに、夫の戀しさ身の辛さ、思ひに沈み思ひくれ、ならぶる歌の下の句の、我が衣手と諸共に、ぬれつゝ袖の宮仕へ、もるゝ涙ぞ不便なる。中宮あはれと思召せども、それとはさして宣はず、「なう人々、歌がるたは常のこと、たゞ取つては珍らしからず。ちと心入れある故に、みづからは取らずして、上の句を出すべし。何れも隨分合

ひし者なれば、せめて切腹させんと思へども、中宮へはゞかりあり。主従の情には、重盛が手にかけて得さすべし。兄傍輩にも暇乞し、奥の小庭へはや〳〵廻れ。」と宣ひて、御座を立つて入り給へば、義次座敷を見上げ、「なう盛次殿、傍輩達も聞き給へ。身の過りは宿世の因果、今生において果報者。主君といひ日本の賢人、小松殿の御手にかゝり、最期に情の御詞、名僧貴僧の引導も、何この上のあるべきと、未来の成佛うたがひなく、現世に心は殘らねども、とてもならば長らへて、もしもの事のあらん時、御命に代り御馬の前にて討死せば、弓矢とつての面目ならん。心にかゝるはこれ一つ。さらば〳〵。」となみだぐみ、奥の御庭に入りければ、その座にありあふ諸侍、日頃疎きも親しきも、思ひ切つたる盛次も、忍び涙はせきあへず。やゝあつて盛次、勝頼を尻目にかけ、「ア・嬉しや。もし遁世などさせたらば、君の御なさけにもあづからず、引出されて雜兵の手にかゝり、坊主首討たれなば、何ぼう口惜しかるべきに、弓取の本望、あら嬉しや。」といふ所に、主馬の判官盛久、首桶もつて奥より立ち出で、「これ〳〵齋藤左衛門。只今左京之進を君御手にかけられ、首をこの桶に入れ、上に封をつけられたり。御邊中宮の御所へ持參し、封を切つてあらため、中宮の御覽に入れ、さて横笛が首を討ち、直にこの桶に入れ、封をつけて歸らるべし。越中の次郎兵衛は、檢使を仰せ付けらるゝとの御諚。兩人いそぎ參らるべし。」とありければ、「左衛門畏まつて候。」と、首桶持つて立ち上れば、

を、防がんための用心なり。油斷とやいはん、不心掛とやいはん、やみ〳〵と奪ひ取られし、その身まで斬り殺されし不覺者。しやつが死骸を磔にし、眷族を罪にふせ、主人の汝にも腹切らする、これを武家の法といふ。武家にもあらず公家にもあらず、律令に背きし掟、重盛は心得ず。されども中宮の仰せは勅諚同然、左京之進は今日中に首を刎ね申すべし。いかに盛次、弟義次を召し出せ。扨横笛は御所にて害せられんとや。太刀取は誰ぞ、覺束なし、又奪ひとられ御所の騷動如何なり。檢使太刀取この方より參らすべしと、罷り歸つて申し上げよ。重盛が御返事はこれまでなり。扨また誰かは知らず、御所の女中に文玉章を通はし、その戀かなはぬ恨みには、惡み苦しむる侍ありと聞く。これこそ實の大罪人。汝が仕置を聞き入れずば、重盛にしらせよ。きつと罪に行ひくれんずやつ。」と宣ふ聲、耳の根にこたへあら肝とられ、たゞ「はつ〳〵。」とばかりうろたへて、袴につまづき疊にすべり、はふ〳〵御所へぞ歸りける。無慚やな義次、兄が内意の召のお使、御成敗とは夢にも知らず、長髮ながら裝束改め參上す。盛次中門に出で向ひ、「大小これにぬきおき、御白洲へ廻れ。」といふ。扨は我が罪極まりしと、「あつ。」と應へてにつこと笑ひ大小ぬき、面體すゞしく覺悟の體、あつぱれ武士の手本やと、見る人涙を流しける。小松殿御覽じ、「珍らしし左京。中宮の御所より御咎めにて、首を刎ねよとの御諚。その身に越度ある上は、是非なしと存ずべし。不便や幼少より、側近く召しつか

の郡司師高罷り出で、「扨も御所の女中の内、横笛は齋藤瀧口、刈藻は左京之進義次、思ひ〳〵の密通の男を持ち、御法度亂れ候上、刈藻懐妊いたし、御奉公もなり難く、中宮樣以ての外御機嫌損じ、急度仕置に行ふべき由仰せそむきがたく、舟岡山にて首を刎ねさせ候所に、何者とも知れず太刀取某が家來、岩村源五を切り殺し、刈藻をぬすみ落ち失せ候。疑ひもなく左京がわざ、掟をかろしめ上をないがしろにする大罪、中宮樣御にくみ深く、早速左京之進が頭をはね、御怒りをやすめらるべし。又横笛をもおつつけ御所にて首をうち、かさねて御左右なされんとの御使なり。」とぞのべにける。小松殿しばらく默然としておはせしが、「珍らしき中宮の御仕置、古今その例を聞かず。昔の和泉式部は宮づかへの身にて保昌にかよひ、又橘の道貞に馴れて、小式部の内侍を生む。赤染の衞門は中の關白に契り、紫式部は西の宮の左大臣に密通せしも、皆奉公の時なれども、その時の女院上東門院、いさゝかとがめ給はず、かへつて末代に名を殘せり。穩かならぬ御政道、汝も姉の戸無瀬の局と心を合はせ、諫言は申し上げずや。」と宣へば、「さん候姉も我等も再三諫め奉れども、中宮樣はもと君の御妹、武家より出でさせ給ふ故、諸事武家の御作法なり。」と誠しやかにぞ申しける。「いやいや武家の法ともいひがたし。太刀取源五とやらんが、刈藻を奪ひとられしが武家の法か。總じて刑罰人に槍長刀を拔身にして、嚴しく警固すること、科人の警固ばかりと思ふか。同類ゆかりの狼藉

へなり、倅瀧口、上の御仕置をも待たず、遁世させしを、貶すると覺えたり。切腹にても打首にても御意次第、今にても召し還す。なんと遁世すれば、御仕置はかなはぬか。御分が弟左京之進、不行跡の浮名を厭ひ、病氣分にして追ひこめ置きしとな。オ、いか樣にも左京、そのまゝ置くならば、御家中の若侍見るを見まねに、友をそこなふは必定なれば、追ひこめ置きしは珍重。さりながら、我が君慈悲深く、何ごとなく召使はれれば、面の皮厚く武士をたてさせ、諸侍にまじらはせんと思ふよな。義を知るものの分別、御分などが合點のいかぬこと。イヤ猿といふ獸はな、おのれが面の赤い故に、我が顏に違ふをもつて、金色の佛の顏を笑ふといやい。コリヤあの蟹といふ蟲はな、おのれが横に行く故に、直に步む人間を笑ふといやい。オ、澀柹の青柹が、甘い熟柹の、烏に食はるゝを見て笑ふといやい。ヤイ磔が獄門の首を見て淺ましい足の下に居るというて笑ふといやい。」「ヤア扨は御邊は、獄門の鹽梅よつく覺えしな。」「ムウ御分は未だ鹽梅知らぬか。ちと知らせうか。」「ヤアみごと我に知らするか。」「おんでもない事、望みならば今なりとも。」と、互に刀に手をかくれば、一座の諸武士ひいき〳〵、兩方へたち分つて、すはや喧嘩のさや持だて、固唾をのんで密語く所に、「中宮の御所よりの御使者。」と、中門の案内お式臺の小取次、御廊下の申次、御前の取次、段々に披露して、君御對面有るべしと、上段に出で給へば、勝賴も盛次も、威儀を改め伺候する。中宮の御使者、加賀

は左程の年でもなく、もの忘れしらるゝか。御分は五位の兵衛の尉、我は四位の左衛門の尉、上に坐するは何事か有る。扠々いかい物忘れ、ちと藥のんで養生めされ。」と、空うそぶいて居たりける。「イヤサさがれといふにさがらずば、小腕つかんで引摺りおろす。荒立てたらば烏帽子すべつて、坊主頭振りまはり、耻かくが笑止なり。但し手をかけうか。」と、苦々しくつめよれば、「オ、老人とてあなどるか。小腕取らば取つて見よ。先づ五位の身柄にて、四品を下に付けんとは、いづれの家の有職か、サア言へ〳〵。」とたゝみかくれば、盛次ちつともさわがず「彌老耄に極まつた。なんぞ四位の樫のとやかましい。勿論御分は四品なれども、隱居して法體の身、御役御番ともに御免ならずや。今日は御邊が倅瀧口が當番。瀧口は身の放埓、不義の惡名をつゝみかね遁世したるとな。いかさまにもその儘あつては御家中の若侍、見るを見まねに友をそこなふは必定なるに、遁世は一段。さりながら、御仕置は上の御心、切腹仰せ付けらるゝか、御成敗なさるゝか、下としてかられず。遁世すればすむと思ひ、法體の親が還俗して、御番勤むるとはとつく聞きたれども、參會は今日はじめ。それ以來御番がへもなく、今日は瀧口と相番の當日。然れば御邊は瀧口が代り、代番といふもの。かくいふ盛次は五位、瀧口は正六位、終に一度も瀧口が下座に著かぬこの盛次、ひがごとあらば言へ聞かん。」と、氣色をふるひ理窟をたゞし、席を打つてぞ怒りける。勝頼あざ笑ひ、「ム、和殿が言分は、座爭ひは脇

され、瀧口があつたら身を捨てさせし。瀧口が身代の敵は義次なり。」とさゝやけば、義次入魂の人々は、「瀧口といふ好色者に伴ひ、浮名を流す左京之進、善惡は友による。瀧口にかゝつて、義次が兄の盛次まで面目失ひ、その無念つもりなば、瀧口が父左衞門とは、どこぞで言分喧嘩のはし。」と、御番所御廣間若侍のこれ沙汰、互に耳に漏れ易く、齋藤左衞門勝頼、越中の次郎兵衞盛次、傍輩づきもぶし〳〵と、心よからずなりにけり。折節盛次御對面所の當番にて出仕有り。義次ひいきの若侍、我も〳〵と出でむかひ、「めづらしや盛次殿、御舍弟左京殿の御身の上承り、氣の毒千萬。我人若き者は惡しき友の附合にて、心のほかの若氣、惡道へ引き入れらるゝ。近頃御笑止々々。」とありければ、「いや〳〵左樣の事ならず。弟左京めは病氣さん〴〵。」と許り挨拶して坐しける所に、齋藤左衞門勝頼相番の役なれば、ぼんのくぼまで烏帽子引込み、顏をかくして出仕ある。瀧口ひいきの若侍、「これは〳〵勝頼殿、御子息瀧口は遁世とや、扨々殘念。善惡は友による、損者三友益者三友。兎角惡い友と辻風には、出合はぬが手柄。さぞ御心底に友達への恨み、鬱忿推量いたし候。」と、傍から喧嘩のすを買ふも、これ堪忍の瀬越しなり。勝頼は盛次に目禮して、上座にむずと坐したりける。盛次聲をかけ、「これ西頼坊主、老眼故見違へしか。越中の次郎兵衞盛次なり。座次が違うた。とう〳〵下座へさがられよ。」といひければ、勝頼うちわらひ、「オ、老眼なれども傍輩の顏は見ちがへず。御邊

ける。なほも殘る奴原を、追立てゝ追散らし、走り歸つて、「これ刈藻殿見知つてか。」「瀧口殿か。」「いかにも〳〵。御身のうへも我が身のうへも、先づこの所を立ち退いて、心靜かに承らん。扨源五め、法師のいはれぬ殺生、逃げばにがさんと思ひしに、壓にうたれて死んだよな。いで戒名に戀者業譽、號付け引導して弔はん。」と、死骸に向つて合掌し、「ア、悲しきかなや、おもしに壓されてひしやげし亡者。さつさ鯖の鮓やおされてひらく。それは人の口に、くう〳〵じやく〳〵。この亡者の鮓は、煮ても燒いてもくはれんじや、胴譽ひつしやり禪定門。南無阿彌陀佛。」と打笑ひ、肩に刈藻を引つ掛け、首には鉦鼓ひつかけ、えてにひつかけ身にひつかけ、曉かけて立つ空の、雲の林の名を賴む、紫野ゆき、しめ野ゆき、行く道筋は多けれど、戀よりいりし法の道、迷ひしまひて後の世に、迷ふべき樣なかりけり。

第三

風無うして荷葉動くは、水底に魚の行くこと決定せり。この理を以て萬事を推さば、人心何をか苦しまん。されば小松殿、人の非を顯はし給はず。今度義次瀧口が噂、一向に御沙汰もなく、空知らぬふりにてましませども、ひいき〳〵の人心、瀧口懇意の輩は、「左京之進といふ浮氣者にそゝのか

燒刃に文を唱へかけ、よく〳〵加持し申せば、その身に唱へたまふも同然。」「ヤアそれは珍重。然らばむづかしながら御出家の慈悲、いざ加持を賴み奉る。」と、拔いたる刀うか〳〵と、手に渡すこそ愚かなれ。瀧口嬉しさ心も勇み、これ太刀取樣、畢竟祕文もなんにも入らず。この女性をさへ殺さねば、報いもなければ祟りもなし。利劍卽是彌陀號、彌陀の利劍にて煩惱惡業を切りはらひ、善心にかへれとの祕文、愚僧が加持はこの通り、一聲稱念罪皆除。アヽ南無阿彌陀佛。」と申しける。源五大きに怒つて、「扨は刀を奪はん爲の僞りな。芋掘坊主め、その刀ぬつくりとおのれに持たせて置くべきか。いはれぬ人を助けんとて、うぬが命失ふたはけ、これ見よ。」と飛びかゝれば、入道ひらりとひつぱづし、「ヤなされな〳〵。坊主の手に入れた物、俗の身で取らんとは、それこそほんの寺から里。この上臈もこつちのもの。」と、かるもをひつ立て奪ひ取り、「利劍卽是とはこの事。」と、一文字に切りかゝれば、源五を始め雜兵ども、「やれ推參なる法師め。」と、一度にどつとかけ寄るを、「心得たり。」と大太刀振つて、八方をなぐり立つればかなはじと、むら〳〵くづれ逃げ散つたり。中にも源五は太刀を奪ひかへさんと、大石塔の陰に隱れて待ちかくる。下人原とつてかへし、「法師やらぬ。」と、弓手馬手より討つてかゝるを、追ひまはし追ひまはされて大勢が、石塔にまくりつけられ、我知らずにおすほどに、さしもの大石、源五が上にどうど伏し、「うん。」とばかりを最期にて、微塵になつてぞ失せに

お侍暫く。」と、刈藻を圍うて立ちふさがる。源五驚き、「やおすて坊主、いはれぬ命もらひだてか。ならぬ〳〵。」といひければ、「いや〳〵左樣では候はず。これは洛外の三昧を廻る夜念佛の修行者。この女中にとがあればこそ御成敗、汝が罪汝を責む、それは是非なし。さりながら懷妊と仰せなれば、罪もなき胎内の子を殺さるゝ、御太刀取の報いいかばかりと思召す。いく月か存ぜねども、月々の守神守佛ある故、その月にあたる神佛の御怒り、太刀取にあたつて、或は惡病、或は劍難にかゝり、忽ち命をはること、むかばかりを待たずといふこと、摩耶夫人經に說かれたり。されど武士のならひ、懷妊とても討たでかなはぬ事あり。その時は身に報はぬ大事の祕文を傳授して、三遍唱へて討つ事なり。愚僧この文を知りながら、科人は是非もなし、科もなき太刀取さまを、見殺しにするは目の前の殺生、お笑止さよ。」とぞ申しける。源五驚き、「扨々夢にも存ぜぬこと。さすが御出家ようこそ〳〵。卒爾ながらその祕文、只今御傳授なるまいか。賴み入る。」といひければ、「我も三七日の荒行にて、受け授かりし祕文なれども、參りかゝつた不祥なり。必ず他言遊ばすな。いで〳〵傳授いたさん。」と、耳に口よせ小聲になり、「利劍卽是彌陀號、一聲稱念罪皆除、この文を三遍唱へ討ち給へ。御身にけし程も祟りあらば、この法師が生んでかやし申すべし。」「いや三遍は扨置き、一遍も覺えられず、こむづかしいちんぷんかん。どうぞ短い覺えやすい文はないか。」といへば、「然らばその刀此方へたべ。

じその人も、今日は又、明日の人にさきだつ身とぞなりにける。ハア思へば嬉しくも、かかる姿となりしよ。」と、おもふも佛の御誓ひ、「攝取不捨。」と鉦うち鳴らし、「南無阿彌陀、南無阿彌陀、南無阿彌陀佛、願以此功德平等施、一切同發菩提心。」と、廻向をなすこそ殊勝なれ。かかる所に岩村源五、乘物さきにおつ立てさせ、此處よ彼處と墓原見廻し、一木の松の下陰、「これ屈竟の所、こゝへ／＼。」と下させける。瀧口それとも思ひよらず、「ヤアこれも死人ぢや。時日もきらはずわれさきと急ぐ冥土の旅、我等が先ばらひの宿わり衆。おつつけ誰も追ひつく身。」と、念佛申して弔ひける。武士ども乘物より、手を取つて引き出すを見れば、やあ、死人にはあらず、やんごとなき上臈なり。いかさま仔細有るらんと、卵塔の陰に身を潛め見る所に、岩村源五大音上げ、「如何に刈藻、サア只今が最期、首が落ちては悔んでも埒明かず。主人師高公はそのまゝ討てとの御意なれども、いかにしても殘念。その身ばかりか胎内の子に日のめも見せず、ともに殺すは不便とは思はずか。命有つてから義次には逢ふことならず、未來は猶見えぬ事。師高公の北の御方となれば、我々までも主人とあふぎ奉る。一生大事の返事承らん。」といひければ、「推參なり下郎め。おのれが主人にさへ返答するが口惜しきに、なんの心が變らうぞ。よしない最期に腹立てさせ、未來の妨げせんよりも、はや首討て。」とありければ、「エ、しぶとい女め、こりや今が最期ぞ。」と、太刀ぬき放し背後に廻る。瀧口入道躍り出で、「これ

たい問ひたい志。なんぢや心にしたがはば、師高が北の方とはどれどの顔で。よく／＼佛神三寶にも、捨て果てられし女があらば知らぬ事、この刈藻などへは慮外ないひ分。君が一日の情に、妾が百年の命をうしなひ、心任せにきりさいなめ、さりながら、これそのさもしい心から、この仇を義次殿へあたへて、敕諚宣旨と僞り、いかなる罪にか沈めんと、悲しいはこれ一つ。エ、あはれ知らず邪見者、世を生き通しと思ふかや。一たびは死ぬる身の、後世も報いもないと思ふか情なや。」と、恨みつ口說いつ伏しまろび、聲を上げてぞ嘆かるゝ。師高したゝか恥ぢしめられ、大きに怒つて「彌罪科極まつたり。いかに岩村源五、かねていひしは合點か。舟岡山へひつたてよ。」「承る。」といふより早く、小腕取り、髻を摑んでねぢふせ／＼、乘物に打込んだり。下女ども歎き取り付くを、取つてつきのけ踏みちらし、世の憂き淵瀨こがれ行く、舟岡山へと三重急ぎける。げに紅は染むるにしたがつて色をまし、道は學ぶによつて智をみがき、心も淸き瀧口入道、法名を西俊と改め、嵯峨の奧往生院に引籠り、暫く世塵をのがれしが、こゝも都近ければ、憂きふし聞くも絆の種、高野山へと思ひ立ち、故郷のなごり、父の後生母の菩提、法界順逆血緣と、洛外の三昧を、夜な／＼めぐる道心の、廻向につれて知る知らぬ、共に導く蓮臺野、舟岡山に著きけるが、長き數そふ高卒堵婆、石塔五輪松のしるし、誰が名を殘す形見ぞや。鉢叩「こゝに消ゆれば向うには、今燃えそむる無常の煙、昨日後れし

文にも口說く通り、なびくといふたゞ一言、聞くと等しく直に屋敷へ連れ歸り、師高が北の御方、嫁入の乘物。又いやといふが最後、罪科に行ふ牢輿、あれ乘物は一ちやう。サア牢輿になりとも、嫁入の輿になりとも、あけすけの返事したがよい。むごういふのもいとしさ故。」と、目元に愛をもたせしは、見るもいぶせく面憎し。刈藻は態とにつこと笑ひ、「科深きみづからを、御憎しみもなく、北の方になされんとは有り難や忝や。あつと申して夫婦になりたう候へども、左京之進義次、よも堪忍致されまじ。その時はいかゞ遊ばすぞ。」「ア、氣遣ひない事。左京めは敕諚といひなし、討つて捨てるに何の事があるものぞ。」「できた〱。してこの胎内の子はおろさうと思うてか、悦ばせうと思召すか。」「いや〱おろすは母にも氣遣ひ有り。請取りにくいみやげなれど、そもじがいとしい。やすやすと平產させ、某が總領の若君とも立つる。」「さればそこの事。この子は左京之進義次の子、智慧づいて親の敵と師高殿、そなたを生けて置くまいが、この御思案が聞きたい。」といへば、「その時はその餓鬼め、ひねり殺して捨つるに、猶氣遣ひのない事。」と、いはせもはてず膝立てなほし、「扨は夫を殺され子を殺されし師高殿と、添うて居さうなこの刈藻と見つけたか。生盲の死畜生。男も女も戀といふもの、命をかばひ身をかばうてなるものか。みづからがお暇を願ひしも、身を遁るゝ爲でもなく、名を包む爲でもなし。義次殿兄御の不興と聞きしゆゑ、火の中へも尋ね入り、共に憂き目を見

たはふれ、恨みも情も水鏡、去つてとゞまるかげもなし。この戀我が身の善知識。さぞ横笛が恨みの歎き、煩惱菩提の廻向によつて、皆極樂の緣たるべし。流轉三界中恩愛不能斷、棄恩入無爲眞實報恩者。」と、自身の受戒さしぞへ拔いて、髻ふつつと切つて捨て、父が脫ぎ置く褊衫の、衣を取つておし戴き、「思へば父は我が師なり。師資相承のこの三衣、世に在る父世になき母、妻も我が身も隔てなし、期する所は九品の臺。南無阿彌陀佛。」と三界の、家を出づるぞ三重あはれなる。たまさかに、あふ坂山のさねかづら、人は知らじと通ひしも、苦しや女のならひとて、はや懷妊の重き身と、うき名御所の外まで隱れなく、御奉公も憚りと、たつて御暇を願ひ給へども、郡司師高こだはつて、埒明けず、ひたや籠りの局ずみ、傍輩達の見舞まで、堅く禁制との掟、憂きをとぶらふ人もなく、召使ふ下婢二三人、泣いてふするの刈藻の牀、涙にくるゝばかりなり。加賀の郡司師高、雜人に乘物かかせ、局の中へつか／＼と踏ん込み、「これ刈藻奉公の身をもつて、出入きびしき御門を忍び、築地を越え垣を越え、放埒のしかた、剩へほてつ腹は、壁に茶壺とやら、今になつてお暇下されとや、さうはならぬ。左京之進義次は、兄越中の次郎兵衞が追ひ込んで置きし段、定めてよつく聞きつらん。この道ばかりは相手づく、その方とても只置かれず。殊に奉公人なれば、きつと罪に行ふ大法あり。されどもこの師高が執心かけしおぬしが事、今とても憎うない。サア今日から魂を入れかへ、年月段々狀

烏帽子狩衣。」と、褊衫脱ぎ捨て、「これ懲らしめの嚇しなどと思ふな。七年以來の常精進、たゞ今落つるあさましや。」と、兩眼に涙を浮べ、「エ、是非もなや、主君の御蔭にて隱居の身を安樂に、一筋に菩提に入り、先だちし母め、一蓮托生と願ひしに、おのれは父母の地獄の手引するぞや。」と、せき上げせき上げ涙の下、「精進落つるこれ見よ。」と、小四方引寄せ、昆布にそうたる熨斗ひつ摑み、口に入るれば、瀧口あわてすがりつき、「勿體なや情なや。向後色の道ふつつと存じきり、恥をしのぎ御奉公仕らん。まつぴら御免。」と泣きければ、おしのけつつと立ち、「オ、親はともかくも、世間は何とい ひ譯せん。越中の次郎兵衛が手本を出して渡されたり。」と、烏帽子狩衣肩に打ちかけ、太刀刀ひつさげ、「ヤア下人ども供の仕度せよ。齋藤左衛門尉勝頼が、二たび小松殿へ出仕なり。」といひ捨てて、奥をさしてぞ入り給ふ。瀧口も前後に迷ひ、涙にかきくれ居たりしが、膝を打つて、「ア、さうぢやよしなやな、父の恨みは至極の道理。成りんじことをば說かず、遂げんじ事をば諫めず、既に往んじことを咎めず。身のあやまりは、悔んでさらに甲斐もなし。君賢人にてましませば、勤めによつて思召しもなほさるべし、世間の恥辱も雪ぐべし。兎にも角にも悲しきは、父の菩提の妨げして、母上まで永き世を惡道に沈めん事、八逆五逆十惡の、無量の罪にもまさるべし。遠く昔をとふまでなし、まぢかき文覺西行法師、戀路を種の發心にて、六親九族を引導せり。よしや幻の境界、譽れも謗りも夢の

はやし、諸人の思ひいれ、主君の御威光、親の光をもつて立身近日に候。」と、いひも果さず、西頼はつたと睨んで、「ヤアだまれ〳〵、聞きたうない。某年よつて御扶持は下さるゝ、なんにも浮世に役はなく、寐ても忘れぬは、未來のことより我が子の上、風の吹くにも心をつけ、よしあしの噂を聞くものを、おのれが行跡知らぬと思ふか愚かやな。横笛といふ女中にほだされ、御所にて山雀を取りにがし馬鹿をつくし、加賀の郡司師高に惡口せられ、すでに罪科に極まりしを、中宮樣御慈悲にて、隱密に治まりしこと、その日に我は聞きたるぞ。北山の御遊にも、横笛をそゝのかし浮れまはり、師高に見つけられ、剩へおのれが非を持ちながら、師高を追ひちらし、狼藉は何事ぞ。隱居の我さへ知つたれば、諸人が知らで有るべきか。諸人の知るもの、小松殿の御耳に立たで有るべきか。この君は當代の賢人、色には出し給はねども、底意に見限りまします事、たとへば草木の根をやいて、土にうゑしが如く、自然に枝葉枯れ凋み、いつ花の咲くこともなく、身のなる果ては家の滅亡、ヱ、淺ましや口惜しや。おのれもよつく知りつらん、越中の次郎兵衞が弟左京之進義次、刈藻とやらんに密通し、度重なつてこの刈藻懷妊し、惡名かくれなく、義次は兄次郎兵衞病氣分にして、追ひこめ置きしと傳へ聞く。その如くおのれを追ひ込んでも勘當しても、一子なれば家の斷絕。平家重代の我が家を、おのれ故にたやさうか。今日より某還俗して御奉公相つとめ、もとの左衞尉勝頼、その爲の

ひ捨てて逃げてゆく。兩人どつと打笑ひ、「逃足はやきお侍。まだ追驅けるまねをして、おどしてあそべよい慰み。」と、木の根をたゝき聲をかけ、手頃の石をおつとり〳〵、はら〳〵はらり〳〵とうちかけ〳〵、谷の川水さつ〳〵、さら〳〵さつと、蹈みたて蹴たて蹈みちらし、紅葉蹈み分け鳴く鹿の、戀も互の身の上と、連れて假屋に歸りけり。

第二

佛種は緣より生ずとかや。瀧口がちゝ齋藤左衛門尉勝頼は、平家譜第の御奉公、丁七十の頭の霜、そりてかへらぬ梓弓、刀もやめて樂坊主、隱居領とて下さるゝ、十人扶持も寺まゐりに、月日を送る常精進、名を西頼と申せしが、藍摺の狩衣烏帽子取り出し、一子瀧口を招き、「これは一年小松殿、大臣の大饗ありし時、著して御配膳仕れとて、拜領したる召しおろし。汝に是れを讓らんが、著して彌我が家を嗣ぐべきか。この頃はお事が勤め方の善惡を聞かず、御前體の御覺え、如何あるぞ。」と問ひ給へば、瀧口謹んで、「さん候。不肖の身に候へども、親の御恩の有り難く、御前體の思召し諸傍輩にすぐれ候故、心まめしく相勤め、殊に中宮の御所樣より、御目をかけられ、御所のお使は皆某が承り、さる北山の御遊にも、こゝへも瀧口、かしこへも瀧口と召し出され、女中方のもて

かづきは刈藻の前。某數年心をかけ、我が心にしたがはば、後々中宮に申し上げ、我が北の方にそなへんと、立居につけてくどけども、おのれが邪魔とはとつくより知つたるぞ。御法度亂す不屆者、我がためには女敵同然、女めも同罪。」と、飛びかゝつて衣ひつたくれば、齋藤瀧口太刀ひねくつてねめつくる。「はつ。」と許りにあきれしが、「ムウ汝奴が是れに有るからは、横笛も居る筈、氣取つて早くも隠せしな。よし〳〵後日の詮議。みな來い〳〵。」と逃げ歸る。義次瀧口弓手馬手に立ち塞がり、「後日は後日今は今。なんで侍のかづきし衣を、ひつはぎ歸るとてかへさうか。中宮の御所に威をふるひ、女中をおどしたその格とは、はらりつと違ふべし。この埒あけずに歸つて見よ。諸すね切つて切りすゑん。」と、兩方よりつめかくれば、「これ〳〵、不義と申すは横笛と刈藻が事。その役なれば隅々まで、詮議せねばならぬ事。お氣に障らば御免あれ。これ手を合はする。」とうそ顫ふ。瀧口から〳〵と笑ひ、「その役人がたつた今、刈藻に年月心をかけ、立居につけて口說くといふは不義ならずや。御所にて汝がぬかした通り、蹈み付けてくゝしあげ、しばり首打つ不義の科。それ義次繩かけよ、太刀とりはこの瀧口。下人原からしまうてとれ、遁すなやつ。」と呼ばはつたる、聲におどされ下人ども、棒提灯もなげちらし、谷底にころび落ち、命から〳〵逃げ失せけり。ふるひ〳〵師高大音あげ「よいよいうぬらには負けたりとも、この代りには横笛刈藻二人の女に、なんとあたる待つて見よ。」と、い

「ヤア瀧口か。」「ウム左京か。あぢぢやく〳〵の。」「そつちもあぢぢやの。此方もかくの仕合。」「互に隱密沙汰なし。」と、行き違うて別れしが、二人の女中振返り、どうやら名がちがうたが、橫笛殿ぢやないかいの。」「かるも殿か。ワアウ男が違うたわ。」「ヤアアウ男がちがへば、女房もちがふ。」とおろし置き、衣引きのけ頰冠取つて、四人一度に橫手をうち、「せいての上の皆粗相、餓鬼の目に水見えずとはこの事。いかに懇仲とても、まだしも背中に負うて珍重。前に抱いたらよいものか、兩方無疵に返辨。」と、取りかはせば二人の君、「サア今こそ前にだかれう。」と、しとゝ凭れて身をよせて、松が根枕こけむしろ、ながき契りとなりにけり。かかる所に上の峯より、人大勢月夜に提灯棒つきちらし、山廻かと見る所に、蝶の丸の紋付は、加賀の郡司師高。「サアきやつはむづかし一期の浮沈。女中達は谷越に、みごと假屋へ歸られうか。」「オ、〳〵これも戀ゆゑ、劍の刃をも渡らんもの、ずゐぶん首尾よく遊ばせ。」と、かひ〴〵しくも手を引きあひ、谷をつたうて歸らるゝ。瀧口きやつに手をとらせんと、橫笛の衣ひつかつぎ、女の眞似して待つ所に、郡司山をかり廻し、「刈藻橫笛見えざるは、そゝのかす男覺えあり。」と、喚き叫んで、「あれ〳〵人影、それのがすな。」とおつとり卷き、「ヤア不義者は左京之進、搦め取れ。」とひしめきける。義次わざと迷惑さうに、「近頃難儀の御咎め、夜の紅葉を見んため、只今是れへ參りしに、不義とはさら〳〵覺えなし。」と、いはせもはてず、「いやぬかすな。あの衣

皆一同に放さるれば、翼をかはし羽をのして、百悅びの聲をあげ、あなたこなたへ翔り行く。慈悲心深き小松殿、一しほ感じ入りたまひ、「これぞ實の放生會。紅葉は明日御覽あれ。」と、夕暮はやき奧山の、「鹿の妻こふ夜の聲、聞しめさるゝ爲なれば、よひより御格子なるべし。」と、假屋に入らせ三重給ひけり。冱え行く月も奧山の、繁みに暗く更くる夜に、越中の次郎兵衞が弟、左京之進義次は、刈藻の前とこの年月、心許りを通はして、逢ふ夜は今宵と約束の、時こそ來れと頰冠、お庭の籬に佇んだり。横笛も瀧口に、今宵逢はんといひかはし、友傍輩の寐入ばな、そつと起き出で衣被ぎ、籬の陰の頰冠、招けば男も招き寄り、互に頷く頤に、物をいはせて、それかかれかと名も問はず、背中向けては顏見えず、氣のせくまゝにひつたりと、負はるゝ腰を後手に、ぢつと引きしめ負ひしめて、重き戀路を輕々と、負うて行くこそあやなけれ。刈藻はもとより左京之進に、契約をたがへじと、はや月影も夜半過ぎ、相圖の時と衣引きかづき、左京や來ると待ち居たり。瀧口は猶横笛と、ぢきに契りし北山の、あふせは今宵と頰冠、御庭に忍び入る。刈藻はそれぞと招き寄せ、兩方待つも待たるゝも、問ふに及ばず引寄せて、背中にとんと負ふ戀の、我より外にあるぞとは、思ひがけなき崖道や、そこつの山路三重踏み分けて、谷の小川のしよろ〳〵水、瀧口は流れにつき、左京之進は川上へと、のぼる道にてはたと逢ふ。兩方よけつよけられつ、忍ぶとすれど朝夕に、つきそふ傍輩おもかげ見えて、

小鳥づくし

はや日限も北山の、茸狩の御遊とて、紅葉を葺きて御假屋、御亭主方には小松殿、小松の陰に庭籠をくみ、數の小鳥をこめらるゝ。中宮立ち出で御覽あれば、百千の鳥の籠なれて、見知らぬ袖にも懷くらん、遊ぶつばさに誘はれて、罪も消えつゝ紫の、雲の臺に法の花、ほふ法華經よむ鶯の、初音和ぐ國なれば、心も花の都鳥、神の惠みの深き世に、大瑠璃小瑠璃燕、袖にむつれてなく聲は、ひいや鵯どり、四十雀、色も匂ひもふくみ聲、鶉衣のつまごとの、ひゞきに通ふうその聲、野澤の水に影見えて、あがるもくだる夕雲雀、憂き事聞かぬ木兎や、百舌鳥の撞木を手に取れば、搖ぐか玉の尾長鳥、胸の鶲に立つ煙、むら／＼雀てりましこ、輕き羽風の山雀小雀五十雀、まだ十二雀、韈雀鷦鷯に松むしり、菊戴が菊のませがき、そなたへくるり、くれはのとり／＼に、聲のあやなす連雀や、思ふ中には名もつらき、人目の鶺鴒うちとけて、いつかは廻り鸚鵡の鳥、忍び大椋鳥こよひ小椋鳥と、人に鶫の行々子、鳥にいふな橿鳥、知らせまいとて鴫の羽搔、としよりこい／＼口まめ鳥に、ほつとあいたよ杜鵑の、一聲に友呼子鳥かほよ鳥、ア、三味線の駒鳥や、山鳥の尾のしだり尾の、長き千歳の友鶴を、はなちてやるは鴛鴦と、おぼしめせども人のため、瀧口と橫笛が、うき名をつゝむ御情、後生菩提にかこつけて、鳥の色音を樂しむも、よしなやおなじ佛性と、籠の口あみ打開き、

しあげ、しばり首打つ法ならば、汝からふみつけん。」と、飛びかゝれば飛びしさり、「よつて見よ。」とぎしみ合ひ、御所中上下騒ぐ聲、中宮かくと聞召し、表近く御出であり。「あれしづめよ。」と宣へば、女中聲々、「これ宣旨がある、御前なるわ。」と制せられ、「あつ。」と頭をさげにける。中宮仰せ有りけるは、「横笛に不義ありとは、それは人の虚言ならん。横笛にかぎらず、いづれにても不義あれば、吟味の役をかうぶりし師高がみな越度、何しにあやまり有るべきぞ。瀧口が山雀を逃せしも、餌を飼ひ水をかふたびに、籠の戸あけまいものでもなし。籠鳥の雲を戀ひ、羽あれば何かたへも、飛び行くは不思議でなし。殊にその山雀は奥の庭へ來りしを、手づから捕へて、伏籠の中に入れ置いたり。北山のもてなしに、庭籠の用意ありと聞く。その山雀も諸鳥の中へ、ひとつに入れて見せ參らせんと、お返事よろしく申すべし。横笛も瀧口も、必ず〳〵氣にかけな。切腹とやらいふことは、聞くもうるさし恐ろしや。九獻でも取りはやし、機嫌ようしてはや歸れ。」と、慈悲深き御詞、二人は身にしむ有り難さ、「忝し。」と頭をさげ、涙を流すばかりなり。師高は澀面つくり、肘をはつたる無念顔、中宮御覽じ、「やい師高。よしあしにつけ今日の噂、堅う致すなと下々にきつといひ渡せ。その上にも沙汰あらば、其方があやまり。」と、入御ならせ給ひける。人の歎きの山雀を、打ちかへしたる上々の、御なさけこそ　三重　たゞならね。

蹴はなし驅け出で、瀧口には一言の挨拶なく、横笛の小がひな取つてつきのけ、はつたと睨んで、「なんとこの御所を茶屋揚屋と思ふか。たとへ男御所にても、使者奏者には作法あり。上から下まで女子原、ことにこの師高が、仕置をも守らず、尾籠の振舞、不屆とも慮外とも、名をつけていひ樣なし。あまつさへ大事の鳥を取り逃し、ようのめ〳〵と生きてゐて、人中へ面が出さるゝか。重々の罪科、侍なれば仕樣あれども、女なれば死罪をゆるして牢舍なり。中間ども横笛に繩かけよ。」とねめつくる。瀧口すゝみ出で、「いやこれ郡司殿。今日の次第、横笛いさゝか存ぜられず。某一人の不調法、切腹と覺悟致せし所に、何とやらん見苦しき耳こすり。瀧口も耳あれば、よつほどあたつて聞きにくし。侍なれば仕樣ありとは、サアその仕樣承らん。瀧口は侍どうなさるゝ。」ときめつくる。「いや異な事を耳にかけめさる。某が支配するこの御所の侍が、斯樣の不義不屆有るなれば、蹈み付けて括しあげ、しばり首はねて獄門にかくれども、お手前は重盛公の御内衆、をどつてもはねても、腰元衆と狂はうが、山雀をむしつて燒鳥にしてくらはうが、この方にかまはぬこと。腹が切りたか切りめされ。ヤア何とておそなはる。横笛に繩かけて、牢屋へ引け。」と呼ばはりける。横笛居丈高になり、「これ御所の仕置をする人が、みづからを始め女中衆へ、狀文つけぬは一人もない。この言譯から聞かん。」といへば、瀧口刀に手をかけ、「小松殿のお家のならひ、外の家も吟味する。蹈みつけてくゝ

候。山雀も戀ひしたふ袖になつきくる人よ人めのわを潛れかし。お奏者の御返歌、聞かまほし。」とほのめかす。横笛は魂も、ぬけて心もどき／＼と、山雀も目につかず、御口上も耳にとゞまらず、嬉し恥かし氣はもやつく。ねぢ寄りすり寄り身を踠き、「ア、おもしろき御歌、返歌はかうもござんしよか。山がらや山のもみぢばこがれなば谷のくるみとわれもしづまん。」「ムウこの御返歌は明後日、紅葉の御遊覽の、北山の谷陰にて、忍び逢はんとのお詞か。」「ハテ紅葉より茸狩に、そもじ様と只二人、こちや谷間の松茸を。」と抱きつけばぞつとして、「かんまへてさうぢやぞや。こつちは違へぬ忝い。」と、抱きつくやら吸ひつくやら、山雀籠を打ちこかし、餌も水もうちあけて、輪もちり／＼にくづれたり。「南無三寶。」とあわてふためき籠の戸を開け、兩手を入れ、こゝをなほせばあちらが離れ、さか様にしつ横にしつ、鳥はばたつく氣はむしやつく。「エ、辛氣や。」と頭をかく、そのひまに鳥は籠を飛んで出で、お庭の梢、御殿の軒、枝うつりして飛びめぐる。二人は狂氣の如くにて、「あれ／＼そこへ。」「それそこへ。」と、飛びあがり追ひ廻し、「來い／＼／＼。」と手を振れば、さすがなれたる曲鳥の、宙にて羽がへし二つ三つ、くるり／＼とうち返し、行方知らず飛び去りしは、さても是非なき次第なり。瀧口も爲方なく、横笛はなほ途方に暮れ、あきれはてて立つたる所に、中宮の侍所加賀の郡司師高は、戸無瀬の局の弟にて、御所中に威をふるひ、五常をしらぬ我慢者、聞くとひとしく遣戸

は一人もゐず、かけ這入せまいぞ。」と喚かれて、「南無三寶、雷婆がおこつてきた。臍つかまれな。」とちり〴〵に、皆々奥にぞ入り給ふ。横笛は日頃の思ひ、胸もだく〳〵聲ふるひ、「御使者是れへ。」と立ち出づる。瀧口も積る戀、顏を見合はせうつかりと、思ひと戀の山雀も、中にうかるゝ瓢箪の、氣もぬけがらとなりけるが、「ヤ先づ御口上申しあげん。」と手をつきて、「主人小松の大臣申し上げらるゝは、北山の御遊彌明後日、早天より御車を出さるべし。此方は曉まで、とほんと思ひ明しては、寢られぬまゝに夢にも見ず。晝は晝とてやるせなく、御姿が目のさきへ、ぶらり〳〵とぶらついて、御奉公も身につかず。夕暮方の戀しさ、武士の涙は一代に、一度こぼすかこぼさぬもの。ほんに男のあることか、朝から晩までこの樣に、しく〳〵〳〵〳〵と、泣いて〳〵泣きつめる。誰が泣かすると思召す。ヤハア何を申すやら。先づもつてこの山雀は、人の手を振る手先につき、輪をくゞり水をくみ、樣々の藝鳥。それ故都の手ぶりと名づけ候。中宮樣、花鳥に御心をよせらるゝと承り、小松の内府獻上いたされ候。いで御奏者の御馳走に一曲。」と、手をあげて、「ひらりくるり、ひら〳〵ひら、くる〳〵〳〵、はつとうつたる中返り、ま一つ返れとんぼう返り、一二の輪ぬけ三の輪くゞり、四も五もくはぬ、戀の悟りの輪をぬけて、唄かはいややさし、情つるべのつん〳〵つるべの、しとんしとゝん、しとん〳〵、つん〳〵つるべの、水を汲むこそしをらしや。これにつき瀧口が一首つらね

がない。上にも下にもすく風俗、男の上々きつするとは、齋藤瀧口賴方。なう横笛殿、さうぢやないか。」と口むしられ、「エ、皆物好が至らぬの、瀧口ばかりが男か。尤もきれいな生まれつき、惡いとはいはれぬが、あの風は必ず器量自慢して、根性が惡いもの。この横笛は身ふしたえ、嫌ぢや〳〵。」と有りければ、殘りの女中一同に、「こりや憎い〳〵。刈藻の樣に打明けて、左京之進義次はいとしらしい男ぢやといへば、一そう手がつかぬ。この横笛は身ふしたえ、いやぢや〳〵が尙いやぢや。それ程いやな瀧口を、いつぞや小松樣のお鞠の時、葛袴の綻び縫うてやるとて、袴のまちをいたゞきやつたを皆見つけた。まだそればかりか瀧口の、口のごやつた汗手拭を、むまさうにねぶりやつた。それでも身ふしたえていやか、すりめぬかせ〳〵。いざこの過怠に帶といて裸にせん。」「拜む〳〵ゆるしてたも。」「こそぐれつめれ。」と高笑ひ。女中仲間はかりそめの、じやれも男の噂なり。かかる所に瀧口は、山雀の籠持たせ、小松殿よりの御使者齋藤瀧口。お取次の女中たのみません。」と案内す。「そりや彼の君よ。」と氣を上げて、「今日の奏者は横笛殿、仕合なあやかりもの。横笛まではおよびがない、せめて尺八になつて、あの瀧口で吹かれたい。お茶でも持つていきたい。」と、おしあひへしあひ覗きあひ、「あの愛敬ある頰さきへ、ほつかりと食ひつきたい。ぢつと抱かれて締められて、締め殺して貰ひたい。」と、身悶えそゝる折から、局の聲にて、「女中衆召しまする、さつきにからお手がなる。お側に

と、山の紅葉はつけたりに、わかい男を見る樂しみ、「早う日も暮れ明日になれ、そのあくる日に早なれ。」と、宮仕さへ手につかず。中にも横笛、刈藻とて、二人は美女の名をとりて、心利發に情あり。器量も人にこえければ、中宮のお氣にいり、傍輩づきもむつまじく、今日は横笛お奏者番、廣廂に詰めければ、非番の女中ばら〳〵とあつまり、これ横笛殿、茸狩の御遊が十二日に極まつた。腹一ばい男見ようぢや有るまいか、何と御供は誰であろ。平家の御一門はどなた〳〵が御出でで有らう。あはれかし、よい男すぐつてお供なさるれば、どつというた祭ぢやが、もし能登殿の樣なすさまじい、女子といはば七八間、取つて投げさうな衆が見えたらば、どうもをかしうあるまい。」といへば、刈藻聞きもあへず、「いや一概にいはれぬ。盲千人、目あき千人、とかく緣次第。平家一番の若衆といふ、經正殿もこましやくれて、十四の春から聲がはり、せゝこましうてこちはいや。敦盛樣はぼつとりと、抱いて寢たい風なれど、はや奧樣があるからは、頤の雫叶はぬ浮世。越中の次郎兵衛盛次殿の弟、左京之進義次は、見す〳〵情もありさうに、いとしらしい男なれど、かたい兄御の毛蟲殿、吟味づようてこれも叶はぬ浮世なり。とかく天道のあてがひ次第。」といひければ、八雲、お花詞をそろへ、「天道任せにして置いて、惡七兵衛景清、上總の五郎兵衛といふ樣な、つはものに取りあたつたら、面白うも有るまい。主馬の判官盛久は、去年北山の茸狩に、一曲一奏は出來たれども、ぬらりとして張

月を、北山にて御覽あり、二三日も御逗留ある樣に、計ひ申し上げられよ。」と、御返答ありければ、局悅び、「御嬉しや〳〵、中宮樣にもさぞ御機嫌。おそばつき〴〵の若い女中達、なま年よりし我々まで、春の花秋の紅葉、一年に二たびの稀の行啓の事なれば、この御遊を待ちかねしに、はや〳〵お返事申す爲、お暇申し參らする。木々の錦、野邊の蟲、打續き日和はよし、月も一入御機嫌と、下が下までのお嬉しさ。お侍衆その日はいづれも御苦勞すもじ致せし。」と、挨拶辯舌ながるゝ瀧の、戶無瀨は御所にぞ歸らるゝ。重盛公、主馬の判官盛久、越中の次郎兵衞盛次を召され、「秋に一度の茸狩の御遊、路次の警固、山の掃除、御假屋に至るまで、例年の如く、隨分疏畧なき樣にまかなふべし。さて中宮は花鳥に、御心をよせ給へば、假屋の前に庭籠をくませ、四季の小鳥の品々を、放ちて御覽に入るべきぞ。はた又この頃門脇殿より賜はりし山雀、輪をくゞり水を汲み、人の手にしたがひ樣々の藝あるよし、重盛これを愛せんもおとなげなし。中宮の御慰みに參らせん。いかに齋藤瀧口、使者の用意仕れ。委細は女中まで披露の文を認めん。なほ口上もあるべし。」と、書院の一間に入り給ふ。瀧口は昨日今日、前髮とつて十九歲、お小姓立の使者男、衣紋つくろふ出立の、器量見に來る姬ぐるみ、山雀の御使、御所をさしてぞ三重あがりける。上臈御所の掟にて、男とあれば侍より、中間仕丁に至るまで、六十以後の隱居頃、きんか頭に照る月の、秋の御遊の日も極り、女中仲間はざわ〳〵

娥歌加留多

第一

夫婦は大倫なり。關雎は樂しんで淫せずといへり。敷島の我が御神天の浮橋に立ち、天の御柱を廻り、飛び來る鶺鴒の鳥にならひし妹脊の道、人に教へて人の種、八百萬代もつきしなき、人王八十代高倉の院の御宇、太政大臣清盛公の嫡男、小松の內大臣平朝臣重盛公の、賢德四海にかゞやけり。武藝文學に長じ給へば、源平の武士重く敬ひ申す上、御妹の姬君中宮の宣旨をかうぶり、女御に立たせ給ひ、安德天皇の國母として、建禮門院と號し奉り、公家のもてなし世に越え、家門さか行く常磐木の、陰に靡くや都人、賢人とあふぎ奉る。頃は養和元年九月九日、中宮の御方より、御祝儀の御使戸無瀨の局が折にあふ、菊の著綿置綿に、白髮交りの下髮も、千代を深めて匂ひけり。重盛公座をたつて「御口上承らん。」と宣へば、「先づ今日のおめでたさ、千歲の秋をかさね菊、さかりについて山々の、紅葉もさぞと、御覽ぜられたき思召し候へば、每年の如く北山の茸狩、御催しあれかしとの御使なり。」とぞ述べにける。重盛公聞き給ひ、「是れより申し上げんと存ぜし所。來る十三夜名殘の

死骸を摑んで差し上ぐる。憲法も吉岡も、二目とも見られもせず、「わつ。」と許りに伏し沈み、絶え入り絶え入り歎きしは、目連尊者の愁歎も、これには如何で勝らんと、見る人袖をぞ絞りける。涙の隙より諸見物、「師匠といひ主の子を、膝の上に抱きもせず、石川ほどの者なれども、最期には氣も亂れ熱さに堪へかね主の子を、下に敷いたか淺ましや。」と、どつと笑へば、今を最期の石川、眼をくわつと見開き、「やいあんだらの大馬鹿ども、此の子を下に敷いたるとは、命生きる五右衞門が、主の子なればいたはしさに、苦痛をさせず殺さんと、思つて下に敷いたわやい。骨まで徹る煮油に、煎り付けられてこの樣な、思案が出るものか出ぬものか、己等こゝへ入つて見よ、仇口ぬかす其の口で、念佛頼む。南無阿彌陀、南無阿彌陀佛。」と許りにて、遂に空しくなりてけり。憲法今はこれまでと、叔父の舍人を引摑み、「二人が最期の供せよ。」と、煮え立つ釜に打ち込んだり。何かはもつてたまるべき。煮えあがり沸き返り、骨もとろけて失せたりける。直に二人の追善の、大法事大吉事。本國本領出世あり。瀧に登るや龍門の、家も繁昌國繁昌、民も賑ふ釜が淵、底の知れざる大福德、末吉岡の憲法染、洗へど落ちぬ富貴なり。

傾城吉岡染　終

しかりける有様なり。かかる所に憲法は、遠坂舎人を宙に引立て飛ぶが如く、検使の前に大息つぎ、「お尋ねの憲法久太郎と申すは拙者が事。石川五右衛門は盗賊なれば、釜煎も鍋煎も御勝手次第。釜の蓋を明けたらば、五右衛門が逃げうかと、科なき倅を同罪は何事ぞ、但し此の憲法が代りならば、サア本人が罷り出た。拙者を如何なる科にも行ひ、倅は元の如くにして請取り申さん。殊に某禁中にて、狼藉致せし起りは、此の舎人。きやつが科をも糺明なくては、御政法は立ち申さじ。」と、血眼になつて理窟を言ふ。詞の中にも釜の中、我が子の方を後目に見て、坐に涙を流しける。検使の人々聞き給ひ、「尤も倅に科なしと雖も、御邊の在處分明ならず。親に子を代へ刑罰に行ふ事、其の例なきにあらず、今は悔みて益なき事。一子が追善供養の爲、龍門一家、兄大炊之助本領安堵、我々は命に代へ、宣旨を願ひ下すべし。しやつは聞ゆる大悪人、上に申すに及ばず、心任せに致されよ。」と、詞を盡し教訓あれば、鬼神を拉ぐ憲法も、兄の出世に納得し、差俯向いてぞ居たりける。「最早氣息もあるまじき、蓋を明けて死骸を出せ。」と鐵梃にて大石刎ね退け、大勢熊手差延べて、蓋引き外せば、油煙四方を暗ませる、中より五右衛門焼け爛れ、ぬつと出でたる有様は、凄まじくも又哀れなり。憲法聲を掛け、これ〳〵五右衛門、死の縁無量是非もなし。一大事は最期の一念、倅が苦しみ不便やな。せめて死骸を一目見て、此の世の名殘。」と泣きければ、釜の底を掻きさがし、煎り焦れとろけたる、

我が盗みはもと主君の爲、師匠の爲と思ひしが、盗まれた人々も、主の物師匠の物、報い積つて油責め、我が身許りか、主師匠の子を、同罪に煎り付くる。是れ程近き罰利生、あると知らざる石川が、愚癡といふ病より、恥を曝す淺ましや。」と、鬼の樣なる眼より、涙を流すぞ哀れなる。「エ、よしなき長口上。そろ〳〵油へ火も廻る。顚倒の戲言と、笑はれんも恥かしし、さりながら世上の人、不用心から盗みに遇ふ、盗人は惡き人、用心せぬは癡人、人に違ひはなけれども、皆一心のなす所、五右衞門が辭世の、一首の歌を聽けや。」とて、「石川や濱の眞砂は盡くるとも、世に盗人の種は盡きせじ。火坑變成池、南無阿彌陀佛、皆々念佛賴みます。」と、首引き入れし其の後へ、幼き者は顏出し、「あついあつい。」と泣き喚く。母は生きたる心もなく、「なう久吉か、いとしやなう。十惡五逆の科人さへ、慈悲の上には助かるもの、西も東も知らぬ子が、何の科してあの責ぞや、諸萬人の方々、命を貰うて下され。」と、聲を上げて泣きければ、警固の武士も見物も、七條河原一まいに、「わつ。」と叫びし其の聲は、天にも響きて哀れなり。釜の中より五右衞門が、引込めば顏出し、ひき入るれば顏出し、「あつやあつや。」と、二三度は悶えしが、次第に猛火熾んにして、薪の煙、炭煙、油の沸く音どう〳〵〳〵、煎り付けば又注ぎ入れ、湯煙雲に渦卷き上り、蓋の隙々迸る、油はさながら熱鐵の氷柱を下げたる如くにて、重りの石もどろ〳〵〳〵、躍り上る許りなる、焦熱地獄大焦熱の、苦しみも目前に、恐ろ

其の上父の憲法が、禁中にての狼藉、御詮索の眞最中、彼此遁れぬ倅が因果、地獄の釜と思ふべし。」と、涙ぐみ給へば、吉岡力も落ち果てて、「扠はふつつと叶はぬか。よし此の上は此の母も、一つ釜に煎り付けて、せめて我が子の苦しみを、母にも分けて見せ給へ。」と、かつぱと伏して泣きければ、殘る人々聲々に、「我々も共に責めてたべ。」と、聲も惜しまず泣き給ふは、目も當てられぬ風情なり。「時刻移るそれ〳〵。」と、襷掛けたる役人ども、油を釜につぎかけ〳〵、下には薪炭火を熾し、煽ぎ立てたる黒煙、「外より見るさへ悒きに、中でこがるゝ苦しみの、幼心の不便や。」と、見物貴賤老若も、目を塞いでぞ念佛す。漸う油に火氣移れば、蓋の穴より五右衛門首をさし出し、につこと笑ひ、「オ、夥しの見物や、此の大勢の見聞衆に、今五右衛門が油責め釜煎に遭ふを見て、よい氣味と悦ぶ人、可笑しと笑ふ人、憎しともいひ、不便とも樣々評議あるべきが、それは皆僻事、面々我が身の師匠ぞと、思うて念佛頼むぞや。某は日本國に古今無雙。盗賊なれども、企んでこれを仕始めず。我人盗みの始まりは、自然と先から持つて來て、盗めと言はぬ許りなもの。其の堪忍が佛の手引、其所を怺へず盗み取る、それこそ天魔の導きなれ、樟の大木も、二葉の時は童にも摘み取られ、己がまゝに茂つて後は石となる。盗みとても其のごとく、始めに思ひとまらねば、次第に增長し、止めん〳〵と思へども、下る車を追ふ如く、車は早く心は後、惡に追ひ付く善心なき、これ人界のならひなり。

垣を結ひ廻し、大鐵輪に釜を据ゑ、蓋の重りの大磐石、同じく銅の筒を通して、油をつぎこむ漏斗とし、油樽を積み重ぬ、廻りに薪、炭俵、檢使の棧敷、横目の幕、杖突き棒突き、刑部職の下司、數百人立ち並び、「すは時刻ぞ。」と呼ばはる聲、洛中洛外近國鄰鄕、見物羣衆の念佛の聲、拔身の兵具日に映じ、諸人の肌骨を驚かす。「己が罪といひながら、例少なき刑罰。」と、皆魂をぞ冷しける。道明寺の住持、龍門親子、大炊入道片足駄にて母引き具し、吉岡諸共七人連、諸見物を押し分け、檢使の前に一通の訴狀を捧げ、兎角の事も言はずして、伏し沈みたる許りなり。右筆訴狀を開き、高らかにこそ讀み上げけれ。「道明寺の老比丘等恐れながら言上、傾城吉岡が愛子久吉、盗賊石川五右衞門同罪の御縛め、歎きても餘りあり、愚母吉岡渡世の爲、三軒屋に身を寄せ候刻、彼の五右衞門强盗をうち候、凡そ萬人に知らるゝは遊女の習ひ、先年關東三谷に於て、一座面友の好みによつて、彼を帶し落ち失せ、共に釜中に捕はれ候。假令父母によつて、御科の仔細ありといふとも、三歲の幼稚何ぞ其の科に預るべけんや。重罪遁るゝ所なくんば、各七人の首を刎ねて、一子の一命に代へられば、生前といひ、萬劫の御慈悲たるべく候。依つて訴狀如件。老比丘尼道林、龍門の後室、同娘舞樂の前、同妹和琴の前、香春大炊之助入道、同老母、久吉が母傾城吉岡判。」とぞ讀み上げける。檢使の人々聞き給ひ、「近頃不便の事なれども、前代未聞の科人と一緒にありしは、罪なしともいひ難し。

拜み願へば、「なう尼前、きやつは石川五右衛門といふ盜賊の張本、天下一等大事の囚人、此の倅に科は無けれども、倅を出せば五右衛門を取り放す、蓋を取らねば、倅とても出されず、是非に及ばす同罪。叶はぬ〳〵。」といふ聲に、吉岡、「わつ。」と泣き出し、「なうお比丘尼樣尼御樣。あの子の母は自ら吉岡と申す者、惡い所に居合はせて、俘囚となつたが身の因果、語れば樣子もあること。先づ〳〵あの子の命を、申し受けて助けてたべ、今生後生の御慈悲。」と、聲をはかりに歎けども、姫君姉妹世を憚り、それぞとも名乘りもせず。住持の尼も爲方なく、皆々、「これは。」と許りにて、泣くより外の事ぞなき。追手の武士も、「此の上は吉岡に科はなし。落著までは此の寺に、預け置くぞ。」と、繩切り解き、「サア此の釜を直に、京都へ送れや。」と舁き上ぐる。吉岡は、「今一度聲なりとも聞きたや。」と、取り付けば拂ひ退け、立寄れば追拂ひ、先を拂ひの警固の聲、母は悲しみ叫ぶ聲、あらかしがまし釜の蓋、何時か明くべき七月の、十六日も程遠き、都を指してぞ上りける。頃は慶長の庚戌、暮春の天も明らけき、國政遁るゝ所なく、強盜の張本石川五右衛門、自縛に掛り俘囚となる。此の者飛鳥の術を得て、空をも翔ける曲者なれば、取り放しては不覺なりと、牢屋へも移されず。憲法が一子諸共に、もとの釜に入れながら、蓋に小さき穴を彫りて、食餌を與へ、頭ばかりを差出し、あるに甲斐なき蜉蝣の、其の日〳〵と長らへて、既に今月今日の、釜煎の刑にぞ極まりける。洛陽七條河原方三町に大

ば、「近郷の在々まで起し、却つて追掛くる、我等許りは兎も角も、此の子が命助くる爲、何になりとも隱れたし。」と、覗き廻れど隱所なく、接待の大釜の蓋を明けて、「これ〳〵天の助け、有り難し。沙汰遊ばして下さるゝな。」と、飛び入りて身を潛め、内より蓋をかき寄せて、「佛の慈悲。」と悅ぶも、地獄の釜とぞなりにける。津の國、河内兩國の武士、かねて王命蒙り、見付け出せし事なれば、在々の百姓驅り催し、夜廻りは吉岡に、繩を掛けて一手になり、梅の林を探し寄せ、寺内へどつと込み入りて、道心尼の部屋々々より、二階、天井、緣の下、社壇の内まで探せども、行方のあらざれば、追手も今はあぐみ果て、森の四方をとり卷きしが、「宙を飛んで逃げけるか。」と、各呆れて休み居る。住持を始め弟子達も、「扨は重き科人、されども目の前殺生なり。助けばや。」と眴し、竈を取卷き立ち給ふ。物馴れたる侍大將、組頭、竈を隱すに心を付け、十人餘り頷き合ひ、聲を合はせてつつと寄り、邊の比丘尼を取つて突き退け、立ち掛つて釜の蓋、一度にどうど押ふれば、中に、「わつ。」と子の泣く聲。「サアこれにあるには極まつたり、釜を搦めよ。」「心得たり。」と、雜兵、百姓我劣らじと、大石を重りに掛け、大木伐つて十文字、「繩よ鏈。」と犇いて、八重無盡にからげしは、綱を懸けしに異ならず。住持も今は叶はじと、「なう如何なる科かは存ぜねども、神前といひ寺の庭、殺生戒も勿體なや。さりながら罪ある人、助けてたべとは申すまじ。せめて幼い子の命、此の尼に御芳志あれ。」と、

け、其の身は直に歸られし。」と、語り給へば親子の人、「虚無僧は知らねども、上﨟とは若し妹か、逢はせてたべ。」と嘆かるゝ、聲を聞き付け和琴の前、「なう母上か、姉君か。」と、驅け出で給へば、「やれ生きて居たか、我々もまだ死なぬわ。」と許りにて、親子三人手を組みて、暫し涙にくれ給ふ。やゝあつて和琴の前、石川五右衞門が手に渡り、三軒屋へ賣られし次第、憲法の情の義理、吉岡の身を替へて、郭を遁れし憂さ辛さ、語るにつけ問ふにつけ、「憂き節繁き憂き世の中、疾く捨てざりし事ぞ悔しき。共に御弟子。」と禮拜ある、菩提心こそ殊勝なれ。住持重ねて、近頃頼もしうこそ候へ。扨當寺には毎月二十五日、攝待供養を執り行ひ、參詣往來に茶を施す、初發心の沙彌尼の役。あの大釜を洗ひ磨き、水を汲み茶を煎ずる。皆樣は大名の姫君達とは申せども、寺法なれば默されず。天滿宮への御奉公、面々後世の爲なれば、御苦勞ながら。」とありければ、「檀特山の法の水、法の薪と存ずれば、何か苦勞に候はん。」と、襷褄取り甲斐々々しく、佛に仕ふる修行の樣、貴くも又いたはしし。かかる所に泥塗れなる大男、三歳許りの子を負うて、氣息をはかりに驅け來り、「借錢に請ひ詰められ、所を驅落致す者、債權方が追つかくる、お比丘尼樣たち頼みます、影をかくして下され。」と、運盡きぬれば威も落ちて、虎に似たりし石川が、身のなる果てぞあさましき。「オ、いたはしけれども、寺とても閑所なく、三疊敷の部屋々々は、隱し甲斐もあるまじ、在所の内で百姓衆、頼んで見や。」とありけれ

濁り江の、濁りに染まぬ蓮の絲、引かれ結ばれ引き取られ、救ひ取られて紫の、雲に入るてふ雲雀山、揚る雲雀や鳴く雉子、歸る鴈がね飛び來る燕、己が樣々取々の、浮世の樣も思はれて、春の野邊こそ長閑なれ。高嶺の花は散り初めて、青葉隱れに一輪二輪、殘る九輪の多武の峯、後に隔てて風吹けば、沖つ白波立田越、下りて下りて見上ぐれば、日影も空に仄曇り、雨の笠置の山越に、彌陀の後光と拜むには、上求菩提も賴もしく、麓に法の花田村、願ひ深江の寺近く、下化衆生の廻向の種、南無阿彌陀佛、彌陀佛と、手向くる露の一雫、三界六道殘りなく、遍く咽潤して、地獄の猛火すゞしむる、法の冷水求め來て、道明寺にぞ著き給ふ。そも河內國道明寺は、忝くも菅丞相の御姨君、道明尼公の古跡とて、千歲の後も松梅の、墨の衣の尼寺にて、天滿宮もうつります、現世といひ後世の種、誠に殊勝の靈地なり。舞樂の前親子の人、かねてしるべの便りして、かくと案內し給へば、住持の老尼立ち出で給ひ、「よくぞ〳〵。何日ぞやより、發心のお望みとの訪れゆゑ、極樂世界の友待ちかね、今日か〳〵と存ぜしに、嬉しき親子の思立ち、何暗からぬ御身にて、菩提の道に入り給ふは、これこそ誠の道心にて、佛も悅びたまふなれ。それに付き、一昨日の暮方、虛無僧一人若き姬御前伴ひ、龍門殿の姉姬、母御は當寺に在すかと、尋ね來り給ひし故、未だ是れへは見えねども、豫々其の案內にて、近き中に御出での筈なりと答へしかば、然らば此の上藹引合はせてくれよとて、當寺に預

立ち舞ふべくもあらぬ身の、名もうとましき舞樂の前、妙莊嚴の跡追ひて、母も勸むる法の道、夫は何とか難波潟、短き蘆の節の間も、世々の報いを晴らさんと、我も足駄の行人や、戴く桶は千代能が、これも昔の跡とめて、水たまらねば月影も、宿定めず何處にか、袖を樒の露をそぐ、經木の廻向とりわきて、乳房の母よ父の爲、有緣無緣の鐘打ち鳴らし、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、」彌陀の御國を賴む身は、生まれし里の住居さへ、宇陀郡を立ち出でて、願ひの道も明らけき、道明寺へと修行ある。親子の樣ぞ殊勝なる。振返り見る故鄕の空、何を恨みて墨染の、烏が嶽の山の名に、まだ寐ても見ぬ曉の、別れ苦しき鐘の聲、初瀨の山はさもなくて、我に烈しき山颪、杉の下風杉間吹く、三輪の神代の謂れを聞けば、これも姬神殿神の、晝をば如何で烏羽玉の、夜の契りのきぬ〴〵の、歸る所を知らんとて、苧環に針をつけ、裳裾にこれをとぢつけて、跡をひかへて慕ひ行く。まだ青柳の絲長く、結ぶや早玉の、おのが力にさゝがにの、絲くり返し〳〵、かへり三笠山、大佛殿を伏し拜み、見渡せば奈良の京、げに古の都とて、春の錦とこきまぜし、柳櫻の八重襲、疊み込めたるつゞら山、葛小笠や菅の小笠に、はらりほろりはらほろ〳〵、零れかゝるは雨か霰か、雨でないぞの百千鳥の、鳥の羽風に花の露、袖に落ちては解けやらぬ、今も涙の郡山、天の香具山白妙に、霞絶え〳〵當麻山、木々の若芽も夏近く、淺葱、水色、空色の、縹の帽子の影殘す、中將姬も我が如く、繼母の心

る、智畧を知らず。「遁すまじ。」とつつと入る。此方の戸口へひらりと拔け、入り替つて兩方の、襖戸をはた〳〵と、さしもの侍籠の鳥。襖越しに兩方より、刀を突き刺し突き通し、盲突きに突き合ひしが、外は明し内は闇、石川は手も負はず、民部左衞門數箇所を突かれ、襖戸も朱に染み、のた打ち喚く聲許り、終に最後と見えにける。いで立ち退かんと思へども、人數四方に滿ち〳〵たり。石川も爲方なく、縛りし女房引き寄せ、「盗人は二階より、屋根越しに脫けたると、聲をはかりに呼ばはれ。さなくばこれぞ。」と切先を、胸に押し當て引きずり廻る。女房大事と、大聲上げ、「あれ盗人は、二階から屋根へ脫けた。そりや〳〵。」と、呼ばはる聲に裏表、ばつと散つて亂れ立ち、「弓矢は無きか、射て落せ、梯子出せ。」と騷ぐ間に、子を負ひながら石川は、走り出で辻々の、此所では、「そりや〳〵盗人よ。」彼所では、「それそこへ、ありや盗人よ。」と大聲上げ、驚かせば驚きて、町人も侍も、西の方へはむら〳〵〳〵、東の方へはむら〳〵〳〵、むら羣烏鳴きわたる、ほの〴〵明の朝霞、人目掠めて退きにけり。

下之卷

法のあしだ

取巻き、一番手は「門口を抉じ割り入らん。」と密語きける。石川眉を顰め「やら心得ぬ胸騒ぎ、大強盗、小盗かけて、家尻、押入、騙り、追剝、千七百餘度の働き、一度もかかる覺えなし。必定捕手が向うたな。折しも退潮、進む方に利あらず、何事かあらん、月入る方に立ち退かん。」と、西裏へ驅け出づれば、塀の後に纏を立て、槍標ひらめいたり。吉岡はつと腰も拔け、絶え入るばかりに見えければ、石川も吉岡の、足手まとひに氣怯れして、膝もわな／＼胴顫ひ、途方にくれて立つたる所に、門押し破つて一番手、「捕つた／＼／＼／＼。」と入る所を、縛りし下女を小楯に取り、遣り過して後より、大袈裟に斬つて斬り下げたり。隙をあらせず二番手が、「捕つた／＼。」と喚いて入る。兩眼拉ぎの拜み打、眉間を二つに割りてけり。「一騎打には叶ふまじ、備へを亂して込み入れ。」と、三番四番五番手が、捕つた／＼のや聲を掛け、斬り入らんとせし所を、石川火搔押取り延べ、竈の灰を抄ひ掛け抄ひ掛け、霧や霞と渦巻けば、捕手の者ども眼も眩み、込み入つては走り出で、追うつ捲つつ揉み合ふ所を、臑節、肩骨嫌ひなく、さん／＼に斬つたるは、さながら軍の如くなり。夜廻りの物頭醒井民部左衞門、「只一人の盗賊に、大勢が斬り立てられ、裏手の者に捕らせては、腹を切るより外はなし、我斬り留めて高名見せん。」と、羽織を脱いで肌著込み、鏈の鉢巻、頭巾押込み、「捕つた／＼捕つた捕つた。」と聲を掛け、しづ／＼とこそ入りたりけれ。石川が謀、押入戸棚に身を半分、見せて隱

變つた男め、何の面恥、生畜生。」と、頰輔をはたと打ち、こづかを摑み引毟り、大の男を引寄せ引寄せ、食ひ付き敲き恨み泣き。さすがの五右衞門もてあつかひ、「あ痛〳〵。これ夢見たか吉岡殿、目を覺して下され。」と、手を合はせてぞ拜みける。吉岡漸う心付き、「ヤア五右衞門殿かいなう。此方を見ても恨めしい。彼の人故に目を煩ひ、其の身に此の子を苦勞して、袖乞非人の所爲をもし、擧句の果てに、吉野といふ端傾城、娌の妹を五右衞門が賣つての、何のかのと手管をして、置換へに遇うて吉岡は、元の水に歸つた。」と、膝に靠れて泣き居たり。五右衞門斯くては叶はじと、「エ、吉岡とも言はれし人の、世につれて氣が僻んだ、吉野といふは和琴の前、命に替へても郭を出すと、常々の念願遂げられしと覺えたり。卑しい氣を持つ旦那でなし、尋ね逢うて聞き屆けば、恨みも憎みも晴るゝこと。只今で五右衞門が、定まつた宿もなく、山の奥、谷陰を家居とは致せども、明日は如何なる大名とも見せ掛け、槍、引馬で本陣宿へ泊らうとも、大商人のまねをして、手代數多に銀荷を引かせ、問屋の馳走に遇はうとも、自由自在の所在とは強盜。もと兵法を覺えしゆゑ、旦那憲法殿の御厚恩。緣の末にも疏畧はなし、いざお供して退け申さん。先づ若旦那は此方へ。」と、脊中に差向けしつかと負ひ、抱帶にて二重三重、我が胴にゆはへ付け、吉岡の手を引いて、既に出でんとせし所に、同類の退際を泊舟が見付け出し、辻番より內通し、二十騎組の夜廻り二頭、裏町を押し破り、表の格子を押

いらぬ、錢も重たい、金銀と衣裳は何處にあるぞ。」と連れ歩く、「いのちに換ふる寶はなし。何しに隱し申さん。」と、貯への金箱、金袋、衣裳簞笥、革葛籠、持ち出し〳〵積み重ね、「もうよいわ〳〵。十分は却つて一分。亢龍悔いありといふ事、石川が家の大事。我これを守る故、一度も盜み仕損ぜず、寅の刻より一陽兆す、陽は顯はれ陰は隱る。ぬしに利あるぞ、時移すな。海手の水門より、次第々々に持つて退け。」「承る。」と同類ども、打擔げ提げ、懷に捩ぢ込んで、我も〳〵と持ち運ぶは、水を渫ふるが如くなり。石川どうど座を組んで、「これ女房、この家に吉野といふ新造あらう。これはもと歷々者、此の五右衞門が師匠に付き、由緒ある姬なれども、不慮に出合ひ勾引し、肝煎賴んで賣つたれども、銀を取つて仕舞うたれば、又此の姬は故鄕へ歸す。サア呼び出せ。」と言ひければ、「いや其の吉野は身請して、今日の晝郭を出し候。」と、言はせも果てず又引ん拔き、「譃をぬかすか、これなるぞ。」と、刀を咽に差當て、「何と吉野を渡すまいか。」と責め付くる。「此の上に傾城一人吝みて、何になり申さん。然も請手は、虛無僧久之進とやら、跡で聞けばお尋ねの憲法。江戸吉岡といふ太夫の果てと引換へ、銀なしに取遣し、其の吉岡は奧の間に、これが證據。南無阿彌陀南無阿彌々々々。」とぞ顫ひける。吉岡と聞くよりも、奧の間に驅け入りて、見れば江戸の三谷にて、見し吉岡に違ひなし。夢に驚き、魘はれ苦しむ其の息差。「吉岡殿々々々。」と搖り起す。むつくと起きて、髻を押取り、「心の

けにどうど蹴返し、早繩解き縛り上げ、「サア金銀、衣衣、財寶の在處案内せよ。」と、睨み付けたる眼ざし、無體至極の仕業なり。下女は恐れて裏口へ、走り出づるを同類ども、踏み伏せて猿縛り、大黑柱に括り付け、殘る奴原刀を拔いて振り廻し、傾城、禿の枕の上、「聲を立つるな。鼻息でもするならば、斬り殺すぞ。」と閃かす、刃も光る目も光る。夜著引被り、今を最期の油汗、下男、飯炊は梯子の陰、走の下土に食ひ付き身を顫はし、念佛申す者もあり。恐ろしなんどもおろかなり。中にも大將頭巾を取り、「三人の者ども未だ夜のしたゝめせず、食物は何處にある。我も一つ飲むべきに、酒肴のあり所サアぬかせ。」と、するりと拔く。「ア、申しませう〳〵。お飯はあの膳棚、酒はそこの手樽に。お菜は何も仕舞うて、參らるゝ樣な物ぢやなけれど、蒲鉾と乾瓢の煮染が少し、鱧の皮の炙りも、かうばしうてだんない物。おしやうじがあるなら、乾蕉の韲物が赤いお椀に御座んする。私が膳に付いたれど、片脇せゝつたばつかり。ほんに昨夜お出でなされたら、餘所からお萩が來たものを。」と、追從言はば助かると、下女が心ぞ憐れなる。同類ども居流れて、思ふ樣に食ひながら、「やれ女め、やかましい。」と睨め付くれば、「あの樣達の目元わい、御器の中から人見さんす。ぬもじ樣の根本ぢや、何もなくとも、ようあがつて下されませ。」お茶はあれども盜人に、「お湯が藥罐にしやり〳〵。」と、いうても繩は解かざりけり。酒食仕舞うて、樽も椀も蹈み散らし、「サア來い。」と、主の女房繩引立て、「外は

三番太鼓限りに、屬託落居あるまでは、大門締めて客吟味、郭の内も靜かなり。夜番が通りしその跡に、又五郎が門の戸敲いて、「川口屋からで御座る。太夫樣達でも、ちやつとお一人送らつしやれ。お供して參らう。早う〱。」と敲く音。眠り驚く下女、「あたやかましい、何處からぞ。お名も言はずに誰樣でも、女郎をくれといふ樣な素人らしい。こちや知らぬ。」と、半分鼾で答へけり。暫くあつて又門敲き、「今宮屋から來ました、遣手衆に逢いたい。こゝ明けて下され。」と、呼ばはれば腹を立て、「うそ眠たいに何ぞいの。遣手衆は皆揚屋にぢや。今時分ぶら〱と、何の内に居やらうぞ。旦那樣も留守なり、男ぎれは少なし、世間が物騷な。代官殿の御用でなくば、更けて門を明けるなと、此中から言付ぢや。」と盜人の導きを、敎へてやるこそ愚かなれ。今度は門の戸夥しく、「明けよ明けよ。」と敲くにぞ、主の女房驚きて、「先にから、けしからず門を敲くは何事。」と、いふ内も猶敲きしに、女房内より、「何處より何の用ぞ。」と尋ぬれば、小聲になり、「これは代官所よりの御使。お尋ねの石川五衞門在處、あらまし知れたる故、年寄又五郎に密かに諜し合はする事。若し留守ならば内儀に逢はん。」と、直化にたばかられ、「ア、私即ち又五郎女房。」と、門を明くれば、深山の樣なる大男、兜頭巾を一樣の、同類かけて四人連強盜提灯提げ、つか〱と押入つて、門口を礑と鎖し、女房が胸座しつかと取り、「なう悲しや。」と叫ぶ口、握り拳を突込んで、「いきほね立てば締め殺す。」と、俯向

歌吉野の花に目がくれて、流れし此の身は捨小舟、ふつとやめよ、いややめまいよ。はたと打つても敲いても、憎いの裏が可愛なり。歌小面憎いいけずか。傍にがさりと寝たるは、毬栗、澁紙、粗筵、のり立つた布に霰釜、鴈木鑢鮫肌、突く様で刺す様で、しつくりほつくり、寝返り打つては寐られない、閨の扇の風の便りも、絶えて三年のあはれげに、憂き事語る友にさへ、言ふに言はれぬ柳髪、誰にか黄楊の櫛鏡、四季の仕著の花摺衣、單衣も手には流れの女の、先の世は扠如何ならん。凡そ心なき草木、飛花落葉の恨みあり、鳥に四鳥の別れあり、斯くは思ひ知りながら、思へば恨みあり、思へば嫉まし。ありし昔の百入千入、紙に染め込む吉岡染の、よしや吉野の、餘所に落ち來る瀧の水、洗はば洗へ晒さば晒せ、胸に鋭き憲法黒茶の眞黒々、黒き鋼に食ひ付く歯形、鬼とも蛇ともならばなりなん。二人伏籠の思ひの煙、昔の名香、匂ひ變じて今の燼、おのの黒木と燻るとも、誰にか著せん脱ぎはやらじとくる／＼、くるりと巻いてひら／＼／＼、ひらりくるりと巻いつ解いつ、取つつ置いつの憂き涙。主は何處に空蟬の、蛻のから衣いとせめて、戀しき時は烏羽玉の、夜の衣を身に重ね、闇はあやなし梅の花、梅の梢にゆかしき人の、ありやなしやと攀ぢ登れば、枝も嶮しき劒のやり梅、こはそも如何に淺ましや、我が魂魄の、魂は飛梅止るは白梅、紅梅落梅梅風順風、さつ／＼／＼として、夜半の鐘も埋もるゝ。霞も夢も朧々と見えし姿も假枕、梅が香許りや殘るらん。更くる夜の

りぞ此方寄れ。」と、臥したる我が子を、かき寄せ〳〵抱き寄せ、前後不覺の泣き寐入、哀れなりける有様なり。亭主は篤と聞き澄まし、差足して戸際を退き、女房、遣手小手招き、「扨は今の虚無僧はお尋ねの憲法、此の分にては後むづかし。程は行くまじ追掛けて、たらして連れて歸るべし。何ぼう兵法遣ひでも、いうても町人染物屋。たつた憲法一匹の染賃、大判十枚は握つたもの。」とひそめきて、

三重 跡を慕うて出でにける。

夢中のおぼろ染

謡 宵々に、ぬぎて我が寢る狩衣、かけてぞ賴む同じ世に、住む甲斐あらばこそ。忘れ形見もよしなしと、捨てても置かれず、取るも嫉まし腹立ち寐入、思ひ切る瀬と切らぬ瀬の、瀬々の網代木顯はれて、深き恨みの水行く川、蜘蛛手にかゝる夢の浮橋、夢とも分かぬ魂は、澤邊の螢燃えもせず、又消えもせぬ埋火と、こがれあこがれ迷ひ出で、梅が香暗き春の夜の、朧染なる形見の小袖、袂に映る吉岡が、姿はこゝに寐姿も、ありし所にあり〳〵と、陰と日向と二重形、染めて寫せし如くなり。數ならぬみのおの山の夕時雨、つれなき松も二葉より、雲居の枝と契りしも、何故に結ぶの神無月、色も紅葉も枯れ〳〵に、なる身ぞつらき徒の男め。いつそ譃なら譃ばかり。誠交りにほだされた、起請も反古になるならば、神も佛も友達か。言へばいぶりの空涙、措いてたも〳〵との、雪の吹雪よの。

ければ、江戸詞にきめられて、流石の遣手も二言と出ず。又五郎聞き付けて、「ヤアこれ〳〵吉岡今更さうは言はれまい、兄虚無僧が手形、これを見よ。」と押し開き、「此の吉岡丸年三年、傾城奉公勤め申すにつき、吉野と申す太夫と引換へに御暇下され、吉野代りになり候上は、假令此の吉岡に、如何樣の深き客出來候とも、連合方より少しも構ひ申さず、屹度勤めさせ申すべく候。請人虚無僧久之進、判も手形も覺えがあらう。」と見せければ、吉岡はつと心も迷ひ、繰り返し卷き返し、見れども讀めどもまがひなし。「ハア、出し拔かれた騙された。心を盡し、身を盡し、親をも非人の身となして、子にも憂き目を見せたるは、誰が爲ぞ男のため、子のある二世の女房賣つて、其の代りに我が戀の、吉野とやらを請出すとは畜生め。此の手形は去狀か。オ、去狀ならば手から手へ、直に取らう。」と驅け出づる。亭主夫婦、遣手も取り付き引止め、驅け出づれば引止め、閨に押し入れ引き据ゑて、おの〳〵外に走り出で、間の戸はたと鎖しにけり。吉岡は人々の、立聞するとも知らずして、憲法染の形見の小袖、顏に當て身に付けて、絶え入り〳〵泣きけるが、「おぬしの手染とありし故、こゝろの誠は此の衣に、染め込みたりと嬉しさに、身に離さじと思ひしが、能く〳〵思へば此の小袖、吉野に遣らん爲なれど、當座の心やしなひに、我が方へとの僞り言。たらされしはこれ故、恨めしや口惜しや。」と、くる〳〵と引絞り、庭へ取つてふはと投げ、「力にも便りにも、賴みにも樂しみにも、其方許

に其の日もくれなゐの、花を揃へて花ぞろの、色であかりの夜見世かや。數々點す燈火に、玉を連ね綺羅をやる、これぞ長者の萬燈會、中に貧女の吉岡は、又古に返る波の、幇間女郎引舟を、太夫仕立の衣裳つき、武士をこなしの江戸力み、出立ばえして比びなし。水揚分の口開き、扇屋に先の聲掛けられ、そこへ遣手の杉が來て、「これ太夫樣、扇屋からはお客樣が見えたとて、七度半の使が立つ。頭から其の樣では、三軒屋の勤はならぬぞえ。江戸風措いて貰はう。」と、聲高なれば、吉岡はつと思ひ、「ム、お客樣が見えたとは、それは誰が事。此の吉岡は幇間女郎引舟の約束、粗相を言うて恥かきやんな。遣手するなら、目を明いて遣手しやれ。」と言ひ返す。「ア、目が明いたか明かぬか、親方の言ひつけ。よしば當座の挨拶に、客させまいといふとて、銀二百枚、八貫六百目、引舟は扠置き、假令龍頭首でも、客もせずに取らうとは、あたゝか饅頭よね饅頭、そりや淺草にあるげな。」と、あざ笑へばこらへかね、「これさ長々しい御託を述べるな。聞きたくないず。なまぬるつこい上方の女郎を、廻した格を突出したら、當が違ひ申すべい。此の吉岡がすがりの花なればこそ、ぬし達に身をぶんまかする。客と寢べいなら、何のわづかな銀見たくない。親方殿も聞きなされ。びやく〳〵客はしないさ。お江戸の傾城は、水道の水を呑んで骨が堅い。ぬしが樣な、切先の鏽びた鏽遣手に、廻さるゝこんぢやないず、今一度言つたら、おつかないめにあはす。そこつつぱしつて、なくなれ〳〵。」と言ひ

法、亭主の傍に寄り、「最前は吉岡が聞く前、銀子をとは申せしが、此方の新造吉野に、すこし譯の候へば、二百枚の銀よりは、吉岡と吉野と引換へに、今日お暇下されば、吉岡が年を二三年も切り増すか、お望み次第に仕らん。如何樣とも御憐み偏に仰ぎ奉る。」と、思ひ込うだる色目なり。亭主夫婦顏を見合はせ、これは變つた望み事。幸ひかな吉野が元の出所明らかならず。それ故に町儀の連判も未だせず、出入のない内に、慾を離れて換へもせう。されどもあの吉岡は、牀を勤めぬ損がある。總女郎同前に、異議なく勤めさせんといふ、其方が證文召されうなら、如何にも換へてやらん。」といふ。「何が扨傾城に賣るからは、左樣の手形は千枚でも仕らん。」と、請合ふにぞ、又五郎も喜びて、「それ女房共、吉野に其の分言ひ聞かせ、連れて來い。」と、懸硯、手形の案文取り出し、「サア此の通り。」と見せければ、憲法披見し、「ム、これでは假令吉岡に、男があると申しても、去狀同然の文體、此の上異議は申すまじ。」と、さら〳〵と書き認め、軈て判をぞ据ゑにける。姫は誰とも知らねども、郭を出づる嬉しさに、足も空に走り出で、「抑如何なる御好みに、斯許りの御情、心得難し。」と宣へば、「御尤も御尤も。道すがら我等が名、仔細も語り申すべし。母御、姉御は河内國道明寺尼寺に閑居の由、伴ひ逢はせ參らせん。寸善尺魔のなきうちに先づ〳〵お暇。いざさらば。」「さらば〳〵。」と立つ、鳥の跡、二五の十年一口に、思ひがけなき身請して、行くや寢耳へみず知らぬ、人に誘はれ出で給ふ。既

といふ詞の中、吉岡は押取つて、「いや兄様は急川の旅立なれば、私が身の代今日中にも下されば、我が身も直に勤めません。明日と延びては、御相談成り難し。」と言ひければ、夫婦喜び、「それこそ願ふ所なれ、後とも言はずたつた今銀渡さん、ざつと濟んだ手を打つた。」さらり〳〵と手を打つて、「それ遣手共、吉岡に身仕舞させ、風に合うた衣裳四つ五つ仕立てよ。其の子が乳母を早う聞け、先づ先づ奥へ。」と勇みける。無慙やな吉岡は、今逢うて今別れ、何れも夫の爲ながら、急に談合極まれば、俄に胸を熟と、男の顔をうち眺め、「なう此の上は此所に、半時も足止めず、一日路も所を去り、ちよつと自筆の文一つ。此の子が事も氣遣はず、只お命を大事に。」と、涙ぐみたる面相に、男も心惜々と、肩に懸けたる平包、「これには今の流行染、憲法が手染の小袖、其方に著せんと拵へし。肌に觸れて慰め。」と、投げ出せば押戴き、「朝夕心の力にも、樂しみにもこれ一つ。今が眞のさらばや。」と、名殘惜しさ愛憐さの、思ひを昔に染め返し、やき返しては憲法の、戀地も弱る黑小袖、泣く〳〵奥にぞ入りにける。郭にばつと沙汰あれば、「名高い女郎御抱へ。」と、方々の悦び使、揚屋から日を極めに來る、家内の繁昌賑ひを、見るに付けても憲法は、心の内に思ふやう、「和琴の姫を五右衛門が賣り、今日吉岡を賣ること、皆我が爲といふ中にも、吉岡は夫婦合點づく、彼の姫郭を出さでは、死しても一分立ちがたし。」と、思ふ折から又五郎、「虚無僧殿、いで銀渡さん手形せられよ。」とぞ申しける。憲

酒よと飲み食ひし恥かしさ無念さ。せめて心の言譯に、此の郭を走らせんと、折々は門に立つ。よし此の事は捨てもせん。一錢の貯へなき、親子三人山家にかくれ、飢死せんも口惜しかるべし、訴人あつて捕つたにあはばそれまで、一天の君の御遊の庭、名を表はしたる憲法が、無手々々とは捕られまい。」と、言はんとすれば、「ア、高い〳〵。」と、夫の口に袖を當て、お身に過りないにして、石川が合力受け、同罪遁れあるべきか。殊にお咎め深き身で、一夜も手足は伸ばされず、幸ひと私が古よりの此の紙子、袖乞せしも名代となり、爰の主人御手洗屋の又五郎殿、牀勤めずの座敷の花、幇間女郎の合點で、此の子諸共厄介し、三年切で銀二百枚、今でも談合せんとの事、互に無事の便宜を聞けば、三年逢はぬは堪忍なる、二百枚の價では、山の奥でも辛々に、暮されまい物ではなし。妹にして我が身を賣り、其の金持つて何方へも、早々退いて下さんせ、あの如く繪圖に描き、屬託掛つた其の中に、狼狽へて見付けられ、後悔しても返らうか。何とて廣い此の世界、狹いお身にはなつたぞ。」と、忍び口說きて泣き居たり。又五郎夫婦、遣手伴ひ立ち出でて、「ヤァ吉岡が親仁も往生せられたけな。豫々もいふ通り、其の子の養育、男のため、座敷を勤める許りで三年を二百枚、虛無僧何と思召す、傍から強ひて下され。」と、言ふを折よき幸ひと、「申し、緣は深きもの、互に昔を語り合へば現在の妹幼少よりちり〳〵の、貧乏神の奉加の爲、近日他國仕る。銀子も少し入用なれば、兎も角も。」

となりしも親の蔭、今は私が手一つで、三味線弾いつ脊中には、負うた子よりも抱き締めた、男はこれでも忘れぬ。」と、三味線からりと沓脱に、身を投げ伏して泣きければ、虚無僧も笠傾け、其の座の女郎新造も、「道理々々。」と許りにて、共に袖をぞ濡らしける。「可憐しや、それでは三味線も身にしむまい、所望するも心ない。かねぐ内の親方の、噂せられし事もあり。身の立つ談合ありもやせん、虚無僧樣あの人を、必ず其所に留めてや。」と、皆々奥に入りければ、憲法見送り人目の隙、「太夫か、我ぞ。」と笠を取る。「オ、初めからさう見付けた。常闇の世となつても、傍に居る男を見違へてよいものか。」と、夫婦犇と抱き合ひ、また濟々と泣きけるが、「なう恨みつらみ懷かしさ、語りたい事、泣きたい事、十日や二十日や一年で、盡きしなければど方々にて、恐ろしい噂あり、此の町にもあの樣に、繪圖に描いて詮索は、誰が事ぞお身の上、如何に野太い氣なればとて、此の人立へのらくと、命知らずといふもの。先づ五年でも十年でも、世間の鳴の靜まるまで、深山の奥の山里へも、親子三人陰をして、遁るゝだけと思召せ。斯ういふ中にも身が震ひ、恐ろしさよ。」と言ひければ、「げに尤も至極ながら、あの石川とは、かの江戸の五右衞門よ、師匠を重んじ、我を育むその間、不慮に盗みを仕覺え、今強盜の大將なり。爰の新造吉野といふは兄大炊之助が小姑和琴の前、五右衞門が勾引し、傾城に賣つたる其の金とも、知らずに我は合力受け、樂々と年を取り、後で聞けば嫂の妹を、雜煮よ

らはら〳〵の泣き姿、一雫が百兩づゝ、黄金涙」と悅びて、奥をさしてぞ入りにける。情ある傍輩にて、「我人此の身に染りては、酷さに變る事はなし、忘れ種には戀と酒。よい戀がな肝煎りたい。門へ來る物貰ひに、紙子吉岡とて、三谷で口をきいた人、男故に袖乞しても、戀が命を結びつぐ、絲切三味の歌の聲、今日も來よかし聞かせたい、先づねつと飮みかけん。」と、いさめてもいたはしや、蘭省の花の時錦帳の下、姫君樣とかしづかれ、昔忍ぶの軒の下、深編笠の虛無尺八、聲細々と怨むが如く、慕ふが如く泣くが如く、我も泣かする戀慕かや。竹の音色に誘はれて、歌三味線鹿が寄る。歌「エイソレ我も妻故身を窶す、我が中は、千賀の鹽竈近くて、袖が潮たるゝ。エイソレ近くて、袖がしほたるゝ。」有合ふ女郎聲々に「あれ今言うた紙子吉岡、よい所へ見えたなう、いとしや今日は子を負うて、いつもの父御は何として、氣色でも惡いか。虛無僧樣も一所に腰掛けて一曲、此の新造の慰め賴みまする。」と言ひければ、編笠越しに憲法は、それと見るより心もくれ、目もくれ竹の尺八の、袱紗に涙を絞りけり。吉岡も恰好は似たると許り笠の内、覗かれもせず問はれもせず、餘所ながら身を摩り寄せ、涙に心を通はして、「ア、皆樣はしをらしう、親の事までお尋ねか。あとの涅槃の名殘の雪、宵の寒氣を苦しみて、夜明の霜と失ひし、昨日が三十五日なり。母の爲には身を賣りて、弔ひ弔ひも致せしが、父親には末期まで、男ゆゑに苦勞をかけ、目を煩へば手を引かれ、孫の面倒見屆けて、人

吹き付けまする。」と羨みける。又五郎も機嫌能く、「これ〳〵吉野、あの繪圖の兩人、客の中にも知人にも、似た者あらば隱すまい、塵一本でも貰ふか、預り物でも致さば、包まず申し上げんとある、町中の連判、印判なくは筆の軸でも、しるしをしや。」と言ひければ、年いかねどもさすがにて、「これは大事の御詮議。申して返らぬ事ながら、隱して判を致す事の、恐ろしさに申すぞや。自身はもと弓取の家、父には後れ、自身が母と姉上とまゝしき中のさが〳〵しさ。母の惡念われ故と、吉野川へ身を投げ、死にもやらず漂ひしに、あの石川五右衞門といふ、繪圖に少しも變らぬ大男、引き上げ助け、尼にせん法師にせんと、いたはる體にて方々と連れ歩き、身に覺えなき叔父とやらんに引合はせ、其の方より奉公に抱へられし事なれば、明さ暗さを其の人に、尋ね究めて自らが、いまの流れの憂き苦患遁れて、古鄕に歸る樣に料簡あつてたべかし。」と、袂を顏にさめ〴〵と、語りもあへず泣き給ふ。亭主もはつとは思ひしが、「いや〳〵もとは川流れであらうが、瓢簞であらうが、肝煎慥かに親、請人の手形あれば、其方も此方も難儀はかゝらぬ。さうでないかお町衆。」「尤も〳〵、來歷を詮議しては禿一人も置かれぬ。先づとくと合點させ、其の上の義になされ。お暇申す。」と立ち歸る。主人は家の姉女郎、定家、小太夫呼び出し、「新造と酒事して、氣を浮かせて煩はすな、隨分大事にかけてくれ。傾城といふ者は、涙脆うなければ大金にはなり惡い。今の涙を見なんだか、袂を顏に押し當てて、は

圖に表はし、大判十枚の屬託。年寄なれば又五郎が、格子の前に立てらるゝ。見物の貴賤口々に、「哀れ似た者見付け出し、大判をあたゝまらう。」と、人々顏をきよろ〳〵と、見らるゝ者も見る者も、互に繪圖と見合はする。慾の世界で水臭き、禿、遣手も立ち掛り、「なうお杉殿、あの大きな小判の名は何といひまする。」「オ、あれか、あれは一歩の祖父樣といふ者。」「ム、それが定なら、客樣達のやらんした、こな樣の一歩も祖父になるまで、取つて置いて見さんせぬか。」といひければ、「さればさう思へども、此方が手へ渡ると、一歩の壽命が短うなる。明日は晦日家賃時、折角ゆうべ貰うた一歩の最期が近づく。」と、とり〴〵喚き羣集する。其の日の行事五人組、町代、用人打連れて、「お觸書の通り懇に申し渡し、太夫より端まで頭數、二千三百四十五人の傾城人別の、判形相濟み歸りました。」と言ひ入れける。年寄又五郎立ち出で、「早速に埒明き御大儀々々々。」と、帳面披見し、「これは扨此方の新造、吉野が判がまだ濟まぬ。なう何れも、此の頃珍らしい新造を抱へた。いか樣元は、歷々の侍の娘と見えた。器量は十人竝なれど、心の發明、行儀の堅さ、一風あつて位も備はる。掘出かと存ずる、ちと見て下され。遣手ども、吉野呼べや。」と言ひければ、悼はしや和琴の姫、古の知行所の吉野を、今の我が名にて、人の見次第折り次第、來て寢次第の木陰の花、主人の前にぞ出でらるゝ。町衆も手を拍つて、これは金山白鼠、吉野藏が建ちませう。何でもどつとお祓には、お振舞の御座船、

手負は數多、我が身には薄手も負はず働けども、鐵石ならねば手も弱り、刃も鯱となつたれば、築地を跳ね越え落ち延びんと、門の扉を後に當て、刀二振、槍三本、棒三本を相手にして、止觀水月心明劍。本來空の夜の霜、太極の劍、無極の劍、今ぞ一世の以心傳心、此の身卽ち摩利支天、六臂の切先ひらく／＼、ひらり／＼の山雀落し、門をひらりと躍り越え、行方知らず隱笠、隱れみの藝、身の寶、天が下にぞ殘しける。

中之卷

難波潟、戀の舟著來て問へば、如何なる罪も、三軒屋には消えて、浮世の榮華町、四國西國引受けて、數々迷ふ人心、幾夜續けて泊舟、通ふ千鳥や千金の、金は當座の淡路島、手管の灘を打越して、碇を下す客もあり、明日も來んとの歌よい手の風に、謔の川口漕ぎ離れ、沖を乘るてふ人もあり、所は梅の譽ある、天神の花の袖、太夫榮ゆる姬松や、住吉も程近き、御手洗屋の又五郎、卽ち郭の年寄にて、上下の女郎、禿をかけて、三百餘人の色問屋、三ヶの津にてならびなし。殊に此の頃京都よりの御沙汰として、「お尋者の御詮議、一人は禁中にて、人をあやめ驅落したる狼藉者、兵法の師吉岡憲法、一人は石川五右衞門といふ強盜。彼等が在家訴人の者は、御褒美を下さるべし。」と、二人が形を

づる浦波の、聲を導に出舟の、知盛が沈みし其の有樣に、眼も暗み心も亂れて、前後を忘ずる許りなり。」憲法少しも騷がずして、元の所に悠々と、何時歸りしとも白波の、船辨慶見て居たりけり。總馬それとは見付けしが、面魂の底氣味惡く、此の度は見ぬ顏して通る所を、「これ〳〵總馬、此の憲法が頭が高い。何と今一度敲いて見ぬか。」と、聲を掛けられ、振り返る眞甲を、懷中より一尺八寸拔打に、二刀重ねかけて打つたるは、たゞ稻妻の如くなり。「すはや喧嘩よ斬つたわ。」と、男女「わつ。」と騷ぎ立つ。雲上人、女官達、玉體圍ひ奉り、殿上も大牀も、上を下へと打返す。お能の役人逃げ廻り、諸人の中へ亂拍子、蹈んづ蹈まれつ猖々の、亂れ立つたる大勢は、鎭めん樣こそなかりけれ。奉行の官人聲々に、「斬手は吉岡憲法、兵法の達人、大方にては叶ふまじ。諸人を殘らず追ひ出し、御門を締めて引包み、討つて取れ武士ども。」「承る。」と南門開けば數萬人が、一同に流れ出でたる其の音は、瀧の落つるが如くなり。軈て貫木しつとと下し、突棒、刺股、槍、長刀、切先揃へ驅り立つれば、思ひもよらぬ空柱の陰よりも、つつと出で大音上げ、「禁庭に血をあやし、朝家を騷がし奉る。天罰恐れありと雖も、遺恨は龍門一家にあり。末世にのこす兵法一流の、元祖となるしるしを見よ。」と、斬つて出づる。唯一人に八十餘人、入れ替へ〳〵、討ち留めん突き止めんと突き出す、槍の柄を十八本、瞬く間に切り折つて、紫宸殿の大庭を、追つつ返しつ半時許り、手を碎いてぞ切り立つる。

ねてより、拜見の札を頂戴し、女は東、男は西、御門々々に詰め掛けて、俗は上下、法體は衣を著し笠頭巾、被せぬ頭も丸腰に、刀、脇差、刺刀まで、刃物堅く禁制は、民を憐む明王の、芻蕘の者雉兎の者、悦びありや此の所、外へはやらじと面白き、面を黒き三番叟、鈴も終れば脇能を、謠ひ出せる尾上の松、老木の母に別れてより、名字も吉岡憲法と、四條西の洞院に、身を古に染物屋、好みを求め忍び居て、妻子の行方を尋ねん爲、今日のお能の雲居の庭、諸人に交り居たりけり。舟越總馬立ち廻り、「宮中なるぞ、扇翳すな手を翳すな、頭が高い、低う〳〵。」と、棒振り廻しちらと見付け、「ヤアきやつは憲法、何日ぞやの遺恨あり。天狗を働く兵法も、丸腰は女同然、よい打ち所。」と、さあらぬ體にて、「これ〳〵頭が高い、是の頭が高いわ。」と、杖の先にてはたと打ち、知らぬ顔にて過ぎ行けば、憲法はつと振り返れば、兄弟意趣ある總馬なり。「憎し穢し、合口一本持つならば、杖を引く間はあらせじものを。」と、能く〳〵見る心も荒磯の、松風も早過ぎにける。總馬始めに味はひて、「いや面白し、これぞ打ち徳、今一打。」とまた振上げて、「こりや此の頭が高過ぎた、持ちあぐんだ頭ならば、敲きひしいでくれうか。」と、續け樣に打ち掛くる、棒の先を確と取り、「御遊の場なれば堪忍する。邪魔になる頭ならば、何と出て歸らうか。」「オ、長居をして打たれうより、歸つたがまし。立ち上れ。」と、言はれても憲法は、態と悄々諸人の中、「御免々々。」と慇懃に、御門の方へ立ち出づる。「思ひぞ出

母も共に走り出で、「家の主人と迎へし人、一夜も屋形に備へもせず、御出家とは情なや。此の上は我我も、一所に伴ひ妹が、行方も共に尋ねん。」と、走り寄らんとし給へば、舍人大勢かけ隔て、「ヤ、ならぬ〳〵、別々に退かば退け、一所にやつては後むづかし。寄つて見よ。」と、槍、長刀、閃かいて隔つれば、姑は大聲上げ、「我も惡心飜す。目前の哀れを見て、其の振舞は何事ぞ。妻子珍寶及王位、天子の位も捨てて行く、火宅の娑婆に淺ましい、家も所領も惜しからず。今まで憎みし繼娘、思へば後世の導師なり。いざ一蓮。」と手を引けば、大炊親子も手を取つて、西と東に立別れ、互に交す教化の詞、「會者定離、愛別離苦、常寂光の都あれば、國郡も惜しからず。瓔珞莊嚴の衣には、綾も錦も代へ難く、網代の輿より乘物より、大白牛車こそ乘りよけれ。邪正一如、善惡不二、思ひ切つたり思ひ切れ、煩惱の表門、菩提の裏門もと一つ。さらば。」と、別れ出でけるが、「三十二相具はれば、此の世の跛も恥ならず、笑ふもよしやこれ見よ。」と、なほ足曳の大和路や、山路を分けて夏木立、左近の櫻散り殘る、御垣が原の時鳥、ほどを知らせて大内の、更衣の御遊とて、十二番の御能組、南殿の正面に假舞臺を設ひ、掃部寮より陣の座まで、樂屋口は二重幕、御簾の内には主上を始め奉り、女御、更衣、十二の局、三公、親王、月卿、雲客、武家は白洲に膝を折る。中にも大和國龍門は、警固の當番たるによつて、叔父遠坂舍人裝束改め、家の侍宮中に、杖振り廻し警固する。洛中洛外か

と出て行く。「やれそちには子があるぞ、母が爲には孫ぞかし。孫までは勘當せぬ。」と、殘す詞に憲法は、ものをも言はず手を合はせ、伏し拜み〳〵、行方知らずなりければ、兄は母に抱き付き、前後不覺に歎きしは道理過ぎて哀れなり。姑は始めより、物をも言はず居たりしが、「ハァ、過つたり我が心、繼母は同じ繼母にて、彼方は佛我は鬼、目の前の地獄の、爰にありとは知らなんだ。繼子を憎い妬ましいと、卑しき心に一大事の、胸の蓮華を汚したか。如來に懺悔申すからは、各も今までの科を御免。」と泣き口說く。一念發起ぞ誠なる。時に奥より女房達、「なう情なや、妹君和琴の姫樣、身を投げるとの書置して、御行方はなし。」といふ。はゝは心も狂亂し、「それは誠なるか、追手をかけよ。」と犇いて、奥を指して驅け入れば、大炊之助も覺悟を極め、「悲しきかなや、一人の弟には生別れ、姑一家に敵を持ち、剩へ只今の騷動は何事ぞ。時節到來とはいひながら、大炊之助が一生の、身の固めの今宵しも、かかる災難諸佛の敎へ、いつの時をか期すべきぞ。御免候へ母上。」と、差添拔いて黑髮を、ふつつと切つて西へ投げ、「棄恩入無爲とは申せども、野山の末まで御供。」と、既に出でんとせし所へ、舍人總馬大勢引具し込み入つて、「ヤァ跛め、出家とはよい分別、兩足の長短、よい加減に切つて棄て、首打落し後先を、揃へてくれんと思ひしが、兵法遣ひの憲法めが、歸るを待つて遲なはり、生けて還す殘念ながら、坊主首は取られまい。早歸れ。」とぞ罵つたる。舞樂の前は憧れて、

を受けてたべ。」といへば、憲法泣く〳〵、「詞を返すは恐れながら、龍門一家の人々、兄上の足の不具を俘囚にし、嫁御諸共追ひ出さん殺さんなどとの取沙汰、承る折しも忠節の下人、某をみつぎの爲、御道具とも存ぜず、不慮に取つて歸りし故、幸ひと身に著し、大炊之助と假名をし、命を棄てて家を鎭め、其の後に心安く、聟入なさせ申さん爲の誠の心、却つて不忠と罷り成る、境涯こそは拙けれ。」と、潸々と泣きければ、「やれそれを知らぬ母にてなし。龍門一家の人々に、其の返答をしかねうか。唐土の蘇武は片足を斬られても、典屬國といふ位に登り、大國の主となる。大炊之助も先づ其の如く、形こそ不具なれども、心に五常備はる。汝は手足揃ひても、心の底が跛にて、直なる道を守らぬは、五體不具に劣つたり。母が心を無下にして、今日の我儘言語道斷不孝者。兄の出世を見るまでは、親子の對面叶はず、其處を立つて失せぬか。」と愛想なげに叱られ、悄々として立ち出づる。大炊之助つつと出で、「弟御免なき事、某が身に取つて、有り難しとは申せども、彼が心底不便千萬、理を非に枉げて御免を願ひ、御承引無きならば、在るに甲斐なき不具者、某切腹仕る。」と胸押寛げ既に刀に手を掛くる。母は驚き縋り付き、「御身が義理に、弟を勘當するで更になし。草葉の陰の父上へ、母が立つる夫婦の道。お事に今腹切らせ、冥途の父と此の母が、二世の緣を切らするか、思ひ止まれ大炊之助。まだ出て失せぬか憲法。」と、兄を宥め弟を叱り、心を碎く親の氣に、逆らふまじ

入り終らせ給ふ御顔容、此のお心を察して見れば、妾が心あさましく、繼子あたりがつらうても御遺言の上なりと、妾がうき名を庇はせ給ふ殿御の慈悲、忘れられうか忘れうか。それよりはなほ疎かもなく、兄を大事と育つれども、繼子の足折つて、不具にしたと世の中の、雜口に戸は立てられず。繼母が繼子を憎むといはれては、第一は夫の恥、父御の石塔卒堵婆にまで、恥與ふるも本の子故、何卒家を出さん爲、母が目を眠つて、態と汝に惡性つけ、勘當はしたるぞや。五人十人ある子さへ、親の因果に、一人も棄てたいと思ふ子は無きに、まして一人の子を棄てしは、夫の爲、兄が爲、母も道を立てん爲、母が道さへ立つならば、汝も人の憐みあり。よも辻門には立つまいと、此所を思ひ彼所を思ひ、汝を勘當してよりは、一夜も泣かずに寐た夜はなく、母は壽命を縮むるに、汝は盜みに夜を明し、母とも思ひ出すまい。」と、聲を上げてぞ泣きたまふ。「聞けば江戸の遊女の腹に、男子もあると聞く、其の根性では、妻子にも嘸つらからう。盜みも妻子の爲ならば、憎い内に哀れもある。身に著飾つて騙事せよとて、親は生み付けぬ、情なの性根や。」と、足駄押取り四つ五つ、丁々と叩き付け、「今は打つても叩いても、此の恥は雪がれず。」と、足駄をからりと投げ棄てて、かつぱと伏して泣き給へば、憲法は涙にくれ、兄も兎角の詞なく、親子三人聲を上げ、人目も恥ぢず泣き居たり。大炊之助涙を押へ、「皆我人の御仁心、兎角申し上げ難し。なう憲法、言譯あらば申し上げ、序に御勘當の、御免

り、「それ〳〵〳〵。」と我が膝を、たゝいて教ふる隙間より、繼母きつと見、「見たぞ〳〵。壻姑の對面の、晴の座敷へ高足駄、禮儀を知らぬ不具者、こちらは騙りめ。二人共に叶はぬぞ、皆寄つて引きずり出せ。」と、猛り罵れば大炊之助、「身の疵を露はす上からは、誰をか恥ぢん、彼奴を引きずり出さば出せ、我に於ては動かぬ。」と、股立高く捩ぢ上ぐる。憲法も突立つて、「合點づくで歸れば歸る、引きずり出せとは誰が事。」と、弟は兄を庇へども、兄は弟の心を知らず、蔑み合ひたる勢ひは、危かりける有様なり。老母は斯くと聞くよりも、徒跣にて走りつき、二人が中へ分け入り給へば、兄は足駄を脱ぎ棄てて、「あつ。」と敬ひ手をつけば、弟も蹲り、御懷かしや。」と許りにて、顔を見上げて泣き居たり。別れて久しき我が子を見て、母も心は亂るれども、さあらぬ體にて、「アヽこれは姫君達の母御樣か。そもじ樣へも嫁君へも、儀式の對面致す筈、かかる無禮の有樣はお恥かしや。さりながら我人子を持つ親の身は、人に思はぬ慮外もして、跡で詫言する許り、料簡して御免候へや。やれ憲法め、汝を勘當せし時に、言ひ含めたる母が詞、はや忘れて此の體か。妾も聖人賢人の身ではなし、打明けて言ふ時は、あの大炊之助よりも、腹に十月の宿貸した、汝が不便は勝るなり。其の汝を勘當せしは、先だち給ふ佛達人の、奉公といひ世間の道。いとほしや前殿の、臨終の枕の下、兄の大炊は身も不具、町人か出家にして弟を總領に、香春の家をと許りにて、死病も憂へぬ兵の、御涙に咽び

かつかと寄り、能く〳〵見ればこは如何に、異腹の弟久太郎憲法なり。思ひがけなき大炊之助、呆れて咎むる詞もなく、溜息吐いて坐し居たり。憲法は豫てより、思ひまうけし思案の上、少しも騒がず、「これ姑御前、祝言の杯は何とて延引なさるゝぞ。但し頭から姫の閨へ參らうか。」と、言はせも果てず大炊之助、「否これ姑殿、因幡國淀山の城主の末孫、香春大炊之助顯定といふ、龍門の家の姉壻は、日本國に某一人、何とて祝言の杯は延引ある、押掛けて姫の閨へ罷り通る。」と立たんとす。憲法、「どこへ。」と膝を直し、「いはれぬ事を長々と、名乘立て召さつて、赤恥かいて取り返しがなるまい。龍門の家の、入壻家督は某嗣ぐからは、姑御前を始め、叔父御前であらうが、執權であらうが、身が下知は背かせぬ、一日でも家を嗣げば、此の家は我が物、其の後は誰にでも、讓りたい者に身が讓る、僞事して化露はれ、他人は堪忍致すまい。はやお歸りやれ〳〵。」と、苦々しくあひしらふ。「ヤァいき盜人の騙りめ。僞事とは汝が事、此の家に望みならば、一旦家督を某嗣ぎ、骨肉の好みある其の後は、汝にくれう。道知らずめ、立つて失せまいか。」「否々そなたの器量では、此の家は今宵一夜も嗣がれまい。」「オ、嗣いで見せたら何とする。」「オ、見物致したい。」「どの眼で。」「この眼で。」「見事見るか。」「見せるか。」と、互に膝立てぎしみ合ふ。兄は跛を隱さん爲、袴を長く仕立てさせ、右に足駄を履いたるも、せいて忘るゝ膝捲り。憲法、姑に見せじとて、身を捩振つて陰にな

と、疊ざはりの尋常さ、大小の差しこなし、肩衣襟付袴越、作りつけたる如くなれば、各案に相違して、怪顚したる其の顏色。聟は猶もしとやかに、「ム、和女は御老母姑御前候な。これまでの御迎ひ恐れ入り候、執柄舟越總馬とはお手前か、祝儀の座敷は何處もとぞ、案内がてら先へ／＼。」と述べければ、「いや案内までも候はず。座敷に飛び越え溝もなし。氣遣ひなしに御通り。さりながら龍門一家の者どもは、兩足達者に生まれ付き、高敷居、中敷居、上段、下段の間所多く、上り下り嘸御大儀。御用心あれ。」といふ。ヤさてこそ聞きしに違はず、きやつ原聟をなぶるよな、此方よりなぶり返し、心底を試さんと、わざとちが／＼／＼ちん／＼、千鳥足してやう／＼と、座敷にはたと直りける。主從目引き袖を引き、「オ、目出度い／＼、謠へ／＼。」「秋の夜の杯、影も傾く入江に枯れ立つ、足もとはよろ／＼と、足もとはよろ／＼と、三國一。」と、二三遍おし返し舞ひ謠ひ、「嘸叔父御滿足、先づ御知らせ申さん。」と山屋敷へぞ走りける。又玄關の若侍慌しく、「只今香春大炊之介と名乘つて、以前の出立に寸分變らぬ聟殿御出でし故、『同じ人が二人あらうか、罷り歸れ。』と申せども、聞き入れもせず、これへ推參仕る。」と、言ひもあへぬに大炊之助顯定、つか／＼と立入つて、座敷をきつと見わたせば、刀、脇差、衣裳、袴に至るまで、我が身に少しも變らぬ男、眞中に坐したりけり。「ヤア京三條の旅宿の盜人ごさんなれ。聟入の見參に盜人搦めて、姑一家に手柄を見せて。」と、つ

されぬか。こりや總馬、大炊之助が內證。犬を入れて聞いたれば、是れも繼母がゝりにて、幼い時に繼母が、片足を打折つて、跛を隱して居るといふ。龍門の家のほまれ、大內御遊の警固の家、五體の內、指一本でも不具なれば、參內院參叶ひ難し、隨分足に氣を付けて、隱し跛を見付け出し、追付禁中衣更の、御能の警固の役を、某が勤むるからは、我龍門の家督にて、和琴の姬と夫婦になれば、妹が總領に立ち、姉の舞樂は跛めと、一所に屋形を追ひ出し、知行所の在鄕に、三人扶持か二人扶持付けて、追込め置く思案、何と惡いか〳〵。」といへば、繼母も莞爾と、「聟の母御も繼母なれば、この工みを聞いては、先にも腹の立たぬこと、繼子の片足打折る程のお袋ならば、自らとても心が合ふ。近付になつて話したら、女夫ながら打殺す、思案のあるまいものでもなし。」と語れば、總馬も頷き合ひ、「一段の御分別、其の義にて候はば、叔父御樣は山屋敷に、人數を揃へ御控へ候べし。お袋樣と某は、座敷に出てあひしらひ、見付け次第に御注進仕らん、大勢とつと取りかけ、姉御諸共追ひ出し、妹君を家督に備へ、今夜中に御屋形すゝぎ上げ申すべし。」「オ、出來た〳〵、定めて足を隱すべし。長廊下を步かせて、隨分恥を見付け出し、報知を待つ。」と座を立つて、天神山の山屋敷、忍びて人數を集めけり。玄關の若侍、「只今聟君大炊之助殿御出でなり。」と、申し上ぐれば、「それそれ。」と繼母主從眴せし、迎ひにこそは出でにけれ。聟は出で立ちきらやかに、少しも臆せずすら〳〵

ん付け手先を揃へ、頤突出せ作り髭、鍋墨こそげて打懸けて、つくや火打の石川が、後は釜煎釜の下、猛火の種とぞ聞えける。大和源氏の庶流とかや、龍門殿と名も高く、系圖正しき家なれども、先君御死去の後、家督たるべき男子なく、舞樂の前、和琴の前、姉妹二人の姫君さへ、姉の舞樂は繼しき中、御繼母と不和なれば、壻取も延引あり。叔父遠坂舍人感冒にて、年月を送られしが、因幡國香春の總領大炊之助顯定、入家の取組調ひて、今日吉日の壻入と、式三獻の飾物、姉妹立ち出で見給ひて、「なう姉樣、此の高砂の尉と姥、共白髮になるまでの、祝事は聞えたが、何故に子は御座んせぬ。不思議さよ。」とありければ、舞樂の前打笑ひ、「あの高砂の謠を聞きやらぬか。をさむる手には壽福を抱きと謠はぬか、壽福とは子寶を抱く心よ。」と宣へば、「ム、出來た〳〵。そんなら頓て姉樣も、子寶を抱いたり。今宵は殿御を收むる手に、抱き付かしやんしよ。」と言ひ捨て、走り入り給へば、「ォ、千秋樂には撫でさすらう、惡口言ひめ覺えて居よ。」と、追ひ掛け奥に入り給ふ。執權舟越總馬、叔父、繼母の傍に寄り、小聲になつて申すやう、「内々は御妹和琴の姫、世取にせんとの御企て。然るに此の度大炊之助、姉姫への御談合、如何あらんと申せども、御分別ありとの事。如何樣の御分別かは存ぜねども、今夜これへ呼び入れて壻姑の御杯、總領娘の夫なれば、大炊之助は龍門の家の世嗣と申すもの。我等は合點參らず、御思案如何。」と囁けば、叔父舍人うち笑ひ、「ム、扨はお袋未だ話し召

お刀筒お預けぢや。四條の道場お居間の牀に立て置いて、御番なされと仰せられ、則ち鍵もお渡し。」と、青貝蒔繪の刀筒わたせば、五右衛門うちかたげ、「先から持て來る大仕合、殊に鍵まで請取つて、盗みの口が明いて來た。」と、心はいき〳〵はい〳〵と、もとの小橋に立歸り、溜息ついて、「重ね〳〵の福德。たゞ取るほどの德はなし。初手は怖し、二度目は儘よ、三度目からはずる〳〵。此の拍子ではまだ取れる。嵩高では如何なり、夜明までにゆる〳〵と、運んで取らん。」と川邊に下り、繋ぎ捨てたる高瀬舟、苫の下に刀筒、葛籠を押込め、立上らんとする所に、又腰元の聲高く、「髭の候介御用がある、髭は何處にぞ。候介は居やらぬか。なう髭々。」と頻りに呼ぶ。「ヤア下部の奴、心得た。又してやつた。」と帶を解き、下著きりゝと褄高に、帶はつつこみ、後下りに鬢かき下げ、裾三のづまで引紮げ、「ない〳〵。」というて出でけるが、「ヤア忘れた、髭がない。ぬつぺりでは埒明くまい、エ、何とがな。これ幸ひと辻行燈の火を一つ、御無心。」と言ひ様に、指に油煙を隱し取る。これも盗みの内ならん。頰げた鎌髭、鼻の下、推當に作り髭。「髭よ〳〵。」と呼び掛けられ、「髭はこれに。」と出でにける。粗相な彼の人は、面々の受取りの挾箱は構はずに、なにを爲て居て呼ばしやるぞ。四條の道場のお宿へ持つて往きや。」と、叱らるゝを幸ひに、顏を傾け迷惑さうに、眞面目に持つて出でて行く。「これこれ今の過怠に、宿入の下馬先して、一振振つて持つて見しや」。「ない〳〵。」「角内追つたてろ。」踵蹈

上下も入れてある。四條の道場へ持つて往て、宰領衆に渡しや。」と言へば、五右衛門合點は行かねども、引き上げて見て、これは餘程重たい物、お金でも入りましたか。」「否々お金は入らぬ。お差替のお脇差、小さ刀も入れてある、封を檢め渡しやや。」と、言ふより始めて五右衛門も、天の與へと思ふ氣の、付きそめぬるこそうたてけれ。「ぶらさげては往かれまい、棒を借つてかたげん。」と、乘物の息杖二本、紐を通して足早に、出でて行きけるが、さすがの五右衛門、そら恐ろしく胸も躍れば、小橋の上にどうど下し、腰打掛けて、「ム、ウ何とせうなあ。思へば／＼うまいこと。いや／＼これでも盜めば盜人なり、此の石川五右衛門が、とても盜人になるからは、異國の盜跖、本朝の熊坂にも、勝つてこそは本望なれ。これ程しきの小盜、なまなかにおいてくれうか。いや／＼何の道にも稽古あり、沙彌から長老になる者なし、稽古の爲にして見ようか。」善と惡との道二筋、一足の蹈み違へ。どうかかうかと思案半ば、又女中の聲として、「新五平殿、新五平殿。」とぞ呼うだりけり。「ヤアこれは徒士か若黨か、侍分合點。」と、葛籠を橋の欄干の外面に押し隱し。上著を解いて打掛け、羽織だけに裾端折り、息杖二本大小に、柄は手拭ぐる／＼巻き、さしも利發に引紮け、大跨ぎに手を振つて、「ハッア只今お召しなさるゝは、拙者事で御座りますか。」と、店の先にぞ蹲ひける。「ム、御一門衆からお雇ひの、新五平殿といふお徒士衆は此方か。」「中々。拙者新五平と申す者で御座ります。」「殿樣より此の

顔容を見ん爲、夜を日に嗣いで急がせ候。扨某は四條の道場と申す所に、宿取らせ候へば、一先落付き、下々にも休息せさせ、更けて又お見舞申し上げん。」と、申さるゝ。「オ、母が旅寢を大事にかけ道中いそぎの孝行、滿足申した、嬉しうおぢやる、其方の行跡丁寧の心入れ、見るにつけても憲法めは、不義不孝の奴かなと、思へば胸が痛いぞや。それにつき、夜もすがら語りたい事もある。其方は此の儘こゝに居て、荷物其の外下々は、道場とやらんへ歸されよ。乘物直に。」と立ちたまへば、「兎も角も御意次第、いざお先へ。」と色代あり。乘物奧へぞ通しける。「殿樣は此の所にお泊り。お侍衆、中間衆は、四條の道場のお宿へ、まゐれとの御意なり。」と、言ふ聲に下人ども、「サァこれから此方の正月だ。可內、四五介合點か。何でも今夜は※鹽梅よしでもぶち食らつて、小半切のけんどん酒、頭割に十文出し、びくにん呼んで念佛講、丸太ぶしんでしよげるべい。おせ／＼。」とて歸りけり。

暮過ぎ行けば石川五右衞門、雇ひの談合せん爲に、鐙屋が店の先に、「御亭樣々々々／＼。」と、奧を見入りて立つたる所に、葛籠かた／＼、腰元二人舁いて出で、「なう七藏々々。七藏は何處へ往きやつた。」と西東見る折柄、五右衞門思はず、「何の御用で御座る。」といふ。「ム、お國から雇ひの人足七藏とは其方か。」「やい。」「イヤ七藏とは其方の事か。」「あゝゝゝゝ私七藏、お國からお供致しました。」と、心ならずも答ふれば、「ハテあの人はきよろ／＼と、何が性根に入るぞいの。此のお葛籠はお召替、お

法に、隨順してぞはごくみける。三條、五條の夕霞の、上り下りの旅籠屋の、門々覗いて、泊のお衆に人はお雇ひなされまいか。荷物でもお駕籠でも、伊勢へなりと熊野へなりと、銀安で二人前の働きを致さう。」と、言うて立ちまふ雲助や、我が身ながらも口惜し。大橋詰の鐙屋に、千石許りの風體の後室方の泊と見え、幕打廻し金具の乘物。茶辨當くむ女中もあり、屛風の小陰に休むもあり、庭に竝べし据風呂の、竈賑ふ其の氣色。五右衞門宿屋の主人に近づき、「泊のお衆に人はお雇ひなされまいか。何處のお衆で御座るぞ、明日のお立ちで御座らう。」といへば、「オ、因幡から和州へお越しなさるゝ衆、若旦那は四條の道場まで、今宵お著きなさるゝ筈、まだ四五日も御逗留。お國よりの傭人は京でお暇下され、また是れより京者を、お雇ひとやら聞いた。入るが定なら肝煎らう、但し慥かな請人があるかや、其の合點なら後におぢや。宰領衆に引逢はせう、請人あるか。」と言ひければ、「否それは氣遣ひなさるゝな。打見こそ此の體なれ、申すは過言がましいが、角屋敷ひき廻して、五間に七間の二階倉、朝晩見て居る西鄰、三疊敷の御主人。後に來ましよ、賴みます。」と、笑ひてこそは歸りけれ。先走りの若黨、小橋の方より驅け來り、「若旦那大炊之助樣、只今お著き。」と言ふより早く、七つ道具の宿入の、足も揃ひて潔し。母上表に出で迎ひ、「これ〳〵其の儘〳〵、乘物是れへ。」とありければ、「憚り御免候へ。」と、乘物の戸を明けて、「明日上著と存じ候へども、旅宿の御徒然心元なく、御

した浪人、心ざし頼もしく下人の樣に附添ひ、一所に落ち失せ申せども、是れも故鄕を存ぜぬ者。御勘當とは申しながら、お血の筋は憎かるまじ。御威光にてお行方を尋ね出して下されば、娘や孫への御慈悲。」と、咽び入つて申しける。「オ、〳〵行方を尋ぬる許りこそ、卑下恥辱にもならねども、此の度兒の大炊之助、大和國龍門殿へ聟名跡の家督となり、一門書に漏れたれば、心に千萬思うても、口に噂も叶はぬぞや。隨分方々廻り合ひ、一本立の久太郞、介抱賴み入るぞ。」とて、旅硯より香包、金子入れしを其のまゝに、其の子に何か人形でも、買うてやりや。」との御手づから。吉岡も泣き出し、「恐れ多きことながら、此の子が爲には祖母御樣、私には姑御、嫁よ孫よのお詞を、とてものお慈悲。」とかき口說けば、母上は、「其方より此方の心推量あれ。言ひ度い事の海山も、世の憂き節に隔てられ、人目のあれば何事も、こゝに〳〵と胸を撫で、淚をおさへ乘り給へば、「お輿まるれ、立ちませい。お先〳〵。」と呼ばはる聲。吉岡も、「よしさらば、又も御緣のあるまで。」と、言ひ返し繰り返す三味線の絲、笠の端に、淚ほろつく花曇、花に別るゝ鴈がねの、便りの風も通させぬ。紙子の皺の寄邊なき、憂身の末こそ無慙なれ。千里も一步に始まれり。人の善惡一念の兆によつて、苔のむす巖ともなるさゞれ石の、石川五右衞門といふ者あり、憲法に兵法の師弟の契約深切にて、一言芳恩の下人となり。共に武州を立退き、上方に蟄居して、或は肩に棒を置き、または日傭に小働き、主師たる憲

出で、餘所の事かと思ひしに、其の憲法とは妾が子、其の子は正しき孫なれば、抱き上げ顔も見たけれども、父めを勘當せし上は、孫を懐けん様なしと、最前より乘物に、包みかねたる我が思ひ、洩れてこれまで出でたるぞ。」と、孫を餘所目にしみ〴〵と、ゆかしさうなる涙の色、武家の行儀に恥ぢ恐れ、心安げに吉岡親子、お側近くも寄り付かず、平伏してこそ泣き居たれ。母上重ねて、「其の久太郎めが名乘、憲法と書いてけんぱふと讀む故に、常々にさはいひつるが、替名にしたると覺えたり。彼めが兄は香春大炊之助顯定。たんだ二人の子供の中、兄の母御は果て給ひ、妾は後づれ。久太郎を喜び、殿にも後れ、兄弟ながら後家親の養育にて、家の武藝も勵ませ、實子繼子の隔てなく、人となしたる其の中に、兄大炊之助は胎内より、片足不具に生まれしは、如何なる過去の因果ぞや。世上の口のさがなさ、繼母が胴慾で、繼子の片足打折つて、大炊之助は世間がならぬ。あつたら武士に疵付けたと、沙汰を聞くも情なく、所詮弟を町屋へ出し、無實の難を清めんと、思ふ中に惡性付き、身持の惡きを幸ひに、勘當はしたれども、腹を貸した我が子なり、行くさきも不便さに、少々金子を取らせしが、仕慣れぬ町屋の家職に疎く、身を立てるすべ知らず、所を退きしと思はるゝ。附添ふ下人、友達とても無かりしか。勘當の子の行方、生けうが死なうが母の身で、問うて益なき事ながら。」と、また涙にぞくれ給ふ。親慇懃に手を束ね。「されば兵法のお弟子の中、石川五右衞門と申す尾羽打枯ら

づま武藏野に、一叢薄初冠、染めかざしたる檜扇や、吉野川には花、筏、立田山には鹿、紅葉、肩から落す菊の瀧、紺と淺葱の水玉を、碁石散の濱千鳥。「はんま千鳥の友呼ぶ聲は、ちり〳〵やちりちり、ちん縮緬、紗綾や緞子の雛形、三河に架けしは八橋の、澤邊に匂ふ杜若、根芹、澤瀉、澤桔梗、水にまかせて染めしもよし。波は立つ波、かたを波、青海波に網の手や、紫菀、龍膽、女郎花、一叢竹の茂葉に、千羽雀の飛び違ひ、風に揉まるゝ模樣もあり。富士と清見を染分けに、裾に千本の松原や、田子の入海帆掛船、また柳に雪降りて、枝も撓むやしつぽりと、積れる陰に白鷺の、物思ひげにつつくりと、止りたる雛形あり。扠又模には雲隱れ、月に猿猴、松に琴、松をしぐれの染めかねて、眞葛が原の戀風のざゝんざ、さつと吹きしをりたる絞染の模樣もあり。鳥屋出の鷲が餌に飢ゑ、み山を搜す所に、雪の根笹の其の下に、搜る兎を目に懸けて、眞一文字に落すを見て、兎は谷へ逃げんとするを、追掛け〳〵追詰め、引掻い攫んで巖に上り、引裂き食らふ其の景色、さも凄まじき模樣もあり。御簾に唐猫、烏帽子に鞠、衣紋流しの柏木や、柳、櫻、松、楓、梅に鶯、水に鴛鴦、牧の連駒、狂ひ獅子、蝶に蒲公英、蔦葛、鳳凰唐草、桐唐草、扇流し、筆流し、蟲盡し、貝盡し、小紋、中形、丁子紋、絞鹿子、染鹿子、打出鹿子に我々が、戀に心は芥子鹿子も候。」と、撥音も亂るれば、詞の花も打萎れ、「一錢の御合力、なうお情あれ。」とぞ謠ひける。御老母夢とも辨へず、乘物より轉び

男の行方を尋ぬる爲、面白からぬ三味線彈き、お袖の情の施し受け、諸國をさまよふ憂き身の果て。古は一步小判石な飛礫となしたる罰。唯一錢の憐みを、此の子にかけて。」と言ひ差して、涙の末を三味線に、彈き紛らすぞ哀れなる。乘物より御意あれば、お側の腰元承り、「これ〱其の憲法といふ人は、もとは何處衆。其の子を負うた親仁は、吉岡の爲に何人ぞ、お尋ねなり。」といひければ、「ハア私は吉岡が父、江戸品川にて染物商賣仕り、彼の者の母長々煩ひ相果て、藥の禮物、弔ひ弔ひも爲方なく、十一の年、吉原へ子を賣つて食ふ親心、無念やな恥かしや。あはれ誠あるお客もがな、一期の片付あれかしと、神佛を祈りし內、香春久太郎殿と申すお侍、替名は憲法、お國は親御の勘當にて、侍止めて江戸住居、兵法の師をする人、末々までの契約と申す故、親の身なればうれしさに、憲法樣と知人になり、それよりは我等が商賣染物の道をしならひ、色々の物數寄仕出し、本鄕に大店借り、吉岡染憲法染と世にはやる根本は、此の倅が父親なり、雛形づくしを唱歌に連ね、節を付けて彈く謠、お聞きなされて唯一錢、御合力。」と泣きければ、吉岡涙の三味線の、調子をかへてぞ謠ひける。

紙子ひゝながた

歌 夜さ來いの玉章翼にかけて、裾にかり田の秋の鴈、裾を、裾を小褄に染めかけしは、これぞ江戸

渡りかねたる世の中を、人の情や恩をきる、紙子の袖の三味線の聲に誘はれ、「お乗物の内へ申しまする、私は江戸吉原三浦が内の吉岡と申す傾城のなれの果て。上つ方には御存じない事、傾城遊女の勤め程、世にも淺ましい悲しい物は御座りませぬ。左程はかない憂き身の上にも、申し戀といふ一字を心の力、本鄕の憲法樣と申した殿御と、新造の春の花より、脇詰の秋風まで、五年六年の霜雪に、浮名を捨てて逢ひましたれども、固よりお國は勘當の身、一門衆の貢ぎとてはなし。自ら御身代も傾き、御不自由なるに付け、揚屋へも疎々しく、日本堤の茶屋の噂が、二度する返事も一度になり、駒形の船頭まで、押すに押されぬ世は金銀。私も身を苦しめ、親方の仕着も代なして、男の恥辱は雪げども、身を飾るは流れの役、爲方盡きて風俗を洒落に紛らし、衣裳を殘らず紙子にして、門立、道中揚屋入、數多の太夫、天神の、花を飾つた一座へも、紙子で公界を勤めし故、後にはそれが異名となり、紙子吉岡、紙子傾城と、例なき名を立てられしも、彼のお一人を思ふゆゑ、重なる馴染のしるしに、あの子を設けし事なれば、手鍋提げても一所の生計、泳ぎつく樣に存じましても、身請をすべきあだてはなし。年明くまでの月日を、あくべなう思召されてか、但しは世を見限つての遁世か、おいとしや憲法樣、一昨年の六月、一夜に本鄕の宿を仕舞うて、それより不通に、行方が知れませぬ。私は二世かけた憲法樣に別れ、明暮涙に此の如く、目を煩ひて勤めもならず、殘る三年暇を貰ひ、

傾城吉岡染

上之巻

人よたゞ、衣紋氣高く染色も、深密と伊達との中昔、主を嫌はぬ黒小袖、憲法流の兵法の、其の一流より色心流、夢想流とも立ち別れ、因幡國の何某、香春大炊之助顯定は當國淀山の城主の梢、未だ二葉の帚木や、母の養育あさからず。永祿の春の花軍、元龜の秋の村紅葉、亂れし御代も治まれば、大和國宇陀郡龍門殿の姉姫へ、壻名跡のいひ入れに、自身母御の御出でと、さすがは武士の後家親の、なほも世間を播磨路に、蒐つて押せや行列の、二つ道具の槍の柄に、押分けらるゝ山櫻、ちりちり對の挾箱、靑皮の覆ひ埋もれて、二月の雪のふり出す臺笠、立笠、天鵞絨の、お袋樣の御供にも、殿樣風の徒歩の衆、旅は慮外も御免ある。兵庫を御影、西の宮、茨墨髭奴ども、茶屋の牀几に腰掛けて、餅に砂糖の尼が崎、上戸は冷も神崎も、茶椀傾け五つ六つ、七つ長柄のはした錢、八つ八幡の其方ぞと、九重近き大黑舞、東寺口にぞ著き給ふ。水菜の花を山吹の、露の色かと浮されて、朱雀の蛙歌ひ出す、聲は女の笠の中、目元の闇も子をおもふ、親と思しく手を引きて、脊中に孫を賺しかね

薄紅葉、夜明の嵐に散り失せし、はかなき最期ぞ是非なけれ。「歎きの聲は何事か」と、向ひ鄰裏借屋、潛戸蹴放し驅け入つて、「やれ女の腹切自害よ。」と、組中年寄月行事、町代夜番が棒ちぎり木、ばつたくさばにおく霜の、はかなき命南無阿彌陀、南無阿彌陀佛疑ひなき、西方極樂淨瑠璃に、語りて哀れを留めける。

長町女腹切　終

兄様、最期の時に預りし甥なれど、著替一つ帯一筋、何をやさしき事もなく、預りし甲斐もなかりしに、大事に替る命、其方には遣らぬ、皆兄様への奉公ぞや。伯母さへ死ぬれば、科は一人に極まつて脇差は上り物、ほかに御詮議は殘るまい。刃物の祟りも三代濟む。行末目出度う出世して、親祖父の苗字をつぎや。サアはやう往きや〳〵。」と、深手に息もきれ〴〵の、血汐に落つる涙の體。花は、「わつ。」と咽せ返り、半七は猶涙にくれ、「伯母伯父は親同然。磔に懸るとて、一寸も退きませぬ。」と、取りつけば甚五郎、「エ、不合點な。其方が爰に狼狽へて、伯母に犬死さするか。」と、二人を取つて突き出し、鎖樞しつととおろせば、「なうそんなら退きませう、ま一度逢はせて下され。」と、夫婦は門に打ちもたれ、聲を揚げてぞ泣き居たる。伯母は苦しむ息づかひ、「ナウ甚五郎殿、人立のない前に早う死にたい。とゞめはどこぢや〳〵。」と悶ゆれば、涙ながら甚五郎、「女なれども武士の切腹。とゞめとは勿體なし、介錯せん。」と立ち寄れば、「否々人の切つたと我が切つたは、傷あらために顯はれて、此方の言譯むづかしい。急所を敎へて下され。」と、男增りの自害の體、夫はいよ〳〵心くれ、「爰を爰を。」と我が喉笛を、指せばうなづき振り上ぐる、手も弱りはつたと落ちて、太股に突き立つる。また振り上ぐれば突き外し、肩先がばと突き込んだり。左手へはづれ右手へはづれ苦しむ顏容、夫は悲しむ。「南無阿彌陀、南無阿彌陀佛。」の聲を力に、喉のくさりを一刀、「うん。」とばかり、目もくれなゐの

ざる甚五郎殿。男を養ふ女子も有る、二十年足らず連添うて、何を男の爲もせず、身の難儀をかける事、恨みにあらう憎からう。それが悲しい面目ない、許して下され甚五郎殿。」と、夫の膝にどうど伏し、聲も惜しまず歎きしは、理過ぎて哀れなり。甚五郎も男氣の、「夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存ぜぬと言うて、此の甚五郎が立つものか。見ず知らずにも義理によつて、命を捨つるは男の役。氣遣ひするな、首切られうが牢へ入らうが、皆我が科に引きうけ、半七に憂き目は見せぬ。」と、心は利發にはやれども、さし當つて相手づく、思案にくれてぞ見えにける。女房は手を合はせ、「ア、情の末とて忝い。侍衆は斯樣の事を皆御存じ、脇差のいはれを申し、伯母一人の科に落し、こなたにも半七めも、罪をのがれて下され。」と、脇差取つてするりと拔き、「ほんのは信國これは下坂、作は替れど燒刄寸尺一對なれば、一家に祟るは同じ事。これ故に父樣が、人を討つて其の刀で、まづ此の樣に押肌脫ぎ、逆手にとつて左の脇、ぐつと立てて。」といふ詞、すぐに突きたて右へさつと引き廻す。「これはいかに。」と甚五郎すがりつけば、半七夫婦飛んで出で、「伯母樣狂氣か情ない。身に覺えある故に、死にに來た半七。」と、脇差にとりつくを突き除けて、「ヤイたはけ者。そちを殺す程ならば、何の伯母が長口上、自害をもするものか。手の惡い事したれども、驅落して身も隱さず、伯母聟の難儀を思ひ、身を捨てに來た心、さすが筋目程あつて、せめてもこれはでかしたな。そちが父御は我が

とろと假寐の、寐耳にけはしい叩きやう。」と、潜戸明くれば甚五郎、せきにせいたる顔色、血眼になつて驅け上り「ヤイ女房ども、甥のとのに掛つて、此の甚五郎が身代破滅、命の大事になつてきた。此の脇差折紙つき、正銘の信國を、今の世の廢り物、下坂にすりかへ、銘を似せて突きつけた。先は武家方出入の門、盗人は女房の甥、此の甚五郎が存ぜぬといふ言譯ならず。京へ詮議に上つては、驅落者と町内へ、付屆けにあうては、人中で口利かれず。死ぬるより外、文殊の智慧にも能はぬ。」と、脇差からりと投げ出し、溜息ついたる許りなり。伯母は「はつ。」と胸塞がり、さては半七が身に覺えある詞のはし、思ひ當つて途方にくれ、しばし返答もせざりしが、半七元より覺悟の前、長持の蓋押しあけ出でんとするを、睨みつけ〳〵、脇差取りあげ「なう甚五郎殿。私は女子の物の道理は知らねども、ついて廻る身の因果は、大名高家智者學者も免れず。是れは正しく半七めが業なれども、半七がして半七はせぬ心。何を隱さん元彼の信國は、常々語りし我が家に、三代までは祟るといふ、性にふさはぬ脇差。一目でこれはと思ひしが、武士の上こそ刃物の相性、町人職人に成り果てて、何の咎めの有るべき。親もない一人の甥、これをつてに、一國のお細工の得意つけたさに、私がさもしい心から、律義またい半七に、悪根性がつきそめ、身の大事仕出したも、往き廻つて三代目の手に觸れしその祟り、知つて居ながら此の伯母が、押事したる其の咎め、因果とほかは思はれぬ、恥かしうご

聲慄ひ、「聞えぬ事いうて下んする。悦びも悲しみも、二人が身に引受ける約束ぢやないかいの。甚五郎樣に逢ひまして、有無の事を聞くまでは、私や爰を動かぬ。伯母樣も女子ぢやが、男の一世の大事の時、見捨てられうかコレ半七樣、むごい事いふお人や。」と、恨みかこちて泣きければ、二人の顏をつく〴〵見て、「其方衆がいふ事は、何の事やら此の伯母は、すつきりと合點がいかぬ。此方の配偶甚五郎殿は、武士附合して堅い人。半七も侍筋、行儀強い若い者と、常々自慢し置きしに、それにお山を同道し、初めて對面させられうか。一町北は皆宿屋。二人ながら早う往て、甚五郎殿に逢ひたくば、半七ばかり明日おぢや、夫婦にもなりおほせ、首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此の體見せ、大事の甥を連合に、見限らするが口惜しい、此の世話やむも大切さ。サアはや〳〵。」と氣をせけば、「お憐みのかたじけなさ、涙が溢れ有り難し。然らば伯母御へちよつと内證申す事あり。」と、にじり寄れば、「マア待ちや、歸られうかと思ひあぶ〳〵する。」と、庭におりて潛戸の鎖をしやんとかけ、「サア何事ぞきづかはし、語りや聞かう。」と言ふ所へ、甚五郎あわたゞしく門叩いて、「今日が暮れて門鎖める、明けよ〳〵。」といふ聲に、「そりや情なや歸られた如何せん。」借屋の路次へも廻されず、押入には夜著蒲團、何所へ隱さん、かやはかくるゝ。帷子入れて夏過ぎし、空長持に秋の鹿、妻もこがれて諸共に、押し隱すこそ哀れなれ。蓋を押へて、「聲立てまい。」とあくびながら、「ア、とろ

いらぬか。萬一お氣にいらいで、甚五郎殿や伯母樣に、難儀のかゝる事あらば、其の難を私が身に受けうと存じ參つた。其の次第が氣遣ひな、どうで御座る。」と言ひければ、「ア、爰な人つがもない。細工がお氣に入らぬとて、何の此方や其方に難儀がかゝる物ぞいの。其の上悅びや、一昨日下ると其の儘、お屋敷へ持參めされしに、柄まはり緣頭鞘の塗、萬事殊の外御意に入り、『甚五郎が女房はよい甥を持つた仕合者。後々はお屋敷の御用もおほせ付けられ、出入りさせ。』との御懇。愈細工に精出しや。」と、聞くより二人は手を合はせ、「エ、有り難いかたじけない。天道のお助け命拾うた。お花悅びや。」「嬉しうござる。胸の痞へがずつと下つた。」「オ、道理々々。武士を相手の商賣、大事に思ふその冥加、今日また俄にお屋敷から、脇差について、何やら急なる御用とて、甚五郎殿を召しに來て、晝過から參られ、今において歸られぬ。定めて悅びに刃わたしの御祝儀、お振舞があるさうな。定めし醉うて戻られう。」と、いへば半七色違へ、「ム、脇差について急用とて、又呼びに來ましたか。サアお花京から道中いふ通り、かう有らうと思ひし事、我はこれに待ちうけ、甚五郎殿に對面し、脇差の御祝儀身に引受けて祝ひ、運によつて今夜中にお屋敷へ、召し出されうも知れぬこと、和女は此の邊旅籠屋に一宿し、明日はさう／＼親許へ。」と、言ふ聲つきもしを／＼と、「さうしては半七が一分は立たねども、ア、なんとせう暇乞ぢや。」と、胸に手を組み俯向きて、涙を隱すばかりなり。お花も涙に

くは、たゞ逢ひましてく／＼、またの御見をまつかしく、その言の葉も昨日といひ、今日と暮して飛鳥川、流れの里ははる／＼と、跡にながらの夕あらし、髪のおくれのはら／＼／＼、ともに亂るゝ我が心、曇りある身は恐ろしの、お城も近き難波江の、よしあし知つてはまる身を、意見は釋迦にきやう橋の、此方の森を隱れ家と、しばらく疲れを 三重 晴らしける。

下の巻

急ぐとすれど秋の日の、短きあしの難波潟、京橋より暮れかゝり、問へど隱れも長町の、伯母の家作り常々の、話に大方かぎあてて、「伽羅細工の甚五郎様は此方か。」と、潛戸明くれば、「ア、いかにも是れが甚五郎、どれからぞ。」と言ふ伯母の聲。「イヤ京の半七下りました。」と、お花諸共つつと入る。「ヤアこれは／＼珍らしい。文の來たは一昨日、間もなう何の用あつて。ヤ連もあるさうな、どなたぢやこれへ。」とあひしらふ。「伯母樣お久しうござんす、いつぞやお目にかゝつた花と申す者。御無事で目出度う御座んす。」と、腰打ちかくる二人の體、心得がたくや思ひけん、「ハアようこそ。」とばかりにて、不思議さうにぞ見えにける。半七色を悟られじと、「お花ことも奉公の年明き、和泉の親許へ歸る道、幸ひ同道致しました。イヤまづそれはさう、あつらへの脇差、先樣は侍衆、お氣に入つたか

へ帶・しやんと結んで引締めて、歩むとすれど行き馴れぬ、道はかどらぬ女旅、これも何ゆゑ男山。作りし罪は山崎の、麓はあれよあはれげに、いつか都へ歸る山。春は梢にいろ〳〵の、花咲く山にと山巡り、となりは靑し夏山の、かしは散るてふ卯の花や、山時鳥山あひの、景色の花に顏つくる、笠を傾け山めぐり、秋はさやけき月影の、いたらぬ山は無けれども、わけて名高き山うけの、月見る方へと山めぐり、さてまた冬は遠山の、霙もてくる雲の脚、賢き鴈は南向、北を後に山のこす、山また山や峯白し。雪をさそうて山めぐり、めぐり〳〵て山姫の、山衆まじりの淨瑠璃も、夕かぎりの口癖や。今日は姿を町風に、やつすとすれど隱れなき、帶の枚方近くなる。松原過ぎて、河邊を見れば、あれ〳〵〳〵五つばかりの子の眞中に、乘合舟の女夫づれ、思ひなき身の高笑ひ、餘所のつまごと羨まし。唄流れわたりの情であろと、網の目にさへ戀風が溜る。荻の〳〵上風身に染み〳〵と、「せめて一夜は譃なしに、ほんの女夫といつの世に、いはれついはん情なや。」と、抱き締めたるそぎ袖も、淚にひたすばかりなり。間夫で逢うたも一昔。それ覺えてか一昨年の、十七日のおぼろ月、宵の我酒にほの〴〵と、二人火燵のじやらくらを、憎や冷泉烏に起されて、あかぬ別れの朝より、日文血文のつけ屆け、半太夫いよしごげんと書いたるは、ほだしの種か花すゝき、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文、方樣まゐる花よりと、思ひまゐらせ候べくの、わけの杯色見えて、わきていづみの思は

とへ首になるとても、もう取返しのならぬ事。此の上ながらも罪に逢はば我一人。伯母壻伯母にも難儀をかけず、そなたの行末頼むため、こゝろざすは大坂。實にそなたの繼父が、盜人というたも譃でない。我が身で我が身が恐ろしい。」と、語ればお花も身を顫はし、「サアそんな事であらうと推量に違はぬ、いとしや私ゆゑ種々にお身を狂はする。詮議のときは皆私が業にして、身を逃れて下さんせ。」「ハテ罪に遭ふとも逃るゝとも、わけへだてはないわいの。」「ほんにさうぢや女夫ぢやもの。」と、又締め寄せて泣く中に、跡の二階に、「花樣遲い。こりや豆腐に買はれてか、迎ひに往け。」と聲々の、南無三寶見付けられては足許暗き、いせきの石に踏みくじき、長き紅絹裏足纏ひ、走るとすれど夜中の太鼓、どん團栗の辻を出づれば建仁寺、「だらりが鳴るぞ。だらつくまいぞ、駕籠よ〱。」と呼ばれども、無いか聞かぬか耳塚の、西に錢座の名のみにて、小錢なければ草鞋も、二足を小判一兩で、買うてはく身ぞ　三重　あはれなり。

お花半七道行

いくよ〱の憂き勤め、七枚起請そら誓文、日本國の神さんを、欺した罪か欺された、人の恨みのねたみぐさ、竟に我が身の下り舟、乘りおくれたる淀堤、淀の河水行末は、いかなる罪にあふ坂の、道がどこやら何里やら、身は初鴈よ初霜に、寢亂れ姿忍ばしと、前垂とつて丸ぐけの、襷をじみな抱

布子を。はぎさん島さんこれも如來は外れた。サアこれからは花樣、きり〳〵もみ鬮明けさんせ。」「ア、せはしい何ぞいの。私が樣な因果人が、なんの阿彌陀になるものか。これ見さんせ。」と押し開けば、「そりやこそいはぬか。サア花樣が阿彌陀ぢや、名代は叶ひませぬ、よね樣に豆腐買はして、居ながら田樂喰べませう。きつう座敷がしやれて來た、サア面白い。」と笑ふにぞ、お花は何がなかこつけに、出たいは心一杯、猶も色目を悟られじと、「ア、迷惑、そんな事に今まで歩いた事なけれども、てんほの皮往てのけう。其の間に用意しておかんせ。」「オ、用意擂子鉢せつかい擂子木しやに構へ、待つて居ります早う〳〵。」「ハテ其邊は合點ぢや。」と、姿も下女ににせかけし、男の爲や徒歩跣足、つひに被なれぬおき手拭、急げばまはる、小褄ほら〳〵、杉が前垂かり橋を、足もしどろに行き過ぐる。半七は番屋の陰、ちらと見るより、「コレ〳〵〳〵爰に居る。」と招かれ、「ヤア半さんかいの、逢ひたかつた。」と抱きあひ、とかうは涙ばかりなり。「コレ泣いて居てはすまぬ事、今宵中に大坂まで退かねばならぬ。サアおぢや。」と手をひけば、「マア待たんせ、先の小判どうしての才覺ぞ。爲方なさに恐い事などさんせぬか、有樣いうて落著かせて下んせ。」「いふまでもない事。此の身になつた半七を、粉にはたいても一步一つ誰が貸さう。先度の脇差三十二兩に賣拂ひ、銘なしの下坂、寸も燒も替らぬを、八兩で貰ひ替へ、二兩で銘を彫らせ、こしらへすまして大坂へ下し、其の賣りへぎの二十兩、た

わけもない事いはん。」「紋紗の衣著て、ぞめき姿ののら坊主、後姿見た樣な。」「オ、それよ、あれは愚僧が五人組、萬年寺の同宿、忍び戀路の摑みどり。」深綠屋の小丁稚が、一中節の川風に、聲も廣がる扇屋の、仲居のまんが供して通る。あれは澤村長十郎、あつたら男を頓て大坂へ下り舟、歌流金子も難波津へ、咲くや此の花其の花の、噂も戀の種ぞかし。苦のない女郎の仇口を、聞くにも勝る涙の露、お花は一切氣も浮かず、四條の河原幾萬人、ぞめきの中に彼の人が、もしやと目をも花色の、長範頭巾しよんぼりと、番屋の陰に佇みしは、たしかにさうぢや。アヽちよつと逢ひたい。いひたい事も山衆の手前、客の手前もはかりかね、牀柱にうちもたれ、念佛まうして紛らかす。料理人の傳介杯を下に置き、「ヤア花樣の念佛で思ひ出した事がある。三味線小歌もふるめかし、町方に流行る阿彌陀の光といふ事して、御一座のよね樣方、どれにても阿彌陀如來に當つた者が、豆腐と酒と買ひに行く役人。色里に無いづなさわぎ、よね樣方いかに。」といへば、「オ、これは珍らしい、はやう〳〵。」と紙押し廣げ、蜘蛛の巢御光延紙引き裂いて錢の高、「もみ鬮は惠方果報、後に無理いふまいぞ。サア今が大事の所。」と、鼠なきしてしめあけに、「さよ樣どうぢや。」「十六文。」「お仕合〳〵。」「藤樣は。」「三十六文。」「小めろの林は。」「十文。」「それははま波さゞ波や、しが樣たつた二文か。お杉はなんぼ。」「悲しやおれは三百ぢや。エ、儘よ、前垂質に置かうまで。」「オ、いやるまでない、錢がなくば

足にならぬ草履、足にははたらぬ半七が、髻を摑んで引立てしは、目もあてられぬ次第なり。「サア親父も先づ歸つて、諸事談合は明日のこと。」「ハツァそれもさう、然らば明日參りませう。申すまでは及ばぬが、花めを敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者、おのれ明日來てなんとする、待つてをれ。エヽ、息せい張つて咽が渇く。」と、ごぶり〳〵とにえばなの、茶びん天窗を振り立てて、河原を西へと歸りける。かかる哀れの最中、二階の階子ぐわた〳〵、藪から坊主の佛頂顏。「お花そこに何して居る。さつきのおさへの杯は、いつの世に戻ること。總體今夜は和女が顏、浮々せいで酒が飮めぬ。氣を替へて西石垣の關東屋で騷がう。太郎山衆貸してたも。」「ハァ殘りの子供は西石垣が天竺へも御同道。お花一人は我等が內、手ばなしては內證に氣遣ひありまの。」「いふな〳〵、皆までいふな湯の談こか、湯治するなら遣ひ錢、見事な事か。」と金三兩、衣の下より投げ出せば、「これこそほんの忝有馬の湯のだんこ、唄やれゆのだんこゆのだんこ、今はありまのゆのだんこ、しよんがえ。西石垣へ。」と三重騷ぎける。同じ所も西側は、祇園圓山前にうけ、芝居の櫓暗き夜も、行きかふ人の提灯は、月もおろかと照りわたり、見おろす〳〵、おろす駕籠からぬつと出た、炮烙頭巾の醫者殿は、藥師如來の引きあはせ、壺屋の客と脈をとる。「それ〳〵、花車も亭主も槌で庭掃く人よびに、走る足元おかるぢやないか、お玉ぢやないか、お玉やあい。」「はて是れから呼んで屆くものか。

刀屋の半七とは其方か、どれ顏見よう。はれよい男の、江戸元結にしゆす鬢、天窗つきは兩替町、内證は曾我殿、見せかけ力身おいてくれ。此の年まで敗毒散一服飮まぬ此の親父、ゆすりはたべぬ。アァ慮外ながら、親ら許さぬ女房とは、粟田口へ往きたいか。此の娘女房に持てば、小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへない樣で、なんぢやお花を女房ぢや、いきがたりとはその事。いつそ手をよう、巾著か屋尻切れ。」とぞわめきける。半七ぐつと急きあげ、「ム、ウよういうた。小豆粒は持たねども、小判といふ物持つて居る。來年の給分二十兩渡すからは、お花は身が女房。」と、紙入より金二十兩取り出し、「サァ金でした小判といふ物、近付になつておけ。」と眞甲に投げつくる。「ヤイ半七。あの娘はまだ五十年が百年が、顏に色氣の有る中は奉公さして喰はねばならぬ。千兩道具の娘を、二十兩の目腐金で、女房に持たうや、べかこ、まあなるまい。何所で盜んでうせたやら、後の穿鑿やかましい、おのれにくれる。」と投げつくる。「イヤ金貰はう好みがない、おのれにくれる。」と投げ返し、投げつけ打ちつけ摑みあひ、お花は、「わつ。」と泣き出す。太郎左衞門つつ立ち、「コレ半七、お花はこちの奉公人。親父とのせりふなら、何所ぞ外でしたがよい。門には大勢人だかり、客の邪魔して貰ふまい。それ男ども追ひ出せ。」「こゝろえ太兵衞長兵衞五介、ばら／＼と立ち蒐り、無理無體に引き出す。お花は譯も正體も、涙ながらに取りつくを、「どこへ／＼。」と押し分くる、親父を中の關守の、雪駄片

年も近づく、屆いた男を見定め、末の片附心がけ、身を安樂にして見せいと、いはぬ親は御座らぬ。節季々々にせびらかし、足らいで又年を切りまし、男にまで添はせまいとは、あんまり酷うござんする。ほんの親より繼父は、なほ大事と嗜み、隨分孝行つくせども、こなさん私にみぢんも憐みはござんせぬ、殺しなりと何樣なりと、分別次第にさあんせ。半七樣と挨拶切り、勤めはせぬ。」とばかりにて、人目も恥ぢず大聲あげ、身を悶えてぞ泣き居たる。傍若無人の繼父冷笑ひ、「よう吐すな、盜人の晝寐も當がある。おのれが母に何の見込はなけれども、おのれを賣つてくはうため女夫になつた。今の詞は誰が教へた、半七のすりめにならうたか。べり／＼しやべる頰げた、蹴放いてしまはん。」と、武者ぶりつくを井筒屋夫婦、「年季の内はこちの物、疵つけさせぬ。」ともぎはなす。「思ふ男に添はれぬからは、殺しや／＼。」「オ、殺しかねうか。」と、ぶちあひねぢあひ大喧嘩。破れかぶれと半七、裾ひつからげ井筒屋の、庭へつか／＼／＼、「柄卷屋の半七。」と聲をかけ、九兵衞を取つて突きのけ、眞中にどかつと坐り、「コレ親父、其方はお花が繼父、すにつけ粉につけ憎いのも理。此の半七をすりの騙りの強盜のとは、いつ騙りした盜みした。半七が目には其方を人賣と見た、もがりと見た。よしそれは兎も角も、お花はおれが女房。すべい奉公仕舞うては、繼父殿でござらうが、もがり殿でござらうが、主のある女房、分別して物をいへ。」と、せきくる顏の青疊、叩き散らして詰めかくる。「ム、ウ

りの拂ひさへ埒明かず、東ふさがりになつた者、打ちみしやいでも粒三文ないは知つて居る。あの樣なごくだうと腐り合うた、お花が行末流浪は知れた事。少さいからの馴染なれば、よい事聞く樣にはござらぬ。どうぞ意見でも召されぬか、壁に馬乘りかけては明くべき埒も明かぬもの。前びろに手形しよう爲に、呼びに遣つた。」と語りける。門口には半七、聞けば悲しさ無念さの、格子の柱嚙みひしぎ、齒をくひしばり泣き居たる。親父は横手ちやうど打つて、「さて〱にが〱しい、親方殿にお世話をかけ、不孝者と申さうか。その刀屋め知つて居る、無賴者の大將菰被りの下地。ヤイ花めはどれに居る、爰へ來い用が有る。引摺りに往て、お客の前で恥かかさうか。」と、昔作りのつこど聲。お花は人目の恥かしく、「アイあの杯、藤さんさよさん預つて下んせ。」と、言ひすておりる箱梯子。「ヤア父さんか、夜更けて何しにござんした。」と、傍へ寄るを突き倒し、「ヤイ不孝者。親方殿お話で、一から十まで聞き屆けた。半七めといふ騙りめと夫婦にしては、年寄つた此の親が、鼻の下が乾あがる。二十兩といふ金が、天から降るか地から涌くか。騙りめが挨拶はらりしやんと切つてしまひ、年切增して奉公するか、否と言へ分別有り、サア〱どうぢや。」と腕まくり、摑み付くべき顏色なり。お花は、「はつ。」と胸ふさがり暫し淚にくれけるが、「なう父さん、傍輩衆は內證、客さん達の手前もあり、さもしい事を言はんする。勤めする身の親達は、どの口聞いても、可愛や親ゆゑ苦勞をする。定めの

ではわつさり惠比壽顏して見せましや。サア笑やいの。」と、せりたつれば、「ア、太郎おだまり〳〵、あれは我等に甘えるの、腹立つ所がなほうまし。嚊衆二階へ連れておぢや、今宵はよね衆の總揚見事な事か。古手の肴取りおいて、蒲燒一種で飲みあかす。鰻四五本さかせにやりや。南無阿彌陀佛。」と騷ぎ立て、皆々二階へ上りける。旣に傾く宵月の、夜もはや四つ半七は、銀の才覺ならず者と、茶屋にはせかれ親方に、見限られつゝ筒井筒、心の水もかへ乾して、流れ歩きにとぼ〳〵と、格子の陰に身をひそめ、お花が便を待ち居たる。爰に誰とはしら髮まじり、きんか天窓に無用の提灯、門口にてふつと消し、「ハァ太郎左衞門樣お宿にか。花めが父西陣の九兵衞でござる。」と、たつみあがりにいひければ、亭主夫婦、「ヤァ親父來てか、こちへ〳〵。」と茶釜の前、太郎左衞門顏顰め、「此の頃段々いふ通り、そなたが娘お花が事、そも〳〵小めろの時分から、手形の表丸十年、親方に損もかけず、おつつけ年季も明くぞや。なれども勤めの慣ひ、小間物屋の煙草屋の、紙屋で候吳服屋で候の、すのこんにやくのと借錢が、今の金で七八兩。その上親父も長者ではなし、あの子にかゝる身でないか。がらり二十兩まー年切りまし、居なりに居れば借錢も先づ其の分。賣買高い此の節、二貫目近い二十兩、其方が手取にあたゝまれば、兩爲と思ひ世話やけども、かの柄卷屋の半七といふ蟲がさいて、何の彼のと入れ性根、お花が一切呑み込まぬ。これからは勝手次第。半七といふ職人の弟子、爰らあた

このこ振舞や半七。」と、二人引き寄せ寝所の、障子の中に押し入れて、伯母は氣とほり堀河通、二條通の高瀬船、直に大坂へ　三重下りける。

中之巻

名は堅く、人は和ぐ石垣町。前には戀の底ふかき、淵に憂き身をほんと町、都の四季の月花を、爰にとゞめて通ひ路や、馴染々々の色遊びの、中にお花は忘れても、忘れ難なや刀屋の、半と深きつま戀に、なつく八つ乳の繼三味線、心くらべの連引に、思ひの色をしのび駒、忍ぶに餘る涙かな。浮氣烏とそやされて、月夜も闇も此の里へ、光滿寺と云ふ坊主客、お花に馴れし鶯の、ほけきやうとも念佛とも、知らぬが佛の戸帳ぞと、井筒が暖簾撞木杖にてひらりと上げ、「太郎内にか、四五日お目にぶらさがらぬ。」「エ、珍らしい、どつち風が吹いたぞい。」「イヤ／＼どつち風でもない、今夜はしよざいの無常風。沙汰はない事葬禮のもどり、ちよつと寄りたし心はせく、どうせうかかう燒香場を、候べく候にやつてすて、引導も何いうたやら、不便や今日の亡者も、碌な所へ往くまい。これもお花へ心中。」と、雪の頬さき遠慮なく、髭口寄せて、頬ずりは、山葵おろしにぬきの玉子、痛そな顔の痛々し。お花が浮かぬ顔付に、花車も亭主も氣の毒がり、「コレお花どうぞいの。お寺ならば大黑、爰

れ燒、もつての外の不吉の脇差、寸は一尺四寸五分、※けん尺は災難、是れを其の儘持つならば、三代までは祟るとある占に驚いて、捨賣に賣り放し、廻り廻つて十三年め、お屋敷方より此の脇差、こしらへ仰せ付けられて、孫子のそなたの眼にかゝると、はや親方の打擲の、難儀に逢ふも此の不思議。武士羨ましと思やんな。一言の咎めより、親祖父の命を絶ち、子孫まで零落れしは、前世の業とは思へども、愚癡な心に淺ましい、此の脇差がないならばと、科ない刃物に恨みが殘り、折つても捨てたい氣なれども、今では大名のお腰の物、家の敵の此の脇差、主人の樣に撫でさする、その時々の身過ほど、悲しい物はなきぞとよ。子にも甥にも唯一人、奉公大事に勤めてたも。可憐の身や。」とかきくどき、膝に靠れて泣きければ、半七も伏し沈み、お花ものかぬ身の上と、語るも聞くも主の内、頷き合ひつさゝやきの、忍び涙ぞ哀れなる。「ヤアうか／＼話して、あれ店さし時。伯母はすぐに伏見まで、夜中でも船はある。來年のお祓には必ず下りや。此の脇差の拵へ、註文の通り隨分急いで下してたも、旦那殿内方樣へよい樣に賴むぞや。お花女郎にも緣でがな、又頓てや。」と出でければ、「イヤ私も東、道までお供致しましよ。」「ア、折角來て素戻りか。これ半七伯母は粹ぢや、跡でしつぽりとはなしやいの。」「イヤ／＼別に話す事もございませぬ。」「そんなら祝うて口濡らしていなしや。」「イヤ最早お茶も飮べました。」「ハテ茶ばかりで濟むものか。しんこの樣な物なりと、茶の子甥の子、の

此の脇差を賣りに來て、諸傍輩のつきあひに、祖父樣も望みにて、買ひ求めたい志、彼の高木も望みをかけ、代物問へば三百貫の折紙。心安さの當座の座興、とはいひながら高木が麤忽、文平お身の身代では、高い物ぢやがおかやるかと、ふつといひしも互の不運、苦笑ひにて一座は濟み、その取沙汰の國一杯、いはれぬ猪瀨が齒も立たぬ、刃物好して高知行の、高木殿と張合うて、人なかで恥辱うけ、あれでも武士かといひはやす。此の脇差を買はいでは、一分立たぬ祖父樣の、武具馬具衣夜の物まで代なして、三百貫の折紙代一倍まし、二百拾兩に買ひ求め、直に中心に一字銘、高木に勝つとの心にて、風といふ字を彫り記し、明くれば九月十五日、登城の道に待ちうけ、高木やらぬと聲をかけ尋常に討ちおほせ、屋敷へ歸つて祖父樣は、娘子供に暇乞『命に替へし此の信國、必ず人手に渡すな。』と、お腹へぐつと押したてて、右の脇まで一筋に、唯一言の義によつて、身上を果されたり。其方の父樣は、伯母が爲には兄樣。その折しも江戶番、直に江戶より浪人あり、永々の憂き苦勞、悲しい暮しが病となり、愈辛き其の中にも、遺言にて『此の脇差、乞食するまで離すな。』と、藥も飮まず、祖父樣の第三年、同じ月に病死ぞや。悲しいともつらいとも、情なやお袋も又歎き死。跡に殘るは伯母とそなた、まだ九つの頑是なし、伯母が心を推量あれ。三年に三人まで同じ月に死ぬる事、不思議と思ふ氣がついて、刃物の相性見る人に、目利して貰ひしに、祖父樣父樣同じ火性、刀は水の流

生きる死ぬるの場になりても、やくたいもない氣を持つまいぞ。世間多い心中も、銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるは一人もない。流れの身にはとりわけて、悲しいこと酷いこと、そこを死なぬが心中ぞや。眞實男可愛くば、五度逢ふものを三度逢ひ、二度を一度になす時は、親方も機嫌よく、戀に身をうつ事もない。二親もない半七、伯母一人甥一人、元は知行も取つた筋、職人の弟子と朽ち果つれど、可愛いとも不便とも、思ふ者は此の伯母一人、末かけて頼みます。今日伯母が上らずば、二人の命は有るまいもの。有り難や忝や、愛宕まゐりの一驗、佛神のお蔭ぞ。」と、意見も親は泣寄りの、二人が肝にこたへつゝ、泣くより外の事ぞなき。伯母はかさねて「やれ半七、涙ついでに今一度、泣かねばならぬ此の脇差、見知つてゐるか。」と差出せば、半七棒鞘の柄引きぬき、中子を見れば信國、裏目釘の穴際に、風といふ字の一字銘、横手を拍つて「これはさて、我が家の重代ぞや。親の祕藏が年を經て、めぐり來るも不思議なり。二度武士に立ち返る、瑞相なり、嬉しや。」と、推戴く脇差を、伯母引つとつてからりと投げ「なう情なの侍や、武士になれとて見せはせぬ。此の脇差故、家筋のかうおちぶれた因緣話、小耳にも聞きつらん。お花とやらも繫がる人、悲しい話の一通りを聞いてたも。もと我々は伊勢の龜山者、先祖は猪瀨文平とて、あの子が爲には祖父樣、お持砲の鐵砲大將百五十石取つた人、同じ家中に高木宮内とて、八百石取る旗頭、互に無二の中なりしが、上方の取賣が、

は伯母なれど、年は甥より二つ下、伯母甥のよしみとて、親しうするを知らぬ目で、女夫と見るに咎はなし。」と、非の入りさうな事どもを、いひくろめたる情の程、二人はあつと嬉しさも、夢に夢見る如くぞや。主の石見まんまとくひ、「ム、ウ二人ながら伯母御か、よい年して不調法、あやまつた免してもらを。伯母御怪我は無かつたか。」と、脊中さすれば彼方向く。「オ、若い人の道理々々。そちらな伯母様頼みます、機嫌取つて下され。これ半七、言譯してくれ。」と、もぢ〳〵と勝手へ出で、「皆の奴等うつかりと、なぜ茶漬でもして出さぬ。腹の立つた擧句ぢやに、けんどんを取りに遣れ。マア杯を出しておけ。むつかしからう、おれは出店へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ勢ひ口に、伯母をも知らいでみしらした。」と、足早にこそ出でにけれ。後見送つて半七は、伯母の前に手をつかへ、「何にも態と申しませぬ。面目ないと有り難いと、胸は二つに裂けます。」と悔み歎けば、お花も涙にしみ〴〵と、「私は四條石垣町、井筒屋といふ茶屋に、花と申す勤めの者。半七様とは末々まで、面倒見あふ契約に、ちといき詰つた憂きふしの談合に、逢はいで叶はぬ事あつて、横著な此の有様。伯母様なら大事の甥を、そゝのかすとのお憎しみ、そこも許して下さんせ、いとしいがたゞ因果ぞ。」と、共に歎ちて泣きければ、伯母も同じ涙にくれ、「さう見た〳〵配偶は大坂で伽羅屋といへば、町のよい衆屋敷方、人に知られて世の有爲無常、此の伯母とても知つて居る。色事は若い役、此の上にどのやうな、

す。」と突き倒し、柄差帚おつとつて、さん〴〵に打ち敲く。伯母は此の體聞くよりも、はつと人目の恥かしさ。憎うもあれど甥子が難儀、思ひやられて何とがな、此の場の首尾をと氣を碎く。半七花は身の科を、いひくろめんと眞顔にて、「申し〳〵旦那樣、お氣がちがひはしませぬか。私は兎も角も、伯母者人を打擲あり、必ず後悔なさるゝな。」と、いはせも果てず、「ヤイ盜人たけ〴〵しく、其の態になつてさへ、まだ總嫁めをいたはるか。主の身代空になし、天道をかすめをる。サアうせぬか。」と杖振り上げ、はた〳〵と打つ音に、伯母は悲しく走りより、「旦那樣しばらく。」と、とりつけば振り放し、すがりつけば突き倒し、とかうする間に思案して、「ヤァ、こりやお吉か、和女は此所へどうして來た。コレ申し旦那樣、あれは私が妹。」と、いへば旦那は興さめ顔、半七はなほ合點せず。花はきよろ〳〵うろたへる、袖をひかへて「コリヤ妹、ヤイお吉これ姉ぢや。姉が顔を見忘れたか、狼狽者。」と睨めつけ、目まぜで知らすれば、やう〳〵と心づき、「ハァほんに姉樣。姉樣々々ぢや。」と言ふ聲慄ふ許かりなり。伯母は色目を悟られじと、「ヤイ大膽者、五條の木賃宿へ行きはせで、姉さへついど來ぬ内へ、騙りらしいこというて來た故にこんなこと、旦那樣のお山ぢやと御覽じたも御尤も。今日も愛宕で私をお袋とはかいひませせぬ。それも道理ぢや。あの人は腹がはりの兄弟で十五ちがひ、半七が爲に

半七によく似たり。さては奥なは似せ物めと、思へども念のため、「これは〳〵いはれぬこと。女房どもは寺參、戻つたら見せませう。してつきもしほもなう半七に、何用有つて上られた。」と、いへば伯母は打笑ひ、「いや半七にさのみ用もなけれども、旦那樣へ少しお賴み申す事。配偶甚五郎上らるゝ筈なれども、お屋敷方の御川は多し、飛脚でも如何とて、さて私が上りし。」と、下人に持たせし風呂敷より、棒鞘の一腰を取り出し、「これはこれ信國とや。さる大名の若殿へ、藏屋敷から上げらるゝ、大切な拵へ物、大坂にも彼此と、職人衆も多けれど、京細工と申し甥子がため、内方へ賴みます、註文は此の通り。さぞ方々の請取御忙がしいは存じながら、どうぞ近々に賴み上げまする。」此の次手に半七めが顏も見たさ、何やかやに上りました。」とさし出せば、石見は脇差註文見合はせ、「これは此方の商賣、心得た。」とずつと立つて、「これ伯母御、戀ひしがらるゝ甥がざまを見せませう。しばらく其處に。」といひ捨てて、思ひがけなき一間の障子、蹴破つてつつと入る。二人は、「はつ。」と驚いて、うろたへ廻る胸ぐらを兩手につかんで、「ヤイ半七のいきずりめ、ようも〳〵親方を踏みつけたな。あの女が來た時から、ござりんすが呑み込まれぬ。りんすの正體顯はれた。お山やら總嫁やら、厚皮面な晝日中、大坂の伯母で候と、目利の家へ似せ物を、ぬく〳〵と寢所へまで手びきさせ、主に一杯、己めは甘い所を喰うたな。親代々の刀屋を、太鼓持にするのみか、座敷を揚屋に仕くさつた。お禮申

がつかぬ。」と、いふ内に半七は、そつと起きて障子の隙、覗けば馴染のお花なり。「南無三寶、さては内々苦勞にした、慾づらの繼父めが、年切增のもがりごと、急々にせがむと見えた。其の工面に來たさうな、何にもせよ出過ぎたこと。逢ふもあぶなし逢はぬもまた、仕舞のつかぬ我が身ぞ。」と、夜著ひつかぶり、生きたる心地はなかりけり。親方は正直一遍、「半七はなぜ出ぬぞ、頭痛でまだ起きられぬか。他人では無し、なう伯母御寢所へいて逢はつしやれ。お山狂ひで酒やら何やら過ぎる故、煩ひ暮して物も喰はぬ。ちと意見してくだされ、そりやそこへ案内せい。」と、下地はすきに据ゑる膳、甘い首尾とぞなりにける。やゝ時過ぎてこれもまた、愛宕參の花お札、風呂敷包下人に持たせ、「刀屋の石見樣とはこなたか、大坂甚五郎が女房、半七に逢ひたい、伯母が來たとおつしやれて下され。」と、いひ入るれば家内の上下びつくりして、「ヤアこりやどうぢや。門にも伯母内にも伯母、騙りか狐に極まつた。」と、不審がるやら怖がるやら、中にも亭主は一理窟、「ヤアざわ／＼とかしましい。奥へ聞えりや詮議がならぬ、默れ／＼。」と小聲にて、「表の伯母御通らしやれ、爰へ／＼。」といはるゝにぞ、綿帽子取つてしとやかに、「これはまあ／＼結構なるお内方、ついしか御出入申さねば、何方樣が何方やら。コレ其所な前髮殿、盆一枚かさつしやれ。私が事なりや心まで、奧樣へ上げまする、樋の上の切荒布、花の都へこんな物、お恥かしや。」と差し出す、伯母の年ばい恰好を、見ればどこやら面相も、

そめ、我が親ざめのつれなさを、問ひ談合も中絶えし、いとし男も親方がゝり、首尾はどうぞと案じほれ、顔の見たさもやるせなく、駕籠舁雇うて草鞋がけ、浴衣を假の旅出立、ぼんぼり綿もひねくろしく、脊中に皺のよるべなき、石見の店へ、「頼みませう、ハ、こりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七どのに、ちよつと逢ひたう御座りんす。」親方ぎよつとし、「はていかう、りんす〳〵といふ女子ぢや、そなたは半七が女房か。」「ハアつがもない。私は大坂者、半七が伯母で御座りんす。」「アレまたりんすぢや。ムウ大坂の伯母御とは、伽羅細工の甚五郎の內儀か。」「ア、伽羅々々、何かのお禮に疾うまゐる筈なれども、主は細工の人だから、貧な世帶の隙なしで、今日までの御無沙汰。大事の甥が出世のかど、祝月を心がけ、愛宕かけての上り船、乘合の窮屈さ、とろ〳〵と寐よとすりや、後からせゝるやら、前からは毛の生えた、大きな足を突き出すやら、齒ぎりをするやら、寐言やら、可笑しい事の數々は、山崎から連もあり、上つてお山を一息に、嵯峨へ下りたりや仕合と、釋迦樣の開帳の、相伴やら※おこゞやら、旅籠屋で支度して、すぐに是れへ。」と出次第の、口は手管に馴々しく、「みな樣御免、ア、しんどう。」と腰かけて、煙管取る手もぞんざいに、「皆樣半七の傍輩衆か、しんくな仕事で御座りんす。」繻子の肌著に色さらしなの、伯母と名乘りて刀屋に、見するは胡散者なりし。「ソレ喜八、伯母が逢ひに上られたと、半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進ぜぬか、幾人をつても氣

工、菖蒲作りの拵へも、五月からの誂へ、何として出來ぬぞ。長刀直しを研いだらば、辨慶山の町へ持つて往け。兩替町の銀作り、御池の町の緣頭、小川通りのせかいらぎ、今日明日に持たしてやれ。さつきにわせた下の町の酒屋のかみ、入聟がはひる引出物にしたいが、娘が望む道具ぢやと、大切先のだんびら物、身ばかり買うていなれたは、後家鞘にきまつた。」と、堅い親仁の輕口も、刀屋とてや古身なり。重手代の忠二郎、旦那の前に帳面控へ、左介喜八は算盤の、さざんの九月節句前、算用の高見合はして、「ヤア此の半七の大のらめは、帳面も埒明けず、今朝から爰へ面出しせぬ。何所へうせた。また祇園狂ひか宮川町か繩手か、朋輩共が知つてをろ、詮索せい。」とわめかるゝ。「イヤ半七は昨日から、頭痛するとて鉢巻で、小座敷に寢て居まする。」「なんぢや頭痛ぢや。若い身でまたしては、頭痛のつかへの何のとは、皆茶屋酒が過ぎるから、粥でも焚いて喰らはしたか。」「アイ粥の事はさておき、おも湯も咽へ通らぬというて、漸うと今朝酒の燗して飲んで見て、どうでも色のない酒は飲まれぬと、苦い顏しながら、中椀にたつた三杯。」と、いへば主も興さめて、叱る心も拍子ぬけ、笑ひ暮せし秋の日の、西山近き染浴衣、愛宕詣に袖を引かれた、これもあだなる世のつとめ、四條の水に名を流し、身の憂き數を積みあげし、石垣町の井筒屋の、お花よざかり戀盛り、身を賣る品はかはれども、刀屋の半七と深い中ごと正銘の、互の誠とぎ入れて、しめた心のもろひねり、其の柄絲のほつれ

長町女腹切

上之卷

例の童の言の葉に、言ひよる品もよし蘆の、難波の京の物語、今の狂歌に取りなせし、京童の口吟、落首洛外とり〴〵に、その一節を繪雙紙や、下立賣を堀河へ、引き廻したる角屋敷、刀屋石見何某とて、諸役御免の受領職、折紙太刀の御用まで、御所は勿論屋敷方、男たる身の魂の、御刀脇差拵へ請取所と大看板、店は弟子に打任せ、誰が下人やら頭やら、はなし目貫の性よしも、つい燒きつけて惡性に、身を研ぎへらす奉公や、跡のこじりの帳面の、つばめ合はせと親方が、鞘鳴するぞ道理なり。主人石見は禪門の、白いあたまに黒眼、仕事場を見廻つて、「ヤアおれが跫音聞いたやら、皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事ぢやないぞ。彼岸過ぎたりや、めつきりと日が短い。夜仕事さしよにも、此の油の高さでは、儲ける程皆戻る。ヤ戻る次手に戻橋の鐔は戻つたか。一條の御所樣の菊鐔も、九月の御用ぢや合點か。黒鞘が出來たらば、烏丸殿へ渡しておぢや。二口屋のはみだし、猪熊の革柄、なぜに遲いと毎日二三度使が走る。醒井の親粒もまだ入れてやるまいな。三條小橋の下細

は、四天王が嬲殺しの手玉ぞ。」と、貞光季武兩足取れば、公時片手に角を持ち、「えい／＼。」聲して引く程に、難なく首を捻ぢ切つて、左右へさつと退いても退かぬは、夫婦主從、一門一家、緣者親類豐かなる、流れを汲んで源の、氏も繁昌國繁昌、五穀豐饒の民繁昌、蓬萊國の秋津島、治まる御代とぞ祝ひける。

嫗山姥　終

るものか。」と、御簾や几帳に身をちゞめ、顫ひ戰慄き給ひける。關白道理に服し給ひ、奏聞衆議判力なく、撿非違使敕を蒙りて、政盛に繩をかけ、四天王に渡さるゝ。「こは有り難し。」と引伏せ、「サア一人は片付けたり。とても事に清原の右大將高藤といふ大惡人の、鬼神の棟梁も賜はらん。」と言上すれば、諸卿目と目を屹と見合はせ、片唾を飲んでおはします。關白殿眉を顰め、「忝くも高藤は女院の御弟、いかに罪科あればとて、右大將の官人、武士の手へ渡されし古例なし。この儀に於ては叶ふまじ。」と宣へば、「ム、御尤も〱。成らぬ事を是非とは申さず、さらば鬼の繩解け。」とつつとよれば、「ア、〱氣の短い渡邊殿、談合せう綱殿。」と、周章て騷ぎ給ふ處へ、右大將つつと驅け出で、「ヤア推參なる童ども、汝等如き匹夫の分にて某を滅ほさん事、蓮の絲にて大石を釣り下げんとするに似たり。早くその場を立ち退くべし。」と、嘲笑つて立つたりける。綱は堪らず驅け出で、高藤が雙膝掻いてどうど引敷き、「ヤア匹夫とは誰がこと。おのれが罪は、天下一統存じの所、白狀に及ばず。」と高手小手にぞ縛めたり。時を移さず舅中納言兼冬卿、賴光を誘引し參内あれば、叡感甚だ麗はしく、源氏の本領舊の如く、鎭守府の將軍に任ぜられ、兼冬の娘澤瀉姬、四位の女官に補せられ、御祝言の吉日まで、敕諚あるぞ有り難き。扨、「右大將の配所は鬼界が島へ、政盛は鬼神と共に誅す可し。」との綸言。「こは有り難し〱、それ計らへ。」「承る。」と政盛を引き出し、首宙に打ち落し、「殘る鬼神

の實否を糺され、賞罰を願ひ奉る。それ〳〵。」とありければ、公時が繩取にて、三人四方を取り圍み、庭上に引据ゑたる。鬼神は怒り喚く聲、宮中に鳴り渡り、帝を始め月卿雲客、宮女上下の男女まで、恐れをのゝくばかりなり。關白忠平御階近く出で給ひ、「變化退治の武功叡感淺からず、この恩賞によつて頼光出仕御免ある。早々鬼神の首を斬り、淀河の伏漬に沈むべしとの綸言なり。」と、詞も未だ終らぬに、渡邊ゐたけ高になり、呵々と笑ひ、「こは一天の君の敕諚とも覺えぬものかな。もとより罪なき頼光が御免ありとは何の事。鬼神退治の恩賞は、望み次第との御高札によつて、我々一命を擲ち、鬼神を生擒り候へども、未だ洛中に平政盛といふ恐ろしき鬼神住んで、科なき者を讒し、國土を騒がし候。彼奴を我々に賜はつて、この鬼神と一緒に退治仕らん。これ第一の望みなり。」と、憚りなくぞ申しける。關白殿を始め、有合ふ諸卿色を損じ、「威勢盛んの政盛、假令如何なる過りありとも、誅せん事叶ひ難し。何にても外の儀を望むべし。」とありければ、貞光を始め季武公時口々に、「叶はぬ望みをまだ〳〵と申しても無益の至り。此方御無心申さぬからは、其方の御用も承らぬ。この談合さらりつと元へ戻し、この鬼神の繩を切り解き、庭上に放ち、我々も腹掻き破り、共に惡鬼と現はれ、禁裏はおろか日本國中に仇を爲さん。」と、既に繩を切らんとす。卿相雲客、「あら怖や。やれ待て渡邊、麁相しやるな、貞光殿季武殿、公時とやら好い子ぢや。頼む繩解くな。鬼を放してたま

化だに、名劒の德に恐れ、大半滅び失せにける。大將破顏鬼怒りをなし、賴光を目蒐け飛んでかゝるを、公時表に立ち塞がり、「ヤアさせぬ〳〵、顏の赤いが自慢か。其方の顏が赤ければ、おれが顏も眞赤いな。母樣よりの讓りの力の鹽梅見よ。」と、ゆふ日に輝く紅葉ばの、何れをそれと紅の、兩手をかけて組んだれども、二丈に餘る鬼神の姿、二尺に足らぬ公時が、膝節までも屆かばこそ。幾年經りし楠の、根を纏ひたる朝顏の、朝日に消ゆる命の程、危くもまた不敵なり。鬼神いらつて片手を伸べ、公時が胴骨摑んで輕々と差し上げ、微塵になれと投げ付くれば、宙に翻然と跳ね返り、落ち樣に鬼神の兩足、一つに摑んで羽交締、大地にどうど打付け、起き上るを踏み倒し、打ち伏せ捻ぢ伏せ、馬乘にしつかと乘り、一息ほつと吐いたりしは、惡鬼に優りし勢ひ、「實に山姥の御子息、いや〳〵どつ。」とぞほめにける。渡邊、季武、貞光なんど、我も〳〵と馳せあつまり、千筋の繩をぞかけたりける。「オ、心地好し潔し、只此の儘に都へ引け。」「合點ぢやまつかせ。」公時が胴より太き大綱を、確乎と摑んで、音頭「ヤア遣るぞえ、本綱中綱木遣でせい。ヤアてんまのひよえい、えい〳〵。」天魔の通力を悉く滅ぼして、凱陣あるこそ 三重 目出度けれ。斯くて帝都には、高懸山の變化の討手、諸卿詮議ある處へ、大納言兼冬公參內あり。「扨も某が壻源賴光、勅宣の御高札に任せ、江州高懸山に分け入り、變化を生捕り入洛仕つて候へども、勅勘の身を憚り、某を以て奏問仕り候、早く佞臣

斯くて賴光四天王を相具し、鳥も通はぬ高懸山、屛風を立てたる如くなる、惡所を嫌はず主從五騎、木の根に取付き岩間を傳ひ、足に任せて行く先も、次第々々に道暗く、山とも谷とも知れざれば、とある木の根に腰打懸け、少時休らひ給ひける。賴光仰せありけるは、「斯程嶮しき山中を、早二三里も過ぎぬれど、何の不思議なき事は、必定世俗の虛說ならん。實否を糺し重ねて取卷き討ち取るべし。いざ開陣せん人々。」と言はせも果てず、あら恐ろしや、虛空に數萬の聲ありて、「不思議なきや不思議ありや、思ひ知らせん思ひ知れ。えい〳〵。」どつと笑ふ聲、波の打ち來る如くなり。時に向うの松が枝に、五尺餘りの女の首、鐵漿黑に色白く、眼の光赫奕と、川邊の氷一面に、朱を流せし如くにて、につと由ばむ容顏は、身の毛も竪つ許りなり。季武進み出で、「よう〳〵どうも〳〵、鬼の娘に御見もじ、この季武奴が思ひの種、八幡一夜のお情あれ、心中づくなら後とも言はず、今目の前に陸奧の、千曳の石と我が戀と、重き思ひを比べよ。」と、大石を「えいやつ。」と、片手に摑んで投げ付くれば、變化の首は其の儘に、搔消す樣にぞ失せにける。時に山河震動して、雷電稻妻夥しく、二丈餘りの惡鬼の形、火炎を降らし枯木を投げかけ、石上に突立ち、「しうぞくだつばがん〳〵がつ。」と呼ばはる聲に、此處の山陰、谷陰、岩陰、杉の木の間に散亂し、數多の眷屬、一度にどつと喚いてかゝる。「さしつたり。」と賴光鬚切をさしかざし、數萬の中へ亂れ入り、喚き叫んで二重戰ひける。通力自在の變

の勢ひに惡鬼退治思召し立ち給へ。」と、すゝめ申せば賴光、「それこそ武運開くべき瑞相。多くの人數無用なり、主從五人山續きに分け入つて、鬼神が自在に身を變じ、千騎とならば千騎を討ち、萬騎とならば萬騎を討ち、天下泰平の忠義を顯はし、敵を亡ぼす前表、はや打つ立て。」と進み給へば、公時悅び、「オ、鬼神退治面白からう、これ人々、この公時は生所も知らず宿もなき山姥の子なれば、産所も山、産屋も山、育つ所も山なれば、山道の先陣仕る。」と、眞先に立つて出でければ、「オ、でかしたでかした。心に懸る事はなし、母はもとより化生の身、有るとも無しとも陽炎の、影身に添うて守の神、これまでぞ公時。」「これまでぞ我が君。」暇申して歸る山の、峯にいざよふ月かと見れば、まだ中空に暮れぬ日影の、暮れしも通力、庵と見えしも、輪廻を離れぬ妄執の雲水、流れ〳〵て谷に音あり梢に聲ある、風に消え〳〵嵐にちり〳〵、塵積つて山姥となれる鬼女が有樣、見るや〳〵と峯にかけり、谷に響きて今まで此處に、あるよと見えしが、山また山に山廻り、山また山に山廻りして、行方も知らずなりにけり。

第　五

謠 瑤臺霜滿てり、一聲の玄鶴空に鳴く。巴峽秋深し、五夜の哀猿月に叫ぶ。物凄まじき山路かな。

ち寄つて、「ヤイ慮外者。彼方は常々言ひ聞かせし源頼光樣、今日よりお事が殿樣。御奉公精出しましよとまうしやいなう。」とをしへられ、はつと手を突き一禮し、「隨分奉公精に入れ、敵の首いくつでも引拔いて上げましよ。」と、生先見えたる廣言に、御悅びは淺からず。母重ねて、「あの岩窟に熊猪を追ひ入れ置き、折々力を試し見れば、御覽候へ、あの如く引き裂き候。これお目見の印に相撲所望。」といひければ、ずんと立つて窟の口に立つたる磐石、かろ〴〵と取つて投げ退け、兩手を廣げ突立つ處に、內より荒熊飛んで出るを、「どつこいまかせ。」と確乎と抱く。熊事ともせず捻ぢ付けんとすれども、いつかな動かばこそ。搦み付けばこぢ放し、組み付けば押し伏せ、呻き猛る咽笛を、二つ三つ叩きつけ、怯む處を取つて押へ、片足摑んでくる〳〵、二三間かつぱと投げ、「ア、草臥れた、乳が呑みたい母樣。」と、母の膝にぞ憑れける。賴光甚だ御喜悅あり。「例なき強力、母が子にてありしよな。卽ち只今冠させ、坂田公時と名づけ、四王天の四天を表し、貞光、季武、綱、公時、賴光が家の四天王、四夷八蠻を切り靡け、源氏の威光四海に照らさん徵ぞ。」と、各さゞめき合ひたまふ。綱貞光詞をそろへ、「君は知召されずや、近江國高懸山には、惡鬼栖んで國民を惱まし、折々は都方へもあらはるゝ故、諸國の武士に惡鬼退治の宣旨下さるといへども、お請け申す者もなし。武勇に長ぜし武士、鬼神退治あるにおいては、勳功勸賞望みに任せらるべしとの高札、所々に立てられたり。こ

く、人倫離れし山に籠れば、何時の間にかは山廻り、一念の角聳ち、眼に光る邪正一如と見る時は、鬼にもあらず人にもあらず、名は山姥が山廻り、春は三芳野初瀬山、高間の山の白妙に、擬ふ霞もそれかとて、花を尋ねて山廻り、秋はさやけき空の色、かはらぬ影も更科や、姥捨山の名にめでて、月見る方にと山廻り、冬はさえ行く比良が嶽、越の白山時雨れ行く、雲を起して雲に乗り、雪を誘ひて山廻り、廻り〳〵て我が君に、廻り逢ひしも我が夫の、念力通力神力にて、渡邊綱、碓氷貞光、只今是れへ招くべし。あはれ我が子をも譜代の家人と思召し、敵御征伐の御馬の口をも取るならば、父が一期の素懐を遂げ、母が鬼女の苦患を遁れ、成佛得脱疑ひなし。二世の苦しみ助かるも、只大將の御慈悲。」と、角を傾け手を合はせ、平伏してこそ泣き居たれ。斯かる處へ綱貞光、草木押分け、「ヤア我が君是れに御座候。兩人今夜信濃路を通りしに、誰がいふともなく源頼光は、この山の彼方に、あの谷の此方にと、手を取つて引くが如く、覺えず是れまで參りし。」と、申し上ぐれば頼光、鬼女の神變委しく語り、奇異の思ひをなし給ふ。扨兩人を季武に引合はせ、「この上は女が望みに任せ、汝が一子に主從の契約せん。これへ召せ。」と宣へば、はゝは悦び、「快童丸々々々。」と呼びければ、「あい。」と答へてつつと出で、どつかと坐したる顏の色。「なう母樣、あれは何處の叔父樣ぢや。土産貰はう嬉しい。」と、手を叩いて悦びし。愛敬ありて凄まじき、宛ら愛染明王の、笑ひ顏かと誤たる。母立

の武功を押へんと、魔障變化の爲す所、追つかけて討留めん。」と驅け出づるを、「やれ待て、變化と知つて立ち騒げば、彼に心を奪はるゝ。この方は靜まつて却つて彼奴を誑し、嬲殺しに退治せん。さもあれ彼が詞に從ひ、奥の一間を見ずに置かんも怯れたり。」と、主從覗き見給へば、あら凄まじや、五六歳の童、五體の色は朱の如く、蓬の産髪四方に亂れ、餌食と思しく鹿狼猪を引裂きて積み重ね、木の根を枕に臥したる樣、誠の鬼の子これなんめり。知らず我羅刹國に來るかと、身の毛竪つばかりなり。時を移さず主の女、栗を手折つて振り擔げ、歸る處を頼光、膝丸を拔き放し、はたと打てばひらりと外し、ちやうど斬ればぱつと開き、退つて白眼む容顏變り、角は三日月、兩眼は寒夜の星と輝けり。怒れる面にはら〳〵と、飜るゝ涙にくれながら、「うたてや恥かしや、恨みなき我が君に仇をなさんと思はねども、御太刀影に驚きて、自性を顯はし候ぞや。この上は力なき、枯野の薄穗に出でて、身の上懺悔申すべし。我元は遊女の身、坂田何某と幾世をかけし契りの中、夫の父を物部といふ者に討たせ、その敵討たん爲、あかぬ別れの梓弓、夫の運命拙くて、妹に先越され、親の敵を討たぬのみか、その事故に源氏の大將、漂泊の御身と成り給ふ。今生のこの身にて、この鬱憤晴れ難し、腹掻切つて、魂魄汝が胎に宿り、日本無雙の大力、一騎當千の男子と生まれ、敵の餘類を滅ぼさんと、天に訴へ地に叫び、誓ひの刃に伏したりし。それより我が身も只ならぬ、子をもち月の影深

る肩助け、里まで送る折もあり。又或時は織姫の、五百機立つる窗の梅、枝の鶯絲繰り綿、繰り紡績の宿に身を置き、人に雇はれ手間仕事、櫛さへ取らぬ亂れ髪、女の鬼とは理の、世を空蟬の唐衣千聲萬聲の、砧に聲のしつていく、しつていからころ槌の音、谺に響く山彦も、皆山姥が業なりと思ふも見るも人心、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥も、などかは無からざるべき。都に歸りて夜語にせさへ給へや。終夜語り參らせん。」と、庵に誘ひ三重入りにける。小高き所をしつらひ、頼光を請じ奉れば、「いや〳〵左樣になさるゝ者ならず、一夜のほどは檐の下にも明すべし。見申せば一人住の女性、この方へお構ひなく、渡世の營みせられかし。」と辭したまへば、「いや紅は園生に植ゑてもかくれなし。大將軍の御骨柄、まがふ所候はず。實や源攝津守殿は清原右大將平政盛等が讒奏にて、御身を危めさすらへさまよひ給ふとは、山の奥にもかくれなし。それとも名乘り給ひなば、みづからが身の上をも語り參らせん。ヤア定めて旅疲れ、何をがな御もてなし。折節山々の木の實も皆落ち果てぬ。實に思ひつけたり、筑紫宰府の山に、毬栗一枝昨日まであり しもの、これを取つて參らせん。」と、戸外に出でしが振りかへり、必ず〳〵奥の一間を覗き給ふな見給ふな。おつつけ歸らん待ち給へ。」と、岩根を蹈む事飛鳥の如く、山深く飛んで入りにけり。季武横手を拍つて、「筑紫宰府までは五百餘里、今の間に歸らんや。彼奴が仕方言分始めから呑み込まず。君

が嶺木曾の山、昨日は淺間伊吹山、比良や横川の花曇り、雪を擔ひて山樵の、樵路に通ふ花の影、休む重荷に肩をかし、月を伴ふ山路には、雪月花を弄ぶ。心は賤の目に見えぬ、鬼とや人の言はば言へ。よしあし引の山姥が、山廻りするぞ苦しき。暮るゝも早き山陰に、行き暮れ給ひて頼光、道なき方に踏み違ひ、里は何處と誰にかも、東西分かず立ち給ふ。御供の季武四邊を見廻し、「ヤあれに柴刈る女休らふからは、人里も早遠からず、究竟の案内者。これ女この山は何といふ。麓の里へ下る者、導きせよ。」といひければ、「これは信州上路の山の巓。御覽の如く道もなく、麓の道とて東北は五十餘里、秋田の地幾重の谷嶺、繩を渡して橋となし、恐ろしや唐土の蜀川、天竺の流砂、葱嶺とやらんの難所にも優るとかや。北は越後越中の堺川、これも谷二つ越え、十里に餘れば今日の中には思ひも寄らず。おいとしや、我等が方に泊めましたう候へども、何れも若き殿達、この柴嗅が栖家はお嫌であらん。」といふ風情、不束ならぬ山人の、薪に花とはこれならん。頼光打笑み、「イヤそれは逆樣、荒くましき若者ども、和方こそ厭はれん。行き暮れたる山道、柴刈は愚か山姥の栖家でも苦しからず。」と宣へば、はつと驚く容顏にて、「ム、扨はみづからが、山姥と見えけるか。山姥とは山に栖む鬼女、よし鬼なりとも人なりとも、山に栖む女なれば、さ見給ふも理や。誠そも山姥は、生所も知らず宿もなし、只雲水を便りにて、到らぬ山の奧もなく、人間ならずと恐るれど、或時は山柴の、山路疲る

ほうど呆れ、「我十餘年の今日まで、多くの者に出で會ひしが、一度も斯様の不覺は取らず。さもあれ御身只人ならず。包まず語り聞かされよ。なう底の知れぬ對手ぢや。」と、舌を卷いてぞ居たりける。賴光打笑ませ給ひ、「オ、さもあらん。凡そこの土に生あるもの、我が名を知らぬ事やある。源滿仲が嫡子攝津守賴光ぞ。」と、聞くよりはつと飛び退り、頭を大地に摺り付け、「ア、勿體なや〳〵。さればこそ始めより、尋常ならず見奉り候。扨は平政盛、淸原右大將が讒言にて、斯かる御身となり給ふよな。所こそあれこの處にて、あひ奉るも宿世の御緣。我は卜部熊武と申す山賊の張本、向後一命を擲ち、君に仕へ奉らん。御沓取とも思召され候へかし。」と、おもひ入りたる詞の末、賴光御喜色斜ならず、「オ、賴もしし、然らば今日より主從ぞや。子孫に長く武功を傳へ、幾千代かけし壽に、卜部季武と名乘るべし。」と宣へば、「有り難し〳〵。昨日までは追剝、今日よりは忝くも源氏の郎等卜部季武御供申し、山も谷も草も木も、皆我が君の御領內、この山の獸も鳥も蟲も皆傍輩、懸けたる首は傍輩の烏殿への置土產、さらば〳〵。」と見返るや山路歸るや。三重一洞むなしき谷の聲、山高うして海近く、谷深うして水遠し。前には海水漫々として、月眞如の光を挑げ、後には嶺松巍々として、風常樂の夢をやぶる。刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る、諫鼓苔深うして、鳥驚かずとも謂ひつべし。心は昔に變らねども、一念化生の鬼女とや。人は陸奥の信夫の山にあるかとすれば、今日は甲斐

ぐれば、こは如何に、老若男女の血汐の生首、梢にひつしと懸けたるは、たゞ熟柿の生つたる如くなり。頼光些とも臆せず、「ム、言はれぬ狐狸殿、落人と侮つて魂を抜かんとな。シャ物々し。」と髭切抜きかけ、瞬きもせず守りつめて立ち給ふ。時に向うの木陰より、小山の様なる大男、丸駄船を漕ぎ出す如く。ぬめくつて歩み寄り、頼光の足元へどつかと坐りし有様は、追剥の大將と看板打たぬ許りなり。頼光ものさばり聲、「こりや／＼男、汝が面相只者ならず。商賣も合點なり。某は善光寺參詣の上方者、路銀を切らし一宿すべき様もなし。近來無心千萬ながら、和主が常々盗み貯めし、金銀衣類はいふに及ばず、身にまとひし古繦袍、腰にさいた候しも、早々抜いてわたせ、命ばかりは助けてくれん。」と、言はせも果てずから／＼と笑ひ、「ヤアラ丁稚奴が味をやるよ。身が一席の臺詞の裏を食はすは曲者。意地張つて大怪我まくらんより、汝が繦袍腰に指いた赤鰯も、早く此處へまけ出せ。渡さぬだてを吐き出さば、こりやこの首の連中に加へん、西の枝か東の枝か、サア／＼望め。」と詰めかくれど、頼光返答も仕給はず、「ア、この程の旅疲れ、とろ／＼と寐てくれん。」と岩稜に驅け上り、首二つ三つ引摑んで飛び下り、「オ、日本一の枕ござんなれ。」と、兩脚ずつと踏み伸ばし、ゆたかに臥したる御有様、不敵にもまた恐ろしし。山賊いまは堪りかね、柄に手を掛け抜かん／＼と踠けども、神武智勇の名將の、三德兼備の威に押され、眼も眩み腕痿れ、覺えず顫ひ出でけるが、さすがの山賊

らぬ藁沓に御足を痛ましめ、草の露散る影にだに、今は憂き身を置く方も、鳴子に噪ぐ羣鳥の、ちりぢり別れ落ち給ふ、御有樣ぞ哀れなる。美濃のお山は其方とも、いざ白菊や秣刈る、牧の童に道問へば、花によそへて紫蘭々々と子供さへ、侮る蔓葛蔓、這ひ蔓りて行く先を、せき留めよと關が原、日高の杣も打曇り、さつと袂に一時雨、少時宿かる笠縫の、里を遙かに見渡せば、野分に亂す萩芒、野守の鏡埋もれし、浮世の曇吹き拂へ。伊吹の里に檐端吹く、苫は荒みて寂しきも、繪に寫しては美しき、賤が藁屋に立つ煙、消えては結び靡きては、風のまに〳〵立ち迷ふ。ア、人界の善惡に、誘はれ靡く人心、斯くやと許り觀ずれば、五慾七情樣々の、罪を宇留間の里近き、友にも疎く親しきも、不破の中山山深く、木の間に漏るゝ入相の、鐘こう〳〵と物凄く、谷の棧橋と絶えして、峯に妻戀ふ鹿の聲、子を悲しみて猿鳴く、夜半の鵺鳥夜の鶴、涙を添ふる種ならし。暮れ行く空は風絶えて、四方の山々默然と、坐禪の相を現はせば、谷の川音森々と、寢物語は美濃近江、國の堺よ世の中の、盛者必衰の堺かと、我が身に問へば我が答へ、否にはあらぬ稻葉山、後に見なして何時か復、世にも青野が原ならば、今を昔の世語と、思ひ續けて行末は、垂井赤坂青墓も、それぞと許り夕まぐれ、松の嵐のとう〳〵〳〵、さら〳〵さつと吹き下し、雲の往來も餘所よりは、はや暮れ過ぎて物凄く、名をだに知らぬ山中に、茫然として 三重 立ち給ふ。草木繁つて、嵓々たる岨陰横折れし、枯木の枝を見上

かりに五體を投げ、消え入る許りに歎かるゝ、心の内こそ哀れなれ。母は涙の隙よりも、「ア、人は筋目が恥かしい。流石滿仲の御胤にてありしもの、このお心とは露知らず、臆病なりと心得て、賤しき母が口にかけ、言ひ恥ぢしめたる勿體なさ、恐れがまし冥加なや。中有の旅の御供して、言譯せん。」と太刀取り上ぐれば、判官押へて、「ア、不覺なり。御身は慥かに生の母、我ばかりは現在の主君、死なば我こそは死ぬべけれど、賴光斯くと聞召さば、よも存へんとは宣ふまじ。時にはこの子も犬死、我々夫婦も不忠の者、敵の使頻りなり。密かに賴光を落し參らせ、一まづこの首の額に、智識の剃刀を。」戴く天の誠の道、守れば守る御佛に、後世を任せてこの世には、忠義を磨く魂祭、濁りに染まぬ蓮葉の、花を君子に譬ふれば、儒佛の教へ暗からぬ、人の心ぞ賴もしき。

第四

源賴光道行

次第　仇なりと名にこそ立てれ櫻花、〳〵、散りても終に根に歸る、都の春を賴みても、浮世の淵瀬常ならぬ、流れの行方汲みて知れ。源賴光は判官夫婦が情にて、御命遁れしと、又も餘所に杜の下風木の葉の雫、落人の身となり給ふ。戰場出陣の折ならで、召しも習はぬ武者草鞋、それにはあ

なし。」と、櫛笥引寄せ髪を解き、元結取れば髻の中、一通の文を結び込め、「母様參る冠者丸。」と書いてあり。夫婦不審晴れやらず、「扨は覺悟のありけるか、但しは何ぞ望み事でもありけるか。」と、泣く泣く披き讀上ぐる、聲も涙に埋もれて、文の詞もしどろなり。「松は千歳を盛りとし、朝顔は一時を一期とす。萬事は前世に定まる夢、何を現と定むべき。然れば我等滿仲公の不興を受け、判官殿の子となり、十三の春より十六のこの秋まで、養ひ親の御高恩申すにも言葉なく、殊更母の御恩德、七生生まれ替りても報じ難なく存ずる折節、我が首討つて賴光の御身代との志、物陰より見參らせ、望む處と存ずれども、常々母の御不便、荒き風にもあてられず、御身に代へての御寵愛、その期に臨んでは歎きに沈み、よもや討ち給ふまじ。所詮我等、臆病者未練の體を見給はば、御憎しみの怒りの刃、御心安く討ち給はんと、態とさもしき卑怯の最期、命惜しむと思すなよ。西東覺えてより、終に一度も御氣に違ひし事もなく、一生の別れ今はの際、御腹立の御顏容見奉らん悲しさは、來々世々の迷ひなり。さりながら君には忠親には孝、母の貞女の道立てば、身においての悅び、三世の諸佛も照覽あれ、命は更に惜しからず。悲しみの中の悲しきは、年長くるまで母上の御寢間近く起き臥しして、今宵よりの御歎き思ひやられていとほしく、御名殘は盡きせず候。返す〲。」と書き留む。母は文を身につけ首掻寄せ、抱きついてかつぱと伏し、聲を上げて泣き給ふ。思ひ切つたる判官も、「わつ。」とば

くば殺すまい。せめて一言潔く、弓取らしい詞を聞かせ、恥を雪いでくれよ。」とて、聲を上げて歎かるゝ。判官嘲笑ひ、「これ〳〵御邊の心底は顯はれたり。生きとし生ける者、命惜しまぬ者やある。その一命を義によつて捨つるを、弓取武士と名付け、惜しむは賣人土民といふ、左樣の下郎を御身代に取つて何の益あらん。この上は賴光の御運次第。」とありければ、冠者色を直し、「アヽ有り難き御料簡、命一つ拾ひし。」と逃げ出づるを、母とつて引据ゑ、「エ、恥知らず。可愛さも不便さも、ふつつりとさめ果てたり。長き恥を見せんより、母が慈悲ぞ。」といふより早く、拔打に討つ太刀風に、盛りを待たぬ小椿や、首は前にぞ落ちにける。胸にせき來る淚を抑へ、髻提げ夫に近づき、「過去の業拙く畜生を生みながら、人とおもひて育てしは、面目なくも恥かしし。斯かるものを、大將の御身代とは恐れながら、我々が忠孝の志を立て給ひ、御情には君御出世の後までも、この子が最期は健氣なりと、必ず恥を隱して給べ、言ふに甲斐なき最期や。」と又咽せ返るぞ道理なる。斯かる處に外樣の侍六七人馳せ來り、「ヤア右大將より御返事遲しとて、使度々に及び候。急々に有無の御返答然るべし。」とぞ申しける。判官少しも騷がず、「あれ聞き給へ、君の御難儀只今に極まつて、先途の御用に立つ事は、御身誠の志、弓矢の冥加に適ひたり。とてもの事に最期清くせざりし事の殘念さよ。血の別れとて容顏は、賴光に似たれども、丸額と角額、この分にては渡されず、この首に角入れば賴光に擬ひ

も討たれず、爲方盡き、「判官殿はおはせぬか、出合ひ給へ。」と呼ばはれば、「さしつたり。」と、妻戸蹴破り飛んで入る。冠者丸も飛びしさり、互に顔をきつと見合はせ、呆れて詞はなかりしが、母は泣く泣く聲を上げ、「御不審は尤も。やれ冠者丸、右大將より頼光を討ち奉れ、おことを源氏の大將と仰がんとの内通、判官殿の名の大事、お身を害して、頼光の御首と敵を誑し、御難儀救ひ、御身も母も末代に、女の道忠孝の名をとゞめんと、この太刀を幾度か、打付けん／＼とはしたれども、いとしかはいに目も眩み、如何でも母もえ討たれぬ。なう判官殿、はや／＼あの子を討つて給べ。こりや狼狽へな、お主といひ元は兄、お命に代るは本望なり譽なり。母方が賤しうて、未練の最期と笑はるゝな。目をふさぎ手を合はせ、尋常に討たれてたも。」と口說きたまへば、冠者丸顔色さつと蒼くなり、わな／＼顫ひ、「ヤア何と、我等がこの首討たんとや、親分ながら判官殿は元他人、頼みにしたる一人の母、情なや慘らしや。假初の煩ひにも、藥よ灸よと宣ひしは僞りか。首討たるゝ科ありとも、助くるこそ親の慈悲、無情い母や恐ろしや。」と逃げんとするを、母飛び蒐つて引き留め、「エ、淺ましや口惜しや。ヤイ科あつて討たるゝ程ならば、母がこの身を一分試に刻まれても、見殺しにするものか。子の命は親の命、假令御身が思ひ切り、捨てうというても捨てともない、御身が命は御身より、母が百倍惜しけれど、それを殺すは人界の、義理といふ字に責められし、母が心を思ひ遣れ。死にともな

付手元も今の間の、形見と思へば胸逼り、物言ふ聲もしどろなり。「これ冠者丸、現世の親より未來の親が先づ大事。行水せしこそ幸ひ、帷子著替へ身を淸め、御經讀んで父精靈の手向け、若き身とて無常の命、いつ何時の定めはなし、自他平等の廻向しや。」「あつ。」と答へて冠者丸、親の襲ぬる死裝束、その身はそれとも白帷子、思ひ染めぬぞ哀れなる。能勢判官仲國は、「妻の小侍從、賴光を瞞討に打たんとは蟷螂が斧、かへつて御佩刀にかゝり、顯はれては一大事、あら氣遣はし胸安からず。」と、佛間の妻戶に窺へば、靜かにお經の聲聞ゆ。「すはや是れぞ賴光の御聲。かく御心を許されし上は何事かあらん、物音のそよともせば、妻戶一重蹴破つて唯一討。」と、鎺元拔きかけて、耳をそばだて控へたり。冠者丸は一心不亂、誦む御經の日もたけたり。ア、歎くまいおくれまいと、母は刀をするりと拔き、後に立ちは立つたれども、髮黑々と色白に、讀誦の辯舌爽かに、百人にも優れし性質、見るに目も暮れ心消え、太刀振り上げし手も弱り、淚の闇に迷ひしが、「さてかはいやな、後よりこの母が、切り殺すとは露知らず、慈眼視衆生福聚海無量と、誦むが不便やな、親を殺す子に許り、天罰當るは何事ぞ、我が如く子を殺す親にも罰の當れかし。奈落に早く沈みなば、この世の思ひはせまいもの。」と、太刀振り上げては泣き沈み、消え入りては又振り上げ、聲をも立てずかつぱと伏し、からりと投げし太刀よりも、胸を切り裂く思ひの刃、淚玉散るばかりなり。御經も早卷軸の時刻過ぐれど、討つ

取らず二も取らず、源氏の破滅この時なり、いたはしながら討ち奉り、冠者を源氏の大將軍、清和の系圖を繼がせんは、我が身の幸ひあの子が果報。」と言はせも果てず、「ォ、皆まで聞くに及ばず。さこそ思ひて尋ねし事、御首討つて今日の中、用意せん。」と立つ處を、「これなう御身の爲には相傳のお主、世の譏り天の咎め、佛神の怒りも恐ろしし。みづからが一太刀に、瞞し寄つて刺し通さん、場所はこの持佛堂。千に一つも仕損ぜば、聲をかくるを合圖に驅け付けて首取り給へ。」「ォ、潔し、然らば御身討たれよ。次の間に忍び居て、聲次第に驅け出でん。必ずせくまい。」「氣遣ひなされな、首尾よう。」と、別れて座敷に立ち出づる。跡見送つて北の方、「恥かしや、男も女も愼むべきは舌三寸、子を思ふ餘りの詞に心を見探され、疑ひうくるも尤も、詞の言譯まことしからず、所詮御身代に冠者丸が首討つて、賴光の御難をすくひ、邪なき誠の心、この佛こそ證據ぞ。」と、貞女の道を守刀、袂の下に押隱す、數珠も我が子に別れの涙、今日一日を現世未來、障子をさつと明けければ、冠者丸立ち出で、「今日は佛事の日とは申しながら、片親にてもある者は、別きて祝日、目出度きお顏見せ給へ。」と、莞爾なるを見るにつけ、母は心も亂るれど、さあらぬ體にて、「ォ、この祝日に、髪をも結はず、取上髪は何事ぞ、賴光樣は何方に在す。」「さん候。築山の涼み處に御入り、我等もお側にありけるが、殘暑凌ぎ難く、行水いたし髪も解き、自鬢に取り上げ見苦しからん。」と、つと搔き撫づる手

心にも懸子なし。御身も亦偽りなく、眞直に返答あらば、語るべき事あり、心底聞かん。」とありければ、「ア、今めかし。何事か存ぜねども、常にも偽り申すにこそ。殊に大事の盂蘭盆の、年に一度のお客の精靈、佛の前にて露程も、虚言の御返事致さうか。語らせ給へ。」と仰せける。判官首肯き、懐中より文一通取り出し、「コレこれ見られよ、頼光これに御座の由、右大將傳へ聞き、急ぎ詰腹切らするか、但し密かに刺し殺すか、首打つて出すに於ては、一子冠者丸は由緒ある者なれば、源氏の大將と奏聞し、取立てんとの文に、起請を書き添へこされたり。されども某かかる非道に與すべきか、頼光を密かに落し奉り、右大將より咎めに逢はば、腹切るまでと心に藏め、打投つて置きけるが、御身昨日の口說き事、偶く滿仲の若君を誕生せし甲斐もなく、平人の判官が子と埋もるゝ冠者丸、明暮本意なく悲ししと、水に住む蝌斗まで思ひつゞけて悔みの體、母たる身にては道理なり尤もなり。畢竟この判官が爲には、我が子にて子にあらず、現世の親とは御身の事。頼光を失ひ冠者丸を世に立つべきや、後悔の無き樣に、心の底を眞直に聞かまほしし。」とありければ、小侍從はつと胸塞がり、文繰り返し、卷き返し顔を傾け目を塞ぎ、胸に手を組みさし俯き、思案とり〳〵さま〳〵に、少時答へもなかりしが、「ア、實さうぢやもの、なう判官殿。假令頼光樣此處を助け落しても、かくまで榮ゆる右大將、御首を見ずしては、雲の裏にもよもや助け置くべきか。時には冠者丸も世に出でず、一も

が手足となり、常の蛙となる故に、歎き悔むと傳へしが、それは天地自然の道理、みづからはたまたま、源氏の大將を産み落せし悦びは夢なれや。覺めては平人の子と成り給ふも、この母が戒行の拙き故と、積る涙は濁江に、夜晝泣かぬ隙もなき、蛙に劣りしこの身や。」と、御前も人目も打忘れ、かつぱと伏して泣きければ、君を始め渡邊貞光諸共に、皆々袖をぞ濡らさるゝ。稍あつて頼光、「小侍從の悔み至極ながら、子を見る事父に如かずといへり。滿仲の深き御心入こそありつらめ、今右大將政盛等が逆威に責められし頼光が、弟美女御前とあるならば、かく安穩にあるべきか。判官が子となりしゆゑ、先づ此の度の難を遁れし事、父の慈悲のこれ一つ。御勘氣の上からは、元のごとく出家ともなし給はず、判官が子に賜はつて、弓矢の家を立てさせらるゝ、父の慈悲のこれ二つ。我世に出でてもあるならば、末を見よや三つの慈悲、親の形見は兄弟ぞ。」と、打涙ぐみ給ひければ、判官親子は、「あつ。」と許り、渡邊も貞光も、末頼みある源氏の光、挑げ添へたる燈籠の、影に門出の杯や、御暇賜はり三重立つ雲の明くれば七月十五日、亡魂祭る持佛堂、北の方は只一人、香を燻き水手向け、捧ぐる花は蓮葉の、露の數々亡き人の、頓證菩提と廻向の折柄、判官立ち出で、同じく香花奉り、暫く念誦事終り、「なう小侍從、あれ見給へ、本尊は三世常住の佛菩薩。殊に今日は盂蘭盆にて、親祖父の聖靈、滿仲公の亡魂も、この持拂堂に來らせ給ふ。尊靈の御前にて申すからは、詞にも虚言なく、

と、あの子が果報の薄き事、日頃くよ〳〵思ふ事、思ひ餘りて涙がこぼれ、御祝儀を醒せしぞや、御大將にも綱殿も御存じ、貞光殿への物語。妾は初め小侍従の局とて、御父滿仲公に宮仕へ、源氏の胤を身に宿し、誕生せしはあの若、美女御前と付け給ひ、御寵愛ありしかど、賴光樣の御母、御臺所の御心を憚り、出家にせんとて、十一の春より十三の秋まで、山へ上せ給ひしに、經の一字も習はず、斬つつ張つつの弓馬の藝、滿仲公の御憤り、なだめても歎きても、御憎み晴れやらず、藤原仲光に仰せ付けられ、首打たるゝに極まりしに、情ある仲光忠義を重んじ、我が子の幸壽丸を害し、あの子の首とて見せ參らせ、當座の命は助かりしが、終にその事顯はれ、二度の御勘氣御立腹、御親子の緣切れて、妾一所に判官殿に下され、今みづからは能勢判官仲國が妻、あの子は一子冠者丸とは申せども、元は滿仲公の御子賴光の御弟、美女御前にて在す。ア、悲しきかなや、同じ源氏の種と生まれ給ふほどならば、御臺所の御腹にも宿り給へかし。然らば出家の御沙汰もなく、賴光樣は大將軍、あの子は又副將軍と、千騎萬騎の軍兵も從へ靡け給はん御身の、末代に殘る源氏系圖の卷にさへ、美女御前といふ名を削つて入れられず、漸うと鄕侍、鋤鍬取の大將とは、痛はしとも淺ましとも。數ならぬこの女の腹をからせ給ふ故、御出家と仰せ出されしが、果報の花の散り初め、井出の蛙の蝌斗の、小さき時は尾鰭あり、宛然魚の如くにて、母蛙が親に似ぬ、龍を生みしと悅べども、次第に尾鰭

海を一呑みにし、萬民の歎き遠かるまじ。兩人お暇賜はつて、都の體をも窺ひ、諸國の御家人驅り催し、科なき旨を奏聞し、佞臣原一々に搔首し、御本意遂げさせ奉らん。如何にしても、此のやうに安閑としては、筋骨たるんで精根盡き果て候へば、はや御暇。」とぞ申しける。賴光聞召し、「我も然こそ思ひつれ、さあらば兩人は伊勢路紀路へ赴くべし。我は又北國にかゝり、源氏志の勢を集め、都九條六孫王の誕生水にて出で會はん。門出といひ、貞光には未だ主從の杯せず。名乘の一字を讓る上は、向後源氏の家の子ぞ。」と、御杯を下さるゝ。貞光退つて頂戴し、「天が下に二人ともなき大將軍を主君に持ち、下地の勇力十倍增し、一騎當千と思召され。」と、三杯續けてつつと乾す。能勢判官座を立つて、「オ、目出度し〳〵。貴殿、渡邊殿の武勇にあやかり申す爲、其の杯を一子冠者丸に下されかし。」とありければ、「お辭宜も申すべけれども、武勇にあやかり給ふ爲、お望みに任せん。」と、さす杯を冠者丸、戴き〳〵敬ふ體、母は見るより打萎れ、袂を顏におし當てて、包む淚も自ら、聲に現はれ色に出で、人々、「これは。」と御座敷、興醒めてこそ見えにけれ。判官見かね、「御祝儀の折柄、不吉の落淚狂氣したるか、罷り立て。」と引立つる。渡邊とゞめて、「オ、尤も〳〵、貞光の杯不足に思はるゝこと、母御の氣には道理至極、此處は綱が頂戴せん、冠者殿いざ指し給へ。」といひければ、母は漸う淚を押へ、「御不審は御理。貞光殿をゆめ〳〵輕しむにても候はず。我が身の運の拙さ

數々廻る杯の、影に映ろふ燈籠の、色をかへ品をかへ、切籠太鼓のなりも好し。籠に入れたる造り花、桔梗、蓮葉、藤の花、風に揉まれて百合の花、〽あの奥山の一本薄、何時穂に出でて亂れ、亂れあふひの花菖蒲、我が思ひは深見草、誰か憐れとしら菊や、紫苑岩菲に罌粟子、繍線菊の花桶に、枝垂櫻や絲柳、水なき空の釣舟も、焦るゝ色の紅椿、手鞠山吹杜若、歌仙の姿おきあげに、文字を透しの透し燈籠、額燈籠、手際優しき花葛、振分髪を比べ來し、井筒燈籠井戸屋形、這ひ纏はるゝ朝顔の、花の臺の輪々毎に、燈す燈火きら〳〵と、さながら秋の、螢飛び交ふ宇治川の、網代燈籠、緞子燈籠、洲濱團扇、唐團扇、扇車に水車、油煙につれてくる〳〵と、廻り燈籠、影燈籠、月も更け行く夜嵐に、廻れ〳〵、品よく廻れ風車、小車の花見車に忍びの車、ア、〳〵百夜の車、餘所に主ある袖引くな、袖褄引くな女郎花、戀を菫か美人草、四季に色ある造り花、手を盡してぞ飾りける。賴光甚だ興に乘じ、酒宴酣の折から、渡邊綱碓氷貞光御前に罷り出で、「實に此の度判官殿の忠節にて、我々まで安座の段淺からず候へども、何時まで斯く悠々としてもあられず。御大將は誰あらん、忝くも六孫王の御孫、攝津守、源賴光。郎等には先づこの渡邊、新參の碓氷貞光、一席に唯二人なれども、兩腕に百人宛、胴骨にも百人宛、押取つてこの座に許り六百騎、何を浮々待ち給はん。惡道には加擔人多く、直なる道には入る者尠なし。右大將が威勢をかつて、平家盛んの世とならば、政盛四

せませ。」と、姫君に一禮し、「今よりは我何處を其處としろ。」妙の、三十二相の容顏も、怒れる眼物凄く、島田解けて逆樣に、たちまち夜叉の鬼瓦、唐門、樓門、四脚門、塀も築土も飛び越え跳ね越え、跳ね越え飛び越え雲を分け、行方も知らずなりにけり。

第三

佞人の詞は甘きこと蜜の如く、人を損ふ事刃よりなほ速かなり。清原右大將、平政盛に荷擔し、源頼光武勇に誇り、狼藉者を引込み民家を騷がし、我々が手の者大勢討取り、剰へ都まで切り上らん企て、上を輕しめ下を傾け候。」と、再三讒訴しきりなれば、終に寗成乳虎の牙にかゝつて、郅都蒼鷹の忠臣の翼も折れ、勅勘の身と成り給ひ、美濃國能勢判官仲國は、累代の被官といひ、内緣深き好みによつて、暫時忍びおはします。判官の妻小侍從、一子冠者丸十六歲、夫婦親子等閑なく、家内の男女いたはり仕へ奉り、御心置く方も、夏過ぎ秋も始めなる、西面の欄干に、色々の燈籠を飾らせ、この夕暮の御徒然と、御杯を參らすれば、賴光も淺からぬ、淺茅が露に燈籠の、光り合ひつつ玉しける、昔の秋を思し出し、數杯を傾け興に入り、長歌作り朗詠し、謠ひ給ふぞ面白き。

燈籠の段

山深谷を栖家とし、生まるゝ子を養育せよ。さらば〳〵。」と諸共に、劒を拔けば紅の、血は白雨を爭ひし、最期の念ぞ凄まじき。あら不思議や、切口より火焔の轉がせ、女房が口に入れば、「うん。」と許り其の儘息は絶えてけり。斯かる處に若侍五六十、無二無三に羣つて、館の四方をおつ取卷き、「ヤァ〳〵兼冬。右大將高藤公より、汝が姫を召さるれども、賴光と緣組とて承引なき條憚り千萬、それによつて姫を引立て來るべしとの御使。亂れ入つて奪ひ取れ。」と、をめき叫ぶその聲に、兼冬公驚き給ひ、「ヤァ主ある娘を奪はんとは、人畜類の右大將、返答するに及ばず。あれ追つ散らせ。」と宣へども、言ふに甲斐なき公家侍、防ぐ方なく見えたる所に、伏したる女むつくと起き、表に立つたる奴原を、取つては投げ〳〵、姫君の在す御簾を圍うて立つたるは、宛然鬼女の如くなり。政盛が家子太田太郎、「數にも足らぬ下種女、何事か仕出さん、あれ引き出せ。」と下知すれば、「なに某を女とや。オ、女ともいへ、男なりけり胎內に、夫の魂やどり木の、梅と櫻の花心、つまとなり子と生まれ、思ふ敵をうつ蟬の、身體は流れの太夫職、一念は坂田藏人時行、その驗これ見よ。」と二抱へ餘りの椋の樹を、片手捩りに、「エィやつ。」と捻ぢ折つて、寄り來る奴原ばら〳〵、はらり〳〵と薙ぎ立つるは、人間業とは三重見えざりけり。この勢ひに恐れをなし、返し合はする者もなく、皆ちりぢりに落ち失せけり。「オ、さもさうずさもあらん。我が魂は玉の緒の、お命恙なく、行末長く待た

らで、娘をころりと落したと、首をころりと落すとは、雲泥萬里。」と恥ぢしむる。時行はうど行き詰り、「アッァ左樣ぢや過つた。然らば是れより賴光の御行方を尋ね、御家來となり、御威勢をかつて、政盛が首引き拔かん。」と驅け出づるを又引留め、「たつた今恥ぢしめた舌も引かぬに無分別。武勇正しき賴光樣、御内には渡邊源五綱とて一騎當千の兵、同じく碓氷荒童、鬼も欺くその中へ、生溫い姿をして、妹に先越され、敵を討たぬ無念故、御奉公致したいと言はれうものか、言はしやるか。お取上も無い時は、すご／＼とは戻られまい。棒戴いて戻ろより、往かぬ方がはるかに優し。どうぞ分別は無いかいの。ヱ、情ないお人や。」と、突き倒してぞ泣き居たる。時行道理に責められて、行きつ戻つつ齒嚙をなし、拳を握り立つたりしが、「もうこの上の分別なし。」と、革籠の中より、氷の樣なる鎧通押取り、腹にぐつと突き立て、脊骨をかけて引き廻す。女房「これは狂氣か。」と縋りつけば、「アッ／＼音高し／＼おことが今の惡言は、伍子胥が吳王を諫めたる、金言より猶重し、恐らくこの一念、項羽紀信が勇氣にも劣るまじと思へども、時來らねば力なし。それまでまだ／＼存命へ、臆病者腰拔と指ざされんは、無念の上の無念なり。我死して三日が内、御身が胎内に苦しみあらば、我が魂やどりしと心得、十月を待つて誕生せよ。神變稀代の勇力の男子となつて、今一度人界に生まれ出で、政盛右大將を亡ぼさん。おことが身も、今日より常の女にこと替り、飛行通力あるべきぞ。深

仇口、エ、恨めしや。」と許りにて、無念涙にくれければ、女房いよ〳〵嘲笑ひ、「ム、あのまが〳〵しい顔わいの、親の敵は幾人あるぞ。此方の妹御絲萩殿とやらんが、先月二十三日、佐夜の中山で討ち給ふ物部平太は、敵ではないかいの。」時行はつと驚き、「何妹が敵平太を討つたるとは、必定か。」「サ定か實か、碓氷の荒童といふ人を語らひ、易々と討つて、源の頼光様を頼み、騙け込みしとは日本に隱れ無い事。」と、聞きもあへず、「南無三寶、天道にも見放され、弓矢神にも捨てられし、口惜しの運命や。」と、我が身を摑んで泣き居たり。女房側に立寄つて、「これなう今悔んで濟む事か。忝くも頼光様、妹御をかくまへ給ふ遺恨によつて、敵の主人右衛門頭平政盛、清原右大將と心を合はせ、頼光様を讒奏し、敕勘の身となり給ふ、これ程大きな騷動を今まで知らぬとは、狼狽者の浮名を世間へ觸れうといふ事か。前後を思案して下んせ。日頃の心に似ぬの。エ、おとましい、世に連れて心までが腐つたか。」と、縋り付いて泣きければ時行突立ち、「扨は敵ゆゑ、頼光の御難儀となつたるとや。妹に先越され、親の敵は討たずとも、政盛右大將は敵の敵なり。いで二人が首取つて頼光の御恩を報じ、名字の恥を雪がん。」と躍り出づるを引留め、「それ〳〵それは悉皆氣違か。討つに討たるゝ程ならば、頼光様に油斷があらうか。彼等は威勢眞最中、討たれぬ仔細があればこそ、日陰のお身となり給ふ。此方が今騙け出して、心易く首取らうとは、重ねて恥がかきたいか。此方が今まで徒

座んする。ア、あんまりしやべつて息切れた。お茶一つくださんせ。」とぞ語りける。姫君をはじめ腰元衆、「さて心中の女郎や。假令如何なる身になつても、おもふ男と添ふからは、面白からう。」と宣へば、「されば末を聞いて下さんせ。その男の父親が、暗討に討たれ、敵討たねば適はぬと、私とは緣を切り、行方もなう別れて、親の敵を狙ふとは、跡方もない赤譃。我が身に秋風立ちけれども、何を潮に退かれもせず、親御樣の死なんしたを、屈竟一の託言に、敵討との口上は、釋迦でも一杯參る事、まんま私を誑り、女房には紙衣を著せ、その身はちやんと榮耀らしい、若い女中に立交り、三味線彈いて居けつかり、くさりくさるを見る樣な、日本國の姫御前の、因果を一つに固めても、我が身には及ぶまい。初對面の皆樣へ、ありし昔の懺悔話、お恥かしや。」とばかりにて、おろおろ涙にくれければ、「オ、道理々々、身にかゝらぬ此方とさへ、煙たうて堪られぬ。さりながら、構へて短氣な心を持ちやんなや。未だ話したい事もある、奥へ通せ。」と姫君は、簾の内へ入り給へば、「サア苦しうない奥へおぢや、此方へ此方へ。」と人々は、皆々一間に入り給ふ。跡見送つて八重桐、さらば奥へ參つて、憎さも憎し男の懺悔、言うてのけうと入らんとするを、時行取つて引き戻し、はつたと睨め、「エ、流石は流れの女ぢやな、親の敵を討つまでと、相對づくの離別ならずや。只今の詞は誰にいふあてこと、未だ敵の行方は知れず、心を碎く夫の體、哀れとも思はず、おのれが榮耀に引き當てて、面白さうな

ぬ嫌ぢやぞや。サア男を給るか給らぬか、否か應か應か否か、二つに一つの返答が聞きたい。』と、胸づくしを引摑む。此方も一期の大事ぞと、弱身を見せず『こりや小田卷とやら、くだ卷とやら、ひかりは喰はぬ出直しや。この廣い日本に、あの人ならで男は無いか。よし無いにせよあるにせよ、それ程ゆかしい男なら、何故に先に惚れなんだ。男盗人いき傾城。』と、言ひさま取つて投げつくれば、明障子打ち破り、繼三味線を踏み碎き、緣より下へころ〳〵〳〵と、這柏槇までこけかゝり、木槲南天めつきり〳〵、切石の上に眞俯向、衂は一石六斗三升五合五勺。『そりやこそ喧嘩が始まつた、大事の此方の太夫樣に、負をつけては叶ふまい、加勢をやれ。』と言うた程に、遣手、引舟、仲居、飯焚、出入の座頭按摩取、巫女山伏に占算、雪駄片足に下駄片足、草鞋懸で來るもあり。臺所から座敷まで、『太夫樣の仕返し。』と、彼處では叩き合ひ、此處では撲ち合ひ踊り合ひ、茶棚竈煙草盆、當る物を幸ひに、打滅ぐ打破る踏み碎く、めり〳〵びしやりと鳴る音に、『そりや地震よ雷よ、世直し桑原桑原。』と我先にと逃げ樣に、水桶盥にこけ掛り、座敷も庭も水だらけになる程に、『南無三海嘯が打つて來るわ、なう悲しや。』と喚くやら、祕藏の子猫を、馬程な鼠が咥へ驅け出すやら、屋根では鼬が躍るやら、神武以來の悋氣爭ひ、この事世上に隱れなく、かの男はその場より、親御樣の勘當受け、我が身も郭を夜脫して、根本戀路の浮名取る、鍋の蓋取る杓子取る、馴れぬ世帶のその日過、男め故で御

煙草賣の源七も、何心なく側近く、顏と顏とを見合はすれば、「ヤァ離別せし女房、南無三寶。」と木隱の、女はそれとみづくさき、男畜生人でなし、赤恥かかせて退けうかと、飛び立つ胸も人目の關、押し鎭め〳〵、心を碎き折々に、後目に睨むも戀なれや。姬君何の氣もつかず、「これなう紙衣、和方の物ごし凄外れ、如何樣常の女子でなし、さうした姿になりやつたは、定めし深いわけあらん。一河の流れも他生の緣、包まず語りや。」とありければ、「ア、何方かは、お優しいお詞、おたづねなくとも言ひ度うて〳〵、胸のたぐる折しも、さらばお話申しませう。恥かしながら、私が昔は憂き河竹の傾城、荻野屋の八重桐とて、大夫仲間の立者と、言はれし程の全盛の、末も遂げぬ仇戀に、登り詰めて此の通り。夜な〳〵替る大盡の、中も坂田の某とて、水揚の初日より、ふと逢ひ初めて丸三年、何が互の浮氣盛り、上る程に〳〵、忉利天の中二階、夜晝なしの牀入に、懸鯛樣と異名を受け、水も漏らさぬ中なりしに、又同じ郭に小田卷といふ太夫、かの男にゆきつきて、每日百通二百通、書きも書いたり癡話文は、大方馬に七駄半、船に積んだら千石船、車に載せたらえいやらさ、木遣でも音頭でも、祈つても呪うても、微塵けもない二人が中、いよ〳〵募つて逢ふ程に、小田卷大きに腹を立て、忘れもせぬ八月の、十八日の雨上り、月は山より朧染の、裲ひらりと取つて捨て、白無垢一衣にひつしごき、脛もあらはに驅け來り、私が膝にふうわりとんと居懸つて、これ八重桐、「あんまり見られ

もう面白い。何を言ふもお氣慰め、平に賴む。」と強ひられ、源七下地好きの道、「てんほのかはやりませう。」と、箱より出す三味線の絲は昔にかはらねど、彈くその主の成れの果て、親の撥駒紙駒の、音色優しく三重彈きなせり。紙衣の袖に置く露と、共に離れし妹脊の中、あはれ昔は全盛の、松の位も多枯れし、風呂敷包行く先は、知らぬ旅路にとぼ〳〵と、築地のかげに休らへば、「ヤア珍らしい三味線。なんぼ大内方でも、しやれの浮世。」にめぐり來る、車寄よりたち聞けば、「ハア、不思議やあの小唄は、我が身郭にありし時、坂田藏人時行殿に馴れ染め、作り出せし替唱歌、かの人ならで誰が傳へた懷かしや。何卒入り込み見たい物ぢや。」と、出放題に聲張り上げ、「これは浪花の遊女町に、誰知らぬ者もない傾城の右筆、濡一通りの狀文なら、恐らく私が一筆、叶はぬ戀も假名書筆、びらりしゃらりのかすり墨、生娘、遊女、妾者、後家、尼、人の女房まで、段々の書分は、私が家の傳授事、若しそんな御用なら、お賴みあれ。」とぞ言ひ入れたる。奥には女中耳を澄まし、「さつても變つた賣物、いざ呼び入れて、癡話文書かせてお慰み。更科掃部呼んでおぢや。」「あい。」と答へて、二人連にて走り出で、「これなう、傾城の右筆殿は此方か、この御殿の姬君、何やら其許に御用ある、此方へいざ。」と手を取れば、「ハア御用とは何ならん、おめもじ樣に。」とゆふ顏の、庭の飛石すな〳〵、ちよこちよこ〳〵と奥座敷へ何の遠慮もなみ居たる、內裏女郎に揚うてせぬ、何れそれしやと見えにけり。

枕、この長の夜を誰と寢よ。おりや泣くまいと思へども、涙が如何も堪忍せぬ。怺へてたも。」と、はらはらと玉を貫く御目元、腰元茶の間仲居まで、「お道理樣や。」と諸共に、貰ひ涙にくれければ、お局は氣の毒がり「ア、何ぞいの、お力はつけもせで、和女衆までめろ〳〵と、忌々しい置いてたも。ヤアそれはさう、煙草賣の源七はまだ見えぬか。氣さく者の通り者、今にも來たらお姫樣、まじくらに迎鬼して遊ぶまいか。」「こりや氣の替つた思ひつき。早う煙草が來れかし、煙草々々。」と待つ宵の、松葉煙草の柔かき、女中仲間ぞ賑しき。昔は色に上り詰め、今は浮世に下り坂田時行と、埋もれし名も父の仇、晴らさんと思ふ志、厭かぬ夫婦の中をさへ、三行半の生別れ、袖は涙の革行李を、今は身過と引つかたげ、「刻み煙草油引かず。」と賣り歩く。「そりや煙草が來たわ。」と腰元中、「早う〳〵。」と呼び入れ「これ源七、先づこの革籠は預る、尻褰げも下しやいの、お姫樣より御意がある。そなたも以前は歷々で、惡性ゆゑに仕損ひ、その姿になりやつたげな。傾城とやら郭とやら、大内には珍らしき、三味線の一曲を、常々のお望みゆゑ、コレ三味線も調へ置く、サア〳〵所望。」とありければ、「アアつがもない。尤も以前は傾城の一つ買も仕り、三味線、鼓弓、淨瑠璃、文作、のら一巻の諸藝なら、此方へ任せておく座敷に、吉野の山の連彈も、昨日の昔今日は又、吉野煙草の刻み賣、股引がけで三味線とは、茶漬に鯷のお望み、ひらさら御免。」と逃げ出づるを、女房達引留めて、「その言ひ樣が

白し心地好し、君に追つ付き奉らん。疾う〳〵急げ。」どう〳〵、どうと蹈んだる街道も、武勇の道も一筋に、古參の渡邊、新參の碓氷貞光奉公始め、門に手柄をあらはして、二王二天に四天王、出づべき兆と聞えける。

第二

※松浦潟領巾麾山の石よりも、積る思ひはなほ重き、岩倉大納言兼冬公の御娘、澤瀉姫と申せしは、源頼光と御緣邊の契約も、互に待てば久方の、月日重なり年も立ち、情盛りも徒らに、右大將高藤が讒言ゆゑ、頼光は行方なく、御文の音信さへ、枯野に弱る秋の蟲、世に便りなき憂き節に、若し御短慮の事もやと、御寢間の奉行不寐の番、女中の外は男混ぜずの大役は、女護の島に異ならず。お局の藤波御側に立寄り、「なう爰な御子、何故に浮き〳〵なされませぬ。これ程大勢集まつて、浮世噺の高笑ひも、皆御前を諫めの爲。お煩ひでも出た時は、親御樣への御不孝、日頃のお氣には似合ひませぬ。」と、いさめられても勇まぬ顏、「ア、又局の氣詰りな、意見聞きたうない。日本國の花紅葉を、今この庭に移しても、何の心が勇まうぞ。吉日極まり、頼光樣へ嫁入して、今頃はお腹に帶をも結ぶはずを、あの右大將づら奴に妨げられ、剩へお行方知れず、何處を當處に一筆の、問はせの文さへ長

供人大半討たれ、貞光流邊只二人、攻め來る敵の眞甲、腕骨、胴切、たてわり、車切、薙ぎ立て〱三重 追ひまくる。さしもの大勢、しどろになつて見えけるが、近郷の農人浪人ども、右大將が威勢に與し、我も〱と入れ替へ〱、射る矢は雨の如くなり。貞光も渡邊も、心は彌猛にはやれども、飛び道具を防ぎかね、「なんと貞光、若し我が君にかすり矢でも當つては末代の瑕瑾、一まづ落し奉らん。」と彼方此方と見廻れども、皆高塀に周圍は堀、裏門堅く鎖したり。「ヤアこの門一つ押し破るは易けれども、跡より寄手の込み入るもやかましし。上へそつと持ち上げて、蹴込の下より落し申さん。」「尤も。」と棟門高き瓦葺、尺に餘りし四角柱、二本を二人が面々に引抱へて、「ヤアえいやうん。」とさし上ぐれば、さしもの大門礎離れ、天より吊つたる如くなり。頼光も笑はせ給ひ、「門を守る金剛力士、二王を家來に持つたれば、我が行く先は關もなし、女は兄が行方を尋ね、兄弟打連れ來れ。一足も早落ちよ、我は美濃路を上るべし。汝等もあらましに切り散らして追ひ付け。」と悠々として退き給ふ、御有樣ぞ不敵なる。その隙に寄手の軍兵、餘すまじきと込み入つたり。兩人「今は心安し、雜人原一人宛切つては手間どほはか行かず。後日にこの門建て直して遣る許り。」と、門柱引放し、手々に提げ、大勢を左右に受け、醉象が岩を割り、飛龍の波を叩くが如く、はらり〱と 三重 薙ぎ立つる。馬も人も堪らばこそ、さしもの大勢打挫がれ、高藤政盛力なく、跡をも見ずして逃げ去れば、「オ、面

二人はあつと頭を下げ、悦び涙を流しける。かかつし處へ、平政盛大勢を引率し、門を叩いて、「ヤアヤア頼光。忝くも右大將殿の御前近く、人をあやめし暴者をひつ込み、天子同然の右大將殿を輕しむるは、朝敵にもまさつたり、女童に縄をかけ、頼光渡邊主從共に切腹せよ、異議に及ばば蹈ん込んで、片端に蹈み殺さん。」と、傍若無人に罵つたり。渡邊くつ〳〵と吹き出し、「ヤア天子同然とは誰が事。おのれ等腕は叶はず手は立たず、口ばつかりは人らしく、官位を以ての脅しは喰はぬ〳〵、さりながら、ぎしみ合ふも大人氣なし。サア渡す、請取らば取つて見よ。」と門の戸さつと押し開き、すつくと立つたるその勢ひ、政盛主從色違ひ、膝わな〳〵とぞなりにける。荒童續いて飛んで出で、「これ旦那。宵までも旅籠屋の下種喜之介、今は頼光の御家人碓氷貞光。渡せよ出せと言はずとも、幸ひ此處も旅籠屋なり、此處へ來て搦め捕れ。サア入らんせ、泊ぢやないかえ。旅籠の料理はお望み次第、頭から爪先まで、刻んで〳〵ざく〳〵汁、眞二つに胴切の血腥い燒物、冥土の道は合宿なし、焦熱地獄の水風呂も沸いて御座んす。ざつと行水阿鼻地獄。泊らんせ〳〵、泊ぢやないか。」とまねきける。右大將高藤遲馳せに驅け來り、「ヤア臆したるか政盛、頼光渡邊なればとて、鬼神にてもあらばこそ。後詰は高藤。」と、いふより政盛いきり出し、「乘り込んで蹈み潰せ。」「承る。」と切つて入り、源氏方にも餘さじと、兩勢どつと入り亂れ、火水になれとぞ三重戰ひける。頼光は忍びの旅、小勢の

俱に天を戴かぬ恨みを、一太刀報ぜんと狙へども、一人の兄は行方知らず、女の力にかなひがたき物語見捨て難く、今宵清原右大將の泊に敵を見出し、思ひのまゝに討取り、首持參仕る。打物は此の太刀、この女が重代、智慧文殊の化身と傳へし、平泉の文殊寶壽が千日潔齋して鍛つたる利劍の驗、片手なぐりの一打に、御覽候へこの大首、女が持つたる髭一房、兩股兩膝只一刀に、大の男七つに斬つたる業物、今宵の御情を謝せんがため、この女が獻上、御佩替とも思召さば、生前の悦び、なほ御芳志には死骸を隱し給はれ。サア今生に思ひ置く事はなし、いざ來い刺し違へん。」とつつと寄る。

「やれ渡邊、あれ止めよ。」と押し分けさせ、太刀を拔いて御覽あれば、明々として芙蓉の開くが如く燒刃は星の列なる如く、光は波の涌くが如し。「唐土晉の武帝天下を治めて、呉國の方に紫の雲氣立つを怪しみしに、雷煥と言ふ者天文を考へ、土中を掘つて干將莫耶の二劍を得たり。然るにこの宿に當つて紫の雲氣靆きし事、遠き異國の昔を思ひ、必ず名劍あるべしと、鷹野に事よせ一宿せしに、今宵この太刀手に入ること、源家の武功天に適ひしその威德、首を討つ餘りの鋒、風にも散る髭を切り、兩膝かけて落ちたる事、日本無雙の名劍。名は體をあらはせば、則ち髭切膝丸と名づく可し。」と、謹んで頂戴あり、御子孫長く傳はりし、和國の寶となりにける。「扨その女に兄もあるとや、重ねて故郷へ送るべし。荒童には我が賴光の光を讓つて、碓氷貞光と名乘り奉公せよ。」との御諚の趣、

で地蹈鞴蹈んで、「エ、口惜しや無念やな、政盛に對つて詞なし。よし地を潛り雲に入るとも、高藤が威勢にて、搦め捕らで置くべきか。追つ驅け討取れ者ども。」と、怒れる聲は松吹く嵐、月日に擬ふ目の鞘の、佐夜の中山手分をして、上を下へと三重返しける。二人は漸う宿端まで走り著き、ふり返れば追手の提灯八方を取卷きて、落ちんず樣こそなかりけれ。「エ、口惜しや、なまなか追手に討たれんより、御身を害し、腹切らんとは思へども、敵に首を取り返され、我等が首をも渡さん事、骸の上の無念なり。誰が泊か知らねども、此處を賴んで刺し違へ、死骸を隱して貰はん。」と、碎くるばかり門の戸叩き、「粗忽ながら我々は、親の敵を討つて立退く折柄、追手嚴しく候へば、何方かは存ぜねども、御庭を借り切腹仕りたく候。御惠み賴み奉る。」と大音上げてぞ申しける。所こそあれ賴光の泊りの宿、渡邊聞くより飛んで出で、「實否は知らねど、敵討とは心地好し。」と、手づから門を押し開き、「サァ圍うたお入りやれ。攝津守賴光の旅宿。かくいふは渡邊源五綱、日本國が起つても、蚊の喰ふ程にも思はばこそ。ゆつくりと休息あれ。」と、元の貫木しつとと下し、御前に伴ひ出でにけり。賴光對面まし〳〵、「彼等は夫婦か兄弟か、假名實名、敵討の首尾具に聞かん。」と宣へば、「さん候、某は信濃國碓氷の莊司が倅、稚名は荒童丸、父歿して孤兒となり、當所に賤しき下種奉公。この女と朋輩の好みに承れば、この女が父、坂田の前司と申せし者、平政盛が家人物部平太に討たれ、

上手な髪結あるまいか。」「ア、〱お易い事、どりや呼んで上げましよ。」と立たんとすれば、「いやいや、少と樣子あつて男はならぬ。女の髪結あるまいか。」といへば、はつと心付き、「なう〱お前はお仕合。私は地體町代の娘、髪月代一通りは、小額、眉際、中剃、逆剃、こそげ剃、お顔はたつた一剃刀にごし〱〱、脣なりと鼻なりと、お首なりとも、ころりつと剃り落して上げませう。」「ア、忌々しい、氣味悪い。仇口きかずと早剃れ。」と、剃刀出し髪おつさばき、縁先の水桶に、頭浸して紅葉ばの、焦るゝ小絲が心の内、喜之介は襖の陰、今や出でん〱と、互に目配氣を通はし、「これ〱頭が未だ揉めぬぞ。かう剃りかゝつて、氣を急くことはちつとも無い。揉めぬ中に剃りかゝれば、剃刀がはづれる。」と、いへども更に氣もつかず、消ゆる命は塵取に、落つる雫のはかなさよ。「サア今が大事のぽんのくぼ、うつむかんせ。」と髪撫で上ぐれば喜之介は、襖を密と締め明けに、後に立つても親の敵、聲をかけねば口惜しと、ためらふ色を女は悟つて、「申し旦那樣。お前は強さうなお侍、定めし人斬らんした事もあらうの。」「オ、斬つたとも〱。」「オ、その斬つた坂田が娘絲萩。親の敵。」といふより早く拔討の、首につらねて髭一房、兩膝かけて一太刀に、水を切つたる如くなり。「サア仕果せた立退かん。」と、甲斐々々しくも首提げ、女を小脇にしつかと抱き、一散にこそ落ち失せけれ。右大將が侍ども、「こは何事。」と走り出で、「南無三寶平太討たれ候。」と呼ばはる聲に、高藤驅け出

用心尤もながら、この高藤がかくまうたり。某が威勢の程、人間は愚か鬼神にても、某が側近く狼藉仕出し、指でもささば、天子に弓引く朝敵同然、身を知らぬ者やあるべき。何の用心、月代剃らせ櫛けづり、世間廣くのさばれ。高藤がかく言ふからは、樊噲張良に抱かれて居ると思ふべし。」と過言上なく罵れば、政盛悦び、「有り難し〳〵、彌頼み奉る。明朝御見舞ひ申さん。」と一禮してぞ歸りける。喜之介小絲は襖の陰、後先とつくと聞き屆け、「あれ〳〵父様討つた平太奴に極まつたり。日頃頼みし契約は今宵ぞや、女の腕にて仕損ずるは必定、必ず跡を頼みます。」と小褄引上げ身繕ふ。喜之介押へて、「急くまい〳〵、和女に兄御もあるげな。その兄も出で合はず、まして女の仕損じては恥辱なり。粗ごなししてやらう、止めを刺せば同然。」と躍り出づれば、「ア、忝い。とても事に、父様の譲りの銘の物、常に人の氣のつかぬ、思ひがけのない所に取つて置いた。」と一間牀板疊を引き上ぐれば、一腰の黄金作り、人こそ知らね紫の、虹立ち昇る名劔の、不思議と後に知られける。喜之介鞘口抜き見れば、氷の燒刃玉散るばかり。「サア本望は遂げたるぞ、必ず急くまい〳〵。」と、いふも關路の朝鴉、飛び立つ心ぞ道理なる。「それ〳〵、奥から行燈提げて誰やら來る。怪しめられな。」と目彈し、ちやつと忍べば、小絲はそらさぬ顔、鼻唄で座敷取置く玉箒、紙屑拾うて居たりけり。敵の平太燈火そむけ、「こりや女物頼まう。明日の御立は明六つ、その點に合ふ様に、月代一つ頼みたし、

嫌直して杯事。幸ひ肴はこの鱠、先づ祝言の心持。」「そんなら祝うて女房から、私が手酌でこれ獻いた。」「我等は得物のこの茶椀、吸物は煮賣の豆腐、目出度う謡はう。 唄寂光の豆腐茶椀酒の、樂しみもかくやと思ふ許りの鱠かな。」相よ助よといふ紅の、前垂膝に打ちもたれ、「可愛奴。」とぞ戯る。かかる處へ、「右衛門頭平政盛參上。」と案内すれば、喜之介小絲口上の趣を、奥へかくとぞ取次ぎける。淸原右大將出でむかひ、「ヤア政盛、近う〳〵。」と對座に請じ、「さても御邊と某、昨日まで泊々同宿にて、名所古跡の物語、旅宿の徒然忘れしに、今宵は賴光奴にさへられ、思はぬ別宿。明日の泊を待ち兼ぬる、今宵の淋しさ、推量あれ。」とありければ、政盛謹んで、「御懇意の餘り、申し上げ度き仔細の候。その故は、某が家來物部平太と申す者、先年坂田の前司忠時と申す浪人侍と口論し、彼の坂田を討ちは討つて候へども、彼には男女の子供あり、親の敵と狙ひ、若し平太奴を討たせては、某武道立ち申さず。一寸も側を離さず、旅の末まで召し連れ、幸ひ君と御同宿、御威勢を以て、昨夜まで心易く臥したるに、今宵野端の別宿、平太奴に過ちも候うては弓矢の不覺、あはれ彼の者、御次に宿せさせ下されば、生々世々の御厚恩。」と、いひも切らぬに右大將、「オ、何より以て易い事、其の者これへ。」といふ間に、駕籠を内へ舁き据ゑさせ、六尺ゆたかの大男、日影見ぬ目の色蒼く、月代のびて髯長く、野邊の薄に異ならず。右大將近く招き、「物部平太とは和主よな。敵持の

濟まして息休め、煙草くはへて立ち居たる。下女の小絲忙がしげに、「これ野良松、暇の無い旅籠屋奉公、殊に今日は、清原樣とやら麥藁樣とやら、お公家樣の大客。上つ方は物靜かで御料饍もあるべきが、下々の癖に口惡く、膳が遲いの何のとて、いぢらせてたもんなや。何故にきり／＼働きやらぬ、煙管は私が預る。」と、ひつ奪れば喜之介、「エ、小喧しい、男の仕事がもどかしさうな。これ料理したり水汲んだり、椀拭いたり門掃いたり、打つたり舞うたり、この手一つで百足の代りも仕る。貴樣の樣に毎夜々々、旅人寢房へ引入れ、煮燒もせぬ加減の好い、味い手料理振舞うて、うめく程錢儲けて、緩りと朝寐召さるゝと、我等が仕事は格別。ためた錢緡脱いたり差いたりせまいか。」「さればいの。」「オ、譃ぢやない。」とぞ笑ひける。「ム、これは聞き所、なんぢや、毎夜帶解き、勤めするとの言分か。それそんな小絲ぢやないぞや。朋輩衆は面々に、勤め次第に錢金貯め、親里貢ぎ、身に一重も飾れども、私は此方を思ひ染め、面倒見よう見られうと、賴もしづくの言ひ替せ、若し末の緣ありて、一緒にも暮したいと、隨分と身を嗜み、旅人の酒の挨拶肴に、小唄謠うたり、僅かの錢を頂く時は、淚が翻れて口惜しけれど、若い此方が奉公の身で、義理順義もあるものと、一錢も身につけず、皆此方に渡すぞや、一言可愛というたとて罪にもなるまい。眞に思ふ程にもない憎い男。」と、首筋に齒形ぞ戀の極印なる。喜之介ほろりと淚ぐみ、「オ、過つた。こらや／＼、サアわつさりと仲直り、機

と睨み、「ヤアおのれは頼光が下人、綱といふ童よな。この度右大將殿、東の名所御遊覽に御同道申すからは、相宿のせき札誰に憚る事あらん。主從共に口頭瘡もきれぬ小倅共、元の如くに札立て直せ、但し割られば割つて見よ。」と、太刀の柄に手をかくる。渡邊莞爾と笑ひ、「オヽ、源氏のならひ、御邊の樣なる相手は、大人の手を出すまでもなく、前髪立の子供の請取、主君頼光に宿を明けさせ、右大將の威を藉つて、御邊ぬつくり泊らんとや。あたゝかな事、右大將一家の外、蹈み込まば空臑薙がん。」と、せき札微塵に蹈み碎き、二王立に立つたるは、金輪際より忽ちに、生え拔いたるが如くなり。政盛そゞろ怖ろしく、身は顫へども押ししづめ、「おのれ生けて置く奴ならねど、高官の御同道、騷動も畏れあり。此處は某おとなしく、宿端に別宿す、よつく性根に覺えて居れ。」と、おめぬ顏にて立歸れば、渡邊は見向もせず、右大將の宿入の中、押し割つてのさ〳〵と、はがひ延したる夕鴉、泊りぢやないか。」旅籠屋の、門賑しく　三重　暮れかゝる。上り下りの旅人の、粹と野暮とに、摺れて揉まれて共摺の、招く薄も、おぢやれ〳〵が戀を呼ぶ、假の契りも末かけて、　唄　其方百切、おりや九十でも、心次第の蓙枕、笠も預る、股引洗ふ、洗足の湯と膳立と、ぐわつた菱屋の門構へ、本陣宿の忙がしさ數多の出女下男、中に若葉の喜之介が、跡の期よりも角前髮、土氣も取れて顏の色、白瓜鱠夕飯の、拵へいそぐ薄刃の音の、ちよつき〳〵、ちよき〳〵〳〵、ちよつきり切盤百人前を夢の間に、仕立て

肱を張り、むら／＼と立ち蒐り、「ヤア／＼當宿に、この家ならで御本陣になりさうな家なし。先だつての宿札何者ぞ、幕も札もはや／＼まくれ。」と呼ばはりける。亭主驚き、「これ／＼粗忽なさるゝな。忝くも攝津守賴光、源氏の大將の御宿札。」と制すれども、「何の賴光、源氏でも毛蟲でも、清原右大將殿御威勢には叶ふまじ、のじばらば幕引斷り、宿札打割り、引摺り出せ。」と罵りける。渡邊綱聞きもあへず、「何條先に打つたる宿札、指でも指さば蹈み殺さん。」と躍り出づるを、賴光、「暫し。」と鎭め給ひ、「同じ武家にもあらばこそ、長袖に勝つて譽ならず。殊に彼は右大將、女院の弟、朝家に敵するなどと讒せられては不覺なり。密かにこの家を立ち出で、宿端に一宿せん。汝殘つて穩便に明け渡すべし。」と、手廻少々御供にて、裏の小道の松陰より、山路に添うて出で給ふ。時刻移ると、賴光のせき札引拔いて、清原右大將殿御泊りと、高々と押し立て、引竝べて、右衞門頭平政盛同じく泊りと、せき札二本ぞ立つたりける。渡邊今は堪り兼ね、躍り出でて下人原、取つて突き退け大音上げ、「清原右大將は、右衞門頭政盛と名を二つ付けられしか。先に打つたる宿札替ふる法はなけれども、主君賴光、若輩なれども御思案ふかく、驕者の右大將に張合ひ、後日の讒を受けん事、犬にくはれし同然と、おとなしく宿を替へられしに、定めてこれは平家の大將政盛な。彼と相宿召さるゝからは、賴光も相宿。」と、政盛がせき札取つて引拔き、叩き割らんとする處へ、平政盛、怒れる聲にてはつた

嫗山姥

第一

漢に三尺の斬蛇あつて、四百年の基を起し、秦に※太阿工市あつて六國を合はす。古の君子、是れをもつて自ら衛ると、子路が謠ひし劒の舞、返す袂も面白き、我が神國の天叢雲、百王護國の御守、のえふす民こそ目出度けれ。されば、今上天暦の帝、御代しろしめすいつくしみ、波靜かなる遠江枝を鳴らさぬ時津風、濱松の宿の邊にあたつて、空に紫の雲氣たなびき、斗牛の間に英々たり。爰に清和天皇の正統、攝津守源賴光十八歲、かくと傳へ聞き給ひ、「唐土の張華が名劒を得たるためし、疑ひもなく、此の邊に天下の重寶となるべき名劒、埋もれあるに極まつたり。尋ね求めて、父滿仲の武功を繼ぎ、源氏の子孫に傳へん。」と、同年の若者渡邊源五綱に御心を合はせ、近鄰の宿々二夜三夜泊り鷹野にことよせて、歩き尋ぬる名劒の、小夜の中山にお宿を召されける。その頃胤子女院の御弟、清原右大將高藤とて、僅かの儒家に生まれながら、當今の御外戚、姉女院の威勢をかつて、中納言の右大將にへ上り、榮耀奢り身に餘り、諸國の名所を遊覽し、「今宵この宿御泊りと、宿割の侍

し貫き、虚空にひらめき歸らせ給ひ、元の鞘に納まりしは、有り難かりける次第なり。「見よ〱悪魔降伏の、寶劍は勇神璽は智、我が内侍所は仁の鏡、智仁勇の三寶も、佛法僧と王法の、民安全に守るべし。」と、御託宣のうちよりも、御形は鏡と現じ、内侍の袖にうつらせ給ふ。天下一統源氏一統、太平國に太平の、君が威光は萬々歳、治まる御代こそ久しけれ。

吉野都女楠 終

り、盛長が頭の上、ひらめきかゝり追ひ廻し〳〵、劍の刃風神風の、三重に逃ぐるを追うて千早ぶる、忌垣も越えてにげて行く。吉野の敕使北畠の准后親房卿、新田義貞、楠正行、三種の三祇、御迎ひに來り給ひしが、「三輪山の震動何事か。」と急ぎ驅け付け、「こはそも如何に。」と驚き騷ぎ、兩人の繩を解き給へば、内侍は夢の心地にて、「小山田が妻の情にて、逢ひ見る今の嬉しさ。」と、盛長宰相が惡逆くはしく語り、嬉泣こそ道理なれ。足利尊氏三社の靈夢蒙り、吉野殿へ參らんと此の所にゆきかゝり、驚き給へば新田、楠、「すは大將と大將との、相手づくぞ。」と身構へして、既に危く見えし所に、和田の新發意宰相が首ひつさげ、「ア、これ〳〵粗忽せまい。」と眞中へかけ入り、「先づ惡人一人は亡びし。」と、首投げ出し義貞に向ひ、「尊氏卿朝敵のとがをひるがへし申す爲、量仁親王を御位に立て京の内裏と崇め、後醍醐の天皇を吉野の内裏とうやまひ、新田足利和睦して、帝を守護せしむべきとの願ひ、玄惠法印の取次我等そのお使。」と、申す詞の中より、白雲棚引き異香薫じ、杉の梢に懸りしは、不思議なりける次第なり。※雨寶童子の御相好、妙なる御聲あざやかに、「天に二つの日なし、地に二人の王なし。量仁親王に新帝の位を授け、後醍醐の天皇は院の御所と仰ぎ、帝都は尊氏これを固め、吉野の都は義貞守護し奉れとの神敕なり。我が國の三つの寶のあらん限りは、國富み民も豐かにて、敵するものの有るべきか。寶劍の威德疑ふ事なかれ。」と宣ふ所に、有り難くも寶劍は、盛長が首をさ

より、首筋摑んで一締しめてはかつぱと投げ、しめては投げ付け〳〵、宰相に飛んでかゝれば、叶はじと、山をさして逃げて行く。源秀あまさじいつまでか、身を逃るべき三輪の山、檜原をわけて追ひかくる。二人の女中公家達も、「何事か起りしぞ。所は三輪の御神前、これは神代の御寶、守めもつき給ふかや。神力を添へ給へ。」と、あわて給ふぞ道理なる。かかる所に大森彦七盛長、手勢ひきぐしどつと驅け寄せ、「年來心を盡したる内侍はあれよ、先づ生公家ばら引括れ。」「承る。」とひつぷせひつぷせ、二人に繩をぞかけたりける。「扨その櫃は心得ず。何が有る開けて見よ。」と、いふより早く郎等ども、御箱にすがれば、兩人涙を流し聲をあげ、「やれ情なや勿體なや。それこそ忝くも我が國の御寶内侍所、十善の御身にさへ拜み給ふ事かなはず。不淨無禮の手を觸れんとは、忽ち眼くらんで立ちずくみに死なん、淺ましや情なやそこ立退け。」と泣き給へど、「扨事をかしい。神よりこはい軍神の、眞先かける兵に、何の罰。」といふまゝに、からげの布を切りほどき、蓋をとれば恐ろしや、御箱の内鳴動して、いなびかり天地に輝き、神鏡朝日の登るが如く、虚空にあがらせ給ひける。近づいたる雜兵ども、忽ち悶絶血を吐いて、のつけにそつて死じてけり。無道の盛長ちつとも恐れず、「よしよしさはらぬ神に祟りなし。心をかけし女を連れて歸る許りに、罰も祟りも有るべきか。」と、走りよつて内侍をひつ立てんとする所に、杉にかけたる寶劍の、鞘を離れて刀の光、天に輝き地に鳴り渡

は坊門の宰相柹、可愛や生まれはよけれども、持ちなし惡さに澀柹に劣つたな。公家ならば公家の樣に、柹の木の流れをくみ、腰折歌でもよますして、身にも熟せぬ武家交はり、終に刃にさし通され、串柹とならん笑止さよ。」と、かんら〳〵とぞ笑ひける。宰相覆面取つてすて、「エ、口惜しや、勾當の内侍を大森彦七盛長に授けんと、契約せしをおのれに邪魔を入れられ、天皇を押し籠め尊氏より恩賞を受けんとすれば、あの尼めに奪はれ、今又三種の神器を奪ひ、尊氏公へ奉らんと欲する所、又妨ぐる推參者。これ程までしこみし事、本意を遂げでおくべきか。下り坂の楠新田に組せんより、運に乘つたる尊氏公に從へ、取次せん。」といひければ、源秀大口あいてかつら〳〵と笑ひ、「ヤイ尊氏は名大將、奴らが樣なる不忠の臣、あたゝかな、用ゐられんや。天子に向つて弓引く朝敵の名を恐れ、後伏見院第二の宮量仁親王を御位に立て、吉野の内裏は後醍醐の天皇、京の内裏は新帝とあがめ、義貞とも和睦し、一家の交はり舊の如く有り度き願ひ、玄惠法印を以て奏聞ある。内奏の爲只今某吉野殿へ、參る折から出で合ひしは、うぬらが因果の木まぶり、梢に殘つて烏の餌食とならんより、熟柹首ゆすり落し、蹈みつぶしてくれん。」と、飛んでかゝれば下人ども、一度にはらりと取りまはし、「ヤア奇怪なる雜言。おのれこそ赤面の熟柹坊主、蹈みつぶしてのけん。」と、左手右手より取りつけば、「ムウ、この源秀を熟柹とな。熟柹にたかる目白ども、捻り殺して見せうか。」と、引きよせて片端

の御箱、吉野までかき申したし。鼻息かくるも恐れに存し、覆面もいたしたり、御許し下され。」と望めば兩人、「オ、望みの者は幾人にても其の身の祈禱、かき奉れ。」と有りければ、「ハア有り難し、これそこな衆、先肩でも後肩でも、何れもよつて片はな爲され。片はなは我等一人、吉野まで同道、先へ著いて覆面取り近付になるべし。道中萬事申し合はせう。サア來い。」といひければ、各密々囁いて、「いや其方が相かたに我々はなるまい。こつちの組へわたすか、さなくば其方一人か、いかやうともすき次第。知らぬ者どし交る事は、此方はいやぢや〳〵。」といひはなす。「やあら珍らしい。知らぬ者どし相肩いやとは、錢を取る出駕籠ぢやと思ふか。冥加の爲身の祈禱、願ふは誰も同じ事。どうも我等一分立たぬ、嫌ふには樣子が有らう、それを聞かう。」と理窟づめ。「ア、小むづかしい何の樣子、見た所お手前は人間はづれのせい高島、肩が合はぬによつての事。どうでもならぬ。」といひければ、「ム、聞えた。肩が合はずば舁くまい、お供すれば同じ事。サア皆よつてかき奉れ、ひつそうて我等はお供。」と、身拵へするを見て、「いや〳〵所詮此方構はぬ。供なりと舁きなりとうぬがざんまい、皆來い〳〵。」と立ちかへる。「ヤアやらぬ〳〵。」と道中に、大手をひろげ蹈んばたかり、「拙者と同道いやがるは、面こそ見えね大方夫れと知つたな。尤も〳〵御所柹と澀柹とは、皮むがいでも知れる物。これ見よ和田の新發意源秀といふ御所柹。」と、覆面を取つて捨て、毘沙門立にすつく立ち、「ヤアうぬ

神風や、みもすそ川の流れたえせぬ神國のしるし、御醍醐の天皇楠正行が守護によつて、吉野山に皇居あり。新田義貞馳せ參じ、都造りと聞えしかば、北の方勾當の内侍、千草の頭の中將洞院左衞門督心を合はせ、三種の神寶内裏に殘り給ひしを盜み出し奉り、神璽寶劍は内侍の身につけ參らせ、小山田が妻御供すれば、内侍所のしるしの御箱、頭の中將左衞門督兩人擔ひ奉り、人目忍べばこれも亦、晝をば何と烏羽玉の、夜道に同じ山陰や、三輪の里にぞ著き給ふ。鳥居の前なる御手洗の水舟石に御箱をすゑ、内侍は寶劍を神木の杉にかけ、暫しやすらひ給ふ所に、覆面したる男、同じ出立十人許り道端につくばひ、「我々は近邊の土民ども、今度天皇樣吉野山にいらせられ、新田殿楠殿内裏を吉野に御造營なさるゝにつき、天照大神より傳はりたる内侍所樣と申す御寶を、只今吉野へ御供遊ばす由、お公家樣のお身にて御大儀千萬。まだ是れより二十四五里中々お足つゞくまじ。賤しき下々の身ながらも、日本の地にすむ冥加の爲、その箱を吉野まで肩にのせ申したし。息をかけるも恐れに存じ、皆々覆面いたし、垢離を取り身を清め候。仰せ付けられかし。」とおもひ入つてぞ申しける。兩人聞き給ひ、「扨々奇特の志。これこそ内侍所しるしの御箱とて、天照大神の御魂御影のうつりし御鏡、汝等が肩に掛らせ給ふ事、よくも冥加に叶ひたる、果報の者ども有り難く存じ、擔ひ送り奉れ。」と宣ふ所へ、六尺豐かの大男、これも覆面目許り出し、「我等も當所の百姓、冥加のため寶

正行思案し、刈り捨てたる稻かき集め、五尺許りに束ねあげ、社人の烏帽子淨衣をきせ、木の間に密と立てければ、「すは天皇よ餘すな。」と、さし取り引取りさん〴〵に射る矢さき、藁人形に留まつて、針を植ゑたる如くにて、味方の矢種となりたりし。幼心に孔明が、昔を耳にふれつらん、頓智の程こそやさしけれ。「エ、目出度し。」と又太郎、矢をかなぐつて大音上げ、「いかに寄手の人々、早天よりのお出で、隨分御馳走申せとて、新田殿の御意を受け、本間孫四郎さび矢少々持參せり。何なくとも賞翫あれ。」と、矢つぎばやに射かけしは、嵐に雪の飛ぶ如く、表に立つたる山口兄弟、弓手馬手へ射伏せられ、一陣しらけてさつと引く所を、正行親子打物かざし、「きたなしかへせ。」と追驅くれば、山口入道隙間を見て、「女中ならぬ。」とむんずと抱く。正行すかさず上帶つかんで宙にさし上げ、「えいやつ。」と井手の深みの泥水へ、眞倒樣にぞ打込んだる。殘る軍兵恐れをなし、四方へぱつと散亂し、近づく敵こそなかりけれ。「軍の手合はせ門出よし。」と、勝鬨の聲太鼓の聲、松に神樂の千代萬歲と、君を馬に駕し奉る。長年は項羽が勇、正行は孫子が智、母が敎へは孟母が仁、これ大將の智仁勇、合はせて三つのみよしのや、吉野の内裏に御幸なる。

第五

しめし、松原をおつ取巻き、しめよせて討ちとれ。」と、ひしめく所に正行長年、木の根をゆすり梢を動かし、弓の鉾にて驚かせば、驚かされて數萬の烏、聲を立てて鳴き騒ぐ。山口親子大きに驚き、「塒の鳥の俄に騒ぐは、この松原に天皇方の軍兵の、隱れ居るに極まつたり。深々と近づくより、切り立てられては悪しかりなん。」と、大將を始め諸軍勢、進みかねて控へたる。童心の楠が、智慧一つに廻されて、一千餘騎の兵の、どまぐれ亂れ狼狽へし、智畧の程ぞ恐ろしき。山口入道聲をかけ、「あれく東も白みたり。天神の森に陣を取り、備へを立てて攻め寄せん、いざ來い。」と見渡せば、こはいかに、朝霧深き森の木の間、色々の旗飜り、嵐に靡く有様は、只花紅葉の如くなり。「南無三寶、前にも敵後にも敵、何所に命をのがれん。」と、大將始め諸軍勢、具足顫ひのがたくく、鳴子をひくに異ならず。相圖をたがへず神樂太鼓、どうくと打つ聲に、「そりや攻め鼓なう怖や」と、主は下人の後に屈み、子は親を楯にして、腰を抜かし氣を失ひ逃げ惑ふ眞中へ、名和又太郎長年、楠帶刀正行と名乘りかけ、わり立ておんまはし、火水になれとぞ三重戰ひける。臆病神に眼もくらみ、二人を千騎萬騎と見て、逃足落足深田にふんごみ岩根に乘りかけ、我が打物にて死するもあり、片時が間に手負死人三百餘騎、生きたるものは落ち失せて、殘りずくなになりければ、「矢攻めにせよ。」と山口兄弟、森に向つて立並び、矢種を惜しまず射かけたり。味方には弓一張矢は一本もなかりしに、

やそれも一圖の軍法。若し又敵の大勢が、この森へはかゝらず、汝が籠る松原へ先にかゝらば如何せん。」「オ、その時こそ松原の泊り烏を追ひ立てん。明けぬ先より立つ鳥は、歸雁列を亂るなる、隱し勢と心得取つてかへして、この森へかゝる時には彼の手だて、鳥と旗とに威されて、中に漂ふ寄手の眞中、たゞ一驅に蹈み散らすは、蚊を殺すより猶やすく、骨を折らずの勝軍、案のうちに候。」と申し上ぐれば天皇も、「天晴正成が子なりけり、末頼もしき若者や。」と、忝くも感涙に、御衣をしぼらせ給ひければ、「又太郎は三十五歲、十一歲の正行に、今日の大將軍御下知に任せ候。」と、手を束ねたる武士の、弓矢の禮こそ正しけれ。母は悅び、「オ、でかした〳〵。總じて大將は必ず弓矢を帶するもの、母がその心にて持つたるは長刀ならず、これ見よ。」と鞘を取れば、弦をはづせし村重籐。「おことを慕ふ忙がしさ、箙負ふ閒もなかりしぞ。薄なりともおし切つて、鏑矢射るは軍神の祭ぞや。」と、弦袋そへてたびければ取つて戴き、「あれ〳〵、追手の松明近づいたり。夜明とて程もなし、母上は我が君を社の森へ御供あれ。敵は小勢と侮るとも、味方は必ず大敵とて、恐るゝ事有るべからず。何萬騎寄するとも、亂るゝまでは音するな。」と、下知する聲も若綠、松原さして三重入りにける。追手の大將、山口入道嫡子八郎久國、二男九郎宗重その勢一千餘騎、もみにもうで馳せ來り、「この松原こそ怪しけれ。いうても二人か三人か、草村の蟲を取るより易かるべし、骨折つて何かせん。松明をふみ

るべからず。父正成は三百騎に足らぬ小勢にて、十萬の敵を幾度か破りたり。軍は奇正變化にあり。時はや寅の一點、我が計畧を廻らさば、千騎は愚か何萬騎も、驅け破つて見せ申さん。」と、廣言吐けば母上、「エ、小面憎や、童なら童の樣にしてゐや。出るまゝの軍法だて、サア味方二人で、千騎の敵に勝つべき智畧があらばいうて見や。道理が惡いと正成の子でないぞ、サア申せ〳〵。」と問ひかけられ、「さん候。總じて子供の爭ひにも、強きは弱きをあなどつて、油斷の負をするものなり。君落人の御身にて、御供とても一兩人、千騎に餘る追手の兵、多勢を頼みに油斷するは必定。我等と長年兩人は、向うの松原に隱れ入り、母上は君の御供して、天神の社に忍び、上を始め各下著の小袖をぬいで、裏表一幅々々に解き放し、本社末社の鉦の緒ともに、大旗小旗の尺に切り、石を括つて森の梢、此處彼處に投げかけ〳〵、敵寄せくるとも靜まりかへつて、ほの〴〵明の朝風の、霧のひま〳〵森の樹陰に、旗の手のひらり〳〵と閃くを、小勢と見る者有るべきか。一呑みに侮つて油斷したる追手の勢、と胸を衝いて色めく所を、神樂堂の大太皷、亂調に打立て給はば、先陣より崩れ立ち、後陣もともに亂るべし。その時我々小松原より横あひに切つて出で、十方無盡に切り散らさば、陣をわられし敗軍の、蹈みとまつたる例なし。多勢かへつて枷となり、人にて人にせき塞がれ、同志討友討度を失ひ、八方へ逃げ散つて、味方の勝利正行が掌に握つたり。母上いかに。」といひければ、「いやい

後醍醐天皇。」と、いふより親子は、「はつ。」と許り、しさつて額を地につくれば、君も泥土におりさせ給ひ、「汝は帯刀正行、汝は母、何れも正成が形見かや。妻子を御覧有るにつけ、父が忠節をこそ思召し出せ。」とて、正行が髪かきなでて、龍顔に御涙をうかべ給ふぞ有り難き。扠坊門の宰相、返忠にて君とらはれとなり給ふを、小山田が妻と心を合はせ、奪ひ奉りし有様委しく語り、「尊氏方の追手の軍兵千騎許り、あれあの松明事急なり。先づ御邊の館まで、急ぎ御幸なし申さん。」といひければ、正行頭を振つて、「いや／＼我等が館へ君を入れ奉り、追手の勢を引受け、狹間もきらぬ塀一重、溝同然の埋れ堀、一日もこらへず攻め落され、敵に分量を見さがされ、後日の合戰なり難し。この所につつ支へ、追手の大勢打ち散らし、出合頭の初軍に、敵に一しほ氣をつけて、驅け惱ます程ならば、重ねて軍に二の足踏まんは必定。是非この所に喰ひ止めて、一合戰。」とぞ申しける。母上睨んで、「ヤイこしやく者。たつた今意見したその舌も引かぬに、御前とも憚らぬ利發だてなそれなんぞ。兄といふても大事ない長年殿、武勇といひ年かさ、おことに習ひ給ふべきか。假初ながら大事の所、あなたの下知に任せてゐや。」と、ねめつけ給へば又太郎、「年に足らぬ正行殿、この所にて戰はんとは、勇有つて頼もしし。さりながら味方は貴殿と某只二人、追手の勢は一千餘騎。死物狂ひはそは知らず、勝つべき道理更になし。」といはせも果てず、「ア、さな宣ひそ。無勢なりとて戰はずんば、戰ふ時節は有

はずして、一騎武者の働きに、いかなる手柄したればとて、その名を揚ぐるばかりにて、天下の爲には益もなし。幼くとも楠正成が子、六十餘州を重荷に持ち、大事の身とは思はぬか、恨めしや情なや。サア歸れはやかへれ、重ねて母は口ではいはぬ、つめ〲するぞ覺えてゐや。これにつけても正成殿、今三年世に存へ、おことが十四十五にならば、かく憂き世話もせまいもの、はかなの浮世や淺ましや。」と、諫め口說きて泣き給へば、さしもに勇む正行も、母の歎きに亡き父の、顏を今見る心地して、母の膝に抱きつき、聲も惜しまず泣き居たる、親子の歎きぞ哀れなる。かかる所に又太郎長年天皇を負ひ參らせ、森を目にかけ來りしが、ヤア心得ぬ、夜はまだ深きに幼き身に物具かため、女も長刀橫たへしは、ム、ウ例の山立よな。幸ひ〲彼奴を威して、夜道の案內させんと思ひ、「こりやこりや山賊、熊野詣の同道に病人有つて迷惑なり。夜明まで看病すべき所や有る。送つてくればきつと禮をせん。」といへば、母聞きもあへず、「いや〲我等山賊にてはなし。熊野道者の御病人とは殊勝にもおいとしし。我が宿所は三里許り、折節これに馬も有る、召されて御入り候へかし。」「いや志は嬉しいが、人を忍ぶ我々、その中に夜明けては氣の毒。三里行けば隱れもなき楠に緣ある故、かたがたを賴むまでもなし。」と行き過ぐれば、「これ申し、楠に緣あると宣ふは何方ぞ。これこそ正成が妻や子にて候へ。」「さてはさうか、我こそ隱岐國名和又太郎長年と申す者、負ひ奉りしは忝くも

力の、示現は今もあら人神、天神の森にぞ著きにける。あら不思議や、後の方に女の聲、「待てよ待てよ。」と呼びかけたり。何者やらんと振返れば、衣引きかゝげ腰刀、長刀かいこみ追ひかくるは母上なり。「南無三寶、我を止めん爲なり。」と、一鞭くれてかけさする。息をはかりに走り付き、鞍の鞖手をむずと取り、留めても引いても驅馬の、二三十間引きずられ、「やれ物がついたか帶刀、母にも知らせず何處へ行くぞ正行。母は息切れ死ぬるをも構はぬか、馬を留めぬか倅め。」と、叫び給へば正行、馬より飛んでおり、土に手をつき頭をさげ、「父の忌のあき候へば、弔ひ軍仕り、尊氏を打果さんと思ひ立ち候。御暇申さぬ段眞平御免下され。」と、さし俯いてぞ居たりける。母はとかうも涙にくれ、「エ、如何に幼ければとて、十に餘れば大人役、などさ程にも辨へなき。栴檀は二葉より香しといふ喩へもある、正成の子ならずや。日本半分切り取つたる尊氏に、おこと一騎かけ向ひ、一太刀合はするまでもなく、多勢が中に取卷かれ、當座に討たればまだしもよ、生捕となつて面縛せられ、恥辱のうへに命を失ひ、いつの世にか天皇樣を御世に立て、父亡魂の本意をばとぐるぞや。親の敵討たんとて、輕々しく身を捨つるは、葉侍の上の事。父ごぜの櫻井より、汝をかへし給ひしとき、生先までの教訓を、母にも語り聞かせしが、百日經つやたたずにて、その諫めを忘れしか。一族かたらひ軍兵揃へ、菊水の旗眞先に押し立て、古今無雙の名將とよばれたる足利尊氏に、一あぐみあぐませんとは思

里の、柴の庵もなつかしや。庵も柴の、柴の庵もなつかしや。」戀しゆかしと聞くからに、實に九重も遙々と、跡に名殘の男山、さかゆく事も有りこしに、今の憂き目を三津の浦、西に霞みて淡路潟、須磨の關守呼び起し、通ふ千鳥のちり〳〵〳〵と、よせくる〳〵、波もよせくる、面舵取舵拍子そろへてさ、舟唄 面白や〳〵、さつさ堺の浦遠く、帆を十分にあげた所が、面白いよの。何にたとへん五手舟、鹽風さむく吹き通ふ、笠も袂もひら〳〵〳〵、ひらの若江も過ぎ行けば、日影もさがる藤井寺、はや告げ渡る鐘の聲、こん金剛山もはるかなり。「あれ御覽候へ。霞みて見ゆる高嶺こそ、志貴の毘沙門にて渡らせ給へ。」と奏聞すれば、主上御手を合はせ禮拜あり、「佛法擁護の本地の月、垂迹和光の影清く、再び朝憲明らかに、四海を照らさせ給へや。」と、丹精無二の御祈り、神慮も暗に測られて、たゞ賴め、年ふる松の壽を、御代にゆづりて高安や、それにはあらでこれも亦、沖津白波立田越、夜半にや君が一時雨、雲行く空を木陰かと、濡れて佇み 三重 給ひけり。取り傳へたる梓弓、光陰矢の如く楠正成が百ケ日、立つやその名も忘形見の一子帯刀十一歳、父が最期の無念さの、胸に止まり骨に沁み、幼心に只一騎、弔ひ軍思ひ立ち、鎧の袖に小櫻の、花を手向の法の駒、曉深き星の影、ともに輝く銀覆輪の、鞍の山がた山道の、小石まじりの小笹原、そよ吹く風にくりかけて、取つたる手綱濃紫、藤井寺を弓手になし、馬手へさら〳〵しと〳〵〳〵、かつし〳〵と歩ませて、神の昔も念

クセ 世は末世に及ぶとても、日月は地に落ちぬならひとこそ思ひしに、我等いかなれば、王位を出でてかく許り、人臣にだにまじはらで、雲居の空をも迷ひきて、行方いづくと白露は、草葉のうへにおきもせで、袂に寒き秋の霜、菊月も末つ方、故宮を忍び出で給ひ、あやしの賤の神詣に、やつせど馴れぬ菅の笠、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、憐れを催す時しもあれ、おんいたはしや先帝は、梁園の昔の御遊、華軒香車の外を出でさせ給はぬも、いつしか馴れぬ蹈皮脚巾、千歳の坂と詠ぜしも、耳にはふれて手にふれぬ、うきふし繁き竹の杖、長年一人御供にて、知らぬ野山を此處彼處たどらせ給ふ御有樣、よその見る目も恐れあり。こゝはいづくと里人に、いざ鳥羽繩手秋の山、岩に碎くる瀧川の、どう／＼／＼、どつとよせくる追手の聲か、それかあらぬかいやまてしばし。あれは野面に誰招く、案山子の影に落人の、鳥よりさきに驚きて、ともにむら立つ鷺の森、急ぐとすれど玉鉾の、ならはぬ道のけはしきに、御足もかけ損じ、御草鞋に流るゝ血は、草葉に染めていさら川、紅葉しがらむ如くなり。哀れげに昨日まで、玉樓金殿の牀に坐し、月に戯れ色香に染み、花やかなりし玉體の、今日は岩間の苔筵、かたしく袖に御涙、せきあへさせ給はねば、さしもに猛き長年も、涙は胸に關戸の院、こゝは名高き山崎の、麓にみだす荻萩薄、蹈み分け啼くや狐川、東の空を眺むれば、あれ／＼宇治の河霧たえ／＼の、瀨々の淺瀨に童の、小手さしつるゝ聲々に、唄「故鄕戀しや我が故

「ヤアウ番の者は一人もなく、塀押し破りしは心得ず。敵の忍びの入りけるぞ。こみ入つて討取れ。」と、喚いて入らんとする所に、又太郎大肌ぬぎ、棒ひつさげつつと出で、「我等は酒賣の又六と申すもの。誰とも知らず十人許り、我等が酒鮓飲み喰ひ、番衆にも振舞うてまんまと抱き込み、錢を拂はず塀を破つて入り候。我等が爲には喰逃の敵、奥に氣遣ひなさるゝな。是れへ追ひ出し申すべし、酒臭い者を相圖に討取り給へ。」といひければ、「オ、出かした〳〵、急いで是れへ追ひ出せ。」「承る。」とつつと入り、無二無三に追ひ立つる。三人の醉ひざめども逃げ出づれば、「そりや討取れ。」ととり廻す。」「イヤ我等は御内の傳五平。」「傳五平でも酒臭いはしれものなり。」とはたと斬る。「我等も御家來源藏。」「やれ〳〵彼奴も酒臭い。」「拙者は軍太。」「此奴は取分け酒くさい、一人も逃すな。」と、片端切つて捨てにけり。又太郎とんで出で、「お手柄〳〵、裏門は大かた仕廻ひ、表門の酒くささ、鼻がもげていにまする。皆々表へ御廻り。」「オ、心得た、隨分鼻をきかせよ。」と、表門へと驅け出す。その隙に高家が女房天皇の御手を引き、走り出づれば數多の犬跡先を取卷いて、吠えかゝれば又太郎、「討漏らされの今井の四郎、手なみを見よ。」と、鮓も餅も投げ出し、虎の尾を蹈み毒蛇の口、犬の脊中を躍り越え、大和路さしてぞ　三重　天皇かちぢの御幸

竹の皮一枚たも。」と木陰に立寄り、懷中より一通の文ぐる〳〵巻き、魚中に入れて、「こい〳〵。」と、投げ出せばひつくはへ、塀の破れに入りにける。又六とつくと見すまし小聲になつて、「これ比尼丘殿、そなたは異國の范蠡をやらるゝの。この所は坊門の宰相下屋敷、天皇樣を押し籠め置く。定めし其方は新田殿よりの案内と見た、違ふまい。某は出雲國名和の又太郎長年といふ者、御厚恩の綸旨を受け、近寄るべき便り。斯樣の商人せめて一人荷擔人の有れかし、奪ひ出し奉らんと心を碎く所なり。御身の上有樣に聞かまほしし。」といひければ、「ォ、我等は小山田太郎高家と申す者の妻、新田殿の情を受け、夫高家は討死し、みづからは尼となり、勾當の内侍樣とひとつ住居のその中にも、天皇樣を奪ひ新田殿の御本意をと思へども女わざ、せめての便りに御力を、付け參らする許りなり。」と、語れば長年大きに悅び、これぞ御運の開くる時、をりしも番の者は喰ひ醉ふ。この塀一重蹈み破り、やす〳〵奪ひ奉り、吉野の奥に皇居をすゑ、根來法師熊野武者を語らひ、吉野十八郷を都と定むるものならば、北國西國靡く事案の内ぞと、あん餅の擔棒にて塀一間、どう〳〵とつき崩し、つつと入れば犬の聲々、一犬吠ゆれば萬犬に、番の者ども目を覺し、起き上れどもひよろ〳〵、よろり〳〵と蹌踉きながら、「南無三塀を破つた。又六めか丸太めか、一打にしてくれん。」と拔きつれ拔きつれ入りけるは、危かりける次第なり。既に夜半の番替り、引連れて宰相檢見の爲に來りしが、

人の御番こなたは加番に青のぼん樣、かるたには太鼓の二、杯には太鼓の一、私から。」と引受けてついとほし、「サア丸太樣へ。」とさしければ、各口を揃へ、「その杯を三人の中氣に入つた男にさし給へ。その者が枕竝べる、鬮取よりこれがまし、思ひざしになされ。」と、面々衣紋つくろひ、鬢かき撫でて竝びける。「いや〳〵それでは氣がしれぬ、茶椀三つで面々杯、私を思ふ數程飲んで、心中を見せさんせ。茶椀の數の重なるが、私が今宵の男ぢや。」「ヤア面白い酒の賣れる瑞相。」と、茶椀竝べて三升樽、「すぐにお酌。」と立ちければ、何れも、「合點まつかせ。」と、初手一杯はつい〳〵飲、二杯目は早我呑にて、三杯からが義理一ぺん、後には義理も瓢簞も、ふらり〳〵が忽ちに、ころり〳〵と息つきて、前後も知らず臥しにけり。「これ〳〵寐入らぬさきに錢しませう。これ旦那衆はて手のわるい狸寐入、酒代早う。」とゆり起す、「マアよいわいの、たつた今寐入ばな。今夜は歸つて明日でも取つたがよいわいの。」と、いへば又六腹を立て、「ム、扨はあひぢやの、サアそなたから錢せう。」と、ねだれかゝるその間に、塀の破れに月影の、白犬一疋尾を振つて、箱の鮓を覘ひつけ、咥へる所を又六、「どつこい。」と首玉おさへ、「犬も人もこの屋敷は食逃の大よせ、まかりならぬ。」ともぎはなす。「これ〳〵いうても畜生執心がかはいい。その價はわしがやる、中で一番大きなを、おなかの飯取つて魚ばかり賣つてたも。」「これは犬殿大盡がついた、何も商賣、丹後の鯖の一番三十八文合點か。」「合點々々、

替りに定めしからは、氣のつまる間もなし。番所は禁酒にして、萬に氣をつけ油斷すな。追付尊氏より大國を賜はり、この宰相も公家をやめ、武家の大名となる時は、みな相應の知行とらすべし、奉公に精出せ。又後程見廻らん。」と、上屋敷へぞ歸りける。番の者ども伸をして、「やれ氣づまりやこれおびん、旦那が往なれたもう樂ぢや。謠はうと踊らうと、夜中まではこつちのもの。爰へ〱。」と招かれて、「ム、ウ殿達は三人、私がおてきはどれぢやえ。氣が定まらぬ。」といひければ、「ハテ誰有らうこの鼻。」「ヤァ傳五平それはまんがち、今夜は身が留風呂だ。」「否身が先だ。」とせり合へば、「これ〱傳五軍太競合は無用、この源藏に任せておけ、寢る時はもみ鬮でしぶいてこい。先づそれまでは一杯あげてしよげるべい、ヤ酒賣の又六がもう來る時分。」と、比丘尼一人に侍三人、役目の番はよその町、聲高々と荷賣り、大名深草大納言、唐人分別ぬらりころりの兼平、やい大名とは白餅、深草とは鶉餅、大納言は小豆餅、唐人もろこし分別餡餅、ぬらりころりは鰻の蒲燒山椒味噌、謠兼平とは木曾殿の御内は今井ずし、酒盛にかくれなき一騎當千の御肴、磯打つ波のまくりのみ、蜘手かくなは十文ぎりの、茶椀に一ばい酒でも餅でも旨い物の勢揃へ、錢次第。」とぞ賣りにける。各悅び、「又六來たか。是れ見よかうした色遊び、酒も鮓も有りたけはだけ買うてやる、汝も飲んで太鼓もて。」「ア、それは忝い。商ひして酒飮んで、その內で利を取るはめでたい。西が吹いてきて、丸太舟の港入、三

忠孝深き法の海、ともに弘誓の舟岡山、煙の末も一筋に、亂れぬ御代の敎へなる。

第四

唄「よさ樣の寐姿窗から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、盛りまだしき閨の內、さては野にさく百合の花、しよがえ、少くわん／＼。」とぞ謠ひける。「ヤイ／＼やかましい※丸太めら、暮に及んで何事ぢや、番所が目に見えぬか、うぬ等が來る所でない、通れ／＼。」と叱つても睨んでも、「さては野に咲く百合の花、しよんがえ。」「扨々無禮者この所を知らぬか。坊門の宰相樣の御下屋敷、尊氏將軍と御內通、後醍醐の天皇をこの所に押籠め、近日隱岐國へ流しもの、夜の目も寐ずの大事の番、宰相樣も只今奥に御入り、追付お歸りそこ退いてをれ／＼。」ときめつくる。「ア、堅い侍ぢや。これより嚴しい番所、波にゆらるゝ繫り舟の中までも、小歌は付けたり假寢の伽によばんす。寢しめての寢心は、髮の有るより無いかたが、ぴら／＼せいでよいげな。番衆は猶用心、すはといふ時早鐘まさり、私が頭を打たんすりや、はやくわん／＼。」とぞじやれかくる。奥より、「殿のお歸り。」とよばはれば、番の者ばら／＼とかしこまる。宰相、悠々と立出であたりを見廻し、「あの裏の方は塀一重、犬のくゞつた道も有る、いかにしても無用心。明くる早々めぐりに蜘手を結はすべし、彌番を怠るな。夜中

參らせ、尊氏公より大國を賜はつて、榮華を極むる果報より、義理と情に命を捨て、獄門にかゝるこそ武士なる者の果報なれ。おいとしや御最期まで、心に懸るは父御の不興、御免有るとの一言の、息をお顏に吹きかけて、親子の縁を二世までも、結んで進ぜてたび給へ。」と、縋りかきよせ抱きよせ、消え入り／＼泣きければ、内侍も、「扨は我が夫の、命の親ぞ。」と諸共に、聲を揃へて歎ちなき、警固の匹夫下部まで、袖を絞らぬ者はなし。父の前司も愁歎の、涙に搔暮れゐたりしたが、「エ、あつぱれ我が子やでかしたり。只殘り多きは十二歳より、一日安堵の思ひもなく、貧苦で死なせし可愛さよ。情にもせよ義理にもせよ、義貞を助けし子の親は、主君尊氏へは不忠の者、奉公すべき理窟なし、御前にてこの首が、義貞にてなきときは、獄門の木の下にて、腹切つて伏すべきと、※はちけん放つて申せしは斯樣の爲、尊氏の御手にかゝると思ひ、我が首てづからかき落し、勘當は冥土にて直に逢うて許すべし。内侍樣をかしづき、情の恩を報ぜよや。三世の諸佛大悲の力、親子一緒に導き給へ、これまでなり。」と、刀を首に兩手をかけ、「えい／＼。」の聲の中、二人ははつとすがれども、はやそのかひもあらしの庭の、老木につもる白雪の、脆く落ちてぞ消えにける。會者定離とはいひながら、逢ふも今別れも今、これ目前の愛別離苦。憂きを重ぬる涙の袖に、舅の首をおし包む。内侍は、「夫の命の親、これも我が爲舅ぞ。」と、身にひきそへて諸共に、實ありける現世の道、仁といひ義となづけ、

振上げて打ちかくる。女房縋つて、「なう悲しや、内侍様も止めてたび給へ。親の勘當受けし身は、未來も暗に迷ふと聞く。勘當御免なき上に、親の手づから子の首に、刃をあて給はば、迷ひの上の迷ひなり、最期の樣を聞き分けて、許しのお詞かけ給はば、名僧知識の引導も、それにはなどか勝らん。」と、口說き立て〳〵、歎けばさすが親心、「いふ事あらばはや語れ。」と、咽び入りたる許りなり。女房なほも涙にくれ、「いたはしや我が夫の、今度の軍は高家が、主親の勘氣を許され、昔にかへるはこの時と、軍兵に交り幾度か出で給へども、浪人の貧しき身、鎧一領あらばこそ、素肌武者の鏞刀、拾ひ弓に拾ひ矢、畠につかふ野飼の馬、うてどもあふれども飼はねば瘦せて足立たず。いかなる猛き武士の、三條小鍛冶の劒にも、なう貧苦の敵は防がれず、腹を切らんとし給ふを、妾樣々力をつけ、兵粮秣の志、盜みかゝりし靑麥の、畠は敵の領內、高手小手に縛られ、大將の前に引き出し、罪に沉む筈なりしに、敵ながら義貞は情ある大將、身の上を聞き屆け、命助かる其の上に、召替の錦の鎧、太刀刀まで賜はり、この恩有るとて必ず我を庇ふな、それゆゑ夫が名は問はぬと、仁義深き御詞、語り聞かせし我が夫の、心魂に染みたるか御命に替り、我源義貞と名乘りてあへなく討たれたまふ。たとへ千金萬金をのべたる鎧太刀にもせよ、高家程の侍が、飢ゑに臨んで死すればとて、鎧一領太刀一振に目がくれて、そもや命が捨てられうか。これぞ實の情の死とは夫の事。恩を忘れ義貞を討ち

には譜代相傳の御家人、小山田前司高春生年六十七歲、命長ければ恥多しとは、我が身の上に知られたり。十八年以前彼奴はその時十二歲、猪狩の御供せしに、年ふる猪の峯越すを、『誰か有るあの猪射留めよ。』との御諚。太郎こざかしげに小弓に矢をはげ向ひしを、尊氏はつたと睨ませ給ひ、『小腕にて仕損ぜん、罷りしされ。』と宣ひし、御詞も終らぬに、弓と矢大地へ投げ付けしを、彌 立腹在し、『誰に當つて投げうち、年にも足らで慮外者、親前司はなきか、あれ引立てよ。』と御怒り。それより君の御不興なれば、親もすなはち勘當して、十八年の春秋は、風の便りも絶え果てし。首も性あらばよつく聞け。世間の親の勘當は、遊女博奕大酒の沙汰、それさへ親は子を思ふ子心にも弓矢の道、主君に向つて意地を立てたる御憎しみ、親の身でも憎い半分、嬉しいが又半分の勘當ぞや。今度の軍に義貞方の名有る兵、首取つて來れかし。君の御前はいふに及ばず、天下の武士にほめさせ、我も世上の親たる者に羨まれん。今やくる〳〵と毎日の高名帳、夜は繰つて翌日を待つ、親に孝なく義も知らず、所領恩賞に恥をかへ、敵に手をさげ膝をつき、義貞に降參し知行に命を捨てしよな。とても捨つる命をなぜ尊氏に奉り、名のためには捨てざりしぞ。親は年よる子は犬死、小山田の名字の譽誰が末の世に殘すべき、エ、淺ましや。」と齒嚙をなし、持つたる首をかつぱと投げ、どうど坐して泣きけるが、「思へば汝は義貞の郞等、我は尊氏の御家人、親子ながらも敵味方、首なりとも一太刀。」と

と泣き、籬の菊の狂ひ咲き、花を爭ふ蝶鳥の、露にしをるゝ如くなり。前司聲をかけ、「エ、はしたなし先づしばらく。」と、二人を左右へ押し分け、「首は一つ内侍は二人、是非一人は僞りなり。これ後に來た上﨟、義貞と札はうつたれども、疑はしき事あり。心を沈めてよく御覽ぜ。」と、獄門を取りおろし、見するもあへなき生首を、なまめく膝にかきのせて、一目見てさへなれし夜の、面影だにもまがはぬ物、よく〳〵見ればその原や、ありとも知らぬ死顏に、ぞつとこはさの、「ア、恐ろし。」と、拂ひ退けて身を顫はし、「いや〳〵これは人違ひ、目元口元義貞殿には似てもつかず。かねて我が夫宣ひしは、『軍は時の運、いつ討死も計られず。敵に向ふ度毎に、帝より賜はりし、蘭奢待の名香、内兜にたきしめん。鬢の髮に名香かをる、首取つたりといふ人あらば、義貞が討死と思へ。』との御詞。軍の騷ぎに淺ましい、下郎の首と取りちがへ、實のお首は勿體なや、草村に埋もれしか、尋ねてたべ人々。」と、歎き給へば以前の狂女泣き出し、「エ、口惜しや。いかに見しりなきとても、下郎の首とは餘りぞや。我が夫は身貧にて、名香はたかねども、弓取の心の花は、梅櫻よりかんばしく、仁義に命を捨てしもの、屍に恥を與へるが、情なやいとほしや。」と、首抱きよせて伏し轉び、聲も惜しまず泣き居たり。前司飛びかゝり取つてつきのけ、首の髻を摑んで、涙をはら〳〵と流し、「六十の老眼に見しも違はず、我が子の小山田太郎高家にて有りけるよ。おことは連添ふ女房な。我こそ彼が父、足利尊氏卿

れども、菩提をとふは本妻の役、お首は我に下され。」と、押し退くればおし退けて、「さいふ御身が一夜妻か遊女か、筋なき事な申されそ。勾當の内侍とは大内の女官、御代にたつた一人の女、義貞殿の本妻我ならで誰あらん、物に狂ふも夫故、本性は違はぬぞ。サア實の内侍ならば、義貞殿の參内の出立有樣覺えしか忘れしか、よもや知らじ。」と宣へば、「なう忘れんとすれど忘られぬ、その出立は紫裾濃、栴檀の板冠の板、金銀にて中黑の、印をうつて黄金札、大立擧の臑當、黄金作りの太刀刀、赤地の錦御著長、妾が取つて著せければ、ゆつて上帶ちやうど締め、につこと笑うて、あつぱれ我ながらも弓取かな。今日の軍に譽を得て、名を末代にとゞめんと、馬引寄せゆらりとのつたるはなう、大將軍にまがひなし。近づく敵の鬨の聲、味方に轟く攻め鼓、峯の木枯磯打つ波、よせくる勢をまくり切り、大敵を見て勇む事、荒鷹が雉を見て、鳥屋をくゞるに異ならず。雨や霰と飛びくる矢さき、あがる矢にはかいくゞり、さがる矢には飛びあがり、向うてくる矢は小太刀をもつて、切つては落し受けては拂ひ、はらり／＼と切り拂ひ、須彌の四方の四天王、摩醯首羅が放つ矢を、一度に切つて大海に、拂ひ落すが如くにて、面を向くる敵もなし。かかるゆゝしき武士の、運つき弓も矢も折れて、修羅の奴となり給ふ、後世とふ者は我許り。」と、獄門に取り付けば、「イヤ／＼／＼、それは軍の出立。大内のことを知らぬ身が、内侍とは僞り。」と、引き退けては、「わつ。」と泣き、押し退けては、「わつ。」

歸り給へ、正體なや。」と諫むれば、「うたての人のいひごとや。伊勢の濱荻難波の蘆、所にかはるは草の名よ。異國はしらず本朝に、名もひとり身もひとり、又と二人はなき人なるを、さもなき首を何故に、墨くろ〴〵と高札に、新田義貞としるしたる、其方こそ狂人よ。我は元より氣違の、こぼさぬ水のあはれを知らば、さのみ人目にさらさずとも、あの首を妾にたべ。煙となしてなき跡の、菩提を弔ひたう候。」と、袖に縋りて歎かるゝ。「ォ、御歎きといひ、御不審はさる事なれども、この首は盛長が討ちは討つて候へども、義貞とは見えがたく、外に似たる者の有る故、曝して實否をたゞさん爲、かくの通り。」といふ所に、東の辻に人立して、これも女の物狂ひ、まゆかきくもり黑髮も、おどろにばつとふりかたげたる笹の葉の、亂れ心や狂ふらん。「あら憚りや恐れをしらぬ京わらんべ。忝くも我が殿御は、源氏の大將左中將義貞、參内の道そこのけとこそ。唄なつかしや我が夫の、雲居を出でしは卯月の空、秋よりさきに必ずと、夕の數は重なれど、こぬ夜つもりの怨めしや。獄門に誰がさらしなの、月日待ちしも徒らごと。後世とぶらひ自身も、死出三途をともなはん。御首たべなう警固の人、お情あれ人々。」と、獄門の木に抱き付き、人目もわかず泣き給ふ。以前の狂女走りより、「これ義貞殿の妻といふ御身はそも何人ぞ。」「ォ、聞きも及び給ふらん、勾當の內侍とはみづからよ。」「イヤ實の勾當の內侍とは妾が事。御身は定めて思ひ者か一夜妻、假の情を忘れかね、跡まで慕ふは優しけ

へちろり東へちろり、ちろり〳〵とする時は、扇おつ取り刀さいて、いなうよ戻らうよというては。妻戸にたゝずみし、えにしなきりゝんな。君が心に秋風吹かば、いなうとも戻らうとも、何とそなたの御はからひと、いうては小腰に抱きつきて、結ぶの神の媒は、比翼連理も磯枕、朽ちせぬ中を葛の葉の、うらみは風の科もないもの。誰が手にかけてうつの山、蔦の葉かづら亂れそめ、狂ひ出でたる 唄 我が身は何とならの葉の、露より薄きお情や。宵は待ちかね夜中は歎き、曉起きて空見れば、兒の樣な傾城が、紫杯手にするゑて、一つ參れ我が殿、二つ參れこの殿、三つめの肴には、白瓜唐瓜唐梨唐梅、西王母が園の桃、百とせ千年の御命、情なくも失ひし。 謠 その修羅の敵は誰そ、大森彦七盛長とや。夫の敵いざ討たん、持つたる柳を劍と定め、嗔恚の焔は焦るゝ紅葉。いふに甲斐なき狂女なれども、夫の弓矢のはげしき嵐に、なれてもまれて、四方の櫻の四方へばつと、よりくる警固、さす手も引く手も武士の、物狂ひとて咎むるか。よし咎めても威しても、歎きても口說きても、一人は歸らじ我が夫たべ、夫たべなう人々。」と、かつぱとふして泣き沈む、涙の袖も黑髮も、亂れ心ぞ哀れなる。警固の下郎棒振り廻し、「騷がしき氣違め、そこ立退け。」と追ひ拂ふ。前司押へて、「さなせそさなせそ、言ふことあり。」と立ちよりて、「さては義貞の北の方にて在すな。いかに狂氣し給ふとも、年月馴染の夫婦の中、容顏も忘れ給ひしか。心を沈めよく見給へ、義貞にては候まじ。歎きを止め

内侍狂女の段

三重「うたてやな、是れ御覽ぜよ。今までゆるがず折つて擔げしこの柳、風の誘へばこそ一葉も散るなれ。たま〳〵心すぐなるを、戀こそ我をくる、くるはすれ。風狂じたる秋の葉の、荻のおとづれ今か今かとたのもの鴈よ。唄君が玉章つばさにかけて、我が手に渡せ渡せや渡せ八橋の、澤邊に匂ふかきつばた花菖蒲、にたりや似たり新田と聞けば懐かしやなう。ヤア〳〵わらんべどもは何故に立ち騷ぐぞ。なに新田左中將義貞といふ大將軍に打負け、敵に首を取られて、獄門にかゝり給ふとや。あら實しからずや、その中將といふ人は、元より弓馬は家の藝、雲の上人に交はりては、歌連歌の道にも達し、鞠は曲鞠の品々まで暗からず。又酒盛などの折柄は、謠いで人々に亂舞舞うて見せんとて、水干直垂取り出し、衣紋うつくしう著ないて、緣塗取つて打ちかづき、手拍子人に囃させ、扇おつ取り、なるは瀧の水、たえずとうたり〳〵落ちくる瀧の、音羽の嵐に地主の櫻はちり〴〵。ア、淺ましや、散るは櫻かふるは涙か、まことにあれよ、あの獄門こそ涙の種。めぐりに嚴しき槍長刀、劍の枝のさかしき中の、梢に萎む花の顔容、目もふさがり色かはるとも契りは變らじ。我こそ妻の勾當の内侍、何なう内侍と召さるゝかや、いで參らう。思ひ出せは早昔、人目忍ぶの袖打ちかざし、逢ひ初めし夜の睦言も、語りつくさぬ鐘の聲、鷄籠の山に響きて、森の小鳥八こゑの鳥。曉の明星が、西

概似たらば似た通り申し上げられよ。凡そ道具の目利でも、只一言で千貫の道具が似せ物になることもある。粗忽いうて盛長が、高名を消すまいぞ。」と、色をかへてぞ申しける。前司かさねて御前に向ひ、「面體よく似たるとは存ずれども、某が心にて決定してもまうされず。所詮一條大路の獄門にかけ、諸人の噂を窺はば、是非明白にあらはれ、義貞に極まらば、味方の勝利盛長が高名。もしさもなき首にて候はば、六十に餘る前司めが、粗忽を申して面目なしと、獄門の木の下にて、腹かき切つて伏すならば、恥は某にとゞまつて、盛長が不覺もなく、味方の恥辱も候まじ。この實否をたゞす事、某に任せ下さるべし。」と、望み申せば尊氏卿、「然らば兎も角も計らふべし。さりながら都方は義貞ひいきの萬民、詞も直には受けがたからん。」と宣へば、「さん候。壽永の昔木曾殿北國合戰に、手塚太郎光盛、齋藤別當實盛が首を取りしかども、名乘らねば名もしらず、見知る人もなかりしを、樋口二郎が朋友の好みに語りし詞の色、染めたる墨の鬢髭を、あらひてそれとは存じて候。友達の好みにさへ、心をあかすは人情の慣ひ、殊に義貞は情有る大將、好みの者も多かるべし。北の方は勾當の内侍と申す内裏上臈、かくと傳へ聞き給はば、忍ぶに餘る涙の袖、諸人に紛れ給ひても、思ひは外の色に出で、そのかくれ有るべきか。實盛がひげを洗ひしは、それは篠原池の水、これは情の底意なく、誠を顯はす涙の水に、洗はせて御覽候へ。」と、申しもあへず首を持ち御前を立ちけり。

の者なれば、よつく大將義貞に忠信深き侍よ、とはれて誠を言ふべきか。若し御邊運盡き敵に生捕られ、味方の謀を問ふならば、ありの儘にいはんずな、覺束なし。」と宣へば、盛長は詞なく、赤面したる許りなり。大將重ねて、「我義貞と一家なれども、使者の通路許りにて、終に直に對面せず。見知りたる人あらば、申されよ。」と宣へば、諸大名立ちより〳〵、「關東以來此の度の合戰にも、遠目に見たる許りにて、近附きし事なければ、朧げの事は申されず。」と、更に實否は極まらず。小山田前司高春、末座よりのび出でて、見れば面ざし顏のかゝり、若年の昔勘當せし、我が子の小山田太郎高家に似たりと見たる親子の緣、六十の老眼にも、紛ふかたなく胸にしみ、はつと驚き居たりしが、さあらぬ體に心を沈め、「新田殿の御顏は、先年鷹狩の折から、一兩度も見參らせ、大かたに覺え候。」と、近々と立ちより右へまはり左へ向き、ためつすがめつ、見れば見る程疑ひもなき我が子の高家。南無三寶、勘當して十八年、この世にながらへ有るならば、此の度の合戰に、大將の御目に及ぶ程の高名せよかし。それを品に勘當赦し、御前もとゝのへ老いが世の、子孫の榮えを見んものと、賴みし心の綱も切れ、そゞろ涙のこぼるゝを、「ハァ、老眼のかすみ定かならず。」と、目をおしのごふその中にも當家譜代の身を持つて、敵の大將義貞と名乘つて死せしは心得ず。申す詞にさしあたり、前後にくれたる許りなり。大森彦七つつと出で、「これ〳〵前司殿、生顏と死顏は相好の變る物。その料簡して大

大將軍の首の標、伺候の諸武士横手をうち、「さては義貞を討つたるか、今度の譽は盛長一人。弓矢の冥加に叶ひし侍、お手柄〳〵あやかり者。」とぞ羨まる。尊氏卿しばらく思案し給ひ、「錦の直垂を著し、新田左中將義貞と名乘つたるを、それぞとしつて討ちつらめ、それに虛言も有るまじ。さりながらこの尊氏も義貞も、同じ淸和の後胤、八幡殿の嫡孫、敵味方とはなつたれども、共に一家の源氏の棟梁、殊に天皇に賴まれ參らせ、官軍の總大將、相隨ふ門葉に、大館大井田里見鳥山、大島堀口脇屋の歷々數をしらず、譜代重恩の武士も多かるべし。義貞程の大將が討死せんに、我さきにと驅け合はせ、冥途の供とて一人も討死せぬさへ不思議なるに、殘る軍兵播播路まで逃げたるは心え難し。一とせ楠が燒首を以て欺き、義貞の智畧に乘せられ京童の笑ひ草、にたく〳〵しき首どもを、まさしげにもかけたりと落書を立てられ、六波羅の愚將共が、恥かきしと聞き及ぶ。彼等は天性武畧智謀備へたる英雄、引くも驅くるも理に當り、生きるにも死ぬるにも、勝負の損德を守る名將、いかなる謀をやかまへつらん。卒爾にもてはやし、義貞にてなくんば味方の恥辱はいふに及ばず、汝不覺人の名を取るべし。方々如何思はるゝ、評定あれ。」とぞ仰せける。大森つつと出で、「いや御評定までもなく、生捕の者に見せ御尋ね候はば、實否早速しれ申すにて候。」と、こざかしげに言上す。尊氏大きに笑はせ給ひ、「イヤ生捕に問ふ抔とは、名もなき者の首の事。命を捨てて働き入り、生捕らるゝ程

周の武王は木主を作つて殷の世を傾け、漢の高祖は義帝を尊んで秦の國を亡ぼす。されば尊氏將軍天理を恐れ、後伏見の院宣を申し給はり、朝敵の名を遁れ、忠戰の鋒先鋭くして、兵庫湊川の合戰に打勝ち、楠正成に腹切らせ、新田義貞を驅け散らし、馬鞍休め物具も、ぬぎて紐とく花の都、東寺を假の館城、大將の御所とぞ定めらる。猶も殘黨洛中を犯す事もやと、口々の警固怠らず、生き殘る義貞一家、かさねて討手を向ふべし。先づ〳〵軍の疲れをはらし、樂しみを諸人と共に樂しむ酒宴の興、此の度の合戰に、分捕高名の帳面を開かせ、其々に御褒美ある。仁木細川吉良石堂、南部桃井高上杉、武田赤松畠山、澀川岩松一色荒川小笠原、この人々を始めとして、外樣の大名小名、御家人は言ふに及ばず、雜兵葉武者に至るまで、太刀刀馬鎧、金銀時服の御褒美、昨日今日の足輕も、知行の感狀賜はつて、首一つが一筆に千石になるも有り、數にもあらぬ首どつて、御褒美を貪れども、僅か銀子三枚兜、拾うて著せてもあきらけき、名大將の賞罰と、仰がぬ人こそなかりけれ。爰に大森彦七盛長、腹卷に直垂うちかけ、揉烏帽子引きたて、血塗れの兜箱御前にさし出し、「敵の大將楠討死の後、總大將新田義貞西の宮の軍破れ、味方の多勢に取卷かれ、求塚の上に驅け上り、腹きらんと致せしを、某矢疵めにして討伏せ首取つて候。殘る軍兵落ち行く所を、播磨路まで追つかけ申せし故、御帳にも付き申さず、只今實檢に供へ候。」と、蓋を取れば錦の直垂、袖を斷つて包みしは、

ずくめに竦められ、「今はこれまで。我義貞の命にかはり、其の隙にやすく〳〵落し、情の恩を報ぜん。」と、求塚に驅け上り、遠からん者は音にも聞け、近き者は目にも見よ。清和天皇の後胤新田左中將義貞、十善天子に賴まれ參らせ、屍を戰場の土に埋む。功ある大將の最期の體、よつく見おいて手本にせよ。」と、高紐切つて解くところを、大森主従をりかさなり、切り伏せ〳〵おさへて首をかいたりける。直垂切つておし包み、「官軍の總大將新田義貞を、伊豫國の住人、大森彦七盛長討取つたり。」と名乘りしは、いかめしうこそ聞えけれ。此の聲に驚き、馳せ散つたる味方の勢、「大將を討たせては、一人もいきて詮なし。」と、八方より引き返す。義貞も取つて返し、「ヤア〳〵同士討する狼狽武者。實の義貞是れにあり。」と、切つてかゝり給へば、「イヤ義貞が二人あるものか。新銀古銀同じ通用、これで堪忍仕る。」と、一散に逃げて行く。味方の大勢追つ驅くるを大將おさへて、「しばらく〳〵。彼は聞ゆる佞人、愚癡愚蒙の狼狽者。かかる者の敵陣にあるは味方の利運ぞ。」と、諸卒をしめす謀、智謀は居ながら天に入り、波をもくゞる尼が崎、山崎過ぎて名將の、譽は雲居の桂川、打越えかけ越え渡り越え、世に立ち越えてならびなき、我が立つ杣や都の富士、西坂本にぞ入り給ふ。

第　三

態と敵に組み敷かるゝ者や候べき。足利尊氏の家の子小山田前司高春が一子、小山田太郎高家、不足の敵と思召さば、只首打つてすてさせ給へ。」と、兩手をゆるめて働かず。「いや／＼この物具は、夜前女に與へし義貞が著捨の鎧、扨はその夫よな。恩を報ぜん志、しをらししやさしさよ。さりながら天下に比ぶる義貞が命、僅かの鎧一領にて助からんとてはとらせぬぞ。主親の勘當につき望み有る者ときく。目を驚かす高名して、本望を達せよ。只今にても跳ね返し、義貞と今一勝負、爲ばせよかし。」と宣へども、小山田は涙にくれ、「重ね／＼の御情、冥加の程も恐ろしく、申し上ぐる詞もなし。いふに甲斐なきこの高家がかせ首、義貞公の御手にかゝり申す事、いかなる先陣魁にも、まさつて身に過ぎたる譽、勘氣の父が聞くならば、さぞ悅び申すべし。この上の御芳志に、はや首打つて捨てさせ給へ。」と、申し切つたる兩眼に、涙を流すぞ道理なる。「エ、義理ばつたる男や。」と、取つて引立て塵打拂ひ、「義貞に助けられしと、人に語るな、我も人には語らぬぞ。」と、手負ひし馬を引立てて、靜かに打つて過ぎ給ふ。武將の氣質備はつて、古今に語るも理なり。小山田は茫然と、義貞の仁心心にしみて立つたる所に、大森彥七盛長手の者五十騎許り、どつと驅け寄せ大音上げ、「赤地の錦の直垂中黑の鎧は、敵の大將義貞遠目にも見違へず。射取れや／＼。」と矢先を揃へ、よこぎる雨と射かくる矢先、「さしつたり。」と小太刀をぬいて、はらり／＼と三重切りおとす。されども鎧の隙間々々、矢

て、追付そこへ。」と立歸れば、「これ討死は軍の習ひ、いきて歸れば仕合。先づ今生の暇乞、かならず泣くな。」「コレ武士の妻になるからは、そこは合點。」「死出の山路の一二のかけ、おくれはせまい。」と別れしは、はや修羅道の先陣と、後にぞ思ひ三重しられける。傾く日影西の宮、大手の合戰入り亂れ、人馬四方に馳せ違ひ、喚き叫ぶその聲は、山を崩すが如くにて、官軍既に戰ひ破れ、堪へつべうは見えざりけり。大將義貞唯一騎、返し合はせ〳〵、十六度まで驅け散らし、御身を屹と見給へば、數箇所の矢疵、馬鞍に立ちし矢は、枯野の薄に異ならず。「エ、軍の勝負今日にかぎるべからず。」と、追ひくる敵を斬り拂ひ〳〵、求塚の小松原、心靜かに打ち給ふ。高家それぞと見るより大音上げ、「大將軍と見奉る、まさなう後を見せ給ふ、引返して勝負あれ。」と、おつかくれば振返り、「日本一の義貞に、聲をかくるはこざかし。」と、鐙にかけてはつたと蹴散らし、たゞよふ所をひらりと飛びおり、片手をのべ一突つけば、凩に、かゞせの倒るゝ如くにて、横投にどうど伏す。義貞すかさず弦走にのつ掛り、首をかかんとし給ひしが、鎧出立つく〴〵と御覽じ、「ム、ウ天晴おのれはしれ者かな、義貞に易々と組み敷かれん力とは覺えず。何とて我を組み敷かぬ、定めて仔細有るべき。さりながら汝が主の尊氏を、組み伏せたらんはしらず、汝如きの侍を五十百首取つても、さのみ義貞が手柄本望とも思はず。サア仔細を語つて名乘れ〳〵。」と宣へば、「コハ御諚とも覺えず。いかに大將なればとて、

ど打ち、鎧引きよせ熟見て、「矢留金物押著の板、發傳高紐上卷附、太刀は鳥首兵庫ぐさり。ム、これは大將の拂ひ物、大抵では賣るまじきが、但し損料でばし借つたか。」と、いへば女房くつ〳〵と吹き出し、「ア、つがもない。日がな一日玉綿繰つて、錢二十取るや取らぬもの、八百年の手間賃でも、なか〳〵買はるゝ物かいの。馬の草もなきゆゑに、昨夜義貞の領内の、青麥盗み刈りたるを、番の者に搦められ、殺さるゝ筈なるを、さすが義貞は憐れを知つた大將、夫の身の上聞き屆け、命を助けその上に、この太刀具足。サア早う出立つて、手柄してござんせ。」と、綿嚙取つて著せんとす。高家つきのけ、「ム、實に義貞は五常を守る名將、物の憐れをしること、敵味方の隔てなき人と聞く。義貞に貰うた鎧を著し、直に義貞に打つてかゝらん事、心よからぬ軍なれば、思ひ切つたる高名もなるべからず。エ、よしない情を受けたり。」と、悔み顔にぞ見えにける。「エ、こなたとも覺えぬ。義貞程の大將が、さもしい返報受けうとて、何の情をかけられう。それ故こなたの名も問はず、用捨なく我を討てと、詞に念を入れ給ふ。義貞の目の前、この具足著て働き、あはよくば義貞をしてやらうと思ふ氣はないか。エ、おくれた人や。」とせきければ、「ム、分別した合點有り。一度著して見せずんば、其方を騙りなどとさみせられんは男のはぢ。サア小山田太郎高家が出陣。」と、鎧取つてなげかけ、上帶高紐小躍して、引締め〳〵太刀わきばさみ立ちあがれば、「オ、あつぱれ武者振よい男、私も馬に草かう

繩手綱、ちぎれ具足もあらばこそ。剩へ女房の、昨夕に出でて歸らぬは、心もとなさ氣遣ひさ、足に任せて此處彼處、在所を尋ね求塚、小松原より振りかへれば、コハいかに、遙か向うの山々に、中黑の旗二つ引兩、巴の旗も輪違に、東へ靡き西へ靡き、磯山風に飜飜して、馬煙矢叫び天に響き地に滿ちて、新田足利の國爭ひ、今を限りと見えたりける。「ア、羨ましき殿原が合戰や、せめて古具足の一領もあれかし。取つて投げかけ何百萬騎が中なりとも、只一揉に驅り破り、兩陣の目を驚かせんものを、何をいうても浪人の、紙子頭巾に鋤一丁、思ふに甲斐のあらばこそ。貧は諸道の妨げと、世の諺もわが身の上、エ、無念口惜しや。」と、拳を握り牙を嚙み、男泣きにぞ泣き居たる。かかる所へ女房は、危き命をまぬかれ、降つて涌いたる太刀鎧、夫に見せて悅ばせんと、足早に歸りしが、「ヤアこちの人爰にか、このなりは何ぞいの。さぞ待ち兼ねてで有らうと思ひ、いきせきして戻つた。これわしぢや女房ぢやが、なぜに物いはんせぬ。氣合が惡いか高家殿。」と、抱きおこせば涙をおさへ、「オオ氣合もどうでようはない。ヤレ女房あの向うの山々に、入り違ふ旗を見よ。今ぞ合戰眞最中。あの軍中には主君尊氏公、父前司殿も在すらん。正しく主君老いたる父が、天下分目の晴軍と、命を惜しまず戰ふを、子の身として安閑と、見物して日を送る、これが無念に有るまいか。」と、いはせも果てず、「コレ〳〵、その泣言はもういらぬ。これ見さんせ。」と太刀鎧投げ出せば、高家横手をちやう

かゝれ、敵ながらも見物せん。はやとく〳〵。」と宣ひて、いましめの繩を解かせらる。女は、「アッ。」と頭をさげ、「情ある御大將、ありがたき御恩の程、何と報じ奉らん。さりながら我が夫はまさしく尊氏公の御家人。すは合戰に及ばんとき、今給はつたる鎧を著し、太刀を持つて義貞公に向はるべきか。用捨しては尊氏への不忠。是非なく一矢仕らば、恩を知らぬ弓取と、末代までの笑ひ草、御恩は却つて仇となる。只御慈悲には自らを、盜み一ぺんの科に落し、はや〳〵殺してたまはれ。」と、首さしのべて泣き居たる、心の中こそすゞしけれ。義貞なほも感じ給ひ、「オ、その心を察してこそ、わざと最前より夫が假名實名をも尋ねず、互に知られず知らぬ相手、名乘つて勝負を遂ぐる時、いづれに用捨の有るべきぞ。さ程の事を汝等に、敎へらるゝ義貞ならず。いらざる詮議に時移れり、はやはや歸れ。」と太刀鎧、手づから取つてたびければ、おし戴きわきばさみ、「お情はこれまで。明日の合戰には、夫婦諸共心を合はせ、恐れながら御運によつて御首を、給はることも候べし。お許しあれ御免あれ。」と、御前を罷りたつかゆみ、ひきはかへさじ武士の、妹脊の義理ぞ三重賴もしき。既にその夜も明け行けば、勝にのつたる尊氏の軍勢雲霞の如く、湊川より討つてかゝる。義貞も西の宮より取つてかへし、生田の森を後にあて、入り亂れ攻め戰ふ。太刀の鐔音鬨の聲、いかなる修羅の鬪諍も、これには過ぎじとおびたゞし。小山田太郎高家は、心許りは春の花、身は埋木の力なき、野飼の馬の

招くか情なや。然らば包まず申すべし。妾が夫は足利尊氏の相傳の侍なるが、聊かの事有りて主親の勘當うけ、この國の土民となり、忍びて暮すうき身にも、此の度の合戰、これ屈竟の時節到來、お免しなくとも戰場に馳せ加はり、分捕高名譽を顯はし、主の不興父御の勘當免されんと、思ひ定めし我が夫の、心は彌猛にはやれども、鎧一領有るにこそ。手綱ゆりかけ乘つたりとも、一町もとばぬ野飼の瘦馬、住むもわびしき藁屋の窗より、鬨の聲矢叫びの音、かすかに聞ゆるその時は、齒ぎしみしての無念がり、傍で見るさへ胸せかれ、おのれやれ二世とかはした大事の男、このまゝにては果てさせじと、樣々に思案し、麥を盜んで兵粮の、便よくば陣所に忍び、寐入りたる軍兵原が、太刀物具思ふまゝに盜み取り、我が夫に打著せ、みづからも太刀脇ばさみ、夫婦諸共軍して、名を後代に揚ぐべしと、思ひし事も徒らに、かかる繩目にあふ事も、夫の武運の拙き故。仔細といふもこのあらまし、とてもながらへ果てぬ身ぞ、憂き物思ひさせんより、はや〳〵殺して給はれなう、御慈悲なるわ人々。」と、聲も惜しまず歎きしは、目も當てられぬ風情なり。義貞もやゝ落涙あり。「オ、あつぱれ武士の妻にてありけるよ。命がけの盜みして、夫の武勇を勵ます心、感じても猶餘りあり。罪をゆるし義貞が、著捨の鎧太刀をもそへて取らすべし、それ〳〵。」と宣へば、御召替の錦の直垂、黃金造りの一腰、女が膝にぞ置かれける。「サア〳〵歸つて物具著せ、明日の合戰には、義貞が陣に向つて打つて

博奕のどう取、この頃續く不仕合、鍋釜疊釣おまへ、糠味噌桶まではたけ出し、爲方盡きて二三日、麥をかるたのかたにはり、ひねつても〳〵、二寸より上目なく、あげくに今夜三寸繩に、縛られました。」と泣きにける。三番目は若き出家。「三衣に似合はぬ麥盜人、仔細を申せ。」と睨め付くる。「されば愚僧はあかしがた、蓮臺寺といふ淨土寺の後住に、無海と申す法師なるが、學問の憂き晴らしに、ふと室の津へ出かけ、梅花の移りをかぎそめて、抹香の匂ひきづまりさ、欠伸は百八煩惱菩提、いつそお山に宗旨をかへ、好色修行と志し、通ひ詰めたその擧句が、それはいかいしやくせん檀の、阿彌陀佛まで質屋へとばし、手ぐらまぐらに調へ、今少しに手づかへ、ふつとした出來心後悔先へたゝきがね、只今斯樣の責め念佛にあふ事も、出家の身にはあぬまい事、あぬまい〳〵、ア、ぬまいだ。」とぞ語りける。遙かの後に年の頃、二十餘りの女房、盜み取つたる青麥を、背中に縛りつけられて、恥かしげにぞ泣き居たる。義貞つく〴〵御覽じ、「彼が體盜みすべき者とも見えず。仔細ぞあらんまつすぐに申すべし。」とありければ、女ちつとも騷がず、「ハア、仔細と申して麥を盜みしより外の仔細もなし。はや〳〵法に行ひ給へ。」と、恐れもなげにぞ答へける。義貞なほもいぶかしく、「仔細を言はずんば往還にさらし、諸人に恥を知らすべきぞ。」と宣へば、女は、「わつ。」と許りにて、暫し涙にくれけるが、「ア、是非もなや。盜みをするも夫の恥、包まんと思ふ爲なるに、諸人に面をさらさん事、恥を

戰破れ、楠正成討死すと雖も、總大將新田左中將義貞、西の宮に御陣を召され、士卒をなづけたまひければ、馳せ集まつて味方の勢、四萬餘騎とぞ聞えける。侍所長濱六郎左衞門松明持たせ陣屋を廻り、囚人四五人搦めさせ、義貞の御前へひつすゑ、「彼奴ばら今夜近邊の田畠を荒し、御馬の飼料に殘せし青麥を、盗み刈り取りしを搦め取つて候。見せしめの爲首斬つて、獄門にかけ候はん。」と言上す。義貞聞召し、「抑今度の合戰は朝敵を亡ぼし、民安全になすべしとの敕諚なれば、賣買耕作に妨げず。田畠の一粒をも刈り取る者は、急度刑罰すべきよし諸軍勢に相觸れ、所々に立てたる高札を背きしは、敵方のあふれ者か但し盗賊か、白狀させよ。」と御諚有る。雜兵繩付ひつ立て「サア大將の御前なるわ。眞直に申すべし。僞らば首捻ぢ切らん。」ときめつくる。「これ／＼そこつなされな。我等も此の國の大將。」「ヤア大將とは。」「いや／＼巾著切の大將、鋏の彌市と申す者。或は花見の開帳の、又は傾國猿芝居、人立多き所にて、人の懷腰のまはり、手が觸るとこつちの物、資本いらずの商賣。この軍始まつて國中のよい衆は、草鞋がけで逃げごしらへ、遊山所はいかなこと、我等がしよざいひつしやりほん。御法度を背きしは、いつそてんぽの皮巾著、お根付衆に咎められ、くゝられました。」と申しける。その次なる大男「うぬが面相たゞ者ならず、眞直に白狀せよ。のじばらばしやつ面を、はつて／＼はりまはさん。」「ア、餘りはる／＼御意なされな、はりが過ぎてこのざま。我等は

僞りか、何處へいかんす。いとしかはいと言はんした、言の葉はうそかいな。オ、しんき、跡じよりさんすは、早秋風か。」と、見あげ見おろす高入道、しやなら〳〵の八文字は、二王をゆるがす如くなり。彦七五體縮めども、弱味を見せじと大音上げ、「ヤア〳〵源秀智仁勇を兼ねしといふ、楠さへ討取つたる盛長。いはれぬ腕立せんよりも、腹をきれ。」とぞ呼ばはりける。源秀今は堪られず、長持の棒おつとりのべ、「ヤイ禮儀知らずの國賊。楠一族國の爲君の爲死を善道に守つて、潔く切腹せしを、何ぞや汝が討留めしなんどとは、どの頬げたから吐き出した。いざ來い源秀が手なみを見せん。」と討つてかゝる。盛長猶も口へらず、「侍たる身が坊主を相手にする物か。」と、言ひ捨てて逃げて行く。「ヤァ出家侍、犬畜生餘すまじ。」と、ぼつ立て〳〵たゝき立て、八方微塵に打ち立つれば、あたりに近づく者もなく、皆ちり〴〵に逃げてけり。「さもさうず〳〵。これより河内に立越え、正成の最期を傳へ、重ねて義兵をあぐべし。」と、甲斐なき首を取り集め、怒れる眼にはら〳〵と、涙貫く玉鉾の、道は生田の森の露、末の雫や末の世に、譽を永く傳へける。

第二

將の謀泄るゝ時は軍利なし、外内を闚ふ時は禍制せずとや。坊門宰相清忠が内通故、湊川の合

ず大森彦七、大勢引具し込入つて、一々に首かき落し、「オ、目出度し心地よし。拔かぬ太刀の高名、楠が首尊氏公に奉らば、三箇國は取れた物。日頃心を通はせし、勾當の内侍も坊門宰相が計らひにて、今宵我が手に入る筈。甘い事の摑みどり、早う内侍の顏が見たい。」といふ所へ、女房二人先に立ち、長持を舁き入れさせ、「宰相殿のお使。」と、聞くより彦七大きに悦び、「オ、滿足々々。人目を憚り、長持とは宰相殿の一策。さりながらいとしい君の箱入、氣の詰るもおいとしい。先づ／＼御見。」と蓋をあくれば、恥かしげに薄衣深く顏かくし、籬の梅の早咲の、雪に埋もれし風情なり。彦七猶も心うかれ、其のおぼこながなほ甘し。そさまを我が手に入れん爲、此の度の軍も某が手を碎き、御覽候へ楠一家を討留めたり。これより義貞が首捻ぢ切らんは、寐鳥を差すよりいと易し。世になき新田に心中を立てんより、日の出の我等に靡かれよ、色こそ黑けれ心は伽羅。先づ我が陣屋へ同道して、新枕の酒盛せん、いざさせ給へ。」と肩にかけ、二足三足は歩みしが、ア、ラ不思議や今まで輕き上臈の、俄に重き小夜衣、我が妻ならぬ念力か、大磐石を肩先に、疊みかけたる如くにて、五體ちつとも働かず。「ヤアラしれ者ござんなれ。」と、太刀に手をかけ振仰げば、コハいかに、和田の新發意源秀、くわつと見開く眼の光、二面の鏡硏ぎ立てて、額につけたる如くなり。大森わな／＼顫ひ出し、こは／＼下にそつとおろし、逃げ入らんとする所を、「これ／＼彦さん手がわるい。幾瀨心を盡すとは

んでどうど打付け、首をかかんとせし所へ、藥師寺十郎同じく次郎、弓手馬手よりむずと組む。「しや物々し。」と兩手をのべ、草摺摑んで捻ぢ合ふまに、大森小脇をそつとぬけ、跡をも見ずして逃げ失せけり。「エ、大事の敵を洩らせしもおのれら故。」と、兩脇にしつかと挾み、「えいやうん。」としめ付くれば、眼口より血を流し、二人一所に伏したりける。これを見て吉良、石堂、高、上杉六千餘騎、楠を討ち留めんと、八方より喚いてかゝる。正成元より討死と思ひ定めし晴軍、望む所と太刀さしかざし、打つて出づれば正季正員和田五郎、宗徒の兵ぬきつれ〳〵、死物ぐるひのをがみ打、當る者を幸ひに、なぎ立て〳〵三重追ひ廻す。されども敵は百萬餘騎、入れかへ〳〵攻め立つれば、七十三騎に討ちなされ、正成今はこれまでと、一村在家に走り入り、是れ屈竟の最期場と、心靜かに鎧ぬぎすて、「いかに方々、抑最期の一念によつて、善惡の生を引くといへり。九界の間に何が御邊の願ひなる。」と問ひければ、弟の正季から〳〵と笑ひ、「只七生まで同じ人間に生まれいで、朝敵尊氏を亡ぼさん事、我等が願ひの一つなり。」と、いはせも果てず正成嬉しげに打ちうなづき、「罪業深き惡念なれども、我も斯樣に思ふなり。いざや同じく生をかへ、この本懷を達せん。」と、いひもあへず押肌脫、ぎ氷の刃一文字、脊骨をかけて引きまはせば、宗徒の一族十六人、從ふ兵五十餘人、我も〳〵と刺し違へ、同じ枕に伏したりし、惜しかりし〳〵、日本無雙の名將の、最期の程ぞ潔き。あひもすかさ

つて押戴き、めのとの恩地に馬引かせ、手綱かいくり打乘つて、親子この世の別れの詞、さらばとだにもいはばこそ。「慾を忘れ情を知り、義にたくましき大將は、百萬騎にかこまれても、恥辱の死はせぬ物ぞ。此の理も背く武士は、勝つも實の勝ならず、恥を子孫に殘すなり。心得たるか正行。」「承り候。」と、互に駒を引きかへし、東西に別れしが、振り返り〳〵、親は我が子の身の行方、子は又親の最期の末、思ひつゝみて弓取の、泣かぬを今の涙とは、よその袂にせきかくる、湊河へぞ 三重 寄せにける。明くれば五月二十五日、尊氏の軍兵海手山手百萬餘騎、楯をならし箙をたゝき、鬨をどつとぞ揚げたりける。 楠手勢七百餘騎、同時に鬨をつくり立て、多勢が中にわつて入り、喚き叫んで 三重 戰ひける。味方は小勢といひながら、一命を義路にかけ、名を末代にとゞめんと、思ひ切つたる勇士ども、北より南へ追ひ靡け、西より東へわつて通り、息をも續がせず攻めかくれば、さしもの大勢支へかね、須磨の上野へさつと引き、後陣の勢をぞ待ち居たる。大森彦七盛長、駒かけする大音上げ、「鬼神ならぬ楠、某が一軍に、正成兄弟首取つて、敵味方の目を覺さん。彦七を手本にせよ。」と、廣言吐いて打つてかゝる。正成も駒かけよせ、「何大森とや。合はぬ敵不足ながら、心ざしのやさしや。」と、まつしぐらに驅け出す。この勢ひに氣を失ひ、逃鞭打つてひつかへす。「きたなしかへせ。」と追つかけしは、早瀬の鮎を鵜の鳥の、追うてまはるが如くにて、程なく追ひつめ盛長が、上帶つか

あふ軍兵感涙に、鎧の袖をぞ絞りける。正成も共に涙は先だてども、わざと聲をあららげ、「ヤア弓馬の家に生まれて、討死するが珍らしきか。おことを年月養育せしは、父が最期の供せよとては育てぬぞや。戰ふべき所に進み、引くべき所に退き、天下に功をたつるこそ、よき弓取とは名付けたれ。傳へ聞く西天に獅子といふ獸有り。その獅子子を產んで三日の內その子を、數千丈の巖壁より眞逆樣に投げ落す。獅子の氣分なき子は、岩角に身を破つて當座に死す。勢ひそなはる獅子の子は、中よりひらりと跳ね返り、身を全うすと傳へたり。我が子の心を見る事は、畜類とても斯くの如し。今諸國八方にそばだつたる敵の中、幼き汝を歸す事、かの巖壁に拋つ獅子の子よりも猶危し。汝勇士の氣分備はらば、數萬の敵の鋒先の岩石も、凌ぎて碎く獅子の勢ひ、太平の御代と跳ね返せ、吉野初瀨の名木も、老木は次第に枯るれども、こぼるゝ種の色香をつぎ、花の名高き山ぞかし。二葉の苗を殘すこそ、巖とならん楠が、永き世までの形見ぞ。」と、鎧の引合より一卷を取り出し、「これぞ我が祕する所の軍術、この書を讀みて道を得ば、父正成が存へ有るも同然ならん。」と、一卷を手に渡し、「サアこの上にも聞分なく、腹切らばきれ供せばせよ。父がいふ事これまで。」と、馬引きよせひらりと乘り、思ひ切つたる心にも、ゆゝしき我が子の武者振を、見るも限りと目に瞻き、涙に手綱くりそへて、駒をひかふる許りなり。正行も理に當る親の教訓爲方も、涙を抑へ、「御詞一々承り候。」と、一卷取

と、義を重んずる許りなり。今度の合戰味方必定打負け、王法忽ち傾き、御代を奪はれ給はん事、鏡に照らすが如くなれば、我一つの謀を以てさま〴〵お諫め申せども、坊門の宰相邪の理を進め、君用ゐさせたまはねば、力なく打立つたり。父が一期の名殘の軍、花々しく戰ひ、一戰に腹を切るべきぞ。おことはこれより故郷に歸り、父が最期と聞くならば、彌身を全うして、二十にも餘る時、金剛山を要害として、住吉天王寺に打つて出で、近鄰を劫し、討手向はば一命を、養由が矢先にかけ、義を紀信が忠烈に比べ攻め戰ひ、君を御代に立て參らせ、父が憤りを散ぜん事、いかなる佛事孝養も、これにはなどか勝るべき。今生にて汝が顏見る事もこれまでぞ。必ず詞を忘るゝな。」と、勇氣撓まぬ弓取も、恩愛父子の浮世の別れ、涙をはら〳〵とぞ流しける。正行聞きもあへず「口惜しき父の仰せやな。楠正成が嫡子正行こそ負軍を考へ、道より逃げて歸りしと、世の嘲りに落ちん事、屍の上の恥辱候。殊に親の討死と、思ひさだめし軍場を、見捨つる子や候べき。是非御供につれられずば、我等一騎かけぬけ、敏達天皇の後胤、井手の左大臣橘の諸兄公の末葉、楠河内判官が嫡子帶刀正行、生年十一歳と名乘つて好き敵にかけ合はせ、引つ組んでさしちがへ、冥土の道の魁と思ひ詰めたる正行、敵の旗をも見ぬさきに、歸れとは恨めしや。幼くて戰場の妨げと成るならば、只今玆にて腹切らん、介錯してたべ人々。」と、芝の上にどうど居て、聲も惜しまず泣きければ、あり

持に押入れて送らるゝ、なうやるかたなさ便りなさ。乳母が慕ひくるとは知らず、頭も上らず息もならぬ長持を、搖るやら振るやら打付け廻る、その響胸にこたへ、目もくら／＼と幾度か死に入りし。火の車にのせて行く、地獄の迎ひもかくやらん。この上のお情に我が夫の陣屋まで、送り届けて給はれ。」と、乳母諸共手を合はせ、かきくどきてぞ泣き給ふ。正成打首肯き、「さこそ／＼。我大内を出でしより、斯樣の事のあらんとは、宰相が詞の色にて察せしなり。義貞の御陣所へ送り申すはやすけれども、宰相かくと洩れ聞かば、陣場に女中を召されしと惡樣に奏聞し、叡慮を以て御夫婦の中をさかば、御恥辱を招くに似たり。それ／＼源秀、これより都へ御供し、玄惠法印に預け參らせよ。道中人に悟られぬ用心第一、疾く／＼。」と有りければ、「合點々々。智畧はお家、勸學院の雀、任せておけ。」と小躍して、郎等二人が具足をぬがせ、長持に入れ棒差通しになはせて、「これ内侍樣も乳母御も、慮外ながら下女にして、我等は又この體。」と、内侍の裲襠の上か衣かづき、二王の樣なる大入道、五日歸りの花嫁と、しやなら／＼とふりかけて、「サア腰元衆、早うおぢやや。」と夕影も、眼は朝日照る月の、都の方へと急ぎける。正成遙かに見送つて、嫡子正行を招き淚を浮め、「汝幼くともよく聞きおけ、忝くも我帝に頼まれ奉り、命を敵の矢先にかけ、身を戰場になげうつ事、譽を取つて名を殘さん爲にもあらず、子孫の榮華を願ふにもあらず、朝敵を亡ぼし國家安全の、叡慮をやすめ奉らん

ば、「承る。」と和田の新發意、畦を傳うて走りよる。其の丈六尺七寸、古の辨慶もあざむく許り、鬼のやうなる赤入道。二人は、「あはや。」と手を合はせ、飛び入る所を引寄せて確と抱く。『なうさうせいでも死ぬる身を、せめて身體に疵付けず、死なせてたべ。」と飛び入るを、「これ上臈、殺す程なら何のとめう。あれなるは楠判官正成、物の憐れを見捨てぬ氣質、『仔細とつくと聞き届けよ。』との使なり。」と言ひければ、「扨は楠殿とや。自らこそ新田義貞の妻勾當の內侍なり、お情に新田殿の陣屋へ送りたべかし。」と、宣ふ所へ二人の下部立歸り、「ヤァウ長持の錠捻ぢ切つた、おのれ取逃し手振で歸つてこちとが命有る物か。此方へうせう。」と取り付く所を、源秀二人が首筋ひつ攫み、「手振で歸れば取らるゝ命、爰にて取つてくれんず。」と、蘆間にかつぱと打込めば、五體を搦む菱かづら、泥に醉うてぞ失せにけり。その隙に楠親子馬乘りはなし、とかういたはり給ひければ、內侍も涙にくれながら、「常々夫の物語、『楠判官正成は慈悲第一の大將と、聞きしに變らぬ御情、何と報じまゐらせん。一とせ猿樂見物の時、伊豫國の住人大森彦七盛長とやらん、みづからに心をかけ、坊門の宰相を媒にて、威勢でおどし文でぬらし、色かへ品かへ口說きしを、つれなく返事もいたさぬ間に、新田義貞の妻となつたるは、上樣よりの敕諚、天下はれての夫婦ぞや。それにこの度義貞殿、西國發向の留守を覗ひ、宰相理不盡に亂れ入り、先約は大森、媒の宰相義理が立たぬの何のとて、無理無體に長

押並べてうちければ、舎弟正季一族和田の新發意源秀、おなじく新兵衛尉紀六左衛門恩地の左近、馬物具を輝かし、心の花も咲きかくる、櫻井の宿に著きけるが、まだ雲こりて五月雨の、やゝ夕立と降る雨は、瀧の落つるが如くにて、人馬の足を立てかね、生田の森に打入れて、暫く晴間を待ち居たり。雨に波よるこやの池、堤を急ぐ蓑笠は、早苗の賤かと見すつれば、下部二人に長持かかせ、四十餘りの女房の、雨にあらそふ涙の雫、萎れまろびて走りくる。下部ども長持どつかとおろし、「エ、どう因果の夕立や、目も鼻もあかれぬ。いざ來い、あの森で少し晴らして行くまいか。コレそこな女子殿、長持預けた番めされ。」と、二人は森へぞ走りける。女とかうにかきくれて、歎き沈みて立ちけるが、思ひよりある顔附にて、長持の棒取つて捨て、石を拾ひてちやう／＼／＼、敲く手先に力なき、女力も念力の、天や見透す鍵の穴、錠前はなれ落ちければ、「なうありがたや、サアお出で。」と、蓋を取る手にすがりつき、二十許りの上臈の、涙ひまなく息籠り、顔にばらつく亂髪、柳櫻をこきまぜて、水にうかめし如くなり。「いざ下部どもの來ぬさきに。」と、抱き出せば、「ア、嬉しや、この池こそみづからに、菩提を進むる功徳池よ。そなたも數珠を持つてか。」「お肌に御本尊かけてか。」「オ、ほぞんかけたる時鳥、あやめの沼は水淺し。」と、深みを尋ねさまよひたる。正成馬上より遙かに見付け、「あれ／＼、身を投ぐる女あり。敵か味方か何れにもせよ、源秀かけつけ助けられよ。」と有りけれ

より私の怒りに忠を忘れぬ良雄、彌面をやはらげ、「仰せにては候へども、その大森彦七が内通にて、味方勝に極まらば、猶以て正成向ふまでも候はず。さりながら詩歌管絃は殿上の御玩び、弓馬合戰の道は武門の諫言に任せられ、是非に都を明け渡し、敵に一旦勝を與へ、重ねて畢竟の勝を御覽あるこそ、謀を帷幄の內に廻らし、勝つ事を千里の外に顯はす籌策にて候」と子房が祕藏孔明が骨髓、殘る方なく奏せらる。宰相大きに色を損じ、「御邊がいふまでもなく、弓馬合戰の道なればこそ、賤しき汝等禁庭へ召さるゝ條、有り難しとは存ぜずや。先年御邊千早赤坂の城郭にて、六波羅の大勢を傾け、相模入道亡びしも、全く武略の手柄にあらず、君の聖運天に叶ひ、宗廟社稷の大小の神祇、王法を守護し給ふ故、殊に今度は目に見えたる勝軍、大森が御蔭にて、手柄すべきは此の度。早うつ立て。」と有りければ、軍法不覺の卿相雲客口々に、「敵の內通有るからは、天の與へこの時、是非是非楠馳せ向ひ、朝敵尊氏一戰に攻め亡ぼし、宸襟を休め奉れ。」と、衆議一決の敕諚は、轉てかりける御運なり。正成も「この上はさのみ申すに及ばず。」と御前を立ちけるが、これぞ最後の合戰と、思ひ定めし忠臣の、屍は刃にきゆれども、義は碎かれぬ楠と、朽ちせぬ名をこそ三重留めけれ。元來正成智仁勇を兼備し、死を善道に守る良將、今度の合戰味方必定負軍、討死の時極まれりと、本國へも立歸らず、直に五月十六日、有りあふ手勢五百餘騎、嫡子帶刀正行十一歲、父が馬に

きに驚かせ給ひ、楠判官正成を軈て御前に召されける。「抑義貞が注進事急なり、罷り向つて合戰を致すべし。」との敕諚、楠畏まつて奏せしは、「數年の軍に疲れたる御方の小勢、筑紫方は新手の大勢機に乘つたるに驅け合はせ、常の如くの合戰は、御方打負け申さんこと決定。先づ新田殿をも召し還され、君は比叡山へ臨幸なり、正成も河内に退き、敵を都へ誘き入れ、河尻をさし塞ぎ、籠の鳥の如くにして、兵粮をとめ敵軍次第に疲れ落ちん所を、新田殿は山門より押寄せ、正成は搦手より攻め上り眞中に包んで、一蒸しむす程ならば、朝敵一戰に亡びん事、正成が方寸の内に覺え候。軍は必ず一旦の勝負を見るなかれ、始終の勝こそ肝要にて候へ、たとへ官軍百度戰ひ百度負くるとも、正成一人生きて有ると聞召さば、聖運終に開かるべしと思召され候へ。」と、世に賴もしくぞ奏しける。坊門の宰相清忠、御簾の前につつと出で、「ヤア臆したるか楠。尊氏が多勢に聞きおぢして、一戰にも及ばず河内へ退き、君を比叡山へ臨幸なし奉れとは、命の惜しさに帝位を輕しめ申すよな。總じて新田義貞、勾當の内侍に思ひを殘し、都に心引かるゝ故、軍手ぬるく敵にきほひ付きたるに、御邊も河内へ引かんとは、故郷妻子がゆかしいか。伊豫國の住人大森彥七盛長といふ武士、尊氏に組すると雖も、某に緣有るゆゑ、裏切して味方に力を加へんとの内通あれば、味方の勝利目前にて、御邊らが命に氣遣ひのない事はこの宰相が請合、早々發向有るべし。」と、嘲り顏して申さるゝ。楠もと

吉野都女楠

第一

往んじを尋ねて來れるをしる、大權聖者の未來記見つんべし。東魚來つて四海を呑み、西鳥來つて東魚をくらひ、海内既に一に歸し、二度九五の御位、後醍醐の帝と重祚ある。逆臣相模入道が一族亡びて後、足利治部大輔尊氏聊か朝家を怨み奉り、東國勢を引率し、矢矧鷺坂竹の下、數ヶ度の軍に勝ち誇り、己と征夷將軍になつて、帝都ま近く攻め入りしを、新田左中將義貞、楠判官正成、陳平張良が肺肝より出でたる如き名大將、命を風前の塵にかけ、義を金鐵より堅くして、驅け破り驅け惱まし、千變萬化の合戰に、さしもの尊氏つひに打負け、筑紫をさして落潮の、八重九重や都の内、萬歳をこそ唱へけれ。時に建武三年五月十五日、新田義貞早馬を立てて奏聞ある。「抑朝敵尊氏大友少貳を從へ、九州の軍兵五十萬騎、兵船數千艘にて攻め登り、尊氏が弟直義、山陰山陽の大勢陸路をうつて雲霞の如く、播州の赤松敵に組し、苔縄の城に立て籠り、官軍を遮り候を、義貞備後備中に支へ、挑み戰ひ候間に、敵船はや須磨明石をはせ越え候。」と、追々注進頻りなり。天皇大

なく捕人の役人、夫婦を搦め引き來る。孫右衞門は氣を失ひ、息も絶ゆる許りなる、風情を見れば梅川が、夫も我も繩目の科、眼も昡み泣き沈む。忠兵衞大聲揚げ、「身に罪あれば覺悟の上、殺さるゝも是非もなし、御廻向賴み奉る。親の歎きが目にかゝり、未來の障礙これ一つ。面を包んで下され、お情なり。」と泣きければ、腰の手拭引絞り、めんない千鳥百千鳥、泣くは梅川河千鳥、水の流れと身の行方、戀に沈みし浮名のみ、難波に遺し留まりし。

冥途の飛脚　終

かゝる、おつつけ今に戻られう。」と、いふところへ忠三郎、息を切つて驅け來り、「これは〳〵忠兵衛樣、親父樣の話で段々聞いて來た。此方の事でこの在所は、大坂からいぬが入り、代官殿から詮議ある、劒の中へ晝日中、運の盡きたお人ぢや。此方の振を見附けたやら、俄に在所家竝の片端から家探し、親父樣を今探す。これから私が家の番。親父樣はいとしや、『早うぬかしてくれよ。』とて、狂亂になつてぢや。鰐の口とは只今、サア〳〵裏道から御所街道、山へかゝつて退かつしやれ。」と、いへば夫婦は狼狽ふる。女房は譯知らず、「私も一所に退きましよか。」「阿房らしい。」と引退けて、夫婦に古蓑古笠や、雨のあしべも亂るゝ心、死しても忘れぬこの情、深く忍びて出でにけり。忠三郎、「先づうれし。」と、息を吐いだる處に、莊屋年寄先に立ち、代官所の捕手の衆、忠三郎が門口背戸口二手になり、どや〳〵と込み入つて、筵をまくり簀子を破り、唐櫃、米櫃、灰俵、打返してぞ探しける。土間かけて二十疊にも足らぬ小家、何處に隱れん樣もなし。「この家は別條なし、野道を探せ。」と言ひ捨てて、茶園畑の間々を、かり立ててこそ三重通りけれ。親孫右衛門跣足にて、「如何ぢや〳〵忠三郎、善か惡か聞きたい。」「ア、好い〳〵氣遣ひない。夫婦ながら、何事無う甘々と落し濟ました。」「ハア有り難い忝い、如來のお蔭。直に又道場へ參りて、御開山へ御禮申さう。なう嬉しや有り難や。」と、二人打連れ行くところに、「龜屋忠兵衛、槌屋の梅川、たつた今捕られた。」と、北在所に人だかり、程

泣き寄り、親子なり、殊に母もない倅、隱居の田地を賣つても、首繩は付けさせまい。今では世間廣うなり、養子の母に難儀をかけ、人に損かけ苦勞をかけ、孫右衞門が子で候とて、引込んで置かれうか、一夜の宿も貸されうか。みな彼奴が心から、その身も狹い苦を仕居る。嫁御にまで憂き目を見せ、廣い世界を逃げ隱れ、知音近付親子にも、隱れる樣に身を持ちなし、碌な死もせぬ樣に、この親は生みつけぬ。憎い奴とは思へども、可愛う御座る。」と許りにて、「わつ。」と消えいり泣き沈む。分けたる血筋ぞ哀れなる。涙の隙に巾著より、銀子一枚取り出し、「これは難波の御坊の御普請の奉加銀、今此處に有合はせた。嫁御と存じて遣るでもなし、只今のお禮の爲。この邊にぶらついては、能う似たとて捕へるぞ、良人は猶以て。これを路錢に御所街道へかゝつて、一足も早う退かつしやれ。此方の良人にも詞こそは交さずとも、ちよつと顏でも見たいが。いや〳〵それでは世間が立たぬ、どうぞ無事な吉左右を。」と、涙ながらに二足三足、行きては還り、「何と逢うても大事あるまいかい。」「何の人が知りませう、逢うて遣つて下さんせ。」「ア、大坂の義理は缺かれまい。どうぞして逆樣な廻向させなと、懇切に賴みまする。」と、咽せ返り振返り〳〵、泣く〳〵別れ行く後に、夫婦は、「わつ。」と伏し轉び、人目も忘れ泣き居たる、親子の中こそはかなけれ。忠三郎が女房、雨に濡れて立歸り、「待遠に御座りませう。此方の人は莊屋殿から、直に道場に參られ、それゆゑ逢ひも致さず。もう雨も霽れ

親父樣の、形身にさせたう御座んす。」と、塵紙袖に押包む、涙ぞ色に出でにける。詞の外れに孫右衞門、熟々と推量し、さすが恩愛捨て難く、老いの涙にくれけるが、「ム、そなたの舅にこの爺が、似たというての孝行か、嬉しい中に腹が立つ。年たけた倅を仔細あつて久離切り、大坂へ養子に遣はせしに、根性に魔がさいて、大分人の金をあやまり、擧句に土地を走つて、この在所まで詮議の最中、誰故なれば嫁御故。近頃愚癡な事なれども、世の譬へにいふ通り、盜みする子は憎からで、繩かくる人が恨めしいとはこの事よ。久離切つた親子なれば、善いにつけ、惡いにつけ、構はぬ事とはいひながら、大坂へ養子に往て、利發で器用で身を持つて、身代も仕上げた、あの樣な子を勘當した、孫右衞門はたはけ者、阿房者といはれても、その嬉しさはどうあらう。今にも探し出され、繩かゝつて引かるゝ時、好い時に勘當して、孫右衞門は出來した、仕合ぢやと褒められても、その悲しさはどうあらう。今から思ひ過されて、一日も先に往生させて下されと、拜み願ふは今參る如來樣御開山、佛に譃はつかぬぞ。」と、土にどうどひれふして、聲をはかりに泣きければ、梅川も聲を上げ、忠兵衞は障子より、手を出し伏し拜み、身を揉み歎き沈みしは、道理とこそ聞えけれ。猶も涙をおし拭ひ、「なう血の筋は悲しい。中の好い他人より、久離切つた親子の親しみは世のならひ。盜み騙りをせうよりも、何故前方に內證で、かう〳〵した傾城に、かうした譯の金がいると、密かに便宜もするならば、親は

ぎて後、未來でお目にかゝりましよ。」と、口の中にて獨言、諸共に手を合はせ、咽び入りてぞ歎きける。孫右衛門は老足の、休み〳〵門を過ぎ、野口の溝の水氷、すべるを留る高足駄、鼻緒は斷れて横樣に、泥田へがばとこけ込んだり。「ハア悲しや。」と、忠兵衛もがけども、騒げども、身をかへりみて出もやらず。梅川あわて走り出で、抱き起して裾絞り、「何處も痛みはしませぬか、お年寄のおいとしや。お足も濯ぎ、鼻緒もすげて上げませう、少しも御遠慮なさるゝな。」と、腰膝撫でて勞れば、孫右衛門起き上り、「何方やら有り難い、お蔭で怪我も致さぬ。若い上臈のお優しい、年寄と思召し、嫁子もならぬ介抱。寺道場へ參つても、これ此處の一心が、邪見では參らぬも同然、此方がほんの御生願ひ、もう手を洗うて下され。幸ひ此處に藁もある、鼻緒は私がすげましよ。」と懷中の塵紙を取り出せば、梅川は、「好い紙が御座んする、紙捻撚つて上げませう。」と、延紙ひき裂きし手元、孫右衛門不思議さうに、「先づ此方は此處邊に見知らぬお人ぢやが、何方なればこの樣に、懇切にして下さる。」と、顔をつれ〴〵ながむれば、梅川いとゞむなづはらしく、「ア、我等は旅の者。私が舅の親父樣、丁度お前の年配で、恰好もその儘。外へする奉公とは、さら〳〵以て思はれず。お年寄つた舅御の、臥し惱みの抱きかゝへ、給仕は嫁の役、御用に立てば私も、なんぼうか嬉しいもの。良人は猶親御の事、飛び立つ樣にもある筈。この紙とこの紙と換へて私が申し受け、良人の肌に著けさせ、父御に似たる

嫁姑の未來の對面させたい。」と、目もうろ〳〵となりければ、「それは嬉しう御座んせう。さりながら、私が母は京の六條、定めしこの閒詮議に人が往きつらん。日頃が眩暈持なれば、何うならんした事やら。ま一度京の母樣にも、一目逢うて死に度いぞ。」「オ、道理とも。我も其方のお袋に、壻ぢやというて逢ひ度い。」と、人目なければ抱き合ひ、淚の雨の横時雨、袖に餘りて窗を打つ。「ハァ、降つて來たさうな。」と、西受の竹櫺子、反古障子を細目に明けて、見るや野風の畠道、後しぶきに降る雨は、傾げて急ぐ阿彌陀笠、道場參り打連れしは、あれ皆在所の知つた衆、先なは樽井端の助三郎、これも在所の口利、あのお婆は荷持瘤の傳が婆、ア、いかい茶飲ぢやがの。其所へ見える剃下は、昔は大貧乏、年貢に詰つて娘を京の島原へ賣り、大盡に請出され、奧樣にそなはり、壻の庇で、田も五町藏も二ケ所の富限ぢや。同じ傾城請ける身が、我はそなたのお袋に、憂き目をかける口惜しい。あの爺は弦掛の藤次兵衞、八十八で一升の飯殘さぬ、今年は丁度九十五。其處へ來た坊主は鍼醫の道庵、彼奴が鍼で母者人を立て殺した。思へば母の敵ぢや。」と、憂きにつけての怨み言。「あれ〳〵、あれへ見えるが親父樣。」「あの綟の肩衣が孫右衞門樣か、ほんに目元が似たわいの。」「それほど能う似た親と子の、詞をも替されぬ、これも親の御罰ぞや。お年も寄る、足元も弱つた。今生のお暇。」と、手を合はすれば、梅川は見始めの見納め、「私は嫁で御座んする。夫婦は今をも知らぬ命、百年の御壽命過

今は留守で御座る。」といふ。「ム、忠三殿におか様はなかつたが、此方は誰でばし御座るぞ。」「ア、私も三年あとにこれの内へ嫁入して、前方の知る人は、誰が何うも知りませぬ。ヤア眞に皆様は、もし大坂では御座らぬか。これの親方孫右衛門様の繼子忠兵衛殿と申すが、大坂へ養子に往て、傾城買うて、他人の金を盜み、その傾城連れて走られたというて、代官殿より御詮議。孫右衛門様は疾うに親子の久離を切り、構はぬとはいひながら、眞實の親子なれば、年寄つての氣苦勞。これのは馴染の事なれば、もしこの邊狼狽へて、見付けられてはいとしい事と、内外へ氣をつけらるゝ。莊屋殿から呼びに來る。寄合の、印判の、節季師走にこの在所は、傾城事で煮え返る。なううたてのお傾城殿や。」と、遠慮もなくぞ語りける。忠兵衛はつと思ひ、「如何にも〳〵、大坂でもその取沙汰。我等は夫婦連で年籠りに參宮の志、懐かしさに寄りました。ちよつと呼うで來て下され、立ちながら逢うて歸り度い、大坂者といはずに賴みます。」といひければ、「扨はいかうお急ぎか、往て呼うで來ませう。さりながら、鎌田村のお道場へ、京のお寺のお下り、毎日のお讃歎、先から直にお道場へ參られたも、いさ汁の下さし燻べて下され。」と、襷がけして走り行く。後の門口梅川が、はたと鎖して鎹かけ、「これはほんの敵のなか、大事ないか。」といひければ、「忠三郎といふ者は、百姓に稀な男氣を持つたもの、賴んで一夜逗留し、死ぬるともこの處、故郷の土に身を成して、生の母の墓所、一所に埋まれ、

らさつと鳴つたは、我を追手の尋ぬるよと、覆ひ重なり影隱し、振放見れば人にはあらで、妻戀鳥の羽音に怖ぢる身となるは、如何なる罪の報いぞと、口說き歎きて行く姿、泣くか笑ふか、富田林の羣鴉、せめて一夜の心なく、咎むる聲の高間山、あの葛城の神ならで、晝の通路つゝましく、身を忍ぶ道戀の道、我から狹き浮世の道、竹の內峠袖濡れて、岩屋越とて石道や、野越え山くれ里々越えて、行くは戀ゆゑ　三重　すめる世の掟正しく、畿內近國に追人かゝり、中にも大和は生國とて、十七軒の飛脚問屋、或は巡禮古著買、節季候にばけて家々を、覗きの機關、飴賣と、子供に飴を甜らせて、口をむしるや罠の鳥、網代の魚の如くにて、逃れ方なき命なり。無慙やな忠兵衞、我さへ浮世忍ぶ身に、梅川が風俗の、人の目立つを包みかね、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明し、二十日餘りに四十兩、遣ひ果して二分殘る。かねも霞むや初瀨山、餘所に見捨てて親里の、新口村に著きけるが、「これお梅、此處は我が生まれ在所、二十歲まで育つて覺えしが、師走の果てにこの如く、諸勸進諸商人、春とても無い事。あれ彼處にも立つて居る、野外れにも二三人。胸騷ぎもして來た。四五町往けば、眞の親孫右衞門の家なれども、不通といひ繼母なり。この藁葺は忠三郎とて下作あてた小百姓、腹の中から馴染み、賴もしい男。先づ此處へ。」と打連れ、「忠三郎宿にか、久しうお目に懸らぬ。」とつゝと入れば、嚊と思しく、「誰で御座るぞ。これのは今朝から莊屋殿へ詰められ、

顔より此方様の、肌にこれを。」と風防ぐ、びらり帽子の紫や。色で逢ひしははや昔、今日はしんみの女夫合、頼まば願ひかのえ申、庚申堂よと伏し拜み、振返り見る勝曼の、愛染様に愛敬を、祈る芝居の子供衆や、道頓堀のいろ〳〵や、馴れし郭のそれぞとは、紋で覺えし提灯の、中にはかなや槌屋内、この木瓜にうち添ひて、私が紋の松皮の、松の千歳を祈りしに、定めぬ契り提灯の、消ゆる命の夕には、この紋付けて我が中の、經帷子と觀念し、「冥途の道をこの樣に、手を引かうぞや。」「引かれう。」と、又取交し泣く涙、袖の氷と閉ぢ合へり。誰が關据ゑぬ道なれど、問ひ〳〵行けば捗ゆかず。今朝の姿をそのなりに、素足に雪駄しみづけば、空に霙の一曇り、霰交りに吹く木の葉、ひらり平野に行き懸り、「此處は知る人多ければ、此方へ〳〵。」と袖覆ひ、里の裏道畦道を、すぢりもぢりて藤井寺。「あれ〳〵あれを見や、何處の田舍も戀の世や。背門に菜を摘む十七八が、唄門に立つたは忍びの夫かえ。野風身の毒、此方這入らしやんせえ。」餘所の睦言妬ましく、それ覺えてか何時の事、かの初雪の朝込に、寢衣ながらに送られし、大門口の薄雪も、今降る雪もかはらねど、變り果てたる身の行方、我ゆゑ染めて可憐しや、元の白地を淺葱より、戀は譽田の八幡に、起請誓紙の筆の罰、其方を除けてと泣く涙、唄暫し人目の、ゝ許しはあれど、申しこれなうさりとては、私が身とても儘にはと、末は涙に果てしなく、延紙の三つ折絞るにも、裾に窶るゝ小笹原、霜に枯野の薄原、ばう〳〵さらさ

華も人の金、果ては砂場を打過ぎて、後は野となれ大和路や、足に任せて　三重

下之巻

忠兵衛
梅川　あひやひかご

翠帳紅閨に枕並べし閨のうち、馴れし唄襖のよすがらも、四つ門の跡夢もなし。さるにても我が夫の、秋より前に必ずと、あだし情の世を頼み、人を頼みのヲ綱断れて、夜半の中戸も引替へて、人目の關にせかれ行く。昨日の儘の鬢付や、髪の髷目のほつれたを、わけて進じよと櫛を取る、手さへ涙に凍えつき、冷えたる足を太股に、相合火燵相輿の、駕籠の息杖生きてまだ、續く命が不思議ぞと、二人が涙こぼれ口、明けぬ間は暫しとて、駕籠の簾をあげてさへ、膝組み替す駕籠の内、狭き局のありし夜の、逢瀬に似たは似たれども、炭の埋火何時しかに、朝の霜と置替へて、夜半の嵐に呼ばれては、應ふる野邊の禿松、過ぎしその夜が思はれて、いとゞ涙の種ならん。「何くど／＼と思ふぞや、これぞ一蓮託生。」と、慰めつまた慰みに、比翼煙管の薄煙、霧も絶え／＼晴れ渡り、麥の葉生の風荒れて、朝出の賤や火を貰ふ、野守が見る目恥かしと、駕籠立てさせて暇を遣る。値の露の命さへ、惜しからぬ身は惜しからず。猶も惜しまぬ徒歩跣足、惜しむは名殘許りぞや。終に著馴れぬ綿帽子、「私が

そなたの心の無念さを、晴らしたいと思ふより、ふつと金に手をかけて、もう引かれぬは男の役、かうなる因果と思うてたも。八右衛門が面相、直に母に吐す顔、十八軒の仲間から、詮議に來るは今の事。地獄の上の一足飛、飛んでたもや。」と許りにて、縋り付いて泣きければ、梅川、「はあ。」と慄ひ出し、聲も涙にわな〳〵と、「それ見さんせ。常々いひしは此處のこと、何故に命が惜しいぞ、二人死ぬれば本望、今とても安い事、分別すゑて下さんせなう。」「ヤレ命生きようとおもうて、この大事がなるものか。生きらるゝだけ添はるゝだけ、高は死ぬると覺悟しや。」「ア、さうぢや生きらるゝだけこの世で添はう。今にも人が來る爲、此處へ隱れて御座んせ。」と、屏風の陰に押し入れ、「ア、私が大事の守を、內の簞笥に置いて來た、これが欲しい。」といひければ、「ハテかかる惡事を仕出して、いかな守の力にも、この科が遁れうか。兎角死身と合點して、我はそなたの廻向せん。そなたはこの忠兵衞が、廻向を賴む。」と屏風の上、顏を出せば、「ハア、悲しや忌々しい、ちやつとおいて下さんせ、嫌な物によう似た。」と、屏風にひしと抱き付き、咽せ返りてぞ歎きける。越後主從立歸り、「サア何處もかも埒明いた。お出での勝手近ければ、西口へ札が廻つた。」と、いへども夫婦はわな〳〵と、「さらばさらば。」も慄ひ聲、「おさぶさうなが酒わいの。」「酒も咽を通りませぬ。」「目出度いと申さうか、お名殘惜しいと申さうか、千日いうても盡きぬ事。」「その千日が迷惑。」と、ゆふづけ鳥に別れ行く、榮耀榮

林も玉も五兵衞も一兩宛ぢや來い〳〵。」と、金銀降らす邯鄲の、夢の間の榮耀なり。「サア今の間に夜明け、今宵の中に出る樣に、賴む〳〵。」といひければ、主人俄に勇みをなし、「無い程は無いも金、ある段には有るものかは。氣を死なさう事でない、川樣嬉しう思はんしよ。ャ大事の金を持つて往く、林も玉も供しや。」と、引連れ走り出でにけり。八右衞門は濟まぬ顏、實とは思はねども、「只さへ貰ふこの小判、返す物をいはれぬ辭儀。五十兩慥かに請取つた、手形返す。」と投げ出し、「梅川殿好い男持つてお仕合、よね樣達これに。」と、金懷中し出でければ、「私等もいざ歸りましよ、川樣目出度う御座んす。」と、皆宿々へぞ歸りける。忠兵衞氣をせいて、「花車は何故遲いぞ、五兵衞往つてせつてくれ。」と、立ちに立つてせきけれども、「イヤ身請の衆は親方が濟んでから、宿老殿で判を消し、月行事から札取らねば、大門が出られませぬ。ま些と隙が入りませう。」「エ、其處邊を早うこりや賴む。」と、又一兩投げ出す。「おつとまかせ。」と足輕く、走る三里の灸よりも、小判のききぞこたへける。「サア〳〵この間に身拵へ、べた〳〵した取姿。帶もきりゝと仕直しや。」と、めつたに急けば、「何ぞいの、一代の外聞、傍輩衆へも杯事。暇乞もわけようして、ゆるりと出して下さんせ。」と、何心なく勇む顏。男は、「わつ。」と泣き出し、「いとしや、何も知らずか、今の小判は堂島のお屋敷の急用金、この金を散らしては、身の大事は知れた事。隨分怺へて見つれども、友女郎の眞中で、可愛い男が恥辱を取り、

聲を上げて泣きけるが、「情なや忠兵衞樣、何故その樣に逆上らんす。そもや郭へ來る人の、假令持丸長者でも、金に詰るはある慣ひ、此處の恥は恥ならず。何を當に他人の金、封を切つて撒き散らし、詮議に逢うて牢櫃の、繩かゝるのといふ恥と、この恥と換へらるか。恥かくばかりか梅川は、何となれといふ事ぞ。とつくと心を落しつけ、八樣に詫言し、金を束ねてその主へ、早う屆けて下さんせ。私を人手に遣りともない、それはこの身も同じ事。身一つ捨てると思うたら、皆胸に籠めて居る。年とてもまあ二年、下宮島へも身を仕切り、大坂の濱に立つても、此方樣一人は養うて、男に憂き目かけまいもの。氣を靜めて下さんせ、あさましい氣にならんした。かうは誰が仕た、私が仕た、皆梅川が故なれば、忝いやらいとしいやら、心を推して下さんせ。」と、口說き立てゝ、小判の上にはらはらと、淚は井出の山吹に、露置き添ふる如くなり。忠兵衞氣も有頂天、前後括らぬ間に合筵、敷金の事思ひ出し、「はてやかましい、この忠兵衞をそれ程たはけと思やるか。この金は氣遣ひない、八右衞門も知つて居る。養子に來る時、大和から敷金に持つて來て、餘所へ預け置いた金、身請の爲に取戾した。花車此處へ。」と呼び寄せ、「先へ手付に五十兩、今百十兩、合はせて百六十兩、これ川が身の代、これ又四十五兩、いつぞやしめた帳面、買ひ掛りの借錢、五兩は遣手、九月からの揚錢、萬事十五兩程と覺えたが、算用がやかましい、二十兩で帳消しや。この十兩は、此方へ御祝儀やら骨折分、

川に※藁を焚き、彼方へ遣らうといふ事か、おいてくれ。氣遣ひすな、五十兩や百兩、友達に損懸ける忠兵衛ではござらぬ。ア、八右衛門樣、八右衛門奴、サア金渡す手形戻せ。」と金取り出し、包を解かんとする處を、八右衛門押へて、「コリや待てやい忠兵衛、餘程の戯けを盡せ。その心を知つたる故、意見をしても聽くまじと、郭の衆を頼んで、此方から除けて貰うたらば、根性も取直し、人間にもならうかと、男づくの懇だけ。五十兩が惜しければ、母御の前でいふわいやい。てんがうな手形を書き、無筆の母御を宥めしが、これでも八右衛門が屆かぬか。その金嵩も三百兩、手金の有らう樣もなし、定めて何處ぞの仕切金、その金に疵を付け、八右衛門仕た樣に鬢水入では濟むまいぞ。但し代りに首遣るか。逆上り詰めるその手間で、屆ける處へ屆けて仕舞へ。エ、性根の据らぬ氣違者。」と、割つつ碎いて叱れども、「いや／＼仁義立ておいてくれ。この金を餘所のとは、この忠兵衛が三百兩持つまいものか。女郎衆の前といひ、身代を見立てられ、猶返さねば一分立たぬ。」と、包解いて、十、二十、三十、しじう詰らぬ五十兩、くる／＼と引包み、「これ龜屋忠兵衛が人に損をかけぬ證據、サア請取れ。」と投げ付くる。「男の面へ何とする。忝いと禮いうて、返し直せ。」と投げ戻す。「己に何の禮言はう。」と又投げ付けつ投げ返し、腕捲りしてぎしみ合ふ。梅川涙にくれながら梯子驅け下り、「なうすつきり私が聞きました。皆島八樣のがお道理ぢや。これ手を合はせる、梅川に免して下さんせ。」と、

げ、「これも買はば十八文。如何に相場が安いとて、五十兩を二分五厘替、神武以來無い事。友達さへこれなれば、他人を騙るは御推量。この次は段々に巾著切から家尻切、果ては首切、如何にしても笑止な。あの如くに亂れては、主親の勘當も、釋迦達磨の意見でも、聖德太子が直に教化なされても、いつかなく直らぬ。郭でこの沙汰ばつとして、寄せつけぬ樣に賴みます。梅川殿へも吹き込んで、此方から挨拶切り、島屋の客にさらりつと、請けさせて仕舞ひ度い。皆あの流が心中か、女郎の衣裳を盜むか、碌な事は出來さず、片小鬢剃りこぼされ、大門口に曝され、友達の一分捨てさする、人でなしとは彼が事。可愛くば寄せ付けて下さるな。」と、語るを聞けば梅川も、悲しいといとしいと、身の果敢なさと掻混ぜて、胸引裂ける忍び泣き、「あゝ刃物がな鋏でも、舌を切つても死にたい。」と、煩悶え伏したる苦しみを、下には各推量して、「ひよんな心にならんした。肩の悪い梅川樣、いとしぼいは川樣一人に留めた。」と、下女、料理人、うら若き禿も袖を絞りけり。忠兵衛元來悪いなし、押へかねてずんと出で、八右衛門が膝にむんずと居懸り、「これ丹波屋の八右衛門殿、常々の口程あつて、オ、男ぢや、見事ぢや。三人寄れば公界、忠兵衛が身代の棚下ししてくれる。忝い、コリヤこの水入も男同士、母の心を安める爲、請取つてくれるかと、謎をかけて渡したを、この忠兵衛が五十兩、損かけうかと氣遣ひさに、郭三界披露して、男の一分捨てさする。但し又島屋の客に賄賂取りて、梅

が長者でも、龜屋へ養子にこすからは、高の知れた百姓。かういふこの八右衛門も若い者の慣ひ、一年に五百目一貫目、揚屋の座敷も蹈まねばならぬ。身にも應ぜぬ忠兵衛が、梅川にのぼり詰め、島屋の客と張合ひ、五月より此の方大方は揚げ詰、身請もこの頃極まり、百六十兩の內、五十兩手付渡したげな。それ故に方々の屆け金が不埒になり、當る處が譃八百、いかう小尻が詰つて來た。今でも梅川が、サア出るに極まらば、借錢もあらうし、泣いても二百五十兩、天から降らうか、地から涌かうか、盗みせうより外はない。かの手付の五十兩、何處から出たと思召す。身が方へ來る江戸爲替、中で取つて遣うたを、それとも知らず請ひに行き、養子の母御がいとしぼや。上つたは知つてなり、渡せ〲とせつかれて、忠兵衛が戾した小判、お目にかけうか。」と一包取り出し、「コレかう見た處は五十兩、さらば正體顯はして、獄門の種御覽あれ。」と、包を切つて切解けば、燒物の鬢水入。主人も一座の女郎も、「はあゝ。」と許りに怖氣立ち、身を縮むれば二階には、顏を疊に摺付けて、聲をかくして泣き居たり。短氣は損氣の忠兵衛、「傾城は公界者、五十兩の目腐銀取替へた借上、若い者に恥かかせ、川が聞いたら死にたかろ。懐の三百兩、五十兩引拔いて、面へ撲付け存分言ひ、我が身の一分川が面目雪いでやらう。ア、されどもこれは武士の金、殊に急用、爰が大事の堪忍。」と、手を懐へ幾度か、兎やせん角やしようげ烏、鶍の嘴の齟齬ふ、心を知らぬぞ是非もなき。八右衛門水入取り上

とつゝと入り、柄差帯逆手に取り、二階の下から板敷を、ぐわたぐと突き鳴らし、「女郎衆あんまりぢや、此處にも人が聞いて居る。如何なる男でそれほどに戀しいぞ。男がなうて寂しくば、お氣には入らずと、これにも一人貸してやろか。」と喚きける。梅川はそれとも知らず、「デモ逢ひたいが情ぢやもの、憎いなら來て叩かんせ。淸樣下なは誰さんぢや。」「イヤ大事御座んせぬ、中の島の八樣。」と、聞くより梅川はつとして、「これ〳〵、あの樣には逢ひともない。皆樣下りて下さんせ、私が二階に居る事を、必ず〳〵言ふまいぞ。」「其處らは粹ぢや。」とうちうなづき、皆々座敷に出でければ、「ヤア千代歲樣、なるとせ樣、歷々の御參會。梅川殿は宵の口、島屋を貰うて往なれたげな。忠兵衞も未だ見えそもない、花車此處へ寄らつしやれ。女郎衆も禿どもも、忠兵衞が事につき、耳うつて置く事がある、此處へ〳〵。」と密々すれば、「ハア、何事やら氣遣ひな。」と、いへども二階の梅川に、惡い噂も聞かせんかと、皆氣を配る折節に、忠兵衞は世を忍ぶ、心の氷三百兩、身も懷も冷ゆる夜に、越後屋に走り著き、內を覗けば八右衞門、橫座をしめて我が評判、はつと驚き立聞きす。二階には梅川が、心を澄ます壁に耳、漏るゝぞ仇の始めなる。斯くと知らねば八右衞門、「斯ういへば忠兵衞を憎み猜む樣なれど、ゐずくみぞ、あの男が身の成る果てが可愛い、尤も千兩二千兩、人の金をことづかり、暫しの宿を貸すけれども、手金とては家屋敷、家財かけて十五貫目、二十貫目に足らぬ身代。大和の親

請けられては、我が身一つは死んでものけう。天神太夫の身でもなし、卑しい金に氣が觸れた、見世女郎の淺ましさと、世間の稱へ傍輩のかもん殿を始めとして、格子女郎衆の手前もあり、忠樣と本意を遂げ、とやかう人に謠はれじ、面が脫ぎ度う御座んす。」と、泣きしみづきて語るにぞ、一座の女郎身の上に、思ひ合はせて尤もと、連れて淚を流せしが、「ア、甚う氣がめいる、わつさりと淨瑠璃にせまいか。禿どもちよつと往て、※竹本賴母樣借つて來い。」「いや先に鬢附油買ふとて聞きましたが、芝居から直に越後町の扇屋へ往かんしたげな。私は賴母樣の弟子なれば、能う似た處を聞かんせ、サア三味線。」と夕霧の、昔を今にひきかけて、「傾城に誠なしと世の人の申せども、それは皆僻事、譯知らずの詞ぞや、誠も譃ももと一つ。例へば命なげうち、如何に誠を盡しても、男の方より便りなく、遠ざかるその時は、心彌猛に思ひても、かうした身なれば儘ならず、自ら思はぬ花の根引に逢ひ、掛けし誓ひも譃となり、又初めより僞りの、勤めばかりに逢ふ人も、絕えず重ぬる色衣、終の寄邊となる時は、初めの譃も皆誠。とかく唯戀路には、僞りもなく誠もなし、緣のあるのが誠ぞや。逢ふ事かなはぬ男をば、思ひ〳〵て思ひが積り、思ひざめにもさむるもの、辛やしよざいと恨むらん。恨まば恨め、いとしいといふこの病、勤めする身の持病か。」と、戀に浮世を投首の、酒もしらけて醒めにけり。中の島の八右衛門、九軒の方より淨瑠璃聞きつけ、「ヤア皆聞き知つたよねの聲々、花車内にか。」

で、立寄るよねも氣がねせず。底意殘さぬ戀の淵、身の憂きしほで梅川も、此處を思ひの定宿と、餘所の勤めもかきの本、島屋をちよつと島隱れ、「申し淸さん、今日は島屋で、かの田舍のうてずにせびらかされて頭が痛い。忠樣はまだ見えぬかえ、せめての由緣に、此方樣の顏が見たさにかしに來た。」と、入るさの門の障子戶も、明くるあしたの形見かや。「さつても能う御座んした。あれ二階にも、女郞樣達が大勢遊びに御座んして、お客待つ間の酒事、拳をして御座んする。此方樣もお氣晴らしに、一拳して酒一つ。傍輩樣も御座んす。」と上る二階の隙間風、男交ぜずの火鉢酒、拳の手品の手もたゆく、※ろませ、さい、とうらい、さんな、同じ事とよ豐川に、ころの高瀨が差す腕には、はま、さんきう、ごう、りう、すむゐ。「それ〳〵何と、地體一つは鳴渡瀨樣。」「あれ梅川樣の御座んした。なう好い處へ來て下んした。此方樣拳の上手。宵から千代歲樣に仕付けられて無念な、敵取つて下さんせ。銚子直しや。」といひければ、「ア、うたての酒や。拳をする氣もあらばこそ、この梅川が今の身を、少しは泣いて貰ひたや。田舍の客が身請の事、今日も今日とて島屋にて、理窟を詰めてねだれ事、腹が立つやら憎いやら、とはいひながらこれは先、忠兵衞樣は後手といひ、宿の勢力一つにて、手付も渡し、約束の日限切れるも言ひ延ばし、今日までは繫がりしが、忠樣も世帶持、養子の母御の手前といひ、屋敷方歷々の町方を引受けて、東路かけての大事の商賣。如何なる事が邪魔になり、田舍の客に

にお屆け。」方々の爲替金高八百兩、ぐわらり〳〵と取り出す。忠兵衛いよ〳〵勢ひよく、「白銀は内庫へ、金子は戸棚へ。母者人、私は直にこの小判、お屋敷へ持參する。人の金を預れば、表も氣を付け早う締め、火の用心が一大事。戻りはちつと遲うても、駕籠で往けば氣遣ひない。夜食仕舞うては早や寢よ。」と、金懷中に羽織の紐、結ぶ霜夜の門の口、出馴れし足の癖になり、心は北へ行くと思ひながらも身は南、西横堀を浮々と、氣に染み付きしよねが事、米屋町まで歩み來て、「ヤァこれは堂島のお屋敷へ行く筈、狐が誑すか、南無三寶。」と引返せしが、「ム、我知らず此處まで來たは、梅川が川ありて氏神のお誘ひ、ちよつと寄つて顏見てから。」と、立歸つては、「いや大事。この金を持つては遣ひたからう。おいてくれうか、往つてのけうか。往きもせい。」と、一度は思案、二度は不思案、三度飛脚、戻れば合はせて六道の、冥土の飛脚と　三重

中之巻

唄えい〳〵鴉がな〳〵、浮氣鴉が月夜も闇も、首尾を索めてあはう〳〵とさ。青編笠の紅葉して、炭火ほのめく夕まで、おもひ〳〵の戀風や、戀と哀れは種ひとつ、梅かんばしく松高き、位はよしや引き締めて、哀れ深きは見世女郎、さらさ禿がしるべして、橋が架けたや佐渡屋町、越後は女主人と

たも、包は解くに及ぶまじ。いらうて見ても五十兩、如何してたもる。」と差出す。八右衛門手に取つて、「ハテ誰ぞと思ふ、丹波屋の八右衛門、請取るに仔細はない。これお袋、江戸爲替慥かに請取りました。不動參りに待ちまする。」と立つ處を妙閑實と思ひてや、「これ忠兵衛、仕切爲替の作法は、金と手形と引替へ。もし御持參なきならば、一筆ちよつと書かせましや。物は念ぢや。」といひければ、「オオそれ〳〵、母は無筆の一文字も讀まれねども、證許りに一筆。」と、硯出して目配せすれば、「易い事易い事、忠兵衛文言これ見や。」と、筆に任せて書き散らす。「一つ金子五十兩請取り申さず候。右約束の通り、晩には郭で飮みかけ、我等は幇間實正明白なり。何時なりとも騒ぎの節、屹度參上申すべく候。仍つて紋日の爲、鬢水入件の如し。」と、阿房のたら〳〵書き散らし、「さらばお暇申さう。」と、表へ出づれば妙閑は、「書いた物こそ物言へ。」と、又瞞されし正直の、親の心や佛の顔も、三度飛脚の江戸の左右、待つ夜もやう〳〵更けにけり。表に馬の鈴の音、「こりや〳〵駄荷が著いたぞ、中戸々々。」と聲高に、手々に葛籠擔げ込む。忠兵衛親子機嫌能く、「サア拍子が直つた。來年も仕合馬、馬子衆に酒よ煙草よ。」と硯拵へつ帳付けて、家内どんどと賑へば、手代の伊兵衛けうとげに、「なう堂島のお屋敷から、金三百兩九日に來る筈、前狀が上つた、何とて遲いと、お侍の甚内殿が睨め付けて歸られた。何と〳〵。」といひければ、宰領がうちがひより、「その三百兩合點。これ急々の御用、今夜中

に額を付け、「忝い〳〵。父二人、母三人、親は五人持つたれども、その恩よりは八右衛門、貴殿の御恩忘れぬ。」と、とかうは涙ばかりなり。「さう思へば滿足。サア人も見る、その內。」と立別れんとせし處に、內より母の聲として、「ヤア八右衛門樣か、忠兵衛これへ通しましや。」と、聲かけられて爲方なく、もぢ〳〵連立ち入りにけり。母は律義一遍に、「先程はお使、又御自身のお出で、御尤も、御尤も。これ彼方の金の屆いたは十日も以前、何として延引ぞ。胸にとつくと手をおいて、能う思案して見や。遲う屆けば飛脚は入らぬ、何が其方の商賣ぞ。サア今渡して上げましや。」と、いへども渡す金はなし。八右衛門も底意は聞く、「これお袋、恥かしながら八右衛門が、五十兩や七十兩、急に入る事もなし。これより直に長堀まで參れば、明日でも。」と立たんとすれば、「否々大事のお金、預れば氣遣ひで夜も寢られず。なう忠兵衛、きり〳〵渡しや。」と急り立てられ、「あつ。」といふより納戸に入り、うろ〳〵しても金はなし。入れもせぬ戶棚の錠、明ける顏してぴんといふ、鍵の手前も恥かしく、胸に願立て神降し、狂氣の如く氣を揉みしが、「ヤレ有り難や、この櫛箱に燒物の鬢水入、これ氏神。」と三度戴き、紙おし廣げくる〳〵と、駿河包に手ばしこく、金五十兩墨黑に、似せも似せたり五十杯、母には一杯參らせし、その惡智慧ぞ勿體なき。「これ〳〵八右衛門殿、今渡さいでも濟む金ながら、母の心を安めるため、男を立てる其方と見て、爲方なうて渡す金。さつぱりと請取つて、母の心安めて

合かける。この方は母、手代の目を忍んで、僅か二百目、三百目のへづり金、負ひ倒されて生きた心もせぬ處に、請出す談合極まつて、手を打たぬばかりといふ。川が歎き我等が一分、既に心中する筈で、互の咽へ脇差の、ひいやりとまでしたれども、死なぬ時節か、いろ〳〵の邪魔ついて、その夜は泣いて引別れ、明くれば當月十二日、其方へ渡る江戸金がふらりと上るを、何がなしに懐に押込んで、新町まで一散に、如何飛んだやら覺えばこそ。段々宿を頼んで、田舍客の談合破らせ、此方へ根引の相談しめ、かの五十兩手付に渡し、まんまと川を取留めしも、八右衞門といふ男を友達に持ちし故と、心の内では朝晩に、北に向ひて拜むぞや。さりながら、如何に懇なればとて、前に斷り立て置いて、遣へば借るも同然、後では如何と思ふ内、その方からは催促、謊に謊が重なつて、初手の眞實も虚言となれば、今何を言うても實には思はれじ。されども遲うて四五日中、外の金も上る筈、如何樣とも仕送つて、一錢一じ損かけまじ。この忠兵衞を、人と思へば腹も立つ。犬の命を助けたと、思うて料簡頼み入る。これを思へば世の中に、御仕置者の絶えぬも道理。この上は忠兵衞も、盜みせうより外はなし。男の口から斯樣の事、言はれうものか推量あれし。咽より劒を吐くとても、これほどにはあるまじ。」と、しほり泣にぞ泣き居たる。鬼とも組まん八右衞門ほろりと涙ぐみ、「言ひ難い事能う言うた。丹波屋の八右衞門男ぢや、料簡して待つてやる。首尾能うせよ。」といひければ、忠兵衞土

處に、「北の町からいかつけに來るは誰ぢや。ヤア中の島の八右衛門、彼奴に逢うてはむづかし。」と、東の方へ出違へば、「これ忠兵衛、外すまい〱。」と聲懸けられ、「ヤ八右衛門、この中は久しい。昨日も今日も一昨日も、人遣ろ〱と思うて、なにやかや延引した。めつきりと寒いが、親父の疝氣は。婆様の蟲は。ア、いかう酒臭い、過しやるな〱。明日は早々人遣らう、ヤれそが言傳したぞや。近日一座致したい。」と、たくしかくれば、八右衛門、「おけやい。口三味線に乘せかけても、乘る樣な男でない。其方が商賣は三度でないか、身が方へ上つた、江戸爲替の五十兩は、何として屆けぬ、五日三日は料簡もあるぞかし。心易いは格別、高駄賃かくからは、大事の家職、十日に餘れど埒明かず。今日も使を遣つたれば、手代奴が嵩高な返事した。よもや側へはさうあるまい、八右衛門を嬲るか、北濱、靫、中の島、天滿の市の側まで、親父とも言はるゝ八右衛門、なぶつて好くばなぶられうが、金は今日請取る、但し仲間へこたへうか。先づお袋に逢はう。」と、内へ入るを引留め、「さりとてはあやまつた。これ手を合はす、たつた一言聞いてたも、拜む〱。」と囁けば、「又口先で濟まさうや。梅川を瞞したと、男の意氣は違うた。言ふ事あらばサア聞かう。」と、苦々しくきめつけられ、「これその聲を母が聞けば、死んでも一分立たぬ事。一生の御恩ぞ、さりとては面目ない。」と、はら〱と泣きけるが、「何を隱さう、この金は十四日以前に上りしが、知つての通り梅川が田舍客、金づくめにて張

して入りければ、丁稚小者も笑止がり、「早う歸つて下されかし。」と、待つ日も西の戻り足、店鎖頃になりにけり。駕籠の鳥なる梅川に、焦れて通ふ郭雀、忠兵衛はとぼ〳〵と、外の工面内の首尾、心は蜘手かくなはや、十文色も出て來るは、南無三寶日が暮れると、足を空に立歸り、門口には著きけれども、留守の内に方々の催促づかひ、妙閑の耳に入つて、如何樣の首尾になつたも氣遣はし。誰ぞ出よかし、內證をとくと聞きて入りたしと、我が家ながら敷居高く、內を覗けば飯焚の、萬めが酒屋へ行く體なり。彼奴は木で鼻もぎどう者、只は言ふまじ。濡れかけて、瞞して問はんと、思案する間によつと出る。樽持つた手をしかとしむれば、「アレ旦那樣の。」と聲立てる。「ア、かしましい、こりや粹奴、おれが首丈なづんで居る。思ひ內にあれば、色外にあらはるゝ、目付をそちも見て取つたか。可愛らしい顏付で、氣の毒がらすは如何ぢやいやい、いつそ殺せ。」と抱き付けば、「ム、譃つかんせ。毎日々々新町通ひ、延の鼻紙二折三折、結構な鼻をかまんすもの、何の私等に手洟もかみたうあるまい。あの譃つきが。」と振切るを、また抱き付いて、「そちに譃ついて何の德、實ぢや〳〵。」といひければ、「それが定なら、晩に寢處へ御座んすか。」「オ、成程〳〵忝い、それに就いて今ちよつと問ふ事あり。」といひけれども、「それも寢處でしつぽりと聞きませう、必ず瞞しにさんすなえ。そんなら私はお湯沸いて、腰湯して待ちます。」と、言ひ捨て振り切り走りけり。忠兵衛はうそ腹の、立煩ひて居る

坂を廣う狹うする龜屋、そこ一軒ではあるまいし、遲い事も無うては。今でも旦那歸られたらば、此方から返事せう。五十兩に足らぬ金、あた姦しう言ふまい。」と、かさから出れば氣を呑まれ、使は眞面目に歸りけり。母妙閑は火燵の側、離るゝ事もなんどを出で、「ヤア今のは何ぞ。丹波屋の金の屆いたは、たしか十日も以前の事、何故忠兵衞は渡さぬの。今朝から二軒三軒の、金の催促聞いて居る。親父の代からこの家に、金一匁の催促得ず、終に仲間へ難儀をかけず、十八軒の飛脚屋の、龜鑑といはれたこの龜屋。皆は心もつかぬか、忠兵衞がこの頃の素振が、如何も呑み込まぬ。昨今の者は知るまいが、地體これの實子でなし。もとは大和新口村勝木孫右衞門といふ大百姓の一人子、母御前にお死にやつて、繼母掛りのわざくれに、惡性狂ひも出來るぞと、父御前の思案で、この世取に貰ひしが、世帶廻商賣事、何に愚かはなけれども、この頃はそは〳〵と、何も手につかぬと見た。意見のしたい事あれど、養子の母も繼母も同然と思はうか。せは〳〵言ふより言はぬ身を恥ぢ入らせうと、思うて目をねぶつても、聞き處見所は見て居る。何時の間にやら大氣になり、延の鼻紙二枚三枚、手に當り次第、重ねながら鼻かみやる。過ぎ逝かれし親父の話に、『鼻紙びんびと遣ふ者は、曲者ぢや。』といはれたが、忠兵衞が内を出で樣に、延紙三折宛入れて出て、何程鼻をかむやら、戻りには一枚も殘らぬ。身が達者なの、若いのとて、あの樣に鼻かんでは、何處ぞで病も出ませう。」と、よまひごと

に、金子三百兩差上せ申すべく候。九日十日兩日の中、その地龜屋忠兵衛方より、右三百兩請取り、內々申し置き候事ども、埒明け申さるべく候。乃ち飛脚の受取證文、この度上せ候間、金子請取り次第、この證文忠兵衛に渡し申さるべく候。これこの通り仰せ下された。今日まで屆かぬ故、大事の御用の手筈が違ふ、何故斯樣に不埒な。」と、鼻をしかめていひければ、「ハ、御尤も〳〵。さりながらこの中の雨續き、川々に水が出ますれば、道中に日がこみ、金の屆かぬのみならず、手前も大分の損銀。もし盜賊が切り取るか、途からふつと出來心、萬々貫目取られても、十八軒の飛脚宿からわきまへ、芥子程も御損かけませぬ、お氣遣ひあられな。」と言はせもはてず、「これさ〳〵いふまでもない、御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ。日限延びては御用の間が明くにより、それゆゑの穿鑿。迎ひの飛脚を遣はして、早速に持參せい。」と、徒士若黨も刀の威光、銀拵へも胡散なる。なまりちらして歸りしが、また「賴みませう〳〵、中の島丹波屋八右衛門から來ました。江戶小舟町米問屋の爲替銀、添狀は屆いたが、金は何故屆きませぬ。この中文を進じても、返事も御座らず、使を遣れば、酢の蒟蒻のと、何時屆けさつしやるぞ。この者に渡して人をつけて下され、手形戾そと申さるゝ、サア金子請取らう。」と、立ちはだかつて喚きける。主思ひの手代の伊兵衛、騷がぬ體にて、「これお使、八右衛門樣がその樣に、理窟臭い口上はあるまい。五千兩七千兩、人の金を預つて、百三十里を家にし、江戶大

忠兵衛
梅川 冥土の飛脚

上之卷

澪標浪速に咲くやこの花の、里は三筋に町の名も、佐渡と越後の間の手を、通ふ千鳥の淡路町、龜屋の世繼忠兵衛、今年二十歳の上はまだ、四年以前に大和より、敷金持つて養子分、後家妙閑の介抱ゆゑ、商賣巧者駄荷つもり、江戸へも上下三度笠。茶の湯俳諧碁雙六、延紙に書く手のかど取れて、酒も三つ四つ五つ所、紋羽二重も出ず入らず、無地の丸鐔象眼の、國細工には稀男。色の譯知り里知りて、暮れるを待たず飛ぶ足の、飛脚宿の忙がしさ、荷を造るやら解くやら、手代は帳面算盤を、おく口ともにどや〳〵と、千萬兩の遣繰も、筑紫吾妻の取遣も、居ながら金の自由さは、一分小判や白銀に、翼のあるが如くなり。町廻の狀取立て歸つて、それ〳〵と、留帳つくる處へ、「誰ぞ賴まう、忠兵宿に居やるか。」と、案内するは出入の屋敷の侍。手代ども慇懃に、「ヤアこれは甚内樣。忠兵衛は留守なれば、御下し物の御用ならば、私に仰せ聞けられませ。お茶持ておぢや。」とあひしらふ。「いやいや下りの用はなし。江戸若旦那より御狀が來た、これお聞きやれ。」と押拔き、「來月二日出の※三度

遺言召され。サア〳〵暇を遣つた、郭を連れてお出でなされ。」と、切れ離れたるいきかたは、さすが所に住めばなり。今を限りの夕霧莞爾と笑ひ。「ア、何方も〳〵有り難い御志、お禮申して下されませ。これ源之介、この金は親方殿より下された、そなたに母が讓りぢや、由々しい町人になつて、父樣の名を擧げてたも。わがみの出世を草葉の陰より見るならば、萬僧供養にも勝りて母は佛になるぞや。さりながら伊左衛門樣、源之介に妙順樣を並べて、三尊の來迎と拜みたう御座んす。」「ヤ妙順樣呼びに走れ。」と立ち騷ぐ。「いや呼びにやるまでもなし、氣遣ひがつてアレ門口に。」と手代伴ひ入りければ、「なう花嫁御、珍らしや〳〵、嬉しい對面。實の佛は西方のお迎ひ、此の妙順は此方の家へ迎へ取り、金づくめにして養生し、この姑が精力で本服させて見せうぞ。」と、家内が勇むきほひに連れて、諸病は氣より本服の、顏もいき〳〵にこ〳〵と、立つて躍るや扇屋夕霧、憂ひ却つて悅びを、語り傳へて三十五年、又五十年又百年、千歳の秋の夕霧を、なほ萬代の春の花、見る人袖をぞつらねける。

夕霧阿波鳴渡　終

遊女の事。この水は、極樂の八功德池の水と思ひ、雨甘露法雨愍衆生故と聞く時は、これを飲んで心身を霑し、九品の淨刹に往生し、半蓮を分けて待つて居や。これ其のしるし。」と、同じく髮を押切つて、親子夫婦の手向の水、哀れにも又頼もしし。かかる處に吉田屋の喜左衞門、六尺に金箱持たせ、「これは平岡左近樣の奧方お雪さまの御使。『夕霧を請出す所、その筈違ひ是非もなし。されども代金八百兩、その爲の金子なれば、外に遣はん樣なし。御病氣以ての外の由、この金にて請け出し、一時なりとも郭の外にて、往生させませ。』とのお使なり。」といふ處へ下袴の若い者、金箱數多かたげさせ、「これ〳〵扇屋殿、我等は藤屋伊左衞門樣の御老母、藤屋妙順樣よりのお使。伊左衞門樣は父御の御勘當、今はこの世に亡きお人なれば、お袋樣の我儘に勘當御免はなりがたし。夕霧樣には御一子まである事、嫁御孫御に勘當はなし。藤屋妙順が嫁を郭の内にて殺されず。一時なりとも郭を出し、外にて往生させましたいとのお願ひ、金子二千兩持參致す。サア〳〵片時も郭を出して下され。」と、きほひ勇めば扇屋了空、「御尤もなれども金子を取つて隙を遣るとは、ゆく末の年月無事で勤める女郎の事。今死ぬる夕霧に、大分の金銀取つて隙をやるは、この扇屋は盜人と申す者。殊に全盛して、親方に大分儲けてくれられたこの太夫、命さへあらうならば、この扇屋が身代半分は入れまする。この金子夕霧そなたに遣る。臨終に金やるとは異な事申す樣なれど、この金では萬部の經を讀まるゝ、跡の追善

る事もなく、何をか後世の土産とも、いさしら露の仇し野や、相の山野邊より彼方の友とては、樒一枝一雫、これが冥土の友となる。知邊となれやこの詞、形身ともなれ廻向となれ。迷ふな我も迷はじ。」と、思ひを籠めし一節に、聞く人あはれを催せり。扇屋夫婦情深く、「なう此方は聞き及ぶ藤屋の伊左衛門殿さうな。忍ぶ事も時による。娘とも思ふ夕霧が、臨終の心がたんのうさせたい、早う逢うて下され。」「ア、忝い。」と走り寄り、「太夫また逢ひに來たわいの。」「伊左衛門樣私や死ぬるわいなう。」「阯樣死んで下さるな。」と、すがりつけば家内の上下、「わつ。」と一度に聲を上げ、泣き沉むこそ道理なれ。重き枕に手を合はせ、「旦那樣稚さい時より御苦勞に預り、御恩も報ぜず死にまする。これさへはかなう御座んすに、いとしい男、可愛い子に逢はせて下んす、もう私や佛で御座んす。とても事に伊左衛門樣の手で、この髪きつて貰ひ佛の形になつて、親子の手から水をく。」といふ聲も、絶え絶えにこそなりにけれ。「オ、髪飾は假の戯れ。佛の三十二相とは、新木作の卒堵婆をいふ。只今某が切る髪は阿字の一刀、彌陀の利劍を以て、煩惱のきづなと觀念せよ。」と、差添拔いて、二人添寢の寢亂れ髪、ふつつと切れば源之介、「あつたら髪を。」と身に添へて、悶え臥してぞ歎きける。重ねて樒の水を携へ、「これ夕霧。人界は一生造惡の娑婆世界、わけて遊君流れの身は、面に紅粉を飾つて數多の人を迷はし、綾羅錦繡を身に纏ひ、多くの酒を汲み流し、煩惱の種を植ゑて、菩提の根を絶つとは

聲にも血の涙、子は安方の囀りや。

相の山

相の山「夕晨の憂き勤め、花一時の眺めとは、知れども迷ふ數々の、文に染めても誠はうすく、思ふ方へと駿河なる、富士も麓の戀の山、我踏み分けて我迷ふ、夢の中戸の夢枕、月を憎みし夜半もあり。辛い座敷を貰はれて、餘所に行く身を彼の人に、一寸鹿島の神も知れ、しんぞ嬉しさ可愛さの身にもこたへて忘れめや。初手二度まではふる雪の、つみも恐れぬ無理起請、神も佛も二つの耳に、譃と誠をさゝやきの、橋の蜘手に物思ふ。格子叩くを相圖にて、稀の御見も籬越し、何を歎くぞ歎きても、身は十年の繋ぎ船、出船の今日の名殘の牀、明日の朝ごみ枕より、跡より遣手の責め來るは、呵責の責めより猶辛く、仕舞太鼓の音までも、寂滅爲樂と響くなり。死出の山路は誰とても、一つ泊の旅の宿、浮世隔つる涙川、この世に浮名さら科や、姥捨親捨身を捨てて、櫻花かや散り〱。五つでは絲をより初め、六つや難波にこの身沈めて、八つで遣手に附きそひ、九つで戀の小使、十や十五の初姿、髱入れずの地髮房々衣裝のこなし、心利發で道中好うて、戀知り譯知り文の文章、思ひ〱べく候。牀は伽羅々々、沉や麝香の薫まで、今の手向と燻らする。種蒔き捨てし撫子の、花の盛りを餘所に見て、惜しや三途の川霧と、消ゆるその身も人目にも、昨日今日とは今までに、數珠を手に取

せる事も、見る事も成るまい。」と、囁けば源之介、「早う逢ひたい事ぢや。」とて、父に縋りて泣き居たり。「梅庵樣お歸り。」と、表へ出づれば遣手杉、家内の上下ついて出で、「病氣は如何で御座ります。」梅庵頭をふつて、「耆婆扁鵲でも叶はぬ。物に譬へて言はば、乾上つた土器に燈心一筋燈いて、風吹きに置く樣なもの。今日の日中か遲うて初夜限り、もはや毒も何も構はず氣任せにしたが好い。ア、惜しい人ぢや。夕霧々々というて、親方にいかい金儲けて遣つた女郎ぢや。達者な内にこの梅庵、彼の人を一年持てば、今頃は匙取らいでも樂するもの、あつたら金を彼の世へ遣る、これ本の來世金ぢや。」と言ひ捨て歸れば、扇屋一家はうち萎れ、返答する者もなし。「ヤレ源之介、醫者の言分聞いたか、もう叶はぬ思ひ切れ。」「ア、悲しや。何卒母樣の死なしやれぬ樣にして下され。」と、取り付き歎くぞ不便なる。扇屋了空夫婦、涙片手に蒲團手づからおうへに敷き、「今の相の山が奧へ聞えて、太夫の慰みに、これへ出て聞き度いと仰有る。これへ這入つて面白い事唄うて慰めて下され。」「あつ。」と親子は笠傾け、奧を見遣れば夕霧は、芙蓉の眥衰へて、夕待つ間の玉の緒の、今ぞ斷れ行く息遣ひ、遣手禿に手を引かれ、肩に懸りしその姿、親子は目もくれ胸塞がり、漏るゝ涙を夕霧も、それと見るより飛び立つ如く、心を胸につみ疊む、蒲團の上にかつぱと伏し、思ひを涙に通はせて、人目を中に憚りの、せきたぐるこそ哀れなれ。「サア〳〵相の山、早う〳〵。」と言ひければ、「あつ。」と涙の玉鬘、謠ふ

るかや。今逢うて今別るゝ、あの子をせめて相駕籠で、いざおぢやや。」と抱き寄するを引き放し、「それは喜左まで迷惑。これ世にも人にも恨みなし、左近もいはば尤も至極、女房が情といひ、誰か親子三人に仇する者はなけれども、親に逆らひ寶を費し、身を奢りたるその報い、あれあの天道に睨まれて、何國にて身の立つべきぞ。百里來た道は百里歸る。昔の榮耀ほど憂き目を見ねば罪消えず。男の苦勞と思ひ、歸つてくれ。」と泣き諫め、賺し乘すれば弱々と、言ひ度い事の數々も、せき來る涙せき來る胸、「命の中に今一度、容顔見度い逢ひ度い。末期の水をあの子の手から、頼む〳〵。」とゆふ霧の、名に立ち替る夕霞、見送り見送る門々の、松に太夫が面影を、殘して別れ三重歸りける。

下之卷

※相の山「夕晨の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし。野邊より彼方の友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥土の友となる。」「エ、物貰ひでもめかりを利かしや。これほど醫者の出入やら、神子の御符のと、屋内が持てかやいて、七種囃す間もないが目に見えぬか、通りや〳〵。」といふ處へ、梅庵御見舞四枚肩、おりるの衣長羽織、醫者は奥へぞ通りける。伊左衛門編笠傾け小聲になり、「やれ源之介、母が氣色が重さうな。命の内にま一度見せたく、この姿にてきたれども、も早見

の。母ゆゑの御浪人、其方も憂き目見せまじと、左近殿の子といひしが、實の親の假親の、心はさしも逢ふかや。左近殿も其方を、よも憎うはあるまいが、我が身の無念一旦の腹立に、いとしい其方を捨てらるゝ。あの父様やこの母は、今の如く人中で、蹈まれぬ許りに恥をかき、いひさげられても其方を抱くが嬉しい、逢ふが嬉しい。肉身分けし本の子は、斯うもいとしい物かいの。母がこの氣色では、もう逢ふ事はなるまい、父様の事頼むぞや。せめて一年しつとりと、一つ寢臥もしたいぞ。」と、かき口說き染み〴〵と、眞實盡す憂き涙、源之介聞分けて、「此方が本の母樣か、父樣は此方か。傾城でも駕籠舁でも、本の親がいとしい。」と、涙まじりの笑ひ顏、血の筋見えて哀れなり。「オヽ、でかいたでかいた。侍とても尊からず、町人とて賤しからず、尊い物はこの胸一つ。氣遣ひせまい伊左衞門が妻子、憂き目はさせぬ、力落すな〳〵。」と、いへども我も力なく、只茫然となりにけり。吉田屋喜左衞門駕籠舁雇ひ、「是非なしともお笑止とも、參り掛つて我等の迷惑。外の事ならば何卒思案も致すべきが、申しても霧樣は親方がゝり、殊に病中大事のお身。先づ連れ歸つて扇屋へ手渡しせねばお爲にも如何、いざ召しませ。」と舁き寄する。「扨は二度別れて郭へ歸るかや、ハアウ。」と許りにかつはと伏し、既に息も絕えんとす。伊左衞門抱き起し、吉田屋は印籠の氣付、樣々看病し、やう〳〵性根付けけるが、「昔より幾人か斯うした身の憂き難儀、話にも聞きつれど、これ程の辛い事、重なれば重な

ひ、知らぬ子に智慧つける。ヤレ稚くてもこの子はな、馬に乗り槍つかせ、生先立身たのしむ身の、伜に恥を與へん爲か、左近が武士を捨てん爲か、色に迷ひ馬鹿盡し、女どもが手前も恥かし。エ、恨めしや是非もなや、伜を返す連れ歸れ。町人の子に刀脇差無用なり。」と、引き寄せてもぎ取る處へ、奥方は走り出で、「なう情なや。この子が事は我とても、直の話を聞きしかども、調べてはお侍の一分廢ると思案して、貰ひ切つたるこの子なり。今返しては武士が立たぬ、一寸も離さぬ。」と抱き上ぐるを引き放し、「身を立て名を立て、一分を立つるといふも子孫のため、實子を持たぬこの左近、誰が爲に身を惜しまん、一分捨てる合點。」と、大小もぎ取り突き出す。「いや〳〵たとへ此方は返しても、契約して子にしたからはこの雪が返さぬ、夕霧も戻さぬ。」と取り付くを引き退け、縋り付くを引き放し、「夫をもどく見苦し。」と奥方ひつ立て、玄關をはたとさして入りにけり。伊左衞門も夕霧も、前後に暮れて途方なく、源之介泣き出し、「コレ父樣母樣、おりや駕籠舁の子ではないわいの、傾城の子にはなりともない、父樣の子ぢやわいの、母樣の子ぢやわいの。此處開けてくれ。やい侍ども明けをれやい。」と、玄關の戸をとん〳〵と、叩く楓のわくらばに、應ふる者もなかりける。夕霧息もたえだえながら、「これ源之介合點しや、眞實其方は左近殿の子ではない。母こそは夕霧、父御はそれ藤屋伊左衞門、さもしい人と思やるな。江戸までも知られて、左近殿より大身の、武家に親子もあるぞい

う、おりや父様に言うて來う。」と、驅け入る處を夕霧抱き留め、「これまうし、乳母が始めての御訴訟頼み上ぐる。」と泣きければ、「乳母のいやる事なら言うて遣らう、父様なう。」と抱き付くを、「オ、忝い、父ぢや／＼。」と嬉泣き、夕霧も羨ましく、「ついでに私も母ぢやと言うて下されかし。」「オ、言うて遣らう、これは母様。」「オ、私が子ぢや。」「これは父様。」「おれが子ぢや、二人がなかの思ひ子の親子夫婦の寄合ひは、また今生では叶はぬ。」と、泣いつ笑うつ種々に、寵愛こそは道理なれ。奥より左近が聲として、「藤屋伊左衛門、藤屋伊左衛門。」と呼ぶ聲す。「南無三寶。」と逃げ出づれば、續いて左近走り出で袖を控へて、「これいにしへ參會せし、阿波の大盡と異名を呼ばれし平岡左近、其方に恨みはなけれども、夕霧に言ふ事あり、それにて聽聞致されよ。」と、がばと突き退け涙を浮め、「エ、僞り多き遊女のならひ、驚くべきにあらねども、これ程まで能うも／＼この左近をつもりしな。この子は伊左衛門が伜とは、先年死したる遣手の玉が話にて、とつくより聞き付け、無念とも口惜しとも、心一つに堪へかねしが、いや／＼改めては侍の身分立たず。殊にこの子も、我々夫婦を實の父母と思ひ睦ましく、不便さも増す故に、緣でがなとあきらめ、二世と連れ添ふ妻にも深く包み、夕霧が生んだる某が實子と僞りしかば、さすが女房の優しくも、夕霧が心を憐み、乳母と名付け、この内へ呼び取りしは、皆この伜が可愛さ故。それになんぞや淺ましい體にて忍び入り、親よ子よのと名乘り合

久しう御座んす。奥樣のお慈悲にて、あのお子のお乳母に附けらるゝ筈ながら、のらぞんざいの私が身、氣色もしか〳〵はかどらねど、先づ和子樣を見たさに。」と、つく〴〵うちまもり、「あれ喜左衞門樣、さても氣高い好いお子や。聞き及びしよりおとなし樣、常體の者の子が、七つや八つで斯うあらうか、人は筋目が恥かしい。さすが父樣のお子程ある、父樣のお心がさこそと推量せらるゝ。」と、表の方へ目をくばれば、伊左衞門も首延ばし、魂脫けて嬰兒の、袖に飛び入る許りなり。左近夫婦は氣もつかず、「サア喜左衞門、先づ少しなりとも金子渡さう、いざ座敷へ。これ源之介、あの人は我が身の乳母、馴染をかけて愛憐がり、この母同然に、大人になつても乳母は見捨てぬものぢやぞや。吉田屋此方へ。」と莞爾に、打連れ座敷に入りにけり。夕霧四邊を見廻し、「なう懷かしや、さつきにから抱き付き度うてならなんだ。」と、縋り付いて泣きければ、伊左衞門も走り入り、思はず知らず、「やれ可愛の者や。」と抱き付く處を、源之介飛び退き、「やい駕籠舁奴、穢い態で侍に抱き付く慮外者奴。」と、脇差に手をかくる。「ア、〳〵まうし、眞平々々御免なりませ。私が倅に、ちやうどお前程なが御座れども、小さい時から人手に渡し、見度い〳〵と存ずる折節、お前を見付け如何も堪へられず、心亂れて慮外の段御免遊ばし、あこぎな申し事なれど、お侍のお慈悲に、父かというて、私に抱き付いて下されませ。」と、額を疊に摺り付けて、手を合はせてぞ泣き居たる。「何のおのれを父といは

心も至り目恥かしい。粗相して笑はれな、杯の用意せよ。」と密語く聲に、左近勝手へ入りければ、「これなう豫て申せし夕霧の事、吉田屋の喜左衛門が埒明け、連れ立ち來たとの案内。なんとこの雪が樣な、悋氣せぬ氣の通つた女房は、御座んすまいが。」と笑はるれば、「オ、御奇特々々々。さりながら座敷にかたい軍兵衛が居らるゝ、今内へは呼ばれまい。表に置いても目に立つ、どうかかうか。」と思案半ば、門前には喜左衛門、「ア、いかう冷い。夕霧樣は御病後、早う内へ入れまし、火になりともあてましたい。頼みませう〳〵。」と呼ばはる聲、若黨仲間ばら〳〵と、「小栗軍兵衛迎ひの者。」と奴の聲、揚屋の聲、遣手はなくて傾城に、槍持交りやかましし。やゝ日もたけて軍兵衛、「お暇まうす。」と立ち出づる。左近親子送つて出で、色代あれば軍兵衛、「オ、源之介殿おとなしう御座るよ、追付殿の御用に立ち召されう。隨分弓馬の稽古精出し申さうぞ、永日々々。」と暇乞して歸りけり。左近親子玄關に立ちやすらひて見送る體、伊左衛門遙かに見て、「あれは我が子か、昔の伊左衛門ならば人の子に爲さうか。大小こそささせずとも、數多の手代若い者、若旦那と侍かせ、京大坂の町人の誰にかは劣るべき。」侍とても負けまじき、母親の駕籠を父が舁き、我が子の門にはひつくばふ、我が親に背きたるその罰、ひつしと思ひ知り、悔み涙に頰冠の、手拭ひたす許りなり。奥方も端近く、「なう〳〵喜左衛門か、その駕籠これへ。」と他事なき風情、それを力に夕霧は、駕籠も思ひも漏れ出でて、「平樣お

褒美にこの鳥目百疋下さるゝ。『扨角介は慮外な、餘所の大事のお道具に手をかける狼藉千萬。重ねてこの事言ひ出さば旦那樣へ仰せられ、討首になさるゝ。』との御意ぢや。」といへば、頭かく介佛頂面、竹は悦び、「ア、冥加もない有り難い。兎角お禮は好いやうに。」と戴き〳〵、「これ杢右衛門殿、これ持つて往なつしやれ。何を見込みにこの樣に可愛いぞ。」と、譬への裸百疋を、直に男にやり持に、過ぎたる妻が三重優しさや。人の情に夕霧が、思ひも寄らぬこの春の、子の日を根から根曳の松に、かゝる藤屋の伊左衛門、我が子の顏の見まほしく、ならはぬ駕籠の片端を、隱れて忍ぶ頰冠、夕霧も簾越し、子を見る今日の嬉しさより、夫に別るゝもの憂さは、上本町にぞ著きにける。宿札を見て喜左衛門、「誰方ぞ女中頼みませう。」「ハウ何方からぞ。」と腰元出づれば、「私は九軒町吉田屋喜左衛門と申す者。奧樣よりお頼みなされし扇屋夕霧身請の事、隨分と驅け廻り、金子は當月一杯に、お渡しなさるゝ約束で、えいやおうと首尾成り、只今これへ同道。扨々節季の急がしいなか私の働き、春の用意正月のお客の穿鑿、錢金の請け拂ひ押詰めての節分。」大豆で打出す鬼の首、取つた樣にぞ申しける。「成程奧樣にもそのお噂、扨は彼が傾城殿か。」と、駕籠を覗いて、「ハウァウ傾城といふもの始めて見た、矢張常の女子ぢや。」と走り入つて、「奧樣〳〵、傾城が參りました。」「ヤアかしましい。皆物見から聞いて居た。傾城〳〵言ふまいぞ、今よりは源之介のお乳の人、侍町人の歷々につきあうて、

大きな鏡に小鮹添へて据ゑられた。藤の棚のねぢ兵衛は此方程槍は振らねども、お祓の練衆御番替、人の氣に入り雇はれて、眞性者といはれたゆゑ、片町のふりを内へ呼び入れ、師走に披露があつたぞや、これでこそ女房の肩も怒るわいの。此方と言ひ替して明けて四年、給分一文身につけず、皆此方に入り上げる。それに何ぢや、よい年して、長屋へ比丘尼ひき入れ、日が暮れると濱ぜせり、まだその上に、※稻荷邊の裏屋小路を覗き廻り、あげくにこの頃は、夜見世狂ひも付いたげな。私とても木竹ぢやなし、悋氣もしたい腹も立つ。エ、憎いとは思へども、ア、左樣ぢやない、女子に生まれた因果ぢや、男のさがを顯はすまいと、隨分私が身をつめ、三度つける油も一度つけ、雪駄履くを草履にし草履履くを跣足で仕舞ひ、鍋釜の煤煙搔くにも、此方の髭に入ると思ひ、好い處を除けて置く。我が身の事には元結一筋買はぬは、男を大事にかけるゆゑぢやないかいの。女房には苦勞をさせ、榮耀が餘つて色狂ひ、聞えぬ人ぢや。」と締泣に、恨み口說くぞ不便なる。「これ此處の御奉公は、中途にまつて馴染はなし、お國までも御内衆が、惡名立てるが悲しい。この上張の袷を脫ぐ、角介殿これで濟まして下され。」と、帶を解かんとする處へ、御腰元のりん走り出で、「これ〳〵竹、そなたの心底奧樣物見よりお聞きなされ、『さて〳〵奇特な、上々までも女たる身の鏡。』と、ことなうお感じなさるゝ。奧樣にも少とお氣の濟まぬ事あれども、其方を手本にお心が納まつてお嬉しさ。師匠とも思召し、御

した、お林殿好い氣味か。」「わしや痞が下りました。」「おしゆん殿は何と。」「此方や金拾うたより嬉しい。」と、身に德もなき法界悋氣、これぞ女の慣ひなる。「あれ北から十文字の道具、御藏屋敷の小栗軍兵衞樣年頭の御禮。御一門の中でも彼方は堅い、そりや〳〵。」物見の簾下す間に、早玄關に、「物まう。」「どれい。」「小栗軍兵衞御慶申す。」「旦那幸ひ宿にあり。いざお通り。」といひければ、軍兵衞玄關に立つて、「これ家來共、御用について左近殿と申合はする事あり、暫く隙が入るべきぞ。屋敷へ歸つて八つ時分迎ひに來い。」「ない。」「その中少と早く來い。」「ない。」「油斷するな。」と入りければ、若黨始め草履取挾箱、皆々宿所へ歸りしが、道具持の槌右衞門、一人殘つて臺所覗き、「誰ぞ賴みませう。飯焚の竹呼び出して下され。」といふ處へ、馬取の角介苦い顏して、「ヤ槌右衞門、汝や見事武家に奉公するかやい。この角介が僅かな切米の內、五百五十といふ錢を取替へた。冬年一言の斷りもせず今も先づ身に逢ひたいといふべい處、竹を呼出してくれとは野太い者だ。錢の濟むまでこれを取る。」と、槍の柄に縋り付く。「待て角介。槍持が槍を取られては、槌右衞門が首が無い。五百や六百で賣る首ぢやない、成らぬ。」「ヤア取つて見せう。」と競り合ふ最中、竹走り出で、「オウ角介殿道理ぢや。錢は竹が濟ます、堪忍して下され。エ、情なの性惡男奴や、世間を見て恥を知りや。お小人町の久六は此方より若い人、八軒屋の龜とたつた一年懇して、小錢貯めて宿持つて、冬年も鶴が橋のお婆へ、

これ此のやうにはい〳〵、はい〳〵〳〵。」と親の心もしら泡嚙ませ、門内へ乗り入りし振いたいけにおとなしし。今の詞に腰元衆、口をとぢて奥様の機嫌を窺ふ體なれば、「これ〳〵源の話を聞いたか。道通りが左近殿を太夫買ひといふたげな。この前大坂お屋敷役の時、新町通ひに夕霧といふ太夫に馴染をかけ、源之介を設けたは定めて皆も聞きつらん、人の見知るも理。大名高家も母方の吟味はなし、大事ないとはいひながら、あの子が心は、この雪をうみの母と思うて居る。必ず〳〵夕霧が子といふ噂禁制ぞや。その夕霧をも請出し、あの子がお乳に置くはず、傍輩並にあしらや。」と、仰せも果てぬに腰元中口々に、「ア、奥様のあんまり結構過ぎました。我々がなんぼ沙汰を致さずとも、あの傾城のばしやれ者、それを言はずに居ませうか。お袋振つて鼻高う、お家をありたい儘にして、奥様を蹈み付けるは今の事〳〵。まだそれ許りか下地がにやこい旦那様、小舌たるう仕懸けたら、ほつかりと喰ひ付いて、田も遣らう畦も遣らうで、奥様はうつそり鼻明いて仕舞はんしよ。小無益しいあた分の悪い、こりや御無用に遊ばせ。」と、焚き付けらるゝ女心、「ア、いへばさうぢや、己はいかい阿房ぢや。祈りも除けたい戀の敵もつて居てあてがふは、盗人に藏の番磁石に針、皆に氣をつけられて、はやもや〳〵と腹が立つ、後に悔みの出るは定、請出すことは止めに遣らう、皆でかいた、能う言うてくれた。」「扨は彌止めになされますか。」「はて止めにせいで何とせう。」「ア、氣が薩張となりま

道場の玄關構へ借り座敷、お國の御用新玉の、此處に年取るまめ男、阿波國平岡左近と宿札も、門の飾に時めきて、武家は綺羅ある春なれや。表の物見に女中の聲々、「申し奥様、珍らしい大坂の正月を始めて見物致し、お國へ歸つて好い話。これもお蔭。」と悦ぶにぞ、「オヽ／＼其方達がいふ通り、七のお蔭は忝い。御用について左近殿、我々連れて、僅か逗留の旅宿へ、今朝から禮者の絶えぬ事、皆殿様の御威光。左近殿は源之介連れて、天滿とやらの神明様へ惠方參り、親の子とてしほらしい、六つや七つで馬に乘る。追付左近殿の名代、御奉公つとめるを見るであらう。」と御悦びの處へ、旦那の御歸り、前供走る黒羽織、すつ／＼素槍栗毛の馬、のつし熨斗目に麻上下、親につゞいて源之介、明けて七つの乳のまう。饅頭形の中剃も、目許賢きうなる松、千代を祝ゆる土佐駒に、手綱かい繰りしやん／＼／＼、轡の音はりゝん／＼、りんとすわりし袴腰、物見の前を乘り廻せば、「これ／＼源之介戻りやつたか、目出度い／＼。嘸馬上は寒からう、おとなしい出來しやつた。」と、招かれて源之介、「まうし母様、惠方參りに天滿へ寄つて、これ買うて來ました。」と、土人形の天神手綱に持ち添へ「私がこれ持つて居るのを、道通りが見付けて、父様を見知つて居るやら、親は太夫貰ひ子は天神買ふといつて笑ひました。おれにも大きな太夫買うて下され。」と、あどなき詞に、腰元共氣の毒がり、「これしい／＼。」と目まぜすれば源之介、「ヤイ駄賃馬の様にしい／＼とは不調法な。侍の乘馬は、

をぞ濡らしける。伊左衞門つゝと出で「ハヽア賢女かな貞女かな。左近殿とは夕霧ゆゑ遺恨はあれども、それは私。拙者もかの倅を力に、出世の望み御座れども、武家のお名には換へられず、進ずるといふまでもなし。以前夕霧が申す通り、左近殿の御子息、伊左衞門が子では御座らぬ。」「ア、忝い夕霧殿もさうぢやぞや。」「はて主の合點の上からは、私が否とは申されぬ。さりながら、命の内ちよつと見せて下さんせ。」と、涙に咽ぶぞ道理なる。「オヽ心得た〳〵、萬事胸に込めました。身請のこ とも吉田屋と、近々に談合しませう。あの子が成人するにつけ、伊左衞門殿も樂しみ、サア契約の堅めの杯、いよ〳〵あの子は此方の子、平岡左近が總領。」さらり〳〵と手を拍つて、郭でざゝんざ珍らしし。日も暮れかゝれば茅黨仲間駕籠釣らせ、「阿波の旦那のお迎ひ。」「これ下人も忍ぶこの姿。」元の男となりふりつくり、頭巾大小印籠巾著。「亭主さらば。夕霧事は追付これより便宜せう。萬事たのむ。」「請け込みました。」と膝を屈める、腰屈める、腰元つれるをひき換へて、駕籠舁が送る大門や、口をきこより奥樣の深き情や、三重立ち歸る。

中之巻

春や延寶六年と、明け渡る世も昔の京、難波の今朝は珍らしき、妻子ひき具し舊冬より、上本町の

して、この中で物申すはおはもじながら、かの阿波の大盡平岡左近が本妻雪と申すは我が身事。夕霧どのの假の情、連合の子を誕生とて此方へ請取り、言はばわが悅ぶ子、腹も痛まず苦勞せず、產んで貰ひし忝さ、あだにもせず傅り育て、手習讀物弓槍までも器用にて、國鄰の土佐駒引かせ、乘つた姿は天晴平岡左近が世繼、七百石の主なりと御家中の褒め者、嘸見たからうし見せたし。一つはあの子が冥加の爲、夕霧殿を請出し、一緒に伴ひ暮さんと、心根も聞かん爲、おはぐろ落しつあられぬ態で、只今聞けば我が連合を誑して、伊左衞門の子を突きつけたと、聞くよりはつと胸塞がり、夫の武士は廢つた。エ、恨めしい夕霧、男に化けたを幸ひに、飛び掛つて刺し通し、我も死なうと刀を取りは取つたれども、死んだ跡でこの雪が、傾城に悋氣して阿呆死と言はれては、いよ〳〵男の名を出すと、留るも殿御を思ふゆゑ。無い事さへ言ふ世のさがなさ。阿波の平岡左近こそ、町人の子を傾城に突き付けられたと取沙汰し、殿樣の御耳に立たば、好い仕合で御改易、阿房拂ひか切腹か、死しても惡名消えばこそ。この處を料簡し、あの子を其の儘下されば、侍一人の取立て、生々世々のお情ぞや。我人我が子は大事のもの、殊に思ふ人の子を、思はぬ人の子といふは、何しに心好からうぞ。それは流れの身の辛さ、侍の妻には又此の樣な憂き事あり。女子と生まれしこの因果、女御更衣になるとても、羨ましうは思はぬ。」と、心の底を口說き立て、淚わりなき物語。夕霧夫婦吉田屋の一家袖

りけり。伊左衛門も涙に暮れ、「オ、過つた。外にさして恨みはなけれども、命にかへぬ大事の女房、奥座敷の若い者、我が物面がむつとして、思はぬ腹立こらへてたも。我とても浮身の體、實の正體見給へ。」と、小袖くるりと脱ぎければ、肌に袷の破れ紙子、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、胴顫ふこそ哀れなれ。伊左衛門涙を抑へ、「さてかの倅は無事で里に居る事か、何としたぞ。」と言ひければ、「さればその子を里に遣りしと申せしは僞り。儘ならぬお身の上、苦勞にさせます氣の毒さ、かの阿波の大盡平岡左近といふ人と、私とが中の子といひかけて塗り付けて見たれば、人は愚かな、まんまとたらされ受取つて、『腹は假物武士の胤。』と、寵愛に逢ふと聞くにつけ、身の憂き時はいろいろの怖い智慧も出るもの。」と、語りもあへぬに伊左衛門、「ム、ウさもあらう事。さりながら我がいにしへの手代ども、その子をつきたて母へ訴訟し、藤屋の家を取立て度いとの談合あり。何卒譯を言うて取り返す思案がしたい。」といふ處に、奥より内儀色違へ、「なうおとましやまし。お二人爰の話が奥の座敷へ筒拔け、お客様は不興顏。『直に逢うて言ふ事あり。』と今此處へお出で。なう喜左衛門殿、此方の人。」と、皆々怖がりひそめく處へ、客は刀を提げ、「ア、これ伊左衛門殿夕霧殿、驚くことは少しもない。これその證據。」と頭巾を取れば、突出し鬢の下、笄、鼈甲差櫛、さしもの粋ども、呆れて不審晴れやらず。「オ、いかにも不審の立つ筈。男に化けたるその間は何のそのと思ひしが、女子の姿を顯は

ければ、「ム、ウ此の夕霧を萬歳とは。」「ォ、萬歳傾城の因縁知らずか。侍の足にかけて蹴らるゝを萬歳傾城といふぞや、誠に目出度うさぶらひける。しかも足駄履いて蹴るやら、年立ちかへるあしだにて、誠に目出度うさぶらひける、聞えたか。さりながら何も身すぎ、あの樣な好い衆には、蹴られても損は往かぬ、慾を知らねば身が立たぬ。慾若に御萬歳や、年立ちかへるあしだにて、誠に目出度うさぶらひける。町人も蹴る伊左衞門も蹴る、蹴る〳〵。」と蹴散らかし、「これ喜左、餅でも米でも遣つてやりや。」と、煙草引寄せ吹く煙管の、さらぬ體にて居たりけり。夕霧、「わつ。」と咽せ返り、「エ、こなさんとも覺えぬ。この夕霧をまだ傾城と思うてか、眞の夫婦ぢやないかいの。明ければ私も二十二、十五の暮から逢ひかゝり何年になる事ぞ。設けた子さへま些とで早七つ、誠を言はば今頃は一門中の狀文にも、伊左衞門内よりと書いても人の咎めぬ事。私に恨みがあるならば、こなさんにも恨みがある。去年の暮から丸一年、二年越に音信なく、それは幾瀨の物案じ、それゆゑにこの病、痩せ衰へが目に見えぬか。煎藥と練藥と、鍼と按摩でやう〳〵と命繫いで、たまさかに逢うて此方樣に、甘えうと思ふ處を逆樣な、こりや慘らしいどうぞいの。私が心變つたら、踏んでばかり置かんすか、撲いてばかり置かんすか。これ死に懸つて居る夕霧ぢや、笑ひ顏見せて下んせ拜んます。エ、心強い胴慾な、憎や。」と膝に引き寄せて、叩いつ擦つつ聲を上げ、涙亂れて髮解け、わけも性根も無か

り香包、名木火鉢にくゆらせ、「嚊これへ來やれ。身なんどが樣な奉公人は、殿の御前に相詰め、たまさか遊興所へ參るも氣晴らしといふ内に、第一は夕霧殿に戀あるゆゑ、君の機嫌の好い樣にお身を頼む。一つ飲みやれ肴せん。」と、ひらり紙花七九寸木枕に打敷いて、横になるとの阿波大盡、夕霧が裲襠に兩足ぐつと入れければ、「扨もなめたり〳〵。この夕霧に足もたすは、こりやちつと慮外さうな。それ程足が苦にならば、打折つて捨てたが好い。」と言ひ捨てゝつゝと起ち、次へ出づれば伊左衞門、ちやつと寢轉ぶ肘枕、空寐入りして高鼾、はつとばかりに夕霧、我が身を共に裲襠に、引纏ひ寄せとんと寢て、抱き付き締め寄せ泣きけるが、「なう伊左衞門樣々々々々、目を覺して下んせ。私や煩うて疾うに死ぬる筈なれど、今日まで命ながらへたは、ま一度逢はせて下さるゝ神佛の控へ綱。これ懷かしうはないかいの、顏が見たうはないかいの、目を開いて下んせ。」と搖り起し〳〵、抱きおこせばむつくと起き、横さまに取つて投げ、「これ夕霧殿とやら夕飯殿とやら、節季師走此方の樣に隙ではない。七百貫目の借錢負うて、夜晝稼ぐ伊左衞門、この樣な時寐ねばならぬ、邪魔されな總嫁殿。」と、轉りと臥して又ごう〳〵と空鼾。「ム、ウ身に覺えはなけれども、恨みがあらば聞きませう、寐させはせぬ。」と引き起す。「これ何とする。この體でも藤屋の伊左衞門。今のごとく奧座敷の侍に踏まれたり蹴られたりする女郎に近付は持たぬ。此處な萬歳傾城、萬歳ならば春おぢや。通りや〳〵。」といひ

眞實か。」「はて譃か誠か、鄰座敷覗いて御覽なされませ。」伊左衛門はつとせいたる顔色にて、少時詞もなかりしが、「なう内儀、天地開け始まりて、誠ある傾城と、迦陵頻の雄鳥は、繪に書いたも見たものない。總嫁の樣な傾城奴に、微塵も心は殘らねども、知つての通り彼奴が腹から出た身が倅、しかも男子で明ければ七つ。元の遣手玉が才覺で里に遣つたとやら。今日來たはその倅が事について來たれども、定めて里に遣つたも僞り、捻ぢ殺してかな捨てつらん。阿波の侍といふは合點、この前我と張合うた河波の大盡平といふ者。つら〳〵思へば、傾城買より紙屑買がましぢや。金出して此方へ取る物は狀文ばつかり、七百貫目が紙屑では、富士の山の張拔も樂な事、仕合の惡い時は何で損をせうも知らぬ。無用の涙で紙子の袖濡らした、繼ぎ目が離れぬ先に罷り歸る。」と立たんとす。「ア、餘り御短氣、奥のお客は平樣では御座りませぬ。」「いや〳〵平でも壺でも、此方支度よう御座る。」と立ち上る。「それはお前の慳貪と申すもの、先づ夕霧樣に逢はせましよ。」「いやとてもけんどんなら、夕霧より蕎麥切に致さう。」とすねまはる。その中に奥座敷より手を叩く。「あれ禿衆は何處にぞ。」と、言ひつゝ出づる内儀に連れて、襖の陰より差覗けば、兩人馴れにし牀柱、もたれ懸るも形見ぞと、忘れもやらぬ物ごしは、慥かにかの人、何がなしほに座を立つて、逢ひたや見たやと心もせき、そむけて向ふ客の顔、さも大名の小姓立、風よしの衣裝付き、ぱつぱの鮫鞘象眼鐔、若紫の焙烙頭巾、懷中よ

衞門つく〴〵見て、「エ、浮世ぢや。藤屋の伊左衞門樣に、この吉田屋の喜左衞門が著せまする小袖、假令蜀江の錦でも戴いて召しませうか、ほんに涙がこぼれます。」と目をするを見て、「否これ喜左、この紙子の仕合、さら〳〵無念と存ぜぬ。總じておもたい俵物材木でも、牛馬が負ふは珍らしからぬ、犬か猫が負うたらば、これはと人が手をうたう。我等も其の通り、紙子の袷一枚で、七百貫目の借錢負うて、ぎくともせぬは恐らく藤屋の伊左衞門、日本に一人の男。この身が金ぢや、それでひえて堪らぬ。」「ヤァウこの身が金とは忝い。喜左衞門が餅搗に、大きな金がお入りなされた。これ嚊、まだ蓬萊は飾らねども、先づ正月の心、三寶飾つて持つておぢや。」とて入りければ、内儀は、「あつ。」と讓葉に、穗長折り敷く橙柑子、蜜柑や何やかや搗栗、「おゆかしや〳〵、久振りで御無事なお顏、お嬉し樣や。」と出でければ、伊左衞門とかうの挨拶なみだぐみ、「夫婦の衆が懇切に、蓬萊とまで氣がつけども、夕とも霧とも言ひ出さぬ。仄かに聞けば夕霧が、身が事を氣病にして、命あぶなしと聞き及びしが、いかう重いか、但し無常の夕霧と消え失せてしまうたか、歎きをかけまいとて言ひ出さぬか。誓文で泣くまい、語つて聞かしや、泣かぬ〳〵。」と言ふ聲も、氣遣ひ涙に濁りけり。「いやこれはお道理。霧樣の御氣色、秋の頃は散々で、勤めもお退きなされしが、寒に入つてちと御快氣。すなはち阿波のお侍、正月もなさるゝ筈で、今日これに。」と言ひも果てぬに伊左衞門、「ヤァ〳〵それは

んせ。」「何が扠御氣任せ、如何なりとも候べく候にやらしやんせ。」と、座敷へこそは出しけれ。冬編笠も垢張りて、紙子の火打膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれど古の、花は嵐のおとがひに、今日の寒さをくひしばる、はみ出し鍔も神さびて、こじり詰りし師走の果て、胡散らしく吉田屋の内を覗いて、「喜左衞門宿にか、ちよつと逢はう。喜左衞門々々々々。」と鼻に扇の大柄なり。男ども口々に、「ヤア彼奴は何物ぢや。風の神か鳥威しの樣な態で、何ぢや、喜左衞門に逢はう。百貫目も遣ふ大盡の言ふ樣な、棒まかれな。」といひければ、「オ、百貫目がそれ程貴い物でもない。喜左衞門といふべき者でいふ程に、逢はせてくれい。」「どりや逢はせてくれう、こんな目に逢はせてくれう。」と竹帚持つてかゝるを、喜左衞門飛び下り、「強請者か知らぬ、粗相を爲な、誰方で御座る。」と笠を覗いて、「ヤア伊左衞門樣か。」「なんと喜左。」「これは夢か七つか、さてお久しや懷かしや。京大佛の馬町に御逼塞と承る、霧樣よりは數通の御狀、飛脚も二三度、奈良大津まで尋ねさせ、たつた今もお噂。先づお馴染の小座敷で、二年積るお物語、いざお通り。」と袖ひけば、「ア、紙子綳りが荒い／＼、これ引けば破れる。」摑めば跡に師走坊主師走浪人、昔はやりが迎ひに出る、今は漸う長刀の、草履を脫いで編笠の、中の座敷に通りしが、「お寒からう。」と喜左衞門、縮緬に紅絹裏の小袖をふはと打掛くる。「ア、これはいはれぬ。寒晒の伊左衞門、少しも苦しからねども、志を著致す。」と戴いて著る有樣、喜左

たり面疲せて、藥も日數ふる雪の、重らぬ先の養生と、勤めも心まゝなれど、深きよしみの吉田屋は足許輕き道中や、暖簾くゞるも力なく、「今日は目出度う御座んす、ア、しんどうや。」と腰うち懸け、我が身を横に投入の、水仙きよき姿なり。喜左衞門機嫌よく、「これは〳〵太夫樣、御氣色も好いかして、聞いた程瘦せもなされず、お顏持もずんと好い。先づ今日は嘉例の餅搗、格子へお出でなされてより去年の今日まで、伊左衞門樣とお兩人、一度もお外れなされぬに、今年の餅搗ばつかり、伊左衞門樣は流浪遊ばす、お前は御病氣、嘉例を外す處、この喜左衞門頭痛八百。ちよつとなりとも呼びましたいと願ふ折柄、今日のお客は四國のお侍、頭巾で頭は見えねども、角前髮のお小姓らしい。その器量のよさおぼこさ、道頓堀の若衆方女方、ひつさらへてもけも無い事。四國西國隱れない夕霧といふ太夫に、近付になりたいとて、わざ〳〵大坂で御越年。お氣合ひに構ふとて、初對面はお勤めなされぬも存じながら、呼びに進ぜた。流石お馴染の喜左衞門、いやおうなしのお出で、身祝ひと申しどつというた餅搗、嚊も尻餅搗いて悅びます。これ杉、沖之丞、中の間へ行て善哉祝や。此處は冷えます太夫樣、先づお座敷へ。」といひければ、「ア、私が氣色も好いが好いには立たねども、伊左衞門樣と二人連、一度もかかさぬ今日の日なれば、命の內にちよつと來て伊左衞門樣に逢ふ心。此方樣達の顏見たいと思ふ折節、よびに來たを幸ひに此處までは來ました。座敷は氣儘に勤める、左樣思うて下

夕霧阿波鳴渡

上之卷

年の内に春は來にけり。一臼に餠花開く餠搗の、にぎ〳〵はしや九軒町、嘉例の日取よし田屋の、庭の竈は難波津の、歌の心よ蒸籠の湯氣の大杵、駕籠舁の長兵衞が大汗で、「やあえい。」中居の萬が臼取の、「さッ、やあえい、さッやあえい、さッ。」「さつさ搗け〳〵。」「ハッア木遣で搗きやれな。」先へ惠方棚神の棚、鏡取る〳〵遣手衆の、顏に取粉の面白いとてよね衆の笑ひ、禿が手折る柳の枝の、春も近づく、年も近づく。やがて郭も谷の戶も、出でて初音の鶯の、羽づくろひの君もあり。正月買ひのだい〳〵盡、太夫樣より付屆け、門を賣る聲山草や、ちよつと祝ひましよ。裏白、讓葉、鱓で御座んせの春永に、いよしも替らぬ御見まで、逢瀨をちぎる餠は杵、ついて離れぬお客を祝ひ、臼へ入れます、ます〳〵全盛、座敷は善哉、庭には節季候、こりや又目出たい揚屋の餠搗、紋日の長持、お客に靑開、こりや又賑々、女郞衆に槍持、お家は金持、代々福々、松まつ吹く〳〵松風や、松賣る聲こそ。三重戀風の、その扇屋の金山と、名は立ち上る夕霧や、秋の末よりぶら〳〵と、寢たり起き

南無阿彌陀佛。」を力にて、襟引き寄せて剃刀の、柄までぐつと一刀、突かれて、「うん。」と反り返り、三重 のたうつ藍の蟲の息、苦しむ體に氣も迷ひ、「かはい〳〵ァ、かはい。」と、ともに苦しむ男の心、「南無三寶後れじ。」と、落ちたる文をくる〳〵巻き、口押割つて含ませ、剃刀押取り、喉のめぐりを切りさき〳〵、つゞくは首の骨ばかり、刀で切つたるごとくなり。その剃刀の返す刃を、我が喉笛につく息も、いる息もはや絶え〳〵の、おなじ枕の死出の山、しでの田長かほとゝぎす、聞きにきたのの藍畠、藍に染めたる魂魄と、廻向に色をそあげにける。

心中刃は氷の朔日 終

息災に、はや〳〵下り、待ち祝ひ〳〵と遊ばせし。父様今年は丁七十の賀の祝儀、一門衆の振舞も、そもじ下りを待ち受けて、生御魂の祝ひ一所にと、盆まで延すと書かれしが、盆にも我は新精靈、親子の杯みそはぎの、露の手向とひきかへて、戴く我は草葉の陰。嘸父母のお歎きを、思ひ遣られて情なや。何事も〳〵追付目出たくめもじにて、申しまゐらせ候べく候、めでたくかしくと止められし、これがなんの目出度い事。子を祝ふ親心、無下になしたる身の罪科は、先の世からの約束か。二枚重ねの御文を、金水引にて綴ぢられし、水引の紅落ちて、おつやといふ字は血に染みたり。子の血は親の血の別れ。血筋が教へてこの如く、先へしらせのあるからは、今の最期を物の告げ、嘸や夢見が悪からう。明日は占夢ちがへ、違へても祈りても、返らぬ後の悔み言。いとほしの父母や、名殘をしの伯母様や。」と、文を抱き締め肌につけ、悶え焦れて泣きければ、男も共に伏し沈み、「皆この歎きは我故。」と、二人が膝に凭れあひ、咽せ返りてぞ歎きける。「あれ〳〵明星様も高々と、あけ方に程はない。この文口に啣へて未來までも持ちまする。最期の苦患に離れたら、含ませて下さんせ、念佛も心で申す。こな様口で高々と勸めて殺して下さんせ。」と、文ひん卷いてしつかとくはへ、兩手は合掌心に念佛、顔で剃刀教へつゝ、早うと急ぐ目元にも、可愛男を見納めの、涙は玉を列ねたり。夫も今を限りの詞「さあ。」と許りにふり上げて、見れば目も眩れ二目とも、塞ぎ俯き、「南無阿彌陀、

松町、伯母樣の家も二三町。伯母樣の近くで死したらば、縁に引かれて後の世は、親にもあひ。」に藍畠、藍より出でて藍より青く、罪より罪の重からん、來世を待つこそはかなけれ。男剃刀取り出し、「扨も因果な身の果てやな、人は高きも賤しきも、死しては出家の剃刀を、頂く物に極まるに、その剃刀で死ぬるかや。生國は大和田原もと、幼少で二親に離れ、今は在所の兄より外、一門眷族一人もなし。鍛冶屋の槌の一本立ち、親兄弟とも賴みたる、親方には勘當うけ、我が身許りか其方まで、殺して一家に憂ひをかくるこの科は、地獄の火焔に鞴かけ、無間の底の鐵牀にのせられ、呵責の槌に骨骨を、打碎かれんは今の事。よし夫れは厭はねども、其方は國の弔ひうけ、六道の辻の憂き別れ、これが今から悲しい。」と、縋り付いてぞ泣き居たる。「ア、つらい事言うて下さんすな。私とても親伯母の心を背き歎きをかけ、幾瀨の罪を造りし身が、よい所へはよも行くまい。無間奈落の底までも、この手は離さぬ、こな樣も私が手離して下さんすな。」と、互に引き寄せ寄せられて、抱きあひてこそ口說きけれ。」母樣のお文をも、來世で讀まんと肌につけ、封じ目も切らねども、親子は一世、冥土にて苛責に逢はば目も眩み、妄執の雲に文字消えて、讀むもこの世の名殘ぞ。」と、親子の縁も封じめも、切つて披きし文の中、「これなう熨斗と昆布とに節分の、まめで下れの祝ひごと、今が冥土の門出と、御存じないか痛はしや。母樣常が血の道もち、長文書くことお嫌ひが、子の可愛さか細々と、舟の中

道、魂は冥土に到れども、魄となりたる今の世の、おつうは母の形見ぞや。この曾根崎に埋もれぬ、大坂三十三番に、名を殘したる普陀落や、大慈大悲の誓ひにて、竟には兜率天滿屋の、お初も佛なかまかや。道具屋おかめ與兵衛とは、思へば近き町續き、世は何事も難波橋、よしとあしとの境筋、中に立つたる賤が身は、不便と思へ備後町。夫れのみならず吳服屋の、唄※手代半兵衛はかの池田屋の、小菊にたんと金入れなれば、心どんすな者でもないに、身のしゆすこしに氣は縮緬の、見世の帳面皆ぬめりんず、らしやもない事いはしやりんずの、はや人魂も飛びざやぬいて、共に刃の諸羽二重の、同じ枕にふしつむぎ、重井筒の戀の水、結び汲む手は多けれど、色は樣々紺屋染、胸はもえぎに紅ひはだ、さやけき色はこれぞこの、とくさに染めてさしも實に、心中みがく緣かや。花紫に薄淺葱、桔梗花色地白型、紺屋ののりの道廣く、到り先だつこの人々を、今身の上の知識ぞと、賴む外には菩提をも、若きは別ちあら人神の、天滿の方に見ゆる火は、我を尋ぬる提灯か野邊の螢か、神の御燈か神垣や、神明宮にお暇の、後世は鳥居の二柱、二人離れず立ち添へど、こほす涙の雨にさへ、千代の老松つれなくて、地水火風の若草は、因果の嵐無常のわけ、時を別たず時ならぬ、夏の枯野に迷ひたる、あかつき露に身もひたれ、帷子裾に纏はれて、歩みかねたる二人が樣。「これなう十里も來たる樣なれど、まだ爰にさまよふは、爰で死ねとの神明樣の、敎へならめ。」と泣きければ、「ア、あの町は老

下之卷

平兵衛小かん夜の朝顏

よそのつらねも我が命も、一よぎりなる憂節や、憂き身の果ては主親の、ばちに掛りし三味線の、二十二三の絲きれて、殘る一期も暫しぞや。いかに今年の空梅雨も、哀れ袂のさみだれに、心は今も皐月闇、木の下闇にどまくれて、覺えし道も幾度か、同じ所にまひ戻る、跡に尋ぬる願立に、神や佛の控へ綱、のばす命と知らばこそ。「ア、これ又元の道なるわ、これも今來た道ぞかし。この世からさへ踏み迷ふ、六道の辻覺束な、迷ふまいぞや。」「迷ふな。」と、泣くぞ迷ひの種ならし。あれ寺町の鐘の聲、一※・・九十は七々の、七つの知死期、最期も早と來にけらし。狼狽へて白たへくゞる畠垣、仇の譬への朝顏も、今咲きかゝる花の露、夫れより先に凋む身は、明日の朝日にこの體、干さん曝さん淺ましと、縋る涙の龍骨車に、あひの水さへまかすらん。世の中に絶えて心中なかりせば、冷泉二世の賴みもなからまし。誰か仕初めしこの契り、音に聞きしは生玉の、それが初めのたい※市之丞、つれて男も名の高き、大和國や三笠山、笠屋三勝舞の袖、褄と褄とを引き寄せて、結ぶ無常の薄煙、千日寺のはかなしや。別れし跡の寐姿は、夜中の鐘に目を覺し、母よく〳〵と乳呑子の、歎きを捨てし修羅の

たし。※しゆらいも書付あるならば、代物遣らん。」と言ひければ、心得たんぼを漬生姜、しほがひに花鰹、書出し算盤に、しばらく時こそ移りけれ。伯母も宿へ行きつく頃、門を明けてたち歸り、「なうなう曾根崎の際まで往つたれば、中町の方が騷がしう、屋根へ上れのなんのといふ。手過ちが氣遣ひて、夫れ故に戻つた。」「ヤア心許ない。」と、内の男は追ひ〳〵に走つて出る。傳内刀押取つて、鉢卷引締め裾からげ、身拵へしつかと固め、實に侍の心掛け、奥へ入らんどする所へ、内の者ども走り歸つて、「ア、氣遣ひない〳〵。盜人さうなが二人連、濱筋の屋根傳ひ、中町の辻へおりて、福島の方へ走つたを、道通りが見つけて、聲を立てて騷いだ分。お騷ぎなさるゝ事でない。」と、いへども伯母も傳内も、「先づおつや様起しませう。」と、連れ立ち奥に入りけるが、案の如く小かんはなし。「これはこれは。」と戸棚を明けつ、庭の隅々詮索すれば、著替の帷子ひきほどき、庇の垂木に結びさげ、屋根へ越したに疑ひなし。「なう悲しや小かんが居やらぬ。」と、伯母が泣く聲、「落人あり。」といふ聲に、家内の男女驚き騷ぎ、「扨は今のぢや、程はない。隨分追驅け、死なぬ先。」連れて北野はあんまり近い。死んだら體を梅田は爰ぢや。町衆までに御厄介、近頃御無心ながらへ走れ。八つの太鼓がでん〳〵でんぼ、あとがやとやの伊丹へいけだ、茶屋中組中駕籠の衆、國の侍交りしは、鬼に鐵槌煎餅屋の、伯母は小橋へ　三重　急ぎける。

肬を寄せ誓紙を抜き、「無南阿彌陀佛。」と合圖の詞、さつと引き裂き身を摺りつけ、待てども内より音もせず。「無南阿彌陀佛。」と引き裂いては身をつけ、引き裂き〳〵男の刃、今や〳〵と最期を待てど、内には疑ふ怨みにや、靜まつて音もせず。「エ、死ぬる事さへ叶はぬは、これが誓紙の罰ぞ。」とて、寸寸に引き裂きて、どうど伏して泣きければ、「オ、尤も理や、つれないふも身の爲。」と、皆々袖をぞ絞りける。涙を留め漸うと、「サ、氣が勞れて頭がうつ。母樣のお文も見たし、些と爰で休みたい。誰も人の來ぬ樣に、障子もさいて皆起つて下さんせ。」「オ、道理〳〵。傳内も端へおぢや。」と出でければ、「まうし伯母樣平野屋へござんしたら、女夫のお衆傍輩衆、內外の者へも懇に、これから直に遠い國へ往きまする、もう此の世では逢ひますまい。年月の御懇わすれはせぬと、つど〳〵に賴みます。伯母樣もさらば。」と、外にいひさす襖さす、さすや障子の薄紙一重、見えざることこそ是非なけれ。はや臺所も仕舞ひ頃、丁稚起して、「こりや〳〵安治川の宿へ往て、明日明六つに乘る程に、舟の用意せよといへ。內衆賴む、七つ過ぎに駕籠二挺、安治川まで約束して貰はうぞ。伯母樣は氣が盡きよう、夜食でも上りませ。」「いやなう此の程胸がつかへて、夜食は思ひもよらぬ事。歸つて父にも悅ばせ、明日見立てに來ませう。」「夫れなら酒がようござらう。」「ハテなんの辭宜がある者ぞ、酒も何にも。」ほしもない、闇夜を辿りて歸りけり。傳内も氣くたびれ、「内衆酒の燗しやれ、一つ飲んで寢み

死病うけたりとも、母様のなつかしさに臨終も仕損ひ、如何なる恥を晒さうかと、案じすごしする程に、親の事は忘れぬ、あんまり叱つてたもんな。」と、文を顔に押當てて、消え入り絶え入り泣きけるが、封じ目切つて見たけれども、文體見たらば氣も落ちて、彌心が引かれうず。平樣に談合したけれども、襖一重が七重の關、一人の思案に落ちかねて、暫し案じて居たりしが、いや〳〵口でいふは安い事、どうなりとも間に合はせ、今宵の所を遁れんと、泪拭うて、「ア、さうぢや、今とつくと合點した、親には思ひ替へられぬ。此方をふつつと思ひきり、なる程國へ下りましよ。伯母樣も傳内も、今宵は歸つて明日早々。」といふ中にも、起請文を取られじと、守袋を後手に、棚の戸を細目に明けその事にかの男の誓紙を、只今破つてお見せなされよ。」といはせも果てず、「ハテ思ひきるからは起請はそつと入るれば、男も心得受取りしが、二人の心の危さよ。伯母傳内も悦び、「御承引辱し。とても有つても反古なり。その上誓紙は男の方へ渡して、爰にはない。」とぞ陳じける。「いや〳〵今まで懷に守袋が見えました。是非にお隱しなさるれば、慮外ながら手をかけます。」といへば男は襖の中、見付けられては悪しかりなんと、守袋を戸の間より、小かんが袖に、顫ひ〳〵返せしは、彌危き契りなり。「ア、待ちや〳〵、尋常に破らう。」と、守袋を解くなかにも、「サア二世の固めの起請文、破るは佛神三寶の守めも切れ果てた。片時も生きてなにゝせん。合圖の最期は爰なり。」と、襖戸棚に

ではすはなる身にそまり、上の空なる世に習ひ、親の事も古郷の事も、忘るゝ程のお心には、いつなりはてた情なや。心なき畜類も鳥は古巣を慕ひ、北國の馬は北風に嘶くとは申さぬか。鳥獸もさうはない、親ない者は身を樂に、旅他國致せども、親の墓へ詣るとて、百里貳百里戻るもある。此の度御國の兄御樣、御知行拜領親御達は御隱居、髮を下して樂々と御法體の筈なれども、おいとしやお母樣、つやが戻つて、二人の親が法體の顏見たらば、何ぼう殘り多からう。ま一度髮の有る顏を、おつやに見せたいばつかりに、惜しからぬ頭の雪、解くも撫でるも子の可愛さ。早う連れて歸つてたも、傳内樣頼みますと、家來の我等に樣つけて、待ち焦るゝ親心、私許りすご〳〵と、戻つて生きてござらうか。手を出して兩親を殺すも同じ不孝人、堅牢地神のいたゞきに釘を打つとの教へあり。釘は鍛冶屋が細工にて、打ちかけはなされまい。曲もないお心や、我等が母はお前の乳母、養君の顏見んと、日を數へ指ををり、待ち憧るゝ母が心、思ひ遣られてお母樣の、御心底の悼はしや。即ち母御の御文。」と、懷中より取り出し、「この直筆を御覽あり、篤と御思案あそばせ。私が腹立も皆おいとしさ故なり。」と、泣いつ叱つつ樣々に、詞をつくし諫めしは、奇特にもまた哀れなり。小かんも母の文と聞き押戴き、上書見れば、「おつや殿參る母より、この方無事。」と書かれしが、「お筆に年のよつた事。十五の年こゝへ來て、八年をがまぬ親の顏、見たうなうて何とせう。生身は死身、若しひよつと

存ずる。」と侍泣にぞ泣き居たる。伯母涙にくれながら、「さりとては面目なや。何もかも伯母が科、あの人ばし恨みやんな、身を賣らせたも我故。この度國の出世につき、下るはその身の仕合なれど、あの人も大坂に思ひあうた方ありて、深い約束逃れぬ中、其方に隱して金調へ、伯母が力でかの男と夫婦になして年月の、望みを遂げて遣りたさに、身を碎いても煎餅屋、押せば碎ける身代の、底を見せたる恥かしや。この上其方が心入れ、國へはよしなに言ひ遣つて、あの子が大坂で彼の男と、添はるゝ樣にはなるまいか。遙々上つた乳兄弟、よからぬ事を聞かするも、皆此の伯母が身の因果、世の中の浮き沈み、子を賣る親は多けれど、姪を賣る伯母は我許り、恨めしの娑婆の境涯や。」と、聲をはかりに泣きければ、小かんも共に涙に咽び、「知つての通り胤腹一つの兄もあり、妹もあれど如何なる緣にか母樣の、わし一人が祕藏子で、海にも山にも譬へられぬ、御恩をうけたこの身なれば、明暮逢ひたさおゆかしさ、身體は大坂に殘つても、魂魄は母樣の懷に入つてゐる。これ程に思へども、生なか武士の娘とは、薄知に人も知る、兎れぬ義理にからまつて、大坂の土とならねばならぬ。其方に任する、兎も角も煩ひとなりとも、いつそ艷は死んだとも、何樣なりともいうてたも。其方を賴むこの儘に大坂に置いてたも、國へは嫌ぢや。」と手を合はせ、拜み口說くも哀れなり。傳內、「わつ。」と聲をあげ、兎角も言はず歎きしが、「扠も〳〵淺ましや、口と心が皆違うた。氏より育ちが恥かしい。は

免なりませ。」と、奥の座敷に通りしが、客といふは國許の迎ひの人。伯母は、「はつ。」と許りにて、「小かんはあの人見知らずか。あれこそ其方の乳母の子乳兄弟、今度の迎ひに上つた人よ。」「ヤア知らなんだ恥かしや。」「いや其方より伯母が恥。この勤めをする事、國の人に見つけられ、最早言譯ないわいの。」と、伯母姪ひしと抱きつき、聲も惜しまず泣き居たり。侍鎭めて、「サ、これ／＼些とも苦しからぬ事。親御達御浪人とは申せども、國では賤しき業もならず、大坂は誰知らず、如何なる身過なされても、名字に疵は附かぬとて、覺悟の前で上されし。夫れ故他人はさし置いて、乳兄弟の拙者が參る事、御内證の恥恥辱承つてよい樣に、計らへとのお迎ひ。いかにしてもこの間、伯母樣の詞といひ萬事合點參らぬ故、客と僞り方々を聞き合はすれば、平野屋の小かんは鐵槌煎餅の姪の由聞き屆け、猶念の爲一昨日表向の御一座、稚顔疑ひなしと藏屋敷にて金調へ、今日晝の間に堀江とやらんの前の親方、平野屋亭主と對談し、本金十二兩相濟まし、一札取つて今宵から、自由の御身に致したり。最早氣遣ひ遊ばすな。私は乳母が倅、和田傳内と申して家中に若黨仕る。おつや樣と御同年稚名は石松。五つの頃までは夜晝お傍に附きそひ、一緒に遊び育てられ、七歳より男の身は、大身小身隔てなく、奥へ參らぬ武家の作法、互の顏は見忘れても、乳兄弟なり主從なり、私迎ひとあるならば、恥も恥辱も振捨てて、御息災な容顏見せて下さる筈なるに、お心までが變つたは、些と御恨みに

細く、切れかゝりたる玉の緒の、結び續がれぬ二人が命、危くも又無慙なり。はや家々に行燈あげ、面々約束々々の、客も見ゆれば酒肴、吸物にする蜆川、水も色めき賑へり。小かんが揚の侍も一僕連れて、「何とおさが遲かつたか、小かんは來てか。」と腰かくる。「これは〳〵、小かん樣は今朝から待ちかねて、たんと腹を立ててぢや。ふられさんすな、恐いこと。いざ先づ奧へ。」と伴ひける。小かんは色を曉られじと、「この長い日をうつかりと、よう待ちほうけにさんした。南か堀江かきつと吟味も仕たけれど、馴染が無いだけ免してやる。そのだいに酒飲ます。」と、挨拶もおしきせの、袂を戸棚に打覆ふ。北野の伯母は二三日、夜も寐ぬ目許とぼ〳〵と、「和泉屋殿は此方か、平野屋の小かん殿をちと呼び立てて下され。北野鐵枓煎餅といへば合點、頼みます。」といひければ、さがも日頃は薄知の、座敷へ出でてしな〳〵囁き、「一寸立つて逢はしやんせ。」と、いへども跡の氣遣ひに、棚のそばも離れ難く、座敷へ伯母も呼び難く、どうか斯うかと思ふ顏、客は見てとり、「ア、これ〳〵、我等は一見、明日は國へ下る者。お客衆でも苦しうない、これへお呼びなされ。」といふ。「いや私が伯母樣、話したい事がある。自由ながら其の間、端へ立つて下さんすか。」「何が扨〳〵、話の時分は立ちませう。」近付にもなる爲、早うこれへ。」と言ひければ、さが打笑ひ、「粹かな〳〵、當世は田舍衆程氣が通る。」と走り出で、「これ伯母樣お客へ斷り申した、奧の間へ通らんせ。」「それなら斯う通りましよ、何れも御

死神の誘ふ命のはかなさよ。和泉屋には、「小かんさま〱。」と呼ばはる聲々。「南無三寶最期の邪魔さらば。」とばかり平兵衛、堤をおりて身を何と、なすび畑に隱れけり。和泉屋の男ども門に出で、「そこに何してぞ。屋内がお前を尋ねて、太鼓鉦がいらうとした。」と言ひければ、「ア、仰山な。涼みがてらに紙鳶見に出た、太鼓鉦がいらうとは、朔日早々祝うて貰うて、忝い。太鼓鉦も鐃鈸もやがていらう。」と涙ぐみ、跡に心ば殘る日の、影と入りつゝ暮れにけり。空にたなびく紙鳶、次第々々に引き下す、中に小袖の絹紙鳶、風を含みて下りかねしが、絲眞中よりふつつと切れ、和泉屋の小座敷の、軒にひらめき落ちたりけり。「あれよ〱。」といふ程こそあれ、紙鳶主大勢ひき連れて、「貰ひませう。」と驅け入れば、あたり近所の血氣者、「それ遣る物か。」と走りこむ。道行く人はこれ次手に、お山見べしに込み入るを、内の者ども押へても、我人差別あらざれば、天の與へと平兵衛、羣集に紛れ奥座敷の庭までどや〱入りにける。小かんは見つけ氣をあせる。兎角する間に漸うと、扱ひ詫言たら〱にて、紙鳶を貰うて立歸れば、皆入り込みの大勢も、殘らず表に出でて行く。小かんは男を招きあげ、違棚のづし戸を明け、夫を押入れ、「すはといふなら此方から、南無阿彌陀佛と聲かけう。それを合圖に其の剃刀で、わしが肋を襖越しにぐい〱とゑぐつて、うんというたらこなさんも、尋常に死んで下さんせ。」と、戸を引き立てて寄りかゝり、口に鼻歌心には、彌陀の名號一筋の、紙鳶の絲よりなほ

ち次第、拭ふも人目つゝましや。男は笠のうち悄れ、「親方も道理の勘當これ以て恨みなし。そなたを國へ下さずば、親に不孝の冥罰、行末善からうやうもなし。下したいも一杯なり、別るゝは猶憂し。この平兵衛が胸一つで、本國の親達まで歎きをかけ苦をかける、免してたも悪縁ぢや。」と笠を傾け泣き居たり。「あれや〳〵と忘れて居たもの、親の事又言ひ出して泣かさしやんす。打たるゝ杖もゆかしいといふ物を、拳一つ當てられず可愛がられた現在の親、これは懺悔ぢや忘られぬ。迎ひに來たは乳兄弟、顔恰好は覺えねども、親達と思うて見たけれども、町方に居る分に言ひ成した私が身が、ばしやれた形で逢はれもせず、親の事を思ふやら、こな様の事思ふやら、心を推して下んせ。」と、又さめざめと泣きけるが、「これではすはといふ時に、國へ心が引かされて、未練の出來まいものでなし。こな様に逢ひ次第、死んでのけうと覺悟をする、剃刀は身を離さぬ。これ見さんせ。」と、袖口から手を引き入れて懐の、剃刀の柄包ながら、男の手にしつかと持たせ持ち添へて、「南無阿彌陀佛。」と我が腹に突き立つるを、捥ぎ取つて引つたくれば、「こりやなぜに、もう逢ふ事は優曇華、こな様の手で死にたい。」と、囁き口說くぞ哀れなる。「はて悪い合點な。まだ人立もある中に、思ふ様に死なさうか。その心底に極まらば、まそつと爰にさまようて、日の暮るゝに程はない、人顔見えぬ時分に、足を限りに何處でも、見事に身體を竝べたい。平に待ちや。」と制すれば、「同じくは今爰で些とも早う。」と、

のいふは皆惡口、間夫の何のといふ樣な、深い譯では更々なし。今でもふつと見えたらば、どこぞでそつと逢はせてや。此方からとんと埒明けて、手を切つて退けましよ。」と、口にはいひて目は涙、さがは五音で推量し、「ア、そんな事氣に掛けて、この勤めがなる物か。世間の口に戸をたてて、錠おろすその錠鍵は、いかな鍛冶屋の平樣に誂へてもなるまい。」と、夕暮近き入日かげ、「お客樣達見ようぞや、行燈の用意しや、甜瓜も冷しや、湯もとつてたも。小かん樣もお行水、私も汗を流さう。」と、奧に入れば一座の色、「私から行水してこう。」と、皆々表に出でにける。空も涼しき夕風に、はやる今年のいかのぼり、雲に舞鶴とんびいか、から風招く唐團扇、鬼の頭も色里の、上に揚ればたよ〳〵と、しなだれ上る藤の花、誰がふみいかの一結び、その思はくの紋つけて、袂すゞしき小袖いか、杯いかの品もよく、菊や牡丹の花いかを、戴きあぐるたいこいか、鰻、瓢簞、鯰いか、吹かぬ風もつ扇いか、雲をゐどるに異ならず。往き來の人も立ち留る。此の内にかの人の見えよかしと、紙鳶見る顏で表に出で、上下に氣をつくれば、梅田橋の西詰に、淺葱縞に深編笠、「ア、あれさうなが。」夕顏の、黄昏たどる覺束なさ、先にもみつけて編笠の、下目遣ひ屆かねば、心の中に招きあひ、目はいかのぼり爪先は、其方の方へゆく水の、橋の詰までそろ〳〵と、跡の恐さに身も慄ひ、傍へ寄りは寄つたれども、人目にせかれ抱き付かれず。「文を見てから私が氣は、死んで居るぞ。」と許りにて、泣くにも涙落

提灯屋の息子走つてきて、「小かん様爰ぢやげな。提灯が出來ました、二つで四匁四分ぢや。」といひ捨ててこそ歸りけれ。「うれしや〳〵、さが樣つい參つてきませう。むづかしながら四郎兵衛殿、この提灯の紋の脇に、書附して下さんせ。」といひければ、料理人は、「お易い事、目出たう一筆みしらせう。」と提灯あぐれば紋なしに、眞白四郎兵衛興さまし、「こりやどうぢや。四匁四分で白提灯、氣轉の惡い提灯屋、ちやつと紋を書かせてこう。」と走り出づれば、「これ〳〵もうよいわいな、提灯屋に科はない私が佛にうけられず、願の叶はぬ知らしめ、さうして置いて下さんせ。軈て梅田へ行く時に、どうで入らねば叶はぬ。」と、浮世をすねし言葉のはし、一座のよねや下女久三、「仕直しに遣つたらば、多分晩の時合にならう。歸らぬことは悔まぬもの、いうて歸らぬ〳〵。唄いうてなかへらぬ死出の旅。サア飲みませう。」と祝うても、定まる前世の約束を、逃れざるこそ哀れなれ。平野屋の小めらうが風呂敷包うちかたげ、「ア、熱や。」とて走り入り、「さが樣ちとお耳借ろ。」と耳に口よせ、「内儀樣のいはしやんす、アノ小かん樣には、鍛冶屋の平樣といふ間夫のお客が御ざんすが、樣子あつて逢はせませぬ。晝からちら〳〵此の邊で見えまする、門より外へ出しませず、行水もそこで賴みます。氣をつけて下さんせ。」と、囁き散らし歸りけり。小かんははし〴〵聞き附けて、「さが樣今のは何のこと、平樣の事であらう、さりとては氣の毒な。先の人は親方持、浮名が立つては職人の、身の爲に宜からぬ噂、人

納めの紋日ぞと、思ひ〳〵の揚の客、小かんは田舍の侍に、初手は内にて二つめは濱筋の和泉屋、さがが許へと出かけたる。女亭主の譯よしが、穗長の煤を打拂ひ、人に情を掛鯛の、むしり肴と春めかす、そのかきもちの氷より、淚の氷とけやらぬ、うき身の上こそ無慙なれ。「あれ〳〵勝曼參りのよね樣達、駕籠が戾る。」といふ中に、早表まで舁きよせて、簾打ちあげ、「コレさが樣、今下向しました、小かん樣爰にか。こなさん參るといはんしたが、道寄りせずにおとなしう、早う下向さんした夫れも合點。早う逢ひたい人があろ。」と、ざゝめき戾る駕籠の數々、衆人愛敬愛染の、威德も見えて賴もしし。さがも其々挨拶して、「松屋丸屋河内屋の、よね樣達も此方の揚げて參らせましたが、遲い事や。」といふ所へ、程なく駕籠を舁き入るゝ。「皆樣緩りとやらしやんす、道頓堀でござんしよの。」「よいする〳〵三十郞の初日見て、芝居では大酒戾りは駕籠でむしたてる、熱いこと〳〵。この暑さでは霍亂して、信田森のうらみくづ水、一つ飲ましや。」と喚きしが、「ヤア小かん樣、こな樣は參らずか。定めし昨夕平樣と、手を引きあうて御ざんせう、小憎い事や。」といひければ、小かんはつと肝にしみ、「さうした事ではないわいな。今日の客は一げんの田舍の侍、日が暮れて見える筈。それまでは愛染樣へ參らうと儘なれども、心に大願あるゆゑに、提灯二つ紋付けて、今日の間に合ふ樣に、一昨日から誂へ、今にも提灯出來次第參りたうござんすが、提灯の出來ぬのも氣に掛ります。」といふ所へ

ければ、親方もこれまでと、燒鐵おつとり大地へどうど投げつけ、「エ、欺された騙られた。十八年此の方、たとへ犬猫飼うたりとも、これ程にはよもあるまい。半時も内には叶はぬ、叩き出せ。」と飛びかゝり、胴骨をどうと踏む。情なき丁稚ども、柄長の鐵ね手々におつ取り、目鼻もわかず打ち出す。平兵衞大聲あげ、「假令擲たうが叩かうが、この平兵衞はこれの中より外、往き所はよそにはない。死ぬるともこの內から直に死ぬる。」と、驅け入るを敲き出し、走り入れば敲き出し、なんなく辻へ打ち出し、打つて淸めの鹽水や、跡は火を替へ水を替へ、表をかふる備後町、へりも切れはて緣切れて、とこ離れゆく三重戀路なり。

中之卷

戀草の種うゑんとて固めしは、神か佛の堂島を、きて見よとてや田蓑橋、夜々を重ねて大江橋、橋のゆきげた雪ならば、幾たび袖を拂はまし。花のふゞきの櫻橋、梅田のみどり曾根崎の、靑葉隱れの鳥の音も、法華長屋の名を立てて、神祇釋教戀無常、中にこめたる中町や、その家々の吉野川、流れの數の多ければ、よねが情のはなの綱、捩ひとられぬ人もなし。色里に誰が身の樂で身を捨つる、人はなけれど取りわきて、平野屋小かん一まきは、語るも聞くも哀れなり。今日は六月朔日の、正月

でかしやつた〳〵、それが其方の身の果報。」と、皆々悦びほめにけり。親方も機嫌を直し、「流石男ぢや滿足した。この上ながら此方の心の落著くため、誓文の證據に。」と、三尺許りの棹鐵の、夕日の如く燒けたるを、鐵挾にて引き出し、鐵牀にどうど直し、「これはこの度禁中樣、お内侍所の釘下地。この内侍所には日本の神々御ばん有り、八萬餘座の神の司の御寶殿、その釘になる黑鐵。今の誓文僞りないと見る前で鐵火を握れ、心に誠ある者は、氷よりもひややかなり。少しも僞り有る者は、腕燒けたゞれ落ちるといふ。佛神に謔はない。其方も發起して、今の誓文立つるからは、熱いことはあるまい。サア握れ。」といひければ、平兵衞色變り、只「はゝ〳〵。」と許りにて、後退りにぞなりにける。女房笑止がり、「ハテ爰な人うろたやる。思ひ切つたが定なれば、鐵火に怖い事はない。但しは當座まかなひに、金取り欺しの空誓文か、さりとは惡い合點。一生の病をぬき、身上の固まる事、さつぱりと思ひ切りや。思ひあうた馴染の中、離れがたない筈なれど、それは一度の皮切り、なんほいとしい戀しいも、身が立たねば叶はぬこと。但し思ひ切られぬか、サアいやおうの返事しや、どうぞ〳〵。」と手詰になれば、平兵衞顏も心もうろ〳〵と、否といへば主人の慮外、おうといへば年月の、小かんが情仇となる。思案涙に胸つまり、「なう旦那樣おへ樣おつま樣も賴みます、その御返事は私が身に成り代つてどうなりとも、思ひ分けて下さりませ。鐵火は御免。」とばかりにて、かつぱと伏して泣き

いて無念な親方の、心の内を推量せよ。さきにも仁介長三めが、噂をするを叱りつけ、今で彼等に面目ない。去年の春から際々に、或は百日八十日、懸の算用不埒にて、何時の際か帳面の、さつぱり濟んだ事が有る。夫れのみならず堺筋の絹屋から、紺繻子の女子帯五十六匁、緋縮緬八尺三十五匁といふ書出し、覺えが無いとて返せども、跡からは持つて來る、不思議な事と思うたに、今日といふ今日内の嬶が緋縮緬の正體を見屆けて歸つた。ヤレ勿體ない冥加ない、灰まぶれの鍛冶屋の仁藏、身にさへ著にくい緋縮緬に、足を四本踏んごんで、その罰はなんとせう。身のゆく末が可愛い。」と、聲をあげて泣きければ、女房娘諸共に、「惡う聞きやるな平兵衞。」と、共に袖をぞ絞りける。罰利生有る親方にて、涙を止め、「こりや平兵衞、いうて居ては果てしがない。今までの事は皆免す、これから魂入れかへ世帯を持つて出るまでは、茶屋の見世へも揚るまい、お山と詞もかはすまいと、屹度誓文たてうならば、此の度の金縦へ四兩が五兩でも、今出して取らするが、サアなんと。」と、いひければ、平兵衞飛び退り、兩手をついて頭をさげ、「申しおへ樣おつま樣、旦那樣へ詫言して、御禮申して下さりませ。道知らず恩知らず、大惡人の私に、金まで出してこの難儀、お救ひに預ること、親も及ばぬ主の慈悲。今日は祝ひ月二十八日御縁日、不動の刃に喉笛を突き通され、身の家職の鐵牀に打ちみしやがるゝ法もあれ、又や二度惡性ごと、ふつつと思ひ切りました。」と、涙を流しいひければ、「オ、

の道一通り、火を清めるといふ事は、商賣なれば知つて居て、その上でする商賣。一旦はさも有れ、一生主に逆らはず、詞一つ返さぬこの平兵衛が、是れほどまで逆らうて申すからは、身拔のならぬ譯有りと大目に見て下されて、その御恩を忘れる平兵衛めではなきものを、但し銀を引きこんで損懸けうとの氣遣ひか。年の切は去年明き、身を質に置くからは、お氣遣ひはないこと。平兵衛が身一生、生きる瀨か死ぬる瀨の、大事の銀に行きつまり、漸う大和の宿村が、誂物を天の與へ、時の間を合はせたく、奉公して十八年目、始めて旦那に叱られ、あたはぬ身にはあたはぬ金、命を捨つるも世のならひ、夫れに悔みは殘らねども、額に毛貫もあてる者、見世の前で晝日中、町の衆、道行く人、友傍輩も見るぞかし、丁稚小者をする樣に、曲もない打ち擲き、脊骨は折れうが碎けうが、打たる〻槌は痛うない。憐れを知らぬ親方殿、見て居て打たするおへ樣やおつま樣の情ない、お心の鐵槌が身節にこたへ染み渡り、痛い悲しい恨めしい。」と、泣いては恨み恨みては、我が身の科を悔み泣き、色に迷ひの心の闇、推量られて不便なり。親方彌腹をたて、「鹿を逐ふ獵師は山を見ずとは汝が事よ。お山狂ひに眼がくらみ、人の理非も身の上も、一寸脇が見えぬよな。汝が身の立つことならば、彼等に商ひするまでなく、五百目や六百目は、この利右衛門が出しかねぬ。遣うても止りの知れぬ惡性金、氣儘にさするはおのれが身に、毒飼といふものよ。内外の者も町衆も、三人寄ればおのれが評判、聞

けるこそ尤もなれ。平兵衛至極に詰れども、懐の銀に離れ難く、「ようござる。今の間に私が打つてやる。地鐵は後で算用。」と、横座に直つて足鞴、地鐵打ちくべ吹きたて／＼、「丁稚ども、傍輩の好みに相槌一つ打つてくれ、平兵衛が一生の恩に受けう。」と頼めども、親方の顔色みて、誰か詞の相槌さへ、打つ者とてはなかりけり。平兵衛恨み泣き、「エ、さうはせぬもの聞えぬな。うぬらが草臥れ眠たがる時には、おれが代りをして二人前を働いて、宵から寢させたり休ませた恩徳を忘れたな。よい頼まぬおきをれ、裏鐵の千足や二千足、平兵衛片腕半日の仕事に足らぬ。親方傍輩ひとつになつて、この平兵衛が一分すてさせ、この首尾なら死なうも知れぬ。死んだらばこの一念、汝等が首引拔いて。」とてこ／＼とつてらこ／＼、とてこ／＼と打つ槌に、落つる涙も溢れそひ、湯玉とたぎる許りなり。親方土間に飛んでおり、鎚鐵挾取つて投げ、「朝晩清める鐵牀に、涙をかける罰あたり。」と、槌の柄をおつ取り直し、胴骨を四つ五つ、たゝきつけ／＼、「汝が敵はこの銀。」と、懐に手を押し入れ、「これ銀を返せば言分ない。此方には請取らぬ、どこぞ外で誂へや。」と、投げ返せば二人の者、詮議無益と思ふ顏、「手附の一貫覺えたか、平兵衛重ねて取りに來る。」と、いひ捨ててこそ歸りけれ。平兵衛、「わつ。」と大聲上げ、近邊も恥ぢず歎きしが、「さりとては旦那殿、舊功なした育ひ立てを、可愛が定か憎いが定か。只今のお詞は弟子子不便ないひ樣で、又此の仕方は平兵衛に、首縊れとのなされ樣。鍛冶

有る。奈良郡山左手右手、吉野郡の奥までも、雪駄屋衆は皆存じた。御兩人の御在所は、何方。」と問へど聞かぬ顔、あちらへすべらし紛らかし、只名所を隱すにぞ、平兵衛も親方に、根問ひさせて惡しかりなんと、「サア請取は仕舞うたり、渡して早う戻しましよ。」と、取らんとすれば亭主押へて、「否この商ひはせまいわい。銀請取つたら早戻せ、始め聞けば請取らぬ。あの衆は大和の金銀たんと持つた村の、牛馬まで持つた樣、あの衆の誂へ物、この利右衛門は受取らぬ。我等が家職に疵がつく、勿體ない。」とかきさらへ、引抱へて奥へ入る。「先づ待たつしやれ、それでは私が立ちませぬ。損のいく細工でなし、銀に一厘不足なし。手付取つて手形して、渡す段に變改して、職人が立ちますか。樣子が有らば有るまで。それなら私が内證の自分仕事にしませう、時には家に難つかず、疵がつけば平兵衛が疵。渡さねばならぬ。」と、取付くところを突きこかし、はつたと睨んで「うつけ者、疵が附けば平兵衛が疵とは、どの口で吐した。この利右衛門が目代にして、弟子手間取をも引廻す、汝に疵を附けまい爲よ。京御所方の御普請の下細工の釘請取り、火水を清める最中に、正しうもない銀を取り、作ひつきあふ汝が先いきせうと思ふか、冥加が有らうと思ふか。五兩に足らぬ腐り銀、寶の山と惜しみをる、根性の甲斐なさで商賣がならうか。けつく丁稚の時分には、人にも成らうと思うたが、エ、ごくに立たぬ根性。」と、涙を浮め齒ぎしみし、「向ひ鄰へ聞えぬうち、銀を戻して去なせをれ。」と、怒り

かけの代に引きがない、こなたのはうにはこれが德。ちよつと一筆請取して、出來た分くだされ。」といひも仕舞はぬ半分聞、三兩三分につかみつき、「これでざつと濟みまする、まあ二分や一分は伯母がどうぞ仕やりましよ。」と、われ許り合點の、數もよむやら讀まぬやら、懐におし入れ、「請取でも手形でも起請でも、仰せつけられ。」硯紙とり出し、「これ旦那樣、上物の裏金二千足戸棚にあらう。取り出し下さりませ。」とぞいきりける。亭主は裏金束ねながら持つて出で、「平兵衞が話で聞きました。大和の雪駄屋殿は各で御座るか、これはあはぬ細工。私が聞けば請取るまいに、平兵衞が在所から、懇仲ぢやと申して、どこでやら請取つて。重ねて斯うは成りませぬ。それおつまお茶進じや。」「あい。」と返事も色づきし、赤繪の茶椀手にすゑて、「出花ひとつあげましよ。」とさし出せば、「これは〳〵忝い。」と、取らんとせしが、「いや〳〵お茶はたべますまい、御無用になされ。」といふ。「お前は嫌ならお連樣。」「いや私も御免なれ。」「平にお一つ上りませ。」「何しにお辭儀申しましよ、兩人ながらお茶は得たべませぬ。」「そんなら白湯でも上げましよか。」「いや〳〵所望に御座らぬ。」と、いへばおつまも打笑ひ、「ハァ愛想もない事や、こりや仁介煙草盆持つてこい。」とて入りにけり。仁介が奥より煙草盆、鍛冶屋炭火のおこり立て、有る火はおいて懐より、火打に火口打ち出し、煙草のむ身は石の火の、光の間にも持ちかねて、身の程知らるゝはかなさよ。亭主これに心付き、「何れも大和のお衆と

少と借錢を輕めん爲、味な商ひからくんで、三兩餘りは今日明日に請取る筈の約束。はて頰は面、この銀を請取り次第遣りませう。二分や三分の足らぬ口、それはその時どうもなる。何とぞ首尾して、小かんを手へ入れる樣に賴みます。國へ下るに極まれば、この平兵衞から死にまする。二人の命を助ける慈悲、眞の後生に成りませう。伯母樣偏に賴みます。」と、又手を合はせ泣きければ、「いや賴む事ではござらぬ、私が身に掛つた事、その銀さへ調へば、何の案ずる事もない。ちつと胸が開いた、平野屋へも立寄つて、小かんにいうて落ちつかせう。そんなら早う歸りましよ。内方へも能いやうに。」と、出づれば、「これ／＼この傘小かんに返して下さりませ。」「なう／＼これは幸ひ。」と、差いて出でたる傘や、虎が淚も引換へて、牛天神の野邊の露、消ゆる間近き 三重 命なり。見送る道もしみづきし、草鞋に編笠の田舍商人二人づれ、「ヤア平兵衞殿いかい暑さでござるの。誂へ物ども出來ませう、今日受取つて銀も濟まし、明日下りたうござる。」といふ。「いかにも／＼上物は皆出來たが、急な細工が支へて、中から下の竝物が揃ひにくい、銀を先づ請取つて出來次第に跡から下しませう。銀を持つてござつたか、何程持つてござつた、四兩あしもござるか。」と、そゞろに高をぞ聞きたがる。「いや上物さへ出來たれば、竝は遲うて大事ない。誂への分算用は、今日殘らず仕切つて。」と、腰のうちがひ取り出し、「先度手付に一貫文渡し、今三兩三分、相場は金六十目、錢十五匁合はせて二百四十目。し

ちと女夫は當惑して、樣々思案して見ても、今で請出す※あだてはなし、恥を捨てていうたらば、國の迎へが藏屋敷で、つい銀を調へ國へ連れて歸らうし、時にはこなたと緣切れる、どうした物で有らうと、小かんに問うて見たれば、いとしやあの子も泣き入つて、『國へ歸つて親達の、顏も見たうはござれども、平樣に一寸も離れうとは得言ひますまい。協はぬ首尾に極まつて、國へ下るが定ならば、私は見事に死にまする。伯母樣を賴みます、國へ遣らずに平樣と、長う添はせて下され。』、と歎くも可哀し道理なり。恩を受けた大事の姪、爰は一つと思うても、手業にいかぬは銀事。國の迎ひは早うといふ。あの子は『どうぢや。』と氣をせきやる。爲方つきてこな樣と談合に來ました。三年を十二兩、一年半は勤める。殘つて半銀六兩なれど、ひき日の何のと適切七兩は入りませう。私が方で二兩二分は身の皮剝いでも調へましよ。まあ四兩二分あればあの子をしやんと請出して、こな樣と疾うから夫婦にしたといひなし、國へ遣るにも女夫連、壻入させて濟ませども、その四兩が見えぬ故、大事の姪が望みも遂げず、死に生きも出來かねまいと、思へば胸も塞がつて、今朝はおもゆばつかりで、何も喉が通らぬ。これ程しきで此方樣へ、身代打明け話すこと、恥かしい口惜しい無念にござる。」と、手拭も絞る許りに泣き居たり。平兵衞「はあ。」と吐息をつき、「はて扨思案に行きあたつた。私も近年彼故に、旦那の懸錢も何もかも、※しやちらさんばう、近附中に痛手を負はせ、動かれぬ身になりし故、

千年百年生きようが、大福長者にならうが、女房の姪に身を賣らせ、その金取つて立つものか。腹を切る。』とて喚かれたを、可愛やあの子が涙を流し、『伯母様許して下さりませ。國の父様母様が浪人でなければ、こなさま達へみつぎの筈、そのならぬが悲しさに、私が身を捨てました。他人でも有ることか、伯母は親の片割、こな様達許りぢやない、國にござる母様への孝行と思ひます。伯母様を母様と私や思うてゐまする。』と、病みほうけた伯母に抱き附いて、聲をあげて泣きやつた顔、今に忘るゝ事もない。その蔭で人參の百服餘りも飲んだ故、病の根を拔きこの樣に身代の尾も見せず、暮すは小かん孝行故。こな樣元は知らぬ人、小かんがいとしがる人と、いうて互の懇あひ、命を助け身を助け、姪ではなうて親ぢやもの、如在にせいといやつても、私等に如在はない物を、恨みが結句で聞えぬ。」と、邊を忍びしく〳〵と、泣きくどきてぞ語りける。平兵衛手を合はせ、「餘り氣遣ひ切なさに、恨みらしい詞つき、眞平々々御免し。此方を伯母御といふ事も、小かんがいうて知つてゐる。先づ此の度ひよんな事できたといふが氣遣ひな、落付かせて下され。」と、猶氣をせくこそ道理なれ。「オ、さればいの、内々國の親御前へ、茶屋奉公は隱して、大坂の歷々の奧樣へ預けた分。所に今度小かんの兄御、殿様より呼び返され御奉公にありつかれ、それ故あの子を國で緣につけるとて、乳母の息子の乳兄弟が、昨日の朝、「おつや様迎ひにきました。」と、幼名いうて上つて安治川に宿をとつてゐる。こ

もの、お殘りおほや。」と挨拶す。「さればの事、平兵衞の懇と、かね〴〵話家も知つてゐまする、重ねてから寄りませう。あれみなおこゞの時分ぢや、サア先づ内へ。それ平兵衞馳走しやや。」と人あひよく、皆々奥へぞ入りにける。平兵衞あたり見まはし、傍へ寄つて小聲になり、「なんとしてござつたぞ。今日立ちながら平野で、小かんにちよつと逢うたれば、物案じ顔して『今夜中に是非共ちよつと來て下され。ひよんな事が出來ました。』と、跡先もなういうたれども、供の事なりや二言と聞かず、おうというて戻つたが、どうした曰くぢや氣遣ひな。萬事此方を頼んでおく、何事ができたぞ。」と、恨み顔にぞ見えにける。女房も早涙ぐみ、「オ、道理。さりながらついいうて濟まぬ事、せかずと樣子を聞かつしやれ。今までは私が身を、小かんの肝煎取次のと、此方へも隱したが、眞實はわしが姉の子現在の伯母姪。父親は播磨で鷹匠頭の奉公人、五十石に五人扶持、二本差いた人の子なれども、親ごぜが殿樣の御祕藏のお鷹をそらし、お氣に違うて浪人し、あの子許りを大坂へ、伯母を便りに何方へも、仕附けてくれと上されしが、折節惡う不仕合、こちの夫の長煩ひ、漸う本復めさつたりや、一昨年の大地震。私は氣癪で牀に附き、身代どうも立ち兼ね、すでにかまどを破る處、あの子が私等に隱して肝煎頼み、堀江の茶屋へ三年を十二兩に、身を賣つてくれました。私は聞いて目をまはす、夫は男の腹をたて、『身こそ貧なれ大坂三郷隱れもない、鐵槌煎餅三郎兵衞、かゝが氣色が本復して、

ア、御免なりませう、大文字屋の利右衛門樣とはこなたか。北野鐵槌煎餠三郎兵衛と申す者の女房。此方の若衆平兵衛殿ちよつと呼び出して下されませ。」「ハア、中々や。平兵衛は今日かゝや娘が不動參りの供をして、此方の近所へ往つたが今に戻らう。煙草でも呑んで待たつしやれ、茶進ぜや。」といひければ、「ア、お構ひなされますな。平兵衛殿とはふとした緣で懇に致しあひ、今では親子同然。とうに內方へもお禮に參る筈なれども、夫婦の手ばつかりの商賣、手があけば口があくで、おのづから御無沙汰。今日は平兵衛殿に用ついで、內儀樣にもお目に懸らうと存じ參りました。これはとゝの手燒鐵槌煎餠、さまに進ぜて下さりませ。皆平兵衛殿の朋輩衆か、暑い時分に熱い仕事、御大儀でござんする。あれ〳〵辻まで平兵衛殿お供して見えまする、おへ樣さうな。」といふ所へ、內儀娘平兵衛が、差掛傘の印にも、新地平野屋墨ぐろに、櫻の丸の花の露、花の雫も艷きて、人々かへれば、「ヤ、戻つたか、雨にあうて氣がせかうなあ。」「いや〳〵平兵衛の近附多うて、傘も借つたり休んだり、ゆるり〳〵と蜆川の新地を、おつまに始めて見せました。」と、語ればおつまも、「なう父樣、平兵衛の案內で、美しいお山衆をたんと見て來ました。」「オ、そりやよい慰み一段々々。北野の煎餠屋のお方平兵衛に逢ひたいと、先にから待つてぢや。嚊土產がある禮をいや。煎餠屋殿も先づ內へ。」と、亭主は奧に入りければ、「ア、おへ樣でござりますか。今日は宿にをりましたら、澀いお茶でも上げましよ

「雨が降らうが雪が降らうが、平兵衛の供からは氣遣ひは御座らぬ。堂島新地蜆川、茶屋暗屋煮賣屋で、鍛冶屋の大盡平様と、誰知らぬ者もない平兵衛殿、傘の五本や十本を、借りかねは仕やるまい。わし等が持つた傘では、お山衆の濡駈は堪るまい。」とて動かねば、親方利右衛門、「やいこりや〳〵。又しては汝らが、謗りはしりに兄弟子の、中言をいひをるか。アノ平兵衛めはこれの見世を任せる程の久しい者。なんぼうでも身をうつて仕損ふ者でない、平兵衛が眞似したら汝等當が違はうぞ。同じ様に汝等が文の使も仕をるげな、連立つたも知つて居る。あの邊は人を釣る、甘い餌に喰ひ附きお山の味を喰ひ覺えたら、それ限りに追ひ出す。」と、苦々しくいひければ、「いえ〳〵私や文持つてたつた一度、仁介は先度も連立つて、お山喰うて來たげな。」「エ、あの人の譃吐きやる、おれがどこに喰うたぞ。」「オ、わがみ先度いやらぬか。本山寺の開帳から、平兵衛殿と新地へいて、喰うて來たとサアなんといやらぬか。」「わあいそれはの平兵衛の、茶屋へ連れていて、旦那様にいふまいなら、甘い物喰はせうとて、主は奥の座敷でお山を喰やつたさうなれど、私は端の上口で鰻の蒲燒許り、お山は口へも寄せなんだが、めいよな鰻といふ物は、喰へば喰ふ程お山が喰ひたうなつてくる。鈍な物ぢや。」と笑ひける。親方も返答を、他へそれたる槌の音、てん〳〵天氣も照り降り雨に、五十餘りの女房のとつて置きをば濡らさじと、「嬉しや此方さうな。」とて走込みしは、「誰でござるぞ何方からぞや。」「ハ

心中刃は氷の朔日

上之巻

　さりとても戀は曲者みな人の、地金をへらす燒釘は、敲き直いて意見して、燒き直いても惡性の、酒と色との鎹や。煮ても燒いても嚙まれぬは、鐵橋焙籠鐵火箸。その癖細工は器用にて、精さへ出せば二人前、せねば釘貫抜けていく、讀み書きかな文鐵挾、兎角萬能一れん物、鐵槌答へぬ糟釘で、後は吹きあげ鞴ぶく、唄鍛冶屋のてこの衆てつからり、ころりてん〳〵からりちんからり、ちん〳〵からりと打ちあげて、帳面許り合ひに合槌、いかな打出の小槌なりとも、續くべき樣なかりけり。弟子子大勢つかふ身は、油斷させじと旦那から、灰猫の顏振りあげて、「ャア虎が涙のしるしが見えて空が曇つた。五月二十八日雨三粒でも降らねばおかぬ。女房や子供が不動參り、氣の毒や雨に逢はう。仁介でも長三でもちやつと傘持つて走れ。大降りがするならば、おつまが帷子濡らさうより、八分ぐらゐで駕籠をかれし、女房にも足袋をぬぎやといへ。雪駄を腰に挾むとも、新しい紙遣ふまい、釘包んだ古反古、一二枚持つていけ。」と、匆々氣のつく職人の、金出來す氣ぞ格別なる。弟子共は不承顏、

ば、「わつ。」と泣き、叫ぶ聲々雷神も、思ふ中をばよも裂けぬ。涙の雨に二重三重、締め付け〳〵、二丈の絹も我々が、一つ蓮は一丈ぞ、往生淨土は一寸も、のべも縮めも「サアよいか。」首の結びめ生々世々、解けぬ契りの堅結び。「サアもう物はいはれぬ。」「いひたい事は御座らぬか。」「其方は無いか。」「私は父樣母樣が、懷かしいこれ許り。」「我はかみ樣旦那の事、いうて盡きせぬこの外は、唯南無阿彌陀佛ばつかりぞ。」「サア唯今がなむあみだぶつ、〳〵、南無阿彌陀佛。」と踏み外し、落つる袂を引寄せて、抱きついても苦しみの。寄りては離れ離れては、足を縮め手を伸ばし、虚空を摑む臨終の、互の目には見えながら、物はいはれず岩代の、松にかゝれる下り藤、嵐になやむ如くにて、次第〳〵に弱り果て、消え行く星と諸共に、一度に息絶え目を塞ぐ、裄丈揃ひし死姿、刃に伏すは古手にて、これ心中の新物と、聞く人廻向をなしにける。

今宮心中　終

や。」「オ、おん※でもないこと。假へ畜生界に落ち、蟲けらに生まるゝとも、同じ蟲と生まれうと、思ひ詰めたか。」「つめました。」「さはさりながら何にならうも知らぬ身の、人界の見をさめ、ま一度顔がよう見たい。」「私も見たい。」と引きよせ〳〵「我故に殺すか。」「女房故に死なしやんすか、いとしいぞや。」「いとしい。」と、盡きせぬ歎きひぬ思ひ、思ひ亂るゝ夏草の、しをれ伏してぞ泣き居たる。「あれ〳〵夜明も近づくか、ちら〳〵人の通ひも有る。二人が帶を結び繼ぎ、いうた通り。」と解かんとすれば、「いや帶を解いては見ぐるしからん。この絹は親方の商ひ物、盜みはせねども、斷りいはねば盜みも同然。これをこの木にゆはへつけ、旦那の絹にて首縊れば、旦那の手に懸るも同然、一つの罪や脫るゝ。」と、昔の例求塚、これも男と女郎花、それはくねるこれは又、うねりし松に手をとりて、渡るも夢の浮橋や、無明の橋のいと細き、心の罪に踏み滑る、足を踏みしめ踏みしめても、上り煩ふ男の體、女子の身でさへ上る物、こりやどうぞいの。」と手を引けば、二郞兵衛淚を潸々と流し、「ア、主の罰の恐ろしや。この足袋の片足は旦那のお古、常は兎もあれこの時は、頭にも戴くはず、土足にかけしその咎め、お許しなされ下され。」と、脫ぎ捨て登る松が枝に、「そりや雷光鳴らうぞや、吃驚して落ちまいぞ。」と、夕立斯る雷神、目指すも知らぬ松陰に、「何やら暗うて見えてこそ、慾深い事ながら、貌をよせて下さんせ、雷光の影になりとも、顔が見たい。」「見せたい。」と、くわつと光れ

るとも、我が妻を避けて涙の袖おほふ。いや我は男よそなたをと、互に覆ひおほはれて、今死ぬる身も生身には、目に恐ろしき稻光、野なかの水に飛ぶ螢、御堂の影はまがはじと、歩みよろ〳〵足たたぬ、惠比壽の森にぞ三重著きにける。二人は松の下陰に、どうど座を組み泣きけるが、男は氣弱き若い者、「ア、譯もないことしたわいの。内に居る時はしりのさきの、菜刀でなりとも一人死ねばよいものを、死ぬるに連を拵へて、旦那には事缺かせ、家の名を出すといひ、女房の親兄弟に、難儀をかけるのぶとい奴と、死面をまぶられ、日頃立てた正直も無になり、よしない者に緣ふれたと、そなたも世間の評議にあふ、許してたもや。」と許りにて、涙正體なかりけり。「なう死に際までその樣に、私が事思うてか、嬉しう御座る忝い。」と、共に打伏し泣きけるが、「されどもそれは愚癡ぢやぞや。格好こそは大ぐれなれ、昨日今日の前髮を、姉というても大じない、きさめが酷や殺したと、憎みは我が身一つにて其處は露塵いとはねども、世間晴れて宿小屋持ち、若い衆のつき合ひに、老女房持つたとて、人が笑うが譏らうが、この兩の手のありたけは、命限りに稼ぎ出し、まあ十五年辛抱すれば、こな樣は三十六、私はちやうど四十一、老女房の威德に、男に家を買はせたと、譏りし人にうらやませ、男に鰭を付けうぞと、思うたこと言うたこと、違へば違ふ現世さへ、未來はなほかし覺束なや。中有の旅の雲霧に、見失ふこと有るとも、犬死と思うて下さるな。六道の辻にて必ずめぐり逢はうぞ

かる。おれが殿御は日本おろかよ唐物町にも、稀な男のちよきりこきり小女房、花の様なる和子を設けて、久太郎町とて聽て寺入久寶寺町、その豫言もいつしかに、徒寢の夢の馬喰町、誠に私もこなさんも、後には親のかれ殘る、老木の老いの世は逆に、順慶町も空ごとや、安堂寺町も子故の闇に、迷はせません不孝の罪、何と脱れん淺ましと、又引寄せて泣く涙、袖にさし來る鹽町や、長からぬ世に長堀の、樂な世界を心から、九之助橋もこれやこの、唄瓦屋橋とや油屋の、油しめ木の音に聞く、※おそめに染めし久松は、いつの時雨の一雫、洗へど落ちぬナヨイ戀衣、世にひろがりし浮名を、よそに謠ひし言の葉や、その油屋の一節も、※師走油が身の上に、かゝる涙とこぼれそひ、明日より同じ三味線に、のりの燈油屋の、廻向をなすこそ哀れなれ。ひとつあるさへ惜しき世に、今宵限りとほりづめや、命二つを二つ井戸、深い緣とて死にたいも、皆罪障の大和橋、あの千日に立つ煙、無常の雲のさつき雨、降らぬ先にと、唄死に場尋ねて露にしみづく帷子、肩と裾とはおぼろ花色、腰に弘誓の舟に帆掛けて、妻に磯馴の松原、これを最期に京橋やら、西に川口船の帆柱、此處に惠比壽の松原、松のくろみか雨雲か、降らぬさきとて道急ぐ、早曉の旅人や、唄死にに行くものヨホ知らいで人の、浮世仇口曲もなや。知らいで人のヨホ知らずや人の、浮世念佛も賴もしく、傾く月を知邊にて、空を拜めばをちかたに、とゞろ／＼と遠くなるをの海かと聞けば、あれ／＼よそに轟く、雷鳴の落ちかゝ

口はたと鎖す。「危や地獄極樂の堺筋からこれ爰。」と、招かれ寄りて、何事も先づ此の近所を退いての事。あては無けれど南の方、人や咎めんくる〳〵。」と、絹をも包む世を包む、其の風呂敷の木綿幅、身のなる果てこそ　三重

下之巻

二郎兵衛おきさ道行

唄 一つとや一つ涙の瀧の絲、落ちて三途の川となる。二つとや筆もあれかし我が心、書いて後世に留めたや。三つとや見たや聞きたや故郷の、親の生顏夢にだに、夢さへ見せぬ死出の夢、覺めてはいつか此の娑婆へ、歸りこんどの藪入は、女夫連でと約束の、盆正月の十六日を、待ち樂しみし我々が、哀れ地獄の釜の蓋、開くを待つべき罪人と、呵責の責は豈夫その、愛しいこなた可愛い其方、脫すまいぞや脫さじと、縋り抱きよせ泣く姿、咎めて吠ゆる犬の責、この世に地獄見せけらし。これも思へば親の罰、私は親よりお主の報い、育てられたるお情や。後生願ひの親方の、宵にや和讚夜中にや念佛、早眞夜中の月しろの、空を力に東堀、澄み行く水に影映る、我が身の濁り恥かし。唄 恥は暫しの浮世なりとも、戀をする身の手本町とは、二人が心一つに米屋町とも、思ひ量りて後生七生助

羨ましうて耐らぬ。此方も盆には在所へいて、粟畑でしげろ※と、ころりと寢たる音許り、鼾の闇はあやなしや。漸うと門口の貫の木堅き家の風、鍵は久三が預りにて、朝比奈ならねば門破り、爲方つきて立ち居たり。預けられたるきさが身の、出でては姉の迷惑と、知れど夫のゆかしさと、分けてわりなき割菊の、紋の風呂敷引包み、菱屋の門口樞の穴、覗いても音信は、蚊の聲ならで便りなく、胸じやくりして泣く聲の、内へ微に聞ゆれば、二郎兵衛も樞の穴、顔を寄すれば鬢の香の、梅花の薫は、「おきさか。」「おいの二郎様か、語りたい事許り。爰がどうも明けられぬ、此の戸一重が關守。」と、互に身をすり氣を踠き、泣くより外の事ぞなき。浪花橋の辻に寢し犬一疋吠え掛る、聲につれて方々より七八疋、きさを威して吠え立つる。恐ろしなんども爲方なく、放れがたなく門口に、猶取り付きて立つたりしが、中の間の竹目を覺し、「あれ久三門にいかう犬が啼く、何も無いか起きて見や。」「おう。」と答ふる寐聲の返事。「そりやこそ久三。」ときさは東へ、二郎兵衛は中戸の陰にぞ隱れける。久三は例の襦袢一つ、桿棒提げ貫の木明け、くゞり開いてつゝと出で、「ハテなんにもないもの、非人がな通つたか、來い／＼。」と。呼べば犬ども尾を振りかゝる。「エ、蒸暑いが、外へ出づれば極樂の西風、エ、忝い。」と涼む間に二郎兵衛、積み重ねたる染地の日野絹、壹反解いてくる／＼、身も頭も眞白に引包み、くゞりをぬつと飛び出づれば、「なう悲しや幽靈ぢや、幽靈よ／＼。」と逃げこみ門

にきさを遣りませう。」「ム、それが定なら誓文立て。」「來月は母の七年忌、此の頃取越し致したこの母を、奈落に墮しませう。」と、跡先知らぬ誓文の、ひとつは罰も當るべし。「オ、出來いたく。此の家久しい重手代、由兵衛と張合つて、勝つて負けといふもの。何事も貞法が美しう濟まして遣らう。二階へ上つてもう寢め。」と、戸棚の錠前しととおろし、「阿房めが、おきさ許りが女房か。あの樣な洒落者より、おむくむく〱の手いらずを抱かせうぞ。南無阿彌陀佛々々々々々。」とて、奥に入る心殊勝に哀れなり。二郎兵衛夢とも誠とも、氣もうつとりと成りけるが、「さもあれ、かの手形隱居の破つて捨てしとや、今やぶつたは何ぢや知らぬ。」と取り出し合はせて見れば、「南無三寶、七貫五百目上本町の家質の手形、この晦日に元利殘らず相濟む筈、はあ〱。」はつと明いたる口も、何に塞がん身の罪科、一災起れば二災起る。雨雲の空恐ろしく、よろめく足もと、判の破れを引寄せて、合はせて見繼いで見て、繼ぐに繼がれぬ命の難儀、「どうも生きては居られぬ。死ぬるとも生きるとも、きさは離さじ離れじ物。」先づこの家を脱殼の、ひよろつく足を踏み留め〱、表へ出づる中の間の、合の戸密と明けければ、竹が帳蚊に丸裸、蚊を燒く紙燭明々たり。「エ、邪魔な、爰を通らば咎むべし。ア、如何せん何と扇子の一煽ぎ、はつと消ゆれば、「ア、悲し、憎の風めや火を消した。今宵一夜を蚤と蚊に、この肌を手向けるぢや。可惜物を、久三でも、おぢやらいで、二郎兵衛殿とおきさ殿、挨拶見れば

られうか口惜しや。どうも私は堪へまい。」と、無念涙は目にあまり、袖を喰ひ切り我が身を摑み、身を慄はして歎きしは、心底道理にむざんなり。「いや申す程お主への慮外、兎に角元の戸棚に入り、彼奴が致した通り、錠を卸して下されませ、直に牢へ參らば、これ今生のお暇乞、御恩を報ぜぬ段は御免あつて下されませ。」と、這ひ入る所を引き出し、「やれ恩知らずの物知らず。」と、腹立ち涙の隙よりも、「十二の歳より飼育てし、二郎七の昔忘れたか、三日にあげず煩ひて、とても用には立つまじき、『去なせ／＼。』と人毎に、言はぬ者もなかりしを、此の婆一人情をはり、在所へ戻さば死ぬるは定、眞の慈悲とはこの事と、十八の春まで呪禁よ藥よと、孫子にもせぬ世話をして、四郎右衛門にも物入させ、漸うと人になし、朋輩どもも嫉む程、人に勝れ目をかけしに、牢櫃に入る時、『菱屋の婆が阿房盡し、盜人飼立て親方は眼病なり、身代あけるも知らぬ。』と、四郎右衛門まで誹らせても、おのれが一分立てたいな。御堂のあさじ參りにも、女子ども起して苦勞かけては後生にならぬと、おのれ許り連れしに、明日より朝じに參られず、願ふ後生も願はせぬ、淺ましい氣が附き初めた。この家に馴染で犬でも猫でも、貞法はむごいめが見ともなく、可愛さにこそ口たゝけ。この上にも我を立てて、おのれが情を情にたて、死にたくば戸棚へ入れ。」と、泣いつ威しつさま／＼に、慈悲心餘る涙の意見、後世に入りたるしるしなり。二郎兵衛聞き入れて、「や御尤も／＼、今合點參つた。思ひ切つて由兵衛

お耳へ入れずに濟む樣に賴み上げまする。あの眞直な旦那殿お心の蔑みが、首切らるゝより悲しい。」と、隱居の膝を戴き〳〵、疊に喰ひつき泣き居たり。「やれその言譯はおのれが心の料簡よ。主の腰の巾著あけ、屋内の鍵を盜み取り、このだいそれた言譯が、でんどでそもや立つべきか。由兵衞が我儘な手形とは見たれども、其の場は其の日の亭主方、無興とおもひ其の手形は、とうに破つて捨てたぞや。きさめと己を夫婦にして、末では世帶に躾けんと、この年寄が苦に持つたも、かう破れては水の泡、何ほど慈悲がしたうても、理を非には曲げられず、目の明かぬ主と由兵衞などが言ひ立てては、朋輩どもも氣がふれて、跡で人も遣はれず、おのれに不便もかけられず。思ひ切つてきさを由兵衞にやれ、時には四方圓くなり、其方もこゝに勤めよく、主の恩も送らるゝ。おのれが心持ち次第、池田の姪の中にても、女房には事かかぬ。きさを遣るか何樣するぞ。」と、我が子に意見をする如く、叱りつ泣いつ割り口說き、二郎兵衞も只泣き入つて、暫時返事もなかりしが、「一々のお詞聞き入れぬは、畜生に劣る二郎兵衞なれども、あつと申して御恩はよも送るまい。元服を致したものを、丁稚よりなほ押下げて、さしもない事言ひ立てに、踏まぬ許りに擲ちたゝき、蟲でも堪忍なりがたき、無念を凌ぎ參りしも、お家のお蔭で一日も、きさと一緒に住居をせば、由兵衞が面を踏み返した同然と、思へば今日の奉公も、心まめしう勇みしに、やみ〳〵ときさめを渡し、こりや見たかといふ面が、見て居

ア貞法様奥へござつてお寢み。我等も明日早々、久三も表を能うしめて、夜さとに寢や。」とて出でければ、欠伸を直に、「あゝ。」といふ。返事眠たき夜なか聲、二十三夜の代待や。門の通はまだ四つ、內は靜まる燈火も心も細く三重更けにけり。物の憐れ深きこそ、後生願ひの心なれ、人も寐入りて貞法は、寐覺の牀を起き出でて、戶棚のそばへ差足し、「こりや二郞兵衞いきずりめ、聲聞き知つたか阿房め」と、こと〳〵と敲かるれば、地獄で地藏に逢ふ心地、「ア、かみ樣かお恥かしや、庖丁でも薄刃でも、柄を脫いて戶の閒から、密と入れて下されませ。お馴染だけのお慈悲ぞ。」と泣く聲漏るゝ許りなり。「ヤレ死ぬる程の性根で、さもしい事を爲るものか。」と、袖を覆うて錠鍵の、音せぬ樣に戶を開けて、「其所へ出をれ、町人といひ年寄の婆なれど、薙刀でなりともおのれが首は切つて遣らう。」と、わざと詞をあらゝかに、叱られてしよぼ〳〵と、這ひ出づる帷子も、汗にひたりて時の閒に、顏も瘦せたる慘らしさ。流石子飼の主心、叱る心は脇へなり、思はず淚を流さるゝ。二郞兵衞顏ふり上げ、「貞法樣面目も御座りませぬ、お主の罰。」と許りにて、礑と俯伏し泣きけるが、「御存じの通り今までに、一錢掠める我等でなし、氣も違はねども恥かしや。きさと懇致せしを、由兵衞めが妬にこみ、何がな見出さう〳〵と、文言知れぬ手形を書き、きさ親子に判をさせ、旦那のお手に入りし事、いかにしても覺束なく、この手形取らん爲ばかり。戶棚の內で微に聞けば、旦那のお耳へ入らぬとやら、何卒

許り、顔を眺めて居たりけり。貞法鍵を腰につけ「四郎右衛門はもう寐てか、旦那に聞かせて兎も角も、思案が有らう。」と有りければ、由兵衛先づ町代を呼びにやり、宿老殿へ知らせて、町中、「提灯、繩よ棒よ。」と犇けば、奥より「由兵衛々々々。」と、手を叩いて呼ばはる。「あい。」と答へて奥に入れば、四郎右衛門小手招き「次第とつくと聞届けか。子飼と思ひ肌を免し、扨も〳〵憎い奴、灸の間に鍵取るは、恐ろしい仕方、さりながら俺が聞いては難しい。夜中にわや〳〵町内の外聞もよからず、外へ物さへ散らずば、おれが聞かぬ分にして、濟まし樣も有らうこと。何いうても夜が更ける、二郎兵衛めは籠の鳥、その分で戸棚に置き、きさめは今夜請人の、姉めにきつと預けてやりや。せいては粗相も有るもの、とつくと分別して見よう。女房子供が恐がらう、直に出見世に泊らしや。手代どもも向ひへ、母者人は爰へ來て、お寢みなされと申して、其方も歸つて明日おぢや。必ず何にも穩便に宵の内にみな寢さしや。」と、蚊帳に入れば、由兵衛元の所に立出で、夜中に旦那のお耳に入り、眼病に障れば如何、何事も明日の事、これ長兵衛權兵衛、大儀ながらこのきさを、請人の姉女夫に、急度預けて直に出見世へ往つて寢や。サアきさ立て。」といひければ、「まうしかみ樣參ります。私が身は構はねども、二郎兵衛に科の無い段は申譯の有ること、おへ樣へもお取成し萬事賴み上げまする。盜人の名を取り、是れが悲しう御座んす。」と、わつと泣き出し送られ行く、目もあてられず不便なり。「サ

まする。日頃は恨みも有る筈を打捨ててその詞、生々世々まで忘れませぬ。一生の内この御恩、どうしてなりとも送りませう。どれ鍵貸さんせ明けましよ。」と、取り付けば押退け、「ヤアうまい事いやんな。何時ぞ〳〵と今まで釣られたは何十度、この以前貴樣が津山玄三殿に奉公した時から、惚れて居たこの由兵衛、是非思ひを晴らさうなら、そなたの口へ手拭捻ぢ込んで、寢る術も知つたれども、それは戀とは云はれぬ、此の戸棚が明けたくば、此の首尾につい一寸、身を汚して下されちよつと一寸。」と、取り付けば突き放し、遁げて廻れば追ひ廻し、抱き付く所を、「あな面倒な。」と突き倒し、「由兵衛の生畜生、文言知れぬ手形に、能う判をさしやつたなう、いま其方と寢たらば、何ぢや戸棚を明けてやらう、忝い嬉しい。それが嫌さに此の苦勞、いひたくば言や大事ない。二郎兵衛殿と此のきさと懇を仕て居る、戸棚の中には二郎兵衛、私も科は脱れぬ。靡かぬ仇に訴人しや、生畜生の死畜生。」と所存極めし涙の體。由兵衛聲をたて、「ヤア若い衆は出見世にか、盗人が入つたぞ。久三や竹は宵の口、何所に居る。」と呼ばはる聲、貞法始め長兵衛權兵衛、皆跣足にて驅け付ける。由兵衛威丈高になり、「これ御覽あれ。旦那衆の腰を離れぬ此の鍵を盗み出し、あの如く簞笥を明け戸棚を明けし所へ、身が來るを見て戸棚の中へ逃げこんだ、所をしやんと錠を卸した。中に居るは二郎兵衛、手傳ひは此のおきさ、證據人はこの由兵衛。」と出來し顏の腕捲り、きさは涙に性根もなく内外の者ははつと

主の目を晦ませば、胴が慄うて恐ろしい。誰ぞ來るか番しや。」と、合はせて見たる簞笥の鍵に、あたるも地獄の錠前を、明けて捜せど衣類の外は、三原の合口時代の印籠、箱に入れしは蓮如樣の名號。「ハア合點のいかぬ。手形箱は何時も土藏へは入らぬが、戸棚に入つたか知らぬ。」と、常に覺えし戸棚の鍵、何の苦もなく戸を引明け、捜せば一通上書に手形と有り。「サア忝い。之が欲しさの狂亂。」と、戴き〳〵二つ三つに引裂き、懐中に捻ぢ込んで跡しまはんと爲る所へ、「門を明けたは誰ぞ。」「だんない者。」と由兵衛、上り口までつか〳〵と、影を見るより二郎兵衛戸棚の内へ這ひ入れば、きさは前にひつそうて、「ハア由兵衛殿か、上らしやんせ。」と後手に、そろ〳〵戸棚を鎖しにける。由兵衛とつ〴〵と見澄まし、「旦那は灸をなされたげな。」と、つゝと上つて、「こりやなんぢや、大事の鍵どもとり散らし、簞笥の口も明けて有る。これおきさ退きや、この世間物騒に、戸棚の錠は何故おろさぬ。さらば鍵も腰につけ、錠をおろして置きませう、ヤアしやんとな。」とおろす錠の音、内に響けば消え入る心地、きさはわな〳〵〳〵〳〵と、直に死にたい許りにて、前後にくれてぞ見えにける。由兵衛きさが手をむずと取り、「これおきさ、先度舟へ石打たれた其の疵がこれまだ治らぬ。此の打人が知れました。今宵旦那の戸棚へ入つた盜人と同人。定めて此方も助けたからう。戸棚を明けて沙汰なしにして遣ろか、旦那の耳へ入れうか、此方の心一つぢや。なんと〳〵。」といひければ、「手を合はせて頼み

おへ様かみ様旦那樣、三人の外介さまへさへ持たされぬ。何時ぞ序にかみ樣頼み、文言見たがよいわいの。」と、いふ所へ四郎右衞門、「何ときさ二郎兵衞、艾がまだ出來ずば、向ひの出見世へいて、女房共にもひねつて貰へ、更けぬ先にしまひたい。どうぢや／＼氣がせく。」「あい／＼灸も皆出來ました、御勝手に遊ばしませ。」「そんなら爰で斯う向いて、それ二郎兵衞菓子盆、あられ煎豆山椒に、小蒲團敷け。」と、袷くるりと灸のばゝ、前を後に目は見えず、何をせうとも頷いて、くすり／＼の灸ばし、癡話の便りの薄煙、十四の灸に水が涌く、盛りの女盛りの男、手をしめ身を撫で口を寄せ、誰を忍ばんさしも草、これぞ因果の皮切りなる。漸う灸もするゑ卸す、主人の帶の前巾著、後へ廻る紐とけて、繫ぎし鍵に巾著より、半分こぼれかゝりたり。二郎兵衞見つけて、簞笥に指さしきさに目くばせ、天の與へと取らんとす。きさは、「嫌ぢや。」と手を振れば、「大事ない。」とて頭ふる、手をふる頭ふるひふるひ、手を出し手を引くから猫の、熾をいらふ危さや。「申し旦那樣、熱くばちと押へましよか。」「いや熱うはないが精がつきた、よい加減におきたい。」「ま少とでござんす、それまちつとぢや／＼、そりやよいわ。」と鍵引出せば狼狽へて、箸の灸を取落す。「熱や／＼／＼、もう／＼これでしまはう、奥へ往てちと寢よう。二人ながら休んでくれ、能う仕てくれた過分な。」と、惡事と知らぬ主の慈悲、仇となつたる身の果ての、冥加に盡きしも道理なり。二人は顔を見合はせて、「鍵を取りは取つたれど、

茶臼形になるを見て、おきさも呆れ、「いつそ泊つて御座んせ。」と、佛頂顔に二郎兵衞、艾に火をつけ庭の隅、卜庵が雪駄の裏、物は試と煽ぎ立て、煽ぎ立ててぞ燻らする。呪詛は理外にて、卜庵氣にや徹しけん、これは不思議千萬、俄に宿へかへりたい。もう往にましよ、滅多に往にたうなつて來た。」「ハテまちつとお遊びなされませ。」「いや／＼俄に往にたうなつて足の裏がこそばい。」と、疊に足をすりつけ／＼降りければ、二郎兵衞雪駄をちつくと直し、「まうし卜庵樣、旦那の眼も直りませう、灸が早う驗きました。」と、いへども我が身の上とは知らず、「オヽ卜庵が名人御覽あれ、一炷で驗が見えましよ。」と、足の踵のきび惡げに、雪駄擦らせて歸らるゝ。「サア旦那の出られぬ間に、手形の文言早う聞きたい／＼。」「さればいの、文言は何樣やら讀んでも聞かせず。宛名は菱屋四郎右衞門樣、貞法樣、親子が印判しました。」と、語れば二郎兵衞はつと驚き、「エヽ由兵衞めが文言を聞かさぬは曲者。娘きさを由兵衞殿へ遣はさうと書いたやら知れぬ、日頃そなたに心を盡す由兵衞め、何樣こけてもうぬが爲のよい樣に書いたは定。三田の親仁も粗相な、手形の文言吟味なしに判するといふ樣な、これ後の邪魔とは其の手形。どうぞ手形を盜んで破つて捨てたいものぢや。」といへば、「ア、苟且にも盜むといふは恐い／＼。」「ハテ錢銀の手形か慾德になるにこそ。朋輩由兵衞との色づく、旦那に損德かゝらぬ事。何時もあの簞笥に手形ども置かるゝ、鍵はそこらに見えぬか。」「何のこゝらに置かれうぞ。

やぞやむごいぞや。先度から染み〴〵と、物いふ間も無いゆゑに、心底が語りたさ、傍へ寄ればぴかしやかと拗言の有るじやう、安堂寺町とは何事ぢや。ア、嫌らしい〳〵。これなう誰しも此方の年輩では、十六七の振袖を好きこのむ最中に、四つも五つも年嵩の、私に惚れて下された。私やその心に打込んで、親兄弟も捨てたぞや。在所は生まれ古郷なり、兩親の傍に居る物が、往きともない筈はない。何の由縁に大坂に、執心はなけれども、此方といふ人に離れるが悲しさに、お主を欺し親に背き身を狂はす心を、可愛やともいはずに面白さうに拗言。コレ死んで見せうか死に兼ねは仕ませぬ、二郎兵衛殿。」と抱きつき、聲をも立てず隱し泣き。二郎兵衛もしを〳〵と、「こらや〳〵。」と背なかを撫で、共に涙を流せしが、「シテ先度の手形の文言は、何樣ぞ〳〵。」といふところへ、卜庵奥より立出づる。「ヤこれはもうお歸りなされますか。」「されば歸らうか、まそつと遊んでやいと行の相伴せうか。やあえい。」と、煙草盆ひき寄する。二人は艾拵へながら、此の首尾に語りたし。早う去ねがな〳〵と踠けど去ぬる氣色なく、「何と灸行言ひつけはなかつたか。冷麥か索麵か、なまなか茶漬位なら、いつそ戻つて寢てくれう、內證知らしや。」といひければ、きさは悅び差心得、『旦那さまは毒斷で夜食はあがらず、卜庵樣へはつい茄子の淺漬で、茶漬進ぜ。』と內儀樣の言付、早う歸つて御寢なつたが、增しで御座ろ。」と誑せども、「何ぢや茄子の淺漬ぢや、一段よからう、それに出花をつけたらば。」と、

破つてもだんないか、それは何樣して打破る。」「まづ此の樣に打破る。」と、槌振上げて打盤を、とんとん〱、「何處やらの男とよそ〱の女と、渡らぬ先にとん〱〱と、んとん。」とぞ打ちにける。重手代口々に、「やい〱ほたえな。それ向ひの出見世から、旦那のわせる見えぬか。」と、いふ所へ四郎右衞門は、眼病に毒とは知れど渡世の世話。「何と仙臺の注文は仕舞うたか、秋田の荷を積んだらば今橋へ往て銀請取りや。ヤァト庵老はまだ見えぬか、ト庵が見えたら灸をせう、女子の手が藥ぢや。きさにするゑて貰はうし、二郎兵衞に手傳ひさしよ。手のふるはぬ樣に仕事しまへ、殘りの者は出見世へいけ。」といふ所へ、「物まう、澀川ト庵御見廻申す。」と、つゝと入れば、「ヤァお出でか待ち兼ねました、先づこれへ。」と上座へ通せば、ト庵、今日は二十三夜なれど、一向宗はお構ひない。明日から八專土用前、一段とようござろ、どれ脈を見ませうか。私の申した通り、藥喰ひをなさるゝか、ハァいかう脈が良うなつた。卵を參る驗に、左の脈がふは〱と打ちまする。ム、魚の中にも鯔などは大溫の物、兼て無用と申した、よもや喰ひはなされまい。右の脈があたまがちなは、もし擂粉木などは參らぬか。風氣もなし點を致さう、硯々。」といひければ、「奧で點を賴みませう。これきさ、二郎兵衞油火燈して艾をもみ、先づ二三百ひねつて置きや。」と、打連れ奧に入りにける。「あつ。」というて二郎兵衞、行燈燈しつ土器あぶり、艾出して揉まんとするを、きさはたち寄り胸倉とり、「これあんまりぢ

て、阿房くさい振舞が戻つた。御座れ戻ろ。」と立ちあがる。「オ、其方はせめて振舞を喰うたが、此方は物入ふるまうて、あげくにしたゝか踏まれた。向後振舞致すまい。御馳走が身のひしや、酒盛つて尻踏まれた。」と、獨言して　三重　歸りけり。

中之巻

本町や新物店の若い衆は、女とも見えず男なりけり、女子交りの針仕事、つい一針が永き世の、緣の端縫しどけなく、尻も結ばぬ絲櫻、綻びかゝるうたてさよ。二郎兵衛は在所より戻つた顔して二三日、仕事は常より精出せども、きさにすね言ねすり言、乾反し直し上下を、盤にかけて打ちけるが、「エ、これは糊加減の悪い袴ぢや。よそ〳〵の人の心の樣に、彼方へはひつたり此方へはひつたり、移り易い胴根性。なうおきさ殿、此方が頓てかみ樣の肝煎で、安堂寺町へ嫁入の時、この袴を聟殿に著せたらよかろ。その晩に石打たれて小鬢先割られぬ樣に、抱き締めて居さつしやれいの。おきさ殿やいのおきさ殿う。」「オ、かしましい、おりや聾ぢや御座らぬ。これこの私が仕立てる布子も、誰やらが氣によう似て、なんぼすぐに縫うても、横へ〳〵といきをる。聞分の無いものは、此方に似合ふ著さつしやれ。私等が氣には入らぬ。」と言へば、「ハテ氣に入らずば打破つてのけたがよい。」「ム、打

無三寶、こりや何樣ぢや、目出度過ぎて目が出た。」と、抱へてこそは歸りけれ。猶も續けて打つ石に提灯も打破れ、由兵衛も敗亡し、「おきさに心有る奴が、てんがうかはくに紛れない。船頭船をやつてたも、久三おぢや。此奴めを踏んでくれう、任さつしやれ。」と上るを見て、二郎兵衛よこへきれてぞ三重歸りける。由兵衛久三大汗にて、「何方へうせたく。」と、橋へ廻れば年輩なる浪人侍、髭奴の草履取何心なく來るところを、「うぬ覺えたか。」と久三郎、奴を橋へ横投に、眞甲を四つ五つたゝみかけてくらはする。主人これはと立歸り、久三を摑んで打ちつけ、踏みつけく踏む所へ、由兵衛驅けつけ、「ヤア爰にけつかるか、よう舟へ石打つた。」と、摑みつく手を確と取り、「何さ石打つたとは誰が事、慮外者め。」といふを見れば歴々のお侍。「ア、御免なりませ。人違へで粗相致しました、御免されて下されませ、御慈悲で御座る。」と泣き叫ぶ。「何のお慈悲。」と捻ぢ上げ、向脛を俯向けに礑と蹴返し、「これ奴、腸の出る程此奴踏め。」「任せておけろ。」と土足にかけ、「うなよく身を打たせたナア、覺えて居ろ。」と胴骨尻骨うんと踏めば、「きやつ。」といひ、眼玉も出づる許りなり。「もうよいわく、死なぬ程にしておけさ。此方へ來い。」と主從は、悠々として歸りけり。命からく由兵衛、あ痛くと起き上り、「久三其所にか、」「ェ、聞えぬぞや。今の樣に踏み居るを見て居やる筈は有るまい。」「ャ此方が聞えぬ、此方故に最前くらはされたり踏まれたり。ェ、振舞喰うた許りに、言はれぬ人の肩持つ

一言邪魔させまいとの、手形が取りたい物。」と差込めば、貞法打頷き、これは由兵衞がいふ通り、手形を取つて置きたい。」「それでも父様無筆なり。明日でも私がかみ様へ、手形して上げませう。」と、辭退する程由兵衞、「否々たとへ無筆でも、判がなくば筆の軸、手形は我等筆取る。」と、煙草盆の硯ひき出し、はや書きつける提灯の影、二郎兵衞見すまし聽きすまし、「ヤア彼奴が勸めて手形させ、かみ様賺してきさを貰ふ分別。この判させては一大事何とせうぞ。石を打つて提灯を打消してのけんと、石を尋ぬるその間に、手形の文言思ふ通りに書き濟まし、これ宛名は菱屋四郎右衞門様、貞法様、親の印判くろ〳〵と、「サァおきさ我が身も判を据や。」「いや私は印判持ちませぬ。」「そんなら父が裏判を。」と、同じくするて、「貞法様いよ〳〵賴み上げます。」と差出せば、「オヽ〳〵これでは此方も如才がならぬ。」と、珠數袋に納むる内、二郎兵衞溝の石をあげ、由兵衞目がけて打つ石が、舳板に當つて一はずみ、川へざんぶと水散つて、由兵衞一絞り。「そりや暴れ者が石うつわ。」と、立ち上る所を續けて打てば、由兵衞が額に當つて、「あいたしこれは危し、皆々屋形へ。きさも乘つて戸を閉ちや。」と、無理無體に舟に乘せ、「親仁も早う去なつしやれ、怪我さつしやれな。」といひけれども、「否々これは目出度い。きさが嫁入の談合に、石打とは吉左右、目出度う御座る。」といふ小鬢に、はたと當れば、「南

方の荒働き一年と續くまい。身に藝もない事か、銀の涌く手を持つて居る、二百目近い給分を、唯の女子にかこうか。廣い大坂に男養ふ商賣とはあれらが職、五人三人は針一本で、樂々と過す手を持ちながら、山家在所へ煩ひに往かうとは、無分別かと思はるゝ。この談合は取りおいて、きさはこの貞法にとんと預けて置いてたも。此方の内にも子飼の者躾る者がたんと有る、善い壻取つて後々は、親達も大坂へ呼ぶ樣に仕て遣らう。」と、念の入つたる割り口說、由兵衛扠はあのきさを、我等へ隱居の心當、日頃の念願成就と、「これ親仁、隱居樣へ任せて在所は變改したがよい。この由兵衛も旦那の蔭で、安堂寺町に手も廣う商賣し、手代の一人も遣うて今日のやうな振舞に、二兩三兩遣ふも皆親方の光。まだ女房を持たぬはかみ樣へ、とんと任せて彼方の媒妁待つて居る。かみ樣のお心で、此方と私が壻舅に、成るまい物でも御座らぬ、なうきさ左樣ぢやないか。」と、いへどもきさは胸塞がり、「ア、何樣やら知りませぬ。」と、打傾きて居たりけり。太郎三郎一々に聞き屆け、「きさめが申した分では、さら／＼胃の腑に落ちませぬ。かみ樣のお御意で發起致した、御尤も／＼。親方の躾けらるゝと申すに、先は幸ひ一門中、何の仔細も申すまい。この上にきさめが緣付は、何樣なりとも。もうお暇。」と立たんとすれば、由兵衛分別顏にて、「これ貞法さま、これは大事の請取物。おきさも若い人の事、後日のもや／＼喧しし。ちよつと親子に手形させ、きさが緣付貞法樣のお指圖背くまい。外から

これへ見えませう。私が口の合ふやうに、在所の嫁入をお止めなされ下され。」と、つど〳〵語る下心、二郎兵衛は合點にて、「あの言分は我故、男に親を見返る心中者め。」と、材木に抱付きぞく〳〵悦び居たりける。親はとほ〳〵尋ねつき、「菱屋殿のお船はこれか、きさが親三田の太郎三郎で御座ります。」「ヤア親仁殿か、それ酒進ぜ茶進ぜ。」と、取り〴〵挨拶ありければ、「否お茶もたべました。定めてきさめが話でお聞きなされませう、在所でなづけの方より、急々に欲しいと申すにつき、中途ながら一生の身の固め。道理立てゝお暇取れと申せば、在所へは往くまい大坂で男を持つと申す。夫れは我儘親のいひ條を背くかと、叱つても聞き入れず『俺が男は内方の、かみ様次第に任せてある。是非とも親のこうげんに、在所の男持てならば、おりや死ぬるが合點か。娘殺そといふ事か。』と大聲上げてほえまする。お主のお慈悲に御意見を頼みます。在所の聟と申すも、喰ひ兼ねぬ身代、行きをれば彼奴が果報。世帶佛法はら念佛、口に食らふが一大事。彼奴が食ふは違うて、大坂の男に喰ひ付いたかゝやい、其處な虚氣者。在所の男ぢや大坂の男ぢやとて、食ふに二つの味はひなし。一人の娘に親の身で、もむない男を食はさうか。エ、親の思ふ程にもない。」と、涙を流し恨みける。おきさも流石親心思ひやれども、二世かけて交せし事も捨てられず、「唯かみ様のお情を、頼みまする。」と許りにて、同じく泣いて居る姿。貞法も不便さに、「親仁の言分理が聞えた。さりながらあのきさが病者で、在所

上べには、手のない樣に仕立口、在所はいかな横堀の、知邊の許に隱れ居て、暮るれば其處へと通路の、仄かに見ゆるあの舟の屋形には、貞法樣おへ樣、舳には安堂寺町の由兵衞。「ヤアこれならぬ、はづしませうありや何樣ぢや、菱の提灯久三が持つて、跡から來るはおきさぢや、樣子が無うては叶はぬ筈。」と、氣ももやくつて蒸暑さ、材木納屋に立隱れ、事のやうをぞ窺ひける。きさは程なく走り寄り、「これは〳〵皆樣今日はお慰みと、只今久三の物語、私が氣色もしか〴〵とは無けれども、かみ樣おへ樣へ、頼み上げます御訴訟事。直にこれへ參りしも、ァ、おとましい事出來まして、一倍氣合に當ります。」と、溜息吐いて居たりけり。貞法も熟見て、「此方へ訴訟の事有りとは、どうした事ぞ話して見や、成るべき事なら聞かいでは。」と、さも懇の詞の末。「ァ、お馴染とて忝や。昨日の暮方三田から私が父親登られ、幼少い時から在所で、約束しおいた男の姑の煩ひゆゑ、急に嫁入を急いで來た。此の度お暇申し請け、三田へつれて歸りて嫁入さすとの申分。御ぞんじの通り私は幼い時より大坂に育ち、手いたい事は仕付けず、殊に病者な身を持つて、在所の手業が何として、それ故當座の間に合ひに、内方のかみ樣が御懇に遊ばし『きうこうなした若いものども數多の中、一つにして此の大坂で、物の見事に躾けて遣らう。必ず外へ約束すな。』と常々のお詞。これが反古になる物か。在所へとては歸るまいと、私は申します。それでは親の一分が立たぬと、いうての親子爭論。多分

れが好きの心中を語らそもの。」「オ、さればいの。せめてきさが居たらば、祭文を聞かうもの。」と、いへば由兵衛興醒顔、「ム、二郎兵衛は母親の年忌に當り、在所へ參ると申したが、きさも一緒に二郎兵衛と連れだつて參つたか。」「ア、つがもない、きさは此の頃風ひいて頭痛がするとて宿へ往た。」と聞きもあへず由兵衛、「エ、内方も此方等が居た時分と違ひ、自墮落になつたなあ。靑二歳の二郎兵衛め丁稚上りの分として、「母の年忌で候。」とて、此の忙がしい最中に、十里近い法隆寺へ、うせざまが氣に入らぬ。殊にきさが煩うて宿へ歸つた時分に、同じ樣に家を出で、碌な事は仕出すまい。」と、滅多無性に一人腹、人も知らぬ心を苛ち、船辨慶に有らねども、知盛が沈みしその有樣に、又由兵衛がしんきをもやし、舟端蹴たて杯踏みわり、前後を忘ずる許りなり。菱屋一家の人々は、何の心もつかざれば。「早日も暮れた、最早これから歸らう。」と、上り支度を由兵衛、「危い事は些とも無し、提灯用意致せし。」と取り出せしが、「南無三寶、蠟燭を忘れた。これ久三、大儀ながら一走り、此の通りの百貫町、四五丁往けばおきさの宿、定めて知つてで有らうぞ。由兵衛が申す、蠟燭一挺貸してたも、些と氣色がよいならば、ちよつと爰まで出てたもと、いつて同道しておぢや。序に内に氣をつけて、誰もないか見廻しや、早う／＼合點か。」「心得ました。」と帶もせず、繻絆一つの裸身や。百貫町へぞ走りける。昨日今日前髪取つて下手代、未だ新物の二郎兵衛おきさとふかき中入の、南京綿の

やくちやくあらや橋、跡へはんなり入花の、茶びんご橋はこちく\。」と、寄せよく\濱際の、瓦町橋にぞ著きにける。菱屋介五郎は如法なる氣も丸額莞爾に、「申し婆様母樣、この永日の馳走ぶり、亭主由兵衛さぞ草臥れ。暮も近し、これからお上りなされ。」と有りければ、隱居の貞法七十三、眼鏡いらず杖つかず、齒は一枚も拔目なき、男勝りのかみ樣にて、「オ、それく\これ由兵衛、念の入つた馳走でいかい慰み。此方の内から出た人が、店一軒の主に成り商賣もしにせて、親方一家を振舞ふとは、此方ともくわいけい※其の身の手柄、さりながら女房が無ければ、人の世帶は落付ぬ、身代藥の女房をはやう持つて落付きや。さうでないか。」と有りければ、内儀もともにうち笑ひ、「何故に女房持ちやらぬ。但し何所ぞに思入れがな有るかいの。」由兵衛思ふ圖に乘りて、「誠に今日はお心ようお遊びなされし忝さ、其のうへ女房の事までお尋ね、御意の通り些と思ひいれ御座れども、この女房がいきやすうていきにくい。どうでかみ樣おへ樣の、お口を借らねば參らぬこと。」「はて此方とがいうて濟む事ならば、肝入らいで何とせう。その思入れの名は何といふ誰ぞいの。」由兵衛殆んど笑壺に入り、「ヤア有り難い忝い、三度禮拜仕る。名を申せばつい御存じ、されども先づ唯今は、お名をばえ申すまいよのしやんく\。サアこれからが本酒、亭主から又はじめ。憚りながら介樣へ、お肴に瞽女殿一節頼む。」といひければ、介五郎杯うけ、「申しかゝ樣、二郎兵衛が法隆寺より戻つたら伴れて來て、あ

續く者がないわ扠。」「それ何故に。」「鹽物町のしたゝるたる、然も藝には骨が有るといの。」「桂木常世は江のこ島とよ。」「なぜ〳〵。」「ゑのころころ〳〵、抱き寄せて手飼に愛らしや。」「扠又嵐三十郎かつを座橋とおじやる。」「心はの。」「何の料理に遣うても仕立しが甘いわ扠。」「櫻山庄左衛門福島ぢやとおしやる。」「心はの。」「小體なれども張り詰めて、舞臺一杯かさも有り、藝に身も有る口中の、しより〳〵したる雀鮓、それで蓼穗の何所やらが、ひりゝとする。」とぞ答へける。「音羽二郎三を雜魚場とは。」「鰭が有るとの譬へかや。」「上村吉彌は伏見堀ぢやとおしやる。」「義理はの。」「舟板町の舟板の末には沖に乘出し、帆を十分の印とて、今から人や焦るるといふ事。」「扠市村玉柏梅田橋と見立てたり。」「それ何故に。」「はて渡れば色町越ゆれば火屋、濡れにも憂ひにもようつるわ扠。」「杉山平八を四つ橋とはこれどうぢや。」「江戸からも京からも四方へ引釣り引張つた。踏んばたがつて山村が、くわつと擴げた兩足は、百間堀を思ひ出す。善惡二つを嚙み分けて、六義を糺す柴崎に、思案橋を思ひ出す。篠塚二郎左を見る時は大佛島を思ひ出す。三代續く奴風、嵐が風俗を譬ふれば、その江戸堀を思ひ出す。嘉十郎が貌付に炭屋町を思ひ出す。敵は三原重太夫、序にて作りし惡心の、切で返報のくる時は、猪喰屋橋思ひ出す。思ひ出し〳〵陳ね行く、先づ是れまでが片おもて、裏の御堂もたか〳〵と、立賣堀を漕ぎ廻し、辨當濟まば椀家具も、釜もち

二郎兵衛
おきさ　今宮心中

上之巻

音頭えい〳〵〳〵えい〳〵、月見花見は何所も同じ。諸國名所のその中々に、類なにはの舟遊、老いも若いも下人も主も、男女がござ〳〵船に、袂涼しき川風は、秋といひても譃でないよの、じやれでないよの本町橋を、漕ぎ出で見れば天滿川、市の側なる初甜瓜、買うて冷してひいやりと、瓜を二つに打割れば、似たりや似たり燕子花、紫帽子河水に、映らふ影を水汲が、汲んで擔うて持ちや桶の棒、坊主頭を振り立てて、道正坊の金柄杓、あれ〳〵撫でて通れば一撫に、はや本復の伊丹酒、茶舟で下る樽肴、在所嫁御の里がへり、上荷で送る葬禮や、世の有樣のさま〴〵を、一時に見る舟遊、これ常になきお肴と、ひとつ勸むる杯や。諸然れば※舩のせんの字を、公にすゝむと書きたり。船の屋形に三味彈けば、納屋に油の臼を引く、橋のいよ此の橋のうへにて賣る聲は、「煙管團扇煙草入、役者評判扇賣、浪花藝者の風俗を、橋々名所に擬へて、書き集めたる藻鹽草、伊勢をの海士に有らねども、そのはま荻野八重桐を、龜井橋ぢやとおしやる。」「心はの。」「先はおたびの神かけて、跡先に又

び上り、跳ね上りたる淀鯉の、瀧壺より涌き出づる、白銀黄金の鶏寶、時は勝鬨悦び時、五畿内五ヶ國神々に　先づ願ほどきに　三重悦びの、幣帛をあげ神樂をあげ、參り治まる八幡山、此の難波津の惠方神、民安全こそめでたけれ。

淀鯉出世瀧徳　終

七、女房は死ぬる親はなし、一人の弟は相果つる。雲のうらを尋ねても、お主より外世の中に大事の人はなきものを、隔てて下さる旦那殿恨めしう思ひます。」と、どうど伏して泣きければ、吾妻を始め亭主親子町内近所の者までも、誠の心を感じつゝ皆々涙を流しけり。勝二郎飛んで出で、「ア、過つた過つた。斯樣な身と成り果てたも、其方を踏んだ下人の罰と、かねぐ悔み歎いた、藤五郎を弟と知らいで吾妻が殺したも我故ぞ。主故に身上潰し其の體となつたを見て、此の勝二郎がいかに畜類なればとて、見ても聞いてもゐられうか。死ぬるにも死なれもせず、とても情に其方が、此の足にかけ以前そちを踏んだ樣に、勝二郎を踏んでくれ。一つの罪も脱るゝ爲、さりとては新七某を踏んでたも。」と、足の下に背中を向け、手を合はせて泣きければ、吾妻は縋つて、「弟御の敵は私、刺し殺して下さんせ、どうも生きては居にくい。」と、歎き悔む聲々。新七は飛び退り、「ア、勿體ない冥加ない。新七と思召すが定ならば、御夫婦心を全うして、出世を見せて下さらば、踏み殺されても大事ない。」と、三人顔を差寄せて、聲をはかりに泣き居たり。斯かる所に八幡の神主紀の太夫より、御吉左右の早飛脚、いきり切つて案内す。「そりや吉左右とは悦ばし。」と、狀箱開くも疾し遅しと、封じ目切つて拜見す。「何々江戸屋勝二郎事、家來新七數年の歎き感じ思召され、關白左右の大臣御憐みに依つて、八幡の本地舊のごとく返し與へらる、追つつけ歸宅あるべき。」と、讀みも終らず八拜九拜悦び躍り飛

前に新七を恥かしいと思召さば、御身代は潰れませぬ。まづ斯う有らうかと存じたゆゑ、様々の強意見。新町橋でお足にかけられ、踏まれながらも御意見は、親旦那の御恩の送りたさ。女房お半はお身の上を苦に致し、氣病を煩ひ去年の春終に空しうなりました。彼めも元は御家來、お主を苦にして相果つるは、下人たる者の本望、聊か悔みも致さばこそ。親旦那のお蔭で少しのもとで家屋敷、在所龍田の親どもも餓ゑ凍えぬ程なれども、否々お主は流浪の身、家來の安樂道ならずと、家屋敷田地まで賣代なし、有銀十八貫目御覽の通り。我が身には碌な布子も著ぬ體ながら、親旦那の十七年忌は内證で、お前から遊ばすと申しなし、恐らく江戸屋の追善と笑はぬ程の法事を致し、御出世の願ひの爲京都公家方、折々の付屆け油斷もなく、殘る金二百兩いとしや吾妻殿、新町の殘金ゆゑ此の所に勤めと聞き、御兩人の氣を思ひやり、弟の藤五郎が請出す分で沙汰なしに、お二人一緒に置きましたれば、貧苦の中のお樂しみ、高いも低いも親たる身の悦びといふ此の悦び、お前の御機嫌よい顏を、草葉の陰の親旦那に、見せましたい心ざし、御奉公の仕納めと存じ立ちたる所に、藤五郎は吾妻殿の手にかかつて死んだか、でかいた〳〵。此の新七はお主のため心ざしの奉公はしたれども、一命の奉公は其方に劣つた、兄に優つた忠の者。これ〳〵御亭主、只今申す通りに虚言はない、兄が言分ないと云ふ證文を致すからは別條は有るまい、それとても是非處の作法下手人を取るならば、水いらずに此の新

れば後より、摑み立つたるその寒き、寒風肌も縮み胴ぶるひ、半死半生の手負、のり返つて、「うん。」といふ、聲に驚き階子より、ばた〳〵どうと落緣の、隅に屈んで顫ひ居る。手負は惱み苦しみて、續いて階子轉び落ち、呻く聲に妙慶親子、家内の男女我も〳〵と驅け出で〳〵、「ハァ南無三寶藤樣を切つたは、切り手があらう。」と、爰彼處尋ね探して緣端に、「人こそ。」と引出せば、「これは〳〵吾妻殿、それ取放すな縛れ括れ。」と立騷ぐ。「いかにも切るも私が切る、金も私が取つたからは、氣遣ひしやるな逃げはせぬ。」と、尤ちきような白狀。「まづ〳〵龍田の一門衆兄御の方へ、注進をぬかるな。」と、追人を走らせける。勝二郎は約束の時分過ぐると紙子に股引、直に丹波の旅出立にて來て聞けば、吾妻が客を切つたと町のもやつき、つゝと入つて、「これ〳〵亭主。身は江戸屋勝二郎と云ふ吾妻が男、何科なりとも同罪にしてくれ。」と、座敷にどうど坐しければ、吾妻は泣いて目も明かず、「無分別なことをして、思ふが仇となりました。」と、顏をさげてぞ居たりける。町の役人龍田より走り歸つて、「手負の兄御只今これへ御出で。」と、いふを見れば古の手代新七木綿布子も物さびて、「御免あれ。」と座敷に入り、主從顏を見合はせ互にはつと驚く中、勝二郎赤面し、「面目なや恥かしや、其方に顏は合はされぬ。」と、兩袖を顏にあて、蹲りてぞ隱れける。新七恨みの兩眼に涙を浮め大聲あげ、「エ、聞えませぬ旦那殿、我等に顏を隱さるゝは面目ないか恥かしい。コレその恥かしがりが遲かつた、五年以

せ。」と、言へどもふら〳〵居眠りながら、「はて一夜でもお客の中は、弓矢の禮儀はづさぬ。」と、言ふ中に脇差の柄を膝に押へて、「いかう更けたに休まんせ。」と、言へども柄には氣もつかず、「明日御見なりませう、鹽茶を飲んで寐てくれう。」と、脇差の鐺を持つて立つ程に、柄は殘れど下は見ず、目は空鞘をぶらさげて、ぶら〳〵勝手へ入りにける。「ア、〳〵有り難い神佛の宛行か。」と、戴き〳〵ひつそばめ、立つて見ても後より、又誰ぞ來る樣な、危さ恐さ右左、足もすわらぬ行燈の、我が影に吃驚して、わな〳〵ふるふ箱階子、ぎし〳〵ぎし〳〵鳴る音も、耳にこたへ胸にしみ、氣を押へ息をのみ、漸く惱み登りつき、溜息吐いたる女業、我が身ながらも興覺むる、藤が臥したる北枕、いとしや科もない人をと、恐ろしながら脊に腹、胸先にうち跨ぎ、切先さしあてどうど乘る。乘られてふつと目覺す。「これ〳〵〳〵聲立てまい、此方に怨みも罪もない。假にも惚れてくれた人、殺したうはないわいな。殺さるゝ此方より殺す我が身が悲しい。」と、涙は刃に傳ひしが、「なう生けて置いては請出して、女夫になるが情ない。私には大事の男が有る、其の男と緣切れる戀路の仇となる故に、今刺し殺す、懷の小判も貧な男に遣りたい。殺生の罪盜みの罪男の爲につくる心、すこしは恨みを晴れてたも。」と、又はら〳〵と泣きければ、得心やしたりけん叶はじとや思ひけん、目を塞いで返事もせず。「サア只今。」と、ぐつと刺し、止めまでは手も弱り、其の儘捨てて懷の、小判を兩の袂に入れ、階子下る

め殺さうか、いや緩りとする間はあるまい。煙草で燻べ殺さうか、醉うて先へ此方が死なう。何としてよからうぞ。鋏でも剃刀でも鐵物がな。」と、座敷中を差足し、うろ〳〵うろ〳〵尋ね廻り、「ヤ思ひ付いたぞ火燵の火箸、火に燒いて喉笛を貫さば、刀も同然。」と、蒲團をあげて手を入れ、「熱や〳〵。」と懷中の、袱紗に持ち添へ陸奥の、韓紅の錦木や、枝珊瑚珠と燒き付けたり。「嬉しや冷めぬ間に。」と立上らんとする所へ、仁三郎が母妙慶、「吾妻樣まだ起きてか。」と、によろ〳〵來れば肝潰し、袖の陰に押隱し、「ハァかみ樣か、私も早休みまする。冷めぬ間にこな樣も目の覺めぬ間に暖かに、熱うして寢やしやんせ。」と、狼狽へ挨拶跡先なり。妙慶更に氣も注かず、「お前は果報なよね樣や。郭で繁昌しつめて間もなう根引の松樣、千年も萬年も藤樣との御中覺めぬ樣に遊ばせ。其のいとしらしいお氣立では覺めまい〳〵、明日お目に懸りませう。」と、辭儀を陳べて立歸れば、火箸は氷と成りてけり。「エ、いはれぬ長口上、燒きなほさん。」と、蒲團あげても火燵も冷し。「エ、阿房らしいなんぼう覺めぬと言やつても、炭火までも冷めきつた。」と、吹いつ扇いつ氣をせく所に、二階より仁三郎醉醒の長欠伸、客の脇差持ちながら、目をすり〳〵階子をおり、「ヤァ吾妻樣爰にか、扨醉ひました。」と、下に居る吾妻脇差に心づき、「それは藤樣の腰の物、こなさんも先づ氣の通らぬ、客の刃物預るとは渡り竝の客のこと。藤樣とは女夫に成り、明日請出さるゝ今宵となり、心中はせまいし其の儘置いていかん

夜は更くる、もう分別は無いところ、そなたも死にやおれも死なう。」と、若い同士は氣を嗜み、死を先だてて涙を隱す、歎きの色こそ哀れなれ。吾妻死身と胴を据ゑ、「これ申し勝二郎樣、死ぬる覺悟に極まらば、死なずに免るゝ思案あり。こなさんは先づお歸り、內を仕舞うて夜中過、八ツの時分に又ござんせ、金調へて置きませう。其の金持つて丹波へ退き、來年私を年前に、迎ひに來て下さんせ、心安うて出らるゝこと。早う往んでくださんせ。」と、囁けば勝二郎、「それは至極の才覺、其の金は借るか貰ふかどこから出る。」「はてそれは構はんすな、惡い樣にはしませぬ。早う往んでござんせ。」とせがめば頷き悅んで、「これぞほんの丹波越。」と、不道化言うて忍び出づる、氣の愚かさも育ちから、憂き事知らぬ印かや。吾妻はほんの出來心、ふつと言うたは言うたれど、これからが大事の思案、火燵の櫓を談合柱、お腹の痞だく〳〵と、胸にをどるを擦りさげ、二階の客を刺し殺せば、明日の難儀を脫るゝ德、金を取れば勝二郎樣のお爲になるこれが德、是れ程よい事有る物か、足元によい思案、こけて有るのが見えなんだ。殺して退かうと思ひ立つ、目の前ばかり脊中を知らぬ、女の智慧こそ果敢なけれ。夜は何時ぞ臺所は、夜中を告ぐる鼾も有り、更け行く儘に恐氣立ち、膝の慄ふを踏み締め踏み締め階子の口から覗いて見れば、客は醉うて前後も知らず。仁三郎が浮氣酒いき倒れては性根つかず。「サァ仕濟まいた。」階子三つ四つ上つて見て、「ヤァこりや何で殺さう刃物が無い。帶を解いて絞

かす。奥二階より手を敲き、「禿衆吾妻樣呼びましや、吾妻樣々々。」と呼ぶ聲す、「それ人が來る、アア辛氣、どこへがな、これ〳〵火燵へ隱れさんせ。」と、蒲團を明くれば勝二郎、「此の夏爰の芝居へ、竹本が弟子が下つて重井筒を語つた。サアこれから夕霧代つて重井筒火燵の段、北濱邊のよい衆は火燵に水を入れまする。紙子一枚の我等とてもの事に、火刑になりたい。」と、蒲團とつて引被る。仁三郎二階より障子をあけて、「申し〳〵吾妻樣、只今暦を詮索すれば、明日は天赦鬼宿日、萬事揃うた大吉日、銀はお身に附けてなり、なに不足ない上は、善は急げ明日の朝、目出度う郭を出します筈、その用意なされませ。飲まうぞ〳〵、大きな物で飲んでくれう。」と、障子引立て入りにけり。火燵よりむく〳〵起き、「今のはなんぞ。郭を出すとは善か惡か氣遣ひな、聞きたい。」と氣をせけば、「サアされば、夫れ故胸を痛めること。先度の文にも云ふ通り、龍田の藤が事いの、作病發して振つて見つ、色色飽かるゝ工面して、退く樣に仕掛けても煩惱の犬かして、爰の妙慶挨拶にて請出す談合極まると、聞くから胸が騷ぎ出し、今に心が落付かぬ。どうした物で有らうやら、最早智慧にも能はぬ。」と、泣くばかりこそ力なれ。勝二郎も泣き出し、「扠も〳〵惡い事も續けば續くものかな。五年以前に在所を出で、無量のつらさに遭うたれども、諦めつ慰めつ心で埒を明けたるが、命かけたそなたを人の物になす悲しさ。二百兩といふ大敵には、弓鐵砲も叶はぬ。」と、齒を喰ひしばり歎きしが、「左右云ふ間に

厭なり、言はねば惡し。罪深い事ながら、今の間にあのお人の、身に妨げも出來よかし、此の病が募れかし、今夜の夜が常闇と明けずにあつてくれよかし、身請の時が延ばしたいと、科なき天にも難をつけ、歎き怨むる世のつらさ、我が身ながらも淺ましや。」と、とんと伏して泣き沈む、涙も階子を傳ひけり。通ふ心や格子前、耳にこたふる謠の聲、謠「一度は榮え一度は衰ふる理の、誠なりける世の習ひ、住み所求むとて東の方に、吾妻々々。」と、謠ひ忘れた顏つきで、我が名を呼ぶは知つた聲と、行燈の影から表を見れば、戀しゆかしの勝二郎、飛びたつ樣に懷しさ、表には人目あり、それから廻つてかう〳〵と、指で敎へて招かれて、小暗がりをば密と拔け、つゝと通れば縋りつき、「なうよう來て下んした、逢ひたうてならなんだ。」と、しつかと抱きしめ泣き居たり。よい衆の果ての流石にて、貧苦を貧苦と思はばこそ。「此の形を見てたも、思へば〳〵不算用。そなたの身を賣らする程ならば、三百兩もして遣つて、うりへぎの百兩も手に持つたがよい筈。大坂の親方へ二百兩渡さねば、井筒屋の太郎左衞門と約束の義理が外るゝとて、差も引もなうきつと堅う、二百兩に賣らさいでもだんない事、此の鈍さから此のつら。何にも德は無けれども、坂田藤十郎が夕霧をま一度見たいと思うたが、此の紙子で手夕霧を仕る。太夫又逢ひに來たわいの、サアそなたも爰で泣きや。」と言へば、「ア、泣く分は夕霧に負けはせまい。」と泣きければ、男も心しを〳〵と、「可愛や〳〵。」物眞似に誠の涙を紛ら

詰め、今ではどうも下りはがない。總じて鯉と言はんすは勝二郎樣故かいな、あのさんは八幡の人、八幡に鯉は有るまいが、合點がいかぬ。」と言ひければ、「それならば今日より、ごんぼ樣と申さうか。よねさまに牛蒡はいかゞ、ヤア夫れも大事か、かゞの牛蒡と云ふこと有り。そんならいつそう毛牛蒡さま、追付旦那の引拔きごんぼ、目出度いごんぼ。」と座をもてば、「エ、憎い口や敲きごんぼに仕たいぞ。」と、二階下るゝも勇まねど、うはべ許りの笑ひ顔、言うて泣くより猶辛し。藤も彌機嫌よく、「今日は嬉しい事揃へ、第一そなたの氣色もよし、仁三親子の働きで身請の埒が明いたぞ。懐中した金子を里に殘いて、そなたの身と兩替して、一兩日に吉日極め、立田へお供仕る、サア〱二階で酒々。吾妻はこれのお袋へ、よう禮言うて跡からおぢや。仁三此方へ。」と手を引いて奥の二階へ上りける。吾妻はつとけてんして、「夢見た樣な事どもや。根引にするの請出すのと、取りしづめもない僭上は、十人が十人で思はれたさに言ふこと、どこで帶さへ解かぬ身によもやと思ひ、賴みまするると僞りしを、先は正直喜んで、はや談合が極まつたか、扨も胸をついた事。誰にどうと談合せん、勝樣からは便宜もなし。サア今でも出ると云ふ時には、泣き口說いても叶ふまい。其の際にならぬ先、とんと打明け云ふたらば、義理詰に詰められて、思ひ切らるゝ事も有る。」と、階子半分上りしが、「いやいやひよつと言ひ出し、先に呑込みない時は、勝二郎樣のお爲まで取返しのならぬこと。ア、言ふも

れば、氣が變つて達者になる、そこに氣遣ひない事。これに付いても一刻も早う請出したい、四年の年を三年遣ひ、ま一年の所を元金の二百兩で請出さうと言ふからは、親方も不足ない所。エ、親子の衆が無精な、餘所へ取られて、此の藤が一分立たず死なねばならず。今日は金を突きつけて、是非共詫びて貰ふ思案、耳を揃へて懷中した、これ袖口から手を入れて、譃か實かこれ見や。どれ〳〵、ホウホウ〳〵可愛らしい小判女郎。」「これは嚴い詮索。扨油斷とお恨みなさるれど、前髪もある私が親程な山城屋、算用だても申しにくし。母妙慶を遣りまして、割つつ碎いつ言はせてさらりと埒を明け、只今お知らせ申さん。」と、硯引きよせ墨をすり、鹿の巻筆妻戀鹿、「鹿は春日の藤樣め、果報者め金持めあやかり者め。」と騷ぎける。「それは大慶、先づ吾妻に逢ひたい呼うでたも、何所にぞ。」「いつもの二階にござります、これ林之介、吾妻樣呼びましや。」「吾妻樣太夫樣、林之介。」と呼ばはつても返事もせず。「これはどうぢや又例の勝二郎といふ淀鯉を、思ひ出して泣いてかな。鯉が付いて居るさうな、鯉なら煎餠まいて見よ。」「いや手拍子を打つて見よ。」「心得。」たん〳〵たん〳〵たんと手を拍てば、心浮かねど身の勤め、悲しい顏を見せまいと、態とにこ〳〵わさ〳〵と、二階の口に立つを見て、「そりやこそ鯉が現はれた。杯をさしみにせう。爰へちよくと御いり酒、甘い事ぢや。」と喚きける。吾妻二階に腰かけて、「これ仁三樣たんと口が上つたの。あんまり鯉々言はんすな、鯉も瀧へ登り

となからざらし、縱横沙汰を聞きふれて、戀の大和の色好み、吉野の花も振捨つる、三輪の索麪喰ひ付いて、買ふ人あまれど賣る日は足らず。中にも龍田の藤と云ふしなだれ男纏ひ付き、揚屋も諸分吉田屋の仁三郎を定宿にて、二階を一間に宛てがはれ、命有りたけ、首尾有りたけ、金有りたけと勤むれば、四天王の名取をも、今の吾妻が下に見て、獨武者とぞ流行りける。藤も在所に稀男吾妻に深く染附の龍田や沖津白波の、太鼓も連れず今日も又、通ひ木辻の吉田屋の、「仁三内にか、ヤアよね樣たち歴々のお寄合。おてき樣の待合我等が座敷へも、少と貸して下されかし。」と言へば薫、小紫、「珍らしい藤樣の外の女郎をからんすか。男の心の一筋に、脇へふれぬは、傍から見ても憎うない物なれど、こなさんと吾妻さまとは餘りで小腹が立つ。しんきのわく程羨ましい、見ぬが增しぢや、戀のめんめん稼ぎぢや。」と、はら〳〵立つてぞ入りにける。仁三郎忙がしげにしよこ〳〵と立出で、「ヤア藤樣いつから爰に御鎭座。手でもお敲きなされいで、夢にもしらがの母者人藤樣のお出でぢや、吾妻樣の御氣色も今日は心よささうな。申し醫者の名も起緣のもの、始めは西の京の道へんと申す醫者の藥で、どうへんに有つた所を昨日から、三條の元喜と申す醫者で、めつきり元氣が見えました。御祈禱を本服院息災法印を頼みませう、銚子々々。」と手を敲く。「これは〳〵吾妻が氣色よいとは、あたまで善い事聞き初めた。さりながらあの病氣は、彼の江戸屋勝二郎が昔を忘れぬ物思ひ。根引に此方へ取つた

に匂ひ炷きしめて浮舟にかげろふ、紅梅竹川橋姫に手ならひ、我が名ゆかしきあづま屋でこれ樣の忍び寢、世も忍ぶ人目も忍ぶ道芝に、駕籠かるすべも白妙の、晒干すてふ槇の島、はんま千鳥も友を呼ぶ、我は伴ふ人とても、なき顔隱せ笠取山、隱すとすれど心なや、宇治の川霧たえ〲に、あらはれ渡る網代木の、川瀨の水に袖ひぢて、互に影をみづ鏡、やつれさんしたやつれたぞ。唄離れ〲の、あの雲見れば〱、明日の別れが思はるゝ。つらき我が身はいろはの文字よ〱、袖に涙のゑひもせず、木の葉散りぬる木幡の里、徒步でこれほど行くことも、初名月や一口、堤づたひの長繩手、續く里々山々も、皆近付の山なれど、今日の憂き身は心から、さぞ見ぬ顔と袖覆ひ、袂を覆ひ笠覆ひ、空を覆へば冬の日の、いとゞ短くはや暮れて、夜は長池の水の泡、水の澱みに我もとて、よどみ休らひ明さるゝ。

下之卷

奈良坂や木辻も戀の札所にて、女郎屋揚屋三十三軒、昔の京の八重櫻、九重薰る小紫、小藤をこゝの四天王、續く勢こそ無かりけれ。哀れや吾妻は義理合の、金の契約もだされず、此の里一番名の高き山城屋といふくつわへ、中年四年二百兩、命がらりに身を賣りて、大坂の埒は明けたれど、又傾城

初もめん

あづま
勝二郎

唄 春の夜の夢驚かすくだかけの、其のしだりをの結ぼほれ、とくる思ひはいつかはと、いはで心にかこち草、根引にせんと言ひ交す、身は捨草の捨てもせで、浮名は流れの淀川や、何をたよりに水鳥の、波にゆらるゝ世の習ひ、疎きは人の情なり。廣き世界は廣けれど、京や浪花の住居さへ、せき留められし水車、月の影さへくる〳〵と、彼方此方に汲みわけられて、行けば丹波路戻れば大和、行くも戻るも二人連、女夫烏のとぼ〳〵と、昨日の閨の花紅葉、今朝ふる霜に朽ちそめて、身をこがらしの森の下道、憂きしほ踏むもあぢきなき、馴れし故郷の草も木も、今の名殘を留めかね、まて〳〵と啼く吉原すゞめ、よしみ〳〵の言の葉に、魅され渡る狐川、仇に暮せし年月の、榮花は夢の杯の、醉醒め枕。唄 其れは若草身をうらみ草、何の其方にあいだてはなし、飽きも飽かれもせぬ中の、戀と命が寶寺、昔の里の寐覺には、伽羅で暖む牀の内、起き別れゆく曉の、袖から袖に手をいれて、出口の風も寒からず。今の憂き身の旅寝には、ぢつと寄せたる肌と肌、吹きわけて吹く山おろし、麓に立てる女郎花、りんき辛氣と艶きて、くねる心の男山、いとし男を古の、世に引返せ弓八幡、神に暇と伏しをがみ、東を見れば名にも似ず、諸 月こそ出づれ朝日山、山吹の瀬に影見えて、大黒舞 渡つた渡つた光君の渡つた、夢の浮橋六十帖を渡り詰め十帖と詠じた。一に一夜のお情の夕顔の若ばえ、二

金子は中受けまい。親祖父の貯へを、冥加も知らず遣ひ捨て、金の罰が當つて金銀に疎まれ、手ぶりになつたる我なれば、此の度きつと身を懲らし、一錢得難しと云ふ事を、我が魂に思ひ知らせ、貧苦の修行の稽古の爲、金銀とては貰ふまじ。さりながら服部煙草煙草入、煙管の餘計あるならば、一本所望申したし。」「ア、お安いこと〳〵、煙管のらうは細くとも、お心を太うして心中などあそばすな。」「いやるがくどい、不足なうて死ぬるこそ、ほんの誠の心中なれ、金に詰つて心中する勝二郎でない證據、藥も少々貰ひたい。」「實にこれは御尤も。懷中至寶の一包。」藥屋は命堅い石見の掾。」と祝ひければ、遣手の杉が太夫樣へ花色繻子の前巾著、人參いれてお餞別、仲居の初は延紙二折、ちよつと假寐もあるものと、あぢな所へ氣をつくる。駕籠の衆の仲間から、三尺手拭抱へ帯とて進上す。「これはかの五尺いよこの手拭と、歌に謠ひし手拭か。」「これは又加賀菅笠、しめをあらくと召しませとよ。」「げにも誠の志。」さまが土產の菅笠と、踊に踊りし笠よなう。」それは吾妻の花嫁子、これは吾妻が身請の果て、腰をよぢらす供もなき、紋日の夜牀引きかへて、禿もつかぬ草蒲團、夜見世の太鼓音たえて、山崎寺の鐘の聲、早こう〳〵と響けども、我が迎ひにはいつ來うぞ。お二人まめで中ようて、隨分無事で御座舟で、迎ひに參る男山、八幡の弓の弦きれず、便りを待つぞ待たるゝぞ。さらばさらばと泣く聲ばかり、耳に殘りて面影は雲に消えけり。

勝二郎を先にたて、兩手を引張り聲をかけて、追ひ拂ふは忌々しくも、三重凄まじし。憂き事知らぬ若子樣の氣を奪はれ、性根をとられ、起きつ轉んづ足たたず、橋本の宿外れ、三國境の板橋にこそ著きにけれ。荒けなき聲々にて、「サア此の所より追放す、京大坂淀伏見堺をそへて住居叶はず、背くにおいては見あひ次第に討捨て。何方へも失せをれ。」と、口々罵り歸りしは、硫黄が島に捨てられし俊寛僧都も斯くやらん。往來の人も目を明いて、泣かずに通る人もなし。役人歸れば驅け付けて、「これ私ぢや吾妻ぢや、不慮な難儀が出來ました、さりながら大事ない。命が寶、袖乞非人の身となつても二人一緒に居る上は、たんのうではあるまいか。くつわへの出入も爰なお人の男氣ゆゑ、御苦勞かけずに埒明く筈。樣子は靜かに物語る、悲しむ事も何にもない、けくで浮世が面白い。」と、笑うて見せて力をつけ、涙を隱せば顏をあげ、「委しい樣子は聞かねども、太夫が殘銀埒あくとは、井筒屋殿の親切、なまなか禮は申さぬ。エ、面目ない此の勝二郎は、下人の罰が當つた。大賢人の新七が意見を用ゐず勘當し、身の仇となる惣兵衛めに魅され、新町橋で新七を足にかけて踏んだる罰、忽ちあたつて此の仕合。身のさきゆきのする事は今生で思ひ切つたぞ。先の事は知らねども、先づは此の世の暇乞と思うて損のいかぬ事。何れもさらば。」と立出づる。井筒屋袖を引止めて、「何方へお出でなさるゝにも、當分の御入用、路銀の餘り少分ながら御懐中。」と差出す。手を付け一寸戴いて、「志は千萬兩、

曲がない情ない。くつわの譯が立たぬとて、再び郭へ立歸り、身の恥は扠置いて、勝二郎樣の恥辱はこれが何と雪がれう。こなさんの請合は私が命有る限り、微塵も難儀はかけますまい。新町ばかりが傾城町であらばこそ、京の島原奈良伏見、茶屋風呂屋へも身を賣つて、見事に分は立てませう。世に落ちようがどうしようが、勝二郎樣の女房になる程の吾妻ぢや。じめんづくに賴むからは、雫もこれに僞りない。再び新町の勤めをのがれ、勝二郎樣の一分立てて下さんせ、これ手を合はせて賴みまする。ほんに〳〵此のよな事降り涌かうとは夢にも知らず、伊勢兩宮へ太々神樂、愛宕淸水住吉樣へ金燈籠、八幡樣へ萬燈其の外神々宮々へ、鳥居立てての何のとて、金のいる事厭はずに、神佛への約束も今では違へる身と成り果て、人間どしの遠契約は騙りの樣にも思はんしよ、夫れが悲しうございす。」と、歎き侘びたる口說言、眞實見えて哀れなり。揚屋もさすが只者ならず、「よい〳〵二言と御意なされな、義理詰になつてきた。茨木屋の手前は此の太郎が請取つた、手形一枚なされいでも、今の涙を手形にして、お前を愛で手放します。お身をどこぞへ片づけて、二百兩お立てなされませ。契約お違へなされても、此方からは尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ、これから互の心底づく。」と、きれはなれたる詞の末、「それは定か有り難い、胸がちつとは開けた。」と、伏し拜みてぞ泣き居たる。時に向ふの堤の上、大勢人の喚く音、追放人の作法とて、八幡公文所の役人數多、手々に割竹大地を叩き、

に置くとて、何とやら申す位たかいお公家樣の姫君を、勝二郎が嫁に呼ぶ其の物入との言立、その公家樣のお袖判を僞判し、金の取手はよみ人知らず、大内方より御詮索。科人は惣兵衞一味のあひずり十人あまり、粟田口にて獄門にかゝる筈。手代の業とは言ひながら、名指す所は勝二郎、存ぜぬとは言分立たず、金銀財寶山田畠、京大坂方々の家屋敷まで取上げられ、著の儘での御追放、何所をしやうどにござらうぞ。腹の内から今日まで、荒い風にも當らぬお身、嘸や途方があるまいと、思へばいとしう存じます。」と、語れば一度に手を拍つて、呆れ果てたる其の中に、吾妻一人の物思ひ、「とかく私が不仕合。」と、餘の事言はず泣き居たり。井筒屋も溜息つき、「お笑止とも氣の毒とも、いうた許りでせう樣なし。太夫樣は先づお歸りなされませ、殘金二百兩は八幡の馬おりに請取る筈。惣兵衞とつうくつ致し、茨木屋をば私請合ひ、手形の上で今日お供仕り、斯樣の御難儀出來の所、うか〳〵八幡へ參つても、貳百兩の金子誰から請取り申さんやら。お笑止ながら太夫樣を茨木屋へ渡しませねば、我等が手形消えませず。世間にぱつと知らぬ內、早うお歸りなさるれば、私が爲と申し、太夫樣もお首尾よし。サアお歸り。」と言ひければ、吾妻、「わつ。」と泣き出し、顏をも上げず居たりしが、「むげない言分して下さんす、歸れなら歸れで濟む。歸れば吾妻が首尾よいとは、さうした吾妻ぢやないわいな。可愛い男の流浪したのを聞きながら、身の首尾を思ふ樣な傾城ぢやと思うて下んすは、

郎と云うては、石火矢でも崩れまい、長者の家と云うたれども、咸陽宮も亡び時、一時の間にいとしぼや、彼も言はば金故、なまなか持たぬ我等しき、寐覺が樂ぢや。」といふ跡から、「科は何ぢや知れぬが、勝二郎は追放で八幡は煮える、おりや見て來た、百兩や五十兩は彼でも取つて退かうか。」「なんのいの編笠さへ被せぬもの、請出された吾妻とやらはどうなる事ぞ可惜もの、やすうて此方へ貰ひたい。」何の彼のとの悪い沙汰、口々言うて通りけり。吾妻ふつと耳に立ち、「太郎樣今のはどうぞいの。いやな沙汰でござんす。」と、氣遣ひがれば供の下女、駕籠の者まで色違へ、辨當持も首さげぢう、喉に詰りし餡餅の、案に相違の顏付なり。井筒屋も氣にかゝれど、氣落させじと、「これ〳〵粋の樣にもない。あれは人の法界悋氣、太夫樣を見知つて、氣遣ひかけて面白がる嫉みで皆言ふこと。ぎえん直しに酒にせう、毛氈敷け。」と勇んでみても、どこやらさまが明樽の、底の心は澄まざりけり。「あれあれ彼處へ泣き〳〵走つて來る人は、勝二郎樣のお草履取、佐五介ではないかいの。」と、言ふ所へ佐五介息もきれ〳〵、「なう太夫樣、ひよんな事が出來ました、私や何と致しませう。」と、泣いて詞も無かりけり。「扨こそ噂に違ひはない、ちやつと樣子を話してたも。泣いて居てすむ事か、きつと性根を附きやいの。」と、叱られて涙をとめ、「事の起りはみな惣兵衞め、旦那をいとしい〳〵と吐いたは己が慾。お金には御一門の封が付いて自由にならず、結構な茶入かけぢお家の寶黄金の鷄まで、京で質

ぢや、思案ある。」と驅け出づるを、女房すがつて「思案とはどうぞいの、短氣を出さずと待たしやんせ。」と、引留むれば、「しや緩慢い、最前に惣兵衞め斬り損うたも女房ゆゑ。短氣も短慮もいる事か、思案は此の胸にある。」「サア其の思案が聞きたい。」「いやこれ許りは儘にして放せ〳〵。」「思案聞かねば放さぬ。」「くらはするが放さぬか。」と、男思ひの女房と主思ひの男と、誠餘りて摑みあひ、女夫爭ひ犬くはぬ、犬の悋氣に威されて、辻の番太が夢くらふ、ばくろ町をぞ三重歸りける。請出すといふ其の日より、衣裳をも皆町風に、縫針の茨木屋より嫁入とて、聟は八幡の石清水、浴びせませんと井筒屋の、亭主は送る傍輩の、太夫天神餞別を、持たせ遣手の杉重に、樽の名酒を守口や、佐太の煮賣を見る事も、郭で成らぬ誰が點野に、紅葉たけ〳〵なべが茶屋、牧方楠葉これも又、吾妻請出す山崎見ゆる、そこで乘物たてにけり。吾妻乘物の簾をあげ、「これ太郎樣、最早八幡も近いげな。かねて鯉さま道まで迎ひに出やんす筈、そこを此方から先越して、によつと押しかけてはどうござんしよ。」「八幡太夫樣これはずんど洒落れませう。」「そんならとんと菅笠で、供やら主やらごちや〳〵は、面白かる。」〳〵飛びおりて、「ア、氣が晴れたわつさりと、嬉しや傍で山見たも、勤めの皮切堪へた故、憂汐ふんだは身のやいと。十四の冬より今年まで、それにしみたる風俗は、いかな家にも走り出て、お山見じと目をつける。上から下る魚荷の戻り、歩き〳〵の高話、扨々浮世は知れぬ物、江戸屋勝二

門詰も踏まされず取次申す者はなし。よしお屋敷へ伺候して、六尺どもが手にかゝり、打殺されうば殺されう、主從の冥加は忘れまいと、朔日二十八日には御門に禮して罷り歸り、さもなき時にも月の中に、二度三度臺所の口まで參り、傳手さへあらば、內證から申し上げんと存すれども、さりとは人は無情もの、古の傍輩も見ぬ顏し、目を懸けてひき廻した丁稚小者飯焚まで、詞を懸ける奴等もなく、馴染とて可愛や、白犬が見知つて尾を振つてしなだれる。犬に劣つた畜生共、恨むまいとは存ずれども、凡夫心の淺ましさ、無念でならぬ女房ども。」「エ、口惜しい新七殿。但し我々僻言ならば、親旦那の魂魄、冥途から蹴殺いて下されかし。」と夫婦は橋に平伏して、聲をはかりに歎きしは、不便なりける心なり。醉醒の氣は上る、ぐつとせいて勝二郎、「オ、親父までもない事、身が蹴殺いて見せんず。」と、飛び懸つてひつ伏せ、胴骨を散々に踏み付くる。女房、「これはお情なし。」と取りつけば、「其の儘おけ、手向ひすな。お腹の癒る程踏ませませ。」「オ、踏まいでおかうか、重ねて斯樣な慮外をせば、下々に打殺さする。用心せよ、駕籠持て來い。」と打乘るも、腹立紛れ譯もなく、後向くやら前向くやら、竪に乘るやら横堀を、急げ〳〵と走らせし、若氣の程ぞ笑止なる。新七は齒嚙をなし、「エ、〳〵口惜しい無念な。天逆樣の事にても、主に踏まれて恨みはない。傍輩の言ひなし故踏まれたと思へば、腸が燃え返る。」と、橋板敲き欄干も握り挫ぐ許りにて、淚に眼も眩みしが、「よい合點

を求め、お出入の醫者浪人、田地買うたり銀かして、分限になるが御存じないか、御懇の醫者はあれど、善し惡しを嗅ぐ鼻がきかぬ鼻缺醫者が、入れ殘しの目藥でも、お目が明かぬか情なや。此の新七めが親は大和の貧乏人、幼少の時藤川小平次と申した、狂言役者へ奉公やら養子やらに參つて、女形を致したを、親旦那のお蔭で、お家へ參り手代並になされしが、流石育ちが恥かしい。算用算勘存ぜねば、何を奉公御恩を送らう樣はない。律義を我が身の奉公にして、お爲にならうと存ずる一念、五臟六腑に染み込んで、お主を大事に存じまする。茂庵樣の御臨終に、『勝が事を賴むぞ。』「お氣遣ひなされな。』と請合うた效もなく、斯樣にお身を持ち崩させ、佛へ言分何とせう。お墓所へ參つても顏振りて、戒名をろくに拜みも致されず、涙に沈み居まするわいの。夫れさへあるに此の盆から、お前の言付けか、惣兵衛めか、私が若旦那の勘當の者、お旦那の墓へは參らすなと、お寺へ屹と言付け、插いた花も取り捨て、手向の水まで打ちあけて、未來に在す旦那にさへ、疎ませうといふ事か。お爲を思ふ新七が、左程お氣にいらぬは、水と火との合性か、餘りと云へば曲がない。さうではない若旦那。」と主の意見の恨泣き、詞を過し推參言ふ、涙は主の藥ぞや。勝二郎大酒の上、猶々氣にや障りけん。「ヤア意見言ふも所がある、途中に駕籠より引きずり下し、恥かかせて意見せよと、親者人の遺言か。サア此の慮外の言分があるか聞かう。」と怒らるゝ。「これ申し勝二郎樣、密かに御意見申さうも、

何が惡うて新七が御意見は御意にいらぬぞ、賴もしうないお主樣や。」と、涙を溢さぬ許りなり。實に酒の醉ひ本性忘れず、お半を突き退け、「因緣話おきをらう、新七めが意見聞きたうない。おれが親父はな一年に八千兩九千兩づゝ、三十年遣はれたれども、つひに浮名は立たなんだ。こちが身代で五百兩や千兩遣うたら何ぢや、ナア慮外ながら夫れを新七めが、遣ひ潰すの身持が惡いのと、一門一家町年寄莊屋まで觸れ步いて、藏々に封を附けさせて阿房者にしてくれた。忝いことの、何ぢやそちに心が殘つて悋氣ぢやあ、おけよ。尤もはじめは惚れて居たけれども、今新七めが喰べ汚して、裏までかやして喰ひさがいた物を、此方所望にござらぬ。ア、慮外ながら新七めが口ゆゑに、揚屋の屆けも無沙汰になり、若い者の一分を捨てうとした、此の恨みは盡きせぬ、勘當の上の勘當ぢや。サア駕籠やれ。」と乘らんとするを、新七飛び出で縋り付き、「お情ない旦那殿、何とて左樣に邪にお聞きなさるゝぞ。新七が御一分捨てたとは恨めしい、捨てまい爲の御意見。金の事は申さぬ、千兩が萬兩でも金程づゝの、お身につくお慰みが有るにこそ。惣兵衞めが計らひにてもがり共を太鼓につけ、十兩の物入を百兩に附立て、九十兩は分取にしてたはけにして笑ひまするが、此方は御存じござらぬか。吾妻殿の身請の金も、私お家にある時分、七百兩と申す金惣兵衞に渡した。其の上に此の度名物のお家の道具、京三界質に置き、二千兩餘の御借金が出來たげな。旦那には借金させ、手代の惣兵衞屋敷

昨日からの醉ひ醒めず、女郎の小袖を打掛けながら、舌も廻らぬ夢半分、「太夫爰まで送つてか、エ、かたじゆけ南京の八幡酒には醉はぬ。今のは兼平の能の手、木曾殿が泥田へ踏み込まれた所、謠末白雪の薄氷、深田に馬を驅け落し、引けども揚らず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えばこそ。こは何とならん身の果て、いやはあ、何と面白い事か。」と、ひよろ〳〵正體なかりけり。「申し旦那樣、これはどうしたお身持ぞ。お前のお蔭で榮耀する今夜の人も大勢あるに、お駕籠に一人附く者ない、これが江戸屋の勝次郎樣のお行儀とは言はれまい。私が男の新七にお暇を下され、お出入さへ止められたれど、眞實お爲になる者は、お家で新七ばつかり。御身上のかいをなす惣兵衞めと新七と、思ひ替へて下さんすはお馴染とも思はれぬ。其の上忘れはなされまい、前方私御奉公致した內、お寢間へ來いのお傍に寢よのと、人頼みまで遊ばした。私は一つも年嵩なり、若いお主を唆す、熊手よ慾よと言はるゝも口惜しく、奧樣お呼びなさるゝ時の、もじやくじやも如何と、お暇を乞ひましたれば、「心ざしを感じた、さりとは女子に奇特者。あの新七といふ者は、親茂庵不便をかけ我が子の如くせられて、兄同然の新七と夫婦にして一生見捨てぬ。」お約束、其の新七を追ひ出し、敵の樣になさるゝは、其の時から私を憎さに夫婦にあそばしたか。憎まるゝ覺えはなけれども、お心に從はぬ恨みを、杵であたり、杓子であたるお仕方か、但しは今にお心殘り悋氣ゆゑの憎しみか。夫れなればなほ穢い氣、

には何がなる。新七が言分なく身のあつさに切つたと、皆手前のふみかぶり。無念を堪へてお爲になり、親旦那樣の御恩を、送る心はないかいの。其の樣に短氣では、私や心元ない。」と、恥ぢしめ止むれば新七、「夫れも皆合點、理が非になるとは知つたれども、今の惡口聞かぬか。彼奴が此の前親旦那の惡性金を、十四貫目横取して曲事に遭ふ筈を、兎角おれが精力で沙汰なしに事濟んだ。其の時には命の親と手を合はせて拜んだ。それから十年たたぬ間に、少しも爲になりさうな、古い手代を嫉み出し、恐らく涼しい此の新七に無い難つけて暇出させ、旦那の身代空にして今の樣な雜言、伸し上つた頬見れば、火に入ることもおもばれぬ。」と涙を流すぞ道理なる。時に揚屋の上する女子下男、門番起いて、「ちと門を頼みます。これは此方の大事のお客、浮世小路までお歸りぢや。甚う醉うて御座んす故、斷り云うて内からお駕籠にめさせます、氣を通して下んせ。」と、言ふより早く門番、「皆まで言ふな合點ぢや。」と、潛り開いて目を眠るも、日頃の金の威光ぞかし。夫婦、「すはや。」と橋詰にて、駕籠の後前しつかと捉へ、「お駕籠待つて下され。」と、引留むれば駕籠の者、「ヤァこりや狼藉して、息杖の胸打を喰ふか。」と振上ぐる。「狼藉は致さぬぞ。旦那のお爲に致す事、打たば打て毆かば毆け。旦那へ一言申さぬ間は、駕籠をやらぬ。」「否放せ。」「否遣らぬ。」と捻ぢ合ふ勢ひ、駕籠を打明けて鼾ながらの勝次郎、橋板をころ〳〵〳〵川へ落ちんとする所を、お半ちやつと引起し、後を抱へて膝の上へ、一

張られ、夫れで顏が引釣つた西瓜の樣な顏なれど、色は黑實ずんと風味のよい男。神ぞ一切振舞ひたい。ホヽヽヽ。」笑ひて南へ歸りけり。暫く有つて「井筒屋の能が濟んだ。」と出入の者、兵法遣ひ座頭茶の湯者古道具屋、大酒食悦お蔭を蒙り八十末社。流石の郭駕籠きれて、雪駄片足の醉潰れ、遙かの跡よりのさ〳〵と、彼奴は手代の惣兵衛め、同道は佞人組能の師匠の富川め、京の浪人軍四郞、醫者はすれども本道守らぬ目藥師なんど、中にも惣兵衛かさ取つて「なんと、何れも旦那のはゞを御覽じたか、あれみな我等がさする事。とかく此の惣兵衛と肌を合はせ、羽交に付いて廻らつしやれ、一期の身代固めて遣らう。はて旦那の身上で、一年に千兩二千兩は筒落でも有ること、旦那を名代に立てては、どうくろめうとも自由なこと。かの新七のいきずりめ、お爲顏で旦那をひつめ、家久しい我等を押し退け、一人威勢を振はうと仕居つたを、旦那へ吹きこみまくし出してのけたが、聞けば大坂に狼狽へて、此の惣兵衛と※公事のみやのと吐すげな。あはれでんどへ出やれかし、五畿内をせいて見しよ。今の間に御器さげて心からの※非人敵討、どこぞでそこらの橋の下新七は居やらぬか。」と、口合惡口僣上はり、どつと笑うて通りける。新七どうも堪へられず、胸を擦り鎭めて見ても、律義一偏に眞直に一筋な若い者、末の事も思はれず、「切つてくれう。」と飛んで出る。女房抱き付き、「これこゝな人、女夫の者が世話やくは、勝次郞樣へ御意見申す爲ではないか。彼奴一人切つたとて、お主の爲

とぞ笑ひける。女房お半も手分をして、見はづまいの目もきよろ〱、立賣堀邊さまよひ來て、夫を小陰へ咳拂ひ、招き寄すれば新七合點、密と寄れば耳を寄せ、「なう今まで西口につけて居ましたが、爰へはまだ見えぬか。」と囁けば、「ム、よい〱様子は知れたぞ、まだ井筒屋に居らるゝげな。程は有るまいぬかりやんな、人が見れば不審が立つ。」と、一つ所に立ちもせず橋を越えたり渡つたり、忍び佇む女夫の姿、夜見世戻りが氣を付けて、「ヤァこつてりと味な事、よね狂ひよりあの方の實入がよからう。」といふも有り、「時分がら心中の下地か。又義太夫が口の端に、新町橋をかさゝぎの、橋。」と語りて行く人も、絶えて其の夜も更けにけり。「なう彼を見や、中から提灯引舟まじくら、禿が謠うて客送る。そりやこれに極まつた。そなたは駕籠に取りつきや。」「こつちへ任せて置かしやんせ。」と、大門際に待ちかくれば、「遣手のつなぢや、羅生門あけてたも。」と言ふ、茨木屋の大盡、鯉にはあらで、「雜魚場の人すゞ木様、明日駕籠の衆頼む。」「合點。」と、北へ走れば新七夫婦、なむ三枚肩見送りて口を明きてぞあきれたる。「それ〱そこへ又提灯、今度はよもやはまるまい。」と、潛りくゞるを手ぐすね引き、女房しかと引捉へ見れば色は眞黑に、横肥つたる菊石面、道頓堀の佐渡島傳八。はつとしらけて立退けば、傳八も膽潰し、これは君何し給ふ。人違へとは存ずれども、色に袖を引かれて、神ぞ忝う思ほゆる。ホヽ〱〱。賤も昔は戀をみがき、年中郭に入り浸り、太夫天神に引きつり引

とした人、まだこゝに遊んでか、どうでござる。」と尋ねける「ア、されば井筒屋のお客は、隠れもない、八幡の住人江戸屋の勝次郎殿、替名は鯉様。拾萬兩遣うても、こちとが百の錢落したとも、思はぬ程の身代なれども、新七とやらいふ手代、堅むくろにせいたうし、一門衆町所まで頼んで、土藏土藏に封をつけ、一歩の金も遣はせなんだげなを、惣兵衛といふ相手代、若い旦那の氣を詰めさせ、煩はせてはならぬと新七を追ひ出し、氣儘にぐわんぐわと遣はせる。鯉が生簀を飛んで出て、日比馴染の茨木屋の、吾妻をとんと請出し、明日は直に八幡へ。今宵郭の名殘ぢやと、井筒屋で大振舞。何ぢやは知らず井筒屋の、庭から門まで長持で通られぬ。今夜の物入ざつと積つて二百兩。扨も金は片いきな、有る所には有る物か。私等は夜晝あがいて三百は儲けかねるに、よう飲んだとて一歩取り、よう笑うたとて二歩取り、兩肌脱いでこそぐられ、鼻の穴へ胡椒入れて、くしやみしても一角。いかな鯉でも鮒でも、一藏あかう。」と語りける。新七さてはと恨めしく、腹の立つにも主思ひ、「ム、それは聞き及うだ分限者、ずんど若い人ぢやげな。仰山な酒呑と聞いたが、今宵も酒であらうの。」「ア、ア、竝びもない呑みぬけ、親茂庵というたも命を酒に替へられた。鯉殿の母御前も元爰に勤めた人、どちらへ似ても蛇の子孫。夫れでもよい衆のしるしには、萬事に達した器用人、能の脇師を手いけにして、九軒で主の座敷能、常住酒で足ひよろつき、三番叟も高砂も、皆猩々の亂れかと、思ひます。」

淀鯉出世瀧徳

唄 郭住居は時雨の雨よ、ふつつふられつ、むら村雨の、まだひぬ露もまだひぬやよや。ア、霧は不斷の伽羅をたき、晝にもまさる燈火は月常住の夜見世かや。朱雀三谷もいかな事、直下にみつの難波の里、戀も所の氣につれて、よろづ手廣き大郭、色に擲つ金銀は、土か砂場の西口や、思ひ綻ぶ袖口を、九軒阿波座の野良烏、月夜はなほか闇の夜も、瓢簞町を腰付に、意見ふる手の印籠の、底に焚きながら吸ひがらの、煙に油煙たな引きて、霞が關か東口、爰ぞ浮世のだての大木戸、あけぬは銀の富樫の關。夫れつら〳〵おもんみれば、大盡客衆の秋の月は、小判の雲に光り、小傳よびましや長返辭、驚かすべき夜半もなし、三番太鼓つてんてん、天下は夜なか八つ過、郭は戀の晝中や、駕籠やろ許りご寐聲なり。頃しも初冬亥猪餅小豆織のべんがら縞、羽織の上に手拭おび、頭巾鼻まで顏隱し、女郎買ふべき風にもあらず。さながら用なき體にもあらず。どちらへどうとも片づけて、思案に落ちぬ風俗、新町橋の橋の上、橋辨慶が薙刀の、鞘拾うたる如くにて、うろ〳〵として立ちたりしが、ちよこちよこと立寄つて、「これ駕籠の衆、率爾ながら物問ひませう。今宵九軒の井筒屋の、客は何處衆の何

まれけり。

五十年忌歌念佛　終

勘十郎が七十兩、盗みしといふには證據なし。しかれども勘十郎、おのれ一旦主人の金子をわだかまり、淸十郎親子に無實を言ひ懸け、迷惑させしふとゞき、もと皆おのれが悪心より事おこつて、お夏も自害におよびたり、主殺しともいひつ可し。屹度しおきにおこなふべきが、手を出して人もころさず、盗人にきはまる證據なければ、慈悲をもつて助け置く。命のかはりに髪をおろし出家して、かれ等が菩提をとぶらふべきか。」と仰せける。「ハ、有りがたし。」と、勘十郎頭を地につけ三拜し、小刀拔いてもとゞりより、ふつつと切つて捨てければ、「オ、神妙々々。佛弟子となつたれば、たとへまことの科あつても、いよ〳〵命は取りがたし。このうへは汝が行くする、彼が後生のためぞかし。和睦して恨みを晴らさせ、往生させよ。」とありければ、勘十郎一念發起して、「これ淸十郎、今は我も懺悔せん、かの七十兩の小判は、この勘十郎坊主が盗んで、源十郎奴に塗らんと思ふをりふし、斬られしを幸ひに、その方に負せたり。恨みを晴れて成佛あれ、跡とぶらはん。」といふ處を、「さてこそ盗人顯はれたり、其奴縛れ。」「うけたまはる。」と、踏み付け〳〵腕捻ぢ上げ、はや斬繩にぞかけてける。「直に國中引渡し、獄門に斬りかけよ。」とひき立つれば、妄執も晴れつゝ、淸き淸十郎、臨終顏も菩薩の數、二十五歳の命は消えて、浮名は今に殘りける。お夏もともに取りつくを、宥めともなひたち歸り、その夏衣墨に染め、年忌々々の手向草、花の帽子に修行の笠、笠が能く似た阿彌陀笠、彌陀の御國に生

代の慣ひ、我等ばかりに限るでなし。あの清十郎は朋輩を斬り殺し、金七十兩盜み取る。これも手代の慣ひか、エヽ殘り多い。まそつと早う生まれたら、熊坂長範か、石川五右衞門が手代にせば、好い給分を取らうものを。」と、憎體にこそ申しけれ。今を最期の清十郎、眼をくわつと見開き、「やい〳〵勘十郎、廣い世界を汝が口から、世間手代の慣ひとは、えらが過ぎて聞き憎い。惡い事を慣ひといはば、主殺し親殺し、屋燒、强盜、世間の慣ひと許さうか。人を殺せば我が身も死ぬる、此の清十郎が七十兩や八十兩の、金に換へる命でなし。旦那の御恩、お夏樣の情に捨てうと思ふ身を、おのれが口一つにて勘當させ其の恨み、汝をたつた一討に仕舞はうと思うたに、仕損うて口惜しし、エヽ〳〵無念な、口をきかするなあ。ハツ〳〵我ら故にお夏樣の自害、御恩の旦那の憎しみも、嘸や增らん、情なや。この年までの御面倒、御恩を報ずる事もなく、御苦勞をかくる事、これぞ黃泉の障りとなる。これ親父樣妹ども。」と、呼び向け顏をじろ〳〵と、言ひ度き事のありさうに、目は働けど息切に、人脈絕ゆる兩眼より、淚ばかりを暇乞、親子他人の隔てなく、皆々哀れを催せり。佐治右衞門淚を流し、「申し殿樣、勘十郎がお主の銀を引負ひし、我らを瞞した慥かな證據出づるからは、七十兩も彼奴が盜みに極まつた。御詮議なされ、清十郎を御助け下され。」と、大聲上げてぞ申しける。代官聽き給ひ、「尤も〳〵、不便なれども淸十郎は、人を殺せし白狀まぎれなき上は、斷罪遁るゝ處なし。又

心配の、臓腑を破りし長煙管、頼む方なく見えにける。程なく、「但馬屋九左衞門、手代勘十郎、一家殘らずお召しによつて參りたり。」とぞ訴ふる。斯かる處へ老いたる百姓、周章しく狼狽へ來て、一目見るより、「南無三寶しなしたり、待てむざ〳〵と一人は殺さぬ、敵を取つてとらせう。」と、せき來る涙を押しのごひ、「謹んで、我らは淸十郎が親、和泉國水間の佐治右衞門、年寄ながら面目なや。その勘十郎奴に瞞され、お主を大事、子が可愛さ、由ない手形なんぼう後悔仕る。それにつきその時分、娘子供が道頓堀にて、取違へ歸りたる笠を、此の頃取り出せば、頂きの下にこの文あり。御詮議なされ、淸十郎が科を輕め下され。」と、涙を流して訴訟する。「それ〳〵これへ。」と、取り上げて披見ある。「幸便に任せ一筆啓上せしめ候、此の度お夏樣嫁入道具の代金百四拾兩の內百二十一兩、爰もとにて鹽問屋へ相渡し、貴樣の損銀殘らず相濟まし、乃ち請取手形殘金十九兩上し申し候、追付御下り待ち入り候、但馬屋勘十郎殿參る、同じく源十郎。」「何とこの手蹟相違なきや。」と仰せける。九左衞門一見して、「相果てし源十郎が筆、判形ともに疑ひなし。」サア返答あるか勘十郎、御前にて申せ〳〵。」と責めつくれば、勘十郎少しもひるまず、「尤も我ら私商ひ、損金の流用に道具の代金、暫く取換へ置きたれども、追付右の金は才覺して、道具屋へ濟まし置く。商賣の慣ひ、廻金の無き時は、氣轉を利かせ表裏をつかひ、主人の金を手前へ加へ、自分の銀を主の銀に廻し、間に合はするは世間共に手

逆の睡りを覺し、「充滿吾願如淸涼池。」と嘯きて、「地獄、餓鬼、畜生、修羅、此の四惡種の苦患を解脫し、吹き出す煙は沙羅林栴檀の霞と變じ、三寶供養の燒香となつて、三十三天に薫じ渡らば、日月は兩の眼に入り代り給ひ、梵釋二天に手を引かれ奉り、佛の御前に此の度は、たち別るゝとも藻汐燒く、煙は同じ鷲の山、靈山淨土で待つべきぞや。南無阿彌陀佛。」といふより早く、煙管押取り鴈首まで、咽の內へ押込んで、眞逆樣にぞ伏したりける。警固の上下ふためきて、「それ殺すな。」と引き起せば、色も變はつて目眩き、血は紅の瀧津瀨と、口に流るゝ風情を見て、「口惜しや後れたり、我こそ淸十郎が二世の妻但馬屋のお夏、人々の情には同じ土に埋みてたべ。南無大悲觀世音助け給へ。」と、泣立てたる拔身の槍押取り、咽笛ぐつと突き通す。二人の比丘尼抱き付き、「なう皆樣賴みます。」と、けど叫べど囚人の、自害に各仰天して、勞る人もなかりしは、是非にかなはぬ次第なり。城下に斯くと注進す。代官所の役人、馬を飛ばして驅け來り、矢來の內に飛んで入り、大聲上げて、「ヤア早まつたり淸十郎。汝朋輩の源十郎を、人違へにて殺めし段は、白狀紛れなしと雖も、盜人の科未だ分明ならぬ故、曝し者として成敗の日を延ばし、盜人の本人あらはれなば、汝が命を助けんとの評議なりしに、近頃殘念千萬なり。只今但馬屋一家を召寄する。事の詮議濟むまでの命を生きんと思はぬか、狼狽者。」と力を付け、二人が口に氣付を入れ、種々看病なし給へば、お夏は少し息出づる。淸十郎は

今の口惜しさせん方なく、高き山の巓にて、一杯の水を求むるが如しとは、此の身の上に知られたり。この羣集の中にこそ、清十郎が一命に代らんと歎く人もあるべきぞ。必ず〱僻事なり、存命へて追善し、菩提を弔ふ善根こそ、命を助け、不老不死の藥を與ふるよりも嬉しきぞや。人々の廻向を受け、佛の御國に至らんと、思へば〱、此の世の覊絆はふッつと思ひ切つたぞや。ア、思ひ切つても切られぬは、いとし可愛の只一人。よしこれも夢の戯れ、頓生菩提、南無阿彌陀佛。」と、潔くはいひけれども、お夏が歎き妹の、變れる顔を尻目にかけ、覺えず「わつ。」と泣き出せば、お夏を始め二人の尼、警固の上下、緣もなき貴賤羣集に至るまで、皆々袖をぞ絞りける。稍あつて清十郎、「如何に警固の方々。口渇きて苦しきに、煙草一服所望したし。この羣集のその中に、姫路の人もあるならば、吸ひ付けて給はれかし。情のお主の御手より、末期の水と觀念せん、如何あらん。」と言ひければ、「苦しからじそれ〱。」と、煙管煙草を出しける。お夏悅び、「なう我こそ姫路のもの。一樹の陰も他生の緣、まして一つ國なれば、未來も一つに生まるゝため、約束の煙ぞ。」と、餘所ながら暇乞、煙草吸ひ付け垣越に、警固の者取次ぎて、清十郎に渡しける。夫婦は物も言ひたげに、顔振上げしが咽せ返る、涙を中の關の戸にて、とかうの詞も出でばこそ、泣くより外の事はなし。漸う涙を押留め、「人もおほきに御身の手より、末期の一服を受くる事の有り難さよ、本望さよ。この煙草にて十惡五

う此處に居る。これ此處に顔を向けて下され。」と、呼ばはる聲も往來の、羣集の歎き念佛に、紛れ聞えぬ哀れやな、不便やな淸十郎、顔も容も瘦せ衰へ、最期極まる心にも、後生菩提も思はれず。お夏が歎き古鄕の、親兄弟は如何ぞや。お夏に知らせ今一目、せめて面影ばかりでも、姬路の方をと見廻して、目と目をふつと見合はせて、お夏は「わつ。」と泣き出す。淸十郎は聲立てず、膽より出づる憂き淚、刀の刃より先づ前に、思ひに命絕えぬべし。淚を中の架橋と、心通はす心の色、世に取沙汰の諺や、唄「淸十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひをさしよよりも、思ひを生きて、生きて思ひをさしよよりも。エなまみだ〳〵南無阿彌陀、南無阿彌陀佛なまみだ〳〵、南無阿彌陀佛。」と廻向して、皆皆袖をぞ絞りける。淸十郎淚を押へ、「何れも有り難き御廻向、千金萬金より、一遍の廻向に優る寶なしと承る。最期の悅び何事か之に如かん。さりながら心に懸るはこの高札、主人の金七十兩、盜むとは身に取つて覺えなし。相手勘十郎を斬り殺さんと思ひしに、過つて人違へ、遁るゝも業悅びならず、殺さるゝも業歎きにあらず。某生年二十五歳、十一歳の春より奉公し、主人の養育み情にて、商人の道一通り、藝能文字の元末まで、人並になりたるも、皆これお主の御高恩。明暮主の敎へに任せ、親に孝行主に忠、口正直を守つて、一言も僞りをいふまじと、每朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲しさは、只今非業に死なんとは思ひも寄らず、佛とも法とも一遍の、念佛なせし事もなく、

憂き物に出で給ふ。今は我が名を包みても、何かその甲斐夏果つる、扇の女の物狂ひ、その人の名は清十郎、有りし姿は變るとも、未だ俤は殘るべし。教へてたべの人々。」とて、伏し沈みてぞ泣き居たる。二人の比丘尼縋り付き、「さてこそは餘所ならぬ、一つ流れの和泉國、その人のためにこそ、我は妹我は姉、親の歎きを宥めかね、共に亂るゝ我が身ぞや。狂女といふも何故ぞ。そなたは妹脊の忍ぶ草、身は兄弟を思ひ草、おなじ由縁の草葉ぞ。」と、手に手を取つて泣き叫ぶ、物の哀れをとゞめける。「なう淺ましや。今里人の語りしは、但馬屋の清十郎は、人を殺めし科によつて、方々へ追手かゝり、長崎とやらんにて終に捕はれ、囚人となり、あの松陰の竹垣にて七日曝し、其の後は但馬屋の門口に、獄門にかけらるゝと語りし故、せめて餘所目の暇乞に、これまでは參りしが、御存じなきか。いとほしや。」「なに我が夫は捕はれて、終に首を斬らるゝとや、それは誠か。今までは狂氣の中にも若しもやと、頼む念力切れ果てて、同じ刀に斬られん。」と、驅け出づるを二人の尼、「歎きは替らぬ我我なれど、最期に心亂れては、人の譏り後世の爲、皆其の人の仇ぞ。」とて、泣く〳〵制し止むれば、早先拂の警固の者、山賊夜盗のその如く、嚴しく堅め引き出す。生きての思ひ死する罪、元一筋の縛めの、繩目に遭ひて清十郎、引かれ出づるぞ無慙なる。矢來の内に土壇を構へ、高手を許し羽搔締、北向に引据ゆるは、目も當てられぬ風情なり。お夏は涙に目も明かれず、聲も立てねど伸び上り、「な

してたべなう。否御僧とは空目かや。我も焦るゝ丸太船、浮世渡る一節を、謠へや謠へ泡沫の、唄　小舟作りてお夏を乗せて、花の清十郎に櫓を押さしよえくわん。觀音薩埵の誓には、枯れたる木にも花笠、笠に插いたは梛の葉、腰に插いたも梛の葉、一枝二枝、三日に三枚七月に七枚、起請誓紙の牛王のうらなく、灰に燒きつゝ互に飲んだる、水も漏らさぬ中々に、引きも合はせぬ神心、熊野の神のお留守かや。足柄、箱根、玉津島、貴船、三輪の明神も、神とも覺えぬ神ならば、尋ぬる人に逢はせて見や。それ〳〵逢はせず逢はせぬは、皆僞りの御神と、譏つても祈つても、神の力も叶はぬか。」と笠も髢もかなぐり捨て、狂ひ歎くぞ哀れなる、共に濡らせる尼衣、二人の比丘尼も涙を押へ、「我も尋ぬる人故に、假に扮せし修行の道。思ひ當る事あらば、知らせ申さん國處、有樣語り給へとよ。」「嬉しの人の問ひ事や。國は播州姫路の者、尋ぬる夫の容姿、姿は詞に語るとも、心は筆も及びなき、ぼんじやりとして屹として、花橘の袖の香に、昔男の業平作り、黒い羽織が好きすき油、鬢付髪付眞黒々、黒目勝なる目の中に、鼻筋通つて櫻色、年頃は二十歳餘り、丈高からず低からず、茶の湯、盤上、打囃、男の藝に一つでも、疵なき玉の杯の、酒もよい酒、假名文書手の萩の露、轉び寢し夜の說經　睦語は、俺と其方が中ならで、岸の濱松根掘れても、漏らすまいぞや顯はすな、變るまじきと末かけし、末の松山浦の波、上越す人もなかりしに、友朋輩の猜みにて、犯さぬ罪の仇名を喞ち、世を

下之卷

お夏笠物狂

唄「夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎とねた處、裾に清十郎とねた處ヱ、少しくわん。歌念佛觀ずれば夢の世や。寢て溫めし懷子、何時の閒にかは浮れそめ、三界をたゞ家として、袖笠雨の宿りにも、心とゞめぬ假枕、流れにあらぬ河竹の、笹の小笹のびんざゝら、花の手おほひお手を引かれた、これも熊野の修行かや。姉樣のこれの勸進柄杓の、笑顏好しとて柳が招ぐ。柳の髮を何ゆゑに、浮世恨みて尼が崎。尼が崎とは海近く、何故に其方はしほが無い。」節は哀れに身は伊達に、歌は念佛の※歌比丘尼。唄「向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠が能く似た、菅笠が。能く似た笠が、笠が能く似た菅笠がえ。笠をしるべの物狂ひ、物に狂ふも我許りかは、鐘に待宵鳥には別れ、戀する人の夜な夜なを、氣違とてな笑ひ給ひそ。諺傳へ聞く、孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き、白居易は又我が子を先だてて、枕に殘る藥恨むは道理や。それは子故の別れの淚、親より子より我が身より、いとし殿御のいとしほや。それより便宜音信の、聲も聞かねば顏も見ず、我は秋鹿夫を戀ひ、唄かいろと啼くと知らせたや。なう〳〵あれなる御僧、我が殿御返してたべ、何國へ連れて行く事ぞ。男返

たは落ちつらん、引入れあるか吟味せよ。」と、上を下へと返せしが、「なうお夏樣が御座らぬわ、ヤア
これぞ曲者、探して見よ。」と、二階、內藏、緣の下、湯殿まで探せども、蚊帳の內は氣もつかず、「表
の口に錠下し、裏を探さん。」「尤も。」と、提灯とぼして驅け惑ふ。お夏は我が身の恐ろしさ、淸十郎
が氣遣ひさ、氣も逆立つて散亂し、「南無天照大神樣、觀音樣、氏神樣、死ぬとも二人一緒に。」と、胸
を騷がす折柄に、勘十郎が聲として、「蚊帳の內を見なんだ、探して見よ。」といふ聲す。「南無三寶。」と
飛んで出で、表には錠下りたり、裏には大勢充ち滿ちたり、跡へも先へも因果の綱の、懸る憂き身は
佛神の、直なる法も橫町の、相の細路次蹴破れば、さつと開くも戀路の念力、かけし願ひの神力の、
神變奇特毒蛇の口、遁れ出でたる如くにて、落ちんと契り西の辻、東の辻に、「なう我がつま〳〵。」と
聲を限りに往き還り、「扨は俘となりけるか。」と、ハヤ狂亂となる鐘の、響の末に、「あれお夏〳〵と呼
ぶわいの。おう〳〵其處にか、何處にぞ。いや〳〵〳〵待て暫し、あれは我が屋に父の聲。我を尋ね
て我を呼ぶ、親もゆかしや、夫も戀しや。」父は子を呼ぶ夜の鶴、我は妻呼ぶ野邊の雉子、追驅け行か
ん、夜は何時ぞ、鐘は幾つ、八つか七つか曉風の、辻行燈を吹き消して、道も心も眞暗くら〳〵、
くる〳〵〳〵、狂ひ亂れ泣き亂れ、亂れて唄ふ鷄の、卵を渡る危さの、狂女となるこそ　三重哀
れなれ。

エ、憎さも憎し、とても斯うなる憂き身なり。身代の敵、此の首尾に助けておめ〳〵と戻られず。勘十郎奴を刺し殺し、有甲斐もなき我が命、しぞこなうたら浮世は闇。」後前見えぬ出來心、內の勝手は覺えの庖丁、心の鏽も荒砥の研ぎ立、尋ね寄れば高鼾、前後も知らず不思議の本望、夜著引退けて咽笛を、ぐつと抉れば源十郎、「うん。」といふを引きおこし、肝先を一刀、又刺し通して息を留め、耳に口を差寄せて、「こりや勘十郎、まだ魂はよも去るまじい、よつく聞け。朋輩に科を被せ、身の爲にせし報いの劒、名乘り合うて殺さぬは、近頃殘念至極ながら、讒訴したるこのえら骨。」と頤かけて斬り下げ、「此の胸から企んだか。」と、鳩尾前を脊中まで、思ふ樣に止めを刺し、死骸を夜著におし包み、たち上れば血落ちて、滑つてのつけにどうど伏す。はつと起きて蒲團にて、足摺り拭ひ靜々と、身仕舞して立つたる處に、奧よりお夏は手燭の影、表へ出づるを、「これ〳〵。」「ム、其處にか。」と走り寄り、血に滑つて、「ア、怖。」と、聲を立つるを押鎭め、樣子をさゝやき、「此のうへは一緒に退かん。」といふ處へ、行燈提げて勘十郎、納戸の方より來る體、「南無三寶人違へ、よしこれもうぬが身の。」火を吹き消して車戶を、押し明け飛んで出でにけり。遲れてお夏は爲方なく、蚊帳打上げ身を潛め、生きたる心地はなかりけり。此の音に勘十郎、走り寄つて手燭を上げ、夜著引捲つて、「ヤア源十郎が斬られたわ。」と、呼ばはる聲に主下人、男女殘らず起き合はせ、「疑ひもなき清十郎。門の戸明い

たか、ちと談合あり、目をさませ。」と、頬杖してぞ寢轉びける。「いや寢入りはせぬ、サア話せ。」と、夜著の内より煙草盆、寢ながら行燈引寄せて、顔を並べて語りける。源十郎小聲になり、「其方が賴うだ鹽商ひの損金、彼の金子で濟まして、請取手形も剩り金も一緒に上した、屆いたか。」といへば、「オオ過分々々。慥かに屆き請取つたが、其の狀も請取も大事にかけ、笠の頂きに入れ置き、其の笠を道頓堀の芝居の木戸に預けて、餘所の笠と替つて、詮議しても知れなんだ。それは失せても大事ない、お蔭で萬事忝い。」といへば、源十郎、「一段々々。それにつき、清十郎奴が諸道具、七十兩の小判まで、旦那が身共に預けられた。お夏女郎と清十郎奴が盗み出した分にして、仕てやる樣な工面がなと、分別すれど能はぬ智慧。其方が今度のおぞい仕樣、魔法でも叶ふまい。如何ぞ思案はあるまいか。」といへば、勘十郎うなづいて、「嫁入道具の代銀を、此方へ遣うて損を埋め、まんまと間には合はせしが、一度大坂へ上す銀、あれをと胸に當てて居る工面を聞け。」と、囁き合うて吸ひ付ける、煙管の先にて行燈は、消えて闇とぞなりにける。清十郎は幸ひと、釜の内より這ひ出づる。酒に醉ひたる源十郎、とろ〳〵寢入る體なれば、勘十郎搖り起し、鼻に手を當て、「仕濟ましたり。七十兩を盗み取り、預り人の此奴に負はせんもの。」と分別し、密と起き出で、源十郎を我が寢處に押し遣つて、夜著打被せさし足し、奥の納戸に入りにけり。清十郎はそれとも知らず、「扨は彼奴等は寢入りしな。

爲にもならぬ事、先づ御入り。」と、衣裳をしるしに清十郎を取巻き、連れて内に入りけるに、お夏續いて入らんとす。「これ清十郎殿、お夏樣がいとしくば、先づ往んだがよいわいの、男の樣にもない人ぢや。」と、恥ぢしめ突出し、大戸を礑と鎖しければ、清十郎は爲方なく、部屋へ入る體にして、大釜明けて身を縮め、そろり〳〵と忍び入り、中より蓋をぞしめにける。お夏は門に憧れて、入るべき便りを待つ處に、炊婦の玉はそろ〳〵と、門口明けて、「なう清十郎樣清樣。」と、お夏が袖を憖と取り、「ア、此方は戀知らず。私が此方に絆されて、御主樣を袖になし、朝晩に心をつけ、しんぞ思ひを盡せども、お夏樣に心中立て、一度も靡いて下されぬ、恨みの熖火吹竹、七や十四五すつとんとんと、撲ち度いが、ア、可愛しいが因果の種。人は落目の志、コレ此の餠は正月の在所へ遣らうと思へども、君に何が惜しからん。恥かしながら此の玉を食ふと思うて、賞翫して下さんせ。」と懷に押し入るゝ。お夏は色を知らせじと、ぢつと抱き付き締めければ、「ォ、悚然する程お嬉しい。恨みの雲も晴れ渡り、これで千倍々々。とてもの事に杯せう、酒取て來ましよ。」と入る跡に、引續いてつゝと入り、部屋に驅け込み夜著引被ぎ、身を顫はしてぞ臥し居たる。清十郎は斯くとも知らず、お夏は外に如何ぞと、釜の蓋明け見廻せば、奥には人も寢入ばな。勘十郎は親方と、寢酒の相伴ひよろ醉うて、夜著蒲團引き出し常の所に臥しにけり。跡より又源十郎、これも微醉ひ來りしが、「勘十郎もう寢

も、布子の袖に入るばかり、身は脱殻の力も切れ、若しやと部屋をしのび出で、門の戸明けてそつと出で、四邊を見れば人影の、「お夏樣か。」「此處にか。」と、いふより先に抱き合ひ、聲を立てじと諸共に、肩の縫目に喰ひ付きて、忍び音に泣く許りなり。「今の間の物思ひ、ま一度逢はせ下されと、いくらの願を掛けたやら。淸十郎の淸の字なれば、先づ此處の淸水樣、京の淸水、室の明神、書寫山、伊勢の御神樣、住吉樣、金毘羅樣、不動、愛染、大師樣、拜み賴みし驗にて、顏を見て有り難や。サア二人連にて立退きて、如何なる遠國小借屋でも、二人遣ふを一人遣ひ、一人遣ふを手鍋でも、暮されまいものでもなし。いざ立退かん。」とありければ、「いやそれでは、情の親方の憎しみも增るべし。在所へ歸り、親どもと勘十郎奴が善惡糺し、身の垢脱いで詫言せば、御機嫌も直るべし。それまで辛抱遊ばせ。」と、泣く〳〵宥め慰むれば、「戀しゆかしは身の氣隨。男の爲には憂き苦勞、厭はずながら只一人、つき放して遣られうか。これ此の小袖と脫ぎ換へて、其の布子を逢ふまでの形身に著ん。」と、淚ながら互に帶解き身を合はせ、片袖づゝを脫ぎ換す、肌睦まじき志、戀路ならずば何故に、生まれて知らぬ木綿物、袱紗の衣と引締めて、顏と顏を見合はせて、「わつ。」と泣き入る心底に、萬の淚籠るべし。物にて顏をおし包み、「さらばや。」といふ處へ、腰元下女ども、「お夏樣が御座らぬ、裏よ井戸よ。」とひそめきしが、門口明けて、「こりや此處にぢや。ア、申しお夏樣、お前は惡い合點な。何方の

責も斯くやと哀れなり。錠前を叩き破り、提物差換取出せば、包の小判七十兩。「これは扨、この金子はお夏樣へ、婆々御よりの讓りの金、身が包ませて覺えあり。極まつた大盜人、首のあるは旦那の慈悲。叩き出して追つ拂へ。」と、手足を取つて引き出す。淸十郞大聲上げ、「ヤイ勘十郞。盜人する男でなし。おのれが私商ひに、赤穗鹽買うて損をして、首縊らねばならぬ首尾、何卒と談合したる故、お夏樣へ申しておのれに貸す爲に預つた。戀する者の因果で、朋輩の機嫌取り、追從したが身の仇となつたるか口惜しや。おのれが損は入れ合はせ、今は銀も要らぬといふ。察するに此の度の嫁入道具の代銀を、遣らずにおのれが引込んで、我が親騙つて一札させ、人を損ふ工面とは、鏡にかけて知つたれども、相讀なければ是非もなし。これを見よ、淸十郞は破れ布子一枚で、非人の體にはなつたれども、心の內は紗綾縮緬、錦より潔い。エ、辛いぞや、やれ恨めしい。」と、齒嚙をなして泣きけるが、「旦那にさら〳〵恨みはなし。十一歲の彌生の花、いろはともちりぬるとも、知らぬ者のこれ程まで、算勘商賣讀み書きの、硯の海より山よりも、優つたる御高恩、拳一つ當らぬ身が、如何なる月日か今日の今日、主從の緣切らるゝ、如何なる神の咎めぞや。今一度旦那の顏拜まん。」と驅け入るを、情なくも男ども、手取り足取り大道へ追ひ出し、門口はたと鎖しけるは、爲方もなき次第なり。

未だ二月の朧夜や、涅槃の雪の名殘の門、立留りつ立去りつ、凍え狼狽へ佇めり。無慚やお夏は魂

一札取つたに胡亂があるか。暇をくれた、出て失せう。こりや女子ども男ども、彼奴が這出に著てうせた布子があらう。尋ね出し引剝いで著せ換へ、追ひ出せ。」とぞ喚きける。お夏は斯かる有樣を、目も當てられず涙にくれ、「言はば我が身も遁れぬ科。餘りといへば親ながら、無得心なるお心や。人の譏りも思召し、すこしは宥免あれかし。」と、聲を揚げてぞ泣き居たる。「オヽ、惨いも辛いも知つたれども、おのれが母の遺言に、『傾城の娘とて侮られうか淺ましや、未來の障りはこれのみ。』と、返す〳〵も歎きしに、『氣遣ひするな、好い聟取つて名を揚げさせう。』と請合ひしを、嬉しさうに打笑ひ、『それで成佛々々。』とて、死んだかほばせ忘れかね、千兩附ける嫁入を止め、大事の娘を唆し、惑ひ者になしたる恨み。但馬屋の九左衞門は、胴慾者惨い者といはれねば、亡き人の位牌に對うて言譯ない。胴慾者には誰がなせし。」と、「わつ。」とばかりに堪へかね、咽せかへりてぞ歎かるゝ。其の間に下部ども、衣裳を剝いで振袖の、汚れし綿衣に著せ換ふれば、さしも美形の清十郎、山田の案山子どうぞ顫ひ、二目とは見られぬ容貌。お夏は「我も一緒に。」と、飛びつくを下女腰元、引分け宥め教訓し、常の部屋にぞ伴ひける。父は彌々腹を立て、「勘十郎は何處にある。何に恐れて引込むぞ。清十郎奴が入物吟味し、衣類諸道具押へ置き、追ひ出せ〳〵。」と、いひつけ奥に入りければ、「心得ました。」と勘十郎、半櫃簞笥舁き出させ、ぐわらり〳〵と打明けて、衣類引出し取散らすは、三途川の奪衣婆の、背

が小腕引き出し、清十郎も這ひ出づれば、「その儘居れ、身動きせば男共ぶちのめらせ。」と取廻せば、蚊帳の内にすご〳〵と、晝の螢の影消えて、籠に窶るゝその風情、外にお夏は夏の蟬、聲の限りを泣き盡し、思ひを比ぶるばかりなり。親は腹立涙にて、「やれ女郎奴。おのれが母は流れの者、空言に身はまぶれても、心のたまかさこうたうさ、千人にも稀なりしぞ。何時慣うてそのいたづら。遊女の腹とて何方へも、嫁に嫌ふは聞きつらん、その袖下は何事ぞ。左樣な事をせんよりも、おのれが額に傾城の娘と、何故看板を打ちをらぬ。」と、齒切をしてぞ泣きけるが、「やい丁稚奴、不義一通りは兔しもあり、十一の年から子同然に育てし奴、事によらばお夏奴と、ひとつにせまいものでなし。在所の親奴と言ひ合はせ、嫁入道具に邪魔を入れ、親方に恥かかせ、但馬屋の家を覆さうと企んだな。口の明かれぬ事見せん。」と、證文出し、「これ見たか。おのれの請狀にある親奴が印判、妹とやら嫁とやらが文とも合はせて吟味した、芥子程も違ひなし。覺えがあらう、あらがふな。主の寐首を搔かんも知らず、エ、憎や。」と蚊帳越しに、額を三つ四つ喰はせて、涙を飜して怒りける。清十郎はつと驚き、「親の印判、妹の手跡とはいひながら、親にさへ逢はぬ身が、夢程も覺えなし。在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手打のなされ樣。勘十郎奴何處に居る、言はせねば堪忍せぬ。」と、蚊帳より出づるを取つて押へ、「ヤレ勘十郎源十郎は、この九左衛門が兩の眼の代りをする。その手代が穿鑿して、

めば手に縋り、「女房を拜む事かいの。これほど思ひ合うた中、何故に女夫になられぬ。」と、辛氣泣にぞ泣き居たる。「ヤア申しお夏樣、いつぞやお前に借りました、七十兩の小判の事、私が遣ふ金にてなし。朋輩の勘十郎、私商ひに損をして、平に賴むと申したゆゑ、取替へやらんと存ぜしが、思ひも寄らぬ仕合して、損を埋めしと途次の話。もう入らぬ金子なれば、戻しませう。」といひければ、「ア、好いわいの、婆々樣の讓りの金、如何しても大事ない。人の來ぬ間に、あの蚊帳の開眼をせまいか。」と、こは〳〵顫ふ春風も、人目を忍ぶ綟子の蚊帳、蚊帳はお夏に緣深く、神の結ぶの釣手かと、戲れ交す手枕も、心せはしき契りなり。內手代の源十郎、「お夏樣、旦那の呼ばつしやる。」と出でけるが、はッと廣げし手も打たれず、呆れて立てば淸十郎、お夏が褄を引被ぐ。お夏騷がず袖にて隱し、「これ源十郎、其方も男ぢや、引かせはせぬ。忍んで逢ふは淸十郎、見遁しにして給らぬか。沙汰をするなら僞るといや、幸ひ刃物も此處にある、直に二人が死ぬるまで。サア助けてたもるか、殺しやるか、屹度した誓文で承らう。」と、弱身を見せず、責め付けられて源十郎、「沙汰して私德もなし、商ひ冥利穩密なり。僞りならば各より私が先に、淸十郎が脇差にて、止めを刺さるゝ法もあれ。」と、言ひ捨て歸るその舌も、引入れず寄親の、勘十郎に打明けて、斯くと語りし不實さよ。二人は五體に冷汗の、露の命も消ゆるばかり、居直つて溜息を、つきもあへぬに親手代ばら〳〵と走り出で、お夏

の富士と一里塚、及ばぬ事をエ、阿房な。」と、舌打してぞ頭振る。お夏涙をおし拭ひ、「其方とわが身は實事にて、口說などする挨拶か。此の度の祝言を、好きこのんだる事でもなし。知つての通り、母樣は室の女郎。今の內の母樣に、あの弟が出來るまでは、我も室で育ちしゆゑ、母方が惡いの、傾城の風があるのとて、何處の嫁にも嫌はるゝ。これぞ好い事幸ひと、なほ女郎の風を似せ、人は隱せど我は只、母樣は傾城と、一季半季の者にまで、觸れ廻りたる村時雨、緣にはつかじと願ひしに、彼の立野の阿房頬、敷銀に目がくれて、嫁に取らうと嫌らしい。此のお夏ばつかりは、言うた事を違へるか、恨みもつらみも後を見て言うたが好い。總じて和方もこんな時、どうなされかうなされの、主待遇が聞えぬ。私から詞を直しませう、なう此方の人、此方向かんせ。」と、袖口から手を入れて、ほとほと叩いて抱きしむる。淸十郎四邊を見廻して、「然しお前に聞えぬ事がある、この袖下は何事ぞ。若衆の前髮、女の脇詰、男が知らいで立つものか。出來ぬ仕方。」といひければ、「其處邊を忘れるお夏でなし。ま一度振袖見せ度さに、皆々お針が縫うたれど、祝うて我も縫はんとて、片袖ばかり縫ふ顔して、これが譃か。」と帶解いて、上著を脫げば右左、振と詰との片ちぐに、片枝は蕾片枝は、開き初めたる花衣、二人前見る誰も皆、斯くぞ仕立てて著せまほし。淸十郎は身をなげうち手を合はせ、「淚が翻れて忝し。それ程に此の男を、不便と思召さるゝかや。冥加に盡きん勿體なや。」と、取り付き拜

ず渡し、職人の手前は濟みながら、不落居な事にて、道具を留められ下りませぬ。」と、言ひも果てぬに九左衛門立腹し、「それは如何ぢや。餘る程銀は遣る、但馬屋九左衛門が娘の嫁入道具、止められう覺えは無い。總じてこの祝言お夏が氣色に日限延び、漸う此のたび脇まで詰め、今日明日となつて、道具が出來ぬなんのとて、この嫁入が延ばされよか。世間からは道具屋へ銀渡さぬと評判せん。それをうか／＼銀渡し、素手で戻るといふ樣な、子供遣つたも同然。」と、算盤の割れる程、疊を叩いて叱りける。勘十郎迷惑さうに、「御立腹御尤も、拙者もぬかりは致しませぬ。證文をお目にかけ、密かな處でお物語致し度い事御座る。」といへば、「オヽ言譯あらばサア聞かう、源十郎も來て聞け、勘十郎此方へ來い。」と、打連れ裏の小座敷へ、苦い顏して入りにけり。清十郎奧を見て、「ハア、餘所には嫁入があるさうな。此方や洗足でも致しませう、やアえい。」と沓脱に腰を懸ければ、お夏つか／＼走り出で、「又ねすり語ばつかり。同じ口で可愛やといふ事がならぬか、意地の惡い。」と抱き付き、「戀には涙脆いぞや。」清十郎は懷手、「アヽ思へば阿房な者。身の正直な勝手して、人の詞をまん誠に、世間の奉公する者は、わざ／＼隙を貰うては、春は親に逢ひに行く、この清十郎は親里の近所に、十日二十日逗留しても、親の所に許嫁の女房分があるゆゑに、これに逢ふと思はれては、心中が立たぬと思ひ、親へ便りもせずに歸る、これに懲りよどうさい坊。ほんに孫子に傳へても、主の娘と懇など、駿河

へども、お夏はさらに氣に染まぬ、心の内の緞子の蚊帳、色香を外に漏らさじと、「ア、俺や風引いたさうな。」とて、洟打ちかみて紛らかす、忍び涙ぞ道理なる。心を知らぬ腰元ども、「お夏樣と聟樣と、この蚊帳※でしげらしやんしたらば、いかな藪蚊もけなりかろ。此方は蚊帳は及びもない、せめて嫁入の紙帳なりと、肖りたい。」と口々に、「申しお夏樣、新し蚊帳の御祝儀、少と浮き〱となされませ。賑やかに酒盛して、謠ひませう。」といひければ、「ア、何をざわ〱しやるぞい。蚊帳が出來ようが、紙帳が出來ようが、この氣あひで今やなど、嫁入する氣は微塵もない。あつたら手間であの蚊帳を、生絹の衣にして著たい。只無常氣でをかしうない。」と、後を見れば父親は、内手代の源十郎に、帳を讀ませて算盤の、「つぶ〱言やんなやかましい、先づ來て祝や。」と赤飯の、こはい目付は我が戀を、知つてさうなと百千に、くだき割りたる胸算は、いかな算者も及ばじな。斯かる處へ清十郎、勘十郎同道してぞ戻りける。九左衞門悦び、「ヤア好い處へ戻つたわ。今日はお夏が嫁入蚊帳の祝ひ。この拍子ならば、大坂の仕合もよかろ。」といへば、清十郎庭に立ちながら、「旦那の病になされた、中國北國殘らず賣つて、爲替手形濟みました。利合は高で二十四五貫目。」と、目を合はする二人が中、無事な顏見て嬉しいと、心に心を言はせたり。九左衞門上機嫌、「お手柄〱、お夏が嫁入は只出來た。扨なんと勘十郎、蒔繪道具も出來つらん、跡から來るか如何ぞ。」といへば、「お道具も出來致し、代銀殘ら

引、その中には清十郎、隙を取らうが走らうが、氣遣ひな事はなし、勘十郎に任されよ。この舟今宵出づると聞く、然らばこれに。」と乘り移り、「方々此の度下つでは、清十郎が爲にも惡しし、好い時分に便りせん、その時必ず待ち入るぞや。數年馴染の清十郎、惡い樣には致すまじ、何れもさらば。」といひければ、親子の者は船より上り、手を合はせ涙を流して、「朋輩の好みとて有り難し忝し、生の親の我等より、清十郎めが命の親、嫁も娘もやれ拜め。辨へもなき清十郎、弟とも下人とも思召して御意見なされ、美しくお暇取り、再び在所へ來る樣に、偏に賴み奉る。」と、敵と知らぬ愚かさの、親の情は子の爲に、藥といへどこれは又、毒を合はする佐治右衞門、心は律義一ぱいに、煎じ詰めたる水間の里、船は別れて 三重 くだりける。

中之卷

所さへ、戀知り顏に姬路とは、何時名づけしぞ但馬屋の、お夏が父は九左衞門、國一番の米問屋、有銀箱も十宛に、六十近き月雪や、花も紅葉も算盤に、かかる親には似ぬ娘、お夏は深きぬれ故に、菩提心と意地ばりて、嫁入も丈も延び〳〵の、それも戀する氣の前か、二人の親の顏までも、飾磨のかちに播磨潟、國に浮名や立ちぬらん。今日は蚊帳の祝儀とて、萠黃の生絹六布七布、屋の內祝ひ賑

しける。蒔繪師の手代冷笑ひ、「ハテサテ惡い工面ななされ樣。これ娘に構ひあるならば、それは先との詰め開き、此方に構はぬ事。如何でもこれは廻し者、近頃惡い仕方。」といへば、「ヤアなんぢや廻し者。オ、男ぢやもの廻しをせいでよいものか、若い時は小相撲の一番も捻つたおれぢや、男につかふ詞がある。廻しかいたかかかぬか、來い見せう。」と裾褰げ、胸を叩いて力みける。蒔繪師も聞かぬもの、片肌脫げば二人の娘、船頭船方居り合はせ、「まづ堪忍。」と取り付きける。勘十郎も分け入りて、種々宥め押鎭め、「塗師屋殿も惡い合點。道具は其方の、銀は此方の、銀遣らずに此方へ請取らうといふにこそ。其方と我とにあの仁から、一筆取つて置くならば、我も旦那の手前が立ち、其方も下細工へ手間遣らいでも大事なし。身に任せて默つて居や。これ親父、なんと一筆召されうか。」「ハテお前の御料簡ならば如何なりとも。それおさん、お望み次第に書きや。」といへば、清十郎立寄つて、「但馬屋のお夏祝言につき、構ひこれあるにより、嫁入道具押へ留め申す所件の如し。但馬屋勘十郎殿、蒔繪師權之丞殿、清十郎親佐治右衛門。」と、好む通りに書きければ、親は悅び巾著明け、墨黑々と捺したりし、因果の程ぞ不便なる。一札卷いて勘十郎、懷中にしつかと收め、「サア埒は明いた。塗師屋殿萬事は國より一左右せん。先づお歸り。」といひければ、塗師屋は船中一禮し、辭宜を述べてぞ歸りける。「なう親父殿。この勘十郎が好い時に居合はせて、此方親子の仕合。道具さへ下らねば祝言は延

れ親父聞いてか。銀を渡せば道具が下る、道具が下れば嫁入がある、嫁入があれば清十郎は引張凧。あの道具屋の手前なんと此處が談合。身は國へ歸つて、旦那へは道具屋が出來さぬ分で濟まし置く。延びさへすれば清は親父から、百五十兩か八貫目渡してさへ置いたれば、波風立たず嫁入が延びる。此處は親父大儀ながら、田地十郎、隙を取らうと走らうと、この勘十郎請取つた。八貫目何ぞいの、田地賣つても子の爲ぢや、出したがよい。」と言ひも果てぬに、佐治右衞門ぎよつとして、「エ、有樣は一口に八貫目。假令清十郎引張凧にならうが、鹽鮭にならうが、世が泥の海に成るとても、一文も銀は無い。エ、此方は皮か身か、合點が往かぬ。」と顏しかめ、立つて入るを引留め、「それは親父廻り氣な、然らば銀も入らぬ思案がある。彼の蒔繪屋にむかうて、この娘には構ひあつて嫁入はさせぬ、道具は其方へ預けた。銀渡したら損であらうと、一言いへば濟むぢやが、成るまいか。」といひければ、「ハテ金さへ入らぬことならば、我が子のためぢや申さいでは。」と、表の間にぞ出でにける。「播磨の姫路、但馬屋の嫁入道具を請取つた蒔繪屋はこなたか。身どもは和泉のどん百姓、土掘ぜりでおぢやれども、但馬屋のお夏には、此方に先の構ひがある。外の男を持たせぬからは、嫁入道具を押へた。勘十郎殿先刻にから切羽詰金する通り、金渡したら御損であらう、斷つて置いたぞ。」と、苦りきつてぞ申

れ。勘十郎打首肯き、「尤も、何方も隙はなし、して此の船に乗つて何方への下りぞ。」といへば、「先づ旦那へ春の御禮も申し、淸十郎にも逢はんと存じ、これは妹お俊、彼は行く〳〵淸十郎が留守をもさせんと存じ、おさんと申し娘分、連れて姫路へ罷り下る。とてもの事に御同道致さん。」といひければ、「イヤこれ逢ひたいといふは其の事よ。まづ下る事は入らぬ物、淸十郎が沙汰を聞かれぬか。さて氣の毒笑止なこと、旦那の娘お夏樣と密通して、お夏樣のお腹は茶壺を抱いた樣になる。それに立野の一門中へ祝言が極まつて、嫁入道具も出來揃ひ、身共が道具を請取つて下り次第の嫁入。彼の腹の土產物壻から詮議があるは定、否でも應でも淸十郎は、片假名のキの空で、此の樣に手を廣げ、引張凧は知れた事、親兄弟も同罪なり。何卒嫁入の無い先に、身を退く思案がさせたさに、知らせまする。」と威しける。親は在所の律義者、何の企みのあるとも知らず、「ア、お前は如來樣。内々如何やら承り、氣遣ひ致せし折柄なり。朋輩の好みとて御知らせ有り難し。年六十に餘つて、火屋へ片足踏み込んで、一人の倅が木の空で、引張凧になるのが、そもや見て居られうか。倅が命助かる樣に、御思案頼み奉る。さりとては誰に似て、下心の悪い倅め。」と、何處で聞いてかいふ事と、泣いて口說くぞ哀れなる。時に船場に案內して、「姫路の本町但馬屋の勘十郎樣のお船は是れか、難波橋は蒔繪

んづして居たを、いくはなか見て來た。扱ひになりしやら、錢をついたも慥かに見た。大坂の喧嘩は大方相場は極まつて、十文では事が濟む。喧嘩は降物。和御寮達萬一の事があつたりとも、いかな九文半錢でも、堪忍ばしめさるな。」と、眞顔にいひしも殊勝なり。二人の娘うち笑ひ、「さればいの、今日も一日芝居見て、それから此處の川口の、八景とやら見物して、つい今になりし。」とて、船に乘れば佐治右衞門、草履菅笠片付けて、「先づ〳〵休めや。」といふ處へ、向うの船の船頭來り、「和泉の佐治右衞門殿はこの船にか。此方の船の乘手衆が、ちとお目に懸り度い。播州姫路但馬屋の勘十郎といへば、合點ぢやげな。」とぞ申しける。佐治右衞門聞きもあへず、「オ、知つた〳〵、但馬屋の勘十郎殿、私が子息の朋輩衆。參つてお目に懸りませう。」と、上らんとする處に、「これへ見えし。」と勘十郎、「何と何と親父樣、さても年も寄らぬわ、不思議な處で逢ひました、先づ御無事にて一段。清十郎も息災で、商ひの用事にて此處へ上りしが、早下つたも存ぜず。旦那も折々噂なり。何故に見えぬ。」といひければ、「えい勘十郎殿樣お久しう御座ります。嫁子供が申すにも、親父ちと旦那樣へ往かつしやれ、何かのお禮も申さつしやれと申しまする。オ、〳〵とは申しながら、正眞の貧乏隙なし。物作りの事なれば、いや大根時の、綿時の、瓜を蒔くわ、茄子を作るわ、牛蒡畠、豆畠、粟よ、黍よ、藍時よ、麥を蒔くぞ、赤らむぞ、田を植ゑては草を取る、穂が出れば刈りまする、籾になれば磨りまする、米

おなつ
清十郎　五十年忌歌念佛

上之卷

通ひ車は、小町が仇の情に乘せられ、閨の扇は、斑女が親骨にせかれ、形身の烏帽子は、行平のいひかぶり、柏木の鞠、山路が笛、古今其の品かはれども、皆これ戀路の寄せ框、根太も根強き門柱、その但馬屋の初色に、立つや浮名の濡れ草鞋、笠がよく似た菅笠の、雫積りて戀の淵、湧きて流るゝ和泉國、水間の里の佐治右衞門、畠作りの田烏や、鳶が産んだる高給取の、手代は主の代りをも、清十郎といふ子を持つて、老いのいりまへ暮し好き、正月著物播磨潟、延引ながら年頭に、娘はおしゆん嫁の名も、三人連の木賃宿、明日は出船の名殘とて、道頓堀の芝居過ぎ、名所々々は大坂の、娘子達に交りても、うてず押されず手入らずの、田舍生まれのおぼこにも、父の乘りたる便船の、印は如何に錨綱、手繰り著いたぞ「日は傾く、いざ急がん。」とちよこ〳〵走り、とはかは口にぞ著きにける。親佐治右衞門苫打上げて、「ヤアこりや〳〵此處ぢや〳〵。ハレやれ〳〵大膽な。暮れるまで大坂の町を漫然と、女の身にて何事ぞ。昨夜も東の横堀で、男と女子と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉

代ぞ樂しき。

丹波與作待夜の小室節　終

情詰、如才ない儀の貞女にめでて、金も投げ出し房との中を、あすは神明こよひの月ぞ、思ひ切つたと誓言すれど、こよひ契りの戀風は、生薑酒でも防がれず、氣もふは〳〵の玉子酒、まゝよいつてのきよ、左樣もなるまいか。どうせうか、かうしやうが酒。辻にしよつつくばうて、思案中橋戀しさ勝る。胸かきまはす玉子酒、心二つに打ちわつて、きみが方へと走り行く。跡は内儀がナ獨り寢てさ、房は日くれて人待つ隙の、火廻しすれば飛脚がせがむ。肥後屋の迎ひはやとく德兵衞、兄の病氣を見舞顏で、來てもたがひの心の底は、いふにいはれぬ鴛鴦の、立たんとすれば病者のくせの長話、何とせん氣のあら腹痛や、痛や〳〵と空腹病めど、そら寒き夜に是非に泊れといふ霜の、おくの火燵にふとんと轉けて、泣いて忍ぶは鄰の二階、そろり〳〵、そろ〳〵そろ〳〵さし足は、誰ぢや房か。德樣かいの、これは夢かと抱きつきすがり、憂さをさゝやき、辛さをくどき、死なでかなはぬ身のさしづめと、なりゆく果てぞあはれなり。房を脊中に大屋根づたひ、足もよろ〳〵夜は何時ぞ、七つ八つの芝居の仕組、浮名ばかりは殘れども、殘らぬものは命ぞと、いとゞなみだの樽屋町、おりて再びこの娑婆へ、いつか高津の日親樣で、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、蓮華ひとつと脇差を、胸におしあてたゞ一刀、あつとさけびし一こゑに、づんぶり染の紺屋の德兵衞、お房が頓證菩提の廻向、水を手向けてふたゝび盆を、重井筒の名の立つにさ。千歳樂萬歳樂、をどりよろこぶ御

披露あれ女中衆。」と、呼ばはれば御乘物、ざんざめかいて舁き寄する。お乳の人も與之助も、さすが武士の子武士の妻、御前なれば手をついて、四人目と目を見合はせ、「何事も姫君樣、御慈悲ゆゑ。」と許りにて、嬉し涙に咽びける。姫君輿の内ながら、與作丹波の伊達男と、歌に謠ふはあの人か、關の小萬も雙紙にある、繪で見たよりはよい女房。聞けば踊が上手ぢやげな、明日は一日逗留せう、踊を踊つて見せてたも。家老共に言ひ付けて、知行をたんとやらせう。」と、生まれついたる御詞、其の一言に千石千兩、千貫松の千代に八千代に萬、與作がもろ果報、小萬が戀も通町、仕合よしで今はお江戸の刀差ぢや。しやんと一筆ふみ馬御免。踊子よする笛鼓、馬も太鼓をうつくしき、踊浴衣の上から下まで、色めき悦び　三重賑へり。

與作をどり

クドキエイ〳〵〳〵紺屋の徳兵衞、房に元よりこいそめこみの、内の身代灰汁でも剝げず。口入賴みて銀四百目を、かりにやとうて女房と名づけ、阿房三太をらむうけん太で、やまけふづくる内儀の心、男いとしし子も亦可愛い。嗇い隱居の手前を包み、宵寐する子を我が夫ぞと、いひまげすます鬢かづら、徳兵衞不義ぢやとはやまるきほひ、顏は澀面工面もいらず、羽織ひらりと、やつ〳〵このこの〳〵、我が子のこの〳〵胸ぐら取つて引きずり出す。宵よりつもるうき涙、理詰、義理詰、

へんとする所を、左内飛び入り脇差もぎ、二人を兩へ踏み倒し、はつたと睨んで齒嚙をなし、「ヤイ道知らずの人外め。さすが以前は御家中の物頭、采配まで御許され、二つ道具をつかせし身が、心まで上々の馬方になつたよな。諸傍輩多けれども、親左近右衛門が烏帽子子、與作といふ名を附けたればこの左内とおのれと、兄弟分が口惜しい。死なう／＼とやかましい、死ぬるが左程珍らしいか。弓馬の家の死といふは、城攻の一番乘、野合軍の一番槍、よき敵の首取つて討死するを、侍の死に難い死とはいふぞ。覺えて置け。關の小萬と心中の討死を手柄とは、一切經にも無い事。僅かの恥を思はんより、主君の恩を報ぜぬは、侍たる身の大恥と知らざるか。扨淺ましや後指をさされうが、犬畜生と言はれうが、我が身の恥をふり捨てて、厚恩の主君に忠節を勵むこそ、恥を知つたる侍、大丈夫の武士のきつすると言ふものぞ。此の道理合點なく、死んで勝手がよいならば、左内は止めぬ心任せ。さりながら侍ならぬ馬方を、刃で死なすは勿體ない。舌をくうか身を投げるか、似合つた樣に在鄕馬の、口取綱で首絞れ、情に見物してやらう。エ、侍でもない者に、心を盡して氣がつきた。」と、大欠伸して居たりける。與作、「わつ。」と泣き出し、「誤つたり左内殿、此の仕合の上なれば、心も闇と罷りなる。萬事貴殿に任せ置く。」と手を合はすれば膝立て直し、「合點いつたか過分／＼。それでこそ與作なれ。御前は拙者が受取つた。」と大音上げて、「與作は御意を重んじ、生害思ひ止まる由、御

ぞ。一生懸命の時節到來、死損はせてくれるか、エ、口惜しい。」と身をもがく。遙か彼方に立てられたる乘物より御意を請け、若侍走りより「ム、珍らしい與作、故傍輩鷺坂左内見知られつらん。今度姫君關東御下向御悅びの時節、今夜の始終御憐憫淺からず、吟味仰せ付けられしに、小萬が箱より貴殿の實名あらはれ、三吉事も實子與之助に紛れなく、殊に內室お乳の人神妙の志、かれこれ感じ思召し、三吉が命を助け、母儀も同じく御供にて、兩人を助けんため、忝くもあれまで、お乘物を出された。大殿の御前相濟むまで、五十人扶持の御合力。小萬もお家に引取り、重ねてよろしく御料簡あるべしとの御意の趣、有り難う存じ、サアお乘物のお供して、歸られよ。」とぞ述べにける。與作叢に頭をつけ、「大殿以來例なき御厚恩、報じ奉る事もなく、不奉公の天罰にて、あらぬ樣になりくだり、親子も知らず恥辱の骸をさらすべき所、姫君の御愛憐、生々世々に忘れがたし。さりながら女どもも倅も、人の笑はぬ志も立てたるに、拙者は何を面目に、おめ〳〵と諸人に生顏があはされん。傍輩の情に死んだ跡と御披露あれ、最期のお暇申し請ける。小萬が事はその代りに、賴み存ずる左內殿。」といひもあへぬに、「これ〳〵、この小萬に殘れとは、お內儀樣の思召し、私許りに恥さらせか、一人歎けか、物思へか。口でいへば人そばえ、先だつて埒あけう。」と、取り付く脇差おし止め、「さうぢや〳〵、恩も禮儀も忠孝も、死ぬる身には絲瓜の皮。爰へよれ南無阿彌陀。」と、刺し違

「オ、念を殘すが迷ひとなる。たとへ奈落に沈むとも、親の事と子の事が、思はず言はずに居られうか。」「さうでござる。」「さうぢやもの、いつそ言うて罪作り、親のため子のために、地獄へ落ちてやりませう。」と、二人ひつしと抱き付き、聲の限りを豐國野の、風も哀れを添へにけり。「あれ〳〵あれへ見える早提灯、走り飛脚と覺えたり。道端はいかゞなり、いざ最後場を換へまいか。」と、半町許り草わくる。飛脚どもは汗水にて、「お乳の人の御立願、あす四つまでに命乞の太々神樂、御願叶へば御祝儀の御褒美は知れた事、急げ〳〵。」と走り行く。「あれ聞きやつたか、何方のお乳の人、命乞の御願とは、養ひ君の煩ひか。いらぬ命が二ツ有る、ア、換へらるゝ物ならば。」と、悔めば小萬涙ながら、「夫れが叶ふ程ならば、他の子よりも此方の子、切られて死ぬる身代りに、とても死ぬるこの身體、髪頭より爪先まで、一分だめしに試されても、代りたい助けたい。」と、歎きしづみし實の心、百千萬の祈りより、などか祈禱にならざらん。時に人足四五十人、ひそめいて來りしが、「ヤア主なき馬の夜中と言ひ、繋がれあるは訝し、提灯立てよ。」と呼ばはつて、忍び提灯さやはづせば、萬燈會の如くなり。「遠くはあらじ一二町、野をかれ。」と大勢が、「與作小萬。」と聲をかけ、漏るゝ方なく取卷きたり。「南無三寶、見付けられては二度の恥、いざ死なん。」と、ひらりと拔く刃物の光、「そりやこそ。」とお徒士衆、やにはに二人を縋りとめ、兩方へ引きわくる。「やれ侍ならば情を知れ、もとは伊達の與作

の寺。泊り〳〵は多くとも、十萬億土馬次なしの、西は百味の旅籠屋に、觀音勢至手を取りて、蓮の臺に泊らんせ。夫婦の外は合宿も、なむ阿彌陀佛彌陀佛。」と、國府の阿彌陀の影頼む、其の誓願の詞の縁、千貫松にぞ三重著きにける。與作も名ある弓取の、家に生まれし氣質とて、きつと死身に胴すわり、土手へ飛びおり馬を小松の根に繋ぎ、小笹の露を打拂ひ、「此處へ〳〵。」と、小萬が手を取り顔を眺め、「二十一と三十一、二人合はせて五十二歳、これでから長命といふ程の年でもなし。いとしい人を殺すよなう。心にかゝり言ひたい事は、ないか〳〵。」と言ひければ、「ハテかはいい男と死ぬる身が、浮世に心なに殘らう。さりながら只一つ、いうて返らぬことながら。」と、言はんとするを、「ア、もう〳〵それもいらぬ事。人間の念慮限りなく、息の通ふ間は六根の樂慾にひかれ、思ふ程言ふ程なほつきず。皆罪障の種となる。この念を拂ふを生死を離れ、涅槃門に入ると云ふ。我とてもいひたい事、千萬無量を打捨てたり。されども一つの粗相には、そなたに預けし箱枕に、先祖の由緒所々の勳功、知行付の一卷あり。死後に諸人にさみせられ、家名をながさんこの無念、よし夫れはまゝにもせん。不便やかはいや與之助が、最期まで親とも知らず、親戀し父親戀しと、思ひ死に殺されん。その思ひは親の業、親ではなくて敵ぞ。」と、かつぱと伏して泣きければ、「それ私には言ふな〳〵とて、こな樣言うて泣かしやんす。そんなら私も父樣が、年よつて子を先だて、途方があるまいいとしぼや。」

外にとふ人も、ないてくれるか優しや。」と、鞍にひれ伏しはら／＼と、袖には涙梢には、木の實こぼるゝ椋本や。契り初めしは一昨々年、拔け參宮の道連に、唄そなた櫛田の眞中程で、深き思ひをやれ紫帽子、ほんに口說いたその眞實が、關の地藏を誓ひにかけて、戀の重荷の馬追ふとても、足も輕々心もひろき、豐國野とこそ樂しみし、あかれぬ中をあきの霜、今宵ぎりぞと氣もへりて、窪田に浮名埋むかや。祭文小萬泣く／＼ヨイ申すやう、「緣は異な物その時に、起請一枚書かねども、雲津の川瀨二世三世、指切しでのいひかはせ、枕定めぬ參宮に、寢て居て胸をやかうより、手を引きあうてゆる／＼と、步み慰むヨイ夕暮は、一把の火繩に火をつけて、相合煙管思ひ草、思ひし甲斐もなつの蟬、春秋知らぬ世の譬へ、與作小萬が身の上と、「昔忍ぶの露涙、今を恨みのうき歎き、此のも彼のもにあののもの、安濃の松原しぐれ行く、阿漕の海士のあこぎにも、過ぎにし方を思ひ出て、二見の浦の二つ石、淸めし肌引きかへて、刃に穢し死する身の、形見となれや石塔の、唄標の石を思ひ出す。忌垣越えしも戀の罪、末社々々の宮巡り、地獄巡りを思ひ出す。返らぬ昔思ふまい、啼くな／＼と啼く烏、人の末期を知らすとは、音に聞きしが今ぞ知る、朝熊の嶽淺ましや。彼の齋宮の忌詞、いまはしやとて道もせに、曝す身體を道者にも嫌ひ憎まれ、人々のよもや廻向も情なや。唄過去もエイ未來も現世で知る。」と、男見る目は泣く目もと。「ヤツサありやそりや、早明方のお八つの太鼓の聲は高田

歎きける。女も共に涙にくれ、「因果人とも業人とも、ようも〱罪業を、重ねたは二人が身、死なうといふ氣の付いたこそ、まだも冥加に叶うたれ。何のかのと暫時でも、この世に居る程罪重し。サアござれ。」「オ、さうぢや。」と、立たんとすれど腰立たず。「口惜しや腰ぬけた。」「エ、氣の弱い。」と、引き立つれども膝をるを、抱き上げても腰折の、三十一期の憂き思ひ、最期は伊勢路育ちは近江、生まれは丹波栗毛馬、夫を抱きかき乘せて、妻は口取るはいどう〱、今六道の次傳馬、三途の川を打跨ぎ、昔の小歌引きかへて、あひの土山死出の山、冥土の旅路通し馬、たどるや夢の　三重

與作小まん夢路の駒

唄與作丹波の馬追なれど、今は野末の放れ駒ぢや、しやんとさせ與作。與作思へば照る日も曇る、關の小萬が涙雨か。しやんとさせ與作、與作々々と呼び呼ばれつる、※稻負せ鳥も音をいれて、野邊の刈萱、軒端の荻、馬の秣にかひ殘す、草も我が身もこの曉は、共に枯野の轡蟲、人を乘せたが乘せられて、限りの旅の坂の下、なうあれ夜深に急ぐ乘掛も、泊りは知れて四日市、我は泊りも七七日、中有の旅の馬羊、歩めしい〱。ア、しぶとい、口を引けどしやくれど行きかぬる。畜類ながら性あれば、最期を惜しむ繩すくみかや。唄「私は十二で人よび初めて、今年二十一まる九年、泊めし旅人何萬人ぞ。關一宿は狹けれど、男女に幾人か、伴侶の好みも時の花、無常の風に散り果てて、馬より

かり持つて居た。心がゝりは殘らぬの。」「ハテかう左繩になるからは、父樣の事も埒あかぬ。もじやもじや言へば氣がもどる、餘の事おいてサア早う、こゝが出たうござんする。」「オヽ、嬉しい〳〵。裏の軒に繋いだ馬を人手へ渡しては、主たる人への不調法。死場へ馬も牽くまいか、その閒に身を出る程、この竹格子をはなして見や。」「いや此處も小善の悪性で、つい推せば離れる。」「ア、、小よしは逢ふ夜の通ひ窗。最期近づく二人には、冥土に通ふ鐵の門。」と、くどき〳〵馬牽き出し、「預けて置いた脇差は。」「そこらはぬからぬ、私が腰にさいて居る。」「できた、夫れならこの馬の鞍を踏まへてそつと下りや。ア、危いぞ怪我すな。」と、かばはるゝ身もかばふ身も、はつる二十日の月毛の駒の、尾髪亂れて置く露に、袖の涙を爭ひし。ひらりと飛びおり、一町ばかり足早に立退き、「海道は往還、伊勢路の方で死ぬまいか。」「ア、それに付いて待たしやんせ。三吉が預けし守袋、如何なる神の御札やら、私が懐にも太神宮の守お祓、穢すは後生の障りなり。地藏堂へ納めませう。」「オ、氣が付いた。」と取り出す。浮線綾に紅絹裏の袋を開き、月影に讀んで見れば、正一位大原太神宮、丹波國の住人、伊達の與作が一子與之助息災延命、南無三寶。さては三つで別れたる、我が子の與之助なりけるか。我を親とは知らねども、與作と言ふ名を大切に、慕ひし物を氣もつかず、盜みをさせておきめにあふ。手を出して我が子の首を、切つたと同じ事よ。」とて、とんと座して足ずりし、聲を上げてぞ

と、本繩に縛りあげ、「宿の莊屋へ預けおく。この方よりも人をつけ、代官所へ渡すべし。たち上れ。」と引立つる。母は性根も泣き入つて、前後もわかずみだるれど、「このお目出度い道中に、繩付などは見ぬもの。」と、人に誘はれ力なく、見返り〳〵奥に入る。子は又母を見送りて、顏をうなだれ目を塞ぎ、聲をも立てず歎きしが、「ム、これぞ本望々々。惡名取つて人には踏まれ、助けられても生きて居ぬ。一人死のより人きれば、往にがけの駄賃ぢや。父樣も母樣も、誰も一度は死ぬるもの。來世で緩りと逢はうまで。あの世から來てあの世へ歸る。戻り馬やろい、ほてつぱら奴。」と惡びれぬ、所存は侍勝りかな。「惜しい奴ぢや。」と涙ぐみ、引いて歸れば本陣は、火の用心の聲許り、物靜かにぞ成りにける。與作は取沙汰聞くと等しく、科を我が身に引きうけんと、驅けつけ見れども、早落著して竊かなり。本陣も門しまり、四邊もひつそと靜まつたり。小萬待ちかね格子叩けば走りより、「どうぢやどうぢや仕損うたげなう。」「ア、仕損うただんかいの。私や爰から覗いた、八藏まで殺いたわ、ありや皆私等が身代り。明日の日中に斬らるゝげな、可愛い事を仕まする。」と泣きさゝやけば、「南無阿彌陀、南無阿彌陀、そりや皆こちが殺すわ。こちとはいかい業人。」と、顏を見あはせ泣き居たり。「なう三吉より一時も跡に下つてなるまいが、こなさんどう思うてぞ。」「ム、その覺悟極まれば、もう落著いた滿足した。宵からさうは思うたが、親父の難儀を見捨てては、死なぬ氣であらうかと、胸にば

は存ぜねども、お前一人に恥かしい。父樣のためかとは、恨めしの仰せやな。父樣がある程なれば、馬追は致さねども、在所知らねば顏も見ず。又母樣も持つたれども、女子の身の不甲斐なさ、奉公人のはかなさは、今では他人も同じ事。たとへ言譯立つてから、盗人の名を取り、見苦しいめにあうては、父樣に顏はむけられぬ。早う殺してもらひたい。その樣におつしやれて、可愛がつて下さる程、どうやら心がうろたへて、死にともなうなりさうな。奥へ入つて下され、もう顏見せて下さるな。」と兩袖を目にあてて、泣きしづみたる利發さに、母はなほしも心くれ、「命はお乳が貰うた、助けて下され侍衆。」と、「わつ。」とひれ伏し聲を上げ、人の推量思はくも、忘れはててぞ泣き居たり。家老の本多奥より出で、「樣子つぶさに承る。盗み物出るといひ、殊に道中他領の者、これ式の事評議に及ばず。お助けなさるゝ立ち歸れ。」と、引立つれば三吉、「この恥かいて助けられ、何と生きてゐられう。慈悲なら切つて貰はう。」と、猶座をしめて立たざりし。「エ、小しやく者。輕い科を成敗とは、古今の掟にない事、立つて失せう。」と怒らるゝ。「ム、この分ではどうでも命助かるの、ォ、聞えた。」とつゝと立ち、「こりや八藏め、おのれは己をよう踏んで、面に疵をつけたな。元來我は武士の子ぢや、人に踏まれて生きては居ぬ、覺えたか。」といふ詞のうち、中間が脇差ひらりとぬき、飛び掛つて八藏が、首打落せし早業は、またゝく間の稻妻なり。「すは人殺し。」と取つて伏せ、「もうこのうへは料簡なし。」

む目の中に、無念涙をはらはらと、思込んだる腹立の、稚心の念力は、悚と身の毛も立ちにけり。母お乳の人聞き付けて、驅け出で見れば大勢に、取り圍まれし我が子の體、「あつ。」とばかりに腰もぬけ、呆れて泣くより外はなし。人々に悟られては、今まで包みし甲斐もなく、お姫樣の乳兄弟、馬方して盗みしてと、言はれんも口惜しく、不便さ憎さ腹立さ、「ヤイそちは國から目をかけて、情を加へた甲斐もない、さもしい事をし出したな。筋目も有りそな者なれども、さすが育ちが恥かしい。その心ゆゑ親々も、知つても知らぬ見ぬ顔して、その馬方とはなりつらめ。此方も子を持ち覺えがある、皆親心は同じ事。若し母などが聞き付けても、我が子の命を助けんため、火水の底へは沉まうが、この場へ助けに出らるゝ物か。見殺しにする樣なれど、心の中では神佛に、命乞して踠くぞや。年にもたらぬ心から、恐ろしい事する筈もない。父親が貧しうて、言ひ付けて盗ましたか。但しは人に頼まれたか、言譯あらば仕てくれよ。母の心を推量し、この頃の馴染もあり、兎に角命が助けたい。姫樣のお名を思はずば、このお乳が産んだ子で、姫樣の乳兄弟と、いうてなりとも助けたい。何うなりと斯うなりと、言譯あらば仕てくれ。」と、魂の底心の底、肝より出づるうき涙、當番吟味の人々に、推量もしてくれかしの、心遣ひ目遣ひを、夫れとも知らぬぞ是非もなき。三吉も母の顔、見上げ見おろし、涙にむせび居たりしが、「申しお乳樣、さもしい盗みいたしても、馬方の事なれば、誰恥かしと

つて、内より戸をざさいたりける。夜廻つゞいて飛び付き、乘物の戸をしつかと押へ簾を揚げて、「ヤア奴めか、これは御前のお金袋。サア馬方の三吉めがお金袋を盗んだ、出あへ〳〵。」と呼ばはりし。これぞこの世の地獄おとし、かゝる鼠の如くなり。本陣の上下殘りなく、下宿の諸侍、鄰町鄰家の旅籠屋ども、棒、ちぎり木にて驅け付け、海道の眞中に乘物かきする高提灯、四邊巖しく取り卷きたり。當番下知して、「丁稚づれに仰山な、それ引き出せ。」「畏まつた。」と荒子共戸を明けて、「サア出ませい。」と小腕取つて引き出す。「これ旦那殿、盗んだ金は返します。」ときよろりとしてぞ居たりける。

「いか樣にも幼少な、彼奴許りではあるまい、同類を穿鑿せん。馬差は居らぬか、當宿に泊つたる馬子ども、殘らず召しよせよ。」「あい。」と言ふより觸れまはり、皆々一緒に相つむる。八藏も大酒して宵より關に泊りしが、「盗みかはくは何奴ぢやい、ヤアませの自然薯めか。おのれなら尤もろくで果てまい奴ぢやと、常に言うたが違うたか。馬方仲間の恥さらし、エ、磔柱め。」と、脊骨をどうど踏みければ、俯けにかつぱと伏し、額を石にすり破り、血は紅と流れたり。「無念なおのれ踏んだか、肢骨もいでくれう。」と、立ち上ればひつすゑ〳〵、「そこな馬子めも慮外者。武士の前にて脛ざんまい。」と、さん〴〵に叱らるゝ。「エ、彼奴に踏まれたか。下々の刀でさへ、切られまいと思ふに、脛にかけてこの樣に、顏に疵を付けたなあ。首がとんだらおのれが面へ食ひ付いてくれうぞ。」と、はつたと睨

込んで頼むと、のぼせば此奴がのぼされて、成程盗んでくれうといふ。なれば上々、ならねば元々。」いひもあへぬに、「いや〳〵、人まで罪に陥す事、止しにして下さんせ。」「ハテ氣の細い。現はれて彼奴が打たるゝ分。三吉いよ〳〵頼んだ、ひかせはせぬ。」と言ひければ、「はれやれ〳〵〳〵しちくどい。盗んでいらずば捨ちやいの、この自然薯が頼まれて引きはせぬ。ハテ親はなし一門なし、※げんこ取りよる小さい首、意氣づくなら取つていけ。盗みして現はれ首きらるゝが不思議か。」と、義を立てぬきし侍氣、盗む黄金もくちせざる、筋目恥かし哀れなり。「オ、頼もしい、命掛けて頼んだ。」と、ありたけそやされ、「ハテイ味方があれば氣がおくれる、何處ぞへとつと退いて居や。ヤァ小萬女郎、この守が預けたい。」「ハテ守はかけて居やいの。」「いや〳〵これには私が本名が書いてある。若しあらはれて捕まへられ、人に見せれば恥辱ぢや。」と、解いて預けし神妙さ、裾ねぢからげて忍び入る。「坂の下の彌六が方へ退いてゐて、夜中時分に戻らう。小萬もはひりや。」「わしやあぶなうてきやきやする。南無地藏樣々々。」「エ、今願立がきくものか。聲が高い潛かに〳〵。」ひそ〳〵と、胸はだく〳〵ぼくの、坂の下へと別れける。武家は道中掟にて、半時がはりの拍子木の、數も九つ、十に餘るやあまらずの、子供心の愚かさは、盗みおほせし嬉しさに、拍子木を除けもせず、金襴の財布さげながら、門口へずつと出る。夜廻ちらりと氣をつけて、しだひ寄れば狼狽へて、乘物に逃げ入

と言ふ博奕打の盗人めに、有りたけこたけ仕揚げて、夏の物は半がいに、襦袢が一枚なささうな。與作が掛が餘程ある、皆おれが請合ぢや。帳面は忘れぬ、旅籠が六かたけ、酒が四升五合、十文盛が七十杯。芋と鯨の煮賣が八十五杯、食らひも食らうた蒟蒻の田樂を百五十串、蒟蒻の錢ぢやとて、砂にしてすはせうか。盗人におひなれば、この出入はこちや知らぬ。與作めが身の皮はいでも、二石二斗が物はない。馬を質に押へて、彼奴に屹と濟まさせ、小萬を內へ入れておきや。皆御大儀でござる。」と、辭儀もそこ〳〵戶を立てて、錠さす音こそ嚴しけれ。莊屋、問屋、組頭、「扨々與作といふ奴は、存じの外の大食、旅籠から盛切から、蒟蒻食うて煮賣食うて、その間に小萬といふお山を夜食に食ひをる。」と、面々宿にぞ歸りける。與作は肌に冷汗流し、やう〳〵這ひ出で樞の節穴、蔀の隙閒覗け覗けど見えばこそ。竹櫺子の出格子に首を伸ばして取り付けば、內より顏がによつと出る。ちやつとひけば、「ア、大事ない〳〵、コレ私ぢや。」「小萬か。」「與作樣か。今のを聞いて下んせ。悲しい事に成りはてて、籠の鳥になりました。私がかうなる上は、父樣へ難儀はもうかゝらぬ。こな樣にあふ事はならうやら成るまいやら、これが別れにならうやら、下から上ははかられぬ。」と、手に取り付いて泣きければ、「イヤこれくもにしるが出來てきた。どうした緣やら三吉めが、與作と言ふ名にほれて、常におれを大事にする。乘物の內でたらしこみ、鄰にとまつた大名の、金を盗んでくれまいか。男と見

横腹を踏みくさる、何者ぢや。」と、小丁稚が大欠伸してによつと出る。「ヤア石部の自然薯か。」「與作殿か。」「そちは爰に何して居る。」「おりや江戸へ通しの馬追うて本陣に泊るが、夕飯過ぎから眠たうて、爰でぐつとやつたもの。あり樣はこりや何事ぢや。」「いや氣遣ひな事ではない。鄰の旦那に逢ひともない。爰へ隱してくれ。」と言へば、三吉四邊をすかし見て、「其所なは小萬か。エ、〱甘いな甘いな、おりやとうから知つて居る。外の人なりや成らぬが、與作といふ名でいとしい。與作の事なら引きはせぬ、隱してやらう、サアはひりや。」と膝おし合ひし志、知らねど親に孝行の、通ずる念こそ哀れなれ。程なく亭主門口から、「内外の者ども皆起きよ。問屋殿、莊屋殿、組中殘らず御座つた。嚊も起きて出や〱。」と、わめく聲に出女ども、※いはらじ諸共表に出づる。莊屋、問屋、口を揃へ、「※おかたお聞きやれ、今日の寄合は、これの小萬について代官所のお差紙。小萬が父親横田の彦兵衛四年このかた二石二斗の御未進にて水牢に入れられたを、小萬が願ひ請負故、出牢仰せつけられた。宿中としてきつと取立て納めませいと、すなはち小萬をお預けぢや。ようお聞きやれ。」と言ひ渡す。小萬うつむき涙ぐむ。女房も驚きて、「おとましい事仕出しやつて、主に厄介かけやるか。」と、言へば亭主とがり聲、「なんの主の厄介、一文もこちや知らぬ。上り下りの旅人衆も、關の小萬と言ふ名に恥ぢて、百やる人も二百やる、一匁の貰ひも※鷗尻に取りをる。百目や二兩は半年にもたまれども、與作

て堪忍したら、其方はよかろ、おれがわるい。與作めの博奕うち盜人と、この門からわめいて往く。」「なうこれ〳〵爰に百三十匁、命がはりの金なれども、男の爲ぢや惜しうない。これで濟まして下され。」と取り出すをひつ奪り、「必ず跡もすませよ、錢の直段はどうせうぞ。」「ハアテそこらは構はぬ、そなたの勝手にしてたも。」「そんならこれで拾貫分、相場は十三もんめん。」巾著、捩ぢこんでこそ歸りける。小萬は小首を傾け、溜息ついて立歸り、「さきの金を渡してやう〳〵といなせた。あれ等との交際、重ねておいてもらひたい。」とつぶやけば、與作肝つぶし、「その金渡してよい物か、取りかやさう。」と立ちあがる。「これ待たしやんせ。人の物負ひながら、返さいでよいかいの。昔とちがうて當代は、道中筋も吟味つよく、馬借問屋へ斷られ、惡名が立てば、とん〳〵とすたつて出入の門も塞がれば、おのづから逢ふことも成らぬ樣に成りはて、萬一お國へ聞えての恥辱は二度返らぬ。父樣の未進もいひ延べるだけ言ひのべて、叶はずば水牢へ代りに私が入る覺悟。差し當つた男の難儀、救へば私が本望。」と、いへども與作聞き入れず、「馬方風情に何の恥辱、うき身窶すは親の爲、その金をやるものか。」と驅け出でしが、「南無三寶こりやならぬ。これの旦那の左次殿が、何事が出來たやら、問屋組中つれだち、それ其處へ戻らるゝ。なんの彼のが喧しい、一寸隱れて逢ひともない、馬も何處ぞへ引いてくれ。」と、鄰の店の幕の陰、乘物あるを幸ひに、戸をあけ片足踏こみめば、内より、「あ痛〳〵。

藏殿、こなたは粋の樣にもない。其方も此方も親方持、馬をやつて能からうか、取つてこなたを褒めうか。聲高にいはずとも、料簡づくがよいわいの、情なや。」と泣きければ、「ヤイ爰な引下れ。その涙は與作に泣け、こちや忝うないわいやい。取るべき錢はとらずに、馬を取るが料簡ぢや。」「いやそりや成らぬ。この門に繫いだ馬は、この小萬がやらぬ、關の小萬がやらぬぞ。」「イヤ死女郎のふりばりめ、竹の鞭をくらふなよ。」「オヽ女子を相手にならばしや。」「ヤア仕かねうか。」と、鞭を持つてはたとぶつ。與作、小萬を押し退けて、「あれは餘所の奉公人、なぜくはした。」「オヽ汝が女房ぢや所でくらはした。」「ムヽようくらはした。女房どもの返禮。」と、拳を固めて目鼻の間、缺けてのけと打つたりけり。「來い、する氣なら仕て見せう。」と、互にこづかを取つては投げつ投げられつ、ぶつつぶたれつ摑みあふ。誠に馬子の喧嘩とて、馬の踏み合ふ如くなり。八藏は力許り、與作は取手柔術取、すりちがひに小腕を取り、脾を蹴返し、「こりやあ。」と取つて投げつくる。門柱に腰骨うち、よろつきながら睨みつけ、「どうずりめ覺えてけつかれ、問屋、馬差、親方へことわつて、海道筋の※御器の實をぶちあけ、薦かづかせて見せうず。」と、身を捩ぢ振つて立歸る。小萬追付き、これ八藏殿、公用勤める馬方が、馬差、問屋へことわられ、何處で身が立つものぞ。この小萬が手を合はせる、男は當つて碎けいぢや、堪忍して下され。」と、詫びる程なほつき上り、「十六貫といふ錢貸してその上に、投げられ

殺させはせまいと、瘦我をはつての出來心。千三百石から馬追まで、成り下るぼんのくぼ、よい事はない筈と、思はなんだは身が不覺。これは主の天罰とあきらめて濟ますが、しこり博奕の榮耀とは、さりとは小萬むごいぞや。皆これそなたの親の爲、胸に書付あるならば、爰が立割り見せたい。」と、打ち叩いたる胸當も、しぼる許りの恨み泣き、小萬、「これは。」と手を合はせ、「忝うござんする、とうに言うて下んせば恨むまいもの、堪忍して下さんせ。父樣の出入も夏の物ども人手に渡し、傍輩にも無心いひ、百三十匁とゝのへ、まちつとの所は賃麻もよつほど績みためた、これ見さんせ。」と、苧小笥より金取り出し、「父樣の命代、落著いてくださんせ。日が暮れて間がある、よもや八も來をるまい、泊人はなし私も隙、馬は向ひに繫いで、中の間に寢ていなんせ。互の憂きを散ぜう。」と、草鞋の紐解く所へ、石部の八藏きよろ〳〵目して來りしが、「ヤァ與作か。人の馬をことわりなしに、美濃路まで隱れもないひぬかの八藏、目の荒い男知らぬかい。十六貫を只せうや、どうずりめ。」と、馬を解く手を飛びかゝり捩ぢあげて、「こりややい、われがひぬかの八藏なれば、おれは丹波與作ぢや。二百目のかたに五百目の馬をほしいか、遣つたら機嫌がよからうな、三百目のつりを持つて來い。五十三次に汁かけて、かみこなす與作ぢや。すないやい〳〵、ほてつぱらめ。」と振りちぎる。「ヤイ男達はおいてくれ。錢濟まいてしたかせい、腕づくならサア來い。」と、ぶつて掛れば、小萬取り付き、「なう八

一文はねて六文にして、當ててとらうと思うて、一文しやんとくろめて、ついて見たれば悲しやの、八文であつた物、一文はねて七つにして、彼奴が壺へあてがうたは、どうした因果の固まり。此方やげんなりとなる程、八めはいきつて、『馬を取つた。』としがみ付く。今日の乘手は氏神、『約束の馬次までやれ〳〵。』と促まるゝ。八めも武士を乘せたれば、『なぜ馬を追はぬ。』と目のぬける程叱られて、『窪田で旦那を下して、追付馬を取りに行く。』と、早追程に追つて來る。親方の馬をとられては、この街道はいふに及ばず、木曾街道、中仙道、たゝずみが叶はぬ。八藏めが來ぬ中に、早う内へ往にたい。」と、溜息ついて語りける。小萬心も暗闇にて、「人の沙汰に違ひはない、世につれるとは云ひながら、さもしい心にならんした。古はお歴々、私等ふぜいは下司にもお遣ひなされまい。縁なればこそ膚ふれて、抱いつ締めつのわりない事、嬉しいやら悲しいやら、一倍いとしさ增すものを、惡い病がつきました、そりや雲介の身持ぞや。友達仲間の交際で、引かれぬ事があるにもせい、私が親の未進米この六日の吉書に立てねばもとの水牢。この世から八寒の地獄へおとす私が心、苦にかけうではなけれども、案じても下んせず、しこり博奕のわる遊び、扠もつれない氣と思へば、熱い涙がこぼるゝ。」と、せき上げ〳〵泣きければ與作、「わつ。」と泣き出し、「そりや曲がない〳〵。慰みにも慾にもせぬ、其方の親の未進米、二石二斗は何程ぢや。昔與作が草履取、馬取の切米。これで可愛いそなたが親を

そ、金に直いて一歩二朱の借錢負うて、肩の重い石部の八藏に請合うて貰うた。これを軍の始めとして、大津八町で八百まける。小野の宿の小町塚で、九十九文してやらるゝ。磨針峠の氣が細うては勝たれぬと、綣村の上で分別しかへ、守山の觀音堂で、三十三匁が質おいて、心は鬼神と出たれども、土山の田村堂で、つい平らげてのけらるゝ。伊勢へ通しにいつた時、宵から曉の、明星が茶屋で飲み干す樣な大ぐさり、借錢の利を一月に二月をどる松坂越えて、雲津の渡で算用したれば、二貫宛四つ合はせて、二四が八藏めに八貫の借錢。これはならぬと思ふ所へ、向うから馬追うてうせをる、じたい八めはぶう〳〵なり。おれが胸座しつかと執つて『こりや貸した錢はどうする、見忘れたか八ぢや八ぢや。』と螫すやうにいひをる。諄々と見苦しう、詫言もして居られず『錢と言うて今はない、正味でかつた錢ではなし、數ばかりの勝負づく。一晩切について見て、八貫を濟ますか十六貫負ふ物か、サア來い。』というたれば、八めは數年の通り者『こちは八貫出して置く、負ければそれで取り遣りなし、勝てばむして十六貫、何で濟ます合點ぢや。抵當もなうてはいやぢや。』といふ。此方も引かれぬ言ひ掛り、『これこの馬を知つたか、池鯉鮒の市で九兩一分、親方の物なれど、十六貫の代りに、五百目の馬ならしてこい。』と、木陰へよつて錢にぎり『サアどうぢや。』というたれば、『三まいせい七つぢや。』と二文張りをつた。まつかせとつく程に手の内に殘つたは、確か七文、南無三寶しまつた。

とも白子屋の店頭に馬引付け、「こりや小萬、この旦那殿馳走してとめましや、お供かけて二人ぢや、サア下りさつしやれ。」と荷物解く。小女郎、小善取り〴〵に、「それお足の湯、先づ奥へ、合宿もござりませぬ、ひろ〴〵と御休みなされませ。」と、奥にともなひ入りにけり。與作は荷物も跡付も、そこそこに投げ下し、「小萬この中逢はなんだ。無事で嬉しい、軈て逢はう。」と馬の口取り驅け出す。手綱に縋つて、「これなんぞ、語る事がたんとある。此方もいふ事ある筈ぢや、そは〳〵せずと待たんせ。」と引き戻せば、「エ、邪魔な、その話はいつでもなる。急な事ぢや遣つてくれ。」と、振りきれば抱きとめて、「これどうぞいの。何がそれ程忙がしい、どうで心に一物有る、譯を聞かねば遣りはせぬ。」と、店にとんと抱きすゑられ、「ハテ荷物さへおろしたに、一物が有るものか。氣づかひさうなに、短う話して聞かせう。この不仕合を聞いてたも。傍輩どもが※けんねじついて、錢儲けする羨ましさ、勢多の久三がどうの時、百切はつて見たれば、勝つ程に〳〵一息に七百。こりや門出が面白いと、腰にひつつけ、しやん〴〵と鈴鹿で皆ついて居る。爰へもちよつと出かけて、又六百してやつた。これでおけばよい物を、慾には見えぬ目川村の、馬子ども寄せて我らがどうを取つたの。當らぬか〳〵、晝さがりから七つまで、一文と六文の錢の顔を見ぬ程に、前の勝をぶちこんで、五百餘りのしすごし。どつこい何處ぞでこの損を、梅の木の是齋の辻で、身を粉にはたいてやつて見た。和中散でもきくにこ

親方の駄賃の算用も立たぬげな。聞けば小萬の知音の與作も、博奕の友ぢやげな。與作がいとしか意見しや、小善も取沙汰聞きやらう。」といへば、小善小聲になり、「さればうちの旦那が、龜山の問屋で聞いて來て、これの小萬が懇する馬方の與作めは、博奕打の大將ぢや。あれから盜みの下地ぢや、重ねて來たともあしらふな、餘程彼奴に掛もある。丸裸にしてなりとも、懸を取つてそれからは、門詰も踏ませまいと、夫婦囁きうなづいて、寄合にいかんした。」と語りもあへぬに、小萬はら〳〵涙にて、勤めの身にもおぢやれの身は、下の下といふは爰のこと。傍輩衆へもいはなんだ、横田村の父樣二石二斗の未進につまり、六十六で水牢。男にも娘にも、子とてはこの身ばかりなり。しよざいこそ出女なれ、お大名へも知られた關の小萬が父親を、水牢では殺されず。參宮するとて隙もらひ、女子の身で代官所を、秋納めまで請合うて、牢を出しは出したれども、何をあだてに※何とせう。前の樣に客は勤めず、私仕事に賃麻績み、女中とまりの袖の下、小萬といふ名でほつ〳〵と、鶴の哀れや淺ましや。請合の日は近付く、氣がいさまねば身もやせて、辛苦するのもあの人の、身をもくろめて遣りたいの、念力一つで立てる身が、世間で惡う謠はれて、まめしげもなき浮世や。」と、苧小笥にひれふし歎きしが、「あれ〳〵あそこへ謠うて來る、本小室のひんぬきは、與作々々。」と小手招き。唄「捉も見事な、ソンレハおつゞら馬や、七つ蒲團に、ソンレハ曲彔据ゑて。」我も昔は乘りし身を、人は夫れ

掛子そこひには、戀に心を捻り麻の、苧綛亂いた胸の中、何となら麻のうき身ぞや。「なう小善、小女郎、かうした勤めさま〴〵あれども、君傾城といふ者は、この類での王樣。それから段々ある内に、※おぢやれの身には何がなる。朝の夜から店ざらし、晝休みから泊りまで、吉原雀の鳴く樣に、息のありたけしやべつて、それでも泊人ある事か。如何した事やらこの頃は、一膳盛の客さへない。鄰にはあの樣に大名のお姫樣、今日で三日の逗留、宵朝百六十人、どつぱさつぱと忙がしい。これの内はいかな事、下宿さへ泊りがない。晩にはみんな覺悟しや、旦那殿のにがい顏、日頃生えた角に股が咲かうぞ。なう怖や。常にひいきな馬子衆も、こんな時に客ひいて、くれそな物ではないかいの。やそれについて小女郎、そなたのおてき松坂の七二は、何として見えぬぞ、口說でもしやつたか。梯子の下のごそ〳〵が過ぎて、氣色でもわるいか。餘りごそ〳〵ごそついて、馬は追はいで頤で、蠅追やろぞや。」といひければ、「ム、その七二とは九郎助の事か。それは末生以前で、今は挨拶きり〴〵す、しいといふ馬追ひ聲も聞かぬわいの。初めはたんと可愛うて、元結の脚絆の鬢付買ふの、帶買ふの、沓の錢まで續けた、その私が目をぬいて、一人か二人か水口の、火繩屋のおげん、まだ土山の櫛屋後家、庄野のふとのお米が俵腰に喰付いて、馴染のおれを鼈ぬきに逢はせた。それもいうたら止むにもせい、※ほでてんごうの貧乏神、何もかもほつきあげ、今は布子と襦袢と、たつた二枚の四九をやつて、

「これ泊りぢやないかえ。とまりなら泊らんせ、泊らんせ〳〵。旅籠安うて泊めませう。上旅籠中旅籠おのぞみ次第すき次第、椀家具も綺麗な、座敷はこの夏表がへ、寢道具ようて酒ようて、お茶は上上。木賃でなりと、据風呂もしやん〳〵、掛り湯取つて加減見て、旅の汙れのあかつきは、七つ立か八つ立か。枕のお伽が御用ならば、振袖なりと詰なりと、足摩つて腰打つて、吸付煙草の煙管の鴈首筋もとから、ぞつと庄野の六藏でないか。よい女郎衆乘しやつて足許が輕いの。」「おいてたも、アしやら。」「草津の三介三藏、石部金吉泊りならとめてたも。何ぼ先へ行かんしても、旅籠屋は皆一つ。同じねを啼く鶯の、春はござれの伊勢衆でないか、目元にしほがこぼれる。爰へ見える坊樣はこの暖かなに紙子著て、仙臺の坊樣か。あの旅人は京の八幡の生まれやら、足に牛蒡の毛がむく〳〵ぢや。向ひ通る菅笠樣。足許腰元身のまはり、すつきり綺麗に掃いた樣なは、伯耆の國の人と見た。これ〳〵爰な若衆樣、越後衆か明石か、鬢がちつくり縮んだ。あれへ大名一かしら、瓜ざね顏の旦那殿、東寺から出た人さうな。後から御座る角前髮、吉野の衆か鼻が見事。これへ見えた飛脚の、足許のねばいは三河者に極まつたぞ。常陸の衆は帶で知る。これこゝな奴殿、越中國の人と見た。なんで見たればこの下紐を、解いて一夜は泊らんせ。」夕暮は急ぎの人も呼びとむる、色こそ道の關の地藏、白子屋の左次が内、小萬、小女郎、小善とて、百二十里の名取ども、人呼ぶ片手の袖の下、苧小笥の

目を隱し、沓見まつべて腰につけ、見すぼらしげな後影、「こりやま一度こちら向きや、山川で怪我しやんな。雨風雪ふり夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩はぬ樣にしてたも。毒な物食はずに、腹や痲疹の用心しや。可愛のなりやいた〳〵しや、千三百石の代取が、何の罰ぞ咎めぞ。」と、式臺の段箱に、身を投げ伏して歎きしが、懷中の有合はせ一歩十三袱紗に包み、これたしなみに持つて居や」と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに、「母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ、その一歩もいらぬ。馬方こそすれ伊達の與作が總領ぢや、母樣でもない他人に、金貰はう筈がない。エ、胴慾な母樣、覺えて居さつしやれ。」と、「わつ。」と泣き出すその有樣、母は魂消え入りて、「養ひ君お家の御恩思はずば、扨一人子を手放して、なんの遣らうぞ。奉公の身の淺ましや。」と、悶えこがれて歎きける。時に奥口ざゝめいて、「早御立。」と姫君の、御輿舁きあげ行列立て、お乳の人の乘物を、平付にこそ舁き寄せけれ。お乳はさあらぬ顏付して、「姫君のお伽に、最前の馬方をこの乘物に引きつけ、お慰みに謠はしや。」「畏まつた。」と宰領ども、「こりや其處な自然薯め、謠ひ居らう。」ときごつなく、「ヤア此奴はほえをるか。何ぢやこりや忌々し。」と、握拳を二つ三つ、いたゞきながら泣聲に、唄「坂は照る〳〵、鈴鹿は曇る。土山、間の、間の土山雨が降る。」降る雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ 三重 雨やどり。

の乳離れ、お苦しみをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。殘つて御恩を報じてくれと、父樣のことわり故、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたわいの。男の子は幼うても、御勘氣の末氣遣ひな。與作の子とばし言やんなや、サア早う御門へ出や。アアいかなる因果な生まれ性、現在我が子に馬追させ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿にのつたとて、これが何になる事。」と、聲を忍びに泣くばかり。子は生まれつき賢くて、聞分有る程なほ泣き入り、「悲しい話を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君樣と私とは、乳兄弟の事なれば、母樣にさへ逢うたらば、父樣も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし。」と、いへばちやつと口を押へ、「ア、〳〵勿體ない、その乳兄弟いはぬ事、姫君樣は關東へ養子嫁御にお下り。高いも卑いも姫御前は大事のもの、先は他人の世間體、三吉といふ馬追が、乳兄弟に有るなどと、どう妨げにならうやら、蟻の穴から堤も崩れる、輕い樣で重い事。ひそ〳〵いうて人も聞く、先づはやう出てくれ。」と、泣く〳〵言へば三吉、「ア、母樣あんまり遠慮過ぎました、先づいうて見て下され。」「まだいひ居るか聞分ない。夫の事我が子の事、母に如才が有るものか。合點の惡い聞分ない。」と、制するうちに奥よりも、「お乳の人はどこにぞ、御前から召します。」と呼ばはれば、「あれ聞きや、人が來る、出てたも。」と、手を取つて引き出す。不便や三吉しく〳〵涙、頰冠して

點させ、恥ぢしめて返さん物と、涙のごうて氣を鎭め、「爰へ來い與之助。」と、引寄せて兩手を取り、「扨も大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしう何故尋常にも育たぬぞ。顏の道具手足まで、母はかうは產みつけぬ。美しい黑髮を、この樣に剃り下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ。」と、又さめ〴〵と泣きけるが、「これ物を合點しや。腹から產んだは產んだれども、今では子でも母でもない。あさましう成りさがつたを、嫌うていうではさら〳〵ない、爰の譯をよう聞きやや。母はもと御前樣の奉公人、與作殿は奧小姓、互に若氣の戀風に、すれつもつれつ一夜が二夜と度重なり、通はせ文をお次に落し、小姓目附に拾はれ、武家の作法といふ內に、殊にお家は御法度きびしく、御家老衆の評定、父も母も御成敗と極まりしを、御前樣のお身にかへ、お命かけての御訴訟、殿樣の御慈悲にて科を許されその上に、表だつて夫婦になされ、與作殿は段々に、奏者役番頭千三百石までお取立、追腹程の御恩の家、その間に其方を設け、上には姫樣御誕生、御內證の好意にて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、其方も今家老衆の子同然に、二番と下座に下らぬ人。情なや父樣が江戶詰の山谷がよひ、大事の所を仕損ひ、また切腹に極まつた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姬樣の乳離れ、御病氣も出れば如何とて、母をその儘殘さう爲、父樣の命助かり、奉公構ひの御改易。その時母も一緖に退けば、尤も夫婦の道はたつ、お姬樣

んの無い事申しませう。私が親はお前の昔の配偶、この御家中にて番頭伊達の與作、その子は私、此方樣の腹から出た、與之助はわしぢやわいの。父樣は殿樣のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覺え。沓掛の姥が話には、母樣も離別とやらで殿樣に御奉公、此方を姥が養育し、父樣に逢はせたう思へども甲斐もない。母樣の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人滋野井樣と尋ねよと、懇に教へて姥はおれが五つの年、久しう痰を煩うて、擧句に鳥羽の祭に往て、餅が咽につまつて、遂に死んでのけました。在所の衆が養ひて、やうく馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする。これ守袋を見さしやんせ。何の譃を申しませう、お前の子に紛れはない、外に望みは何にもない。父樣を尋ね出し、一日なりとも三人一緒に居て下され、みごと沓も打ちまする、この草鞋も私が作つた。晝は馬を追うて夜は沓打ち草鞋作り、父樣母樣養ひませう。父樣と一つに居て下され、拜みまする母樣。」と、取りつき抱きつき泣き居たり。お乳はハつと氣も亂れ、見れば見るほど我が子の與之助、守袋も覺え有り、飛びついて懷に抱き入れたく氣はせけども、アツア大事の御奉公、養ひ君のお名の瑕、僞つて叱らうか、イヤ可愛げにさうもなるまい、まあちよつと抱きたい。ア、どうせうと、百千色の憂き涙、二つの眼には保ちかね、咽び沈みて居たりしが、いやく我が子ながらも賢しい者、僞つて實とせず、母の心のきたない者と、蔑まるゝも情なし。譯を語つて合

お江戸に著き給ふ。「一の裏は雙六の、さいはひあり喜びあり、慰みありける道中。」と、どつと興にぞ入り給ふ。お傍の衆に囃されて稚心の姫君、「かう面白い吾妻とは、今まで己は知らなんだ。サアサア往かうはや往かう。」「やア御座らうと仰しやるか、そりや目出度いわ〳〵。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ。」と立騷ぐ。お乳の人は勇みをなし、「そんならま一度、大殿樣お袋樣とお杯。これも馬子殿おかげぢや、出來いた〳〵。其方には禮いふ褒美やる、其處に待ちやや。」と、ざゝめき渡り奥に御供し入りにけり。馬方は遂に見ぬ金の間をうそ〳〵と、覗き廻れど筵の外、踏みもならはぬ備後表、「エ、この座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも、此方の内が結構で御座る。」と、獨言して居たりけり。お乳の人は大高に、お菓子さま〴〵文匣に盛り入れ、「どれ〳〵三吉其處にか、まあまあ其方はけな者ぢや。道中雙六お目にかけ、夫れ故に姫君樣、お江戸へ御座ろと御意なさるゝ。お上にも御機嫌、これは御前のお菓子、有り難う頂きや、お錢三筋買ひたい物買やや。殊に其方は通しぢやげな、道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢はうといや。見れば見る程よい子ぢやに、馬方させる親の身は、よく〳〵で有らう。」と、いと懇の詞の末、三吉つく〴〵聞きすまし、「由留木殿の御内、お乳の人の滋野井樣とはお前か、そんならおれが母樣。」と抱きつけば、「ア、こは慮外な、おのれが母樣とは、馬方の子は持たぬ。」と、もぎ放せばむしやぶりつき、引きのくれば縋りつき、「な

とどさ草津、お姫様より先づ姥が餅、一口二口水口泥鰌跳り越え、坂へ越すのも采次第、采を振れ振れ、振るや鈴鹿を後に下れば、負けまいとせきに關より龜山に、煙草火打の石薬師、おつと桑名の舟渡、宮へ上れば池鯉鮒へ四里の、宿にころりは　唄　岡崎女郎衆々々々々、岡崎女郎衆と、縺れ寢よやれ藤川に、思ひ／＼の君待ち受けて、解く前垂の赤坂や、吉田、二川　唄　白須賀ちよいと越えて、手判御座るか振袖に、ヤこの／＼新居、今切、舟に召せ／＼、蛤召せの、蛤々濱松まで、舞坂三里ナ馴染見附の泊と聞けば、誰も惜しまぬ縞の財布の袋井や、のり掛川を飛びおりて、機嫌笑顔やサア日坂の蕨餅、腰なは何ぞ日本一の大井川、采に無の字を打出せば、水の出ばなの八十川の、島田、金谷に二日のよどみ、仕合よしの旅すご六里。七里八里も只一足に、先へ／＼と咲き掛りたる、藤枝、岡部、※瀬戸の染飯、※宇都の山邊の十團子、所々の名物買うて、おあしつく／＼つく手鞠子に、ひいふうみいよ、府中、江尻にすつとん／＼、とんと打つたる興津波、松原はるゝ膏藥買うて、月をすひ出せ清見寺、由井、蒲原や吉原の、花の蒲燒名物の、鰻のはだへ沼津の宿、三島越ゆれば箱根へ三里、采目次第にせきこゆる。悪い目うてば手判をとりに、元の京へ立歸る。合點か、ォ、呑み込んだ。小田原外郎、大磯、平塚、藤澤の、さはりもなしに雙六の、さいさきも宜し門出よし。道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷。神奈川越え、川崎を越え品川越え、まづ先驅のお姫様、一番勝に勝色の、花の

の丁稚に、持つて參れと呼うでおぢや。」「心得ました。」と御門に出で、連立ち來たる馬方が、片肌脱いで摑髪、御前近くも無遠慮に、縁先にあげ足して、「やれ〳〵〳〵、あり樣達はあつたぼこしゆもない。傍輩どもとかけどくに、道中雙六打つて、沓の錢程してこませうと思うたに、人を呼び廻つてなんでやる。はれやれ〳〵〳〵、きり〳〵乘らつしやれ、馬やろい。」とぞつこうどなる。「扨々利口な野郎ぢやな。船頭、馬方、お乳の人、此方も其方と同じこと。して年は幾歳、名は何といふぞ。」「年は今年十一。五つの歳から馬追うて、一代若衆にならずに、はえぬきの念者ぢや。所で名は自然薯の三吉。」「扨もよい名ぢや。聞けば道中雙六が有るげな、腰元衆もうつて見や、姫樣も遊ばせ。サア三吉も爰へ來い、苦しうない。」と呼びければ、「あい。」といふより慮外をも、かへりみじかき煙管の煙、立交りたる女中の傍、そぐはぬ樣に見えざるは、さすが童の一徳と、繪を取り出し雙六を、皆打交り遊ばるゝ。

道中雙六

「これ〳〵御覽ぜうたしやんせ。是れこそ五十三次を、居ながらあゆむひざ膝くり毛馬、はいしい道中雙六。」南無諸佛分身と、書いた六字を六角の、釆は櫻木、花の都を眞中に、思ひ〳〵のしるしを置いて、さらば此方から打出の濱、大津へ三里、爰で矢橋の舟賃が、出舟召せ〳〵旅人の、乘り遲れじ

ぬ。サアよいお子ぢやお輿にめせ。」と、威してもそやしても、「いや〱、皆の欺しぢや、何の吾妻が好い所。腰元どもが謠ふを聞きや、サアみんな爰へ出て、いつもの歌を謠へ〱。」とせめ給へば、お伽小姓の頑是なし、十二三なが手を揃へ、唄「山も見えざるかりそめに、江戸三界へ往かんして、いつ戻らんす事ぢややら。殺して置いて往かんせの、放ちは遣らじと泣きければ。」「ア、おきや〱、お大名の宮仕へ。琴の組でも謠はいで、誰に習うて派手な歌、姫樣などに教やんな、必ずおいてもらはう。」と、お乳の人の不機嫌さ。本田もあまり爲方なく、「申しお姫樣、あれは人の口てんごう。花のお江戸は京優り、淺草上野の花盛り、又堺町木挽町の、てんつく〱でこのほう、辨慶や公平が、えいやつとゝえいなどと、切り合ふを見せませう。道中の面白い事、富士の山と申す、天までとゞく山を、御目にかけまするサアお輿に召しませい。」と、力一ぱい賺しても、「いや〱、江戸へは往きはせぬ、どうでもいやぢや。」と泣きたまへば、お乳も今はあぐみはて、どうしてよからう御家老も、呆れてこそは居られけれ。お仲居の若菜は、旅出立に菅笠持つて、門外より走り入り、「なうお乳の人樣、面白い事が御座ります。十ばかりの剃下の小ぼけな馬方が、道中雙六とやら、東海道の繪をひろげ、味な事して遊びます。御機嫌直しに、お目にかけなされませ。」「オ、〱、ようぞ氣がついた。夫れは聞きおよふだ道中の繪を見せまし、お心も移るため、馬子でも子供は大事ない、お免しぢやそ

通りだ。若黨、仲間、荒子、小者に至るまで、大酒を致さぬ様に、馬次舟渡し等にて、がうぎがさつを仕つたらば、曲事でおぢやんべい。又とさ、泊り〳〵の赤前垂に、じやらくら致さない様に、第一お乘物の先で見苦しい。さりながらとさ、長の道中下々が退屈致すべい。若しぬれなどを企つるとも、目だたぬ様に物陰へよつて、ちよこ〳〵〳〵、ぬれたがよくおんじやる。目出度い折柄と申し、殊に女中のお供だ。少々の事は見逃しにして、置き召されつちや。」「あつ。」と答へて宰領ども、「サア御立。」と催す所に、奥より女中聲々に、「ア、待たつしやれ〳〵。氣の毒やお姫様、關東へ往く事は、嫌ぢや〳〵と、やんちやばかり御意なされ、お袋様も殿様も、たらしつ叱つつ遊ばせども、どうでもいやぢやとおむづかり、お乳の人の滋野井殿、種々と申されても、夫れ程江戸へ往きたくば、乳母ばかり往きをれと、お乳の人の脊中を、とん〳〵と打たしやんして、御機嫌が損ねました。」といふ所へ、眉泣きはがし姫君は、「江戸も東もこちやいやぢや、おれは往かぬ。」と、泣く〳〵走り出で給へば、侍衆も下々も御門に驅け出で、家老の外男ぎれこそなかりけれ。お乳の人色を變へ、「これ申し御姫様、下々の子供さへ、九つ十では物の聞きわけ御座ります。あれ見さんせ、百里彼方の山川越えて、白髪かづいた家老殿、皆歴々の侍衆が、迎ひませに參つて、江戸へ御座れば、入間殿の總領嫁御と、傅かれるお身ぢやぞや。お乳の育ての難になれば、女でこそあれ、乳母は腹を切らねばなら

丹波與作待夜の小室節

大名に生まるゝ種の一粒が、何萬石ぞ幾萬人、腹の内から敬ひて、持囃したる舌鼓、丹波國の一城主、由留木殿のお湯殿子、しらべの姫はお國腹、金水引の初元結、まだ十歳の裲襠も、すらりとしたる生まれつき、東の高家入間殿より、御養子分の約束にて、蕾からとる花嫁御、御迎への諸侍、五千石を頭にて、騎馬が二十騎、稚兒醫者は御輿づき。扠大上臈、小上臈、御差、抱乳母、御乳の人、中臈、下臈の供乘物、又者駕籠はいろは付、以上四百八十挺、金、銀、瑪瑙、枝珊瑚樹、研出し蒔繪の長柄の傘、長刀袋、傘袋、時代の金襴、鶴菱、襷、花兎、窠に霰、大内桐、覆ひかけたる挾箱、濃い紅の大紐を、高々と結びしは、盛りの牡丹に異ならず。臺所荷は次傳馬、御葛籠荷物は通し馬、三十駄の馬方の、小歌がなつて小綺麗な、聲のよいのを選られしも、金にあかせし吟味なり。刻限は巳の上刻との定めにて、御迎ひの奥家老本田彌三左衞門、數獻の杯足許はよろ〳〵と、猩々緋の道中羽織、白い所は髪ばかり、きんか頭に顔色も、繻珍の裁著凛々しげに、「何と〳〵、御供廻りが揃つたら、お先手から乘り出しめされ。是れさ文左、源五左、身はおさへを乘り申す。萬事夜前申し渡す

姉御に逢ひ、親御の御骨の側にて、羨ましい最期ぢやが、私は父樣母樣の、悲しい中にも不孝者と、叱られうかと氣に掛り、これが迷ひとなります。」と又泣き出せば、「これ〳〵、宵に母御の下されし杯は爰にあり。手に觸れられし物といひ、志の籠つた形身はこれぞ。」と取出す。「ア、有り難い。丈長の伸びた私を、親の心で何時も童と思うて、抱いて寢て下さんした、その心で死にましよ。」と杯肌に手を合はせ、刃を待つたるその顏。「オ、綺麗な〳〵。其方は母の形身を持つ、我は父の骨の側、夫婦親子一蓮の、示しの時刻延ばされず、只今ぞ。」と脇差拔き胸に押當て、「おんあほきや、べいろしやのまかもだら、まにはんとまじんばらはらはりたや、うん。」と突込む切先の、膽に當れば反り返り、「はりたやうん。」とくり通す、阿吽の息も消え〳〵と、反つつ返しつ苦しむ聲、姉主從は驚きて走り寄つて、「南無三寶、人殺し〳〵よ。」と呼ばはれども、山中夜中聞く人も泣いて麓へ走りけり。久米之介身を隱し、立歸れば骨桶に樒を添へて殘したり。押戴き三拜し、分けて賜はる骨肉を、一つに返す阿字本不生、阿字の一刀これなりと、咽にぐつと突立てて、死骸の上に法の花、梅と枕を竝べける。地水火風の風は山、水は谷水土は又、土砂の功德の眞言祕密、善男子善女人堂、心中かくとぞ聞えける。

心中萬年草　終

ば、切めて死目に逢はうもの、男の身ならば一山を、驅廻つても逢はうもの。女と生まれし惡業は、淺ましや悲しや。」と、聲を上げてぞ泣きければ、夫婦も共に伏し沈み、お梅涙の隙よりも、「親御樣をもお誘ひか、但し姉樣許りか。」「なうその事よ。父樣が去年の冬から煩ひで、この二月の朔日に、六十九にて御臨終、明くる二日に煙となし、今日七日の弔ひを、兄弟一緒に拜まんと、このお骨を持つて上りしに、弟も同じ骨となし、すご／＼歸つて母樣に、何と申さん、定めなの浮世や。」と又潸々と泣きければ、久米之介は我が親の、骨と聞くより氣も亂れ、お梅は一目も見ぬ舅、緣といはうか、因果といはうか、心に含み目に漏るゝ、涙を袖に堰きかねて、「わつ。」と絶え入る許りなり。側に臥したる供の下女、「あれ申し七つの鐘が鳴りまする、善か惡か夜が明けたら知れませう。ア、此方は草臥れて、何が善やら。」欠伸やら、ふら／＼眠る心なき。「ア、それも左樣、御用あるも存ぜず、引留めて長物語、これも他生の御緣でこそ。もし久米が事を聞き付けなされなば、お知らせを賴みます。何れもに別るゝも殊更名殘惜しうて、久米之介が臨終の暇乞をする樣で、心細うて悲しや。」と、物が知らする血の由緣、涙すゝむる許りにて、言はず知らせず別れしは、本意なくも三重又哀れなり。堂の小陰に身を潛め、「片時も娑婆に居る内は、見るも聞くも皆罪障。夜明も近づく、この上に如何なる苦しみ恥をか見ん、いざ死なう。」と囁けば、「早う死に度う御座んする。さりながら此方樣は、餘所ながらも

まいぞ。」と取交す、袂は涙手には珠數、賴めや賴め一筋に、一心頂禮萬德圓滿、釋迦如來信心舍利、舍利々々佛になるとても、又は三途に迷ふとも、一つ廻向の水汲めや、手向の梅の花折坂、辿り越ゆれば曉の、五障の雲に埋もるゝ、女人堂にぞ三重著きにける。若い心の一向に、死んで來世で〳〵と、思ふこゝろのがつくりと、「サア著きました嬉しや。」と、勇むは跡の歎きなり。堂の內には我より先に、泊りし女中の眼を覺し、「申し〳〵。」と呼びかくる。「あい。」といふのも怯氣立ち、身を抱き合ひて居たりしが、「イヤお氣遣ひな者ではなし、私は播磨の飾磨にて、成田武右衞門娘さつと申す者、南谷の吉祥院に、久米之介と申す弟を尋ねて、今日の暮方、下人どもを登せ訪はせても、ありとも無しとも知れ難く、坂の麓神谷の宿を尋ねよといふ人もあり。皆樣所のお衆か。もし御存じもあるまいか。」と、他人に見なす姊弟、後世の闇路も知られたり。弟は骨肉恩愛の、涙にくれて答へもなく、暫し躊躇ひ居たりしが、「久米之介とは聞きたる人。昨日の晝より俄に大病引受けて、今宵限りの命なりと申せしが、夜明けなば、生死の定說隱れあるまじ。」と、涙をかくす聲つきを、姊はそれとも猶知らず、「さればこそ思ひ當つたれ。このお山の萬年草は、人の命の生死を示し給ふと申すゆゑ、餘りの事のいぶかしさ、守に入れし萬年草を、あの谷川の水に浸け、久米之介と志し、半時ばかり浸してても、次第に枯れて萎みしが、弟が命あるまいとの大師樣の御告か。遙々尋ね來て、昨日にも著くなら

と顔とを擂寄せて、零す涙は自ら、互の口に傳ひ入り、末期の水となりけらし。刃を急ぐ我が命、末短夜の春の霜、羨ましやな朝まで、消え殘るかと白妙に、里の夜鍋も時過ぎて、干すや神谷の宿はづれ、生まれ在所の名殘さへ、親より殿を思ふぞや。」「我は其許の親御の恩、戀と思ひに縛られて、情の絆、縛の繩、不動坂にもさし懸り、死出の山路を越ゆるかと、唄心ぼそしや卒堵婆谷、此處な塚はと引留め問へば、此處は古の刈萱殿の、しるし繁りし春の草、クドキ問うて語つて味きなや。かの刈萱弓取の、猛き心や梓弓、彌生の空の月の前、櫻が下の杯に、開いた花は散りもせで、花の莟に身を捨てし、無常の夜語身の上に、十九十八一盛り、今宵散り行く初櫻、兒が瀧。」とぞ涙ぐむ。「彼へ越ゆればあまの口。去年母樣と連立ちて、拜みし事の忘られず。哀れ佛の御母も、女の罪の捻岩や、それさへあるに我が身の科は、唄五月雨に、ほど戀慕はれて、終にな、秋田のよ落水、山は眠りて物言はず、谷の流れよ聲立てて、人に語るなこの姿。私が心を此方樣に、隱す事とて持たねども、賴む佛の御名問へば、我をば外の不動樣、二親よりも捨て難き、嘸や若木の花の兄、歎き恨みの數々も、二人が上に罰受くる、天竺の山嵐、締めた肌にしみ／＼と、サア悲しえ、いとしといふも今の間の、冥土の苦患覺束な。この世からさへ嫌はれて、深く心を奥の院、渡らぬ先に渡られぬ、御廟の橋の危さも、後世のみせしめ蛇柳や、鬼が千疋責めうぞ、責められつ、さいなまるゝと離れまい。放す

も恐ろしく、母に知らせぬ足音をば、火を踏む如く爪立てて、顫ひ〳〵沓脱まで忍び出で、母、久米之介に囁きて、「此方は命の亡い人なれど、お梅がなげく不便さに、此方夫婦が料簡で、今宵の命を助ける。お梅は男定まれば、思ひきらねばならぬぞや。これはお梅が飲んだ杯、これを形見の縁切。」と、懐に入れければ、二人は死ぬる覺悟の上、心の中の暇乞、顏は見られぬ暗闇に、ま一度聲をとためらへば、「遲い〳〵。」と氣を急きて、急ぐは我が子の死を急ぐ。產み出すも母、死なすも母、生死二つの門口を、明けて出て行く先も闇、後も子ゆゑの闇の夜に、迷ふ親こそ三重悲しけれ。

下之卷

久米之介お梅道行

唄幻や、定業の限りとは、いかに如何なる娑婆ならん。世は何の譬へぞや、逢ひ初めて早三年、影許りの契りにて、夫は野中の一つ井戶、名は後の世の形見かや、殘す形見は親の爲、我はそ樣の前髮の、長き來世も私がこの、直さぬ額この儘で、見たり見せたり六道の、辻の儒は多くとも、紛れまいぞと夕月は、早入り果てて更け渡る、まだ如月の八重霞、隱れ忍ぶによけれども、顏が見憎の朧夜や、二つ好い事あらし吹く、木の下露の玉川の、毒の雫も降るならば、身に疵つけず死に度やと、顏

ばお梅が首がないぞ、拔かるな。」と諜し合はして酒肴、下では下人盛り潰し、二階を母の酌人は、怪我あらせじの氣遣ひや。作右は母に辭宜もなく、差いつ差されつ辭宜作法、大杯四五杯引つかけ、「なうお袋、姑に酌とらせ、むやくしいか知らねども、斯う召さつたがよい筈。作右衞門ほどの壻は、慮外ながら取り憎い。久米之介は若衆で前髮はあらうが、おれが樣に小判の前髮はあるまい。あの樣な奴等が娘子供を唆し、京大坂にもある事、大方果ては心中。ホヽ、嫌な事、お梅は命拾やる、親御は娘拾やる。おれは杯ひらはう。」と、又三杯引續け、「サア寢ませう。お袋彼方へ往なしやれ。」と、夜著引立てんとする處へ、大石をはたと打つ。「これは。」と驚く頭の上、障子雨戸を打破り、大石小石隙間なく、はらり／＼と三重投げければ、お梅は此處を大事ぞと、久米之介に抱き付き、作右衞門はひよろ／＼足、「お梅は、あぶない夜著被ぎや。」とたち寄れば、母親燭臺踏みこかし、「やれ暗いわ火を燈せ。」と言ふ聲に、與治右衞門、下の火殘らず吹き消して、常闇の夜となりにけり。母は這ひ寄り、久米之介が手を取つて引き出す。びつくりするも夢心地、お梅は久米が帶を取り、付いて出づるも闇の夜の、母はかくとも知らばこそ。作右衞門度を失ひ、「お梅は何處に。」「イヤ此處に居まする。」「暗闇で怪我しやんな。お袋は何處へぞ。」「火を取りにでがな御座んしよ。此方樣勝手知らずぢや、動かずに御座んせ、私も此處に居まする。」と、聲が殘れば母親も、一人と思ひ連れて出る。お梅は後

私がかうして出るのは詫言といふもの。それでも合點ないからは、氣に入らぬであらうまで、田舍育ちの私ぢやもの、何の都の目に入らう。」と、身振もすねて見えにけり。聟はお梅にゆすられ、につこと笑ひ、「これ親父、お袋默らつしやれ。彼が此處へ出てくれて、今の詞で千倍ぢや。頭の上で踊つても、去る事では御座らぬ。サア寢所へ。」と手を引けば、二親屋内打ちうるほひ、「ハア目出度い〳〵。さりながら、まづ此處で杯事。その間にそれ〳〵。」と、氣をつけて踠けども、「いや〳〵今宵も四つ過ぎ、軈て夜半眠る間がない、目出度う閨の杯。」と、寢處急ぐ氣の毒さ。「平に此處で酒盛なされ、その間に内との者一獻酌めや、酒を酌め。そりや酌め〳〵。」とあがいても、何處へ落さん久米之介、夜著引被ぎ身を縮め、生きたる心地はなかりけり。聟は蒲團に延し上り、「ヤア誰ぞ寢たやら暖かな。さらばこの夜著を被て、杯せう。」と久米之介が、臥したる夜著を取らんとす。「ア、これ〳〵、此方樣ばかり寢やうでの。とんと二人が一度に寢る。杯濟むまでいかな事、夜著に手をもかけさせぬ。」と、もたれかゝりし夜著の袖、足を擦り手をしめて、夫に力をつけければ、「一つに寢ようは忝い。銚子早う。」と呼ぶ内に、夜半の鐘も鳴り渡る。下には夫婦手に汗握り、九兵衞その外小隅へ寄り、供の者にも酒盛つて、「醉うた時分に臺所の火を消して闇に爲い。」二階の酒のしゆんだ頃、祝儀の石を打込んで、騷ぐ拍子に蠟燭を踏みこかし、どやくや紛れに久米殿の、手を引き門へ脫かさうぞ。仕損へ

親孝行と思はば、必ず死んでくれるなと、まづ斯ういうて留めたらば、よもやとは思へども、若い心の一筋に、恥かしいことばつかりで、若しや死なうか悲しや。」と、知らせの詞一つをも、皆兩方へ架橋の、二階にも聞き取りて、拔いたる脇差さすが又、死にもやられず聲立てず、抱き合ひてぞ泣き居たる。「なう親はどれも變らねど、母の名汚すも雪ぐのも、娘の育ちの善し惡しから。お梅が一期の疵つけば、三十年添うた此方の人に、面皮拭うて添はれもせず、是非に一旦杯して、男の手柄に何時でも、退き去りは世のならひ。子が立つてこそ慾もあれ。屋財家財代なしても、返す物を返さずに置く與治右衛門でさら〳〵なし。母がこの歎きを聞き、お梅が此處へ出るならば、それをしほに和睦して、祝儀を渡して下され。縱ひお梅が我を立てて、座敷へ出まいといふとても、先の小姓も木竹ではあるまいし、まづ往きや〳〵といやる筈。それも聞かねば不孝者。子を一人育つるに、生きる瀬か死ぬる瀬か、七度あるとは稚い内。十七八に脊丈伸び、親に夜の目も寐させぬか、憎いものには世話燒かぬ。子を持つたらば思ひ知らうぞ、恨めしの世の中や。」と、聲を上げてぞ口說きける。久米之介も聞き取りて、「後は兎もあれ、親御の心安める爲、淚も拭うて下りてたも、拜む〳〵。」と進められ、口惜し淚ひつしよなく、梯子とん〳〵踏み鳴らし、驅け下りて、「これ母樣、いたづらの惡性も、男持たぬ前ならば、いはれぬ構ひぢやあるまいか。それに意地無地いふ人は、放からかいて置かしやんせ。

つた。」と、いふより九兵衛もじり〳〵と、門の方へ後退去り、亭主もはつと二階を見れば、女房賢く、「いや〳〵、そのぶんでは胡亂な。此方の人、娘が垢を脫かつしやれ。狼狽へて娘一人捨てさつしやるな、これ〳〵。」と、膝を突けば合點し、「オ、飮み込んだ。こりや男、雷が鳴つたとて、此方の娘が不義のある證據にはなるまいぞ。如何でも今宵祝言させ、括りつけて往なさねば、雜賀屋の與治右衛門が町へ面が出されぬ。手柄に壻にして見せう。」「オ、おれが身代見掛けては、定めて壻に欲しからう。二十八貫目の銀では、疵のない手入らずの女房が持たるゝ。俺が銀で拵へた、夜著蒲團から取つてくれう。」と、二階へ上れば與治右衛門、「腕挨ぢ折らう。」と引下し、上を下へと摑み合ふ。久米之介は脇差拔いて、すはといはばと縋り付き、お梅が、「わつ。」と泣く聲も、下には聞かず叩き合ふ。女房中を押し分けて、「此方の人から默らつしやれ、待つて下され壻殿。」と、彼方を拜み此方を拜み、漸う兩方おし鎭め、かつぱと伏して泣きけるが、「都衆とも覺えぬ、物の情の無い事や。これ程まで取結び、サア祝言の場となつて、打破つて此方夫婦、世間が立たうか身が立たうか。男を持たぬ娘子は、誰が身の上に何事の、あるまいと言ひ難し。過ぎつる事に二親が、迷惑するを聞くならば、氣の細い娘なり。先の小姓も堪へかねて、死なうとするは必定。留めに往かるゝ時宜でもなし。必ず死ぬるな死ぬまいぞ。此處は死ぬる場でないぞ。親に歎きをかけるといひ、その身も無い難受ける事。

商ひに、九貫目のほこりを取り、さきも見えぬ秋買に、十五貫目の前銀取り、祝言の仕入に四貫目取り、男のある娘を被がせて、去らせて構はぬ工面ぢやな。此邊ではまだ流行るか、京大坂では、その手の騙瞞は廢つた。サア娘の首を渡すか、二十八貫目戻すか、二つ一つの返辭を聞かう。ヤイ一升入る袋は海川でも一升、肩の好い者の仕合見よ。杯せぬ許りで二十八貫目拾うた。惠美須、大黑が乘り移つた作右衛門をこかさうや、措いてくれ。」とぞ罵りける。與治右衛門眞直者、ぐつと急いて、「ヤア京々とやかましい。頰げたが過ぎる。七十萬石の下に住む與治右衛門、氣のせばいおのれらが蔑みとは違はう。銀返すは易けれど、言ひ詰められて戻したと言はるゝが口惜しい、娘にも疵がつく。サア男のある證據を出せ。何處ぞで藁を焚かれて、銀が惜しうなつたか。慮外申した御免あれと詫言させてその上で、是非に祝言させねば、娘の垢が脫けぬ。サア證據を出せ。」とにちければ、家内の上下しみ凍り、二階には逃げ場もなく、死ぬるより外分別の、泣いつ顫うつ狼狽ふる。作右衛門押ししづめ、「證據々々と涼しさうに言やるな。身は明日立つ合點で、今朝から御山へ上つたが、八つ時でもあらうか、俄に山が暴れ出して、大雷雨風、一期に覺えぬ怖い事。さる寺へ驅け込んで、樣子をつぶさに聞きたれば、南谷吉祥院の小姓久米之介といふ者と、雜賀屋のお梅と數年密通して、山を穢したその祟り、それ故今追ひ出さるゝと一山が見物、後姿を俺も見た。飛脚の樣な奴が供して麓へ下

た。今宵の物いり仕拵へ、此方には一文入れさせず、娘を裸で受取る壻は、世間に些とありかねる、なんと九兵衞。」といひければ、「イヤ久米之介樣も小判の事は請合はれぬ。お梅樣を裸でならば、鬼に鐵棒で御座りましよ。」「コレ阿房な事は言はずとも、壻がおぢやるか出て見よ。これお梅、久米樣二階へ連れまして、新しう出來た寢道具を見せましや。こりや女子ども、肴を鼠に引かるゝな。」と、鼠の用心しながらも、二人二階へ上げたるは、これこそ猫に鰹魚なれ。二階には、もと渡りの大紋緞子の夜の物、二つ枕の總付を、妬ましさうに久米之介、「ム、、、京の男と、この枕を竝べて、この夜著を被て、二人しつぽりと寢さんしよの。ア、ひよんな物見せて、又泣かせて下さるか。」と、ほろ〱淚を流しける。「エイ嫌がらす樣な事聞き度うない、京の奴と何の寢よ。今夜中に連立つて走るぞえ。胸を極めて下さんせ。この夜著蒲團に今の奴が寢くさる筈、エ、嫌らしい煩さや。」と、蹈みちや〱くつて擲げ投り、「これは又私がの、新しい寢道具、祝うて寢初めて欲しけれど、人が來うかと氣遣ひな。ア、辛氣や。」と、疊みし夜著にもたれ合ひ、誰も勿來のせき心、花のお梅に鶯の、人來と厭ふわりなさよ。時に美濃屋の作右衞門、小僕を連れてつゝと入り、與治右衞門が髻を取つて引寄する。女房始め下々も、「これは聊爾。」と取付くを、「寄るな〱。」と撲ち拂ひ、取つて引据ゑ、「こりや與治右衞門。京の者を瞞立したら返報を食はう、用心せい。親代々の得意で二十年以來、一千貫目足らずの

何として、呼びに遣りたい處へ、能うこそ〳〵、まづ内へ。嬶、久米樣が御座つたぞ。暮れたに何故に火は燈さぬ、お梅が祝言常とは違うた、二階は蠟燭、庭もお上も、燈心を摑み込んで赫々とやれ。」と、勇む處へ母親は、形振を心得難くや思ひけん。「何時の間に九兵衞は、此處へも寄らず山へ往て、お梅が祝言聞いてお出でなされたか。」と、不審相なる顏色を、九兵衞見て取りつゝと出で、「久米樣のお仕合、未だお聞きなされぬか。お國の親御御隱居で、跡目をお繼ぎなさるゝ筈で、私も在所から早飛脚に雇はれ、打通りに上りました。日頃の懇暇乞の爲、一寸つれて寄つてくれ。祐辨樣もおつつけ其處へとある事、今日からはこれ七百石の御世繼。旦那樣物は談合、お梅樣の御祝言まで杯なされぬさき、彼方を變改なされて、久米樣へ進ぜられまいか。私やお爲申します、祐辨樣も大方その御心と見えました。千貫目持ちても商人は、一時の損が知れませぬ。照れ降れなしに七百石、すればお前もお手柄、雜賀屋の壻殿が、ひん〳〵跳ねるじや〳〵馬に乘つて、娘御は金物の乘物に乘らつしやる。サアしやんと打ちませう。」と、手を廣げても「イヤまあ打つまい。」「※ハテねちみやくした。そんなら舅姑御夫婦も乘物やじや〳〵馬。」と、乘せてもいかな乘らばこそ。「いや〳〵馬は馬連、牛は牛連、今日祝言する壻殿は、京三條烏丸美濃屋の作右衞門、お梅を欲しいばつかりで、年々の殘銀九貫五百匁、百六十兩で帳消して、この秋の買入に、紅の花の樣な小判二百五十兩、先へ預けて置かれ

今朝からとんと死んで居たわいの。」と、縋り付いて泣きにけり。「オ、そなたは氣が死んだか。私は叩かれ引摺られ、身も心も死にまする。譃ならこれ。」と、手を取つて袖から、「脊中がハアたんと腫れてあるわいの。鬢もそゝけた、顔も泣いた顔ぢや。こりや如何ぞいの。」といりわりも、言はず知らずに泣き居たり。九兵衞不祥な調子にて、「エ、麁相なお梅樣。文を封じ違へて、久米樣への濡文が、法印樣のお手に入り、何が日頃法印樣、眞言陀羅尼讀んだ目で、くどくは御見思ひまゐらせさふらふと、讀んで婆羅僧揭諦を立て、※ほじそあかなる顔付。念者坊の祐辦樣は、蹈み殺すとて熱えさつしやる。一災起れば二災起る。お國からは弟の敵ぢやとやら申して、理窟臭い侍が脊打を喰らはする。弘法大師御入場八百年以來の一山の大騒ぎ、飛脚の詮議もあるさうで、私は据つた膳箸も取らずに隠れ居る。その間にお山が暴れて來て、天狗殿が鼻を怒らかし、大雨、大風、霹靂。大事の山を久米之介が穢したと叩き出されて、かくの體にて在す。お二人の御蔭で、煙草入を落しました。中に賴母子の懸錢七十四文あつたもの、定めて狗賓に摑まれたで御座らう。正眞の天狗賴母子ぢや。」と、ぶつくさ言ふも道理なり。「オ、その樣な事内へ沙汰してたもんなや。山は暴れても崩れても、久米樣に逢へば嬉しいく。こな樣嬉しうないかいの。ちと笑うて見せて下さんせ。」と、いうても後前思はれて、泣顔見ゆる不便さよ。親は、「お梅よく。」と、門口見遣りて、「誰ぢや。ヤ、久米樣か。九兵衞これは

み、「急な事いうて下さんす。杯さへ延べて欲しけれど、親のかうけん是非なうて、如何なりともと言ひました。京上りは先づ待つて、氏神へも參りたし。阿房でも兄は兄、花樣にも知らする筈。日頃懇切あそばして、お守よ御符よと、御恩を受けた祐辨樣。お山には未だほかにも。」と、その人の名は言ひ兼ねて思ふ邊をかすらする、これも思ひの餘りかや。母親もうち首肯き、「オ、それも左樣ぢやが此樣な事、懇な方へ知らすれば、餞の祝儀のと、厄介かけるが迷惑ぢや。兎角聟御の心次第。サア御座れ。」と、納戸へ入れば、與治右衞門、「これ嗅。聟の供の者ども、これの內の奴等にも、何がしに三百宛、お引をやるが合點ぢや、筒ごかしの顏でつらりと九文十文づゝ、百の口を拔いて置けや。」「ハテ此方もあんまりな。お梅が一世一代に何が惜しいぞ。やつぱり九十六文で、百宛遣つて置かしやれ。」と連れて納戸に入りにけり。お梅は稚き時よりも、甘やかされて二親に、我儘言ひしならはしも、心に疵を持ちたれば、いぶりもならずすねられず。「ア、九兵衞は何故遲いぞ。久米樣の返事は。」と、そろ〳〵表へ出でけるが、女子丁稚が口々に、「ようお梅樣、晚には立聞いたしましよ。京のおかく樣にならつしやる。」と、嬲られても浮々せず、「ア、なに言やる。京へ往こやら冥土へ往こやら、知れた事か。」と門に立ち、坂を見上げて居る所へ、久米之介は頰冠り、九兵衞も投首して、辻へ見ゆれば走り寄り、「なう能う來て下さんした。文にいうてやる通り、京の奴めと今夜杯する筈で、私が氣は

殿、妹が事は氣遣ひさつしやんな。此方の居所知れるまでは、おれが女房に持つてやろ。」と、聞くも苦しき名殘の山、鬢も髻もひき亂れ、涙亂れて目も暗く、「さらば〳〵。」とふり返り、啼く音もかゝる鶯や、お梅に通を失ひし、久米が心ぞ 三重 あはれなる。

中之卷

逢はぬ昔の白紙も、忍び重ねて厚紙を、人に裂かるゝ横紙に、袖濡紙の漏れやすき、浮名やばつと塵紙の、嵐に脆き鼻紙や、まだ十七の懷子、名さへお梅は氣もすしや。親與治右衛門、活々として外より返り、「お梅が祝言いよ〳〵今宵に極まつた。今朝いひつけた通り、市介、傳九郎鱠をかけ。夏よ雜煮の用意を爲い。竹膳立も綺麗に爲い。聟殿は京烏丸の人なれば、黒椀が好からう。塗杯は入らぬぞ。年の往かぬ娘ぢや、土器を三寳に、口取は熨斗昆布、肴は鯣、車海老、熊野から貰うた鹽貝があらう。ャ鹽貝の次に女房どもは何處に居る。」と、うれしがるのも親心。「おへ樣は中二階に、お梅樣の髮梳いて。」といひければ、二階の口まで驅け上り、「こりや〳〵宿老殿へ往て談合した。みな内證勝手づくの祝言なれば、廣めは重ねて下つた時。今宵杯濟んだらば、娘は最早聟の物。とんと先へ渡いて女夫連で、明日早々上して退けいと言はるゝ。」と、きほひ掛る親の顏、見るよりお梅は涙ぐ

い。」と、さすがは武士の神妙な。久米之介、「わつ。」と聲を上げ、「只今の脊打も、打つて打たるゝ身の報い、恥辱とも思はねども、山の名殘に、法印樣の御機嫌損ふ悲しさと、二世と賴みし兄分を、袖にしたとの恨みの詞、悲しうて〳〵死んでも迷ひとなりまする。疾くに髮を剃つたらば、この悔みもあるまいもの、坊主頭のすげない顏、兄分に見せる悲しさに、せめて二十歳を越すまでと、鬢を撫で顏つくり、身嗜が身の敵、お梅に思ひ初められた、これも前世の因果かや。お梅に逢うて斷り立て、緣を切つて來ましたら、元の樣に懇に可愛がつて下さるか。」「おんでもない事、女と緣さへ切つたらば、身にかへても法印樣へ、詫言申して懇せうが、實緣を切らずば、大師の罰を受けうといふ誓文を立てうか。」「如何にも誓文立てませう。」「サア立て、サア何と。」「エ、此方は切らうと思へども、お梅が合點せぬ時は、なんとしませう悲しや。」と、かつぱと伏して泣きければ、「それその心のつくこそは、罰の當つたしるしぞや。はや出て失せう。」とどうど伏し、共泣することこそ道理なれ。その隙に法印、以前の文を取り出し、「山に置くは穢らはし。持つて失せう」と投げ付け給へば、恥かしさうに密と取り、肌懷に入れけるが、男女破戒の御咎め、俄に吹き來る天狗風、岩も枯木もどう〳〵〳〵、震動雷電雨霰、天地一つに黑雲覆ひ、長夜の闇とぞ三重なりにける。「すは一山の大事なり。不動坂まで追ひ出せ。」と、下僧下僕が小腕引立て、「棒よ杵よ。」と犇いたり。さすがよしみの花之丞、「これ久米

皺の寄つたこの法印を、梅干に譬へたか。師匠と思ふな、弟子でもない。あの御使者の手にかゝり、死なうが生きようが構ひない、あれ引摺り出せ叩き出せ。十一から教へた經文も眞言も、魔道へ捨てたか勿體ない。」と、腹立涙にくれ給へば、久米之介は伏し沈み、ありあふ小姓同宿も、側から何と千右衛門、呆れ果てたる許りなり。祐辨律師走り出で、久米之介が袴腰、破るゝばかりに蹈み付け〳〵引起し、齒嚙をなして涙を流し、「エ、見損うた倅奴。その根性とは夢にも知らず、兄弟の契約の懇したは何事ぞ。雜賀屋にはお梅といふ若い娘もある程に、出入するには行儀が大事、浮名ばし立てられな。若衆のたしなみこれ第一、兄分に恥かかすなと、起居に言うたを忘れたか。これ千右衛門殿、今まで愚僧が存ぜしは、彼奴は敵持つたる身。若しも覗ふ人あらば、拔刀の下へ此の法師が、驅け入つて討たれんと、一命やつたる中なれども、只今懇切る上は、金胎兩部の大日も御照覽ましませ、不便とも存ぜず。御舍弟の敵、サアお手にかけられ。」と、座敷の下へ取つて投げ、「俗の女を慕ふより法師の身にて少人を、思ふは幾千優るぞや。その兄分を袖になし、志を無下にした。憎や無念や淺ましや。」と、氷の樣なる眼より、涙をはら〳〵とぞ流しける。千右衛門續いて下り、「心ないには似たれども、寺を出づれば弟の敵。討たでは武士の道立たず。」と、するりと拔いて脊打に、四つ五つ丁々と打ちつけ、「これからは死したる人。この方遺恨なきうへは、心次第に師弟の中、何卒挨拶いたした

右衛門とは身どもが事。その頃は數年の在江戸、後日に聞けば、殿よりは切腹との御評諚、父母が料簡にて、子の可愛いは同じ事、親達へ歎きをかけ、討たれし者の爲でもなし、出家させて、稚い者の後世弔はせんとの扱ひにて、我が親どもが命を助け、當山へは登らぬか。一人の弟が死骸をも見ぬなつかしさ。せめての形見にその方を一目見たさに、此の度のお使を望み受け、小姓衆の名を尋ね、久米之介と聞くよりも、弟があらば今年は十八蕾む花、つれなくも討つたかと思へども、改めて恨みを言はん樣もなく、仇を恩なる出家して、後世を助けてくれるかと、思へば形見の心地もする。恨めしいとゆかしいと、未練の涙をこぼしたが、口惜しいぞ久米之介。たとへ親の敵でも出家は格別、在家となれば見遁し置かれぬ弟の敵。この山が下り度いとは、それこそ望む處。麓に下つて八年以來鬱憤を散ぜん。法印にことわり申す爲、御意を得ん。」と立つ處へ、法印驅け出で、「樣子詳しく承る。やれ若衆奴、おのれは未だ髮こそ剃らね、※九字護身法傳授して、禮拜加行を勤むれば出家も同然、殊に大師以來結界清淨の御山、假にも女犯の穢れがあれば、一山暴れて震動し、其の身は狗賓に五體を裂かれ、木の枝に懸けらるゝは、目にも見せ話も聞かう。それを知つてこの寺を、能うも〳〵穢したな。國許の親から珍らしい文を得た。この年になれども、思ひまゐらせ候べく候。※御げんの如く二世三世、くされ〳〵と血判を据ゑた、小舌たるい女子文、手に觸れたは今日始め、梅よりとは誰が事。

ついしか割つて見ませぬ。無念な事。」とぞ眞顏なる。使者も返答しかぬれば、傍輩は笑止がり、「これしい〳〵。」と袖を引く。久米之介はお梅が噂、聞くにつけてもかの文の、法印の手に渡り、今や詮議のあるかとて、思ひ痛める胸の中、釘を打たるゝ八寸の、給仕も更に手につかず、目に涙持つばかりなり。使者重ねて、「御自分はお年嵩と見え申す。お名は何と、生國は。」と問ひければ、「我らは播州飾磨、成田武右衛門が倅同苗久米之介。」「ム、さては同國武右衛門子息、高野にあるは此方か。」と、見上げては泣き出し、見下しては涙にくれ、打萎れて見えければ、身に思ひある久米之介、心便りも無き折柄、故郷の人の染々の、涙に絆され側に寄り、「一見に馴々しき事ながら、同國のよしみと申し、御落涙の樣子、御心底の優しさを、推し量つて賴み奉る。私事此の山に、一夜も足を留め難き身の難儀出來致し、幸ひ國より迎ひも參る。詳細の事は麓にてお物語いたしません。お詞を添へられ、法印より暇を取り、今日中にこの山を連れてお出で下されば、生々世々の御恩に受け、命の親と存じませう。」と、身の置き處なき儘に、粗忽の無心も戀路故、若氣ゆゑこそ是非なけれ。使者膝を立て直し、「これ久米之介。お主が山へ登つたは、末は出家の筈なるに、今この山が出度いとは、還俗したい心よな。ヤレ出家する因緣を忘れたか、恨めしい。お手前十二歲の時、傍輩は伊吹重太夫が二男、卯之介といふ十一になる友達と、雛合はせの友達喧嘩、敢なくお主が手に掛つた卯之介が兄、伊吹千

山に石碑を建て、日牌を供へ申すにつき、祠堂銀五百枚奉納いたされ候。御受納あつて末世末代、不退轉の御廻向賴み存じ候。」と、包の白銀目錄添へて渡しければ、「武門の御身に、御信心御孝行の御追福、感じ入り候。それ我が山に卒堵婆一本殘せし人は、五十六億七千萬歲の後、彌勒の出世に逢はせ給はん御誓願、などか疑ひ候べき。先づ此の銀子の請取認め申さん。」と、法印奧に入り給へば、豫て用意の勝手より、銚子杯重箱や、はや吸物の椀折敷、善盡したる馳走なり。御住の弟子祐辨律師を始めとして、納所、同宿、入り替り立ち替り、「山中と申し、風情はなくとも御時分好し。お吸物でもお代へなされ。それ小姓衆相手になつて、御酒一つ。緩りと上つて下され。」と、あひしらへば、愛嬌の小姓は、「お相。」と色めきける。使者も數獻を傾け、「さて〳〵御器量なる小姓衆、いづれもお名は何と申す。御生國は何國々々の御方ぞ。仰せ聞けられよ。」といひければ、「我等は有村主膳と申す。當國田邊の者。」「私は世嗣八彌と申す。大和の者。」「身共は伊賀の上野の生まれ、小栗右門と申します。」「私はこの麓神谷の宿、雜賀屋の花之丞、年は十九で法印樣の御內儀。私が妹にお梅と申して、ずんど伽羅めで御座れども、惜しい事は女子で、坊樣の口へ這入りませぬ。私が顏は花の樣で、花之丞と申しまする。妹をお梅といふ譯は、如何した事か知らねども、あの梅といふものを、此方は割つて見さしやつたか。中に平たい物がある。此方のお梅の中にも、それがあるやら無いやら、

無い。外の者に添はせては、生きて居られぬ二人の中。親の命とあるからは、法印料簡ないとても、久しく暇請ひ捨て出でやすし。先づ文見ん。」と封じ目切り、讀まんとすれば南無三寶、上包はお梅が文、久米樣との名宛にて、中は吉祥院法印樣參る。成田武右衛門、親の文。「ム、さては聞えた。お梅が常々男手を能う書く故に、國許の狀をも人頼みするなと、下書書いて渡せしが、斯く忍んでする事とて、封じ違へて我が文が、法印の手に渡つたか。これはく。」と色違へ、立つても居ても仕方なく、狼狽へ廻る打柄に、主膳立出で、「これく飛脚、法印直に問ふ事あり。先づ休息召されとの事なり。」と、言ひもあへぬに久米之介、「なう主膳殿。最前の文を法印樣は、はや御披見なされたか。封じ目お切りなされずば、密と取つて來て下され。一期の御恩。」といひければ、「イヤその狀は、法印樣繰り返し披見あり。反古棚へ入れ錠下し、手が汚れた勿體ないと、跡で手水をなされたが、如何なる狀で御座るぞ。」と、問へども譯は話されず、はつと許りに胸躍らし、詮議に逢はば如何せうと、飛脚の九兵衛が心まで、※細谷川の丸木橋、ふみかへれとぞ祈りける。時に麓の山どよむ。木遣に法の「ひんよえい。」聲播磨路の大名より、御墓引くこそ三重殊勝なれ。則ち宿坊吉祥院、僧達立合ひ、石塔請取り給ひければ、使者は座敷に直りける。法印聽て出で迎へ、「遙々のお使者御大儀々々々。いざくこれへ。それお杯、お茶持て參れ。」と挨拶ある。使者の侍慇懃に、「旦那が妣母第七年に當りしゆゑ、御當

し。」といひければ、「いや別儀にてもなく、御老體の武右衞門樣、御隱居の願ひにつき、久米之介を呼び戻さんと、御一門の談合極まり、法印樣への御狀段々の御口上、兎角は首尾よくお暇の出る樣に、御傍輩樣達へも賴みませとの御使。」と、文取り出せば久米之介、「これは思ひ寄らぬ事。父が老後の大望を、違背ならずといひながら、我が口からは申されず。何れも傍輩言ひ合はせ、お暇の出る樣に、執りあはせ賴みます。狀も進ぜて好い樣に、いづれもに任する。」と、手を合はすれば人々も、「心一ぱい申して見ん。」と、一度に、座敷を立ちけるが、花之丞ふり返り、「これ久米殿、お暇貰うていなしやらば、糠袋はおれに下され。巾著にして※穴一の粒入れます。」と打連れて、皆々奧にぞ入りにける。飛脚はそつと側に寄り、「申しお國からとは僞り。雜賀屋へ出入いたす、岸の和田の九兵衞と申す駕籠の者、お梅樣のお賴みで、密かにお話致せとある。かの御存じの京の紙屋、この中下つて逗留し、二三日中に祝言し、其の明くる日お梅樣を京へ連れて參るとて、内方にも御用意。兎角お前が片時も早く山をお出でなさるゝと、何處ぞへ一緒に立退くか、分別もある處。それ故内々約束の如く、お國の親御の僞狀で、お暇取つて今日中に、久米樣連れて來てくれと、いとしぼやお梅樣、涙を流し手を合はせ、お賴みなされた手前もある。何卒お供致したし。詳しい事はお筆に。」と懷中よりお梅が文、取り出して渡しける。久米之介も心せき、「成程々々其の筈。其方も知つての上なれば、隱す事は少しも

れから身持になつたやら、ほてれんぢや。」と腹摩り、傍輩は皆小小姓の、顏を赤めて挨拶せず。久米之介は年嵩にて、「なう花殿、笑止な事いふ人ぢや。これに御座る主膳殿、八彌殿、右門殿、年は三つ四つ下なれど、此方の心が足らぬゆゑ、嬲られて居さつしやる。此方は他國者なれば、當地では此方の里を賴みにして、一家同然の此方を笑はせて本意でない。この久米之介が居る內は、侮らせはせまいが、おつつけお暇申し請け、國へ歸つたその跡では、高野一山の嬲り者。少と嗜んで下され。」と、いへばむつと腹を立て、「鈍な事言やんな。法印樣の女房が法印樣と竝んで、善哉餅食うて孕んだがをかしいか。コレ忝くも、おれが親は、神谷の宿で隱れもない、雜賀屋の與治右衛門、母樣と一つに何時も物を食やるで、おれも生まれる。お梅といふ美しい妹まで生みやつた。其方も何時も此方へ來て、妹のお梅と二人土藏へ這入つて、善哉餅を食はしやるやら、お梅が聲で味い〳〵というたを、おりや聞いたぞ。」といひければ、久米之介は赤面し、殘りの傍輩は口々に、「賢い人の言ふ事を、氣にかけてははてがない。さりながら正直な法印樣の、お耳へ入りては言譯ならぬ、小姓仲間の恥辱なり。沙汰しやるな。」と制せられ、六尺どもも聞き流し、「阿房に油斷は尙ならぬ。」と、目まぜしてこそ入りにけれ。稍ありて表より、「成田久米之介樣に逢ひ申したい。お國の親御武右衛門樣よりの飛脚なり。」と、若黨一人刀の先に、文箱附けてつゝと入る。「ム、久米之介とは身が事。國許よりの使とは氣遣は

高野山
女人堂 心中萬年草

上之卷

唄女嫌やる高野の山に、なぜに女松は生ゆるぞや。なぜに女松が生えまいならば、夜這星でも飛ぶまいか。松より栂より柳より、お寺小姓の兒櫻、兒文殊の御相傳、大師の廣め置き給ひ、俗も尊む若衆の情、衆道祕密のお山とかや。南谷の吉祥院に、播磨大名の使者ありとて、庭の掃除の下僕、小姓衆は客殿の、牀に掛物臺子の埃、掃いつ拭うつ忙がしさ。「これ長助、關介、掃除が大方出來たらば、不動坂まで一走り、御使者が見ゆるか見て戻りや。急ぎや〱。」とありければ、「いやそれは餘の者遣らしやりませ。私どもは皆々樣の髮を結はねばなりませぬ。寺方のお小姓は、俗の內儀と同じ事。法印樣の奧樣の、髮は結はずに濟みますか。」と、洒落をまうけの顏ひねて、足らぬ心の花之丞、「ム、左樣なら此方は法印樣と女夫か。エ、在所の父樣や母樣は譃吐ぢや。山へ登れば魚食ふ事がならぬ程に、豆腐や蒟蒻を、鯛や鱧ぢやと思うて食へ。山の芋を鰻と思へ。法印樣を親と思へとばつかりで、女夫とは聞かなんだが、ア、思ひ當つた。一昨日のお日待に、法印樣の相伴で、善哉餅を十三杯、そ

れば甲斐もなし。去年一度に死したりと思召しきり給ひ、歎きも悔みも御留め、只佛壇にさし向ひ、大姉の御廻向あるに於ては、六尺屏風の隔てもなく、眞直に受取り、先だつ妻の跡繼となり、共に三途のかは葛籠、一荷に手を取りうち渡り、西方淨土に一文字、越ゆるは下品下用櫃、忽ち上品膳棚に到らんと、思へば最期急げども、返す〴〵も伯母御様、御名殘惜しき椀家具、法界行器の御廻向偏に頼み奉る。南無阿彌陀佛彌陀佛と涙を染めて書き留む。毎日評判朝暮の供養、佛法繁昌の廻向を得るも、その身の果報と承る。

卯月の潤色 終

ば、御菩提を弔ひ奉るこそ、順とも孝とも申すべけれ。去年はお龜が憂へを見せ、今年は我等が歎きを掛け、お心を苦しめ申す事、罪に罪を塗長持、孝行の元直に外れ申すなり。さりながら子弟主從父子夫婦、五倫の親しみ何れ愚かは無き中に、妻となり夫となり、偕老同穴の枕屏風、鴛鴦の襖障子、疵も破れもなき契り、今捨賣にはなり難し。殊にお龜と我等事、從弟同志の水入らず、鼠入らずの竹戸棚、釘も離れぬ中といひ、去年最期の折からも、一緒と思ふ頼みにて、二十歳に足らぬ女の身清く相果て候ひしに、我等思はず存命し、六道の辻に只一人、今や〳〵とさこそ待ち兼ね申すにや、現に現はれ夢に見え、幻に來り歎く樣、見る度毎に片時も、生存へて有る心、思ひ遣らせ下されとよ。今は此の世に亡き妻を、二度娑婆に掘出しする、小道具屋の身にもあらず、無常の風の荒道具、身蓋揃はぬ離れ物、浮世の直打更になし。輪廻の塵の置き古し、無明の夜市に賣り下げられんよりはと、今宵亡妻の忌日を期して、去年お龜が死したる剃刀、緣と緣とを合砥にかけ、二十二歳一睡の夢を拂つて、淸月己が眉間に施し、今月今日剃刀の刃に滅し畢んぬ。悲しきかなや娑婆に親、伯母、冥土に妻、未來に情現世に慈悲、中に憂き身を挾箱、何時の世にかは一對の、一つ蓮に生まるべき。これも因果の車長持、轟く穢土は假の宿。有漏路、無漏路の中休み、割籠辨當茶辨當、剝げぬ間の戲れなれば、誰か端に殘るべき。縱ひ此の度生存へても、重簞笥の抽斗の、一重足らぬ如くにて、お龜な

下之巻

助給書置

古道具屋與兵衛入道助給、末期に親、伯母の御方へ申し殘す書置の事。つら〳〵思へば老木返つて春を迎へ、蕾める花の先に散る世のならはし、かたぢの長持、嫁に傳はり出來合飯櫃風呂の下の霞となる。老少不定の境、會者定離の掟、末世一代教主の如來も、免れ難しと思召せ。それ一河の舟に棹をさし、一樹の陰の合宿りも、他生刧の緣と聞く。況んや親となり子と生まれ、伯母と言はれ甥となり、一日養育の御恩は、蘇迷廬の山より尚高しとこそは承る。況して他年の御面倒、譬へを取るに物なし。殊に去年五月の十七日、不慮の御難儀かけ商ひ、命を捨つる身の損銀を、他目には榮耀者。呆氣者氣違者と、人の譏り世の嘲り、親伯母の御歎き存ぜぬ我にも候はず。然れども生きて居られぬ心の中、今更申せば人を損ふ毀ち家の、立つ方もなき夫婦の者、涙で暮す朝夕は、湯水も喉に錠前の懸硯の海かへ干しても、書き盡されぬ我が身の上、二人が胸に埋れ木の身にならずして、誰人か推量には及び申すまじ。其の節お龜諸共に、相果て申す程ならば、二度の歎きは掛けまじき。とても助かる程ならば、生存へ出家成就して、御恩の伯母樣情の親、百年の御壽命過ぎ、目出度く往生あそばさ

受け、堅牢地神は大地を破り、奈落に沈め給ふべし。罪業深きこの身體。」と我と我が身を掻き抓り、食ひ付きて聲を上げてぞ泣き居たる。やゝ更け渡る野寺の後夜、八聲の鷄も啼き交す、明方も近づきたり。後れじものと位牌に向ひ、「これお龜、去年の五月に伯母御より、緋縮緬を下されて、御身と我が肌廻り、自害の恥を隱したり。時しもあれ今宵又、白縮緬の絎帶、これも二人が申し受け、永き形見と身に附けん。我も受取る受取れ。」と、位牌のひれに結び附け、端を左手にじつかと絡み、斯う持つたる心こそ、最期は後れ先だつとも、手に手を取つて行く道は、只一筋の白縮緬、のばさぬ時刻只今と、剃刀取つておし當てしが、「ア、思へば〳〵、名殘惜しの伯母御樣、身を達者に長生し、後世弔へとて只今も、お藥までも下されし、志を無下になす、御恨み御免あれ。神も佛も御慈悲に、我等を地獄に沈めても、伯母御の二世を助けてたべ。南無阿彌陀佛。」と剃刀を、咽にがばと突立てて、笛のくさりを刎ね切つたり。まだ死にかねて目眩く。苦痛はせじと押取直し、人脈筋を四つ五つ、聲を掛けて刺し通し、「うん。」と許りにかつぱと伏し、反つつ返しつのたれを打ち、苦しむ中にも妹脊のしるし、お龜が位牌に抱き付き、むかはり待たぬ花橘、昔の人と短夜の、雲隱れして世の人の、袂しをるゝ藻鹽草、書置に名を殘しける。

いてある。洗足して休息あれ。」と、いひつゝ筆を早めける。道心何の氣も付かず、「オ、構はずと遊ばせ。扨石山の繁昌、京大坂がうちあける。ヤア夫れに付き戻りがけ大坂へ立寄り、此方の里へ見舞うた。在所にも何事なく、長兵衞殿もお息災。立賣堀の伯母御から懇の言傳、進上物を渡さう。」と平包おし開き、「來月の十七日はお龜樣の周忌、供物になされてと、これ菓子が二袋。お齋でもなされうばと、大坂の名物樋の上の切荒布、嵩高な許りで錢安な物なれど、これ齋にも非時にも重寶な一分が二つ屆けます。梅雨も近づく土用前、喉の疵が發つたら、この藥を參つて、隨分命延ばはつて、伯母樣の後世菩提賴むとある言傳。これは又白縮緬のしゆきん帶、衣の上に宜からうと、氣の付いた伯母御樣、必ず疎かになさるゝな。幸ひ文の次手なり、皆々慥かに屆いたと懇に遊ばせ。愚僧も一宿仕り、樣々御馳走忝いと、一寸入れ筆賴みます。言傳どもは明日。長道中の草臥、我等は最早休みます。」と、我が事許り言ひ仕舞ひ、奧に入りてぞ臥しにける。この間に助給は、書置細々と書き納め、伯母よりの贈物、一つに取つて押戴き〳〵、位牌の前にも供養して、暫し絶え入り歎きしが、扨も扨も有り難や。盆にも立たぬ甥一人、ある時は氣を痛ませ、心を盡させ身を碎かせ、苦勞の上に苦勞を掛け、一日盡せし孝行なく、不孝第一の某を、勘當不興も仕給はず。如何なる合緣奇緣にや、親も及ばぬ御厚恩、送りもやらず自害して、又もや歎きを掛けん事、不孝の上の不孝の科、日月の怒りを

の原や、伏屋に立てる我が妻の、位牌に隱れ消えにけり。「ヤレお龜女どもお龜〱。」と尋ぬれども、山彦許りに姿もなし。「ま一度顏を見せよかし。つれなの人や。」とかつぱと伏し、消え入り〱歎きしが、漸うに正氣つき、「ア、狼狽へたり南無三寶、思へばお龜は死したる者。扨は魂魄止まつて、まざまざ詞を交せしか、不便の者の心や。」と、又咽び入るばかりなり。「エ、口惜しや淺ましや。去年一緒に死ぬるならば、迷ふとも共に迷ひ、浮むと共に浮むべし。つれなくも死に後れ、中有の闇に迷はせし、今出家とはなりたれども、知識智者の身でもなし。文盲不學の靑道心、念佛廻向なしたるとて、亡者の功德にょもならじ。今日は卯月十七日、この命日の明けぬ間に、今宵の中に自害して、來月のむかはりは、未來で一緒に付添はん。」と、胸を定めて死を急ぐ。戀しき人は先にあり、この世に殘す心はなく、淚も溢れぬ死用意、無慙といふも愚かなり。「ヤア待て暫し、大坂の伯父、在所の親、恩深き伯母のあり。狂亂したりと歎きをかけ、不孝の罪も恐ろしや。一筆づゝの書置を殘さばや。」と、佛前の經机引寄せて、油も細き燈火の、消ゆる間近き我が命、心あまりて事足らぬ、筆のすさみぞ哀れなる。かかる所に相住の道心、石山より立歸り、「何と助給御無事なか。今下向致した。やあえい。」と平包、どうど下して休みける。助給はつとおもひしが、イヤ此の坊主は、いろはのいの字も讀み書きならぬ幸ひと、「まめで下向羨ましい。今にいかい參りか。在所の文を書きかけたる間に、溫湯も沸

の住居でも、女房がなうてはちつと事が缺けませう。鍋蓋と女房は、無うて叶はぬ筈なれど、鍋蓋あつても女房が無い。事の缺けぬは不思議ぢやまで、眞に忘れたその筈ぢや。道具と女房は有合はせ、尤もぢや〳〵、道具屋の娘ぢやもの。」と、とんと背けて身をすねて、口舌仕掛くる目元なり。色氣を離れた道心も、何樣やら心浮いて來て、「ヤアいかう口が上つたの、斯うして居ても面白い事、芥子程も持ちませぬ。うさんな事が有るならば、拷問なされ。」といひければ、「それその口が憎いわいの。此方覺えがござらぬか。立賣堀の伯母樣の、聞けばあの與兵衞は、家の茶が飲み足らぬか、茶屋へもちよこちよこ遣ふとある、その詞を覺えてか。夫れから尋ぬる折もなく、今で胸に默つて居て、詮索せう許りに、今日は遙々來ました。茶屋で此方の參る茶は、新造の振か詰茶か、但しは白の白茶か、風呂で焚いた煎じ茶か。私が樣な薄茶は、交した詞も冷め切つて、水臭うて呑まれまい。互にこひ茶の初昔、私は忘れは仕ませぬ。」と衣の袖にひつたりと、抱き付いてぞ泣きにける。助給打笑ひ、「エ、かふにも立たぬ悋氣ぢやなう。今は左樣の色茶もなく、只お茶湯で暮します。さらば釜を焚き付けて、お茶湯一服供へませう。」と、火打箱引寄せて、はた〳〵と打ちければ、お龜すつくと立ち上り、「なう熱や堪へ難や。愛著戀慕の迷ひの火焔、緣に引かれて石の火の、身を焦す淺ましや。これまでなり。」と驅け出づる。「我を捨てて何處へぞ。暫し〳〵。」と縋れども、影も形もなき人の、ありとは見えてそ

事ぞ。」といへば、「さればいな今日は四月十七日觀音樣の御緣日、此方樣と父樣と、中の好うなる願立に、二十二社廻り仕まして、その次手に神子町の、黑格子お辻の方へ、在所の衆が呼ばしやんして、一寸逢ひに寄りました。去年此方樣の生口を、寄せてから近付になり初めて、再々私を呼び出して、父樣にも伯母樣にも、折々は逢ひまする。神子殿さへ合點なれば、何時逢はうと儘なるに、なぜ此方樣も折々は、呼び出しては下さんせぬ。」と、そゞろに咽ぶ恨みの淚、世に亡き人と氣も付かぬ、夫の心ぞ哀れなる。「ムヽ、先づ駕籠は預らう。爰へ通りや。」と呼びければ、「嬉しや誰もなささうな。」と、裾を搔い取る身も輕く、おりゐの簾捲き返す、駕籠は亂れて失せにけり。助給内に案内し、「これ見や今はこの身持。結構な事はなけれども、お龜は庵の體を見て、浮世の世話を餘所に見て、藜の羹紙衾、先づ盜人の恐れなく寐覺がよい。」といひければ、「ア、ほんに扠も氣樂な住居ぢや。釜一つ鍋一つ、谷から水を汲んで來て、山から柴を折つて來て、米ごし〳〵と洗うて、俎板に白瓜菜刀取つて、てき〳〵ヤ、てき〳〵〳〵ヤ、でき〳〵じやんと、揉み瓜に、なれ〳〵茄子秋茄子、嫁を譏る姑はなし。相伴は如來樣、火吹竹は一本、火箸は二本國中に、怖いと思ふ今めは居ず、此方樣と只二人、寢たけりや宵から長枕、寢ともなくば起き通し、誰が叱らうとも思はばこそ、世界の樂とはこの住家。女夫一緒に居る內に、せめて一日片時でも、斯うした暮しはしもせいで、今これが何になる。何ほこ

ぬ面影は、夢ともなく現とも、無き人爰に有り〳〵と、昔を見るも歸るさ知らぬ死出の旅、〳〵、露の仇駕籠急がん。戀と言ふそのたう網にからまれて、浮みもやらぬお龜とは、外には人も水くらき、澤邊の螢。稻の殿、影かあらぬか簾の隙に、漏るは卯の花白妙の雪のな、振袖ちら〳〵とな、ありし昔に奈良團扇、風かろ〳〵と駕籠舁が、昨日の旦那今朝の幻、夢の浮橋一つ橋、「跨げぢや。」「合點ぢや。」「手にも取られぬ朧駕籠、姿の山に肩替ふる、賤が袂も幽なる。折節助給は念佛に氣を屈し、茫然と眠けざし、物に化されたる如く、うつかりとして表を見れば、山家に見馴れぬ女中駕籠、不思議と思ふ氣もつかず、身をも所も打忘れ、とほんとしてぞ居たりける。細谷川の小石原、息杖の音かまびすく、川瀨が鳴るか空耳か、女の聲にて高々と、「北久太郎町古道具屋笠屋與兵衞樣と申すお方は此の邊では御座らぬか。」と、尋ぬる聲と諸共に、駕籠は庵に近づきたり。助給は元より魂魄に、氣を奪はれたる夢心地、「オ、これ〳〵、その與兵衞は爰ぢや〳〵。」と、扇を上げて打招く。「ヤレ〳〵嬉しや、彼處ぢやげな。駕籠の衆賴みます。ま些と急いで下さんせ。」と、機嫌よげなる高笑ひ、程なく駕籠は庵室の、柴の戶口に舁き据ゆる。簾を上ぐれば妻のお龜、莞爾なる綠の眉、芙蓉の目元、わさわさと、「さつても熱い事かな。それそこな樒の葉の、水一つ下さんせ。」と、汗おし拭ふと見えにけり。
「いや〳〵水はいらぬもの。釜の下を焚き付けう。して先づ今日は駕籠に乘つて、何處へ往きやつた

き罪を作りし。」と、杖をからりと投げ捨てて、前後不覺に伏し沈み、聲をはかりに歎きしは、道理せめて哀れなり。至極に詰り一言も、傳三兄弟顔を下げ、伏目になれば長兵衛も、漸う涙をおし止め、道理とも尤もとも。皆某が誤りなり。この上は身に替へて、與兵衛が命を助け出家させ、娘が願ひを立て申す。落居の後は今兄弟、家を追ひ出し申すべし。外聞といひ親の身で、のめ〳〵生きて居る心、伯母御推量遊ばせ。」と、又潸々と泣きければ、「オ、夫れはせめてもその詞、違はぬ樣に頼むぞ。ハア神子殿へも面目なや。いつぞや爰へ生口寄に參つたげな。美しい娘こそ今大坂の口の端に、か丶る梓も縁ならめ。拜んで下され頼みます。」と、出づれば神子も門送り、「いとしぼ樣や。」と諸共に、思ひの數も百二十、袖に涙を包錢、繋がる因果や巡り行く、月にも日にも秋風も、捨て果てたりし與兵衛が、生き効も無き身なれども、親、伯母も心默されず、髮剃りこぼし發心遂げ、妻の菩提も我が後世も、助け給へといふ文字、その名を助給法師と改め、二度難波の故都へは、蹈み返さじと足曳の、大和國平羣谷、大念佛派の庵室に、知邊をもとめ閉ぢ籠り、妻の位牌の手向草、いう〳〵たる谷に下りては、去此不遠の水を荷ひ、盤々たる山路に薪を拾ひては、十萬億土の月を攀ぢ、霜に憧れ霞に伏し、櫻が閉す柴の戸も、躑躅にあけて今年も早、卯月中旬になりにけり。相住の道心は、二三日以前より、石山參りの留守なれば、助給一人佛前に、心も細き鐘の聲、廬山の雨の世捨人、捨てても捨て

姪子共、可愛がらせう爲ばつかり。月に一度しひて二度三度とは往かねども、家のさだつも見て取つた。この摑み頰兄弟が、お龜女夫を踏み付けに、せこめ廻すといふ事を、盲目でさへ知つて居る。其方に二つ眼は無いか、但し知つての指圖か。お龜は其方が死なした、お龜を返しや姪返しや。如何に妾が可愛いとて、我が子に思ひ換へるとは、酷いぞや憂いぞや。」と、せき上げ〱泣き叫び、傍なる竹杖押取りて、「姪の敵。」と長兵衛を、散々にこそ打つたりけれ。傳三も今も縋り付き、これ申し伯母御樣、人中といひ女中の身、如何に弟御なればとて、近頃非道千萬。」と、もぎ放す手をふり解き、「アア非道とは誰が事。その非道といふは汝等兄弟。同じ女子と生まれても、汝等とは違うたぞ。善し惡しは嚙み分ける。エ、扠この伯母が手前、兎も角もするならば、お龜夫婦を引取つて、分立つて商ひさせ、くじみやしても汝等に、がや〱口を利かせうか。貧の病に肩身もすぼり、可愛や氣弱な甥姪を、踏付にさせたよなあ。せめて片眼見ゆるなら、起居素振に氣をつけても、斯う闇々とは死なせまじ。その胴慾な心からは、二人が死にに出るていを、見ても見ぬ顏仕かねまい。恨めしい者どもや。」と、盲目打ちに擲り打ち〱、聲も惜しまず泣きけるが、「不便やお龜が存生に、汝等が驕る面厭きたからう擲ちたかろ。若い身なれば齒切して、堪へた心思ひやる。これはお龜が打つ杖。」と、折るゝ許りに四つ五つ、又ちやう〱と擲ちつけて、「今は打つても擲いても、死んだお龜が歸るにこそ、由な

ひ弔ひにもます鏡、冥土の曇が晴らしたやなう。」「いやこれなうお龜樣、女夫の衆がこの今を、酢でさいて飲む樣に、言ひたいがいに言ひ籠めて、死んでも又言ひ足らぬか。榮耀が餘つて此方衆が、ほたえ死めさるゝをおれ兄弟が知つたか。それに何ぢや兄弟の犬めらとは、ォ、私や犬ぢや黒犬ぢや。試し物になる與兵衛の身體を、がり〳〵と嚙んでやろ。梅田堤で其方の死骸、嚙まいで殘り多いわいなう。」「なう死人に妄語はなきぞとよ。恩を知らぬは犬畜生。身の皮剝いでも母樣の、御恩を思はば幡天蓋、袈裟の一重も上げはせず、著衣裳までもがり取り、家一杯に荒鼠、父御を誑す見苦しや。それに弟の傳三めが、旦那増りにとぼし立て、提灯に釣鐘と、主ある我が袖褄引き、與兵衛殿を失ひて、夫婦になつて家の跡、繼がうというたを忘れたか。此方等夫婦は下人にて、今兄弟は旦那顏、車は海へ舟は山、皆逆の憂さ愁さ、語れば親の恥晒し、言へば詞のくづいをの、夜の衣の我が夫の、命を助け出家となし、家を晦ます黒雲を、祓はば晴るゝ胸の月、守りの神とゆふつけ鳥の、別れは又の逢瀬あり。今は返らぬ三途の川、影は留らず手に取られず。冥土の使繋ければ、浮世の名殘これまで。」と、梓の弓に弭に、弦走りして失せにけり。伯母は涙に沈みながら、神子の前とも思はれず、「これ長兵衛の邪見者、亡者の寄口聞きやつたか。我は其方の姉ぢやぞや。身こそ貧なれ一文一錢、合力は受けまいし、何輕薄が言ひたかろ。現在弟に殿樣付、内外の者に追從するも、母のない

中。」と呼ばはる聲に、里人をり合ひ、池に飛び入り引上ぐれば、女は死して眞菰草、薦や蓆に死骸を埋む。男は淺疵半死、「殺してくれい。死なしてくれ。」と、泣き叫ぶ間に緣者一門驅け付けく、「北久太郎町心齋橋古道具屋の跡取壻養子。」と、とりぐに見物人の山をなす。「斯くてはすまず。」と、與兵衞を駕籠に打乘せ、ながらへし甲斐もあるかや蜆川、跡白波とぞなりにける。

中之卷

廣がりし浮名は何とすぼめても、笠屋夫婦の心中と、歌に唄はれ繪に賣られ、或は狂言淨瑠璃の、三十五日に早なりぬ。父長兵衞は一人子を、あへなくなせしその悔み、壻與兵衞が疵もまた、立賣堀の伯母諸共に、傳三兄弟引連れて、河内の親の手に預け、天王寺の東門を、大坂の方へ歸りしが、下女のふりは、神子町を見遣りて、「わつ。」と泣き出し、「申し伯母御樣、お今女郎、今までは物見、見物參り、又はこのよな時節でも、お龜樣も打揃ひ、ひらり帽子に加賀菅笠、大振袖の後帶、いかな者でも見返りて、お供についた私等まで、眞に肩がいかつたに、大事の花を失うて、物足らずなお供には、歩けど足を引戻す。何時やら爰の神子町へ、それがお供の仕納めか。冥土の道の一人旅、誰がお供しませうぞ。おふり如何ぢや斯うぢやと、愛想らしい聲付が、耳に殘つて有る樣な。元結一筋、紙

龜は常々信仰の、「南無觀世音菩薩樣。母樣の戒名教譽樹林信女、一つ蓮に導き給へ。南無觀音樣觀音樣。」と、手を合はせて待ちけれども、男は目眩れ差しうつぶき、只泣くより外の事ぞなき。「エ、憂き目を見せて何事。」と、夫の手を取りわが咽喉に、おし當つれば思ひきり、「南無阿彌陀佛。」と笛のくさり、剃刀の刃も折れよと一刳は刳りしが、若き者の悲しさは、とゞめの急所を知らずして、未だ息絶えず悶ゆるを、疵の口を隱さんと、抱への帶をぐる〳〵と、二三遍引廻す。憂き目の程ぞ不便なる。「我も軈て追つつかん。」と、咽喉にあつる剃刀の、刃は鋸と折れ碎け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれども、通りつべうはなかりけり。「南無三寶。」と剃刀すて、傍に拔き置く脇差の、鞘を持つて引き上ぐる。鐔は重し手は弱る、彈んではぬる勢ひに、脇差ぬけて樋の口の、井出の水草の漲つて、ざんぶと許り沉んだれ。「エ、しなしたりこは如何に。」と、這ひ下るゝ堤の露、溢れし血に足滑り、池へどうど落ちたりけり。池は深くて泥土深し。底の脇差尋ねかね、浮きぬ沉みぬ漂ひしが、今を最期の眼にも、夫を思ふお龜が心、引き揚げんとや思ひけん。這ふ〳〵岸によると見えしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうど落ち、互に助け引き揚げんと、抱き上ぐればどうど伏し、かき上ぐればかつぱと伏し、心許りを力にて、「なう與兵衞樣々々。」「お龜〳〵。」と呼び交す絶え〳〵切るる息の下、この世からなる地獄かや。哀れ果敢なき三重有樣なり。朝出の土民が見つけ出し、「ヤレ心

けかけて泣きゐたり。「ア、愚かや愚癡や淺ましや。永き來世があるぞかし。さりながら心にかゝるは其方の父御。二人とも無き獨子を、憎や聟めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、これ罪障となるぞ。」とて、共にひれ伏し泣きければ、「いや父樣は男氣の、思ひ諦めあるべきが、いとしや在所のお袋樣、姑なりとて一日の、みや仕へした事もなく、大事の子をば嫁故に、失うた殺したと、お叱りなされんこれ一つ。目の不自由な伯母樣の、力となるはこち女夫。嘸今頃は泣き悲しみ、眼でも眩はぬかどうしたと、胸に塞がるこれ二つ。又母樣の十三年、觀音經を書きませう。佛になつて下さんせと、墓に向うて約束の、これが違うた。何やかや斯くまで重き罪科の、閻魔の前には黑鐵の、帳に付くと聞くものを、よい所へよも往かじ。火水の地獄も厭はねども、夫婦別れて行かうかと、これのみ猶も迷ひぞ。」と、聲もをしまず歎きける。さすが男は力をつけ、「一途に行かうと別れうと、皆一心の向け樣ぞ。氷の地獄、火焔の地獄、劒の山へ登るとも、とり交したる手は放さじ。」と、心強くは言ひければ、まだ蕾む花出づる月、玉の樣なる若い者、若い女の頑是なさ、慰めらるゝも慰むるも、分けて分たぬ涙なり。「あれ早東も白うだり。サア念佛。」といひければ、「心得たり。」と懷より、剃刀二挺取り出し、「これも母樣の額たれとて讓りなり。私はこれで死にたい。」と、泣く〳〵出すその中に、向うの野道を人通ふ。「あれよ〳〵。」と心は急く。二挺の剃刀一つにとり、「南無阿彌陀佛。」と引寄すれば、お

三十過ぎての初子とや。その讓りから馴れ初めて、一夜離れた事もなく、交す枕に子種のないか。是れも生まずの數ならば、根を掘る竹の伏見町、高麗橋の西東、牀も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮世小路の細き聲、唄うて歸るその歌の、品ある中にも來ぬ人を、まつほの浦の夕凪に、やくや藻鹽の身をこがす。それは吾妻の物語、耳に聞きたる許りぞや。そもじと我は浪速津の、貴賤羣集の見るめかる、尼ヶ崎町過書町に、はや北濱や中の島、明日は天滿の橋々賣りて、唄 梅田の、梅田の堤をそめし、紅葉笠屋のな女夫の心中、男二十一お龜は十五、年にあはすりや、いたづら〱ぢや。サア繪雙紙へ、餘所の口の端、ア、餘所事に買ひ求めては慰みし、この身の果てを讀賣に、誰が節つけて田舍まで、唄ひ流さん蜆川、水も濁りてこの世へは、いつかへりすむ根なし草、左手は無常の燒草と、惜しからぬ身はをしからず。灰となさうかこの肌。」「煙となるかこの形。」「惜しや。」「いとしや。」「悲しや。」と、引き合ひし手を猶締めて、涙の限り泣き盡す。杜の小烏、川千鳥、がつぽう鳥も聲さびて、早東雲も近づけば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば綱舟の、目にや懸らん行く先は、早曾根崎の宮奴の、朝淨めする折なれば、今は仕方夏草の、人目堤の下陰を、爰ぞ夫婦の最期場と、泣く〱休らひ立ちにけり。お龜は夫の顏を見て、「連立つ冥土の道とは知れど、今今生の別れとて、言ひたい事の何やらが、胸にはあつて口へ出ず。飽く程顏が見て死にたや、心なの短夜。」と、身を投

あとおひ心中 卯月の潤色

上之巻

末後の道行

今捨つる身にも怖ろし犬の聲、辻を隔てて見歸れば、あれで生まれし町所、家の馴染も十五年、その春夏のこの月は、祝月とて物忌ひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、つゝましく、其方の髪亂れずや。いや我よりもおの樣の、鬢撫で附けて掻きなでて、死んだ跡までよい殿と、人に言はせまほし明、今宵の月を月々に、待ちしも遂にひきかへて、冥土の使我々を、待つらんものとかきくれて、涙曇りの十七夜、二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つるとも、假令佛になるとても、必ず契り米屋町、本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町、生まれ變りて又いつか、娑婆の便りの備後町、思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、逃れし賽の河原町、三途の瀬戸の淡路町、超ゆれば親の古里の、名にも別るゝ平野町、曙近き時太鼓、どう道修町これやこの、修羅の太鼓の響かと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつゝ泣くばかり。聞けば私も母樣の、

いてひらりと飛び、橋の上まで斬り出づる。四丁町より、「すは喧嘩。」と東西の門を打ち、「擲き殺せ。」と集まつたり。二人女房大音あげ、「訴へ申した敵討外の人には構ひなし。聊爾をするな。」と聲をかけ門の左右に突立ちけり。二人は爰を大事ぞと、息休めては打合はせ、命限りに火を散らし、花を亂して二重切り合ひしが、然れども彦九郎侍の身で、町人を見苦しとや思ひけん。その身は然のみ働かず、うちかくれば追拂ひ、二三度揉ませて是れまでと、射る矢の如くつゝと入り、弓手の肩先右手のさがりに、ざんぶと切つて落せば、犬居にどうどぞ臥したりける。文六やがて飛び懸り、「母の敵。」と切りつくる。藤が爲には、「姉の敵、受取れ。」とちやうど打ち、同じくゆらは、「嫂の敵、恨みの刀。」とはたと切る。四人一緒に乘り掛つて、一度にとゞめを刺いたるは、前代未聞の振舞なり。一町集まり棒突き竝べ、「敵討とは申しながら、町内の念の爲、腰の物を預つて、有無の御下知有るまでは、外へは落し申されず。會所へ取つて押込めよ。」と、四人の男女打圍ひ、しんづ〳〵と歩み行く。見事さ立派さ心地よさ、世上にばつと囃し立て、いひ渡したる山鉾の、ちやんぎりしつきり切つたりや、討つたり敵妻敵討、話のとほり眞直に、いへば言はるゝ舌三寸の、操の御評判とぞなりにける。

堀川波鼓　終

こそ小倉彦九郎。妻女種と不義の段露顯によつて、女は先月二十七日に刺し殺す。妻敵やらぬ。」と聲をかけ、拔打にはたと切る。「さしつたり。」と足をあげ、梯子に手をかけ、「えいやつ。」と、二階へ上るを追ひ縋り、上らんとせし所を、源右衞門が女房、かけたる長刀おつとり延べ、上げはたてじと切り結ぶ。下人共は物合より、棒棒杖よ帚木よと、支ふるもかせとなり、躊躇ふ中に源右衞門、蟲籠より手を出し、軒に立てたる槍おつとり、上り口より差下しに、「上らば突かん。」といふ儘に、眞下しにぞ突きかけたる。彦九郎あざ笑ひ、「何の己が鼠突。鼓の胴こそ握るとも、槍の柄握る習ひは知らじ。身の好いたる細工槍、手並を見よ。」と、蛭卷よりかつしと切つてぞおとしける。「ものくしや。」と腕の力、碁盤片手に振上げて、「こりや、我は元より武士ならず。槍持つすべは知らねども、鼓のお陰でうつ事覺えた。この碁盤うけて見よ。」と、狙ひすまして礑とうち、雙六盤將棊盤、とつては投げく、後には火入煙草盆、風呂釜茶椀枕箱、ぐわらりとうちあけ手にさはるを、ばらりくと投げたるは、たゞ降る雨の如くにて、寄るべき樣もなき所に、妹のおゆら表へ廻り、辻の門に手をかけて、柱を傳ひ貫木ふまへ、尾垂より這ひあがつて、拔打にちやうど切る。源右衞門仕方なく四尺屛風を倒しかけ、上よりとつて押ふれば、刎ね返さんと挑みあひ、終に脇差もぎとつたり。その隙に彦九郎、梯子を上つて餘さじと、追立てく切り結ぶ。手ひどくなれば叶はじと、大道へこそ飛んだりけれ。追續

如何はせん。」ととり〴〵に、小聲になつて談合す。文六耐へぬ若者の、「斯樣にいうてはいつまでも、本望遂ぐる時節はあらじ。下郎共あらばあれ、めざす敵は只一人。助太刀あらば撫斬の、それからは運次第。いで切り入らん。」と驅け出づる。「やれ待て思案できたり。」と、押鎭めて彥九郞、又門に立ち暖簾あげ、「これ申し賴みませう。先程これより編笠召して、お出でなされた殿達は、山鉾見にがなお出でならん。三條上る室町で喧嘩しだして、大勢に取卷かれてござります。お知らせ申す。」と呼ばはりける。「これはしたり。」下人ども、はら〳〵と驅け出でて、「三條とはどう行くぞ。室町とはどちらへ行く。北か西か。」とおつとり刀、我劣らじとぞ走りける。「サアこの方の謀、當らずといふ事なく、運の盛り刻限先勝の時至れり。」と、衣脫ぎ捨てふはと捨て、親子の脇差兩人の、女に渡せば心得て、鐔打ちならしぼつこんで、鉢卷りゝしく抱へ帶、紮げし膝口しろ〴〵と、小足を踏んで立つたるは、男勝りといひつべし。「南無正八幡大菩薩、神力威力を添へ給へ。」と、心中に祈念して、二人の女は堀川口、親子は立賣西東へ、立別るゝと見えけるが、中戶障子を蹴破つて、ばら〳〵と驅け入つたり。思ひがけなき家內には、下女も下人も、「あゝ怖や。」と、裏口さして逃げ出づる。「あれこそ宮地源右衞門。」と、お藤に聲をかけられて、安閑たる源右衞門、立ち上つて二階梯子、半ば上つて腰打ちかけ、拳を握り左右を睨んで控へしに、隙間もあらせず二人の女、兩方に引添うたり。彥九郞大音あげ、「我

込み阿彌陀笠、上に衣をひつ張つて、暖簾の褄よりさしのぞき、かねて覺えし普門品、本望遂ぐる身の祈禱、案內檢見のたよりとも、力を添へて、「只賴み、妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五、爾時無盡意菩薩、卽從座起、偏袒右肩、合掌向佛、而作是言、世尊觀世音菩薩、以何因緣名觀世音菩薩。」「エ、かしましい默りや。遣らう。」と走り出る、下女が手の內うらどうて、「申し女郎樣、早々からの御客さうな。誰樣で御座る。」と問ひにける。いづれ下部の口まめに、「あれは田舍の御侍、これの旦那殿の鼓の弟子。お國の殿樣から鼓故に、御加增があつたげな。これも師匠の御蔭ぢやてて、今度禮に御座つたが、旦那樣へ銀十枚、內儀樣へ一步五つ、私等までつらりつと、三百宛あたゝまつた。わがみの一日朝から晩まで、咽喉の穴の痛い程、觀音經を讀みやつたとて、三百は貰やるまい。さらりと經をとりおいて、手鼓なりともうつたがよい、今からでも鼓をうちや。」と、問はず語の口早に、言ひ捨て內に驅け入りける。彥九郎うちうなづき、「樣子は聞いたり。今からでも鼓をうてとは吉左右よし。」と皆々さゝやき勇みける。時を移さず客人は、上下脫いで脇差許り、編笠かづき只一人、あたりを忍ぶ風情にて、立賣を東へ、洞院南へ下りける。人々一緒にこぞりより、「これはきつと推量するに、只今の侍が下人どもを殘しおき、おもてに槍も置きながら、その身はこれにゐる體にて、祇園會の山鉾を、見に行くと覺えたり。七八人の下人ども留まつてあるからは、却々容易く討たれ難し。

「心得たるか。」「心得たゝ」「サア込み入らん。」と突立つ所へ、あれ見たか油の小路を此方へさし、らふそく槍の槍印、知行ならば三百石、二十餘りの若侍、茶字の袴に綟肩衣、若黨三人挾箱、對の奴草履取、十枚糊の付紙臺、足うち早め敵の門、「物まう。」といふもなまり聲、内より下人が、「どれい。」と答へ、溝端につくばへば、何かは聞えず稍暫し、頭をふり廻つて口上のべて、進上臺を差出せば、下人は受取り腰屈め、其の儘内に入りにける。文六天窗をかいて、「エ、拍子に乘つたる先を折る。如何はせん。」と跪きしを、「いや〳〵屈する事なかれ。屋敷方か御所方か、囃子を勤めし禮物と見うけたり。返事を聞いて返る分、隙はいるまじ待つて見よ。」と、いふ中に以前の下人立出でて、「これへ。」といへる氣色にて、主人内へ入りければ、若黨中間草履取、槍を軒端に立て懸けて、皆々内に入りけるは、事緩やかに見えてけり。外より樣子を窺はんと、立ちより見れども中戸を閉め、人音許り聞えしも高聲なり。すご〳〵通る法師を呼びかけ、「これ〳〵御坊。御身が衣の、破れまはつて見苦しさよ、所に、托鉢の道心者、「はつち〳〵。」と門にたつ。下女の聲して、「忙がしい通りや。」と、きごつなげにこの金子を報謝する。新しいを買うて、夫れをこれに脱いでいきや。非人にとらせ喜ばせん。」と小判一兩與ふれば、夢かとおもふ顔つきにて、「ア、これは如來樣。」と、いたゞき〳〵伏し拜み、「夫れなら御意に任せませう。」と、古著は脱いでぞ通りける。彦九郎うちふるひ、辻なる門の片陰にて、頭巾引

るさへ、心に懸るその上、今の石賣かゝどもが、馬の沓が打たれぬ。打たずに引いて歸れとは、如何にしても氣懸りなり。その上世間に同じ名の、あるはならひといひながら、折しも悪う一人をば、お藤と呼んだは何事ぞ。味方の心おくれては、仕損ずるは定のもの。天道よりの御しらせ、又翌日の日もあるものを、今日は延引せまいか。」と、いへば皆二の足にぞなりにける。斯かる所へ西橋詰の髪結牀より、さばき髪の若い者、楊枝くはへて來りしが、友とおぼしく行き逢うたり。「ヤアこれは早々から、髪も結はずにどこへ。」といふ。「然ればば〳〵、祭に行く今日のはれ、月代剃らせにいつたれば、扨も切つたわ〳〵、荒がみそりの刃は劒、天窗をうち切りちや〳〵くつた。あいつが手にかけては、幾人でも切りさうな。これを見よ。」と言ひければ、「ハア、切つたり〳〵。これで客に行つたらば、祇園祭ではなうて、軍神の血祭ぢや。」と、笑ひてこそは別れけれ。四人嬉しき辻占の、「今のを聞いたか。」「聞きました。サア破軍がなほつた仕濟ました。」と、そゞろに笑うて勇みをなす、心底思ひやられたり。「いざこの運に乗つて討たん。時刻延ばすな用意せよ。」と、帯締め直し身を輕め、内の勝手を知らざれば、爰にて談合無益の沙汰。女二人は堀川おもて、小店に上つて障子蹴破りつゝといれ。我々親子は立賣の、門口より中戸を蹴破り込み入るべし。面體を見知らぬぞ。人違へさするな。神妙に意趣を述べ、ものの見事に討たんずる。はやまつて欺討、卑怯などといはするな。合點か。」「合點ぢや。」

下之巻

寺、御幸、麩屋、富柳、堺町、柑の東は玉敷の、御垣にかこふ五つ緒の車、烏丸、兩が室、衣、新釜、西小川、油、醒井、堀川の、岸の平砂を白波に、照らせば今も夏の夜の、下立賣のほの〴〵明、六月七日祇園會の、長刀鉾の切先に、うちかちどきの鶏鉾と、門出を祝ふ力紙、拳をかため四つ辻に、四人さまよひ立ち居たり。常さへ賑ふ上京の、折しも今日の祭客、下へ〳〵と朝霧の、隙に門掃き打つ水の、かかる姿を咎むやと、西と東に行き別れ、立休らへる折柄に、豆腐商ふ商人の、「きらずきらず。」と聲高に、賣る辻占の耳に立ち、心おくれとなりやせん、南無三寶と橋詰に、各寄れば向うより、白川石をあきなひに、賤のかゝらが馬追ひ連れて、連を呼ぶさへ同じ名の、「お藤や、今日はあきなひ早終うて、祭に行かうと氣がせいて、馬に沓さへ打たなんだ。」「オ、然れば同じ事。今朝は少し寐過して、こちらも沓を打たずに來た。誰も今日は皆打たれぬ。いつそうたずに此の分で、とつとと引いて歸りやいの。」と、どつと笑うて通りける。京童の口ずさみ、家々ごとに朝もよひ、よろづに心もみ瓜を、刻む音さへ比叡の山、峯に響くと傳へたる、洛中の今朝のあなかまと、心亂るゝばかりなり。中にも藤は小聲になり、「いづれもなんと思召す。最前の豆腐屋が、きらず〳〵と賣つた

で、刺し通してぞ居たりける。哀れなりける覺悟なり。藤文六は、「あつ。」とばかり涙は胸にせき來れど、萎れぬ主人の顏に恥ぢ、齒をくひしばり歎きゐる。彦九郎刀を拔き、とつて引寄せぐつと刺し、返す刀にとゞめをさし、死骸おしやり刀を拭ひ、しづ〳〵仕舞うて立つたりし、武士の仕方のすゝどさよ。今朝脱ぎ捨てし旅裝束、又おつとつて笠草鞋、刀おつとり、これ文六、我はこれより番頭へ訴へ、御暇申し捨て、直に京都へ馳せ上り、女敵を討つ間、おのれは足弱引連れて、一門方へ立退け。」と、言捨て出づれば藤文六、ゆらも同じくひき添うて、「共に行かん。」とせり合うたり。彦九郎大の眼に角をたて、町人風情一人に、おのれらを召連れて、この彦九郎にいよ〳〵恥を與ふるか。一人にても付き來らば、勘當なり。」と怒りける。各一度に、「わつ。」と泣き、「それは餘りに情なし。我等が爲には姉の敵。」「我が爲には母の仇。」「いや我が爲にも嫂の、敵を見捨ておかれうか。然りとては連れてたべ。」と、三人一緒に手を合はせ、聲をあげて泣きければ、夫も今は包みかね、勇める容顏しをしをと、「さほど母姉嫂を、大切に思ふ程ならば、など最前に衣をきせ、尼にせんとて命をば、なぜに貰うてくれざりし。」と、空しき體に抱き付き、「わつ。」と叫び入りければ、殘る人々諸共に、涙につれてたち出づる、物の哀れや武士の、身こそ 三重 あだなるならひなれ。

ないかいやい。ム、さこそ〳〵、返答はあるまじき。さて不義は中立同罪たり。藤は中立知らぬか。」と言へば、「ア、愚かなり彦九郎樣。中立をしる程ならば、斯樣に恥を見るべきか。」と、又さめ〴〵とぞ泣き居たる。「扠は下女めが中立ならん。其奴呼べ。」と呼び出せば、がち〳〵〳〵身を震はし、「ア、御勿體なや、私はなんにも存じませぬ。この間お種樣、人に隱して、子墮藥を買うてくれとおしやりまして、一服を七分宛、三服を二匁一分で、買うて參つたばつかり。然りながら旦那樣のお聞きなされたら、高い物を買うたと叱られうかと思うて、錢※はしかけてやりました。」と、何をいふやら譯もなし。彦九郎はつとおどろき、「扠は懷胎したるか。やい文六、おのれ若年なれども、これ程家中の沙汰といひ、何として源右衞門、疾くに討つては捨てざるぞ。」「いや我等も今朝承り、家來どもに申し付け、彼が旅宿へ討手に遣はし候へば、二三日以前に京都に歸り候。」と言へば、「ム、是非に及ばず。それ持佛堂に火をともせ。女立つて持佛へ來れ。」と言ひければ、女房涙おし拭ひ、「未來の末の後の世まで、御にくしみのあるべきに、持佛堂へ參れとは、さすが馴染の御情、いつの世にかは忘るべき。その御心をこの年月、知つていとしき我が夫を、袖にしての不義ではなし。夢見たやうな身の上の、間に憎い奴もあれど、いへば卑怯の未練の死。夫の刀の先するは、如何とは存ずれども、これは我が身の言譯なり。免してくだされこれ御覽ぜ。」と、胸押し開けば九寸五分、膽さきに切羽ま

刀とり延べ閃かし、たるまば切らんず勢ひなり。彦九郎横手を打つて、「ム、これは珍事を聞くものかな。その源右衞門とやらん、音には聞けど面は見ず。遂に家内へ出入せず。證據やある。」と問ひければ、「オ、三五平ほどの者が、證據をとらでいふべきか。即ち傍輩磯邊牀右衞門、氣色を見てとり見廻にもてなし、兩人忍び逢ひたる夜の、兩袖切つて取つたるが、御家中取沙汰ある上は、隱しても隱されず。いかに傍輩のねんごろとて、直にはこの事しらされずと、夫の三五平殿に注進ある。是れ御覽ぜ。」と懷中より、二人の袂を投げ出し、「これにも何と疑ひか。」と、色を違へて申しける。彦九郎取りあげて見て、男の袖は知らねども、女の衣裳に覺えあり。「こりや妹、たつた今其方が恥辱を雪いで得させんず。此方へ來れ。」と打連れて、座敷にこそは通りけれ。家内の上下これを聞き、鳴をひつそと靜めし時、主人少しも騷がず、「女房ども來れ。倅文六來れ。」と、詞少なに呼びければ、いづれもすはや大事ぞと、そろ／＼夫の前に出で、頭を下げて居たりしは、身も冷え渡り魂消え、息を閉ぢたるその中に、無慙や種は心にも、工まぬ不慮の惡緣の、身の鈍刀夫の手で、刃に掛るは覺悟のまへ。やがて逢はんと永の留守、辛抱盡せし效もなく、去年發足の前の夜の、枕が限りの枕とは、今殺さるる今までも、思はざりしと思ふにも、今一度夫の顏、見たやとは思へども、涙にくれて目も開かず、差俯向いてぞ泣き居たる。主人兩袖投げ出し、「妹ゆらが言分、定めていづれも聞きつらん。女言譯

に歎きをかけ、來世に御座る母樣の、屍に苦患がかゝるわ。」と、くどきつ恨みつ聲をあげ、伏し沈みてぞ泣き居たる。姉は詞も涙にむせび、「好みし酒も今思へば、前世の業の毒の酒、無明の酒の醉ひさめて、自害せんと思ひしが、夫の顔を今一度、見たい／＼と思ふより、今日と延び明日と暮れ、世間に恥を晒す事、我が身に惡魔の魅入りか。」と、返らぬ愚癡の繰言に、姉妹縋り抱きあひ、聲もをしまず泣き居たり。よに是非もなく哀れなり。時に門外さわがしく、「口論あるか先づ暫し。」と、姉妹奥に入りければ、彦九郎妹のゆらは、長刀をとりのべて、兄彦九郎を追ひ驅け來り、「是れ兄樣、妹とはいひながら、政山三五平といふ侍の妻なれば、義の立たぬ事あれば、兄とても許されず。いかにいかに。」と申しける。彦九郎はつたと睨み、「ヤアこざかしき女郎めが、兄彦九郎に向つて、義の立たぬとは推參千萬。仔細をぬかせ、ぬかさずば、長刀持つたる腕ぼし共に、捻ぢ折つてくれんず。」と大きに怒つて言ひければ、ゆら呵々と笑ひ、「ヤアしをらしい腰拔殿。樣子をいうて聞かせ申さん。『此方内儀は鼓の師匠、京の宮地源右衛門と密通して、御家中この沙汰眞最中。それ故土産に眞苧を遣はし氣をつけても、女敵をも得討たず、聞かぬ顔する腰拔の彦九郎、その妹とは添ひ難し。』と、夫の政山三五平、我に暇をくれられて、『兄が腰立つたらば、その時は立歸れ。元の如く夫婦にならん。』と、離別して來つたり。これ腰拔の兄御、我が夫に添はせうか、添はせぬか、其方の一心一つぞ。」と、長

は見た。こなた一人で親兄弟、男の武士まですたつた。」と、聲を上げて泣きければ、姉はとかうの詞もなく、「常の意見を聽かざりし、酒が敵。」と許りにて、泣くより外の事ぞなき。妹せき來る涙をおさへ、「なうその悔みがもう半年遲かつた。これ妹が心の物思ひ、もはや姉の名はすたる、せめて命が助けたやと、とりどり樣々思案して、彦九郎樣との緣きれて、暇の狀さへ遣らせなば、海道の眞中でうませても大事ない。命に障りはない筈と、はかない女子の思案から、姉の男に執心と戯らものに身をなしたも、姉樣ばかりの孝行ならず。お果てなされた母樣へ、孝行と思ふ故ぞとよ。おいとしや母樣の、御臨終の二日前、兩人を枕の右左、遺言のお詞をよもや忘れはなされまい。そち等二人は小さいから女子の道を教へ込み、讀み書き縫針絲綿の、道もそれでは恥かかず。第一女子の嗜みは、殿御もつてが大事ぞや。舅は親ぞ、小舅は兄よ姉よと孝をなせ。ほかの男と差向ひ、顏をあげて見ぬものぢや。總じて夫の留守の中、男とあらば召使、一門他人おしなべて、年寄若いのへだてなく、この嗜みが惡ければ、四書五經を宙で讀む、女子でも役に立たぬぞや。この遺言をそち達が、論語と思うて忘るゝなとの御詞が、骨にしみ肝に殘つてえ忘れぬ。姉は父御の※そんをつぎ、後紐から酒を飲む。藤よ母になりかはり、意見をせよとその跡は、はや息ぎれのやつれ顏、身に付添うて忘られず。朝夕位牌に向へども、この遺言をお經と思ひ、一遍づゝは繰つて見る。姉樣ははや忘れてか。この世の妹

て膝に敷き、「親にも子にも換へじと思ふ、稚馴染の我が夫、一年隔てし長の留守、月よ星よと待ちうけて、漸うと今朝殿御の貌、見たぞ嬉しや來年までは、一つに寢臥もせうものと、悦んだ矢先に己めは、姉を去れの離別のとは、ようもいうた畜生面、生けておくも腹立ちや。」と目鼻もわかず打叩く。「なうこれには言譯だん〳〵あり。取りさへてたべ人々。なう息も絶ゆる。」と叫ぶにぞ、「先づ言譯をお聽き。」と、たつて支ふれば姉お種、「サアさあ言譯が立たぬからは、この度は命を取る。言譯あらばして見よ。」と、とつてひき立て突き退けしは、理道理至極なり。妹くるしき息をつぎ、亂れし髪を搔撫で〳〵涙を押へ、「この言譯は姉樣と差向ひにいふ事ぞ。皆々次へ。」と言ひければ、いづれも立つてぞ退きにける。「ヤア仔細らしうせずとも、言譯を聽かん。」と言へば、妹涙をはら〳〵と流し、「これ姉樣、自らが彦九郎樣へ狀をつけ、姉樣去つて下されと、言うてやつたは姉孝行、こなたの命が助けたさよ。いふに及ばず覺えがあらう。鼓の師匠源右衛門と懇してござらぬか。」と、いふ所を飛び懸り、口を押へ、「これだまりや。かりそめながらやす大事。何を見てさはいふぞ、證據を出せ。」と言ひければ、「オ、證據までもないことよ。このお腹には四月になる子は誰が子にて候ぞ。下女の林に買はせられし、墮胎藥は誰が飮むぞ。人は知らぬ樣なれど、家中一ぱいこれ沙汰で、今も今とて方々から、眞苧の土産に來りしも、彦九郎樣にしらせの爲、贔屓の方から氣をつけに、來たものなりと私

はなほこの文につぶさの事、分別きはめ書きましたれば、否でも應でも、合點してもらはねばなりませぬ。」と、封ぜし一通、姉聟の懐に押し入るゝ。彦九郎苦い顔して、「ヤァ其方は狂氣めさつたか。尤も姉を呼ぶ時分、其方の談合もあつたれども、緣なければこそ姉と夫婦と定まりて、十何年といふ年月を重ね、子まで養ひ置いたる中を、いか程に思はれうが、去つて其方に添はんとは、この彦九郎はえ申さぬ。斯樣な文は手にもとらぬ。」と、投げつけ表に出でにける。姉のお種奥より見て、つかつかと出で文を拾うて懐中す。「いやその文は大事の文、人には見せぬ。」と取りつくを、はたと蹴倒し棕櫚帚木おつとつて、散々にうちふする。「あれよ〳〵。」といふ聲に、文六下女ども驅けつけて、「何事か存ぜねども、御堪忍。」と縋りつき帚をたくれば、荷物につけしはなねぢ引きぬき、顔も頭もわれての けど、續け打にぞ打つたりける。お藤は聲あげ、「なう痛や死ぬるわなう。助けてたべ。」と泣き叫ぶ。文六はねぢに取りつき、これ母樣いか樣の事か存ぜねども、詞にてお叱りもあるべきに、あらけなき打擲。叔母樣目でも眩うたらば、何と言譯なされん。」と、苦々しく言ひければ、「いや打殺しても大事ない。姉の夫に執心懸け、江戸まで文を遣つたるを、たつた今慥かに聞く。今も拾うたこれ見よ。」と、封じめ引切りさつと明け、「ある事か姉を去つて暇をやり、私が夫婦になろと、生爪放して入れたる文、これが謔か讀んで見よ。えゝ憎や腹立ち。」と、飛び懸り髻を取つてくる〳〵と、手にからまい

ろ目出たかろ、さこそ嬉しからうどの、君々たれば臣もまた、しんたるの酒ざゝんざや、濱松の葉の散り失せず、萬代不易國入りの、國こそ久し三重がりけらし。家中の上下、親妻子に一年ぶりの對面に、彼方此方の悦び使、祝儀土產のとりやり持、中間小者に至るまで、ざゝめき渡るぞ賑しき。中にも小倉彦九郎、數年の務め舊功によつて、東發足のきざみ拔羣の御加增賜はり、若黨下人彌增して、一子文六お種兄弟、悦びあふ事限りなし。爰に主人の妹聟、政山三五平といふ馬廻、これもこの度歸國なりしが、お種の方へ使を立て、「先づ以て道中何事もなく御供にて、久々にて御對面、さぞ御滿足候はん。此方とても同然たり。扨何がな土產と心ざし候へども、さして變りし品もなし。これは關東麻とて名物の眞苧、如何しくは候へども、御留守の間お種樣、眞苧をおうみなさるゝと、道中すがら家中の沙汰、罷り歸り承れば、御當地にても其の沙汰故、進上致し候。」と言ひもあへぬに、彼方のこれは誰樣より、此方の是れは何兵衞樣、お種樣へのお土產とて、送るにつけても女房は、心に應へ取沙汰の、夫の心もつくやとて、顏を見れども夫はさせる氣もつかず。「それ此方も荷をときて、相應に土產物見合はせて送るべし。ヤァ忘れたり。まづ舅殿へ參らうぞ。それ〳〵袴。」「あい。」といふて女房は、やがて奧にぞ入りにける。すり違うて妹のお藤、する〳〵と走り出で、袖に取りつき、「これ彦九郎樣、エ、おまへは曲もない。お江戶まで二度進じた、文の返事はなぜなされぬ。私心

る。火影にすかし牀右衛門、よく〳〵見れば下女子。「エ、勿體ないやいまく〳〵し。鰯で精進おちようとした。」と、跡見返らず逃げて行く、闇のうつゝぞ 三重 うつくしや。

中之卷

唄 さても見事なお葛籠馬や、七つ蒲團に曲彔すゑて、蒲團ばりして十小姓衆を乘せて、海道百里をはなでやる。はなもさき手の供道具、素槍片鎌十文字、からのかしらの紅の、きぬ紅梅魚は鯛、いふも管槍人は武士、奴が今朝の朝酒の、天目鞘に禿鞘、ふれ〳〵ふれや白雪の、富士も淺間も跡に見る、道も長柄の數槍の、鞘に掛りし木綿著鳥、關より西に隱れなき、名を望月の引馬や、轡の音のしやんしやん、りん〳〵しやりりん〳〵と、心拍子に乘掛は、六番頭使番、侍大將奏者番、旗大將の跡先に、續きて靡く旗棹の、世時治まり四方の海、波靜かにて天つ空、風もなぎなた見えたるは、醫者よ儒者よと物識も、知らぬもなべて行列に、舌をまくぐし挾箱、引きもちぎらぬ持弓の、滋籐塗りごめその數は、いさや白木にそば黑の、弓に靱に矢籠矢箱、二重の覆ひ著長の、その具足櫃甲立、立ちて程なき東路も、一歲越えし國の留守、七つ何事七つ道具の、臺笠立傘馬印、これぞと名にしおほ鳥毛、御召の駒も乘替も、己が故鄕の北風に、勇んで嘶ふ勢ひや、跡におさへの對道具、國久しか

し俯いてぞゐたりける。忠太夫は待ち兼ねて、猶荒氣なく門叩く「あれ父樣に見られては、死なねばならず如何せん。」と、此所彼所にはひ隱れ、下女が臥したる夜著の內、うろたへ入れば飛び上り、丸裸にて、「なう悲しや。うらが寐た懷へ盗人が這入つて、雪の肌を荒すわ。」と、わめきまはる勢ひに行燈を蹈みこかし、※戀路の闇のくらがりと、うたふは物かこれもまた、由なき事の迷ひなり。表は頻りに聲を立て、「明けよ〳〵。」と叩くにぞ、お種も男も顫ひさゝやき、後手に袖を引き、我が身で男をおし隱し、鐶明けて、「父樣か。サア御入り。」と言ひければ、親にてはなかりけり。牀右衛門顏隱し手をさし延べ、兩人が袂を一つにしかと取り、「サア不義者證據をとつたる。」と、聲をかくれば、「南無三寶。」と、潛戸はたとさしけれども、とつたる袂放さばこそ。仕方なくも源右衛門、腰の脇差するりと拔き、二人の袂きり放し、戸を引明けていつさんに、わが屋をさしてぞ逃げ去りける。牀右衛門は袖下を懷中に捻ぢこんで、戸をこぢ明けて內に入り、「さりとは御內儀曲がない。人には免す下紐の、我にはなぜつれないぞ。この事隱してくれならば、今宵のお情頼みます。」と、くらがりに手を擴げ、尋ね廻るぞ怖ろしき。立舞ふ內に裸身の下女にはつたと行當り、「こりやこそ爰に。」と抱きあふ。下女は勝手は覺えたり、我が寐所へと逃げ行けば、「こは忝し有り難い。」と、夜著引被ぎかつぱと臥す。下女はいやがり捻ぢ合ふ間に、「お種樣のお迎ひに、りんが只今參りました。」と、提灯ともし來たりけ

おし戴いて飲んだりけり。お種も餘程醉ひはくる、男の手をしかと取り、「コレこな樣とても主ある者のつけざしを、まゐるからは罪は同罪、何事も沙汰する事はなるまいぞ。」と詰めければ、「いやはやかかる迷惑。」と、飛んで出づるを抱きつき、「エ、あんまり戀知らず。扨もしんきな男や。」と、兩手をまはして男の帶、解けばとくる人心、酒と色とに氣も亂れ、互にしめつしめられつ、思はず誠の戀となり、「サアこの上は今の事、沙汰はならぬが合點か。」「オ、〳〵餘所かと思へば我が身の上。この事を隱さいでなんと。」障子を押し明けて、うたゝ寐枕かりそめの、緣の端また因果の端、うたてかりける契りなり。稍更け渡る時しもあれ、父の成山忠太夫下人も連れず立歸り、門の戸荒く敲いたり。お種はつと耳に入り、酒の醉醒目もさめて、我が身を見れば帶紐とき、男とそひしみだれ牀。「南無三寶あさましや、牀右衞門めが不義の沙汰、世間の口止爲んために、わざと戯れ仕懸けしまで、たしかにそれは覺えしが、その後は酒に醉ひ、夢現ともわきまへず。酒をとまれと常々に、妹が意見を聽き入れず、我が夫ならで一生に、覺えぬ男の肌ふれて、身を汚したか淺ましや。女の罪の第一にて、未來は愚かこの世の恥、親兄弟まで名を捨つる、身をいかにせん悲しやな。夢になつてもくれよかし。」と、咽び上げてぞ泣きゐたる。歎きの音に源右衞門目を覺し起き上り、これもおなじく醉ひ紛れ、男たる身の道を背く、「はつ。」とばかりに目を見合はせ、互に、「はづかし〳〵。」と、面はゆげにも涙ぐみ、さ

ろしや、人が聽いたそりや〳〵。」と、おどされて牀右衞門、「今のは何も皆じやれぢや、譃ぢや〳〵。」と言ひ捨てて走つて表へ逃げてけり。無慙やお種は氣もすわらず、恥かしや京の客、今のあらまし聞き給ひ、欺していふとはそも知らず、心のさげしみばかりかは、家中一ばいする人の、世間の沙汰を如何せん。胸のだくつき堪へ兼ねて、下女呼び起し酒の燗。「おもても閉めてもう寢よ。」と、ひとり酒汲み憂きつらさ、忘るゝうちも忘れぬは、江戸の夫の事ばかり。涙にいとゞ朧夜の、月さす緣に人音す。「ヤア是れは源右衞門樣、お前はどれへお越し。」と言へば、「イヤ女中ばかりは遠慮に存じ、罷り歸る。」とたち出づる袖をひかへて、「扨はお前は今の事、御耳に入れたるかや。勿體なや恐ろしや。彥九郞といふ男を持ち、眞實にいふべき樣はなし。當座の難を逃れんため、欺して申した分の事。御沙汰なされて下されな、偏に賴み參らす。」と、手を合はせて泣きければ、源右衞門も仕方なく、「いや聽いたでもなく聽かぬでもなく、餘り傍から聽きにくく、謠をうたひ紛らしたり。申してもやす大事。拙者は他言致すまいが、錐は袋と外よりの取沙汰は存ぜぬ。」と、振りきり出づるを縋りとめ、「さりとは酷い御詞。御身樣も若い殿、我も若い女の身。實のかうした事聽いても、隱しかくすは世の情。この分でいなせては、私心落著かず。いふまいとあるかための杯、取交して。」と銚子を取り、濃茶茶椀にちやうどつぎ、つつと干してまた引受け、半分飮んでさしければ、「こは珍らしいつけざし。」と、

振放して退きけれども、身の毛も立つて怖ろしく、わぢ〳〵慄へて居たりしが、「こりや侍畜生め。彦九郎殿とはねんごろなり、人間の道に背くと言ひ、御家中の後指、殿様のお耳に立たば、身代の破滅となるが知らぬかや。小倉彦九郎の女房ぞ、侍の妻なるぞ。推參な事をして、必ず我を恨みやるな。沙汰はせまい。サア歸りや。」と、にが〳〵しくも言ひければ、「いや〳〵〳〵、人の譏りも身の恥辱も、思うてしまうて上の事。よし御承引なきからは、此方と爰で刺し違へ、上方に流行る心中と、國中に沙汰をさせ、ともに恥をさらさんと、覺悟を極め來りし。」と、刀を拔いて胸座とり、「どうぞどうぞ。」とおどしける。女心の誠と思ひ、犬死と言ひ無き名を取るも口惜しし。たらさばやと分別して、「ム、これは眞實か。」「オヽ、殿様の御勘當うけ、歩に首討たるゝ法もあれ。僞りはない。」といふ。「扨も嬉しき御心底、何しに無下に致すべき。されども爰は親の家、今戻られては如何なり。明日の夜にても我等が内へ、密と忍んで下されなば、打解け思ひ晴らさう。」としとどうつてぞたらしける。無智無學の牀右衞門、一言にだまされほろりとなり、「忝い御情。この上はあこぎながら、とてもの事に今こゝで、ちよつと〳〵。」とすがりしを、「聞きわけなや。」と逃げまはる。襖の彼方に源右衞門、鼓を打つて聲をあげ、謠「邪淫の惡鬼は身をせめて、〳〵、劒の山の上に戀しき人は見えたり。嬉しやとてよぢ登れば、劒は身をとほす。磐石は骨を碎く。こはそも如何におそろしや。」「なう怖ろしや怖

また重ねて。」と辭儀を述べ、暇乞して歸りけり。文六もおとなしく、「私も旦那の屋敷、今宵は客もある筈なり。お暇申し候はん。祖父忠太夫歸らるゝまで、御師匠樣はこの所に、今暫く御座なされ下されい。」とぞ申しける。源右衛門は、「ともかくも、さりながらお袋樣と、さしでこれには如何なり。あの御座敷へ參らん。」と、その座を遠慮し立ちにけり。お種は文六送つて出で、「これなう其方は内へちよつと立寄つて、祖父樣にお歸りなされと申してたも。我もまた戻りたい。りんを迎ひに起してたも。」「心得ました。」と打答へ、主人の屋敷へ歸りける。門さし時の町はづれ、女主人の年若き、夫はながの東留守、心たしかに持つためと、一つ過する酒好み、亂れぬ顏もほかつきて、おもたき頭なで櫛や、向ふ鏡に餘情あり、殿待顏の夕かな。同じ家中の相役人、磯部牀右衛門は病氣とて、江戸供ゆるされ在國せしが、下人も連れず潛戸あけ、「御見舞申す。」とつつと入る。お種はつと鏡を退け、「忠太夫は今朝ほどより出でられ留守にて候。」と、言ひ捨てて入る所を抱きとめて、「これ申し、お留守を存じて參るからは、御親父に用はなし。そもじ樣故こがれ舟、人めの岩に波せきて、碎くる磯邊牀右衛門、今年お江戸を勤むれば、御加增あるは知れた事。武士の立身振り捨てて、虛病を構へ願ひをあげ、御國に止まるも皆君ゆゑと思召せ。病氣も譃で譃ならず、戀が病のお種樣、假の情のお藥を、ちよつと一服賴みます。拜みます。」とぞ抱きしむる。女房ちと酒には醉ふ。「エ、嫌らしや面倒や。」と、

客振の、よきにすぎては仇となる、先の見えざるうたてさよ。「すぐにこれを文六殿返盞申す。」と言ひければ、「爰は母がおさへまし、あひを致してあげません。」と、また引受けてついとほし、「酒がお氣にいつたらば、一つあがつて下さんせ。」と、置かせもあへず杯取り、「何がさて下されん。」と、たんぶとうけて一息のみ、文六にぞ戻しける。今度もちよつと口つけて、「憚りながら叔母樣へ上げませう。」とさす所を、「はてさて如何に飲まぬとて、あまり素氣ない一つ飲みや。母があひをしませう。」と、たぶたぶ受けてつつと干し、「母の身で我が子のあひ、目出度い上の目出度さに、江戸の父御の名代に、爰は一つ重ねませう。サアおあひを賴みます。」と、又源右衞門にぞさしにける。「扨は御内儀樣には、ちと御用ゐると見うけたり。馴々しき事ながら御手許見ん。」と突きもどす。妹は笑止がり、「いや〳〵深うは飲べられず。殊にこの頃あてられて、氣色も勝れぬ折柄なれば、姉樣もうおかしやんせ。」と、側から強て止むるが、張合になる上戸の癖、「エィ何言やる。お肴もない酒なれば、飲んであげるが御馳走。」と、得手勝手よりかへ銚子。客は手鼓一曲の、「これでは一つ。」とさし廻る、杯とつて天晴な

謠 つはものの交はり、賴みあるなかの酒宴かな。杯數返傾ける、日も晩景に及びしかば、妹の主人の屋敷より中間來つて、「これ申しお藤女郎、迎ひに來ましたお歸りなされ。御門がしまる。」と呼ばはれば、「オ、〳〵角藏か大儀ぢやの。姉樣さらば歸りませう。お客樣へも無禮ながら儘ならぬ奉公人。

幡山、國育ちとは思はれず。妹お藤も立ち出でて、「私は藤と申して、これなる者の妹にて、御家中に奉公つとめ參らすが、文六に御ねんごろ、お嬉しうこそおはしませ。姉の配偶彦九郎殿、留守の事なり小身なり、閒所とても無き儘に、洗濯よろづに至るまで、斯樣に親の所にて致す譯にて候へば、文六鼓の稽古まで、此所にては何事も、御不自由に候はん。彦九郎殿が戻られては、內へも申し入られましよ。それお杯でも持つてこいやい、父樣はお留守か。ひとり女子が這ひ出なりや、お客が一人あつても、ア、不都合な事許り。ア、眞にえへえ、お恥かしや。」と會釋する目元は姉に劣らじな。「いや何もお構ひなさるゝな。」と、挨拶とりぐなる中に、下女は心得、酒肴取揃へてぞ出しける。女房お種は酒ずきにて、「オ、これは氣がついた。浪人の親なれば、お肴はなくとも、お慰みに一つ。」と言へば、「御用もあらうに近頃これは忝し。まづそれより。」「いや其方よりお辭儀なし。」「然らば文六殿より。」と、言へどもさすが酒好み、手まづさへぎる杯の、「母甲斐に私からお燗を見て。」と、引受けてさらりと干し、文六にぞさしにける。「我等はかつて飮べぬ。」とて、ちよつと飮んでお師匠へ慮外ながらと禮をなす。源右衞門戴きて、もとより上戶の家の者、舌鼓たんぐと打ち、「ハッく天晴御酒かなく。拙者も深うは下されぬが、ちと御酒を好む故、方々吟味致せども、これにはなかなか京酒も及びなし。色よし香よし風味よし、御亭主樣の御心まで、御なつかしう候。」と、酒挨拶の

干上りて、物干棹の棹竹の、よい仕事して嬉しやな。江戸の男を是れからは、まつ風きかん。」との、めきける。一子文六奥よりも、「これ申し母ぢや人。内々御聞きなされたる、鼓の御師匠宮地源右衛門樣、只今稽古も御仕舞なり。次手ながら知人に、御なりもや。」とぞ申しける。「オ、されば〳〵、さきより然は思ひしかども、張物にしかゝりて、遅なはり參らせし。」と、襷もといて身繕ひ、座敷にこそは出でにけれ。源右衛門膝をなほし、「我等は、京都堀川下立賣に住居の者、御家中の方々へ鼓の指南仕り、ゆく〳〵は御奉公の望みも叶ふべき樣子により、折々御當地へ罷り下り、一年半年五ヶ月三ヶ月逗留仕り候へども、未だお配偶彦九郎殿には、御近付にもなり申さず。この頃御子息文六殿、鼓御所望に付き、師弟の契約致せしが、中々御器用千萬。嘸お袋の御滿足、推量致し候。」と、慇懃にこそ申しけれ。女房會釋し莞爾と笑ひ、「母と仰せ候へば、彦九郎も私も年寄に聞え候が、もとこの者は我等が實の弟を、つれあひ養子に致されまし、僅か御扶持の小身者。先づ只今は御家中の、然る方へ預け置きて候が、何とぞ御師匠樣の御世話にて、鼓の一番もうち習はせ、御直の御奉公に出したきとの念願にて、配偶留守の内なれども、祖父御が御頼み申されたり。この五月には配偶も御供にて歸られん。その時分は一番もうつて、父御に聽かする樣に、一しほ頼みあげます。」と、挨拶さはいしと〳〵と、物やはらかできつとして、姿なら面體なら、京のどなたの奥樣にも、誰が否とは因

つきが、目にちら〳〵と見る樣で、ほんに忘るゝ隙もない。ふだん戀して居る樣で、いつか〳〵とまつ。」の木に、衣張結び細引の、いうて思ひや晴らすらん。妹のお藤打笑ひ、「姉樣それは榮耀ぢや。私が樣に根から男のない身でさへ、みんごと堪忍しまするぞや。殊にお屋敷行儀づよく、この樣な親里でも、一夜泊りも法度なり。姉樣なら死なしやんせう。人が聞いたら笑ひましよ。」「アレ奥に鼓の稽古がある。高い聲さつしやるな。しいし〳〵。」を張物に、かいまみ覗く鼓の手に、心も乘りて配偶を、うはの空なる戀衣、松に打懸け干す内に、曲も終りの掛聲、「ヤアかたみこそ今は仇なれ是れなくば、忘るゝ隙もありなんと、よみしも理や。猶おもひこそは深けれ。」「あら嬉しや。あれ配偶のお歸りぞや。いで〳〵迎ひに參らう。」と走り寄れば、「これ姉樣、エ、正體ない。彼は庭の松の木よ。彦九郎樣は江戸にぢやわいの。氣が違うたか。」と耻ぢしむれば、「エ、愚かなお藤、何の氣が違はうぞ。男の留守の徒然の、せめての心慰みよ。爰は所も因幡國、松としきかば歸り來らんと、うたひつ鼓の賴もしさ、あら賴もしの御歌や。立ち別れいなばの山の峯におふる、まつとしきかば今歸り來ん。それはいなばの遠山松、これは懷かし君爰に、すまの浦わの松の行平、たち歸りこば我も木陰に、いざ立ちよりて磯馴松のなつかしや。松に吹き來る風も狂して、夫の留守居の寂しき折から、鼓に心を慰むなり。吾妻戻りも早近々の、風の便りの風もすゞしの絹袴、洗ひてはるの長閑なる、影に程なく

堀川波鼓

上之巻

謠さても行平三歳が程、御徒然の御舟遊び、月に心はすまの浦、夜潮を運ぶ海士少女に、姉妹選ばれ參らせつゝ、折にふれたる名なれやとて、松風村雨と召されしより、月にも馴るゝ須磨の海士の、鹽燒衣色かへて、かとりの衣のそらだきなり。それは鹽燒くあま衣、これは夫の江戸詰の、留守の仕事の張物や、妹のお藤は折よくも、幸ひの里歸り、サア手傳とゆふ襷、糊つけしぼる姉妹の、袖しづくだる風俗は、國に名とりの濡者と、聞えしもさる事ぞかし。「否なうお藤、必ずお主の氣に入つて、いつまでも奉公しや。男やなんど持ちやんなや。身につみてこそ知られたれ。彥九郎殿とは樣子ある夫婦故、よめりの時の嬉しさは、譬へん方もなかりしが、小身人の悲しさは、隔年のお江戸詰。お國に居ては每日の御城詰、月に十日の宿直番。夫婦らしうしつぼりと、いつ語らひし夜半もなし。然れどもぬしは侍氣、かうつとめねば侍の、立つ身がならぬとて、心づようは言ひながら、去年六月の江戸立に、又來年の五月にお供して、下るまでは逢はれぬぞや。無事で居よ、よう留守せよとの貌

期の眼にも、夫を思ふお龜が心、引き上げんとや思ひけん。這ふ〳〵岸に寄ると見えしが、眩む眼に氣も亂れ、同じく池へどうど落ち、互に助け引き上げんと、抱き上ぐればどうど伏し、かき上ぐればかつぱと伏し、心許りを力にて、「なう與兵衞樣々々々。」「お龜〳〵。」と呼び交す。絶え〴〵切るゝ息の下、この世からなる地獄かや。哀れ果敢なき三重有樣なり。疵の口に水入つて、女は生年十五歳、時も皐月の菖蒲咲く、沼の泡とぞ消えにける。夫も死なんと脇差を、尋ね漂ふ朝嵐、里人下りあひ、「すは心中。」と飛び入り〳〵、夫婦をとつて引き上ぐる。女は死して池水も、みな紅に名を留む。男は生きて生甲斐の、かひもあるかや蜆川、跡白浪となりにける。

緋縮緬卯月栬　終

花出づる月、玉の樣なる若い者、若い女の頑是なさ、慰めらるゝも慰むるも、分けて分たぬ涙なり。「あれ早東も白うだり。サア念佛。」といひければ、「心得たり。」と懷より、剃刀二挺取り出し、「これも母樣の額たれとて讓りなり。私はこれで死にたい。」と、泣く〳〵出すそのなかに、向うの野道を人通ふ。「あれよ〳〵。」と心は急く。二挺の剃刀一つにとり、「南無阿彌陀佛。」と引寄すれば、お龜は常々信仰の、「南無觀世音菩薩樣。母樣の戒名教譽樹林信女、一つ蓮に導き給へ。南無觀音樣々々。」と、手を合はせて待ちけれども、男は目眩れ差しうつぶき、只泣くより外の事ぞなき。「エ、憂き目を見せて何事。」と、夫の手を取り我が咽喉に、押當つれば思ひきり、「南無阿彌陀佛。」と笛のくさり、剃刀の刃も折れよと、一刳は刳りしが、若き者の悲しさは、止めの急所を知らずして、まだ息絶えず悶ゆるを、疵の口を隱さんと、抱への帶をくる〳〵と、二三遍引廻す。憂き目のほどぞ不便なる。「我もやがておつ付かん。」と、咽喉にあつる剃刀の、刃は鋸と折れ碎け、皮肉ばかり切れけるを、力を入れて突きけれども、通りつべうはなかりけり。「南無三寶。」と剃刀すて、傍に拔きおく脇差の、鞘をもつて引きあぐる。鐔は重し手は弱る、彈んではぬる勢ひに、脇差ぬけて樋の口の、井出の水草の漲つて、ざんぶとこそは沈んだれ。「エ、しなしたりこは如何に。」と、這ひ下るゝ堤の露、翻れし血の足滑り、池へどうど落ちたりけり。池は深くて泥土深し、底の脇差尋ねかね、浮きぬ沈みぬ漂ひしが、今を最

て、早東雲も近づけば、小田守る賤に忍ばんと、右へ下れば綱舟の、目にやかゝらん行く先は、早曾根崎の宮奴の、朝淨めする折なれば、今は仕方なつ草の、人目堤の下陰を、爰ぞ夫婦が最期場と、泣く泣く休らひ立ちにけり。お龜は夫の顏を見て、「連立つ冥途の道とは知れど、今今生の別れとて、言ひたい事の何やらが、胸にはあつて口へ出ず。飽く程顏が見て死にたや。心なの短夜。」と、身を投かけて泣きゐたり。「ア、愚かや愚癡や淺ましや。永き來世があるぞかし。さり乍ら心に懸るは其方の父御。二人とも無き獨子を、憎や聟めが殺せしと、さこそ恨み憎しみの、これ罪障となるぞ。」とて、共にひれ伏し泣きければ、「いや父樣は男氣の、思ひ諦め有るべきが、いとしや在所のお袋樣、姑なりとて一日の、みや仕へした事もなく、大事の子をば嫁故に、失うた殺したと、お叱りなされんこれ一つ。目の不自由な伯母樣の、力となるはこち女夫。さぞ今頃は泣き悲しみ、眼でも眩はぬかどうしたと、胸に塞がるこれ二つ。又母樣の十三年、觀音經を書きませう。佛になつて下さんせと、墓に向うて約束の、これが違うた。何やかやかくまで重き罪科の、閻魔の前には黑鐵の、帳につくと聞くものを、よい所へよも往かじ。火水の地獄も厭はねども、夫婦別れて行かうかと、これのみ猶も迷ひぞ。」と、聲も惜しまず歎きける。流石男は力をつけ、「一途に行かうと別れうと、皆一心の向け樣ぞ。氷の地獄火焰の地獄、劍の山へ登るとも、取交したる手は放さじ。」と心強くは言ひけれど、まだ蕾む

るとても、必ず契り米屋町、本町筋の軒深く、思ひ染みたる中なれば、埋まば同じ安土町、生まれ變りて又いつか、娑婆の便りの備後町、思へば我も元服し、私も若いに鐵漿つけて、のがれし賽の河原町、三途の瀬戸の淡路町、超ゆれば親の古里の、名にも別るゝ平野町、曙近き時太鼓、どう道修町これやこの、修羅の太鼓の響かと、共に驚く袖と袖、抱き寄せつゝ泣く許り。聞けば私も母様の、三十過ぎての初子とや。その讓りかや馴れ染めて、一夜離れた事もなく、交す枕に子種のないか。是れも產まずの數ならば、根を掘る竹の伏見町、高麗橋の西東、牀も定めぬ立君は、これも世渡る習ひとて、浮世小路の細き聲、唄うて歸るその歌の、品ある中にも來ぬ人を、まつほの浦の夕凪に、やくや藻鹽の身を焦す。夫れは吾妻の物語、耳に聞きたる許りぞや。其許と我は浪速津の、貴賤群集の見るめかる、尼が崎町過書町に、はや北濱や中の島、明日は天滿の橋々賣りて、（唄）梅田の、梅田の堤を染めし、紅葉笠屋のな女夫の心中、男二十二お龜は十五、年にあはすりや、いたづら〳〵ぢや。サア繪雙紙え、餘所の口の端、ア、餘所事に買ひ求めては慰みし、この身の果てを※讀賣に、誰が節つけて田舍まで、唄ひ流さん蜆川、水も濁りてこの世へは、いつ歸りすむ根なし草、左手は無常の燒草と、惜しからぬ身は惜しからず。「灰となさうかこの肌。」「煙となるかこの形。」「惜しや。」「いとしや。」「悲しや。」と、引き合ひし手を猶締めて、淚の限り泣きつくす。杜の小烏、川千鳥、かつぽう鳥も聲さび

せ、身を悶えてぞ歎きける。町の夜番が時申し、又長持の蓋あけて、抱きあひてぞ忍んだる。夜番は物に心をつけ、けはしく門を叩き立て、「これ起きたく、二階の蟲籠をはづいて、上から帶がさげてある。長持も出してある。盗人さうな。」とわめくにぞ、家内一度に目をさまし、二階へ上れば娘はなし。「お龜樣が見えぬわ。そりや提灯よ釣鐘よ。八つ過ぢや八軒屋、河内よ堺よ川口よ。」と、足許へは氣もつかず、手分をしてぞ追つ驅けける。夫婦は隙間に長持より、そつと出でて四邊を見、先立ち失せし心中の、戀の移りの香をとめて、梅田橋へとこゝろざし、二三町こそ三重走りけれ。

下之卷

末期の道行

今捨つる身にも恐ろし犬の聲。辻を隔てて見返れば、あれで生まれし町所、家の馴染も十五年、その春夏のこの月は、祝月とて物忌ひ、しの字をさへも嫌ひしが、死して死骸を知る人に、その死恥もつゝましく、其方の髱亂れずや。いや我よりもあの樣の、鬢撫で附けて搔きなでて、死んだ跡までよい殿と、人にいはせまほし明、今宵の月を月々に、待ちしも遂に引きかへて、冥土の使我々を、待つらんものと搔暮れて、涙曇りの十七夜、二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つるとも、假令佛にな

皆我々が不運なり。如何様になるとても、親をも人をも恨みとは、思ふまいぞ思やるな。」と、一聲いうたばかりにて、誰がものいうても返事もせず、歎き沈みし有様は、目も當てられぬ風情なり。「日の内は外聞悪し。表を締めて追ひ出せ。」と、蔀下して情なく、引き出せば伯母お龜、「なう今暫し。」と取り付くを、もぎ放し〳〵、門より外へ押し出し、潛戸をはたとさしければ、内には妻の叫ぶ聲、外に夫の忍び泣き、涙に曇る十七夜、月に別れて三重出でにけり。宵より二階に引籠り、待てど暮せどその人の、そよとばかりの音便も、早九つの鐘の聲、書置涙に文字消えて、先へ死んだもましならめ、萎れ侘びたる折節に、ひそかに人の足音す。そつと二階の障子をあけ、覗けば夫もかき暮れて、互に聲も立てばこそ、うなづきあひたる許りにて、泣き崩折れしぞ哀れなる。用意仕置きし差替に、夫の白き帷子、緋縮緬に結びさげ、下せば下より受取りて、死ぬる覺悟と心得ける。南無三寶西町より、新町戻りの駕に提灯、走つて近く車長持、蓋をあけてぞ隱れ入る。漸う遣り過し出でければ、いつかは釘を放しけん、蟲籠を外し帶結ひ下げ、傳うて下りんその用意、夫は長持ひきいだし、心を碎く二階には、消ゆる許りに蜘蛛の、絲にかゝれる身の命、露の便りの危さよ、憂さよ怖さよわな〳〵と、三重顫ひ傳ふを抱きおろし、二人が顔を見合はせて、息つき胸をしづめしが、「この頃とだえし添寢の牀、ゆかしなつかし戀しや。」と、互にひしと抱きしめ、齒を食ひしばり息をつめ、顔と顔とを打合は

め殺さんとする所を、與兵衞壁より這ひ出でて、むんずと組んで引きければ、お龜は奥に逃げ入りける。「己不義者身上の敵。」と、摑みついて組み合ひしが傳三郎は剛力者、非力の與兵衞を取つて投げ、足をもためず逃げ失せしは、殘念なりける次第なり。「さわがしきは何事。」と、亭主歸る折節に、手代も皆々立歸り、裏へ通れば與兵衞は、南無三寶と起き上り、狼狽へ廻つて切り明けし、倉の壁へ這ひ入る所を、長兵衞飛び懸り、兩足摑んで引摺り出し、「ヤレ與兵衞めこそ倉の家尻を切つたれ。」と、呼ばはる聲に驚き、伯母はお龜に手を引かれ、「そも實か。」と許りにて、あきれ果ててゐたりける。「道具はあるか吟味せよ。」と、鍵投げ出すを手代ども、戸を明け内に走り入り、「なにも道具は違ひなく、これぞ不思議。」とふすぼつたる、火繩艾を取出すは、仕方なうぞ見えにける。親ははらく涙をこぼし、「如何なる天魔が入り換つたか。町衆を騙つて讓狀を取出し、大恥かいたる昨日の今日、親の倉の家尻を切り、この火繩の火は何にする。ヤレ罰當りめ、八百屋お七を見居らぬか。聲山立てて町へ聞え、下で濟まぬ詮議になれば、如何なるおきめにあふとか思ふ。そこをせめても不便さに、高い聲も得爲ぬわい。これでも己が心には、伯父をつらしと恨むらん。本氣ではよもあらじ。碌な死をせまいかと、却つてこれが不便なり。」と、涙を流し目を顫はし、色を違へて怒りける。お龜涙をおさへ、「これ與兵衞樣うろたへまい。言譯なされ。」と言へば、「イヤ證據もない言譯、見苦し氣に何かせん。

氣、水晶に火移りて、艾燻り出でけるを、火繩に移しやすくと、莨に氣をぞ休めける。お龜は伯母を寐入らせて、倉をほとくと敲きける。與兵衛顔を差出し、「これは何たる不仕合。いふ事爲る事間に違ひ、獨り網にかゝりしは、如何なる因果。」と泣き口説く。お龜は思案やしたりけん。「かうなる上は一心を据ゑ、壁を破つて逃げ出で、二人連にて在所へ行き、今兄弟と公事をせん。この暮紛れに早う早う。」といひければ、「オ、我もさう思ふ故、壁は餘程崩せしが、壁下地の大竹を、切る音の響きては、如何あらん。」といふ所へ、「あれく芝居の替りの太鼓。サアこの間がよからう。」と、脇差拔いて切り破る、音も嵐の三右衛門、替りくと打つ太鼓に、隱れて餘所には 三重 知れざりけり。今が弟傳三郎、かくとも知らで來りしが、「旦那は留守か。お龜樣は奥にか。」と、裏へ通つて後より、遠慮もなく確と抱く。「エ、暑くろし誰ぢやいや。ム、傳三郎か。主といひ主ある身に、この樣な無作法は、覺悟なうては成らぬはず。その根心が聞きたい。」と、騒がぬ顔で裏問へば、「ハテ根心とて別はなし、與兵衛のたはけめは、どうでもこゝには置かれぬ談合。君さへ合點なさるれば、賤が壻になるぢやげな。但し阿房がお好きか。」と、猶理不盡に抱き付く。「オ、聞えた。扠はかの讓狀も、其方が欺して取らせたか。」「如何にもく。町儀が何とも濟まぬ故、手盛にさせて食はせたる才覺を御覽ぜ。」と、いひも果てぬに、「オ、それを聞かうといふ事よ。あれ聞男よ。」と聲立つる、口に袂を捩ぢ込んで、絞

ひしが、色變りしか知らねども、若い者はたしなみぞ。與兵衛と其方が肌の物に縫うてしや。男も女子も旅他國、どこでどの樣な事あつても、肌の物の善し惡しにて、常まで思ひ知らるゝ。」と、渡せばお龜、「忝し。」と、夫諸共戴きて、跡まで淸く顯はせし、心の色の緋縮緬、縮む命ぞ果敢なさよ。時に亭主立歸り、店の道具を見廻す間に、「あれ父樣の。」と言ひければ、與兵衛裏へそろりとぬけ、細目にあいたる倉の戸を、明けて內にそつと入り、くろゝをはたと落しける。長兵衛は不機嫌顏、「ヤア伯母御出でなされたか。手代共は一人もをらぬ。何處へうせた。」といひければ、お龜聞きもあへず、「はて、忘れさしやんしたか。一人は河內のをぢ樣へ、一人は尼ケ崎へ買物にやらしやんした。」「オォ夫れを何の忘れはせぬ。まだ歸らぬか野良共。」と、表裏を見廻して、「これは〳〵、男切は一人も居ず、倉に錠も下さぬか。扠々無沙汰千萬。」と、つぶやき〳〵錠おろし、鍵巾著に打入れて、「伯母御遊んでお歸りなされ。我等は町の年寄へ、壻の掏摸めが談合に、參る。」といふて出でけるは、苦々しくぞ見えにける。お龜は樣々心亂れ、「伯母樣ちつとお息み。」と、奧の間にこそ入りにけれ。無慙やな與兵衛は、網代の魚の如くにて、倉の窓より顏出し、「水にても湯にても、せめて煙喫みたやな。」煙管火繩は懷中す。お龜來らば火がほしや。」と、咽喉かわかし待ちけるが、「エ、思ひついたり。」と、倉の案內覺えたり、水晶の根附尋ね出し、艾を少し押し當てて、入日の窓にさし向へば、實に炎天の酷陽の

親の辛苦一つにて、仕出いたるこの身上、夫れをまねぶが子の作法。何であらうぞ、唐物屋衆さへならぬ程に、ぞべ〳〵と著飾つて、謠講の俳諧の、若い其方を女房にもつて、内の茶が飲み足らぬか、茶屋へもちよこ〳〵遣ふと聞く。意見をすれば燻りを出し、商賣は袖にして、※小路隠れの家出のと、聞く度ごとにこの伯母が、胸には釘を打つ如く、いふさへ涙がこぼるゝぞや。これなうお龜、年はいかねど男を持てば大人役、夫の身持惡ければ、女房の名が出るぞや。戻つたりとも寄せ付けず、江戸長崎へも追ひ下し、鹽を踏ませて人にしや、とはいひながら與兵衛めは、氣の弱い生まれつき、無分別の出ぬ様に、女夫あひをようしやや。内に惡魔のある事も、憎い者は生けて見よ、これも世上の不祥ぞかし。ア、淺ましやこの伯母が、年はよる目は見えず、配偶には離るゝ、子は養子なり嫁掛り明日が日往生申しても、骨を拾うて眞實に、泣いてくれるは與兵衛とそなた、子同然にいとほしく、よいが上にもよう仕たく、朝夕の看經にも、其方女夫を祈るぞや。お袋がこの世にならば、これほど苦勞は聞かじもの、恨めしの娑婆世界、片時も早う參りたや。」と、咽せ入り〳〵、或は憐み或は叱り甥子を思ふ實の涙。與兵衛もまろび出で、物は言はれず手を合はせ、拜めばお龜は聲をあげ、「只伯母様を母様と、思うて頼む。」と許りにて、縋りあひてぞ泣きゐたる。道理すぎて哀れなり。伯母は涙の閒よりも、懷より縮緬一巻取り出し、「これ此の緋縮緬は、今はこの手は渡らぬとて、この前人に貰

見るよりも、「これ誰もない大事ない。これなうこれ。」と呼ばはれば、笠をも取らずつゝと入り、二人ひつたり抱きつき、伏し轉びてぞ泣きゐたる。稍あつて與兵衛、「ム、この白無垢を仕立つるは、死ぬる合點か嬉しや。」といへば、「オ、さればとよ。これは斯うはして置けども、是非に叶はぬその時は、私が方から知らせをせう。必ずそれまで短氣な心持たんすな。こな樣いかう狼狽へてぢや。心を納めて下さんせ。ひよんな心を持つまいぞや。」と、力を付くるその中にも、流石は年も童氣の、「いつそ連立ち走りたい。」と、また縋りつき抱き寄せ、引寄せ／＼歎きける、有樣こそは不便なれ。下女のふりはさし心得、門に立つて西東、心をつけてゐたりしが、「あれ立賣堀の伯母御樣、駕籠が見える。」と驅け入れば、「こは何とせん。伯母樣の目は見えねども、内の者が見つけやせん。」と、店に立てたる賣佛壇の、戸を明けてこそは隱れけれ。程なく駕籠を舁き入れて、伯母も下るればお龜は、「これはようこそ。」と、手をひき奥に入りければ、供の女は駕籠舁に、「錢をわたしも歸りませう。晩方迎ひに參りませう。」と、言うてその儘歸りけり。伯母は溜息ほつと吐き、「爰のはまだ戻らずか。今朝こちへ來て、與兵衛が話をめさつた故、あるにもあられず氣遣はしく、さてこそ見舞に來たるぞや。總じて入家入聟に、小言のあるはならひなれど、和女や與兵衛が親々は、伯母が爲には兄弟なり。私御寮達は甥姪なり。どちらに贔屓偏頗もない。まんろくをいふ時に、皆與兵衛めが惡いぞや。胸前垂に草鞋がけ、

り呼び懸けて、息をはかりに泣きかはす、山時鳥皐月雨、涙の雨もふる道具屋の、聲ばかりして俤は、隱れ笠屋の憂き名殘、別れ〴〵に 三重なりにけり。

中之卷

花聟と、名にこそ立てれ下草や、娘ぞ家の心齋橋、女夫の間は烏鵲や、笠屋お龜は夕より、寐られぬ目元落窪み、思ひ染みたる身の大事、仲よき下女にも語らねば、誰も斯くとは白無垢を、仕立つる縫目大針に、二度と著まいと思ふにも、涙先だつ折柄に、町内の娘友達二三人、「お龜樣内にかえ。今日は五月の十七日、とうからの約束、三十三番連れだちませう。サァ拵へさんせ出さしやんせ。」と、なんの氣もなく誘ひける。觀音樣と聞くからに、未來の緣も嬉しけれど、「父樣も留守なり、これも仕立てて仕舞ひたし。今日は連になりますまい。よう拜んでや。」と言ひければ、「夏白無垢がいる事か。參らしやれ。」といふもあり。「よしかおかしやんせ。今のおぢやつて見やつたら、留守明けたとてやかましからう。」「ほんにお龜樣も、よい姑を持たんした。こちらばかり廻りませう。」與兵衞樣とこな樣と、一つ蓮と拜みませう。」と、言うて出づるも常なれど、思ひあればや身にぞ染む。かかる所へ與兵衞は、今朝までうか〳〵彷徨ひ歩き、心も空に行くともなく、我が家の門を徘徊す。お龜はちらと

與兵衞夫婦に讓り申し候。外より違亂すこしもなし如件。これ見よ。」と與兵衞が目にさしつくるを、よく／＼見れば紛ひもなき、我が方への讓狀、「ハア、南無三寶。扨は傳三郎めが賢人面を見せかけて、我を取つて陷さん爲、裏の裏を喰はせしを、知らではまりし悔しさよ。たばかられし口惜しや。」と、齒がみをなして泣き居たり。長兵衞も怒りの淚、「こりや卑怯者、人な恨みそ。皆己が誤りぞや。母なき娘が大事に思ふ壻が、何とて憎からん。皆根性のひがみから、親にも恨み出で來るぞ。恨めしの心や。」と、讓狀を與兵衞が面に打付けどうど伏し、大聲上げて泣きければ、妾はいきつて、「咎もない傳三郎に、いひかぶせ仕やるな。」と、哮りかゝつて怒りける。娘は我が親、我が夫、中に立つたるやるせなさ、傍で泣くやら喚くやら、往來もとゞまるばかりなり。神子町中がをり合はせ、「人がたかる何事ぞ。早々通りや。」と叱りける。「ア、御尤も／＼。御町の妨げ御免あれ。サアおのれ在所へ駕籠で送らせん。」と、※ひがやすな與兵衞を、引立て駕籠に押し込めば、「何の面目在所へは行くまい。」と、駕籠の左へつゝと拔けた。親もつゞいてつゝとぬけ、又引捕へて乘せれば拔ける。親子くるくる／＼、出つ入りつ、どこぞのはずみに長兵衞、駕籠をぬけるを町人ども、「エ、面倒な。」と押し込みて、駕籠舁き上ぐれば長兵衞、「ヤアこりや違うた／＼。」と、わめけど更に聽き入れず、大坂の方へ舁いて行く。お龜は歎きこがれしを、下女や手代が手を引いて、なだめ歸れど立歸り、とまり見返

郎に跡式取られ、この與兵衛がすご〴〵と、生きて在所へ歸られうか。これ誰が業ぞ、その女めとの談合ならん。この事を某には、誰が知らせたと思ふぞや。おのれが弟の傳三郎、今まで己ら一本と思ひしに、奇特にも傳三めが、天道がおそろしさに、知らせますると告げし故、後日の證據に取つたるぞ。おのれはおのれと思へども、さりとては親父樣、可愛い娘の男なり、甥子とは申さぬか。さうはなされぬ筈なり。」と、聲を上げて泣きければ、お龜は傍に引添うて「母さま生世の折ならば、彼等に口を利かせうか。母樣はこの世になし、伯母樣といへば目は見えず。夫婦は誰を便りにせん。」と、くどき歎くぞ哀れなる。長兵衛眉を顰め、「これは努々覺えなし。おのれを町へひろめして、直に出した讓狀、身が目を塞がぬその內は、年寄行事も封を切らぬ書置を、傳三が知らう筈がない。讓狀を奪ひ取つて、親に難題言ひ懸け、今兄弟に無實をいひ、大坂に置かぬ公事だくみ、おのれ一人が智慧でない。サア讓狀が物を言ふ。三つ鐵輪で讀んで見よ。」と、懷中へむさぼりつく。「いやこれ親父樣、※でんどで披く讓狀、後の證據に封じも解かず持つたれば、此方の手へ渡さうか。權柄になさるな。」と、もぎ放せばこづかを取り、※引伏せ〴〵踏んづ叩いつ、散々に打擲し、引起いて讓狀、奪ひ取つたる有樣は、目も當てられぬ次第なり。「オ、成程、身が判封の儘、只今披くこれ聽け。」と、封を解いてぞ讀みたりける。北久太郎町心齋橋表口五間半、裏ゆき町並二十間家財殘らず、娘お龜聟

母様の、十三年忌の口寄に、ちよつと寄つたまでの事。して父様はあの人連れて、何方へ。」と言ひければ、「オ、されば與兵衛めが、在所へは戻らいで、町の會所の帳箱に、入れ納めた讓狀、身が使と詐つて、取つて往んだと年寄から、斷りがいうて來た。彼奴に讓る讓狀、取つて何になる事ぞ。家を棒に振りをるか、但しはどうぞ公事企みか。日頃は此所な女子と、いひごと小言が絶えねども、五分五分に聞いて居た。彼奴が惡いに極まつた。河内の親に言ひ渡し、直に埒を明けんため、來ればあれで見付けたが、こゝらへはうせぬか。」と、うそ〳〵見廻し神子の門、「こりや爰にけつかると引出せば、與兵衛は被き菅笠身に纏ひ、うろ〳〵出でしその風情、お龜は、「わつ。」と泣き出す。笑止千萬哀れなり。妾笑つて、「これ與兵衛樣、このせいするゐな私を、鵰の熊手の摑みづらのと異名をつけ、八町まちへ名を立てて、オ、心の直な跡取樣、かうした事をなされても、これでも家が立ちますか。コレ與兵衛樣、やあ與兵衛殿樣。」とぞ喚きける。與兵衛はさしうつぶいてゐたりしが、顔を上げて、「これ女かしましい。エ、恨めしい親父樣。あの家屋敷家財まで、私夫婦へ讓りの約束、なれば親子と存ずる故、ふしようの事も堪忍し、心一ぱい働けども、何をするのもお氣に入らず、在所へ歸れ戻れとは、オ、〳〵道理かな〳〵、家屋敷家財まで、今が弟の傳三郎に、取らせるとある讓狀、この與兵衛が聞いてゐる。明日まで親父樣、萬一の事も有つた時、町衆が立合ひ讓狀を披いて、傳三

様。」「どれどこに。」「これはお龜か。」「與兵衞様か。あんまり便宜もない故に、生口寄せに來ましたが、なぜに戻つて下されぬ。おりやどうならうと構はぬ氣か。」と、縋りついてぞ泣き居たる。「オ、おれとてもそなたに心が引かされて、在所へもえ歸らず、大坂中をたち迷ふ、雲介同然の身持となり、今日は河内へ行かうかと、小堀口までいつたれば、親父とかまの今めとが、これも在所へ行く風で、跡から來たをちらりと見て、漸う逃げて戻つたが、おれを見たか知らぬまで。怖い事ぢや。」と語りける。「はて見付けられたら大事か。恨みも腹の立つ事も、私に免じて下さんせ。昨日は私が氣晴らしとて、父様と※半四郎の心中狂言見たれども、餘の事は耳へもいらず、※半九郎お染が最期の臺詞、此方の胸に皆こたへ、二人死ぬなら死にたいが、こな様死んで下さりよか、どうかかうかと思うて居て、※四郎五郎が不心中、面白いとて笑へども、私や一日泣いてゐた。泣いてばつかり居たわいの」と、袂に取り付き聲をあげ、十五になるやならずにて、夫を思ふ眞實の、歎きの涙ぞ奇特なる。「あれあれへ見ゆるは親父ぢやないか。葛籠笠は今めぢやわ。逢うてやかまし茲御免。」と、神子の門にぞ隱れける。親長兵衞は手代を連れ、大汗流いて來りしが、いま大聲上げて、「ヤアこれはお龜様、二十二社巡りとて、味な所へ來てござんす。如何に男を持つたとて、若いなりしてびらしやらと、あんまりほたえさつしやるな。」と、嚙み付く様に夕立の、鳴る雷の如くなり。お龜ははつと怖ろしく、「今日の次手に

よかと、涙が溢れて口惜しいわいなう。」「おいとしや／＼。あの今めといふ奴を、出入も止めうと思へども、母樣の存生より居たる者の事なれば、生若い私が身で、出過ぎた事を控へしが、この秋は母樣の十三年忌も仕舞ひまし、ふつつと出入をやめさせん。してこの間五七日は、河内へ歸りて御入かや。」「そよとの便りもない事は、扨は我にも秋風かや。」「ア、何しにそもじに秋風の、立田の山の初紅葉、古鄕へは錦を著て歸ると申す。今すご／＼とこの姿、何とて在所へ歸られん。晝は生玉天王寺、天滿小橋に河口を、終日步む時もあり、或は芝居で日を暮し、旅籠に命を養ひて、暮るればそもじが懷かしく、人目忍びて門に立ち、軒の下なる長持に、そつと隱れて折々は、若しも二階の格子から、顏も見えるか聲するかと、蓋を明方近づけば、立出で歸る夜每には、なほしも思ひ深草の、榻に通ひし車長持、巡り逢ひたや語りたや。語るに盡きぬ生口も、今はこれまで梓弓。」「引いては歸る習ひなりとも、暫しが程と、せめて留むる甲斐もがな。」「甲斐こそなけれ緣あらば。」「あふも不思議。」「あはぬも不思議。」「逢はずば何を玉の緒も、絕えなば絕えね。」と伏し沈み、死したる人に逢ふ如く、名殘を包む涙の袖、寄り來るよりの生口は、神上りして覺めにけり。親の意見は直なれど、傍のとりなし橫時雨、どこをしやうどにさして行く、笠屋與兵衞在所へも、面目なしと戻りかね、心は有頂天王寺、神子町に迷ひ來りしが、お龜は神子に一禮して、立出づる門口に、下女が見付けあて、これ與兵衞

て、何か恨みのあるぞとよ。」「オ、二世と契りていとしいもの、そもじに恨みのあるべきか。小夜衣とは親ならぬ、親の手かけの茨草、目をつく樣に家の内を、立てうと伏せうと儘にして、陰言中言さへ口、立つてはふすべ居ては譏り、何がな見出さう聞き出さう、目に角立てる仁王顏。物には阿吽ある故に、道具仲間の商賣に、損もする又德もとる。搖れば落ちる木の葉の露、我が身にかゝる商賣の、それにおろかのあるべきか。又してはく、道樂者でのら者で、在所へ戻せいなせとて、額に角も入れた者、丁稚小者をいふ如く、内の手代や庭寶の、侮り者になし果てて、あの女めが弟を、内へ入れうといふ企圖。町内からも小柴垣、ゆひ立つれども世の中の、藥の灸は身にあつく、毒な酒は甘いとや、何を言うても氣に入らず。牛は嘶き馬は哮え、理は非に落ちる左繩、ゆひ甲斐もない身なれども、在所に歷と親もあり、敷金してあの下種めに、使はれう筈はない。エ、口惜しいわいの、腹が立つわいの。舅の家を出るからは、下種めたつた一討に、仕舞うてのけうか。いや出所へ連れて出て、首に繩をかけうかと、樣々思案はしたれども、家の名を出す夫れのみか、そもじと緣が切れうかと、これが第一悲しうて、情ないやら無念なやら、弦なき弓に羽拔鳥、立つもたたれず、居るも居られぬ家の内、そもじに心引かされて、破れ暦にあらねども、徒な月日を數へたよなう。粉糠三合有るならば、入壻すなといふ事は、我が身の上の譬へかや。十貫目といふ敷金を、あの女めにちやかされ

格子の若神子の、口と口ともよせまほし、「して先づ御用の事ありとは、生口か死口か。」と言へば、「否されぱとよ、頼みたきとは生口なるが、海山隔てし方でもなし、只二三里の道を越え、五日六日の便りもなし。どうがなかうがなくよく〳〵と、案じ侘びたる御身の程、寄せてたべ。」とぞ仰せける。神子は合掌目を塞ぎ、珠數をくりひく梓弓、神下しして寄せにける。「天清淨地清淨、內外清淨六根清淨、天の神地の神、家の內には井の神、庭の神竈の神、神の數は八百萬、過去の佛、未來の佛、彌陀、藥師、彌勒阿閦、觀音勢至普賢菩薩智慧文殊、三國傳來佛法流布、聖德太子の御本地は、靈山淨土三界の、教主世尊の御事なり。この御教への梓弓、釋迦の子神子が弦音に、引かれ誘はれ寄り來り、逢ひた見たさに寄りきたよ。なうなつかしの相の枕や。」「我懷かしとは覺束なみの、寄り來る人は誰ぞいの。」「誰とて二人おもふ身か。一つねふしの二股竹、與兵衞を夫と思へばこそ、問うて給つて嬉しやの、問はれて今の恥かしや。扨世の中の憂節はなう、わが善きに人の惡しきがあらばこそ、破れ車でわが惡い、とは言ひながら、扇の影の立烏帽子、舅といひ元は伯父、跡嗣の約束なれば、今では親子ぢやないかいの。何しに粗畧にする物ぞ。在所の生の親達より、猶孝行を盡せども、丸い苧小笥に角の蓋、心が合はねば是非もなし。恨みも仇も外になし。憎いも辛いも只一人、重きが上の小夜衣よなう。」「恨みありとは私が事か。おの樣の女房よ。仕方の惡い事あらば、なぜ殺しなりともなされずし

守を一社と伏しをがみ、扨十四番十五番、南東の門前の、牛頭天王に我が願ひ、幾つとはなき生玉の、玉の光の透き通り、神は見通し言はずとも、心の底の只一つ、それを頼みに北向の、八幡宮の御誓ひ、世々に高津の坂道を、唄登ればさつさ、下ればさつさ、さつさ三六十八番、こゝも難波の大君を、唐土人の褒め詞、咲くやこの花今はとて、梢も青き夏木立、西を遙かに百舟の、入江の秋の海面に、沖津白浪さばけて忍べ、碎けて遊べ、中よい月に、戯れ遊べゝえい〳〵、遊べえい〳〵、えい〳〵えい〳〵、照る〳〵月、月てる〳〵、君と寢たらば何とよござるまいかの、照る〳〵月、照る〳〵月や月讀の〳〵、旭の神明額づきて、仰向く顔に當る日を、袖で翳しの玉造、稲荷の宮居爰も亦、伊勢の内外の内平野町、太神宮よと色々の、諸願の種を上町の、座摩のお旅所に二十二社、拜み納むる袖神樂少女子ならぬ神子町に、問ふべき占のあればとて、まだ日の足も南へと、駕籠の息杖息つがず、走らせてこそ 三重 急ぎけれ。幼きときより氣に入りて、幾春秋をふりといふ、年季の下女を身になして、隱す事をも語りしは、黑格子の辻とかや。上手と聞きし神子の門、「あゝ申し、ちと口寄を頼みませう。」とぞ案内ける。弟子の小女郎心得て、「お通りなされ。」と戶を明くれば、お龜は一間に入りにけり。暫くあつて立出づる、神子も餘程見えるもの、「ア、ようお出でなされました。大坂のお衆で御座りますか。お供の爰へ上つて、先づあふいで上げさつしやれ。お茶もておぢやや。」と待ひは、あい黑

本の外までも、御威光四方に飛梅の、天滿の社に手習子供、書いて上げたる龍虎梅竹。絲屋の小絲、姉は十三妹は十二、殿御ほしさに宿願かけてえ、月の參りは二十五日、やつさ、ありやそりや、こりや堀川の惠比須殿、北野は天滿と御一體、現人神と音高く、轟々と鳴神も、よもや破らじ、よもや裂けじの、幼馴染の女夫合、この神明に祈らばや。扨六番は曾根崎の、宮の木立も何時頃よりか、名立てがましき天滿屋お初、餘所に聞くさへ身に蜆川、身の流れの勤めの憂身、どうで女房にやもたれぬ中の、死ぬる生きるは愚かの沙汰よ。己はそれをと願ふぢやないが、男故なら命も資産も取つてゆけ。どこらへの、爰らでの、お手を引き合うて二人の死骸、茲に梅田のナ橋に寐てサ、夢を津村の新御靈、人の祈りは樣々の、大明神やその次は、仁德帝の宮所、拜み巡りて十番に、數も願ひも三津寺の、正八幡に早つきぬ。道頓堀の絲竹や、太鼓の聲にひかされて、心も足もしやな〳〵しやなら、ちよつと立見の手鞠の曲は、一ふう三よう、五むなゝ八よころ〳〵、とんとはずむも可愛らし。明日も來うぞの惠比須橋や、惠比須橋越えて、見たや見せたや難波橋、難波の今宮これからは、野道の風の涼しさに、笠も帽子もはれ〴〵と、兩の袂に吹きたまる、身も冷々と心よき、肌を締めさせ、しめて貰はば此方からも、じつとしめ〳〵、空も濕りて五月雨の、雲のすゞしの帷子の、衣紋繕ひとりなり直し、鬢掻き撫づる差櫛の、蒔繪に似たる松原は、安井の天神これぞとよ。天王寺には十五社の、鎭

道具屋おかめ 緋縮緬卯月艶

上之巻

二十二社めぐり

古き都や浪速潟、〳〵、二十二社詣で急がん。戀といふ其の水上を尋ぬれば、神と神とが肌觸れて抱き寄せ給ひし腹帶の、解けてほどけて世に溢れ、產みひろめにし人種の、次第々々に孫つぎて、色の道には發明な、町の小娘若嫁の、眞似る芝居の女形、髮の結振小利口に、ひつくる〳〵郭樣、今はむかぬと縫箔の、それにはあらぬ白の風、風呂の煙のたち居まで、姿似せれば心も共に、そまる紫縮緬の、小皺のよりし姥嬶まで、情こめたるこの時代、年經て爰に石の上、古道具屋の古格な、堅地の父の親の手を、水離れせぬお龜とは、一人娘の命をば、萬代祝ふ名なるべし。正五九月の神參り、殊にこの頃我が親と、初元結の我が夫、壻と舅の挨拶の、中に節だつ早苗月、皐月の雨は神心、夫の身の上安穩に、田畠を潤すその如く、苗代水に堰きかけて、惠めやあまの川崎の、大權現を伏し拜む。この御神の君が代を、聞くも語るも有り難き、蝦夷か千島や朝鮮國、琉球筵敷島の、この日の

死んで見ぬ死出の旅、連立たうやら連れまいやら、逢はうやら逢ふまいやら、二度生きて生顔を、見るは此の世の限りかと、物をも言はず面影の、顏を悄々見合はせて、「わつ。」と消え入り泣き居たり。「ヤア後れるな。」「後れませぬ。」「合點か。」「合點ぢや。」「南無阿彌陀佛を忘れまい。」「南無阿彌陀佛。」と喉笛に、がばと突きたて兩手をかけて、くるりとゑぐれば兩方の、面影消えて無かりけり。無慙や二人はなから死、男は女の姿を尋ね、女は「市樣々々。」と、のつつ返しつ苦しみの、くらむ眼に手を伸べて、尋ね迷ふぞ不便なる。終に一息切斷の、經絡六脈絶え〳〵に、息の通路ふつつと切れ、「うん。」と許りを此の世の名殘、いざよふ月の朝霜と、一度に命は絶えてけり。弟善次は川端に、捨てし衣裳と書置を、拾ひ驚き驅け著けて、見ればあへなく事切れたり。「南無三寶。」と歎けども、せんなし甲斐なし面目なし。せめては兄の報恩と、恥も身體も衣裳に包み、負うて一先立退きける。扨こそ世上に此の男、死んだ風說死なぬ沙汰、生死二枚の繪草紙に、戀路の廻向をうけにける。

心中二枚繪草紙　終

る互の形、茫然とこそ現はれけれ。夢か現か空蟬の、もぬけの魂とも知らばこそ。「こは何としていつの間に、一所に死なん嬉しや。」と、縺れ取りつき縋り合ひ、實の形影の人、歎けば歎き泣けば泣き、こひにせぐりの玉の緒の、己が思ひにたぐられて、一里の道は隔たれど、鏡に映すごとくなり。「月は白みて曉の、あれ明星もさし昇る。近づく最後一筋に、一つ蓮と願へども、思へば〱我が身の科。養子の親には疎まるゝ、實の親のありとても、親知らず子しらず。たとへ冥途で逢うたりとも、何をしるしに誰をか見ん。惡業深き我が身や。」と、聲をあげてぞ泣き居たる。お島が心の歎きには、「一人の母の老いの世に、いつかお主が年明きて、せめて一日片時なりとも、湯水取られて往生せんと、是れのみ一つの願ひなりしに、病で死するは是非もなし。いとほしや母樣の、藥呑め灸せよ、身養生して勤めよと、大事にかけて下されし、此の體をば血に染めて、明日は堀江へ使たち、呼び寄せ母の目に見せば、死に入る樣の歎きの顏、今見る樣で聞く樣で。」思ひ過しの胸の中、五體の涙締め寄せて、手にも袖にもせき餘り、漲る瀧に異ならず。爰にくゆるは吉原よ、あれにふすぼる梅田の墓。他所の無常の煙を見るも、明日は我が身も何處の雲、何處の煙と立上り、誰に此の骨拾はれん。冥途は六つの巷ぞや。迷はぬしるべ彼の煙の、消えざる内に我々もと、夫が脇差拔く形、島が幻後れじと、用意の剃刀横へて、サア只今ぞ一足も、はやかるな遲かるな。手に手を取らんと思へども、未だ

べ、これを限りと百八の、數とる度に繰り盡す、命二つを珠數二連、これが冥途の迎ひぞや。見送る軒と見返る野邊と、中に飛びかふ夜這星、行いて歸らば言傳てん。出でて返らぬ魂の、憧れ添ふとは知らねども、傍に夫のある心、夫はお島と連れだちて、歩む心のともすれば、目にちら〳〵と幻の、此は其の人か實かと、抱きつけば仇野や、風ぼう〳〵たる閨の戸に、どれ市樣はお島はと、尋ぬる袖にふる涙、夜半の時雨となりにけり。これこそ曾根崎天神の、松と椶櫚との連理の森、書き集めたる言の葉の、餘所に聞きしも今は又、餘所に嵐の身にぞ染む。お島も同じ我が庵は、お初德兵衞のその曉の、夢も破れてまだ間もないに、心中宿世の報いの業か。それのみならず親方や、親の苦勞と思ひは知れど、男死なせて見て居られうか。女房先だて生存へあらば、そりや犬猫も同じ事。同じ中にも鹿となり、鴛鴦と生まれて女夫池、生ける間もなく身を果し、猶や藻屑に埋まんと、又一向の憂き涙、落ちて三途の川となる。男心もくれはてて、西か東か何處ぞと、月に向へど我が影の、映らざるこそ不思議なれ。女も向ふ燈火の、壁にも窗にも障子にも、我が影見えぬ怪しさよ。あゝ味氣なや果敢なやな。實や人の物語に、死する時節は人魂飛んで、其の身の影の無きと聞く。嘸やお島も市樣も、かくぞ最期の近づくと、合圖の珠數の念佛の、一萬遍も繰り詰めて、九千遍にぞ早なりぬ。心細くも便りなや。今千遍の命の内と、思へど我が身は思はれず、先には如何いかにぞと、案じ交せ

はせては、招き合ひ〳〵、われと我が身を抱き締めて、歯を喰ひ詰めて歎きける、深き思ひぞあぢきなき。弟の善次郎、島が詞に發起して、惡心を飜し、兄の命を助けんと、こゝ彼處と尋ね歩き、元の格子に走りつく。兄は人ぞとたち隱るれば、善次郎門を叩き、「長柄の市郎右衞門は是れには居られ申さぬか。近江屋にて尋ぬれば、はや歸られたと申さるゝ。御存じないか。」と呼ばはりける。內よりは、「やかましい。夜更け廻つて、そんな人は知らぬ。」と言へば、「南無三寶。」と走り行く。斯くと心を語りなば、死なで止みなん二つの命、隔て疑ふ因果と因果、定まる業ぞ力なき。「彼奴追つかけて討つて捨てん。いや〳〵見苦し最期の邪魔。」と、心を鎭め小聲になり、「サア夜明も近づく人立あり。一所と思へど仕方なし。我は在所の堤にて、最期の所はかはるとも、連れだつ道は唯一筋。今より珠數を繰り初めて、一萬遍にをはる時、それが互の合圖ぞや。追付待つ。」と言ひければ、「合點しましたさりながら、同じ枕に死にたいなあ。心はついて往きませう。」「オ、我とても其の二階、顔を竝べて死にたいなあ。心は跡に殘るぞ。」と、あこがれ出づる玉の緒の、互の目には見えねども、殘し置くのと連れ行くと、兩刃に死する剃刀の、一つ刀の亂れ燒、亂れ心は、　三重

血死後の道行

死神の導く道や、かげろふのはかなき蟲もたま〳〵は、朝の露に生き殘る、それよりも猶あだ　ら

なんたる胴慾ぞや。私等が今の此の勤め、伊達にも派手にも身の爲でも、一日片時なる事か。親兄弟のいとしさゆゑ、面白からぬ勤めなれども、つらいと一度いひ遣らぬは、親兄に苦を掛けまいため。か程大事の親里の、貧苦を助けしお主なれば、御恩は更に忘れねども、生身は死身殊にまた、此の頃酒に當てらるゝ。若し頓死でも致しなば、下された茶が末期の水。」と、管まく體に紛らかし、「わつ」と許りに堪へ兼ね、しやくり上げたる泣き上戸、人目に見せし下心。市郎右衛門は忍び泣き、弟は身の惡顧みて、恥ぢて悲しむ悔み泣き、心は三つに替れども、おなじ涙に曇る月、時雨の闇の本意なさよ。人影見てや町内の、犬吠え渡れば兄弟は、見付けられては惡しかりなんと、西東へぞ逃げ去りける。亭主夫婦は氣も付かず、「管をまかずと早う寢や。皆々仕舞へ。」といひければ、「あい。」と答へて、箱梯子上りかゝつて、「コレ旦那樣内儀樣、みんなさらばや／＼。」と言ひすて二階に上りける。下女は見上げて、「ハテ小きびの惡い聲つきぢや。長兵衛門もよう締めやや。有明の消えぬ樣に、油もたんと差いてたも。消えてもこちは火は打たぬ。おれには火打が禁物ぢや。打つ音聞いてもぞつとする。」と、つぶやきてこそ臥しにけれ。稍しづまれる※小夜格子、市郎右衛門は立歸り、軒の下にてしはぶけば、お島はそれぞと二階の窗、覗けど我が姿は見えじ、聲を立つべき樣もなく、柄つけの鏡差出し、星影映してひらめかし、爰に有るとぞ知らせける。夫も心得扇を抜き、聲立てられねば金物の、光に物をい

で舌が廻らぬ。此方さんは弟の身で、けなりや機嫌がよささうな。禮言ふ事があるござんせ。」と、胸ぐら取つて引いて行く。善次は、「いづれも賴みます、賴みまする。」と仰向にそり、引摺らるれば下女下男、「これは島樣なんぞいの。サア内ぢや這入らんせ。」と、無理無體に押し入るれば、上り口にひよろひよろと、かたみをとんと横に投げ、「水給や。」とて伏しにける。夜こそ更くれど一町の、行燈仕舞へば天滿屋の、しめたる門口くら闇に、善次は島が心根の、恐ろしければ格子の陰、身を引きそばみ立聞きす。市郎右衞門は近江屋の、人目にせかれしかじと、死際の契約せず。便りもがなと門に立ち、弟ありとも知らざれば、弟は兄があるとも知らず、傾く月に東向き、暗き格子を隔てにて、内の樣をぞ聞きにける。亭主夫婦これを見て、「島は甚う醉うたさうな。これいて休みやお島く。」と茶を汲んで、「一つ呑みや。」と言ひければ、「あいくこりや忝い。」と戴きて、「ほんに實にお主たる身が勿體ない、大事に掛けてくださんす。是れを思へば勤めの身が、心中などで死ぬるのは、お主へ對してぶしつけ、損を掛けるは身の罪科。さりながら死んだ者が生き返り、其のいり譯を言ふにこそ。命に替へる者はない。夫れを捨てて身を果すは、言ふに言はれぬつまつた事。憎まう者でもござんせぬ。斯う言うて私が心中する氣は無けれども、爰にも前の初樣に、手懲の事も有る故に、こりや前書の話ぞや。私が馴染の市樣の勘當は、弟御の無實の難を身にかづき、所の住居もならぬとよ。これは

此方の島ゆゑぢやと、女夫池で聞いて來て、知らぬかと言はるゝ故、とつかはして戻つた。前のおはつに懲り果てた。家名の出るも迷惑。客をたふすがみめでは無い、商賣せいでも大事ない。それ早う呼びに遣れ。」と、わめき散らせば女房も、「エ、皆も氣がつかぬ。こちに言はるゝ事かいの。又淨瑠璃にのしやんなや。早う連れて戻りやいの。」と、女心のせは〳〵し。譜代の下女は門より入り、「市樣はお馴染ゆゑ、遣るは私が遣りましたが、勘當とも分銅とも、知つたらなんの遣りませう。たつた今も近江屋へ往て見たれば、島樣はきつう醉うて居さんして、何を言うても譯がない。そんな事なら戻しませう。お初樣のかの夜さり、二階梯子を踏みはづし、おれが胴骨踏まんした、形見の痛さが漸うと、此の頃止んだに勿體なや。又踏まれてはならぬぞ。」と、驅け出してこそ走りけれ。かくて弟の善次郎は、兄にあぶせて銀盗み、所々のびらくらを仕舞はんと、此の所へ來りしが、お島は酒に醉ひくづをれ、ひよろり〳〵となまになり、近江屋出でて濱すぢや、今宵一途に三途川、越えんと思ひつめたれば、心にはたと戸をたつる、風呂屋の前にて善次に逢ふ。ひらりとはづすをちらりと見て、「これ善次樣々々手が惡い。」と、よろ〳〵と縋り付いて、「此方さんな聞えやせんぞえ。前はさい〳〵ごあんして、何が恐うて逃げさんす。これ兄嫁の島ぢやいな。たつた今まで近江屋で、兄さんと逢うて居て、今日の樣子を聞きやした。大事の己の男が、勘當受けてござんしたりや、胸が痛うてちつとの酒

産の親は見ず知らず、養ひ親には不孝を爲し、此の市郎右衞門めは親の罰が當つたり。せめて心の念願にて、死して再び親子と生まれ、今の御恩を報じたき其の證、此の杖の片折を、未來の形見と推戴き、いかに講中組中も、今生の暇乞。頼み申すは親の事、孝行盡せと妹に傳へてたべ。死するとあらば御廻向も頼み申す。」と言置も、涙ながら餘所ながら、見置きながらの橋柱朽ち行く身こそ、三重

下之卷

哀れなり。逢ひ初めし一夜を戀の水上に、三夜四夜五夜十夜百夜、通ひぐるまの蜆川、變る瀨枕沉む淵、思ひ二つの中町や、更けて苦しむ待宵に、明くる侘しき別れ路の、憂きをつぎ木の梅田橋、うめて冷せと色茶屋の、色の出花の里ぞとは、醒めぬ花香を汲みてしれ。實にや士農工商の、品數々の其の中に、情で賣れば情で買ふ、歌人の評判つけ置きし、よき衣著たる商人も、誠を守る天滿屋の、亭主は外より歸りしが、「なんと女子どもは仕舞うたか。島は今宵はどうした。」と言へば、「島樣は今宵は長柄の市樣とて、馴染の御客が久しぶりで、近江屋まで見えまして、夫れで島樣も近江屋へ、送りました。」と言ひければ、「扨こそ／＼さう有らう。今宵丸屋のうたひ講に往つたれば、町衆の話に、長柄の市郎右衞門と言ふ人、報恩講の銀を盜み、親の勘當うけて、白晝に在所を追ひ拂はれた。是れも

と打ちつけて、大聲あげて、「わつ。」と泣き、「たとへ千兩萬兩でも、銀惜しいとは思はぬが、すたる己が名が惜しい。近頃面目無けれども、人々も聞いてたべ。此奴は疾くに殺す奴なれども、今ならでは申さぬが、元我々が實子でなし。大坂のさる人の、四十二の二つ子にて、産屋より貰ひ守り育て、後に弟が出來たれども、それには替へず可愛さに、育てるに從ひ性惡く、勘當せんと思ひし事、五度三度には限らねど、若しや己が寐心に、養子と言ふ事知るならば、眞の親ならかうあるまいと、我々夫婦を疎みやせんと、義理もあり不便もあり、殊に母が最期にも、弟より彼の兄を、繼母に掛けてくれるなと、言うて死んだは小耳にも、定めて覺えて居らうぞや。仁義も慾も身の上も、本子には忘るゝに、其の本子より己をば、大切にせし甲斐もなく、湯を沸して水いらずの親の内で盜みをする、これは如何なる性根ぞ。」と、聲をあげて泣きけれども、子は覺えなき事ながら、言譯も無きしだらとなる。親も道理子も道理、心に籠る哀れさの、兩人の淚せきあへず。「エ、兎角言ふも恥の恥勘當ぢや出てうせう。親子名殘の形見の杖、身に覺えよ。」と押取つて、散々に打ちければ、杖は中よりふつつと折るゝ。飛び掛つて踏む所を、妹下人縋り付き、泣く〳〵奥へぞ入りにける。市郎右衛門淚を滂沱し、「何にも申す事はなし。親ならぬ親子ならぬ子、眞實の親子にも勝つたる御恩德、いつか報じ申すべき。とくにも斯樣に承らば、如何樣とも孝行の、盡し樣も有るべきに、口惜しさよ後悔さよ。

餘の惡性は若い者、有らう事とも言はれうが、あれ掛硯の口明いたり。鍵を入れたる鼻紙袋、明けて我に見付けられ、仰天するは盜人な。身が銀ならば親の慈悲、沙汰なしにもして遣らう。身の油にて講中が、御開山へ奉る、御茶所の銀ぢや盜人め。一文一字違うても、おのれが生けて置かれうか。我等一人は緣者の證據。それ〳〵講中組中。」と、呼ばはる聲に向鄰、一在所が驅け集まり、とざまの詮議ぞ是非もなき。介右衞門大きにせき、「サア何れもの目の前で、掛硯を開かん。」と抽斗見れども金銀は、一錢とても無かりけり。介右衞門地團太踏み、淚を流いて、「エ、口惜しや、何代か此の家に小言の有つた例もなし。歲六十に及んで、一在所といひ講中の、大口小口動かする、おのれ許りが恥と思ふか。盜人を捕へて見れば我が子なり。此の手間でこれ程な、能い事を仕たならば、親の身ではどれ程の、自慢で有らうと思ふぞやれ。成人の子を持てば、親の心やすめぞと人も言ふに、おのれには寐た間も心休まらず、擧句にかかる大事を仕出す。內で斯うした心からは、外で何がな仕置きつらん。誰に似て此の根性、憎いが餘つて不便なり、不便の餘りの憎さや。」と、地空を叩いて無念泣、實に尤もに憐れなり。市郞右衞門顏を擡げ、「鼻紙入は明けたれども、金銀には、手をささず。盜人は外に有らん。心を鎭めて御穿鑿。」と、泣く〳〵言へば飛び掛り喰ひ付きて、「エ、腹の立つ。盜みをする子を持つて、何と心が鎭められうぞ。親の心を知らぬか。」と、懷搜せば以前の一步、「これを見よ。」

家來まで、何れも野畑へ出でたれば、誰に首尾問ふ便りもなく、上り口にとぼんとして、寒さは寒し酒一つと、膳棚さがせど酒もなし。「ヤア荒神の御酒がある。冷でも一つ戴いて、胸のもや〳〵晴らさん。」と茶椀引寄せつぎければ、「こりやどうぢや。酒の中より壹歩が涌く。寶の泉有り難い。」と、皆打明けて、是れは夢か現か、三寶荒神の御利生か、死したる母の御授けか。」と、嬉しいやら恐いやら、分別に能はねども、「久々で金氣に逢うた。先づめでたう一歩の上汁吸ひませう。」と、戴き〳〵ぐつと飲み、一歩を紙に押包み、懷に納めける。黄金は人の身を富ます寶なれども、此の身には命を刻む刃となる、善惡こそは哀れなれ。所へ善次ひよつと出で、「ヤア兄者人お歸りか。推參な御意見なれども、お身持がさうでない。親仁も機嫌さん〴〵の上、蜆川の何處やらから、惡い所へ文が來て、親仁が見付け、それそこな鼻紙袋に入れ置かれた。我らは南の御堂へ、親仁の使に參るなり。跡で首尾ようなされ。」といへば、市郞右衞門は肝潰し、これはとあきれ居る中に、善次はそつと後手に、御酒德利を隱し取り、表に出でておし戴き、一さんに驅け出でし、心の中こそをかしけれ。斯くとも知らず市郞右衞門、「常々不和なる弟の、さすが恩愛なればこそ、よくも知らせて有りける。」と、鼻紙袋の紐なとき文を捜す所へ、親つか〳〵と出で後に立つて、「それは何する市郞右衞門。」「はつ。」と驚き飛びしさり、さし俯いてぞ居たりける。介右衞門聲をあげ、「己は天魔がみいれたか、佛罰が當つたか、

ぬ。」「何でも無いとは、己等までが一つになつて、親の目を拔き居るか。」と、文捻ちたくつて、「これいづれも。田地賣らせた女めが、市樣まるる身よりとは、はて扨々あたじたたるい。皆の手前も面目ない。待ておのれどうする。」と、鼻紙袋へ文をも入れ、ぐる〳〵捲きし小撚より、細きお島といち命の、終る端とぞなりにける。講中も挨拶なく、「男の子は何處もそれ、先づお暇申しませう。なんと太郎兵衞、若い衆がよね〳〵と言ふ程に、何うした事と思うたが、田地を賣つて買ふ故に、それでお山をよねと言ふ、今講釋が聞えた。」と、堅い輕口いうて歸れば、介右衞門も苦笑ひ、奥の間にこそ入りにけれ。善次郎は唯一人、外の事は耳にも入らず、一心不亂に掛硯の、銀に性根を奪はれて、そろりと立つて錠前を、押して見引いて見捻ぢて見て、奥を覗き表を見、箱ぐち取つてもち上ぐれば、慄うてどうと打落し、我とおびえて飛び上り、種々樣々に盗み樣、工夫するこそ恐ろしき。「ヤア忝い。鍵の入れたる鼻紙入、親仁が忘れ置かれたり。」引解き鍵取出しまんまと明けて、鍵は元の紙入に、初めの如く納め置き、掛硯の抽斗明け、二包の白銀を、下懐へ押しこんで、小判は頭巾にぐわらりと入れ、裸一歩を手に握れば、奥より親の聲として、「善次々々。」と呼び懸くる。「あい。」と言へども此の一歩、置所に動轉して、口へ入れたり目へ入れたり、うろたへ廻つて、釜の上なる御酒德利へ、ざらざらと移し入れ、親の前へぞ出でにける。かかる所に市郎右衞門、内へ歸れど敷居高く、心おかるゝ

皆宿所に歸りける。親介右衞門は六十餘り、頭に積るお霜月、講中お茶所の冥加錢、殘らず爰に持ち集まり、お勤め過ぐれば表に出で、介右衞門いひけるは、「何れも講中有り難いと思召せ。毎年のお霜月、懈怠もなう上ぐる事、自力では叶はず、御恩徳のお蔭なり。扨去年の通り此の銀を、兄市郎右衞門に持たせて、京へ遣るはずなるが、在所の沙汰も聞かれつらん。新地狂ひに身代あげ、方々の借錢堤際の田地をも、七百目の質に入れ、四貫目の手形したと聞く。かうした性になるからは、一錢も持たされず。あの弟めは一日でも、居らねば年貢の埒明かず。身共が上りませう。」といへば、弟は律儀な顏つくり、「大儀ながらさうなされ。ア、何れも性の能い兄貴にて、年寄られて親仁の苦勞でござる。」といひければ、「それはきようがる今聞いた。」と、頭を振り顏を蹙める。介右衞門かさねて、「白銀五百目二包、小判二十五兩一歩合はせて四十切、改めて預つた。」と、數讀み揃へ懷中より、掛硯の鍵出し抽斗開けて、金銀取入れ錠おろし、鍵を袋に入れにける。時に表へ駕籠の者、「頼みませう。」といひければ、「どれい。」と言うて妹のお吉、「何所からの使。」といふ。「私は蜆川天滿屋のお島樣より、市郎右衞門樣へ急な使に參つたり。此の文進ぜて下されませ。」と、高聲にいひければ、「ア、爰な人、高い聲さつしやんな。兄樣は昨夜から未だ歸られず。私が預り屆けませう。」「お歸り次第頼みまする。」と、言ひ捨ててこそ歸りけれ。介右衞門聞き付けて、「お吉今のは何ぢや。」「イヤなんでも御座りませ

す。其の上お前は當もない、花車や娘仲居にまで、仕著をして取らせうと、約束許りでまるらぬ故、私が宙でも取つたかと、毎日毎夜の使立。内は常住師走にて、何とも迷惑仕る。今日は是非に請取りませう。それに成らずば、親旦那へ訴訟申す。」といふ所へ、五十餘りの女房、綿帽子にて顏包み、「編笠島の笹屋の嚊でござんする。御人體とも覺えませぬ。我等が僅かの商賣の、元手も利くひの月躍る、泥鰌汁のしゆらい代、取り切る間は何所までも、」著き纏はるゝ、「藤の棚、谷町から。」と言ふもあり。九軒のおろせが揚錢の、殘りも今日はすつきりと、取つて九兩二分の銀。道頓堀の水茶屋の、或は饂飩けんどんの、傍で聞くさへ笑止なり。善次郎もて扱ひ、「尤も掛は負うたれども、節季でもある事か、つきともない今日に限り、此の樣にせがむのは、ム、合點ぢや〳〵。兄市郎右衛門のうつけ者、天滿屋のお島にぐわらりと片鼻うちあけて、親父の機嫌散々にて、半勘當の身となつた。夫れを聞いて我までを、氣遣ふと見えたが、兄とは格別、こんな銀譯惡うする男でない。親父に言ふなら言うて見や。一文にも成るまいが、遲うて此の月一ぱいに、濟まそといふから譃はない。十三國島北南の長柄で、男といはれたる、善次郎ぢやが何と見た。僅か二百目内外で、捨てる善次が名ではない。親父にいうて此の善次を、勘當させて腹いるか。但しは自然に銀取るか、勝手次第。」と投げ出し、立派に言へば掛乞ども、いかなれ譃はながら川、砂にはよもや成るまいぞと、幾日々々の日切して、皆

中之卷

こがれ行く其の名は言はじ。名を問へば父は長柄の田地持、市郎右衞門が弟善次郎なれど惡性もの、人の意見も馬の耳、餘所吹く風のぶう／＼にて、夜歩行日歩行とほしたて、歸れば小宿で衣裳を仕換へ、稼ぐ體をば親兄に、これみやの前大根を、擔うて家路に戻りける。斯かる所へ、下男つかつかとよつて棒鼻取り、申し善樣、これお見忘れなされたか、毛馬屋の七兵衞、エ、お前は譯の惡い。術によつて待てならば、待つまいものでも無けれども、幾際か／＼、今日遣らう明日遣らう。假初ながら五百目餘り、五匁も埒明かず、夫れに昨夜も鄰までお出でなされ、此方へは音信なし。餘りな爲され樣。今日は親御樣へ、直に申して取つて來いと、旦那が申し付けました。斷りました。」と入る所を引留めて、「こりや聞えぬ、日比の己ぢや知らぬかい。五百目や一貫目、今でも遣るは合點なれど、親父が手前をあぢにして、末永う出よう爲、すこしの銀を延引した。そちがさはいで二三日どうぞ賴む。ヤアいつやらの紙花も、思ひの外に遲なはり、面目ない／＼、これも拂ひと一度に遣ろ。今改めて、こりやばつとうちなほすわ。」と捻ぢて出せし鼻紙の、しらごかしこそ笑止なれ。所へ駕籠の長介來り、「私が請合の菱屋の花代、津の國屋の料理代、合はせて三百四十五匁六分、扨も／＼せがまれま

と此の節に違ひがあるか。」と言ひければ、「オ、よい推量、おつつけお島を請けて見せう。なんぼせいても張合うても、金で語る淨瑠璃は、ちつと喉につまらうぞ。こりやこれ見よ。」と、お島にしつかと抱きつき、「なんと腹が立つか。」と言へば、又扇の拍子を拍つて、「あら不思議や、ますらが行ふ魔法の形、天上に現はれ出で、異形は手を伸べけんびるしが眉合を、破れて退けとはたと打つ。ハア、拍子にかゝつて粗相々々。」「ヤァおのれ擲つたぞよ。もう聞かぬ。」と立ち上るを、島は縋つて、「なう情なや、是れ私が詫事ぢや。エ、供の衆氣が利かぬ、船頭衆頼みます、舟に乗せて下んせ。」と、泣き叫べば人々は、「折も惡し場も惡し。是非御堪忍々々／＼々。」と、無體に舟へ抱き乗せ、櫂を早めて漕ぎ出す。猶船中より聲をあげ、「銀も持たいで言はれざる、戀の意氣地の淨瑠璃だて、身が前ではおいてくれ、おけ／＼おけや。」と、舟端たゝき手をたゝき、笑うて舟は上りける。市郎右衛門四邊を見廻し、「ハアア我ながらしどもなや。氣が違うたか南無三寶、一期と思ふ女房を、我が物顏の見にくさに、苛つは戀の癖なれども、思へばくやしかうせいでも、三匁では彼の頬を、うつけたことと思ひやせん。島が心の恥かしや。氣遣ひかけし可愛や。」と、見送る方もほの／＼と、明石の客の乗る舟に、お島も隠れ島がくれ、蜆川へと　三重

な、初段から切まで語りぬかさにや堪忍せぬ。」と、ぎしみ廻れば、お島一人が氣を苦しみ、「これ申し此方樣程な粹樣が、これは又氣のとほらぬ。彼の人と私と、譯ある樣に見さんしたさうなれど、みぢんそんなことではない。腹立てさんすを面白がつて、法界悋氣に言はんすわいの。おとなしうして、サア舟に乘らんせ。」と、手を取れども聞き入れず。「いや〳〵おつしやれな〳〵。他國から登つて此の大坂で、よねづかを握る者が、通例の男と思ふか。どうでもかうでも聞かにや置かぬ、語らせにや置かぬ。」と、堪忍せぬ顏つきに、お島は難儀手に汗握り、これ爰な人も誰か知らぬがよつぽどな。勤めする身が客に引かれ、芝居へいつたが珍らしいか、船に乘るが不思議なか。淨瑠璃はそなたより、私が能う覺えてゐる。晩に此方の見世へおぢや。能う合點のいくやうに、敎へて遣らう。」と世話やけども、市郎右衛門もいひがゝり、「いや〳〵此方に習はいでも、此方の胸中にある淨瑠璃は、此の鼻が覺えて居るお聽きやれ。」と、扇をうつて、「扨もますらが此の目の玉ぐつと脫け出で、花人親王の蜆川の御所の體、とつくと見屆け候へば、まのの長者同然の大銀遣ひに思はれて、金銀小袖を仕て貰ひ、深い男をふり捨てのぼり詰めて、擧句には姬君を請出すとて、料理獻立表換、眞最中と見て候。兩人が中へ某が毒氣を吹き込み、男と女と不和になし、同士戰の口舌をさせば、姬君は見放され、はしばしのくら屋へさがり、後には濱の納屋の陰、一本立にて候。」と、語りけるこそ不思議なれ。「なん

か。」「何がさて御所望ならば語らいでは。則ちさんろの四段目、撿非違使が鹿島の事ふれ、島樣とつくとお聽きなされ。是りやこなたへ御免ならう。是れはお島ではござらぬ、お鹿島大明神よりまかり出た、事ふれでござりや申す。總じておかしまと申すには、上の客が三十三人、中の客が三十三人、拙者が樣な見る影もない粕客がたつた一人。正月七日神前に於て、おやおつかない誓紙を書く。其の誓紙の文言に、かやうに申し交すからは、未來までも變るまい、譃をつくまい隱すまい。勤めの開外に深い男を、持つまいと申す起請を取交すから、僞りは申さないと存じ、盡す程にける程に、只今は向脛から、でつかちない光物が飛んで來て、巾著の扉が八文字に開け、内の首尾が八角にわれ、神馬のお馬の太鼓持にも見捨てられ、大恥をかいてござある。されどもおか島大明神、氏子を不便とも思しめさず、或時は餘國の大じん宮に身請の談合を仕かけ、或は紋日をかづかせひき日の立前、跡からはげる禿頭、親里の合力なんどと申して、厄介しつかいむくりこくりの上手ごかしに、むくり取られたとの御託宣、無上しんれい神道加持、これ是れが眞實戀のある淨瑠璃。島樣ようお聞きなされい。」と、よそながらこそ恨みけれ。男は二人が色目を見て、「はてさてかはつた文句ぢやの。なんと餘國の大盡に、身請の談合とは珍らしい事ふれ。これお島、そなたは今のが面白からうが、此の貞は耳に立つ。とても所望しかゝるからは、まあ一節所望いたさう。お島とお身とが連節で、戀の籠つた淨瑠璃

舟は目に立つゆゑ、どれに限らず皆見さんす。なまなか咎めて、一本かたげ恥かこより、ハテ彼方から見るなら、此方からも見て大樣にして居さんせ。」と、言へども更に聞き入れず、驅け上れば續いて揚り、見ればいよ／＼まぶの男。これ市樣と、言はんとせしが目はじきして、「是れ申し此方は他國のお衆ぢやぞ。所の衆なら粹であろ、何を言懸けさあんしよと、言分してくだんすな。何方の爲にも惡いぞ。」と、心を揉むこそ道理なれ。貞は肱はり澀面つくり、「こりや編笠、五度や三度は堪へうが、何うしたことに舟につき、女を乘せたる船中を、見るも大かた方圖が有る。それ程見たくば、近くへ寄つて見られに來た。「サア我が存分に見けつかれ、見やうが惡いと免さぬ。」と、聲をなまつてりきみける。市郎右衛門も差當る意趣は無けれど、當分の妬ましさばかりなれば、口論しては如何ぞと、「イヤ申し、別にお腹の立つこととも存ぜず。我らも下地淨瑠璃ずき、折々稽古仕るが、此の山路の道行は、戀を含んだ節付なるに、只今お島樣とやら遊ばした淨瑠璃の、節は少しも變らねども、情を御存じない故か、誠の心少なうて、御眞實の無い故か、如何にしても道行が、浮氣に聞えて、底意に戀がござらぬ。」と、片眼でお島をねめにける。男あざ笑ひ、「ヤアぬかすまい／＼。島が淨瑠璃よかれあしかれ、己が冷えにも熱氣にもなる事か。何樣でも外に樣子があらう、但し又おのれが言ふ戀を含んだ淨瑠璃の、語りやうを知つたらば、只今こゝで語つて見よ。節が違ふとぶち据ゑるが、なんと語らう

ぐ鎌の、砥石も心砕けとや。夢にもかくとしら玉の、玉世の姫は胎内の、まだ見ぬやゝの別れぞと、つれなき母に誘はれ、行く道筋は多けれど、笛に誘はれ妻戀ふる、※牡鹿の園の法の導き是れなれや。互にそれと道芝の、※すがるばかりの戀草も、芽は繁りそふ母子草、千草八千草思ひ草、おそろし鬼のしこ草に、隔つる中の垣根草、力草なく泣きかはす、心ぞ思ひ遣られたる。草ばし刈るな笛を吹け。野路にふたりが悔み草、毒の草をも身の上と、知らぬ手元の暗さには、燈臺草を思ひ出す。思ひ出でずやありし夜の、亂れあひにし枕には、かつら草をぞ思ひ出す。彼のほの〴〵のほのぐらき、黄昏早く寢し時は、かやつり草を思ひ出し、人目思はで肌觸れて、起きつ轉びつさゝめして、相撲取草を思ひ出す。通ひ路遠き獨居の、班女が閨の寂しさは、茶引草をも思ひ出し、心細しや絲薄。えい〳〵えい、風かと聞けば山の下には、嵐吹く〳〵、さりとは嵐吹く、山をはなれて風となる、風も昔に吹き返れ。」「ヤァ淨瑠璃待ちや〳〵、舟も留めい。なんと皆は氣がつかぬか。先にから陸を見れば、うそ汚れた八丈縞に、花色の羽織、茗荷の丸の紋つけて、編笠著たる男めが、道頓堀を乘り出すから、此の舟に目を放さず、跡へ下れば走りつき、先へ拔ければ立ち留り、つけて廻るは合點ゆかず。ありやありや、また彼處に立つたるは、喧嘩しかける體と見た、だまつて居るはひけたこと、揚つて一つ詰め開かん。」と、脇差押取り出でんとすれば、島引留め、「ハテはでな人樣ぢや、私等が樣な者が乘つた

連れて出る。いづくはあれど曾根崎の、緣の芝居初樣も、定めし佛金色の、身あがりと聞く外題に引かれ、終日見物慰みて、芝居果つれば繫がせし、屋形に皆々乘りいだす。提重ひらき對開ども、「なんと島樣、今日の山路の道行は、本で語ると直に聞くとはまた格別。大盡樣のお慰み、船の著くまで道行を、所望々々。」とどよめけば、「イヤこりやよかろ。おれも島の一弟子で、餘程節は覺えたが、おつけ島を引摑み、國へ連れていつたりとも、國元は堅い所、こんな遊びはなりがたし。此の船中をぶらぶらと、たゞ行くも愚癡の至り。大坂の名殘にちつと聽聞致したし。サア皆つけやや。」と言ひければ、供の丁稚が懷中の、本取出してお島に渡し、「東西々々。此の所が山路草刈の道行、師弟連節。東西東西。おきに戀路の〳〵まだいろは船、惚れてほの字の帆が見ゆる。ほの字の〳〵、誰に〳〵ほの字のはつを花、小すげしらすげ岩間菅、此の一叢は刈り殘せ。つまごめの夜の牀にせん。塒の蟲とも、ろともに、刈り取る鎌の鋭くも、聲きり〴〵す轡蟲、牛の鞍にも音を泣きて、歸る家路をまつ蟲や。さらば笹原笹蟹の、秋に染絲繰り出し、五百機立てし機織や、其の藤袴破るなと、泣くかいばらのつるさきに、野飼の駒の優しくも、古鄕の風の北にいばえて嘶けば、越路の雪にふる鄕の、空を慕ひて泣く犬の、べうの湯元はあれとかや、いかに言はんや久方の、天津雲居をあまさがり、賤の仕業はいつ君が、ゐにかくならで思ひきや、見しや聞きしやと許りに、草も刈り兼ね忍び兼ね、淚をうけて研

心中二枚繪草紙

上之巻

既に今年の酉もたち、戌の顔みせ朝木戸を、曙深く提灯の、影きら〳〵と初霜の、おきなの面のにこやかに、始まり呼ばう聲に引かれて、老いも若きも見る人は、餘念なじみに御贔屓に、ようお出やつた朝日影、御代も御國も久方の、此の日の本のならはしの、歌を種なる諸物、天地を動かし鬼神を感ぜしめやかに、妹脊も猛き武士も、心「やはらか饅頭や、菓子に火繩に番付。」と、賣る聲にまで節籠る「竹の紋つく道行の、本を召せ〳〵。」目塞笠「笠も預る預けて御座れ。」紅のくけ紐淺葱紐え、繁昌々々、イヤ此の所繁昌毛氈敷島の、其の難波津の冬籠り、今を春べの顔みせに、日もなが事の御退屈、今日のお暇と、散らし太鼓の下轟き、明日はとうから唐錦、彩る空は夕陽の、山は夕の雲の帶、腰の廻りの御用心。おすまい〳〵おす毎日の、入りくる人や歸るさや、花山の幕が袖續く、貴賤羣聚は冬ながら、心ぞ彌生となりにける。中に家名も君が名も、世上に高き天満屋の、お島と言ひて彼の里に、※おはつが跡繼かくれなし。此の頃あかしの貞と云ふ、馴染の客に揚げられ、今日は南へ

にけり。

傾城反魂香 終

ほどき酒漬の、死骸は更に色變らず、唯其の時の如くなり。名古屋袴のそば取つて、近々と寄り、彼を討ちしは、先月二十日、曉月の時鳥、名乘りかけしは欺さぬ證據、向う傷に斬り伏せ、とゞめを刺さんとのつかゝり、胸おし開けば懷中に金子あり。此の儘置いては實の盜人、來り搜し取らんは必定時には山三が盜みしと、後日の難を察せし故、鳩尾さきをゑぐつて、金子は彼奴が身體の內、肺の臟に押込んだり。五臟の中にも肺は金、同氣もとめて朽ちもとろけもよも爲まじ。いで見せん。」と、手を伸ばしぐつと入れ、朱に染みたる緞子の財布、引摺り出して「これ見たか。これでも山三が盜人か。弓矢取る身の仕方を見よ。」と、道犬にはつたと投げ付け、死骸を踏まへつつ立てば、役人衆を始めとし、元信其の外門弟等「出來た〳〵、あつぱれ〳〵御分別、後學なり。」と勇みをなす。道犬は言句も出でず。雲谷はひるまぬ顏にて「相手の言譯立つからは、此方は切られ損、お歸りなされ。」と立つ所を、役人衆飛びかゝり、鐵棒ふり上げ打つほどに、面も眉間も打裂かれ、胴骨碎くる許りなり。頓て繩をかけさせ、道犬親子は世間流布の重罪、上を犯す科といひ、只今の始末、諸人の見せしめ、親子諸共獄門に曝さるべし。まづそれまでは兩人ともに牢屋へやれ。」と引立つれば、狩野も名古屋も勇みつゝ、「サア唄へや唄へ雅樂介、其の外の門弟中、永く知行に墨筆や、家をさいしく繪具筆、隈筆藁筆、泥引筆、その筆先に金銀も、わきて和泉の※壺の印、ならびなつ毛の狩野の筆、末世の寶となり

役人きつと見、「不破伴左衞門をお手前が手にかけしこと紛れなき上、父道犬願ひによつて、吟味を遂げらるゝ處、盗賊の罪遁れがたく、曲事に行はるゝ條、召捕り來れとの御諚、尋常に繩を掛られよ。」とあれば、名古屋すこしも騷がず、懷中より亡八の手形數通の文を取り出し、「斯樣の愚蒙の返答は、申すも似合はぬことながら、片口の御裁斷、如何にしてもかろ〳〵し。これ此の手形を御覽ぜ。葛城事は三月二日に親方が暇を取り、拙者が本妻、借宅見たての間、揚屋に預け置きし所に、伴左衞門數通の艶書、斯くの通り不義者の女敵なり。」と、詳かにぞ申さるゝ。道犬つつと出で、「きたない〳〵、こりや山三。倅伴左衞門葛城を請出す手付として、金子五百兩懷中せり。女敵討は聞えたが、なぜ金子は盗んだ。五百兩の金子を身につけた伴左衞門、切りは切つたが、銀は知らぬと言ふとても言はせうか。盗人でないならば、言譯せよ。」と詰めかくる。「オ、サ言譯はして見せん。其の跡は合點か。」「イヤまづ言譯から聞かん。」と競合へば役人衆、「これ〳〵名古屋、問答までもなし。其の爲の我々、人にこそよれ、兩方共に弓馬の身柄、盗賊といひかけ分明ならぬ訴訟、且は上を掠むる越度、言譯たたば道犬は、存分に計らふべし。又盗賊に極まらば、下知の如くお手前に繩をかけ申す。」と、理非明らかに述べらるゝ。名古屋勇んで、「この山三春平は外の事は不調法。傾城の買ひ樣と人切る樣は大名人、恐らく宗匠ござんなれ。それ〳〵伴左衞門が死骸をこれへ出されよ。」「心得たり。」と役人封切り

なつても、思ひなき世は和歌の浦、梢にかゝる藤代や、岩代峠潮見坂、書きうつす繪は殘るとも、我は殘らぬ身と聞けば、いとしやさこそ我が夫の、なみだにくれて筆捨松の、しづくは袖にみつ潮の、新宮の宮居かう〳〵と、出島に寄する磯のなみ、岸打つ波は普陀落や、那智は千手觀世音、いにしへ花山の法皇の、后の別れを戀ひ慕ひ、十善の御身をすて、高野西國熊野へ三度、後生前生の宿願かけ、發心門に入る人は、神や受くらん御本社の、證誠殿のきざはしを、おりて下りて待ち受けよろこび給ふとかや。われは如何なる罪業の、其の因緣の十二社を、めぐる輪廻を離れねば、疑ひふかき音無河、ながれの罪をかけて見る、業の秤の錘には、それさへ輕き磐石の、岩田川にぞ著きにける。「皆妄執のあだ夢と、さめ〴〵もろき涙の露の、玉の臺の牀の內、連理の蓮片しきて、永き契りを待つぞや待たん。しるしはこれ此の一見、卒堵婆永離三惡道、南無や三熊野本地の三尊、迎へ給へや導き給へ。」と、唱ふる聲は伏屋に殘つて、形は見えず消えにけり。元信抱き留めんと、縋りつけば影もなく、「うん。」と仰向に目くるめき、忽ち息切れ絕え入りしを、名古屋、揚屋、門弟等驚き騷ぎ、藥さまざま呼び助け、やう〳〵一間に三重休めけり。夜もほの〴〵と明け行く頃、管領の役人衆不破の道犬、長谷部の雲谷誘引し、伴左衞門が酒漬の死骸を舁かせ、どや〳〵亂れ入り、「此の所に名古屋山三春平やある。管領よりの御下知有り、對面せん。」と呼ばはつたり。名古屋遲々せず出で迎へば、

三熊野かげろふ姿

あら惜しやあたら夜や。夫婦のなかに咲く花も、一夜の夢の眺めとは、知らぬ男のいたはしやと、泣くより外の事はなし。昔の朝のみじまひに、髪に炷いたり裾にとめ、そよとふくさの色風も、今燒香に立つ煙、反魂香と燻ゆるかや。香爐の灰の灰寄せも、順をいふなら此方樣を、我こそあらめ逆さまの、水の流れの身のならひ、所々の死水を、誰にとられんあさましと、よそに言ひなす言の葉を、世に亡き人とはそも知らず。アヽいま〳〵し。老木の末の思ひおきはよしなやな。こちも其方も若松の、千代の杯ざゝんざ、濱松の音、七本松の七本を、女は卒堵婆に數ふれど、男は今日の七五三、嫁入ごとせし戯れも、今は實と嬉しげに、手を引きあうて笑ひ顔、我は朝顔しぼみゆく。花の上なる露とは知らぬ果敢なさよ。月は缺けてもみつの山。娑婆の便りは片便宜、文も屆かず言傳も、いはで心の熊野路や、照手の姫のやつれぐさ、常陸小萩も夫故、身を旅籠屋の水だなの、はしに目鼻の餓鬼阿彌を、夫とは更に白絲の、緣はきたなき土車、心は物に狂はねど、姿を物にくるはせて、引けやひけやヨヤ此の車、えいさら〳〵〳〵笹の葉に、死出の旅路の後世の友、一ひきひけば千僧供養、二ひきひけば萬能の、藥の湯元と聞くからに、四百四病は消えもせん。骨になつても癒らぬは、私がそ樣を戀病、變る心を案じては、神の御名さへぞつとする。飛鳥の社濱の宮、王子〳〵は九十九所、百に

と夕顔の、黄昏照らす行燈の、障子に映るを能く見れば、元信は元の人體にて、女の影は五輪と、みやが物ごしばかり、人間の地水火風の風脆き、木の葉に結ぶ陽炎の、露の姿ぞ哀れなる。四郎二郎はらう〳〵と、疲れ侘びたる如くなり。雅樂介なほ訝しく、「此の菅笠は、里の便りに參りしが、何に入ることぞ。」と言へば、「なう嬉しや〳〵。ほんにこれがほしかつた。私が熊野を信ずる事、敦賀では遠山、三國での名は勝山、伏見へ賣られて淺香山、山と云ふ字を三度つき、それ故に木辻では、三つ山とつけられし。思へば熊野三つのお山の名を穢し、牛王の咎めも恐ろしく、お主と夫婦にして下さらば、連れだちお禮に詣でませうと、笠の紐まで絎けおきし。おつつけ別るゝ身なれども、一日でも斯う添ふからは、願ひは叶うた同然、神佛に譃はないと、此の襖戸にお山の繪圖を頼みまし、參つた心で拜まんと、思ふ所へこの笠は、どうした便りに來たことぞ。餘の事は何も言はずか。又の便りに傳三殿へ、假令如何なる事ありとも、四郎二郎樣へ歎きの懸る事などは、知らせまして下さんすなと、よう言ひ屆けてくださんせ。」と、苔の下まで我が夫を、いたはる心ぞ不便なる。「サア女夫連で參りませう。こなさまは勝手へいて、後夜の鐘の鳴るまで、念佛きらして下さんすな。似合うたか知らぬ。」と、笠打被たる五輪の影、五つの假の夢現、餘所のことではなく〳〵も、元の座敷へ人々は、宗旨宗旨の手向草、題目眞言念佛の、迴向に更くるも　三重

の時には念佛といふものも、何の穀に立ちませぬ。南無阿彌さへすう〳〵、陀佛までやらずに、轉りと取つていきました。」と、「わつ。」と叫べば人々も、「扨は定よ。」と手を打つて、皆々袖をぞ絞らるゝ。名古屋も呆れゐられしが、「疑ひもなく夫にひかるゝ魂魄、假に形を見せけるぞや。さもあれ樣子を尋ぬるため、腰元々々。」と呼びければ、「あい。」と答へて奥より出づる。「何とおみやは機嫌はよいか。」と問ひければ、「アイ機嫌ようにこ〳〵笑うてござんする。さりながら、志有るとて酒も魚も口へよせず。樒の香の煙絶やすな。煙絶ゆれば爰にゐる事ならぬとて、お寢間の内は抹香で、ふすぼります。」と言ひければ、「して四郎二郎はどうしてぞ。」「ア、さればおみや樣のお頼みで、お寢間の襖に、熊野の繪をあそばいてござんする。」「扨はみやの幽靈、疑ふ所もない。」とあれば、腰元驚き、「ア、怖や。なう知らいで傍に居ました。」と、膝の傍に這ひ寄りて、身を屈むこそ道理なれ。雅樂介心を決せんと思ひ、「さもあれ狸野干の業も有る。眞の死したる幻は、形あれども影映らずと承る。某參り、直に逢うて笠をわたし、燈火をたて、實否を試し申すべし。方々は小庭より、障子の影を御覽あれ。假令怪しいこと有りとも、必ずわつといふまいぞ。」「何が怖いこと有る。」と、誰も口では夕暮や、小氣味の惡くも佇めり。雅樂介何心なき調子にて、「これは暗いお座敷。みや樣はそれにか。火を燈したらようござらう。」「ア、さればいな。心の迷うた身の上、闇に闇を重ぬるつらさ、晴らして欲しや。」

佛も、やくたいもない骨佛にしてのけた。」と、さめ〴〵とぞ泣きゐたる。人々更に實とせず。「酒に醉うたか狂氣したか。みやは少し樣子あつて、姫君に替り四郎二郎と祝言し、五日前より奥に夫婦ならんでぢや。戯けたこと吐すまい。」「イヤ私を戯けになさるゝか。七日前に死んだ人が、五日前に來るものか。蓮臺寺專譽樣の御引導、舟岡山で灰になし、和國樣をはじめ、女郎衆から名代に、禿どもが灰寄せ、五輪まで立てたもの、何の僞り申しませう。」と、眞顔に言へば人々も、ぞつと怖氣も立ち寄りて、「して眞實か。どうして死んだ事ぞ。」と言へば、「眞實かとはいとしほげに。常が癪持、ぶら〴〵とはしながら、一日と寢られたこともない人が、いつぞや葛城樣身請の晩から、頭痛するとて引きこみ、それから枕上らず、次第に重つてくる程に、お客衆のひき〴〵で、柳原の法印さま、半井の御典藥、幸ひと和國樣へ、對馬の客から參つた朝鮮人參、尾張大根見る樣なを、刻みもせず丸口、人參の風呂吹を一期の見始め、人參でも鐵砲でも、いツかな咽を通すにこそ。もう無いに極まつて、私を呼び寄せ、今までは隱した遠山というた昔から、四郎二郎樣と夫婦の契約し、目出度う願ひ叶うたら、女夫づれで熊野參りを致さうと願ひをかけ、此の笠の紐も手づから絎けました。これを著て四郎二郎樣、熊野へ參つて下され。死しても心は連れ立たう。書置もしたいが、口でさへ盡されぬ。筆には中中廻らぬと、目をほつちりと明いて、南無阿彌陀佛々々々々々々と七八遍は聞きましたが、なう肝心

る。其の日もやう〳〵傾く頃、名古屋山三春平。「お見舞申す。」と案内ある。雅樂介出で迎へ、「先づ以て此の度は、姫君樣料簡うつくしく、おみやも念晴れ、元信も落ちつき申す事、皆是れ貴公の御蔭、門弟中も忝く、悦び存じ候。」と、いづれも禮をなしにける。「これは迷惑。元信ためと存ずれば、各同然の大慶。扨今日は五日め、五百八十の餅を搗いて、里歸りといふ事、緣邊の式法なれども、親元は遠所、祝うて我らが宅へ呼びたいと、葛城も申すが、ちよつと尋ねて見たい。」とあれば、雅樂介打笑ひ、「イヤ尋ぬるに及ばず、やがて別るゝ日切の女夫、寐入る間も惜しいとて、顏と顏を突き合はせ、頭も振らぬしただるさ。里歸りはさて置き、臺所へも出られませぬ。夫れは仰な喰ひつき樣、さうして互に飽かせたら、跡の爲には珍重。元信筆は達者なり。一日一夜に、半年の仕事は出來う。」と笑はるゝ。斯かる所に無紋の色に淺葱の上下、編笠取つて入るを見れば、舞鶴屋傳三郎、出口の與右衛門、打萎れたる風情なり。名古屋を始め門弟中興醒めて、「これ傳三、あんまりそれは粹過ぎた。聞かぬといふことあるまい。葬禮の戻りに、祝言の家へたち寄るは、無禮すぎた不道化、をかしうない。歸れ〳〵。」と苦々しく叱られ、鼻打ちかみて目を擦り〳〵、「姫君樣の御祝言と、遠慮致して見ましたが、わきから沙汰があつては、お恨みの程もいかゞと、女房が心をつけまして、今日七日目の墓參り、ついでながらのお知らせ、常々氣だてが結構で、おみやとはいはず佛々と申したに、あつたら

がよい。元信は豫てより、傾城いきと聞きしゆゑ、此の小袖を見や、郭模樣に言ひつけた。是れ著ていきや。」と裲襠脱いで、「七日といふも忌々し。來月一ぱい貸すぞや。」「ア、お志は有り難けれど、終に別るゝ此の身なり。然らば七々四十九日が其の中は、私が妻と思召せ。此の分で死んだらば、定めし男の餓鬼道へ墮ちませう。」と、泣く／＼立てば姫君、「さう言うて皆吸ひ干しやんな。どこぞ少し殘してたも。こちはこれから腰元つれて步うて戻る。あの乘物でみな供しや。」と、歸るさを見て遠山は、「姫君樣の情程、我が身の罪は重うなる。借る時の地藏菩薩に捨てられ、返す時の閻魔の廳、どう言うて遁れう。」と、涙をかこふ神垣や、神も佛も見通しに、酸いも甘いも梅靑む、北野の假屋に、

下之卷

三重嫁取の、嫁の手道具、御厨子、鏡臺、うちみだれ箱、葛籠、貝桶、挾箱、長刀持たせて遣手のみやが、來るとは思ひがけもなし。其の心底の屆きし事、姫君の情といひ、かた／＼默し難ければ、門弟雅樂介、釆女隼人、大學なんど宗徒の弟子ども、すべよく賄ひ、春平にも內意を得、表向は銀杏の前御入り有りしと披露すれば、方々の音物樽よ肴よ卷物よ、太刀折紙の馬代銀、五十目がけの蠟燭の、明けぬ暮れぬと賑ひて、今日五日目の朝上下、雜煮の黑餅、子持すぢ、つき／＼しくぞ見えにけ

り、越前の敦賀で遠山と申して流れを立て、四郎二郎殿とは故あつて、起請一筆書かねども、釘鎹、より離れぬ中。されども方々をうろたへ、今は六條三筋町、上林が内みやといふ、流れの身よりあさましい、遣手はしてもおのれやれ、一度は狩野元信が、内儀とは言はれう〳〵と、四年が間の氣の張弓、はつたりと弦切れて、泣くにも力あらばこそ。無理とも損とも、餘り無法なことながら、永うはいらぬ一七日、今宵の嫁入を下されば、跡は御前と萬々年。七日添うて別れて後は、此の世の生顔見せまいし、たとへ死んでも彼の人の、未來の廻向は受けますまい。もう此の跡は申しませぬ。」と、涙を流し手を合はせ、伏し轉ぶこそ哀れなれ。姫君呆れておはせしが、「聞けば笑止悼はしや。いやと言ふはたいてい、胴慾者といはれうず。心得たと言うてから迷惑するは我一人、新枕はどうかうと、きほひかゝつて行く嫁入、道から貸して歸るとは、話にも聞かぬこと、こちや義理づくめになつたか。」と、※途方に暮れて泣き給ふが、やゝ有つて涙をおさへ、「ム、よし〳〵合點した。和女が其の思ひからは、男も心にかゝる筈。二人の縁の離れぬ中へ、嫁入してをかしうない。蓋も懸子も打明けたこそ女夫なれ。男を貸してやる程に、互の心を晴らしてたも。さりながら、餘りかけごを明け過し、底抜きやつたらこちや聞かぬ。」と、涙ぐみつゝ宣へば、「ア、有り難や。」と遠山は、姫の膝に抱きつき、貸すお心より借る心、御推量あそばせ。」と、泣聲よそに飛梅の、神も憐み給ふべし。「サアとてもなら早い

入する身に女の際で、只のこととは思はぬ。四郎二郎殿の姿か、但し時の戯れに、末では妻にせうなどと、男の當座間に合はせを、一筋な心から、其の恨みでござらうの。我が身に知らぬことながら、殿を持つ役なれば、聞くまいとはいはぬ。道理さへ立つことで、負ける道なら負けもせう。又筋もない道言うて見や。我にも手も有り足も有る、銀杏の前が理不盡と、言はれては大人氣ない。相手むかひにしておきや、サァ何ぞ聞かう。」と、口は陸路をわけながら、胸はしどろの山坂や、顏は躑躅の如くなり。女溜息顏を上げ、「ア、流石でござんすな。其の美しい出やうには、かう取つた胸倉を、放しやうに困つた。我とても中々、狼藉する氣は微塵もなく、お乘物に縋つて歎きを申し、お情を受けうと、七本松から跡先に、これまで窺ひ參りしが、頭のかゝりがどうもなく、思はず慮外致せしなり。仰々しい白無垢著たは、討ち果しての何のといふおどしでも見せでもない。思ふ願ひが叶はずば、西所川原か舟岡へ、直に飛ばうと思ふ氣で、私がための修羅出立。高いも低いも女子には、大なれ小なれ此の氣はあれど、いはぬでもつた世の中、色に出さぬをたしなむと、心で心を叱つて見ても、いかなる慾もはなれうが、男に慾は得離れぬ。さりとてはきたない氣、恥かしうござる。」と聲をあげ、譯をも言はず泣きるたり。瀨兵衞を始め女房達、「御祝言の時刻ちがふ。道行ばかりいはずとも、要ることばかり申せ〳〵。」と責めければ、「オ、御尤も〳〵。私は土佐の將監が娘なるが、親の憂瀨に身を賣

郎二郎様、私や何にも申しませぬ。御息災で姫君と、夫婦になつて下さんせ。」と、「わつ。」と叫び伏しければ、共にせきくる四郎二郎、「オ、よい合點々々。郭の衆は涙もろく、目出度いことにも泣きたがる。身請する女郎衆に、名殘惜しいは尤もながら、他國へ行かす死にはせず、おつつけ逢はう泣きやるな。」と、外に言ふさへ包みかね、目はうろ／＼になりにけり。「サアお乘物が參つた。早うお出でなされませ。」「いや／＼乘物古い。」と立ち出づれば、一家の太夫、天神、圍、「葛城さまさらばでござんす。」「門まで送れ。」後賑やかし、打つたり舞うたり、舞鶴屋、傳三が萬うけこんだ。置土産を遣手衆お春お夏。」と、勇めども、みやが心はあきがらの、腰の巾著ぶら／＼と、物寂しげにぞ三重見えにける。花の三月はや過ぎて、娘の年も二十棹、何時の間にかは長持に、桐の葉茂るよめり月、銀杏の前の御祝言名古屋山三の謀計にて、四郎二郎元信を、北野の社人に假座敷、名古屋が家の子世繼瀬兵衛輿添にて、供女中の出立や、地黑、淺葱、紅檜皮、右近の馬場にぞ著き給ふ。並木の櫻暮れかゝり、まだ人貌も白無垢著たる、若き女の横合より、嫁入の供先おし分け／＼、打つも敲くも事ともせず、しつかと縋つて引くほどに、乘物の戸は碎けて放れ、姫君、「あつ。」と叫び給ふを、胸ぐら摑んで引きすり出し、土堤に押しつけ引据ゑたり。瀬兵衛刀の反を打ち、六尺徒士衆おつ取りまはし、「そこを放せ放さずば、ぶち殺せねぢ殺せ。」と口々に呼ばはれば、姫君制して、「ア、默つて居や、構やるな。嫁

聞きすれば伴左衛門を討ちとめた物語。「ア、うれしや、女房事は出ぬさうな。まちつと聞かう。あの耳語は何ぢや知らぬ、聞きたいまで。」と耳をよせ、「ア、悲しや、連れて歸つて姫君と、女夫にせうと言ひくさる。こちの男が利口さうに、こなたの詞は背きはせぬと、吐しづらは何事ぢや。エ、聞くまい物を腹の立つ。」と、耳を塞いで立ちつ居つ、身を揉み歎くぞ哀れなる。舞鶴屋の傳三郎、遣手、引舟、下男、いきりきつて大聲あげ、「こりや〳〵、葛城樣の身請さらりつと埒明いた。あとの三月二日に暇をやるとの一札、王樣の御綸旨より高直な物握つた。乘物の戸をぐわらりと明けて、今でも大門お出でなされ。」と喚く聲に、人々悦び走り出で、「扨々お手柄〳〵。酒巓童子の首より取りにくい事、主もたぬ身は爰が過分、手を引きあうて門を出で、名古屋山三と葛城と、後々までの話を殘さう。ヤア亭主、近付になつて置きや。狩野四郎二郎元信と云ふは此の人ぢや。廻り逢はうばかりに、互の苦勞は知る通り、身は葛城を請けだす、四郎二郎は大名の、お姫樣をほり出す。祝言の夜は勝手へ見舞や。扨みやの禮は今は申さぬ。前垂鎰を捨てさせ、武家か公卿か町人か望み次第に、數ならねども拙者が親分。先づ姫君の祝言には、待女郎に賴まう。」と、勇みかけても投首に、目も泣き腫らして返事もせず、堪へ兼ねてつつと出で、言はんとするを四郎二郎、柄に手をかけ腹をさすれば、手を合はせ泣く〳〵退れど、なほ堪られず、思ひきつて言はんとす。四郎二郎腹押明くれば、「ア、〳〵、申し四

を碎いて、何の波風ない樣に、十の物が九つ、追付埒が明く筈で、あれ奥にぢやわいな。」「是れは大慶、先づ通つて對面せう。」「イヤ〳〵待たんせ、そりやならぬ。こな樣を尋ね出し、姫君と夫婦にせねば侍がすたると、今も今言うた人に、逢はずといんで下さんせ。」「エ、愚癡な事ばかり。我故に一命を果さうといふ山三ぢやないか。逢はずに歸つて人外の名を取れか。けしう逢はせまいなれば、爰で腹を切らうか。」と、脇差に手をかくる。「ハテ死なんせではないわいの。外に奥樣持つまいといふ誓文立てて逢はんせ。」「オ、姫君は扠置き、たとひ餅屋のお福、山姥と祝言するとても、山三が詞を一たん立てずにおかれうか。エ、世間見た樣にもない、氣が狹いぞや。」と恥ぢしむる。「世間は唐土まで知つても、氣は武藏野程廣うても、大事の男を人には添はさぬ。山三樣に逢うて、四郎二郎が女房は、此のみやでござんすと、罷り出て斷らう。」「オ、言ひたくば言や。詞の中に脇差を、この腹へ突きこむ。サアどうぞ〳〵。」と詰められて、泣くより外は、何をいふも大切さ。「そんなら言ふまい、息災でゐて下んせ。さりながらどうぞ言ひ拔けらるゝなら、言ひ拔けて見て下んせ。」と、まだゞと〳〵の忍泣き、「尤も〳〵男のつら役、斯う言ふとて何の如才が有る物ぞ。弟子衆こちへ。」と涙ながら、奥へ行く間も惜しまれて、「これ采女樣雅樂樣、祝言の話が出たら、言ひ消して下さんせ。」と、賴む返事の否應は、涙に紛らし入りにけり。心許なさあぶなさに、心騷ぎて落著かず。襖の際にさし足し、立

や。それをとんと打ちこして、主親方にも背きしゆゑ、奈良伏見まで賣り渡され、今此の京で遣手となり、花の都も我が身には、鬼界が島に住む心、皸凍瘡に苦しみても、手足の苦勞はなりもせう。心を痛めるばかりぢやない。力業にも才覺にも、かなはぬものは逢ひたいと、思うて遣瀬がなかつた。」とあまえ口說くぞ不便なる。四郎二郎も盡きせぬ淚、「ォ、道理々々、いとほしや。度々文でもいふ通り、和女の蔭にて、大事の繪を書き譽を取り、契約たがへず身請をせうと思ふ間に、不慮の事ども、命が有るといふ許り。恩をきた名古屋山三、我ら故の浪人、行く先も〳〵、目出度いといふ字は書き樣も忘れて、今は團扇の繪、※蘆屋釜の下繪に露命を繋ぎ、大津で問へば奈良にといふ。難波で聞けば伏見とやら。是れは采女雅樂介、二人の弟子の介抱で、丸四年めに顏を見て、嬉しいことはどこへやら。おれといふ者ないならば、疾うによい仕合、前垂鎰はさげまいと、親御の事まで思はれて、生きた心はせぬぞ。」とて、男泣に泣きければ、「ナウさう打明けて下んすが、ほん〳〵の御眞實。私は寧そ親のこと、思ふ所へいかなんだ。私に罰が當らずば、當る者は有るまい。」と、口說き立つるぞ哀れなる。稍あつて四郎二郎、「先づいふべきは、名古屋山三春平此の所にて不破伴左衞門を討つて、詮議に遇ふ由、洛中のこれ沙汰。意恨のもとは某故。聞き捨てておかれぬ挨拶。郭の說はどうぞ。」と言へば、「さればいなァ、詳しい事も聞きました。山三樣にする世話は、こなさんへの奉公と、さま〳〵心

れ催す相の山、我に涙を添へよとや。「夕朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし。「通りや。只の時さへ相の山、聞けば哀れで涙が溢れる。悲しうてならぬどうぶくらに、あた聞きともない。通りや〱。」と、いひて涙をおし拭ふ。相の山「野邊より彼方の友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥途の友となる。」「ア、しただるい、手の隙がない。通りや〱。」といへども、心に苦のない新造禿、ばら〱と走り出で、「此方は好きぢや相の山、聞いて泣きたい。所望々々。」と立ちかゝる。「エ、意地の悪い子供ぢやわ。それ程何が泣きたい事。やつて去なそ。」と巾著の、紐を解いて取り出す、錢は一錢二世の緣、切れても切れぬ笠の内、泣き沈みたる顏見れば、戀しゆかしの四郎二郎、互に、「あつ。」とばかり、目くれ心はしみ〲と、抱きつきたうも邊には、禿が目元小ざかしく、堪へるだけと包めども、咽びふくゐび泣きゐたり。「ア、去なせましたらよい物か。まちつと哀れな所を、謠うて聞かせてくださんせ。」「あつ。」と涙にするさゝら、鼓弓の弦も細き聲、相の山「定めなき世に捨てられて、身の寂滅が知らせたく、文は書けども便りなし。寐覺の友とては、夢に見た夜の面影か、これが寐覺の友となる。」をりしも二階奥座敷、「來いよ〱。」と手をたゝく。「あい〱。」と禿ども、立つ間遲しと走りより、「これかうしたこともあらうかと、憂き命をも捨てなんだ。よう顏見せてくだんせ。」と、縋れば男も抱き締め、涙の外は聲もなし。「なう戀しいのゆかしいのとは、大抵戀路の習ひぞ

送りて、「おいとしや〳〵、傳三様、どうぞ首尾してくださんせ。まきぞへが入るならば、私が襦子の帶も有り、八丈の袷もござんす。」と、歎けばともに泣聲の、「オ、奇特によう言やつた。おれも男ぢや氣遣ひすな。嚊を總嫁に賣つてなりとも、埒を明けぬといふ事は、ない。」て出づるぞ頼もしき。みやが憂き身の憂き思ひ、口でいはねば氣につかへ、目に流るゝは百分一、胸に涙のとゞこほり、山三様に骨折るも、男の心の悲しみを、思ひやり手となつたるものの、ぞんざいで成られうか。戀がかうじて遠山が、此の樣になつたとは、知らぬか聞かぬか、男めが何所に居るやら死んだやら、梨も礫もうつとりと、煙草飲んでも煙管より、喉が通らぬ薄煙、人の見ぬ間に思ふ程、泣くを所在か味氣なや。内を首尾して葛城は、走つて來るより驅け上り、「みや殿爰にか、いかい世話であつたげな。忝いぞや、土になつても忘れはしませぬ。おれが心を察してたも、ほんに〳〵物日なかに痩せたわいな。こなたは今は何の苦もなうて樂であろ、遣手の身は羨ましい。山様は奥にかの　ちよつと逢うて來うぞや、後に〳〵。」と言ひ捨てて、行くを見るにもなほ涙、「つらいぞ憂いぞといふ中にも、男を傍へ引きつけては、憂きを凌ぐも力が有る。此の身には苦も有るまいとや。明暮つきあふ人目にさへ、樂な樣に見えるもの、遠國隔てた男氣に、思ひやりのないことは、無理ともいはれず。さりとては、せめて有所が聞きたい。」と、聲をたてねばないじやくり、氣も沈み入る時しもあれ、心細げな鼓弓の聲。哀

エ、主持たぬ身の無念さよ。」と、齒切をしてぞ涙ぐむ。みやは聞く程我が男の、身に逼りくる悲しさの、「何卒よい分別して、進ぜて下され頼みます。」と、身に引つかけて歎く體。亭主しばらく思案し、「これ〳〵よい仕やう有り。爰へよりや」と小聲になり、「これをついでに、葛城樣をとんと請出し、奥樣に定める時に、親方と肌を合はせ、手形の日づけをとつと跡の月にして、外樣へは借宅見たての其の間、郭に少し逗留分、すれば御夫婦といふものよ。昨日まで伴左衞門が口說いた狀文、握つてからは密夫の證據慥かなり。女敵討は天下のお許し、千人切つても切り德。此の分別はどう有らう。」みやは悦び、「ア、できました〳〵。目出度い〳〵、智慧者め。」とあふぎ立つれば、「イヤ〳〵むしやうに目出度がるまい。當分請出すお銀がないが、もしお腰の物を、それまでの質物に遣はされば、私が加判で太夫樣をたつた今、門を出して見せませう。さりながらお侍にお腰の物とは、なうおみや、どうも申しかねるわいの。」「ハテおのしの身ばかりか、不便になさるゝ四郎二郎まで、命を助かることなれば、御料簡あそばしませ。」と、手を合はせるやら歎くやら、山三も共に涙をうかめ、「オ、〳〵何が扨何が扨、皆の衆に苦勞をさせ、何しに否と言はうぞ。近頃過分千萬、コレこれは重代の左文字、二千五百貫の折紙有り。惜ししとは思はねども、七歳の時より今日まで、竟に脇差一本で、他所へ出たことと知らぬ身が、刀の冥加に盡きたか。」と、涙は雨や鮫鞘の、脇差ばかりで奥に入る、後姿を見

三味線の、天柱に貌を筋かひ身、絲の音色も目の色も、人を斬つたる體はなく、亭主は結句色違へ、「先づお話はいらぬ物。内外の者ども必ず仇口聞くまいぞ。」と、わな〳〵慄ひ手酌にて、滅多に飲んでぞ居たりける。みやも聞くより驚きて、さては我が二世までと、思ひ込うだる四郎二郎樣に、かくまで深き恩を見せ、お命をも捨てんとは、ア、賴もしや忝や。我こそと名乘つて一禮いはうか。いやいや姫君とやらに聞えては、御祝言の邪魔ぞと、追ひざけらるゝは知れたこと。只餘所ながら彼のお方の爲に成り、お命を助けるこそ、我が夫への奉公と思ひ定めて、「これ傳三樣、お侍の覺悟の上を、女子の料簡推參なことながら、あのさんに腹切らせ、恩を受けた四郎二郎とやら、何國の浦で聞かれても、よもや生きてはゐられまい。人の由緣は知れぬ物、どれからどれへどうつつて、誰が悲しみとならうやら。山三樣のお身の難、脱るゝ工面は有るまいか。思案は今でござるぞや。」と、よそを言ふのも夫のこと、案じて餘る涙の色、胸撫でおろすも道理なり。「オ、わが身がいふ通り、おつ取つて郭の迷惑。お仕置には法が有る、腹切りたいとおつしやつても、ようあたゝかに、見苦しい罪に粟田口、下からどうもはかられぬ。」と言へば、山三はつとして、「ア、よい所へ氣が付いた。三味線所でないわいの。相手は主持こちは浪人、あばれものにしなされ、木兎の止つた樣に、獄門などに曝されては、先祖一家の恥辱。今さつぱりと腹切つても、其の段からは死骸まで、いよ〳〵恥が重うなる。

る、額に千石、兩の手に二千石、主人の外一生に、此の式作法はえや一人。これが禮ぞ。」と手をつけば、「アヽ勿體ない、何のお禮が入りませう。ちよつと葛樣に逢はせて、去なせましたい物ぢやが、私が行けば目に立つ。和國樣一筆進ぜて下さんせ。」「いや文もいかゞぢや。私ら直に誘うて、遊びに出るかほで、連れまして來ませう。サア皆ござんせ。」と、座敷をこそは立ちにけり。然らば爰は人も來る、二階へお通りなされ。」といへば、「ヤレ何が怖うて隱れうぞ。伴左衞門を斬つたるは誰とか思ふ。此の山三が手にかけ打つて捨てたるぞ。葛城が意趣は僅かの事。彼めと傍輩たりし時、狩野四郎二郎を身が取持にて、奉公に出せし所に、伴左衞門親子、雲谷といふ繪師を引き、御在京のお供の留守に無實をいひかけ刃傷に及び、四郎二郎はゆき方しれず、剩へ外戚腹の姫君銀杏の前、四郎二郎に心をかけ、御祝言有る筈を、妨げ入れて狼藉し、某までも讒奏し、浪人の身となつたれば、重ね〳〵の意恨あり。殊に四郎二郎は隱れもなき名筆、大内繪所の宮にも進む身を、某強ひて國に留め、難儀をかけて見て居られず。姫君と夫婦になし、四郎二郎さへ出世すれば本望々々。生けて置かば四郎二郎は、如何なる仇をかなすべきと、傾城の意趣を幸ひに、討つて捨てたる伴左衞門、知れて切腹する許り。四郎二郎故に捨てる命、聊か惜しいと思ふにこそ。武家に生まれた不祥には、大門口で立腹切り、新造衆や禿どもに、芝居でするやうなことして見せう。ヤア葛城はどうぢやの。亭主謠へ。」と

こりや遣手め、重ねての詮議には、水をくれる用心せよ。」と、おどして立てどもおぢもせず、「エおかんせ。銀くれる遣手に水くれるとは惡がうな。」と、笑ひをしほに言ひしらけ、先を拂ひて立ち歸る。權威を見せて突き鳴らす、ちぎり木の音三味線に、引きかはりたる三筋町、戀の市場と三重なまめかし。名古屋山三春平は、通ひ馴れにし六條の、道には石が幾個有るまで、よみ覺えたる一貫町の、茶屋が葭簀のよしやよし。里に擲つ命ぞと、大門口の與右衞門も、門番には二代の後胤、平の供して口輕く、舞鶴屋にぞ入りにける。亭主傳三を始めとし、數多の女郎遣手まで、「これは〱樣子はお聞きなされうが、先づ四五日も御出でなされぬがよい筈。日頃意趣ある伴左衞門、斬手は名古屋山三ぢやと、何處ともなしの取沙汰、葛城樣のお案じ、我ら夫婦の氣遣ひを、此のおみやが辯舌で、今日はすらりとやりましたが、伴左衞門が死骸を、奈良漬にして後日の詮議。殊にお客の名所書き記せとの言ひつけなれば、お身に覺えがなうてから、詮議まんぎも喧しし。お前を外樣へつくばはせては、此の傳三が立ちませぬ。帳面に留めぬ間に、まづお歸り。」と言ひければ、「いや傳三さうでない。お手前こそ懇なれ、郭中の女郎衆へ苦勞をかけた此の山三が、穿鑿にあふが悲しいと、屈んでゐるほどならば、里通ひも妓交りも、あたまからせぬがよし。まづ和國樣から御禮申す。大事の遣手をお貸しなされ忝い。さてみやの働き心ざし、詞の禮はいふ程古い。三千石取つた山三が、手をついて頭を下げ

上からは、名古屋山三が妨げ言うても叶はぬ筈。然るに違亂に及ぶとは、汝等がもがりと覺えたり。斬手も知らいで叶はぬ筈、眞直に申せ。」と詞あらく問ひかくる。少しも臆せず會釋して、「御意の通り賣物とは申しながら、神佛の奉加と同じことで、銀出しながら拜まするは、恐らく世界に傾城ばつかり。買うてくれるが嬉しいとて、親掛りやお主持の、戀路の闇の一寸先、見えぬ所を傍から見て、買人のお身も廢らず、女郎ものぼさぬ樣に、舵を取るが引舟、目の鞘はづすが遣手の役、大事にかける證據には、世間に心中十あれば、郭に一つ有るかなし。伴左樣は御大身、お銀に不足も有るまいが、御主人のお耳に立ち、お身のがいとも成る時は、御一門の評議にのり、人をはぐの欺すのと、おつる所は郭の難。愛の意氣をたてるが色里のたしなみ、身請の談合破れたも、伴左樣のお身の上、大事に思ふ上の事でござんす。道で切られさんしたは、そこまでは存じませず。さだめし死にとも有るまいし、尤も逃げても見さんしよし、そこに如才も有るまいが、先の相手が強かつたか、身の取廻しの惡さにか、知らんでやんす。」と答へける。檢使の人々もてあつかひ、「能いわ〳〵もう默れ、一時に詮議成り難し。死骸を酒に浸し置き、後日の評定たるべし。それ〳〵。」とて役人衆、「桶しつらひ死骸を納め、酒汲み入れて繩がらみ、牢屋へやれ。」と舁き上げたり。役人重ねて、「これ〳〵年寄々々、商賣なれば傾城には構ひなし。さりながら夜前よりの買手ども、事濟むまで名所を、一々に書き留めよ。

「これ〳〵おみや。檢使の衆が葛城が遣手を召さるれども、玉は愚鈍で臆病なり、何をお問ひなされうやら、いひ教へて濟まぬこと。郭中の賴みぢや。葛城が遣手になつて出て、請返答をしてたも、恩に受けう。」と言ひければ、「あの死骸の傍へ出ることか、ァ、ゐづ。さりながら、いやと言ふも仔細らし。いひ損うたら大事か。口にまかせて遣つてくれよ。てんぽのかは。」とぞ出でにける。役人ちぎり木橫へ、「おのれは葛城が遣手めか。用有つて召し出すに何として遲なはる。橫著者氣隨者。」とかさをかけて叱らるゝ。「ァ、彼のさんわいの、頭から叱らんす。なんの氣隨でごあんしよ。十二人の太夫樣を一人して廻せば、辨慶遣手が忙がしさ、口說のなかを押隔て、打物業にて叶ふまじと、日に幾度の詫言やら、よるの身持は揚屋の吸物同然、ちよつちよと座敷へ出る度に、一杯づゝも飲む酒に、ふらふら眠りのいき倒れ、朝から晩まで緋の袴、花色繻子の巾著も、中は秋の夜の、長紐提げた鑰の穴から天を覗けば、ほの〴〵明け、妓樣達の身仕廻ひ、風呂の手洗水の髮洗ひの、鍋よ杓子よ臼よ杵よ。正月しまへば節句朔日、今日は二日の拂ひ日なり。灸もすゑたし、※卯腹辰股脊中に腹、商賣には換へられず、皮切こらへて出る心、其の樣に言はんすな。郭は諸國の立合なれば、常住切つてのはつてのと、是れ程の喧嘩は、お茶の子〳〵茶の子ぞや、ァ、仰山な。」とわらひける。役人怒つて、「いやさおのれが身の上は問はず。此の伴左衞門千二百兩にて、葛城を請出すとな。傾城は賣物、直段極まる

京童の物見だけく、手負見がてら傾城見に、羣集は押しも分けられず。「すはや檢使。」と人を拂ひ、管領の役人供人引具し、死骸を解いて疵改め、「江州高島の執權、不破の伴左衛門に極まつたり。扨此の者の買うたる傾城は何といふ。意趣有る者の覺えはなきか。口論抔はなかりしか、眞直に申せ。當分隱して、後日に知れなば、曲事なり。」とぞ仰せける。年寄罷り出で、「上林の葛城と申す太夫を、千二百兩にて請出さるゝはずの所、名古屋山三と申す浪人衆と葛城と、行末深い約束とて、談合成りかね申せし故、兩方意趣を含み居られしが、これならで覺え候はず。」と、詳かにぞ言ひわくる。雜色一々口書し、「名古屋山三は浪人なれども、元は伴左と傍輩、かた〴〵大事の詮議なり。まづ葛城が遣手を呼べ。」「遣手出ませ。」と呼ぶ聲に、玉は臆病年寄なり。「やら恐ろしや、私が出て何と云はう、縛られたら如何せうぞ。なう悲しや日がまうた、氣付は無いか。」と泣き居たる。これでは埒が明くまい。どれぞ氣轉な遣手衆を、賴んで見ん。」と言ふうちに、「出ませ〱。」と賴りの使。「エ思ひついたつ一文字屋の和國についてゐる、みやといふ遣手は、越前の敦賀で、遠山と呼ばれた全盛の太夫、戀故今はあの體、すゝどけなうて智慧まん〱、閻魔の廳でもいひぬける、此のみやを賴まう。あれ〱彼處へ、大福帳かたげて來るは、みやぢやないか。」といふ所へ、おしよぼからげの忙がしげに、「皆さんこれにござります。まあ〱けうとい事が出來まして、御苦勞でござんす。」と、言ひ捨て通るを、

山の時鳥、まだ初聲の口は吃り、心は鐵石金頤に、勝つた優れた、越えた峠は日の岡の、石原草原足もしどろに、吃り廻つて上りけり。

中之卷

里は都の未申、通ひても通ひたらぬぞ三筋町、西洞院中道寺、衣紋が馬場の一方口。まだ大門の遲櫻、忍びて開け一番門、とんと打つたる太鼓の番太、「ヤレ何者やら、大門口に切られてゐる。」と呼ばはる聲に、亡八、揚屋、茶屋、駕舁、郭の年寄立ち合ひ、見れば年頃三十ばかり、屈竟の侍、二つ重の白無垢白茶宇に、縫紋紅裏に、源氏雲の裾ぐゝみ、南蠻ごろの大小、對の金鐔、毛彫は波に山王祭、七所御物蒔繪の印籠、※天川珊瑚珠は然もなくて、大疵五ヶ所肝先にとゞめありと、委細に書きつけ、管領所へ訴へさせ、死骸を圍ふ横梯子、二階から女郎買手、遣手のかめは首のばし、松は寐ほれた顔出し、まだ起き〳〵の禿ども、常彌幾野と、手を引舟も走つてきて、塀にくらかけ木に取りつき、「薫樣あれ見さんせ。吉野樣の大膽な。掃溜山へ上つて、海老の皮で足突かんすな。」「突いたら大事か、切られて死ぬる人さへ有る。」と、あだ口々の喧しさ。「あの切られてゐる人は、葛城樣の大盡、不破の伴樣に似たぢやないか。」「ほんにさうぢや伴樣に極まつた。」「サァ伴左衞門が切られた。」と、

さじものと、續いて掛る、團八が弟犬上三八、二八ばかりの小人、枕返しの曲枕、押取り／＼、はらり／＼はら／＼／＼、うつ波枕かず枕、枕重に打ちみだれ、散り／＼にこそ引いたりけれ。伴左衛門怒りをなし、「手にも足らぬ雑人ばら、しや何事か有るべき。武士の刀のあんばい見よ。」と、眞一文字にかけたりけり。「あら凄まじや、こはいかに。」姿は沙門、頭は鬼神、鬼の念佛噛み砕く、牙を鳴らし角をふり、向ふ者の眞甲、撞木を持つて叩き鉦、くわん／＼／＼、耳にこたへ骨に染み、進みかねては引足も、隼、荒鷹、鷲、熊鷹、一度にさつと飛び來り、むらがる勢を八方へ、追つ立て蹴立て、つきたて、翼の嵐夜明の風、鷲の聲々 三重 逢坂の、木綿著鳥にしら／＼と、白み渡れば白紙に、有りし形は彩色の、繪に寫りたる筆の精、天骨の妙ともいひつべし。又平勇んで女房の袖を引き、物は言ひたし、心進んで舌まはらず、只、「ウ、／＼。」とばかりなり。「エ、爰な人。敵が詰めかけ事急な。廻らぬ舌を言はれぬ事、舞で／＼。」と言ひければ、「オ、それよ／＼氣がついた。今目前の不思議を見よ。我らが手柄で更になし。土佐の名字をついだる故、師匠の恩の有り難さよ。敵の中へ驅け入つて、命限りに追ひ散らさん。」と、大勢に割つて入り、西から東、北から南、蜘手かくなは十文字、割りたて追ん廻し、さん／＼に切り立てられ、さしもの軍兵堪りかね、八方へ迯け散つて、殘る者こそなかりけれ。「さあしてやつた。此の上は、爰には片時も叶ふまじ。都の方へ。」と姫君を、逢坂

うなういやや。」と身顫ひし、舌を捲いてぞ恐れける。「何を吐す狼狽へ者。人三人とも住まぬ荒屋、何者か有るべきぞ。察する所店に張つたる三文繪を生物と見違へしか。怖いと思ふ心から、眼が眩んだ腰拔ども、それ〳〵蔀をこじ放せ。ぬるい〳〵。」と下知すれば、鳶口引懸け、「えいや〳〵。」と、なんなく店をこじ放し、内を見れば不思議やな、言ひしに違ひも荒奴の、影ともわかず幻とも、まだほのぐらき曉の、鳥毛の槍先揃へしは、土佐が魂寫し繪の、精靈なりとも知らばこそ、我も〳〵と驅け向ひ、打てども突けども手に取られぬ。露の命を君にくれべいと、そめしだいなし嫌ひなし、相手えらばず防ぎたり。雲谷が弟子長谷部の等巖、「數にも足らぬ糟奴、我に任せ。」と捲りかゝれば、片肌ぬいだる立髪男、大杯をひらり〳〵と閃かし、眉間にふつたる唐芥子、「オ、辛、オ、から。」唐錦、あやめも別かず引返す。師匠の雲谷たまりかね、「片端より打ちみしやぎ、手なみを見せん。」と飛んでかゝる。やさしや優者の、女わざには奇特頭巾、藤の竹刀をおつとりのべ、引ん纏うてはたと打ち、しとと打つをひらりと外し、受けつ解いつ、麻衣の玉襷、甲斐々々しき若き法師の現はれ出で、勇みかゝれる有樣は、なみや鯰の瓢簞々々、持つて開いて鉢叩き、叩けばすべり、打てばすべり、ぬらりぬらりと手に堪らず、倦みはててぞ支へたる。不破が郎等犬上團八、「そこ退き給へ人々。」と打つて出づるや現の闇の、座頭一人とぼ〳〵と、とほつく杖をふり上げ〳〵、盲目打に打つてんげり。餘

野の弟子雅樂介に賴まれ、お迎へに參る折柄なり。必ず包ませ給ふな。」と、囁けば嬉しげに、「オ、自らこそ銀杏の前。道犬、雲谷が追手すき間なし、よい樣に賴むぞや。」と宣へば、又平土邊に額をすり付け、悅びの色勇みの色、氣を急けば尙物言はれず、心を仕形の腕まくり、力み反打ち居合の眞似、拔打、撫切、拜打、組合、捻首、手にとつて、握り拳の武士氣を顯はし、埴生にかくまへ參らする。夫婦が所存ぞ賴もしき。程なく八丁走井の問屋、組頭、組町引具し、おこしかへつて聲々に、「六角殿の姬君朱印を盜み出で給ひ、御家老より御穿鑿、裏屋小路もあらためよ。別して繪書は家搜し有る。人は勿論犬猫も內を出すな。」と、裏口門口ばた／＼と、さしもの又平取りこめられ、狩場の鹿の如くなり。不破伴左衞門長谷部雲谷、著込の兵百騎ばかり、むら立ちきたつて家々に、押入り／＼搜しける。又平一期の浮沈ぞと、女房諸とも姬君を押しかこひ、鄰をがばと蹴破つて、ぐつと拔けたる壁厚き、氷の樣なるだんびら物、「さし出す首は片端から、キ、／＼／＼切り竝べん。」と、壁に添うてつつ立つたり。雲谷聲をかけ、「ヤア／＼これぞ音に聞く、土佐が弟子吃の又平めが住家なり。敲き毀つて搜して見よ。」「承る。」と一番手、「捕つた／＼。」と、どつと寄せしが、しどろになつて引き返し、「なう怖やすさまじや。何かは知らず家內には、人大勢みち／＼て、或は奴の形も有り、又若衆女も有り。人間ばかりか猿、野猪、鷲、熊鷹、爪を研ぎたて眼を怒らし、寄りつかることでなし。な

に一節目出度う舞うて立て。」「あつ。」と答へて立ち上り、古き舞を身の上に、なぞらへてこそ舞うたりけれ。「さる程に鎌倉殿、義經の討手を向くべしと、武勇の達者を選ばれし。それは土佐坊、これは又土佐の又平光起が、師匠の御恩を報ぜんと、身にも應ぜぬ重荷をば、大津の町や追分の、繪に塗る胡粉は安けれど、名は千金の繪師の家、今墨色を揚げにけり。」斯くて女房勇みをつけ、「又もや御意の變るべき。はや御立ち。」と勸める。「オ、いしくも申されたり。身こそ墨繪の山水男、紙表具の體なりとも、朽ちて朽ちせぬ金砂子、極彩色に劣らじ。」と、勇み進みし威勢は、ゆゝし頼もし我ながら、天晴繪筆の殊勝さよ。「唐繪の樊噲張良を、たてについたと思しめせ。お暇申してさらば。」とて、うち立ち出づる勢ひは、實に諸人の繪本ぞと、オ、〱〱〱譽めぬ者こそ三重なかりけれ。逢坂の關、曙近き火ようじの、聲高島の屋形には、六角殿の姫君、行き方見えさせ給はぬとて、旅人の改め問屋の詮議、土を返さぬ許りなり。又平は今朝七つ立ち、門出祝ふ中椀に、例の熱燗三杯引掛け打立つ所に、やごとなき上﨟の、跣足の土に身も崩折れ、伏見の方よりうろ〱と、「これそこな者、京の道を教へてくれ。草鞋とやらいふ物をはかせてくれ。」と、詞つきの横柄さ。又平慍と貌に、立ちはだかつて返事もせず。女房走り出で、「大抵のお方でない。威の備はつた見所有り。」とお側に參り、「恐れながらお屋形の姫君樣と見參らす。我々は土佐の將監が弟子、吃の又平と申す繪書の夫婦。狩

や。」ともぎ放せば、女房を取つて投げ、はたと蹴て、「おのれまでが氣違とは、エヽ女房さへ侮るか。不具は何の因果ぞや。」と、どうど座を組み疊をうつて歎きける、心ぞ思ひやられたる。將監重ねて、「汝能く合點せよ。繪の道の功によつて、土佐の名字をついでこそ、手柄とも言ふべけれ。武道の功に繪書の名字、讓るべき仔細なし。成らぬ〳〵。」と言ひ切り給へば、女房居直り、「サア又平殿覺悟さつしやれ。今生の望みは切れたぞや。此の手水鉢を石塔と定め、こなたの繪像を書きとゞめ、此の場で自害し、其の跡の諡り號を待つばかり。」と、硯引きよせ墨すれば、又平頷き筆を染め、石面に差向ひ、「これ生涯の名殘の繪。姿は苔に朽つるとも、名は石痕に留まれ。」と、我が姿を我が筆の、念力や徹しけん、厚さ尺餘の御影石、裏へ透つて筆の勢、墨も消えず兩方より、一度に書きたる如くなり。將監大きに驚き給ひ、「異國の王羲之趙子昂が、石に入り木に入るも、和畫において例なし。師に優つたる畫工ぞや。浮世又平を引きかへ、土佐の又平光起と名乘るべし。此の勢ひにのつて、姫君御朱印諸共に、取り返せ。」と有りければ、「はつ。」とばかりに又平は、「忝し。」とも口吃り、禮より外は涙にくれ、躍り上り飛びあがり、嬉し泣きこそ道理なれ。將監夫婦悅び、「心剛にて志厚けれども、敵に向つて問答せんこと、いかゞ有らん。」と宣へば、女房聞きもあへず、「常々大頭の舞を好き、妾諸共つれわきにて舞はれ候。節の有ることは少しも吃り申されず。」といふ。「やれ夫れこそは屈竟よ。試み

ウゥ、うば奪ひ取つて歸りましよ。」將監きつと見、「ヤ面倒な吃りめが思案なかばに邪魔いるゝ。そこ立つてうせぬか。」と、叱られてもおぢるにこそ。「イヤ膝とも談合と申す。口こそ不自由なれ。心も腕も天下に怖い者がない。胸に覺えがござります。拙者が分別出し、叶はぬ時はえん正すけさだ、あつちへ遣るか此方へ取るか、首がけの博奕、命の相場が一分五厘。浮世又平と名乘つては、親もない子もない。倅のときから舊功なし、命にかへ申し上ぐるも、師匠の名字を繼ぎたいばつかり。拙者めを遣はされて下されませ。申し、さりとては御承引ないか。吃りでなくば斯うは有るまい。さりとはつれないお師匠ぢや。」と、聲をあげてぞ泣き居たる。將監なほも聞き入れなく、「不具の癖の述懐涙不吉千萬、相手に成つては果てしなし。これ／＼修理之介、御邊向つて思案を廻らし、奪ひ返し來られよ。」「畏まつた。」と言ふより早く、刀ぼつこみ立ち出づる。又平むんずと抱き留めて、「マ、まん／＼待つてくれ。師匠こそつれなくとも弟子兄弟の情ぢや。此の又平を遣つてくれ。拜む／＼。」「いやこりや又平、某彌猛に思うても、師の命は力なし。爰を放せ。」とかけ出づる。「イ、／＼いやハ、ハ、／＼放しやせぬぞ。」「放さねば拔いて突くが。」「ツ、つけコ、／＼／＼殺せ。ハ、／＼／＼放しやせぬぞ。」修理之介もて扱ひ、「放せ／＼。」と捻ぢ合うたり。將監夫婦聲を懸け、「放せ／＼。」と留むれども、耳にも更に聞き入れず。女房取りつき、「あれお師匠さまの御意がある。おとましの氣違

を吃りに産みつけた、親御を恨みさつしやれ。」と、頼みなく／＼又平も、我が喉吭を掻きむしり、口に手を入れ、舌をつめつて泣きけるは、理見えて不便なり。時に藪の内よりも、「將監殿光信殿。」と呼ばはつて、痛手負うたる若者、縁先によろぼひ立ち、「狩野の弟子雅樂介、御見忘れ候か。」「實にも實にも雅樂介、まづ此方へ。」と座敷に入れ、「承れば四郎二郎殿、雲谷不破が惡逆にて、難に逢ひ給ふ段々、具に聞きつけし。」とありければ、「さん候。某も供仕り雲谷と戰ひ、斯樣に深手を負ひ候。頼み切つたる名古屋山三殿は在京なり。元信危く候ひしが、漸う遁れ落ち失せたると承る。こゝに難儀の候は、姫君銀杏の前元信を憐み、七百町の御朱印を持ちて落ちたまひしを、敵奪うて下の醍醐に隠れし由、二度姫君屋形へ移し、御朱印奪ひ返さでは、永く繪師の瑕瑾なり。某手負の身は叶はず。御加勢頼み申さん爲、忍び參り候。」と、語りもあへぬに、將監、「皆聞くまでに及ばず。狩野と土佐は一家同然、力に成つて參らせん。されども彼奴らと太刀打は、いつかな／＼叶ふまじ。姫君にも負傷あらん。どうぞ辯舌のよき人に、御屋形の御意といはせ、誑つて取りかへす分別がござらう。何れも言うてお見やれ。」と、額に小皺頰杖つき、各小首を傾くる。又平何ぞ言ひたげに、妻の袖引き脊中つき、指差しすれども合點せず。しんきをわかし、女房を引きのけつつと出で、師匠の前に雙手をつき、唾を飲みこんで頭をふり、「此の討手には拙者が參り、姫君もゴウ御朱印も、ウ・ウ

來ませう。ア、おはもじや。」と笑ひける。北の方聞き給ひ、「オ、ようこそ祝うてたもつた。今宵は奇妙なこと有つて、修理は名字を免され、土佐の光澄と名乘るぞよ。其方もあやかり給へ。」とあれば、又平時節と女房を、先へ押出し脊をつき、我が身も手をつき頭をさげ、訴訟有りげに見えければ、女房心得進み出で、「實に道すがら百姓衆の話を聞き、身は貧なり不具なり。弟弟子に土佐を名乘らせ、兄弟子はうか〱と、いつまで浮世又平で、藤の花擔げたお山繪や、鯰おさへた瓢簞の、ぶらぶら生きても甲斐なしと、身を揉んでの無念がり、尤もとも憐れとも、連れ添ふ我等の心の中、申すも涙がこぼれまする。奧樣までは申せしが、お直の願ひは此の時節、今生の思出、死しての跡の石塔にも、俗名土佐の又平と、御一言のお許しは、師匠のお慈悲。」とばかりにて、涙に咽び入りければ、又平も手を合はせ、將監を三拜し、疊にくひつき泣きゐたり。將監元より氣短く、「ヤア又しても〱、叶はぬ事を吃りめが。こりや此の將監は、禁中の繪所小栗と筆の爭ひにて、敕勘の身と成つたるぞ。今でも小栗に從へば、富貴の身と榮ゆれども、一人の娘に君傾城の勤めをさせ、子を賣つてくふほどの、貧苦を凌ぐは何ぞ。土佐の名字を惜しむにあらずや。修理は只今大功あり。己に何の功がある。琴棊書畫は晴の藝、貴人高位の御座近く參るは繪書。物も得言はぬ吃りめが推參千萬。似合うた樣に大津繪書いて世をわたれ。茶でも呑んで立ち歸れ。」と、愛想なくも叱られて、女房は力を落し、「此方

な繪書殿に、よいお山を十人程書いて貰ひ、金儲けがしたい。」と言へば、一人が聞いて、「オ、〳〵冬年お目に懸つたら、借錢乞の帳面を爰から消して貰はう物。お暇申す。」と打笑ひ、在所々々へ歸りけり。爰に土佐の末弟、浮世又平重起といふ繪書あり。生れついて口吃り、言舌明らかならざる上、家貧しくて身代は、薄き紙子の火打箱、朝夕の煙さへ、一度を二度に追分や、大津のはづれに店借して、妻は繪具、夫は畫く。筆の軸さへ細元手、上り下りの旅人の、童賺しの土產物、三錢五錢の商ひに、命も錢も繋ぎしが、日影の師匠を重んじて、半道餘りを夫婦づれ、夜な〳〵見まふぞ殊勝なる。夫はなまなか目禮ばかり、女房傍から通事して、「まだこれはお寢りませぬ。實にめつきりと暖かに、日も永うなりまして、世間は花見の遊山のと、ざは〳〵〳〵致しまする。こなたは山陰、御浪人のお徒然をいさめの爲、嫁菜のひたしに、豆腐の煮染、小筒でも持ちまして、關寺か高觀音へお供して春めく人でも見せませうと、夫婦申して居ますれども、心で思うたばつかり、道者時分で店は忙がし洗濯物は支へる、仕事にははかいかず、日がな一日立ちずくみ、何をするやらのらくらと、急げばまはる瀨田鰻、只今膳所からもらひまして、練貫水の大津酒、ゆめ〳〵しうございますれども、此の春からお仕合がなほつて、鰻の穴から出る樣に、御世にお出でなされませ。ほんにつべこべ〳〵と、私が言ふことばつかし。こちの人の吃りと私がしやべりと、入り合はせたらよい頃な、女夫が一組出

の處に逼塞し、將監年は寄つたれども、某は門弟修理之介正澄といふ者、油斷はせぬ。」と、棒ふり廻しいさかふ聲、將監夫婦障子を明け、「聞いた〳〵、天地の間に生ずる物、有るまいとも極め難し。諸共探せ。」と槍熊手、提げ〳〵、えい〳〵聲、たい松ふつて狩り立つる。一叢竹の下陰に、「そりやこそ物よ。」と火を上ぐれば、暴れに暴れたる猛虎の形、人に恐るゝ氣色なく、脊を撓めてぞ休み居る。將監橫手を打つて、「あら不思議やがんひの筆の、竹に虎の筆勢に、少しも紛ふ所なし。これは實の虎にあらず、名筆の繪に魂入つて、顯はれ出でしに極まつたり。然も新筆。今是れ程に書かんず人は狩野祐勢が嫡子、四郎二郎元信ならでは覺えなし。いづれにもせよ、證據には足跡有るまい。」「物は試し。」と百姓ども、若草わけて尋ぬれども、虎の足形あらざれば、「書き手も書き手、目利きもめきき前代未聞の名人や。」と、心なき土民等も、拜む許りに信をなす。修理之介七足退つて師匠を拜し、「ア、有り難や、此の虎を見て、繪の道の悟りを開き候。その印、我が筆さきにて、あの虎を消し失ひ申すべし。名字名乘をさづけ、御許しを受け度く候。」と、懇望あれば將監悅び、「オ、今日より土佐の光澄と名づくべし。」と、印可の筆をあたふれば、修理はいたゞき墨を染め、虎の寸にさし當て、四五間間をおきながら、筆引くかたに從つて、頭、前脚、後脚、胴より尾先に至るまで、次第に消えて失せけるは、神變術ともいひつべし。百姓ども舌をまき、子孫までの話の種。なうあの上手

力者、組み止めんといどみあふ。虎は猛つて爪をとぎ、邊を蹴たてて三重揉み合ひしが、元より不思議の猛獸、道犬が襟髻引咥へ、打ちかたげくるり／＼、くる／＼／＼、くるり／＼と持つて廻り、一振りふつて投げければ、塀を打越し敷石に、面をすつてぞ打ちつけける。虎は勇んで元信の、縛めを噛み切り、脊を差向けてそばえたり。元信頓て心づき、袴の股立しぼり上げ、ひらりとこそは乘つたりけれ。虎は千里の足早く、風に嘯く身も輕く、追ひ來る敵を追ひ散らし驅け散らし、堀も築地も躍り越え、飛び越え跳ね越え驅けり行く。※豐干禪師が四睡の虎、李將軍は虎を組む。繪にかく虎を動かすは、古今一人乘つたも一人、天下一人一筆の、譽は世にぞ三重殘りける。げに獸君の一靈、山野にはびこり草木を踏み折り、田畠を荒す事なゝめならず。近鄕の百姓聲々に、「三井寺の後から藤の尾までは見屆けた。此の山科の藪かげへ逃げ込んだに極まつた。皮に疵をつけずに毆き殺せぶち殺せ。」と、とり／＼喚き評定す。庵の内より棒ついて、小提灯提げたる男、「ヤ、何者ぢや、人の軒際にて打ての殺せのとは胡散なり。」とぞ咎めける。「いやこれは矢橋粟津の百姓どもなるが、此の頃設樂山から虎が出て暴れる故、鄰鄕がいひ合はせ、此の藪へ追ひ込んだ。探させて下され。」と口々に呼ばはれば、侍あざ笑ひ「やい、虎といふ獸が日本に出た例なし。途方もないこと。扨は汝等は夜盜押入の手引ならんが、此の庵を誰とか思ふ。土佐の將監光信といふ繪師、仔細あつて先年敕勘を蒙り、此

るを、女中手々に枕槍、長刀にて引つゝみ、圍ひ防げば餘さじと、奥を差してぞ追つつめける。腰掛に控へし雅樂介、斯くと聞くよりたまられず、かけ向つても奥方の、勝手は知らず中口の、明けずの門碎けてのけと扉をたゝき、狩野四郎二郎元信が弟子、雅樂介之信と云ふ草履取、「主といひ師匠なり、死ぬる道なら共に死なん。高が繪書の丁稚づれ、怖いことも有るまい。相手の首取る分のこと。開けよ明けよ。」と、貫木も折るゝばかりに踏みたゝき、鳥居立にぞ跨つたる。元信内より、「雅樂介か滿足した。身に過りなき上に、慮外をして、姫君の御身のあやまち氣遣はし、歸れ／＼。」と呼ばはれば、「ア、慮外といふもことによる。明けずば踏んで踏み破る。」と、わめき散らせば雲谷不破、「雅樂介を打殺せ。」と、引返して門の貫木、はづす所をつけ入つて、雲谷が小額ずつぱと切り下げたり。「あいつたゝ。」と躍りあがり、二人抜きつれ打ちかくる。あなたへ追詰め此方に支へ、城下をさして三重切り出づる。四郎二郎地蹈鞴踏んで、「エ、佞人ども。むざ／＼とは死ぬまいぞ。親よりつたへし一心の繪筆はこゝぞ。」と觀念し、右の肩に齒を立てて、ふつつ／＼と喰ひやぶり、口に我が身の血を含み、襖戸に吹きかけ／＼、口にて虎をぞ書いたりける。電目雷威の眼の光、怒り毛怒り斑怒り爪、千里も驅けん勢ひなり。道犬は姫君の、行きがたたづね廻りしが、「まづ繪書めから仕まはん。」と、太刀を抜かんとせし所に、俄に吹き來る風騒ぎ、繪にかく虎は形を現じ、牙をならして吼えかゝる。道犬も強

厚化粧、三平二滿の口紅、しなだれ懸る會釋顏、「これがなんの藤袴、※しやちらごはい皮袴。」と、どつと笑ひのどやくや紛れ、盡きせぬ妹脊と成り給ふ。かかる所へ不破伴左衞門宗末、雲谷を伴ひ、遠慮もなく上座にずつかと直り、「これ四郎二郎、汝如何なる野心にか、お屋形を調伏し、亡ぼさんとの存念あり。きつと詮議を遂ぐべき旨、父道犬が下知、申譯仕るか、直に繩をかけうか。」と、はや繩たぐつて見せかけけり。四郎二郎ちつとも騷がず、「せめてかたちの有ることには、申譯もあるべし。御屋形調伏とは、此方の言譯より、まづ御咎めの證據承らん。」とぞ答へける。雲谷下座より、「こりやこりや證據は某よ。總じて繪書の祕密にて、繪をかいて調伏すること、人は知らじと思へども、此の雲谷が見つけた。此の懸繪は和主が筆、梅に山鳥雪に雉子。抑當家は高島の御屋形と號す。山偏に鳥と書いては、嶋とよむ文字なり。梅の梢に山鳥の高々と止りしは、これ高島にあらずや。雉子にほろゝの聲有つて、雪はふるとの心あり。讀み下せば高島亡ぶる調伏。狩野とは狩の野と書けり。姫君と心を合はせ屋形を亡ぼし、一國をおのれが狩場の野原にせんずる表相、重罪遁れず繩蒐れ。」と、取りつく所をひつぱづし、胸板はたと蹴倒すまに、飛びかゝる伴左衞門が眞甲、刀の柄にてはつしと打ち、直に拔かんとするところを、隱し置きたる取手の者、十手八方鐵鞭を、ぶち立て〳〵捻ぢ伏せて、高手小手にいましめ、黑書院の牀柱に、思ふさまに縛り付け、「姬君の御朱印を、奪ひ取れ。」と羣

せの返事、聞き切り參れとのお使。私も一分立つ樣に、お返事なされ。」と述べにける。元信額を疊に
つけ、「冥加に餘る仕合ながら、度々お返事申す如く、諸傍輩のそねみと申し、慾心に紛るゝ事世間の
あざけり。よし御機嫌に違ひ改易仰せつけらるゝとて、御恨み候まじ。御うけとては成り難し。よ
き樣に御取りなし、賴み入る。」とぞいひ切つたる。「ハヽアにべもなう埒あいた、如何にとしても上つ
方へ、左樣な慮外申されまじ。少し物に品つけて、始めより約束の女房ありと申しなば、お胸の晴る
ることもある。さりながら、其の女房は何者と、ごどをつかるゝ念の爲、今こゝで私と夫婦かための
杯して、とつと前から藤袴と、契約ありと申さば、いかな主でも大名でも、此の道許りは先が先、
此の談合はどう御ざんしよ。」「オヽウ幸ひ望む所。サア杯仕らう。」「いや〳〵〳〵、我とて
も假にはいや、佛神掛けての女夫ぞや。」「誓文々々、綸筆をとらぬ法もあれ、かうぢや〳〵。」と抱き
つく。「近頃嬉しい忝し、これ祝言の杯。」と一つ受けて元信に、「妻の杯戴く作法、儀式は固う。」
と四海波、腰元中が謠ひつれ、奥よりお局島臺に、七百町の御朱印箱、「姫君樣の御祝言、三國一。」と
ぞ祝ひける。四郎二郎合點ゆかず、逃げんとするを抱きとめ、「藤袴とは假名ぞや。自らこそは銀杏の
前、誓文だての杯、いや成らぬ。」と宣へば、「いや我らの名ざしは藤袴、外に妻はこれなし。」と、な
ほ意地張れば腰元衆、「そんなら本の藤袴、早う〳〵。」と呼びいだす。お茶の間のきりかが五十餘りの

の辭儀無用の沙汰。」と、四郎二郎に刀の鐺、打ちあて〳〵袴の裾、踏みたゝくつて睨みつけ、お次の間にぞ出でにける。御留守といひ女中の邊、なほ穩便にことゝもせず、「御好みの掛物、梅に淡雪雉子山鳥、仕つて候。」と、紐を解いて懸けければ、「このよし披露致さんに、サアまづゆるりとお茶進じや。」と、局は奥に、「あい〳〵。」と愛想らしき聲々の、男の側へ寄ることは、常に梨地の煙草盆、落雁、かすてら、羊羹より、菓子盆運ぶ腰元の、饅頭肌ぞ懷かしき。物に臆せぬ男なれども、女中の色に目うつりして、氣を取られたる折ふし、十八九なる脇詰の、後結びも格別に、銚子杯前に置き、しとやかに手をついて、「私はお姫樣のお髮上、藤袴と申す者。しみ〴〵お話致しませいとの御事ぞや。御存じの通り、お妾腹のお姫樣、御臺樣への憚りにて、大名高家のお望みなく、心次第緣次第と田上郡七百町、御朱印握つて殿好み。つれないは其許樣、いつぞやより種々と、お乳の人、お局、口のすい程勸めても、どうでもお請ないとのこと。おいとしや姫君は、あまりの事に戀ひこがれ、私をお寢間へ召し、ヤイ藤袴、せめてのことにそちなりと、四郎二郎と名をつけて、心ゆかしに抱いて寢よ。そちもおれを抱きしめて、姬可愛いと言うてくれと、もがき言がおいとしさ。とんと下紐打解けて、寢る程抱く程締める程、二人の心せく許り、どちらぞ男に成りたいと、言うても泣いても叶はばこそ。なう大名の手業にも、有るべき道具の足らぬのは、ひよんな物とておむつがる。自らにいな

あり。立ち歸るも不覺なり。幸ひ〳〵、奥へ通路の鈴の綱、ふりはへ引けば鈴の音、「おう。」と答ふる女の聲、宮内卿とて中老の局立ち出で、「ヤァ狩野殿か。姫君樣も御待ち兼ね、お直の御用もあるとのお事。サア〳〵此方へ。」とありければ、畏まつて四郎二郎入らんとすれば、伴左衛門聲をかけ、「待て待て〳〵、お家の掟を知らずんば、なぜ物頭には伺はぬ。知つて背くか不屆千萬。上より御許しなき時は、刀物を帶し奥方へ進ること、禁制との御條目。あれ大小挽いで引摺り出せ。當番々々。」と呼ばはれば、宮内卿、「いやこれは私ならず、姫君樣より殿樣へ御伺ひ、即ち京より名古屋山三殿の指圖にて、奥へ召さるゝ四郎二郎、なんのお咎めござらう。」と、いへども更に聞き入れず。「お留守を預る家老の耳へ承らぬ御意なれば、殿の御意でも叶はぬこと。それ伴左衛門挽いで取れ。」「まつかせ。」と立ちあがる。四郎二郎も身がまへして、縋らば切らんず眼ざし、左右なくも寄りつかず、「サア渡せ渡せ。」と、詞でおどすばかりなり。時に奥よりお腰元、つか〳〵と出で、「これ〳〵いづれもお姫樣より御意が有る。四郎二郎には直に御用の事あれども、丸腰でなければ、奥へ通さぬ御法度と有れば、是非に叶はず姫君樣、此の所へ御出でとの仰せなり。四郎二郎は御用人、其の外の男の分、雲谷は言ふに及ばず、御家老殿を始め御前へは叶はぬ。皆お廣間へ立ちませい〳〵。」との權柄さ。道犬親子無念ながらつつと立つて、「サア雲谷、姫君の御前へは、男たる者罷り出でず。男でもない奴原に、侍

きつとお仕置然るべし。」とぞ支へける。道犬うなづき「つつと寄れ雲谷、總じて此の四郎二郎めは、相役名古屋山三が取持にて召し出された。山三は元來お小姓立、前髪の酒林で殿を醉はせし男傾城、口ばしの黄な小雀が、家老並につらなり、威を振ふ其の山三めを甲にきて、のさばり廻る四郎二郎、我々親子が睨めども、事とも思はぬ奇怪さ。其方とても同然たり。また乙の姫君銀杏の前は、御愛子なれども脇腹故、御臺所を憚り給ひ、田上郡七百町の御朱印を付けられ、京都有徳の町人か、由緒有る御家中へも、下されんとの御內意故、某嫁に申し請け、此の伴左衞門に緣組し、七百町をぬしづかんと、當てはめて置いたもの、姫君狩野めに心を通はし、今日密々祝言ありと、奧目付より聞きたれども、御意とあれば詮方なし。御在京の其の間は、山三めも留守なれば、彼奴が方人する者なし。少しにても過りを、隨分見出せ、聞き出せ。慮外をせば打殺せ。御留守の間國中は、某がさばきなり。此の不破といふ鰐が見いれし、あまり程は有らせまい。試して見たい新刀はないか。一の胴か二の胴か、望んで置け。」と言ひければ、雲谷甚だ笑壺に入り、「政道正しき御家老樣、お屋形の心柱。」と追從たら〴〵見ぐるしし。斯くとは知らず四郎二郎、櫻の間に伺候し、「姫君銀杏の前樣より、御掛物を仰せつけられ、持參仕り候。御取次賴み奉る。」と、言へども入道伴左衞門、じろりと見たる許りにて、返答もせず睨め付くる。ヤアしれ者よ。そばには雲谷。いかさま我に手を取らするたくみ

ア沖漕ぐ船の帆のほの見えて、さす腕には壽福の枝、をさむる手には不老の枝、垂れて雪見のひかへの枝、これ〳〵〳〵〳〵、ずつと伸びたるながしの枝、松は非情のものだにも、傳へし心の色は尙、宛ら青々條々として、松の生木のいき〳〵と、若やぎ立てる其の風情、狩野は一點違ひなく、書きつらねたる筆勢、何れを寫繪何れを立枝、紛ひつべうぞ見えにける。元信、「家の幸甚たり、早速歸り本懐遂げ、此の報恩には御身の上、父御の事も請取り申す。萬のお禮は本國より。」と、立ち歸るを、「これ申し、神の告げに任せしからは、恩にはかけず末かけて、情を思召すならば、必ず外に内儀樣持つてばし下んすな。奴殿賴みます。」「何がさて〳〵。天神樣より太夫樣、追付お二人連理の松、中に立つたる此の松は、島臺持ちての取結び、千年萬年萬々年、とぢ付きひつ付き松脂の、離れぬ中にとぞ、三重壽きし。されば江州高島の館、左京大夫賴賢卿、參勤の上洛あり。執權不破入道道犬、同嫡子不破伴左衛門宗末、國を預る留守居なり。御家の繪師長谷部雲谷遽しく、入道親子が前に手を束ね、「近頃過言に候へども、某事は雪舟の嫡傳として代々の御扶持人、此の高島のお館にて、繪筆を取つて誰人か拙者が上につき申さん。然るに此の度、狩野とやらん申す二才、武隈の松を書きしとて、過分の恩賞を下され、古參を踏み付け御前にはびこり、剩へ今日は奥方へ召され、姫君樣よりお料理を下さるゝと承る。殿樣の御留守、誰が許しての推參。御家老の仰せ、一國に違背申す者はなし

これは斯うもあらうと、御料儲ついでに、お交際もあまたなり。願ひのかなふ便りも有らば、御世話頼み奉る。」と、思ひ入つてぞ語らるゝ。女郎はつと顔を眺め、「扨は狩野四郎二郎元信様とは御身の上か、恥をつゝむも時による。何を隠さん私ことは、土佐將監光信が娘なるが、父は一年敕勘うけ、今浪人の憂き渡世、此の身に沈むは申さずとも、推して泣いて下さんせ。扨武隈の松の圖は、土佐の家の祕密の繪本、漏す事は叶はねども、昨夜不思議や天神樣の夢の告げ、狩野と云ふ繪師下るべし。武隈の松を傳授せよ、父が出世の種ならんと、見たはまざ／＼正夢。」と、語りもあへぬに四郎二郎、感心感涙肝にそみ、天を禮し地を拜し、懐中の繪筆繪絹を廣げ、「サア遊ばせ、御傳授頼む。」と悦びける。「いかにも傳へ申さんが、親の許しもなき中に、筆取ることは如何なり。ア、何とせん、實に思ひ付きたり、あの御供の人の立姿を、松の立木になぞらへ、笠を枝葉の笠となし、此處にてまなび見せ申さん、それにて寫し留め給へ。これそこな奴樣、爰へござんせ、雇ひましよ。」「ない／＼。」手ふる頭ふる年ふる松の、松根によつて腰つきも、千年の緑寫せしは作意なりけり。先づ歌人の見立には、一本松を二木とも、三木とつらねし言の葉の、それは老木の松が枝なれど、寫す若木の奴のこのこの、此の膝のふし松の節、前へ地摺の下枝に、ぬつと出せし片足は、盧外千萬千貫枝、筆捨枝や久方の、天津少女のかたくま枝や、腰掛枝の三蓋松、月にさはらぬ枝々の、さゞれ小枝の松かげを、サ

へ現はれ出で給ひ候。ヤア〳〵はやあれへ御出で候。我らはお暇給はり候べし。御逗留の開御川の事は承り候べし。」「たのみ申し候はん。」「心得申して候。高き名の松の門立たちなれて、人待ち顔の暮ならん。町は敦賀の懸作り、まぶこそ潮のみちひなれ。誰をかも知る人にせん此の郭の松となりしも親の爲、賣られ買はれて北國の、土氣の賤の里なれど、米の育ちは上田の、水損なしの太夫職、名を遠山と呼ばれしも、人に登れの戀の坂、おろし歩みの道中は、花の立木の其の儘に、ぬめり出でたるごとくなり。雅樂介、「これ申し見事な者が夫れそこへ。夫れ〳〵。」といへば四郎次郎、「ヤア何と、松が見えたか現はれたか、寫しとめん。」とふつと立ち、女郎にはたと行き當り、「これは扠、松かと思うてはまつた。眞の松を尋ねて見ん。丁稚來い。」と行き違ふ。袖を控へて、「これ申し、此の遠國の我々と、京の郭の松樣達と、比べさんすが不覺の至り。併し不粹なお方には、松と見られて嬉しうなし。杉と言はれて腹立たず。桑の木とも榎とも、こなさあに似合うたあはうの木とも見さんせ。」と、無駄言なしの言ひ捨ては、田舍妓とて笑はれず。「ォ、御機嫌そこねし御尤も。實に〳〵松とは太夫さま、我等は惡う心得て、不調法な御挨拶、眞平〳〵お詫言。これを御緣にお知人になりましたし。下拙ことは狩野四郎二郎元信と申すわづかの繪書、さる御方より武隈の松の圖を仕れとの仰せ。すなはち天滿天神の夢想に任せ、此の所にて名ある松と尋ねしを、太夫さまとの取りちがへ、

る人なし。我これを書き顯はし、譽を得させ給はれと、天滿天神を祈りし所に、武隈の松を見んと思はゞ、越前國氣比の濱邊に行くべしと、あらたに靈夢を蒙れども、それは陸奥爰は越路、何を知邊に尋ぬべき。哀れ里人の來れかし、物問はん。」とぞ呼ばはる。「所の者の御用とは、都人にてありげに候。御尋ねありたきとは、何事にてばし御座候。」「御覧の如く都の者、天神の教へに依つて松を尋ねる仔細あり。此の所にこそ名高き松の候らめ。教へて給はり候へとよ。」「これは思ひも寄らぬ事を承るものかな。此の北國にてお尋ねあらうならば、越前布越前綿、若しは實盛の生國なれば、お供の奴の髭にぬる、油墨などのお尋ねもあるべきに、名高い松とは流石優しい都人。先づ當國の名木は、西行が鹽越の松、※あそふの松牛若が物見の松、金が崎には義貞の腰掛松、山のを山松、庭のを庭松、門には門松、※酒には濱松、肥えたは肥松、捩ぢたは捩松、わり松たい松ぬつほり松、我らが息子に岩松長松と申す嬰子もあり。莊屋の名は松兵衛、若い時には相撲取、赤松ぶちわつた樣に御座ありしが、今老松になられて、力も元より下り松、腰も屈んで、ゐざり松〳〵と所の人は呼び候。ヤア誠に天神の御告げとあるに思ひ當つた。當所敦賀の町に名高き松の御座候。これぞ京にも類なしと、心を懸けぬ人もなき、色よき松の候が、若し左樣の松にては御座なく候か。」「實にや往來も慕ふとは、疑ひもなく我らが尋ぬる名木よ。急いで見せて給はれかし。」「いつも夕暮毎には、此の所

傾城反魂香

上之巻

※素きを後と花の雪、〱、野山や春を畫くらん。聞きに北野の時鳥、初音を啼きし其の昔、清涼殿に立てられし、はね馬の障子の繪、夜毎に出でて萩の戸の、萩を喰ひしも金岡が、筆のすさみの跡絶えず、傳はる家や畫工の譽、狩野四郎次郎元信、丹青の器量古今に長じ、心ばへ好き男振、親の繪筆の彩色に、生まれつきたる美男なり。比は文龜の彌生の空、天滿天神の告げありて、越前國氣比浦へと旅羽織、我は笠著て大小の、柄にも袋きせる筒、丁稚がこしの白山も、去年の綠に歸山、山の頂青々と、雲に映ろふ月代の、湯尾峠の孫じやくし、盛りこぼしたる花重ね、重ね重ねし旅籠屋が、情もあつき燗鍋の、敦賀の濱にぞ著き給ふ。四郎次郎一僕を招き、「ヤイ雅樂介、外の弟子にもかくし、此の所に下りし事餘の儀にあらず。近江國の大名六角左京大夫賴賢殿と申すは、佐々木源氏の旗頭高島の館とて、系圖所領竝びなき大將なるが、將軍家の御意を受け、本朝名木の松の繪本を集めらる。然るに奥州武隈の松と云ふ名木は、往古能因法師さへ、跡なくなりしと詠みたれば、名のみ殘つて知

諸輪違、一文字、十文字、拂ひ落し、かけ落し、百手を千手と手を碎き、數多の敵に驅け向ふ。目覺しかりける三重働きなり。胸板胴骨、眉間眞甲打割られ、弓手馬手へぞ伏しにけり。「時分は好きぞ乘つ取れ。」と、搦手より細川勝秀、城中へ亂れ入り、堀際塀際追つ詰め〳〵、一騎も殘さず討ち留めしが、赤沼親子を見失ひ、此處よ彼處と尋ぬる處に、中川が亡魂は、花の吹雪の雪女、一念の鬼女となつて「あら恨めしや如何に赤沼、たとひ何處に隱るゝとも、助けはやらじ吉野山、花を尋ねて山めぐり、最期の寒風また此處に、冱えかへりたる雪氣の雲の、雪を誘ひて山めぐり、めぐり〳〵て輪廻の恨み、思ひしれや。」と、入道親子を引立て〳〵、「來れ〳〵。」と、大將の御前に引据ゑ、なほ行くすゑは源氏の白旗白雪の、守神ぞとゆふしでの、雪を散らして失せてけり。大將御喜悅淺からず、二人が頭を斬り掛けさせ、凱歌三度三々九度、斯波細川に御杯、藤内五人に五箇國の、御加增御褒美段々に、樂車打つて囃した、囃した繁つた松竹の、世よし人よし物なりよし、仕合よしの今年ぞと、祝ふ春こそめでたけれ。

雪女五枚羽子板 終

あれ、我も〳〵木戸押開き、槍先揃へてさゝへたり。何處よりか來りけん、藤内三郎高手小手に縛められて陣中に跳り出で、「城の大將聞いてたべ。先日古川が館にて、兄の二郎に搦め捕られし、藤内三郎武治なり。情なき兄奴が生けもせず殺しもせず、やりばなしの放飼、近頃無念千萬なり。繩を解いて給はれかし。兄二郎奴が首取つて、此の無念を晴らしたし。如何に〳〵。」と呼ばはれば、城に籠る藤冠者、「まかせて置け。」と飛んで出で、「ヤァ三郎か珍らしや。大事の味方一人、搦めさせては口惜ししサァ働け。」と解く處を、「忝し。」と腕首取り、前へとつて引寄せ、どうど押伏せ、「一旦の出來心、兄に背きし後悔さに、たばかつたるぞたはけ者。すぐに此の繩いたゞけ。」と、三寸繩に縛り上げ、兄弟のなかなほり、土產にする。」と廣言して、味方の陣へ押立て行く。心地好かりし働きなり。弟の五郎いりかはり、「今までは大炊介、今日よりは藤内五郎。四人の兄は親のしつけし亂舞藝。我等は自身の才覺にて棒を一手覺えたり。我と思はん者あらば、某が棒先に當つて見よ。」と呼ばはつて、白金にて筋金入りし、樫の桿棒掻い込うで、進み出づれば四人の兄弟、「我々が一藝も揃へて軍の目を覺さん。棒に合はせて囃せや鼓、吹けや横笛、打てや太鼓、討つたり敵。」と戯れて、一聲を奏すれば、「こは花々しの者どもや。討ち取つて高名せよ。」と、走井久七、久八、羽根田頓藏、根地大藏、栗生熊藏石坂九郎、獲物々々を提げて、討つてかゝれば藤内五郎、棒の祕術の水車、横車、腰車、片手輪違、

氣を受け、傍輩には疎まるゝ。此の身の前生は、何者が生まれ變りて此の身ぞや。」と、諸軍勢の見る目とも、恥ぢず歎くぞ哀れなる。「エ、思ひきはめたり。軍をすとも侮つて、好き敵は向ふまじ。雜兵の五騎十騎、討つとも何の益あらん。兩陣の眞中にて腹掻き破り、生々の業煩惱を晴らさん。」と、腰刀するりと拔き、「此の刀こそうみの親よりゆづりの刀。これを添へて捨てられしと、養親の物語。二度指すべき鞘にてなし、共に冥途の供せよ。」と、鞘の眞中、二つにさつと切り割つたり。不思議や鞘を二重にほり、父の筆と覺しくて、一通の證文あり。諸人不思議の思ひをなし、鳴りを靜めて聞きければ、高らかにこそ讀みたりけれ。「五番目の男子に書き置く一通の事、抑我等が氏は藤原、生國は河内國、よつて家名を藤内と呼ぶ。久しく浪人に沈淪して、五人の男子をまうく。一藝に名ある者は、用ゐられずといふ事なしといふ本文を忘れず、藤内太郎より、二郎三郎四郎まで、笛鼓を習はしむ。汝は襁褓にて母に後れし、父また今死にのぞむ。孤兒とならんいとほしさ。路頭に棄てて養育の、また餘の親を待つ事も、實の親の情なり。共に孝行忘る可らず。藤内五郎忠治へ、慈父藤内大夫實治判。」と讀みも終らず、太郎四郎も立ち寄り、見れば父の手蹟なり。「ありしとばかりに見ず知らぬ、乙の五郎なりけるかや。」「兄々達かなつかしや。」と、兄弟ひしと抱きつき、慕ひ歎くぞ道理なる。城の内には聲々に、「かくとも知らばおびき入れ、とつく討つて捨つべき者を。あれ餘すな。」と言ふ程こそ

り。門を開き城内へ入れて給べ。」とぞ呼ばはつたり。斯くと聞くより新判官、塀の上に顯はれ出で、「ヤア表裏者の恩知らず。汝不義の科によつて、害せられんずる處に、父入道が情を以て、命を助け落せしに、其の大恩を振り捨て、一大事をなど藤内には語りしぞ。犬猫の畜類も、食を與ふる恩は知る。蟲同然の奴原を、此の赤沼が味方にせんずる樣はなし。とつく歸れ。」と言ひすてて、城の内へぞ入りにける。大炊介も詮方なく、寄手の陣を見渡せば、藤内兄弟三人陣頭に控へたり。大炊介きつと見て、「珍らしや藤内太郎、定めて沙汰にも聞き給はん。某御勘氣御免の願ひ申し上げたる處に、大將軍の仰せには、赤沼父子が中、首取つて來らば、其の時御免あらんとの御諚につき、味方といつはり城に入り、たばかり討たん心入れ、門外までは來たれども、敵心を許さねば力なし。方々偏に頼み入る。斯波殿へも樣子を語り、御執り成しにて御免あり、心すゞしく好き敵と引組んで、討死遂げたき心底をあはれと思ひ、好き樣に披露して給べ藤内殿。」と、涙を流して頼みける。太郎聲を荒らげ、「情知らぬに似たれども、大事の攻口、小事にかゝはる暇なし。軍はじめの味方に對し、涙の體は不吉なり。餘人を頼まば頼まれよ。」と、愛相なげにぞあしらひける「はつ。」とばかりに大炊介、「さてはふつつと叶はぬか。」と、どうど座を組み歎きしが、「敵も味方も聞いて給べ。某程世にあぢきなき者はなし。實の親は見ず知らず。捨子となつて拾はれし、苗字の親の一色殿には死に別れ、主君には勘

らから〳〵、とん〳〵から〳〵どんがらが、つッてん天の時到り、地の利に合へる名將の、出陣こそは 三重 ゆゝしけれ。さる程に、斯波左衛門義將は、大將軍の御出でに、面目開く花櫻、吉野に籠る大敵を、血潮になれと赤沼が、大手の木戸に向はるゝ。搦手は細川勝秀、三萬餘騎を引率し、貝を吹き太鼓を鳴らし、鯨波の聲をぞ上げたりける。軍大將竹束際に駒を立て、「淸和天皇の後胤、足利の類葉、斯波左衛門源義將寄せ來る意趣は、赤沼入道父子謀逆を構へ、帝都を騒がし武將を弑し、四海を覆さんとする罪科據なし。誅戮せしむべき旨うけたまはつて發向す。敕命といひ、天道いかでか免れん。速かに腹切つて、親子首を渡せや、やつ。」と呼ばはつて、しづ〳〵と乘り入りしは、勇々しかりける武者振なり。入道門の矢切に立つて、「大將を亡ぼし、國家を望むは、弓矢取る身の定まる法、和漢其の例を知らず。忠孝にことよせて、位牌知行に膝を屈むる臆病者、入道一家を討たんとは、鷲の巣を鼠が狙ふに異ならず。誰かある、討つて出で追散らせ。」と、采押取つて下知すれば、城にも鯨波をどつと揚げ、大手の木戸口押開き、切つて出づれば寄手の大勢、入り違へ入り亂れ、もみにもうでぞ 三重 戰ひける。かかる處に金の御嶽の方よりも、若武者一騎、卯の花縅の鎧著て、大手の木戸に突立ち大音上げて、「城内へ申すべきの事候。我こそ入道殿に一命を救はれ參らせし、義教の奧小姓一色大炊介久常、御高恩忘れ難く、命の親の御先途に、槍一本の御役にもと、御味方に參つた

打つたり敵も討つたり、物臭い赤沼に、胸が悪うて頭もうつ。太刀も刀もいらばこそ、撥二本が干將莫耶、一曲所望か、サア來い。」と、あたりを睨んで立つたりけり。「相手になつて犬死すな。遠矢に射取れ。」と差詰め引詰め、雨あられと飛び來る矢を、「樂車太鼓の曲撥見よ。」と撥押取つて切り拂ふは、前代未聞の、三重拍子なり。矢種盡くれば敵の勢、太刀拔きつれて討つてかゝる。大將も太刀さしかざし、支へ給ふ其の隙に、藤内太鼓を轉ばせ寄せて、天も響けどう／＼／＼と、打鳴らす其の聲に、「すは事こそ。」と三人は、我も／＼と引返し、大勢にわつて入り、斬り立て薙ぎ立て追散らすは、潔かりし働きなり。熊橋犬二郎滿景取つて返し、藤内に討つてかゝる。「しやしれ者奴、太鼓の撥の鹽梅見よ。」と、目とも鼻とも言はせばこそ、無二無三にたゝきつけ、太刀打落いて小股をかき、うつぶせに取つて伏せ、やがて繩をぞかけたりける。程なく三人立ち歸り、「御事初の御吉相、なほも目出度き驗には、たゞ今あれにて承れば、赤沼入道吉野山の古城にたて籠り候を、斯波細川が攻め寄するとの風聞、兩將が陣へ御入りあり、逆臣亡ぼす謀、時刻を移すべからず。」と、言上すれば御大將、「實にも。」と同じ給ひける。藤内四郎は、犬二郎が脊中に太鼓をくゝりつけ、「御出陣の武者揃へ、味方を集むる觸太鼓の、祕曲を打つて祝はん。」と、撥かろ／＼と打鳴らし、聲張上げてふれにける。「明日より吉野の山にて大合戰、寄手の勢は三萬つゞき、敵役は赤沼入道、御望みの方々、明日は疾うか

負はせで置くべきか。御勘氣御免の御執り成し、頼み申す。」と許りにて、御前を立ち去りし彌猛心ぞ頼もしき。大將彼が後姿を遙かに見遣り給ひ、「如何に方々、彼奴が詞は心得難し。大炊介奴が瘦腕にて、赤沼父子を討たんとは、實に蟷螂が斧なれば、叶ふまじきと歎かんこそ實の心なるべきに、たやすく討つて參らんと、輕々しく立つだるは、思へば彼奴は入道が恩を送らん爲、義教が有樣を窺ふと覺えたり。おつかけ討つて來るべし。疾く〳〵。」と宣へば、血氣さかんの若武者ども、あせるばかりに思案もなく、「討ち取つて御門出の一番手を祝はん。」とさ足を蹈んで三人は、藤内四郎相具して、もみにもうでぞ追掛けける。御運のなせる處なり。旅人の休らふ體にもてなし、側に寄り給へば、何處よりか來りけん、矢一つ來つて、左の袂に立つたりけり。「こは如何に。」とかなぐり給へど堪らばこそ。なほ亂れ來る矢を凌がんと、笠を持つて受け給へば、刈り殘したる村薄、枯野に立てる如くなり。「今は叶はずこれまで。」と、此處の木陰、彼處の草叢、隱れ顯はれ遁れんと、佇む處に赤沼熊橋、弓箭の武者百騎許りが、一面に矢襖つくつてどつと寄せ、「ヤァ義教、都よりつけ來るを、それと知らざる愚かさよ。速かに腹を切れ。異議におよばば、なぶり殺しにせんずる。」と、鏃を竝べし其の勢ひ遁れつべうは無き處に、藤内四郎取つて返し、矢面に驅け塞がつて、「ヤァこりやなまこび過ぎたる奴ばらかな。畠山が郎黨づでん天下に隱れなき、太鼓打の藤内四郎、定めて音にも聞きつらん。太鼓も

衛門に、爭でか面が合はされん。仁義ある忠臣に見捨てらるゝも、義教が運の極め。」とばかりにて、御涙にぞ咽ばるゝ。かかる處に十八九なる若者、編笠脫いで御前に畏まり、頭を地につけ申す樣、「某は御近習に召使はれし、一色大炊介にて御座候。御壁書を背き不義の科、高眼を掠め女を相具し、驅落重罪遁るゝ方なく候へども、全く色に耽り、御成敗を恐るゝにも候はず。もと我らは一色が實子にて候はず。元來父母もなき捨子とやらんにて候ひしを、養父一色兵衛拾ひ取り、御目見えおほせ付けられ、總領に立つべき處に、段々實子出生いたし、養父兵衛世を去り、母にて候もの、若年の弟を總領と申し上げ、年かさの某を末子と沙汰し、式日の御禮も、俄に末子の座に列なり、御供に候。六角畠山山名を始め、肩を比べし諸傍輩に、面を向けんも面目なく、所詮一色が家を出で、誠の親の由緣を尋ね、此の面目を雪がんと存じ候折柄、心の外に御法式を背き、御所を立ち退き候。慈悲は上より御免を蒙り、御馬の前にて討死仕り候はば、生前の思出。」と涙を流し申しける。大將御立腹まし〳〵、「など以前首を斬つて捨つべかつしに、入道奴が助け落したれば、おのれは入道が大恩を受けし者を、召使はん樣はなし。誠あらば立ち歸り、赤沼入道父子の中、首取つてきたれ。其の時は勘氣を許し召使はんず。罷り立て。」と御諚ある。大炊介承り、「有り難き上意。」赤沼父子の首取つて、御憤りを安んじ奉らん。如何に傍輩達、若し仕損じて討死すとも、敵に半死半生の深傷を

白浪を、花の綱代と朝ぼらけ、鶚の鳥鳶飛んで、天に戻れば魚淵に、躍る敎も上下の、道明らけき鳩の峯、正八幡の鎭座なる、「我が氏の神軍神、武運を守りたび給へ。」と、頭を傾け給ひければ、各遙かに禮拜し、君が行方を祈念ある、御有樣こそ殊勝なれ。見渡せば山の名の朝日に氷解けわたり、水や煙をまきの島、宇治の里の子打羣れて唄萌ゆる女萎摘む若菜摘む、茅花杉菜にさいたづま、妻は誰が妻老いぬれば、蕗の姑々、水無い川で船漕がば、そなたは目籠で水を汲め、蕗の姑々。あの松山の松葉をよめや。嫁菜蒲公英土筆、菫菜摘みて童の、相撲取草立つ方に、勝てや勝て〱凱歌の、聲高無雙武士の、櫓にかけて播磨投げ、上ぐる團扇や扇の芝に、はや三番の勝相撲、名乘りて過ぐる郭公、待たぬに春を漏れ出でて、弓馬の道もさきがけんと、漲り渡す長池や、水草かきわけ鳴く蛙。蛙軍の勝ち負けに、お身の上の占問へば、水の源淀みなく、にごりなき世に泉川、しばしが程の泡沫に、沈まば沈め頼みある、瓶の原にぞ三重著き給ふ。さて其の後に、畠山小將監進み出で、「某召し具し候は、藤内四郎光治と申す郎等、太鼓の妙を得、戰場のかけひき、御陣の押太鼓、萬里を響かす名人ゆゑ、乃ち御代々の太鼓を預け召し連れ候。斯波左衞門が家臣、藤内太郎が弟にて候へば、此の者を御使として、斯波が方へ内通し、一先づ御頼み然るべし。」と申し上ぐる。義敎公やや涙ぐみ給ひ、「我もさこそは思へども、斯波が諫めを用ゐず、今かかる身となつたれば、今生にて存

かさね引きかへ、何時の間に鶉衣と綻びて、ほつれ出でさせ給ひける。從ひ仕ふるものとては、御側近き旅衣、狩場に馴れぬ若鷹の、鳥立も知らぬ若草や、二番生えなる若侍、六角左近太則冬、尊氏公の白旗を、守袋にまもりとて、疊み込めてぞ持ちにける。山名伊織介氏廣が、肱にかけたる袱紗には、代々に傳はる軍配團扇、昔を匂ふ梅の鞭、畠山小將監高顯が袋に收め腰に指す。同じく郎等藤内四郎光治、彼らもせめて攻太鼓、勝色見せてまた何時か、都に歸り花軍、開かん御代の關路の鳥も、此の曉を今しばし、忍べや我も忍ぶぞと、門出の鴈に驚きて、笠打掩ふ人々の、世のなる末ぞいたはしき。思ふに違ふあらましに、昨日と過ぎつ明日はまた、いさやしら木の弓の弦、おもひ斷れども思ほえず、かへりみらるゝ九重の、殘んの雪のほの〴〵と、花に明け行く比叡の嶽、霞にこめて鞍馬山、鞍置き馬の數々を、繋がせ牽かせ歩ませて、折にふれたる乘り心、我が北山の御所櫻、春の眺めも櫻陰、唄 咲いた櫻になぜ駒繫ぐヨノ。勇めば駒が、駒が勇めば、天にも上る雲雀毛や、夏は梢もあをの駒、祭に賀茂の河原毛や。紅葉に通ふ小雄鹿の、鹿毛も冱えたる月毛の駒の、駒の銜さへさへ〳〵と、手綱搔繰り〳〵栗毛に、乘つた馬上はよしや蘆毛に、雪のよつじろ白覆輪や金覆輪、今は梨子地の鞍鐙、馬はあれども此の身には、徒歩路越え行く木幡山。左手にみつの行く先は、山梔原と聞くからは、世に隱らふる我々が、此の身包むに賴もしく、明けずもあれな淀川の、岸にかけたる

じめの初肴。これを肴に姫君を、御供申して御祝言。月代剃つたを幸ひに、お輿添にも女ども、待女郎にも女ども、侍にも女ども、お腰元にも女ども、四揃花揃、きりばねつんばね、二役三役、ゑがつく、徳つく、色がつく、人思ひつく、知行つく、民もつく〳〵筑紫の果ても、東も靡く官領職、武家繁昌の御代に遇ふ、この正月こそ目出度けれ。

下之巻

源義教公道行

唄 文武の花も榮えた。初花咲いた見さいな。藤内四郎どのナ、太鼓打の役で、代々の太鼓を、あそこらもとに置かせて、金の撥を手に持ち、てれつくにはつツてん〳〵〳〵、とうからつとんと打惚れた。なるかならぬか、こひのなつかの町、なつかの〳〵中の町を、とほり度うはないが、七草たゝいててつへい若水。はだか花婿百貫、くわん〳〵〳〵とも鳴るは夜明の、鐘はつん〳〵辛いかつつてん、天の道せばからず。立つ春は、うぐひす啼かぬ離れ島、雪の深谷の奥までも、知ればやしろしめされたる、御身の上に如何なれば、御運も今はうすがすみ、花の晨もたたなくに、袂は露に夕の色。赤沼父子が逆心を、防ぐ力もつき弓の、月の都を月諸共に、をち方人とさすらふる、羅綾の袴錦繍の

二つの日なし、地に二人の殿御なし。夫のために捨てん命、塵灰斧、吹けば散る煽げば飛ぶ、高の知れた浮世の中、たとひおのれら鬼神にてもあらばこそ、斬らば切らん、突かば突かうず、飛ばば飛ばん、跳ねば跳ねん、命かぎり腕限り、三つ四つの男首、此の一つの女首、かへば換へ徳。サア來い。」と、身もかるぐ\とさそくを踏み、目の中鋭く、身は凛々しく、勇み掛れる有樣は、昔の巴山吹が、生まれ變りといひつべし。「やア口の過ぎたる女めかな。あれ討ちとめよ。」と下知すれば、父權頭打物拔き、母も姫も長刀構へ、「主といひ聟といひ、親に敵たふ大惡人、あますまじ。」と入り違ひ、しばし支へて三重きりむすぶ。其の隙に盛治は、疊を上げて板敷を、やす／＼と切り破り、大童になつて顯はれ出で、「藤内二郎とは我が事よ。敵に勝劣なけれども、差當つては弟の三郎奴、首ねぢ斬らん。」と飛んでかゝる。「三郎討たすな者ども。」と、どつとをめいて驅け合はせ、彼方へ追つ立て追ひ捲り、二郎危く見えける時、女房さかしく、障子に張りし大綱はづし、勇んでかゝる新判官、藤冠者が後より、ざつくと綱を打ちかけて、「えいやつ。」と引きければ、仰反に打ちこかされ、「これは／＼。」と手足も叶はず、はごにかゝりし野末の鳥、心地よくこそ見えにけれ。此の勢ひに盛治は、三郎をとつて伏せ、高手小手に縛め、寄せ來る雜兵、四方へぱつと追散らし、立ち懸つて綱繩を、牀柱に縛りつけ、「彼ら二人は左衞門殿より舅殿への御年玉、活けるも殺すも御勝手次第。弟は拙者が正月の料理は

むる不覺さよ。此の通りにて乾殺に逢ひ、餓鬼道に落ちんより、一思ひに腹切つて、修羅道におちよかし。」と、一度にどつと打笑ひ、鯨波の聲をぞ上げたりける。權頭夫婦姫君諸共走り出で、「ヤア物に狂ふか悪人奴、仁義ある斯波殿と緣を組みて、忠を盡し身を立てん心はなく、謀反人に與し、賢人の大事の壻をも討たんとは、天魔の障礙か淺まし。」と制し給へば、「ヤア聞きともなし、大義には親を殺す。それ搦めよ。」といふ所へ、庭の一木の陰よりも、「オ、しばらく〳〵、斯波左衛門これにあり。」とゆふ闇照らす黄金作、五尺餘りを指し貫き、搖ぎ出でたる有樣は、鷗羣れ居る潮干潟、蘆分鶴ののさのさと、物に恐れぬ威勢なり。藤冠者驚きて、「今まで此處に聲しつるが、何處より逃げ出でけん、それ討ち取れ。」と呼ばはれば、「ハ、ア愚か〳〵、蟹は甲に似せて、穴をほるとは汝らが事よ。天下の管領承つて、六十餘州の政道を司る斯波左衛門義將、身はひとつなれども、命にかはり名にかはり、幾人にならうとまゝ。これさ藤内三郎、なんと此の左衛門は、其方が嫂の小晒といふ女によう似たとは思はぬか。オ、似たも道理。誠は藤内二郎盛治が妻、小晒といふ女房なるわ。うつそりども、女と思ひ怪我するな。竝やつうつの女でない。浪人の憂き難儀、針一本の力にて、夏の物を冬にしつ、鏡立を米にしたり、硯箱を味噌にする。古葛籠を忽ちに、目の前で家賃にせし、神變自在の女なるぞ。さりながら姫君の牀入には、神通も叶はぬいたはしさよ。サア此の上は案じもなし、天に

きの大綱を、そろり／＼と引延ばし、四方に張つて包みしは、逃れ難なき手段なり。しすまし顔にうなづき合ひ、面々が懐中より、大釘鐵鎚取り出し、襖遣戸に手を揃へ、一度に打つて打ちつけたり。藤内三郎、「南無三寶。」と、此處彼處と明くれども、釘付けの戸の明かばこそ、障子を破り差覗けば、大綱かけて軍兵ども、兵具提げ圍んだり。天へや飛ばん地や潜らん、六神通の阿羅漢も、遁れつべうはなかりけり。障子の内には大音上げ、涙を流いて「古人の詞に僞りなし。七人の子は生すとも、女に心ゆるすなとは、今身の上に知られたり。敵は敵とも思ふべきが、おのれ女奴、此の儘にて死するとも、大天狗となつて思ひ知らせん。」と、戸障子叩き蹈み鳴らし、「敵の奴らよつく聞け。昔が今に至るまで、君を弑し父をなみする族はあれども、主と聟とを討ちとつて、世に立ちし例やある。汝知らずや。長田の莊司は、主君義朝、聟の鎌田を害し、其の日に其の身も討たれたり。因果は下れる車の如し、報はん程を思ひ知れ。せめて冠者奴か判官奴か、一人討ちとり、雜兵の五騎も十騎も、左右の脇にかいこうで、思ふ樣に締め殺し、心變りし女奴を、蹴殺いて死なんずものを、エ、無念なりくち惜しし。」と、蹈んだる板敷どう／＼、どう／＼／＼と蹈み鳴らし、血の涙をハラ／＼／＼、はらりはらりと襖を切り裂き牙を噛み、跳り上つて怒りをなす、無念なりける有樣なり。障子の外には、女といふを姫の事と心得て、「ヤア愚かなり左衞門、敵の娘兄弟と知りながら、悠々と聟入して、女を恨

もなし。此處の娘御、左衞門樣を戀病の、心ゆかしの伽にとて、だましてかくはなした事。それについて琵琶の姫、大將の御判を兄の持つたをうばひ取り、牀入したらばくれうといふ。さま／＼思案して見れども、千日千夜案じても、女子同士の牀入は、文殊の智慧にも能はぬこと、腹を立てずと御判を取る、分別したが好いわいの。コレせく事ではないぞや。」と事を正して言ひければ、盛治聞いて、

「それは案の外の事、でかいた／＼、まづ其の御判が取りたいが、どうしたものであらう。」といふ。

「これ重疊の思案がある。今宵も姫の忍ばれん。こな樣私と入り替り、暗がりに姫と寢て、すかして御判を取り給へ。」「ハテそれがどうなるものぞ、餘の分別をせい」といへば、「エ、いはれぬ斟酌、私さへ慾を離るれば、お主の爲ぢやないかいの。」「いや／＼、終には左衞門樣御夫婦の姫君に、疵がついては後難なり。然らば某閨に待ちうけ、姫君忍び給はん時、仔細を語り、連れて立ち退き參らせん。時には御判も取戻し、姫君も御夫婦と本意を遂げさせ給ふのみか、我々が忠義も立つ。好き折柄に來合はせたり。此方へ任せ、案内せよ。」と盛治は、上段の戸をさし廻し、臥したる體にてもてなせば、女房は植込の數寄屋に隱れ、首尾合はせ、一緒に連れて立ち退かんと、手筈を取つて別るれば、早暮六つの時計の聲、一間々々の大蠟燭、星の下りし如くなり。諜じ合はせし藤冠者、赤沼判官、藤内三郎、郎等には走井久七、久八、根地大藏、息をも立てず拔き足して、帳臺を押取りまき、まりが

御取次頼み存ずる。」といふ。番の侍聞き屆け、「さいはひ廣間にお出でなり、かうお通り。」「御免あれ。」と奥に入れば、上段に器量ゆゝしき若侍、茫然として坐したりけり。我が女房の小晒に、よくも似たる男かな。さもあれ、これや斯波殿ならんと、額を疊につゝしんで、「近來憚り千萬ながら、藤内太郎家治が兄弟なれば、お主同然の忠義を重んじ奉る。當代のならひ、親が子をたばかれば、子は親に楯を突く。況んやこれは赤沼が一族、ことに御小舅藤冠者は、君を討ち滅ぼさん結構と、密々に承る。御運盡きて不覺の事も候はば、色に溺るゝの嘲弄遁れ給はじ。とつく御供申さん爲、參候仕る。」とぞ申しける。顏を上げねばそれとも知らず、「ヤァ誰なればちんぷんかん。殊に此の左衞門を色に溺るゝとは、宿に殘せし思ふ人の、傳へ聞かんも恥かしし。まづおのれは何者ぞ、罷り立て。」とぞ仰せける。「イヤ某は御家來藤内太郎が弟、同じく二郎盛治。」と顏を上ぐれば、「なう藤内殿か我が夫か。」と、走りよつて縋りつくを、小腕ねぢて取つて投げ、「やれ物狂ひ奴、大名の若君のおさし奉公と僞り、所こそあれ赤沼一家、あまつさへ女の身の、斯波殿と名乘つて、月代剃つて、其のざまは唐天竺にも例を聞かず、爪一つ髮一筋、夫に任せし體ならずや。察する處、敵に頼まれ、斯波殿をすかし寄する計略か、但しは不義か。とても助けず白狀せよ。」と、せいて聲さへ慄ひけり。女房動ぜず、「ア、コレ聲が高い。不審も腹も立つは道理。さりながら不義をする私でもなし、敵に與せんやう

は、あの子が氣色本復までは、寢る事無用とある上に、ぬけがけしては一分立たず。是非に寢よなら寢もせうが、鞘と鞘とで切り合ふ樣で、齒ぎれがせまい。」と笑ひける。「しや堅い事ばかり、毒藥變じて藥となる、袴なりとも解かしやんせ。」と、取り附けば飛びのきて、「ア、譯もない。此の袴の下には鬼がすんで、いツかい口で嚙みつきます、怖い事ぢや。」とありければ、姫さめ〴〵と泣き沈み、「つれもなきお心や。男に立つる心中は、珍らしからぬ事ながら、みづからが兄藤冠者氏連と、叔父赤沼と心を合はせ、將軍義教公の御判をもつて、僞廻文を致せし所を、みづから御判を盜み置き、新手枕の引出物に參らせんと、兄叔父の敵となり、隱し置いたる心といひ、あんまり辛き我が殿。」と、恨み喞ちて歎かる〻。「御尤も〳〵。御判も請取り義教公へ奉り、御身の思ひも晴らさせたいが、肌を觸れて寢ることは、凡夫の業に叶はぬこと。どうぞ抱きつくばかりではなるまいか。」といひければ、「それほど寢るが嫌なもの、よう壻入はなされたな。今ならずは今宵の中、今宵ならずば明日明後日。」「少將程通うても、叶はぬ間はかなはぬなり。」「能う覺えてや。」と喞つ目に、涙を浮べて歸らる〻、心の中こそわりなけれ。藤内二郎盛治は、女房とは夢にも知らず、「左衞門殿壻入の風聞あり。赤沼一家に緣を組み、心を許し給ふ事、飛んで火に入る御身の上、如何にしても氣づかはし。」と、借著いでたち古川の式臺に立ち懸り、當番に近づき、「斯波左衞門が家來にて候。主人にそと逢ひ申し度き事の候。

法然上人の一の御弟子と有り難き、熊谷の二郎直實に、三代の一人娘、靜御前は血の道持、扨こそ御子ましまさず。常に冷えたる腰越より、追返されさせ給ひにし、九郎大夫の判官源の義經の、一の谷の鵯越、眞逆樣に落し子の、末葉も茂る桃園や、清和源氏のちやく〳〵、嫡流斯波尾張守家氏、左近の大夫時氏、其の子に宗氏、其の子に武衞高經が三男、斯波左衞門義將とは、我らが事にて御座んす。」と、口に任する系圖の卷、うさんな處を言ひかすめ、いきつき次第に言ひければ、「さても廣き御一家、舅に過ぎたる壻殿や。三國一ぢや、壻にとりすまいた。」とぞ謠ひける。權頭夫婦の人、長物語に女の姿、現はれては如何と思ひ、「ちと御休息候べし。我らも勝手へ罷り立つ、皆々これへ。」とうちつれて、座敷を立つてぞ入り給ふ。小晒はたゞ一人、「さてもあぶなや氣づまりや。眞似をするさへ術なきに、よう殿達は彼のよにして、生きて居さんす事ぢやまで。」と、獨語して身を横に、手枕してぞ休み居る。琵琶の姫立ち歸り、さし足して寢姿の、うしろに立つてつく〴〵と、見れば見る程好い男、「日の暮れるまで待たれぬ。」と、とんと抱きつき臥し給へば、「なう悲しや。」と起きあがる、袴の相引しつか〳〵取り、「こりや騷がしい如何ぞいの。暮れるを待たぬ新枕、御さげしみも恥かしながら、おことのふに氣病して、こら〳〵ぜいなく落ちつかず。帶紐といてくださんせ、寢て見もせいで嫌はんすか。」と、じろりと見たるかほつきは、惚れて欲しそな目元なり。小晒も當話なく、「親達のいひつけに

傳受と聞えたる、百人一首の卷頭、天智天皇十八代の帝、陽成院筑波嶺の峯より落つる源の、賴光に胤腹ひとつの御弟、賴信の跡取り賴義の總領、譃でないよの愛宕白山、八幡太郎義家に五代の後胤上總介義兼が末葉、兵庫頭坂田公平には、顏眞赤いな他人にて、渡邊綱こそは、茨木童子が片腕、ただひと太刀にうちわも內輪、叔母聟ぞや。叔母の子息の競瀧口、源三位賴政の小姓立、猪隼太とは行き合ひ兄弟。近衛院の御宇かとよ、鵺といひし獸の、帝を惱まし奉る。賴政敕諚蒙つて、たんだ一矢にころ〱〱、落つる處を猪隼太、九の刀※ぞさいたら畠、畠山重忠も、緣者つゞきの先祖にて、三浦大介が疝氣筋、四代の末孫朝夷の三郎義秀は、音に聞えし大力、曾我の五郎時宗が、鎧の草摺無手と取つて、引いて見せんと蹈みしめて、蹈んばたがつた股野の五郎、力損にて我らまで、いかな殿御もしつかとだきしめ、だけばあられの佐々木どの、土肥の二郎も從弟筋、從弟程ようにたんの四郎、富士の御狩の高名は、末代末世記錄に載つた、猪武者の爭ひに、負け腹立てて讒言いふ梶原とは何でもなく、鎭西八郎爲朝の下戚腹、瓜の蔓になすの與一、扇の的より精兵の達者、弓の傳受の家ぞとは、これぞ系圖の始めなる。それより代々に傳はりて、楠多門兵衛正成が嫡子犬坊丸、二男惡源太義平、三男山邊の赤人は、古今無雙の歌人にて、公家にも一門在原の、業平の中將の妾腹のもちごもり、妻もこもれり若草に、けふはな燒きそ武藏坊、辨慶の七番目末子、七つ道具の梌挨頭、

く仕合。」と、たゞ禮してぞ居たりける。藤冠者、此の體を心得ずや思ひけん、「これ〳〵左衞門殿。貴殿の御事は、斯波の武衞のお館とて、系圖正しくこれある由、氏は何氏、いづれより別れしぞ。承らん。」と申しける。南無三寶と思へども、知らずと言はば惡しかりなんと、「ム、扨は私を實の左衞門にてはなきと思ふ疑ひか。拙者が家の氏系圖、存ぜぬ事や候べき。末永く緩々と、御物語致しません。」とぞ答へける。冠者何がな詞質にせんと思ひ、「オヤ重ねては重ねて、冠者奴も言ひかゝつて、聽かねば一分異なものなり。是非語りともなくば、どうぞまた語らせ樣もあるべき。」と、苦々しくぞ申しける。今は遁るゝ方もなく、「然らば語つて聞かせ申さん。」と、まざ〳〵しくは言ひけれども、夢にも知らぬ斯波の系圖、何處へ取りつき言ふべきやら、こは如何せんと、思ひ亂れて居たりしが、此の上は力なし。いにしへの大將兵を、思ひ出すをさいはひに、口へ出るまゝ譃八百、言うてのけんと心を据ゑ、膝立て直し息次し、さもありさうにぞ語りける。

もんさく系圖

抑斯波の武衞の館と申すは、代々左右の兵衞に任ず。兵衞の官の唐名なれば、家を武衞と名づけたり。斯波の氏は源氏なり。そうじて源氏もしな〴〵の淸和源氏、宇多源氏、村上源氏、嵯峨源氏。中にも斯波は淸和源氏。㒵源氏々々が四源氏御座る、中に淸和ぞ世に光る、光源氏は敷島の、歌道の

父母嘆きて申しつかはし候へば、左衛門も合點し、今日聟入仕る。我らには何も知らせず。これぞ天のあたへ、手を合はせて討ち取らんと、内通致せし處に、早速の御くだり。大慶々々。」とぞ申しける。判官悦び、「さてなういつぞや、此の處にて失ひし將軍の印判も、必定琵琶の君の盗みしに疑ひなし。妹とて油斷せられな。それにつき、此の者は藤内太郎二郎が弟、藤内三郎武治、兄を疎んじ我我に仕へんと申す故召抱へ候。かかる處へ聟入する左衛門奴は。死にに來る同然。」と、笑壺に入つてぞ笑ひける。「ヤアこれ〳〵、下人共には一味もある。父母聞かば事やかまし。隨分忍べ。」「忍ばん。」と、座敷を立つて判官は、土民の家に宿を借り、案内をこそ待ちにけれ。殿御見んとて琵琶の君、今日はハラリと氣も輕く、此の頃になき笑ひ顏、男といへる妙藥に、耆婆も匙をや捨てけらし。父母ばかり合點にて、深く包む事なれば、兄藤冠者家來まで、實の斯波殿御出でと、伺候の侍頭を下げ、「御通り。」と申し上ぐる。女心の男の眞似、顏に紅葉の錦縁、疊ざはりも足浮きて、舅君にも姑にも、どう挨拶を諸禮やら、無禮やら、唯「あい〳〵。」と禮をして、頭下げるにひまもなく、割り膝痛くともすれば、女子居住居しどけなく、行儀つくるもいた〳〵し。姫君心わくせきと、「申し左衛門樣、何がお氣に入らぬやら、祝言の取り遣りも、渡守なきこがれ船、片破船の片思ひ、よう煩はして下さんした。」と、恨めしさうに宣へば、「こがれ船でも何船でも、手前に帆柱持ち合はせず。本意を背

顔に我と我が、別れの涙亂れ髪、共に落ち來る膝の上、小枕捨てて丈長も、捻元結に大髻、眉の引黛男眉、鐵漿落す磨砂、磨楊枝の青柳に、櫻咲いたる二役や、女とも見え男なら、御物上りの若者と、まがふ許りになりにけり。衣裳あらため太刀刀、衣紋繕ひ待つ處に、引き馬乘物徒士侍、七つ道具を押立てて、「古川權頭清氏より、花壻斯波左衞門義將公の御迎へ。」と呼ばはれば、「アレ馬がでん/\うつわいの。ア、怖や。」とぞ逃げにける。肝煎も氣の毒さ。「これ/\これは何事ぞ。小訛になまつて、どうすべいかうすべいと、男らしうやらうぞや。」と、囁けば打ちうなづき、「ム、何と身が方へ、舅殿よりお迎へだといふか。オ、大儀々々、目出度い折からだ。酒でも打飲らつて、唐辛をかつ嚙り、寒風を凌いで供をせろ。先へ行くべい奴樣、許さしやんせや。」と口掩ふ、袂張肱のし/\と、歩むとすれど、襠の、身癖顏癖引包む、殿御模樣の重著の、うら懷かしき女肌、男女の二面、このてかしはや此の手振れ、ふれ/\お前おつ立てろ、まかせておける春の霜、古川館へぞ三重迎へける。花壻がねに相生の、島臺飾る座敷構へ、さも賑しくぞ見えにける。家の總領藤冠者氏連は、妹の祝言と、裝束改め居る處へ、都より赤沼判官下向の由にて案内し、密かに冠者に對面し、「此の頃は御飛脚、殊に斯波左衞門義將壻入との御知らせ、これぞ屈竟の時節と存じ、罷り下り候が、してそれは必定にて候か。」といへば、冠者小聲になつて、「中々の事。妹の琵琶の姫、左衞門を戀ひ焦れ、病氣重り候を、

へかかる事。猶行く先が思はるゝ。」と、泣けど悔めど甲斐もなく、思ひ直すも亂るゝも、心一つの涙なり。「嘆きて歸らずともかくも、せめての事に樣子を語り、たんのうさせて給べかし。」と、泣く〳〵いへば肝煎悅び、「オ、語らねば叶はぬ事。寺と申すはいつはり、心を靜め聞き給へ。此の國の大名、古川權頭淸氏殿の一人姬、琵琶の君とて美人あり。斯波左衞門義將殿といひなづけ。されども父權頭殿は、赤沼入道幸滿と、みづいらずの伯父甥とて、斯波殿の御祝言、今に延びて沙汰もなし。おいとしや琵琶の君、二十歳の花は散り過ぎても、殿御の顏を見給はず。唯斯波殿を戀ひ慕ひ、思ひ積つて氣病となり、今養生の眞最中。それゆゑ器量の好い人を、斯波左衞門義將と名づけ、心に勇みつけたらば、おのづと藥もまはらんと、醫者衆の指圖なれども、眞の男はならぬゆゑ、男らしい女中のお尋ねにて、かくまで談合なりし事。月代剃るが嫌ならば、三十兩を今此處へ、立てて歸りや。」と語りける。女房あまり可笑しくなり、「寺よりそれはましならん。常々聞きし事もある。左衞門樣の眞似をして、合戰軍の話でも、見事閨には合はせうが、みづからと姬君と、肝心の夜討には、如何も勝負はつくまい。」と、笑うて憂さを晴らしけり。「さては合點か悅ばし。」と、荷物を解き櫛道具、衣裳品々取り出す。女房常に配偶の、髮月代は手馴れしが、自剃自鬢の初元結、もむ黑髮を玉水の、底の玉藻と水鏡、油の梅花剃刀も、匂ひを惜しむ額際、剃ればあくたの花かづら、髮おきしての幾年か、見馴れし

ず。三年の內逢はれぬぞや。死なうも生きようも知らぬもの。迎への來ぬ間についちよつと、門出祝ひを、御座んせ。」と、泣きはれし目をにつこりと、涙片手の暇乞、あはれわりなく三重別れ行く。跡は霞の八重一重、山吹の瀨を我が中の、天の川瀨と叉何時か、馴れにし夫の盛治に、逢ふはたまさかたま／＼も、歩みならはぬ大和路や、涙にもまれ駕籠ゆりて、額重しと徒跣足、道の伽とや媒介が、噺も今の氣にあはず。まだ春淺き御室山、花には雪をやとひどが、戀知らぬやら荷も輕き、かたにの端にさげ煙草盆、折々休む道草の、今の悲しさ忘れ草、思ひ燻らせ思ひけし、胸に解かせ手に掬ぶ、玉水の邊に著きにけり。肝煎の老女こわづくり、「これ申し內儀樣、今宵は奈良に泊らせ、明日はお國へ著く。此の處で月代剃らせ、衣裳もかへて袴を著せ、男の姿になしまする。用意なされ。」と申しける。女房大きに仰天し、「それは嚊樣何事ぞ。寺方への奉公と、聞くも心に入らねども、それはいうても返らぬ事。月代を剃り袴著て、男の眞似する約束は、こちやしませぬぞあんまりな。」と、煙草を吹いて顏をふる。「ハテ此處な人、あんまりぎし／＼言はしやるな。金遣つて手形は取る。それが嫌なら如何なりと、三十兩の金立てて、此處から往んで貰ひましよ。オヽ、生暖い。」と上著脫ぎかけ、汗押拭うて居たりけり。女房しく／＼泣き出し、「何事の報いぞや。奉公の身の代が、男の身にもつく事か。三年經つは夢の中、月代剃つた髮つきを、戻つて男に見せられうか、人に面が合はされうか。道でさ

ひ遣る。我も生きんず覺悟なかつしが、※卞和が三度足切られ、本意を磨く夜光の珠、韓信は市に股を潛り、勾踐は石淋を嘗めて會稽の恥を清めしためし。それ程こそはあらずとも、盜人の虚名を忍び、武功を立てて一天に名を留むべき念願。縄目の恥を遁れしも誰が情ぞや。妻ながら親にも劣らぬ厚恩を、生々世々に忘れはせじ。思へば如何なる貧乏神、由なき處へ導きて、思ひも寄らぬ難に遭ひ、情の妻の身の代を、無下になさうか口惜しや、淺ましの運命や。」と、男なきにぞ泣き居たる。女房はつと心暮れ、勇む心も弱々と、「さても〳〵、先の見えぬは浮世ぞや。夫の爲に捨つる身は、いづれも同じ道なれど、世に立てて所領の主、乘り馬よ引き馬よと、綺羅をみがいて浪人の、すぼんだ肩のいかるをも、人にも見せつ見ん爲に、添うて間もなき女夫の中、三年といふ年きつて、生き別れする身の代を、無實の難にかへんとは、口惜しや本意なやな。金惜しいとは思はねども、夫婦別るゝ三年の、月日が惜しい。」とばかりにて、聲も惜しまず泣き居たり。警固ども、「遲し〳〵、金子を渡せ。」と聲々にいふ。「ハテ渡すまでもなし。其の金子取つてうせう。」といひければ、「請取らいで置かうか。」と、小判吟味し數讀みて、皆々京へぞ歸りける。盛治かれらを見おくりて、「エ、心ない雜人かな。盜まぬには極まつたり。此の歎きを見るからは、情も料簡もあるべき事。此の上は※わやにする。取り戻してくれんず。」と、驅け出づるを女房、「ハテ好いわいの。金より命が大事なり。迎へが來れば往かねばなら

がしげにぞ出でにける。かかる處へ藤内二郎、大勢がとりまいて、「逃げだてしたら撲ちすゑる。撲ち殺せ。」とどよめけば、「逃げはせぬ棒あてな。」「逃げたら撲つぞ。」「棒あつるな逃げはせぬ。」と、命からがら來る體。女房屹と見だしなみの、手槍提げつつと出で、「仔細は知らねど我が夫。其處を放せ、放さずは片端に突きとめん。」と、突き出す槍を捍棒にて、打つつ拂うつ叩きあひ、既に危く見えたりけり。盛治聲をかけ、「やれ女房早まるな。此の人々にも一理あり。樣子を聞け。」と制すれば、小晒ははがみをなし、「エ、腑甲斐なや。理にもせよ、非にもせよ、浪人なれども藤内二郎盛治といふ侍ではないかいの。白晝に手籠めに逢ひ、其の恥が立身の害にならいであるものか。夫を出世させん爲、奉公に身を賣つて、たつた今手形して三十兩取つたる金、皆空事になつたよな。賤しき下々相手には不足ながら、夫婦此處で討死し、名を潔う殘さん。」と、金子を大地へばらりと捨て、杖も棒も厭はばこそ、無二無三に突き立てしは、人の妻たる手本なり。二郎手籠めを振り解き、勇んで勵む女房が槍の柄をしつかととり、「オ、健氣なり頼もしし。先づ靜まつて仔細を聞け。さりとは武運拙きは、今日都本阿彌にて、百貫の折紙道具盜まれし場へ行き懸り、我が盜まぬに極まれども、言譯もなき首尾となり、既に牢舍の縛り繩、かゝらんとせし處に、御身が情の三十兩、ふつと思ひ出せし故、それをあがなふ約束にて、口惜しながらおめ／＼と、面を拭うて來つたり。御身が無念の心底を、尤もと思

み、「サア歩め。」といふ處へ、姫玉椿走り出で、「やれ其の人は御存じなし。いとしほなげに何事ぞ。許してたも賴むぞ。」と、泣き叫べども聞きいれず。先を拂つてみちすがら、面も恥も名もさらしの、宇治の里へと三重送り行く。世もかすかなる陽炎の、森の下庵軒荒れて、月の影さへもり治が、妻の女房小晒は、夫の出世の物入りに、我が身を捨つる志、哀れ優しき貞女なり。媒の老女、供の男に財布持たせ、「內儀樣御座りますか。今日御契約の日限ゆゑ、金子も渡し手形をも、極めません。」と腰かける。小晒悅び、「なぜに遲いと心待ちいたせしに、先づ此方へ。」と請じ入れ、「さて配偶には、大名方の若君の、おさし奉公と言ひ聞かせ、夫の判も預りしが、世間へも其の通りに、いうてさへ下されなば、茶屋郭の外は、何なりとも嫌はねども、先のお主の名を聞いて手形も仕度い。」とありければ、小聲になつて、「勿體ない。お山や女郎に遣るものか。先のお主は、さる御本寺の大寺の、悟り開いた長老樣。寢酒のお伽にそれ樣を、三年限つて置きたいとの御事。此方から沙汰が仕度うても、彼方がきつい隱密。三十兩は捨て金、四季のしきせにつかひ銀、未來も惡うはあるまいぞいの　サア金渡さう判なされ。」と、手形と共に出しける。女房はつと涙ぐみ、「如何に夫の爲なるとて、出家に思はれ、來世まで取りはづさん悲しや。」と、そゞろに淚はすゝめども、差當つて變替も、なく〳〵判をおしければ、價の金を讀み渡し、「たゞ今迎へを連れ參らん。御亭樣とも暇乞、門出祝うて待ち給へ。」と、忙

燒きつけでやけどすな。」と、雜言たら〳〵脇指拔けば、あら身の疵物。「こりや〳〵刀の身を見よ。竹の篦。扨も見事なお侍。冬としならば此の刀を、疊川に借らうもの。」と、一度にどつとぞ笑ひける。藤内涙にせきくれて、「盜人とは無實の難。天道も晴らし給ふべし。武士の刀に竹の篦、こそげても此の恥をすゝぐ事のあるべきか。舌食ひきつても死にたし。」と、我が身を摑み腕に嚙みつき、大地を蹈みつけ齒をたゝき、絞り泣くこそ道理なれ。いや〳〵少しき恥を忍んで、大功を立つるは丈夫の勇と思ひ定め、「これなう心あらん人は聞いて給べ。毛頭おぼえなけれども、折惡ければ言譯なし。さりながら一門兄弟歷々、主も持つたる者、我も望みある身なり。繩かゝつては一家の破滅。又後日に盜み人あらはれなば、此の家内主人下人、何十人あるかは知らず、犬鷄に至るまで、生けて置かぬが合點ならば兎も角も。されどもそれも無益の事、願はくは料簡あれ、某身上かせぎの爲、妻の女房今明日に金子三十兩、借り調へると申したり。刀の折紙、いか程か知らねども、盜人の實否立つまでは、右の金子を渡し置かん。逃げ失せる身にもあらず、所で人にも知られたり。繩を許して此の料簡、賴みいる。」とぞ申しける。家のおとな文平次、「ム、きこえた〳〵、好い言分。折紙は百貫、町人方の賣り道具、旦那の留守に失うては、此の文平次が譯立たず。三十兩あるに極まらば、五兩は某まどふべし。宿へ送れ取り逃すな。」と、兩人兩手を引張れば、一人は髻を取り、四方を棒にて取り圍

なるまいか。」と、皆までいはせず姫悦び、「おやすい事〳〵。將軍樣の御重代、天國小鍛冶義光、其の外名に負ふ銘の物、今日は御鏡開きにて、奥の座敷に飾られたり。玄關からは人目あり、それ露地口の錠明きやや。沙汰しやんな。」とゆふ節の、人に紛れて入れにけり。藤内三郎武治は、兄が歸るさ待伏し、投げてくれんと元の道、本阿彌の門の内、奥の露地口細目に明く。何かは知らず入つて見て、「叱られたら出る分。」と、獨語して身を細露地の、取次の桁緣の、障子を明けて牀の間の、牀に置かれし一腰の、好き折紙に相州物の、中に取つても出來心、盜むといへば氣もおくれ、前後棒鞘身は慄ひ、足もしどろに取つて出で、行き方知らずなりにけり。暫くありて家内には、「折紙道具失せたり。」と、家來は面々身開きに、上下騷いでとも吟味、出入りを詮索する處へ、露地より歸る盛治を、門外までつけだして、「盜人知れた。」とおつとり卷く。二郎騷がず、「これ〳〵卒爾せられな。我らは宇治の邊に居住の浪人。用事あつて出京し、女中方の誘引にて、御太刀頂戴いたせし分。うろんならば女中衆へ、尋ねられよ。」とことわれども、「ぬかす程晝強盜。旦那の留守をねらひ、女子子供をたらし、手の好い盜人、打てよくゝれ。」といふ處へ、外より歸る下部の男、「たつた今一二の橋にて、棒鞘の刀持つて、走つて下へさがつた。」といふ。「さてこそはや同類に渡したな。大小もいで搦めよ。」と、六尺中間立ちかゝり、「意地張らば打殺す。」と、ねぢふせて大小取り、「いやはや見懸け許りの金ごしらへ、

四といふ聲に、姫振り返り、「アレ彼のお人の拾うてぢや。意地の悪い。これ此方へ下さんせ。」とありければ、藤内眞顔になり、「誰方の羽子か存ぜねども、年の數つけば夏痩もせず、蚊が食はぬと申すゆゑ、ちとの間借りまする。女中方の大事の物、長うつきは致しませぬ。早うついてのけませう。一二三四五七八九。」と口早に數ふれば、玉椿打笑ひ、「お年は其のよに往きそむないが、數はたんと取らしやんす。ほんぐ\にお幾つが、ぢやうぢやまで。」と手を取れば、「ホ、ウお家程あつて好い目利。我らは丁度疵なしに二十六、羽子は疾うにつき仕舞ひ、これは又女共が名代に突く羽子なるが、なう此の女が、私に六十二の老女房、當年八十八歳。顔の皺は漣や、志賀の山越え頭は雪、それでも八十八ぢやとて、我が手に米とやられます。此の米の八十八、一日には突かれまい。數取り許りで仕舞ひましよ。十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、五六七八。なう草臥や。」といひければ、姫は羽子を引つたくり、「お内儀樣はあるまいが、いかに譃を言はしやんす。羽子突く事も上手なり、譃つく事も上手なり、だきつく事も上手であろ。此の抱付の上手奴に、抱かれて見たい。」とだきつけば、流石の藤内しよげになり、扇の骨で白壁に、小坊主書いてぞ居たりける。腰元ども取りついて、「扨も小氣な、往來も見る。門の内へ御入り。」と、手を取つて引きければ、藤内これぞ幸ひと思ひ、「何と此の家に、將軍より御預りの銘の物、數多あると承る。武士たる者の冥加のため、戴く事は

み合ふ。目の鞘はづしの下はゞき、身は竹刀拔きかねて、暫し挑みあひけるが、三郎飛びしさつて、「これ二郎、好い加減に引きもせず、我らが大小、本身でなしと侮るか。組み伏せて赤沼殿へ引いて行くも合點なれど、兄弟の好み許し置く。おつつけ大小調へて、眞劒の勝負せん。待つて居れ盛治。」と、上は立派な鞘口に、篦を遣うて別れける、心の中こそ不覺なれ。二郎見おくり、「弟と思ひ甘やかす情が、却つてあたまがちになりけるよ。」と、あきれて立ちし垣越に、とり〴〵響く羽子板の、音は娘の集まりや、笑ひに春の色籠る、祝儀も籠る、伊達籠る、情も何もかもの羽、雉子の風切り思ひ羽や、思ひの數を唄ひとふた三い四う、十二三までまだ君知らず、十五六から濡鷺の、羽子の數々年の數、よむ聲聞けば姿まで、さこそと思ひやり羽子は、正月めきし景色なり。藤内二郎も曲者にて、扨も間の好い羽子板の音、姿見たしと思ふ處へ、仕舞うて戻る、「萬歳殿、鼓を少しかしこへ寄つて見物せよ。面白い事して聞かせう。」と、戀もなり手の曲鼓。垣の内には本阿彌の、一人娘の玉椿、腰元までが拍子聞き、鼓に合はせてつく羽子の、打合はせたる如くにて三重往來もとまるばかりなり。しづ心なき春風の、羽子を吹き上げ横ぎつて、藤内が襟袖に、はら〳〵と落ちとまる。二郎袂に拾ひ入れ、鼓を渡し萬歳に、目禮してぞ返しける。羽子板もつて玉椿、腰元諸共走りいで、藤内には氣もつかず、其處か此處かと梅の枝、搖りつ振ひつ尋ねける。藤内羽子を取りいだし、扇を廣げて一二三

より、斯波の左衞門は勿論、宗徒の郎黨一人にても討ち來らば、三千石は相違なしと、これたしかな書中到來す。御內方の調へ給ふ金子、少々配分あれ。身のまはり大小こしらへ、斯波が面うち、赤沼殿に奉公し、三千石では仕好い事。二人扶持や三人扶持の御合力、兄貴其處邊は引きませぬ。」とぞ廣言す。二郎むつと空笑ひ、「兄なればこそ二人扶持の合力とは先づ過分。さりながら二人の兄が主と賴まん斯波殿の大敵、赤沼に隨ふ其方に、此の大切な金子與へて、敵に勢つけうとは言ひがたし。天下の忠臣賢人と呼ばるゝ斯波殿に、嫌はるゝを口惜しと思ひ、手を下げかせいで奉公し、斯波殿にも戀ひ慕はれんと思ふ心はなく、末賴みなき佞臣の、赤沼を主に取らんとは、道に背く無分別。おつつけ獄門の相伴せんずる瑞相。エ、笑止な。」と敎訓ある。氣短き三郎ぐつと急き、「春早々から獄門の相伴とは、兄ぢや人嬉しう御座る。此の三郎が相伴するか、賢人の斯波の左衞門を木のぼりさするか、今御覽ぜ。」と言ひ返す。「ム、さては斯波殿につく我々なれば、太郎殿も此の二郎をも討つべきな。」「オオまさかの時は、此の三郎も弟とて容赦はあるまい。すれば組んで落ちる一戰に及ぶ時、貴殿の首は某が討ちとり、兄甲斐には獄門の木を太うして、外よりは五六寸も高う上げてやらん。」といふ。二郎腹にすゑかね、「うぬが知行になる某が首、戰場までもなし。今でも取られば取つて見よ。」と、脇指に手をかくる。「イヤ此の三郎がとりかねうか。」「サア討て。」「サア來い。」と、柄に手を懸け、睨

ありやこりや、はつあ新玉の、春ぞ長閑なる。折知り顔に白梅の、路地の垣穗に咲きこぼれ、研ぎ拭ひたる玄關前。これは本阿彌の屋造と、目利したるも理なり。藤内三郎武治奥を見入つて、「これ兄者人。本阿彌右衞門太郎清祐が居宅、此の身代は羨ましからず。此の内に澤山な、銘の物の大小を持つならば、好い主取つて立身を致す物。何をいうても此の竹光、何時か此の無念さを、はるといふは名許り、心は未だ師走ぢや。」と、小首を投げて悔みける。二郎盛治聞きもあへず「浪人の町住居、鼓太鼓に武士の道忘れたかと思ひしに、頼もしの心懸け。然らば話す事のある。兄の太郎家治の主君、斯波どのは、近日義兵を起し、佞臣赤沼を攻め滅ぼさんとの用意と聞く。此處ぞ我等が立身の種。斯波殿の御味方に加はり、兄太郎殿諸共に、軍功を勵まんと思へども、刃物とては脇指一本、ちぎれ具足の一領も、才覺とて叶はず。如何せんと思ふ所に、これ女房は持つべきもの。黄金三十兩調へてくれうといふ。此の金子では、御邊と我が軍用意は物の見事、斯波殿の御手に屬し、藤内太郎二郎三郎と名乘つて、赤沼親子が首提げ、目覺し高名御感狀を拜受し、今の泣言やめうぞや。」と、語れども三郎は、少しも乘らぬ顏色にて「オ、主旱魃はいかず。斯波に扶持を受けんとは勿體なし。いつぞや兄太郎殿の肝煎にて、某奉公望みしに、氣に入らぬとてありつかず。斯波に嫌はれ無念の折節、赤沼入道幸滿殿へ、肝煎らんといふ人あれども、こしらへにもとでなく、延引に及ぶうち、犬二郎滿景

申せども、花實の時を違へず、實に陽春のとつくり燗鍋屠蘇の酒、三杯機嫌の朝ぼらけ。物まう、どれい。先づ當年の御吉けいはく慶庵。めつきり今年は若うなる〱、なる程〱、目出度い事の言種山草、穗長は白妙交讓木の淺綠、わつさりわさ〱、紙衣の袖にも春立つと、いふばかりにて銀かけて、買うた袴のしはすの氷、叩いて碎いて若水の、湯殿始め著衣始め、衣紋繕ふ若い者、藤内二郎同じく三郎、合はせて五郎は曾我に劣らぬ住家にも、ごまめなますの素浪人、雜煮の上置輪ん切大根、すんでんどうど打ち治まつた、時世に逢ふも他生の御緣、花の宴、緣から落ちたお乳の人、打つた處がふく〱福德、千歲を呼ばふ鶴の聲。此方に似あつて雀はちう〱、烏はかあ〱、鳶とろゝ、山の諸、勢のついたる妻戀猫、猫の化粧鼠の嫁入、ちゝつちつくり色をやる。戀から生まれた人間萬事、塞翁が馬のうつた太鼓の撥、狸がうつた腹鼓、うつたら鳴るべい、何になるべい、知行に成るべい。なれ〱〱〱、花に馴れ來し王城の町。其方は髙山去年の雪、これ香爐峯の心なんめり。簾を捲けばお肴に、嵐が雪をもつてきた山東山、西によね里戀郭、正月買ひの初君の、袖をつらぬる、裳裾をつらぬる。ぬる〱ぬつと出づる日影に、南枝花初めて開く、梅に鶯紅葉に鹿、獅子に牡丹昆布に山椒、小粒な男も陽氣をうけて、和歌を囀る、一曲奏づる。つる〱〱〱、つつた所を惠方棚賑ひ申す榮え申す、おさへ申す、食べ申す、色めき申す、ときめき申す、御亭を祝つて御禮申す。

れば其の通り、先づ新春の御吉慶。」「此方も。」「其方も。」「互に目出度い御越年。」「此の春よりの御悦び。」「十分の御仕合珍重々々。」「お杯は永日々々。」「然らば春永末永、月永日永。」年も壽命も永永と、傳はる御代の時に逢ふ、春の門出を祝ひける。

中之卷

ぼんじやり咲いて、匂うた梅の花がた見さいな、藤内二郎。アリヤコリヤ、殿ハナ、小鼓のヤ、えてもの。※あかうの胴に加賀革くれ、紅の調べを、千鳥がけにかけさせ、合はせ打つたるは、さつても打つた小鼓と、上の町下の町、どつとほめて通した。ほんのり明けてうたうた鳥の、懸聲聞きやいな。藤内三郎殿大鼓の上手で、しつたんにしつたん〳〵、七段つくる御百姓、明年は八段ぢや。さ明年は十六たん〳〵、丹波國の御百姓と、勇みうつたるは、さつてもうつた大鼓と、どつとほめて通した、はるめく大路ぞゆたかなる。ヨイ、一夜押開けて四方の春、空の顏にこやかふくやか、につこりほやりの笑顏は誰だァ。それだかこれだか、春の司の保佐姫君、霞の衣當流仕立、しやんと著こなす四尺八寸。あざを握つて押せ〳〵、おしこめ乘りこめ米俵、でつかり踏まへた大黑々々、※大黑舞と囃されて、天の戸袋だんぶくろ、くわつと開けた初日の色、あら面白やお目出度や。草木心なしとは

て某が向うたる討手なれば、むざと腹は切らせぬぞ。サア御邊の心底承らん。」とありければ、「ム、聞えたり、さぞあらん。此の左衛門も其の通り、勝秀は愚か、樊噲が討手なりとて、恐ろしとも思はず。諫言申すも君の御爲。死せる孔明、生ける仲達を走らしむといへり。死しても忠は忘れまじ。一旦都を立ち去り、御邊とも内通し、惡人を退け、我が君を名將と仰がんと思ひし處に、案に違ひ、御分討手とあるからは、浮世の望みも切れ果てて、さて生害に及ぶなり。弓矢取る身の討手を蒙り、手を空しうは歸られまじ、介錯せよ勝秀。」と、自害せんとする處を、「待て〳〵左衛門、實に滿足せり滿足せり。日頃語る傍輩の、かほどに心の合ふものか。此處は死する處でなし。筑紫方へも身を忍べ。我も本國に引籠り、世上の安否を内通し、佞臣の榮枯を窺ひ、義兵を起し討つて出で、惡人を攻め滅ぼし、聖賢に優る名將となさんとは思はずや。」と、理を盡し諫むれば、左衛門横手を打つて、「ハア、さうぢや過つた。君の御爲大事の命、此處は死ぬる處でなし。一先づ落ちん、御身も退くか。」「中々の事。」「やれ勝秀、斯程に揃ひし忠臣に、君君たらば、唐土も靡け從へ治めんものを、無念にないか勝秀。」「口惜しいは左衛門。」と、互に鎧の袖と袖、とりつき縋り泣き居たる、忠義の涙ぞ哀れなる。「ヤア時刻うつして益もなし、傍輩の縁盡きず。」「まれ逢ふ事は命次第。」と、泣く〳〵左右へ別れしが、また立ち歸つて、「これ〳〵思へば、明けていまだ對面せず。これ當年の逢ひはじめ。」「さればさ

えにけれ。斯波左衛門義將は、腹卷に小具足固め、侍には藤内太郎家治、若黨少々、旗指一騎相具して、都を隔つる山崎や、關戸の院にぞ著きにける。かかつし處に緋縅の鎧、月毛の馬に乘つたる武者、直兜五十騎許り引率し、「やあ〳〵左衛門、御暇申しすて、京都を開く慮外者、討ち取つて參るべしと、大將軍義教公の仰せを蒙り、細川右馬丞勝秀向うたり。引返せ。」とぞ呼ばはりける。左衛門聞きもあへず、「なに勝秀とや。たとひ千萬騎向ふとも、打物の續かん程、攻め戰はんと思ひしが、勝秀と聞くからは、すみやかに腹切らん、首取つて歸れ。」とて、どうど座を組み居たりける。勝秀馬より飛んで居り、「やれ待て左衛門。和殿が切腹に三箇條の不審あり。勝秀が武勇に恐れての切腹か、これ一つ。日頃水魚の傍輩の、討手に向ふ恨みの腹か、これ二つ。まつた浮世を輕く見て、身を見限つて切る腹か。三つに一つを言うて死ね。」とぞ申さるゝ。左衛門打笑み、「ホ、ウ流石勝秀程ありけるよ、問ひ憎い事を能う問うたり。然らば其方にも不審あり、人こそ多きに御邊が此の討手は、此の義將が諫言を、僻事と思ふか、一つ。但し某程の弓取の首取つて高名せんとおもふか、二つ。まツた佞臣赤沼と一味の心か、三つの中、明さば我も明さうず。勝秀如何に。」とありければ、「オ、尤もの疑ひ。某が心はな、管領の其の中にも、御邊と我は※斷金の契りなるに、我にも知らせず都を開くこゝろざし氣遣はしく、死すとも生くとも、朋友の交はりを違へじと、山名に討手とありけるを、請ひ受け

國をめぐむ糧盡きん。時には四海野心を含み、四夷八蠻一度に起つて、攻め來らんは必定。其の時には御寵愛の佞臣奸臣、味方を捨てて敵に下り、君一人敵の擒となり給ひ、元祖尊氏公の御勲功も一度に朽ち、御父義滿公の七寶八貨に、金銀をちりばめ造り給ひし北山の金閣、室町殿の花の殿、三條の紅葉の殿野原となつて、※梟松桂の枝に鳴き、狐蘭菊に隱れ棲んで、谺山彦ならで、誰か昔を訪ふ人の候べき。其の時には、此の斯波が詞を思召し出され、天を望み地をつまだて、臍を噛んで悔み給はん事、掌を指すが如し。三度諫めて用ゐざれば、身を奉じて去るといへり。左衛門が一生の諫言もこれまでなり。仲尼は炊水をうけて、衛の國を去り給ふ。某も其の如く、宿所へも歸らず、直に他國仕る、お暇申す。」と罷り立つ。赤沼判官つつたつて、「こりや左衛門。主君に暇出す推參者、あまさじ。」と飛んでかゝる。藤内太郎驅けへだたり、「ヤアおのれ如きの鏽刀が、主人の身に立つべきか。ま一度身もだえするならば、御前とは言はせぬ。」と、はつたと睨めば義教公、「やれ待て赤沼、討手を以て左衛門が首を取る。靜まれ〳〵。」と御諚ある。左衛門少しも臆せず、「討手とは有り難し。すみやかに腹切つて、穢首を差上ぐべし。さりながら討手の人は誰ならん。其の相手によつて、一戰の勝負を決し、討手の首を此方へ拜領いたし候べし、慮外と思召されぬため、御斷り申し置く。藤内太郎供をせい。」と、御前を立つて悠々と、顧みもせず立ち退きしは、臣下の手本、弓取の鑑とこそは 三重 見

氣色變つて、「折こそあれ祝儀の座敷。おのれ一人智慧ありげに、愚將とは誰が事ぞ、罷り立つて閉門せよ。」と、おほきに怒つて仰せらる。左衞門つゝと進み出で、「愚將と申すは我が君の事よ。愚將と申すが御耳に觸る程ならば、など佞臣忠臣の詞を聞きわけ給はぬ。淺ましさよ愚かさよ。御祖父義詮將軍、御父鹿苑院殿義滿公、御舍兄勝定院殿義持公、御先代義量公、我が君までは五代。我々は三代管領職を承つて、終に閉門の例候はず。左程あやまりある左衞門ならば、閉門までもなく、御指料をもつて御手討になさるゝか。たゞし御氣に入りの赤沼入道、子息新判官、此の歷々に討手を仰せつけられ、軍勢をもつて此の左衞門を、など攻め滅ぼし給はぬぞや。オ、赤沼なんどの手に及ばぬは理々。軍といふは、酒宴遊興に事かはり、命づくのものなれば、鯨波の聲矢叫におそれて、馬より落ちて目を廻さんより、追從言うて世を渡るが、一段の思案ならん。エ、これ我が君、莫耶を鈍しとし、鉛刀を銳しといひ、周の鼎を棄てて、瓢簞を寶とするといひしは、御身の上と御存じなきか。麒麟も繫がれて動かねば犬猫に同じ、渴しても盜泉の水を飮まずとは、義者の恥づる處。※章甫の冠を沓にはかれんより、首陽山に蕨餠をねり、汨羅に沈んで、江魚の腹中に葬られんには如かじ。某都を開きなば、赤松細川畠山、結城長沼仁木石堂、大內今川山名京極宇都宮、凡そ名ある諸大名、賴もしげなき世をいきどほり、面々分國に引籠らば、民百姓は貢物を私し、地頭郡司に收斂ありて、

御笞めを恐るゝ由。それ程の事は、某が申譯をして遣らん。エ、氣の狹い左程のこと、氣苦勞に召さるゝな、左衞門殿。」とぞ申しける。藤内太郎飛んで出で、威丈高になつて、「これ入道、兩刃の劒にて人を切るに、振り上げさまに、我先づ切らるゝといふ譬へあり。まづ其の如く、人を惡に陷さんとて、身の惡を囀るか。其の御笛は、此の藤内太郎家治が預り奉り、先日北山の御門にて、一色大炊介を、己が賴んで切らせたを忘れたか。功ある者の心懸け、實の小水龍は庫に藏め、影を作つて持つたる故、うぬが賴んで切らせたは、其の影の笛なりしは、うつけ者。誠の小水龍といふ御笛、天曆の帝の敕筆の銘ありて、天下の大事におのれと鳴る。たゞ今も音を出し、怪しさに馳せ參ず。これを見よ。」と差出し、「これ程大事の御寶を、何として御邊は大炊介を賴んで、切れ折れとは言ひしぞ。笛を切るが好きならば、おのれが咽笛切り折らん。」と、つめかくれば義將、「ヤア藤内。御前といひ、主をさしおき憚り千萬、罷りしされ推參者。赤沼入道ともあらん人が、笛を切り折り、遺恨を晴らすなどといふ、若輩わざのあるべきか。よしそれはあるにもせよ、上は天下の武將たり、御譜代忠功の斯波の武衞、笛一本に思召しかへられんや、とは思へども忠臣をいとひ、佞臣に心を許し、酒宴妓樂に御目眩み、枕元の太刀刀、取らるゝ程の大愚將。山鷄を鳳凰とし燕石を玉と見て、國を失ひ身を破り、名を末代に損ひ給はん、口惜しの御所存や。」と、拳を握り席を打ち、涙をながして教訓ある。大將御

身ば衣紋引きつくろひ、御太刀持つてしづ〳〵と、廣間に立つて、「お小姓衆〳〵。斯波左衛門義將御機嫌伺ひ申す。」と、高々と宣へば、「すは左衛門よ討ち取れ。」と、赤沼親子犬二郎、「心得たり。」と出でけるが、流石五常の德備はり、威あつて猛からぬ忠臣の、威光に氣を呑まれ、「ヤア斯波殿奇特の御出で。」と、手をもんでこそ居たりけれ。大將、斯波と聞き給ひ、寢惚れ髮に烏帽子引懸け出で給ふ。左衛門につこと笑ひ、「義將は今宵めづらしき夢を見、御物語の爲伺候仕る。いやはや夢はをかしいもの。これ赤沼殿、御氣にばしかけられな。貴殿逆心の企てにて、尊氏公より御相傳の御印判を賺しとり、御腰元の中川を瞞し、御太刀を奪はせ、罪を某に負せて、此の左衛門に切腹させんず謀と、まざ〳〵と見たる夢、覺むるとひとしく、枕元に此の御太刀のあつたるは、何と正夢とは思さぬか。夢なればこそ御仕合。若し誠にてあるならば、赤沼どのでも青沼どのでも、御前にてたゞ中を、親子つなぎに突き拔くか。また一戰に及ぶとも、わぬしごときの相手に、騎馬を向けるまでもなし。左衛門が足輕十騎ばかり差向けば、朝がけに擒つて洛中を引渡し、なんでも柱一本の、主にしてくれんもの。さりながら春の夢は合はぬもの、必ずお氣にかけられな。」と、かんらからとぞ笑はるゝ。赤沼も言ひ込められじと、「いやこれ義將、和殿が今のいひぶんは、其の身の過り、人に言はせぬ前置きに、かさから出る詞なりと、此の入道は聞き申した。ォ、思ひついたり。御預りの小水龍の笛を打折り、

將は、今宵しも小水龍の、おのれと音を出す不思議さよ。君の御事氣遣はし。」と、人馬も具せず、藤内一人提灯ともさせ、雪蹈み分けて赤沼が、門の此方に著きけるが、俄に持たせし提灯の、吹き消すやう消えてけり。塀の内より白鷺の飛ぶ如く、雪うづまいて提灯に、映るとひとしく女の姿、白衣白髮白妙の、雪女ともいひつべし。左衞門主從、太刀の柄に手をかくれば、「なう見忘れ給ふか藤内殿。たがひに忍びて落ち合ひの、漏らさぬ水は御身と我、思ひ二つの中川が、幽靈これまで來りたり。口惜しや、赤沼親子逆心にて、君の御判を奪ひ取り、みづからには御太刀を奪はせ、左衞門樣我が夫にも、其の科おほせて失はんたくみと知らで盜み出づる、道の前後錠下し、今宵の雪に埋もれて、凍やかし殺されし。此の世から八寒の、苦患は我が身一つにて、いとし可愛の我が夫主從の御命、助けたや救ひたやと、おもふ一念こほりつき、たゞ今知らせ申すぞとよ。此の御太刀を義教公へ差上げ、御身のいひわけ立てて給へ。名殘惜しの我が夫や。此の世の緣の薄雪も、ながき契りは厚氷、結び添へ結び添へ、生々世々によも解けじ。さらば〳〵。」と泣く涙の、霙と消えて失せにけり。藤内涙を押拭ひ、「おのれ入道奴、妻の敵國家の仇、首引き拔いてくれんず。」と跳り入るを、「やれまてこれは一應ならず。申しても天下の大事。大將の御座といひ、御直衆に慮外せしといはれては理非立たず。これに控へて窺ふべし。罷り出でば勘當ぞ。」と、なだめ給へば藤内太郎、「あつ。」としづめて控へたり。其の

あらしは五體をつんざけり。袂はまいて防げども、襟に溜りし雪解けて、膚は水に浸さるゝ、足は膝まで埋もるゝ。鬢の氷柱は白銀の、瑤珞かけし如くなり。「ア、寒や苦しや。」と、顫ひあがりて齒も合はず。「通ひ路ならでこれも亦、男の爲ぢや戀ぢやもの。此處を一つこらへう。」と、身を抱きしむれば息切るゝ。雪にて口を濕せば、身の内までもしみこほり、寒苦鳥の苦しみかや。「立ち歸つて湯一杯。」と、腰まで埋む大雪を、押し分け踏み分け遣戸にすがり、押せども引けども明かばこそ。「南無三寶、誰かは錠を下せし。」と、立ち歸れども時の間に、分けこし跡を降りうづみ、波路を凌ぐ其の風情、土戸ばなほも明かばこそ。次第々々に降り重なり、身も埋もるゝ其の苦しさ。「エ、さてはたばかられたか、口惜しや、病に臥し刃に伏し、火水に死するはあるならひ、殺しやうもあるべきに、雪に凍やし殺さんとは、おのれ入道奴、むざ／＼とは死ぬまい。」と、埋るゝ雪を這ひ出づれば蹈み沈み、這ひ上り蹈み落し、嵐は咽に吹きせまり、呼ばはる聲も立たばこそ。手足も凍え身も冷え渡り、「寒やつめたや苦しや。なう藤内殿々々々々我が夫なう。ま一度逢うて死にたいぞ。」と、雪にくひつき涙の氷、眼も口も閉ぢられて、天ぎる雪はばう／＼／＼、寒風しきりにさつ／＼／＼と、五臟六腑にさす如く、息のたもちもあらばこそ。二十の春の花待ちあへぬ、雪に先立ち消えけるは、あへなき最期や。諸三重 東南に雲起つて、西北に風靜かならず。夕暗の空も轟く雪も夜の、あら物凄の景色やな。斯波左衞門義

上には事ない九獻にて、御盃の最中、そつと御太刀を取りませう。」「オ、それ〳〵目の覺めぬ先、片時もはやう太刀刀奪ひ取り、高遣戸の小庭から、椿畑の妻戸を明け、鞠場の口に待たれよ、土戸の錠を明けさせん。それを合圖にそつと拔け、左衞門方へ落ちられよ。呑みこんだか、仕損ずまいぞ。」「ア、身にかゝつた事ぢやもの、其處らに氣遣ひなさるゝな。」と、奥をさしてぞ入りにける。「そりやまた彼奴も食はせたわ。屋敷の内をうろつかせ、曉方に引捕へ、斯波左衞門逆心にて、家來藤内が密通の女に、御太刀を盜ませしと、證據をいだす上からは、好い仕合で切腹道具。今宵は如何した夢がな見る。」此方はまことの寶舟、舳先が向いた、飲めきほへ。」と、勇み頭をふる 三重 雪空の、雲凄まじく更けにけり。時分は好しと中川、義教公の枕の太刀、奪ひ取つて出でけるが、思へば品こそ替つたれ、慾心ならで此の太刀も、主の目拔の盜み物、生きる死ぬるの切羽ぞと、心も後れ手も顫ひ、持つたる太刀の柄鮫や、鰐に追はるゝ心地して、檜書院に出でにけり。遣戸をそろりと明ければ、吹雪と跡の恐ろしさ、すくむ心の駒下駄に、「怪しめらるなエ、儘よ。」と素足の雪に飛び下るれば、劒を踏むが如くなり。後より赤沼つけ來り、遣戸に錠を下せども、中川それとはしら雪を、打拂ひ〳〵、土戸を押せども開かねば、「さてはまだ早かりつ。」と、しばし待つ間のかきたれて、こぼすが如く降る雪の、庭も埋れて白妙に、立ち寄る檐も横吹雪、袖打拂ふかげもなし。佐野のわたりもさのみやは、

「サア熊橋してやつた。いかに厄を拂ふとて天下を治むる此の印判、人手に渡すうつそり、滅ぼすに思案はいらず。むづかしいは斯波細川、此の判を以て義教の下知と僞り、鎌倉勢を催し、一戰に討ち取るべし。此の年越からまんが直つた。これ熊橋、來年はめつきりと好い年取らせう、精出せ。」とうなづき悦ぶ折節、御腰元の中川、つか〳〵と走り出で、「これ赤沼殿、只今の御判はお厄落の呪ひに、すこしの間お預りかと思ひしに、戻さず其處に留め置いて、なんとやら密々と、私はどうとも飲込まれず。女子なれども、御臺さまよりおつけなされた此の中川。サア其の御判を戻さうか、戻さぬか、戻しやらねば思案がある。」と、男優りの氣色なり。入道動ぜぬ面相にて、「オ、好い處へ來召された、これにこそ仔細あれ。斯波左衞門義將諫言申すが御氣に入らず、密かに諸國の軍兵を集め、左衞門滅ぼす御催し、それを聞いて笑止さに、御判をさへ取つたれば、軍兵一騎寄せる事もかなはぬ故、やうやうすかし取つたる御判。聞けばそなたは斯波が家來、藤内太郎家治と夫婦の契約して居るげな。これについて大事がある。藤内太郎は御預りの笛を折る、それを越度の仰せにて、今宵これへ召し寄せて、お手討になさるゝ筈。今宵さへ過しなば、明日某御訴訟まうし、藤内は助くべし。どうぞお側の刃物ども、盜む事はなるまいか、如何にしても笑止な。」と、誠しやかに言ひければ、さすが女の一筋に、「ア、忝き御しらせ。夫の命助くると申し、斯波殿とても夫の主人、よしなき疑ひ恥かしや。

めり〳〵と、くたばり外れにあやかりなされ。父等母等に爺嬶息災、めなご小倅産みの儘なる餓鬼十二疋、錢金俵や小袖の中から、目玉むき出し耳朶でつかく、五百八十七曲、惡魔外道打拂つて、西の海へ打投げろ。こつきやつこう。」と祝ふとかや。此處に名に立つ色郭、揚屋女郎の厄拂、又珍らかにかくもなん。「あら〳〵目出度や此方樣の、御壽命中さば苦海十年、蠅がとまつて鶴は千年龜は萬年。浦島太郎が重箱肴、紋日々々は一歳に、かず數の子も御盛んや。何時大服の茶は挽かず、揚屋にいりこくら鮑、幇間相客宿屋駕舁のつけとゞけ、こそ〳〵宿の情事、身揚分のおどもりも、東方朔が九千兩。それで殘らずうめ干。井戸へ釣られた大黒天も、好い客蹈まへた俵子や。蜜柑柑子だい〳〵盡、子の日の松や根引きのよねん。三年前の紙纏頭空纏頭捨てた古懸。今年はくる〳〵郭の全盛。火燵に火を爲い、牀せい酌せい。酒はこぼすと仕著はいとはじ。禿がぶんぜに駒は古さに、寶引骨牌をうつつら王子が八千歳。女郎に口說の痞も下り、やりてはきはの血の道なく、揚屋々々の賑ひは、二階中の間奥座敷、いつ客む客しつきやく入れず。扨こそ不審はるの日の、長ういらぬは見せかけ大盡※、わるごう末社の、ちよつと借り著に食ひ物吸ひ物、小言いふ人、親父の意見に手代の始末、一つ買うては三度借る客、これが郭での惡魔外道、打拂うて西の海へさらり〳〵こきやこう。」とこそ拂ひけれ。大將猶々御杯の、數も睡りも傾きて、伺候の女に誘はれ、寢殿深くいり給ふ。入道親子見おくり、

方には御存じなし。御身の大事とある物を、捨つるといふて東に預けられ、厄拂の詞をのべてまじなへば、惡病邪氣を除くと申す。疾く〳〵行ひ奉らん。」とぞ申しける。義教公、佞臣の詞を實と信じ給ひ、「幸ひこれに先祖よりの印判、軍兵集め關所廻船、日本を治むるも此の判一個。これをしばし預くる。」と、錦の袋に入れながら、「サァ捨てた。」と投げ給へば、「お厄は我等拾ひのけ、四魔三障祟りはなし。これ女子ども、都の町の厄拂、物は呪ひ出るまゝに、拂ひ申せ。」といひければ、「あつ。」とこたへて口々に、厄拂をぞまねびける。

初春厄拂

「やあら目出度や。此方の御壽命申さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が八千歲、東方朔が九千歲。西王母が桃の核、猿豆小豆、親もまめ鳥雛鳥の、はがひ重ねに寶は集まる、家は治まる持丸長者の、四方に四萬の藏の戸前のあけ行く年から、福神達の御影向。一に市姬辨財天女、二は西の宮若惠比須殿、三は三面大黑頭巾の襞の數々、十二箇月は無病息災、其の身は鐵槌打出の小槌、打つて打ち出す金錢銀錢、福德圓滿惡魔外道、打拂うて西の海へ、さらり〳〵さつ〳〵こきやこう。」まづ斯う祝ひ納むるは、これ上方の厄拂。さて又東國の果てにては、かくこそ厄を拂ひけれ。「お厄拂〳〵。厄つつ拂ひ申すべい。がいに目出度い此方の御壽命、語るべいなら、鶴と龜奴が何打食らつて、すつ百萬年の

事を承る御厚恩には、御身の上、奈落までも隱密ぞや。はや夜も明くる　落ち給へ。」と、別るゝ方の禮者の聲、物まう春の御年玉、取りかはしたる扇子箱、にほん目出度き年越や、今日から一つ年の數、ますに煎豆福は内、鬼は外面に深雪、柊に鬼も恐るゝと、鰯の頭梅が香の、ほどけ初めたる下紐は、心ありげにつちのこまで、春めく御代こそ　三重　ゆたかなれ。御大將義教公、赤沼が館に入御あつて、追儺の御祝儀行はる。年男には熊橋犬二郎滿景、御年豆を獻すれば、赤沼前司入道幸滿、子息新判官則久御前に畏まり、「冥加に餘る御成り、一家の面目此の上や候べき。然れば、毎年御所にての御祝儀は、斯波畠山細川なんどをはじめ、馬鹿慇懃の頑侍、卷舌の諸禮、折目正しき正月詞、さぞ御窮屈と存じ、某が御馳走には、御供の諸大名殘らず退出致させ、古流な事をさらりと止め、奥方の女中の中の通り者、其の外洛中に娘子供の色好きが、御座んす詞の酒のこなし、上覽に入れん爲、召し寄せ置きて候。」と、かねて支度の色揃へ、御腰元の其の中に、心意氣も風俗も、これ當流の眞中川、酒になりての名人さ。飮まずに人をおさよの君、琴三味線の撥音は、誰も袂にすがとかや。扨又町には、姉が小路の針屋の縫、紺屋のお染、白粉屋の艷、絲屋の房、舞子踊子、小唄の節、上手に座敷を持ちければ、猶御機嫌は義教公、烏帽子の紐も直垂も、打解け給ひ膝枕、足さすられつ御腰を、うつゝともなき酒宴なり。入道時分よしと思ひ、「さて節分の夜、厄拂と申して民間には行はれ、上つ

炊介久常といふ奥小姓。此の女は御臺所に小田卷といふ御腰元。阿漕が浦のぬけ舟も、度重なりし通ひ路の、赤沼入道幸滿に見つけられ、御成敗たるべきを、直に入道が計らひにて、隱密に命を助け、御所を夜脱けにせさせ、此の恩賞には、御門前に藤内太郎相詰めたり。お預りの笛を二つに切り折つて得させよといふ。心得ずとは思ひながら、一旦の恩を受け、否といふは卑怯と思ひ、扨こそ笛を切り折つたれば、入道が恩は報じたり。扨これからは其方への話。入道が根心、上へ對して其の意を得ず。御分が主人左衞門にもいひ聞かせ、必ず油斷あるべからず。某身にも望みあり、正八幡ぞいつはりなし。何と落してくれまいか。」と、理非を決して語りける。「オ、一色大炊介殿、承り及うだ。お身柄と申し、御誓文虛言はあるまじ。さりながら、明朝は御松囃のお觸なるに、はや東雲におよべども、其の沙汰なきは樣子ぞあらん。御前向きを有體に、承らん。」といひければ、小田卷聞いて、「ム、さては御存じ候はぬか。昨夜俄に變替り、松囃は明日の晩、赤沼の方へ御成りにて、節分のお年取御遊覽とのお事にて、皆々お觸が廻りしに、たとひお觸がないとても、御前の事を知らぬとは、エイ好い加減な事ばかり。傍輩の中川殿と、此方樣との挨拶が、たいてい竝の事かいの。奧の事はつつぬけ、飛脚よりましぢやもの。知らぬとは小面にくう、打ちたいまで。」と笑ひける。「ア、音高し音高し。さては赤沼奴が此の笛をあやまたせ、我々主從越度にせんとて、御祝儀までを延引せし。一大

内太郎は笛の役、御預りの小水龍、餘寒の風に吹きそらし、まだ夜も深き五更の一點、虎の御門に著きにけり。太郎挾箱に腰うちかけ、「御松囃は辰の刻との御觸なれば、役人伺候の諸大名、夜の中より羣參あるべきに、御所の内ひつそとして、御門も未だ開かれず。不思議さや退屈さ。奴に持たせし煙管筒、一服ついで燻らする。目覺草は初鷄の、八聲も鐘もかすみ行く。門の檜皮を踏み越ゆる、霜の振袖角前髪、取りかはす手もわな／＼と、女が帶の若紫、茶宇の袴の忍摺、亂れ逢ひにし密通の、驅落とこそ知られけれ。「咎めて無益、見ぬ顏せん。」と、下人等にも囁きて、築地の陰に忍ぶとは、見ずや知らずや門松を、傳ひ下りたる人も木も、連理の女松男松かや。太郎いよ／＼身をかくすを、彼の若者きつと見て、打物拔いて弓手より、聲もかけず打ちかくる。刀の柄にて拳を打ち、太刀振りおとさせ、二の拍子にて、胴骨あて踏みつくれば、女は又右の方より打ちかくる。拳を打たんと持つたる笛、振り上ぐるをつけいつて、笛を二つに切り折つたり。「すはしれもの。」と取つて引き寄せ、二人をどうど引敷いて、「ヤアこび過ぎたる奴等かな。斯波左衞門が家來、藤内太郎家治ぞ、知つつらん。おのれ等不義の驅落見のがしにする處に、かへつて手向ひ、剩へ御預りの笛を切りをる、言語道斷の始末、白狀せば許すべし。いつはらば繩をかけ、四職衆の白洲に引据ゑ、一家一門の恥を見るか。サア分別次第。」と申しける。若者臆する氣色なく、「オ、藤内太郎よく知つたり。我は一色が末子、大

雪女五枚羽子板

上之巻

樂車うつて囃した、樂車うつた見さいな藤内太郎。アリヤコリヤ。殿ハナ、笛吹きのヤ、家で、紫竹寒竹、埃をさ、さつさと拂うて、到來の〳〵。御年玉は到來の、此方からも遣らいのと、合はせ吹いたるは、さつても吹いた笛吹きと、どつとほめて通した。門松立てて囃した。御松囃を見さいな藤内太郎。アリヤ、コリヤ、殿ハナ、斯波殿のヤ、御近習、弓矢打物お馬をさ、さつさと乘り初めや、蓬萊の〳〵榧搗栗膝栗毛、熨斗昆布に川原毛と、祝ひのつたるは、さつても伊達なお侍と、どつと都にほめにける。主君斯波左衞門義將は、當家の管領たるによつて、藤内太郎が文武の器量、將軍義教公の上聞に達し、御直の諸武士同然に、年頭五節の御目見え、殊さら笛の達人にて、小水龍といふ名管を、上より預け下さるゝ。そも此の笛は、天曆の帝の御寶物、國にあやしみある時は、吹かぬにおのれと音を出す神妙あり。御先祖尊氏將軍より、代々に聞ゆる笛の音の、ひいや兵亂治まりて、寶祚百王のかためたり。時は永享八年正月三日、將軍家の御松囃、北山の御所にてあるべしと、藤

無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。」を、一つ蓮華にと、ぐつとつきぬく一刀、「わつ。」と叫びし一聲の、あはれはかなき最期なり。「今のは何處ぢやや、サア知れた。」「其處か。」「此處か。」「いや〱南に聞えた。」と、谺の響は氣もつかず、皆生玉へと走りける。見つけられじと德兵衞、畠の中を西東、此處にかゞみ、彼處に忍び、「今は嬉しし一緒に。」と、房が死骸を尋ね寄る、道も心も埋れ井戸、踏みはづしてかつぱと落ち、水のあはれや汲み上げて、重井筒の心中と、御法の水をぞたゝへける。

心中重井筒　終

我が身にさしあて忍び泣き、男は力なみだに迷ひ、刃物持つ手も弱々と、女の膝に伏し轉び、覆ひ重なり泣き居たり。石の鳥居の彼方より、女子の泣く聲子の泣く聲。「南無三寶我が家の提灯、女房子供家來ども、見つけられては情なし。小橋の方で死ぬまいか。」と、立ち上らんとせし處へ、はや道傍まで尋ね來て、間は僅かに半町に、足るや足らずも因果の隔て、百里も同じ如くにて、近き甲斐なき千賀の鹽竈、身を焦すこそ哀れなれ、妻のお辰は宵よりの、涙と霜に袖こほり、物言ふ力もなき中に、「あれ〳〵夜明も近づくか、鴉がいかう啼くわいの。外の驅落走者と違うて、明日尋ねうとはいはれぬ。死にに出た心中なれば、とくに命はもう無い人。あさましや悲しやな、女房子の無い人ならば、殺すまい死ぬまいものと、さぞや最期のくやみ事、お房がうらみも思ひやる。思へば私がある故に、人二人殺すよな。位牌に對うて言譯ない、冥途の旅を連れ立たん。」と、下人が指いたる脇差に、取りつく處をもぎはなし、「これはいつきよう。此の子はいとしう御座らぬか。」と、止むれば小市郎、「母様死んで下さるな。」と、嘆く聲さへ身にしみて、野邊の霜風小夜嵐、丁稚の三太もうろ〳〵涙、「心中といふものは、いかう寒いものぢや。」とて、共に袖をぞ絞りける。德兵衛囁きて、「月は傾く東は白む。ためらうて今の間に、見つけられんはあさまし。いざ何事も、宵よりいうた通りぞや。」「おう。」とうなづくばかりにて、涙にものをいはせつゝ、夫の膝をしつかと押へ、あふのき待つたる口の内、「南

も御身とわが、積る涙の雫かや。西に嵐のふき晴れて、空は冴えても我々は、戀慕の闇に暗がりに、よしなき事を仕出して、東の果てに名を流す、それに劣らぬ歎きぞと、いとゞ思ひにくれ竹の、節を習ひし淨瑠璃も、餘所の事よと慰みしが、今身の上に降る霜の、一足づゝに消え失せて、死にに行く身の味きなや。あれ見返れば人聲の、我を尋ねて高津の町を、急ぎ遁るゝ鰐口や、賴みをかけし御經の、此の三界の衆生は、皆是れ吾が子と聞く時は、親諸共に到るなりけり。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。五逆の提婆は天王如來。龍女の成佛する時は、煩惱菩提となるぞたのもし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。六萬九千三百八十四文字を、たゞ此の七字に納まりし、大曼荼羅や斑雪、雨にも風にも詣で來て、朝は現世、夕は後世、此の世彼の世の二面、今宵一つにならの葉の、影は浮世の塵芥、共に命の捨場ぞと、大佛殿の勸進所、身を捨つる藪となりにけり。涙に迷ふ其のなかにも、男はさすが男にて、「なう世間を聞けば、女先立ち、男は後に死にぞこなひ、見苦しき沙汰に遇ふ、無念の上の死恥ぞや。まづ我から。」と脇指を、ぬかんとすれば抱きつき、「なう待つて下さんせ。今死ぬる身といひながら、大事の夫が目の前で、朱に染つた體を見ば、氣も狼狽へ目もくれて、如何してか死なれうぞ。なから死にして恥さらし、此方様の死骸の、帶解き紐解き打ちかやし、詮議のあるをじろ〳〵と、そもや見て居られうか。私から先に。」と手を持ち添へ、

つたどりつ傳ひ行く、道は三途の瓦葺、霜の劒の山冱えて、此處に地獄の鬼瓦、左手も右手もおそろしく、遁れ〳〵て行末は、今ぞ冥途の門出と、これを限りの立酒や、樽屋町にぞ三重迷ひ行く。

下之巻

ちしほのおぼろぞめ

唄筒井筒、井筒の水は濁らねど、今は涙にかき濁す、月も袂にかき曇る。晨の雲夕の霜、仇しが浦のうつぼ船、みを無き物と知りながら、いとしにくしの戯れも、しばし此の岸彼の岸の、假の現の假橋や、藻に埋もるゝ牡蠣船の、苫の隙間の燈火の、風を待つ間の影よりも、明日まで待たぬ我が命、我と失ひ兩親の、育てし御恩は如何せんと、歩みもやらず泣き居たり。送り迎への色駕籠も、しばし途絶えは何處にも、馴染々々の寐入りばな。我が身は今宵散り果つる、名殘盡きせぬ濱側の、此處は竹田か夜は何時ぞ。五つ六つ四つ千日寺の、鐘も八つか七つの芝居、二人が噂世話狂言の、脚色の種となるならば、我を紺屋のかた岡に、何とか思ひ※染川は、臺詞に泣いてくれよかし。包む袂のひだ※之掾、ふたつ遣ひの手妻にも、かかるなり振うつすとも、此の思ひをばよも知らじ。去年のお※嶋の心中の、其の井筒屋に我がいま、重井筒と※篠塚に、いはれ※若井半四郎、うれひ臺詞の※菖蒲草、露のおとし

る。徳兵衛兄ながらうらめしくや思ひけん、「とてもの事に眞黑に、焦げるまであたつてお歸りなされかし。」と、いへども流石一言も、いはは木をわけぬ人心、奥の一間に入りにけり。徳兵衛は小腹立ち櫓も蒲團も一つに摑んで取つてなぐれば、咸陽宮の煙の中に、顏も手足も紅の、房は目許りじろ〱と、物をも言はず片息の、性根も亂るゝばかりなり。漸うに抱き上げ、袂にあふぎ身をさまし、花活の水幸ひと、顏に灑ぎ口しめし、すこし心もさわやげり。「サアあにきまでが知られたり。何面目にのめのめと、人に面をまぶられん。いざ此の處で尋常に。」と、脇指取らんとせし處を、「さうさへ覺悟極まれば、嬉しい〱。さりながら此處で中々思ふ樣にもなるまい。屋根傳ひに裏へ脫け、樽屋町の門へ下り、宗門なれば日親樣の御門で、死なせて下さんせ。」「オヽ、尤も〱、有り難い心ざし、サアおぢや。」と立ちけるが、「サアそなたは法華、我は淨土、願ふ所が別なれば、先のいきばも覺束なし。宗旨をかへて一緒に行かん。今題目を授けてたも、疾く〱。」と手を合はすれば、房は不覺の涙にくれ、「私に淨土になれとも言はず、法華になつて下んする、さても嬉しい心やな。勿體ない事なれど、今まで每日千遍宛、五年唱へた題目の、功德で赦したび給へ。」と、互に合掌心をしづめ、「今身より佛身にいたるまで、能く持ち奉る南無妙法蓮華經。今身より佛身に至るまで、添はせ給へ添はせて給べ。」南無妙法の力を賴みに、しつかと負うて上る二階や、三重屋根の棟、鷲の峯ぞと一筋に、這う

と、火燵にあたるうたてさよ。「ヤア火燵の火が薄い。これ女房ども、火をくわつとおこいて、ひかきに二三杯持つておぢや。」と呼ばはれば、徳兵衛ぎよつとして、「まうし〳〵火のきついはお毒。御無用に遊ばせ。」「いや〳〵裾が冷える。膝節のこげる程なが、此方は好い。」といひければ、「平にそれは火の用心と申し、膝の皿に火がついたらば、御身體の妨げ。」と、いへども兄はこらしめと思ひ、意地悪う、「火を早う持つておぢや。」とぞせがみける。「ア、申し、お前は病氣で引籠つて、世間を御存じ御座らぬ。此の冬から何方も、火の強い火燵すたりもの。北脇邊の好い衆は、大方火燵に水を入れるげに御座る。重井筒ともいはるゝ身が氣の通らぬ。火燵に火を入れなんどとは、さりとてはお笑止な。あれおか樣、火は入らぬと仰しやるゝ。」と身を踠く。其の間に火かきは、焦るゝ紅葉を盛つたる如き池田炭、遠慮もない儀が火燵にうつし、「サアあたらんせ。」と言ひ捨てゝ、臺所にぞ出でらるゝ。側で見るさへ徳兵衛、身も焦げ渡る心地にて、「兄者人其の火で熱うは御座らぬか。いつその事に火炙にならしやれぬか。此處まで火氣が來まする、ちと埋けて消しませう。」と、寄らんとすれば、「其のまゝおきや。」と、止められては火燵より、胸を焦すは徳兵衛。房は涙の埋火に、燒きつけらるゝ身の苦しみ、蒲團の陰より手を出し、裾に取りつき堪へんとするにたへ難き、地獄もかくやと不便なり。主人も一旦こらしめの、さのみは哀れと思ふにや、「ア、あたゝまつた、もう歸る。其方もやすみや。」と立ち歸

がみつき、絶え入る許りに泣き居たり。「オ、聞かねど萬事至極した。さりながら其の詞嬉しい樣で怨みあり、本妻あるは知れた事、同じ口で諸共に、死んでくれというてたも。京の便りを大事に思ひ、騙り同然の才覺にて、銀四百日借り出し、一時許りは懐にあつたれども、兎角二人に死脈が打つ。何處も彼處も一時に、潮のさいて來る如く、ばら／＼と首尾わるく、もとより理をもつ女ども、理窟をつめて恨み泣き、いかな張良樊噲でも、道理にむかふ矢先はない。銀も渡す其の場にて、見す見す誣の空誓文。とても遁れぬ此の罰、佛神を待たずとも、此方から當つて埒明けんと、道から胴は据つたり。死に直しは二度ならぬ、喞ち顔は曲もなし、手に手を取つてにつこりと、死ね死なうというてたも。」と、火燵に顔を打投げて、世にあぢきなき涙の體。「ナウさう思うてが定かいの。思ふが不思議か、夫婦ぢやもの。」「ほんにさうぢや忝い、嬉しう御座る。」と抱き合ひ、聲を立てずのしぼり泣き、炭火も消えて氷るらん。奥へかくとや聞えけん、兄の聲にて、「なんと徳兵衛、痛みは好いか。」とごつ／＼せいて來る音す。「やれ隠れよ。」と狼狽へて、房を火燵に押入れ、蒲團被せて徳兵衛は、上にもたれ覆ひになり、顔もきよろ／＼なりにけり。程なく主人立ち出で、「物言ふ聲の聞えたは、誰であつた。」と不審顔。「いやそれは私寐言がな申したか。但しお前が病み耄けて、空耳でがな御座りましよ。歸つてお寝みなされ。」といへば、「イヤいかう夜が寐憎い、咄しさいた西國の物語して聞かせう。」

火燵にとんと腰も脱け、譯もなみだに我が身ながら、男の樣にもなかりけり。戀の寢ばなの屋根つゞき、何時か思ひはやま口屋の、物干づたひ忍び來る。餘所の戀かと羨ましく、見れば雨戸の戸袋を、そつとふまへる足元も、ふるひ〳〵の目も眩れて、「ヤア此處にかいの。」「房か、これは如何ぞ。」と許りにて、火燵を中に手を取りて、たゞ泣くより外の事ぞなき。淚の中にも男の顏、じろ〳〵と見て、「ア、いとしぼや、氣をもまんす故にやら、顏にたんと瘦せが來た。その苦は誰がさするぞい、皆私故と、それは〳〵忘るゝ事もあるにこそ。さりながらもう苦にして下んすな。かういへば如何やら、すねていふに似たれども、微塵もさうした心もなし。私が京の父樣、よしない者の請けに立ち、明日ぎりに銀立てねば、私を遣るとの判ぢやげな。私は此處へ身を賣つて、先から連れに來た時は、二重賣二重判、牢舍は鏡にかけた事。成らぬ事をくど〳〵と、思ふは愚癡の至りなり。先だち死なんと剃刀を、手に取りは取りたれども、內儀樣に見つけられ、え死にもせず居る間に、此方樣の聲はする、向ひ側より呼びに來る。嬉しや先で何事も談合せんと、今まで待ちぼうけになつたれども、一目逢へばこれ本望。末賴みない契りなれば、これ限り〳〵と逢ふ度每の觀念、今更ためていふ事なし。貞女を立てるお辰樣のさげしみも恥かしい、中好うして下さんせ。互に生まれかはつたら、本妻定めぬ其の先に、早う夫婦になりませう。言ひ置く事はこれ許り、サア〳〵戾つて下さんせ。」と、夫に犇とし

見舞ひ度う存ずれども、これではお返しなされまい。あ痛〳〵、あいたしこ〳〵。冷える加減か、俄に疝氣が起つた。かへつて養生いたしたい。」「はて譯もない、夜氣にあたつてなほ痛まう、薬でも遣らうか。」「いやもう薬も通らぬ、駕籠に乘つて歸りたし。あ痛〳〵。」と呻けども、内儀推して、外へとては出すにこそ　小座敷の火燵に火をたんと入れさせて、「泊つて御座れ。」としひければ、「いや〳〵今年の火燵は、いかう人にあたります。今も今、女どもが生姜火燵を仕懸けて、漸う詫言いたした。」と、心は先へ脱殼の、何をいふやら譯もなし。「此處になりとも寢せませ。」と、蒲團打著せ表には、内儀手づから錠下し、内外の者にめくばせし、そろ〳〵側へ退く樣子。「ム、ウ氣がついた。」とそらさぬ顏、「いや〳〵寒いに往なうより、暖かにして泊つたが、まづ此方の德兵衛。」と、重き心を輕口に、蒲團被つて行く振も、涙ぐろめし　三重 ※まぎらなり。内と外とに引き合ひの、心の駒の諸手綱、房が思ひの通ふかや　夢とはなしに現なや、顏を竝べて見る樣で、抱きつけば小夜蒲團、涙に濡れて冷々と、髱ほどけて身に障る。其の夜の心地しみ〴〵と、身にひき纏ひ寢て見ても、一人ころりはエ、らつちがない。心の内はむしやくしや枕、寧そあけてものけよかし。「ア、※おほぬさのこの蒲團、小六も寢つろ、小夜も寢つらん、房も寢よう。引く手數多に何處の誰奴と寢くさつた。撲ちたい踏みたい叩きたい。え、〳〵、踏むな蒲團に科もない。今は踏んでも叩いても、房に逢はれぬ逢はせぬか。」と、

づお上りなされませ。いかう冷える酒一つ、それ燗つきやや。」とありければ、「ア、おきや〱もう歸る。此の頃酒があたつて、今も今女ども、生姜酒を飲べさせうと、手づから生姜おろすやら、それが嫌さに漸うと、これへ逃げて參つたに、又酒を飲めとや。やれ逃げん。」と出る處を、女房飛び下り立ち塞がり、「何の無理に進ぜませう。茶でも一つ參りませ。」「いや〱此の頃は茶があたります。今も今さる方で生姜茶をくれたを、漸うと逃げのびた。是非かへして。」といふ處へ、兄の主人寢間より出で、「ヤア徳兵衛ようぞ〱。夜が寐られぬに、夜とともにはなさう。サア此處へ。」と呼びかくれば、病人といひ兄の命、異議も言はれず不返事に、もぢ〱してぞ上りける。「なんと中橋架けたの、欄干渡す許り。春は町中渡りぞめ、氣色も次第に快し、寒明いたら本服せう。これといふが此の夏の、西國の御利生、ャ三十三所の風景、一々語つて聞かせん。サアろくにゆるりと居や。」と、果てしも知れぬ長咄、徳兵衛心もだ〱と、可哀や房を今まで待たせ、又宿屋でもあこがれん　早う立ちたさ氣はせいて、「いやまうし、今宵は我ら伊勢講、講中待つて居らるべし、罷り歸る。」と立たんとす。「まづ待ちや、今まで誰が待つものぞ。まそッと話しや。」と留められ、「いや槍屋町の隱居へ齋に參る約束、是非おかへし。」といひけれども、「はてときは明日の事。ひらに。」といふに詮方なく、「女どもが懷妊、何時産致さうも知れず、お戻しなされ下され。」と、いへども兄は聞き入れず。「遁れぬかたの自身番、

を上げもせず、たゞ「あい／＼。」としやくりなき、延紙の幾重を絞りけり。客かあらぬか表にて、「能うござりました。」といふ聲す。「誰樣ぢや。」とすまして聞けば、「いかう冷えるが、兄の氣色變る事もないか。」と云ふ。「ハア、人事言はば筵敷け。徳兵衛樣さうな。」と、聞くより胸もさは／＼と、飛びも下りたき心なり。時に丁稚が門口より、「向ひの肥後屋から、房樣ちやつと送らつしやれ。お客は堺の。早う／＼。」と呼ばはれば、料理人不審を立て、「問ひもせぬお客のことわり、合點が往かぬ。房樣はお暇が入る、成らぬ。」といふを房聞いて、「あれは何故に。」と問ひければ、「オ、さればいの、彼の宿で徳兵衛樣に逢やつたゆゑ、それで遣るなといひつけた。」「エ、内儀樣の譯もない。それはあつて過ぎた事。今は挨拶切れた上、徳樣は此處になり、何の氣遣ひ。堺の客は正月を頼まねばならぬ人、ひらに遣つて下さんせ。」と、いふも誠と思はねども、「オ、それもさう。これなう房を送ろぞや。」と、呼ばはれば下にて料理人、「そんなら道ぢや、駕籠へも一寸寄つてくれ。」「心得たろ兵衛の婆々さま。」と、喚いて使は歸りけり。「サア身仕舞して早う往きや。」「いや夜もいかう更けまする。つい此の儘。」と、連れ立ち二階を下りる間に、駕籠を庭にぞ舁き寄せける。「徳兵衛樣遊んでお歸りなされませ。」といへば、とぼけた顔つきにて、「誰ぢや房か。際の商ひ跡をつめや。」と、餘所々々しう、口にはいひて魂は、一つ駕籠なる番鳥、飛び立つ許りに見えにける。色を悟りて女房、「これは夜更けて御大儀な。先

後に廻りしも、さては氣色を見取られしと、悲しさ怖さいや増して、更にわかちもなかりけり。さすが※それやの女房とて、世間咄に氣をゆるませ、「これなう房、何時ぞ〳〵と思ひしが、ついでにそなたに意見がある。我もはじめは勤めの身、素人の言ふことと、一つに聞けば曲がない、心鎭めて聞いてたも。郭や此處の奉公は、樂しみなうては勤まらず。無下なうせくではなけれども、それにさへ猶驅引あり。必ず妻子ある人と、末の約束せぬ事ぞ。男の密夫同然にて、思ひばかいかぬ物ぞとよ。德兵衞樣とも今は挨拶きつたとある。オヽ〳〵仕合々々目出度い事。お辰さまを離別させ、添うてそなたの本望ならず。最愛しい人の身のひ※し、一門中の憎しみ受け、そなたを鬼よ蛇よといふ。また圍はれて世を忍び、後家同然に暮しても、これが何の手柄ぞや。若木の花は一盛り、老木の枯葉色失せて、變るは男の心ぞや。餘のお山衆と違うて、十の年から兒飼にて、豆腐取て來い、八百屋へ走れ、駕籠呼んでおぢや、はき掃除、戸棚の鍵まで預けしは、小さいからの馴染だけ、我が子の樣に思はれて、好い客もがな出世させ、下女の一人も連れさせたう、思ふは此方とばかりかは、皆親方は同じ事。譯もない事しいだして、慘い目見せてたもんなや。爲の好い事あるならば、今でも暇をくれといや、慾を離れたこれ證據、損というて僅かの事、不便な目を見ようかと、案じすごしがせらるゝぞや。思ひも寄らぬ憂ひをかけ、必ず泣かせてたもんな。」と、涙も聲もしめ〴〵と、殘る方なき恩の程、房は顏

どれ〳〵御狀は。舟が出ます。」「オ、道理〳〵。この銀は京の私が親里へ、明日の日中に渡さねば、いかうつまらぬ銀なれども、今にさきから來ぬわいの。定めし今に來う程に、まそつとしてから來て下され。」「いや最早來られませぬ、來てから今夜は出されませぬ。」と、言ひ捨ててこそ歸りけれ。房は一人とほんとして、「今夜の首尾を違へては、一代京へ繫がれて、連添ふことも限りとは、根掘知つての上なれば、如才のあらう筈もなし。皆おか樣のさしこみと、思ふも地體此方の無理。身一つ胸を据ゑたれば、いつそ悲しい事もなし。」と、内へかへれば主人の内儀、「房は今まで門にか、此の寒いにものずきな。總じて此の中うか〳〵しやる、ちつと心をしめやや。」とありければ、「されば餘り餘所が賑やかさに、*格子祝に出ました。」と、言ひ捨てて二階へ上る體、氣懸りなれば目を放さず、折々心をつけけるが、房はそれともしら紙の、障子の月を明にて、剃刀出し合はせ砥に、かからましかばかくとだに、ま一度顏見て死にたいと、思へば引かるゝ後髮、手もわな〳〵とぞ顫ひける。主人見つけて後より、「房それは何しやる。」はつと驚き振り返り、「ハァ内儀樣の、何ぢややらびつくりとしました。あんまり好い月影に、額たれうと思うて。」と、紛らかせばうち笑ひ、「オ、好い處へ來て仕合や。幸ひ旦那どの鬚そつてくれとある、ちと其の剃刀貸してたも。」と、引つたくり押包み、しばしは顏を打守り居たりしが、「ア、一昨日の煤掃に、たんと肩がつかへた。そろ〳〵揉んでたもらぬか。」「あい。」と

「又房様の忌々し。男殺そといふ事か。此方は祝うて姫小松。」「緋縮緬解く人目の隙に、鬼も來るなと柊や。」「雛子。」「ひしこ。」「ひともじ。」「エイ洒落臭い。」ふたせ仲居も小差出で、炊婦は來て、「火吹竹。」料理人まで、「冷物。」駕籠の彦兵衛、「膝頭。」「柄杓。」「緋緞子。」「蟇。」「平野蒟蒻。」「菱紬。」「ひらのやゐきやう。」「肥後ずゐき。」「サア／＼紙燭が皆になる。なんと房様、サア如何だや、如何だや／＼。」と詰めかけられ、「ア、姦しい息が出ぬ。物がいはれぬ赦してたも。」「息が出ずば火屋へやれ。」「そんなら火箸で燒いて退け。」「南無三寶火が消えた。サア房様の灰寄ぢや。」と、どつと笑ひしてんがうも、明日の哀れとなりにけり。火廻し半ばへ飛脚屋が、「何も御用は御座りませぬか。ヤア房様、京へ上す銀もあり、御狀もあるとの御事、遣はされませぬか。」と問ひければ、「ア、能う寄つて下さんした、未だ文を書きませぬ、ま少としてから來て下され。」「それなら明日の便りになされませ、今宵は仕舞で御座る。」といふ。「尤もなれども、今夜上して、明日の間に合はせねば、きつう叶はぬ大事の用。」無心ながらまそつとして、ま一度寄つて下さんせ、頼みまする。」とわぶれども、返事もせずに出でにける。房は心も心ならず、日の暮までの約束が、初夜過ぎ四つのかねてより、思うたつぼへあたりしと、門に出でて北を見つ、濱まで歩み西東、足も冷えて鐵釘を、胸に打たるゝ幾瀬の思ひ。「ヤァ北から人が走つて來る、そりや德様よ。」と走り寄り、見れば以前の飛脚屋なり。「お房様か、

も手放したり、まづ此方を仕舞うて退けうか。ハア、可哀や、房がどうぞ銀の首尾なつて、鷄卵酒飲む樣に、したい事ぢやと歎きしを、氣遣ひすなといさめしが、氣の弱い女子なり、此方は儘よ。」と又立ち歸り、「思へば〳〵女ども、生姜酒して待ちますと、手づから生姜おろしたる、志も不便なり。」と、辻を越えては又戻り、辻に立つたりつくばうたり、行くも歸るも定まらず、如何せうか、かうしやうが酒、熬りつく樣に氣がなつて、胸かき廻す鷄卵酒、心を二つに打ちわつて、君が方へと走り行く　後は涙の玉子酒、霜の白みに　三重

中之卷

月ははや、わたり初めして中橋や、六軒町の小夜格子、唐の聖人の曰はく、色の德には鄰あり。向ひ兩側輝かす、軒の燈火目印に、昨日も今日も明日の夜も、重井筒の釣瓶繩、たぐり來いとの夜すがらや。中に不便や、房は憂身のしな〳〵を、心一つにはらみくの、わきが勇めば力なく、片目で笑ひ片目には、涙を包む火鉢の元、人待つ宵の火燃りや。小夜も小六も浮き〳〵と、引裂紙の捻り元結で火廻しを、「ひのじ。」「日野絹。」「房樣何と。」「私は獨寢。」「ア、忌々し。」「緋無垢。」「冷酒。」「引舟。」「火桶。」「雲雀。」「鵯。」「比叡の山の檜の枝に。」「そりや鳥指が。」「鳥でないぞや身は丙午。」

の爲、兄貴の身上我が身のため、房めが後の爲も好い。其處を知らぬ身でもなし。明日は伊勢の御縁日、今宵の月に蹴殺され三世の諸佛の御罰を受け、二人の親に冥途から、睨み殺さるゝ法もあれ、ふつつと思ひ切つたぞ。今日の女も房ではない、人おきの娘を一角で賴んだ。證據には其の銀此處にあり。」と取り出し、「明日直に返辨し、向後房とは通路せぬ。今まで心を無下にした、恨みも辛みも赦してたも。さりとてはこの德兵衞、女房の罰が當つた。罪を赦してくれよ。」とて、手を合はせてぞ泣き居たる。女房につこと打笑ひ、「エ、忝い〳〵。挨拶切つた捨てたのと、幾度か聞いたれども、銀まで見せての誓文、とんと心も落著いて、今日から眞の女夫、皆悅んでたもや。」とて、嬉し淚を流せしが、「とてものことに年寄つて、一夜の心も休めたし。大儀ながら隱居へ往て、今の誓文一通り、聞かせまして下されかし。これは私が御無心、御恩に受けう。」とありければ、「何がさて讓り受ければ、我が爲にも親同然。ついちよつと往て來う。」「そんならさうして下さんせ、生姜酒して待ちませう。それ生姜おろしや釜の下。」たけは手樽を振つて見る、酒の通路ひきかへて、夫は北へと出でけるが、辻にてふつと思ひ出し、「南無三寶、義理に詰つた女房のせりふ、尤も胸に徹へしより、房が大事をはつたりと忘れたり。入相限りに待て、待たう、此の手筈が違うては、生き死にの出來る銀。いや〳〵、親父は明日の事、ちよつと逢うて。」と立ち戻る。「ア、さうもなるまいか。たつた今誓文立て、殊に銀

幸ひに、この子に著せて間を渡したも、私が智慧ではあるまい。氏神樣のなされたと有り難う思へども、恨み受ければ是非もなし。女房の口から推參ながら、言はば此方は人でなし。房と挨拶切れぬげな。餘所外でもある事か、兒御の內の奉公人、しつけ意見もすべき身が、客衆とやらの※かいになり、身代の妨げと、嫂御のねすり言、聞きづらや聞きにくや。ア、それも道理。又あとの月の騷動に、一家が寺へ退いての時、見舞に往つて見屆けた。餘のお山衆は押退けて、房一人を大事にかけ、此處らで心底見せ顏に、けば〳〵しい仕方ども、側に居るは知つた衆、此方より私が顏、阿呆らしう見えたやら、まぶられて歸りしぞや。それに餘り踏みつけた。先刻に房を連れて來て、女共の女房のと、印判までをひき探し、納戶戶棚も見せさらし、これが嬉しからうか。男々の恥よりも、隱しても隱したい、女子同志に恥を見せ、男は寢取られ、寢間帳臺は見探され、阿呆の數々よみつくされ、これでも男の可愛いは、扨も如何なる因果ぞや。今日の事が隱居へ聞え、私は親に叱られながら、科を負うて居る心。人間らしい氣があらば、三十日の一月を、せめて三日は碌々に、寢物語もあれかし。」と、心一杯理をせめて、情も深く口說き泣く、千々の思ひぞ哀れなる。德兵衛一念發起して、「ハツアあゝ過つた〳〵。惡人とも業人とも、盜人とも騙りとも、我ながら重罪人。今までもそなたに恥、やめうやめうと思ひしが、これ程の瀨戶がなうて、うか〳〵と盡した。我一人思ひ切れば、そなた子供隱居

入らぬ、頭痛のする寢やうでない、又くらひ醉うたか。春は早々まくし出しや、彼の樣な聟なら、二十人や三十人は、今の間に取つて見しよ、三日と一人寢させはせぬ。」と、呟き〳〵雪駄はく。内の者ども、「もうお歸りになりますか、送りませう。」といひければ、「ヤァ道ならちと送つて、それ言ひ立てに夜食はうといふ事か。」と、門の戸明くれば德兵衞、もがりの陰に隱れしを、それとも知らで歸りしは、危かりける次第なり。入れ違うて德兵衞、つつと通つて羽織を後へひらりと投げ、實事の格は見覺えたり、女房の膝元にむんずと居て、「こりや最前からの次第、門口に聞いて居た。留守の己を寢て居ると、親父の手前は男をかばふ樣なれど、職人に似合はぬ鬢付な男を、身代りに寢させたは念が入つて忝い。入聟の事なれば、家屋敷家財にも、罌粟程も疵はつけまいが、うぬが命に疵つける。」たつた今密夫をひきずり出して見せうぞ。」と、奧に飛び込み、何かは知らず、「わつ。」と叫ぶを胸倉摑み、宙に引提げ躍り出で、どうどひつするゐ能く見れば、こは如何に、坊主天窓の小市郎、盆に貰うたる踊の鬘、奴天窓を振りながら、「母樣怖い。」と泣き居たり。德兵衞もしまひつかず、詞なければ女房は、宵より積る憂き涙、一度に、「わつ。」と叫び伏し、消え入る許りに泣きけるが、「なう德兵衞殿、慘う御座る辛いぞや。不義せう者と見するゐたら、何故附き張つても居もせいで、元日から元日まで、よう往き處もある事ぞ。此方の留守の言譯に、ふつつりと事は缺く。隱居樣の聲と聞き、側にあつたを

まいかと、疊算置いて見て、縱ひ算が合うても、五度に三度は投げずにしまふ。側に居る同行衆が、ぐわら／＼投げる時には、錢を一文摘んで、肩へ手を斯う振り上げ、投げる顏で鹽の長次郎、錢は手にとまつた。斯う氣轉を利かせねば、過ぎにくい身代、四百目は何にした、行き端を聞かう。」ときめらるゝ。女房、さては丁稚奴が咄に違ひなしと、思ひあたれば妬ましさ。いつそ言うて退けうか、いやいやそれもむごい事、如何かかうかとせきくる間に、まづ先立つは夫の可愛さ。「ア、親父樣、なんぞと思へば仰山な、私ら女夫がなに借錢しませうぞ。其の銀はな、南の兄御の方に、曲輪から出た好い奉公人を抱へて、手附銀が遣り度いが、世間共に銀づまり、彼の邊は利も高し、殊に兄御は病中なり。私等が判では貸す人ありとの頼み樣。銀こそはなるまいし、判捺く程は一門がひ。殊に私と他人なれば、猶しも義理は缺かれず。又用無心もあるものと、それで判を押しました。内外の者も聞くぞかし、千里萬里も違うたか。あんまりな親父樣。」と、陳ずる心の優しさよ。德兵衞は女房の歸らぬ先にと足早く、門口に立ちけるが、内には舅の喚き聲、「南無三寶。」と入りもせず、しばらく樣子を覗ひける。舅猶も納得せず、「オ、女夫が言ひ合はせ、親を瞞して身代潰せ。寢て居るも譃ぢや、何處へ失せた。」と穿鑿す。「ハテなんの、留守なら留守と言はいでは。あれ暖簾の彼方へ。」と指させば、宗德は暖簾打上げ、孫の事は氣もつかず、老眼の何見てか「ム、ウまづ職人には似合はぬ、彼の鬢付が氣に

小行燈提げ入る有樣、下女手間取は見送りて、「内儀樣と旦那の仲、彼方へ支へ、此方へ言ひ、兩方で物をつかみをる。彼奴は　鋸商。」と、鋸屑の言甲斐なき、猜みも下の役ぞかし。此の家の隱居吉文字屋の宗德、代々傳はる紺屋の形と、もとに禿げたる頭を剃し、額にたえし古毛拔き、食ひ兼ねぬ世も算用づく、この家屋敷家職をば、妹娘にやり屋町、姉にかゝりて隱居分、薪の始末燈心を、日暮れて一人によつと來る。内の者ども、「あれお辰樣、槍屋町の隱居樣のお出で。」といふ聲に、「おう。」というて立ち出づる。宗德とがり聲にて、「入婿殿は何處へぞ。節季師走内を明けて、出るとても出すものか。これ二人目の壻ぢやぞや、彼の孫の小市郎に、父親三人持たしやんな。」と、いふ顏の不興なれば、優しくも女房は、良人の惡性押包み、「なんの餘所へ往きやりましよ。方々の贈物もの、内外の者の手は足らず、今朝早々から仕事して、風引いて頭痛するとて、奥に寢て居られます、お前は何しにお出で。」といへば、「イヤコレたゞは來ぬ。たつた今そなたが歸つた其の跡へ、堀江の口入治右衞門といふものぢや。此方の娘御壻殿兩判で、銀四百目貸しました。若い人の事なれば、後日の念にちよつと知らせて置きますと、いひ置いて歸られた。聞くとおれは眼がまうて、一服の茶を飲みさいて來た。四百目といふ銀を、何にするとて借りたぞ。食ひ込んだか、へこんだか。女夫の仲の榮耀づかひか。エ、おとましや　身代はえ持つまい、己らが談議參りして、一文投げる賽錢さへ、進ぜうか進ぜ

貸してやつて下さいやせ。」と、褄々合はせる辯舌に、口入喰うた顏つきにて、「ア、〳〵これには及ばぬ事ながら、德兵衞殿は入家と聞く。斯う致せば後の爲、又も用を聞かう爲、サア判をなされよ。」と手形を出せば德兵衞、掛硯引寄せ、「これそなたの判、さらば先づ私。」と、互に印判明白なり。「丁銀四百目包の通り、吟味なされ。」と受取りわたし、「もう暮れまする、お暇申そ。」「ちとお杯いたしましよ。」「重ねて〳〵。預けます。さらば。」といひてぞ歸りける。「ざつと濟んだ、目出度し。」と銀懷に押入れ、「これ三太。この女衆を送つて、ちよつと往つて來る程に、門もしめて火も燈せ。其の中お辰が戻つたら、湯屋へ往つたと瞞して置け。必ずなんにも吐すな。」と、口をとめたる紺屋糊、「德樣早う。」と出でにけり。所帶持つても色は猶、捨てぬぞ道理紺屋の妻、月も冴え行く夜嵐に、「あゝ提燈もよいわいの。」宵寢まどひの小市郎、竹が脊中にふら〳〵と、「寐風ひかすな大事の子。」萬年町に歸りしが、問ひもせぬに三太郎、「旦那樣はたつた今、湯屋へ。」といへば、「オ、〳〵どうで湯か茶か飮みにであろ。法界の男ぢやと思へば濟む。」と恨みながら、小市郎が目ざますを、暖簾の奧の小座敷に、漸うすかし寐入らせて、我も著物著換へんと、押入明くれば、こりや何ぢや、掛硯明けひろげ、夫婦の印判取り散らせり。これは〳〵と言はんとせしが、あたりを見廻し押鎭め、「こりや三太郎、其方に大事の物遣らう、火を燈して奧へ來い。」と、いふより早く、「あい〳〵、さらばしこだめ參らう。」と、

ら其の銀で、餘所々々のお山が、一つ買うて見度いと遣らるゝぢや。」と身を縮む。「これは出來いた、容易い事〳〵。して誰ぞ惚れたのがあるか、サア言へ〳〵。」と、とひかけられて恥かしがり、「私が惚れたのは、いろはの中にある。」といふ。「ヤアそんならいろは茶屋か。」、「イエ〳〵太左衞門橋筋に。」「なんぢや太左衞門橋にいろはとは、ちりぬるをわか、よたれそつねな。」と吟じ返せば、「それ〳〵其の次の、※らむうけんだ。」とぞ答へける。「これは上物上目利。」と、豆板一粒ばつとはずみ、「ヤイ今此處へ銀持つて來る人がある。此の女衆をお内儀樣かと言はう程に、必ずいゝやと言ふなえ。さて此の事を、女どもにも傍輩にも、微塵も言ふ事ならぬぞ、合點か。」といひければ、三太郎首肯き、「勿體なや勿體なや、言ふ事では御座りませぬ。若しも重ねて言ひたい心出來た時々に、お前へそつと斷りませう程に、又銀を下さりませ。」と、阿呆な顔でも損をせぬ、遣る粹よりは粹ならん。時に表に、「頼みましよ。紺屋の徳兵衞殿は此方か」と、※年ばいなる仁體なり。「ヤァ治右衞門樣かおはひりなされ。」「御免。」といひて通りける。「あれ女房ども、内々の治右衞門樣、そなたの判なら銀貸さうとおつしやる。お目にかゝつて置きや。」といへば、いひあはせてや彼の女、「これはまあ〳〵御懇親な。尤も家も商賣も、私の物とは申しながら、子なかなした中なれば、もう今では屋財家財皆主の物で御座りまする。斯うお目に懸る上からは、私が請けあひ。ふかしい事こそ、此の家屋敷相應に三貫目や五十兩は、

に未だ懸つてか。何時ぢやと思ふ、今日は師走の十五日、中の島のそうぶつ物も、昨日限りの約束、谷町の蒲團も未だ持つて往くまいな。兄貴から誂への、重井筒の暖簾もおそいというて腹立ちぢや。女房共は何處へ往た、エ、どんげな、一言おれが言はねば、もうそれほど閒が明く。いひつけも見まはしも、口は一つ目は二つ、これでは水も飲まれぬ。」というた處は見事なり。下人どもは平常の事、「お内儀樣は槍屋町の姉樣へ、一寸往つて來う程に、お前に問うて蒲團地も、持つて往けとの事といへば、「そんなら喜兵衛持つて往きや。庄助は提灯持つて、女房どもを迎へに往け。それ坊主奴に怪我さすな。負うて歸れ。」といひつくれば、「あい〳〵。」いふもそこ〳〵ながら、皆々表に出でにける。亭主も辻まで行くかと見えしが、三十許りの女房と、何やら私語き呟きて、連れ立ち内に入りければ、女は亭主と座を組みて、お家樣顏して居たりける。年季の三太すつきりと合點せず、じろ〳〵見るを徳兵衛、「これ三太此處へ來い、つつと寄れ。」と膝元に呼びつけ、「此奴はずんど利口者で、言ふなといふ事いはぬ奴、それで人が可愛がる。近づきになるしるしに、何ぞ遣つてたも。」といへば彼の女、「さうやらして、目元が利發に見えまする。なんと顏見世見やつたか。札買やる錢遣らうか、但しなんぞ餘の物が欲しいかいの。」といひければ、「イエ〳〵私等芝居が見たけりや、六軒町の兄御樣から、何程往かうと儘ぢや。私や銀が欲しい。」といふ。「ム、銀持つて何買やる。」「アノ銀貰うてか。銀貰うてか

心中重井筒

上之巻

唄夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に淸十郎とねた處、裾に淸十郎とねずみ色。京の吉岡紙子染。※やぼてりがきか、うすがきか。「正月前のきは〳〵に、旦那殿は外が内、御神酒過してうか〳〵と、山衆といへば目が見えず。内に居やんす内儀様、此方と許りに打任せ、誂物も節季をも、如何しまはんすことぢややら、下心の悪い旦那殿。」「やい三太、そりやなんぢや。茶屋へ往きやろが、山衆を買やろが、旦那は旦那。此方とは紺屋の手間取。何事もさらりつと、淺葱にいうて居よいやい。」「オ、喜兵衛の言やることなれど、我身は元を知るまいが、地體旦那のしたぞめはの、重井筒屋といふ南の茶屋の弟で、これへは入聟。乳呑子紋を持ちながら、人のみる茶も構ふにこそ。お内儀は結構者、柳すゝたけにやつてぢやが、隱居の親父がわせると、家内はしみこほり山染になるわいの。彼の様にほついては、やがて身代は木賊色で、おろす様になつてのけう。」と笑ひける。酒漬に水もつくかや我が宿へ、歸りこん屋の德兵衛、忙がしげに立ち歸り、「これ庄助喜兵衛、埓が明かぬの〳〵。これ

方を傳へ、斷れたる筋、折れたる骨、落ちたる首も繼ぐ名人。この療治にかけたらば、夫婦が命も恙なく、千年までは千石取りが、受け取つたりや松の風、風に當つるな、身を揉むな、とり〴〵さまざま取り繕ひ、乘物に乘せ、三味線に乘せて謠ふは、源五兵衞何處へ往きやるぞ薩摩の山の、山は寶の山とかや。

薩摩歌 終

参して、會稽の恥辱をすゝぎ、武門の美名を輝かすも源五殿の御情、御恩は海山、報じても猶報じがたし。先づ御自分が行方を尋ね、拙者が主人を頼み入り、お國を廣う彼のおまんと、比翼の杯取り結ばせんと、心のかぎり尋ねても、今日まで行き方知らず。その内にあのおまん、外に縁につけさせては、恩を報ずる甲斐もなし。先づ外の手を止むるため、我等が方へ呼び取つて、靜かに貴殿を尋ねんと、我々夫婦が思案して、媒介頼み作り名して、言ひ入れのたのみ送つたは、この三五兵衛であつたぞや。殘り多や殘念や、さりながら曲がない。よしこの方こそ知らずとも、笹野三五兵衛こそは、親の敵を討ちおほせ、本懐を達せしとは、九州にかくれなきものを、何故尋ねては下されぬ。たゞし今おちぶれて、諂ふまいとの身の卑下か。たゞし又拙者が、昔の恩を忘れて、見ぬ顔しさうな三五兵衛と見つけられたか、恥かしい。さりとは聞えぬ、恨めしい。せめて好い折對面して、詞をかはして滿足した。後に聞いて三五兵衛に、追腹切れといふ事か、さりとては曲もない。その筈ぢやない源五殿。」と、抱きついて泣きければ、いまはのおまんも眼を開き、じろりと見たる眼は涙。源五兵衛も手を合はせ、「忝い。」とばかりにて、各「わつ。」と泣く涙、落ちてながれて紅の、朱の血潮も洗ひけり。「ア、三五殿。御夫婦の御禮は來世で〳〵。とてもの情に御介錯、早う〳〵。」と苦しむ聲。「エエ腑甲斐ない、氣遣ひすな。尤も深手といひながら、本國長崎に黄陳といふ南蠻外科。昔の華佗が仙

ばと斬る。斬られながらに刀の刃にしがみつけば、手の内くられ朱になつて逃げ廻る。おまんは母をせきにせきたる手も伸びて、見込みのかねあひ外れけん、おまんが左の肩先より、前は乳房を裟袈がけに、兩へさつと斬り下げられ、既に最期と見えにける。母はひるまず大聲上げ、「やれ人殺し。切つた切つた。」と呼ばはる聲に、當町鄰町驚き騒ぎ、我も〳〵と驅け集まり、手負を勞り「源五兵衞取り逃すな。」とぞひしめきける。源五さわぐ色もなく、大肌脱いではつたとにらみ、「喧しい町人ども、逃すなとは誰が事。すべによつてこの源五が、立ち退かば退きもせん。逃ぐるといふ字が聞き悔い。刀を拔くは人斬る覺悟、人を斬れば死ぬるは覺悟、譃か實かこれ見よ。」と、左の肋に刀を突き立て、「えいやつ。」と引き廻し、かへす刀を喉吭に、立ては立てて抉りしが、腹を深く切りたれば、腕先弱りのつけに反り、半死半生哀れなり。斯かる處に風體千石ばかりなる武士夫婦、供廻りはなやかに、親新兵衞に案内させ、息をはかりに驅けつけ、「未だ死に切らぬは嬉しや。」と、夫婦の手負を看病し、耳に口寄せ大音上げ、「ヱ、言甲斐ない源五殿。先年京都で參會した、林と申した腰元、いまは笹野三五兵衞。これは我が妻、その時の小まん見忘れたか。不慮の縁によつて、親の敵の在處、別名まで聞いたる故、翌年敵を討ちおほせ、數年の本望遺恨を晴らし、この小まんと夫婦になり、本國本地に歸

動くな。母めも今日が明日になり、千日なりとも居たくは居よ、おまんにおいては戻さぬ。」と、既に顔色變りけり。母はもとよりたゞものならず。「ア、町人の淺ましさ、お武士の作法は知らず、是非に及ばぬ何とせう。驅落人のお尋ね者、それでも武士が立つならば、いはれぬ肝精やかうより、町所家主を頼んで、連れて歸りませう。手間も暇も入らぬ事、皆來い。」と起たんとす。おまん取り付き、「マア待つて下さんせ。町所へ斷つて、源五樣を今の間に、牢へ入れうといふ事か。連れ立つて歸りましよ、先づしづまつて下さんせ。これ源五樣、萬事人に逆らはず、身の愼みと申した事、必ず忘れさんすな。大事のお身ぢやが合點か、何も私が胸にある。ちよつと戻つて親達を、なだめて歸ればさらりと濟む。私次第にしていなさんせ、つい戻りましよ。」といひけれども、源五兵衛合點せず。「イヤ明日戻さば戻しもせん。今日一日は、この源五が戻さぬといふ一言、首になつても言ひ通す。」と、さらさら戻す氣色はなし。母は名に負ふ我武者もの、「ヤァ、しやまだるい、男どもおまんを引立て連れて來い。」「かしこまつた。」と下男、牀の上へ驅け上る。源五兵衛驅け塞がり、「武士の女房に、指でもささば片端に、泥臑斬つて斬りするゑん、寄つて見よ。」とねめまはす。薩摩一國名取の男源五兵衛にねめつけられ、左右なく寄りつく者もなし。母事ともせず打笑ひ、「臆病な奴等かな、昔が今に至るまで、にらまれて死んだ者はない。おまんおぢや、手を引かう。」と、立寄る處を拔きうちに、頬先かけてずつ

く言ひ捨てけり。おまん挨拶言はんとするを、源五兵衛押止め、つつと出で、「これ〱昨日までは、其方へ出入り奉公下人分の事介、今日より元の菱川源五兵衛、一錢持たねど武士のちやく〱。十萬貫目持ちやつても、琉球屋の新兵衛、詞も違ひ座もちがふ。推参至極な、案内もなく踏み込んで、歸れといふは誰が事、此のおまんは身が女房。武士の妻女は夫の心次第にて、親の儘にはならぬ事。おのれが宿にて新兵衛を、廻いた格とはちがうたぞ。其方ばかりはや歸れ、長居をせばひき摺り出す、」と煙草引寄せ煙吹き、取つて著くべき方ぞなき。女房さすが物仕にて、詞をやはらげ、「御尤も〱、連れて往んだら戻すまいと、惡うお心廻つたさうな。親が千萬嫌うても、主が心に好いたもの、戻さぬとても、彼の子が戻らずに居やるまじ、親も何しに留めませう。さりながら、琉球屋ともいはるゝ我々、娘一人をしつけかね、長持一箇送らぬと、外聞惡い沙汰も嫌。第一彼の子が身祝、きつと仕立てて送りませう。新兵衛心もその通り、その證據に今日は、祝うて餅を搗きまする。ちよつと戻して下さりませ、ぜんざい祝うて戻しませう。サアおまん、起つておぢや、サアおぢやいの。ア、しぶとい子や。」と言ひければ、おまんは中にうろ〱と、「情なや疎ましや、あのゝものゝが喧しい、ちよつと戻つてさらりつと、埒明けて來ませうか。」「何處へ〱。母めが言分皆僞り、騙しすかして連れ歸り、賴みを取つた壻の方へ送らんといふ心底、面つきに顯はれた。門より外へ一寸も出しはせぬぞ、

ども、我が手に我が身の廻向して、念佛申すが耳に入り、ふつと目が覺め恍惚と、今のは夢であつたげな。サアたゞ事ではあるまい。こな樣の怪我過ちか、但し浮世を見限つて、例の短氣が起つたか。はやう逢ひたや聞きたやと、胸も心もわくせきして、帆掛船さへまだるうて、手繰りつく程氣がせいた。此の樣に無事な顏見まいかと思うたに、私やがつくりとなりました。善いにつけ惡いにつけ、夢は三日が大事のもの、必ず人に逆らはず、身を愼んで下さんせ。これこの袖見さんせ、夢に泣いた涙で、今に濡れてあるわいの。思へば〳〵夢の間の悲しさが、ほんの事ならどうせうぞ、夢が合うたらどうせう。」と、夫の膝にもたれふし、聲を上げてぞ歎きける。源五は男氣打笑ひ、「オ、氣がくたびれては種々のわけもない夢見るもの、身に金が入るとて、斬らるゝは上夢。おれも去年怖い夢、天狗の鼻に取りついて、女護の島へ渡ると見た。其の翌日、餘所から松茸と赤貝を貰うた。」と、語ればおまんも吹き出して、「エイ好い加減な事ばかり。ア、久しうて笑うた、家では親の氣を兼ねて、誰に甘える者もない、私やこな樣に甘える、あまやかして下さんせ。」と、頰杖枕身を横に、互に足をうちもたせ、來し方かたるぞ盡きしなき。かかる處へ母親は、下女下男引連れ、案内もなくつつと入り、「ハアアおまん此處にか、左樣あらうと思うた。來るなら來ると、二人の親に何故知らさぬ。人も連れず著の儘で、親の外分構はぬ氣か。言ふ事いうて仕舞うたらきり〳〵戻りやい迎へに來た。」と、前後もな

と、かつぱと轉ぶ兩袖に、涙も潮も滿ちにけり。夢違へしつ轉じかへ、心も浪も立ち騷ぎ、つかへは上る山颪、吹くや追風のそよ／＼と、風のいろはに帆を上げて、走り行方は薩摩潟、沖の雄波にあこがれて、便りなぎさに立雌波、身を碎くこそ三重不便なれ。尋ね巡るやはう坊の津、鹽の辻なる裏貸屋、豫て聞き置く目標あり。「嬉しや此處ぞ。」と走り込み、「ヤア、これは源五樣、死なずにまめで御座んすか。先のが眞かこれが夢か、何れが夢やら誠やら。息が切れた水一つ、先づ飮ませて下さんせ。」と、どうど伏してぞ泣き居たる。源五抱き上げ水含ませ、「ようこそ／＼、心底屆いた滿足した。此の上からは親里の、首尾は兎もあれ角もあれ、首は首、胴は胴、甲が舍利になるとても、親の手へは渡すまい。落著いて氣をしづめや。」と、脊なかを擦り撫でおろす。おまんも少し笑ひ顏、「こな樣の顏見たりや、胸も大方しづまつた、氣遣ひして下さんすな。さて／＼憂い目辛い目や、身の一代に覺えぬこと、裏の高塀飛び損ひ、堀へ落ちて死ぬる場を、お蘭比丘尼は命の親結ぶの神、眞實奇特な介抱ゆゑ、鰐の口を遁れ出で、やう／＼と福山の船に乘り、九里の渡も千里の如く、とけしないやら怖いやら、氣がくたびれてとろ／＼と、船梁に手枕して、寐るとも思はぬ其の間に、まざ／＼しい夢を見ました。私やこな樣に斬らるゝ、こな樣は又腹切つて、夫婦刃の死人のためと、流灌頂七流れ、殊勝らしい坊樣が、鉦をはつてお念佛。私や悲しうて／＼、何やら泣いて口說いたが、言うた事は覺えね

闇眺めやり、睡る鷗に誘はれて、うたゝねふりのふら〳〵と、船に搖られて睡るらん。舟人も睡り漕がれ行く、そも一睡の假枕、皆一心のむすぼふれ、夢を結びてあり磯海、夢か現か幻か、更にわかちもなゝ流れ、流灌頂血の上の、亡者浮ぶる法の水、哀れにもまた不思議なり。導師のお僧鉦打ち鳴らし、釋迦は去り、彌勒は未だ世に出でず、彌陀の彼岸をたのまずば、何時か火宅を出で船、乘りおくれては誰か渡さん。なむあみだぶ〳〵、なむあみだ〳〵〳〵、なむあみだぶつ、なむあみだ。如何なる人の何故に、刃の上の往生か。産のあら血か世の中は、餘所の事とも思はれず、語り給へと尋ぬれば、誰がいふとも浪の音、弔ふ人は琉球屋、おまんと申す姿の花、夫源五の手にかゝり、消えて散つたる血刀の、のりの誓ひも淺ましや。其のおまんとは我が身の上、娑婆か冥途か如何にとも、覺束なみだせきかぬる、浮世の恨み葛の葉の、かへす刀に腹かき破り、男は晨女は宵、一夜ばかりは隔つれど、末の逢ふ瀨は一筋に、流れ寄る邊の水施餓鬼、語るも我が身聞くも我、心一つをいろ〳〵に、結ぶは有漏路、解くれば無漏、萬事は夢の戯れの、手にも取られぬ沖津風、濱風潮風さつ〳〵、さつとして覺め行く夢のあと見れば、ありしは浪の音どう〳〵として、海上空しく渺々たり。おまんは驚く楫枕、我が身は元の我が身にて、覺めても覺めぬ夢心地。淺瀨の波に下り浸り、歎きの聲に舟人が、舵取りなほす面楫の、思ひまはせば夢なりけり。「心許なや我が夫に、怪我過ちのしらせの夢。」

所ぞや。よゝの高野に逃れ來て、遊ぶ野鴈や鷺鷗、筑紫の妻を都鳥、ありやと問へどいかにとも、牧の野馬の馬の耳、風ふく山の渡守、我が思ひはしらすげに、舟も潮も引く方に、下り行く濱は速日の岸、高千穗の嶽高けれど、高い聲せぬ二人が中の、契りは此の世後世山隱すほど猶世に漏れて、誰ひらきゝの、神の氏子の神歌や。唄おらは知らぬが、子供等が咄す。おまん寢處に、足や四木となんしよばへ。寢處におまん、おまん寢處に、足や四木となんしよへばへ。歌は一節舵の音、蜑の友呼ぶ聲までも、此方が浮名の噂かと、餘所のひがごと焚きつけの、硫黃が島は一霞。流され人の彼の島で、流す卒堵婆も立つ波に、寄り來る〱よりくる絲は、くまの三筋が流れちりつる、ちんりちりつる三味線の、渡り初めにし國とかや。琉球國に打續き、唄薩摩や、三が國に、霧雨が降らばよな。それぞ立つ名のうき雲の、雨のもりとて濡れて行く。袖は嵐の吹きかわかして、顏は涙の水鏡でァ、あれあれあれ、眉の引墨臙脂落ちて、髮はばら〱海藻若布に、縺れ亂れて何時櫛の齒の唄櫛になりたや。ヤレサテ薩摩の櫛に、諸國娘の、ヤレサテ手に渡ろ。どうがねの、よんぢり嫁御は好い嫁御。此のなんなんこの好い嫁。あれ見さいな霧島山の横雲、此のなん〱此の横雲、横雲の下こそ己らが親里、此のなん〱此の親里、妻里が夜の間に近くなれかし。此のなん〱此のなれかし。戀しき方も近くなれ。潮滿ち來れば水馴棹、長き日影もほの曇り、心盡しや氣盡しに、暮れぬ先より我が心、夕暮の

尼は今生で逢ふ事はこれまで。一所不住の出家の身、互に便りもこれ限り、早う〱。」と別れ行く。仇を御恩の情人、名殘は盡きず上方で、芭蕉の布を見る時は、形見と思うて下さんせ。」「ォ、此方樣松葉の相生まで、私や一人寢の芭蕉布。御恩きびらの目もつまる、涙に袖は半晒。今ぞ一期の織留。」と、互の心太布の、名殘は一たん裁ち切つて、二丈六尺五尺の身、戀に晒すぞ 三重 哀れなる。

下之卷

源五兵衛おまん夢分船

唄 源五兵衛何處へ往きやる、薩摩の山へ、後はおまんが涙の海よ。船も押されず、櫓櫂も立たず、寄邊尋ねてうか〱、うか〱焦るゝ、源五兵焦るゝ。高い山から谷底見れば、布を晒すは、夏こそよけれ。おまん心は沍寒の冬か。雪のおもかげちら〱、ちら〱わすれぬ源五兵俤、姿は四季の花なれや。時折々にはやり行く、山ぞ伊達者の山葛、引く手數々かずならぬ、心の種の笹舟に、情の上荷はねられて、思ひは沈むヤッサ、やつさ〱の空櫓の音も、耳に悲しく遠ざかる。彼の故郷の此の儘で、又歸らじと思ふにも、これが此の世を出船ぞと、親を恨みの目は涙、何に生まれん鰈川、松の叢立夏木立、櫻島人打羣れて、サンサ沖に綱引き釣垂るゝ、波の雄波をかきわけ〱、走る兎の名

樣な惡心なし。もとより源五樣に露心殘さぬ上、今日御二人の深い中、そもやそも此の尼が、半時も男の側に居ては、女の道立たず、三衣の罰も恐ろしく、此の世では源五樣に、逢ふまい見まいと鉦を打ち、明日の夜明に上方へ、幸ひ出船のつれもある。夜の中に港までと思ひ立ちしが、待てしばし、おまん樣はどうしてぞ、力にも成らうと申した一言、譃にはせまじと來た證據、死なせはせまい。聲高に暇取つて、…見つけられては一大事、何としてがな下さん。」と、驅け廻つて、「これ〳〵たんと晒布が干してある。此の端をきつと結ひつけ、こちらは此の木で留めて置く。これを手繰れば樂々ぢや。」と、石を錘に結びつけ、投げても如何屆くべき、力の程もしら布の、松にかゝるぞ仕合なる。おまん嬉しさ、「恥かしやうたがひは御免あれ。」と、伏し拜み〳〵、布引絞り松の木に、しつかと括りつければ、此方は尼が締めつけて、しつくりの木に留めてげり。おまんは片手に布を取り、片手を廻し松の木に、かゝりし帶を引きはなし、左右に手繰る布引の、瀧津心の胸跳り、目まひ氣も消え絶え〳〵の、雲の通ひ路天津風、尼が「せくまい〳〵。」の、聲を力にやう〳〵と、向うの岸に手繰り著く。「サアしてやつた、あぶなや。」と抱きおろせば夢心地、「ア、正眞の生如來、これが實の善の綱。お禮は何と申さう。」と、泣き拜むこそ道理なれ。「禮をいふ間に夜が明ける。所の人に教へるは、釋迦に經か知らねども、陸を往けば遠うて、追人の氣遣ひ、九里の渡が近いげな、一足なりとも早いが好し。此の

魂許り飛ぶ鳥の、翼折れたる如くにて、屋敷の内を此處彼處、逃げ出る隙間もがなと尋ね廻れど、常々に用心精しき屋造の、風の通ひもなかりけり。見つけられたらそれまでと、布織る下機取り組みて、庭木の松にもたせ架け、我が身ながらも恐ろしき、智慧の梯子を上るにも、盗みする氣の斯くやらん。顫ひ〳〵もやう〳〵と、枝に取りつき、塀の上へは上りしが、めぐりは用水底知れず、幅一丈の堀切にて、下るゝに足手のかゝりなく、飛ぶことかたき石垣なり。此の上は思案もなし、思ひ切つて飛んで退けう。水に溺れて死んだらまゝ。千に一つも神佛の、力もあらばと思ひきり、ひらりと飛べば南無三寶、帶を松に引つかけて、宙に下つてこれも彼の、罠にかゝりし野邊の雉子、夫ゆゑにこそ苦しみけれ。かかる處に如何はしけん、お蘭比丘尼は紛れ來て、締めたる門口見世格子覗き歩き、裏へ廻つて此の姿、一目見るよりはつと驚き、怖氣立ち、念佛申して居たりけり。おまんそれと見るよりも、「ヤアおのれはまた來たか。思ふ夫に添ふからは、言分はあるまいが、我に恨みが殘つて殺さん爲に來たよな。口惜しやこれを見よ。内は忍び出でたれども、とかく男に縁ないしるし、其方が手にかけいでも、しばしの知死期をまつが枝の、折るゝまでの命ぞや。定めて源五樣も同道と覺えた、槍はあるまい、竹の先に小刀でも結びつけて、夫の手にかけさせて殺してくれよ。エ、苦しや、身がしまつて息斷れして、ア、苦しや。」と悶えしは、目も當てられぬ風情なり。「なう勿體なや、我等に左

世間内證、義理一つで沙汰なしに往なするぞ。尼めも共に出て失せう。」と常わんざんとは事かはり、道理至極に返答なく、おまん涙に正體なく、源五は手を突き頭を下げ、「もとに越度ある上に、かさね重ねのあやまり、如何樣になるとても御恨みとは存ぜず。唯御夫婦娘御の、御難儀のなき樣に、兎も角も御計らひ。」と、差しうつむいて居たりけり。情ある新兵衛も、私ならねば詮方なく、「疾くにもかくと打明けて、仰せられれば、何とぞ思案も致さうもの。近頃殘念氣の毒。」と、いへばおまん縋りつき、「とてもお慈悲の上からは、私も源五樣、一緒にやつて下さんせ、拜みまする。」と泣き叫ぶ。母はいよ〱腹を立て、「おのれが一緒に出て往んで、賴みを取つた婿殿へ、ちとは死んで見せうか。それ親父殿、奥へ連れて往かつしやれ、事が延びれば尾鰭がつく。男どもは居らぬか。此奴が宿は坊の津にあるげな、家主へ渡して來い。」「心得ました。」と引つたつる。おまんは「わつ。」と聲を上げ、「なう源五樣、お蘭と連れ立ち御座んすの。ア、羨ましい腹の立つ。」と、恨み歎けば源五兵衛、「往き度うては往きませぬ。今此の庭でさつぱりと、死にたいわいの。」とばかりにて、どうど伏して泣き沈む。手荒き薩男の無意氣もの、「死にたくば我が宿で、撲き殺してくれうぞ。コリヤこれを見よ。」と、振上げて振廻したる坊の津や、棒づくめにて三重送りける。何時の間に、日の暮るゝとも夜のふくるとも、おまんはわけも正體も、泣きつゞけたる孀鳥、親のしがらむ脊戸門に、人目の網の繁ければ、

置いてたも。西國の筑紫のとて、情の道に替りはない。そなたの樣に言ふならば、西國はまだしも、唐には戀はあるまいか。これ斯う竝んだ妹脊の中、そなたの樣な女房が、千人萬人妨げなし、杆を入れても離れはせぬ。何が邪魔で殺さうぞ。怪我にあたるは其の身の不運、言はれぬ處のお見舞から、都衆の戀には手傳が入るさうな。薩摩の戀に味方は入らぬ、早う出て往ね。腰が起たずば綱つけて、引きずり出すが失せまいか。」「いや張り合ひになつたれば、斯う居た處を動きはせぬ。」「オ、動かすとも動かせう。」と、せりあひ捻ぢ合ひ立ち騷ぐ。新兵衛驅け出で、「四邊鄰家もあるぞかし、兩方默れしづまれ。」と、制すれども聞き入れず、母親始終を聞き濟まし、水汲み朸おつとり延べ、競り合ふ中を容赦もなく、「靜まれ〳〵片端に、撲ちすゑてくれるぞ。」と、敲き廻り〳〵勢ひは、唯山姥の山廻り、舞ひ損うたる如くなり。銅鑼のやうなる聲あららげ、「エ、親父殿が生緩い。縛し上げて置きもせず、彼奴等が口說の揚屋の亭主になる氣か。やい事介、おのれはお尋ねの源五兵衛、大事の娘をそゝのかし、寒がりの此の國へ、前髮落して態を變へ、又彼の子に惡氣を付け、人の目を暗ますは、人買よりも野太い奴。唯さへお國は人改め、おのれゆゑにこれのうちは、月に一度の判をする。見知らぬとて是非もない、手前にふだん飼ひ置いて、外から上へ聞えては、同罪といふ一筆の、身拔けがならうと思ふか。御吟味所へ引渡し、牢へ入るるはやすけれど、おまんが心底量つて、腹を借さぬ母ゆゑに

てまで歸りしが、内の騷ぎに心をつけ、暖簾の陰より覗くとも、更にしら刃を奪ひ合うて、やう〳〵男もぎたくり、手許に置かじと力に任せ、投ぐる拔刀が一はずみ、二階の比丘尼が小腕に、鋩はづれにずつはと立つ。狙うてはよも當るまじ。障子にさつと生血ひいて、朱に染れば兩人の、口說もわき〳〵興覺めて、「これは〳〵。」と騷ぎしが、されども淺猿甲斐々々しく、二階の梯子踏み轟かし、「これ源五兵衛殿おまん殿、流石は田舍夷よなう。男に執心ひかされて、尋ね來たとの惡推か。執心殘る程ならば、あたら姿をむごたらしう、木の端と窶さいでも、人は情の心の花、花の匂ひに引かれては、深山谷の奥までも、離れ難なう慕ひ來る。戀路とても其の如く、此の胸一つすゑたらば、源五兵衛殿で御座らうが、業平殿で御座らうが、戀の絆に繫ぎ留め、物の見事に添うて見しよ。されども國のおまん故、斯うなつたとの物語。我が身の事は思ひきり、そなたに早う逢はせたく、路銀まで取りしつらひ、其の上にも其の中は、何とかなりしと氣懸りにて、とても捨てたる此の身の果て、修行がてらに餘所ながら、戀には味方の欲しいもの、役には立たずと力にもやと、八重の潮路を越えわたる、都女の戀の情、見習うて手本にしや。それに刃物を投げうちして、騙し討ちに殺さうや。コレそなたの手では得死ぬまい。サア源五兵衛殿、尋常にお手にかゝれば身の本望。」と、脇指拔いて手に持たせ、泣き喚いて武者振り付く。おまん引き退け、「これかしましいしちくどい、都の上方の、聞きともない

蘭があの尼ほど見えれば、薩摩へ戻らず京に居る。牀から出た顔見せたかつた、頭は赤熊猫脊なか、鳩胸に顔は猿、まちつとで鵺になる。思ひ出すもなう嫌や。くらがりの商ひはせうもので御座らぬ。」と、まぎらかし出づれば、「いや〳〵〳〵言はしやんすな。それならなぜ門口で、咳拂ひしてうなづき合ひ、何もいふまい〳〵とは、何の事で御座んした。命をかけ身を捨てて、親に見かへる男なれば、鼻息にも氣を付ける。ひくう言うたら聞くまいと、思はしやんすが不覺のいたり。過ぎにし事を輪廻深く、言ふ氣はさら〳〵無いものを、問はれても未だ隱さしやんす。左程に隔て心を置き、未來までとは能う言はれた。お蘭が來たも皆あひけん、つもられた騙された。逢ひ初めし時の誓文を、金輪際と思ひ詰め、男を大事にかける故、今の母に逆らひて、常々疎み憎まるゝ、嫂まで憎い世の譬へ、今日の年忌の佛まで、憎まするは我が戀ゆゑ、多くの罪をつくりしも、皆いたづらになり果てた。死んだ跡では彼のお蘭と、心安う添はしやんせ、私や死にます。」と、事介が脇指拔いて我が胸に、突き通さんとする處を、「これは短氣。」と飛び懸り、柄に取り付き、「これ〳〵、今日の日天御照覽、少しも隔つる所存なし。思ひがけなき處へ來て、我も當惑したる上、氣にかけさせて無益と思ひ、先づそでないというた分、隱し遂げる心でなし。前後の聞き分けなう、氣が短い。」ともぎ取れば、「オ、氣が短うて、鈍な事見ながら生きては居られぬ。」と、又取り付いつもぎ取りつ、競り合ふ中に母親は、おも

轉寢、後も前もない戀なれど、お前樣も姫御前、女のはかない心から、二人に枕替すまいと、思ひ初めたが善知識、髮容つくつてさへ、高の知れた私が嫖緻、衣を墨に天窗を圓め、戀ひ慕はれうと思はねば、いつそ氣樂で、何れ佛では御座んする。されば佛の石上樹下とて、石の上樹の下陰の、宿りも厭ひ給はねば、岩が根枕氣散じながら、寐覺め〳〵にどうやらすれば、彼の徒臥の因果めが、煩惱を起させます。」と、餘所に語りて事介を、尻目に睨むぞ氣味惡き。事介も迷惑さ。「エ、此處な佛殿、問はず語りせぬものぢや。近頃佛とも覺えぬ人ぢや。」と嫌がれども、新兵衛氣もつかず、「菩提の緣は種種、殊勝にこそ存ずれ。今日は我らが先妻の忌日。彼の中二階の持佛に、薰譽蓮清と申す位牌。あれにて念佛御廻向賴みます。」「それならあれへ通りましよ。」「いざ〳〵あれへお通り。」と、二階へ上れば新兵衛、「事介賴む。何ぞ一種で非時をせい。さらばお布施を包まう。」と奥の間にこそ入りにけれ。二階を見上げて事介、「エ、打見には殊勝らしく、咄を聞けば淫奔者。信心が覺めたれど、非時をせよとのいひつけ、豆腐でも取つて來う。」と、起たんとすればおまん取り付き、「コレ待たつしやれ。彼の尼は内々咄に言はしやんした、こまん樣の侍女お蘭であらうが、何故だまつて隱さんす。但し私があのお蘭を、取つて嚙まうと言ひましたか。どういふ心で御座んす。」と、問ひ詰められて顏を赤め、「ムム今の尼の咄が、蘭が噂に似たゆゑに、其處をもつての惡推か、イヤこれはいかいおはまり。彼のお

し、狹き浮世は何かせん。戀にさはりの關縫ひの。積る思ひをかたあけて、同じ刀にたちちがへ、一つ枕に伏縫して、三途の川のせ筋にて、結び留めましよ、縫ひ留めましよ。留めてとまらぬ涙の絲、裾を引き合ひ褄を引き、二人が歎き諸共に、疊み込めつゝ泣き沈む、世に頼りなき戀路なり。時しもおもてに念佛も、鉦の響もあはれげに、細々と女の聲、「これは上方より諸國をめぐる修行の尼。草鞋の價賴みます。」と、聲つき賤しからざりけり。新兵衞起き上り、「ヤア事介來たか、あれ一錢取らせ。」といひければ、「なう父樣。母樣のお位牌に、念佛一言手向の爲、彼の修行者を持佛堂へ呼び入れても大事ない事か。」「オ、氣がついた奇特々々。殊に比丘尼の事といひ、雷奴が戾つても大事ない事。それ事介呼び入れよ。」「はい。」といふよりおもてに出で、見れば京の屋敷にて假の契りのお蘭なり。互にはつと驚く顏。事介ちやつと我が身を陰に、頭をふつて口のうち、「何も言ふまい／＼ぞ。えへんえへん。」と知らすれば、心得頷く目元にも、浮ぶ涙ぞ至極なる。「これ内方から志がしたいとある、此方へ／＼。」と案内す。「ハア御免なりませ。」と笠を脫いで腰懸くる。おまん茶を汲み饗應して、「若いお人の上方から、筑紫の果てまで修行して、發心の因緣は如何したことか知らねども、今其の身には苦もなうて、羨ましう御座んす。ほんに此の世の佛ぢや。」といひければ、「あの仰しやんす事わいの。苦は色替ふる松風、通り風の吹く樣に、身にも染まぬ一時戀、物言ふ間もないあだし男と、假初臥の

其方も定めて死扮裝。此の誂への縫物も、其の心得に仕立つれども、心の底の裄丈は、昔も今も替らぬが、彼の袖下のいひかはし、いよ〳〵一尺一寸も、引かぬ合點が聞きたい。」と、縫物に事よせて問へば答への返縫、心通はす端縫の、詞の縁こそ哀れなれ。我もそもじもわきあけの、其の袖形のいきかたも、何も彼も未だはづしの絲の、愛しとまでに思はくの、針の本末覺え初め、互に心懸袖の、緣により絲くゝり袖、針目人目も思はねば、親の躾もよしやたゞ、解くな解かじと仕立てしに、綻び易きならひとて、誰がみゝづに聞きつたへ、さがない浮世の袖口に、かけて裂かれてあぢきなや。文の音傳言傳も、誰繼ぎあてず中絶えて、何時しみ〴〵と久振、裄丈逢うた夜半もなし。果敢なきものは女の身、親の詞に從ひの、餘所の小褄に綴ぢられて、つらや悲しや忍び泣き、涙小針にしく〳〵と、まばら〳〵に縫ひこぼす。實に道理や、とても肩身許りかうか〳〵と、ながらへ果つる身巾なし。縫込み廣き身でもなし。かたの惡さに裾切れて、人を恨みん道もなし。思うた事言うた事、今は徒なる逆衽、三寸おとしに裁ち切つて、此の世の契りあさ絲なれど、來世は長き絲巻を、繰り返しては繰り返し、縫れつ縺れつ合はせ絲、六道の縫目に待針して、手は遲くとも待ちぬべし。ア、跡も結ばぬ絲筋の、一筋先へ拔けんとや。一人殘りてまだ〳〵と、誰を相手に裾合はせ、針道違ひ著にくしと、手づゝの浮名は取るまいとよ。さては頼もしなまなかに、まだ著替なき此の生は、五尺に足らぬ襟おと

い、縫物でもして居や。酒の上に泣いたれば、ア、いかうふらつく。やあえい。」と手枕すれば、「少とろ／＼となされませ、私も其の間に事介の頼みやつた洗濯物、つい仕立ててやりましよ。」と、取り出す我も其の人も、互に思ひ替らじと、神に誓ひを掛針や、此の血を染めし指貫なりと、思へば心みだれ絲、過ぎし其の夜を忘れかね、思ひ切りかね捨てかねて、心の底に包み綿、落つる涙の絲筋に、戀をくけ込む哀れさよ。事介は頼みの使ありと聞くより堪り兼ね、嗜む一腰ほつこんで、覺悟極めし顔色、門に驅け入り、「おまん樣これ來ました。」とばかりにて、おろ／＼涙で立ち居たり。おまん嬉しく、「ハアおぢやつたか、先づ上りや。母樣は留守、父樣は寢轉んだばかりで、碌に寢入りはなされぬぞ。物を言やらばそつといや、お眼が覺めれば惡いぞ。」と、眼まぜ頷き知らせける。事介やがて合點し、「今日は御縁付の極めがあると承り、お出入り申す私が、お前の嫁入をおめ／＼と、知らぬと申すは一分立たず。御心底を聞き屆け、其の目出度いお座敷の、お茶の給仕を、これ急じ所をまつ此の樣に、お給仕でも致さんと、脇指さして參つたが、はや御祝儀は相濟み、御縁付は極まつたか。早う聞きたい／＼。」と、胸なで擦るばかりなり。「いかにも出入りの門の事、其方に知らせ、取り持つて貰はずば、殘り多く腹も立ち、無念も嘸と思ひ遣り、種々心碎きても、先づ一旦は縁付に、遁れ難なう極まりし。嫁入する日は死扮裝、葬禮の儀式と聞く。此方の胸は死用意、嫁入の供をして給らば、

てし恩があればとて、縁の道は格別ぞや。殊更今日は大事の年忌、弔ふ者は私ばかり。ほんに無縁の佛の日、出家の一人も供養せず、お墓の花も枯れ次第、持佛の香も消え次第、ざゝんざ所ぢや御座んすまい。但し今の母樣の、仕樣が好いと思うてか。嫁入は思ひも寄らぬ事、重ねていうても下さんすな、いつそ死ねなら死にます。」と、聲をあげて泣きければ、新兵衞も涙にくれ「我が子の心底恥かしい。今の母に目がくれて、死んだ母を忘れたと、思ふ恨みか恨めしや。今日は往なさん追ひ出さんと、幾度筆は執つたれども、堪忍せしも子の可愛さ。七歳から馴染みたる彼めさへ彼の辛さ。跡に呼ぶは猶もつて、馴染は薄く氣兼して、互に隔てもある時は、苦勞に苦勞を重ぬべし。世話の譬へにいふ如く、ほんの母の折檻より、鄰の人の扱ひが、痛いといふは誠ぞや。如何なる賢女貞女でも、乳房の母には似もつかぬ。斯ういふ我も其の通り、若い時分は色もあり、頭に雪を頂いて、寢覺めがちなる夜な〳〵は、稚馴染の子の親を、忘るゝ事はなきぞとよ。此の度の縁づきも、一旦心に隨うて、三日なりとも居て戻れ。其の上では如何樣とも、望みの通り違へはせじ。さら〳〵彼めが贔屓でなし。兎角心に逆らはず、可愛がらせう爲ばかり。今日の佛が不便やな、預けて往んだ此の娘、何とて粗末に思はん。」と、縋り付きて泣きければ、「それなら是非に及びませぬ、必ず〳〵苦に持つて、煩うてばし下さんすな。」と、親子手を取り縋り合ひ、泣き叫ぶこそ道理なれ。「こりや〳〵戻つて見をれば喧し

を、ふきはちやつと酒屋へ、決水槽に水がなささうな。吸物になにをしやうゆか、いやざつと薄味噌を、鰑炙れ。」と噎しく、連立ち奥にぞ入りにける。おまんは胸もせきかへり、サア賴みを取つてはもう遁れぬ。わざくれ燒けぢや。ばれて出て、忍び男のかまひがあると、とんというて捨てうか。寧そ内を走らうか。いや／＼源五兵衛樣も日陰の身、其の上に苦を持たせては、いとしい人の身の大事。談合もするものを、今日は如何して見えぬぞ。父樣を呼び立てて、へんがへして貰はうか。内の者は身にならず、心の合うた友はなし。何とせうやら彼とせうやら、やるせ涙に氣も塞がり、座敷の内をうろ／＼と、起つたり居たり泣く許り。時刻移れば奥の間に、「千秋樂は民を撫で、萬歲樂には命を延ぶ。相生の松風、さつさお暇／＼。」と、好い機嫌にて媒人は、足もひよろ／＼立ち出づる。新兵衛も送つて出で、「兎角目出たいお目出たい、おまん樣おつつけ好い殿持たせます、お内儀樣と申します、兎角目出たいお目出たい。」と管を卷いてぞ歸りける。母は酒氣に猶氣強く、「何とおまん見やつたか、安う積つて百兩足。なんぼ四の五のいやつても、我が身の細工で、あれ程の男はちつと持ち憎かろ。皆媒人の肝精。親父殿の名代に、媒人へ禮に往て、氏神へも參つて來う。何れぞ暇な女子ども、供をせき駄よ綿帽子よ。」と、引繕うてぞ出でにける。おまんは母の町内を、出離るゝまで見送りて、門口より走り入り、「父樣これはどうぞいの。」と、膝の上にかつぱと伏し、絶え入るばかりに歎きしが、「育

じこと、私や別け隔てはせぬものを、又してはく\、さしてもない事苦口言うて、我も嗔恚を燃したり、人にも惡氣附けさんす。精進すなら爲ますまい、寺が嫌なら參るまい、子は親次第のものなれど、緣の道ばかりは押付け所爲には成らぬ事。賴み取りたか取らしやんせ、私や嫁入はしませぬ。せめて十に一つは父樣にも問はしやんせ。母に向うて口過すも、皆こな樣が言はさしやんす。あんまり氣強う御座んす。」と、袂を顏におしあてて、恨み歎きの其の中にも、今日命日の亡き母を、慕ふ淚ぞまさりける。「オ、泣く程嫁入がしともなくば爲せまい、一期男持たずに居やるか。どれ顏見よう、オオ嫌さうな顏ぢや。わが身の好きやる男はおれが嫌、親の許すはそなたが嫌ひ、押付け所爲はしますまい。おつつけたのみが來る筈、投げ返いて見せうぞ。」と、喚きちらす折しも、袴に媒人が、袷羽織もしほめ好き、大鯛昆布柳樽、五色の縮緬紅眞綿、附紙臺折紙臺、三荷に擔はせ、「まづ萬事首尾なつて、「私まで大慶。」と舁きこめば、女房今まで夜叉の忽ちに、愛敬柔和の高笑ひ、「まあく\これはこれは夥しい、何故に留めては下されぬ。さりながら貴方も代が一度の事。皆お媒人のお世話故、これ姉、お禮申しやいの、彼の子も今朝から悅んで、待ち受けて居ましたが、恥かしいと見えました。良人の新兵衞奥に待ち受け居られます、先づあれへお通り。」供の衆は端の間へ。男共は何處へ往た、事介はうせぬか。これおまん、目を拭うて鼻でも、かめや玉よ、此の進上物持つて來い。それ茶の下

前の氣にいりの、事介がおぢやりましよ。事介連れて御座りませ。」「いや事介は少とお寺に障す事ある。母様のいま藏に御座る間に、はやう出たい。」といふ處へ、「ア、これ〱、母はいま藏から出た。動く事はなるまい。」と、笠風呂敷も取つて投げ、「參らして好けりや參らする。今日は其方の嫁入の賴みの使來る筈で、此の中夫婦が用意して、餅よ杵よと世話かくが、そなたの目には見えぬか。産み落した母御前も、七歳の年まで養育、それから此の方十何年といふものは、誰が世話で其の樣に、背丈伸びたと思やる。十月の宿こそかしはせね、恩比べをして見たい、本母御前から釣を取る。地獄にやら何處にやら、見えぬ孝行せうよりも、これ鼻の先にぎろつく、此の母に孝行なら、寺も精進も取り置いて、今日はにつこり笑うて、生臭物で祝うてたも。其の代りに來年は、祖父樣の三十三年忌。それと一度に荷うて、そなたの母御は十四年忌、一年でも多ければ、弔はるゝ佛も德、こつちも雜作が少ない。」と、差す手引く手に算用なり。何時もごとなり親ながら、おまんもあまりこたへかね、「もう好い加減に默らんせ。他人でさへ恩ある方親しい中は精進して、寺道場へも參るのが、まづ道さうに御座んする。腹を借つた母樣の、十三年忌の墓參りが、それ程科になりますか。第一はこな樣の、外聞冥加もあるものと、寺へ上げるお布施も、皆こな樣の志に書きつけをしました。譃なら風呂敷見さしやんせ。死んだ人への廻向は、こな樣への孝行、こな樣への孝行は佛への奉公、母といふ字は同

母の二役、帷子時も前垂で、上下ともに仕舞はるゝ。入相時分に膳立して、夕飯夜食を引張り、火搔がすぐに塵取、砂糖桶に柄をつけて、柄杓を終に買はれず。狗兒しいれて鼠捕らせ、盜人の用心と一疋で埒明け、冬は時々蒲團代り、欠伸もそつにせまいとて、口開きついでに念佛、精進日には齋物一つ。其の齋物の擂木の、頭の圓いを、長老の代僧で仕舞はるゝ。慈悲ある者の眞似はせず、吝嗇い者を手本に、杓子を定規に使はるゝ。正月の飾りが釣瓶繩になるやら、七月の苧殼が壁下地になるやら、念佛講にあたれば、熬豆ついでに灸して、來月の庚申も取越したいとのつぶやき。それに奇特な如來樣が欲しいとて、佛師を呼うでの好み事。右の御手に錫杖、左の御手に縛の繩、腰から下に緋の袴、御頭には烏帽子著せ、蓮華のかはりに米俵、御面めうを眞赤いに、御口をくわつと大髭。阿彌陀如來一體で、不動地藏聖德太子、惠美須大黑、閻魔大王しまうて、胴の中を空洞に鑿つて、二月堂の牛王と、お伊勢樣の御祓入る樣にとの誂へ。佛にさへ油斷させず、責め使ふ和郎ぢやもの、衆生を責めるは道理ぢや。」と、口々そしりて歸りける。琉球と家名を聞けば唐めきて、君は和國のほつとりもの、おまんは千々の物思ひ、「七歲で離れた母樣の、十三年忌が二度はなし、お墓へちよつと。」と加賀笠に、小風呂敷には手向草、露も涙も押包み、「なう竹、大儀ながらこれ持つて、お寺まで供してたも、參つて來たい。」と言ひければ、「お袋樣に問はしやんしたか、私やわめかれたら何とせう。今にお

内より下女が走り出て、「なうこれ〳〵、今日は内方のおまん樣へ、御祝言の頼みが來る。それで餅を搗かつしやる。臼も杵も入る程に、まあ仕舞うて歸らしやれ。今日の働き半日拂ひにせうけれど、なまなか半手間取らうより、頼みの祝ひに皆進上にさつしやれと、お内儀樣の言ひ渡し。」と言ひ捨て入れば、皆々呆れて、「何と事介聞いたか、其方が出入りの旦那ぢやが、餘りな慾面。おまん樣の頼みが來るなら、祝儀は上から給る筈。其の日過ぎの半手間を、貪つて何程ぢや。それに今日はおまん樣、本の母御の十三年忌、茶の子一つ配る事か。おまん樣がいとしい。言うても一人の娘御、彼の名の立つた源五兵衞殿とやら尋ね出し、物さへ入れれば成る事。方々首尾を繕ひ、聟に取つて世を渡いたが先づ順といふもの。定めて頼みの來る方も、大分取れる見込で、奉公分といふであらう。其のあとへ銀持つて來る男の子を養うて、また銀のつく嫁を取り、擧句に主の連合も追ひ出し、銀持つて來る亭主を入れ、惡うしたらば内との者も置き替へ、銀持つて來る奉公人、敷銀する手間取を、尋ねられうも知れまい。傳兵衞のお方どう思やる。」と、どつと笑へば、「オ、それ〳〵、お蝶の父の言やる通り、一を打つて萬を知れ。琉球屋の新兵衞樣といつては、お國は愚か、筑紫九箇國隱れない富限者に、餅搗く臼杵持たずに、晒臼をかねる程な吝嗇坊。彼の心で餅搗きやるは不思議でないか事介。」「いや臼ばかりに限らぬ。萬の物を一色で、二色三色に兼ね割らるゝ。先づ主の身から新兵衞樣を押除け、父

の役にも立つたであらう。先の人が侍ならば、其の恩は忘れまい。」と、心を含む言ひこなし、お蘭は奥より走り出で、「これ待ちや〳〵。この鼻紙入鼻紙、中にお錢もあるさうな。お庭に落ちてあつたが、其方のであらう。持つて往きや。」と、仇の契りも仇にせず、心の底に結び置く、露の情ぞ哀れなる。源五兵衛もほろりとなり、「これは如何にも私の。お志は薩摩でも、一生忘れはいたすまい。」と、お寢間の方をじろりと見て、「ほんに切麥でさへ此のお情、こんな事なら箸ついでに、饂飩も一膳食べましよもの、おのこり多い。」と 三重 出でにけり。

中之巻

川下に布搗くあした來て見れば、かんずる夜半の、霜と見るもの、霜と見る物、椿々、谷川の椿、編笠形に開いたら好かろ、なほ好かろ。さつさ薩摩の芭蕉布、晒すも織るも上方で、まなびも奈良や玉川や、うぢより育ちなりけらし。無慙やな源五兵衛、京も東も足留らず、戀に心の不敵なく、また故郷に立ち歸り、見つけられたらそれまでと、おまんに命捨て杵の、浮名さらしの其の日過ぎ、奉公人やら手間取やら、出入り仕事の事介と名を替へ、見つ見らるゝを取得にて、語る夜なきぞせうことなき。晒搗の女子男共、「ヤア事介今か。」銀が出來たやらゆるりとやりやる、羨ましい。」といふ處へ、

が敲き、下々わめけば詮方なく、土戸の錠を明くるとひとしく、與茂太夫つつと入り、「さてこそ新参め、縛れ縊れ。」と取り廻す。源五兵衞少しも怯まず、「いや縛らるゝ科は持ちませぬ。夜前初めて拍子木役、奥とも口とも存ぜず、戸の明いてあるからはと、しかも念入れ廻る處、女子衆が見つけて、此處へうせたは曲者、夜明まで留め置いて、おとな殿へ渡すとて、錠をおろして動かせず。蚊に喰はれて居ましたが、それでも縛らばお縛りなされ。」とさもありつべしう言ひければ、三五兵衞合點して、「いかにも彼れがいふ通り、わしが鈍相で錠を忘れた、其の間にお庭に來て居ました。勝手知らぬといひながら、後で知れては奥の者の過り、夜明けて此方へ渡さうと、錠下して留めました。何の別儀も無い事。」と、何れも武士の一疋ども、尤もらしうぞ言ひなしける。與茂太夫頑い者、「何も奥のお道具に、見えぬ物は御座らぬか、能う吟味なされたか。」「イヤ何もお道具揃うて、うさんな事は御座らぬ。」と、言へども猶顔しかめ、「汝はすかぬ奴ぢや、第一鼻が高うて合點のいかぬ面。きつと詮議の仕様はあれど、傍へさはればやかましい。これ四十平、直に大坂へ連れ下り薩摩宿へ渡して、舟に乘るまで見屆け歸れ。渡した二歩の取り替へ、返して失せう。早う〳〵。」と睨めつくる。「ハテかしましい返します。おれが鼻が高けりや、此方が睨める筈か。一歩は其方の一歩、鼻はおれが鼻。それ返す。」と投げ出す。三五兵衞も我が身さへ、世を忍ぶ身は詮方なく、「これ其處な者。そちも人の一大事、詞

づらしたら、こな樣斬つて捨てさんすか、さりとてはつれない人。女房可愛がつたとて、ひけになるか、恥辱になるか、武士がすたるか。八年の月日は取りかやしはなるまい。」と、思ひの限り息限り、縋りついて泣きければ、二人の男も理に迫り、泣くより外の事ぞなき。三五兵衞涙を押へ「理とも非とも、これ許りは一言も返答なし。それはよし夫婦の中。源五殿への申譯、腹を切らうと申すとも、よも切らせはなされまい、すれば入らぬ化粧業。何とも違却千萬。」と、いへば源五「これ〳〵、お詞の中なれども、親の敵狙ふ身は、盜みをしても許しある。何のこれしき、お心に懸けられな。さて彼の石子久彌といふ者は、唯今名波道愚と申す雲水の身となり、或時は勢州に住ひ、または濃州信州、折々は京東山、勝軍地藏の隱遁者にちなみ、詩文など作る由、草履中間の咄なり。」といひければ、「有り難き御物語、御恩の上のお情。」と、悅び合ふこそ道理なれ。夜もしら〳〵と白むころ、家のおとな磯部與茂太夫、寄親の四十平、中間四五人引連れ、路次口敲いて、「これ〳〵林殿。お部屋の方に男の聲が聞える。錠明けさつしやれ。穿鑿いたす林殿、林殿。」とぞどよめきける。「そりや爺めが來をつた。」と、あわて騷いで、三五兵衞は奴振る。源五兵衞は女子の眞似、「先づ小まん樣隱しませ。」と、蚊帳へ入るやら驅け出るやら、更に差別はなかりけり。中にも源五物巧者、「騷ぐまい〳〵、渡り奉公した御かけ、我等次第に遊ばせ。私お家に居ぬばかり、何の氣遣ひない事。」と、いふ内にも戸

とは姉妹同然に、一寸側を放さぬに、如何なる事か夜に入れば、唯寝姿を隠したがり、終に側に寝た事なく、小風呂に入れば風邪引いたの、物が出來るの何のとて、伽に小風呂へ入る事なく、胸へさはるも嫌がつて、兎角乳を隠したがる。よろづ起居に心をつけ、見れば見るほど男ぢやが、さては此の小まんに執心かける奴さうな。悋氣するか試しの爲と、わざと今夜彼の人を、閨へ呼うだはこれ故。されども佛に誓ひを立てた道筋は歪むまいと、暗がりに附聲して寝させたは外の者、源五兵衛殿を騙した此の詫言は幾重にも、身のあきらかな證據を。」と、蚊帳打上げ手を取つて、引き出すお蘭といふお櫛上げ、髪も解けて所體なく、顔を赤めて「源五兵衛様許して下さんせ。ア、恥かし。」と袖掩ふ。三五兵衛は詞なく、手持無沙汰に赤面する。源五兵衛も胸つきしが、「ちつとも苦しからぬこと。小まん様も女子、此方も女子、人間の身にかはりなし。譬へば饂飩と切麥、汁は同じ醤油。何方でもお振舞は同然なり。」とぞ和ぐる。小まん取りつき、「わつ。」と泣き、「これ三五兵衛さま、泣かずに言はうと思へども、如何も涙がとめられぬ、出來た仕様ぢや御座んすまい。わたくし明暮戀ひ慕ひ、泣き悲しむを見て居ながら、能うもだまつて居られたなう。去年の春の大煩ひも、こな様故といふ事は、看病なされたお前が證據。男は松女子は藤と、もとから譬へがあるげな。松の力で藤も這ふ、男頼みに女は立つ。十二の年から十九まで、人の盛りを捨て置いて、假令道を守ればこそ、若し氣が反れていた

てかまはぬ事、しかし下郎を相手にするが無念ならば、其の無念はやめて遣ろ。コリヤ音にも聞いたか、薩摩の鹿兒島、菱川源五兵衞、雀の餌程な米を取り、馬の脊骨も跨げたもの。そつちも昔は誰にもせい、當分女子で居るからは、お腰もとの林殿。女は相手にならぬといひたい者ぢやが、それも口眞似童しい。但し女敵といふ惡名。髮きつた後家女に、女敵とは不理窟ながら、これも調べて益ない事、女敵ならば女敵、如何にとしてもお手前が、親の敵に身を碎く、此處が如何も仕かゝれぬ。脇差に手もかけまい。女敵討つて門出祝ひ、親の敵を討ちめされ。それとても是非拔けならば拔かうが、身が國の習ひで、拔くと鞘を敲破り、再びささず死ぬるが、これが薩摩の正銘。ときには二人討死して、親の敵久彌たつた一人の仕合。何のやくにも立たぬ事。これ御腰元、女子衆、女敵の首斬らしやんせ、サア首斬つて取らんせ。」と、人を人とも思はぬ顏、さすがに薩摩者なりけり。「いやさ〳〵武士の喧嘩にぐめんは入らぬ。鞘割らば破れ、碎かば碎け、サア拔け。」と詰めかくる。小まん隔たり押留めて、「さては三五兵衞樣かいの。此方も男といふことは、三年前から見たれども、三五兵衞樣であらうとは、尤も氣のつく筈もなく、私やはまつたか是非もなや。餘の腰元は半季でも、季を重ぬれば打解けて、冬は同じ夜の物、夏は同じ蚊帳の内、女子と女子の主從は、肌を合はせて寢る程に、じやれ※てんがうも言ひ慰む。それに五年も馴染といひ、おはてなされた母樣の、鐵漿親にならせられ、おれ

ば夢にも知らず。四歳で母に後れ、一門の介抱にて、十四の年跡目を繼ぎ、お手前と緣を組み、迎へ取るべき用意の最中、毎日門に貼紙して、狂歌俳諧種々の落書を立て、家中ゆびさして嘲哢する。如何なる故と聞き合はすれば、親の敵があるといふ。弓矢八幡知らぬ事は力なし。敵石子を討ち取り、此の恥を淸めずば、本國へ歸るまいと、譜代の下人に心を合はせ、賴みし寺と内談しめ、三五兵衞病死と披露し、鰶魚といふ魚をもつて火葬を欺き、十六歳で國を出で、髮を延ばし女となり、十九歳の九月より、今年二十三歳まで、五年の春秋附添ひ見るに、顏も知らぬ夫の爲、下尼の身となり、まざまざ側に居るとも知らず、朝夕我に香花取り、精進廻向歎きの樣子、嬉しいやら不便なやら、部屋に入つては泣き暮し、名乘りて聞かせし、うれしがる顏見たいとは思うたが、いや〳〵本望達するまでと、胸に包んだ數々は、船車にも餘るべし。日頃にも似ず今夜しも、彼の下郎を閨へ入れ、見苦しき態は何事ぞ。あれ體の下司奴を、三五兵衞が女敵といふも口惜しい。況んや大事の敵を討つまでは、無念も恥もこらへうと、心誓文立つたれども、凡人の習ひ、目の前の怒り止み難く、かう破つて出るからは、討ちとも無うても討たねばならぬ。一本指せばうぬめも男、サア拔け、相手にしてくれん。エ、奴等風情と太刀打は、武運に盡きた口惜しい。」と、はがみをなして歎きしは、道理せまつて哀れなり。源五兵衞にこ〳〵笑ひながら、「ヤレたとひ王の子息でも、今草履取するからは、下郎と言はれ

獨寢、此處で眠るも同然。そなたも往つて早う寢や。明日逢はうぞや。」といひければ、「さればいの、今日ひよんな草紙を見て、氣が騷いで寢られぬ、何時もの樣に女夫事して寢ませう。今宵は此方さんお內儀にならしやんすか、但し男にならしやんすか。」「ア、何方になつても思ひの種、男とも女子とも、見立て次第。」というて居る、下心こそわりなけれ。「いや〳〵どうでも女子が好い。實可愛らしい女房ぢや。ならば男と生まれて、貴樣と一夜寢て見たい、何うもならぬ。」と懷に、手を差しいれて抱き付けば、「ヱ、ほてくろし放さんせ。女子同士寢ようより、一人寢て本の事、夢に見たのに德がある。」と、じやれに紛らし逃げ入れば、「わしも夢の相伴。」と、おはへてこそは 三重 入りにけれ。此の人音に源五兵衛、「顯はれては身の越度、お暇申す。」と驅け出づる。小まん押留め、「覺悟あつてするからは、其方に難儀かけはせぬ。ハテ高が後家の身、いたづらものといはるゝまで。思案がある待つてたも。」といへども、「否々、お屋敷はどうもあれ。生國薩摩は人あらため強く、我等は今にお尋ねもの。此のこと國へ聞えては、召し返されて罪科に遇ひ、一門の恥おまんが歎き。塀を乘り越え夜の中に、大津までも。」といふ處へ、林は嗜む長刀、裾端折つて捲り上げ、「奴殿動くまい。」と、緣端に跳り出でたるは、狂氣とならでは見えざりけり。「ホ、ちと合點が參るまい。これ小まん、我こそ肥州熊本笹野三五兵衛。我二歲の時、親三五左衛門は武州の遊所にて、石子久彌といふ者に討たれしな、幼少なれ

女の眞似をして、五年七年辛氣を碎くも、大事を思ひ立つたる故。念願遂げず本名顯はし、小事に大事を忘れては、今までが皆うつけの沙汰、一家一門武門の名折れ、堪忍の場思案の場、だまれ／＼人や見る。」と、もとの女でしやなら／＼と立ち歸る。お寢間は愈聲高く、今ぞ別れのさゝめ言、エ、妬ましく口惜しきに、下部の持つたる拍子木あり。「ム、ウ忍男は下郎よな。たとへ望み遂げたりとも、三五兵衞が女房を下郎に盗まれ、目前の女敵見遁しにならうか。日頃塗つたる艷白粉の、つやつくろひも入らばこそ。」と、裾捻ぢ上げて足頸も、人に見せじと包みたる、紅絹地袋の色に出る、腓太股いと黑く、女の爲なる緋縮緬、足纒ひぞと高褰げ、男の下紐顯はなる。常に嗜む紅皿も、今宵血潮の膝の皿、鐵漿壺のくろがねも、心の鋼鏽おとし、引き寄せ／＼一刀、さし櫛笄こん小枕、小微塵になれと髮かきなで、さそくを蹈んで驅け出でしが、南無三寶、刀は部屋の長持に、取りに歸るは手延びなり、無刀でかゝるは不覺なり。夜中はんじの時計の聲、心せかするばかりなり。「ハア、彼の廊下を來る人は、傍輩のおしゆんおや。此奴はしやべりの轉婆め。見つけられては大事ぞ。」と、からげ下して前掻き合はせ、所體つくれば目の前に、元の林となら團扇、空睡こそゆたかなれ。おしゆんは何の氣もつかず、「林殿、此處に何してぞ。」といへば、わざと喫驚して、「ア、何ぞいの、けうとげな。お寢間が近い嗜めや。明日は月の十五日、鐵漿つけて寢ようか、寢て待つ男もあらばこそ、氣散じな

あるうちに、はや片附けうとあつたれども、頑是なしに道を立て、十二で小癪な髪を斷り、今で後家は立つれども、若い女子の可愛と思や、妻戀ふ犬猫鳥翼、蟲にも劣つて男の肌、知らずに死ぬる。今の樣な咄を聞く度に罪つくられ、當座にしやんと嫁入つて退ければ好いものを、阿呆な斟酌仕すごいて、湯の辭儀は水になる、吸うても見せず心から、煮えこじけの若後家。一字違うて名も能うにた、三五兵衛樣と思うて、其方をおまんに借りたいが、なんと一夜は貸す氣か。おまんにうけやつた五重相傳、此の小まんに授けてたも。手を合はせて拜みます。サア南無阿彌陀佛々々々々々、これなう南無阿彌陀ぢや。」と身を揉みし、笑止痛はし恥かしし。源五も困り狼狽へて、「おまんが五重相傳は、丸裸で受けました。夜は蚊が喰ふ明日。」と、逃げんとすれば引留め、「氣がつかなんだ、蚊が食はう、蚊帳へおぢや。」と抱き入るゝ。否ぢや／＼もお主の威光、蚊帳打明くるあをち風、有明消えて、「これこれ、これが安養極樂世界。」何國も戀の闇ぞかし。お氣に入りの林は、宵より茶の間に寢たりしが、土戸に錠を忘れしと、手燭挑げてお寢間の次、御用もやと立ち窺へば、有明消えし襖の彼方、しめやかな男の聲、「合點いかぬ、蚊の鳴く聲か、いや／＼人に紛れない。」と、緣先見れば男の草履。「サア惡性に極まつた。男は何者、襖蹴破り飛び入つて、二つ胴に斬り重ねん。」と跳り出でしが、「ア、さうでないさうでない。笹野三五兵衛とも言はるゝ身が、世間は病死と披露して、葬禮まで取行ひ、あらぬ

善導か法然の化身であらうと申した。又寺の旦那に濱の町といふ處、芭蕉布屋のおまんと申すは筑紫一番、和泉式部か小式部の化身と褒めた小娘。彼奴が我等を見るたびに、齋に參れば抱き付き、墓へ參れば抱き付き、滅多無性に抱き付けども、此方合點まゐるにこそ、和泉式部の化身めが、此の法然の化身と相撲を望むと覺えた、投げてくれうと存じて、或時墓へ參つた處、私ははだかになり、長老樣の緞子の袈裟、腰にきつとしめつけ、さア御座れとだきついた。彼方もぬからず四つ手にくみ、汗水流してくみあふとて、何やらさゝやきつぶやいて、互に因果を晒屋の、臼から杵とは此の事。まんまと法然上人が、彼方の十念授かり、初わけの五重相傳受け、四十八夜の常念佛、互に忍び忍ばれて、物三年は夜晝なし、千日の廻向まで一日懈怠も仕らず。これが知れいでであるものか、沙彌が聞けば長老が聞く、兄が知れば親が知り、髮をおろさぬ其の內に、縛首打たるゝ沙汰。如何も國にたまられず、おまんと後の契約して、十九の年に薩摩を出で、十方世界を驅け廻り、お尋ねなれば身の上の、願以此功德氣の氣な、お咄なり。」とぞ語りける。「さても〳〵可笑しい樣で悲しい咄。其の人はおまん、おれは小まん、身に擬へて淚が飜るゝ。國並びの事なれば、若しは聞きやつた事もあろ。おれは肥後の熊本、笹野三五兵衛さまといふ人と、後紐から緣組あり。無事で御座れば疾うに肥後へ嫁入する。八年前に彼のお人、病死なされた便宜あり。一門衆も親達も、杯はせず顏は見ず。方々貰人

過ぎ早夜中、「蒸しくり熱う寢憎や。」と、小萬の君の夜半起き、庭にとほんと風受けて、「ア、生熱や、此方が樣に肥えたものは猶熱い、男持つて痩せたいぞ。」と獨言して、「これは〳〵、土戸の錠が下りずにある。林が麁相で忘れたか。誰ぞ來いやい。」と召す處へ、屋敷廻りの拍子木の音、月に近寄る影見れば、新參の津摩藏、「ヤアこれは好い慰み。」と、つい立ち寄るも女松の影、男氣入らぬお部屋なり。新參は勝手知らず、戸の開くまゝにつつと入り、庭の隅々拍子木打ち、爪だてて蚊帳の中、好もしさうに見る間に、そつと廻つて戸を引き立て、錠さす音に膽潰し、「申し〳〵まだ私が出まする。錠開けてくだされませ。」「いや〳〵此處に鍵はない。むざと男の來ぬ處へ來たが不祥、明日まで待ちや。」「ヤア、それでは私首がない。これ四十平殿お助け。」と、拍子木鳴らすを、「エ、囂しい〳〵、拍子木置いて貰はう。」と、取つて擲つて手をとつて、「コレちつとも大事ない、苦にするな。おれは此處の姉娘小萬といふ者。其方は濡れゆゑ薩摩を出て、賤しい奉公するといふ。大名衆の標揃聞きたうも何ともない。薩摩の戀の一通り、根から葉から聞かねば、氣にかゝつて夜が寢られず。ひよんな咄を聞きさいて、睡たうて眼がうづく。※譃なしに咄さうか、言はねばこれぢや。」とつめらるゝ。「あ痛〳〵申しませう。私は鹿兒島で菱川源五兵衛と申して、親兒共は小知を取り、我等末子の是非もなく、來迎院と申す知行寺へ後住の約束、十三の秋から豆腐、蒟蒻、念佛の外、魚類女類は口にもかけず、

中ぶくら、お駕籠は紺に香の圖なり。阿波淡路兩國主、撞木鞘と丸十文字、六尺は繋菱」繋げや〳〵永樂錢の駕籠印、黑鳥の末廣は、周防長門の萩の殿、さて九州にいたつては、御紋も黑餅、圓丸鳥毛は筑前福岡の御城主、蠟燭鞘と鎌槍の筑後の久留米、天目鳥毛は同國柳川、白熊のすみ袋、杉形の中締は豐前の小倉、中津の主。白分銅は豐後の杵築。萌黃羅紗の袋鞘、白滑皮の鍔ぶくら、銀杏の丸の駕籠の紋、肥前佐賀の御居城。大袋は同國唐津、ずん切鞘に銀の笠、手杵は島原平戸の城主。白猪の丸筒鍔ぶくら、同じく笹鞘、駕籠は淺葱に山道こそ、代々肥後の御國主。劍形は日向大名、十文字は對馬の縣、黑熊の片鎌は高麗までも隱れなき、大隅薩摩の御大將。其の外諸國の御大名、數も限りもあら慮外、申すも長柄の御槍標、あらまし斯く。」と述べければ、簾の内外ざわ〳〵〳〵、「能う〳〵云うたり申したり。扨も〳〵。」と稍しばし、手を拍いてぞ褒めらるゝ。「やれ幸ひの奉公人、此の者に極めよ。」と、四十平を召し出され、「おとな殿へ申して取りかへ渡し、吉日なれば今日中に請判きはめ、今宵からお屋敷に泊らせよ。薩摩者とあるからは、さの字を除けて津摩藏とお付けなさるゝ。」あれへ立つて休みませい。」「ない〳〵〳〵。」と立ちければ、四十平小隅へまねぎ、「して切米は何程欲しい。」「半季に二兩二歩下され。」四十平興さまし、「それでは一年五兩か。」「いかにも〳〵近年五兩取りまする。」「すれば其方は實盛ぢや。道理で女中の氣に入つた。」と、連れて入り日も 三重 短夜や、秋の初夜

くつ〳〵、岩槻の御城主と、名乘つて出羽の米澤は、摘鳥毛の唐人笠、六尺は重釘貫、白鳥の笠鉾鞘、煤竹羅紗の袋鞘、犬鈎打つたる印こそ、庄内の主ぞと、白熊の天目鞘、これが秋田の佐竹殿劒銓の中締に、六尺模樣はぐる〳〵、御紋も車は越後の村上、黑羅紗の輪鼓鞘、同じく桔梗十文字、紺に無紋の六尺は、加賀に梅鉢百二十萬石に、續くものなし似たるものなし。御紋ばかりは越中も、似たりや似たり杜若花、花菖蒲、菖蒲皮の角十文字、白頭の大禿、これ越前家。六角の筒鞘の二本道具は若狹の小濱。劒銓輪鼓の鈎槍素槍は、伊賀伊勢の津の御城主。花色羅紗の巾著鞘、輪違の六尺は相州小田原。兜巾頭と大身の槍は、下總國佐倉の御城主。栗色の敲鞘、筆形の中締は、江州彦根の御大將。黑熊の如意寶珠、駕籠は輪抜けに角の棒、美濃の加納のあるじなり。青貝柄に切立鞘、信濃の松代。白柄に白鞘兜巾頭、駕籠は束木丹後の宮津。裾ぶくらの對のお道具出雲の松江。駕籠の紋は丸に蔦の葉、のきませ、退け〳〵とつと退け〳〵、鳥取鳥毛大鳥毛、因幡伯耆のお國取り。播磨の同國印も似たり。姫路は赤し明石は黑し　何れも素槍の中締にて、分銅形の一對は備前の岡山。鈎槍に白獅子の棒は備中松山、駕籠の紋は丸に虎の尾、ひんと跳ねたる備後の福山。獨樂形の白鳥毛、駕籠は紺にちぎりの染め拔き、袋鞘は安藝の廣島。さてまた四國の御大名、熊の皮の投鞘は讃州高松。同じく伊豫の松山は、黑熊の唐杯に、お道具持が醉うたとさ、醉うたとさ、とさ〳〵土佐の高知は

二三四五六七、押せ／＼振つて出ませい。「在所故鄕は何國にて、小姓廻しの一通り、お江戸の勝手おぼえてか。供先乘打下馬前に、大名方の目標も、知るや如何に。」とありければ、「倅九州薩摩者、推參ながら古は、大小刀もさそふ水、かなはぬ濡れに身を浸し、廣い薩摩を狹められ、近い朝鮮琉球より、遠い東都は日本の地、命菜種に油の涙、搦み奉公いたしても、戀しい奴めにま一度と、江戸に三年、都に二年、公家武家方のお小姓髮、結立ては持ちませず、六十餘州の大名樣、お馬標槍標、お駕籠おさへの紋印、暗に覺えて罷り在る。御奉公は緣の者、これを取得に召し置かれば、常江戸脇城國脇まで、申せば事も長い事、先づ一國名に高き、城主樣方あらまし。」と、口拍子にて連ねけり。

諸國鑓じるし

「武家繁昌の御威勢、我らが口にかけまくも、勿體なみ風治まりし、お江戸は貴賤群集の中、御同朋を連れらるゝは、外に數なき類なき、お家のこれがしるしなり。垣ねもりばの大鳥毛、對のお道具突つ立てて、お駕籠の者は裏菊の、裾にませ籬染めたるは、名にしあう州五十四郡の旗頭、旗は白旗黑羅紗の、杉形鞘に羽織著て、お駕籠舁くのはこればかり。同國若松の主ぞと、誰しら河は大身の槍、駕籠の紋は松皮菱、鱗形の腰替り、白頭の振兎、二本松の城主とかや。素槍の鈎に枝垂絲、さつと枝垂れて、枝垂鳥毛の大小は、これ南部殿、津輕殿、奥大名の長道中、奴が首も投鞘に、紺に手杵をつ

甘うまい事仕り、旦那茯苓致され、詮議まち〳〵麥門冬、季中に其處を追ひ出し薬、それより心に莪朮を張り、よしや浮世は陳皮の皮、肩に木香かたげても、地黄に大根しらがまで、かくては果てじと、こんのだいなし薑一片、腰に一本薬研鐔、面に鍋墨髭人參、煎じ詰めたる奉公人、誓文白朮和中散、身を粉薬に御奉公、定齋なし。」とぞ答へける。「實に氣の薬なものなれど、女中の前の長口上、近頃天鵞絨の半襟かけた、次の男は町の風、武士の勝手は合點か。」「さてもお目利今極め、極印打つて私儀は、銀座に長々使はれ、駕籠乘物のはい〳〵ぶき、京者の正眞、お屋敷方は新分銅、聲に鉛は混らねど、少といき憎いと申す故、歩を引かれても奉公の、しな替へます。」といひければ、「それでは此方に使はれぬ。末の季までは包みの儘、宿に居やや。」と笑はるゝ。「後な奴が國所、あちと麓の赤松を、打割り松の煙油髭、氣味好い頭のすり鉢鬢、江戸すりがらしと見えたよな。」「御意の通りに丁稚奴は、信州木曾の山家者。でつかく冷ゆる寒國の、髭に氷柱の朝嵐、布子一つでお供先、ふるか信濃の信濃の、ハッアつめたいな。實に雪國で、身を寒晒唐辛、天目にごき集錢酒、一兩二歩の取り替を、春めきながら借り越して、末白雪の買ひがゝり、首だけつもる借錢の、深田に馬をかけ落ちいたし、木曾を走つて參りし。」と、いへばおの〳〵打笑ひ、「左樣なものを抱へては、此方に算用あはづの原。」と、どつと興をば催しける。お庭の隅に目をもつて、碁盤格子の染帶を、骨牌結や年配も、二十

背のすらりと眉目の好い、二十餘りな女中が受け返答を召されう。林殿とて姉御樣の御氣にいり。第一此の人のいひなしとはいひつ、緣次第仕合次第。」といふ處に、小庭へ廻る車戸の、かけ金はづす女の聲、「これ四十平。奉公人衆揃うたら、一人づゝお庭へ廻しや。」と、言ひ捨てて立ち歸る。「それ〳〵彼が林殿、簾の内は姉姬樣、御前が近い競合はず、下馬前をして振りませい。」「ない。」と答へて振り出す、手先上りの頭八分、腰の捻りに足取りに、すつ〳〵〳〵、すつ〳〵砂地に膝をする、花かいらぎと散る花と、ざんざめいたる掃き庭の、緣の上には腰元衆、簾に挾みしお鼻紙、姉御樣ぞと奧ゆかし。中にも林は手を突いて、簾の中より何事か、御意なさるれば「あい〳〵。」と、お返事申して尋ねける。「これ〳〵前な絲鬢の、鬢かかりつけた鎌髭奴。今までは何處に居て、在所は京か田舍か。お小姓方の奉公は、髮月代におこのみあり。手覺えあるか。」と尋ぬれば、「私が生國陸奧國、七つ道具の一通り、お馬の湯洗ひ伏せ起し、武家の奉公しからせば、糠味噌汁の花散りて、近年高野に相勤め、小姓廻しはいたせしが、高野六十那智八十、きんが頭の若衆にて、つひに月代剃つた事、ごはりませぬ。」と答へける。「けうとや怖や。其の樣な目出度い若衆に、升かけをきり米望み次第ぞや。次な男は何うぞ何うぞ。」「拙者は倅の時分より、醫者衆に相勤め、町人參や香附子方の奉公は不案內。地體我等は川芎持、同じ處に當歸まで、三百草々々と季を重ね、罷り在りし搒雜の、中居にちよつと甘草の、

源五兵衛
おまん 薩摩歌

上之卷

櫻咲く、彌生の鴈の出かはりに、新參の燕おきつけて、あとを濁さぬ水の面、這ひ出の蛙二合半、首にかけたか杜鵑、木々の梢も繁藏と、誰か呼子鳥草履取、一季半季の花鳥も、とかくは御緣次第なり。流行小唄も時につれ、時の昔と何處へ往く。寛文年の頃かとよ、御城本は但馬國、京の屋敷は千本通千本立ちの植込も、若葉の錦みかけから、長者町をばおしまはし、出水通りの長屋門、この大屋敷をあづかり、京江戸、御國の御用等一人に承る、御留守居平鹿の某殿にこそ、中途に奴草履取、召し置かるれど方々より、ひきを求めてめみえする。此の頃五人三人宛、毎日吟味なさるれど、好い男さへ稀なれば、少しよめなる女房の、びかしやかふるは科ならず。中間頭寄親の、四十平下見をして「ム、何れも好い奉公人衆。さて御家の若旦那、殿樣よりお小姓に召出され、親旦那御同道で、唯今は御江戸に。御若年の若旦那、氣を知つた上方者を、抱へてやらんと仰せられ、小まん樣と申す姉御樣、お部屋のお庭へ召出され、簾越しに御覽あり、女中よつての御極め、女中多いといふ中にも、

まや。」と、しやくりあげ〳〵、聲も惜しまず泣きければ、夫も「わつ。」と叫びいり、流涕憧るゝ心意氣、理せめて哀れなれ。「いつまでいうて詮もなし。はや〳〵殺して〳〵。」と、最期を急げば、「心得たり。」と、脇差するりと抜き放し、「サアたゞ今ぞ南無阿彌陀々々々々。」と、いへどもさすが此の年月、いとし可愛としめてねし、肌に刃が當てられうかと、眼も眩み手も慄ひ、弱る心を引直し、取直しても猶慄ひ、突くとはすれど切先は、彼方へはづれ此方へそれ、二三度ひらめく劍の刃、「あつ。」とばかりに喉吭に、ぐつととほるが、「南無阿彌陀々々々々、南無阿彌陀佛。」とくりとほし、くりとほす腕先も、弱るを見れば兩手を伸べ、※斷末魔の四苦八苦、哀れと云ふもあまりあり。「我とても遲れうか、息は一度に引き取らん。」と、剃刀取つて喉に突き立て、柄もをれよ刃も碎けと、ゑぐりくり〳〵目もくるめき、苦しむ息も曉の、知死期につれて絶え果てたり。誰が告ぐるとは曾根崎の、森の下風音に聞え取り傳へ、貴賤羣集の廻向の種、未來成佛疑ひなき、戀の手本となりにけり。

曾根崎心中　終

も、浮名は捨てじと心がけ、剃刀用意致せしが、望みの通り、一所で死ぬる此の嬉しさ。」と云ひければ、「オ、神妙頼もしし。さ程に心落ちつくからは、最期も案ずる事はなし。さりながら臨終の時の苦患にて、死姿見苦しと云はれんも口惜しし。此の兩本の連理の木に、身體をきつと結ひつけ、潔う死ぬまいか。世に類なき死樣の、手本とならん。」「如何にも。」と、あさましや淺葱染、かかれとてやは抱帶、兩方へ引きはりて、剃刀取つてさら〳〵と、「帶は裂けても主さまと、私が間はよも裂けじ。」と、どうど坐をくみ二重三重、搖がぬ樣に確かと締め、「能う締つたか。」「オ、締めました。」と、女は夫の姿を見、男は女の體を見て、「こは情なき身の果てぞや。」と、「わつ。」と泣き入るばかりなり。「ア、歎かじ。」と德兵衞、顏ふり上げて手を合はせ、「我幼少にて誠の父母に離れ、伯父と云ひ親方の、苦勞となりて人となり、恩も送らず此の儘に、亡き跡までも兎や角と、御難儀かけん勿體なや。罪を免して下されかし。冥途にまします父母には、おつつけ御目に懸るべし、迎へ給へ。」と泣きければ、お初も同じく手を合はせ、「こなた樣は羨ましや、冥途の御親に逢はんとある。我らが父樣母樣は、息災で此の世の人なれば、いつ逢ふ事の有るべきぞ。便りは此の春聞いたれど、逢うたは去年の初秋の、初が心中取沙汰の、明日は在所へ聞えなば、如何ばかりかは歎きをかけん。親達へも兄弟へも、これから此の世の暇乞ひ、せめて心が通じなば、夢にも見えてくれよかし。なつかしの母樣や、名殘惜しの父さ

とて、思ひ合たるる厄祟り、緣の深さのしるしかや。神や佛に懸けおきし、現世の願を今宵で、未來へ廻向し後の世も、猶しも一つ蓮ぞや。」と、つまぐる珠數の百八に、淚の玉の數添ひて、盡きせぬ哀れ盡きる道、心も空もかげくらく、風しん〳〵たる曾根崎の、森にぞたどり著きにける。彼處にか此處にかと、拂へど草に散る露の、われより先に先づ消えて、定めなき世は稻妻か、それかあらぬか、「ア、怖、今のは何と云ふ物やらん。」「オ、あれこそは人魂よ。今宵死するはわれのみとこそ思ひしに、先立つ人もありしよな。誰にもせよ、死出の山の伴ひぞや。南無阿彌陀佛々々々々。」の聲の中、「あはれ悲しや、又こそ魂の世を去りしは。南無阿彌陀佛。」と云ひければ、女はおろかに淚ぐみ、「今宵は人の死ぬる夜かや、あさましさよ。」と淚ぐむ。男淚をはら〳〵と流し、「二つ連れ飛ぶ人魂を、よその上と思ふかや、正しう御身とわが魂よ。」「なになう二人の魂とや。はや我々は死したる身か。」「オ、常ならば結び留め、繫ぎ留めんと歎かまし。今は最期を急ぐ身の、魂のありかを一つに住まん。道を迷ふな違ふな。」と、抱き寄せ肌を寄せ、かつはと伏して泣き居たる、二人の心ぞ不便なる。淚の絲の結び松、椶梠の一木の相生を、連理の契りになぞらへ、露の浮身の置きどころ、「サア爰に極めん。」と、上著の帶を德兵衞も、初も淚の染小袖、脫いでかけたる椶梠の葉の、其の玉はゝき今ぞ實に、浮世の塵を拂ふらん。初が袖より剃刀出し、「若しも道にて追手の懸り、われ〳〵になるとて

夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて、殘る一つが今生の、鐘の響きの聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見上ぐれば、くも心なき水の音、北斗は冴えて影映る、星の妹脊の銀河、梅田の橋を鵲の、橋と契りていつまでも、我と其方は女夫星、必ずさうと縋り寄り、二人が中に降る涙、川の水嵩も增るべし。向うの二階は何屋とも、おほつかなさけ最中にて、まだ寢ぬ火影聲高く、今年の心中善し惡しの、言の葉ぐさや茂るらん。聞くに心もくれは鳥、あやなや昨日今日までも、よそに言ひしが明日よりは、我も噂の數に入り、世に謠はれん。謠はば謠へ。謠ふを聞けば、どうで女房にや持ちやさんすまい。いらぬ者ぢやと思へども、實に思へども歎けども、身も世も思ふ儘ならず。いつを今日とて今日が日まで、心ののびし夜半もなく、思はぬ色に苦しみに、どうした事の緣ぢややら、忘るゝ隙はないわいな。それにふり捨て行かうとは。遣りやしませぬぞ、手にかけて、殺して置いて行かんせな。放ちは遣らじと泣きければ、「歌も多きにあの歌を、時こそあれ今宵しも、謠ふは誰そや、聞くはわれ。過ぎにし人もわれ〳〵も、一つ思ひ。」と縋りつき、聲も惜しまず泣き居たり。いつはさもあれ此の夜半は、せめて暫しは長からで、心もなつの夜のならひ、命をおはゆる鳥の聲、明けなばうしや天神の、森で死なんと手を引きて、梅田堤の小夜烏、明日は我が身を餌食ぞや。「誠に今年は此方樣も、二十五歲の厄の年、私も十九の厄年

無垢死出立、戀路の闇黑小袖、上にうちかけ差足し、二階の口よりさし覗けば、男は下家に顔出し、招きうなづき指さして、心にものをいはすれば、梯子の下に下女寢たり、釣行燈の火は明し、如何はせんと案ぜしが、棕櫚帚に扇をつけ、箱梯子の二つめより、煽ぎ消せども消えかぬる、身も手ものばしはたと消せば、梯子よりどうど落ち、行燈消えてくらがりに、下女はうんと寢返りし、二人は胴をふるはして、尋ね廻る危さよ。亭主奥にて目を覺し、「今のはなんぢや。女子ども有明の火も消えた、起きて燈せ。」と起されて、下女は眠そに目をすり〳〵、丸裸にて起き出で、「火打箱が見えぬ。」と、探り歩くを觸らじと、彼方此方へはひまつはるゝ玉かづら、くるしき闇の現なや。漸う二人手を取り合ひ、門口までそつと出で、かきがねははづせしが、車戸の音いぶかしく、明けかねし折から、下女は火打をはた〳〵と、打つ音に紛らかし、ちやうど打てばそつと明け、かち〳〵打てばそろ〳〵明け、合はせ合はせて身を縮め、袖と袖とをまきの戸や、虎の尾を踏む心地して、二人續いてつゝと出で、顏を見合はせ、「ア、嬉し。」と、死にに行く身を悅びし、あはれさつらさ淺ましさ。跡に火打の石の火の、命の末こそ 三重 短けれ。

曾根崎心中 徳兵衛 おはつ 道行

此の世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、

と、「死んで恥を雪がいでは。」と、いへば九平次ぎよつとして、「お初は何をいはるゝぞ、何の徳兵衛が死ぬるものぞ。若しまた死んだら其の跡は、おれがねんごろして遣らう、和女もおれに惚れてぢやけな。」と云へば、「こりや忝かろわいの。私と懇さあんすと、此方も殺すが合點か。徳様に離れて、片時も生きてゐようか。そこな九平次のどうずりめ、阿呆口を叩いて、人が聞いても不審が立つ。どうで徳様一緒に死ぬる、私も一緒に死ぬるぞやいの。」と、足にて突けば縁の下には涙を流し、足を取つて押戴き、膝に抱きつき憧れ泣き、女も色に包みかね、互に物は言はねども、肝と肝とにこたへつつ、濕り泣きにぞ泣き居たる、人知らぬこそ哀れなれ。九平次も氣味惡く、「相場が惡いおぢやいの。爰なよね衆はいな事で、おれらが様に銀遣ふ大盡は嫌ひさうな。あさやへよつて一杯して、ぐわらぐわら一歩を撒き散らし、そしていんだら寢よからう。ア、懐が重たうて、歩きにくい。」と惡口だらけいひ散らし、喚いてこそは歸りけれ。亭主夫婦、「今宵ははや火もしまへ、泊りの衆は寢せませい。初も二階へ上つて寢や、早う寢や。」と云ひければ、「そんなら旦那さま内儀様、もうお目に懸りますまい、さらばでござんす、内衆もさらば〳〵。」と他ながら、暇乞して閨に入る、これ一生の別れとは、後にこそ知れ、氣もつかぬ愚かの心不便さよ。「それ釜の下に念を入れ、肴を鼠に引かするな。」と、みせをあげつ門さしつ、寢るより早く高鼾、如何なる夢もみじか夜の、八つになるは程もなし。初は白

れ、上り口に腰打掛け、煙草引寄せ吸ひつけて、そ知らぬ顔して居たりけり。かかる所へ九平次は、惡口仲間二三人、座頭まじくらどつと來り、「ヤアよね樣達寂しさうに御座る。何と客に成つて遣らうかい。なんと亭主久しいの。」と、のさばりあがれば、「夫れ煙草盆お杯。」と、※ありべか〻りにたち騷ぐ。「イヤ酒はおきや、呑んで來た。さてはなす事がある、これの初が一客、平野屋の德兵衛めが、身が落した印判拾ひ、二貫目の贋手形で騙らうとしたれども、理窟に詰つた擧句には、死なずがひな目に遇うて、一分はすたつた。向後爰らへ來るとも、油斷しやるな。皆に斯う語るのも、德兵衛めが※うせまつかい樣にいふとても、必ず誠にしやるなや。寄せる事もいらぬもの。どうで野邊か飛田もの。」と、誠しやかにいひ散らす。緣の下には齒を食ひしばり、身をふるはして腹を立つるを、初はこれを知らせじと、足の先にて押鎭め、押へ鎭めし神妙さ。亭主は久しい客の事、善し惡しの返答なく、「さらば何ぞお吸物。」と、紛らかしてぞ立ちにける。初は淚にくれながら、「然のみ利根にいはぬもの、德樣の御事、幾年馴染み心根を、明し明せし中なるが、それは〱※いとしぼけに、みぢん譯はわるうなし。賴もしだてが身の※ひしで、欺されさんしたものなれども、證據なければ理も立たず。此の上は德樣も死なねばならぬしなるが、死ぬる覺悟が聞きたい。」と、獨言になぞらへて、足で問へばうちうなづき、足首取つて喉笛撫で、自害するとぞ知らせける。「オ、その筈〱。いつまで生きても同じこ

酒も飲まれず氣も濟まず、しく／＼泣いて居る處へ、鄰の妓や傍輩の、ちよつと來ては、「なう初様、何も聞かんせぬか。德様は何やら譯の惡い事あつて、たんと撲たれさんしたと、聞いたが眞か。」といふもあり「イヤわしが客様の話ぢやが、蹈まれて死なんしたげな。」といふもあり、「かたりをいうて縛られて。」の、「僞判してくゝられて。」のと、碌な事はひとつも言はず。問ふに辛さの見舞なり。「あゝいやもう言うて下んすな。聞けば聞くほど胸痛み、わしから先へ死にさうな。いつそ死んでのけたい。」と、泣くより外の事ぞなき。涙片手におもてを見れば、夜の編笠德兵衛、思ひ侘びたる忍び姿、ちらと見るより飛び立つばかり、走り出でんと思へども、おうへには亭主夫婦、上口に料理人、庭では下女がやくたいの、目が繁ければさもならず。「ア、いかう氣が盡きた、門見てこう。」とそつと出で、「なうこれはどうぞいの。こな様の評判いろ／＼に聞いたゆゑ、其の氣遣ひさ／＼、狂氣の様になつて居たわいなう。」と、笠の内に顔さし入れ、聲を立てずの隱し泣き、哀れ切なき涙なり。男も涙にくれながら、「聞きやる通りのたくみなれば、いふ程おれが非に落ちる。其の内四方八方の、首尾はぐわらりと違うてくる。最早今宵は過されず、とんと覺悟を極めた。」と、さゝやけば内よりも、「世間に惡い取沙汰ある、初様内へ這入らんせ。」と、聲々に呼び入るゝ。「オウ／＼あれぢや、何も話されぬ。私がする様にならんせ。」と、裲襠の裾に隱し入れ、はふ／＼中戸の沓脱より忍ばせて、縁の下屋にそつと入

け、彼方此方へふし轉び、「やれ九平次め畜生め。汝生けて置かうか。」と、よろぼひ尋ね廻れども、逃げて行方も見えばこそ、其の儘其處にどうと坐り、大聲上げて涙を流し、「いづれもの手前も面目なし恥かしし。全く此の德兵衞が言ひかけしたるで更になし。日頃兄弟同然に、語りし奴が事といひ、一生の恩と歎きし故、明日七日此の銀がなければ、我等も死なねばならぬ、命がはりの銀なれども、互の事と役に立ち、手形を我等が手で書かせ、印判するゑて其の判を、前方に落せしと町內へ披露して、却つて今の逆ねだれ、口惜しや無念やな。此の如く蹈み叩かれ、男も立たず身も立たず、ヱヽ最前に摑み付き、食ひついてなりとも死なんものを。」と、大地を叩きはがみをなし、拳を握り歎きしは、道理とも笑止とも、思ひやられて哀れなり。「ハア斯ういうても無益の事。此の德兵衞が正直の、心の底の涼しさは、三日を過さず、大坂中へ申譯はして見せう。」と、後に知らるゝ詞の端、「いづれも御苦勞かけました、御免あれ。」と一禮述べ、破れし編笠拾ひ著て、顏も傾く日影さへ、曇る涙にかきくれかきくれ、すご〳〵歸る有樣は、目もあてられぬ　三重

戀風の身に蜆川、流れては其のうつせ貝、現なき色の闇路を照らせとて、夜毎にともす燈火は、四季の螢よ雨夜の星か。夏も花見る梅田橋、旅の鄙人、地の思ひ人、心々の譯の道、知るも迷へば知らぬも通ひ、新色里と賑しし。無慙やな天滿屋の、お初は內へ歸りても、今日のことのみ氣にかゝり、

十五日、鼻紙袋を落して、印判共に失うた。方々に張紙して尋ぬれども知れぬゆゑ、此の月からコレ此のお町衆へもことわり、印判を替へたいやい。二十五日に落した判を、八日に捺されうか。さては其方が拾うて、手形を書いて判をするゑ、おれをねだつて銀取らうとは、謀判より大罪人。こんな事をせうよりも、盗みをせい徳兵衛、エヽ首を斬らせる奴なれど、懇甲斐に許して置く、銀になるなら仕て見よ。」と、手形を顔へうちつけ　はつたと白眼む顔付は、けんによもなげにしら〴〵し。徳兵衛くわつと胸急いて大聲上げ、「さてたくんだり〳〵、一杯食うたか無念やな。ハテ何とせう。此の銀をのめ〳〵と、唯おのれに取られうか。斯うたくんだ事なれば、でんどへ出てもおれが負け、腕先で取つて見せう。コリヤ平野屋の徳兵衛ぢや。男ぢやが合點か。おのれが樣に、友達を騙つて倒す男ぢやない、サア來い。」と摑み付く。「ヤアしやらな丁稚あがりめ、投げてくれん。」と胸倉取り、摸ち合ひ捻ぢ合ひ敲き合ふ。お初は跣足で飛んで下り、「あれ皆樣賴みます。私が知つたお人ぢやが、駕籠の衆は居やらぬか。あれ徳樣ぢや。」と身をもがく、詮方なくも哀れなり　客はもとより田舍者、怪我があつてはならぬぞ。」と、無體に駕籠に押入るゝ。「いや先づ待つて下んせ。なう悲しや。」と泣く聲ばかり、「急げ〳〵。」と一散に、駕籠を早めて歸りけり。徳兵衛は唯一人、九平次は五人連、四邊の茶屋より棒づくめ、蓮池まで追ひ出し、たれが蹈むやら叩くやら、更に分ちは無かりけり。髪も解かれ帶も解

まい。氣遣ひしやるな。ヤアお初。」謠初瀬も遠し難波寺、名所多き鐘の聲、つきぬや法の聲ならん。山寺の春の夕暮來て見れば、先なは、「これ九平次、ア、ふでき千萬な。身共方へは不屆して、遊山どころではあるまいぞ。サア今日埒明けう。」と、手を取つて引留むれば、九平次興覺め顔になつて、「何の事ぞ德兵衞。此の連衆は町の衆。上鹽町へ伊勢講にて唯今歸るが、酒も少し飮んで居る。利腕とつて如何する事ぞ。麁相をするな。」と笠を取れば、「イヤ此の德兵衞は麁相はせぬ。後の月の二十八日、銀子二貫目、時貸に此の三日切りに貸したる銀、それを返せといふ事。」と、言はせも果てず九平次、かつら／＼と笑ひ、「氣が違うたか德兵衞、我と數年語れども、一錢借つた覺えもなし。聊爾な事を言懸け、後悔するな。」と振り放せば、連れも笠をはらりと脱ぐ。德兵衞はつと色を變へ、「言ふな／＼九平次。身が此の度の大難儀、如何もならぬ銀なれども、晦日たつた一日で身代立たぬと歎いた故、日來語るは此處らと思ひ、男づくで貸したぞよ。手形も入らぬと云うたれば、念の爲ぢや判をせうと、身共に證文書かせ、お主が捺した判がある。さういふな九平次。」と、血眼になつて責めかくる。「ム、ウ何ぢや。判とは何れ見たい。」「オ、見せいで置かうか。」と、懷中の鼻紙入より取り出し、「お町衆なら見知りもあらう。コリヤこれでも爭ふか。」と、披いて見すれば、九平次横手を打ち、「成程判はおれが判。エ、德兵衞、土に食ひつき死ぬるとても、こんな事は爲ぬものぢや。此の九平次は後の月の二

問屋、常々かねの取り遣りすれば、これを頼みに上つて見ても、をりしも悪う銀もなし、ひき返して在所へ行き、一在所の詫言にて、母より金を受取つたり。追つつけ返し勘定仕舞ひ、さらりと埒は明くは明く。されども大坂に置かれまい時には、如何して逢はれうぞ。たとへば骨を砕かれて、身はしやれ貝の蜆川、底の水屑とならば成れ、わが身に放れ如何せう。」と、咽び入りてぞ泣き居たる。お初も共に喘く涙、力をつけて押留め、「さて〳〵いかい御苦勞。皆私故と存ずれば、嬉し悲しう忝し。さりながら心たしかに思召せ。大坂をせかれさんしても、盗みかやきの身ではなし、如何してなりとも置く分は、私が心にあることなり。逢ふに逢はれぬ其の時は、此の世ばかりの約束か、さうした例の無いではなし。死ぬるをたかの死出の山、三途の川はせく人も、せかるゝ人もあるまい。」と、氣強う勇む言葉の中、涙に咽せて言ひさせり。お初重ねて、「七日というても明日の事。とても渡す銀なれば、早う戻して親方樣の、機嫌をも取らんせ。」といへば、「オ、さう思うて氣が急くが、そなたも知つた彼の油屋の九平次が、後の月の晦日、たつた一日いる事あり。三日の朝は返さうと、一命かけて頼むにより、七日までは入らぬ銀、兄弟同事の友達の爲と思ひて、時貸に貸したるが、三日四日に便宜せず、昨日は留守で逢ひもせず。今朝尋ねうと思ひしが、明日限りに商ひの勘定も仕舞はんと、得意廻りで打過ぎたり。晩には行つて埒明けう。彼奴も男磨く奴、おれが難儀も知つて居る。如才はある

ながら、現在の叔父甥なれば、懇切にもあづかる。また身共も奉公に、これほども油斷せず、商物ももじひらなか、違へた事のあらばこそ。此の頃袷をせうと思ひ、堺筋で加賀一疋、旦那の名代でかひがゝる、これが一期にたつた一度、此の銀もすはと言へば、著替賣りても損かけぬ。此の正直を見て取つて、内儀の姪に二貫目つけて女夫にし、商賣させうといふ談合、去年からの事なれど、そなたといふ人持ちて、何の心が移らうぞ。取りあへもせぬ其の内に、在所の母は繼母なるが、我に隱して親方と談合極め、二貫目の銀を握つて歸られしを、此のうつそりが夢にも知らず、後の月からもやくり出し、おして祝言させうとある。其處でおれもむつとして、やあら聞えぬ旦那殿、私合點いたさぬを、老母をたらしたゝきつけ、あんまりな成されやう。お内儀樣も聞えませぬ、今まで樣に樣を付け、あがまへた娘御に、かねをつけて申し受け、一生女房の機嫌取り、此の徳兵衛が立つものか。嫌といふからは、死んだ親父がいきかへり、申すとあつても、否で御座ると、詞をすごす返答に、親方も立腹せられ、おれがそれも知つて居る、蜆川の天滿屋の初めとやらと腐り合ひ、かゝが姪を嫌ふよな。よい此の上はもう娘はやらぬ、やらぬからは銀を立て、四月七日までにきつと立て、商ひの勘定せよ。まくり出して大坂の地は踏ませぬと怒らるゝ。それがしも男の我、オヽ、ソレ畏まつたと在所へ走る。又此の母といふ人が、此の世が彼の世へ反つても、握つた銀を放さばこそ。京の五條の醬油

樣を廻りまし、此處で晩までひぐらしに、酒にするぢやと贅言ひて、物眞似聞きにそれ其處へ。戾つて見ればむづかしい。駕籠も皆知らんした衆、やつぱり笠を被て居さんせ。それはさうぢやが此の頃は、※梨も礫もうたんせぬ。氣遣ひなれど內方の、首尾を知らねば便宜もならず。丹波屋まではお百度ほど訪ぬれど、彼處へも音信がないとある。ハアたれやらがオ、それよ、座頭の大市が友達衆に聞けば、在所へ往かんしたといへども、つんと實にならず。ほんにまたあんまりな、私は如何ならうとも聞きたうもないかいの。こな樣それでも濟もぞいの。私は病になるわいの、譃ならこれ此の痞を見さんせ。」と、手を取つて懷の、うちうらみたる口說き泣き、ほんの夫婦にかはらじな。男も泣いて、「オ、道理々々。さりながら言うて苦にさせ、何せうぞいの。此の中おれが憂き苦勞。盆と正月其の上に、十夜お祓、煤掃を、一度にするとも斯うはあるまい。心の內はむしやくしやと、やみらみつちやの皮袋、銀事やら何ぢややら、譯は京へも上つて來る。能うも／＼德兵衞が命は、續きの狂言にしたらば、哀れにあらうぞ。」と、溜息ほつとつくばかり。「ハテ輕口の段かいの。それ程に無い事をさへ、私にはなぜに言はんせぬ。隱さんしたはわけがあろ、何故うちあけては下んせぬ。」と、膝にもたれてさめ／＼と、淚は延紙を浸しけり。「ハアテ泣きやんな、恨みやるな。隱すではなけれども、言うても埒の明かぬ事。さりながらおほかたまづ濟みよつたが、一部始終を聞いてたも。おれが旦那は主

草道草に、日も傾きぬ急がんと、また立ち出づる雲の脚、時雨の松の下寺町に、信心深き心光寺、悟らぬ身さへ大覺寺、さて金臺寺大蓮寺、巡り〳〵てこれぞはや、三十番に三津寺の、大慈大悲の頼みにて、かくる佛の御手の絲、白髪町とよ黒髪は、戀に亂るゝ妄執の、夢を覺さんはくらうの、此處も稻荷の神社、佛神水波のしるしとて、甍ならべし新御靈に、拜みをさまるさしもぐさ、草のはすはな世にまじり、三十三に御身をかへ、色で導き情で敎へ、戀を菩提の橋となし、渡して救ふ觀世音、誓ひは妙に有り難し。

立ち迷ふ浮名を餘所に漏らさじと、包む心の内本町、こがるゝ胸の平野屋に、春を重ねし雛男、一つなる口もゝの酒、柳の髪もとく〳〵と、呼ばれて粹の名取川、今は手代と埋木の、生醤油の袖したたるき、戀の奴に擔はせて、得意を廻りいく玉の、社にこそは著きにけれ。出茶屋の牀より女の聲、「ありや德さまではないかいの、コレ德樣々々。」と手をたゝけば、德兵衞合點してうちうなづき、「コレ長藏、おれは後から往のほどに、其方は寺町の久本寺樣、長久寺樣、上町から屋敷方廻つて、さうして内へ往にや。德兵衞最早戻ると言や。それ忘れずとも、安土町の紺屋へよつて錢取りやや。道頓堀へ寄りやんなや。」と、影見ゆるまで見送り〳〵、簾をあげて、「コレお初ぢやないか。これは如何ぢや。」と、編笠を脱がんとすれば、「ア、先づやはり被て居さんせ。今日は田舍の客で、三十三番の觀音

ちやこち風ひた〳〵、翅と〳〵を袷の袖の、染めた模様を花かとて、肩にとまればおのづから、紋に揚羽の超泉寺、さて善導寺栗東寺、天滿の札所殘りなく、其方にめぐる夕立の、雲の羽衣蟬の翅の、薄き手拭あつき日に、貫く汗の玉造、稻荷の宮にまよふとの、闇はことわり御佛も、衆生の爲の親なれば、これぞ小長谷の興德寺、四方に眺めのはてしなく、西に船路の海深く、波の淡路に消えすも通ふ、沖の潮風身に染む鷗、汝も無常の煙に咽ぶ、色にこがれて死なうなら、しんぞ此の身はなり次第、さて賞に好い慶傳寺、緣に引かれて又何時か、此處にかう津の遍明院、菩提の種や上寺町の、長安寺より誓安寺、上りやすな〳〵下りやちよこ〳〵、上りつ下りつ谷町筋を、歩みならはず行きならはねば、所體くづをれァ、恥かしの、もりて裳裾がはら〳〵、はつとかへるを打掻き合はせ、ゆるめし帶を引締め〳〵、しめてまつはれ藤の棚、十七番に重願寺、これからいくつ生玉の、本誓寺ぞと伏し拜む、珠數に繫がん菩提寺や、はや天王寺に六時堂、七千餘卷の經堂に、經讀む鳥のときぞとて、餘所の待宵きぬ〴〵も、思はで辛き鐘の聲、こん金堂に講堂や、萬燈院に燈す火は、影もかゞやく蠟燭の、新淸水にしばしとて、やがて休らふ逢坂の、關の淸水を汲み上げつ、手に掬び上げ口すすぎ、無明の酒の醉ひさます、木々の下風ひや〳〵と、右の袖口左の袖へ、通る煙管に燻る火も、道のなぐさみあつからず、吹きて亂るゝ薄煙、空に消えてはこれもまた、行方も知らぬ相思草、人忍ぶ

曾根崎心中／附觀音廻り

實にや安樂世界より、今この娑婆に示現して、我等が爲の觀世音、仰ぐも高し高き屋に、登りて民の賑ひを、契りおきてし難波津や、三つづゝ十と三津の里、札所々々の靈地靈佛、巡れば罪もなつの雲、熱くろしとて駕籠をはや、おりはの乞目三六の、十八九なる顏佳花、今咲き出しの初花に、笠は被ずとも召さずとも、照る日の神も男神、除けて日負けはよもあらじ。賴みありける巡禮道、西國三十三所にも、むかうと聞くぞ有り難き。一番に天滿の大融寺、此の御寺の名もふりし、昔の人も氣のとほるの、大臣の君が鹽釜の、浦をみやこに堀江漕ぐ、汐汲舟の跡絕えず、今も※弘誓の櫓拍子に、のりの玉鉾えい／＼、大坂巡禮胸に木札の普陀落や、大江の岸に打つ波に、しらむ夜明の、鳥も二番に長福寺、空に眩き久方の、光に映る我が影の、あれ／＼走れば走る、これ／＼又留れば留る、振のよしあし見る如く、心もさぞや神佛、照らす鏡の神明宮、拜み巡りて法住寺、人の願ひも我が如く、誰をか戀の祈りぞと、あだの悋氣や法海寺、東はいかに大鏡寺、草の若芽も春過ぎて、遲れ咲きなる菜種や罌粟の、露にやつるゝ夏の蟲、おのが妻戀優し※やすしや。あちへ飛びつれ、こちへ飛び連れ、お

羅はさもあらめ。末代淫女のためしなき、五濁の曇霽れそめて、玉と欺く秋の露、宮城野をこそ拜しけれ。同聲念佛大空に、響き渡れる雲の上、北の方の靈魂千壽の姫をかき抱き、繼母同じく、秀光が妻卯の花、眼のあたり、影の如くに顯はれしは、幻ならぬ現なり、破顏微笑の聲れい／＼と、「あら懷かしの人々やな。我が子の破戒によつて、八大地獄を巡りしに、有り難や教信上人朝夕の廻向、稚き法明上人の出家成就の功德によつて、親子諸共九品の淨刹に往生す。此の結緣にひかれ、繼母の三毒三菩提となり、卯の花までも引接す。又宮城野の造佛供養、滅罪生善の福德限りなし。還俗の眞光を民部殿と二人の中、實子と思ひ育ててたべ。穢土も淨土も御佛の、光の中の我なれば、常住不退の姿を見よ。」と、宣ふ御聲の中よりも、親子は三十二相を現じ、二人の法燈光明遍照、十方世界に靈香靈雲花降り下り、天人娛樂の管絃は、有り難かりける次第なり。斯くて本家に立ち歸り、大念佛の大檀那、大願力の大信心、大福德の大名と、代々國富み榮えけり。

賀古教信七墓廻　終

や逢へて餘の人にやるな。花のかの樣のサテ、花のかの樣の、袖に入れかしわたせかし。極樂世界へ屆けかし。ヒしと書いたる字態をば、高燈籠に表して無明の闇を照らすべく、しゆびのしの字のゆらゆらと、香爐に煙立つ風情、上る蓮の玉の臺のはん箱梯子、ずんと上り詰めては日記書、血文血判の紅の、紅葉重ねの封じ文に、書きたりや散らし書、猶々書にひらりと披いて、ちらりと讀んではひらひら〳〵、披いて疊んできり〳〵、きり〳〵〳〵、くる〳〵卷いては繰返し、立返し打返し、生死の郭に生まれ來て、六塵の境に迷ひ、六根の罪を作る事も、待つ戀逢ふ戀になづむ心なるべし。面白や、實相無漏の硯の海に、五塵六欲の浪はたたねども、隨縁眞如の筆を染めぬ日はなし。染めぬ日はなし。筆のすさみも何故ぞ。仇なる色に心染むるゆゑ。心染めずば手管もあらじ、口說もしのばし、門立もなく、朝込もあらし吹く、花よ紅葉よ、月雪の故事も、あらよしなや。よしや吉野のよしや吉野の杉原の、文を合はせて縒絲の、佛像と結びつくらんと。それ※月支の遺龍といひし人、妙法蓮華經卷第一乃至八の卷までの經の外題を書きたまふ。其の功德文字の數、八八六十四佛と現じ、父の獄苦を免れしは、それは異國の名筆。これは流れの女文字、情色めくいろは假名。それも佛體具足して、千萬無量の玉の瑤珞、玉章の、參るといふ字を書竝べ、八葉蓮華と拜まれ給へと、心に結び手に結ぶ、法の絲筋金色の、光後光と御佛の、御影あらたに見え給ふ。三輩九品蓮の絲の、其の曼荼

三重　紅花の春の朝、紅錦繡の山、粧ひなすと見えしも、夕の風に誘はれ、紅葉の秋の夕、黄纐纈の林色を含むといへども、朝の霜に衰ふ。松風蘿月に詞をかはす賓客も、去つて來る事なし。翠帳紅閨に枕を並べし妹背も、何時の間にかは隔つらん。籠の飼鳥雲を戀ひ、空行く鴈は友慕ふ。人間とてもかはらめや。戀より外は友もなき、郭住居の八重葎、からまかされし憂き世話に、詞を飾る文の數、一切經にはあらねども、凡そ七千餘通りなり。今ぞ佛に供養して、救誓の船の帆にかゝり、大悲の空の天蓋と、此の差傘をさしも草、觀世紙捻の觀世音、つくる菩薩の御誓ひ、罪を助けてたび給へ、懺悔物語申すべし。そも〳〵水揚の下前髮のなよやかに、好色の雲をかざし、初牀の夜のやもじにも、終に客衆の花ちりぬ。過ぎし御見の夕顏の、露の黄昏身に染み〳〵と、我が魂に封じ文、つらり來て今一心の、蜘蛛手に罹る八つ橋や、さりとは杜若、うら紫の恨み文、くる〳〵しやんと引結び、身よりとばかり霞ませて、今日の一座の知らせ文、明日を賴みの屆け文、紋日を逢うて勤め文、千束百束文車、楊の端書誓起證、昨日の誓紙今朝の夢、寢覺め憂寢に風騷ぐ、眞葛が原の紙屑の、喞言がましや神の名も、佛の御名も口馴れて、更に怖いと思はれず。罪業如何に恐ろしや。實にや一々文々、是眞佛と聞くときは、一字の文字も佛の尊容なるものを、間夫の文とて引破り、まろめ〳〵て蚊遣火の、閨の油煙や消炭を、かくし忍んでかくし文、替字替名のやつし書。「文がやりたや室町筋へ、取り

其の御禮に內裏普請の材木、獻上いたし候。」と、悅び勇んで申しける。斯かりし處に印南の彌七郞、熊源太姉弟を搦め捕り、「御迎へに參り候。」と、御前に引つすうる。人々喜悅の眉をひらき、「お手柄お手柄。」主も手柄下人も手柄。百姓は國の御寶。朝廷に訴へば、願ひも三つの車の綱、神變奇瑞の善の綱、神の綱佛の綱、先綱元綱追つかけ中綱、見事能う揃た。そろた主從揃うた親子、揃うた女夫の信心も、智慧學問も身代も、上る都ぞ道廣き。

第五

摩訶陀國に邪を防ぎて祇園をかまへ、舍衞國に鬼を驅つて、竹林を建てしこそ、佛法止住の因緣なれ。されば若君は閻魔王の請により、黃泉に到り給ひし事叡聞に達し、叡感の餘り、父祖本領に拜せられ、念佛の大檀那たるべしと、地藏菩薩の御契約、時を移さず、賀古の莊に伽藍を建て、敎信上人廻向の導師、幼少の姬君に法明上人の號を授け、北の方、姬君の拔苦與樂、かねては又沙界の含識平等利益、靈佛靈像安置して、百福莊嚴百味の供物、大念佛を開白あり。千佛供養の御法樂、法談讀誦管絃の聲、猿樂田樂伎樂を奏し、佛の恩を讚嘆し、苦界の衆生をすゞしむれば、天熱變じて清涼地、※德勝童子の土の餠の、果報めでたき百萬石の國中が打明けて、日々夜々の參詣は市をなしける。

ば、ありつる童一同に、「我々も歸してたべ、戻してたべ。」と泣き叫ぶ。「理なれども汝等は、死して程經る者共にて、灰に燒かれ土となり、歸すべき身體なし、今眞光が結緣によつて、汝等は娑婆よりも、極樂淨土の目出度き國へ追付生まれいたるべし、それまでの父母は我なるぞ。いざ疾く〳〵。」と宣へば、眞光は妹に名殘惜しくも佛敎の、重き力やかろ〴〵と、錫杖に取付いて、行くとばかりは一心の、跡に稚き聲々の「我も行かん歸りたし、さらば〳〵。」と泣叫ぶ、涙も露も吹きはらひ吹拂ひ、花も千草もちり〴〵の、嵐の野邊と三重吹き返せ、かやせ〳〵の鉦太鼓の、舍利生あり佛法不思議。中務、寺僧達、尋ね廻りしるしの松陰、四人の人々安閑と、膝に抱きし眞光の、魂は色身に返ると覺えて蘇生り、夢の覺めたる如くなり。中務驅け寄つて、皆々これはと名乘りあひ、嬉し泣きにぞ泣き給ふ。眞光も正氣づき、互に冥途の物語。「師の御坊の氣遣ひがり。先づ登山。」といひし處に、南の方より土民ども、一樣に扮裝ちて、御用木といふ幟を押立て、「播州賀古の郡主より、大内獻上の牌柱の御通り。先退け〳〵、先綱元綱、えいや〳〵。」と引き來る。中務たまり得ず、先に立つたる莊屋が小腕、むずと取り、どうど引きすゑ、「賀古の郡主とは、民部殿親子ならでは外になし。但しおのれらが私か、眞直に申せ。」と、太刀拔きかけてきめければ、「ア、おゆかしの御家老樣、代々の御地頭の流人を歎き、總百姓が金銀を集め、主典樣の流人を申し宥め、目出度く御歸國遊ばし、

滴りて、餘の子供が寄せつけず。膏藥つけて癒して欲しや。衣服もこればつかりで、夜は寒うて寐ならず、何とてか母様は、妾を憎んで、此處に一人捨て置き給ふぞや。詫言して屋形へ歸してたべ。なう兄上。」と、足摺してぞ泣き給ふ。「オ、我とても離れ〴〵の死出の道。親子兄弟一緒とは、佛にならでは叶はぬ。」と、縋り歎くぞ哀れなる。民部夫婦は怺へかね、「不便の者やいとほしや。」と、立寄らんとせし處に、俄に川水どう〳〵と、逆卷く煙を押分けて、面は老女の荊の白髪身は六足の黑蛇の形、「憎し妬まし繼子の末、遁すまじい。」と舌を振り、鱗を立てて馳せかゝる。「情なの祖母御前の、此處まで慕ひ給ふか。」と、兄弟手を引き逃げ給ふ。繼母は怒つて邊なる童男童女を蹴散らかし、五百由旬の河原表、追廻し追戻し、追蒐け行くぞ恐ろしき。既に危く見えし處に、地藏菩薩は紫雲に乘じ、「利劍卽是彌陀號。」と、左の御手を伸べ給へば、寶珠の光明利劍となつて、繼母の上に振りかゝれば、容も縮み角碎け、「恨みは盡きじ。」といふ聲ばかり、火焔と燃えて失せにけり。菩薩美妙の御聲にて、「如何に教信。おことが堅固の道心、諸佛の感應淺からず。今より汝が十念血脈受けたる亡者は、往生疑ひあるべからず。これによつて眞光法師が命を延べ、娑婆に歸し、念佛の大檀那となすべしと我閻魔王に請合ひたり。娑婆に歸つて精舍を建て、其の身の罪を懺悔して、親兄弟をも助くべし。」と錫杖さしのべ給ひける。眞光感涙せき敢へず、「願はくは我を留めて、妹を歸して給べ。」と泣き給へ

み、岸に上りて石を積み、花を摘んでは父の爲、石を積んでは母の爲、水を汲んでは佛樣の、さま幾歳、十三、一重、二重ともなき川帷子の、綻び一つ縫ひ著せぬ母は何處に隱れん坊、「父よ。」と呼ぶも木隱れて、「飯食はうなう乳呑まう。」「兄よ妹。」と叫べども、此處にと應ふる弟もなく、伴ひ賺す姊もなし。「最早娑婆へ歸りたい。惡さもせまい跪くまい。娑婆へ歸して下されなう。家へ歸つて母樣に、衣服して貰うて踊りたい。此方の家に置いて來た、※かいらぎ欲しい髭欲しい。何とてか父母は、迎へには來給はぬ。」と、西に呼ばはり東に走り、立てたる樒、積んだる石、打崩し引崩し、不便や親の千代までと、撫で擦りたる裸身を、石の上に打投げ／＼歎き焦るゝ其の聲は、廣き河原に滿ち／＼て、蚊の鳴く聲に異ならず。眞光泣く／＼彷徨ひ來て、妹の千壽の姬、これか彼かと見給へども、互に隔生卽忘の、それと知らぬぞ痛はしき。童男童女これを見て、「あれ／＼小さい長老樣。笑や／＼。長老の首は、捩上げた首で、殿樣お馬、土の子は槍持、能う槍持つた。」と、聲に子供遊びのあはれさよ。眞光淚の隙よりも、「これ／＼なう子供衆、我も死んで來たる者、若し此の內に播磨國賀古の民部が娘、千壽の姬といふ人あらば敎へて給べ。」と呼ばはる聲に千壽の姬、朱に染りてよろ／＼と、「なう兄上か。」とよろぼひ寄れば、「これが妹か、いとほしや、淺ましの姿や。」と、抱き合ひてぞ泣き給ふ。姬は泣く／＼、「とてもなら何故、母樣と連れ立つては下されぬ。祖母樣に嚙まれし傷が、痛んで血が

苦を受け、二度逢ふ事なり難し。然るに本人の汝來る上は、母が地獄の苦に代へんと、冥官の評議頻りなり。閻魔の廳に詣でなば、阿鼻獄中に落ちん事、手を返すより早かるべし。然れども叔父教信の道心、功德佛地に通じ、とゞめて娑婆に歸さん爲、これに遮り待ち受くる。又此處に賽の河原とて、童男童女の生所あり。此處ぞ我が受取りにて、子供が待たん不便さに、我は是れより歸るぞとよ。汝等も追付きたれ。繼母が害に殺されし妹にも逢はすべし。さりながら眞光法師は死したる身、其の外の者共は何れも命ある身なり。冥途の者の目に見えず。賽の河原に至るとも、詞を交す事なかれ。若しも詞をかはしなば、娑婆の悪縁きづなとなつて、罪業酷だ重かるべし。構へて疑ふ事なかれ。」と宣ふ聲は光明の影に乘じて失せ給ふ。ありつる獄卒聲々に、「呵責の時刻。」と呼ばはつて、八方に飛び去れば、山叫び谷應へ、山河草木鳴動して、常夜の闇となりけるは、恐ろしかりける次第なり。娑婆の柵斷れ果てて、歸らぬものは行く水の、賽の河原ぞ哀れなる。渺々として果てもなく、邊も知らぬ眞砂地に、初立ちもせぬいさり火や、初子這ふ子に四つ五つ、十を頭の嬰兒は、大名高家の公達も、土民貧家の手育ても、此處に來りて隔てなく、刹利も首陀もかはらざりけり。稚き癖の面嫌ひ、人臆せしも自ら、共に冥途の友達と、馴るゝ中にも無慚やな、痲疹に死したるは、刎退けられて泣き叫ぶ。中好い同士は手を引き連れて、「地藏樣の御訓への佛事して遊ばん。」と、川邊に下りて樒を摘

むる。是れを見よ。」と、鐵の華表の前にやりつけ、眞光を下し置き、車を飛ばせて失せにけり。眞光法師は闇々たる冥途の旅、朧月夜の如くにて、颯々たる風腥く、身の毛も立つて怖ろし。茫然として立ち給ふ。人々夢とも辨へず、纏り付かんとし給へば、牛頭馬頭五色の阿呆羅刹跳り出て吹きかくる火焔、渦まく雲煙、隔てとなつて目を暗まし、互の聲を聞く許り、涙に咽ぶぞ傷はしき。ありつる獄卒鉾刺股を提げ〱、眞光法師を押取卷き、取つて引上げ手玉に突き、兩手を引張り、或は大地に引伏せて、打ちつ敲いて責めさいなむ。「なう悲しや許してたべ。父よ母よ乳母よ。叔父道心のお慈悲に、念佛申して此の苦患、少しは助け下され。」と、歎き給へば宮城野は、「皆我故の罪科の、苦しみを我が身に代へ、其の子を助けたび給へ。」と、立寄れば立隔て、其の甲斐更に奈落の責め、目も當てられぬ次第なり。誠なるかな、稱我名號下至十聲の其の功德、端嚴美麗の御僧安祥と出現あり。「止止汝等。」と、稱へ給へば、獄卒頭を垂首れて、鉾を伏せてぞ敬ひける。妙なる御聲あざやかに、「我はこれ六道能化地藏菩薩摩訶薩なり。汝假にも、まことの佛を見んと誓ひし、一度の信心ある故に、所化の誓約なさん爲、これまで迎へに來りたり。汝人の虚言に誑され、衒賣女色に身を觸れ、偸盜邪淫の破戒の罪、外の罪に較ぶれば、五百生に千人の父母の首を切つたるより、一度出家を落ちたる科重しとこそは說かれたり。されば其の罪障、先立つ母の身に報い、地獄々々を經廻つて今八萬四千の

か。我こそ民部よ。」「宮城野。」と、走り寄つて抱き付き、よく〳〵見れば眞光なり。「なうこれぞ昔の光明丸。唯今地藏と見違へて、見殺しに致せしか。ア、いとしい事をしました。」と、肌につけ身に觸れても、次第に身冷え骨固まり、其の甲斐更に無かりけり。浮世を捨てたる教信も、恩愛悲嘆の涙にくれ、「さても〳〵我々親子一家には、如何なる宿業あればにや。一人や二人か三人まで、出家となつても盡きせぬ因果、こはそも何の報いぞや。此の小僧は北の方の死骸より、出生したる忘形見こりや小僧、此の死骸こそお事が兄、彼れは親よ。」と教へ給へば、うろ〳〵と側に寄れば宮城野も、「母と思うて下され。」と、抱き寄すれば抱かれて、涙の中にも出家とて、兄の死骸を伏し拜み、「南無阿彌南無阿彌、南無阿彌陀。」と、十念授くる弟の愛らしさ。死んだる兄の悲しみに、人々、「わつ。」と伏し轉び、泣き沈みたる有樣は、人のあはれを聞きなれし、火屋の煙の下燃えも、涙に濕るばかりなり。時に六種震動して、行くも來るも本地の娑婆、※四土不二隔ても七墓は、八大地獄と鳴神の、山は鐵城、水は清劍、修羅の鼓、惡鬼の怒り、大地も裂くるが如くなり。氣も魂も消え果てて、天狗道に落ちけるかと、顧みれば抱きたる眞光の死骸はなし。「あつ。」と駭く中空の、雲中に火の車、矢を射る如く三重飛來り、獄卒侃々たる聲を吐き、「如何に汝等たしかに聞け。眞光法師梵行を亂り、罪業遁るゝ處なく、閻魔王の敕によつて、火車上に召捕つたり。さるによつて、目前に八大地獄を見せし

阿の字には朝夕の手向種、樒の露が未來には、終に百味となるぞ頼もし。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無あみだぶ、／＼。彌陀頼む／＼。人は雨夜の月星なれや。雲晴れねども西、西へこそ行け。なまうだ／＼と、誰かたのまざる。誰かちかひの綱にもれなん。いたはしや甥の小僧、舌もまはらぬ念佛の、鉦も撞木もほそき足、跡にさがるを引立て／＼、「飛田の墓所に時ならぬ、奈鴉の異しさよ。」と、すかして見れば、「昨日まで無き石佛の地藏尊、誰人の建立ぞ。」と廻向をなして、「ヤア此のお地藏は宙にぶらりと下つてぢや。ハアさては首くゝりか南無三寶。來世も後世も鼻の先。先づ現世を助けいでは。」と、さすがを拔いて臺石に驅けあがり、「コリャ小僧。繩切つて下すぞ。下で見事抱へるか。」といへば、「己やそれでも怖いもの。いや己やこはい。」と泣きたまふ。「エ、なんぼうの亡者にも出やはうが、今から怖うてなるものか。些と叔父坊主が死人さばきを見習へ。」と、しゆきんを切つて吊り下せば、新發意も恥ぢしめられ、下で抱ふる奇特さよ。飛下り、膝に抱き上げ、何國の誰とも名は知らず、息をはかりに、「小坊主やあい／＼、坊さまなう／＼」と、呼びたすくる其の聲を、餘所に吹きやる小夜嵐、風のこだまを知るべにて、宮城野夫婦は、「彼處よ此處よ。」とたづね寄り、「粗忽ながら人を呼び生け給ふ體、誰方にて候ぞ。心懸りの事ありて、尋ねまする。」とありければ、「オ、我は七墓廻る教信といふ道心。誰かは知らず小坊主が、首縊つて死んで居る。」「ヤア教信とは、さては賀古の教信

不便なる。涙の隙より宮城野は、眞光をすかし見て、「なうこれに石の地藏のお立ちぞや。此の菩薩は稚き子の、二世を守りの御誓ひ。命あらば現世の祈禱、死に失せ給はば後の世を、助け給へ。」と諸共に、息を限りに伏轉び、涙を川と堰入れて、小田の蛙も諸聲の、鳴く音は野邊に餘りけり。稚心に無慙やな、父の名殘に夫婦の歎き、涙は胸につゝみも切れて、目にも餘りてばら／＼／＼、ほろ／＼ほろと二人が顏に落ちかゝれば、「こは夕立の名殘の雨か。未だ大降の來ぬさきに、暇申していざさらば。」とて、「願以此功德平等施一切衆生。」のはかなさは、目前我が子を見殺して、知らずもわかれ立ち歸る。後に廻向の句を繼ぎて、「發菩提心往生安樂國、南無阿彌陀佛。」と、石塔蹴放し、ひらりと飛べば、十三歲の短夜や、息を引取る善の綱、此の世の夢は早覺めて、空しき空に吹く嵐、塒離く鴉の聲、あはれ／＼あゝあはれ、あゝ／＼哀れ／＼の鴉啼き、心にかゝる横雲の、立休らひつ立戻り、立隔てたる雨雲、我が身一つはかきくれて、また五月雨とぞ　三重

鉢たゝき

巡り見る、浮世の波にくらぶれば、阿波の鳴門は磯小舟、賀古の敎信叔父甥の、連道心と七墓を、夜な／＼分くる露の間も、亡き人送らぬ夜半とては、南無阿彌陀佛、々々々々々、南無阿彌陀、南無といふ聲の内より霧はれて、五色の雲に乘るぞ嬉しき。南無阿彌陀、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀。

かゝる涙の闇に、目もくれ心もかき曇る夜の、星も光を失へり。娑婆の假なる雨宿り、冥途の使ひ誰をかも、雨の晴間と殘すべき。殘さば殘せ我はたゞ、此の曉を殘さじと、思ふ中にも父母を、娑婆と冥途に引分けて、逢ふも嬉しく去るも憂き。絶えぬ涙のしよろ／＼川を、これぞ三途と一足に、飛田の墓にぞ著き給ふ。「此處ぞ死ぬべき處なれ。さあ死なんとは思へども、刃物とては用意もせず。淵河あるも見えわかず。首のしめ樣なほ知らず。おりや如何して死なうぞ。」と、獨言して泣きたまふ。「オ、それよ、人の話に聞き置きし、しゆきんの上帶くる／＼と、時や移る。」と石塔の、蓋は碎けて苔蒸せる、三重臺に攀ち上り、しるしの松の枝垂れし、梢に帶を結び下げ、輪組を喉に纏ひかけ、すはや末期と手を合はせ、既に飛ばんとし給ふ處へ、宮城野夫婦は此處彼處、尋ねあぐみて石塔の、前に悄々立萎れ、「淺ましや斯くばかり、足に任せて廻れども、尋ぬる子には逢ひもせず。またしてもまたしても火屋三昧に來る事よ。始めの程ははかいきと、心に祝ひ直せしが、思へば最早死したりと、これや佛の知らせかし」と、二人は墓の臺石に、縋り伏してぞ歎かるゝ。眞光は、宮城野の聲と聞くより恥かしさ、顔は見えねど我が子と呼ぶは、別れて久しき父の聲、お師匠よりもなう怖や。出家落ちしと叱られて、撲たれ抓られ勘當かな。怖ろしさよと息を詰め、身を堅めたるあしたゆく、蜂や刺蟲燈蛾、野邊の藪蚊の顔も手も、むらがり食らふ堪へがたさ、臨終病苦の斷末魔と、齒を食ひしばるぞ

に、廻向をなすぞいとほしき。夫婦は斯くともしら露の、小萩が下を思ふにも、我が宮城野が遣瀬なさ、俄に胸の騒ぐこそ。「今や郭に我をたづねん恐ろしや。追手かゝりて憂目に遭ひ、年限増して見世端に、引下さるゝはまだせめて、御身の上にも首綱の、かゝる苦患の身になれと、二人の親は產付けぬ。如何なる業の種蒔きし。心中するのも笑はれず。」と、泣く〳〵歩む夏草の、かもの三昧行きなやみ、男心もとぼ〳〵と、堤に點す狐火を、「彼は我が子の人魂よ。結びとめん。」と手を引きて、走り近寄る先に消え、後に點すを我が寺の、「人の來るよ。」と逃げて行く。此處に點りて此處に消え、親は追付く子は走る。一里の野邊を此處彼處、行返る間に幾度か、袖と袖とを振合はせ、擂違ひても茫然と、それとも知らで別れ行く。末は小橋の果敢なやな。「あやなや、それよこれよ。」とて、抱付けば古卒堵婆。風しん〳〵たる夏の蟲、露も涙も爭ひて、いとゞ哀れや添へぬらん。別けて今宵の身の上に、無常の調子聞けとてや、難波の寺の鉦の聲、高津の墓所に夕立の、雲のむら〳〵風早み、臨終急ぐ雨急ぐ。死に後れじと辿れども、子供の足に雨の脚、大人の足に追ひ拔けて、煙知邊に千日の、柴も命も一時の、惜しまぬ身さへ雨宿り、生きて居る間の習ひぞや。火屋の軒にも我々は立寄る陰もあるぞかし。いとほしや稚き身の、濡れ萎れてあるらんと、思ひやるにも夕立に、爭ふ袖の血の涙、降れば濡れじと刈麥や、袂傾け此處彼處の、木陰を求めて隱れ笠、隱れ蓑にもあらざれば、尙降り

せて、これは親ゆゑ、「迷子よう〳〵。」と、呼べども人は夏山の、木の葉隠れの天つ星、影も見えぬぞ哀れなる。

夏野の迷ひ子　　四段目

迷子に迷はかされて迷ひ行く、親子の中を雲なへだてそ。二番には、親につき、佛とも師匠の恩の山寺に、名残も後夜もつき果てにけり。かりそめに三歳住む、目標の森も林も木隠れて、逃道暗き子心よ。追はゆる親は此處、此の面彼の面の道知らず。妻は遊女の外知らず。尋ねらるゝも尋ぬるも、何處あてどの五月闇、長夜の暗と目も暮れて、側に立つさへ見えざれば、息をはかりの時鳥、啼く聲聲に血を吐きて、野邊の躑躅を染むると聞く。鳥の涙は借らずとも、躑躅も松も我が袖も、我が涙にぞ染めつべし。それを知邊と立ち寄れば、あだし煙の梅田の火屋。出家たる身は法界の、廻向をなせとの師の教へ、忘れじものと手を合はせ、今宵最期の身の廻向、共に手向くる念佛の聲、それぞと知らば縋り留め、抱きかゝへても行くべきに、我が子の聲とも知らばこそ、餘所に驚く世の無常、尋ぬる人を残し置き、先へ〳〵と一筋の、道を急ぐぞあはれなる。物思ふ身の短夜を、誰がならはしの長良川、渡し呼ぶなる風の山彦を小耳には、我を追手の呼ぶかとて、また道かへて道もなき、野原笹原葭原の、火葬の燃ゆる光にも、見付けられじと身を忍び、隠るゝ中にも南無阿彌陀。出家の役と童氣

師の破戒の詮議。「南無三寶。」と御堂の軒、耳を澄まして聞き居たり。中務障子を叩いて、「これ見事恥を御存じか。某に恥ぢんより何故天道を恥ぢ給はぬ。其の宮城野は都にて父民部殿を迷はせし女。御身に取つては、親を損ふ悪魔とも、又は母とも謂つつべし。母と契るは犬鶏、生きながら畜生道。佛物を盗み取り、佛の箔を剝がすとは御坊の事よ。年にも足らで遊女狂ひ、最早出家は廢つたり。佛身より血を出すは、五逆罪の悪僧よ。其の一心の不所存故、六親眷屬地獄に墮し給ふよな。當年は御母上は第三年。佛にはなり給はで、奈落に沈め給ふかや。宮城野ゆゑに父上の、汚れたる名は雪ぎはせで、末代までの名を流し、未來の業を添へ給ふか。さりとは佛罰三寶の、當り果てたる親子や。」と怒りつ歎きつ口說きける。宮城野夫婦は驚きて、「扨は御子か。」「我が子よ。」と、驅出でんとはしたれども、上人に身を恥ぢて、歎き密みておはします。やゝありて師の御坊、障子の隙を覗き給へば、眞光は無かりけり。「あら不思議や。」と、戸を明くれば、何時の間にかは落ち失せけん。扇に殘せし一筆を、各驚き讀みて見れば、「人に欺され面目を失ふ。今夜の内に身を果し、親師匠の名を雪がん。後世弔うてたび給へ。」と、讀みも終らず中務、寺中、「是れは。」と騒動して、「未だ夜は更けず、遠くは行かじ。多田よ山田。」と手分して、其方へ伊丹、此方へ池田、稚き者に強意見、頂禮高じて尼が崎、先づ神崎の傾城町、太鼓鉦よと犇く中に、夫婦は歎き悔みても、誰を恨みん親心、親は子ゆゑに迷ひは、

の引出密と明け、※讃對揚の次第書、※懺法廻向の祕密の書籍、上を下へ打明け探し、施主書したる金銀を、殘らず取つて掻抱き、袖より漏るゝを掻きまつべ、取落せば掻き寄せて、佛前に供へたる御禮の笈摺を、廣げて金銀を押包み、軈て頸にぞ懸けにける。抑當寺の本尊は、聖德太子の前生、舍衞國にて作りたまひし十一面、運慶湛慶の兩尊諸尊、巍々たる靈地なり。閻浮檀金の金佛の、作りこめしはいづれならん。さもあれ片端割つて見んと、庫裏の大鉈提げて、中尊の御肌に丁々と打ちければ、あら不思議や、御身より血は紅と迸しり、眞光忽ち顚倒し、「うん。」とばかりに絶え入りしは、顯著なりける靈現なり。上人驚き起き給へば、中務、御弟子達、「これは〳〵。」と抱き上げ、藥を含め水そゝぎ、呼び助くれば漸うと、人心地こそつきにけれ。上人額に筋を立て、「弟子を可愛くおもふこと、子は持つて知らねども、子とても斯程はあるまじき。やれ小僧め、智者になれとは教へしが、傾城買へとは教へぬぞ。唐の明解といふ僧は、地獄にて詩を作る程の學匠なれども、出家を落ちたる科によつて、八萬地獄へ落ちしと聞く。此の笈摺もおのれに著せ、刃に死したる母が爲、順禮させんと拵へ置く、施物を盗んで包めとて、拵へはせぬぞ。」とて、打顫ひ投げ付けて、大聲上げて泣き給ふ。眞光顏振上げ、中務を一目見て、「なう恥かしや堪へてたもつ。」と學問寮に走り入り、内より障子をはたと鎖し、泣くより外は音もせず。民部少輔宮城野は、郭を密かに忍び出で、門外より窺へば、眞光法

は閻浮の塵、閻浮檀金の御佛の、罰とは後に三重知られけり。別れて後の音信も、中務光秀は所々の溫泉に湯治して、金創平癒せし處に、主人流人の風說、民部少輔を尋ねんと思ひ立ち寄り若君の、山寺住居學問に、疲れ給ふか覺束な。聞かまほししと中山寺、密かに斯くと案內す。上人急ぎ立ち出で給ひ、小病小難の挨拶もなく、「御邊に逢はでかなはぬ所、幸ひ哉〳〵。さて眞光法師は師弟の契約切り申す、疾う〳〵連れて歸られよ。」と、つきもなげにぞ仰せける。中務前後を知らず、「師の命とは申しながら、孤兒といひ如何なる過失か候。學問の利鈍は生質、惡あがきは子供のならひ。如何なれ盜み亂行は候はじ。別に底意ばし候か。」と、色を變へてぞ申しける。「ォ、御不審はことわり。經も人に勝れし故、木像繪像は假の寫し、誠の佛を見付けよと、敎へを聞き入れて、信心堅固につとめしが、なう何時の頃より神崎の遊女町、宮城野といふ傾城に通ひ初め、什物祠堂を盜み取り、今朝夜の中から出でけるが、今において歸らず。心中でも致さうかと、今日まで意見もせず。愚僧が虛言か、神崎にて尋ねられよ。」と仰せける。中務呆れ果て、「誠にこれは善惡の評議に及ばず。所詮御寺に逗留致し、事によつて討つて捨つるか、是非を極め申すべし。」「しからば一先づ此方へ。」と、上人諸共物陰に、隱れてこそは待ち給ふ。佛を見んと眞光は、口に念佛三枚肩、門前に舁き下させ、編笠脫棄て奥を見れば、師の御坊は方丈に高鼾、同宿一人もなかりけり。折よしと嬉しげに、枕元にさし足して、文箱

勝さに、包まず語らん聞き給へ。我こそ江口の君の流れ、普賢菩薩の化身なるが、衆生濟度の方便にて、假に遊女と生まれたり。誠の形を顯はし、拜まれんとは思へども、此の儘にては成難し。佛は金程光るといふ。金銀澤山あるならば、我が身を請出し、佛體と拜まれて見せ申さん」と、いひも果てぬに眞光禮拜合掌し、「お師匠樣の經箱に、小判が百も千もある。閻浮檀金といふ金で作つた觀音、本尊の内に籠めてある。是れも盜んで遣りましよが、どうも持つて出でられず。夜に入つて門前まで取りに來て下されや。そんなら早う往にませう、念願遂ひ下さるな。」と、衣著ることそ不便なれ。「其の疑ひは惡い事。佛に僞りあるものか。」と、取つて被ける編笠の、「空腹じうないか飯いやか。」と、愛したらして表まで、送り出でつゝ、孝房に斯くと囁き悅びて、後姿を見送れど、親子と知らぬ因果づく、空恐ろしくや思ひけん。跡振返つて「何と金さへ上げれば佛を拜むが定かや。」「アレまだいの。寺々の奉加散錢は何の爲。臨終に誠の佛を見たいといふではないかいの。」と、いはれてほく〳〵打首肯き出でけるが、又振返り、「何と師匠の物を盜んでも、科になりはしませぬか。」「オ、盜みはおろか佛の爲には師匠親を殺しても、一念彌陀佛卽滅無量罪。お經は讀まずか知らずか。」といへば、眞光横手を打ち、「オ、それ〳〵左樣ぢや、盜みまぜう。晩方に風呂敷持つて取りに來て下され。」と、勇みて行くを親子とも、知らぬが佛これは又、知らぬがゆゑに地獄の緣、教へて罪をつくらせて、明日の命

隙に宮城野とは、それと聞くより立寄りて、「愚僧こそ民部殿の弟、花二郎教信入道教信といふ者よ。さる仔細にて發心し、旅人の荷を持ち、法界の肩をやすむる願を立て、父の流人と知らずして、此の姿を御覽ぜよ。名乘つて父に思ひをかけ、歎きをかけん悲しさに、包む心を推量あれ。過り故の國法にて、親助からば子は殺され、子が助からば親殺されん。一人は兄、一人は親。御身の心も同然に、一人は夫、一人は舅、いづれも思ひ捨てがたし。是れより修行を替へ、一紙半錢の頭陀を貯め、金を辨へ、親兄の命を請うて見る許り。エ、代らるゝ命なら、他人さへ惜しまぬものを。兄上に逢ひ給はば、父の詞を言ひ聞かせ、短氣の心なき樣に、意見してたべ宮城野殿。兄の形見と思はれて、名殘惜しや。」と縋付き、聲も惜しまず泣き給ふ。心なき人夫ども、「こりや濡坊主、癡話は今度して貰はう。時著けの宿送り、急げ〳〵。」と追つ立てて、引連れ行くぞ力なき。民部少輔も堪りかね、頬冠取つて捨て驅出づるを、「これ狂人、親御樣弟御の今の詞を聞きながら、名乘つて誰がためなるぞ。金を辨へ歎きを申し、其の上の生死ぞや。智慧の鏡も曇りしか。なう狼狽へて下さるな。」と、涙を流し留めければ、「オ、命を繋ぐ藥はあれど、命を賣りても金はなし。懲心を盡さんより、父諸共に。」と驅出づるを、「はて氣の短い。それにこそ手懸りあり。」と、漸う宥め、其の身は亭に驅けあがり、「ヤア最前の法師樣々々々。」と呼びければ、眞光は斯くとも知らず、「何事ぞ。」と立ち出づる。「これ申し、心入が殊

の主典牢輿の物見より顔差出し、涙をはら／＼と流いて、「我が子の心を盡したる、宮城野とは和御前よな。事によつて民部が行方、知るゝ事もあらんとは、訴人をするか恨めしや。船は損じて死したりと、叡聞に達せし民部少輔、死んだるは僞りと名乘つて出でて、虛言者僞者と指さされ、公家武家の交はりなるべきか。親孝行の爲なれば、民部が恥はなきにもせよ、我が子の繩に懸るを見て、親の身でおめ／＼と、此の駕籠輿が出られうか。傾城なれども民部が妻、我が爲には嫁ぞかし。恩愛妹脊の執著には、親を背き主を捨て、身を損ふは凡夫の習ひ、我が子許りに限るでなし。民部はおことに身を果す、和御前は夫の訴人かや、情なの老いの身や。世の中の子を持つ人、親の命にかはらせて、殺す爲とて養育し、育つる親はなきぞとよ。民部がこれへ出でたりとも、嬉しいと思はばこそ、却つてながき勘當ぞ。三十に足らぬ子の命、我が七十の命を代へ、塵芥とも惜しからず。なう預りの武夫達、配所までは遙々と、生けて憂目を見せんより、道にて害したまはれかし、情あらば殺してたべ。」と輿の戶叩き口說きたて、人目も恥ぢず泣き給ふ。宮城野は目もくれて、「わつ」と許りに伏轉ぶ。民部少輔は勘當の詞に恐れ名乘りもせず。親の苦しみ親の恩、心魂に染渡り、身を悶えての包み泣き、上下の遊君往來の人、「實に道理なりあはれや。」と、袖を絞らぬ者はなし。木石ならぬ撿非違使等、泣く泣く牢輿舁上げさせ、次の宿へと早めける。遙かのあとより教信法師、荷持の人夫に立交り、涙の

はずと、論語に書きしも理かな。よしなき口上陳べしゆゑ、今更物を思ふよな。寶の山に入りながら、咽を空しく干しける。」と、投首してぞ呟きける。斯かる處に、「流人の牢輿揚屋町へ來りし。」と、いふより早く眞中に舁きすゑさせ、「仰せ渡しある間、町人殘らず遊女共、罷出でよ。」と觸れければ、「あつ。」と答へて面々の、格子の前にぞ並びける。何心なく宮城野も、表に出でて蹲ひしが、縁こそあらめ孝房と、膝を並べて肩と肩、摺合ふ許りに思はずも、互にふつと見合はせて、驚く體を包みかね、側目遣ひに持つ涙、物は言はれず心せく。身を寄せかくる袖の下、手を取りかはし憂さ辛さ、逢ふ嬉しさの數々は、十づゝ十の指先に、おもひを締めつ數へけり。預りの撿非違使大音上げ、「此の流人は播州賀古の主典といふ者なり。嫡子民部遊女に溺れ、大内造替の金子を掠め、不行跡の餘り、身は船中にて死せしと僞り行き方なし。これによつて父の主典を人質として遠流せらる。民部若し人情あらば、傳へ聞いて罷出で、官金を掠めし科を償ひ、父が命に替れよかしと、衞府の別當の内意をうけ、扨こそ斯くは下知する。」と、言ひも敢へぬに孝房飛んで出づるを、宮城野は引留め〳〵押鎭め、さあらぬ體にてつつと出で、「我等こそ民部樣の御身を亂せし、都九條の宮城野と申す遊女。今の仰せに不審の候。金をさへ辨へば、親子助かり給ふ事か、又金子を辨へても、親子の中に一人は、是非に命を取らるゝか。其の樣子にて民部樣、行方の知れまい物ならず、聞きましたい。」と言ひければ、父

より配符が廻つた。町衆御出でなされませ。」と觸れ廻れば、年寄行事出合はせ、「何事やらん。」と立騒ぐ。「これ〳〵差紙の面、宿送りの流人あり。人夫二十人出すべしとの書付、方々雇ひまはせども、今日の事にて、今一人不足致し、僅か尼が崎までを一貫の一步のと、足元を見濟ます。」といへば、「よし一貫が二貫でも、公用は背かれじ。」といふを聞付け民部少輔、これは見事な働きと、「申し〳〵、私卽ち尼が崎が駕籠の者。戻りがけの事、人が一貫取るならば、八百で參りましよ。さりながら旅籠に外れ、腹中が物さびしうて働かれず。したゝめさせて下されうか。」といへば、「ォ、飯でも酒でも其處らは、又町方とは違うたり。それ〳〵早う。」と持つて來る。つい出來合ひといふ分が、太夫客の膳部にて、二汁五菜の壺平皿、尾頭付きの大燒物、味は昔にかはらめや。肴の顏も見忘れて、鯛は近づき久しけり。犬も步けば防風の、刺身のけんによもない仕合と、悅び箸を取る處へ、町の番太が、「ァ、これ待つた〳〵。賀古の敎信といふ道心、此の邊に徘徊し、報謝の爲に價も取らず、旅人の荷物を持ち、人の肩を休むる修業者。所の爲になるならば、唯雇はれて參らんと申す。彼の者やめになされ。」といへば、「それは珍重八百のきほひ。それ膳上げよ。」と、取らんとするを、「先づお待ちなされ。据つた膳を手もつけず、餘り本意なく殘念なり。其の義ならば私も、價取らずに振舞ばかり、口の上で參らん。」と引留むるを捥放し、膳を上げて入りければ、「はつ。」というて力を落し、「物食ふ時んば物言

事のお首尾の程、宿への御合力、皆々來い。」と勇むれば、出入の幇間下男、鴇婦のまきは醉散らし、「大々盡が取れたり。」と、笑ふ顏を亭主が見て、「これ申し法師樣、奧に佛があるしるし、二王が迎へに出られた。」と、噪ぎどよめき囃立て、奧の二階に三重 移り行く。人間不定の世の習ひ、民部少輔孝房は、古乘りし三枚も、身は一枚の夏衣、一重木綿の空色に、立つ雲介と息杖の、生きたる甲斐も涙川、船引く者に雇はれつ、或は徒荷田の草の、露の命を繋ぎしが、宮城野は此の里にと、聞くより一寸餘所ながら、面影ばかり見てゆかうか。いや／＼我は難風にて死失せたると言上す、京の揚屋の不首尾もあり、如何はせんと迷ひの辻、よしやまゝよの一足より、善惡千里の虎の尾を、蹈む心地して顏隱し、揚屋町をぞ通りける。實に此の處の習ひにて、深き男の方よりも、幟兜を送るとは、登り詰めたといふ心か。ム、聞えた／＼義理を取りたる紋處、色と情の名を取つて、此の界ばかりが三蓋菱、幾夜も／＼揚羽の蝶、かはるまじとの念力の、矢筈の的に三星や、賤の絲卷繰りかへし、通へ千夜の櫻唐花、藤や立花桐牡丹、五つ輪違ひ三つ巴、丁子ににほふ黛を、誰が八の字に入子菱、龜甲鳩酸草毬鋏、鳳凰の丸扇の丸、手をつくしてぞ染めなせり。「エ、口惜しや、われ古の我ならば、宮城野が幟をば、長さ五丈幅二丈、中將姬に誂へて、蓮の絲にて織らすべきに、一尺五寸の手拭さへ、買ひ兼ねる此の身代、巾著の凧、思へば無念千萬なり。」斯かる處へ郭の町代あわたゞしく、二上の宿

てあつかひ、「ム、怖い事いふ坊樣ぢや、天魔の魅入れか怖ろし。」と、ソッと立つて逃入れば、聲を上げて、「これ申し、佛の慈悲と申さぬか、一目拜まれましませなう。假し叶はずば此の人に。」と、花紫に取付けば、「あれ坊樣の勿體ない。」と、これも振切り逃入つたり。淀川、吾妻や、網代木も、外して奧に入りければ、「わつ。」と許りに聲を上げ、「五百生の骨を粉に碎き、報恩の燒香に焚盡しても、一度の佛に逢ふ事成り難しと、師匠の敎へは是れなるか。」と、足摺りしてぞ泣叫ぶ。誠の佛と思ひ込む、愚かさ哀れに殊勝なり。宮城野は淚を浮べ、「皆々人の僞りぞや。西行法師は昔の智者、江口の君は佛の化身。憂きふし辛き流れの身、煩惱迷ひに責められて、罪障深き我々が、地獄とは見ゆるとも、佛と見えん樣はなし。お師匠樣へ聞えては、御爲も悪しからん、歸らせ給へ。」と、賺してもたらしても聞分けなく、「イャ抱れて寢ても、極樂の内まで入らうと申すまじ。つい帶解いて、門口から覗かせて下されし。」と、人目も分かず泣き口說く。亭主聲を荒らげ、「これ御坊、金も持たいで傾城狂ひがなるものか、重ねて金を持つておぢや。はや〳〵歸りや。」と威しける。法師聞きもあへず、「如何にも金は持つて來た。又黃金でも白銀でも、入り次第盜んでやらん。先づこれ取れ。」と、一步小判四五拾兩、ばらばらと投出す。亭主ぎよつと驚きて、「これはさて、我等が目には此の小判、如來と拜まれ奉る。太夫樣達頼みます。間夫というては大人氣なし、客というては糟氣なし、齋坊呼んだと思召し、一夜別

我等は元武士の子、三歳にて乳母が懷離れしより、女子と寢た事なけれども、兎も角も致さんが、抱れて寢れば後生になるか、菩提の種か。」と問懸けられ、園原もをかしさに、「ォ、後生とも〳〵。傾城の懷は極樂安養淨土に表し、牀に入るは極樂の樂門に入る心ぞ。」と、戯れを誠の稚心、五體を投げて感歎し、「扨こそ佛に妄語なし。人のいひしも誠ぞや。今は何をか包むべき、我等は只今父もなく母もなし、兩親の爲に中山寺にて髮剃し、名は眞光と申す者。師の御坊の仰せには、木像繪像は假の寫し、誠の佛にあらざるぞ。學問勤めて一心に、誠の佛を見付けざれば、父母は助からずと、深く敎へ給ふ故、天道に願をかけ、誠の佛を見せ給へと、明暮祈りの驗にや、或人の申せしは、昔の西行法師こそ、誠の菩薩を見んと思はば、江口の君を見よとある、夢想をうけ給ひしかば、江口の君といふ傾城、忽ち普賢菩薩と顯はれ、白象に打乘り、西の空に入り給ふ。汝も其の如く、神崎江口の格子を見よ、佛とも菩薩とも拜まれんとの敎へに任せ、折々寺を忍び出で、格子々々を拜めども、阿彌陀とも觀音とも、見ゆる人は一人もなし。ァ、情なや、父母のこれでは浮み給ふまじと、泣いてすごすご立歸り、敎へし人に斯くといへば、唯は中々拜まれじ、傾城買うていとしがれ、如來と見えんと敎へしが、有り難や只今の物語に疑ひ晴れ、懷の極樂生如來を拜みつけ、二人の親をも佛にせん。嬉しし嬉しし。サア早う抱いて寢て下され。」と、衣脱ぎ捨て帶解きて、悦び勇むぞ哀れなる。園原も持

お馴染なくばどうぞ又、遣手衆も氣が注かぬ。」と、頭を搔いていひければ、「ア、さればいな。豫て左樣に承る。如何せんと思ひし處に、此の頃可笑しい事ありて、行方も知らず名も知らぬ美しい小坊主が、格子まで折々見え、幟もくれんと約束し、變つた咄があるわいな。」といふ折からに横丁より、十二三なる小法師の、紋紗の衣に紅の袖裏、編笠深く顏忍び、亭を瞰上げ、しく／＼と衣の袖を顏にあて、思入りてぞ泣き居たる。「なう唯今言ひしは彼の子の事。」といへば、一座も不審を立て、「出家といひ稚き身で、戀のあらん樣もなし。」と、長立出でて、「これ小坊さま、折々格子に見えると聞く。殊に今の涙の體。尋ぬる人ばし御座るか。」といへば、法師涙を押拭ひ、「ム、其方は傾城賣る人か。彼の宮城野といふ傾城を、俺に負けてたもらぬか。此の頃さい／＼値切れども、坊主には賣らぬとある。それで幟を約束した。これ此方の寺の靈寶徽宗皇帝の鷹の繪、此の懸物を幟にして、其の代りには宮城野を一つ負けて下され。」と、手を合はすれば亭主を始め、遣手婦禿手をたゝき、「さても變つた大盡。」と、一度に咄とぞ笑ひしが、中にも園原あはれがり、「いづれも御覽ぜ。童氣に大事の寶物盜み出し、女郎に逢ひたいとや。さりながら宮城野樣が叶はずば外でも大事ないか。」とあれば、「ア、忝し有難し、此方なりとも買ひませう。賣つて下され賴みます。」と、手を摩り頭を下げ口說くにぞ、「然らば直に牀取つて、抱いて寢るが合點か。」法師不思議な顏付にて、「ム、傾城買うて抱れて寢ねば叶はぬか。

艘様。身代よしの粋大盡、心のきれたさばき手の、鴇婦に澤山物くれる、好い客様を千人ほど、つけまして下さんせ、賴みます。」とぞ申しける。神崎一番の大揚屋、懸作の長、表まで迎へに出で、「これは宮城野様、此の里へお下りと言ふより早く、度々呼びに進ずれども、太夫様は殊の外客の御吟味なさるゝとて、一度も御出で下されぬは、少とお恨みに存ぜしに、不思議の今日の御出では、三千年に花咲く天竺のうどんの粉、のこ〳〵〳〵辛の粉、のこ〳〵〳〵娘の子、これはかたじけ有馬山、猪名の小笹の粽の節句、祝ひません。」と、伴ひ座敷に通りけり。宮城野は猶物思ひ、「誠に數ならぬ此の身をば、御持囃しは嬉しけれども、御聞き及びもあるべきが、賀古川民部様と申す御方と郭は愚か、京田舎はびこるほどの浮名立ち、おいとしや大名の國郡をも失ひて、生きた死んだも知れぬ様に、成り行き給ふも我等故。それに如何に勤めとて、此の神崎まで賣流され、繁昌の全盛のと言はれて譯の立つべきか。揚屋の道も忘れる程すたつてこそは宮城野なれ、」とは言ひながら、親方の難儀を思へば節句しも、内に居眠り居る時は、茨の筵に居る如し。思へば侘しき此の勤め、それに染りて馴るればこそ、憂き身を常と暮せし。」と、涙にむせぶ其の風情、薗原吾妻若紫、一家の遊君諸共に、皆々袖をぞしぼりける。亭主も共に涙ぐみ、「お道理〳〵。ヤアそれにつき餘所の郭に御座なき事、此處の慣ひにて、五月菖蒲の節句には、深いお客のお方より、幟兜を御進上。宮城野様の節句始め、

の臺の花の露、南無といつはこれ歸命、阿彌陀といつは此の行。此の義を以ての故にこそ、即ち此處も唯心の、淨土と聞けば己心の彌陀、南無阿彌陀佛と十念も、おりて里へぞ歸りける。

第三

河舟をとめて逢ふ瀬の波枕、揚げて逢ふ夜のさし枕。假へさすとも、障りありとも、押して行こやれ神崎の、神崎の、町は歌仙が右左、以上三十六格子、揚屋の數は十二軒、四季に名高く都なも、下に瞰下す鴈金屋、冬には雪と結綿屋、春咲き初むる梅鉢屋、今は五月の押竝べて軒の菖蒲や蓬葺く、端午の禮の初袷、今日ぞ郭の衣更へ、夏來にけらし染めけらし、模樣は京と難波津の、なかを取つたる小褄の袘に、思ひふかせてすらり〳〵と歩みつれ、一家々々の花盡し、戀の早苗もうら若き、若衆が身裝禿松、深い餘りの口說文、淺きを招く屆け文、心きかせてそこ〳〵の、風を見合はす引舟や、揚屋々々の門に立ち、幟甲に長刀や、鴇婦が腰の鍵までも、今朝の祝儀の口明けと、笑ひ賑ひの、めけり。中に無慙や宮城野は、京の亡八の年の中、又此の郭に賣渡され、再び此處の新艘と、好い事がましや面目も、涙まじりの道中は、さすが名に負ふ流れとは、水際立つて知られたり。鴇婦のまきは大聲を、揚屋の門から高笑ひ、「これは宮城野樣とて、元は京の太夫樣、跡の卯月八日から此方の新

ひやりつゝ御弟子達、衣の袖をぞ絞らるゝ。花二郎教信は親の敵病死と聞き、實否を正し極めんと、門前に走り著き、斯くと案内請ひければ、幽靈は恥かしげに、「それぞ妾が小姑よ。」と、隱るゝ體をちらりと見て、會釋もなくつつと入り、小腕取つて、「これ腰拔けの表裏者。汝を誠の武士と思ひ、身の孝心に引當て、親を助けし義理を忘れ、病死と僞り葬禮をまなび、此の姿は何事ぞ。おのれ如き卑怯者に、義理も瓢簞も入らばこそ。サア葬禮は仕舞うたり。直に土へ切込まん。」と、討つて掛れば上人御弟子縋付き、「詳しく仔細は知らねども、友風病死に極まりて葬送の刻、賀古川の北の方惡人に害せられ、其の魂假に宿つて、愚僧に願ひの仔細あり。前代未聞の不思議なり、必ず粗忽なさるゝな。」と、始終を語り給へども、花二郎得心せず。「それは我等が兄嫁、末世にさることあるべきや。其處退き給へ。」と討つてかゝれば、幽靈涙の下よりも、「なうさのみ疑ひ給ふなよ。姿こそ替るとも、聲は聞き知り給ふべし。其の證見給へ。」と、襟を開いて乳を搾り、「疑ひ晴れて我が子を助け、跡弔ひてたび給へ。」と、いふ聲ばかり、魂は去るよと見えて、亡骸は花の枯木と伏しにけり。「はつ。」とばかりに花二郎、言語を絕し感ぜしが、「誠に思へば一日に、親の敵と嫂と、讐と情の無常を見る。これぞ出離の知識ぞ。」と、拔いたる刀を取直し、髻切つて敎信の、文字を其の儘敎信法師と戒名し、「此の嬰兒は甥の殿、我が手に育て叔父甥の、連同心。」と抱上ぐれば、上人も合掌の、十の蓮花や九つの、花

しつ寵愛は、不思議とも亦哀れなり。上人御手を拍ち給ひ、「さては賀古川の一族かや。昨日の暮程、賀古川の執權中務と申す仁、光明丸を連來り、愚僧を師匠と頼みし故、即ち子弟の契約し、夜前髮をも剃せし。」と語り給へば、「なに若は此のお寺にとや。法師顏を見せて給べ。中務よ秀光よ。」と、奥へ入るを、「これ〳〵、其の中務といふ人は、北の方を尋ねるとて、直に寺を出でたるぞ。又新發意との對面も、御身誠の姿ならず、此の世に住む身でもなし。稚き者に歎きをかけ、菩提心の妨げ、御身も迷ひの種ぞかし。今客殿に臥してあり。餘所ながら御覽ぜ。」と、遣戶を細目に開け給へば、痛はしや光明丸、牀を枕に剃立て法師、疲れ寐入りし味氣なさ。「あれは我が子か不便や。」と、「わつ。」と叫び入りけるが、「アヽ、いた〳〵しの寐姿や。生まれ落ちての昨日まで、お乳が手にさへかけさせず、母が抱添ひ寢させしに、此の山寺に唯一人、見すぼらしげに悄然と、頭に風のしみ〴〵と、日數立つ程父母を、慕ひ歎かん可愛さよ。」と、伏沈みてぞ歎かるゝ。「アヽ、いとほしや、母は魂許りでも、餘所ながら寐顏を見る。御身が母を見る事は、今生にては叶はぬぞ。やれ夢には見えぬか物を言へ。出家成就學問して、母が成佛自在を得ば、又來る世には、又親子と必ず生まれあふべきぞ。なう上人樣。彼の子は未だ疱瘡せず、殊に初の子※ひわづ者、毒斷して息災に、介抱頼み參らする。名殘惜しの我が子や。」と、五體を擲ち身を悶え、聲を限りの悲歎の涙。世に絆しなき上人も、恩愛親子愛別離苦、思

くべきものを、はかなき親子の契りや。」と、泣けば産兒も聞入れてや「わつ。」と叫ぶを揺り賺し、ゆりすかしては我も亦、共に涙の中山寺、辿り行くこそあはれなれ。御寺の門に佇みて「此の世を去りし者候。上人樣に逢はせて給べ。」と、頻りに叩き呼ばはれば、待設けたる寺僧達、「そりや葬禮よ。」と用意して、眞如上人大衣を著し、門を開かせ出で給へば、友風の死姿嬰兒を抱き立ちたる體。「わつ。」と許りに御弟子達、「なう怖や南無阿彌陀、阿彌陀樣地藏樣、助けて下され幽靈さま。」と、顫ひまはるぞ道理なる。上人掌を合はせて「淺ましや友風、無數の煩惱は雪を削る、摺屑五蘊離散して栴檀の煙に伴ふ。色心の當體皆是阿彌陀佛。」と示し給へば、差俯伏き、涙をはら〱と流して「いや友風にては候はず。恥かしながら自らは、播州加古の主典が嫡子、民部少輔が妻候。繼母といひ、姑のさかしき瞋恚の牙にかゝり、稚き女は食殺され、妾も共に死ぬべきを、兒の若がいとほしさ、又は此の子を産まんため、痛手も重き身を持ちて、此處まで落延びしに、惡人に見付られ、身は寸斷々々に魂も、宿る方なく斬割かれ、體を離れし嬰兒の、犬狼の餌食にや、餘りの事の悲しさに、上人樣を頼まん爲、男の體を假初にも、女の魂罪深く、此の亡者友風の往生の妨げ、妾が業は彌增しの、罪障思ひやられたり。さりながら我が身は三途に迷ふとも、此の子が行方を上人樣、偏に頼み奉る。淺ましの親子の態、憐み給へ。」と泣き叫び、乳房をしぼれば悦びて、口に哺むを掻撫でて、泣いつ賺

を使りにて、あこがれ出づる母上の、魂は青柳の青き火焔と、傳ひのぼるを嬰兒の、目には母ぞと泣き慕ふ。母は思ひに寄れば消え、退けば燃えつゝあこがるゝ、柳の絲の力なき、親子の中ぞ痛はしき。頃に夜半の鐘、鐃鈸、友風の葬送とて、親類下人鄰家の人々、心ざしある野邊の供。光明遍照の天蓋は、十方世界の雲に覆ひ、念佛衆生の幡の脚、攝取不捨の風に靡かせ、欲生我國の提灯に、不取正覺の輿を照らして、中山寺へと送りしは、宛ら安養寶國に、生まれつべしと賴もしく、心意も澄める折柄に、山風頻りに梢を鳴らし、河瀨の音は蓼々として、輿盤石を擔ふが如く、後へも前へも動かず。供の面々身の毛を立て、怖れ戰慄き立ちたる處に、北の方の魂の火焔は、鳥の飛ぶが如く、輿に入るかと見えけるが、棺槨搖ぎ鳴動して、棺を四方へ打破り、亡者顯はれ出でたりけり。「わつ。」といふより輿昇役人、幡天蓋も投棄てて、皆散り／＼にぞ逃失せける。いたはしや北の方、友風が骸を假に此の世に立歸り、柳に縋りし嬰兒を、手繰り寄せつゝ抱上げ、暫し涙にくれけるが、「世上の產の習ひにて、子は生まれて母は死し、子は死して母生きたる例はあれど、御身と我は如何なる因緣因果にや。かく淺ましの產養ひ、誕生は佛に似て餓鬼道の孤兒かや。母が肌には付けずとも、お乳乳母にも抱かれず、行方も知らぬ男の死人の骸を借り。」抱けばさすが魂は、親子と知つたしるしにや。冷えちぎつたる亡者の肌に、母と思うて抱きつく。「ア、命あるならば母が誠の肌につけ、悦ぶ初聲聞

悦び飛んで出でけるは、傍若無人と謂つつべし。友風今は堪りかね、「以前彼等が恥ぢしめし怵惕惻隱忍ばれず。花二郎が恨みを受けば受け、のめ〳〵生けては置かれず。手槍越せ。」と杖に突き、蹣跚ひ蹣跚ひ聲をかけ、「返せ〳〵盜人奴等、遣らぬ〳〵。」と勇めども、長病ひに足立たず。「エ、口惜しいな無念や、膁が動かぬ。」と、彼方へよろ〳〵、此方へたじ〳〵、蹈挫いては膝摺剝き、起上つては脛を揉み、心許りは早瀬川、急來る痰火に息切れて、仰向に反つて絶え〳〵の、今を最後と見えけるが、「エ、脆きは人の命ぞや。義理も仁義も腕立も、病には勝たれぬかや。殘念なり花二郎、斯くと知らば最前に、一太刀合はす眞似をして、本望遂げさすべかりしを、武夫の義を重んじて、賴む者をも濟まはず、武士の命を徒らに、病に死する本意なやな。諸佛菩薩の力にて、我が死する我が壽命、殘れる親に授けてたべ。南無阿彌陀佛。」の一聲に、此の世の息は絶えてけり。下女下人驅付けて、呼び助け呼び助け、藥樣々用ゐれども、其の甲斐更に亡骸を、抱きて奥に入相の、鐘に散りゆく花よりも、脆きは諸行無常の嵐、烈しき世には三重とゞまらぬ。水行末は鳴小川、北の方の亡骸は井堰に流しかけられて、血汐に染むる柵は、流れもあへぬ紅葉と、哀れはかなき風情なり。痛はしや子を思ふ、恩愛九輪の川波に、生死五蘊の泡消えず、胎內の嬰兒は、肋の疵を出身の、門とたのみて產聲上げ、誕生あるこそ不思議なれ。死骸に取付き乳房を尋ね、泣き叫べば口に入る。水分柳枝垂れて、浸す梢

人、山陰森の樹陰より、「一人も餘すな。」と、一度に突いて懸りしは、潮の涌くが如くなり。痛はしや北の方、「憐れ今までは、何卒都へ落上り、若を祖父御の手に渡し、自らも安々と胎内の子を悦ばんと憂目を逃れ落延びし、其の甲斐も情なや。なう中務。人手に掛るも口惜し。胎内の嬰兒諸共に妾を害し、光明丸を出家にし、佛の契約立ててたべ。」と、聲を上げてぞ泣き給ふ。「ア、お心安かれ。若君をお供し追手を切拔け、何方へも落延び、御出家なさせ申すべし。奥樣は是れに御隱れあり。敵散つても候はば、都父御の御方へ落ちさせ給へ。」と、花見が捨てし筵取り被せ忍ばせて、寄せ來る追手を弓手に受け、馬手に支へて切拂へば、若君も甲斐々々しく、中務に引つ添うて大勢に切り結び、追返し追戻し、麓の岡邊に三町追うて行く。此の音に友風は、下人共に手を引かれ、這々垣に取付いて見送れば、二人の者大勢に取卷かれ、今を最期の有樣なり。「ハアア、不便や危し。南無三寶、我花二郎と契約なくば、最前匿まひくれんずもの。人に預る此の命でなくば、此の病でも一方の助太刀してやらん物を、命が二つ欲しさや。」と、拳を握り齒を鳴らし、身を顫はしたる許りなり。熊源太が弟虎平次取つて返し、「女が見えぬ。」と呟きて、木草を分けて探せしが、筵の下を怪しげに引除くれば、北の方、「わつ。」と魂ぎり手を合はせ、「身二つになるまでの命をくれよ。」と、泣給ふを引寄せて、肋骨三刀四刀刺通し、返す刀に笛の鎖寸斷々々に切散らし、死骸は遙かの谷川へ、「えいやつ。」と投込んで、

る命、大事にかけて養生し、潔く勝負せん。」「ム、嬉しし頼もしし、醫者をも代へて養生し、本復して討果さん。たとへ討つとも討たるゝとも、親孝行の手向の勝負、莞爾と笑うて死ね。」「死なん。」「風にあたるな身を冷すな。人參入らば言越せ。さらば。」「さらば。」と別れける、所存の程こそ頼なき。早暮渡る山陰の、中務秀光は我が身に數箇所の創を蒙り、懷妊の北の方、殊に臨月惱みの上に、光明丸を相具して、淡路方へと落ちけるが、先々追手隙間もなく、又都路に行く月の、熊源太が追手の者、蓦地になつて追掛けたり。秀光今は詮方なく、浪人めきたる一構へ、屈竟と中務、走り寄つて案内し、「近頃匆忽千萬ながら、仔細あつて斯くの如く創を負うたる我々、追手嚴しく逃れがたなき仕合。某追手を防ぐ間、足弱を暫しが程、影を隱し給はれかし。頼み入る。」とぞ申しける。友風牀の内ながら、「御覽のとほり病中、殊更故障の事あつて、かつはお爲も如何なり。御宿は叶ふまじ。」と、情なげにぞ答へける。中務無興氣に、「怵惕惻隱は仁の端。頼まぬとても侍の、斯かる哀れを見るに忍び給はんや。御身に難儀は懸け申さじ。是非に暫しの御憐愍、頼み申す。」といひければ、「ハテ頼まるゝ程ならば、難儀を顧みるべきか。某は敵持ち、討果す約束にて、人より預る大事の命。若し過つては一分たたず。後れたりとて笑はば笑へ、ふッつと叶ひ申さぬ。」と、戸を閉てさせてぞ臥しにける。「エ、よしなき腰拔け、頼みかゝつて隙費し、何國へ落ちん。」といふ處へ、熊源太が追手の者數十

り。實父は養父の公事相手、正しく所領の敵なれども、我には聊か如才なく、猶憐みをかけらるゝ。我も亦乳房より膝懐を汚したる、養育慈愛の高恩は、誠の親にも代へ難し。此の報恩に飽足らず、父に隱して某こそ、高梨吉内左衞門友重と假名をし、討たれて父を助けん爲、徘徊したる其の内に、斯かる大病引受けて、唯今にも相果てなば、跡にて父が討たれんかと、いよ〳〵病募りしに、今日御邊に出逢ふ事、討手より尚討たれ手の、某が身の幸ひ。御邊は誠の親への孝、我は養ひ親への孝、實子と養子と變れども、子といふ文字は同じ事。孝子の心を思ひ知り、父を助けて某を、疾く〳〵討つて給はらば、生々世々に忘れじ。」と、涙に咽び賴むにぞ、岩木にあらぬ花二郎「痛はしや哀れなり。心底察し入るからは、望みをかなへ申すべし。御分は生きたる親への孝。我は親の顔も見ず、羨ましの身の上や。」と、悲歎の涙にくれけるが、飛退り涙を拭ひ「禮儀はこれまで親の敵參る。」といへば、「心得たり。」と、首を伏せて待ちたりしが、又花二郎頭を振つて「暫く〳〵。御分が望みを叶ふからは、此方も望みあり。腕も叶はぬ病人を討つては死人も同然なり。養生加へ快氣を得て、一太刀合はせられぬか。」といへば「ハテ渡し置いたる一命、如何樣とも勝手次第。さりながら若し此の分にて病死せば、跡にて父を討つまじきか。」「アヽいふにや及ぶ。正八幡も照覽あれ。御邊を除けて外に討つべき敵はなし。但し病死するならば、早速に注進せよ。隨分養生賴む。」といへば「何が扨其方より預

時宗は祐信が子となつて、曾我の名字を繼ぎけれども、父の河津の敵は討つ。我もそれによも負けじと、無念さと口惜しさ、胸に徹り骨に染み、恨みの刀一太刀と、狙ふ心の走り過ぎ、無禮の至り御免あり、勝負を遂げてたべかし。」と、落涙してぞ語らるゝ。友重もやゝ涙ぐみ、「いはれを聞いて笑止や候。斯く孝行の心ざし承らば、疾つくに討たれ心を休め申さんものを。和殿は一生親知らず。我は生まれて三十年、今日まで親に添うたれば、思ひ置く事更になし。打つて本望遂げられよ。」と、首差延べて待居たり。花二郎眉を顰め、「これ友重、今の詞は心得ず。御分は生まれて三十年、父は討たれて二十一年。よも十歳にて討ちはせじ。仔細を聞かん。」といひければ、友重はつと思ふ景色にて、「オ、武士の子の七歳八歳にて、高名するは珍らしからず。よし十歳にも百にもせよ、中納言を手にかけし親の敵は外になし。由なき猶豫をせんよりも、はやく討て。」とぞ申しける。花二郎猶も承引なく、「いや如何に言うても御邊敵と思はれず、人違ひさせ、後代に恥かかせんとの底意かや。とても情に、本意を包まず明してたべ。」と、手を合はすれば涙をうかめ、「わりなくも問ひ給ふ。今は何をか包むべき。中納言殿を手に掛けし誠の吉内左衞門友重とは我等が父、今北國に逼塞す。某は一子政太郎友風とて、元來我は養子なり。實の親と養ひ親と、遠親類の其の中に、所領の論の候ひしが、中納言殿國司の時、非分の判きに知行を失ひ、其の恨みに因つて養父吉内左衞門が闇討に討つて立退きた

花見の貴賤幕の内、「さて聞き事や面白し。變つた祭文あるならば、所望々々。」と喚きしに、彼の男笠脱ぎ棄て裾端折りて大音上げ、「これ〳〵御邊は高梨吉内左衛門友重よな。我こそ先年其方が闇打にせし坊門の中納言資雄が一子。親の敵覺悟ぞあらん。サア拔合つて勝負せよ。一寸も退かせじ。」と、間近く寄つて詰めかくれば、「すは敵討ぞ。」と聲々に、幕辨當を蹈散らし、羣集の騷動夥し。吉内左衛門起上り、「オ、坊門の中納言殿を手にかけし友重は我なるぞ。左右に敵を持ち乍ら、名字も變へず人目も忍ばず、羣集の庭に面を晒す某が、何しに卑怯の働きあらん。殊に病中手足も立たず。何ぞ見苦しく立ちはだかつて、遁さぬ遣らぬと無禮の擧動。弓馬の法を知らざるか。哀れ討手の來れかし。見事に死して名を揚げんと、待つたる事の仇となり、汝等如き武骨人に此の首は惜しけれど、サア取らする、寄つて討て。さりながら坊門中納言殿には、子も兄弟もなかつしが、定めて己は下人よな。何故眞直に名乘らぬ。」と、はつたと睨んで叱りける。實にこれは過つたりと、褰を下し手を束ね、「心ざしの過分さや。御不審晴らし申すべし。某は中納言が妾腹に宿りしが、討たれし節は胎内にて父に別れ、母にて候者、某を身に持ちながら、播州賀古の主典に身を任せ、彼の方にて誕生し、賀古の花二郎教信と名乘り、父の主典が養育にて、誠の父のあるとも知らず年月を送りしに、不慮にかくと承り、頻りに親の懷かしさ、寐ても寤めても忘られず。勿體なや恩深き今の親まで煩くなる。昔の祐成

の國に至つては、難波のきしに跡たれて、住吉四社の花神樂。和歌を守りの宗匠とて、西行櫻色深き、小町櫻も老いぬれば、身は百歳の姥櫻。若木櫻の足駄の笛に、寄來る〳〵鹿も寄り來る。縫交ぜ縫交ぜ櫻結びの花かつら、繋ぎ留めん普賢象。普賢は流れの身を守り、ふはと打乗る雲井櫻にしつたんたん、たん〳〵丹後に馴合ひ切戸の文殊現じ給ひて兒櫻、これ佛神の御方便、猛き熊谷櫻さへ、墨染櫻諸共に、到り到らん彼の岸の、彼岸櫻は有り難く、說くや御法の庭櫻。熊野は三つの御山にて、新宮、本宮、同じく那智の瀧櫻。尾張に熱田の御社は、異國の美人と名に高き、楊貴妃櫻を勸請ある。近江國には、唐崎志賀の山櫻。また北國には、立山白山泰山府君。武藏に神田江戸櫻。湯島はたのもの天神より、まだ御鎭座は遲櫻。又櫻田の大明神。奧州に至つては松島六社、鹽釜櫻の大明神。總じて日本國中に、八百萬の枝社、讀むとも盡きぬ眞砂櫻の數々は、粟三石の米櫻、勸請申し枝下し奉る。そもそれ神すゞしめの、宮仕の左近の櫻が烏帽子櫻を傾けて、乙女櫻の小忌衣、肌に白無垢淺葱櫻に樺櫻、櫻重の袖飜し、さかて櫻に白木綿襷、引掛けつつかけ、花の木陰を祓ひ淨め奉れば、惡鬼惡魔もすつきりきり〳〵、きりがやつ。來るまじきは天けんにては緋櫻や、又煩惱の犬櫻。惡事災難たゞりん〳〵、そもそこ祟りをなすとも、唯今の御方便の功力を以て、繁昌の御酒宴。」とぞ謠ひける。

に所領の爭論、先年國司の裁許暗く、重代の領地に離れ、引籠り居し柴の戸も、吹荒したる花に風、咳氣の咳の何時の間に、鬱氣の病日に増り、今を限りと衰へて、頼み少くなりけるが、花より先も知らぬ身の、せめて此の世の名殘とて、介抱の女の童、一僕に手を引かれて、木陰に僅かの牀を設け、往來の花見に暫しが程、氣を養うたる春の野や、幕に立ちたる歌比久尼、舞まひ物眞似さま〴〵の、賑ふ中に編笠被て、錫杖ふり、「櫻盡しの歌祭文、一錢。」とこそ申しけれ。看病の下女隸僕、「お氣晴らしの御養生、一ッ唄や。」といひければ、「あつ。」といふより扇を開き、口覆ひしてぞ謠ひける。

櫻祭文

「そも〳〵敬つて花を眺め奉る。上は梵天山櫻、下は次第に咲く櫻、忝くも此の國の、開き初めたる初櫻、伊弉諾伊弉冊二もとの、連理の櫻隣合ひ、天の橋板、櫻板。薄き契りの子櫻の、三歳足立ち給はねば、天の岩樟釣舟に、下すや釣の絲櫻、釣つた姿の櫻鯛、蛭子素盞嗚八雲起つ、出雲八重垣八重櫻、さては〳〵神明伊勢櫻。天の窟戸は大日の、朝日櫻や月讀の有明櫻、雨もいや風もいや、淺間の嶽の宮居より、見ゆるぞ富士の雪櫻。都の地には、先づ王城の地主の櫻に、稻荷祇園の薄櫻、一重櫻をお手に手に〳〵、手毬櫻の一枝は、折つて手向の賀茂糺。北野は連歌の花の本。嵯峨に櫻葉大明神。毘沙門天の遷ります、鞍馬の山の雲珠櫻。正月一の虎の尾櫻、これこそ花の御縁日。さて津

霹靂、天地も崩るゝ三重ばかりなり。蜘蛛は空にて若君を、呑まん〳〵と働けども、凌ぎかねたる刃の光、半身の須磨藏が、變化に優る不思議の力、蜘蛛の眞中刺し通し〳〵、弱る處を腕切落し、若君を搔抱き、八重たつ雲をくる〳〵、くるり〳〵と舞下り、大地へ撞とをちこちの、變化は亡び失せければ、須磨藏が半身は若君を下し置き、さも嬉しげに死顏も、眠れる花とぞ萎みける。北の方中務、煎つたる種の生ひ出でて、石に花咲く拾ひ物、蘇生りたる若君の、悅びに猶姫君のいたいけ盛りの花は散りて歸らぬ憂き涙、落行く夜半も深手は負ひぬ。目もくれなるに暗き夜の、足はたど〳〵身はよろ〳〵と、互に呼續ぎ呼びかはす、聲を知邊の千鳥啼く、淡路の方へと落ちにける。

第二

花の盛りは冬至より百五十日、又は彼岸の後七日などとはいへど、立春より七十五日、大樣は違はずと、斯かる事にも氣を付けて、見付け書付け留めにし、智者の目鏡を違へては、田舍花とて京吉野奈良や初瀨の名木の、笑はば嘸や花の名も、惜しや牡鹿の津の國の、櫻塚こそ盛りなれ。太平の世の民草の、女子勝なる花鳥の、天も色にや醉うたとさ。醉ひても拔かず切らぬこそ、治まる御代の銘の物、價千金の春べかな。此處に當所の隱士、高梨吉内左衞門友重は、播州揖保の住なりしが、一門中

君を失ひしも、繼母姉弟よな。化物ならばおんぞろか。縦へ誠の人間にても、手練を見よ。」と、太刀差翳し討つてかゝれば、北の方も長刀構へ、「我が子の敵餘さじ。」と、討つてかゝれば、變化の繼母、唯陽炎の如くなり。秀光は病中なり、北の方は女業。熊源太が大勢を、腕一つにて防ぎかね、數箇所の痛手を受けながら、此處に支へ彼處に堪へ、龍虎に優る熊源太、二三度表へ驅散らし、火水になれとぞ戰ひける。時に繼母は光明丸を引摑み、梢々に絲繰懸け、虛空に飛ばんともがきしは、危かりける振舞なり。斯かりし處へ須磨藏は、縛られながら驅付けて、「南無三寶。」ともがけども、高手の繩の強くして、爲べき樣もあらざれば、「ヤアおのれ食ひ付いて留めん。」と、くるり／＼と大庭を、彼方此方へ追廻し、追詰めて繼母の弱腰しつかと咬へ、齒骨も切れよと引いたりけり。繼母は命を遁れんと、足踏みしめて前へ引く。とゞろ／＼たど／＼く、遣つつ戻しつ、遁れつ留めつ、白洲を蹴立てて引合ひしが、熊源太取つて返し、須磨藏が胴中を縛繩の結目をかけ、ばらりずんと切下げた。腰より下は落ちながら、念力胴に生留まつて、繩は切れたり手を伸ばし、若君の指添拔持ち、突留めんと繼母を左手に攫んで揉合ひける。時に秀光、北の方、よろぼひ來つて熊源太を追散らし、繼母に打つて懸りしが、忽ち惡風黑雲覆ひ、七尺餘りの蜘蛛と變じ、猶若君を放しもやらず。胴半分の須磨藏が念力は死にもせず、縋付くを事ともせず、虛空に千筋の絲を張り、雲をわけて攀上れば、電光擊して

唄うた、其の喉吭に飛付きて、牙を立ててぞ食ひ締めける。「なう悲しや。」と力を出し、引けども〳〵放ればこそ。牙は肉を貫いて、血は瀧津瀬と流れける。何事ならんと北の方、長刀提げ走り出で、「物の魅入れか淺ましや。」と、石突取延べて、丁々と打ち給へば、打たれてかつぱと落ちけるが、忽ち屋鳴り鳴動して、鼎の如き蜘蛛となり、軒を翔り長押を走り、喚き渡るぞ凄まじき。頭の外れに長刀の切先を打込まれ、はふ〳〵逃延び繼母の局、壁を穿つて其の儘に、形は失せてなかりけり。北の方は卯の花が傷をいたはり給へども、毒蟲に急所を食はれ、終に敢なく絶入りけり。繼母は額を切り下げられ、廊下桁縁蹈轟かし、大聲あげて、「ヤァ嫁御前。如何に繼しい中とても、姑は親ならずや。長刀持つて追廻し、額に創を能うつけた。長刀は遣はねど、劍まさりの齒を持つた。食ひ付いてのけたいな。熊源太は何處にある。あれ引出して討つて捨て。をりあへ出合へ。」と喚きしは、五月の雨の山川に、堤の切れたる如くなり。「心得たり。」と熊源太、家中一味の端武士、雲霞の如く馳集まり、「北の方も若君も、一所に討て。」と犇きける。今は斯うよと北の方、長刀取りのべ戰ひ給へど、大勢に女の力叶はねば、既に危く見えし處へ、中務秀光病中の枕の刀、一文字に殺到し、眞中に驅隔て大音上げて、「ヤァ不審なり熊源太。唯今屋形の騷動は、御屋敷に化物棲んで、小姫君を食殺し、我が女房も相果てしと、聞くや否や驅著けしに、案の外に方々が、北の方、若君を害せんと取卷くは、ォ、扨は姫

いたいけ盛りの花の顔、頭を口に押込めば、口耳際まできれあがり、肩も腕も一口に、血を吸ひ呑んだる其の勢ひ。いたはしや姫君は、足を縮め苦しみしは、目も當てられぬ風情なり。渾身半分胴中まで、呑むには程もあらばこそ。股より膝口爪先も、のこさず終にぐつと呑み、腹は毬とぞ脹つたりける。光明丸は氣も付かず、花に見入つておはせしが、振返つて、「あれなう千壽の姫は、祖母御前に喰殺された。」と叫び給へば、忽ち姫の姿と變じ、「エ、兄樣何を騒がしい。祖母樣は先刻にはや、お部屋へ歸つて寢してぢや。いざ此の花でまゝ事して遊ぶまいか。」と、花に戯れ引毟り、隙もがな若君を、取つて呑まんと眼をつけて、唯後方へと立廻る。眼の光左右の牙、人間ならぬ顔色を、見つけば命も絶えぬべし。それとは知らねど若君も、慄と身の毛も立上り、逃げんとすれば、「兄樣。」と、おはへ縋れて追蒐くる。猶怖ろしく詮方なく、小太刀を拔いて拂はるゝ。されども怖るゝ氣色なく、颯と外し、ひらりと飛び、宛ら飛鳥の如くにて、「あれ兄樣の。」と喚く聲、中務が女房卯の花、周章て驚き走り出で、大刀奪ひ取つて、「これ若君樣、又御兄妹爭ひか。殿樣は無し、中務は病氣なり。構ひ人ないとてあんまりな。怪我ばしあつてよいものか。いとしほなげに小姫樣、此方へ〳〵。」と抱き上げ、機嫌を取つて賺しける。お乳や乳人のくせとして、背に子を負ひ寢させて置いて、「いんの子〳〵とのたもなめなかけそ。此處な子は幾歳、十三七つ。七つになる子がいたいけな事いうた。殿が欲し。」と

雛鷹も傍輩、此の有樣は何事ぞ。エ、口惜しや是非もなや。おのれ等姉弟はびこつて、民部樣の御座子殺され給はんおいとしや。奥樣は何處にぞ。光明丸樣若君樣、なう姫君樣姫樣。」と呼ばはり引かれ出でけるは、無慙なりけり。痛はしや兄弟の人々は、「あれ須磨藏が聲として、我々を呼ぶわいの。嬉しや父の御歸り。」と、兄弟表に驅出でて、「ヤレ須磨藏よ。父上は何國にぞ。何故に隱れ給ふぞ。」とあらぬ隈々隅々を、尋ね廻れどあらばこそ。「なう悲しや千壽の姫。御身や我が明暮に、父を呼ぶのを面白がり、茶道坊主の珍齋めが、欺して呼んだものさうな。侍の子といふ者は、返らぬ事をくよくよと、泣けば人が笑ふぞや。我も泣くまいな泣きやんな。」と泪を隱し妹を、笑ひ顏して慰めしは、穩順しやかに哀れなり。奥より繼母は、色々の花折持ちて、「なう孫達。餘所の子供は親よりも、祖母を慕うて抱かるゝ。如何なれば和御前達は、祖父祖母同じ事なれど、主典殿には抱かれても、祖母が膝へは寄付かず。孫を持つたも名許りで、いたいけらしい顏も見ず。愛憐の者や可愛者。リア誰ないと此處へ來て、祖母樣いとしと抱付いたら、此の花やらう。」と招かるゝ。若も、「何時なき祖母樣の御機嫌よし。」と悦べば、姫は膝に驅上り、「祖母樣いとし。」と、首筋に抱付いてあまえしは、危かりける次第なり。繼母莞爾笑顏して、「オ、能う抱かれた出來いたな。とてもの事に衣裳脫いで、祖母がはゝに抱かん。」と、我も大肌ずんと脫ぎ、千壽の姫の帶解き、衣引剝いで裸身を、兩手に取つて差上げ、

誰をか親の泣寄りに、誠の母は悪人の、身の行末も覺束なし。」と、かこち出づるぞ道理なる。斯かる處に、門前に轡の音頼りなり。須磨藏はつと身を隱せば、繼母の弟熊源太、供人引具し來りしが、馬上よりきつと見て、「ヤア汝は須磨藏か。難風に吹き流され、民部少輔諸共に、行方知らずと披露せしが、僞るな下郎め、開牒を入れて聞きたるぞ。民部少輔は遊女に溺れ御普請料を掠め倦し、身の置き處なき儘に、難風に失せしと僞り、驅落したると聞きけるが、疑ひもなく合力受けに來りしな。それ懐を探して見よ。妻子の方か中務へ、文のあるに極まつたり、それ〳〵。」と下知すれば、郎等共兩方より懐へ手を入るゝ。「悪しかりなん」と振放し、「男たる身のいき懐へ、ほでをさすとは何事。」と、言捨て逃ぐるを熊源太、元首押へて、「ヤア身が言付くるに推參者。はや〳〵探せ。」と武者振付く。今は斯うよと文取出し、ずん〳〵に引裂きて、口に入れてぞ嚙んだりける。「すは顯はれし搦めよ。」と、取付くところを取つては投げ〳〵、足に縋れば蹴散らかし、腰を抱けば振放し、前にかゝるを蹈み倒し、拳を堅め、寄付く者の眞甲打つて打廻し、此處を先途とはげみしが、大勢に組付かれ、脇指もがれ大童、散々に蹈伏せられ、難なく繩にかゝりしは、無念なりける次第なり。「なほ拷問して問ふ事あり。牢に入れよ。」と引立つれば、須磨藏眼に角を立て、「身のほど知らずの業人め。鷄犬の類まで餌を飼ふ者には從ふぞや。所領を申受くるからは、民部樣は主ならずや。斯ういふ我も御扶持人。犬も傍

念の絆の絲幕ひ參り候。」と、いひも敢へぬに花二郎、「南無三寶。」と横手を打ち、「エ、淺ましや恥かしや。大惡心の母故に、北の方、光明丸に不慮の難儀出で來なば、兄民部殿に疑はれ、世間ともに言譯たたず。所詮存命へ益もなし。是れまでなり。」と、腰刀するりと拔き、既に自害と見えし處を、須磨藏縋つて、「暫く〱。これ申し御心底は至極ながら天晴大事の御命。御身に取つては討たで叶はぬ親の敵の御座候。御存じなきは御道理。それを如何にと申すに、もと母君は都人、坊門の中納言といふ公家方に宮仕へ、其の時に懷妊ありし。これ殿は公家の御子ぞや。未だ胎内にまします時分、實父中納言殿、國司として當國へ御下り、諸人の訴へ聞召す中に、非道の判きの恨みによつて、御父中納言殿は闇討に討たれ給ふ。それより母御は、此の屋形へ御入りあつて奧に立ち、これにて誕生ありし故、賀古川の二男とはなり給ふ。とても死なんず命ならば、誠の親の敵を尋ね、刺違へんとは思さぬか。エ、腑甲斐なき御所存。」と、樣々制し教訓す。花二郎手を合はせ、「能くも知らせし有り難さよ。今の親の名字を繼ぎ、養育の恩深けれども、誠の親の敵を持つて、討たぬは畜類同然たり。命限りに狙ひ付け、討つての後は立歸り、名字の親に孝行なさん。敵の假名實名は、中務が知つつらん。病氣によつて私宅にあり。直に立越え相談して、時を移さず打立たん。命あらば兄上にも、對面せんと申してくれよ。淺ましや今までは、一つ胤ぞと思ひしに、親と賴むも他人なり、兄といふも他人なり。

留めて、これ須磨藏。如何に祕する事なりとて、兄の身の上弟の聞かぬ事やある。是非に仔細を語れ語れ。」とありければ、「アッァこれは過つたり、御物語仕らん。必ず他言遊ばすな。」と小聲になつてぞ語りける。「されば貴きも卑しきも、色に傾く世の習ひ、君は此の度公用の御休息の夕な〳〵、都九條の遊女町、宮城野とまうす傾城を、人に誘はれ二三度は、一座流れの御遊び、四度馴染めば五つめは、はや睦ましさ彌増り、先からとんと上り坂、戀の峠を打越して、引くに引かれぬ義理づくも、後は互の誠なしに、身を任するを御不便がり、それが嵩じて憐れがり、後は苦勞を引受けて、御身のひしといきつきて、通ひくづをれ給ひし程に、はや金銀の矢種も盡き、武家の聞え、大内の御用も闕ける郭に急く。京の外聞國の恥、御切腹と候ひしを、某が計らひにて、御内衆へも知らせばこそ。難風を幸ひにさる浦方に漕著けて、海人の苦屋の御住居、餘所の藻汐の煙さへ、此方に立たぬ朝夕を、執權中務に密かに語り、合力受け歸れとの仰せにて、忍び參り候なり。申すも便なき仕合。」と、今更袖をぞ絞りける。花二郎聞き給ひ、「御痛はしや。さりながらそれ程の御艱難中務までもなし。一人の弟なり。など我等には知らせもなき。腹異りの隔てかや。曲もなき御心。」と恨み給へば、「いや〳〵御繼母とて隔て給ふは御尤も。夜前、某雲が洞を通りしに、母君一人さも怖ろしき裝扮にて、繼子繼嫁孫をも殺し、實子に實督繼がせて給べと、調伏の願立てに、惡神の驗にや、忽ち山荒れ御繼母の、一

嫁二人の孫を食殺し、死骸を神の御供となし、我が子を家督に立て給はば、四季に四度の人身御供、供へ祭り奉らん。目前利生を見せ給へ。」と、枯木を叩き岩を踏み、跳り上つて祈りしは、身の毛も悚立つ許りなり。聞くもいぶせく空怖ろしく、そゞろ顫うて立つたりしが、俄に山谷震動して、山風吹上げ吹下し、雲霧覆ひ、咫尺も見えぬ洞の内より、火焔を吐きて七尺餘りの蜘蛛の形、千筋の絲を繰懸け繰懸け、顯はれ出づるぞ怖ろしき。繼母を捉つて引纏ひ、六足伸べて引摑めば、「あれよ〳〵。」と泣き叫び、逃げんとすれど動かさず、たゞ一口にこそ呑んだりけれ。聲ばかりして姿は見えず。刀拔きかけ居たりしが、ありつる蜘蛛は忽ちに、繼母と化して行く月の、影もほのかに晴れてけり。さもあれ彼奴が行く先を、尾行て見んと身を密め、遣り過したる裾より、一筋の絲引いたり。是れぞ不思議と繰り留めて、慕ひ來るとも白露の、奥山道の險しきに、木の根を傳ふ身も輕く、這ひ行く足もはや玉の、己が力に蜘蛛の、絲を控へて三重繰返し、行くとも覺えず賀古の莊、主人の館に留るにぞ、「扨は繼母御前か。」と、呆れ果てたる許りなり。花二郎教信は父を送りて歸られしが、「ヤア須磨藏か珍らしや。お事が無事に歸るからは、さぞ兄上もお供しつらん。如何に〳〵。」とありければ、「ア、御沙汰なし御沙汰なし。民部樣は御歸りなし。されども御命は恙なく、御家老の中務に御内意ありて參つたり。大旦那御夫婦は勿論、北の御方、若君樣へも御隱密頼み奉る。」といひすてて、驅出づるを引

ん。」と、旅立つ雲も丹波路の、栗毛の駒の導にも、我が子の便り文も見ぬ、生野の道や大江山、越えて都に三重卒十る。月影暗き深谷の、木の葉の時雨瀧の音、さら〳〵どう〳〵さつ〳〵と、吹く風に雲起り霧降りて、物騒がしき山路かな。我が生さぬ子も子なれども、何故にうらむらさきの初草の、始めの妻の猜ましさ。妬み暮せし年月の、身は百歳の半ば過ぎ、頭の髪も白黒に亂れ碁石の繼子立、數へ殺さん喰殺せ、呪ひ殺せと岩根踏み、苔踏み分くる山樵の、樵路空しき丸木橋、下は千仞萬仞の奈落々々のそこばくの、苦患を繼子に見せし繩、邪神を祈る小忌衣、口に啣へし燈明の、油煙くるくる渦卷く雲の懸路、巖々峡々として、松風梢を拂つては、花を薪木に吹添へて、雪を運べる岨傳ひ、慳貪我慢の一念には、平地を行くより足輕々、山神の洞に攀登り、一息ついて休らひしは、宛ら鬼女の如くなり。民部少輔の一僕須磨藏は、主人の内意を承り、人目を忍び山越えに、夜道を故郷に歸りしが、繼母君とは思ひも寄らず、「天晴如何なる非道者、山の神を駭かし、人を害する大悪人、見屆けん。」と、麓より附登つて岩陰に、隱れて事をぞ窺ひける。繼母は斯くとも白木綿の、襷の四手を打振つて、「謹上再拜雲が洞の山の神、聞召せや聞き給へ。辱くも御神は、昔大和國葛城山に住み給ひ、それより此處に移ります。呪詛調伏の願を滿てしめ、古は年毎に人身御供を受け給ふとや。今佛法盛んの世なりとも、威力朽ちずば繼子を四海の波に沈め、自らに一念の鐵の牙を付けて給べ。殘る繼

けし申し子なるを、寵愛に絆されて出家になさんいとほしさ。月日ものびて成人し、佛の契約違ふのみか、嫁を迎へて孫まで見て、民部少輔孝房と家督に立てし此の僞り。一年母が死したるも、罰とは知れど親心、闇にはあらで子に迷ひ、兄を出家にせぬからは、後妻の子の花二郎、せめて法師にせんものを、淺ましや凡夫心、佛なしとは思はねど、物宣はぬ木像に、實には心の怠りて、斯かる愁へを見る事よ。」と、又さめ〴〵と泣き給ふ。父を諫めて花二郎、「御歎きはさる事なれども、非を改むるに憚りなし。某唯今出家せば、兄弟は同根生、兄にて候民部殿、御出家ありしも同じ事にて、懺悔の功德に父母の、佛の咎めも飜り、兄上の現未を助け、子孫も繁昌致すべし。光明丸が家督の願ひ、某が出家のお暇、唯御急ぎ候へ。」と、涙を浮べ宣へば、老母きつと睨みつけ、「ヤア何をいふぞ花二郎。彼の兄の民部はな、前の奥の石女殿、出家にする誓願で、佛頼んで産まれた子。御身を産んだ此の母は、神も佛も手傳なし。夫婦のせゐで悅びしに、出家にする程ならば、何しに腹を痛めうぞ。物の順を云ふ時は、御身は兄の跡を繼ぎ、民部の出家の名代に、光明丸が頭を剃げ、すぼろばうにしたが好い。懸替もなき花二郎、出家にしての德は何、勿體なや聞きともなや。アヽ南無阿彌陀佛。」とまぜこぜ言、餘所の聞えのうたてさよ。主典はこれに應答もせず、「我が子孫とはいひながら、家督の事は儘ならず。殊に公用缺くるといひ、鎌倉表計り難し。これより直に上洛して、公の御氣色窺は

引出せとの仰せによつて、去年より在京あり。國より金銀を運ばせ、播州紀州に渡海の留守、めでたく公用調ひて、追付歸國を祈らんと、教孝夫婦花二郎、光明丸、千壽の姫、北の御方諸共に、播磨と丹波の山境、出雲の社に大三重參籠の、宿坊とても奥山家、水尾の柚が斧の音に、山路の苦勞も思ひ遣り、尚々祈誓をかけ給ふ。斯かる處へ、「京都より、乳母子の印南の彌七郎、同じく外樣の侍共歸りたり。」と申しける。人々、「如何に。」と驚き給へば、心ならずも北の方、「氣遣はし彌七郎。殿は何とて御歸りなきぞ。御文にてもなきか。」とあれば、彌七郎涙ぐみ、「さん候。大内の御普請大半成就致せしが、陽明門の欅柱不足によつて君御舟を出されしに、先月七日の難風に、熊野浦にて類船、悉く漂溺に及びし時、御草履取の須磨藏、磯に著けて御命を助けんと、傳馬船に乘せ申せば、山の樣なる大浪がどうど打つて、御船は行き方知らずになつて候。假へ御命ありとても、日本の地には在さじ、何面目に主を失ひ、やみ／＼と歸らんよりは、腹切らんとは存ぜしかども、先づ御知らせ申さん爲罷歸り候。」と、語りも敢へず泣居たり。北の方を始めとして、教孝親子光明丸、東西分かぬ姫君まで母に取付き聲を上げ、「父上戀し。」と泣き給へば、人々夢かと許りにて、悔み歎かせ給ひけり。主典涙の下よりも、「ア、思へば、佛の咎め程恐ろしき物はなし。我前妻に子種なく、摩耶山の觀世音に願を凝らして、一子を與へ授け給へ、出家させて夫婦產まずの業を晴らし、佛恩を報じ奉らんと、誓ひて設

賀古教信七墓廻

第一

十王經に曰く、閻魔卒三魂を縛して闕樹下に至る。二鳥棲んで掌る。一を無常鳥、二を抜日鳥と名づく。我汝が舊里においては、鷴鶘鳥と化して、別都頓宜壽と鳴くと云々。是れぞ和俗に聞くならく、冥途の鳥や卯の花月、佛降誕ましまして、因果をしめし量りなき、衆生濟度の誓願力、御法と共に文武の道、盛んの御代と著し。往日播州の總郡代、賀古川前主典藤原教孝は、代々鎌倉の被官として、家督民部少輔孝房、嫁君は檜室の中將種平朝臣の御娘、相性よしの水と金、光和ぐ光明丸、十二歳にて其の次は、在鎌倉の獨寝がち、年弱五つの千壽の姫。總領孫の顔も見ず、先立ち給ふ前妻を思召し出して、教孝の膝を放さず育てらる。二男は當奥御前の一子にて、兄に劣らぬ侍盛り。花二郎教信と名乘つて二十一、孝悌の心淺からず。嫂は姉、甥姪は我が子の如き仁愛に、似ぬ母心ひすかしに、繼子繼嫁孫君も、憎や／＼と押出して、詞に尖る劍先舟、家中柁をぞ取り兼ねける。其の頃大内御造營。鎌倉の沙汰として、諸國に是れを下知せらる。則ち民部少輔孝房は、熊野山の材木を

よりも尊きはなく皆佛性を備へたり。彼も我も一佛一體、汝が怨念消除徹塵、もとの佛果に至りたまへ。おんあびらうんけんたら、たかんまん急々如律令。」と精誠をぬきんで、修多羅の聲も川風も、天に響きて有り難し。時に不思議や、神木の松の木の間に、北の方の幽靈影の如くに現はれ、「此の御經にひかれて、五逆の達多八歳の龍女、共に佛果を受けしぞや。恨みを晴れて今よりは、五智の佛と成るべし。」と、宣ふ聲もかんばしく、如意觀音と現はれ、光をはなつて失せ給ふ。此の光明に照らされて、蟬丸の御兩眼くわつと開けて、「これは〳〵。」と宣へば、君臣上下おしなべて、悦びさゞめき給ひけり。扨小聖に御禮厚く、御夫婦うちつれ還御ある。御子孫繁昌國繁昌、千秋萬歳萬々歳、盡きせぬやどこそ久しけれ。

蟬丸　終

には陰陽の二氣、相和して一氣となり、獨鈷の形とあらはる〻。これを胎子と名付けて、形のはじめ理のつぎにて、藥師如來の請取りなり。三月めにいたつては、人倫の本身わたくしなく、始めて一念きざす。天竺の釋迦牟尼如來は佛といひ、唐土の聖人は明德と名づけ、我が朝にては神慮と仰ぐ。名づくる所はへだたれど、三教一致は、やこの〳〵、ハッア〳〵この〳〵三鈷の形、文殊菩薩の請取りなり。はや四月めは、地水火風の五輪悉くつらなりて、仁義五常の五鈷の形、普賢菩薩のまもりなり。扨五月に及んで、六根手足をさいしき、五體殘らず連續す。此の時より、その體に守本尊定まりて、付添ひめぐる腹帶や、地藏菩薩の請取りなり。六月になれば、好むところ欲する所自然に生じ、母の乳房にくひつきて、親の乳を吸ひ取る事、およそ三石六斗なり。則ち大悲觀世音これを守らせ給ふとぞ。扨七月に至つては、忝くも御佛は、三世の因緣壽命をかんがみ、扨こそ人間一生に、めぐる因果の小車の、輪の輪寶にきざみ付け、頭にかづけたまふとかや。彌勒菩薩の請取りなり。八月めに及んでは、阿閦菩薩の守にて、輪寶變じて胞衣となる。九月には成長し、意念ある故、法界の惡魔惡靈、毒氣を吹き入れ吹きかけ注ぎ込み、此の界に出生せば、己が魔道へ引き入れんと、隙間を狙ひ窺ふなり。父母の所行所念に引かれ、善をなせば善人、惡をなせば惡人と成り、極樂地獄の界ぞとて、産神を定めおき、勢至菩薩の守なり。十月は愛染明王。されば六道四生二十五有の其の中に、人

宇治の網代木日をかさね、今日滿願の大法事、宮御夫婦は願主にて、壇の左右に著座ある。大君行幸なりければ、洛中近國かくれなく、信心の參詣は、老若男女貴賤都鄙、袖を列ねておびたゞし。かくて安居院の小聖は、役の行者の跡をつぎ、胎金兩部の峯をわけ、七峯の露を拂ひし篠掛に、不淨をへだつる忍辱の袈裟、知行おとらぬ御弟子達、左手右手に相具し、壇上にさしかゝり、先づ加持の讃をぞ誦せられける。「謹上再拜々々、敬つて申す、魂鎭め。それ無漏無上の法界には、自他の念更になし、悟る時んば十方空、迷ふが故に三界常、喜怒みだりに起つて、哀樂これが爲に止む事なし。花と見よ、雪と見よ。龍田の錦、吉野の雲、うつゝなければ夢も結ばず。水たまらねば月も宿らず。今ひるがへす幣帛に、阿字本不生の風を招きて、迷妄の闇をはらさん。そも／＼行者が修法といつぱ、初七日は曼陀羅供、二七日は放生供、三七日には龍女成佛水施餓鬼、四七日は光明供、五七日は妙なれや法華懺法、六七日、法要の趣理三昧、今月今日七々日の大結願と申すには、妊婦安平子安の法、今の御法に仇を忘れて、擁護の眥を廻らし給へ。」と、懷胎十月の十相を、語り給ふぞ殊勝なる。先づ初月は一氣體中に孕まれ、其の形あたかも鷄卵の如し。これ本來一とくの精水、かたちに取つては混沌未分、名にとつては太元大素、神道にては國常立の尊とまうし奉り、漢儒は天の生民を下すと云ふ。佛法にては本有の毘盧遮那、不動明王の請取りたまひて、本來の空の一物これとかや。二月め

有るべきとは存ぜず、御顔面を拜せんと、勇み歸りし甲斐もなき、定めかたなの世の中や。」と、人目もわかず聲を上げ、くどき立てゝぞ泣き居たり。「實に道理ことわりや。」と、各袖をぞ絞らるゝ。稍あつて千手太郎、「ア、歎くまじや候。親兄弟が命を捨てしも、君を御代に立てん爲、敵を討ちて候上は、唯父母が孝養には、君御出世の御訴訟こそ有らまほしう候。」と、涙を止め申しければ、清貫聞きも敢へず、「我々もさは存すれども、先々月より直姫御懷妊の兆候故、取紛れ延引せし。いざ急に奏聞せん。」と、評議とり〳〵なる所へ、姉宮搖ぎ出で給ひ、「千手太郎とは御身の事か。忠義感じ入つてこそ候へ。妾は逆髮とて、蟬丸の姉なるが、因果の不具に髮倒に生えし故、父帝にも嫌はれて、かかるわびしき住居ながら、これは過去の因果なれば、祈るべき力なし。又蟬丸の盲目は、嫉妬に命をうしなひし、北の方の一念、現世の報いばかりなり。殊に直姫懷妊とや、彼の恨みにて生まるゝ子も、不具ならんは必定。もと北の方に仇もなければ科もなし。安居院の小聖を請じ、宇治川にて七々日、魂鎭めの法事をなし、彼の亡魂をなごめなば、蟬丸の目も開け、直姫の平産も、氣質美麗の男子ならん。とく〳〵。」の宣へば、「皆尤も。」と同じつゝ、小聖に御使者あり。都の辰巳思ひ立つ日を吉日とぞ三重開白ある。

懷胎十月の由來

の鞦鞍壺かけて突きければ、馬は堪へずがつぱと伏す。早廣下り立ち、「心得たり。」と、太刀を合はせて防ぎしが、一念の鉾先岩を劈く勢ひに、左の肋を貫かれ、仰向に返せばつつと入り、取つて引伏せ馬乘にどうど乘り、「親の敵諸人の仇、年來の恨みおもひ知れ。」と、三刀四刀さし通し、「えゝ嬉しし心地よし。」と、嬉し泣に泣き居たり。「先づ母上に悦ばせ奉らん。」と、首かき落し槍に貫き振擔げ、蟬丸のおはします一條大宮逆髮の館へ、飛ぶが如くに急ぎける、心の中こそ三重嬉しけれ。案内にも及ばず、「千手太郎忠光、敵早廣が首取つて參りし。」と、大音揚げて呼ばはれば、希世淸貫宮御夫婦、「これは〱。」と走り出で、「扨もお手柄〱。」と勇み悅び給ひけり。此の年月の難行、又下り松にて餓ゑに及びし時、亡者に供へし供物にて、餓ゑを凌ぎし有樣具に語り、「母に申して悅ばせん。早々逢はせて給べ。」と申せば、人々は涙ぐみ、兎角の事も宣はず。「こは心得ず如何なる仔細ぞ。聞かさせ給へ。」希世淚を止め、今更語るも便なきながら、御老母の御事は、「二十日程以前より風の心地と候ひしを、醫療手を盡せし甲斐もなく、一昨日の暮方に、終に果敢なくなり給ふ。只今の物語、亡者の供物を食せしとは、それこそ御老母の供物よ。」と、語りもあへぬに忠光は、「はつ。」と許りに伏し轉び、聲も惜しまず泣き居たり。心の中こそ無慙なれ。いとゞ涙にくれながら、「扨は亡母の供物にて、我が渴命を繫ぎ本望を達せしかや。草の陰まで子を思ふ母の一念通じたる、親子の値遇の有り難さよ。かく

淨土なれば、心外無別法卽心成佛、とりもなほさず居もなほらず、十方偏照の光明を放ち、金色の蓮臺に駕せられ、一瞬刹那がそのあひだに、たちまち安養無垢世界、不退快樂の都に至らん。何疑ひの有るべき。」と、※四とん八辯流るゝ如く、語り給へば往來は、皆々禮して通りけり。右大辨早廣は、丹波の方へ落ち行かんと、編笠引きこみ驛馬に乘り、白川越に來りしが、傘にや恐れけん、早廣が乘つたる馬俄にけしとみ跳ね上り、鞍を放れてどうど落つる。早廣怒つて、「これ願人奴、馬上にも用捨せず、傘をひらめかし、落馬させつる奇怪。」と、笠取つたるをきつと見て、「ヤア親の敵早廣か。千手太郎知つつらん。」と、傘の轆轤を拔けば、長柄に槍を仕込うだり。「餘さじ」と飛び蒐れば、「南無三寶。」と馬引き寄せ打乘り、鞭を當てて歩まする。「卑怯者臆病者、返せ〳〵。」と聲をかけ、息をもつかず追つ驅けしは、只韋駄天の如くなり。半道ばかり追つかけしが、馬の足並早廣に、十四五丁さがり、松の木陰につつ立ち、又驅け出でんとしけれども、一足もひかればこそ。野山に伏したる千手太郎、二三日五穀を食せず、咽渇してよろ〳〵と、「エ、冥加に盡きたり口惜しし。」と、齒嚙みを爲して立つたる所に、誠に天の與へかや、死人に供へし枕づけの供物、松の元に棄ててあり。「有り難し幸ひ。」と一口にぐつと食ひ、一ゆり搖つて力足を踏んだれば、金剛力士の如くなり。「さあ千里萬里も一飛び。」と、又かけいだし 三重 行く水の紙屋川にて程なくおつつき聲をかけ、馬

世の中は、兎にも角にも假の宿、笠一本に起き臥すも、身の程隱す我が庵と、墨の袂に角頭巾、經論少々懐中し、父の敵を狙ひゆく、瞋恚に我は迷へども、人を導く六道の、辻談義こそ殊勝なれ。誠に淺ましいかな、歎かしいかな。今日の衆生一生造惡不斷、煩惱の塵に交はり、朝に怒り夕に悦び、貪瞋癡慢の色香に迷ひ、假にも佛法と云ふ事を知らぬ、愚かなるかな。妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者と申して、現世にて寶の山を築かせ、子孫奴にかしづかれ、花に詠じ月に嘯き、無上の榮花を極むるといへども、一息切斷臨終の嵐に、貪慾私慾の火の車、業障の雲に轟き、誘ひ行く時んば、日頃の下人も從はず、金銀衣服も身につけず、無間奈落に眞倒さまに墮つること、三つ羽の征矢よりいと早し。財寶は地獄の家苞、名聞は焦熱の爪木とも譬へたり。扨如何がして各々、我等佛にはなるぞと申せば、有り難い事の、化城喩品に曰く、大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道。此の文の心は、一心の外に佛法なし。一心の外に成佛なし。されば愚癡無智の凡夫、心の外に佛を求め、穢土の外に淨土を求め、かへつて迷ひの種と爲す。これを和げ、傳教大師の御歌に、悟りとて外に求むる心こそ、迷ひそめける始めなるらん。又天台の釋文にも、法華彌陀眼目の異名とて、釋迦と阿彌陀は、譬へば目と云ひ眼と云ふが如くにて、一佛異名同一體、心の外に來迎なし。ゐながら爰も蓮華道場、寐ても佛覺めても佛、立つても佛居ても佛、行住坐臥一心不亂に念佛せば、己身の彌陀唯心の

し、長追ひに力盡き候を、火水の底もと存ぜしかど、母が有樣氣遣はしく、無念ながらも打ち洩らしとつてかへし候。幸ひかな此の上は恐れながら母を君に預け參らせ、心身輕くし罷り出で、敵を討つて歸るべし。早お暇。」とぞ申しける。清貫聞きも敢へず「オ、すゞし勇ましし。御老母は我々あづかり、都一條大宮に、逆髮の姫宮とて、蟬丸の御姉宮おはします。君諸共に此の方へ、伴ひ忍ばせ奉らん。これ此の袈裟衣は、某が著用して、君に巡り逢ひ奉りし、吉左右目出度き衣なり。貴殿に讓り申すべし。修行者に樣を變へ、狙ひ寄つて本望遂げ、目出度く歸洛せられよ。」と、各門出祝はるれば、「オ、有り難し忝し。此の衣を賜はつて、姿は墨にやつすとも、心ばかりは染め殘し、彌陀の利劍を提げて、譬へば敵翼を生じ、梢をかけり波を潛つて、新羅百濟高麗國、支那天竺に到るとも、乾坤を出でずんば、よしや五年が十年も、命終らば一念の、魂殘つて本望遂げ、目出度く歸つて母者人、御笑ひ顏見申さん。」「オ、御身が笑ひも見せて給べ。」「お暇申す我が君樣。」暇申して母上さま。各には老母が事頼み存ずる。」「オ、〳〵〳〵おさらば。」「さらば。」と出でて行く。花はみ芳野人は武士、響は雲居に薫りける。

第五

立つ身の皺に、痩せて色香も無かりけり。宮もあきれてましませば、三位いよ〳〵當惑し、「今朝程宿を出でさまに、たしか姫君を入れ置いたかと存ずるが、取違へたか知らぬまで。」と、眉を顰めて居たりけり。痛はしや蟬丸は、御淚をはら〳〵と流し、「我この姿となる事も、彼の姫故と樂しみしに、情も戀も覺め果てし、天魔の所爲か冥罰か。」と、御愁歎こそ道理なれ。老母は聲を聞き覺え、御顏面をも思ひつき、「なう宮樣か蟬丸樣か、お懷かしやゆかしや。」と、縋りつけば、「ア、煩さ、免せ〳〵。」と彼方へ逃げ此方へ隱れ、百歲に一歲足らぬ九十九髮、もてあつかはせ給ひけり。「オ、御尤も〳〵。名を申さずば、御見忘れ候べし。妾こそ君が爲早廣に討たれし、千手入道が後家、忠光が母にて候。」と件のあらまし語らるれば、「實に〳〵夫れよ珍らしや。これは〳〵。」と手を打つて、「一先づ不審は晴れしかど、直姫の行き方なし。」「最前の騷動に、敵や奪ひ取りつる。」と、未だ氣遣ひ堪へぬ所に、淸貫喜藤太姫君を誘引し、「宮に出逢ひ奉らぬは、道こそ違ひつらめ。」とて、舊の庵へ歸らるれば、「こは淸貫か。」「我が君か。」「それよこれよ。」と寄り集まり、泣きつ笑うつとり〴〵に、語らひどよみ給ひけり。然つし所へ千手太郞、薄手少々受けながら、大汗になりて馳せ歸り、人々を見るよりも、はつと驚き嬉しさに、左右の言句も出でばこそ、夢かと思ふ氣色なり。各一度に、「やれ〳〵、千手か、忠光か。事の首尾は、御老母の物語にて承る。して先づ敵は討ち止めしか。」「さん候。敵は大勢と申

所存の程こそ道理なれ。時しもあれ志賀の里にて、早廣をつけいだし、「さあ今ぞ日頃の運試し、天の與へあら嬉しや。」とはやれども、見れば敵は大勢にて羣り來る。「老母を何處に置くべきぞ。エ、屈竟の庵室、御免。」と言ひ捨てつつと入り、持佛の下段の戸を押開け、母を忍ばせ奉り、「あら心安や此の上は、腕限り太刀限り。」と、身繕ひする所へ早廣主從七人にて、「博雅の三位が庵とはこれならめ。ほつ込んで討ち取れ。」と云ふ程こそあれ、我先にと亂れ入る。忠光戸口に立ち塞がり、「千手太郎見忘れたか、おのれをこそ尋ねしに、神佛のあてがひ、能くも爰へ來りしな。親の敵覺えたか。」と、無二無三に切つて懸れば、先を取られて動顚し、おびえてさつと退きしが、踏み止れば打ちかけ、取つて返せば切りかけ、打ちかけ／＼息をも續がず、逃ぐる敵におつすがひ、粟津が原へぞ三重追つ驅けける。かくとは知らで博雅の三位、蟬丸の御供して、清貫とは道違ひ、麓の田面下向道、己が庵に歸りける。蟬丸仰せけるは、「誠に師弟の因とて、此の度の忠節淺からず。」と宣ふにぞ、「かかる御用に立つ事も生前の本望、先づは姫君さぞ御寂しく御心も盡きぬべし。」と、佛壇の戸を開け、御手をとりひきいだせば、「ヤアこれ何ぢや。」七十有餘の老女、頭の雪もみつはぐむ、老いさらほひて出でてける。三位はつと飛び退けば、宮も驚き、「やれ何事ぞ、氣づかはし。」「さん候。姫君俄に白髮の姥となりたまふ。今の間に年の寄るは合點參らず。これ御覽ぜ。」と御手をとり、肌を撫づれば骨荒れて、老いの波

てて、「あら心よや、今一つ。」とさし出す。清貫も滑稽者、「腸持の梵妻殿、ちと拜み奉らん。」と、其の手を取つて引出し、能く／＼見れば直姫なり。「扨は御身は清貫か。」「なう姫君か。」と手を打つて、互にあきれおはします。されども清貫不審晴れず、「何とて爰には御入り。」と、問へば直姫聞き給ひ、「さればとよ此の處は博雅の三位とて、宮御琵琶の弟子なる故、扨妾諸共これに忍びまします。」と語り給へば、清貫悦び、「宮は何所に渡らせ給ふ。御目見得致したし。」「オヽ、宮は御出世の御祈誓に、坂本の山王へ日參遊ばし、今日も三位を御供にて、御參詣候が、おつつけ歸らせ給ふべし。」と、宣ふ所へ喜藤太立ち歸り、清貫をきつと見て、「彼奴も盜人の同類か、油斷は爲ぬ。」と鎌取りなほすを、姫君御覽じ、「やれ喜藤太。あれは宮の御乳人清貫と云ふ人なり。おことは氣ばし違ひたるか。」とのたまへば、「ム、扨はさうか御免々々。拙者は山にて強盜に逢ひし故、扨只今の仕合。」と、有りし次第を語りける。清貫つく／＼聞き給ひ、「否々これは盜人ならじ。早廣にうたがひなし。大勢催し此の處へ押しかけんは必定。垣一重の庵室に、長袖足弱過ち有らば後悔せん。いで山王まで姫君をも御供し、宮をも誘ひ奉り、一先づ都へ登るべし。それ喜藤太御手を引け、暮れぬ前に。」とゆふ浪の、鳰の海邊を濱傳ひに、坂本さしてぞ急ぎける。爰に又千手太郎忠光は、父入道を早廣に討たせ、其の無念晴れやらず。老いたる母を肩にかけ、親の敵早廣を、是非一太刀と心懸け、野山に起き臥しつけ狙ふ、

げ落ちける。喜藤太もこれまでと、元の所に立ち返り「エ、何でも無い奴等に逢ひ、あつたら汗を流せし。」と、柴に棒さしかき荷ひ、鼻歌謡ひ悠々と、志賀の里へと歸りける。左衛門督清貫は宣旨とはいひながら、御幼少より仕へにし、宮を山野に捨て參らせ、あぢきなき世にすみ染の、袂にやつし國々を、修行念佛他事もなし。されば古郷忘じ難し、宮の御上如何ぞと、都に歸る漣や、滋賀の浦にぞ着き給ふ。古き都の所がら、花ちる里の藁圍ひ、檜垣透垣さゝやかに、いと故づける庵あり。立入り見れども主人はなし。持佛の香華細やかに、持經禮讃繕はず。本尊も昔覺えたり、如何なる遁世者の住家ぞや。世をいとふ身は誰とても、斯くこそあらまほしけれ。住持の歸さを待ちうけ、一夜語りて通らばやと思ひ、緣に腰かけ待ち居たり。時に佛壇の下より、女の聲にて「申し〳〵。」と呼びかくる。はつと驚き見てあれば、忍びやかに戸を開けて雪の樣なる手を出し「やよこれ水一つ給べ。」と云ふ。大道心の清貫も、これぞ化生の業ならめと、膝わな〳〵と震ひしが、エ、不便や、餓鬼道に迷ひし幽靈ござめり。これぞ出家の役と觀じ、器物に水を入れ「下給三塗飢渴飽滿、南無阿彌陀佛。」と差出し、ちやくと手を引き退りしが、又恐々立ち寄りてそつと覗けば、弓矢八幡艷やかなる女房なり。「ム、さては御坊の梵妻よな。いやはや浮世に拔目はなし。誰かは知らねど此の庵の濡れ坊主、所こそ有れ佛壇に、女寢させてさゞめごと。」思ひまはせばをかしくて、獨り笑うて居たりしが、又聲立

廣か。」「否々天狗の笄ならめ。」と、様々見立て笑ひける。時に向うの岡邊より、若き樵夫のこれを見て、「やれかた〲。それは此の山に捨てられましませし、蟬丸樣の琵琶の撥といふ物ぞ。賤しき者の用には立たず、我にくれよ。」と言ひければ、「ム、して又お事は何にか爲る。樣子によつてやらん。」と云ふ。彼の男聞きもあへず、「ォ、某は彼の志賀の里に、世を逃れ住み給ふ、博雅の三位と申す人の、一僕喜藤太といふ柴刈なるが、主君博雅の三位殿は、蟬丸さまの琵琶の弟子。其の由緒にて此の間、蟬丸樣御夫婦共に、旦那が庵に入り給へば、捧げ申すに是非々々所望。」と云ひければ、「扨はさうか。持つても用なし勿體なし。」と、與へて皆々通りけり。早廣とつくと聞きすまし、郎等に眴せ、喜藤太を四方よりばら〱と取圍み、「これ〱汝が主人三位の庵に、蟬丸のおはするとや。さあ案内して連れて行け、否といはば踏みころさん。」と、かさをかけてぞ申しける。喜藤太ぎよつとせしが、打ちうなづき、「ム、聞えた。うぬめ等は强盜よな。ヤイサおのれら氣色すればとて、主の家の盜人の引き入れがなるものか。下郎と思ひ侮るな。四も五も食ふ男でなし。足手息災な内、早々歸れ。」と怒りける。早廣怒つて、「それ引立てて案内爲せよ。」「承る。」と下人ども、飛び懸れば取つて投げ、取りつけば踏み倒し、朸取りのべ打つてかかる。早廣も拔き合はせ、二打三打働きしが、山路に馴れたる荒男、岩とも谷とも言はせばこそ、猿より輕く驅け廻れば、さしもの早廣詮方なく、轉びころんで逃

響きて、菩提の道も暗からず、悟りの夜半も明け渡る。兩眼は暗くとも、汝心月明らかなり。和歌の妙を授けん爲、我は人丸、我は赤人、二人の魂魄はれ出で、共に成佛得脱の、兜率に生まれん嬉しき。」と、言ふ聲ばかりは逢坂山、言ふかと思へば逢坂山の、杉の嵐に立紛れてぞ失せにけり。蟬丸、「あつ。」と感歎あり。「夫れ日の本は神國の、和歌を以て道とせり、歌仙の靈魂顯はれ出で、詞を交す其の奇特、未だ天道捨て給はず。」と、感涙袖を潤して、「さて直姫に逢ふ事も、神の授くる緣ぞ。」と、各夢かとたどられて、猶信心の和歌の道、古き例に踏み分けて、打連れ山路に歸らるゝ。夫婦不思議の契りとて、二度めぐり逢坂山の、名歌は今に殘りける。

第四

右大辨早廣は千手入道を討ち滅ほし、都の住居もなり難く、遠國にさまよひしが、「兎角我が身上の敵は蟬丸なり、是非に恨みを晴らさん。」と、下人等一兩輩召し連れ、逢坂山の谷峯を、草を分けて尋ぬれども、宮の行方は無かりけり。後は小關藤の尾や、かかる山家も住めば住む、奥の柴人友呼び交し、「これ〳〵逢坂山にて不思議の物を拾うたり。抑何といふ物ぞ。さあ推當に言うて見よ。」と、琵琶の撥をぞ出しける。山賤ども集まりて、「姿は銀杏の葉の形にて、さても合點ゆかぬ物。これは猿の末

の悲しさは、傍にありとも知り給はず、獨りごちたき聲を上げ、歎き慕はせ給ふにぞ。今は堪へかね心消え、「直姫爰に。」と云はんとすれど、稚兒達、「暫し。」と留むれば、絶え入り消え入り伏し轉び、身を悶へてぞあこがるゝ。神ならぬ身は是非もなし。稍あつて蟬丸、琵琶も撥もからりと捨て、「南無三寶叶はぬ事に迷うたり。逢ふは別れの始め、獨り止まる道ならず、色も匂ひも一盛り。ア、思ふまじ歎かじ。」と、一首の歌にかくばかり。「これや此の行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關。朝に、別れ夕暮に、逢坂山の旅人の、往來も夢のすさみぞや。雨降らば降れ風吹かば吹け。山の奥こそ住みよけれ。エ、浮世の無常。今ぞ悟りの花開けし。」と、走り出でんとし給へば、人々岸より飛んでおり、「これ直姫よ。」と縋りつく。宮も「これは。」とばかりにて、互に手をとり袖をとり、戀しゆかしの物語、盡きせぬ物は涙なり。心ぞ思ひやられたる。時に兩人の稚兒達詞を揃へ、「如何に蟬丸、御身色を重んじて、思ひに絆され情に沈み、數多の女を迷はせし、因果の霞心を暗まし、盲目となり給へども、今の悟りの詠歌面白く。三十一文字の表に旅の姿を列ね、裏にはすなはち會者定離愛別離苦の理、逢ふは別れの始めと示し、一首に三世を顯はせり。神も心もたをやぎて、佛の教へに逢坂の、あの關寺の鐘の聲、煩惱の夢を覺すや、法の聲も靜かに、「先づ初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり。晨朝の響は生滅々已、入相は寂滅爲樂と

せ給ひける。姫はあれよと見るからに、「契りし人か淺ましや。」と、縋り寄らんとせし所を、稚兒達押へて、「ア、音高し、人音すれば逃げ隱れ給ふ故、物言ふ事は叶はずとこそ、最前より申しつれ」ただ音せで。」と有りければ、姫は詮方なみだに曇る、鏡の影か我が戀は、逢ふとはすれど物云はぬ、我が山梔の色香をも、見ずや知らずや淺ましや。」と、聲をも立てず忍び音に、むせかへりてぞ泣き給ふ。宮はかくともしら絲の、琵琶取り出し、盤渉を平調に調べ換へ、「やよや待て天津鴈がね言傳てん。古郷の秋は如何ならん。我は深山に住み侘びて、琵琶より外は友なし。」と、撥をあげ給ひし時、風が持て來る村雨の、紅葉遲しと夕時雨、一むら颯と降り來れば、蟬丸琵琶を濡らさじと、此所の木の下彼所の木陰、濡れても寢んと詠ぜしは、花に戯れし歌の體、我は又瞎の男が〳〵、被ぐ袖笠肱笠の、雨に木の葉も亂るゝ初時雨、彼方へ走り、此方へ走り、ざらり〳〵ざら〳〵ざつと、驅り彷徨ひ身は濡れ衣木陰なければ、雨もたまらず。人々見る目も痛はしく、すこし小高き岨陰より、笠をそつとさし懸くれば、宮御耳を敧てて、「不思議や雨は降りながら、身にかゝらぬは木陰よな。口惜しや古は、一夜泊りし宿までも、錦の褥綾の牀、垣に金花をかけ、戸には水晶を列ねつゝ、鸞輿屬車の玉衣の、隙間の風も厭ひしに、かくあさましき苔蓆、しくともしかじ世の中よ。思ふ人とし片敷かば、玉の臺も愚かしき。かくとは知らで直姫が、哀れ何とか暮すらん。戀しの昔や、忍ばしの直姫や。」と、盲目

まりて語られよ。平に〳〵。」と申さるゝ。彼の女顏打ちあかめ、「恥かしながらみづからは、此の山に捨てられおはします蟬丸樣の思ひ者、直姬と申す者なるが、御行方の懷かしく、これまでさまよひ候へども、御在所も定かならず。人に尋ねて候へば、御身の不具を恥ぢらひて、人に面を合はせじと、山深く入り給ひ、今は生死も知らざると、聞くより浮世の賴みも切れ、此の淸水をば三瀨川、逢瀨を急ぎ候ぞや。早々死なせ給べかし。」と、又さめ〴〵とぞ泣き居たる。稚兒達聞き給ひ、「扨痛はしや我我は、此の關寺の稚兒なるが、山蹈みの行法に、御在所は存じたり、よそながら見せ申さん。さりながら人音すれば逃げ隱れ給ふ間、必ず聲ばし立て給ふな。唯御姿を見るまでならば、いで〳〵案內申さん。」と、夕の雨にさす傘や、空も淚も定めなき山路なるらん。第一第二の絃は索々として、秋の風松を拂つて疎韻落つ。第三第四の宮は、我が蟬丸が調べも四つの、折柄なりける村雨かな。流るゝ水のあはれ世の、其の理も目に見えぬ、月の入るさも知らざれば、夜晝分かん方もなく、谷の梟閑子鳥、梢を渡る鼯や、何を恨みて猿鳴く。落葉衣に露重く、月を擔ふに肩瘦せたり。移れば變る哀れさよ。されば夕日のめぐる方をこそ、都の空と招く手に、其方の嵐懷かしく、又森々たる野分に琵琶を彈じては、過ぎし寐覺の忘られず、鹿の妻こふ聲までも、御身の上とあぢきなし。眞析の蔓青つゞら、來る人ありとも知りたまはず、槇や柏を押分けて、杖が枝折の岨傳ひ、よろぼひたどら

世にて因果を果し、後世を助けん御計策、これこそは親の慈悲。捨て置きかへれ。」と宣へば、二人は彌涙を流し、「此の御有様にては、盜人の恐れあり。御衣を賜はつて簔を參らせ候はん。」「ム、これは雨による田簔の島と詠ぜし簔か。」「さん候。雨露の爲なれば、同じく笠をも參らする。」「これはみさぶらひ御笠と詠みし物よなう。」「又此の杖は御道案內。」「實に〳〵これも突くからに、千歳の坂も越えなんと、彼の遍昭が詠みし杖か。」「夫れは千歳の榮ゆく杖。」「爰は所も逢坂山。」「關の藁屋の竹柱」「かかる浮世にあふ坂の、知るも知らぬもこれ見よや。延喜の王子の成り行く果て、こはそも如何なる例ぞ。」と、聲を上げてぞ泣き給ふ。宣旨なれば人々も、名殘の袂振切つて、涙ながらに歸らるる。王子は跡に唯一人、琵琶を抱きて竹の杖、伏し轉び〳〵、「さらば〳〵。」「さらば。」の聲許り、梢の木魂山彥を、せめてそれかと力草、分けて山路に入り給ふ、桂はみのる三五の暮、名高き月に逢坂の、關の清水と聞えしは、江州一の名水なり。されば關寺の稚兒達も、これを佛の閼伽桶や、柄杓の露の玉襷、月を汲まんと秋に澄む、清水が許に出でらるゝ。時に柳の木隱より、若き女の走り出で、石を袂に拾ひ入れ、「南無阿彌陀佛。」と云ひ捨て、既に清水に飛び入る所を、稚兒達引留め、「放生第一の靈水にて、捨身思ひもよらず。」と有れば、「いやとても存へ果てぬ身ぞ。御慈悲に見逃して死なせてたべ。」と振り放す。これ〳〵、左程思ひ詰めしには仔細こそあらめ。品によつて兎も角も、先づしづ

つ、なう四つ五つ、「五文字は、歌の中山誓願寺、彼の神垣の年古りし、天の帝の御廟野より左手の山の岡の邊。」と、御手を取つて教ふれば、宮は左右の言もなく、世々の日繼の天津君、民を惠みの言の葉の、露の流れ汲みながら、成り行く果ての淺ましや。」と、御涙せきあへさせ給はねば、清貫希世心なき牛も、尾を伏せ角を伏せ涙を流す有樣に、草木も哀れ催せり。秋の田の刈穗の原や風落ちて、賤が手枕寢亂れし、かみ干す布干す又稻も刈り干す、我は袂の乾く間も、ないそな泣いそ澤邊の蛙、かかる思ひはよも知らじ。紫竹交りの藪の下、春の緣のさいたづま、小笹姬笹行く袖に、蓑著て通へ。笠著てまたかよへ。涙の雫雨まさり、雨にはあらでや、これの木々の〳〵木の葉が、はらりほろり、はら〳〵〳〵と風に諸羽の宮所、今日を限りと伏し拜み、上り下りの旅人も、心々に今宵しも、誰が誰と伏見の山見えて、彼の黃昏の私言、今日に浮ぶ種ぞかし。急ぐとすれどとけしなき、牛の玉鉾遲くとも、心の駒は日に千度、戀しき方に走井の、水櫛の齒もよしやよし。何時を賴みに東つけん。我が黑髮のさね葛、逢坂山にぞ著き給ふ。清貫希世兩卿は、宮を木陰に下し參らせ、「宣旨默し難く、これまで供奉せしめ候へども、何處に捨て置き申すべき。さるにても我が君は、堯舜以來の賢王とは申せども、現在御子を捨て給ふ、叡慮如何なる事やらん。」と、涙にくれて申しけり。蟬丸聞召し、「あら愚かや人々よ、前世の戒業拙くて、盲目となりし故。されば父帝の御情なきには似たれども、此の

きものを、況してや我が親心、身にも換へまく思へども、過去遠々の悪業は、十善王位も逃れずと、萬民に知らしめて、天下の民を悉く、佛の道にいれん事、廣大の慈悲ならずや。子のいとほしきは盡きせねど、國を育む我なれば、國民には換へ難し。かまへて汝ら露程もいたはらば、却つて仇となるべきぞ、疾く／＼山に捨て置くべし。果敢なの浮世や淺ましの人界やこと、御冠の巾子を傾けて、御涙せきあへさせ給はねば、八省百官諸共に、各袖をぞ絞らるゝ。清貫希世兩卿も、力なく／＼退出ある。世のならはしぞ三重定めなき。

蟬丸道行

結ぶの神も僞りや、何時の月日に結び初め、寢初めし夜半の夢消えて、縁さへ薄きから衣、御いたはしや蟬丸は、何の報いか浮世の闇、戀慕の闇の暗がりに、引出す牛は昨日かけふ、御幸の車引きかへて、野飼にやつす綱手繩、御身に添ふる物とては、玄象の琵琶一面、清貫希世御供にて、萎れ出でさせ給ひける、御有樣こそ哀れなれ。秋されば／＼、月の障りと泣き歎きつる、東の山を越え行けど、今盲目の御身には、何の光もみづ鳥の、賀茂の河岸波越えて、契りも末の松坂と、消えばや爰に粟田口、秋未だ若き山々に、忍び／＼の初紅葉、誰に著よとか錦織るらん。折々に花鳥風月の戯れも、ともに散り行く花の山、鐘こう／＼と仄聞え、御心細き時しもあれ、己が夕の牀急ぐ、妻こひ鳥二つ三

ゆし頼もしし、前代未聞の勇士やと、扨は文にも殘し留めつる。

第三

早廣が惡逆故、宮は虎口の御命まぬかれ、清貫が計らひにて中納言希世の館におはせしが、或時清貫希世參內あり、「扨も蟬丸の宮、往時五月の頃より、御眼病例ならず、唐の大和の藥を以て、醫療手を盡し候へども、元來宮の御事は、美男目出度くましします故、數々の女の思ひ嫉妬の恨み、御一身に逼り、醫術の及ぶ所ならず、遂に御兩眼盲ひさせ給ひ、蒼天に月日の光なく、闇夜に燈火影暗き、盲目の御容、力及ばず候。」と、詞を揃へ奏せらる。天皇はつと御氣色かはり、御落淚ましませしが、「誠に朕が第四の宮と生まれ、十善の位をもしるべき身が、生まれもつかぬ盲目となりし事、よつく前世の惡業深きゆゑ、五體不具にして佛にはなり難し、況んや此の世さへ、暗きに迷ふ盲目の、未來の闇も痛はしや。」と、やゝ御淚に咽れ給ふ。「よし〳〵此の世にて、諸人に恥を懺悔して、業障を果し後世を助くるいとなみ、逢坂山に捨て置くべし。」と、綸言あるこそ哀れなれ。兩卿詞を揃へ、「宣旨にては候へども、賤山賤さへ不具なる子はいとほしし。況んや一天の若宮を、山野に捨てさせ給はん事、且は仁心薄きに似たり。」と、恐れ入つて申さるれば、「いやとよ生きとし生けるもの、子を憐まぬはな

と、痛はしや御老母、二歳の若君諸共に、唯一太刀に害せしは、目もあてられぬ次第なり。」エ、天道知らずの人畜奴、一人ものがさじ。」と、枕長刀おつ取りのべ、四十餘人を左手にうけ、右手に支へて戰ひけり。千手太郎が手に懸けて、十六人とめければ、入道が長刀に、八人懸けてぞ捨てける。殘る者も深手を負ひ、颯と引いては又驅け入り、二三度四五度揉み立てし、千手親子聲をかけ、「清貫は果せぬか。宮を御供申されよ。跡を構ふな〳〵。」と呼ばはれば、「尤も。」と清貫、宮を負ひ參らせ、「己が館に落ちらるゝ。其の隙に早廣、後の垣を押し破り、直姫を引立て大地に踏みつけ、拜打に振り上ぐる、「南無三寶。」と入道、横間に丁ど受け、火を散らして、切り結ぶ。太郎は父を討たせじと、討つて懸れば入道隔て、「父が命をかばふな。姫君を討たせなば、七生までの勘當。」と、云ふ聲に力なく、母と姫とを兩脇に搔い込うで、上の山へと落ち行きける。入道は面も振らず、追ひ行く敵をふせぎしが、早廣苛つて打つ太刀に、弓手の肩先打ち込まれ、七十一歳春の夜の、敵なき夢とぞ消えにける。忠光、「父は如何ぞ。」と取つてかへして、「ア、口惜しや討たせつる。目前親の敵ぞ。」と、退く敵をかさにのり、蜘蛛手に追つ立て追つ返し、半時許り驅けたりしが、早廣は行方なし。「エ、無念口惜しし。おのれ天地を出でずんば、討つて父に手向けん。」と、僅かに殘る雜人ども、木の葉の嵐磯打つ波、むらむらばつと追つ散らし、父が死骸の薄煙、霞の谷へと分け入りし。父父たれば子も子たり。天晴ゆ

望遂げさせ申さん。」と有れば、忠光悦び、「夫れは何國如何なる者にて候ぞ。」「オ、此の清貫こそ敵なれ。」入道親子仰天し、「一圓に心得ず、何様仔細候はん、承らん。」と、眉を顰めて申しける。清貫涙をはら／＼とこぼし、ありし段々心底を精しく語り「宮此の所にましますとは存ぜず。御行末の仇と思ひ、不便ながらも討つたりし、忠はかへつて不忠となり、仇は情となつたりし、短慮と云ひ麁忽と云ひ、面目も候はず、今は恨みを晴れ給へ。」と、太刀を逆手にずばと抜き、既に自害と見えける時、親子左右に取りつき、「なう清貫殿、我々も侍なり。一家命を拋つ上は、さもしく悔み殘るべきか。大事を抱へてこれしきに死なんとは、狼狽へしか、但しは狂氣か。さあ死なれうば死んで見よ。」と、樣々宥め止むれば、思ひきつたる清貫も、理に詰められて死なれもせず、生きても居られず殺しもならず、三人目と目を見合はせて、涙を流すぞ道理なる。早東雲に及びし時、右大辨早廣、青侍ばらに物具させ、直姫の老母同じく若君奪ひ取り、陣頭に引立て、千手が屋敷を取りかこみ、「御勘當の蟬丸をかくまへし段、逆鱗斜ならず。太平の君が世に、事を好むはしれものなり。とう／＼蟬丸直姫を渡せ。異議に及ばば先づ一番に、彼奴らを殺す。」と、刃を胸に差當て、「さあ返事は如何に。」と、聲々にをめき叫んでよばはりける。忠光親子清貫も、人質にあぐみ果て、左右なくきつても出で難く、如何はせんとひしめきて、兎角時刻延び行けば、「エ、緩慢し軍神の手向草、夫れ突き殺して切り入れ。」

の所爲なんめり、追つ驅けんとはしたりしが、宮の御事氣遣はしく、立ちもやらず居もやらず、蟬丸も直姬も、慌てふためき給ひける。今を限りのばせをの前、宮をつくぐ\見參らせ、苦しげなる息をつき、「ム、夫れなるは蟬丸様、直姬御前とは御身の事か。怨めしや恥かしや。僞り多き御一言、誠と思ひ身を焦し、戀に心を惱まして、有られぬ思ひに狂ひしも、唯一筋に思ふ故。君が戀路の障りならば、思ひ切れとは宣はで、誑り殺さん御計策か、餘りに酷き御心。情の道はさなきもの、なう憎うて人には惚れぬぞや。果敢なの戀に朽ち果てん名こそ惜しけれ。さりながら我が里にお宿を召すも他生の緣、草の陰にて君が爲、惡しかれとは祈らまじ。詞の由緣と思しなば、餘の人千度百度より、君が一度の手向草、露の命は惜しからず。なう父上様兄上様、宮の御事偏に賴み奉る。名殘惜しの母上様。南無阿彌陀佛。」と云ふ聲も、眠れる花の夕の秋、十七歲を一期として終に果敢なくなりにける。親子は夢とも辨へず、縋りついて泣きければ、蟬丸直姬聲を上げ、「さりとては覺えなし。恨みを晴れよ免して呉れよ。不便の者の心や。」と、抱きつき縋り伏し、泣けど叫べど甲斐ぞなき。物の哀れの限りなり。清貫案に相違して、今は堪へかね案内し、斯様々々と云ひければ、「聞き及びし清貫殿か。先づ此方へ。」と請じける。清貫人々に對面し、「甲斐々々しくも御かくまひ、我が身にとつて祝着。」と、禮儀濃かに相述べ、「先づ以て御息女不慮の最期、御愁傷察したり。さりながら此の敵は知れ申す。本

ひ逃げんとす。「ア、〳〵これ〳〵苦しからず。我は田舍の旅人なるが、雨を凌ぎて罷りある。承れば大内方の人樣とや。拙者どもは田夫野人の遠國者、殿上の交際も夢に見た事も候はず、國元の土産に、語り聞かさせ給へ。」とある。ばせを打笑ひ、「田舍のお衆は、何れも左樣に宣へども、さして變りし事もなし、絲竹詩文和歌の道、取別け流行るは濡事。」と、莞爾と會釋し申しける。清貫恍けた顏付にて、「エ、野でも山でも棄らぬは戀の道、定めし上﨟樣も、さうした色候はん、さあ〳〵聞きたし聞きたし。」と云へば、一樹の宿りも他生の緣と、包まず語るうたてさよ。「恥かしながら自らは、禁中一の美男蟬丸樣に思ひを懸け、樣々心つくし舟、引く手數多の殿なれど、さゝの一夜の珠霰、轉び寢んとの約束を、由なき女にさへられ、遂に思ひの晴間なき、淚の雨に身は朽つる。念力岩を通すとの、譬へに僞りなきならば、死ぬるとも生きるとも、此の無念は晴らすべし。エ、面伏口惜しや。や、よしなの問はず語り、穴賢人にな洩し給ひそ。」と、又むせ返りせき上げし、袖は時雨に爭へり。清貫とつくと聞くからに、「なう恐ろしの一念、終に蟬丸直姬の仇とならんは必定、如何なる事をか仕出し、御命に障りあらば、後悔に甲斐あらじ。」と、近頃不便千萬ながら、太刀拔き潛め取つて引寄せ、胸元を刺し通す。「なう悲し人殺し。」と呼ばはる聲に、親子の者門を開き飛び出づる。惡しかりなんと清貫は、篠の小藪にかけいり、しばらく潛みおはしける。母は縋りて悲しめば、入道親子も敗亡し、盜人

け、宮の御手を引き參らせ、おのが宿所に歸りける。既に其の日も暮れ過ぎて、左衞門の督清貫は、蟬丸落ち失せ給ふと聞き、京近邊を尋ね廻り、木幡の里に著きけるが、草鞋切れて行き暮し、村雨しきる今宵しも、宮ましますとも知らばこそ。千手が門の茅葺に、晴間をしのぎ立たれけり。雨にこもれる夜半の鐘、霧の絶間を透し見れば、女姿の振袖も、いと忍びたる氣色なり。木陰に立退き見給へば、彼の女門の扉を忙しげに、「物申さん。」とぞ叩きける。千手親子は、「すは追手よ。」と驅け出で、「夜中の案内何者。」と云ふ。「なうさ宣ふは兄上か父上か。ばせをの前にて候が、傍輩の讒にあひ、御所を紛れ出で候。爰開け給へ。」と云ふ聲に、母は驚き、「扨は我が子か懷かしや。」と、開けんとすれば父の入道、「ア、暫く、大事は油斷より起るぞかし。宮を隱まへ奉り、夜中に門を開かん事不覺の至り。これ〳〵ばせを仔細有つて、夜中に門を開く事は叶はず。今宵はそれにて明せ。明けなば内へ入れん。」とあれば、「こは心得ぬ仰せかな。如何なる憎しみ候ぞ。是非開けて給べ開け給へ。」と、かき口說きてぞ歎きける。「いや〳〵憎しみはなけれども、今宵門を開きては、親兄が侍立たず。仔細は明朝語るべし。はや夜明まで程もなし。これを片敷き明せ。」とて、うちより小袖を投げ出せば、ばせをは力なく〳〵も、衣引被ぎ臥し居たり。清貫ばせをと聞くからに、「彼奴こそ彼の丑の時參りござんなれ。大内の有樣尋ねん。」と、そろり〳〵と傍に寄り、作り聲して、「まうし。」といへば、「ア、恐。」とい

事は是非もなし、見奉ればけしうは有らぬ御有樣、怪しや語りおはしませ。」「オ、我は當今第四の宮蟬丸と云ふ者よ。これなる女は直姫とて、踏みも慣はぬ若草に妻もこもれり。追風の追手も急に來るべし。萬事は賴む。」と宣ひて、又御淚にむせ給ふ。「ハア扨は蟬丸の宮にてましますか、某は千手太郎忠光とて、古はかけ鞍にも乘りし者、殊に某が妹は、女院樣のお末の奉公仕る。然らば大内緣と申し、數ならぬ某を、かかる高位の御賴み、一命も惜しからず。父は千手入道とて、年まかりよつたれども、甲斐々々しき覺えの者、一先づ私宅へ御供申し、仔細は靜かに承らん。いざさせ給へ。」と云ふ所へ、右大辨早廣兵仗二三十、爰彼處と搜索し來り、「彼れこそ蟬丸直姫よ。搦め捕れ。」と喚いて懸る。忠光面に立ち塞がり、「これ〳〵、これ扨方々は追手よな。宮の御誤りはいさ知らず。某は千手太郎と云ふ者よ、苟くも賴まれ參らせし。とう〳〵歸れ。」と呼ばはりける。早廣大きに怒り、「宮は不義の誤り故、召捕れとの敕諚なるが、綸言にたてづくは、扨はうぬめは朝敵か。」と云へば、「いやさ朝敵にもせよ、とん敵にもせよ、武士の一言綸言より重し。賴まるゝと云ふからは、命は君に奉る。惡しくよらば蹴殺さん。」と、力足をどうど踏む。早廣怒つて、「何の二才奴討ち取れ。」と、むらがりかゝるを飛び退り、矢束くつろげ矢繼ばや、差取り引詰め空矢もなく、雨の如くに射かくれば、早廣も叶はじと、皆散り〳〵に落ち失せけり。「オ、さもさうずこれまで。」と、直姫を肩にか

渡岸をたゝき、あら恐ろしや、北の方の遺骸、むつくと起き上り、角はたちまち蛇身と成り、鱗を振ひ炎を降らし、浪を蹴たてて三重捲き上り、鳥居の笠木をくる〳〵、くるり〳〵とひんまとひ、虚空に向つて吐く息は、只火の雨の如くなり。人々これに怖ぢ恐れ、「わつ。」と云うて逃け散れば、大蛇は川瀬に飛び入つて、「生きかはり死に替り、世々生々に恨みを爲さん。あら恨めしや口惜し。」と、云ふ聲ばかりは水底の、そこはかとなく流れゆく。宇治の川霧たえ〴〵に、明け行く空と消えてんげり。恐ろしし、凄まじし、最も果敢なし哀れなり、さて戀路は切なるおもひぞや。

第二

爰も戀路に名を立てし、情の峠程近き、木幡の里の片傍に、千手太郎忠光と云ふ者あり。元來ゆゝしき弓取なるが、いま浪人の身ながらも、飢ゑず凍えぬ芝の庵、明暮殺生を樂しみ、尾花靭に弓とり添へ、今日も狩場に出でにける。深草山のすゞ原より、兎一疋追ひいだし、弓矢取つて打ちつがひ、左手もぢりに放つ矢を、手先下りに射損じて、誰が刈り積みし稻村に、はぶくら込めてずばと立ち、兎は逃れ失せにけり。「弓矢八幡射損ぜし。いで矢を取らん。」と稻引き退くればこは如何に、二十許りの殿上人、二八餘りの上臈の、左の袂に矢を受けて、涙に萎れおはします。忠光はつと驚き、知らぬ

んと、堅き約束候へども、奥樣せいたうつよきにや、お約束も夢となり、一人焦れ死なんより、斯く祈り申す。」と、言ひもあへぬに初めの女、「我こそ宮の北の方、妾を恨むは僻事ぞ。直姫と云ふいたづら女郎ゆゑ、自らも捨てられし。憎い奴は直姫。」と、きばを鳴らして語らるれば、清貫聞けば餘所ならず、肝を潰して居たりしが、ばせを手を打ち、「扨奥樣か。知らでお恨み申したり。戀の敵は直姫一人、いざ打殺し、ともに本意を遂げ申さん。」「オ、尤も。」と、神木に立ち並び、「鬼とも蛇ともなし給へ。」と、肝膽くだき釘取り出し、「これは直姫が兩眼にうつ釘、早つぶれよ。」と丁ど打ち、「これ首の骨胸板、五體腐れ。」とはたと打ち、四十四本の釘の數、筋骨節々つがひ〳〵、打つておもひを晴らせよと、躍り上り飛びあがり、ちやう〳〵はた〳〵丁どうてば、釘目より血ながれて、さしもの大木搖ぐにぞ。清貫もゆら〳〵と、漂ふ舟の如くなり。あまりゆられて目眩き、枝踏み外しどうど落つる。二人は驚き飛んで逃ぐるを、北の方の小腕とつて立ち歸れば、その隙にばせをの前、行方も知らず逃げ失せけり。清貫今は堪られず、「これ御臺樣、人にこそよれ、はしたなき御振舞、明けぬ前にさあお歸り。」と申せども聞き入れず。「人に知られて此の大願、空しかるとも一念は、死して報いを知らせん。」と、戀に浮名やたちばなの、小島が崎は大紅蓮、逆まく水に飛び入つて、哀れ果敢なくなり給ふ。清貫あわて、「松明々々。」と云ふ聲に里人ども松明提灯星の如く、「爰かしこ。」とぞどよめきける。時に小

鐘の物淒き、心にこもる願事に、あまのさかてを打つてうけへば、驗あらなん。あら〳〵恐ろしや、心の角の枝高き、かげろふの森ほの暗し。淺くな明けそ朝日山、山吹のせに影見えて、峯のいなづまちら〳〵〳〵、星の光かァ、螢火か、あこがれ出づる我が魂か、實にや外面似菩薩内心如夜叉、たとへ其の色白くとも、無間の猛火に黑むべく、涙に戀に紅の裾踏みしだき、闇きより女心の倉梯山、ぐら〳〵〳〵〳〵涌き返り、玉ちる川瀨浪の音、梢を渡る小夜嵐、どう〳〵さら〳〵どう〳〵どう、とんどろとゞろと踏み鳴らし、世を宇治橋の橋姫の、宮居を叩き祈りしは、身の毛彌立つ許りなり。清貫今が見始め、何とやら氣味惡く、枝に取付き見る所に、又向うより同じ姿の人影見ゆる。「ヤアこれも丑の時、さて澤山や天狗の所爲か、但し狐や魅しぬ。」と、睫を濡して居たりけり。二人の女も見交して、互にぞつとしたりしが、初めの女小聲になり。「なう和上臈は何人ぞ。」とあれば、「さ言ふ御身は何者ぞ。」「オ、御身にかはらぬ姿なれば、祈りも同じ嫉妬よの。」「されば我も悋氣事。扨も世の中に性のよき男はなし。扨々合うたり叶うたり。いざ立ちながら悋氣講をはじめ、語りてうさを晴らさん」と、先づ傍に立ち寄れば、清貫恐さも打忘れ、急な所の悋氣講と、可笑しさどうも耐られず、ふつと吹き出すばかりなり。「扨も妾は女院のうへわらはは、ばせをと申す者なるが、及ばぬ戀とは申しながら、幼き時より蟬丸樣に思ひをかけ、かくと口說き申せしかば、一夜は思ひを晴らさせ

よる。宮を聟に持つてこそ、一門親類榮花もあれ。兄が鼻までひしぐるか。夫を寢とられ口惜しうは思はぬか。これ證據を見よ。」と誓紙を出せば、北の方披見あり。宮の御手跡紛れなし。くわつとせき立つ顔面に、血筋は眞紅のあみをはり、髪さかしまに立ちのぼり、瞋恚の身ぶるひ齒をならし、「エ、たらされし、口惜しや、恨めしや妬ましや。思ひ知らずや此の恨み、思ひしらせん思ひしれ。」と、天地を睨む兩眼に、血の涙をはら〳〵〳〵、はら立ちや。」と、ずん〳〵に食ひ裂きすて、衞士の燒く火はものかはの、胸の煙はくる〳〵〳〵、狂ひわなゝき出で給ふは、恐ろしくも又哀れなり。いでや其の頃蟬丸の御乳人左衞門督淸貫は、直姫を尋ねん爲、南都を忍び巡りしが、一先づ都に歸るさの、長池より日はくれて、物すさまじき宇治橋の、宮居にこそは著きにけれ。「今宵はこれにて明さん。」と、笠を取つて向うを見ればあやしき姿「南無三寶此の社は嫉妬を守る橋姫の、丑の時詣これなんめり、窺ひ見ばや。」と神前の、松の古木に攀ぢ登り、身を細めたる振舞は、宛然梢にさゝがにの、

きぶね詣

蜘蛛の網にあれたる駒は繫ぐとも、ふた道かくる仇人を、思ふはつらし。おもはぬも、ア、ものうしの時參り。仇と情と怨念と、三つの鐵輪に燃ゆる火に、瞋恚の燒木こりもなく、煙くらべん夕闇の、空もとゞろに浮舟の、けうとく立ちし宮柱、人になつけのつま櫛も、おどろの髪も七つ八つ、夜半の

中深く入り給ふ。月かあらぬか茜さす、衛士は篝を焚きさして、さめ〴〵とぞ泣き居たる。蟬丸御覽じ、「目出度き御遊の折から、希有の落涙心得難し。」と宣へば、烏帽子かなぐり、「これ御覽ぜ、なう御見忘れ候か。われは一年春日の里にて、假寢のお情候ひし、直姫にて御座候。有りし逢瀬の川水の、よどみ〳〵て月かさなり。君の御子を生み參らせ、不思議の事にて御父帝樣に、老母諸共拾はれ候へども、君の浮名を憚り、夫は死せしと僞り、希世の卿にかしづかれ候が、せめてお姿見まほしく、衛士の男にいでたちし。とても賤しき此の身にて、添ひ奉るは叶はぬこと、血判を染めて給はりし、誓紙も今はよしなし事、唯今燒きすて奧樣とは、おなかよし野の初櫻、火花も薫れ。」とにほひ墨、燒べんと爲しを引留め、「明けくれ忘るゝひまもなく、乳人の清貫を尋ねに出し、出家の望みと僞り、妻の傍にもぬる夜なき、我をばむげに此の誓紙、灰になせとは曲もなや。」と、かこち給へば直姫も、袂に抱きつくば川、積る戀しさ逢ふ時は、心おくれに胸さわぐ。そゞろぶるひの姿なり。爰に北の方の御兄、右大辨早廣此の體をきつと見て、「今宵の衛士は蟬丸密通の女なり。あれ吟味せよ。」官人舍人我も我もと驅け出づる。聲に恐れて人々は、築地がくれに逃げ給ふ。早廣誓紙を拾ひ取り、「さあ證據は握つた。奏聞せん。」とひしめけば、人目も恥ぢず北の方、「なうばしたなし。宮の御名の立つ事ぞ。穩密にしてたべ兄上樣。」と、涙にくれて宣へば、早廣眼に角を立て、「エヽ、言甲斐なし、結構だても事に

くこそ謡ひ出しけれ。「ゆふべ〱のわが涙川、もしや逢瀬の波枕、それを頼みにうき身をおくるえ。此の年月をえ。」宮驚き御覧あれば、北の方にておはします。お傍によりて、「これ〱今夜の管絃はれがまし。琴を枕の假寝は、調子もや狂ひなん。誰かあるそれ〱。」と宣へば、「はつ。」とこたへて女房達、御枕参らする。北の御方つつと寄り、宮の御太刀ずばと抜き、御長枕引きよせ、二つに丁ど切り給へば、宮は驚き縋りつき、「こはそもいかに狂氣か。」と、呆れ果てゝぞ坐しける。北の方聞き給ひ、「全く狂氣に候はず。お主樣とみづからは、夫婦と成つて二年の、幾夜を重ね候へども、あはぬ縁かや、但しはお氣にいらざるか。つひに一夜も肌ふれて、枕をかはせし事もなし。釋迦でもさうはならぬもの。男持つたも名許りぞ。益もなき長枕。科はなけれど成敗。」と、恨み侘びつゝ泣き給ふ。宮うなづかせ給ひ、「オ、恨みさもあらん。いひ出すべき折もなく、今までは打過ぎし。親の命そむかれず夫婦とは成りつれど、われ幼少より出家を望み、一生不犯の願を立て、佛に誓言たてしゆゑ、是非なき事と斷念めたまへ。」と、ともに涙をながさるゝ。北の御方涙を止め、「ム、扨は左樣に候か。然らば妾も出家をとげ、此の世はわづか永き世の、心が誠の夫婦ぞや。今よりみづからも誓文立て、互に心を恥ぢしめて、身を汚さず清淨に、目出度く發心とげ申さん。しかし今宵は誓文がため、一世一度の色牀は、佛もお氣のとほらめ。」と、膝にもたれて宣へば、さすが亂るゝ花薄、詞に露を慕はせて、簾

給へ。」と泣き叫び、「まつたく捨子に候はず。妾老母をもち候が、今は老木の葉も落ちて、物參らせん樣もなく、乳房をふくめ養ひ候。此の子が爭ひむつかる故、暫時外方にすかし置いて候。聊か捨ては致さぬなり、返してたべ。」とぞ泣き居たる。主上御手をはたと打ち、「扨は捨子にてはなかりしな。子にかへて母をいたはる孝行、賢女ともいひつべし。して汝に夫は無きか。」「さん候。夫は去年の秋霧と、消えても殘る俤の、形見は此の子。」と許りの淚も、いづれ由あつて、目元のくらゐ爪はづれ、育ちゆかしき女なり。主上感じ思召し、中納言希世を召され、「窮民を養ふは古への道。彼が老母諸とも、汝に預け與ふる條、大內に誘引し、よく〳〵養ひいたはるべし。ついては斯かる豐年の悅び、天にうたふる兆ぞや。初菊の宴を催し、紫宸殿にて音樂を奏し、五穀豐饒を祝ふべし。」と、世に畏まる御敎、仰ぐもおろか 三重 なりけらし。初霜よ初霜に、をらばやをらん花の宴、菊見の御遊絲竹の、其の役々を別たれし、中にも當今第四の御子、蟬丸の宮と申せしは、天性美男の御器量、天皇御寵愛淺からず。琵琶に妙を得給へり。扨又琴は蟬丸の、北の御方と定めらる。そも此の姬君は右大辨早廣が妹にて、はや十八の秋風も、ふさがで通す振袖や、二つ違ひの爪琴は、似合ひ頃とのしらべかや。「月出でなば管弦を始むべし。」との御沙汰にて、衛士は烏帽子を傾けて、月待つ程の篝火も、優に目出たき景色なり。蟬丸は唯一人、「月や出でし。」と欄干の、奧の渡殿見給へば、琴を枕に女の寢聲、斯

蟬丸

第一

諫鼓苔深うして鳥驚かず、刑鞭蒲朽ちて螢空しく去るとは、いま此の時よ秋津君、延喜の帝の御盛徳、申すもをさ〳〵有り難し。治まる國や民草の、猶其の榮え衰へを、直に叡覽有るべしとて、唐土の聖代の巡狩になぞらへ、交野のみ野の櫻狩、今日の紅葉とをりはへて、月卿雲客供奉せしめ、はや警蹕とよばふなる。御狩車の五つ緒も、五つの常の道芝や、惠みの露に轟きて、行幸有るこそ目出度けれ。禁野を過ぎてなぎさの院。賤が門田の八束穗に、竈の煙ほの〴〵と、戸ざさぬ御代の民百姓、管籥の聲羽旄の美、欣々然と悦びて、君が御狩を待ち顔に、空飛ぶ鳥も御車に、羣り慕ひ囀りしは、實に賢王の慈愛、鳥獸にも通じけん。民安全のしるしなり。時に行く手の松が根に、幼き者の泣く聲す藏人を以て召さるれば、まだ乳ばなれぬ捨子なり。主上御涙ぐませ給ひ「我國民を憐み育むといへども、子を捨つる邪見の者我が國に有る事、朕が不德のあやまり。」と、かたじけなくも兩眼に、御涙をそゝかけ給ふ。然る所へ十八九なる女房、あわたゞしく驅け來り「なう其の子返させ給へ。返し

には、恨みも戀もあるべからず。」と、既に危く見えし時、小栗驅けつけ、三郎が兩足かいて取つて伏せ、「因果のとゞめ受け取れ。」と、三刀四刀刺し通せば、人々おりあひ、思ひ〳〵の劍、惡魔降伏太平の、太刀風松風吹きをさまりて、枝をならさぬ君子國、五穀豐饒民安全、治まる御代こそ目出たけれ。

當流小栗判官　終

たゞ稻妻の如くなり。色の者ども拔き揃へ、三郎に續いて起つ。小栗方の諸侍鬼王鬼次兩道心、餘さじと身構ふ。三郎怒つて大音上げ、「おのれ兼氏、たばかつてたゞ一打と思ひしに、仕損ぜし無念さよ。親兄弟も容赦すな。撫で切りて打取れ。」と、きばを噛みてぞ下知しける。小栗から〳〵と笑ひ、「優しき愚人めが智畧だて、腕にも智慧にも、此の兼氏を討たんとは、蟷螂が斧ござんなれ。積りつもりし大惡逆、一門の恨み他門の仇、娑婆塞げのえせ者、片端切つて切り散らせ。」と、一文字に入り亂る。何處にてか聞きたりけん、後藤左衞門長刀よこたへ驅け來り、一人も餘さじと眞中におつとり込め、此處の眠郞彼處のつまり、打ち伏せ切り伏せ、墓原佛檀庫裏客殿、押つ返し追ひ戻し、善根解脫の大道場、修羅の街に覆し、暫し支へて三重戰ひける。元より一人當千の小栗といひ、後藤といひ、鬼王兄弟手痛く打てば、死武者の惡黨ら、此處彼處に切り伏せられ、僅かに殘る奴原も、蜘蛛の子散らす如くにて、はふ〳〵逃げ失せてけり。三郎も今ははや鐵壁の力も折れ、大童に戰ひなされ、小藪の陰よりつつと出で、「もとより期したる一命、何時の時を待つべきぞ。小栗こそは漏らしつれ。我一人死なんより、親兄弟に供させん。」と、奥をさして躍り入る。横山親子聞くよりも、「天命知らずの大惡人、人手にかけじ。」と三人が、一つに拔きつれ取り廻す。三郎怒つてはねちがへ、太郎次郎を兩手に取り、大地に打ちつけ兩足にどうと踏み、大手を伸べて父が胸倉掻い摑み、「親子つれて死ぬる

姫君も、いさゝか恨む色もなく、一の上座に招待あり。横山申されけるは、「照手は親子の挨拶なり。其小栗殿の御心底、千萬もつて恥かしし。さりながら必ず恨みを晴れて給べ。皆三郎がすゝめなり。とてもの證據には、我々意見を加へ候處に、却つて此の如く親兒を追ひ出し、おのれ所知を押領す。とても三郎が首を刎ね、自他の意恨を散じて給べ。」と、手を束ねてぞ申さるゝ。兼氏も慇懃に、「老體とひ親方の仰せ、わけまでも候はず。なにしに意恨はさむべき。さて三郎が我儘を振舞ふとや。シャ小冠者奴、首ねぢきつて捨て申さん。御心安う思召し、向後隔てあるべからず。」と、既に御酒宴はじまりける。しかつし處へ色を著して十四五人、棺を寺内へ舁き入れ、「上人へ申し上げ候。我々は當國の百姓にて候。然るに此の亡者皆是無緣の者なるゆゑ、拙者ども講中として葬り納めたく候。あはれ御慈悲に御引導頼み奉る。」と、涙を流し申しける。上人聞き給ひ、「もとより出家の役義、殊に無緣とあるからは、安い程の事なれども、たゞ今は祝儀の時節かなふまじ。外を賴め。」と否い給へば、小栗御覽じ、「いや〳〵某が祝儀には、葬禮こそ吉相なれ。慈悲を下して御引導遊ばせかし。我等も聽聞仕らん。それ〳〵。」と宣ひて、棺を緣にぞ舁かせらる。上人三衣を改め、すでに法事と見えし時、豫てかくやたくみけん、横山三郎太刀ひつそばめ、棺の内より躍り出で、兼氏に飛びかゝり、太刀を胸にあてんとす。心得たりとかんづか取り、三間ばかりかつぱと投げ、太刀おつとつて立ち給ふは、

末、なんの其の破らうこと。オヽ、分別あり〳〵。みづからながらへある故に、長殿にも難をかけ、身にも憂き事聞くなれば、死しては人に恨みもなし。」と、思ひ定めて銚子を捨て、今朝の蚊帳の釣手繩、わなに結びて首にかけ、「南無阿彌陀佛。」と宣ふ聲、國司驚き驅け出で給へば、ありあふ侍長夫婦、「これは〳〵。」と抱きとめ、あわてふためくばかりなり。國司は姫の手を取つて、「捨身とは心得ず。熊野本宮の汲み湯にて、某病惱本服せし。されば車のそへがきに、上下五日の大檀那、常陸小萩とありしゆゑ、命の恩をおくらん爲、さてこそ酌とは望みつれ。よく〳〵見れば面形の、似たる人のありけるが、國は何處。」と宣へば、あつと思へどおし沈め、「妾も殿樣は見ましたやうに存ずるが、實のお名は聞かまほし。」とぞ仰せける。「オヽ、某は死して再び蘇生りし、小栗の判官兼氏といふものよ。」「さては夫にてましますか。なう我こそは照手の姫。」「やあ實か。」「ほんに現か。」と、人目もわかず抱きつき、嬉し淚のひまもなき。三世の緣とはこれならん。御物語夜と共に、長にも數の褒美あり。「先づ藤澤の上人に、いざや謝禮を達せん。」と、打連れ積るゆかしさや。よれつもつれつ藤澤の、御寺をさしてぞ急がるゝ。さきへ案內ありければ、上人立ち出で、まづ客殿に請ぜらる。一禮終つて鬼王鬼次兩道心、姫君を助けし忠節、妹君の最期の體、問うつ問はれつ盡きしなく、池の莊司が菩提をも、深く弔ひたまひける。然る折節橫山は、太郎次郎に誘はれ、面目なげに來らるゝ。兼氏も

娑婆往來ぞ有り難き。卽ち上洛朝參あり。本領を安堵して入國の道すがら、美濃國靑墓の萬屋長に本陣を召され「常陸小萩といふ水仕の女を、お酌に出すべし。」との御諚にて、長は用意をしたりけり。末すむ花の染衣も、心うつらず照手の姫、主の仰せのおもければ、今は辭するに處なく、前垂襷脱ぎすてて、情模樣の色小袖、追風淺くかをらせて、銚子たづさへ出で給ふは、巫山の神女雲となり、雨となり好し振も好し。三十餘人の女郎も、花の邊の深山木と、景色おされて見えければ、扨は國司の物好きも、見處ありしと聞えける。八十間の長廊下、十六間のおばしまを、搖ぎ歩ませ給ひしは、晴れざるに何の虹、花を吐くかとあやまたる。一間此方の障子より、國司の姿をつや〳〵と打眺め、天晴器量や殿振や、小栗殿の面ざしに、さても似たりと見る目にも、昔忍ぶの淚かな。「ア、忘れたり。長の御恩を報ぜん爲、お酌には出でたれども、國司も若き御方の、戯れごとも宣はん。たとへ命は終るとも、お酌の外は返答も、せまじとは思へども、此の道ばかりは思案の外、殊に國司が小栗殿の、容に似たるにほだされて、我知らずに我が心、移るまいものでもなし。草の陰なる小栗殿、嫉妬ましうおぼされん。出でねばお主の仰せを背く、出づれば女の道を破る。さて如何せん。ア、詮方もなき此の身や。」と、不覺の淚止めかね、たゞ溜息をつく〴〵と、暫し案じておはせしが、「いや〳〵國司の權柄にて、如何なる無理を宣ふとも、よもや違背はなるまじき。ア、勿體なや、今まで立てし誓ひの

しみ〴〵と、其のいつぞやの下紐の、今は昔に解けよかし。解くや柳の眉ねかき、はなひ紐解け亂るれど、誰かは我を慕ひつゝ、噂流れん言の葉の、うたづめ川を打渡り、何故つくる姿見の、鏡の宿も引過ぎて、梢に響く仇浪は、琴の調べか唐櫓の音か、松風の聲でないよの、忍び車かの、廻りめぐるや瀬田の橋、引いつ引かれてひとふた夜、みよを重ねし笹竹の、大津も過ぎて關寺や、玉屋が門に車著く。「あはれ此の身が儘ならば、熊野のお山にひき著けて、本宮の湯を引くべきに、宮仕ふ身は力なき、力車の善根も、これまでなり。」とゆふ暮の、松の焚きさし筆にして、「そも數ならぬ美濃國、萬屋長が水仕の下女、常陸小萩といふ女、上下五日の車の旦那、志はおもふ人頓生菩提。」とかき記し、別れて歸る道芝の、しばしが程といひながら、他生の縁これぞこの、救世の船の綱子ども、立ち歸りては、「いざさらば、さらば〳〵。」と袖絞る、姿も影も遠山の、霧にほの〴〵木隱れて、涙に聲もうはがれし。

第五

菊の流れもこれなれや、生藥てふ熊野の湯、はこぶ他力に引かれ來て、忽ち心身健かに、小栗の判官兼氏と、姓名紛れなかりける。奇なるかな妙なるかな。土中より蘇生して、今又人界に立ち歸る、

照手の姫車の段

忘草がな種あらば、我が戀草に植ゑまぜて、憂きが折々忘れなん。片輪車の綱手にも、雌綱雄綱はあるものを、ア、如何なれば我一人、世に長らへて先立てし、夫の菩提を祈るにぞ、心は物に狂はねど、姿ばかりは物狂ひ、形見の烏帽子眉深く、はつねの里の我が笹に、露の白木綿きりかけて、引けや引けや此の車、引くや佛の御手の絲、妙なる法に青墓の、長の門前はや過ぎぬ。刈穗の庵の夕雫、垂井の宿はこれとかや。片破月のかたわれは、落ちても水の底にあり。あるかと見えて無きものは、彼の見し人の面影を、夢に來るやとまつ葉山、天津少女の空炷か、雲な隔てそ、せめて故郷の空を見ん。廻れや〳〵此の車、廻る輪廻は離るとも、かけし誓ひはよも切れじ。菫交りの淺茅原、旅衣つましなき、板屋が軒に風落ちて、荻の裳裾もふは不破の關、數多の綱子聲々に、「えいさらえい」と引く車、音頭を取りて、引かせうぞ。引けや干潟の群千鳥、諸聲かけてはやさぬか。おひかけ中綱しめて見よ。しめて寢し夜の睦言の、耳に止まり懷かしく、美濃と近江の界なる、寢物がたりや牀の山、枕の森もあはれげに、二人ならぶる夜半もがな。ア、〳〵一夜だに〳〵、忘れもやらぬ戀しさは、何時醒が井の水深く、沈みて物を思へとや。沈まば沈め、とんと沈まん戀の淵、まぶちなはてを遙々と橫ぎる嵐さら〳〵〳〵、さつと左の振袖を、ア、また右の袖下へ、吹きぬくかぜは戀風か、玉の肌に

の道に心懸け、供養の車を引かんといふ、心いれが殊勝なり。三日の隙を取らする。」と、よに頼もしげにいひければ、女房いよ／＼腹を立て、「これ性悪。みづからも鬼ではなし、情は知つた。さりながら、御身が小萩を見る度に、目を細めてをかしい目付が氣に入らぬ。四十五十に餘つて、しほの眼の時分かいの。エ、笑止な。」とありければ、長は元より律義者、「ア、迷惑々々、それは廻り氣。たとへ小萩を天人にもせよ、そなたを除けてわき心を持つものか。彼の女に某がしほの目するといはるれども、いかな事／＼、細い目見せた事もなし。此の繰る珠數を誓文。」と、くわつと睨みし兩眼は、其の儘達磨のごとくなり。女房少し柔ぎて、「なう勿體ない誓文に及ばうか。いやこれ長殿、みづからも鬼畜にてもあらねども、如何にしても今までは、御身の眼元が妬ましう、思はぬ腹を立ててある。これこれ小萩、後生のことゝあるからは、長殿より三日の隙に、妾が二日相添へて、五日の暇取らするぞ。車を引いて歸れ。」とあれば、姫君嬉しく思召し、「さて有り難や此の御恩、一度は報じ申すべし。」又もや御意のかはらぬさき、はやお暇と出で給ふ。」長は小萩を見送りて、「さても／＼女の身にて、かく佛法に赴く事、若い者のさりとては／＼、アヽ奇特々々。」と、しばし感ずる顔ばせに、女房氣をつけ、「それまた眼元が細うなる。それが嫌ぢや。」といひければ、長は驚き、「はて此の珠數ぢや。」と、目を見出し、つれて奥にぞ 三重 入りにける。

の事にて候へば、亂れ髪も見苦しく、櫛取り上げて候なり。流れの事は何時までも御許し候へ。」と、涙とともに仰せける。女房重ねて、「やれ結ふにも時分がある。はや何時ぢやと思ふぞや。ム、合點ぢや合點ぢや。これの長殿が、何とやらん此の頃は、汝を見る目は絲薄の如くになる。合點が行かぬと思ひしに、さてはおのれが長殿を、そゝのかすと覺えたり。こりや長殿には、妾といふおか樣ある。サァ何として長殿の目を、彼の如く細うはしたぞ。まつすぐに申せ。」といへば、「これは近頃御無理なり。旦那樣のお目の事は、みづからは知らぬ。」とある。「ヤイ賣女め、おのれを遣ふみづからが知るまいと思ふか。昨夜長殿の御湯殿しに參りし時、涙を流ししみ〴〵と、口說いたは何事ぢや。サァこれは何事ぢや。」と、疊みかけて申しける。姫君聞き給ひ、「さん候。妾には親夫も候はず。明日をも知らぬ無緣の身。此の頃此の宿に、熊野本宮の車が著いたる由。一ひきひけば千僧供養と申すゆゑ、菩提の爲に車が引きたう候て、三日のお暇給べかしと、御訴訟申して候が、其の外には覺えなし。情は人の爲ならず、さのみに辛くな宣ひそ。」と、又さめ〴〵とぞ歎かるゝ。「エ、つべこべと吐したり〳〵。あら憎や腹立ちや。」と、鏡を取つて投げつ、胸を燃してぞ怒りける。主人の長立ちいでて、「これ〳〵女房、さな荒けなくし給ふな。君を思ふも身を思ふとやら、奉公するも身の可愛さ。主も人、下人も人、我々夫婦を便りにて、奉公するではあらざるか。情をかけて使はれよ、年端も行かぬ彼の女、佛

るならば、斯くと傳へよこれまで。」と、あたりの櫛笥押明けて、氷の剃刀取り出し、海松房の黑髮を愛相もなく引上げて、既に切らんとし給ふとき、時鳥一文字に飛び下り、羽風を立てて剃刀はたと打ち落す。「こは如何に。」と取り上ぐれば、又立ち歸り打ち落し、二聲三聲雲に啼き、行方は月ぞ殘りける。照手あきれておはせしが、「さては草の陰なる小栗殿、我が黑髮を切らせじと、惜しみ給ひてこの如く、冥途の鳥が止めしよな。思へば夫婦は二世の緣、殿は冥途に持ちたるものを、男に此の身を任せながら、氣まゝに髮は切られまじ。斯程やつれし我が姿、露の陰より見給はば、いくばく無念に思されん。未來で殿御に逢ふまでは、大事の我が身何の捨てう。よね振仕上げ我が夫に、嬉しがらせて戀若やがせ、かうしてどして。」と一人ごち、鏡にむかひ玉櫛笥、つくらふ顏も中々に、やる方なさのあまりぞや。かかる處へ長が女房、「小萩々々。」と呼び立て、局に入つて大きに怒り、「ヤイ女め、何をひろいで此處に居る。おのれは何が役なるぞ。遊ばせうとて置きはせぬ。流れを立てよといひつくれば、四の五のとて嫌ふゆゑ、下の水仕に追ひ下し、十六箇所の釜を焚き、のぼりくだりの客達の、洗足取つて苧をうみて、裏脊戸掃いて朝夕に、三十人の遊君の、化粧の水を汲む役ぞや。女郎どもと同じ樣に、粧化粧はあた見られぬ、それ程身にかまふならば、今でもおのれ流れを立てよ。」と、帚おつとり怒りしは、さながら夜叉の如くなり。姫君は赤面し、「御奉公は何事も、殘らず仕舞ひ候ゆゑ、女

小萩と名を改め、つひに見もせぬ手業にも、下職は安きならひかや。下の水仕の荒仕事、あらいとほしき心なり。元より長は海道一の有德人、三十餘人の流れの君を持たれしが、十町彼方の清水より、化粧の水を汲み運ぶ。擔ひし桶の漣の、うき勤めとは思へども、「此の頃聞けば此の宿に、熊野本宮湯汲車の著きたるとや。此の車を一ひき引けば千僧供養と聞きし故、夫の小栗の菩提の爲、我も車を引くべきに、三日のお暇申すまで、長の心を背かじな。皆これ夫の御爲。」と、思ひなほしてしのがるる。局々を掃き拂ひ、手洗化粧の玉水を、汲みかへ汲み入れ給ひしが、「口惜しやいにしへは、斯樣の上臈を、數多の侍女下婢にて、かしづかれたるみづからが、ひきかへ今は使はるゝ、人の行方は定めなや。ア、さこそ容もやつれつらめ。」と、遊君達が立て置きし鏡臺引き寄せ、一目見たれば、「南無三寶、色も容も我ながら、更に我とも思はれず。淺ましや花紅葉、月を妬みし此の身がさて、かくとやつるゝものかは。」と、鏡おしやりひれふして、しばしはこがれ沈まるゝ。涙もくもる中空に、若時鳥簷に咲く、樗の花におちかへり、本尊かけたと告げ渡るは、いとゞ涙の種ならし。照手つく〲聞き給ひ、「實に時鳥は冥途の鳥、死出の田長を啼くとかや。彼の鳥ならば我もまた、冥途の夫に逢ふべきもの、なつかしや羨まし。」と、少時聞き入りおはせしが、「ア、よく〱思へば、思ふ人を先立てて、何樂しみに世を立てて、誰に見すべき髮容、樣をかへて一筋に、菩提の道に入るべきぞ。汝も心のあ

其の故は愚僧の不思議の靈夢にまかせ、上野が原の閻魔堂へ參詣せしに、一つの墓より餓鬼一人顯はれ出で、指を以ておのれが胸を敎へしが、非業不非業、定業不定業といふ文字すわれり。正しうこれは久しき土葬の亡者なるが、善根にひかれ、閻魔大王の感應にて、再び娑婆に蘇生る。夜前の夢は此の告げぞと、卽ち餓鬼を彼の輿に乘せ連れ歸り候。佛法不思議、方々の初發心の善知識、御覽ぜよ。」とぞ仰せける。兄弟輿をさしのぞけば、皮肉もとけて骨あらはれ、炭の折れの如くなり。息はあれども聲出でず、六魂氣血通はねば、見聞闇に異ならず。昔は如何なる人やらん。見る目もいぶせく淺ましし。上人重ねて、「一度生を變へて冥途に至り、久しく土中にありたる身、たとへ息のあればとて、たやすく元の人間とはなり難し。熊野本宮藥の湯を汲み寄せ、一七日沐浴し、反魂の法を行ひ、壯年の形となさん。」と宣へば、鬼王兄弟承り、「これも佛の御奉公。修業の始めに、我々本宮の溫泉汲み取つて參らん。」とぞ申しける。上人聞き給ひ、「殊勝なり。さりながら他力こそなほ藥の湯。桶に車をしつらひ衢に捨て、一ひき引けば千僧供養、二ひき引けば萬僧供養、大乘慈悲の車の檀那、他力をもつて汲み寄せん。いざ此方へ。」と宣ひて、にはかに車を三重用意ある。斯くとはいさやしら玉の、照手の姫の御行方、傳へ聞くだに淚ぞや。鬼王に助けられ、父の館を忍び出で、彼方此方にさすらひて、何を賴みに憂き年月をながらへし、命も辛き美濃國、青墓の宿萬屋の長が許に買ひ取りて、常陸

姫。何につけても主と頼みし横山一家、恨めしうは思はぬか。如何なる悪業悪縁に、主従とはなりけるぞ。前世の約束思ふにぞ、後の世とてもさぞあらん。」と、またさめ〴〵と歎きしが、「思へば運の盡き目なり。憂き事聞いて何かせん。百年も千年もながらへしは同じ事、寄れ刺し違へん。」「尤も。」と刀を抜いて取組みしが、「やれ待て弟、死して心は安まれず。誰を頼みに照手の姫、却つて憂目に逢ひ給はば、助けて徒となるべきぞ。さりながら館へも歸られず。此の太刀無下にもさされじ。」と、おつとり直し髻を、ふつつ〳〵と切り拂ひ、「太刀諸共に西に雲、紫深き藤澤の上人にゆかりあり。御弟子になつて後世菩提、決定往生祈らん。」と、涙ながらに出でて行く。人間萬事夢の世の、夢も夢なり夢の中、恨みも仇も樂しみも、戀も情もおしなべて、さむれば同じ現ぞと、皆知れども住めば憂世なり。

第四

名のみ鬼王鬼次が、心は佛の道に入り、浮世の絆ざんぎりの、鬢も亂るゝ藤澤や、御寺をさして急ぎける。折しも上人力者共に、張輿舁かせ御歸寺ある。兄弟門前に跪き、「御剃刀を戴き候。」と、發心の趣を一々殘らず申し上ぐる。上人横手を礑と打ち、「誠に各は好き折柄の發心、佛縁深く候。

し。」と立ち歸り、以前の處にどうど居て、「口惜しき身の上や。」と、五體を投げて泣くばかり。寄せ來る浪に下り浸り、「なう御姉妹。愚癡愚蒙の兄め故、非業の死を遊ばせし、御心底こそいとほしけれ。なまなか某弟に生まれ、同じ恥辱に沈まん事、何程無念に存ずるなり。腹かきやぶり惡鬼となり、敵を取つて參らせん。」と、自害せんとせし處を、鬼王驚き走り出で、「やれ粗忽すな死するな。」と、すがりつけば飛びしさり、「死に損ひの卑怯者。」と、太刀振上ぐるを、「先づ待て弟、一言聞け。疑ふは至極せり。全く照手樣を殺しはせず、都方へ落し參らせ、人に似たる石を沈めて三郎をたばかりし。以前斯くと知らせたく、心はやたけにありしかど、三郎が聞く前なれば、明けてこそ言はぬとて、左程某を狼狽へしと思ふかや。恨めしやつれなし。さりとては聞えぬ。」と、涙をはら〱とぞ流しける。鬼次つつと寄り、「なに助けしとや。然らばいよ〱聞えぬわ。など一旦我にも知らせ給はぬぞ。」「オ、談合せんとは思ひしかど、かばかりの人心、兄弟とても頼まれずと、互の底意疑ひし。これも何故お主の爲、許してくれよ弟。」と、涙を流し申しける。鬼次道理に至極して、「扨は左樣に候か。よしなき人に奉公し、かかる憂目を見聞く事は、冥加にも盡き果てしか、口惜しの身の上や。」と、兄弟手を取りすがりつき、聲も惜しまず歎きしが、鬼次涙を押へ首を下げ、「最前の慮外雜言、天の照覽畏れあり。眞平御免候へ。」と、打ちしをれてぞ申しける。「オ、何事も忠功ぞや。たゞあへなきは更衣

えたか。これなうお主なれども、媒の科人なれば、殺さでは置かぬ。サア姫君死に給へ、早死に給へ。」と責めければ、三郎も聲をかけ、「死神ついて死にたがらば、殺せ／＼。」と怒りける。姫君なほも思ひ切り、「なう死ぬるに人は賴まぬ。」と、飛び入らんとし給ふを、鬼王また抱きとめ、「狂亂か勿體なし。是非死なせぬ。」と引留むる。「やれ鬼王、我を留むるほどならば、など姉樣は殺せしぞ。言譯あらば我も思ひ留まらん、何と／＼。」とつめ給へど、三郎が聞く前なれば、落したりとは言はれもせず、更衣はなほ殺されず、千々に亂るゝ鬼王が、心の內こそ不便なれ。姫鬼王をつき除けて、「おのれが樣なる愚人奴に問答も無益。これ三郎殿、壻といひ妹といひ、御身の心一つにて、多くの人を失ひ、天命思ひ知り給へ。なう姉上樣唯今追付き參らせん。一つ蓮。」と手を合はせ、浪に飛び入り給ひしは、さても是非なき次第なり。鬼王兄弟三郎も、「あつ。」と許りに詮方なく、手をあげてこそ居たりけれ。鬼次膝立てなほし、「こりや鬼王、一人ならず二人まで、目前主を失ひしも、御邊が一心違ひしゆゑ。兄と思はぬ。主君の敵遁さぬ。」と、太刀拔きそばめ飛んでかゝれば、鬼王は道理にむかふ太刀先なしと、彼方此方へ逃げ廻り、苫屋の陰に隱れけり。鬼次せいて見失ひ、走り歸れば橫山三郎、「緩怠者。」と打つてかゝる。「オ、主も下人もこれまでなり。餘さじ。」と切り結び、受けつ流しつ戰ひしが、死狂ひの鬼次が、はげしく討てば三郎も、かなはじと逃げて行く。何處までと追つかけしが、「エ、よしな

王聞きもあへず、「御意に任せ、此の沖へたゞ今しづめにかけ、失ひつるわ。」と言ひければ、更衣夢とも辨へず、「なう情なや悲しや。」と、其の儘其處に伏し轉び、「わつ。」と消え入り泣き給ふ。されども鬼次のみこまず、「なんと眞實殺せしか。」鬼王詞をあらけ、「はて異な事に念をいれる。何の僞りあらん。これ三郎殿の御目の前にて殺せし。」といへば、三郎、「我が見る前にて殺させしが、それが何とした。」言ひもはてぬに鬼次、大地をはつたと打ち、「ハッァ南無三寶しなしたり。これ兄者人、相傳の主君を殺し、能うも〳〵生面下げ、我々に物言はんとは思はるゝぞ。蟲同然の人外を、兄に持つたる無念さよ。エ、淺ましや腑甲斐なや。最早侍はすたつた。命が惜しくば直に彼の船に打乘り、海賊して世を渡れよ。」と、牙を鳴らして申しける。鬼王氣色を損じ、「兄にむかつて推參千萬。おのれが智慧をかつて、我侍を立てうか。殺すもお主、殺せとあるもお主、なれども姫君には、小栗殿と正しう密通の科人、助け置いてはお家の恥。事を知らずば默つて居れ。」と、大きに怒つて申しける。更衣姫聞き給ひ、「何姉上を科人とや。其の科のはじまりは妾が媒したりしゆゑ、科人はみづからぞ。殺して給べ三郎殿。さあ殺せ兄弟。」と、聲を上げてぞ歎かるゝ。鬼次聞いて、「オ、御尤も、姉君樣を先立て言譯は立ち申さじ。諸共に。」と引き立て、海へ投げんとせし處を、鬼王飛びかゝり、鬼次を取つて投げはつたと睨み、「ヤイサ畜類奴、相傳のお主を殺さんとは如何に。」鬼次から〳〵と笑ひ、「ム、今眼が見

こそあるべけれ。」と、とつくと思慮をめぐらし、「如何にしても殺されじ。さりながら小栗殿なくなり給ふと申しなば、よも姫君もながらへんとは宣ふまじ。所詮小栗殿、都へ歸り給ふと、こしらへすかして落し申さん。」と、とつおいつ分別し、一人首肯き歸りける、所存の底ぞ三重奧深き。過ぐる月日と散る花と、あだ競べして行く水に、暫しばかりは漂ひぬ。あはれ命のつれなさや。佛心の鬼王は、照手の姫を心安う落し參らせ、人に似たりしお庭の石、君の振袖ふりかけて、さながらそれとゆふ暗に、松明背け梶取つて、岸の岩根を漕ぎ流す、心の内こそ哀れなれ。三郎氣遣ひにや思ひけん、岸端に驅け來り大音上げ、「やあ其の船は鬼王か。何と姫は沈めしか、實檢せん。」と呼ばはりける。鬼王すはやと思ひ、「唯今沈め奉る。これ御覽ぜ。」と松明上ぐれば、三郎遙かにすかし見て、「ム、遠目の加減か姫が小さく見ゆる。聲を立てさせ聞かん。」といふ。鬼王涙ぐみたる體にして、「いや御涙にせかれ、御聲も立ち給はず。痛はしの御有樣や。」と、すがりついて空泣す。「よいわ〳〵早く沈めよ。」其の時鬼王ふなばたに跪き、「御身より出でし不義の科、人ばし恨みましますな。サアたゞ今が御最期ぞ。南無阿彌陀佛。」と引立て、逆卷く浪間にどうと沈め、船に平伏し泣き居たり。三郎悅び、「出來た出來た。來れ〳〵。」と招きければ、面なげにしておも梶や、漸う陸にぞ上りける。然つし處へ弟の鬼次、更衣姫の御手を引き、息をはかりに走り著き、「これ〳〵鬼王殿、照手樣は如何に。」といふ。鬼

る最期とかや。横山一家手を叩き、「さつても好い氣味〳〵。」と、一度にどつとぞ笑ひける。「さて兼氏の死骸を、上野が原の土中に埋め。」と、下人共にいひつけて、立ち歸らんとせし時、三郎父が袖を控へ、「彼奴らを殺し候へば、妹の照手、夫の敵と我々を恨みんは必定。然らば屋の内に敵を設け何かせん。御思案あれ。」とぞ申しける。郡司打ちうなづき、「オ、氣がついた。いしくも申せし三郎。」と、譜代の家の子鬼王を招き、「おことは夕さり人知れず、照手の姫を相模が沖へしづめにかけよ。」と申しける。鬼王はつと仰天し、「科なき人を毒害さへ、都の聞えはかりがたう候に、骨肉哀愍の姫君を失ひ奉れとは、御家の破滅かや。たとへ御科候とも、譜代の御主を討てとある、御請はえぞ申すまじ。よく〳〵御思案候へ。」と、涙を浮べ教訓す。三郎大きに怒り、「なまぐさき諫言だて措きをらう。横山が内に己ならで人あるまいか。外の者にいひつけん。いざ立ち給へ。」と立たんとす。鬼王「しばし。」と押留め、「一旦は申せし事、餘の者よりは某が失ひ奉らん。」とぞ申しける。「ム、しかと汝が殺すべきか。」「中々の事。」「然らば仔細はあるべからず。我も行きて檢分せん。少しにても容赦せば、おのれを共に曲事ぞ。サア親父お歸りあれ。先づ一人は仕舞うた。」と、どつとどよめき歸りける。天罰如何恐ろしし。斯くて鬼王兎角思案に落ちざれば、「口惜しの奉公や。」と、途方を失ひ居たりしが、「先づ弟の鬼次に談合せん。」と、つつと立ち、「いやまてこれを見るにつけ、兄弟とても頼まれず。分別

處に意恨を結ぶべき。和談の酒盛いたすべし。それ〳〵。」と宣へば、池の莊司承り、銚子杯取り出す。兄弟詞を揃へ、「中なほりの法なれば、其のお銚子を此方へ賜はり、又我々持參の酒を御邊へ參らせ、二つの杯にて、兩方一度にさし申さん。」と言ひければ、鴆毒ありともしろ金の、銚子を取り換へ給ひける。御運の末のうたてさよ。彼方の酌は鬼王といふ男、此方には池の莊司、小栗杯とり給へば、先づ三郎が杯とり、一度に酌んで差し給へば、兩方互に押戴き、さらりと干して兼氏は、太郎次郎に差し給ひ、三郎が杯池の莊司にずんどさし、「サア意趣も恨みも川へ流して、一つ一つ。」といひければ、莊司手盛にだんぶと受け、ずつと干して銚子杯からりと捨て、「南無三寶許られし。やい横山、汝等が持參の酒、飲むより早く五體にしむ、正しう毒酒と覺えたり。詞にほだされ、心を許せし後悔さよ。いで一打。」と、太刀に手をかけ拔かんとしけれども、五臟六腑惱亂し、九穴より血をはいて、彼方此方へ反り返り、十八歳の夕の露、終に果敢なくなりにける。強かりし兼氏も、面の色は紫立ち、刀を拔きは拔かれしが、打上げん力もなく、「エ、卑怯なり横山。押寄せ腹を切らせず、酒毒にて意趣を晴らさんとは、下郎に劣りし奴輩、刺し違へん。」と立ち上り、心ばかりは高砂の、松の翠とはやれども、呼吸も斷れて弱々と、「人間僅か五十年、戀ゆゑ果す一生に、せめては妻を一目見ん。照手戀し懷かしや。」と、二十三を一期として、かつぱとまろび失せたまふ、痛はしかりけ

栗の判官兼氏の、自然沸智にかんたくし、四足を折つて禮拜し、三度嘶きしつ〳〵〳〵と、元の廐に立ち歸る。本心誠を備へては、六根自在の妙ありて、鬼畜も我に從へり。いたれるかな盡せるかな。學んで知るは智にあらず。生れながらの善は善、隱れし德は明らけき、古人の一句誠ぞと、聞く人たゞするばかなり。

第　三

横山一家の人々は、和睦の宴を催さんと、酒杯とり持たせ、小栗の館に案内す。もとより不敵の小栗殿、兄弟に對面し、「何の爲のお出でぞや。」と申さるゝ。郡司扇を笏に取り、「參る段別儀ならず。貴公とわれ不思議の緣を結びし處に、御分とは存ぜず伜ども、去年不慮の口論致し候由、さぞ御覺え候べし。それ故過ぎし夜初めての參會に、兄弟はつと當惑し、何とやらん品惡く、迷惑の由申し候。知らぬ以前は是非なき事、斯樣の緣者となるからは、昔の意趣は殘るべからず。和睦の一杯いたさせん爲、酒杯を持參仕る。老いたる郡司が手を下ぐる。これに免じて貴方よりも酒杯をいだされ、兩方一つ杯に、中なほりして給べ小栗殿。」と、殘る方なく申しける。兼氏も喜悅あり、「御慇懃の御出で過分に候。誰とても知らぬ以前は、言分すまじきものならず。ことにいづれもこれまでのお出で、何

櫻もこきまぜて、押し分け搔き分け、露も雫も打拂ひ、いや打ちはらひはら〱、はらり〱と行く先に、霧立ち渡るきりはらか、岩壁苔に埋もれて、岩角道をさしはさむ。行かんとすれば蹐り、越さんとするも遙かなり。岩根葛に手をかけて、鐙蹴放し飛び上れば、馬は岩間を 三重かいくゞる。稻妻よりもなほ早く、其の身輕げにのり〱、乘つた姿の、やれさてしをらしや。しばし歩ませ聲をかけ、弓手に控へ、馬手に押へでしつとと打つ、雙の鐙の強弱や、馬と人との息遣ひ、しやんとしめたる諸手綱、肩から腰から手の内に、一つの祕傳有明の、空行く月に鞭を揚げ、二千里刹那の駿馬の曲、これをなづけて櫻狩、父母のたづなといふとかや。※りうくわうさうくわう瑪瑙の鞭、手綱搔い繰りくる〱〱、ゐりくりゐん所の馬場の堤、乘り上げ乘り下げ乘り下し、跳りあがればしつかと留め、乘り靜めては驅け出す。馬は名馬乘者は達者、轡の音がりん〱〱、松吹く風は颯々、さつと棚引く馬煙、土を蹴立てし其の勢ひ、龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風騷ぐ、末野の草葉胸分に、踏み亂し踏みしだき、雲雀の牀の芝繫ぎ、とある處に 三重乘り靜め、ひらりと飛んで下り給ひ「かく口弱き此の馬を、など鬼鹿毛とはつけられしぞ。御免候へ横山殿。」と、袖かき合はせ一禮ある。馬上の見事さ鞍の内、前代當代末代に、ためし少なき達者かな。「いや〱乘つたり〱。」と、上下思はず聲を揚げ、どつとどよめく其の音は、暫く鳴りもしづまらず。馬は馬頭觀音の、神通威力あるゆゑに、小

ぎ、貫木蝦錠しつとと下し、名にし負うたる鬼鹿毛や、鬼一口と悅びて、まへがきして高嘶き、天にも響く許りなり。池の莊司つつと寄り、蝦錠攫んで「えいやつ。」とこじ放し、八ッの鎖をねぢきりねぢきり、厩の出し口しとゞと打てば、大力に引立てられ、さすがの鬼鹿毛頭を垂れ、身の毛を伏せたる氣色なり。小栗御覽じ、「遂に召されぬ馬ならば、鞍皆具も候はじ。裸脊に乘つて見せ申さん。」と、しめの髮を搔い攫み、ひらりと乘つてしづ〳〵と、步ませ給へば横山一家、膽を消し苦り切つて見えけるが、三郎心に思ふ樣、力に任せ乘つたりとも、曲乘は叶ふまじ。恥をかかせて腹癒んと、棊盤架梯取り出し、「さあ一曲。」とぞ望みける。「易かんなれ殿ばら達、馬上の達者御覽ぜよ。」と、犬追物の拍子にかゝつて、先づ平地をぞ　三重

小栗鬼鹿毛曲乘の段

乘つたりける。　抑馬に七箇の祕事、三箇の手綱五箇の鞍、陰陽の鞭、朝嵐大嵐小嵐、運び延足地取足、霰ながしといふ曲を、乘り返し引つ返し〳〵祕曲を盡して乘り給ひ、なほ馬場乘を見せんとて、櫻の馬場に　三重　乘り出し、手綱取りのべ悠々と、横ぎる風に雲の足、天にも上る氣色あり。漢の光武は一日に千里の馬を得たりつる、昔を我が身の上にしら泡嚙ませ、おゝさゝせ、遙かに行きて引つ返す、鞍の山形山近く、踏みもならさぬ馬場のうち、砂礫まじりの石あらく、繁り合ひたる袖摺松、柳

「壻殿にへんぺん。」とぞ申しける。「いやあまり急に候へば、此處は一ッ押へ申す。」とありければ、三郎から／＼と笑ひ、「さても都の小栗は、物の作法を知られぬよ。かかる儀式の杯を、押ふるといふ事は、當國にははやらぬ。」といふ。「ム、それは兎も角も、我も詞は無になされず。是非押へたし」とつきもどせば、「いやさ、嫌というては千度もいやなり。」と、膝立て直せば池の莊司つつと出で、「何れも御免候へ。某は小栗が下人、池の莊司と申す者。杯に推參なし。さらばお合ひ仕らん。」と、三獻ほして、「これさ御自分にも三杯。」と、膝の上に乘り懸り、八方を睨め廻し、太刀ひねくつて申しける。三郎戰々顫ひながら、三獻酌んでほしけれど、半ばは顫ひ零しけり。父の郡司は始終を知らず、「一杯の張合ひ、必ずお氣にかけられな。某收め申すべし。祝うて花壻殿、御肴。」とありければ、三郎聞きもあへず、「とてもならば我が家に、鬼鹿毛といふ荒馬あり。一馬場所望。」と言ひ出す。太郎次郎も合點し、鬼鹿毛に喰ひ殺させん幸ひと、「所望々々。」と申しける。照手驚き、「なう其の馬は、遂に乘りたる事もなく、人を食らふ荒馬ぞや。平に無用。」と宣へども、「しや何事か候はん。御身も出でて見物あれ。さあ御案内候へ。」と、打連れ馬場に入り給へば、夜はほの／＼と三重明けにけり。「すはや小栗の最期を見ん。」と、横山一家老若男女、我も／＼と見物す。かくて兼氏主從は、廐の體を見給ふに、八角の楠四方にゑり込み、四寸四角の鐵にて、蜘蛛手格子を切り組み、鎖を以て八方へ繫

の擧い先づ御使を立てらるべし。」と、裝束改め用意して、照手の局に入りにけり。夜も闌になりし時、「父上より兄參の御使。」と申しければ、姫君悅び、烏帽子直垂著せ參らせ、席を設けて待ち給ふ。時刻移さず人々は、引出物取持たせ、乾の出居に移らるゝ。舅なればとて、横山を上座に移し、互の禮儀慇懃に、千代の堅めの杯は、親しみ深うぞ見えにける。三郎暫く思案し、火影にすかしよくよく思へば、「彼奴は日外口論したる男なり。「南無三寶。」と、太郎次郎に目を合はせ、太刀に手をかけ身繕ふ。小栗はもとより覺悟の上、後藤にきつと目くはせて、事もあらばと氣をくばり、一座しらけて見えにけり。されども小栗手並は見せつ、何事かあるべきと、「此の杯を三郎殿へ、目出たく慮外申さん。」と、おほやうにさし給ふ。三郎むつとしながら、ちやうと受け、此の酒つらに打ちかけ、飛びかゝつて斬るべきか。兎や斯くやと分別し、胸をさすつて居たりけり。留守に殘りし池の莊司、何時になき胸さわぎ、「あら氣遣はし。」と、腹卷取つて打懸け、飛ぶが如くに驅けきたり、中門をつつと入り、障子のすきより見てあれば、横山一家居流れて、顏色かはつた有樣なり。「先づ君は恙なし。あら心やすや。されども彼奴らが面付は只ならず。事出來なば、障子一間踏み破り、三郎が首ねぢきり、殘る奴ばら蹴殺して、將棊倒にせんずもの。」と、そゞろにはやるぞ頼もしき。照手仔細は知りたまはず、兄上達の色がはり何故にやと恐ろしく、兼氏に引添うて、目を配つて坐せしが、三郎が杯を、

ねての思ひ今宵しも、晴れみ曇りみ初時雨、厭ふまでとの傘も、さすが忍びし風情にや。後藤一人お供にて、深き意趣ある横山の、館に忍び給ひしは、戀路の習ひとはいへど、不敵にもまたあはれなり。二十日餘りの夜半なれば、月は名のみに照手の姫、うはべは急かぬ振なれど、心の内の早瀬川、螢の籠を燈火と、後藤が女房先に立て、庭に下りゐて來る人を、まつの嵐のばらりとなるは、「ハァ人か。いや、君はこずゐに。」寢鳥の騷ぐ、寢卷の裳裾ほら〳〵と、ひつ扱き帶しやら解けし、「じどけなや。」とて結ぶとすれば、「ア、よいわいの。今にはや解くもの。」と、包むにもるゝ詞の露、置き所なき思ひかや。外より後藤しはぶけば、「さてこそ。」と女房は、懸金外し戸を明くれば、互に、「はつ。」とばかりにて、さしうつぶいておはします。「かくて夜も更け候へば、端近くてそゞろなり。いざお牀へ。」と女房は、案内の螢、「足音が、高い〳〵。」と打ちさゞめき、二人誘ひ入り給ふ。お寢間は嬉し恥かしき、新牀の中三重なつかしし。さる程に横山の郡司信久は、三人の子供を招き、「照手が局へは、小栗殿の今宵忍びておはするよし。某伊豆相模を押領し、何に不足はなけれども、させる氏も系圖もなし。申しても小栗殿は三條家の御末、官位めでたき雲の上人、かかる人を壻に取り、高官にまじはらば、子孫までの面目なり。今宵則ち酒をすゝめ、壻舅の杯せん、如何あらん。」とありければ、太郎次郎は云ふに及ばず、無法破りの三郎も、いつぞやの口論を、兼氏とは夢にも知らず、「子孫繁昌家門

急け小倉山、小倉の野邊の一本薄、何時か穗に出てみだれ、みだれ逢ふ夜は玉蟲や、幾重の關も越え行かん、矢竹心の鎧蟲、鳴く音は品々候。」と、面白うこそ賣りにける。照手の姫聞召し、「實に珍らかなり。殘らず庭に放たせよ。さりながら螢は夏の物なるに、今の螢は僞りならん。たとへ有るとも火はともさじ。」と宣へば、後藤が妻承り、「されば螢は、水に隨ひ流れて下り候故、都方にも、瀨田より宇治は遲きとかや。川水の果て埋れ澤秋の螢と古歌にも連ね、光は夏より明らかなり。今宵お庭に放されて、とほさぬ螢一つにても候はば、如何樣とも計らひ給へ。」と、螢よりけに詞の光、あざやかにこそ申しけれ。女房達聞き給ひ、「然らばお事は、今宵こなたに泊り、證跡を御覽に入れよ。若しも螢に光なくば曲事ならん。」と、はしたなくのゝしりて、皆々奥へ入り給へば、幸ひと了承し、夫にきつと目くばせし、後藤はお暇申しつゝ、小栗殿へぞ急ぎける。女房嬉しさ斜ならず、何卒姫君に知らせたやと、思ふ折柄飛石に、駒下駄の音しきりにて、更衣姫出で給ふ。女房悅び走り寄り、「これお姫樣。我等は實は商人ならず。小栗樣に御恩を得し後藤左衛門夫婦なるが、御媒申さん爲、小栗樣を今宵忍ばせ申すべし。姉君樣に御傳へ、はや〳〵。」と急きければ、更衣夢の心地して、「それは誠か先づ姉君に申し上げ、悅ばせ參らせん。何事もたゞ好き樣に、御身に任せ置く。」霜の、更け行く夜半をぞ　三重　待ち給ふ。身は濱松の　唄　根掘れてほれて、柳の絲の亂れ心、忘れめや。人の心を兼氏の、か

と、妻の女房に蟲籠しつらひ取り持たせ、物商人に出で立ちて、照手の姫のおはします、乾の局の前渡り、「蟲召せ〳〵。色を音に鳴く蟲召すまいか。」と、賣りにける。女房達は聞き給ひ、「珍らしき商人や。呼び入れて姫君達の御慰みに召さすべし。商人これへ。」と招きける。照手更衣諸共に、端近く出で給ひ、「庭の淺茅に放ち飼ひ、秋の野にして慰まん。蟲は何々持ちたるぞ。所によりて蟲の音も、訛あると聞くものを、名所をも名乘りて賣れ。それ〳〵。」と宣へば、蟲籠種々しつらひて、一々にこそ賣りにけれ。三重「數々咲ける露草や、露にむつるゝ聲々の、文を込め戀を込め、人に哀れを知れとてや、如何につれなき中だにも、一夜を逢うてくれごとに、何を松蟲何時までか、何時こほろぎも白萩に、亂れて鳴くはたから蟲。神樂が岡に鳴く蟲は、神の心をすゞ蟲や、あらぬ方より吹く風に、尾花頷く振見えて、堰いて逢はせぬ轡蟲。胡蝶の翼濡れそめて、蟲さへ情あればこそ、戀の重荷の我がつまを、背にきつと背負うて、人目思へば聲たてぬ、蜻蜓、蜻蛉、金龜子、世を空蟬の羽衣の、薄きえにしはなまなかに、ふつつりばつたり、眞から實から、はつたと思ひきり〴〵す、歌詠む蛙こと問へば、夕を待たぬかげろふの、命の夢の通路を、通車のわざくれに、おのが怒りの斧をもて、妬む蟷蜋優しやな。あの宮城野の絲萩の、絲をくる〳〵繰りためて、風にはた〳〵機織蟲、野原篠原狩りくらす、袖の綻つゞりさせ、待つとしきかば忍ぶ夜の、雨も厭はぬ蓑蟲や、胸の焔の螢火に、闇をも

は、すさまじかりし一通いきほひなり。横山一家恐れを爲し、皆逃げ散つて寄りつかず。されども山形曲者にて、搔潛つて後より、兩足取つて伏せんとす。さしつたりと二三間、鳥より輕く飛び返り、持つたる大石指上げ、「えいやつ。」と投げ給へば、山形が眞向を胴中まで打ちみしやがれ、微塵になつてぞ失せにける。すぐに驅け入り、「三郎が雜言吐いたる口引裂かん。」と、飛んで出でしが、「いや待てしばし、姫の情は捨てがたし。」と、門の立石元の如くに押直し、「お暇申す横山殿。手並はこれまでこれまでなり。重ねて姫に通ふ爲、案内を見置かん。」と、心靜かに練築地、高塀高垣高遣戶、栽込泉水築山を、彼方へ廻り此方へ廻り、衣紋繕ひ鬢を撫で、悠々として歸らるゝ。文武兩道誰とても、男はかくこそありたけれ。

第二

後藤左衛門むしづくし

諸共に心通ひて寄り添はぬ、中や鳥居の二柱、二歳の春秋を、妹の更衣心あり。文の使の渡船、焦れて月日を送らるゝ。後藤左衛門國忠は、小栗殿の情にて命をつぎ、寢本服したりしが、御恩を報ぜん所もなし。此の君の媒し、一夜逢はせまゐらせ、首尾よくは奪ひ取つて、思ひを晴れさせ申さん

渡し申す。」といへば、小栗聞き給ひ、「暫く〳〵。全く某狼藉はせず。一通りを聞かれよ。」と、今朝の次第を詳しく語り、「此處は我人、侍たる身の遁れぬ處と、御邊の牛を斬り、其の血を以て欺き、彼の者はおとせしなり。これ見よ。某に血の出でん疵もなし。證據には屋の内に手負牛のあるべきぞ。侍は相互、誰が身にもあるべき事。聞き分けて給べ横山殿。」と、理を盡して仰せける。山形聞きもあへず、「さては今朝、彼奴めが我をたばかりしよな。よし此の上は汝を代りに誅せん。」と、飛んでかゝれば飛びしさり、「これ横山殿。彼の者こそせいたる上、各も名ある武士、事の道理は知り給はん。人の命を助くるからは、我が命はすつる覺悟、一命は惜しからねど、望みある此の身なり。侍ならば賴み申す。」と、くりかへし仰せける。三郎重ねて、「然らば汝何しに此處へは忍びたるぞ。」
「オ、御邊の牛を斬つたれば、牛飼どもが難儀せん不便さに、便宜を窺ひ言譯して得させんためよ。」
「いや〳〵其の言譯は立ち難し。盜賊に疑ひなし。其の上牛を斬つたれば、我が爲にも下人の敵。疾う疾う山形引いて歸られよ。」とぞ申しける。小栗つつ立ち、「ム、さてはふつつと聞き入れぬか。ヤイサ畜生ども。おのれ誠の侍と思ひ、詞を下げし口惜しさよ。いで物見せん。」と心を張り、えいやつと身を振り給へば、七重八重の縛めが、はらりふつつと切れてけり。早業輕業力業、「身に兼氏がてなみを見よ。」と、門の据石輕々と提げ、群る中を縦横に、打ち据ゑ薙ぎ据ゑ、飛んづ返りつ打つたてし

御存じ、我も此の鳥何せん」と、顔打振つて入相の、兼氏の有様は、世に現なくわりなしや。かかる處へ件の牛、家路忘れず馳せ來り、にれ打ちかみて驅け廻る。姫は驚き逃げ入り給へば、小栗もあわてて的場の射垜に、立ち隱れてぞおはしける。時をうつさず山形兵衞、血を慕うて追つかけ、大音上げ、「此の内へ狼藉者をつけ込うだ。出せ〱。」と呼ばはつたり。横山太郎同じく次郎、中に取つても三郎は、大力のあふれ者、門外につつと出で、「ム、方々は當國山形兵衞といふ人よな。さて途方もなき事をいふ者かな。狼藉者をつけこみしとは、何を以て申すぞ。此の横山が館に踏ん込み、案外ばかば一人も生けて歸さぬ合點か。」と、はつたと睨んで申しける。山形ちつとも臆せず、「ヤア證據なくて言はうか。血を慕うてつけ込うだり。これ見よ。」と怒るにぞ、門のけはなし朱に染み、白洲に生血流れたり。太郎次郎詞を揃へ、「此の上は門内へ手負入りたるに紛れなし。さりながら武士の家へ驅け込む者を出すべき作法なし。出す事はならぬ。」といふ。三郎つつと出で、「いやこれ兄達。われ〱に對ひ賴むといはば、命かけてもかくまふべきが、斷りなしに入つたるは、法を知らぬ狼藉者、探し出して搦めて渡せ。」「承る。」と郎黨ども、上を下へとかへせしが、「射垜の陰に物こそ見ゆれ。やれ此奴よ。」と、兼氏を縛めて引き出すは、さても是非なき次第なり。三郎眼に角を立て、「おのれ何處のうず蟲め。案内なく驅け込みしは、作法を知らぬうろたへ者、我々を恨むな。これ〱山形殿、狼藉者を

宣ひしは虚事か。」と詰められて、詮方もなく兼氏も、うじ〳〵として入り給ふ。顔に紅葉や照手の姫しばし詞は無かりしが、思ひこほれてつゝと寄り、小栗の御手をしかと取り、「あつはれ此の鳥督徳ぞや。此の世はおろか來世まで、手飼に馴き給へや。」と、手を引き寄せてしめ給ふ。兼氏は赤面し、「お志は嬉しけれども、人を鳥とは迷惑。」と、聲もふるひて申さるゝ。「いやこれ鳥でないとは言はれまじ。我等が爲の命とりといふ鳥よ。なづけやなづけ。」と寄り添へば、呆れてなほも返辭なし。「なう更衣、以前の鳥は詞を聞き、わがいふ樣になりたりしが、これはさもなし。もとの山雀かへしや〳〵。」と、又こそ御機嫌損じけれ。更衣いとゞ迷惑がり、「未だ人馴れぬ鳥なれば、さも候はん。これ何事も御心に隨ひてたべ。なう氣の毒や。」とありければ、小栗も今は包み兼ね、「我こそ流人小栗の判官兼氏よ。お姿といひお情に、譯知らぬ身も繋ぎ馬、配所の月の廻り逢ふ、御縁もがな。」とほのめけば、「ム聞き傳へし小栗樣か。女に物を思はせて何のお手柄。なう強いも事により竹の、好いをり時分、アア壽命の毒め。」とうちもたれ、袖より入るゝ手先には、如何なる戀か籠るらん。更衣さすが妬ましく見ずも居られず見もやらず、わくせきしたる折柄に、以前の山雀歸りけり。「これ〳〵姉樣、元の山雀返しません。其の鳥此方へ。」と、引き除くれば、「いや其の鳥は最う入らぬ。餘の鳥千疋萬疋より、此の命とりたゞ一人、其の山雀は祕藏なれども、そなたに遣らん。」と宣へば、「ム、姉樣も好い事は能う

翼も輕く氣も輕き。「ア、可愛の鳥や。」と愛で給ひ、「なう更衣、鳥類ながらも此の鳥の、我が言ふ事を聞き分けし。天が下に此の鳥ほど、かはいいものはよもあるまい。」と宣へば、更衣も興に入り、「まうし姉様、いざ此の鳥に砂水かけて、最早休ませ申さん。」と、籠引き寄すれば何とかしけん、籠の戸開けて山雀は、中空かけて三重飛び上る。「これは〳〵。」と、慌てふためき給へども、其の行き方は無かりけり。照手色を損じ給ひ、「一命にもかへぬ大事の鳥を何事ぞ。なう更衣、捕へてかやしや。山雀が無きならば、姉とも思ふな。妹とも思はぬぞ。山雀かやしや、かやしや〳〵。」とせめ給ふ。更衣も詮方なく、「ハア悲し何とせん。遠くへは行くまじ。」と、屏中門を押開き、走り出づれば兼氏に、會釋もなく行き當り、はつと上氣の紅に、はや男見る目遣ひあり。稍あつて更衣、「何方とは知らねども、姉様の秘藏の山雀取り放し、御機嫌損ひ迷惑なり。捕へて給べ。」とぞ仰せける。小栗聞き給ひ、「これにてあらまし聞き候が、嘸御難儀といとほしし。命なりとも參らせん。空飛ぶ鳥は何とも。」と、情ありげにのふ日影、照手遙かに御覧じて、魂深く染め渡る、色は詞に綻びて、「これなう更衣。まこと山雀歸らずば、鳥のかはりに其の殿を、捕へてかへしや堪忍せん。」と宣へば、更衣悦び、「近頃卒爾な事なれども、姉上の御機嫌なほして給べ。偏に頼み參らする。」と、袖を引けどもうちつけに、さすがの小栗も興さめて、當惑したる風情なり。更衣重ねて、「なう最前のお詞に、命なりとも用ならばと、

畠も踏み散らし、行き方知らずなりければ、草刈共は肝を消し、皆ちり〳〵にぞ逃げにける。案の如く追手の者、「此處。」「彼處。」とどよめきて、「これ〳〵此處へ手負は來ぬか。」と問うた。さてこそと池の莊司、「ム、誰とは知らず深手を負ひ、彼の畦道を落ちたりし。これ〳〵のりを引いたり。血のある方へ追つかけられよ。」と、牛の血を教ふれば、追手は悦び、「疑ひもなくこれなりき。過分〳〵。」と、牛の血を慕ひてこそはおつかけけれ。時の間の善を爲し、人を助くる發明は、總明叡智身の内の、盡きせぬ寳ぞ　三重　ありがたき。さて其の後に、兼氏つく〴〵思せしは、牛を放せし童ども、言譯は何とかせし、覺束なし。」と、横山の門外に佇みて、しばし窺ひ立ち給ふ。されば横山の郡司信久は、伊豆相模をしるよしし、五人の子をもたれしが、末は照手更衣とて、二人の娘戀知りの、二八三五の玉簾、情をぐする閨の内、「秋風寂しいざ給へ。的場の庭の雨の後、石などりして遊ばん。」と、姉妹連れて出で給ひ、「ア、ほんに氣が晴れた。」と、につと笑顔の花桂、雲の黛寂寞として、眼元にしほの闌干たり。兼氏遙かに垣間見て、「都優りの娘ども、戀の種蒔これこそ。」と、屏中門に身を寄せて、うかと見入りておはしける。見る人ありともしら砂に、山雀籠を据ゑさせて、柳にとまる蝶々や、松葉に巣がく蜘蛛取りて、籠に放ちて振る袖の、手飼になづく山雀が、とんと返りて輪を拔けて、其方へくるり此方へくるり、くるりくるみ姫、くるみ姫が詞について、廻れや〳〵、めぐれしやんと羽返す、

て三國無雙の名馬あり。彼の御馬と申すは、神變不思議の相を得て、春は梅花の香を食らひ、夏は卯・の花菖蒲草・今は折から秋草の、露を其の儘秣に飼ふ。若しまた彼の馬ある〻時は、人秣を飼はざれば、廏にも立て難し。さるによつて近國野山にて、毎日百荷の草花を、假初ながらこれとても、君が爲。」とぞ語りける。かかる處に二十歳許りの侍の、大傷三箇所受けながら、太刀に縋つてよろぼひ來り、「これ〳〵お侍と見受け申す。某は後藤左衞門國忠と申す者。當國の住人山形兵衞と申す、親の敵を討ち損じ、御覽の如く深手を負ひ、嚴しく追手のか〻り候。人手にか〻るも無念のいたり、介錯頼み存ずる。」と、既に自害と見えし時、小栗主從すがりつき、「やれ待て若者、如何に深傷を負うたるとて、親の敵をうちそんじ、死なんとは何事ぞ。叶はぬまでも逃げ延び、重ねて本意を遂げうとは思はぬか。某は流人小栗判官兼氏、此の上は死なせぬ。追手か〻らば我々に任せよ。サア落ちよ若者、エ、臆れたかうろたへたか。如何に〳〵。」と宣へば、後藤左衞門聞きもあへず、「さては承りおよびし小栗殿にてましますか。御教訓至極仕り候。其の儀ならば落ち申さん。萬事は頼み奉る。此の度の御厚恩全く忘れ申さじ。」といへば、「イヤ禮までもなし。これ幸ひの物あり。」と、鳥威の蓑笠を左衞門に打被け、いそげ〳〵。」と力をつけ、あらぬ道へぞおとしける。もとより小栗案深く、彼の草刈が牛引寄せ、太刀引拔いて胴中を、したゝかに切り下げ追つ放せば、牛は猛つて朱に染み、畦も

當流小栗判官

第一

昨日まで早苗とりしが何時の間に、稲葉戰ぎて秋の野や、萩の朝あけ荻の夕ぐれ、月の桂も色まして、大抵四時心總てねんごろなり。中に就いて腸を斷つ秋の天、と作りし唐の歌さへ身に染みて、目出たき秋の眺めなり。扇の嵐何時しかに、今朝は野分と吹きかはり、一本薄穗に出でて、世にかくれなき美男たる、東三條の末流小栗判官兼氏は、往んじ春流人となり、相模が原の配所の庵、せめて慰む方もやと、池の莊司を御供にて、外面の野邊に立ち出でて、都に知らぬ山畑や、一叢粟の鳥おどし、鳴子に馴るゝ友鶉、妹脊兎の孕むてふ、桔梗が露に戯るゝ。野菊紫蘭の亂れては、袖もさながら花摺衣、裾野に響く草刈笛、尙目がれせず見給へば、十二三なる草刈ども、牛追立てて鎌振り上げ、花をかるかや女郎花、押分け〳〵來りける。小栗御覽じ、「心なし童ども、牛馬に飼はん爲ならば、花なき草こそあるべけれ。露も盛りの秋の花、如何に田夫の汝らも、つれなし。」とありければ、童ども承り、「御道理やさりながら、我々は此の國の押領使、横山殿の御内の者。されば横山殿鬼鹿毛と

よりは、君にひかれて萬代やへん、と子の日の松の行末も、久しかるべき例ぞと、君を祝ひし名歌なり。十八番のをはりには、左に平の兼盛が詠歌を見れば、くれて行く秋のかたみにおく物は、我がもとゆひの霜にぞありける、と老いをいとひてよむ歌も、たゞ我々が身の上に、思ひしらるゝことわりの、むかしにかはる黑髪は、霜のおきなと衰へて、過ぐる月日はあづさゆみ、ひくにとまらぬ世の中の、生老病死の有樣を、悟れとよめる心なり。右のとまりは中務、是れこそ伊勢がひとり姫、母に劣らぬ名人なり。つらねしうたは、黃鳥のこゑなかりせば雪きえぬ、山里いかで春をしらまし、と實に心なき鳥類も、時を忘れぬ初こゑに、四方の春をやしらすらん。されば花に鳴く鶯、水にすむかはづのこゑ、何れか歌をよまざるや。神も佛もおしなべ納受あるは此の道なり。ヤア弓馬の家に生るゝとも、歌の道をもたしなむべし。」と、一々次第にかたらせ給ひ、すぐに還御なされける。今にたえせぬ大日本、王法佛法國法は、萬劫經るともよも盡きじと、貴賤上下押しなべて、悅びの眉をぞひらきけり。

百日曾我　終

をば隱せども、妻こひかぬるをり〳〵は、けい〳〵ほろゝとなく聲に、よその袂もぬれぬべし。右の方の第三は山邊の赤人のつらねしうたは、和歌の浦にしほみちくればかたをなみ、あしべをさして田鶴なきわたる。實に此の浦のならひとて、女浪は立たで片男浪、蘆邊の田鶴の立ちさわぎ、行方もしらぬこゝろなり。在原の業平の歌のことばは、世の中にたえてさくらのなかりせば、春の心はのどけからまし、と花に心を染川の、ふかき情をあらはせり。僧正遍照の詠歌には、するの露もとのしづくや世の中の、おくれさき立つためしなるらん。實に世の中の有樣は、今日は人のうへ、あすは我が身を白露の、風まつ程の命ぞと、思ひしれとのをしへなり。猿丸大夫は、遠近のたつきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな、とたよりなき身をおく山の、鳥の心にたとへたり。小野の小町が、わびぬれば身をうき草のねをたえて、さそふ水あらばいなんとぞ思ふ、とよみけん歌の心こそ、ことに優れて哀れなれ。むかしの花の一盛り、世におちぶれし行末は、水のうへなる浮草の、さだめかねたる身のほども、思ひやらるゝことばかな。こゝに左の十六に、藏人左近と聞ゆるは、是れも女の歌仙なり。いは橋のよるのちぎりもたえぬべし、あくるわびしきかづらきの神、と詠める心は、いにしへの役の行者の、かづらきやくめぢにかけし岩はしの、渡しもやらで中々に、神にうきめをみしめなは、ながきうらみをむすびける、夜のちぎりぞ哀れなる。大中臣の能宣が、千とせまでかぎれる松も今日

も、是れは神道の根本佛果菩提の妙文なり。人間生死の有様を浦漕ぐ舟になぞらへ、弘誓の海を渡り涅槃の岸に至るべき、其の行末を思ひやる、深き心をよまれしなり。狂言綺語のたはぶれも讃佛乘の因縁とは、よくこそ是れを傳へたれ。扨右の第一は紀の貫之の詠歌に、櫻ちる木の下風は寒からで、空にしられぬ雪ぞふりける。此の貫之と申すは、延喜のみかどの御時に、歌のほまれ世にたかく、御書所を承り、住吉玉津島蟻通しの明神にも逢ひ奉る歌人なれば、是れ又凡人ならずとて、かの人丸と諸共に、和歌の祖師とぞ定めらる。歌の心を尋ぬるに、嵐の誘ふ山ざくら、木陰の雪と積れども、照る日のひかり曇らねば、空にしられぬことわりの、實にたぐひなき名歌かな。左の二番は是れも又、同じ延喜の御宇に有りし凡河内の躬恒なり。詠める歌には、住吉の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つ白なみ。歌の心ははま松の、こずゑのひゞき沖つ風、立つ白浪もおとそへて、神の心をすゞしめの、さつ／＼の聲とや聞ゆらん。右の二番の歌人に、伊勢といへるは女なり。書かれし歌は、みわの山いかに待ちみん年ふとも、尋ぬる人もあらじと思へば。歌のしさいを尋ぬるに、是れは批杷の左大臣仲平と申せし人の、心がはりを恨みつゝ、大和國へおもむく時、よみて送りし歌なれば、さてこそ所も三輪の山、しるしの杉のふる事を、我が身の上によそへたり。扨左の第三は中納言家持。春の野にあさる雉子のつまごひに、おのがありかを人にしれつゝ、とは春の狩場にすむ雉子の、草葉に身

も、太平の代の秋津洲。仁義の道や白旗の、綴野の社に御參詣。忝くも大將御父子曾我兄弟の神靈に御手を合はさせ給ひければ、近習外樣の召具の人、殘らず法施をさゝげられ、取分き今日は重陽の、折に幸ひ曾我菊や、種たやさじと若共に、河津の本領三萬町、安堵の御判の墨色も、深きめぐみに取りそへて御恩をになふ木瓜の、紋も再び榮えける。目出度かりける次第なり。

歌仙

さて其の後賴朝公拜殿に立ち出で給ひ、數の歌仙を御覽じて、「いかに方々聞き給へ。何れの宮社頭にもみな萬民の宿願にて、繪馬歌仙をかけ奉る。中にも此の三十六枚の歌仙と申すは、是れ雙びなき名歌たり。あるとのみ許りにて事の心をよもしらじ。いで〳〵此の歌のしな〴〵を、あらまし說いて聞かすべし。こなたへ參れかた〴〵。」と、一々次第にのべ給ふ。「そも〳〵、此の歌仙といつぱ、中比四條の大納言公任といひし人、選びおかれし人々なり。歌仙と書いては歌のひじりと是れをよむ。されば三十六人の歌人は、世にたぐひなき名人なり。先づ左の第一番は柿本の人丸。此の人丸と號すは忝くも大聖文殊の化身たり。和歌の道をひろめんため、かりに人間とあらはれ、奈良の帝にみやづかへ、位正三位に至り、一代の詠歌の數五千三百八十首、みな眞言の祕密なり。中にもこゝに書かれたるは、ほの〴〵と明石の浦の朝ぎりに、島隱れ行く舟をしぞ思ふ。此の歌の口傳樣々なりと申せど

が有らうと思ふか。うき世も命もすて坊主、いつの時をか待つべきぞ。鎌倉中の大名の總名代には不足なれども、己が相手ぢや、逃さぬ。」と、腕捲りし怒りしは、凄まじかりける勢ひなり。彼の者笠をとつて捨て、「オ、賴もしし〳〵。必ず麁忽せらるゝな。某は賴朝公の御近習大友の一法師、元服して大友の左近の將監に任ぜられ、若君へ付けられ、唯今は賴家公につかへ申すよ。然るに祐成時宗前代未聞の勇士とて、君御感まし〳〵、照明荒神現人神と齋ひ、富士の裾野に社を立て、兄の宮弟の宮觀請あり、近日御社參との御事なり。其の節兄弟の忘れ形見のをさなき者共、所領を下され賴家公の御伽に、召し出されんとの御內意なり。然れどもかた〴〵久しく沈淪流浪の家、俄の用意見苦しかるべし。沙汰なしに此の黃金手に入れおけと、忝くも賴家公御懇切の尊意なり。必ず麁忽し給ふな。」と、いひもあへぬに禪師坊、「あつ。」と頭を地につくれば、老母を始め虎少將、鬼王兄弟轉び出で、「世に有り難き御惠み、いつの世にかは忘るべき。是れに付けても祐成や時宗が浮世に存へ、此の仰せを同じ樣に承る程ならば、いかに嬉しかるべき。」と、先立つ物は涙なり。大友重ねて、「御內意なれども此の首尾にて、斯樣に顯はし申す上は此の通りを披露致し、追付け御社參あるべき間、其の節罷り出でむかひ、御目見え候べし。委細は和田殿秩父殿より申さるべし。先づお暇。」と有りければ、唯御前をば宜しき樣に。」と禮儀をのべ、いとま乞ひつゝ用意ある。歎きはうせて目出度さの、曾我の出世の悅び

「イヤ是れは我一人の金子にあらず。鎌倉の大名衆かた〴〵をみつぎの爲、少しづゝ奉加をいたされ集められたる金なれば、恩に被給ふ事でもなし。平に取つて置き給へ。」と、虎に渡せばじたいする。少將にやれども手にとらず。「然らば御兄弟精靈に參らする。」と、さし置いて逃げて行く。禪師坊外より歸り、包みし黄金を取つて彼の者になげ付け、襟元つかんでどうとひつすゑ、「いづくの誰とはしらねども、慮外千萬なる奴めかな。身こそ貧なれ伊東が孫、曾我兄弟が追善ぞや。但しおのれは茶をうる出茶屋と見たか。先祖より此のかた曾我一家が、物を賣つて商賣したる例なし。おのれ誠の心ざしならば、縱へ一紙半錢なりとも、寺へ持參し三寶に供養すべき事。縱へ千金萬金にもせよ、羣集の中にて茶のあたひを取つて、日本無雙の五郎十郎が、潔きしかばねに泥をぬるか、推參者。殊に鎌倉中の大名が奉加してあつめたと、エ、胸わるや穢らはしや。左程曾我を大切に思ふならば、兄弟が存生に心ざしも有るべし。など時宗が一命をも申し受けて助けざりしぞ。祐經が威勢に恐れ世間をはばかり、見ぬ顏せし腰ぬけ共が、なんぢや此の目腐り金。兄弟の者共には忘れがたみの子供等あり。若しもの事の有るならば、蚫共に腹卷させ、此の法師が衣の上に鎧なげかけ、坊主頭に兜をいたゞき、痩せたる馬に打乘つて、太刀脇挾み一陣に進んで、能き敵と引組み討ち取り一方を切り破り、かうなる者の子々孫々と後代に名を留めんと、朝暮念ずる我々が、諸大名の奉加を受け、生きたる甲斐

精靈の、棚に折りしく蓮葉の、盂蘭盆祭る哀れなり。痛はしや母上は、虎少將がくろかみの、思ひ切つたる姿を見て、「面影に立つ我が子の顏、物忘れする老いが身に、など是れ許りは忘れぬぞ。」と、日のくれ夜半のあくるにも、折ふしにます歎きなり。もとより貧家の曾我の末、なほ御勘氣は強くなり、世間ひろき弔ひを、すべき便りもなかりけり。「誠や菩提の死靈は、法界の廻向にしくはなしと聞くぞ。」とて、祐成や時宗の最期場に、日覆ひかまへ竈をまうけ、接待に天台乳花の茶を煎じ、往來の人に施し、一遍の廻向をうくべしと、鬼王兄弟水薪折りくみはこべば、虎少將母上も諸共に、取る茶杓柄の廻向の念佛。往來の僧俗男女貴賤をわかず聞き及び立ちどまり、「是れ廣大の功德ぞ。」と、皆々茶をうけ手向をなし、「一杯に喉を潤し、二杯に暗き心をあきらめ、三杯に枯れたる魂をさぐり、四杯に輕き汗をおこして平生不平の氣を散じ、五杯には肌潔く、六杯にはおのづから仙靈に通達し、七椀喫する其の中に、淸風に乘じて不退地の雲に遊ぶ。」と、みな禮拜して念佛す。妙なる功德と聞えけり。かかるところに編笠にて、顏隱したる侍一人、茶をのみて廻向をなし、懷中より黃金一包取り出し、「近頃殊勝千萬。たゞさへ不勝手の曾我殿、御兄弟にはなれさぞ不自由に候はん。貧者の御茶ただのみ申すはいかゞなり。」と、膝において立たんとす。老母御覽じ、「お心ざしは嬉しけれども、子供が追善にほどこす茶、あたひを受けん樣はなし。返辨いたす。」とかへさるゝ。彼の男小ごゑになり、

方、新田は悦びなるべきが、此の海野は立ち申さず。御邊が馬を盗みし故、某召取つたる禪師坊を忠常に助けさせ、爭ひの有る此の馬を新田にやるは何事ぞ。それでは海野が一分たたず。料簡し直せ朝比奈。」と、いへば義秀えせ笑ひ、「イヤこしやくな一分だて、じたいあの馬は御邊などには似合はず。お主たちには牛がよし。其の上あの馬は手柄三度したる者に賜はらんとの御詞に、ろくな手がらを一度もせいで、御馬を望むは、經もよまずに布施とるか。今でも手柄にサア此の朝比奈をなげて見よ。」と、大手をひろげおひ廻せば、「我儘者の無法やぶり、かまひはせぬ。」と口の内、ぶつくさ／＼つぶやきて、表をさして逃げ出づる。新田朝比奈どつと笑ひ、禪師坊おや子の人に禮儀をなせば、人々も、「朝比奈の心ざし新田殿の御情、敵にてはなかりけり。草のかげなる兄弟も、さぞ悦びのみつせ川、かへらぬ水のあはれ世に、ながらへ一所にあるならば、いかゞはうれしかりなん。」と、なほ繰言のくやみ草、むかし戀草しのぶ／＼、ふせ屋にいざなひ歸らるゝ。實にやたのしみかなしみは、定めがたなき人界なるわと、今こそ思ひしられたれ。

第五

數ならぬ身にも宿にもくる秋は、折もたがへぬ風の音。去年まで魂を祭りし身が、今年はかげも新

田殿、生々世々の御慈悲なるわ。」と、忠常ををがむやら禪師坊をさするやら、行きつ戻りつ泣いつ笑うつ、嬉しさ足も地につかず、暫しどよめき悅びし、心ぞ思ひやられたる。かかる所へ朝比奈の三郎松島月毛の口をとり、御白洲にはせさんじ、「義秀めは盜みを仕り、直に立ちのき候へども、思案を仕り、我と我が身を訴人に罷り出で候。盜んだ所は罪深けれども、自身訴人の御褒美に、此の馬は朝比奈が拜領致し申すべし。若し御聞入れなくば訴人致して益もなし。一層元の盜人なり。和田の一門九十三騎、三浦の一黨同類を組し、盜みを致す程ならば、恐らく鎌倉中東八ヶ國を盜み立て、後には何を盜まうもしれ申さず。時には却つて我が君の御損たらん。理をまげて義秀に拜領仰付けられかし。」と、恐れなくこそ申しけれ。賴朝笑はせ給ひ、「朝比奈が我儘今に始めぬ事ながら、是れは餘り興がつたり。さりながら、和田一家に免じてとらするなり。」と仰せける。朝比奈かうべを地に付け、「有り難し有り難し。」と御禮申し、「扨こりや新田、お主は近比でかいたり。あの禪師坊が命は、日本國が御訴訟しても叶はぬ所、先づかうせうと思ひ、扨此の馬を盜んだり。朝比奈と同腹中、でかいたでかいた。サア此の馬を朝比奈が引出物に和殿にやつた。是れでどこも圓うなる。名は朝比奈となのれども、智慧はふかひな分別義秀。ほめてくれよ。」と、どつと笑へば、我が君も伺候の人々一同に、興に入つてぞ感じける。かくて大將簾中に入り給へば、海野太郎行氏役所よりかけ來り、「コレ朝比奈殿、御邊の仕

はらんとぞ申しける。君聞召し、「それは沙汰にも聞きぬらん。新開を使にて汝が方へ引かせし所に、朝比奈が狼藉にて盗み取り、行き方しらず。それ故義盛を初め三浦一黨閉門をせさせ、新開までも出仕をとゞめ置きつるわ。」と宣へば、新田大きに不興し、「いや是れは御諚とも覺えず。以前君の仰せには、三度の手柄仕れ。それまでは賴朝が預つたりとの御意なれば、畢竟我らの預け物。盜まれしとは大將の御意とも存ぜず。馬を得ん許りに祐成を討つて候間、是非に於てお馬を、後ともいはず、たつた今賜はらん。」とぞねだれける。垣の外には母上、「憎き奴が詞やな。縱へ龍馬千疋萬疋にもせよ。人の大切のひざう子を、馬にかへて討つたるとは、人非人の畜生め。」と、聲を上げてぞなき給ふ。賴朝もあぐませ給ひ、「其の義ならば外の物を何にても望め。」とある。新田邊を見まはし、「然らばお馬のかはりに、此の禪師坊を申しうけ候べし。」「いや／＼彼は大事の囚人、かなふまじ。賴朝が重代、ひげ切膝丸にても望め。」とある。新田かぶりをふり、「イヤ馬は四足有る物に、足も手もなき御太刀はいやにて候。ぜひ禪師坊を賜はらずば、但し始めの通り松島月毛を賜はるか。二つに一つの御返答承らぬ其のうちは、全く此處を立ち申さじ。」と、どうど座をくみ居たりけり。賴朝思案につきたまひ、「此の上は詮方なし、禪師坊をとらする。」と御詞も納まらぬに、「こは有り難し。」と罷り立ち、繩きり解き塵打拂ひ、「是れ／＼曾我の母御、疾う／＼つれて歸られよ。」「ハッ。」と許りに手を合はせ、「神か佛か新

る。不輕菩薩は打擲せられ憎まれながら、妙覺の佛の位に至り給ふ。皆是れ一念信解のとく。それ六字の名號といつば、華嚴經にて南の字を表はし、阿含經にて無の字をせつし、方等經にて阿の字をひらき、大般若にて彌の字をつゞめ、法華經を以て陀の字を皆會し、南無阿彌陀佛と申すなり。妙樂大師の御釋に、諸經所讃多在彌陀緣深厚故とのべ給ふも、深き心や有明の、一心三觀のむねの月は、圓頓止觀のそらにかゝり、隨緣眞如のはつしほは、同一鹹味の岸にみつ。中道實相の車は、無二無三のかどに轟き、一乘菩提の駒は、平等大慧の園に斷ふ。等覺深位の時鳥は、妙覺究竟の峯になき、二乘作佛の鶯は、無作三身の谷にさへづり、諸行無常の春の花は、是生滅法の嵐に散り、生滅滅已の秋のしぐれは、寂滅爲樂の紅葉をそむ。一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟りを得、韋提希夫人の無生忍にあやかり給へ、母上樣。禪師が素懷是にあり。思ふ事もいふ事も是れまでなり。人々サア我が首を召されよ。」と、目をふさいでぞ居たりける。賴朝重ねて、「學問といひ武勇の法師、近頃惜しき者なれども力なし。此の上は罪な作らせそ。早々討つてすてよ。」と有る。然る所へ新田の四郎忠常、「言上のこと有り。」と、簀戶をひらかせ伺候する。人々は涙ながら、「あれ祐成討つたる敵。人こそ多きにあの者が討つたるか。恨めしや面にくや、腹立ちや口をしや、食ひ殺してのけたや。」と、齒がみをなして歎かるゝ。忠常御前に向ひ、「曾我の十郎を討ちとめ、高名三度の都合あうて候。御契約の御馬賜

らせて、滿座の諸武士下々まで、袖を絞らぬものはなし。

三　ぶきやう

やゝあつて禪師坊、「ア、愚かなり母上さま、疾病におかされ劒にふし、火に入り水におぼるゝも前世の業、品こそかはれ生死の緣、のがるゝ道のあるべくは、世尊入滅あるべしや。十神力をあらはせば、一日も百千ざい。迷ひの衆生は以如半日、あかず惜しと思ひなば、千歲の夢の心ぞや。母も姉も聞き給へ。禪師坊がさいごに、自受用卽身成佛の御法をといて聞かすべし。御前伺候の人々も、なりをしづめて聞き給へ。それ世尊一代五千七千の經卷は、そも華嚴寂滅場に始まり、法華涅槃に書き終る。其の中間の五時八敎。中にも薩達磨芬陀利花、妙法蓮華と翻じたり。三世の諸佛出世の本懷、衆生成佛の直路、超八醍醐の鷲の峯、うへなき法と說かれたり。こゝにしばらく緣なき衆生を度せんがため、方便の門をかまへて妙法蓮華の、五字をかくして南無阿彌陀佛の六字に攝す。五戒十善の窗の前には、顚倒の霧立ちのぼり、坐禪の牀には、煩惱の眠り深く、修行の天地にいたりがたき愚癡の凡夫は、六字を稱して極樂に往生す。娑婆分段の凡身には、恩あり仇あり貧福あり。善惡上下のしなじなも、冥途の道に入りぬれば、刹利も首陀もかはらざりけり。己心の彌陀、唯身の淨土なれば、本來無東西、何處有南北と觀ずべし。提婆達多は前生にて佛の師匠たりし身が、阿鼻に墮して苦をうく

それもお心次第。さりながら愚僧を助けおかれうならば、あつぱれ御身の一大事。明暮君を見るたびに、うらめしや先祖のあだ、恨めしや〳〵と思ひつもつて何處ぞでは、御首ほしくなり申さば、麁忽いたさんは必定。然れば虎の子を飼ふに似たり。よつく御思案候へ。」と、猶はゞからず申しけり。御前伺候の諸大名、「誠に河津が子なりし。」と、舌を卷かぬはなかりけり。君も感涙押へかねさせ給ひ、「あつぱれ猛き勇士どもや。彼等兄弟召しつかはば、賴朝が一方の用にも立たんずものなれども力なし。時宗が最期の所へ引出し、討つて暇をとらすべし。」「畏まつて候。」と、引立てんとする所へ、老母二の宮虎少將、警固も番もおぢばこそ、外垣二かは押通り、御白洲の内がきにひし〳〵とすがり付き、「やれ母こそきたれ禪師坊、淺ましの有樣や、やれ可愛の者や。」と泣きさけび、「なう我が君も聞召せ。老中達も聞き給へ。そも出家は佛子とて、衣を墨に染むるなり。釋迦如來の御子となり、此の世の父母兄弟とは、他人になつたるあの法師に、何の科の候ぞ。侍の子の敵うつたが不思議かや。時宗が切られしさへよに御恨みに思ひしに、遠國波濤の隅々まで、さ程にさがし曾我一家を、絶さで叶はぬ事なるか。あの子許りは助けてたべ。なう御慈悲なるわ人々よ。申しなほして給はれ。」と、理非をもわかず聲を上げ、垣にすがり伏しまろび、きえ入り絶えいり泣き給ふ。今まで勇む禪師坊、母の歎きを一目見て、朝日にきゆる初霜の、たゞしを〳〵と心くれ、前後もわかぬ其の有樣、君を初め參

誰人にかは渡すべき。」「お二人の御最期にも、一足ちがうて逢ひもせず、わすれ形見に禪師様を、見んと思ひてはる〳〵ときたる甲斐なき旅衣。ひだりまへなる世の中や。」と、歎くも心便りなし。「此の上は越後に行きて益もなし。曾我に歸りて母御樣に一先づ知らせ申さん。」と、今きし道を立ち返る、心の内こそ侘しけれ。去る程に右大將賴朝公、「曾我一類の落著は、富士野にて御沙汰あるべし。」と、未だ假屋に逗留ある。かかりし所へ海野の太郎、禪師坊を召しとつて御前に引据ゆる。君御覽じて、「和法師は河津が末子よな。兄共が敵討ちしを知つつるか。但し知らせざりつるか。」と御諚ある。禪師居丈高になり、「恐れながら大將軍の仰せとも覺えぬ物かな。一ッ腹一生の兄が親の敵をうつと申すに、しらぬ顏する人間や候べき。但し法師なればしつても討つまじき奴と御覽ぜられて候か。我が君天下を知召すも文覺と申す法師の力。此の坊主文覺程こそ候はずとも、一寸の蟲に五分の魂、かくとしらする程ならば、衲經を兄共におし向け、愚僧は御座近く推參致し、祖父伊東入道が御恨みをも申すべかつしものを、殘念や本意なや。」と、はゞかる氣色はなかりけり。賴朝なほも心ざし引き見んと思召しけん、「ォ、さもこそあらめ。汝はさせるとがもなし。伊東が所領をあたふべきが、還俗して賴朝に奉公してんや。」と宣へば、禪師眼に角を立て聲をあらゝげ、「よつく某を腰拔と御覽ぜしな。兄共は誅せられ、三衣になはをかけられて、所領がほしい命がをしい、還俗いたさんと申さうか。但

露の牀、こちよれ枕ひきよせて、寄せてもしめても又恨みても、抱きぢからなき草枕、投げそ枕にとがもなや。「いざ。」とて二人よりそへど、女子同士の徒臥や、我は眞紅のヨウヤヨヤヨ結ほれいとの、解けぬこゝろが辛ござる。トヨエいよつろござる。とけぬ心の氷室もり、夏の氷もあればある。團雪の扇雪なれど、消えてものこる世のなかに、ア、いかなれば我々は、戀の瀬越をいくせとも、越えて甲斐なきなゝせ川、四十八ヶ瀬うちすぎて、こしのしらやま白雪の、つもるは富士に似たれども、裾野の原に我が思ふ、魂の在所はあらしふく、松江の里くれゆけば、暫くやすらひ、三重たちたまふ。

日も暮れ行けば人々は、宿をからんとやすらひ給ふに、「曾我一類の囚人此所の泊りにて、外の旅人は一人もこよひの宿は叶はぬ。」といふ。「南無三寶。」と膽を消し、「曾我一類の囚人とは誰なるらん。」と問ひければ、「五郎十郎が弟、越後國國上の寺禪師坊といふ法師を、海野太郎行氏殿が承り、召取つて御通り、用心かたく仰せ出され、旅人の泊りはかなはぬ。」と、言ふうちにはや牢輿の前後嚴しくとりかこみ、御家人さきを打ちはらひ、海野の太郎は押へを乘つて、弓に矢つがひ長刀のさやはづし、朝敵謀反の生捕なんどの如くにて、驛路のなかへかき入れしは、見る目もあはれに淺ましし。「聞き給ひしか少將樣。」「こはいかにせん虎樣なう。」「せめて御兄弟のうつりにもなれかし、又は母御の御なぐさみ、便りをだにもと心ざし、はる〴〵下る甲斐もなく、はや召捕られ給ひては、なき人の御形見も、

戀風を、よそに吹かせてやつし行く、世の習はしこそ果敢なけれ。人は兎もいへ我が身には、三國一の殿もちて、富士さへ次に見し山の、今は上なき雲のみね、月を招きしあふぎにも、見しはかへらで面影の、なほなつかしみ御影堂。城殿があふぎ召すまいか。夏をわすれて涼しさは、秋と白地や淺葱地や、さつとくまどる一筆がらす、なにをうらみに仇し世を、墨繪彩色いろ〳〵に、情の種をまき砂子、すかし扇に唐扇、あふぎ〳〵、あふぎ召せ〳〵。あふぎとは空言よ。あはでぞ戀は、どれ〳〵それます、それます鏡團扇や奈良團扇。扱繪團扇のしな〴〵は、武者繪のたけき武士も、心やはらぐおやま繪や。浮世男繪立髪に、ながい刀をさすぞ杯やつこの〳〵、奴がうけし武藏野の、くさ花づくし青によし、丹や綠青ぬり團扇。羨やましきは高砂の、夫婦いもせのとも白髪、我になけとや箔うちは、風をあきなふ其の身さへ、空の暑さは凌がれぬ。しのの石原日にやけて、蝶も翼を休めかね、千鳥鶺鴒足ひやす、清水がもとのやなぎかげ、風を見つけて走りつき、立ちやすらへばさら〳〵〳〵、さつと時雨の雨かとて、ころにかさきる夏の蟬、春秋しらぬ可惜世を、よそに聞きしも身の上と、是れも涙を添へぬべし。ならはぬ旅の憂き泊り、夢さへ薄く間遠なる、蚊帳のつり手のみじか夜を、來ては水鷄のこと〳〵と、格子たゝくに聞きまがひ、思ひまがひつ見まがへて、雲まにさわぐ稻妻と、行方もしらぬ思ひぞや。身はならはしの假寢にも、あひなれし夜のくせわるく、ひとり寢られぬ

ぢかける。新開ほうどもて扱ひ、「所望ならば御前にて直に訴訟候へ。某はお使なれば罷り通る。」と行かんとす。「どつこい／＼、扱はしかとなるまいか。朝比奈は惡いくせ。あるひは敵の首でも城でも、欲しいと念をかけてからは、取らずに置いたる例なし、是非に及ばず此所で山賊して盜み申す。後日に盜人とあつて、切腹仰付けられんは必定。馬と朝比奈とは頼朝こそ換損なれ。サァぬすんだ。渡せ。」といへば、「ヤァこいつ男を見ちがへたか。新開なるぞ盜んで見よ。」と氣色する。朝比奈くつくつとふき出し、「イヤ見違ひはせぬ。なるほど／＼、曾我兄弟に出合ひ小柴垣をおしやぶり、たかばひして逃げたる新開見しつた／＼。サァ馬を盜む留めて見よ。」と、取つて突きのけ馬取り中間蹴倒し、手綱かいくりひらりと乘る。主從、「やらじ。」とよる所を、馬引きかへし八方へ、ふみちらし／＼鞭うちくれてかくをいれ、雲をかすみに飛ばせける。新開は力なく、童の手を切つたる如くにて、恨めしさうに打眺め、「待て己覺えてをれ。」と、御所の假屋へ　三重立ちかへる。

とら少將道行

戀といふ文字の字形を判じもの、言葉しがらむから絲の、解くにとかれぬした心。いとほしや虎少將、母の歎きをいさめかね、慰めかねつせんかたも、涙のうちに思ひつき、すこし力を越後なる、禪師の君に告げばやと、旅だつ姿此の儘は、人や見しるとさしかざす、扇あき人團扇うり、昔しのぶの

明王は一人の爲に其の法をまげずとかや。されば賴朝、曾我兄弟が有樣甚だ感じ思召し、時宗が死罪を宥めまほしく思せしかど、國法もだし難くして、明くる二十九日に誅せらる。扨又新田の四郞には、高名三度の御契約相違なく、松島月毛に金覆輪の鞍あぶみ、五色のあつぶさ馬よろひ、新開の荒四郞御使を承り、新田が假屋へひかせける。朝比奈の三郞義秀は、曾我兄弟の墓詣して歸るさに、此の體を見て無益しくや思ひけん、つか〳〵とより「ヤア新開殿、見申せば君御ひざうの名馬をひかせて、どれへがな。」といへば、新開聞いて「わ殿は御存知ないと見えた。新田の四郞忠常拜領なり。」とこたふ。朝比奈とほけた顏にて「ムウ珍らしや。此の馬は池月磨墨にもまさつたりとて、秩父北條我らが親父をはじめ、此の義秀さきとして、皆々願ひ申せしかど、下されぬ御祕藏を、新田には何として。オ、ウ合點々々。値がよさに賣らせらるゝの。」といふ。新開重ねて「ハテ惡口を申さるゝ。新田は富士の人穴へいり、希代の猪をのりとめ、曾我の十郞をうちとめ、高名三度に及びし故、御契約にて拜領なり。」と、いはせもはてず朝比奈から〳〵と笑ひ「イヤしやらくさい腹筋千萬。三度や五度の高名を珍らしさうに何事だ。但し高名して御馬を貰ふならば、保元平治より源平の合戰まで、高名有る者數をしらず。此の朝比奈もお耳にたつたる覺えあらん。高名づくにて貰はるゝ御馬ならば、新田までやらせうか。此の朝比奈が拜領まうした。ふせうながら新開殿、お取次よい樣に賴み申す。」とに

樣の殿御とある御兄弟に、そもや如才をいたさうものか。宵にはや御兄弟の危き所をたすけ參らせ、こよひの御本意とげがたかりしを、わらは心のはたらき故、扨みづからに組みとめよとの御契約候。」と、よひの次第をあらましに、語るも聞くもいそがはしく、「サア此のうへはこゝの勝手を案內して、御兄弟に今生で今一度あはせてたべ。はや今のまもお命しれず。はや尋ねん。」といふ所に、夜廻りの本田の二郞馬上ながら大音上げ、「曾我の十郞祐成は新田の四郞が討ちとめ、弟の五郞時宗は五郞丸がくみとめて、はや事はをさまりぬ。御所の假屋は安全なり。鎭まり候へしづまれ。」と、館々をふれまはる。人々、「はつ。」と耳にたち、「あれ聞き給へ。」と、魂もきゆる許りに身にこたへ、「若しや〳〵のたのしみの、心の綱もきれはてたるか情なや。同じ道に。」と走り出で、かけ出で〳〵歎かるゝは、目もあてられぬ許りなり。龜菊やう〳〵慰めて、すかしいさむる詞のつゆ、「共にきえては誰人か、ながき來世をとぶらはん。此の世許りはみじかよの、その明けぐれに星消えて、澤の螢や鳴く蛙、昨日の聲にかはらねど、今のあはれを忍び音に、とぶらひかはす八聲のとり〲、野寺の鐘のひゞきまで、又まつ宵にいつ聞かん、これや限りのきぬ〲ならん。」と、泣く〳〵つれてぞ歸りける。

第四

た。」といふてしつかとだく。時宗ふり返りきつと見て、「扨は龜菊ござんなれ。今少し死ぐるひに、よき侍二三百も切りとめたくは思へども、契約なればャア搦めよ。あつぱれおのれは日本一の剛の者をぐんでうずよ。」と手をまはすを、高手小手にからみ付け、大音あげて、「天魔波旬と呼ばれたる曾我の五郎時宗を、御所の五郎丸が生け取つたり。をりあへやつ。」と、うすぎぬ取れば童なり。「南無三寶、はやまつて搦捕られし口惜しや。」と、はぎりをなしぢだんだふみ、かゞみの樣なる兩眼に、涙を流すぞ哀れなる。是非なく大勢をりかさなり、千筋の繩を四方へ取り、引立て行くこそ無念なれ。かくとはしらで黃瀨川の龜菊は、曾我の五郎に契約あり、組止めんと顏かくし、繩をかいこみ此處彼處目をくばつて尋ねける。虎少將も、「兄弟はまだ討たれ給ふまじ。此さわぎの其の内に、ちらとなりとも顏を見て、冥途の契りを結ばん。」と、おなじ所を行きかへり、立ちまふ揚羽の直垂は、背に見たりし時宗なり。「あまさじ。」と飛びかゝり、「黃瀨川の龜菊ぞや。時宗やらぬ。」としつかとくむ。くまれて少將振放さん〳〵と悶ゆれども、龜菊ははなさじと捻ぢあふ所を、虎御前兩方へおしわくる。顏を見れば少將なり。龜菊、「あつ。」と驚きて、暫し呆れて詞もなし。やゝあつて虎少將、「つれないぞや龜菊殿。昨日今日までかう三人は、兄弟よりも底意なく、あかしあひたる中ぞかし。時宗やらぬのがさぬと、女子の際にあんまりな。さうしたものではないぞや。」と、言ひ捨て行くを引留めて、「御恩をうけし皆

妙や。蛇は一寸にして兆あらはれ、頻伽は卵の内にて其の聲諸鳥にすぐるとは、殿原達の御事よ。幼少より日陰の身、武士の參會も絶え百姓土民に打ちまじはり、弓馬の道もとり失ひ給ふべきかと侮りしに、異國の子路が勇にもまさる。唯今御扶持を下さるゝ鎌倉武士は多けれども、誰か殿原に優るべき人はなし。河津殿の御子なりけるぞ。勇力孝行仁義の道、か程たつせし祐成を、いかに契約なればとて、新田などがむざ〳〵と御首を給はるは、天の咎め弓矢の罰、緣の人の歎きの程、思ひやられて今更に、いづくに太刀をあつべきぞ。忠常討たるればうたるゝまでよ。運に任せ勝負あれ。なう祐成殿十郎殿。」と、尙せきかぬる感涙は、理せめて哀れなり。十郎も涙にくれ、「嬉しき人の詞や候。年月ねらひし敵を討ち、御邊の樣な弓取の、手にかゝつて死なんこと、祐成はなんぼう果報のもの、成佛までも疑ひなし。はや首を取り給へ。」と、涙をとゞめいひけれども、忠常は目もくれて、討つべき氣色はなかりけり。祐成怒つて、「エ、曲もなし忠常、雜兵の手にかゝつて名をくたせとの事なるか。ぜひに及ばず自害せん。」と立ちあがれば、忠常、「ォヽ誤つたり御免あれ。南無阿彌陀佛。」と諸共に、水もたまらず打ちおとし、きつさきに首つらぬき、「鬼神とよばれたる曾我の十郎祐成を、武藏國の住人、新田の四郎忠常討ち取つたり。」とぞ名乘りける。無慙やな、時宗はにぐる敵をおつかけしが、「今は何をか期すべき。」と、御所の假屋へはしりこむ。簀戸の陰より女の姿、薄衣かづいて、「時宗を捕つ

兄弟左右より諸臑なぎ、四つ五つに切りちらし、門外さして切り出づれば、「すは夜討こそ入りたれ。」と、弦なき弓に矢をつがひ、つなぎ馬に鞭を打ち、太刀のつかをこしにさし、上を下へと[illegible]かへしける。太樂の平馬の丞、「祐經が討たれし上は、狼藉者は曾我殿原。いで／＼きやつらを討ちとめて、狩場の猪の恥辱をすゝげ。」と、愛甲安西海野臼杵が、いれかへ／＼打ち出づる。兄弟は事ともせず、小柴垣を小楯に取り、もみにもうでぞ戰ひける。多勢とは云ひながら、曾我殿原が死狂ひに、手負討死四百人、足のふみどもなかつし所に、新田の四郎忠常、「祐成に契約有り。首をとらん。」とかけ出でしが、「イヤ新田の四郎と名乘りなば首さしのべんは必定。それは武士の本意ならず、運づくの勝負せん。」と、祐成にわたしあひ、切りむすび切りほどき、たゝかふひまにも祐成は、「本望は達したり。をしからぬ命なれども、新田の四郎忠常に、預つたる我が首を、人手には渡さじものを。」と、呟きながら打ち合ひたり。新田是れを聞くよりも、「やさしき者の心ざし。」と、なほ恥ぢ入りて名乘りもせず。物のあいろも見えざれば、松明出せ。」とよばはるこゑ。祐成、「はつ。」と飛びしさり、「さいふ和殿は新田殿か。」「オ、忠常。」と答ふ。「南無三寶こはいかに。それともしらず最前より、太刀を合はせしくやしさよ。厚恩といひ契約の誓文違へし面目なさ。サア契約の首取り給へ。」と、太刀を投げすて座をくみて、首さし延べてぞ待ちゐたる。新田涙をはら／＼と流し、「扨も／＼優しき今の振舞、頼もしや神

「アレ夜廻りか番衆か。見付けられてはあしかりなん。一先づのけ。」と一叢の、森を目あてに走りすぎ、逢はでわかれし本意なさよ。兄弟は祐經が假屋の外垣切りやぶり、中門につゝといれば、郎等若黨悉く、晝の狩には仕疲るゝ、雨を頼みのゆだん酒、みな高いびきして伏したりけり。所々のともし火をふきけし〳〵、そろり〳〵と差足して、なんなく敵祐經が、一間の寢所に忍びつき、溜息ほつとついたりし、心の中こそ嬉しけれ。「サァ是れまではしすましたり。今暫くぞ、南無八幡、箱根兩所伊豆三島、力をくはへ給へや。」と、近付きよつて見てあれば、祐經沈醉高枕、前後もしらぬ其の有様、「一眼の龜の浮木にあひ、優曇鉢華の三千年の、春にあひたる心地ぞや。優曇華のさく時はをがみて枝を折るとかや。まれに逢うたる親の敵、をがみ打ちにうてや。」とて、につこと笑うて立つたりし、うれしさ類はなかりけり。兄弟刀をぬきはなし。祐經がむないたに、あてては引きひいてはあて、大音上げて、「河津の三郎が嫡子十郎祐成。」「次男五郎時宗なり」。「おきあへや祐經、左衞門やッ。」といふ聲に、「心得たり。」と、枕の太刀とらんとするを、祐成左手の肩より右手の脇、衾をかけて切り付くる。「五郎是れに。」といふ止に、腰のつがひを板敷まで、きれもきれたり年月の、仇と怨みと一時に、今打ちとくる氷の太刀、折れもせよ碎けもせよと、寸々にこそ切り付けけれ。側にふしたる大藤内、太刀風に目を覺し、「狼藉あり出であへ。」と、裸身ながらかけ出でて、あなた此處とわめきまはるを、

許りか勤めたる身の總恥なり。どうもお返事なり難し。わるうは聞いてくだんすな。」と、おぐみし色ぞ道理なる。時宗聞いて、「オヽ、至極したく〳〵。日本一の思案あり。兄弟祐經うつての後、御所へきつていらん時、百萬人がかゝつても、事ともせぬ我々なれども、御身向つて此の時宗を組みとめ給へ。女と見たらば某がやす〳〵と搦められん。時には御身も親分を討つたる者を、女の身にてくみとめしと名をとれば、身一分の道は立ち、我々も本意を遂ぐ。ひらに賴む。」と手をすれば、龜菊も恐ろしながら、「おいとしや其の義なら、祐經病氣と中にて御所へお返事申し、今宵のお成りをとめ申さん。御本意とげられ其の後は、みづからに組止められ、我が一分を立ててたべ。」と、いへども流石女心の、身もふるはれて聲こもり、「あれ供人の立ちかへる。二言たがへな。」「たがへじ。」と、左右へ別るゝ雨のあし、行く方くらく風さわぐ。虎少將は寢ねがての、枕に殘る書置を見るより驚き、年比の契りはこゝぞ冥途まで。遲れじ物とかねてより、思ひそめおく蝶千鳥の、裝束引つかけ太刀かたな、鬘小枕取つてすて、地髮ばかりをはちまきし、假屋まぢかく忍び入り、出立小柄にりゝしくて、女とさらに見えざりけり。勝手はしらず雨夜なり、二人手をくみ隈々を、「祐成やおはする。」「時宗やましますゝ。」と、小ごゑに呼うでうそ〳〵と、尋ねまはるは過ぎし夜の、手くだに似ても事かはり、胴慄はるゝ許りなり。かくとはしらず兄弟は、袖打翳し松明に、足もと許りてらさせて、遙かに見ゆる虎、少將、

の一手もまひならひ、上手でもないものを、私が仕合にてまた跡の月、祐經にうけ出され、即ち主の親分にて、唯今は賴朝樣へ御奉公に出され、御酒宴のお肴の、舞や謠や琴琵琶にて、御前みつとめ候が、最前お顏はちよつと見る。供の者が見付けしが、刀の先でも當りましてはと、よきちゑを出して下部どもを去なせしが、定めし日頃のお望みならん。さりとてはあぶない。首尾はあは〱と思ひし故、是れ痞が上つた。御無事なかほ見てお嬉しや。虎樣はまめなかや。少將樣は赤子うまんしたか。杉の疝氣はおこらぬか。猫の子はどうしたえ。がぶろどもは今に穴一しますか。」と、急な所に取りまぜし、女郎はあどなきならはしなり。兄弟氣はせく耳へもいらず、「一だんのお仕合。シテ先づ今宵はいづくへ。」とあれば、「さればとよ鎌倉殿、さみだれの夜のつれ〲に、祐經の假屋へ御成りなされんと有るお使に參る。」と、いひもはてぬに時宗、「イヤ是れ、日頃しつての事なれば何を隱さう。こよひ祐經を打つ覺悟。それに賴朝入り給ひては、本望とげぬのみならず、仕損ぜんは目前なり。何とぞ思案し、賴朝公こよひの御成りをとゞめてたべ。生々世々の厚恩、曾我兄弟が一生に、人を拜むは是れが初め。」と、手を合はせてぞ賴まるゝ。龜菊しばし答へもせず、「是れはよぎなき御賴み。虎樣や少將樣の、うつりといひお二人を、じよさいに思ふ心でも、祐經かばふ心でも、誓文くされなけれども、親分を討つ人に、ならびてなどとの後日の沙汰、傾城のはては道しらず、尤もかなといはれん事、妾

くやみの歎き是れ一つ。」「二の宮の姉、禪師坊、彼是つきぬ思ひの涙、敵を討つて本意をとげん。」うれし涙も樣々の、雨にあらそひ袖と袖、絞りかねたる許りなり。時宗涙の隙よりも、「あれ御覽ぜ十郎殿。御所の假屋の方より、供人具したる乘物の、庵に木瓜付けたる提灯こそ、祐經と見しはいかに。」「オ、うたがふ所なし。こゝにて待受け本望とげん。」「もつとも。」と、松ふみしめし、天にもあがる嬉しさに、足のたてども覺えばこそ。漫ふるひて待ちかけたり。程なく近づく左右方より、二ツの提灯ばた〳〵と切り落す。「あは狼藉。」と夕やみの、刺すとも突くともしらぬ夜に、中間若黨縱横に、打物ぬいて薙ぎ廻れど、二人は小わきに身を潛む。危かりける有樣なり。輿の内には女のこゑにて、「必定夜盗と覺えたり。大道へ出でつらん。此處を捨てて外垣より、山ぎはを搜されよ。」と、あらぬ方へ敎ふれば、愚かの下人、「尤も。」と、しどろになつて追つかくる。稍あつて女輿より出で、小聲になつて、「十郎樣、五郎樣、是れなう申し、最前ちらりと御兄弟と見付けたり。大じない時宗さま、祐成さま。」とよぶこゑは、きいた樣な物ごしなれども、粗忽にあつともいはれぬ時宜。兎角の思案もなきうちに、女はせいて、「ア、辛氣。なうお二人樣、だんないわいなあ。黄瀬川の龜菊ぢやわいなあ。」兄弟ほつと力をえ、「オ、いかにも五郎、十郎なり。シテ龜菊殿のかうした事は合點ゆかず。」と、いふ聲をしるべに近より、「先づお久しや、なつかしや。扨わし事は、虎樣や少將樣の御苦勞になされし故、舞

置くまじきぞ。此の富士山は死出の山、富士川は三途の川、兄弟せぶみの門出の酒宴せん。」と、笑ひたはぶれ立ちかへる。そろひにそろひし武夫の、手本なりかゞみなり、をしへなるわと後の世まで、つきぬは曾我のはなしなり。

第三

身は蜉蝣の憂き命、憂き命、暮るゝや限りなるらん。頃しも五月二十八日、空さみだるゝ黄昏の、虎が涙や少將の、夜の雨さへ頻りなるに、兄弟最後の晴小袖、母の手づからぬひ仕立て、請けし五體の胎内へ、歸る心に本來の、經帷子と觀念し、あげ羽のてふや村ちどりも、翼しをるゝ風情にて、松明かゝげ笠ふりあげ、兄弟かほを見合せて、涙ぐみたる哀れさよ。「いかに時宗、和殿三歳祐成五歳、竹馬のむちを打ちしより、片時はなれぬ兄弟の、六度契りて兄となり、七度むすびて弟となるとつたへしが、今宵裾野の五月雨、くさの雫と消えはてて、未來の逢瀬は定めなし。今ぞ此の世の見をさめぞ。御身が顏をよつく見ん。」「母上見奉ると思ひ、祐成殿の御顏をも今一度見せ給へ。ことゝはぬ草も木も、雲水空のなごりまで、今をかぎりのわかれとや。」「いつも風はふきけれども、今宵の風ぞ身にはしむ。虎少將が書置を、あけなば歎かんふびんさよ。」「鬼王や團三郎、最後の供にはづれたる、

「兎角は詞多からず。」と、麓をさして近經は、我が假屋へぞ歸りける。祐經鹿を見うしなひ、谷をへだてし岡のべの、小松の中を乘りまはる。「祐成あはや。」と谷ごしに、馬引寄せ打乘れば不思議や此の馬身の毛をたて、四足を縮めて立ちすくむ。「南無三寶。」と打てども〳〵あふれども、ちつとも動かずはねあがり、前足折つて祐成を、眞逆樣にはね落せば、祐成は枯杙に、弓杖ついて下りたつたり。落して馬はかろ〳〵と、谷をくだりにかけてゆく。折しも時宗はるかに見付け、走りかゝつて馬の口、しつかととめて引き來り、「扨よき所へ參りたり。鞍心しらぬ馬主をきらふと覺えたり。鐙を踏みしめしつかとめせ。」「心得たり。」と翩然と乘れば、又此の馬高いなゝきし、躍り上つて祐成は、屛風がへしにどうど落ち、岩角に胸うちあて、氣をうしなひたる許りなり。時宗兄をいだきあげ、「エヽにくや此の馬は目前の敵、刺し殺さん。」ととびかゝる。祐成はつと心づき、「やれまて時宗、まつたく馬のあやまりならず。花野が新田にあたへつる、虎のいきづめ懷中せしが、恐れたるに紛れなし。」と、守よりとり出し、はるかの谷へ投げすて、駒引きよせうち乘つて、引立て見れば不思議やな、元の如くにあゆみゆく。「つゞけや時宗來れや五郎。」と、谷を乘りこえ乘りおろし、岡の茅原麓の松原、追ひつ返しつ尋ぬれども、はや祐經は見えざりけり。兄弟目と目をきつと見合はせ、こぶしを握り牙をかみ、「寶の山に入りながら、むなしく歸る口惜しさよ。よし〳〵今日はたすくるとも、明日までいけては

と、につこと笑ふ顔と顔、主從此の世の見納めとは、後にぞ思ひ三重しられたる。其の日の御狩も列卒をあげ、息をやすむる午の刻。「お辨當。」とふれければ、狩場も暫し靜まりける。こゝに富士の根方より、七年物の牡鹿八股の角ふり立て、險阻苦路をのさ〳〵と、北をさしておとしける。秩父の家臣本田の二郎近經、「天のあたへ。」と弓と矢つがひ、駒を直路に歩ませよせ、既に矢ごろと見えし所へ、工藤左衞門祐經一さんにあふりかけ、「コレ〳〵本田、あの鹿は祐經が見付け射とむるぞ。粗忽すな。」と聲をかくる。「御諚にて候へども狩場のならひ、目がけし鹿を人に渡す法はなし。はづれんまでも近經が、射とめて御らんに入れ申さん。」と、なほ引絞れば祐經いかつて、「ヤァおのれは緩怠者。秩父が下人陪臣の分として、此の祐經に慮外をなし、主の爲もあしからん。」と、廣言はいて乘り出す。近經無念に思へども、慮外といへば力なく、「エ、おのれ祐經め、矢印になのりなくば、遠矢に射落しくれんもの。」と、こぶしを握つてひかへし所に、曾我の十郎祐成、祐經をはるかに見、竹笠引込み弓をふせ、繁みを分けて忍びよる。本田きつと見、「是れ申し祐成殿、忍んで御狩の御供の由、主人重忠聞き及ばれ、御用あらば承れと申し付けられ候。貴公數年御狙ひの鹿こそ見えて候。さりながらかれは馬上、貴公は歩行。幸ひ近經も當座の遺恨候へば、此の馬を貸し奉る。召されて鹿のまつたゞ中、うらみの矢壺ははづれ申さじ。人目あればお暇。」と、おり立ち馬を與ふれば、祐成手綱をおしいたゞき、

預り申せしやつなればくるしからず。人をそへて汝に預けん。かれを囮鳥にからめ取つて、我に手がらをさせてくれよ。それ〳〵角田兵五兵六、兄弟かれに付いてゆけ。隨分ぬかるな。沙汰ばしすな。判官の末類を、おほくもいらぬ一兩人、生捕つてくるゝなれば、コリャ此の海野は手もおろさず、かませてのんだる大手柄、屹度禮は重ねて〳〵、急げ〳〵。」と別れしは、愚かにも又あさましし。角田兄弟「是れはふしぎの同道。いざ參らん。」とぞ申しける。時宗あたりを見廻し、「海野は遙かに行き過ぎたり。」鬼王に眴し、二人を左右へばた〳〵と蹴倒せば、「コハ狼藉者。」と起き上るを、鬼王團三郎つゝとよつてしつかと取る。時宗から〳〵と笑ひ、「我を誠の町人と思ふか。河津が次男曾我の五郎時宗といふ者。此の入道は鬼王團三郎が父、津藏の入道といふ者。我々をかばひ、辨慶親辨眞と僞りしを、鎌倉中の大名小名の髭口へ、うま〳〵ときこしめしたるをかしさよ。何とぞ奪ひ返さん爲、和田殿へ參る折から、海野殿の運のつき、よい所で出くはせ、時宗にたらされてお預りの大事の囚人、ふかふかと渡さるゝは、猫に鰹、武士に似合はぬあまい事。是れこゝな生ぶし達、うぬらが首よりつまさきまで、みぢんに削つて兄祐成が、手がひの虎に悦ばせん。それ〳〵。」と引起し、口に込藁、いきほねたたすな。山ぎはにて討つて捨てよ。入道妹は古郷へおくれ。某は祐成の狩場の出立氣遣はし。追付けて本望とげん。門出よければ行く先の、仕合は手に取つたり。吉左右しらせん。」「待ち奉る。」

とも、御難はかけじ何方までも、請人出でてさばきがみ、油もとゆひ紅はな紙、あしだせきだに至るまで、仕著の外は身の入立との定めなり。もし又ふかき縁のあり、戀ぞ積りてみなの川、さそふ水とて請け出す、あたひ千金萬金なりとも、それは主人の得分たるべし。もし誰人ぞ流れの身に、横波かけてさまたげの、さしでの磯のもがり舟、押していとまを取るならば、衣裳殘らずはぎすゝきの、奉公かまひ給ふべし。總じてつとめの其の間、下戸なりとも酒飲み習ひ、文には譃をかき習ひ、牀にて人をやきならひ、ねぶたくとも居睡らず、泣きともなくとも後朝の、わかれに泣かせ申すべし。起請誓紙に身の内の、血をばをしませ申すまじ。指は切損、かみも切損、申しぶん候まじ。其の外浪華のよしあしに付き、後日の爲の傾城奉公、請狀の趣くだんの如し。」と、天もひゞけとよみ上げたり。海野の太郎疑ひはらし、「扠は仔細もなき者なり。疾く〳〵通れ。」と許しけり。時宗しすましたりと思ひ、「御聞分有り難し。扠さいぜんより承れば、判官殿のゆかり御尋ね候とや。我らが本國奥州には其の末々の多く候へども、今日まで手をおき誰構ふ者もなし。あの辨眞めが我々を、打擲致せし憎さも憎し。拙者に預け下されかし。搦めて國へ罷り下り、辨慶が親をとらへしと國中に風聞せば、義經のゆかりども、堪忍せずあつまらん、所を皆々かりもよほし、搦取つて參らせん。一つは旦那の御奉公。」と、誠しやかに囁けば、海野ほつかりとたらされ、「イヤ是れはできた。きやつは某我が君より、

も、思ひやりたる忍びねの、歎きをかくしてうつぶけり。海野重ねて、「是れ若者、以前汝はあの者が主人といひしが、いづくの町人、商賣は何ぞ。」時宗聞きもあへず、「さん候某は、奥州伊達の郡の傾城屋にて候が、あれなる女を金銀出し、傾城にめしかゝへ、唯今つれて下り候。」海野なほもうたがひ、「エ、然らば定めて請狀あらん。それにて讀め。聞かん。」といふ。

けいせい請狀

もとより請狀あらばこそ。懷中より時宗が夏書しかけし普門品をとり出し、請狀と名づけ、たからかにこそ讀み上げけれ。「傾城奉公請狀の事、一此のなみと申す娘、流れの道に身をしづむ。建久四年癸の丑五月十五夜突出し女郎。何所の雲もさはりなき、影も丸年十年きつて、金子百兩たしかに手取の身は籠の鳥。親は他國の死に目なりとも、年の間は郭のほかへ、一足にても踏みも通はぬ、遠國波濤へ賣りて遣手や姉女郎の、おきて背かず勤めさせもが露ほども、奉公に如才なく、客をばふらずする男あつて、勤め麁末に致すに於ては、著の儘ながらの端におろされ、又はみづしの下女にせられ心にかけて、まはる紋日を一日も、おこたらせ申すまじ。第一には間夫狂ひ、浮名ほくろに入れ性根て、竈の火を焚き湯殿の水くみ、門はき背戸はき、庭の掃除のちりや芥や紙くづのはの、恨みとぞんじ候まじ。萬一此の者年のうち、郭をにげて走り井の、水に身を投げ刃にふし、心中して死したり

ろよな。こゝでの論はむやくの事。あやまりなくば御前にて、すみやかに言分せよ。御所の假屋へ同道せん。早あゆめさあ來い。」と、言はれてさすがの時宗も、御前へ出てはあしかりなんと、返答遲々して見えにける。入道是れぞ一大事と思ひ、大聲上げて氣色をかへ、「扠々おのれらは何者なれば、何の用もなき事を、仔細有りげに言ひなす故、科もなき判官殿、彌御とが深くなる。勿體なくも御骸に、苦患をかくる後生のまよひ。いか樣かたりか物取りか。エ、腹立ちやにつくいやつ。暫し御免。」と郎等が、ついたる桿棒おつ取つて、つゞけ打ちに時宗を、ちやう〳〵と打つたりける。「是れは。」と言つて鬼王兄弟立ちよる所を、「ヤア己等とても唯おかうか。」と、はらひ打ちに叩き付け〳〵、「傳へ聞く判官殿御存生の折から、東下りの忍び路や、安宅の關にて我が子の辨慶、判官殿をうつたるとや。それは富樫をたばかりの、智畧の棒の歪みなき、此の辨眞が心底を、海野殿への言分に、叩き殺して見せ申さん。」と、口にはいへど心根は、主君なり我が子なり、思ひの色を腹立の、涙に見せてうつ杖も外れよかし反れよかしと、打てばこなたは覺られじと、用捨もなく身にうくる、互の心ぞあはれなる。海野我を折り、「ヤレさなせそ辨眞。殺してはいかゞなり。もうよいわ。」と引きとむる。「いやたゝき殺さん。」と、猶振上ぐるを棒もぎ放せば、「エ、殘念や口惜しや。草のかげにて判官殿、さぞや悲しくおぼされん。」と、義經にかこつけて、胸にたもちし涙をぞ、わつと泣き出す其の心。鬼王兄弟時宗

よ今思ひ合はすれば、熊野山のどこやらにて、一寸見たる御坊にて候。サア御通し候へ。」と、つゝと行かんとする所を、「どつこへ〳〵、エ、己めらは癡者かな。入りもせぬ長口上、紛らかして通らんとや。熊野山にて見たるとて、につこらしく言ひまはす。察する所、己は義經の家來、熊野の住人鈴木龜井が一族よな。此の辨眞めと心を合はせ、鎌倉殿へ仇をなす御敵の張本、搦めとつて高名にせん。ソレ遁すな。」と、ひしめく所へ五郎時宗、編笠取つて大手をひろげ、「ヤア權柄な御侍、あの者どもは某が、大分の給銀にて召抱へたる下人ども、最前より何れもの我儘、はらわたがもえ返り、胸の蟲がむか〳〵と耐へかねて候へども、無事にすまば濟まさんと、齒をくひしばり控へし所に、理非もろくに聞きとゞけず、なんぢや搦捕らんとは、いか樣の科がある。さあ承らん。もし科もないに下人を縛りからめさせ、主人の身にて堪忍ならず。町人なれば太刀かたなの、お相手にはかなはずとも、腕や脛の力は御侍にも負け申さぬ。はりごくら踏みごくらは、此の膝骨のくだくるまで。」と、すね打叩いて睨め付くる。海野ちつともひるまず、「イヤこりや若い者。縦へ其方が下人にもせよ、是れは賴朝公の御敵。判官殿の因縁を尋ねもとむる穿鑿なれば、いうても天下の御大事。誰をか憚ることあらん。こいつは辨慶が親熊野の別當辨眞。それにしたしきものなれば、熊野そだちの鈴木龜井が一族ならんと、咎むるが僻事か。彼奴を下人といふからは、扨は汝は義經の、おとし子の有りと聞きしがそれな

「イヤまて〳〵、かれらがしかた、兩方見知つたるに紛れなし。サア何者ぞまつすぐにいへ。さなくばいつかな後へも先へもやらぬ。」といふ。鬼王兄弟つゝと出で、「御尤も千萬。我等は上方の貧者にてござ候。是れなるは妹。老いたる親を養育みの爲、奉公かせぎに方々召連れ廻りし時、何方にてやらあの御坊見たる樣に候故、扨唯今の通り。」といひ捨てて通らんとす。海野眉をしかめ、「どこへ〳〵、シテ其の見たるといふは何所にて見たるぞ。胡亂ならば通しはせぬ。勿論もどしもせぬ。搦めおくがいかに〳〵。」と一面にとり廻す。鬼王兄弟大事と思ひ、「是れは近頃不祥なる所へ參りかゝつて候物かな。妹が奉公かせぎの爲、方々廻りし事なれば、何方とは覺え候はねども、先づ上方の女の習ひ、大内がたを望む故、中宮女院仙院十二の對の局々の女孺お末、内侍所への刀自采女、公家に松殿すゝき殿、近衞關白政所、一條殿や九條殿、久我菊亭に花山の院、頭の中將頭の辨、儀同三司女三の宮、お比丘尼御所までかせぎしが、御所の風にはあはずとて、兩六波羅の屋敷方、武家は行儀むづかしく、こゝもありつき緣うすき、衣の棚や珠數屋町。めぐり〳〵て室町の、絲屋組屋ひさぎ女に、御影堂の扇折、ほね身をくだきかせげども、都の奉公口もなく、西國がたへ身をしぼる。豐後國の染殿や、そこをも既に立ちわかれ、因幡丹後の紙すき奉公。それより紀州熊野には、能き奉公の口ありと、聞くをしるべに立越えしに、それは小歌比丘尼とて、尼にするよし承り、逗留もせず歸りしが、お、それ

田と武功のあらそひ、蝸牛の角のつのめ立ち、挑みはげむといへども、新田が猪に乗つたりし、功名につゞく手がらもがなと、心は強情に手も立たず、空しく根氣を費しける。もとより祐經縁者といひ中よしなれば、彼の辨慶が父辨眞となのりし津藏の入道を、鬼王が親とは夢にもしらず、和田に預け置かれしを、工藤祐經取成にて、暫く申し預り、此の辨眞を目印にて、狩場の見物群集の中を、東西南北引通り、もし見知りたる者あらば、それぞ義經のけらい筋、鎌倉殿の御敵と、召捕つて高名し、新田が功名をふみつけんと、たくむ思案もまはり遠き、野山を引いてぞめぐりける。曾我兄弟は聞き及び、「譜代の下人を囚人となし、なからん後まで恥辱なり。人も多きに和田殿の、御預りこそ仕合なれ、密かに歎き申して見ん。さりながら祐成は人見しれり。五郎は見しる人なし。」と、鬼王兄弟妹の花野、和田の假屋へ急ぎける。海手山手をかぎりにて、大垣亂杭逆茂木引き、東海東山三十三ヶ國の大小名の、假家のしるし所々に木戸を打ち、御家人給人商人見物、行きかふ人に紛れても、時宗は此の夕、敵討たんとおもひこみ、眼を四方に見くばりて、案内窺ひ通りける。所こそあれ海野が持ちの木戸口にて、覿面にはたとあふ。花野父の入道を見付け、「あれよ。」といへば鬼王團三郎、「是れはいかに。」と仰天す。入道いかつて、「やあ某は見知らぬ奴等。何者なればうろたふる。此の入道に知られては穿鑿がむつかしい。早く通れ。」とつかうどにいひはなす。海野さとき男なれば、

故。其の契約に虎御前を助け候へば、お禮はかはせに仕る。此爪返辨申す間、花野とやらんに返してたべ。某は祐經めを討たで叶はぬ意趣あり。」と、とんで出るを引留め、「是れ申し重ね〴〵の御無心なれども、祐經は我々が大事の親の敵。御自分に討たれては曾我兄弟が侍立たず。暫しの無念を息められ、彼奴を我等に討たせてたべ。易々と討ちおほせ御所近く切り入らん時には、狼藉入りたりと、をり合はんは必定、千騎萬騎が防ぐとも、我々兄弟、ものの數とは存ぜねども、新田の四郎忠常と御名乘を聞くならば、首さしのべて討たれ申さん。然れば我等も本望とげ、貴殿は三度の高名なり。聞き分けてたべ新田殿。」と、理をつくしたる詞の末。忠常うなづき、「オヽ、できた〳〵面白し。さあらば祐經討ち給へ。和殿が首は貰うたぞ。」「いかにもやつた、忝い。それまで隨分御健固に。」「そなたも御無事に。」「お暇申す。」「御ざらうか。」「首をとつたりやるまでの。」「先づ是れが。」「お暇乞。」と、互の一禮細々と、ふる五月雨や袖傘の、竹笠取つて打被き、新田は假屋、曾我は伏屋に立ちかへる。述べも述べたり答へも答へた武夫の、詞の末は神妙、神妙々々なりとて、後に聞く人感じけり。

第二

己が人に及ばざるを恨みず、人の己にすぐるゝを嫉むは小人のならひ。されば海野小太郎行氏、新

の威勢にや恐れけん。とあるふし木につまづきて、弱る所を誤たず、差添ぬいてあばらほね、四五枚ばらりとかき切れば、四足を土にふみ入れて、立竦縮になる所を、頓てひらりと飛んでおり、數のとどめをさしもの猪、しとめて新田は悠々と、扇を遣うて立つたれば、大將軍を始めとし、大名小名列卒狩人、足輕荒子一同に、「のつたり新田、とめたり四郎、でかいた〳〵手柄々々。いや〳〵。」どつとわめく聲、山も崩るゝ如くなり。賴朝御感限りなく、「新田が振舞、千度百度の高名にも優りたり。松島月毛をとらするなり。」と宣へば、祐經進み出で、松島月毛の事は、高名三度ある者に賜はらんとの仰せなるに、縱へ鳴雷と組めばとて、三度の都合も合はざるに、忠常に賜はりては、海野の太郎に腹きれよとの仰せかや。先づ此の度は御無用。」と、たつてとむれば力なく、「先づ〳〵休息仕れ。」と、御本陣に入り給へば、大名小名人數をまき、皆々假屋に入り給ふ。新田の四郎忠常、本意なげに見送り、「エヽ、につくい祐經、海野とおのれと緣者故、彼奴にほまれを付けん爲、度々我に恥辱を與ふ。出頭一の祐經が首取つて、高名三度の都合にせん。」と立ち上る所へ、若者一人木陰よりつゝと出で、「申し申し新田殿、前代未聞の御手がら、目をおどろかし候。拙者は曾我の十郎祐成と申す者、先刻くるわにて虎が難儀を御身に受け、救はせ給ふ御懇切、生々世々の御厚恩、御禮申し上げ候。」と、頭を地につけ禮儀をなす。「扨は承り及ぶ十郎殿か。其の猪をとめたるも、御家來鬼王が妹、虎の爪を與へし

で齒をならし、唯一かけと唸りけり。此の勢ひに恐れをなし、突棒からりと投げ捨てて、鹿垣を押破り、高ばひして逃げければ、數萬の狩人聲をあげ、一度にどつとぞ笑ひける。海野小太郎行氏眞一文字にかけ來り。「この猪を組み留めなば、高名三度にたらずとも、御馬を拜領致さん。」と、小太刀をかいこみ躍り懸れば、猪はすかさず一足に、飛ぶとぞ見えしが小太郎が、膝口より踝まで、まつくだりにかけ通せば、片足立つてちが〳〵と、列卒の中にぞ逃げ入りける。今はをりあふ者もなく、いたづらに守り居る所へ、新田の四郎忠常遲ればせに驅けつき、「あら物々し、仰々し。漢の李廣は石虎を射る。明の金氏は女なれども、猛虎をうつて夫をたすく。縱へ鐵石を丸めたる猪なりとも、しや何事か有るべき。」と、箙竹笠かなぐりすて、「ゑいやおふ。」と聲をかけ、二丈餘り飛び上り、向うざまに乘り移れば、倒にこそ乘つたりけれ。猪は乘られて怒りをなし、土をけたて木の根を穿ち、雲と霞にわけ入つて、飛びこえ跳ねこえ、驅け上りかけ下り、虚空を飛んで廻りしは、周の穆王法の爲、八疋の龍馬に乘じ、萬里を刹那に至りしも、斯くやらんとぞ見えてげる。新田は馬上の名人にて、樂天が三つ頭、王良が祕密の鞭、尾筒を手綱にしつかととり、腰も切れよとしめつけ〳〵、履行縢は山おろしに、さら〳〵さつと斷れてのけば、大童に亂れなつて、たゞ落ちじ〳〵落ちまじとぞ耐へける。小笹茅原巖石枯木、打ちつけ〳〵猛りをかき、落ちばかけんとあがきしが、新田は虎の爪をもつ、其

へば、武藏國の住人太樂の平馬の丞、「某とめて御酒宴の御肴に。」と、夕日にかゞやく大太刀かざし出でたりける。猪はいは根に身をふせて、飛びかゝらんとする氣色、たゞ牛鬼ともいつつべし。詞には似ざりけり。面もふらず逃げてゆく。平馬が姉聟、愛甲の三郎、熊手引つさげかけ向ふ。猪は身をふり飛びかゝり、左手の腕を懸けきれば、熊手を捨ててぞ入つてけり。安西の彌七郎、「返せ〳〵。」と聲をかけ、長刀かまへかけ向ふ。猪はいかつて齒をみがき、唸りてかゝる其の聲も、高股をひつかけて、三間許りふり上げしは、鞠の曲ともいつつべし。臼杵の八郎景信、續いて懸れば隙間もなく、眉間を二つに引きかけられ、眼くらんで引いたりけり。御所の黑彌五是れを見て、大の尖り矢打番ひ、暫しかためて切つてはなす。矢よりも早く飛び來り、腰の番ひを横がけに、ざつふとかけてぞおとしける。岡部の三郎、原小二郎、槍ひつさげて兩方より、上段下段のつゝみ突き、はつし〳〵と突き懸る。猪は一期の死に狂ひ、ひらりと飛んではかつしとはね、くるりと廻つてちやうどかけ、くるりくるりはた〳〵〳〵、蝶鳥なんどの如くにて、怯むけしきの見えざれば、二人もあぐんでさつと引く。猪は巖根に身をちゞめ、鼻の嵐にたけりをかき、息つぎしたる有樣は、すさまじかりける次第なり。新開の荒四郎、「憎し、きたなし、かた〴〵よ。鬼神にてもあらばこそ、あの畜生を恐れては、誠の合戰なるべきか。某が打殺し、皮引剝いで障泥にせん。」と、突棒取りのべ打つてかゝる。猪はにらん

據は證據は。」とひどく問はれて、「ム、シテ證據あらば宥免あらうな。後に否とはいはせぬが。」と、詞をつめても證據はなく、心をくだき思ひ付き、花野が與へし猛虎の爪、守より取り出し、「コレ此の書付を見たまへ。虎の生爪と書いてあり。はなしくれたる虎が爪、守にかけたる開夫男。疑ひめさるは合點々々。今朝の遺恨に胎内の、せがれを殺さうのむさい心底、白癩きかぬ。」とぎしめけば、誠とや思ひけん、勢ひにや恐れけん、「ア、みじかし忠常、證據あれば疑ひなし。帳面もむづかしし。」と、虎は病に片付けける。新田が思案なかりせば、あやふき曾我の運命なり。かかる所へ海野が方へ、祐經よりはや使、「富士野の御狩まつ最中。然るに唯今いく年經るともしれぬ猪あれ出で、列卒四五十人かけ殺し、各あぐんで見え候。御詮議早く御しまひ、此の猪とめて高名し、望みの御馬拜領あれ。こと急なり。」とぞ告げたりける。海野は、「あつ。」と言ふよりも、挨拶もなくかけ出す。おくれじものと新田の四郎、一散にかけ出で、後になり先になり、足もためず走りしは、さながら競馬の三重如くなり。案の如く狩場には、いく年ふりし猪の、牙は劍の如くなるが、鹿矢三つ四つ負ひながら、近づく者を懸倒し、おちあふ者を踏みちらし、大きに猛つて巖窟をこだてに構へ、鼻をふき、寄らばかけんず其の勢ひ。人々馬を立てかねて、列卒も亂れてたゞよひける。養由が術、きよりくりうが神變も、かなふべしとは見えざりけり。君團扇を閃かし、「誰かある。あの猪とめ高名せよ。」と呼ばはり給

れのうき身なすててんある〳〵、或人の申されしは色も顏も、お腹も脈も只ではない。さだめて〳〵あん青梅、好きやらば惡阻でござろ。めいよなふしぎや、中戸の豫言がはや七月。」とぞ答へける。扨その次は虎御前、おめる色なく二人の前に立ちながら、「お尋ねなれども自らは懷妊にては候はず。勤めのうさが支へとなり、かかる病を受け候。よし又懷妊なればとて、夜な〳〵替る男の數、どれがどれやら何の其の、夫れに覺えの有るものか。」と、言ひすて歸れば海野の太郎、「ヤイ〳〵賣女奴待ちをらう。ヤアのぶとい奴め、己と曾我の十郎こと、知るまいと思ふか。祐成が子に極まつた。サア吐さぬか。」とぞ嚇しける。新田曾我といふ聲に、花野が契約思ひ付き、「イヤ海野殿。浪人なれども祐成も侍、推しつけてさうもいはれず、病とあらば病にして、帳面をすまされよ。」といへば、海野聞きも入れず、「宥免するも事による。曾我は君の御仇、不吟味にはなり難し。腹をさかん。」とひしめきける。忠常ちやくと思案を出し、「エ、是非もなし。今は何をか包み申さん。あれは拙者が子にてあり。某虎に通ひしかど、世間を憚り、曾我と云ふ假名をして、遣手かぶろ郭中、懷妊するまでかくせしが、手詰なれば打明ける。沙汰なしに賴み申す。」と、いへば虎は嬉しく、「ハテ卑怯千萬な。たとへ今死ねばとて、夫れを今言ふことか。」と、詞を合はする利發さよ。海野頭を振つて、「おいやるな〳〵。此の場をさまし重ねて曾我がゆかりとて、一人の手柄にせんたくみ。當座のでき合。但し虎と馴染の有る證

きしめて、晝まで寢るを作法にて、他ともんちの揚屋町、くつわの亭主下々まで、それを習ひに朝寢する。大磯小磯化粧坂、朝顏しらぬ里ぞかし。町の番太あわたゞしく、「何事やらん御詮議とて、新田殿海野殿御出でなり。」とふれありく。町の年寄五人組、寢惚髮に袴肩衣、土にひれふし居たりける。程なく兩人入り來り、「此の度仔細あつて、孕みたる傾城の父親を御詮議ある。少しも僞るに於ては。腹を切裂き吟味する。懷妊の傾城ども殘らず出せ。」と申しける。町人ども承り、「懷妊と申しても三四人ならでは候はず。それ先づ藤屋の竹とり出でよ。」と言へば、戀には恥ぢぬ傾城も、包む色にや胸高の、帶でかくすもしをらしし。海野新田詞をそろへ、「汝が孕みし子の親は何者ぞ。帳に記し鎌倉殿御覽あるぞ僞るな。」「さればとよ、此の子の親は京の衆。人目を包む闇の夜や、烏丸の烏帽子屋折樣。」と言ひければ、海野帳にぞとめにける。次に出でしは、「井筒屋のひがきと申す新造。」と、傍からいふも恥かしく、裲の褄打合はせ、見せじとすれど振袖の、下よりもるゝふくよかさ。「其の子が父は誰なるぞ。」問はれて顏も赤くなる。「紅葉が谷の客なるがひよつと變るな變らじの、其の言の葉ではらみ句や、連歌師の山樣。」と、同じく帳にぞ付けにける。其の次は眉目惡く、歩きぶりさへ横町の、「青柳と申し候なり。」「扨汝が胎内の子の親は何者ぞ。」「誰と申して我が身には、二人の客も荒磯の、荒井の宿の馬かた、本名は六藏、替名は四の二、物思ふ流

は伊東の末なれば、我が君の御仇。海野に先をこされ、彼の御馬をとられては、某腹を切る許り。此の事に於てはなり難し。外の事は何なりとも、無心あらば聞くべし。」と、云ひ捨てて乗り出す。「なうお情なし。」と、尾筒を取つて引戻し、「御ことわり至極致したり。誠にお侍の手柄にせんと、思召すを止むる不調法。その返禮に進ずる寶の候。」と、守袋より一包取り出し、「是れは韃靼國より渡りたる虎の生爪にて候。死したる虎の爪はあれども、生爪は稀なる物。誠や虎は獣の王にして、地を走る獣おぢ恐るゝは必定。妾が在所三河國阿部山の狩人、此の虎の生爪をまもりにかけて狩に出づるに、いかなる荒熊、荒猪も、やす／＼手取に致す事、猫の鼠を取る如し。これを只今參らせん。御身につけて御狩場にて、猪とも熊とも引組んで、人の及ばぬ手柄を遊ばさば、海野が先はよも越さじ。いで／＼證據を見せ申さん。隨分御馬に鞭うち給へ。」「心得たり。」と乗り出す。娘は先に立ちふさがり追戻せばたぢ／＼／＼、とゞろ／＼と千鳥足、四足を折つて恐れしは、不思議なりける次第なり。忠常も我ををつて悦び、「奇代の重寶手に入るからは、御狩にて高名し、海野が望みの御馬を拜領して名を揚げん。此の上は曾我兄弟いかなる狼藉ありとても、子孫までも見逃しなり。弓矢八幡大菩薩此の詞に僞りなし。お事が父も和田殿と内通してたすくべし。人見付けては如何ぞ。」と、「さらば／＼。」もよそごとに、聞き捨てて行く時鳥、五月の空の雨曇りに、まぎれてこそは三重別路の、宵の移香燻

其のお詞は違ふまいな。」「ハテ疑はしくば誓文立てうか。」「イヤそれまでも及ばず。さあらば語り申すべし。自らは今朝御狩場にて、海野殿に捕はれし入道が娘花野と申す者にて候。そも其の入道が武藏坊辨慶が父辨眞と名乘りしは僞り、實は曾我の兄弟の下人鬼王團三郎が父、津藏の入道と申す者。御主の敵祐經に一矢と思ひ忍び入り、思ひの外に召捕られ候を、御前にて鬼王團三郎が親と、有りの儘に名乘りなば、御勘氣の曾我殿の大事と思ひ、名を隱し辨慶が父辨眞と、あらぬ事を申せしと存ずるなり。夫れにつけて鎌倉殿より、父親しれぬ子のあらば、懷妊なりとも腹をさき、詮議せよとの御諚を承り給ふとかや。賴み申すはこゝの事。曾我兄弟の人々は、浪人のつれ〴〵に折々の色里通ひ、馴染の方もありと聞けば、遊女の腹に情のたねのやどるまい物でなし。よし其の事はかまはねども、それからそれがどうこけて、御兄弟の御身に萬一お祟りある時は、もと自らが親入道が仕損じより事おこる。是れを哀れと思召し、御聞きとゞけ候ひて、もしも曾我殿の子だねなど候はば、御料簡賴み奉る。」と、理をつくし事をわけ、手を合はせてぞ歎きける。新田聞きもあへず、「扨はお事は聞き及ぶ鬼王が妹。今朝の入道も辨慶が父とは僞り。鬼王兄弟が親なるとや。扨々餘儀なき賴み事、心得たりといひたいが、こゝに一つの難儀あり。海野と某御前にて、松島月毛と云ふ名馬をあらそひ、三度の手柄ある者に賜はらんとの御諚を蒙り、兩人が我さきに何をがな手柄にと、意地をはる最中、曾我

も海野も靜まれ〳〵。是れは雙方道理にて、賴朝が無念なり。先づ彼の馬を只今は賴朝が預りたり。二人共に今までに一度づゝの譽あり。是れより後兩人の中、二度づゝの手がらをして、以上三度の高名あらん者に相違なく取らすべし。此の詞僞らば氏の神の御罰をえん。」と、忝くも御大將御誓言ありければ、二人は「あつ。」と頭をさげ、恐れ入りたる禮儀の體。大將軍の御料簡、おの〳〵感ずる許りなり。重ねて仰せ出さるゝは、「今辨眞が詞によつて案ずれば、平家の餘類を始め義經の家人等、錦戸が一族、伊東入道の末葉なんど、賴朝に恨みある者多かるべし。敵の末は根をたつて葉を枯らせ。」と傳へたり。新田海野にいひ付くる。「父親しれぬ幼き者を尋ね出して吟味せよ。大磯小磯の遊君はいふに及ばず、其の父分明ならぬ子は、懷妊たりとも腹をさき、きつと詮議を加ふべし。」と、仰せ嚴しき御狩場の、番手々々の槍印、御馬印の目に高き、富士の裾野に出で給ふ。新田の四郎忠常は大事の仰せを承り、「あはれ然るべき御敵の末を詮議仕出し、高名三度の數を合はせ、松島月毛を拜領し、海野工藤に手柄を見せん。」と、駒を早むる大磯の、波こゝもとや泣木の陰より、若き女のつゝと出で、「是れ申し新田樣、お侍と見受たり。ちと賴み度き事あり。」と、轡づらしつかと取る。をなご力も駒なづむ　郎等ども立騷げば、新田もとよりさる者にて、「さなせそ〳〵。見かけて賴むとあるからは、聞き屆けでは通られず。シテ女郎仔細によつて賴まれうが、無心とは何事。」とあれば、「先づ以て忝し。

を望め。」と仰せある。海野面目ほどこし、「御諚冥加に叶ひ候。然らば御祕藏の御名馬陸奥より召されたる松島月毛を賜はりなば、千町萬町の御加増にもまさりて悦び奉らん。」と、申しもはてぬに祐經、「オ、何しに御意に異變あらん。誰かある、馬引け。」と取持つ所へ、新田の四郎忠常、はゞからずつと出で、「暫く〳〵、工藤殿、彼の御馬には言分あり。某先年富士の人穴へ入り、御褒美望めとありし時、松島月毛拜領を願ひしかど、御出陣の召料とて、某願ひかなはぬ所に、老いぼれの痩法師召しとつたる御褒美とて、只今海野に賜はつては、忠常が武士道立ち難く、且は上の御依怙に似たり。よしそれとても工藤殿の御取持にて、是非海野に下されなば、某も思案候が、御返答承らん。」と、色をちがへて申しける。祐經えせ笑ひ、「緩怠なり忠常、以前は以前今は今。御邊が望みあればとて、日本の武將として、誰に恐れて御詞を違へらるべきぞ。此の祐經が取持にて、海野に拜領せさせんが、して御分が思案とは、どうした思案、聞かん。」といへば、「いや只思案までもなし、彼の御馬を胴中より二つに切り、先は某頭の方、海野にはともの方、御前にて半分づゝ切り取るなり。」と怒りける。海野もせいて膝立てなほし、「某が拜受の御馬半分づゝ切り取るとは、愛宕白山指もささば堪忍せぬ。」とつめかくる。忠常も刀に手をかけ、「オ、拜領したくばしても見よ。諏訪八幡も照覽あれ。馬人共に一討ち。」と三方論議の意地づくは、危くもはれがましく、各手に汗握りし時、大將扇を上げ給ひ、「新田

入道弓矢たづさへほのぐらきに、御假屋の邊忍んで徘徊いたす體、さながら山賊强盗とも見えず、必定平家の餘黨と存じ、早速召捕り候。きつと御糺明有るべし。」とぞ申しける。賴朝聞召し、「先年大佛供養の時、惡七兵衛景清が賴朝を狙ひしためしもあり。いか樣おのれ仔細あるに紛れなし。まつすぐに白狀すべし、陳じなばがうもんせん。いかに〳〵。」と仰せければ、此の入道ちつともおくせず、「いまは何をか包み申さん。某は一とせ奥州衣川にて、御腹召されし九郎判官義經の家臣、武藏坊辨慶が父、熊野の別當辨眞が生き殘りたる身の果て候。忝くも我が君今天下の武將と仰がれ給ふは、全く判官殿の戰功なるに、讒人の口によつて、一日も安堵の思ひなくうしなはれさせ給ひ、子にて候辨慶も冥途の御供仕りぬ。せめて無念をはらさん爲、討死したる御家人どもが、產みすてし子にても候はば、幼少なりともかりあつめ、心許りのとぶらひ軍仕らんずる血祭に、先づ讒者を一矢と心がけ、忍びよつたる甲斐もなく、海野とやらんに見付けられ、白狀無念の至りなれども、君故すつる老いの命、とく〳〵首を召されよ。」と、返答すゞしく申しける。賴朝聞き給ひ、「是れ一應の事ならず、後日に評議あるべき條、先づそれまでは勞れ。」とて、和田の義盛に預け置かれけり。時に工藤左衛門祐經進み出で、「誠に彼の法師其のまゝ置かば何事か仕出し、御遊興の妨げならんに、いしくも仕つたる海野の太郎、御褒美下され然るべし。」と取りなせば、君御悅喜の餘り、「オ、尤も〳〵。何にても褒美

百日曾我（一名團扇曾我）

第一

文宣王は大野に狩して麒麟を得。韓退之が獲麟の解にいはく、麟は德を以てして形を以てせずと云云。麟は仁獸にして生けるをくらはず、生草を踏まずともいへり。道ある君が御狩場や、麒麟を得ずといへども、農業を妨げず。民をたすけて山田もる、火串の光明々として、斐たる君子の一遊一豫。國をなびかす旗棹の、直なる掟樂しめり。維時建久四年仲夏下旬、征夷將軍頼朝卿、富士の御狩の當日を、待つも程なきみじか夜や、御發向は寅の一點、假屋の木戸も明がたに、御出馬の御ふれあり。昵近外樣の大小名、狩裝束に美をつくし、列卒の人數は所領の高下、面々持の場所にまとひを立て、組子には思ひ〳〵の笠印袖印。扨御鷹はつみ、ゑつさい、さしば、せう、隼、このり、鷲、鵰はくてうどりの朝鮮鷹、そろへて三千餘居なり。逸物の犬唐犬、是れも同じく三千疋、馬鞍皆具のきら飾り、花と紅葉をむさしのに、一どに眺むる如くにて、御感は斜ならざりけり。こゝに信濃國の住人海野の小太郎行氏、八十許りの老入道を御前にひつするゑ申す樣、「唯今御假屋へ參勤仕る所に、此の

かりけり。（竹本義太夫正本）

大覺大僧正御傳記　終

飛び來り、龍女をはたと蹴落して、「オ、潔し。若作障碍卽有一佛魔境の力、今こそ本望唯遂げてあり。猶うき雲の關守ぞ。」と、聲ばかりして失せにけり。日像上人御覽じ、「いかに大覺。捨邪歸正の行法只今なるぞ。」と、佛前に手を合はせ、「頭破作七分如阿梨樹枝の誓ひを現はし給へや。」と、一心に觀念し、せめかけ〳〵祈らるゝ。法力忽ち金色の跳題目と現はれて雲中に見えけるが、經といふ文字の兩の引きすて地に下れば、龍女悅び縋り付き、軒端に傳ふ蜘蛛の、いとも危く 三重 したひけり。左右なく雲に乘せし處に、又狗賓顯はれ出で、「扠懲りもなし。おのれいづくへ餘さん。」と、羽風を立て翔け來る。龍女恐れて雲の足はやく逃ぐるや妄執の、輪廻の黑雲渦卷きて、くる〳〵と廻りしは、せつなくもまた 三重 すさまじし。されども達多が法敵の、五逆の罪のためしにや、狗賓あへなくはたと落ち、大地二つにさつと裂け、奈落の底へ落ちければ、日像不便に思召し、大覺諸共高聲に、提婆品を讀誦あり。時に龍女手を合はせ、「南無妙法蓮華經。」と、となふる聲のうちよりも、卽身卽佛目のあたり有りがたかりける次第なり。まことに妙なる法力にて、魔障も我慢のほのほ消え、ともに成佛得脫の蓮華に浮み出でしとき、御法の雨は車軸のごとく、都鄙遠鄕に降りわたれば、帝叡感限りなく、此のたびの御法施に宗祖日蓮大菩薩、日朗日像菩薩號。さて大覺は大僧正といとかしこき綸言の、今の世までもとゞまりて、宗旨繁昌國繁昌、五穀成就萬歲樂、目出たかりともなか〳〵申すばかりはな

しくは、尋ね來て見よ法華經の、八卷が奥の※九名皐諦。」と詠じ給ひ、虚空に上らせ給ひけり。御聲に御夢驚かせ給ひ、「こはそも不思議の次第や。」と、諸卿殘らず御前に召され、右の御靈夢一々御物語ましまし、「急に其の沙汰あるべし。とく〳〵。」との宣旨なり。おの〳〵驚き思召し、宣旨に任せそれよりも、敕使を立てさせ給ひける、例少なき 三重事共なり。さる程に、日像大覺は佛神擁護の名僧故、ふたゝび帝都に歸洛あり。扨敕諚に任せ、降雨成就の祈りの爲、御寺を龍華王院と改め、三寶四菩薩日蓮の御影の莊嚴、善盡し美盡しつゝ、素幡華鬘種々の香花を供へつゝ、金銀珠玉日に映じ、軒も甍も光添ふ。かくて日像大覺は、禮拜恭敬ましまして、第一の卷序品より一心不亂に讀誦あり、第三等雨法雨の文に至り給ふ時、雨夜の前佛前に聽聞申しおはします。大覺御覽じ、「なうお事は雨夜の前にてあらざるか。我こそ昔の兒月光よ。」と宣へば、「あら有り難の御事や候。恥かしながら今は何をか包むべき。我本人間にて候はず。長く蛇道の苦を請けし龍女にて候が、靈山會場の古を聞くにつけてもうらやましく、此の御經にたよらん爲、假に御身と連枝となる。いよ〳〵佛法堅固にして、五濁の衆生を度し給へ。我も像師の結緣にて、朝暮拜する曼陀羅の、妙法蓮華の功力により、變成男子疑ひなし。此の報恩に今此の度、雨を降らし妙經の威力を現はし申さん。」と、夕立つ空の浮雲を、掻き分け押分け 三重飛行ある。不思議や俄に如意が嶽の方よりも、電光頻りにて魔風梢を吹き折り、時平天狗

つ空に風遠近の、山河草木震動し、矢を射る如く飛び去りけり。御所中一度に肝を消し、「あな有り難や。さりとては、かかる貴き妙法の御宗旨にならでは。」と、老若男女二百人念珠を切つて、「今身より佛身に至るまで能く持ち奉る。南無妙法蓮華經。」と、唱ふる所の信心は、「これぞ得入無上道速成就佛身なるわ。」と、悦ばざるこそなかりけれ。

第五

いで其の頃は延文年中、天下大きに旱して、五穀果實の種を絶ち、※餓莩野外に充ち滿ちて、行人道路に倒るれば、徒事ならずと帝より、諸國の神社へ奉幣使を立てられ、神泉苑大堰川、賀茂桂川の邊にて諸寺の高僧貴僧に仰せ、大法祕法を修せらるれども、遂に小雨も降らざりけり。君宸襟を痛ましめ、「朕が不德なる故か。」と、朝餉を止められ、綾羅に霧を、かけまくも忝き叡慮にて、暫し御寢と見えけるが、角髮結うたる童女一人忽然と現はれ、帝に向つて宣ひしは、「此の度天下旱魃し、萬民憂へに沈む事、一乘弘通圓頓の行者日像大覺といふ二人の法師を、佞人僞つて備前國に流し置く。諸天龍神これを悲しみ、慈悲の雨露を惠まさず。急ぎ兩僧を迎へ、妙法の法水を乞ひ受けよ。」とありければ、帝御夢の中にして、「御身は何處の人ぞ。名は何といふぞ。」と御尋ねありければ、其の時童女、「戀

何とせん方あら恨めしの浮世や。」と、流涕こがれ歎かるゝ。時平えせ笑ひ「ホ、結構な有様、ちつとさうも御座るまい。先程よりの悪口の返報、いで〳〵暇取らせん。」と、飛びかゝり膝に引敷き、柄も拳も砕くるばかり、刺し貫くぞ哀れなる。「今は存念晴らせし。」と、死骸を引立て見てあれば、有り難や姫君の御守曼陀羅を、ずた〳〵に刺し通し、題目より流るゝ血は、たゞ瀧つ瀬の如くなり。時平呆れ、「こは如何に、野狐の所爲か。」と見廻せば、思ひも寄らぬ廣縁に、姫は佇みおはします。「エ、無念や仕損ぜし。」と、側に掛けたる長刀を、柄長く押取り、「遁さじ。」と走りかゝつて丁ど斬る。引外し飛び上り、長刀はたと踏み落し、其の隙に曼陀羅を拾ひ上げ捲き返し、押戴きてぞ坐す。「扨無念や。」と振廻し、苛つて蒐れば弓手へこし、馬手へ跳ね越え飛びしさり、裾を拂へばこは如何に、虚空に乘じ、持ち給ふ彼の曼陀羅を、時平が眉間にはたと打付くる。のつけにどうど倒れ伏し、暫しが間悶絶し、「なう耐へがたや勿體なや。」十界互具の本尊より、血を出せし嚴罰立處に報い來て、熱湯の責めに遭ふ。あら悲しや。」と叫びぬる、口より猛火燃え上り、五體の繼ぎ目〳〵より、斷れ〳〵にさばけしは、あさましかりける苦しみなり。暫くあつて寄りこぞり、元の形となりけるが、兩眼光り鼻長く、さも凄まじき羽がひ生ひ、「我佛法に仇をなし、魔道に入るを幸ひに、己を摑みひしがんと思へども、恐ろしや三十番神十羅刹守護し給へば力なく、唯今は立ち去るなり。重ねて思ひ知らせん。」と、夕立

約はせられうとも、末代家の瑕となれば、御身と夫婦になる事は、ふつ〱思ひ寄らぬぞや。ならぬぞならぬ。」と仰せける。時平愈腹を立て、「なにさ關白の娘とて、女房にせられまい物か。此の上は男の我、適れ天子の娘なりとも女房にして見せう。是非いやならば暇にはこれ、これなるわ。」と、太刀をずばと拔きけれども、姫君これにも怪顚なく、「やあ道知らずの惡人め。如何に慾に耽ればとて、眼前世嗣のある家を横領せんとて、自らを妻にせんとは扠いかに。せめて氏ある身ならばこそ。賤しき下々の分として、攝家の跡目を望む事、天命知らずの驕り者。これにつけても母上の、慳貪邪見の心から、如何に繼しき子なればとて、妾が爲には兄なるを、疎み妬みてあの如き、放埒無慙の下々ばらを、夫に持たせん壻にせんとは、扠情なき心入や。」と、恨みかこたせ給ひけり。時平飽くまで恥ぢしめられ、「最早堪忍ならぬ。」とて、既に討たんとせし所へ、母上驅け出で縋り付き、「こは情なし。お事は氣ばし違ひしか。姫が行方の知れざれば、在るにも在られずいつとなく、泣き歎きしを知りながら、歸ると知らせぬのみならず、殺さんとは扠如何に。お事は妾が敵かや。殺さで叶はぬ道ならば、先づ我から。」と縋り付き、悶え焦れて叫ばるゝ。時平母上を取つて伏せ、「何婆塞ぎ面倒な。死に度くば死なせん。」と、胸元を三刀に刺し殺し押伏する。姫君氣も消え心消え、「なう情なや。母上を何の科にて殺せしぞ。口惜しや自らが、女の身の果敢なさは、親を殺せし敵をば、目の前に置きながら

うかま占野に竝の岡。此所こそなゝのやのだけの、紫竹舟岡鷹が峯、見やり見返り眺めこし、やうやう北野に 三重 著き給ふ。然る折節時平は、北野下向と打見えて、編笠深く顏隱し、下人少々召しつれて、寛闊らしく來りしが、姫君と行き逢ひ、「はて田舍者さうなが、よい風の。」と、立止まつて眺むれば、姫君笠を押傾け、足早に行き給ふ後姿歩みぶり、「八幡堪忍ならぬわ。」と、追つ付き御手を引止む。高則が妻押退けて、「これなう田舍者と見て侮り給ふか。主あるお子をしやほに大膽な。」といへば、「なに主がある。其の主のあるが面白い。此の上は無理と出る氣ざし。」とむずと抱き顏を見て、「ヤお事は雨夜ならずや。扨よい所で出會うたり。これは北野の引合せ。」と、供の者共諸共に、ひしくと取圍み、無體に引つ立て連れ行けば、時雨あまりの悲しさに、「やれ狼籍者。あたりに人はあらざるか。あれ取返し給はれ。」と、起きつ顚びつ追ひ行くを、散々に叩き伏せ、跡をも見ずして連れかへるは、情なうこそ 三重 見えにけれ。御所にもなれば、先づ母君に押隱し、とある一間に連れて行きて、「やい愛ないたづら者、何に不足あつて拔け出てはありけるぞ。親の合點せらるゝ上は、否でも應でも我が女房。サア從ふや從はぬや、早く返事をさらへ出せ。」と、眼をいらゝげはつたと睨み、牙を嚙んでぞ嚇しける。姫君ちつとも恐れ給はず、「いやこれなう時平殿、先づ心を靜め思うても見られよ。自らは誰あらう、天下に一人の關白の娘。いうてもお事は武士ならずや。例へば母の不合點にて、契

方と踏み迷ふ。小野の淺茅に置く露の、褐も小褄もしぼたるゝ、蜑の小舟や小鹽山。あれ〱御覧ぜ野も山も、紅葉色どる四方の景、えやは筆にも及ぶまじ。捨てられし身は、昔ながらも哀れさは、今更增る野の宮の、杜の木枯吹き散らす、木の葉の里の嵯峨の女が、刈り置く稻をかづきつれ、下歌頂きつれた、ア、形振を、立寄りうつす姿の池、濁る浮世の塵ひぢも、積り〱て高尾山。歌「愛宕參りに袖をひかれた。これも愛宕の御利生かの、面白や。」と歌ひつれ、九折くる樒が原、はら〱通る村時雨、袖をかざして衣笠山、さがなや嵯峨の女郎花、尾花招けば立止り、しばし座しき刈萱の、桔梗白菊たはれぐさ、引く手を取りて地楡、はや歸らんと夕顔や、歌しのぶ草葉末にむすぶ白露の、たまたま來ても早往のとは何事ぞ。せめて二十日の月の出づるまで、暫し假寐の岡のべに、蟋蟀はたおり螽斯、りん〱と鳴く鈴蟲に、駒も勇むや轡蟲、たれ松蟲の聲澄みて、濁る時なき清瀧の、瀨々の網代木水車、廻れ〱品よく廻れ、くるりくる〱、まだくるくるりきんりきり〱たよ〱と、波に搖らるゝ川柳、枝垂柳は風に揉まるゝ、都の牛は車に揉まれて、とゞろ〱と轟の、橋にしば〱休らへば、もの鵜の鳥の羣れ居るに、驚く魚を追ひ廻し、かづき上げすくひ上げ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報いも後の世も、忘れ果てつゝ面白や。げに思ひ出し、石和川石に御法を書き留めて、弔ふためしも有栖川、いざとて諸とも手を合はせ、妙法蓮華の手向草、江河の鱗山野の獸、草木國土

庭の面、さながら夢のこゝちにてあきれながらも人々は、自我偈を讀み法樂し、首題を唱へたてまつる。「まことに是人於佛道、決定無有疑の金言に、正しく入りし人々かな。」とて、押しなべ感ずるばかりなり。

第四

いたはしや雨夜の前、兒島が妻の情にて、嵯峨野の奥の山陰に、月日を過させ給ひしが、いつぞや高則は、お寺詣と立ち出でて歸りもせず。音信をまつに時雨の物思ひ、案じ暮して居たりしが、餘り待ち侘び、女房は、「妾お寺へ參り樣子を尋ね參らんに、お寂しながら待たせ給へ。」といひければ、「こは現なや、いかで一人はあられうぞ。妾も共に。」と宣へば、「誠に一人置きましては氣遣はし、お供せん。去りながら其のお姿ではなか／＼人や咎めん。」と、里歸りする初嫁の、振袖田舍模樣にて、其の身は下女の姿になり、鶯袖のゆきあはぬ夫を尋ぬる　三重

雨夜の前道行

小牡鹿のつま戀ふ聲に秋を知る。山里ながら住み馴れて、しばし名殘は有明の、空炷しめる雨夜の前、濡れし姿は自ら、時雨や誘ひ眞菅笠、雫とく／＼立ち出でて、覺束なくも行く道を、彼方や此

是れぞ諸法實相の風。無間に沈む悪人なりとも、今臨終の期に及び、此の法を聞入れ一心結定して首題を唱へ奉らば、卽身成佛せん事何疑ひかあるべき。若し此の詞虛言ならば、日蓮を始め日朗日像、かう申す大覺、阿鼻大城に忽ち墮ち、無量劫を經るとも浮ぶ世更に候まじ。必ず疑ふ心なく日蓮の法水を汲み、今此の火宅を離れずば、又ぞや生死流轉して浮ぶ世更にあるまじ。」と御敎化半ばに、不思議やな虛空に花降り音樂聞え、星の數々天降り、猶望月の照りまさり、輝き渡る庭上に、寶塔忽ち涌出ある。日像暫く合掌あり、「如何に高則。日蓮が僞りなき卽身卽佛の證據を見給へ。忝くも釋尊の此の法華經を說かせ給ふ時、六種震動し多寶如來現はれ出で、今世尊の說法は皆是眞實なりと末世の證據に立ち給ふ。只今爰に出現も、御分が迷ふ心あるを晴らさしめん御利益。」と、宣ふ下より寶塔の、扉四方へ開きけり。「あれ〱正身の多寶佛拜み給へ。」とありけれども、兒島が目には寶塔の光り輝くのみにして、更に拜まれ給はぬ上、扉はたと閉ぢければ、「扨あさましや業悪の疑ひの雲眼に覆ひ、尊容拜まれましまさず。今は何しに疑ふべき。許させ給へ。」と手を合はせ、不覺の涙に咽びけり。上人聞召し、「ォ、尤もさぞあらん。然らば一念決定し、題目を唱へよ。」と、寶塔にさし向ひ、「一如却關鑰開大城門。」と唱へさせ給ふ時、扉ぱつと開け如來の尊影儼然たり。高則信心肝に銘じ、こは有りがたやたふとや。」と、頭を地につけ禮拜す。夜も明けがたの月の影、星のひかりも薄ぐもり、霧立ちかくす

是等は皆無一不成佛の經文、空しからざる故と遊ばされて候。何と〳〵會得致されたるか。」兒島道理に至極して、唯緩々として言葉もなく控へしが、暫くあつて申しけるは、「して、其の善悪不二の妙理より、迷ひの凡夫となるは如何。」時に大覺笏取直し、「善哉々々よき難勢。さあらば示し申さん。先づ一切衆生の迷と悟は、水と波との如し。それ心性の水は波もなく風もなし。然るに一念顚倒の風起る時、千波萬波の浪となる。波もと水なり、水至う波なれば、煩惱卽菩提、生死卽涅槃にして、眞如海の内には衆生佛の隔てなく、一體不二の妙理なれども、無明煩惱の迷ひの縁によつて衆生となり、一乘一實の妙法の緣に引かれては、如我等無異の佛となる。是れを佛種從緣起是故說一乘といふなり。されば世語にも面白や。實相無漏の大海に、五塵六慾の風は吹かねども、隨緣眞如の波の立たぬ日もなしと、常に人の口號み申さず候や。あれ〳〵見給へ。心なき草木さへ、それ〴〵の縁にひかれ、青陽の春の園には花は紅柳は綠、夏は繁りて梢となり、秋は紅葉の色をなす。冬は野山も音さびて、皆白妙の示しなり。されば歌にも、妙の名は八巻許りに限らじな。松竹櫻當位卽妙と連ねたり。然れば衆生の迷ひといつぱ、煩惱の山高く妄執の雲覆ふ故、眞如の月立隱れ迷ふ心の暗となる。其の迷ひを晴らさんと思はば、事に觸れ折につき後生を心にかけ、花の春雪の朝も是れを思ひ風騷ぎ村雲迷ふ夕にも妙法を忘れ給ふな。出る息入る息を待たぬ夢の世に、唯他念なく南無妙法蓮華經と唱へられよ。

高明膝立て直し、「それはなほ〳〵心得がたし。例へばな、人の口に火々と言へども、手に取らざれば暑からず。水々と口に言へども、飲まざれば咽喉の渇き止むまじ。まつその如く唯題目ばかりを口に唱へ、其の心を知らぬ惡人の、惡趣を免れ得道するとは、何とも道理聞きがたし。」と、座を打つて申さるゝ。「オ、難ぜられたり〳〵。併し今示す所の妙法は、諸教中王の御法にて、功一期に高く、化度三說にすぐれたれば、餘經の及ぶ所にあらず。たとへば師子王の筋を一筋琴の絃にかけ、一度彈ずれば殘る十二の絃一度に悉く切れ、梅干のすき聲を聞けば、口中に酸溜り口を潤す。世間の不思議さへ斯くの如し。如何に況んや出世一大事の法華經の不思議、凡智の及ぶ所にあらず。それ小乘四諦の名許りを囀りし鸚鵡さへ天に生じ、三歸ばかり持ちし人大魚の難を遁れたり。ましてこの法華經は八萬聖教の肝心、一切諸佛の眼目なれば、我等これを唱へ四惡趣を離れん事、何の疑ひのあるべきぞ。さるによつて提婆品に、法華修行の輩に以上五つの功力を擧げ給ふ。一つには三惡道に墮ちず、二つには十方の佛前に生まれ、三つには所生の處に常に此の經を聞き、四つには若し人天の中に生まれては勝妙の樂を受け、五つには佛前に在つては蓮華より化生せんと說き給ふ。これ〳〵拜み給へ。此の心を大聖人の御書に、提婆が三逆も羅睺羅が二百五十戒も同じく佛に成る。嚴王の邪見も舍利弗の正見も同じく授記を蒙れり。爰をもつて大惡をも歎く事なかれ。一乘を修行せば提婆が後を繼ぎなん。

と釋し、一念の裏にも一心亂ぜざるを誠の修行といふ。これをよく〳〵心得修行致されよ。それ〳〵大覺。」と宣へば、畏まつて笏を取り、「鐘鼓獨り鳴らず、打つに隨ひ響あり。不審あらば愚僧答へん。問はせ給へ。」とありければ、兒島につこと笑ひ、「げに賴もしし。さあらば尋ね申すべし。されば妙法の經力にて※卽身成佛と說き給ふ。然れども※女人は地獄の使よく佛の種を絕つといひ、又內典には五障と嫌ひ、外典には三從と選む。されば榮啓期が三樂を歌ひしにも、女人に生まれざるを一樂とすと捨てたり。かかる重惡の女人、法華の力如何なれば、龍畜蛇身の女人の身の、南方無垢世界に成道を遂ぐるとは、これ疑はしし。」と難ず。大覺答へて、「それは御身方便の經に心を寄せ、卽悉頓成の妙理を忘れ給ふな。それ女人を選み惡人を捨つるは、法華以前の餘經の沙汰。此の經の功力は無差平等の妙理にて、惡人善人有智無智、戒を持つも持たざるも、男子女人の隔てなく、諸の川水の大海に入れば皆潮となり、須彌山に近づく鳥の金色となるが如く、法華經をだに持てば、總じて十界の衆生、殘らず成佛の素懷を遂ぐる御經なれば、平等大惠眞淨大妙法とも、十界皆成佛の妙經とも申すなり。されば其の證人を出し聞かすべし。先づ惡人には提婆妙莊嚴王、有智は舍利弗、無智は槃特、有戒は聲聞、無戒は龍女なり。かかる衆人の成佛は、皆妙法の威力にあらずや。」高則聞きもあへず、「扨は無智愚鈍の凡夫の、何の辨へもなくとも、たゞ題目をさへ唱へ候へば、四惡趣を離れ候か。」「中々の事。」

大蛇碎けし舟板悉く取りまき、微妙不思議の聲を上げ「※如渡得船。南無妙法蓮華經。」と唱ふれば、舟板おのれと一つに集まり、舊の如くの舟となる、奇妙なりける次第なり。人々奇異の思ひをなし、日像を初め各舟に乘り給へば、其の時大蛇立ち上り、忽ち形を變じ妙法五字の帆柱となり、尾を以て潮を捲くと見えけるが、有り難や※界如三千の帆を揚げて、諸法實相の追風を得、風に任せてそれよりも、備前の兒島へ三重吹かれ行く。かくて聖人、高則が情にて僅かの庵室引結び、去年と過ぎ今年と暮れ月光公も今ははや、御修行の功積り御剃髮なされ、卽ち御法名を大覺と改めさせ、像師諸共妙法の、御法を弘め給ひけり。頃しも九月十三夜、今宵は高祖日蓮の御難の夜とて、高則は日像大覺招待し樣々と饗應申し、昔語りの序よく、兒島申しけるやうは「我が父在鎌倉の節、日蓮上人の御敎化をうけ、受法せしと承れども、某幼稚にて親に後れ、田舍住のはかなさは、宗旨の有り難き事をも承らず。然る故やゝもすれば諸宗の論に心移り、法華に不審の思ひなす。恐れながら佛道修行の御敎化に預り度く候。」と、謹んで申しけり。像師聞召し「オ、尤もかな。それ法華修行の肝心は信心をもつて根本とす。愚鈍第一の我が名を知らぬ槃特も、智慧第一の舍利弗も、同じく佛と成る事は、唯信心の二字にあり。さるによつて華嚴經には、佛法は海の如し。たゞ信を以てよく入ると。※又佛舍利弗に示して曰く、信を以て入る事を得たり。己が智分に非ずと述べ給ふ。されば各信といつぱ、無疑惑心

覺高則をさもあらけなく縛めて、道中嚴しく守護しつゝ、難波の浦より出船し、風に任せて播磨潟。爰は西國二箇所の難所、ところこそよけれと、半平つつ立つて、「これ〳〵流人のかた〴〵。この海にて沈めにかけよとの宣旨に任せ、只今爰に沈むるなり。覺悟あれ。」と呼ばはれば、各はつと驚き給ふ。中にも兒島齒がみをし、「エ、勿體なや。假令如何なる科にもせよ、法衣を著せし上人を、斯樣に行ふ法やある。かく暴惡の天子とは知らで、心を盡し北條一家を討ち滅ぼし、叡慮を息め申さんと、智謀を碎きし後悔さ。あつぱれ繩目の身ならずば、己等一々摑み裂き、直に內裏へかけ行きて、帝にもせよ王にもせよ、唯一太刀に恨みんもの、扨口惜しや無念や。」と、舟底どう〳〵と、拔くるばかりに踏み鳴らすは、凄まじかりける氣色なり。半平嘲笑ひ、「扨腹筋痛きあだ威言。やれ此の世の王は最早叶はじ。追つ付け閻魔王を恨み腹を癒よ。いで〳〵暇取らせん。それ〳〵。」と下知すれば、畏まつて警固の武士立ちかゝるを、どう〳〵と弓手馬手へ蹴倒せども、大勢ばつと折り重なり、牢輿諸共智覺正覺海へだんぶと投げ入れしが、忽ち蒼波紅蓮を返し、千尋の大蛇現はれ出で、舟を搖り上げ搖り下し、惡風毒氣を吹きかくれば、「こは悲しや。」と警固の武士、前後を忘じ目も眩み、みな嘔血を吐きけるが、舟は微塵に碎けつゝ、底の水屑と三重なりにけり。されども二つの牢輿智覺正覺高則は、少しも波にひたりもせず、剰へ牢輿は雙方へさばけ、舟板諸共暫しが程に、波に漂ひ見えけるが、時に

のなせる所と云ひながら、誠は諸餘怨敵皆悉摧滅の、御奇特あらはし給ふ處なるわ。」と、聞く人感にぞ堪へにける。

第　三

危き命逃げ延びて、立歸れども靜まらぬ、胸もどき〳〵時平は、猶いやまさる無念さに、高橋半平といふ浪人を招き、金銀をとらせ酒をすゝめ「さて賴みたき事あり。」と、巨細殘らず語り、「月光が儀は言ふに及ばず、日像共に沙汰なしに、殺す思案はあるまいか。」と、餘儀なく賴めば半平は、暫しうつぶき眼を閉ぢ、「これは格別の儀なれば大事の思案、はあ何とがなエ、思案袋の口が解けて候。綸言と僞り僞敕使をたて、月光君を訴へもなく引込み置く科によつて、遠流と僞り無禮に各半輿に乘せ、途中殘らず搦め取り、西海の沖中にて沈めにかけ失はば、誰知るものも候まじ。但し如何。」といひければ、「さて解けたり智慧袋、これに如くべき智畧なし。とても事に御身敕使になつてたべ。偏に賴む。」とありければ、「はて此の上は兎も角も。然らばお手の人々を仰付けられ候へ。晝は人目いかゞなり、夜をこめ都を出で申さん。」「實に尤も。」と夕まぐれ、檜長刀とひしめいて御寺をさしてぞ急ぎける。げにや天子の御威光は、僞とても誠ぞと、思ひも寄らぬ半輿に、日像月光乘せ申し、智覺正

いッかに所領が欲しいとて、現在の御實子を殺させ、其の跡を取らんとは、悉皆夜盗強盗のやから。己法師とならずんば、首引拔いてくるべけれども、我々が出家はいぬめが仕合、とう〱歸れ。」と罵れば、時平大きに怒り、「あれ物な言はせそ。亂れ入つて討ち取れ。」と、苛つて下知をなしければ、兄弟腹に据ゑかね、太刀も刀もあらざれば、飛びかゝり〱取つては引伏せ押伏せ、其の太刀を奪ひ取り、羣りかゝる大勢を、はらり〱と三重斬り伏せけり。されども敵は大勢故、此處彼處より亂れ入り、勿體なくも上人を兩方へ引張り出し、「月光はいづくに隱せし。眞直に白狀せずば、此の太刀が問ひ狀ぞ。」と、御胸板に押當てしは、危かりける仕業なり。かかる折節兒島の三郎、今日は父の忌日とて、彼の御寺へ參り合はせ、此の體を見もわかず、「はつ。」と驚き驅け入つて、つき退け引退け取つて投げ、上人を押隔て二王立に立つたるは、面を向くべきやうぞなき。時平齒がみし、「あれ餘すな。」と悶ゆれば、高則あたりを見廻し、二丈有餘の材木を輕々とひつさげ、「三衣の僧に敵たふやから畜生に劣りしを、刀汚して詮なし。」と、毆り立て〱算を亂して三重打ち伏する。時平今は敵はじと、跡をも見ずして逃げ去れば、「オ、さもさうず〱。」と、しづ〱と立歸り、上人の御目にかゝり、「扨々危き處へ參り合はせし珍重さよ。定めて斯くては果すまじ。たとひ重ねて寄せ來り、幾千萬騎候とも、某かくてある上は御心安かれ。」と、門戸きびしく差固め、御寺を守護し居たりける。「これ高則が勇力

まづ私宅へ御供し、御所の様子を窺はん。」と、夫婦諸共御供申し、庵をさしてぞ 三重歸りける。これは扨置き、御繼母は月光君を殺さんとの、巧みもあだに成る上に、月雪花と思ひ子の雨夜の前、いづちへか知らぬ行方をあこがれて、身も絶えなんと歎かるゝ。時平もはたと胸に迫りしが、「いや申しつくづくと思案致すに、姫も彼奴等が勸めにて、唆せしと覺えたり。其の上聞けば、平井兄弟仰せを無にするのみならず、月光諸共日像法師に受法し、出家せしと承る。いよ／＼憎き仕業。縦ひ出家にならばなれ、某直に行き向ひ、月光共に首を刎ね、鬱憤晴らさせ申さん。」と、究強の若者五十人、著込鉢卷高股立、とるま遅しと 三重急ぎけり。さる程に月光君平井兄弟諸共に、日像上人の御弟子となり、御寺に忍びおはせしが、元よりも月光君、無邊行菩薩の再來ゆゑ、自解佛乘の悟りを開き、化一切衆生皆令入佛道の願ひに適はせ給ひけり。兄弟は法師となり、兄は智覺弟は正覺と法名し、即身即佛の媒、唯此の五字の名目ぞと、眞實妙に入りけるは、殊勝なりける次第かな。然る所へ時平は、手勢引具しつゝと入り、「やあ兄弟の生道心ばら、主命そむくのみならず、何の意趣あつて、斯く法師とはなりけるぞ。あつぱれ憎き仕業。先づ／＼月光は何處に在るぞ。急ぎこなたへ渡せ、早く出せ。」と、太刀拔き寬げ、はつたと睨んで立つたりけり。兄弟聞きもあへず、かつら／＼と笑ひ、「なに主命を背きしとは、どの主の事なるぞ。我々が主とては月光君より外になし。いやはや腹筋いたし。

れば、默止しがたなく濡れし身の、又ぞや御身に靡きなば、一道かくるまめ男、いやなりませぬ。」と仰せけり。まだ殿なれねどわけ知りも、逃ぐるばかりのしなせぶり。とんと腰骨拔け、「高則いつそ殺して給はれ。」と、よれつもつれつする所へ、兒島が女房肱笠の下に、小筒を携へ來りしが、此の體を見付け、燃え立つ焔胸を裂き、身悶えながら石を拾ひ、「扠腹立ちや。」と投げかくる。高則驚き、「はあ大事の所へ魔がさいた。エ、因果めが。」と呟きて、舟差寄すれば女房は、角も生ゆべき顔ばせにて、舟底の拔くる程どうど飛び乘り、「これこゝな上﨟、美しい顏をして、人の男に心をかけ、ようもく暖かに、此の舟へは乘られたなう。男ひでりはゆくまいに、扠恥知らずや。」と※ひしるにぞ、姫そゞろ恐ろしく、「こは難題や。自らはさうした者にて更々なし。語るまじとは思へども、御身の胸を晴らさん爲。」と、月光君の御行方尋ね出でさせ給ふ事、始終を殘らず宣へば、夫婦横手を丁ど打ち、「こは如何にあさましや。如何に存ぜぬ事とても、餘りとあれば勿體なき、法に洩れたる慮外の段、眞平許させ給へや。」と、五體を投げてぞ歎きける。姫君不審に思召し、「して方々は誰なれば、斯程までは宣ふぞ。」「さん候。某は兒島三郎高則と申す浪人にて御座候。扠女房は其の以前、君の御父上時雨の御所にて召使はれ、かくれさせ給ひて後某妻女に仕り、それ故名をば時雨と申し候。然れば御恩の君の姫君を、いかで粗畧に存ずべき、此の上は身不肖ながら御先途見屆け奉らん。見苦しく候へども、まづ

節もがな天下を覆し、宸襟を安んぜ奉らんと、世をためらひ嵯峨の奥に、たゞ夫婦のみ隱家の、瓢頴川に口漱ぎしも、かくやと思ひしらま弓、いるさや月の桂川、一葉に棹さして、釣のいとなみうつつなや。實に古も五湖に浮べる船の内。それは功なり名遂げ、身退きての樂しみを羨むばかり。有明の月をうかゞふ猿よりは、猶あだならん我が心、よしやかなはで玉の緒の、絶えなば絶えよながらへば、石に立つ矢と思ひ出の、ひとり樂しむ舟の内へ、「物申さん。」と呼びかくる。「や、何事ぞ。」と見返れば、遂に見馴れぬ顏かたち、ぞつと時雨のぬれ姿、さも恥かしげに笑みながら、「自らは人を尋ぬる者なるが、其の舟に乘せ向うへ越させ給はれ。」と打ちなづみたる物越に、高則心とけ〳〵と成り、「はて若い上臈の、お連もなく供もなし。いとほしや嘸便りなく在すらん。いで〳〵乘せて參らせん。」と舟差寄すれば伽羅の香の、薫じ渡れる天津風、雲の通ひ路絶え果てて、乙女や迷ひ來るらん。なんでも爰は濡れかけてとは思へども、流石又下女や婢にあらざれば、つつかけても口說かれず、如何と思ひいつの間に、舟川下へ流るれば、「はつ。」といひさま押し直す。櫂のしたゞり姫君の、御身にぱつとかゝるにぞ、「南無三寶。」と、高則迷惑さうに見えければ、「はてちつとも苦しからず。これ程の事に心弱きお人ぢやわ。」と、につと笑顏の御靨に、水溜れかし身を投げん。「お心ならお姿なら、いやはやなりませぬ。」と、御手を取れば、「はてわけもない。御身はいかい横著人かな。櫂の雫が濡れかゝ

いつの榮耀を期せんとて、數代の主君を討ち奉らん。尤も早速言ふべきを、兄弟といひながら、實は心が置かされて、これまで延引致せしぞ。天神地神も照覽あれ、全く虚言これなき。」と、涙を流し口說くにぞ、さしもの一角悄々となり、「さて勿體なや淺ましや。かかる事とは存ぜずして、法に背ける慮外の段眞平許させ給へや。」と、手を合はせてぞ詫びにける。禮儀の程こそ殊勝なれ。上人この由御覽じて、「さて見事なる兄弟の所存、尤もかうこそあるべけれ。我は法華の弘通日像なるが、方々が忠信あつく、又は愚僧が信に適ひ、いづれも怪我の無き内に來りぬるこそ珍重なれ。いざ先づ月光を伴ひ我が寺に忍ばせん。時刻移る。」と宣へば、兄弟大きに悦びて、「さて有り難き御仰せ。いよ〳〵賴み奉る。」と、上人の御供し、大覺寺へと急ぎける。「彼の兄弟は義を守り、命を的に隱れなき、弓矢とる身の手本なるわ。」と、褒めざる人こそなかりけれ。

第二

其の頃相模守平の高時天下の執事を取り行ひ、上君主の德にそむき、下臣の禮を失ふ。さるによつて四海安からず、手足を置くに所なし。伯夷が如き賢人も時に遇はねば力なく、空しく朽つる其の中に、備前國の住人に兒島の三郎高則とて、文武の達者ありけるが、高時が驕りを憎み、あはれさて時

所存と覺えたり。あつぱれ犬に劣る心底、最早兄とは思はぬぞ。主の敵遁さじ。」と、太刀をすばと拔きければ、「やれ待て一角。此の儀には思案あり。暫し〳〵。」と制すれども、「なに思案とは卑怯なり。」と、無二無三に打ち來れば、森廣是非なく拔き合はせ、受けつ流しつ三重戰ひけり。兄弟共に手利の達者、暫くあつてむずと組み、上を下へと捩ぢ合ひしが、一角兄を取つて伏せ、首をかかんとしたりしが、流石思へば親兄の、禮に畏るゝ武士の、やたけ心も手もなえて、詮方涙に眼くれ、途方を失ひ居たりけり。然つし所へ日像上人は息をもつがず、暗紛れより此の體を御覽じて、南無三寶月光を害すかと思召し、「やあ〳〵何者なるぞ。狼藉はせさせじ。」とあれば、一角透し見て、「さ宣ふは御出家と見えし。近う寄つて此の體を御覽じたべ。これに組み伏せしは拙者が兄にて候が、主人に敵する惡人故、討つて棄てんと思へども、さすが親兄の禮に畏れ此の仕合、御料簡。」といひも果てぬに、「なう其の主人といはるゝは、若し月光殿ならずや。」一角、「はつ。」と驚きして、「さ宣ふは誰人にて渡らせ給ふぞ。さら〳〵不審晴れ申さず。」といふ。「オ、尤もかな。此の儀に於ては仔細あり。詳しく語りまうさん。先づそこを放ち給へ。」と、是非に引きわけ給ひ、雨夜の前の書置の次第始終を殘らず宣へば、兄弟、「はづ。」と呆れ果て、兎角も言はず居たりしが、稍あつて森廣、「やあ一角よ。誠に汝は弟ながら、恥ぢ入つたる心入れや。現在連枝の因を捨て、主君への忠義返す〳〵も賴もしけれ。我も幾年長らへ

志。老少不定の境、明日をも知らぬ人の身の、後生菩提の肝心は、唯南無妙法蓮華經の口唱の修行に如くはなし。尤もかなや此の經は、諸經中王最爲第一、法華一部の肝要は、全う首題に留まれり。いでいで二世了達の守曼陀羅參らせん。」と、早速認め賜はれば、「こは有り難や。」と押戴き、「重ねて參詣申さん。」と、御前を立つて出で給ふが、御髪ふつと半ばに切り、御寺の内へ投げ入れて、御行き方は見えざりけり。「こは如何に。」と御弟子達、彼の黑髪を取上ぐれば、書置一通添へてあり。急ぎ御前に差上ぐれば、上人披き御覽ずるに、「恥かしながら自らは、前の關白經忠が娘候。扨も兄月光公と申すは先腹故、妾が母とは繼しき中、互に疎み兄君は、浮世の嵯峨の大覺寺に引籠りますを、今宵の中に現とも夢ともわかぬ我が心、兄に從へば親への不孝、母にたよれば兄弟の道立たず。中に立つ身は梓弓ゐるかひもなき世の中に、存へ物を思はんより、自ら兄の身代りに、立つより外はありそ海、深き障りの女の身、刃にかゝる後の世を偏に賴み參らす。」と、御涙にくれ讀みも終らず、「やれ方々。これを其の儘置く道ならず。たとひ二人が身に代り、段々に斬らるゝとも、それぞ誠の菩薩の行。妙法蓮華。」と唱へられ、御衣を結びあげ、足をはかりに驅け給へば、御弟子達も追々に、息をはかりに

三重　急がるゝ。黄昏時に平井兄弟常磐の里に懸りしが、一角いふやう、「如何に大炊殿。これまではさりともと御身、言葉を出されうと思ひ同道はしけれども、其の一言のなきは必定若君を、害し奉らん

てくれよ。喰ひ付いても。」ト悶えられしは、恐ろしかりける巧みなり。弟一角進み出で、「いや申し、若君に於て左様の不義なる御心入れ、ゆめ／＼以て候はず。それは皆讒者の業。先づ思召しても御覽ぜよ。科もなき若君を討たせ、姫君を御寵愛ましまさば、さればこそ壻君を世に立てん巧みと、世上の取り沙汰上への聞え。兎角御血は分けられずとも、誠は故君の御愛子、姫君の御爲には眼前の兄君なれば、以ては御實子同然なり。唯々我等兄弟に、御機嫌直され下されば、生々世々の御恩ならめ。」と、理を盡してぞ歎きける。御繼母面の色變り、「生推參なる意見だて。それ程の事を知るまじきと思ひ侮つて申すか。女とこそ生まれうずれ、言ひ出せし事を反故にはせぬぞ。さあ今一度言葉を返せ。」と、はつたと睨み給ひしは、夜叉の荒れしも斯くやらん。大炊介につこと笑ひ、「御立腹の段至極仕り候。兎角申すもお爲づく、何しに御意を背かん。」と、兄弟座敷を立ちけれども、母の思慮なきはかなさは、まだ睨め付けて、「早う急げ。」と言ひ捨て、奥にぞ 三重 入り給ふ。これは扨置き、其の頃妙法の首題を弘め、都鄙遠境の果てまでも、洽く受法し奉る、日像上人と申せしは、元より佛の應化故、衆生濟度の其の爲に、都の北に御寺を立て、毎日の御法談、貴賤羣集は限りなし。或夕暮にやごとなき少人一人參詣あり。「我は前の關白經忠が一子、月光と申す者なるが、上人の御結緣にて佛道の願ひあり。あはれ二世安樂の御法御示し給はれ。」と、しみ／″＼と宣へば、像師殊勝に思召し、「扨々やさしき

蓮華經の五字を書き、兩の脇に釋迦多寶の二佛を竝座に勸請し、「さて高祖日蓮大聖人報恩の御爲、日像之を營む。」ト、光を放ちあり〳〵と、拜まれ給ふぞ有り難き。月光信心肝に銘じ、「扨は發願成就せり。」と、晝夜法華に身を委ね、衆生利益の御志、げに凡人の胤ならぬ。世に辛きかな、御繼母は月光公の出奔を、願ふ處と悅び、御實子雨夜の前を寵愛あり。其の頃都六波羅鹽谷左近時益が甥、同左京時平といふ無骨者を養子とし、雨夜の前に娶せんと、既に婚姻の日限も、早近々に極める。されども御繼母思案あり。常の家さへあるものを、まして況んや此の家をや。月光を生け置きては後日の障りと思召し、御家人平井大炊介弟一角といふ兄弟を召され、「近頃わりなき無心なれども、方々大覺寺へ立越え、密かに月光を討つてくれよ。仔細は重ねて語るべし。偏に賴む。」とありければ、兄弟しばし言葉なく、さし俯向いて居たりしが、稍あつて兄大炊介顏を擡げ、「扨々驚き入つたる仰せかな。誠に我が君御臨終にも、若君を恙なく守り育て奉り、御跡目を繼がせ奉れと、數ならぬ我々までにも仰せ置かれ候ひし。然れども若君御歎きの餘りにや、御出家の思し立ち。たとへお恨みましますとも。是非々々思し止らせ給へ。」と、涙を流し諫言す。御繼母聞きもあへず、「いやとよ大炊介。いかに繼子なればとて、大方の事にて斯く言ふべきか。やれ月光が寺籠りを菩提の爲と思ふかや。妾を憎みて調伏し、殺さん爲と聞いてある。さすれば現在我が身の敵。片時も早く首を討ち、妾に一目見せ

救ふ。これぞ誠の孝ならめ。何はにつけて自らは、憂目みかさの晴れ間なく、暮れ行く空の雲の色、有明がたの月の光までも、心もよほす許りなり。所詮出家遁世し、父の御菩提弔ふべし。」と、唯一筋に思ひ切り、世の憂き嵯峨の大覺寺へ、密かに入らせ給ひつゝ、明し暮させおはしけり。頃しも文月初めつかた、やゝ月上る庭の面、蟲の音までもしん／＼と、風に瞬く燈籠は、あはれ亡き世の靈祭、いとゞ涙もまさるらし。月光僧正へ向はせ給ひ、「自ら未だ若年なれば、精靈得脫の廻向の御經、いづれを讀誦し然るべからん。教へさせたまへ。」とある。僧正聞召し、「オ、殊勝なり／＼。およそ眞言の奧義は究竟にして事むつかし。有緣無緣無差平等の手向には、只法華經に如くはなし。」と、教へ給へば若君は、「さて有り難し。」と御前を立ち、暮れ行く夜半を待ち給ふ、心ざしこそ殊勝なれ。すでに其の夜も、丑の刻に及びけり。其の時月光我が行業を試さんと、なほ山深く入り給ふ。大覺寺の奧山に人を葬る廟所あり。人跡絕えし三昧に、萬木空に覆ひ、日月影をうつさず、狐狼四面に驅り、猪犬牙を鳴らし、諸木嵐に動じ木の葉雨の如し。されども大覺志氣勇健にましませば、少しも恐るゝ心なく、塔前に座を構へ、一心に※自我偈を讀みておはします。其の時不思議や山中の諸石塔、皆一同に動き出で、月光と同音に自我偈を讀むこそ不思議なれ。中にも一つの石塔自餘の石塔より聲音高く、音律感に堪へ、其の聲殊勝に聞えければ、月光奇異の思ひをなし、やがて立寄り見給へば、中尊に妙法

大覺大僧正御傳記

第一

※此妙法蓮華經者、本地甚深之奥藏也、三世如來之所證得也。かるが故に如來の金言に、自證無上道大乘平等法。若し小乘を以て化する事乃至一人に於てもせば。我則ち慳貪に墮せんと云々。たゞ願ふべきは釋尊出世の本懷、唯爲一大事因緣の妙法なり。されば忝くも法華の高祖、末法有緣の大導師日蓮大聖人四代の權者、大覺大僧正の御俗姓を尋ぬるに、前の攝政近衞經忠公の御公達、月光公と申し奉り、三五の春の花盛り。されども父上世を早う過ぎ行く月日の重なりて、憂きが上にも物憂きは、なさぬ中とて御繼母の、憎み疎ませ給ふ故、過ぎにし父母の御事を、身にしみ〴〵と感に堪へ、つく〴〵思召すやうは、誠に父母の恩德は、外典三千餘卷にも孝行を以て旨とし、内典五千餘卷には孝養を以て眼とす。一日三時に自身の肉を裂き、父母の恩を報ずるとも、謝するに足らずと傳へ聞く。然るに我が幼少にして父母に後れ、寸志の孝をもなさざる事、思ふにつけて本意なけれ。※それ釋尊は母の御爲忉利天に昇り、一夏九旬摩耶報恩經を說き給ふ。又目連七月の供養も專ら靑提女の苦を

だれゐたりけり。頼朝はなはだ御感あり。「前代未聞の侍かな。平家の恩を忘れぬごとく、又頼朝が恩をもわすれず、末世に忠をつくすこと、仁義の勇士武士の手本は景清。」と、數の御褒美淺からず。鎌倉差して入り給へば、なほ景清は觀音に、三萬三千三百卷の普門品を讀誦して、日向國を本領し、悦び〳〵退出す。「なほ〳〵源氏の御繁昌、國靜謐の始めなるわ。」と、みな萬歳をぞとなへける。

出世景清　終

源平たがひに見る目も恥かし。一人をとめん事は案のうち物小脇にかいこんで、某は平家の侍悪七兵衛景清よと名乘りかけ〳〵、手取にせんとて追うて行く。三保の谷が著たりける兜の錏を取り外し取り外し、二三度逃げ延びたれども、思ふ敵なれば逃さじと、飛びかゝり兜をおつとり、えいやと引くしほに、錏は切れてこなたにとまれば、主はさきへ逃げのびぬ。遙かに隔てて立返り、『さるにても汝恐ろしや、腕の強き。』といひければ、景清は、『三保の谷が、首の骨こそ強けれ。』と、笑つて左右へ退きにける。昔を忘れぬ物語、お恥かしう候。」と、語り給へば人々は、一どにどつとぞ感じける。

かくて我が君御座を立たせ給ひければ、大名小名續いて座敷を立ち給ふ。景清君の御後姿をつくづくと見て、腰の刀をするりと拔き、一文字に飛び懸る。おの〳〵「是れは。」と氣色をかへ、太刀の柄に手をかくれば、景清すさつて刀を捨て、五體をなげうち涙を流し、「あゝ南無三寶あさましや。何れも聞いて給はれ。かくあり難き、御恩賞受けながら、凡夫心の悲しさは、昔に返る恨みの一念、御姿を見申せば主君の敵なる物をと、當座の御恩は早忘れ、尾籠の振舞面目なや。眞平御免をかうぶらん。誠に人のならひにて、心にまかせぬ人心。今より後も我とわが身をいさむるとも、君を拜むたびごとにとても此の所存は止み申さず、却つて仇とやなり申さん。とかく此の兩眼のあるゆゑなれば、今より君を見ぬやうに。」と、いひもあへず差添ぬき兩の眼玉をくり出し、御前にさし上げて頭をうな

のならば、觀世音の御手にかゝると思ふべし。此の上は助け置き、日向國宮崎の莊をあて行ふ。」と、御懇情の御詞に御判をそへて給はりける。景清涙をとゞめかね、「誠に身に餘りたる御諚の段、生々世世に有り難き、魂に徹つて覺え候。かく情ある我が君と知らで、狙ひ申せし景清が所存の程こそくやしけれ。」と、御前をも打忘れ聲を上げてぞ泣きゐたり。さて御土器賜はり、諸國の大名殘りなく皆々杯さし給ふ。重忠仰せけるは、「かかるめでたき折といひ、かつは我が君御慰みのため、和殿屋島にて功名の樣子かたつて聞かせ給へ。内々君も御所望ありしぞ。ひらに〳〵。」とありければ、頼朝公をはじめ參らせ、滿座の人々一同に、「はやとく〳〵。」とのぞまるゝ。景清辭するにおよばねば、袴の裾をたかく取り、御前に色代し、すぎし昔を語りける。「いで其の頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸に分つて、互に勝負を決せんとほつす。能登守教經宣ふやう、『去年播磨の室山備中の水島、鵯越に至るまで、一度も味方の利なかりし事、偏に義經が謀いみじきによつてなり。いかにもして九郎を討ち取る謀こそあらまほしけれ。』と宣へば、景清心に思ふ樣、判官なればとて鬼神にてもあらばこそ。命をすてば易かりなんと、教經に最期のいとまごひ、陸にあがれば源氏の兵、餘すまじとてかけ向ふ。景清是れを見て、物々しやと夕日影に、打物ひらめかいて、切つて懸ればこらへずして、刃向ひたる兵は、四方へぱつとぞ逃げにける。さもしや方々よ。

盗人の業にやと、御戸を開きて候へば、觀世音の御頭きれて失せさせ給ひ、切口より血流れて、禮盤長牀朱に染み、勿體なき御風情に拜まれさせ給ひ候故、驚き入つて注進申し上げ候。」と、事の次第を申し上ぐれば、君を始め奉り、畠山も高綱も供奉の上下おしなべて、あつと感ずる許りなり。君信心の感涙を流させ給ひ、「誠や景清、年來清水寺の觀世音を信じ奉り、十七の春より三十七の今日まで、毎日三十三卷の普門品を讀誦懈怠なく修行せしと聞きけるが、疑ひもなく觀世音、兵衞が命に替らせ給ふ有り難さよ。」と、御手を合はせ給ひければ、僧俗男女下々まで、皆々禮拜恭敬して、涙を流さぬ者はなし。重ねての御諚には、「かくては如何勿體なし。急ぎ千人の僧を供養し、一萬座の護摩をたかせ、御頭をつぎ奉れ。法事の上にて景清にも對面致すべし。いざ頼朝も參詣せん。」と御身を淨め佛の御頭を直垂の袖にうけ入れて、清水寺への御參詣、例まれにぞ聞えけれ。枯れたる木にも咲く花の、千手の誓ひぞ有り難き。かくて頼朝御法事も事畢り、佛の御頭をつぎ參らせ、宿坊に入らせ給ひける。時に佐々木畠山、景清夫婦を伴ひ御前に出でらるゝ。頼朝御覽じ、「珍らしや景清、我を平家の敵とて、狙ひ討つべき心ざし神妙々々。尤も武士の憤り、げにさうも有るべけれ。然れば頼朝が爲には御邊亦敵なれば、うつて捨つべき者なれど、汝が身には觀世音、入り替りまします故、二度害せば觀音の御頭を二度打つ道理、もつたいなし〳〵。もし又頼朝運盡きて、御邊に討たるゝも

ども、重忠は今朝景清が生顔を確かに見て參り候。」と、いひもはてぬに佐々木の四郎つゝと出で、「いや是れ畠山殿筋なき事な申されそ。其の景清は某仰せを承り、高綱が手にかけ首を刎ね、我が君の實檢に供へ、三條畷に獄門にかけて候ものを、景清が二人あるべきか、近頃粗忽千萬。」と、嘲笑うてこそ申さるゝ。重忠聞き給ひ、「尤も／＼御分が手にもかけつらめ。又重忠も確かに見て候はいかに。」高綱色を違へ、「はて埒もない事。一度切つたる景清が蘇生るべきやうもなし。それは定めて血迷うて、何がな見られつらん。但しは寐ほれて、夢をばし見給ふか。」「いやさ御分がうろたへて、よしなき者を景清と思ひ切つたるか。」「夢を見たるか。」「慌てたるか。」「是れ目を覺して思案せよ。」と、氣色かはつて爭ひける。頼朝だん／＼聞召し、「いか樣佐々木畠山そこつある人にてなし。不思議千萬晴れやらず。是れより取つて返し、頼朝直に見分くべし。各しづまれ／＼。」と、御馬の鼻を立てなほし、都にかへらせ給ひける。さる程に三條畷に景清の首を切りかけ、平家の一族謀叛の棟梁惡七兵衞景清と、高札を添へられたり。頼朝立ちより御覽あり、高綱重忠を招き、「是れ見られよ。」と仰せける。重忠も不審晴れず。諸大名立ちかゝり、よく／＼見れば今まで景清の首と見えけるが、忽ち光明赫奕として、千手觀音の御頭と變じたまひける。歴劫不思議ぞありがたし。しかつし所へ清水寺の大衆、我も／＼と馳せ參じ、「扨も一昨日の夜中に、佛前の蔀おの／＼あきて候ゆゑ、もし

又大宮司や小野の姫、憂目を見んは必定なり。」と、思ひ定めて立歸り、もとの牢屋に走り入り、内より貫木しとと締め、千筋の繩を身に纏ひ、さあらぬ體にて普門品、讀誦の聲はおのづから、卽心菩薩の變化ならんと、皆感ぜぬ者こそなかりけれ。

第五

かくてその後、右大將賴朝公南都の大佛御再興ましく〳〵、既に成就と訴ふれば、供養の報謝に、いそぎ大赦を行ふべしと、天が下の科人、京鎌倉の牢を開き、のこらず御免なされける。中にも惡七兵衞景清は、朝敵重罪なれば、助くるに所なく、佐々木の四郎に仰せられ、終に首を刎ねられ、今は四海太平なり。大佛供養御聽問有るべしと、諸國の大名御供にて、南都に御下向なされける。路次の行列三重花やかなり。すでに我が君巨椋堤にさしかゝり給ふ時、畠山の重忠息をはかりに馳せ來り、御馬の前に跪き、「さても惡七兵衞景清は御成敗のよし承り候へども、いまだ恙なく牢の内に罷有り候。一大事の囚人なれば早々首を刎ねられ然るべく候はん。」と謹んで申し上ぐる。賴朝聞召し、「不思議の事を申す物かな。景清は佐々木の四郎に申しつけ、一昨日の暮程に首を打たせ、則ち其の首賴朝が見參して、獄門にかけさせしが、ひが事なるか。」と仰せける。重忠重ねて、「其の段は存ぜず候へ

かに觀音經讀誦する嬉しさに、慰み半分に牢舍して有るものを、緩怠過ぎたる譫言つき、二言と吐かば摑みひしいで捨てんず。」と、はつたと睨んで申さるれば、十藏から〳〵と笑ひ、「其の縛めにあひながら、某を摑まんとは腕なしのふりずんばい、傍いたし事をかし。幸ひ此の頃痃癖痛きに、ちつとつかんで貰ひたし。」と、空うそぶいてゐたりける。景清腹にすゑかね、「いでものみせん。」といひもあへず、「南無千手千眼生々世々、一聞名號滅重罪、大慈大悲觀音力。」と、金剛力を出し、「えいやつ。」と身ぶるひすれば、大釘大繩はら〳〵ずんど切れてのいた。貫木取つて押しゆがめ、扉をかつぱと踏み倒し、大手をひろげて躍り出で、八方に追ひ廻すは、荒れたる夜叉の三重如くなり。むらがりかかる若黨中間、はらり〳〵と蹴倒し、十藏を搔摑み取つて押伏せ、背骨も折れよとどうとふまへ、「何と景清を訴人して御褒美にあづかり、榮花といへるは此の事か。」と、二つ三つふみつくれば、「なう悲しや、骨も碎けて息も絶え入り候。御慈悲に命を助け下され。」と、聲を上げて泣きにける。景清手を叩き打笑ひ、「おゝ某が褒美には廣い國をとらせん。」と、兩足取つて逆さまに引上げ、肩をふまへて、「えいやつ。」と裂きければ、胴中より眞二つに、さつと裂けてぞのきにける。「えゝ心地よし氣味よし。」と、左手右手へからりと捨て、「さあしすましたり。此の上は關東へや落ち行かん、いや西國へや立ち退かん。」と、行きつ歸りつ、戻りつ行きつ、一町許り走りしが、「いや〳〵此の度落ち失せなば、

あゝ今は恨みを晴らし給へ。むかへ給へや御佛。」と、刀を咽に押しあてて兄弟が死骸の上にかつぱと伏し、共に空しくなり給ふ。さても是非なき風情なり。景清は身を悶え、泣けど叫べどかひぞなき。「神や佛はなき世かの。さりとては許してくれよ我が妻よ。」と、鬼を欺く景清も、聲を上げてぞ泣きゐたり。物の哀れの限りなり。かくとはしらで伊庭の十藏、梶原がとりなしにて、少々勳功に預り、若黨小者數多連れ、遊山より歸りしが、此の體を見て肝を潰し、「是れは扠しなしたり〳〵。不便の事を見る物かな。これ侍ども。我此の如く御恩賞を受け、榮耀榮華に榮ゆるも、きやつ等を世にあらせんため、この頃方々尋ねしかども、その行方のなかりしが、扠は何者ぞ偏執を起し害せしか。但しは大宮司が計らひと覺えたり。よし何にもせよ、猶景清に言分あり。先づ〳〵死骸を取りおけ。」と、傍に葬らせ、牢屋に向つて立ちはだかり、「是れさ妹聟殿。いかに怨みあればとて、現在の妻子を殺させ、腕かなはずばなどいき骨でも立てざるぞ。ない〳〵は某御邊が命を申しうけ、出家させんと思ひしが、最早ほつてもならぬ〳〵。侍畜生大たばけ。」と、いかつはいてぞ申しける。景清くつ〳〵とふき出し、「こりやうろたへ者。あの者共はおのれが貪慾心をかなしみ、自害したるが知らざるか。それさへあるに、うぬ奴が口から侍畜生とは誰が事ぞ、命をしむ程ならばかかる大事をたくむべきか。まつた生きようと思ふ程ならば、へろ〳〵柱の五十や百、此の景清が物の數と思ふべきや。心靜

るまじきか。」「お、くどい／＼。見苦しきに早々かへれ、思ひ切つたぞ。」「なうもはやながらへて、何方へかへらうぞ。やれ子供よ、母があやまりたればこそ、かく詫言いたせども、つれなき父御の詞を聞いたか。親や夫に敵と思はれ、おのしらとても生きがひなし。此の上は父親もつたと思ふな。母ばかりが子なるぞや。みづからもながらへて、非道の浮名流さん事、未來をかけて情なや。いざ諸共に死出の山にて言譯せよ。いかに景清殿、わらはが心底是れまで。」と、彌石を引寄せ、守刀をずはと抜き、「南無阿彌陀佛。」とさしとほせば、彌若驚き聲を立て、「いや／＼我は母樣の子ではなし。父上たすけ給へや。」と、牢の格子に顔を差入れ／＼逃げあるく。「えゝ卑怯なり。」と引きよすれば、「わつ。」というて手を合はせ「許してたべ、こらへてたべ。明日からはおとなしう月代も剃り申さん、灸をもすゑませう。扨も邪見の母上樣や。助けてたべ父上樣。」と、息をはかりに泣きわめく。「おゝ理よ。さりながら殺す母は殺さいで、助くる父御の殺さるゝ。あれ見よ兄もおとなしう死したれば、お事や母も死なでは父への言譯なし。いとしい者よよう聞け。」と、すゝめ給へば聞き入つて、「あゝそれならば死にませう。父上さらば。」といひ捨てて、兄が死骸によりかゝり、打ちあふのきし顔を見て、いづくに刀を立つべきと、阿古屋は目もくれ手もなえて、まろび伏してぞ歎きしが、「えゝ今は叶ふまじ。必ず前世の約束と思ひ、母をばし怨むるな。おつつけ行くぞ南無阿彌陀。」と、心元をさしとほし、「さ

切つたる景清も、不覺の涙はせきあへず。やゝあつて涙を押へ、「やれ子供よ、父がかやうになつたるはな、皆あの母が惡心にて、繩をも母がかけさせ、牢にも母が入れけるぞ。邪慳の女が胎内より出でたる者と思へば、汝らまでが憎いぞや。父とも思ふな子とも思はじ。はや〳〵歸れ。」と叱るにぞ、子供は母に縋りつき、「なう父をかへしや、父上かへしや。」と、ねだれ歎きし有樣は、目もあてられぬ次第なり。阿古屋は餘りたへかねて、「よし此の上はみづからはともかくも、可愛やな兄弟に、優しき詞をたゞ一言、さりとてはかけてたべなう。子は可愛うは思さぬか。」と、又せき上げてぞなげかるゝ。景清重ねて、「おことがやうなる惡人に、返事もせじとは思へどもな、今のくやみをなど最前には思はざりしぞ。されば天竺に獅子といふ獸あり、身は畜生にてありながら、智慧人間に超えたれば、獵人にもとられず、却つて人を取り食らふ。されども腹中にとどくといへる蟲あつて、此の蟲毒を吐く故に、體を破つて自滅すなり。されば女の嫉妬の仇、人を恨むと思へども、夫婦は同じ體なれば、皆是れわが身をせむる道理。和御前がやうなる我慢愚癡の猿智慧を、獅子身中の蟲に譬へて、佛も戒め給ふぞや。汝が心一つにて本望とげず、あまつさへ恥辱の上の恥辱を取り、今言譯じて妻子が歎くを不便よとて、日本一の景清が再び心をかへすべきか。何程いうても、汝が腹より出でたる子なれば、景清が敵なり。妻とも子とも思はぬ。」と、思ひ切つてぞゐたりける。「さては何程申しても、御承引あ

六波羅に走りつきて此の體を一目見て、「なうあさましの御風情やな。やれあれこそ父よ、わが夫。」と牢の格子にすがりつき、泣くより外の事ぞなき。景清大の眼にかどを立て、「やれ物知らずめ、人間らしく言葉をかくるも無益ながら、かほどの恩愛をふりすて、夫の訴人をしながら、何の生面下げて今此の所へ來りしぞ。おれの指一つかなひなば、摑みひしいで捨てん物を。」と、歯がみをしてぞゐられける。「實に御うらみは理なれども、わらはが事をも聞き給へ。兄にて候十藏訴人せんとせしを、再三留めて候所に、大宮司の娘小野の姫とやらんより親しき御文參りしゆゑ、女心のあさましさは嫉妬の恨みに取りみだれ、後さきのふまへもなく、當座の腹立やるかたなく、ともかくもと申しつる、後悔さきに立たばこそ。さはさりながら嫉妬は殿御のいとしさゆゑ、女のならひ誰が身の上にも候ぞや。申譯いたすほど皆いひおちにて候へども、今までのよしみには道理一つを聞き分けて、唯何事も御めんあり、今生にて今一度、詞をかけてたび給はば、それを力に自害して、わが身の言譯立て申さん。」と、地にひれ伏してぞ泣き居たる。むざんやな彌石、父が姿をつくぐ〵見て、「なう父上程の剛の者が、なぜやみ〵〵とは捕はれ給ふぞ。いで押しやぶつて助け奉らん。」と、柱に手をかけ、「えいや〵〵。」とおせども搖がばこそ。不便なりける所存なり。弟の彌若はほだしの足に抱きつき、「痛いかや父上様、なう痛むかや。」と撫で上げ撫で下げ擦り上げ、兄弟「わつ。」と叫びければ、思ひ

の大筒を、三本までかづかせたり。「諸人に見せて恥かかせよ。」と、番も警固もつけざれども、なかなか五體働かず。されば文王は羑里に捕はれ、公冶長はけいりくにかゝれり。君がため名のため、何ぞかつて憂へんと、觀音經の讀誦のほか、世間口を閉ぢたれば、聲聞耳にとざせり。動くものは兩眼のみ。見るめもかなしくあはれなり。いたはしや小野の姫、不思議の命助かり、牢屋ちかきに宿を取り、酒菓物をとゝのへて、牢の格子に立ちかゝり、いたはり給ふぞ哀れなり。やう〳〵として景清心地よげに酒を飲み、「今日は一しほ骨髓にとほつて候。まことに御身の心ざし、いつの世にかは忘るべき。さてかりそめながら某は天下の朝敵、さだめて最期も遠からじ。今景清が生きたる顔をかたみにて、とう〳〵御身は尾張へ下り、後世弔うてたび給へ。これにつけても阿古屋めが心底の恨めしさよ。二人の子供も今は早殺して捨てつらん。思へば〳〵景清が運のつきこそ口惜しけれ。」と、恨みかこちて泣き給ふ。姫君も涙をながし、「御仰せはさる事なれども、とてもみづからは御最期の先途を見とゞけ、兎にも角にもなり參らせん。一日も一時も御命のあらん中は、往生の御いとなみを心にかけて、何事も定まる事と思召し、人を恨み給ひそよ。いつまでも是れにありたく候へども、人目繁う候へば、明日又參り申さん。」と、泣く〳〵歸り 三重 給ひける。是れは扨おき阿古屋の前彌石彌若諸共に、山崎山の谷陰に深く隱れておはせしが、景清牢舍と聞くよりも、我が身もあるにあられればこそ。

えしかば、重忠大宮司を同道にて、六條河原に馳せ來り、「扨も景清、人の難儀を救ひ、我が身を名乘りて出でらるゝ段、近頃神妙、尤もかうこそあるべけれ。此の上は小野の姫大宮司共に御赦免なさるる條、景清に繩をかけ急ぎ引立て申すべし。」畏まつて人々、「繩よ綱よ。」とひしめけば、景清喜び、「それこそ望む所よ。」と、千筋の繩をかゝり、先に進めば小野の姫、「なうみづからも諸共。」と、驅け出で取りつき泣き給ふを、大勢中を押隔て、あたりを拂つてひつ立て行く。かの景清の心底、勇あり義あり誠あり。前代未聞の男子なりとて、皆感ぜぬ者こそなかりけれ。

第四

かくてその後、げにや猛將勇士も運盡きぬれば力なし。不便やな景清、鎌倉よりの評定にて、六波羅の南おもてに、始めて牢を立てさせらるゝ。櫟白樫楠の木栂の木、長さ一丈にとらせ、地へは七尺掘り入れ、上三尺の詰牢に、しこの木をもつて蜘手格子に切組んで、一尺二寸の大釘の裏をかへさず打つたれば、劒をうゑたる如くなり。七尺ゆたかの景清を、二重に取つておし入れ、髮を七把にたばねて、七方にこそ吊つたりけれ。足を牢より引出し、左手右手へ取り違へ、山だし七十五人して、曳いたる楠の木にて上羈絆を打たせ、しつ錠詰金、唐々楓千引の石、材木を積みかさね、首にははねぼり

ちつと上つて見給はぬか、是れへ〳〵。」と有りければ、景時腹にするかね、「扨々しぶとき女かな。此の上は引きおろし火責にせよ。」と、炭薪をつみかさね、團扇をもつてあふぎ立て〳〵、天をかすめし黑煙、焦熱地獄といつつべし。すでに責めんとせし所に、惡七兵衛景清いづくにてか聞きたりけん。諸見物の其の中を、飛び越え跳ね越え垣の中に躍りいり、「こりや景清ぞ見參。」と、あたりをはつたとねめまはし、二王立にぞ立つたりける。姫君はつと肝潰れ、立寄らんとし給へば、人々取つてひつすゑ、「すは景清を逃すな。」と、一度にはらりと取りまはす。景清から〳〵と笑ひ、「えゝぎやう〳〵し。此の景清が隱れんと思はば、天にも昇り地をもくゞらんずれども、妻や舅が憂目をみるかなしさに、身をすてて出でたれば、もはや氣遣ふ事はなし。さあよつて繩をかけ、六波羅へ連れて行き、妻や舅を助けよ。」と、手向ひしてんず氣色なし。姫君涙を流し、「口惜しの有樣や。みづからや父上は、生きてかひなき憂身なるに、御身はながらへ本望遂げんとは思さず、何とて是れへは出で給ふ。淺ましの御所存や。」と、又さめ〴〵と泣き給ふ。景清も涙をおさへ、「おゝ賴もしの心底や。人は素性がはづかしし。子なかをなせし阿古屋めが、夫の訴人をしたりしに、御身は命にかはらんとは、賴もしや嬉しやな。さりながら父大宮司の御事心もとなう覺ゆれば、御身は是れよりとう〳〵歸り、菩提をとうてたび給へ。」と、鬼をあざむく景清も、不覺の涙を流しける。理せめて哀れなり。この事六波羅に聞

が奉行にて、方一町に垣をゆひ、突棒刺又鐵の棒、兵具ひつしと竝べしは、さながら修羅の獄卒が、八逆五逆の罪人を苛責にかくる如くなり。いたはしや小野の姫、あらき風にもあてぬ身を、はだかになして繩をかけ、十二の梯子に胴中を縛りつけ、哀れもしらぬ雜人ども、湯桶に水をつぎかけ〳〵、「おちよ〳〵。」とせめけるは、只瀧津瀬の如くにて、目もあてられぬ景色なり。無慙やな小野の姫、息もはやたえ〴〵に、心も亂れ目くるめき、旣に最期と見えけれども、いや〳〵武士の妻となり、心よわくてかなはじと、さあらぬ體にもてなし、「いかにかた〴〵、夫の景淸常に淸水寺の觀世音を信仰し、我にも信じ奉れと深く敎へ給ふゆゑ、今とても尊號をたえず唱へ奉れば、此の水は觀音の甘露法雨と覺えたり。今この水にて、死する命は惜しからず、夫の行方は知らぬぞや。千日千夜も責め給へ。南無や大悲觀世音。」と、苦しき體をおしかくし、いさぎよくは宣へども、さすが強き拷問に、聲も濁りて身もふるひ、よわ〳〵となり給ふは、扨も悲しき次第なり。「此の分にてはおちまじきぞ。やれ古木責にせよや。」とて、細首に繩をつけ、松の枝に打ちかけて「えいや〳〵。」と引きあぐる。下せば少し息をつぎ、引きあぐれば息たゆる。あはれといふも餘りあり。「たとへいかなる鬼神も是れにてはおつべし。」と、二三度四五度責めければ、今はかうよと見えけるが、又目を開き、「なう梶原殿、此の木の上に吊上げられ、世界を一目に見おろせども、夫の行方は見え申さず。かた〴〵も慰みに、

りて坂の下、谷の川瀬にからころと、なるは鰍の鳴く聲か、小石流れて行く音か。いや水の泡ちる玉でないよの。唄駒のひざぶしちりからからりの鈴鹿山、賤が草鞋のいとなみに、ふけてわら打つ土山や、だての旅路にゆくならば、買うてもたもれ水口の、葛小笠に露もりて、おのがまゝなる鬢水は、櫛にたまらぬ亂れ髪、とく／＼行けば洛陽や、六波羅にこそはつかれけれ。さて父上のおはします牢屋はいづこなるらんと、こゝかしこにたゝずみ給へば、をりもこそあれ梶原源太、町まはりしてかへるさに、此の體をきつと見て、「彼奴が有様たゞものならず、何者ざふ。」と咎めける。姫君聞召し、「さん候。みづからは尾張の大宮司が娘なるが、故もなきに父をとられ候ゆゑ、我命にかはらん爲、是れまで參り候。」と、いはせもはてず景季、「おゝ皆までもいふな。おのれが親の大宮司に、景清が行方をいへといへども知らぬといふ。おのれは夫婦の事なれば、よも知らぬ事は有るまじ。既に清水坂の阿古屋は、子のある中さへふりすてて、一度注進申せしぞや。ありのまゝに白狀せよ。」と、小腕取つて怒りける。「なう恨めしや命をすてて、是れまで出づる程の心にて、たとへ行方を知つたればとて申さうか。此の上は水責火責にあふとても、夫の行方は存ぜぬなり。只父上を助けてたべ。」と、聲もをしまず泣き給ふ。「おゝいふまでもない事さ。おのれおちずばたゞ置くべきか。」と、高手小手に縛りつけ、六條河原に引出し、種々に拷問したりしは、なうなさけなうこそ三重見えにけれ。梶原親子

人につらくはあたらねど、何の報いや袖の露、枯れも果てなで小野の姫、いたはしや去年の春、夫は都へいにしより、阿古屋の松の夕しぐれ、染めつけられて若紅葉、こひ散らんとあけ暮に、人めつつみてくい〳〵と、案じ煩ふ身の上に、父は都の六波羅へ、擒となりてあさましや、憂目にあはせ給ふとの、その音信を聞きしより、思ひに思ひつみかさね、せめては憂きにかはらんと、乳母ばかりを力にて、旅の衣手なみだつめたき紅に、もみうら濡れてゆふされし、空飛ぶ鳥のかへるさに、物忘れせぬ故郷の、風もわが身にふきかへて、今の門出をはりぞと、國の名殘もつゝましく、身の種まきし産土の神、熱田の宮居伏し拜み、父と夫とを安穩に、惡魔はらへと取る弓の、桑名の舟に梶枕、しきねの苫の荒筵、膚にあれてつられければ、戀するあまが鴛鴦の、夜のふすまとみるめ刈る、かづく刈藻はなに〳〵ぞ。歌によまれし鹿尾菜藻や、加太和布廿海苔春もまた、若布交りの目刺ほす、しほやが軒に竹見えて、をさな鶯音をぞなく、花にまがひのさくら海苔、天をひたせば雲のりに、月を包みてかゝるとはすれど、手にはとられぬ桂男の、あゝいぶりさは、いつ青海苔もかだのりと、身のさがらめをなのりそや。明あらめづらしと荒布かる、二見の浦ははる〴〵と、松の村立ち色の濱、蒔繪によくもにたるよな。あとは白雲とばかりを、故郷の夢とそらさめて、庄野につゞく龜山は、誰がため長き萬代と、かこつ涙はせきもせで、何をか關の地藏堂、せめて未來を賴まばや。のぼりくだ

かくてその後、悪七兵衛景清行方しれずなりたれば、もつとも天下の御大事と、諸國の所縁を詮議あり。中にも熱田の大宮司は現在の舅とて、千葉の小太郎搦め取つて、警固嚴しく打ちつれさせ、六波羅に引据ゆる。梶原源太大宮司に對面し、「汝は當家の大敵平氏の落人景清を壻にとるのみならず、剰へ行方もなく落しける、罪科甚だ輕からず、いづかたへ落しけるぞ。まつすぐに申せ。すこしも陳ぜば拷問せん。」と、はつたと睨んで怒りける。大宮司聞き給ひ、「仰せの如く景清とは緣を結び候へども、去年の春國許を立ち出で、今に便りも候はず。土も木も源氏一統の御代なるに、一旦陳じ申すとて、隱しとげられ申すべきか。壻に取りしを曲事とて、誅せられんは力なく候。行方においては存ぜぬ。」と、詞すゞしく申さるゝ。重忠仰せけるは、「尤も〳〵。たとへ行方を知つたればとて、壻の訴人は致されまじ。たつては此の方の不調法。いかに梶原殿、かの景清は仁義第一の勇士なれば、所詮太宮司を牢舍させしと傳へ聞かば、舅の難を救はん爲、おのれと名乘つて出でん事は目前に見え候。此の儀はいかに。」と有りければ、おの〳〵、「評定尤も。」と、六波羅の北の殿に新造の牢を建て、大宮司を押込めさせ、嚴しく番をぞ三重せさせける。

小野の姫道行

に血をあやす奇怪さよ。とても世になき某が、おのれらが身の爲ならば、何條命をしからん、人おほく打たせんより、女房兄弟をりあひて、搦めとれ。」とぞ喚きける。十藏が下人三太といふ者、分別もなく飛んでかゝる。景清につこと打笑ひ、側にありける雙六盤、片手に取つて投げつくれば、三太が眞向に、響き渡つてはつしとあたれば、首は胴にぞにえこみける。「おゝでつくともせぬ丁稚奴が、手柄しさうに見えたれども、ぐし〳〵となりけるは、誠に愚人夏の蟲。」と、たはぶれて立つ所を、十藏續いて切つてかゝる。景清長刀おつとりのべ、「蟲同然のこつぱ武者、婆婆の訴人は是れまでぞ。閻魔の廳にて訴人せよ。」と、受けつ流しつ切り結ぶ。江間の軍兵是れを見て、「訴人討たすな加はれ。」と、どつと連れておし隔つる。「心得たり。」と景清は、西門を小楯に取り、いれかへ〳〵大勢を左右にうけ、眉間眞向鎧のはづれ、嫌はずあまさず三重打ちたつる。こは叶はじと軍兵ども、十藏をひつつゝみ、六波羅さしてぞ引きにける。景清今は是れまでと、音羽の山の峯を越え、梢をふみわけ巖をおこし、飛び越え跳ね越え、刹那が間に飛ぶが如くに、東路さして落ち行きしは、實に希代の武士やと、扠感ぜぬ者こそなかりけれ。

第三

しは、料簡もなき三重次第なり。かくとは知らで景清は、清水寺に參籠し、轟の御坊に通夜申し、同宿達に雙六打たせ、助言してこそゐられけれ。頃は卯月十四日、夜半許りの照る月に、直兜五百餘騎、江間の小四郎大將にて、訴人の十藏眞先にかけ、轟の御坊二重三重に取りまはし、鬨の聲をぞ作りける。元來こらへぬ荒法師、門外につゝ立つて、「そも此の寺は田村將軍此の方守護不入の靈地なるに、狼藉は何者ぞ、夜盜なんどと覺えたり。あれ打ちとれ小僧ども。」と、聲々によばはれば、江間の小四郎駒かけよせ、「さな言はれそ法師たち。御坊に咎はなけれども、平家の落人惡七兵衞景清今宵こゝに籠りしよし、伊庭の十藏訴人によつて、義時討手に向うたり。異議に及ばば寺ともいはせじ、沙門ともいはすまじ。かたはし切つて切りちらせ。」といひもあへぬに、「惡七兵衞是れにあり。」と切つて出づる。常陸の律師永範此の由を見るよりも、「慈悲第一の此の寺にて、信心の行者を空しく討たせて、觀世音の誓願はいかならん。防げや〳〵法師ばら、さゝへよや下僧共。」「承り候。」と、衣の袖を絞り上げ、獲物々々を提げて、三十餘人の荒法師、五百餘騎につつ支へて、命を惜しまず三重戰ひける。五百餘騎が四方に分つて、隙をあらせず防げども、景清飛鳥の術をえたれば、さうなく討たれんやうもなし。雙方しろみて控へたり。景清緣端につつ立つて、「今宵の訴人は妻の阿古屋、おなじく兄の十藏と覺えたり。おのれ數年の恩愛をふりすて、大慾にふける愚人ども、勿體なくも此の御寺

御旅宿所は、これにてや候やらん。」と、やがて文箱を出しける。十藏出であひ、「いかにも〳〵、是れは景清殿の旅宿にて候が、宿願あつて兵衛殿は清水參詣致され候。御文をあづかり置き、歸られ次第見せ申さん。明日御出で候へ。」と、飛脚をかへし、兄弟文を開いて見れば、小野の姫の文にてあり。「かりそめに御のぼりまし〳〵て、いなせの便りもし給はぬは、かね〲聞きし阿古屋といへる遊女に御したしみ候か。未來をかけし我が契り、いかゞ忘れ給ふか。」と、細々とぞ書かれける。阿古屋は讀みも果て給はず、はつとせきたる氣色にて、「恨めしや腹立や、口惜しや妬ましや。戀にへだてはなき物を、遊女とは何事ぞ。子のある中こそ實のつまよ。かくとは知らではかなくも、大切がりいとしがり、心を盡せしくやしさは、人に恨みはなきものを、男畜生いたづらもの、あゝ恨めしや無念や。」と、文ずん〲にひきさきて、かこち恨みて泣き給ふ。道理とこそ聞えけれ。十藏悦び、「それ見たか、此の上は片時も早く訴人せん。最早思ひ切つたか。」といへば、「おゝ何しに心の殘るべき。せめて訴人してなりとも、此の恨みを晴らしてたべ。」「げによき合點。」と立ち出づれば、父、「暫く。」と引きとゞめ、「とは云ひながら、如何に恨みがあればとて、夫の訴人はなるまいか。いや又思へば腹も立つ。にくいは女め。えゝ是非もなや。」と、あるひは止めあるひは勸め、身をもだえてぞなげかるゝ。十藏袂をふり切つて、「えゝ輪廻したる女かな。そこ退け。」と突きのけて、六波羅さして急ぎ

と覺えたり。兵衞はいづくにありけるぞ。はや六波羅へ訴へて、一かど御恩にあづからん。いかにいかに。」と申しける。阿古屋はしばし返事もせず、涙にくれてゐたりしが、「なう兄上、そもや御身は本氣にて宣ふか。たゞしは狂氣したまふかや。妾が夫にて候へば、御身の爲には妹婿、此の子は甥にて候はずや。平家の御代にて候はば、誰かあらう景清と、飛ぶ鳥までも落ちし身が、今この御代にて候へばこそ、數ならぬ我々を賴みて御入り候ものを、たとへば日本に唐土をそへて給はるとて、そもや訴人がなるべきか。飛ぶ鳥懷に入る時は、獵人も助くるとよ。昨日までも今朝までも、隔てぬ中をそもやそも、除かれう物かさりとては、人は一代名は末代、思ひわけても御覽ぜよ。」と、泣いつくどいつとゞめける。十藏から〱と打笑ひ、「やれ名ををしんで得をとらぬは、昔風の侍とて、當世は流行らぬふるい事、其の上御邊が夫よ妻よなんどとて、心中だてはしけれども、あの景清はな、大宮司が娘小野の姫に最愛し、御身が事は當座の花、後悔するとも叶ふまじ。女さかしくて牛賣られぬとは御ぶんが事ぞ、諸事は兄に任せよ。」と、とんで出づれば又引きとゞめ、「いや大宮司のむすめは人のいひなし惡口ぞや。景清殿にかぎりさやうの事は候まじ。よし人はともかくも、わらはが二世のつまぞかし。さ程に思ひすゐ給はば、子供もわらはも害して後、心のまゝになし給へ。やあ生けらん內はかなはじ。」と、縋りついてぞ泣き給ふ。しかる所へ、「熱田の大宮司よりの飛脚なり。景清樣の

憂身といひ、殊更敵を持つたる身が、せめて一年に一度の便りをもし給はず。おゝそれも道理よ。此の頃聞けば大宮司の娘、小野の姫とやらんに深い事と承る。尤もかな、みづからは子持迄のうらぶれて、見るめにいやと思すれども、子にほだされて御出でか。悋氣するではなけれども、浮世狂も年による。しやほんにをかしいまで、よい機嫌ぢや。」と有りければ、景清打笑ひ、「是れはめいわく。其の大宮司の娘小野の姫には、しか〱物をも言はばこそ。八幡々々さうした事で更になし。そちならで世の中に、いとしい者が有るべきか。」と、なほこそもたるゝ袖枕、阿古屋も心打解けて、思ふ餘りの戀いさかひ、犬が食ふとや是れならん。銚子杯たづさへて、彌石に酌とらせ、三年積りし物語、語らひ明し給ひける、契りの程こそゆかしけれ。景清のたまふやう、「我久しく尾州に蟄居して觀音參詣怠れり。在京の間は、一先づ日參の志あり。さりながら是れより毎日往來せば、人の咎めも如何なり。轟の御坊にて、一七夜は通夜申し、やがて歸り對面せん。」と、編笠取つて打被き、表をさして出で給へば、彌石門まで送り出で、「さらば〱。」の小手招き、しをらしかりけるおひさきなり。爰に阿古屋が一腹の兄伊庭の十藏廣近は、北野詣をしたりしが、大息ついでわが家に歸り、妹の阿古屋を傍に招き、「是れを見よ、誠に果報は寢てまてとや。惡七兵衞景清を討つてなりとも、搦めてなりとも參らせたるものならば、勳功は望み次第との御制札を立てられたり。我らが榮華の瑞相此の時

清も、つねに清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら、清水坂のかたほとりに、阿古屋といへる遊君に、かりそめぶしの假枕、いつしかなれて今ははや、二人の若をぞ儲けける。兄の彌石六歲、弟の彌若四歲にて、よにおとなしくぞ見えにける。阿古屋はもとより遊女なれども、妹脊のなさけ濃やかに、世になき景清をいとほしみ、二人の子供を養育し、兄には小弓小太刀を持たせ、父が家督をつがせんと、ならはぬ女の身ながらも、兵法の打太刀し、武道を敎ふる心ざし、たぐひ稀にぞ三重聞えける。かかる所へ、惡七兵衞景清は重忠を打ちそんじ、やう〳〵として清水や、阿古屋が庵に著き給ふ。女房子供を引連れ、「こは珍らしや、何として御上り候ぞ、先づこなたへ。」と請じける。景清申しけるは、「内々御身も知る如く、我平家の御恩を報ぜん爲、鎌倉殿を狙へども其のかひなく、一兩年は尾張國熱田の大宮司にかくまはれ、空しく月日を送りし所に、此の度畠山の重忠、東大寺再興の奉行に上るをよきしほと、先づ重忠を狙はん爲、我が身を卑しき下郞になし、すでに間近くつけよせしが、運強き重忠にて、我らが智畧現はれ、本意なくも討ち損じ、一向に重忠と刺し違へ、死なんとは思ひしが、思へば御身がなつかしく、子供が顏をも見まほしく、無念ながらもながらへて、さてたゞ今の仕合なり。誠に久しく逢はぬ間に、子供もいたう成人し、御身もずんど女房をしあげたり。なんでも今宵はしつぽりと、積るつらさを語らん。」と、しととよれば、「えゝ、榮耀らしい。かく浪人の

が恐ろしさに、面影に立ちけるか。よし何にもせよ、是れ程まで雜言せられ、堪忍罷りならず。景清程こそあらずとも、そつと手なみを見せんず。」と例の痣丸小脇にかひこみ、多勢が中にわつて入り、水火になれとぞ三重切りあひける。時刻もうつらぬ其の内に、十四五人切りふせ、「重忠に見參せん。」と、此處のつまり彼處のくまに驅け入り〱騷げども、大勢に隔てられ、今ははや是れまでなり。深入して雜兵に手負うせられては、景清が末代の名折なり。またこそ時節あるべけれ。いでおつ拂うて落ちのかんと、番匠箱をおしひらき、大鑿小鑿、手斧鋸、遣鉋、屈竟一の手裏劍と、押取り〱打立つれば、さしもに勇む軍兵ども、「わつ。」というてはさつと引き、なほも寄せ來る者どもを、小屋の小柱ひんぬいて、八方むぐうに三重ふり廻れば、秋の嵐にちる紅葉、むら〱ぱつとぞ逃げにける。「おゝさもさうずさもあらん。此のたびは仕損ずとも、此の景清が一念の、劍は岩を徹さんものを。」と、跳りあがり飛びあがり、齒がみをなして行く雲の、月の都に上りける。惡七兵衞が力業、早業輕業神通業、たゞ飛ぶ鳥のごとくなり。」とて、恐れぬ者こそなかりけれ。

第二

さる程に、誠やたけきもの〻ふも、戀にやつるゝならひあり。薪を負へる山人も、立ちよる花の景

叩け。」と下知すれば、中間共承り、一度にはらりと取りまはす。番匠の棟梁此の由を見るよりも、「いや是れ本田殿、彼奴は其の日雇の人足にして差別も知らぬ下郎なれば、さぞ推參も候べし。さりながらかかる目出たき折なれば、たゞ何事も穩便に計らひ給へ。」と申しける。本田聞きも入れず、「いやさ、彼めはちと人に似たるものゝ候。」といへば、「扨珍らしや本田殿、人が人に似たるとは事新しう候。いかに下郎め、おのれ大分の錢を取りながら、かだをして働かず、横著ひろぐゆゑにこそ、人々にも怪しまれ、祝儀に邪魔をなしけるよ。價を損にするまでぞ。罷り歸れ。」と叱りければ、よき幸ひと景清は、擔ひし櫃を下し棄て、迷惑さうに揉手をして、表にこそは出でらるれ。重忠幕の内より御覽じて、「暫く〱、いかにかた〲、平家の落人こゝ彼處に忍びゐて、君を狙ふと聞きけるが、唯今の人足正しく惡七兵衞景清と見しは僻目か。やあ彼あますな。いうても是れは一大事の柱立の淨めの庭、穢らはしてはいかゞなり。前なる野邊に追ひ出し、討つて捨てよ。」と宣へば、もとよりはやる關東武者、我も〱とかけ向ふ。景清是れを見て、擔ひ棒に仕込みたる、件の痣丸するりと拔いてさし翳し、大勢を左手にうけ、頭を叩いてから〱と笑ひ、「是れお侍、某は尾羽を枯らせし鎌倉の浪人者にて候が、朝夕にせまり、かかる侘しき營みを仕る。さすが人目の恥かしく、面をかくして有りければ、なんぞや某を惡七兵衞景清とは、眼がくらみてありけるか。但しは其の景清

唐竹牡丹に獅子、豹と虎とが威勢を爭ひ、百千萬の獸をほつたて〳〵、くるり〳〵と巖に追ひ上げ追ひ下し、風に嘯く波間より、紫雲を卷いて登り龍、またくだり龍、玉をつかんで虛空にさゝげ、鱗を立てたる其のいきほひ、手をつくさせて彫りつくし、さて棟瓦軒瓦、金銀瑠璃玻璨、硨磲瑪瑙、珊瑚琥珀水晶をふきたて〳〵、珊瑚樹のこまひをひつしと打つたる臺には、金襴錦に柱を包んで、黃金の鋲を輝かせん。棟木を負ふの柱をして、南畝の農夫よりもおほく、梁に架するの椽は、機上の工女よりも多く、釘頭の磷々たるは、庾にあるの粟よりも多く、旦暮の說法讀誦の聲は、市人の言語よりも多からしむ、佛法繁昌四海鎭護の大伽藍、如意滿足の柱立、めでたし〳〵ォ、めでたしと、手斧おつ取りちやう〳〵〳〵、槌おつ取つてはしつてい〳〵、鉋取りのべさら〳〵、えいさら〳〵さらちやう〳〵と、打ち始め取り始め、三三九度の御酒をさゝげ、千たび百たび祈念して、重忠に色代し、棟梁座をぞ下りける。手斧はじめも事すぐれば、數千番匠下々まで、皆々小屋にぞ三重入りにける。はるかの後より、四十ばかりの男なるが、一人足と思しくて、晝餉の櫃をになひ、頰冠して通りける。秩父の執權本田の二郎きつと見て、「ヤァこれなる下郎めは、かかる晴れの庭なるに、頰冠は緩怠なり、色代せよ。」ト咎むれば、かの男小聲になり、「作法もしらぬ下々なれば、御免。」といひてつゝと通る。「どこへ〳〵、さて〳〵ぞんざい千萬なる奴めかな。頰冠を取らずんば、誰かある、それ打て

村濃の大幕打たせ、續いて見えしは本田の二郎、其の外の侍ども、帳場々々にしるしを立てて、弓槍長刀吹貫に、柳櫻をこきまぜて、花やかなりける御普請なり。かくて番匠の棟梁、木工のかみ修理のかみ、おのがしなれる出立、吉方にうちむかひ、まづ屋固めの祭文を唱へつゝ、御幣をふつて再拜し、手斧はじめのその儀式、嚴重にこそつとめけれ。むべもとみけりさきくさの、みつばよつばの大伽藍を、手斧はじめのことぶきに、千代をかためて柱立、春は東に立ちそむる、是れ萬物の始めなり。夏は南にめぐる日の、あやめが軒やかをるらん。秋は又西の空、つきせぬ契りかたどりて、天の川原に橋柱、しらげたつるや突鉋、雲をそなたに遣鉋、冬は北にて筒井筒、水こそ家の寶なれ。めぐれやまはれ井戸車、かまど賑ふ竈殿、先陰陽の二柱、二本の柱は女神男神を表したり。三本の柱は三世の諸佛、四本の柱に四天王、四海泰平民安全と、祝ひこめたる墨つぼの、絲のすぐなる國なれば、寶や宿にみつめ錐、鋸屑のかず／＼と、濱の眞砂と君が代は、數へつくさじおもしろや。しかるにこの大伽藍と申すは、聖武皇帝の御建立、三國無雙の靈場なり。兜率天の内院を、さもあり／＼と移さるゝ。堂の高さは二十丈、佛の御丈は十六丈、雲につゞけばおのづから、月を後光と三笠山、柱のかずは天台の、一念三千の機をあらはして、三千本とさだまれり。軒の垂木は法華經の文字のかず、六萬九千三百八十四本なり。山門には獅子の狛。さて正面より、四方四面の、扉々の彫物には、松に

に此の處をうつて通り候よし。たとへば頼朝七重八重の城郭にとりこもり、天地に黑鐵の網を張つて、用心きびしく候とも、此の景清が一念にてなどか狙はで候べき。さりながら重忠常に頼朝の側を離れず、神變不思議を兼ねたれば、其の身は都にありながら、心はなほ鎌倉殿の側にあり。かう申す景清は二相を悟り候へども、重忠は四相を悟る。頼朝に出で合ひ、既に討たんとせしこと三十四度に及べども、かの重忠に隔てられ、竟に本望遂げ申さず、然れば先づ重忠をさへ討ち取らば、頼朝を討たん事踵を旋らすべからず。重忠この度東大寺の奉行にのぼる事、幸ひかな仕合かな。天の時來りたり。忍びやかに南都に下り、重忠が首ひつさげて參らんに、早お暇。」と申さるゝ。大宮司聞き給ひ、「實に屈竟の時節ござんなれ。かまへて人に悟られ給ふな、急いて事を仕損ずな。片時も早く。」とありければ、北の方も悦びて、宗盛公よりたび給ふ、あざ丸といふ名劍を景清に給はり、「首尾よく仕おほせ給ひなば、一日も逗留なく、早く御歸りましませ。」と、門出の杯出さるれば、たがひに千秋萬歳と、獅子の勢ひ龍の勢、勇み〳〵て行く虎の、尾張國を立ち出でて、奈良の都へ、三重上らる。ついで其の頃は文治五年、春過ぎて夏きにけらし白旗の、源氏の大將頼朝は、南都東大寺大佛再興の御願にて、畠山の重忠奉行職を承り、松にも花をかすが野や、飛火の野邊に假屋をうたせ、横目帳付勘定方、大和大工に飛騨匠、杣人木作こと畢り、今日吉日の柱立。わが身は棧敷に一段高く、

出世景清

第一

扨もその後、妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第二十五は、大乘八軸の骨髓、信心の行者、大慈大悲の光明に輿り奉る、觀音威力ぞ有り難き。こゝに平家の一族惡七兵衛景清は、西國四國の合戰に討死すべきものなりしが、死は輕くして易し、生は重くして難し、所詮命を全くして、平氏の怨敵右大將賴朝を一太刀恨み、平家の恥辱を雪がんと、落人となり、尾張國熱田の大宮司に、いさゝかしるべありければ、深く忍びて居たりけり。もとより大宮司は平氏の重恩の人なれば、深くいたはり、ひとり姬にをのの姬と聞えしを景清にめあはせ、子とも壻ともかしづき給ふ志こそわりなけれ。景清大宮司の御前に出で、「誠にそれがし無二の御懇志に預り、ながく在居仕り、身は埋木と朽ち果てん、末賴みなき身ながらも、せめて賴朝を一太刀うかゞひ、君父の恨みを散じ、その後は腹切つて、兎も角も罷りならんと、空しき月日を送り候。然る處に、今朝屈竟の事を聞き出し候。其の故は、鎌倉殿は南都東大寺の大佛殿を御再興あるべしとて、秩父の重忠かの奉行を承り、きのふの暮ほど

案ず。

猪甘連　四百年前顯宗天皇蒙塵し給ひし際、御糧を乞はれしを惜しんで斬殺されき。後に弘法大師行道の時、車大路にて猪甘の幽靈現はれて罪障消滅を請ふ。大師爲に說法し、外五鈷智拳印を結べば、有り難やと叫んで其の姿忽ち五輪の石塔となり、幽魂惡右馬尉仲成の體內に入りて橘判官勝藤に殺され、又櫟原の牛の腹に宿りて守敏僧都に殺され、また大炊介仲經の一子と生まれて餓鬼道の苦患を受けて殺され、遂に龍王となつて天上の果を得。

上演人物解說　終

格闘せしが、その心を知つて相和し、共に大海原王子を狙ひ弘法大師雩御修法の場にて王子を刺す。

悪右馬尉仲成　猪甘連の末孫なり。大海原王子の逆心に一味せしも難病に罹りて死し、猪甘連の魂魄と結んで蘇生し、大海原王子と共に嵯峨天皇を攻めんとして橘判官勝藤に斬り殺さる。

花　世　仲成の女にして、橘判官勝藤に嫁す。父逆心を懐き大海原王子に一味して勝藤の敵となる。勝藤乃ち仲成を殺して妻を離別す。是に於て花世果物賣となり、嵯峨の離宮に行きて舅の濱頼に邂逅し、伴うて我が家に歸り孝養を盡せしが、不在中何者にか舅を奪ひ去られ、其の行方を尋ねて狼谷に至り、高札を讀んで兄の大炊介仲經が舅を奪ひて殺したるを知り、兄を殺さんと決心したる際、勝藤に邂逅して相共に兄の宅に斬り入りしが、深き事情を知つて兄の心に感じて我が身の輕忽を謝し、仲經の妻と共に四國八十八の札所を經巡りて都に上る。

前判官濱頼　勝藤の父なり。歳九十三、嵯峨の御所に赴きて拜する際、勝藤が離別せし嫁の花世に邂逅し、互にその情愛に咽び、遂に花世に連れられて其の家に行き介抱せられしが、大炊介仲經に奪ひ去られて厚遇せらる。勝藤が仲經を父の仇と信じて斬り入りし時、濱頼這ひ出でて仲經の義心を談じて勝藤を諭す。

多治見左衛門春國　大海原王子の臣なり。敕使と偽りて又次郎を欺き、其の飼牛を牽かせて北岩倉の深山に連れ行きしが、又次郎に斬り殺さる。

與茂作　山城國西の岡樫原の土民なり。朋輩九郎右衛門、太次兵衛等十五六人と共に又次郎を訪ひ、又次郎の飼牛の玉を見て目出度しと言うて饗應せしめんとせしが、又次郎の亡父の因果話を聽いて己等が亡父の菩提を

ひ、其の法力によつて苦しめらる。

小　町　稲荷大明神の社人竈の大夫の娘にして美貌なり。大海原王子亂入せしとき、これをたらして殺さんとせしが、王子に悟られて危き場を遁る。

嵯峨天皇　大海原王子の逆臣に宸襟を惱ませ給ひ、北嵯峨の離宮に移らせたまふ。前判官濱賴來つて離宮を拜せる際、嘗て己が子の勝賴に離別されたる嫁花世に邂逅して互に情に泣く。爲に敕諚ありて花世の家に舅濱賴を養はしめ給ふ。後、天皇、弘法大師雩御修法の場に行幸し給ふ。

守　敏　我慢邪慾の惡僧なり。空海の法力に及ばぬを猜んで大海原王子の反逆に組し、北岩倉の深山に籠り、大威德の法を修して天下を殺さんとして、大炊介仲經に追拂はる。是に於て邪法を以て龍神を水瓶に封じ、天下旱する罪を嵯峨天皇に歸して流し奉らんとして、空海と法力を比ぶることとなり、空海の眞言祕法により龍王の爲に慘死す。

太次兵衞　山城國西の岡樫原の土民なり。朋輩等と共に又次郎を訪ひ、又次郎の飼牛の玉を見たりと稱して其の祝を勸め、精進料理を出されたるを怒りしが、又次郎より其の理由を聞いて心解く。

大炊介仲經　父仲成の逆心を諫めて勘當せられ、山城國西の岡樫原の土民となり又次郎といふ。多治見春國に欺かれて牛を牽き北岩倉の深山に入り、大海原王子等の反逆を見て大いに怒り、力戰して敵を破り春國を殺して我が家に歸る。かくて亡父の仇橘勝藤を狙へども行方知れず。よつて勝藤の父濱賴を奪ひ去り、我が子を殺して妻の乳を與へて厚遇しながらも、外面作つて濱賴を殺したる高札を立て、勝藤の斬り入るを待ち受けて

嵯峨天皇甘露雨

大海原王子　嵯峨天皇の從弟なり。生年二十三。惡右馬尉仲成と謀りて反逆を企て空海に看破せらる。また惡僧守敏と共に北岩倉の深山に籠りて大威德の法を修し、天下を覆さんとして大炊介仲經に追拂はる。後遂に天皇を嵯峨の離宮に幽閉し參らせ、自ら僭して帝と稱し放逸驕奢に耽りしが、竈の大夫を攻めて利あらず。弘法大師の雩修法の際、嵯峨天皇に飛び掛らんとして橘勝藤、大炊介仲經の兩人に刺殺さる。

橘判官勝藤　前判官濱賴の子なり。瀧口武者所を勤め、惡右馬尉仲成の娘花世を妻とす。仲成反逆に黨するに及んで、之を斬つて妻を離別したり。後に仲成の子の大炊介を我が父の仇と思ひて斬り入りしが、その然らざるを知るや直に仲經に降服し、相和して弘法大師雩修法の場に大海原王子を刺殺す。

竈の大夫　稻荷大明神の社人にして、弘法大師の弟子なり。大師より賴まれて大炊介仲經、橘判官勝藤の兩人を隱まひしが、大海原王子に亂入せられて危かりし時、眞言陀羅尼を念誦して王子等を追拂ふ。

空　海　弘法大師なり。嵯峨天皇の御代逆臣あるを豫想し、闕下に奏して大海原王子の逆心を觀破す。また車大路の藪陰にて猪甘連の幽靈に遇ひて說法す。これより玉體安全の祈禱に餘念なかりき。弘仁八年天下大いに旱す。空海これを守敏僧都の法力によるものと知り、爲に雩の法を修し、眞言の法力を以て甘露の大雨を降らす。

百濟大納言　大海原王子の逆心に一味し、嵯峨天皇を流し奉らんとして牢輿を押立てて行く途中、空海に遇

笛蘇生し、志賀辛崎大明神に參詣して、建禮門院より橫笛等召還の使者戸無瀨に遇ひ、相共に都に上る。

左京之進義次　平重盛の家士にして、越中次郎兵衞盛次の弟なり。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、建禮門院の侍女刈藻と密會せるを、加賀郡司師高に探し出されて惡評を立てられ兄の盛次に幽閉せられ、師高の奸策によりて死罪に處せられんとせしが、重盛の仁慈によつて救はれ、僧となつて嵯峨の奥に住む。或日橫笛、賴方を尋ねて來る。こゝに於て相共に賴方を尋ねて雪中にさまよひ、一家を見付けて宿を請へば、これぞ賴方と刈藻の住所なりしかば、互に奇遇を喜び、連れ立つて志賀辛崎大明神に參詣し、戸無瀨局の難を救うて師高を搦め、師高の部下岩村源九郎、鎌須無藏を斬る。此の時盛次等重盛より召還の使者となつて來れるに遇ひ、相共に都に上る。

齋藤瀧口賴方　平重盛の家士にして、齋藤左衞門尉勝賴の子なり。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、窃かに建禮門院の侍女橫笛と山中に密會せるを、加賀郡司師高に見付けられて惡評を立てられ、父に叱られて遁世の身となり、西俊と法名して嵯峨の奥往生院に引籠り、夜な〳〵洛外三昧所を巡りしが、舟岡山にて刈藻が岩村源五に斬られんとする場に出遇ひ、源五を欺きて刀を奪ひ源五を追拂ひ、刈藻を連れて去り、志賀の里に小庵を結びて、刈藻及び其の幼兒を養育せしが、或雪夜左京之進義次、橫笛を伴ひて來る。是に於て互に奇遇を喜び、志賀辛崎大明神に參詣し、師高に出遇うて之を搦め、義次と協力して師高の部下岩村源九郎、鎌須無藏を斬る。此の時父の勝賴等重盛より召還の使者となつて來れるに邂逅し、相共に都に上る。

侍女横笛の檢死を命ぜられて建禮門院の御所に至る。然るに建禮門院はこれを聞かれて憤怨せらる。盛次乃ち師高の讒より事起れるものと察し、勝賴と和睦して師高の行動に注意す。かくて建禮門院より横笛の首桶を出されしを開き見れば、笛を折りて土を盛りてあり。義次の首桶を開けば、義次の髻に石を入れてありしかば、深く建禮門院と重盛公との仁心厚きに感泣す。かくて後重盛公の命によりて賴方、義次召還の使者となり、志賀辛崎大明神の邊にて義次等に遇ひ相共に都に上る。

加賀郡司師高

戸無瀨局の弟なり。建禮門院の侍所を勤め、門院の侍女横笛及び刈藻を横戀慕す。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、横笛は賴方に、刈藻は義次に密通せるを探知し、賴方等と口論し、また刈藻を捕へて口說けども、其の意に從はざるを怒り、奸策を廻らして刈藻、横笛、義次を殺さんとして、師高の罪惡露顯し、追放せられて岩村源九郞、鎌須無藏と共に强盜となり、志賀辛崎大明神にて姉の戸無瀨局を搦めて掠奪せんとして、義次等と戰ふこととなり、搦められて輿に押込められたるを源九郞、無藏に刺殺さる。

横笛

建禮門院の侍女にして、平重盛の家士齋藤賴方と相思の仲なり。或日賴方が重盛の使者となり、來つて山雀を建禮門院に獻ず。横笛これを取次いで賴方と戲れ、過つて山雀を籠より逃して加賀郡司師高に罵詈せらる。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、賴方と密會せるを師高に見付けられ、師高の奸策によりて死罪に行はれんとせしを、建禮門院の仁心によりて救はる。これより賴方の行方を尋ね、嵯峨の奥なる庵室に至りて、賴方の朋輩左京之進義次に遇ひ、相共に賴方を尋ねて雪中に彷徨ひ、漸く家を見付けて宿を請へる間に横笛凍死す。然るにこの家は賴方の宅なりしかば、賴方等愁歎に暮るゝ際、刈藻が焚べたる藥王香によつて横

しを建禮門院出でて和げ給ふ。かくて北野に茸狩の御遊ありし時總ての籠鳥を放たる。また御歌かるたの催ありし時師高奸策を廻らし、重盛公より橫笛の首を受取る使者の來れるを言上す。建禮門院これを聞かれて悲歎に沈ませ給ひしが、憤然として起ち橫笛を作うて入御し給ふ。戸無瀨局出でて橫笛の首を重盛の使者に渡す。其の首桶を開けば、笛を折つて入れ土を盛つてあり。

小松内大臣平重盛　賢明仁慈の德に富む。養和元年九月九日建禮門院より北山に茸狩の催あるやう申し越され、其の奉答使に獻上の山雀を持たせて遣はす。或日加賀郡司師高が建禮門院の使者と稱して來り、左京之進義次を死罪に行ふべきを命ず。重盛不審に思へども門院の命令なれば詮方なく、義次を召して奧に連れ行き、義次の髻を切つて首桶に入れ、石を添へて重りとなし、齋藤左衞門尉勝賴及び越中次郎兵衞盛次に其の首桶を持たしめて建禮門院の許に遣はす。

戸無瀨局　建禮門院の侍女にして、加賀郡司師高の姉なり。養和元年九月九日建禮門院の御使となりて平重盛の邸に至り、北山に茸狩の催あるやう御意を傳ふ。後また建禮門院の御代參として志賀辛崎の大明神に參詣し、師高の強盜となれるに搦められしが、左京之進義次に助けられて相共に都に上る。

鎌須無藏　師高手下の強盜となり、志賀辛崎大明神にて戸無瀨局を搦めて掠奪せんとして、一物も獲られざるを怒つて戸無瀨を刺さんとし、過つて師高を刺し、左京之進義次、齋藤瀧口賴方に殺さる。

越中次郎兵衞盛次　内大臣平重盛の家士にして、左京之進義次の兄なり。義次が建禮門院の侍女刈藻と密通したる惡評を聞きて義次を幽閉す。盛次當番の日齋藤左衞門尉勝賴と軋み合ひしが、重盛公より建禮門院の

きに感泣す。後、重盛公の命により頼方、義次召還の使者となり、志賀辛崎大明神の邊にて頼方等に逢ひ、相共に都に上る。

刈　藻　建禮門院の侍女なり。平重盛の家士左京之進と契り、加賀郡司師高に横戀慕せらる。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、義次と密會せるを師高に知られて遁れしが、懷妊となつて浮名立ちし爲、宮仕のお暇を願へど、師高に妨げられ舟岡山にて殺されんとせしを、齋藤瀧口頼方に助けられて志賀の里に養はる。ある雪の夜義次、横笛を伴ひ來つて宿を請ふ。こゝに於て夫婦相逢ふを喜べる際、横笛寒氣に堪へずして絶息す。刈藻乃ち嘗て建禮門院より賜はりたる藥王香を焚いて横笛を蘇生せしむ。後、義次と共に辛崎大明神に參詣し、建禮門院より召還の使者戸無瀬の局に邂逅し倶に都に上る。

岩村源九郎　岩村源五の一族なり。惡漢師高に屬して賊盜となり、志賀辛崎大明神にて戸無瀬を刺さんとして過つて師高を刺し、左京之進義次等に殺さる。

岩村源五　加賀郡司師高の部下なり。師高の命を奉じて刈藻を舟岡山に連れ行き、之を斬殺さんとして齋藤頼方に追拂はれ、卵塔の陰に隱れしを、源五の部下ども逃げんとして卵塔に押寄せし爲、卵塔崩れて壓死を遂ぐ。

建禮門院　安德天皇の御母君にましまし、仁慈の德に富ませ給ふ。養和元年九月九日侍女戸無瀬局を御使として內大臣重盛へ北山に茸狩の催あるやう申し遣はさる。重盛その奉答に齋藤頼方をして獻上の山雀を持たしめて遣はす。建禮門院の侍女横笛、頼方に戯れたる際過つて山雀を逃す。加賀郡司師高之を咎めて口論となり

林　河内道明寺の老尼なり。ある日虚無僧來り和琴の前を預けて去る。尋いで龍門家の後室及び舞樂の前來つて此の寺の尼となる。此の時石川五右衞門幼兒を脊負ひて寺内に闖込み、大釜の中に隱れしを官人追及して縛し去る。是に於て林は龍門家の後室等と共に刑場に行き、幼兒の救免を哀訴す。

和琴の前　龍門家の女にして、舞樂の前の異母妹なり。母が姉を惡むを悲しんで家をしのび出で、吉野川に投身せんとせるを石川五右衞門に捕はれて、大阪三軒屋町御手洗屋に賣られて遊女となり吉野と名乘る。ある日虚法來つて吉岡と交換せられて、河内道明寺に連れ行かれ、尋いで母及び姉に遇ふ。此の時石川五右衞門幼兒を脊負うて、寺内に逃げ込みしを捕吏に捕へらる。是に於て和琴の前は道明寺の老尼等と共に五右衞門の刑場に赴き、幼兒の救免を哀訴す。

娥歌加留多

齋藤左衞門尉勝賴　平重盛の家士にして、齋藤瀧口賴方の父なり。佛法に歸依して法名を西賴と稱す。賴方が惡評を聞き、賴方を叱つて出家せしめ、自らは還俗して出仕し、越中盛次と軋み合ひしが、重盛公より義次の首桶を携へて建禮門院の御所に行き、横笛の首を入れて歸るべしとの命を奉じ、建禮門院の御所に至る。然るに建禮門院は加賀郡司師高よりこの由聞かれて憤怨し給ふや、勝賴乃ち師高の讒より事起れるものと察し、盛次と和して師高の言動に注意す。かくて建禮門院より横笛の首桶を受取りて開き見れば、笛を折り土を盛りてあり。而して義次の首桶を開けば、義次の髻に石を入れてありしかば、深く建禮門院と重盛公との御仁心厚

舞樂の前　大和國宇陀郡龍門家の女にして、和琴の前の異母姉なり。繼母に惡まれて、香春顯定と祝言の席上にて顯定諸共に殺されんとせしを、繼母、顯定の母の善心に感じて惡心を飜し、舞樂の前も發心し、繼母諸共に河内國道明寺の尼となる。ある日石川五右衞門、憲法の子の久吉を脊負ひ、寺内に逃げ込みて大釜の中に潛匿せしを官人追及して捕縛す。是に於て舞樂の前は道明寺の老尼等と諸共に五右衞門の刑場に至り、久吉の爲に哀訴す。

又五郎　大阪三軒屋町御手洗屋の主人なり。虛無僧來つて懇請するを容れて抱妓の吉野と吉岡とを交換し、後にて其の虛無僧こそ官より尋ね人となれる憲法なるを知り、捕へて恩賞に預らんものと其の跡を追ひかく。其の夜强盜石川五右衞門に押入られて多くの財物を奪ひ去らる。

醒井民部左衞門　夜廻りの物頭なり。大阪三軒屋町御手洗屋に强盜石川五右衞門が闖入せしを取押へんとし身仕度して飛入つて五右衞門に斬殺さる。

吉　岡　貧家に生まれ、母の病氣を救はん爲身を賣りて、江戶吉原遊郭三浦の内の遊女となり、憲法と馴染みて久吉を生む。憲法財產を蕩盡して行方不明となりしかば、吉岡は父と共に久吉を連れて京都に來り、憲法を尋ねて三人路頭にさまよひ、三味線を彈じ唄を謠ひて、惠みを往來の人々に乞ふ。偶朱雀にて憲法の母に遇ひ、また大阪三軒屋町にて憲法に邂逅し、やがてこの町の御手洗屋に身を賣ることとなる。其の夜石川五右衞門押入り、吉岡をして遁れしめしが捕吏に召捕られ、五右衞門縛に就くに及んで放免せられ。後久吉釜煎にせらるゝ場に來つて愁歎に暮る。

や、其の場に來つて愁歎に暮れ、官人に對して久吉に何の罪があるかを詰り、遠坂舍人を摑んで沸返る釜中に投込む。

石川五右衛門　江戸にて憲法に兵法を學び、師と共に流寓して京都に來り、大橋詰錺屋にて憲法の異母兄顯定の荷物を掠奪せしを手始めに遂に強盜の巨魁となる。吉野川に投身せんとする龍門家の姫君和琴の前を勾引して大阪三軒屋町御手洗屋に賣り、部下を率ゐて御手洗屋に押入り、財物を奪うて捕吏に圍まる。五右衛門數多の捕吏を殺し、憲法の子の久吉を脊負うて河内國道明寺まで逃延び、接待の大釜中に潛匿せしを捕へられて釜ながら京に送られ、七條河原にて釜煎の酷刑に處せらる。刑場に於て辭世の歌を詠んで曰く、「石川や濱の眞砂は盡くるとも世に盜人の種は盡きせじ。」時に慶長十五年なり。

舟越惣馬　大和國宇陀郡龍門家の重臣なり。遠坂舍人等と奸策を廻らし、香春大炊之助顯定聟入の宴席にて、顯定を殺さんとして顯定の異母弟憲法の爲に妨げらる。後、禁中御能の會の警固を勤め、故意に棒を以て憲法の頭を毆打して憲法に刺殺さる。

遠坂舍人　龍門家の次女和琴を妻となして以て龍門家を奪はんとし、龍門家の奸臣舟越惣馬等と謀りて遂に龍門家を奪ひしが、石川五右衛門が釜煎の刑に處せられたる場に於て、憲法の爲に沸返る釜中に摑み込まれて慘死を遂ぐ。

久　吉　父を憲法、母を吉岡といふ。石川五右衛門に脊負はれたる儘捕縛せられて釜煎の酷刑に處せらる。時に三歲。

し、以て半七、お花を遁れしむ。

傾城吉岡染

香春大炊之助顯定　因幡國淀山の城主の裔にして生來跛者なり。大和國宇陀郡龍門家の息女舞樂の前との婚約成りて其の壻入の際、異母弟憲法は龍門家の奸策を豫知し、兄の危急を救ふ爲顯定と作り、龍門家に來つて祝言の席に臨む。顯定は弟の心を知らずして之と口論せしが、其の實を知るに及んで感に堪へず、髻を切つて出家の身となる。後に憲法の子久吉罪なくして石川五右衞門と共に釜煎の刑に處せらるゝや、官命じて久吉の償に顯定を本領に安堵せしむ。これより龍門家繁榮することとなる。

香春久太郎憲法　放蕩の爲に家を放逐せられ、江戸の本郷に住んで染物業を營み劍道を教授し、吉原の遊女吉岡と馴染みて久吉をまうけしが、財産を蕩盡して行方を晦まし、弟子石川五右衞門の合力を受けて京都に放浪す。兄の顯定が龍門家に壻入して辱めを受けんとする噂を聞き、之を救はん爲に自ら顯定と稱して龍門家に至り、尋いで兄と口論することとなり、母に叱られて去る。後に禁中御能の拜觀に出で、見物人の中に交りしが、龍門家の重臣舟越惣馬、憲法を見るや、故意に其の頭高しとて棒にて毆打す。憲法立退きしが平素の遺恨を晴らさんものと匕首を懷にして引返し、見物人に紛れ惣馬に近寄つて之を刺殺し、直に名乘を上げ寄手を斬拂ひて逃走す。これより虚無僧となり、大阪三軒屋に來つて妻の吉岡に遇ひ、遊女屋の主人又五郎に談じて抱妓吉野と吉岡との交換を請ひ、吉野を伴うて去る。慶長庚戌年久吉が五右衞門と共に釜煎の酷刑に處せらるゝ

父を恨んで其の意に從はず。此の時お花の愛人刀屋の手代半七現はれて九兵衞を突除く。九兵衞怒つて半七と格鬪し、半七の髻を掴んで引立つ。

甚五郎　大阪長町に住し、半七の義伯父なり。

太郎左衞門　京都四條石懸町娼家井筒屋の主人なり。

お　花　京都四條石懸町の娼家井筒屋の遊女なり。刀屋石見某の手代半七と馴染み、半七の伯母と僞りて刀屋に半七を訪うて會談せる際、半七の伯母も訪ひ來る。こゝに於てお花の僞り露顯す。石見怒つて半七、お花を毆打せしが、伯母の執成しによつて事なきを得たり。お花の養父九兵衞井筒屋に來り、お花の勤めの年期を延ばして二十兩を得んとす。お花養父の意に從はずして毆打せらる。坊主客に連れられて西石懸の色茶屋に行き、朋輩妓と阿彌陀の光といふ遊戲をなし、採鬮に當りて豆腐買に出でて半七に逢ひ、相携へて大阪長町なる半七の伯母を訪ふ。

刀屋半七　京都下立賣刀屋石見某の手代にして、井筒屋の遊女お花と馴染む。お花、半七の伯母と僞り、刀屋に半七を訪うて逢へる際、半七の伯母來る。石見主人これを見て、さては以前の女は娼婦と知つて大いに怒り、お花半七を毆打す。半七、伯母より信國作の刀の細工を賴まれてこれを賣り、下阪作の刀に買替へて金二十兩を著服してお花を訪ふ。此の時お花の義父九兵衞井筒屋に來つてお花の年期を增さんとす。半七乃ち九兵衞と喧嘩し、懷にせる二十兩を其の面に抛ち、お花と相携へて大阪長町なる伯母を訪ふ。伯母の夫甚五郎は下阪の刀に取替へられたるを知らずして武家に屆けしかば忽ち惡事露顯す。是に於て伯母其の罪を引受けて切腹

荻野八重桐　荻野屋の遊女なり。坂田時行と馴染みて夫婦となる。時行亡夫の仇を報ぜんとして夫婦離別す。或日八重桐、澤瀉姬の邸前を通り掛りて三味線の音に耳を澄まし、尋いで時行と邂逅し、澤瀉姬の問ひに應じて我が身の上を語り、時行の薄情を詰りて意見す。時行身を恥ぢて自刃し、其の魂魄火焰の轉風となつて八重桐の胎内に入る。八重桐之より飛行通力の女となり、淸原高藤の寄手を追拂ひ雲を分けて去り、山姥となつて信州上路の山に棲息し快童丸を生む。偶源賴光に遇うて我が身の上を語り、快童丸を賴光の家來となし、暇を告げ山を驅廻りて行方知れずなりぬ。

攝津守源賴光　濱松のあたりに紫雲靉靆せるを目當に寶劍を尋ね、家士渡邊綱を伴うて佐夜の中山に泊す。時に齡十八。其の夜小絲喜之介が亡父の仇物部平太を斬り、遁走して來れるを助けて、淸原高藤平政盛の寄手と戰ひ、竊かに美濃路を指して落ち行き、高藤に讒奏せられて敕勘の身となり、美濃の能勢判官仲國に身を寄せ、美濃路をさまよひて深山に迷ひ入り、山賊に遭うて之を家來となし、信州上路の山中にて山姥に遇ひ、其の子快童丸の非凡の力量に感じてこれを家來となし、坂田公時と命名して四天王の一に加へ、公時を先導として江州高懸山の惡鬼を退治す。功を以て鎭守府將軍に任ぜられ、敕諚によつて岩倉大納言兼冬卿の女澤瀉姬と婚す。

長町女腹切

西陣の九兵衞　京都四條石垣町井筒屋の抱妓お花の養父なり。お花を年期增して二十兩を得んとす。お花養

之介の兩人が物部平太を斬り、逃走して來り賴る。綱これを助けて清原高藤、平政盛と戰うて勝つ。美濃路を通り、山姥に導かれて信州上路の山に分入り賴光に會ふ。これより江州高懸山の惡鬼退治に從ひて惡鬼を生擒し、高藤、政盛の罪惡を奏訴して政盛及び惡鬼を殺す。

坂田藏人時行　坂田前司忠時の子なり。萩野屋の遊女八重桐と馴染みて父より勘當を受く。父が物部平太に殺されてより平太の行方を尋ねて仇を報ぜんとし、八重桐と離別し源七と名乘つて煙草賣となり、澤瀉姫の侍女より三味線の一曲を所望せられて之を彈じ、八重桐と邂逅し其の意見に感じて自刃せしが、其の魂魄火焰の轉風となつて八重桐の胎內に宿り、公時となつて再生す。

能勢判官仲國　美濃の住人にして源氏の家士なり。源賴光の來れるを厚遇し、種々の燈籠を飾りて其の心を慰む。盂蘭盆會の日賴光と酒宴の後竊かに妻を呼び、清原高藤の差出したる封書を見せて其の心中を問ふ。妻思案して賴光を討ち奉らんといふに同意し、次の間に隱れて其の樣子を窺ふ。然るに妻は我が子の冠者丸を斬つて賴光の身代りたらしめ、尋いで自刃せんとす。仲國乃ち妻の自刃を制止して賴光を落し參らす。

物部平太　坂田前司忠時を殺して平政盛の家來となる。ある日佐夜の中山の旅人宿菱屋に清原高藤の保護を賴みて同宿し、下女の小絲に蓬髮を剃らせ、親の敵と聲を掛けられて、小絲の情夫喜之介に殺さる。

右衞門頭平政盛　清原高藤に從ひて佐夜の中山に赴き、高藤と共に菱屋に同宿せんとして渡邊綱と喧嘩し、高藤に物部平太の保護を賴みて去る。其の夜平太が喜之介小絲に殺さる。是に於て政盛怒つて喜之介を賴光の旅舍に襲ひ、渡邊綱と戰うて敗る。後に賴光の四天王に訴へられて斬罪に處せらる。

たる手紙を出して其の心意を尋ねらる。其の文意に、頼光を斬つて內應するに於ては冠者丸を取立つべしとあり。小侍從忠案の末、頼光を討つ由を答へて助勢を賴み、然も心底には冠者丸を斬つて頼光の身代りたらしんとし、冠者丸を持佛堂に招き、經を讀誦せしめて其の背後より一討にせんと思ひ定めしが、親子の情に絆されて果すを得ず、感極まつて聲を上ぐ。冠者丸怖れて逃げまどふを母引捕へて首を刎ね、其の髻を解けば中に一通の文あり。其の文意に、世の無常を云ひ親の恩を謝し、母御歎きに沈ませられて手を下し給はでは本意ならず。されば殊更に卑怯の擧動をなし、憎しみを受けて殺され奉るとの由を記す。母悲歎に暮れ自殺せんとして夫の仲國に制せらる。

卜部季武　初め卜部熊武と云ふ。美濃の深山に住み、旅人の首を刎ねて梢に吊す。ある日源頼光の通るを呼び掛け、其の威に服して臣となり、卜部季武と命名せらる。これより主從共に信州上路の山に分入りて山姥に遇ひ、江州高懸山の悪鬼退治に從うて武功あり。

淸原中納言右大將高藤　天曆帝の御宇驕奢を極む。諸國を遊覽して佐夜の中山に來り、源頼光の宿せるを追拂ひて菱屋に泊す。折しも平政盛來つて物部平太の同宿を請ひ其の保護を依賴す。高藤之を諾す。此の夜平太、喜之介に斬らる。是に於て喜之介を捕へんとして賴光の宿舍を襲うて渡邊綱に破られ、都に歸つて頼光を讒奏す。また部下の者を岩倉大納言兼冬卿の邸に遣はし、澤潟姬を奪はんとして果さず。後罪を得て鬼界島に配流せらる。

渡邊綱　源頼光の臣なり。主に陪して佐夜の中山に赴き、宿舍のことより平政盛と口論す。其の夜小絲、喜

坂田公時　坂田藏人時行の魂魄萩野八重桐の胎内に入るや、八重桐忽ち山姥と變じ、信州上路の山中にて公時を生む。幼名を快童丸と云ひ、顏面朱の如く、獸肉を裂いて食となす。ある日源頼光に逢ひ、母の命により荒熊と格鬪して非凡の力量を發揮し、頼光の臣となつて公時と名乘り、四天王の一人となる。江州高懸山の惡鬼退治の先導をなし、惡鬼と奮鬪して武功を立つ。

冠者丸　幼名を美女御前と云ひ、源滿仲の子。母を小侍從といふ。母に從ひて能勢判官仲國に養はる。盂蘭盆會の日源頼光の身代りとなつて母に斬られんとするを推知し、莞爾として母に對面し、髪を梳る間に竊かに一通の文を認めて髪の中に結び込む。その文に、世の無常をいひ父母の恩を謝し、母御歎きなき様に態と卑怯の擧動をなし、憎しみを受けて殺されん由を記し、白帷子を著て持佛堂の前に坐し、從容として經を念誦す。母歎いて斬ること能はず。是に於て態と臆病の擧動をなして母に斬らる。

小絲　小萩の替名。坂田前司忠時の女にして、坂田藏人時行の妹なり。父が物部平太に殺されてより佐夜の中山の旅人宿菱屋の下婢となり、同家の下男喜之介と情交密なり。ある夜物部平太來つて泊し理髪を請ふ。乃ち髭を剃りながら竊かに喜之介と諜し合はせ、忽ち親の敵と名乘るや、喜之介即ち平太の首を刎ね、小絲と共に出奔して源頼光に頼る。

小侍從　源滿仲に仕へ、滿仲の胤を孕みて冠者丸を生む。後に冠者丸を連れて能勢判官仲國に嫁す。偶源頼光來つて身を寄す。仲國夫妻これを厚遇せしが、盂蘭盆會の日小侍從頼光を饗應する席に侍して哭し、頼光に怪しまる。乃ち我が身及び冠者丸の來歴を語る。かくて宴終りたる後竊かに夫に呼ばれて、清原高藤より寄せ

大森彦七盛長　足利尊氏の臣にして勾當内侍に懸想す。和田源秀女裝して駕籠に乘り來れるを内侍と思ひ、其の手を取りて源秀に追拂はる。また新田義貞が西の宮に敗れて退くを追擊し、小山田高家の首を討ちて義貞の首と思ひ、尊氏に見せて恩賞にあづからんとす。かくて後勾當内侍が三種神器を捧持して吉野に至るを道に要して奪はんとせし時、忽ち神器奇特を顯はして盛長を追拂ふ。

新田義貞　青麥を刈り盜む二十餘歳の女を捕へしが、其の女の言を聞き哀みて鎧を與へ放免す。生田森の戰に小山田高家を組伏せ、其の著たる鎧の嘗て女に與へたるものなるを見、憐んでこれを助く。かくて後に吉野の内裏に至り、尊氏と和睦することとなる。

嫗山姥

澤瀉姬　岩倉大納言兼冬卿の女にして、源賴光と婚約あり。然るに賴光は淸原右大將高藤に讒せられて行方不明となるや、姬鬱々として暮す。ある日煙草賣の源七を呼び入れ、三味線を彈かしめて心を慰む。後に賴光高懸山の鬼神を退治して武功を立つるや、澤瀉姬四位に敍せられ、敕命ありて賴光と結婚の日を定めらる。

喜之介　佐夜の中山の旅人宿菱屋の下男を勤め、下女小絲と情交密なり。或夜小絲の亡父の仇物部平太來つて泊す。是に於て小絲と心を合はせ平太の言を刎ね、小絲と共に遁れて源賴光に賴り碓井貞光と改名す。淸原高藤、平政盛の追手と戰つて之を破り、山姥の導きによつて信州上路の山に分入り、こゝに賴光と會し、江州高懸山の惡鬼退治に從ひて武功を立つ

首を刎ねんとして、其の鎧を見憐んで之を助く。高家深く義貞の恩に感激す。義貞戰敗れて窮せる時、義貞の身代りとなつて大森彦七盛長に斬らる。

小山田前司高春　大森彦七が討取つたる新田義貞の首を尊氏見て疑ひを懷く。高春一見して我が子高家の首なるを知りしが、一旦獄門にかけて義貞か否かを正すべきをいひて其の首を梟す。高家の妻も勾當内侍も來つて其の首を見て泣く。高春乃ち高家の妻より高家が義貞の恩に感じて其の身代りとなりたることを聞き、其の行爲を褒め且曰く、義貞を助けたる子の親は、尊氏には不忠となるとて自刎す。

名和又太郎長年　出雲の住人にして忠臣なり。飲食物行商人となり、又六と稱して、坊門清忠が後醍醐天皇を幽閉し奉れる番所に來る。折しも小山田高家の妻比丘尼に扮して番人に酒を勸め、醉はせて眠らしむ。其の間に又六塀を破り、天皇の御供して大和路を指して逃ぐる途に楠正行母子に遇ひ、相共に天神森に據つて義旗を擧げ、寄來る敵を破り、天皇に供奉して吉野に急ぐ。

楠正成　足利尊氏西國の兵を率ゐ海陸より都へ攻上る。正成一時その鋭鋒を避けんとして謀を獻ぜしが、坊門清忠に妨げられて用ゐられず。是に於て正成死を決し、櫻井驛にて子の正行を敎訓して故郷に歸し、湊川に尊氏と戰うて利あらず、退いて民家に入り、弟正季に謂つて曰く、吾子何處にか魂を託せんと欲する。正季曰く、願はくは七度人間に生まれて國賊を滅ぼさんと。正成欣然として死す。

楠正行　幼少の時足利尊氏と戰はんとして走出でて、母に制止せらるゝ際、名和長年が後醍醐天皇を守護して來るに遇ひ、相謀りて天神森に陣して朝敵を破り、長年と共に天皇に供奉して吉野の内裏へ急ぐ。

し、銀子一枚を與へて忠兵衞と共に御所街道に遁れしむ。かくて兩人其の途上捕吏に取押へらる。

龜屋妙閑　大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衞の義母なり。

吉野都女楠

坊門宰相清忠　後醍醐天皇に仕へ、楠正成が奏上したる謀を難じ、足利尊氏に內應して天皇を幽閉し奉り、後また勾當內侍等が三種神器を捧持して吉野に至る途中を要して、神器を奪ひ內侍を生擒らんとして和田源秀に殺さる。

和田新發意源秀　楠氏の一族にして容貌魁偉膂力あり。櫻井驛にて新田義貞の室勾當內侍が難儀に遭へるを見て之を救ひ、自ら內侍の駕籠に乘りて、大森盛長の宅に行き盛長を追ひ拂ふ。後、內侍等が三種の神器を捧持して吉野に至る途中、坊門宰相淸忠等之を路に要して奪はんとするに會ひ、源秀乃ち淸忠を追うて之を斬る。

勾當內侍　勅命によりて新田義貞の室となる。坊門宰相淸忠に搦められて大森盛長の宅に送らるゝ途中、櫻井驛にて和田源秀に救はる。後に小山田太郎高家の首を新田義貞と稱して梟せる場に狂女となつて來り、また三種の神器を捧持して吉野に至る途に、坊門淸忠に要撃せられしも和田源秀に救はる。

小山田太郎高家　足利尊氏に仕へ、怒りに觸れて浪人となり貧困に生活す。其の妻新田義貞より鎧を惠まれて歸る。高家その鎧を著し、尊氏の軍に屬して出陣し、西の宮にて義貞と戰つて組伏せらる。義貞將に高家の

龜屋忠兵衛　大和國新口村の農夫勝木孫右衛門の子にして、大阪淡路町飛脚商龜屋の養子なり。大阪新町遊郭槌屋の遊女梅川と馴染み、之を落籍せんとして、丹波屋八右衛門の爲替金五十兩を私消す。八右衛門爲替金の交附を迫るに及び、忠兵衛泣いて具に情實を告げ其の猶豫を懇請す。八右衛門之を諾す。忠兵衛の義母妙閑はかかる事とは知らず、忠兵衛をして八右衛門に爲替金を渡さしめんとす。是に於て忠兵衛鬢水入を包み、小判金の如く見せてこれを渡す。八右衛門熟（つらつら）忠兵衛の身の行末を案じ、まづ遊女をして忠兵衛を疎ましめんとし、新町遊郭越後屋に赴きて鬢水入を示し、忠兵衛の窮狀を揚言して罵詈す。此の時忠兵衛藏屋敷の侍の委託金三百兩を懷にして越後屋に來り、外に立聞きして大いに怒り、八右衛門と口論して五十兩を投付け、梅川をも落籍して郷里新口村に伴ひ、舊友忠三郎の宅に立寄る。時に捕吏の追求急なるを聞き、御所街道に逋走せんとして途に捕縛せらる。

丹波屋八右衛門　龜屋忠兵衛の條に述ぶ。

勝木孫右衛門　大和國新口村の農夫にして忠兵衛の父なり。

まん　龜屋忠兵衛の飯焚女なり。

梅川　大阪新町遊郭槌屋の抱妓なり。龜屋忠兵衛と馴染む。忠兵衛花屋敷の侍の委託金三百兩を横領して梅川を落籍す。梅川一時喜びしが、其の請出金が委託金なりしを知るに至つて、深く嘆きながら忠兵衛に連れられて大和國新口村に赴き、忠三郎の家に立寄る。折しも忠兵衛の父孫右衛門鎌田村の寺院に參詣する途中、下駄の緒を切つて泥田に轉び込みたるを見、走り行きて懇に勞る。孫右衛門その樣子を熟視して梅川なるを察

霧の生みし子を養ひ、夕霧を請出して其の乳母たらしめんとして成らず。かくて後に夕霧の病革る際金を贈りて之を請出さんとす。

夕　霧　大阪新町九軒町の遊郭扇屋の名妓なり。藤屋伊左衞門と馴染みて源之介を生む。伊左衞門落魄するに及び、夕霧乃ち源之介を平岡左近の胤なりと稱して左近に養はしむ。左近の妻雪が夕霧を請出して源之介の乳母となさんとして、源之介は伊左衞門の子なること發覺し、源之介と共に左近の邸を放逐せられて扇屋に復歸す。夕霧病篤し。伊左衞門、源之介を伴ひて扇屋に夕霧を見舞ふ。此の時伊左衞門の母妙順金二千兩を贈りて夕霧を請出す。

扇屋了空　大阪新町九軒町の遊郭扇屋の主人にして、名妓夕霧の抱主なり。夕霧病篤き際、藤屋伊左衞門の母妙順及び平岡左近の妻雪より夕霧を請出さんとして金を送り來る。了空其の金を私せずして夕霧に與ふ。

忠兵衞
梅　川　冥途の飛脚

伊兵衞　大阪淡路町飛脚商龜屋忠兵衞の手代なり。

清　大阪新町遊郭越後屋の女主人なり。

忠三郎　大和國新口村の農夫にして、龜屋忠兵衞の故朋輩なり。忠兵衞、梅川相伴ひて大阪を脱走して、忠三郎の留守中其の家に立寄る。忠三郎歸宅して兩人を見、捕吏の兩人を追求すること急なるを告げ、兩人をして直に御所街道へ遁走せしむ。

藤屋伊左衛門　大阪新町九軒町扇屋の名妓夕霧と馴染みて豪遊を極め、七百貫の借財を負ひ、家を放逐せられて落魄す。阿波の士平岡左近の妻雪男裝して、井筒屋に夕霧を招き醜態をなす。此の時伊左衛門離室にありて、この體を見怒つて夕霧を罵詈す。夕霧、雪に落籍せらるゝや、伊左衛門は夕霧の舁夫となつて我が子の源之介に逢ふ。夕霧扇屋に戻つて病革るや、伊左衛門は源之介を伴ひ、扇屋の門前にて關の山の唱歌を唄うて夕霧と逢ふ。

吉田屋喜左衛門　新町九軒町吉田屋の主人なり。藤屋伊左衛門落魄して來りしを優遇す。扇屋の名妓夕霧が平岡左近に請出さるゝ約なるや、夕霧を連れて左近の宅に屆けしも約破れ、夕霧を連れて扇屋に歸る。

平岡左近　阿波の藩士なり。大阪上本町に別宅を構へ、九軒町扇屋の名妓夕霧を慕うて屢之を井筒屋に揚け、夕霧の子の源之介を我が子と信じて之を引取り、遂に夕霧を請出して其の乳母たらしめしが、源之介は伊左衛門の胤なること發覺するや、夕霧、源之介を放逐す。

たけ　阿波の士平岡左近の下婢なり。奴の權右衛門と契り、夫の放埒を忍んで親切を盡すを左近の室に聞かれ、其の心をめでられて錢百匹を惠まる。

梅庵　醫師なり。扇屋の名妓夕霧の病氣を診察し、病篤くして醫藥も效なきを語る。

妙順　藤屋伊左衛門の母なり。伊左衛門の馴染める扇屋の名妓夕霧の病氣革ると聞き、金二千兩を贈りて之を請出し、かつ見舞に行く。

雪　阿波の士平岡左近の妻なり。男裝し左近と名乗つて、扇屋の名妓夕霧を井筒屋に揚げて其の心を試し、夕

は姨の内大阪北野鐵鎚煎餅屋三郎兵衞方へ身を寄せしが、こゝも家運衰へ剰へ姨病氣となる。こかん、姨を救はんとして身を賣り、堀江の色茶屋に勤め、轉じて曾根崎新地平野屋の遊女となり、鍛冶職大文字屋の手代平兵衞と馴染む。折しも國元よりこかんを取戻さんとして使者來る。是においてこかん、平兵衞と別るゝを悲しみ、平兵衞に請出されんとして得ず、身の不遇を歎き、國元の使者和田傳内及び姨に暗に別れを告げ、深夜平兵衞と共に走り出て、神明宮附近の藍畑にて情死す。

和田傳内　播磨の人にして幼名を石松と云ひ、こかんの乳兄妹なり。こかんを連れ歸らんとして大阪に來り、こかんが堂島新地平野屋の遊女となれるを聞き、和泉屋にこれを招き、こかんの歸國を嫌ふを諫めて意見す。

平兵衞　大阪鍛冶職大文字屋利右衞門の弟子なり。堂島新地平野屋の遊女こかんと馴染む。ある日大文字屋の内儀等と北野不動に詣で、堂島新地の遊郭見物の案內して歸る。折しもこかんの伯母來れるに遇ひ、國元よりこかんを連れ歸らんとして來れる者ある由を聞き、早くこかんを請出さんとして、穢多より請合ひたる雪踏の裏金を調へて、其の代金を身請金にせんとせしを、主人より拒絕せられ爭らて放逐せらる。是に於てこかんに逢ひて共に死を決し、夜中神明宮附近藍畑に走つて情死す。

大文字屋利右衞門　大坂の鍛冶職なり。手代平兵衞かねての惡所狂ひを知つて案ぜる際、平兵衞が穢多の雪踏の裏金を請合へるを怒つて之を放逐す。

夕霧阿波鳴渡

於てきさ竊かに姉の家を脫け出て二郎兵衞と會し、相共に今宮惠比須森に走つて情死す。年二十七。

二郎兵衞　菱屋の手代なり。同家のお針女きさと相愛す。菱屋の別家由兵衞、きさに橫戀慕し、きさの親をして娘を由兵衞に與へんとの證文を作らしむ。きさ、二郎兵衞この證文を奪はんとし、主人に灼灸する間に主人の鍵を奪うて、戸棚に藏めたる證文を破り、由兵衞に見付けられて難儀に遭ひしを、菱屋の隱居貞法の說諭によつて改心し、破りし證文をよく見れば、七貫五百目の家質證文なるに當惑して死を決し、おきさと共に今宮惠比須の森に走つて縊死を遂ぐ。行年二十一。

菱屋四郎右衞門　大阪本町新物店菱屋の主人なり。

太郎三郎　三田村の農夫にして、菱屋の下女おきさの父なり。

貞　法　菱屋の隱居なり。

澀川卜庵　菱屋の主人四郎右衞門に灼灸す。

由兵衞　大阪安堂寺町菱屋別家の主人なり。菱屋のお針女きさを戀慕す。嘗て大川に舟遊びせる際、菱屋の手代二郎兵衞に礫石を投付けられて怒り、二郎兵衞を毆打せんとして過つて侍に無禮を加へ、侍よりいたく毆打せらる。きさ二郎兵衞の愛を割かんとして、遂に兩人をして情死せしむ。

心中刃は氷の朔日

こかん　幼名をおつやと云ふ。父は播州鷹匠頭に奉公せしが、鷹を逃したる罪によつて浪人となり、こかん

惣兵衞　江戸屋勝二郎の手代なり。主人の放埒に乘じて許多の金を瞞著し、忠義の手代新七を放逐せしが、遂に惡事をたくらみしこと露顯し、官より其の一味の徒と共に粟田口にて刑せらる。

太郎左衞門　大阪新町井筒屋の主人なり。茨木屋の太夫吾妻を連れて八幡に赴く途中、江戸屋勝二郎追放せらるゝに遇ふ。是に於て吾妻の身請金二百兩の不足を引請けて吾妻を勝二郎に渡す。

仁三郎　奈良の遊郭吉田屋の主人なり。藤五郎の爲に吾妻を請出す周旋し、吾妻に腰刀の身を奪はれたるを氣付かず。

お半　江戸屋勝二郎の手代新七の妻なり。勝二郎の豪奢放逸を諫めて用ゐられず。爲に深く主人の身を憂慮し病を得て死す。

龍田の藤　實名を藤五郎と云ひ、新七の弟なり。遊女吾妻を請出して勝二郎に與へんとして吾妻に刺殺さる。

妙慶　奈良の遊郭吉田屋の主人仁三郎の母なり。遊女吾妻が客の藤を殺さんとして夜中目をさませるを、其の心を知らずして來つて話し掛く。

今宮心中　二郎兵衞 おきさ

きさ　大阪本町新物店菱屋のお針女なり。同家の手代二郎兵衞と相思の仲となる。菱屋の別家の由兵衞もきさに懸想す。きさ、二郎兵衞が主人の鍵を盜み、きさの父がきさを由兵衞に與へんとの證文を奪はんとして戸棚を明けたるを由兵衞に見付けられて悶著を起し、きさ惡名を負ひ主家を出されて姉の所に預けらる。是に

の煙草を吸付けて清十郎に呑ませ、清十郎の自害を見て、捕吏の槍を奪うて咽喉を突きしかども死せず。尼と
なつて清十郎の菩提を弔ふ。

淀鯉出世瀧德

あづま　大阪新町茨木屋の太夫なり。八幡の富豪江戸屋勝二郎に落籍せられ、井筒屋太郎左衛門に連れられて八幡に行く途中、勝二郎官より追放せらるゝに遇ふ。太郎左衛門乃ち吾妻の身請金二百兩の不足を引請けて吾妻を勝二郎に渡す。これより夫婦奈良に落ち行き、吾妻は太郎左衛門に二百兩を支拂はんため再び遊女となり、龍田の藤五郎に落籍せられんとするを嫌ひ、藤五郎を刺殺して二百兩を奪ひしが、忽ち露顯して大騷ぎとなりしを、藤五郎の兄新七の執成しによつて事なきを得たり。

江戸屋勝二郎　八幡の富豪なりしが、遊女吾妻に馴染みて豪遊を極め、惡手代惣兵衛を信任し、吾妻を請出すことより滅亡の禍機をなして、官より追放せられ、吾妻と共に奈良に落ち憂目を見しも、遂に舊手代新七夫婦等の忠義によつて救はれ、再び家を興すに至る。

紀太夫　八幡の神主なり。早飛脚を以て江戸屋勝二郎追放の罪赦されたるを本人に通知す。

新七　江戸屋勝二郎の手代なり。主人の豪奢放逸を諫め、同僚の惣兵衛に陥れられて追出さる。其の後も屋勝二郎を諫めて用ゐられず。勝二郎資産を蕩盡して官より追放され奈良に落ち行くや、新七忠勤を怠らず。官新七の忠勤に感じて勝二郎の罪を赦す。

りて清十郎を陷れ、清十郎がお夏より借りたる金を奪はんとする奸策を談合せしが、この夜清十郎に殺さる。

佐治右衞門　和泉國水間の里の農夫にして清十郎の父なり。娘おしゆん及び清十郎許嫁の女おさんを伴ひて大阪見物に出で、清十郎の相手代勘十郎に騙されて、清十郎の主人の娘お夏の嫁入道具の發送を差止む。清十郎これが爲に主人の嫌疑を受け、罪を負うて主家を放逐せられ、捕吏に縛されて刑場に引出さる。佐治右衞門其の場に來つて勘十郎の罪を明らかにす。

おさん　清十郎の許嫁の女なり。清十郎罪を犯して失踪するや、おさん比丘尼となりて清十郎を尋ね出でて刑場に逢ふ。

おしゆん　佐治右衞門の娘にして清十郎の妹なり。清十郎罪を犯して失踪するや、おしゆん比丘尼となりて清十郎の行方を尋ね、清十郎の刑せらるゝ場に巡り逢ふ。

清十郎　佐治右衞門の子なり。但馬屋九左衞門の手代となり、主人の娘お夏と情交を結び、友手代の勘十郎及び源十郎の奸策に陷れられ、寃罪を負うて主家を放逐せらる。清十郎悲憤に堪へず、勘十郎を刺さんとして誤つて源十郎を殺し、脱走して長崎にて捕へられ、刑場に引出されたる際、お夏の來れるを見て喫煙の火を貰ひ、煙管にて咽喉を突破りて自殺す。行年二十五。

お　夏　但馬屋九左衞門の娘なり。龍野の某家に婚約あり。然るに手代の清十郎を愛して龍野に嫁するを肯ぜず。清十郎主家を放逐せらるゝや、お夏狂亂となり、清十郎の跡を慕ひて家を出で、熊野修行者となつて清十郎の許嫁の女おさん等に遇ひ、相共に淸十郎の刑場に赴き、埒外に狂奔して死を共にせんことを請ひ、一服

本田彌三左衛門　東の高家入間殿の奥家老なり。丹波領主由留木侯の女しらべの姫を迎へに來り、姫に陪從して歸る途に、伊勢國關の宿にて馬追三吉竊盜して捕へらるゝや、しらべの姫の乳母滋野井の愁歎を察して三吉の罪を救す。

伊達與作　丹波領主由留木侯に仕へ、登用せられて奏者役番頭千三百石に取立てられ、侯の侍女滋野井と通じて與之助を設く。後に江戸の邸に勤仕し、放蕩の爲に改易を命ぜられ、落魄して馬追となり、關宿の出女小萬と馴染み、馬方八藏と賭博し負けて喧嘩す。此の夜馬追兒三吉を教唆して、しらべの姫の金袋を奪はしめしが、三吉夜廻の侍に見付けられて捕へらる。此の時與作は三吉が我が子の與之助なるを知り、愁歎に暮れ小萬と共に死せんとして迷ひ出でしが、滋野井・しらべの姫君に救はれて士籍に復す。

おなつ清十郎　五十年忌歌念佛

勘十郎　但馬屋の手代なり。相手代清十郎の父佐治右衛門を騙して、主人の娘お夏の嫁入道具の發送を差止めしめて、主人より預れる嫁入道具の支拂金を著服し、主人に讒訴して罪を清十郎に負はしむ。清十郎處刑の場に勘十郎の罪狀暴露して刑に處せらる。

但馬屋九左衛門　播州姫路本町米問屋の主人にしてお夏の父なり。手代清十郎がお夏と情交をむすべるを怒り、又惡手代勘十郎の言を信じ、遂に清十郎を放逐す。

源十郎　但馬屋の手代なり。相手代清十郎が主人の娘お夏と密通せるを相手代勘十郎に報告し、勘十郎と謀

笠屋與兵衞　長兵衞等に勸められて僧となり、助給と法名して大和平羣谷の庵室に籠り亡妻の菩提を弔ふ。ある日幻に亡妻に逢うて物語をなし、目覺めて愁歎に暮れて遂に死を決し、大阪の伯父、伯母、在所の親に書置を殘して自刃す。時は四月十七日にして行年二十二。

高野山女人堂　心中萬年草

祐辨律師　高野山南谷吉祥院の僧にして、寺小姓成田久米之介の念者なり。久米之介が雜賀屋のお梅と情交あること露顯するや、祐辨怒つて久米之介を毆打して放逐す。

お　梅　神谷宿雜賀屋與次右衞門の女なり。成田久米之介と情交ありて、吉祥院の法印と久米之介とに渡すべき二通の手紙を九兵衞に託せしが、其の手違ひの破綻より、久米之介寺を放逐せらる。この日お梅は親の命によつて美濃屋作右衞門と祝言することとなり、久米之介もお梅も窮して、遂に陰暦二月七日の夜高野山女人堂の傍に情死す。行年十八。

岸和田の九兵衞　駕籠舁なり。雜賀屋お梅の書狀の使をなし、久米之介吉祥院を放逐せらるゝや、兩人相伴うて雜賀屋に來り、九兵衞諧謔を交へつゝ久米之介お梅を夫婦たらしむべきをいふ。

成田久米之介　成田武右衞門の子なり。十二歳の時鷄合の喧嘩より其の友伊吹卯之助を殺し、高野山に登りて南谷吉祥院の寺小姓となり、神谷宿雜賀屋のお梅と情を通ず。お梅の書面よりお梅との情交吉祥院の法印の知る所となり、祐辨律師及び伊吹千右衞門に毆打されて吉祥院を放逐せられ雜賀屋に來る。此の日お梅の親、

となし、お種が已の意に從はざる意趣にお種源右衛門の姦通を言ひ觸らす。

ゆら　小倉彦九郎の妹なり。彦九郎の妻お種が宮地源右衛門と姦通せるを語り、彦九郎に其の證を詰られて、磯邊牀右衛門より得たる兩人の袂を出して之を示す。お種悔悟して自刃す。ゆら乃ち彦九郎等と連立ちて源右衛門を襲ひ、遁ぐるを追ひて堀川橋上に斬殺す。

あとおひ心中　卯月の潤色（緋縮緬卯月椛よりつゞく）

お今　お龜の死口を寄せたることよりしてお今傳三郎の惡行暴露す。長兵衛の姉大いに怒り、杖を以てお今を毆打し、長兵衛に迫つてお今傳三郎を放逐せしむ。

笠屋お龜　伯母より死口を寄せられて、お今、傳三郎を痛罵し、與兵衛の身の上を賴む。またお龜の幽靈大和國平塚谷の庵室に助給を尋ねて物語す。

笠屋長兵衛　お今等と連立ちて養子與兵衛を河内なる其の親元に預けて歸る途に、神子町の梓巫女お辻の宅を訪うてお龜の口寄せを賴む。お龜乃ちお辻の口を藉りてお今等の惡行を語る。長兵衛の姉之を聽いて大いに怒り、長兵衛に迫りてお今等を放逐せしむ。

傳三郎　お龜の死口を寄せて、傳三郎等の惡事暴露するや、長兵衛の姉に毆打せられ、長兵衛より放逐せらる。

ふり　お龜非業の死を遂げたる後、長兵衛の供して神子町を通り、お龜のことを思ひ出して泣く。

守中にその妻お種の不義ありしことを諷す。

お種　小倉彦九郎の妻なり。夫が江戸詰の留守中養子文六の鼓師匠宮地源右衞門を饗し、強飲して夜に及ぶ。彦九郎の同役磯邊牀右衞門兼てお種に懸想す。この夜竊かに來つてお種を挑む。お種欺き明夜を約して歸らしむ。源右衞門鄰室にありて之を聞き、謠に託して諷刺す。お種愧ぢて源右衞門に他言せざらん事を請ひ、酔狂の過ちより不義に陷る。牀右衞門再び來つて兩人姦通の證を捉ふ。彦九郎歸國し妻の不義を傳聞して大いに怒る。お種悔悟して持佛堂に自刃す。

小倉彦九郎　因幡の藩士なり。江戸詰の留守中に妻お種、宮地源右衞門と姦通す。彦九郎歸國して之を聞知し、妻を持佛堂の室に呼ぶ。お種悔悟して自刃す。彦九郎その止めを刺し、妹ゆら、養子文六、お種の妹お藤と共に女敵討に出で、源右衞門の宅に斬入り、遁ぐるを追ひて堀川の橋上に斬殺す。

お藤　小倉彦九郎の妻お種の妹なり。彦九郎の留守中お種宮地源右衞門と姦通す。お藤は姉の不義を彦九郎に聞知せられんことを憂ひ、自ら艷書を彦九郎に送り、姉を離別せしめて之を救はんとして成らず。お種悔悟して自刃するや、お藤は彦九郎と共に源右衞門の宅を襲ひ、其の遁ぐるを追うて堀川橋上に殺す。

文六　小倉彦九郎の養子なり。鼓を宮地源右衞門に學びしが、義母お種、源右衞門と姦通したる事露顯して自刃す。是に於て義父等と共に源右衞門の宅を襲ひ、其の逃ぐるを追ひ堀川橋上にて斬殺す。

磯部床右衞門　因幡の藩士なり。相役人小倉彦九郎の妻お種に懸想し、之を挑みて拒絶せらる。後刻再びお種の父忠太夫と名乘つて來る。其の夜お種、宮地源右衞門と不義に陷る。床右衞門兩人の袂を奪うて不義の證

預み、常に家内不和合のために胸を痛め、剩へ傳三郎より挑まれて大いに怒り、身の不運を嘆きて夫と共に死を謀り、五月十七日の夜陰に乘じて家を出で、梅田堤に走つて死す。行年十五。

笠屋長兵衞　大阪北久太郎町古道具商なり。妾いまの言を信じて養子壻與兵衞を疎み離緣せんとす。これが爲に娘お龜死するに至る。

傳三郎　笠屋長兵衞の妾お今の弟なり。長兵衞の娘お龜と夫婦となつて、長兵衞の家督を奪はんとして奸策を廻らし、お龜の夫與兵衞を陷る。

ふ　り　笠屋長兵衞の下女なり。長兵衞の娘お龜の供して神子町黑格子辻の宅に立寄る。

笠屋與兵衞　笠屋長兵衞の女お龜の壻養子なり。養父の妾お今及び其の弟傳三郎に窘められ、養父に惡まれて家出せしが、お龜を慕ひて立寄るを、長兵衞お今に見付けられて益惡まれ、遂にお龜と共に梅田堤に走り、情死せんとして妻は死し、己は里人に助けらる。

堀川波鼓

宮地源右衞門　京堀川下立賣に住み鼓の師匠なり。因幡の藩士小倉彥九郎の養子文六に鼓を教授し、彥九郎の妻お種と不義に陷り、かねてお種を横戀慕せる磯邊床右衞門の爲に言ひ觸らさる。後に彥九郎等の爲に堀川橋上にて女敵討に遭ふ。

政山三五平　小倉彥九郎の妹壻なり。彥九郎江戶詰を終へて歸國するや、三五平眞等を辭りて、彥九郎の留

難儀の身となるや、お島もともに憂ひ、市郎右衞門と最後の宴を近江屋に張り、歸途善次郎に遇うて怨言を述べ、天滿屋に歸りて暗に別れを告げ、夜更けて市郎右衞門の戶外に咳する聲を聞き、窗より鏡を出して星影を映し、無言の中に心中を示し合うて自刃す。

介右衞門　長柄の百姓なり。報恩講の金を預り、懸硯の抽斗中に收めて其の鍵を置き忘る。後その金の無きに驚き、義子市郎右衞門が盜みたるものと早合點し、之を毆打して放逐す。

善次郎　市郎右衞門の弟なり。酒色に耽つて借財嵩み、其の返濟に窮して父の預れる報恩講の金を盜み、其の罪を兄に嫁す。兄遂に自殺するや、我が身の非を悔いて兄の屍を納む。

お吉　長柄の農夫介右衞門の子にして、市郎右衞門の妹なり。天滿屋の遊女お島より市郎右衞門に送りたる手紙を受取りて父に奪はる。

緋縮緬卯月艷　道具屋おかめ

お今　大阪北久太郎町古道具商笠屋長兵衞の妾なり。弟傳三郎をして、長兵衞の息女お龜の壻養子たらしめ、よつて以て長兵衞の家督を奪はんとして、傳三郎と共にお龜の夫與兵衞を陷れ、長兵衞をして深く與兵衞を惡ましめたり。

お龜　古道具商笠屋長兵衞の女にして與兵衞の妻なり。與兵衞が舅の妾いま及び其の弟傳三郎にいぢめられて家出するや、お龜は夫の身を案じて大阪二十二社に詣で、神子町の梓巫女お辻の家に立寄つて夫の口寄を

修理之介正澄　土佐將監光信の門弟なり。元信の畫きたる虎生動せるを正澄その畫虎を抹殺し、光信より土佐光澄の名を貰ふ。

浮世又平重起　土佐光信の弟子にして吃なり。家貧しく大津繪を畫きて口を糊す。土佐の名を望み光信に懇請して拒絶せらる。又平失望して自害せんとし繪像を畫く。然るに其の繪石を穿つ。光信感じて光起の名を授く。又平また銀杏の前を助け、雲谷等と戰ひて之を破る。

心中二枚繪草紙

市郎右衞門　長柄の百姓介右衞門の義子なり。大阪蜆川新地天滿屋の遊女お島と馴染む。ある日お島が明石の貞と云ふ客に連れられ、舟に乘りて淨瑠璃を語る。市郎右衞門陸よりその舟の後を追ひ行くを貞に見咎められて罵詈せらる。かくて後親の預れる報恩講の金を盜める嫌疑を受け、遂に死を決して最後の宴を近江屋に張り、長柄の川邊に迷ひ行き、お島の靈魂と相行交ひつゝ自殺す。

明石の貞　大阪蜆川新地天滿屋の遊女お島を伴うて芝居見物に行き、歸途舟に乘り、お島をして淨瑠璃を語らしむ。お島の愛人市郎右衞門陸より其の舟の後を附け行くを見咎め、口論して之を辱む。

お　島　大阪蜆川新地天滿屋の遊女なり。長柄の百姓市郎右衞門と馴染む。嘗て明石の貞と云ふ客に連れられて芝居見物に行き、歸途舟に乘りて淨瑠璃を語る。市郎右衞門陸より其の舟を注視す。貞これを見咎めて市郎右衞門と一悶着を起ししが、お島の斡旋によりて事なきを得たり。市郎右衞門弟善次郎の爲に冤罪を負うて

不破入道道犬　六角左京大夫賴賢の家老なり。賴賢の抱繪師雲谷等と黨を結んで、狩野四郎二郎及び名古屋山三春平を放逐す。春平浪人となつて道犬の子伴左衞門を京都島原遊郭の大門口に斬殺す。道犬怒つて春平を竊盜殺人罪に訴へしが、却つて人を誣ふる罪に處せらる。

傳三郎　京都島原遊郭舞鶴屋の主人なり。名古屋山三春平が不破伴左衞門を斬つて捕吏の取調を受くる際、傳三郎は鴇老(やりて)のお宮と共に春平を辯護して之を助く。又狩野元信祝言より五日後に其の宅を訪うてお宮の死を語つて悲しむ。

等巖　六角左京大夫賴賢の抱繪師雲谷の弟子なり。雲谷と共に土佐又平を攻めて敗績す。

遠山　土佐將監光信の女にして幼名を光と云ふ。越前氣比の遊女となりて遠山と名乘る。狩野元信に逢うて奧州武隈の松を畫く祕傳を授け、かつ慇懃を通ず。遠山はかくて後諸方に流轉し、越前三國町にありては勝山と云ひ、伏見にては淺香山と云ひ、奈良の木辻にては三つ山と云ひ、京の島原にてはお宮と稱す。元信の恩人名古屋山三春平が不破伴左衞門をきり殺すや、お宮乃ち春平を辯護して殺人の罪を免れしむ。元信が六角左京大夫の妾腹の女銀杏の前と結婚するに及んで、お宮失戀して憂死し、其の魂魄留まつて元信と夫婦となり、靈魂相伴うて熊野權現に詣づ。

不破伴左衞門宗末　不破入道道犬の嫡子なり。父と謀りで狩野元信を放逐す。京都島原の遊女葛城を請出さんとし、大門口にて名古屋山三春平に斬殺さる。

藤袴　銀杏の前の侍女なり。五十餘歲の醜女なるが、狩野元信を慕ひて抱付く。

銀杏前　江州高島の館左京大夫賴賢妾腹の女なり。狩野四郎二郎元信の妻となる。

雅樂介　狩野四郎二郎元信の弟子なり。元信の敵雲谷と戰うて痛手を負ふ。

長谷部雲谷　江州高島の館左京大夫賴賢の抱繪師なり。狩野四郎二郎元信の畫才あるを嫉み、不破入道道犬等と黨を結び、四郎二郎を苦しめしが遂に流罪に處せらる。

葛城　京都島原の遊女なり。名古屋山三春平に請出されて其の妻となる。

名古屋山三春平　六角賴賢の家老なり。同役不破道犬の讒によりて浪人となり、京都島原の遊女葛城と馴染み、道犬の子の伴左衞門を大門口に斬りしが、傳三の同情によりて殺人犯の罪を免る。また賴賢妾腹の子銀杏の前を狩野四郎二郎に娵すす。道犬其の黨雲谷と共に山三を訴へ、伴左衞門を殺して其の所持金三百兩を奪ひたりとなす。是に於て山三は伴左衞門を殺しし時に、其の所持金を屍の肺腑中に入れ置きしを取出して道犬に示す。爲に道犬却つて人を誣ふるの罪に處せらる。

狩野四郎二郎元信　狩野祐勢の嫡男なり。文龜年間天滿宮の御告げにより、奥州武隈の松を畫かんとして越前氣比浦に赴く。時に土佐將監光信の娘光遊女となり、遠山と名乘つてこの地に在り。元信、遠山に逢うて武隈の松の祕傳を授かり且之と契る。後、江州高島の館左京大夫賴賢に仕へしが、道犬、雲谷等に憎まれ、弟子雅樂介と共に遁れて又平の宅に潛む。賴賢妾腹の娘銀杏の前と婚約するや、光ために失戀して憂死し、其の魂一魄留まりて元信と契る。大永七年元信大嘗會の屛風を畫きて從四位下越前守に任ぜられ、光信を推擧して共に繪所に出仕す。

しめ、義將と稱して內に入る。

藤內四郞光治　藤內太郞家治の弟にして鼓の藝人なり。足利將軍義教に從ひて反臣赤沼父子を吉野城に攻めて軍功を立つ。

藤內二郞盛治　藤內太郞家治の弟なり。家貧しく、本阿彌清祐の刀を得んとし、清祐の女玉椿を唆して其の屋內に入り、賊名を負ひ妻の身賣金三十兩を與へて免るゝを得たり。後に斯波義將が琵琶姬と婚するを聞き、義將が敵の術中に陷らんとするを憂ひ、尋ね行きて面會を求むれば、義將と聞きしはその實我が妻の小哂なるに驚く。此の時赤沼の軍に襲はれ、盛治夫婦奮戰して之を退け、琵琶姬を伴ひて走る。かくて斯波義將に從つて赤沼父子を吉野城に攻めて滅ぼす。

足利義教　足利六代將軍なり。赤沼幸滿の逆心を覺らず、招かれて其の邸に行きて印判を預け、斯波義將に諫められて大いに怒る。幸滿反するや義教亡命して斯波義將等に救はる。

斯波左衞門義將　管領職を勤む。足利將軍義教の身を氣遣ひて赤沼幸滿を訪ひ、中川の幽靈に逢うて赤沼父子の逆臣を知り義教を諫む。義教大いに怒り細川勝秀に命じて義將を討たしむ。義將自刃せんとするも勝秀制して其の心事を聽き、相和して別る。後に義將、勝秀共に赤沼父子を攻めて之を誅す。

傾城反魂香

紵卷　足利義教の奧方の侍女なり。奧小姓一色久常と密通し、相共に屋根を傳ひて遁る。

小晒　藤内二郎盛治の妻なり。夫を救ふ爲に金三十兩に身を賣り、男裝して斯波義將と稱し、義將の許嫁の女琵琶姬の所に行く。姬の兄之を疑つて斯波家の系圖を尋ぬ。小晒出鱈目を言散らして胡魔化す。時に盛治來つて義將に面會を求む。乃ち小晒出でて逢ふ。此の時赤沼の軍の襲擊に遭ひ、夫と共に奮鬪して敵を退く。

藤内二郎武治　太鼓、鼓の藝人なり。兄盛治の意見に從はず、反臣赤沼幸滿に屬して斯波義將を古川權頭清氏の邸に攻めて捕縛せらる。後に前非を悔い、盛治と和して赤沼父子を攻む。

玉椿　本阿彌右衛門太郎淸祐の娘なり。藤内二郎盛治に羽子を拾はれて話し合ひ、盛治に名刀を得させんとして之を屋內に引き入る。

中川　足利義敎御臺所の侍女にして、藤内太郎家治と慇懃を通ず。赤沼幸滿反心あり、中川を欺いて義敎の刀を奪はしめて、中川を雪中に凍死せしむ。中川時に歲二十。乃ち幽靈となつて斯波義將及び家治に逢ひ、赤沼の反心及び悲慘なりし己が最期の情を告ぐ。後に又中川の幽靈出でて、赤沼父子を引き立てて義敎の前に突き出す。

一色大炊介久常　足利義敎の奧小姓を勤め、御臺所の侍女紵卷と密通して赤沼幸滿に見付けられ、幸滿とれを見遁す代りに藤内太郎家治の持てる小水龍といふ笛を折るやう賴まれて、家治の手にせる笛を折りたる後、家治に赤沼が反心を懷けるを語る。後に義敎にも赤沼にも疑はれ自殺せんとして、鞘を割れば一通の書出づ。亡父の筆蹟にて己は藤内五郎忠治といふ者なるを記したり。

琵琶君　古川權頭淸氏の女なり。斯波左衛門義將を戀慕して病となる。淸氏乃ち藤内二郎盛治の妻を男裝せ

密會し、互に身の上を嘆けるをお房の抱主に悟られて、火燵責めの苦を受けて益世をはかなみ、お房と共に出奔し、高津上鹽町大佛殿勸進所にて情死す。

お房　大阪六軒町の娼家重井筒屋の遊女なり。紺屋德兵衞と馴染み、親に送るべき金の調達を賴み、德兵衞の家に行きて、口入業治右衞門に會ひて、德兵衞に丁銀四百目を貸さしめて歸り、朋輩と火廻の戯をなせる際飛脚來る。房未だ託すべき金を德兵衞より受取らずして苦悶す。後に德兵衞來つて、互に身の上を嘆きたるを抱主に覺られて火燵責めの苦を受け、德兵衞と共に高津上鹽町大佛殿勸進所に走つて情死す。

雪女五枚羽子板

藤内太郎家治　斯波左衞門義將の家來にして笛に妙を得たり。北山御所の門前に立てる際俄に一色大炊介久常に笛を切らる。後に義將に陪して赤沼幸滿の家に行き、計らずも妻中川の幽靈に遇ふ。赤沼父子反するや、主と共に之を吉野城に攻めて功を立つ。

赤沼前司入道幸滿　節分の夜將軍足利義敎を饗して其の印判を奪ひ、又管領斯波義將を罪に陷れん爲に、一色大炊介に命じて義將の家來藤内太郎の携へたる笛を義敎の名笛小水龍と誤信して之を折らしめ、又藤内太郎の妻中川を欺きて義敎の太刀を盜ましめ、遂に反して兵を擧げしが、斯波義將等と戰ひ敗れて滅ぶ。

細川右馬丞勝秀　足利義敎の命によつて斯波義將の討手に向ひしが、義將の心事を聞いて深く感じ相和して別る。後に赤沼幸滿反旗を擧ぐるに及び、乃ち義將と共に赤沼父子を攻めて之を誅す。

に比丘尼となつて薩摩に下り、芭蕉布商琉球屋に來り、源五兵衞に刀を投げられて怪我す。琉球屋の娘お萬が源五兵衞の後を追うて裏塀を越ゆる際、帶松枝に懸りてぶらさがる。お萬乃ち帶を松枝に投懸けて之を助く。

心中重井筒

小一郎　萬年町紺屋德兵衞お辰の子なり。お辰が小一郎に踊の鬘を被せて寐せたれば、舅宗德それを見て德兵衞と誤り、また德兵衞はお辰の情夫と思うて引摺られれば、奴天窗を振りながら母樣怖いと泣く。

三太郎　紺屋德兵衞の手代なり。德兵衞の馴染の遊女房より小粒銀一つを貰うて、房の來れるを口外せざるを誓ひ、また德兵衞の女房辰より銀を貰つて用命を聽く。

吉文字屋宗德　紺屋德兵衞の義舅なり。口入業治右衞門の通知によつて德兵衞夫妻が借金せしことを知り、怒つて德兵衞の宅を訪ひ、お辰に會して借金の理由を詰問す。

お辰　大阪萬年町紺屋の女にして德兵衞の妻なり。子を伴つて鍛屋町なる姉を訪うて歸れば、夫は留守にして懸硯明けたる儘に夫婦の印判取散らしてあるに驚ける折しも、舅來つて口入業治右衞門より借金したる理由を詰問す。お辰良人の惡性を押包み體よく誤魔化して歸らしめ、夫の歸るを待受け其の改悛を促して泣く。この夜夫出でて歸らねば、或は馴染遊女の房と情死もやせんと案じて其の行方を尋ね出づ。

紺屋德兵衞　大阪萬年町紺屋の入婿なり。遊女お房に馴染み、お房の難を救はんとして堀江の口入業治右衞門より丁銀四百目を借りしも、妻の貞實に感じ我が身の非を謝してその金を妻に渡し、井筒屋に行きてお房と

を教へ、身は女中部屋に入りたる科によつて放逐せられ、薩摩に歸りて事介と替名し、芭蕉布屋の丁稚となりておまんと關係を續けしが、おまんの繼母に追出さる。おまん源五兵衞を尋ね來り、おまんの繼母も後を追うて來り、おまんを連れ歸らんとす。源五兵衞怒つておまんの繼母に斬付け、また誤つておまんをも斬り、自らも割腹せしが、笹野三五兵衞に救はる。

小　萬　肥後熊本の士笹野三五兵衞と婚約ありしが、三五兵衞病死せりと聞いて國を出で、但馬城主の京都の邸に勤仕し、侍女の林を我が夫の變裝せるものとは知る由もなかりしが、偶菱川源五兵衞を挑みしことより引いて林の我が夫たるを知るに至る。後に夫と共に源五兵衞を尋ねて薩摩に下る。

笹野三五兵衞　肥後熊本の士なり。幼時父武州の色里にて石子久彌に殺さる。三五兵衞長じて之を知り、父の仇を討たん爲、女裝して但馬城主の京都の邸に住込んで小萬の侍女となる。ある日菱川源五兵衞と癡情の喧嘩よりして久彌の居所を敎へられ、親の敵を討取るを得て、其の禮を述べんとして薩摩に下つて源五兵衞を訪ふ。折しも源五兵衞切腹して傷を負へる際なりしかば、助けて名醫の許に連れ行く。

お　萬　鹿兒島濱の町芭蕉布屋新兵衞の女なり。菱川源五兵衞と慇懃を通ず。お萬の繼母これを知つて他に嫁せしめんとす。お萬乃ち脫走して裏塀を越ゆる際、帶松枝に懸りて吊下る。お蘭これを見てお萬を助く。かくて後お萬源五兵衞相逢へる際、繼母來つて喧嘩となり、お萬傷を負ふ。

四十平　但馬城主の京都の邸に仕へ、中間頭の寄親となる。

お　蘭　但馬城主の京都の邸に仕へてお櫛上げを勤む。ある夜小萬の媒介によつて菱川源五兵衞と契る。後

平次に銀二貫目を詐取せられ、かつ罵詈殴打されたるを聞いて復讐せんとす。この時九兵次も天満屋に來つて徳兵衛を罵詈して歸途、印判のことより徳兵衛より銀二貫目を詐取したることの露見せんことを嘆きしを、久右衛門竊かに其の背後にありて聽き、直に聲を掛け匕首を突付けて其の言を確め、殴打して代官所に渡す。

平野屋徳兵衛　大阪内本町醤油商平野屋久右衛門の手代なり。主人は徳兵衛の叔父にして、徳兵衛に妻の姪を娶らせて家業を譲らんとし、銀二貫目を徳兵衛の母に與へて其の婚約の證とす。然るに徳兵衛は蜆川遊郭天満屋のお初と馴染みて叔父の意に從はず。婚約の證銀二貫目を主人に返濟せんとして母より請取りしも、惡友油屋九平次に欺かれて奪はれたる上、罵詈殴打せられて憤懣に堪へず、お初と共に身の不幸を悲しんで曾根崎の森に情死す。行年二十五。

お　初　大阪蜆川天満屋の遊女なり。田舎客に連れられて大阪三十三番の觀音を廻り、生玉社の出茶屋にて愛人平野屋徳兵衛に逢ふ。折しも九平次來つて徳兵衛と喧嘩す。お初は徳兵衛の身を思ひ歎けども、強ひて駕籠に入れられて歸る。朋輩妓等お初に徳兵衛の惡評を語る。此の時徳兵衛來つてお初と逢ふ。九兵次も來り徳兵衛を罵詈す。こゝに於てお初愛人の爲に覺悟を定め、其の夜相共に曾根崎の森に情死す。行年十九。

源五兵衛 おまん　薩摩歌

菱川源五兵衛　薩摩者なり。同所來迎院の小僧となり、濱の町芭蕉布屋の娘おまんと通じ、罪を得て京に上り、但馬城主の京都の邸に奉公し、勤仕女の小萬に挑まれたるより事起り、笹野三五兵衛にその父の仇の居所

熊源太と戰つて淡路に落ち、中山寺の眞如上人を賴んで光明丸をその弟子となす。後また中山寺を訪うて光明丸の放埓を意見せし爲、光明丸出奔するや其の行方を尋ね、飛田の墓地にて孝房等と邂逅す。

法明上人　藤原民部少輔孝房の末子なり。母横死して其の肋の疵より生まれ出で、眞如上人の弟子となり、叔父の教信に從ひて七墓を巡り、飛田の墓地にて兄眞光の縊死を發見し、教信と協力して之を蘇生せしむ。後に賀古莊の寺に住して亡母亡姉の追福を祈る。

宮城野　京都九條の遊女なり。藤原民部少輔孝房と馴染む。神崎に鞍替へ、孝房の父教孝の配流せらるゝを目擊し、其の罪を贖はん爲に眞光を唆して金を得んとす。眞光これが爲に失踪するに至り、宮城野は遊郭を脫走し、孝房と共に眞光の行方を尋ねて飛田の墓所を彷徨す。

印南彌七郎　賀古川民部少輔藤原孝房の家士なり。主と共に京に出でしが、賀古に歸つて主が熊野浦にて難船に遭ひ溺死したる由を報告す。かくて後熊源太兄弟と鬪つて之を搦む。

曾根崎心中

油屋九平次　平野屋德兵衞を欺きて銀二貫目を奪ふ。生玉社の出茶屋にて德兵衞に逢うて其の返濟を督促せられ、德兵衞を罵詈毆打して逃ぐ。後に天滿屋より歸る途にて、德兵衞の叔父久右衞門の爲に毆打され、かつ代官所に訴へらる。

平野屋九右衞門　德兵衞の叔父なり。德兵衞を尋ねて天滿屋に來り、遊女お初に逢うて德兵衞がその惡友九

敎信等に邂逅す。此の時賀古郡主より大内獻上の礎柱を引き來ることなどありて、孝房遂に本領安堵となり、賀古の莊に伽藍を建立す。

高梨政太郎友風　高梨吉内左衞門友重の養子なり。友重が坊門中納言資雄を殺害するや、友風は養父が敵討に遭はんことを慮り、其の身代りにならんとして友重と稱し、櫻塚に赴ける際、資雄の子の敎信より敵討の聲を掛けられ、敵より病身を討つは本意にあらずとて、全快の上勝負を決せんことを約して別る。ある日中務秀光が熊源太等に追擊せられて遁れ來り、女子供を隱まはれんことを懇請せられ、これを拒絕せしが、熊源太等の暴戾を見るに忍びず、秀光に助太刀せんとして病身の爲に斃れ、中山寺に葬送せらるゝ途中、熊源太等の爲に橫死したる藤原孝房の室の亡魂その死骸に入る。

虎平次　熊源太の弟なり。兄と共に藤原孝房の室及び中務秀光等の淡路の方へ落ち行くを追擊し、孝房の室を殺害するなど惡行多かりしが、遂に印南彌七郎に搦めらる。

藤原花二郎敎信　坊門中納言資雄の子なり。幼時母に連れられて藤原敎孝に養はる。長じて實父は高梨吉内左衞門友重に殺されたるを聞き、亡父の仇を報ぜん爲變裝して祭文を語り、櫻塚にて友重と名乘るものに逢ひしが、その病身なるを見て、全快の上勝負を決せんことを約して別る。後に中山寺に行きて、友風の死骸に我が嫂の亡魂の入り替れるを知り、人生の無常を歎きて發心し、嫂の末子を佛門に入れて補佐し、亡墓地を巡りて飛田墓所に縊死せる甥眞光を蘇生せしめ、賀古の莊に寺院を建てて廻向の大導師となる。

中務秀光　藤原敎孝の重臣なり。敎孝の長男孝房の室及び其の子光明丸が蜘蛛に害せられんとするを救ひ、

卯花　播州總郡代賀古川前主典藤原敎孝の重臣中務秀光の妻なり。敎孝の孫光明丸を脊負ひて賺し機嫌を取れる際、光明丸の妹千壽姫に化けたる蜘蛛に嚙まれて死し、後に敎信上人の廻向によりて成佛の姿を現ず。

熊源太　藤原敎孝の後妻の弟なり。敎孝の嫡子民部少輔孝房の僕須藤磨藏を殺し、孝房の室及び中務秀光等の淡路をさして落ち行くを追擊して孝房の室を害せしが、後遂に印南彌七郎に搦めらる。

光明丸　播州賀古川の民部少輔孝房の子なり。祖母に化けたる蜘蛛及び熊源太の爲に、將に殺されんとして漸く免れて中山寺に赴き、眞如上人の弟子となりて眞光と法名す。人に騙されて遊女宮城野を菩薩と信じて、閻浮檀金の觀音像を奪ひて宮城野に與へんとし、眞如上人に見付けられ、深く恥ぢて飛田墓所に縊死す。時に齡十三。然るに叔父敎信の信心堅固の功德によつて蘇生す。

須磨藏　播州賀古川民部少輔藤原孝房の僕なり。孝房の繼母が孝房夫妻及び其の子の死を雲が洞に祈るを目擊して、これを孝房の異母弟敎信に語る。かくて後變化及び熊源太と力戰して死し、其の念力胴に留まりて變化を退治す。

千壽姫　藤原孝房の子なり。祖母に化けたる蜘蛛に呑込まれ、死して賽の河原に遊ぶ。後、叔父敎信及び弟の法明上人の廻向の功德によつて極樂に往生し、母に抱かれて朦朧の姿を現ず。

藤原民部少輔孝房　播州の總郡代賀古前令吏藤原敎孝の長男なり。大内修造の命を蒙つて京に滯在中、遊女宮城野の色香に溺れて御普請料を浪費し、世には熊野浦に溺死せりと佯つて海人の苫屋に潛匿す。宮城野が神崎の遊女に轉ぜるを尋ね行きて、計らずも我が子の眞光の行方を尋ぬる事となり、飛田の墓地を彷徨して弟の

蟬　丸　延喜帝の第四皇子なり。琵琶に妙を得。木幡の里にて右大辨早廣の兵に襲擊せられ、千手入道父子の忠勤によつて免る。蟬丸美男なりしかば、數多の女より戀慕され、うらみられもして盲目となり、逢坂山に棄てらる。ある日愛人直姬との情事を思ひ出して逢坂山の歌を詠じ、計らずも直姬及び人麿赤人の神靈に逢ふ。早廣平定の後、蟬丸の北の方を供養す。是に於て女の怨靈去つて、蟬丸の兩眼忽ち開く。

千手太郎忠光　浪人して木幡の里に住し、狩獵に日を送る。ある日深草山にて兎を射んとして、蟬丸の袖を射たるを謝して其の臣となり、蟬丸の敵右大辨早廣と轉戰して功あり。辻談義に身を俏して早廣を殺す。

直　姬　蟬丸と契りて子を生みて棄て、右大辨早廣の亂を避けて小幡の里千手入道の家に隱れ、早廣の襲擊に遭ひしも、千手入道父子の忠勤によつて免る。蟬丸盲目となりて逢坂山に棄てられたるを直姬尋ね行きて之と逢ふ。

芭　蕉　千手入道の女にして女院の水仕女なり。蟬丸に懸想し、蟬丸の愛人直姬を妬みて宇治の橋姬社に丑の時詣でをなし、三善清貫に見らる。後に父の家の門前にて清貫に斬らる。

右大辨早廣　蟬丸の室の兄なり。蟬丸を襲擊して千手入道を殺し、忠光と戰うて敗る。また逢坂山に蟬丸を襲ひしが、遂に忠光に斬り殺さる。

中納言希世　延喜帝の綸旨を奉じ、三善清貫と共に行いて蟬丸を逢坂に棄つ。

賀古教信七墓廻

横山三郎重次　小栗判官兼氏を惡んで之を縛す。兼氏怒つて縛繩を切る。是に於て重次驛馬鬼鹿毛をして兼氏を殺さしめんとして成らず、兼氏の館を訪うて之を毒殺す。後親兄を放逐し、藤澤寺に行きて蘇生したる兼氏を刺さんとして殺さる。

照手姫　横山郡司信久の娘なり。小栗判官兼氏と慇懃を通じ、兄三郎重次に殺されんとして鬼王に助けられて遁走し、美濃の宿萬屋長に買はれ、常陸小萩と名乘つて水仕女となる。或日藤澤上人の供養の車を挽きしが緣となりて兼氏と邂逅し、夫妻相伴うて藤澤寺に參詣す。

横山郡司信久　伊豆相模を領し、太郎次郎三郎照手更衣の三男二女あり。信久三郎の言を聽いて小栗判官兼氏を毒殺す。後三郎に放逐せられて前非を悔い、蘇生したる兼氏を藤澤寺に訪うて謝罪す。

山形兵衞　後藤左衞門國忠を殺さんとして小栗判官兼氏に妨げられ、兼氏を殺さんとして却つて殺さる。

蟬丸

喜藤太　博雅三位の僕なり。逢坂山にて蟬丸の敵右大辨早廣の軍と戰つて之を破る。

左衞門督三善清貫　蟬丸の愛姬直姬の行方を尋ねて宇治橋姬の森に至る。折しも蟬丸の北の方及び侍女芭蕉の前が直姬を妬みて、丑の時詣でして悋氣講をなせるを見、千手入道を訪うて芭蕉の前を殺し、蟬丸と直姬とに出會ひたるを喜べる際、右大辨早廣の兵に襲擊せられ、千手入道父子と協力して敵を破る。蟬丸盲目となるや、宣旨を奉じて之を逢坂山に棄て、墨染の衣を著て念佛修行者となり、博雅三位の宅を訪うて直姬に逢ふ。

鬼　次　横山郡司信久の家士なり、主君の娘更衣姫の入水を見て主君の無情を恨み、兄鬼王と共に薙髪して、藤澤上人の弟子となる。横山重次が小栗判官を藤澤寺に襲撃せし時、鬼次之と戰ふ。

鬼　王　横山郡司信久の家士なり。信久より其の娘照手姫を相模沖に沈むべき命を受け、竊かに姫をして逃れしめしが、照手姫の妹更衣姫の入水を見て主君の無情を恨み、弟鬼次とともに薙髪して藤澤上人の弟子となる。横山重次が小栗判官を藤澤寺に襲撃せし時、鬼王之と戰ふ。

小栗判官兼氏　流人となりて相模にあり。義心を以て後藤左衞門國忠の危急を救ひ、横山郡司信久の女照手姫と契りて、其の兄三郎重次と隙を生ず。國忠は兼氏の恩を感じ、妻を蟲賣に扮せしめ兼氏を手引して照手姫と契らしむ。重次等相謀り兼氏を駻馬鬼鹿毛に乘せて殺さんとして能はず、つひに兼氏及び其の家士池莊司を毒殺す。かくて後兼氏の靈上野が原の墓中より餓鬼となつて現はる。藤澤上人これを連れ歸つて熊野の藥湯に浴せしめ反魂の法を修す。また照手姫が信心の功德によつて、兼氏本復して本領安堵となり、照手姫と共に藤澤寺に參詣し、重次と戰つて之を殺す。

更衣姫　横山郡司信久の娘なり。姉照手姫の山雀を取逃したる爲、其の機嫌直しに小栗判官兼氏を姉に媒介す。後に兄重次が姉を入水せしめたるを悲しみ、遂に海に投じて死す。

後藤左衞門國忠　親の敵山形兵衞を討たんとして、反討に遭うて危き場を小栗兼氏に救はる。國忠其の恩返しに妻を蟲賣となし兼氏を手引して照手姫と契らしむ。横山三郎重次が兼氏を藤澤寺に襲撃せし時、國忠驅付けて重次と戰ふ。

二十八日の夜富士野の假屋に闖入して、亡父の仇工藤祐經を殺し、嘗て恩を受けたる龜菊の手にかゝらんとして、女裝せる五郎丸に生捕られて刑に就く。

虎御前　大磯の遊女にして曾成祐成と契る。曾我兄弟が亡父の仇工藤祐經を殺して刑に就きしを禪師坊に知らせんとして旅に出で、松江の里にて禪師坊召捕られたるを聞き、尼となつて祐成の菩提を弔ふ。

花　野　曾我兄弟の下人鬼王の妹なり。新田四郎忠常に猛虎の生爪を贈つて、大磯の遊女虎御前の懷胎を見遁すやう賴み込む。

海野小太郎行氏　源賴朝の臣なり。武藏坊辨慶の父辨眞と名乘る老入道を捕へ、其の賞として賴朝の名馬松島月毛を得んとして新田忠常に妨げらる。また大磯の遊女虎の懷胎を詮議して忠常に誑さる。また鬼王兄弟及び花野を捕へしも、曾我時致に誑されて皆免し、後に曾我二子の弟禪師坊を捕へて賴朝の前に引く。

朝比奈三郎義秀　新開荒四郎が、名馬松島月毛を牽きて新田忠常を訪ふ途に其の馬を奪ふ。忠常が賴朝に請ひ、高名に代へて禪師坊を助けたる時、義秀喜んで松島月毛を忠常に返す。

源賴朝　曾我兄弟の神靈を拜し、其の社殿に揭げたる三十六歌仙の繪に就いて物語る。

當流小栗判官

池莊司　小栗判官兼氏の家士なり。兼氏と共に相模の配所に暮し、後に横山三郎重次の爲に兼氏と共に毒殺せらる。行年十八。

百日曾我

亀菊　臺瀨川の遊女なり。富士裾野の狩場に招かれて、歸途曾我兄弟に逢うて狩場の樣子を語り、曾我兄弟をして工藤祐經を討たしむるやう便宜を圖る。

工藤一臈祐經　源頼朝の權臣なり。頼朝に從ひて富士裾野の狩に行き、建久四年五月二十八日の夜、曾我兄弟に其の寢所に斬り入られて殺さる。

曾我十郎祐成　新田忠常に逢うて嘗て虎御前が恩に預りたるを謝し、亡父の仇工藤祐經を殺したらば忠常の手にかゝりて死すべきを約し、建久四年五月二十八日の夜遂に祐經を殺して忠常に殺さる。

少將　假粧坂の遊女にして曾我時致と契る。時致が亡父の仇工藤祐經を討取らんとして富士裾野に赴きし後、枕邊に殘せる書置を見て其の跡を追ふ。時致刑に就きし後、尼となつて時致の菩提を弔ふ。

禪師坊　曾我二子の弟なり。曾我二子が亡父の仇を報じたる後、禪師坊は海野小太郎行氏に召捕られ、母悲歎に暮れしかば、即ち三部經を說きて之を悟し、忠常によつて死を救はる。

新田四郎忠常　虎御前の難を救ひ、富士野の狩に出でて大猪を刺し、曾我二子頼朝の狩屋に亂入の時祐成を斬り、その恩賞に代へて禪師坊の死を救ふ。

津藏入道　曾我兄弟の下人鬼王の父なり。海野小太郎行氏に捕へられ、伴つて熊野別當辨眞と稱す。

曾我五郎時致　傾城請狀を讀んで海野小太郎行氏を誑し、行氏より鬼王と花野とを取り戾す。建久四年五月

時平が日像の寺院を襲撃したる際、これと奮戰す。

大覺大僧正　近衞經忠公の子にして月光と云ふ。幼時兩親を失ひ繼母に疎まれ、嵯峨の大覺寺の僧となり、日像の德に感じて法華經の行者となる。或日鹽谷左京時平の爲に難に遭ひしも、法華經の功力によつて免れ、また日像と共に祈雨の修法をなして雨を降らし、叡感によつて大僧正の號を賜はる。

兒島三郎高則　備前の住人なり。嵯峨の奥に隱栖し、雨夜の前を保護し、日像の寺に參詣して、鹽谷時平と戰つて之を破り、尋いで高橋半平に欺かれて死せんとせしを、法華經の功力によつて難を免れ、日像等と佛法の問答をなし、妙法の不思議に感じて法華信者となる。

鹽谷左京時平　近衞家の養子となり、月光の師事せる寺院を襲擊して、兒島高則に敗られ、尋いで日像、月光等を播磨沖に沈めんとして成らず。また雨夜の前の己が意に從はざるを怒り、養母を弑して佛罰を受く。

日像上人　日蓮宗の高僧なり。月光を弟子となし、月光の臣平井兄弟をも佛道に歸依せしむ。嘗て時平に襲擊せられ、また半平に欺かれて死せんとせしを、妙法の功力によりて難を免れ、高則と佛法の問答をなして妙法の不思議を見せ、また敕命により月光と共に祈雨の修法をなす。

高橋半平　鹽谷時平の意を受け、日像、月光等を播磨沖に沈めんとして成らず、佛罰を受けて溺死す。

平井大炊介森廣　近衞家の家人にして一角の兄なり。主君月光公のことより日像の弟子となり、智覺と法名す。鹽谷時平が日像の寺院を襲擊したる際、防戰して敵を退く。

出世景清

阿古屋　京都淸水坂の遊女なり。景淸と契りていや石、いや若を生む。景淸に他に愛人あるを知つて嫉妬に燃え兄十藏をして景淸を訴人せしめしが、後に非を悔い、景淸の獄舍に來つて罪を謝し、二子を殺して自刃す。

惡七兵衞景淸　平家滅亡後、落人となつて賴朝を狙ひしが、己が爲に愛人小野姬が慘酷なる拷問に遭へるを聞き、乃ち出でて縛に就き、三條𣘺の刑場に引かれたる時、淸水觀音その身代りに立ち給ふ。賴朝景淸の罪を赦して、日向國宮崎莊に封ず。是に於て自ら不具者となり、觀音經を讀誦して世を終ふ。

伊庭十藏廣近　賴朝の恩賞に與らんとして、景淸を訴人せしが、遂に景淸に殺さる。

江間小四郎義時　五百餘騎を率ゐて、景淸を京の淸水寺に襲擊す。

小野姬　熱田大宮司の女にして、景淸の妻なり。梶原景季に捕へられて、景淸の行方を白狀せしめんとして、慘酷なる拷問にかけらる。

大覺大僧正御傳記

雨夜前　月光の異母妹なり。日像上人より法華經の功德を聽聞して尼となり、兒島高則の家に養はれしが、北野にて時平に捕へられ、將に殺されんとせしも、法華經の靈驗によつて免る。

平井一角　近衞家の忠臣にして大炊介森廣の弟なり。日像上人に諭されて其の弟子となり、正覺と法名す。

上演人物解説

目次

果物せりふなど、巣林子の詞藻は又なく美しい。

簡單なる解題を畢つて、最後に附記すべきは、本卷に添へたる『上演人物解説』、及び『註釋』は、樋口慶千代君の筆に成つたもので、其の他にも同君に負ふ所が少なからずある。猶巣林子の批評に就いては、下卷の解題に讓つてこゝにはこれを省く。

解題　終

語』にある瀧口横笛の情事を脚色したもので、曲中には『小鳥盡し』『横笛道行』などがある。然し此の横笛は大堰川に入水もせで、末は目出度、小松内大臣より歸參の奉書、本領安堵の朱印を頂戴して、夫婦兄弟親子の奇緣、忠孝の德、和歌の德、神の威德と、勸善懲惡の義を全うした目出たい作である。

嵯峨天皇甘露雨

正德四年十月十五日より竹本座上演。筑後掾歿後初めての上演で、此の節の太夫は竹本賴母、内匠理太夫、竹本政太夫、豐竹萬太夫、竹本文太夫などであつた。

弘法大師と行敏僧都と祈雨の術較べで、大師の行法あらたかに、一天俄にかき曇り、平等一味の甘露の雨が沛然と降つて來るのである。太海原の王子の逆心、行敏僧都の加擔、それに從ふ惡臣右馬尉仲成に配するに、仲成の壻で忠臣の橘判官勝藤、節婦の花世、其の兄仲經などを以てして、操向きの舞臺の變化が著しく當時の見物人を喜ばせた事であらう。黃牛を吊して油を取るくだりなど、殊に出色の場面であつたと思はれる。『四國遍路』の名所讀込や「山家なれども京近く振も會釋もよい女房の、肩に棒おく露がおく、在所はいづく、梅が畑とて香に匂ふ、物賣聲。」の

傾城吉岡染

正德二年十一月二日より竹本座上演。巢林子六十歳の作。

豪賊石川五右衛門の釜煎の刑と憲法染とに基き、憲法染の創作者を因州の武士香春憲法とし、其の情人を傾城吉岡として、其の間に於ける波瀾と、五右衛門の義俠とを描いたものである。

憲法（兼房と書くのが正しからう）は吉岡氏で、劍道をもつて名を得てゐたが、べつに染法を創め、これを憲法染、或は吉岡染と云つたとの事であるが、劍道家と此の染家と同一人であつたかは疑はしい。西鶴の『日本永代藏』に、「風俗も自ら都めきて、新在家衆の衣裳をうつし、油屋絹の諸職をけんぼう染の紋付。」とありて、寛永頃からあつた染で、黑茶染である。

歌舞伎では、延享二年春、大阪中村十藏座で、『昔形吉岡染』と題して上演し、其の後、安永五年には改作して、『けいせい布引山』と題して上演した。

娥歌加留多

正德四年八月一日より竹本座上演。巢林子六十二歳の作、竹本筑後掾最後の語り物。『平家物

『冴山路菊月』『母育雪間鶯』、淸元節には『月花茲友鳥』、長唄には『山姥四季英』『邯鄲園菊蝶』等がある。

長町女腹切

『外題年鑑』に元祿十三年正月上演とあるは誤りで、正德二年、巢林子六十歲の作と思はれる。元祿十一年十二月二十一日、大阪道修町刀屋の手代半七と、京都石垣町井筒屋の遊女お花との情死一件に、翌十二年にあつた長町の女腹切とを配合して脚色したものである。此の曲には例に依りて、お花半七道行の玲瓏たる名文が光彩陸離としてゐる。

寶曆十四年五月、近松半二、竹本三郞兵衞の合作で、お花半七心中一件を『京羽二重娘氣質』と題して、竹本座が上演してゐる。歌舞伎では、寬延元年、江戶森田座で『露時雨裳浪』、寶曆二年秋、江戶中村座で『お花半七笹結渡涉船』、同十一年五月、森田座で『お花半七道行尾形船』、安政六年七月、市村座で『出色緣萩紫』が演ぜられてゐる。豐後節には『雙紋刀の銘月』、富本節には『笹結渡涉船』、宮薗節に『京羽二重娘氣質、お花半七開帳場口舌の段』『掛行燈』などがある。

なし。」「我が國の三つの寶のあらん限りは、國富み民も豐かにて、敵するもののあるべきか。」と虚空に妙なる託宣ありて、寶劍は盛長の頭を貫き、三種の神器の威德を述べて、篇をむすんでゐる。尊王主義を闡明した淨瑠璃で、江戸時代の此の種のものとしては甚だ珍らしく、巣林子の識見の高きを見るに足りる。正閏を分たずして、「量仁親王に新帝の位を授け、後醍醐天皇は院の御所と仰ぎ、帝都は尊氏これをかため、吉野の都は義貞守護し奉れ。」との神勅は面白い。

嫗山姥

正德二年七月十五日より竹本座上演。時に巣林子六十歳。

謠曲の『山姥』を本とし、これに賴光と四天王との傳説を結びつけたもので、當時女形の名優として知られた荻野八重桐の舞臺風を其の中に取入れて、初めは其の役名を荻野屋八重桐と命名したが、後には山姥と名づけた。巣林子が操と歌舞伎とを調和せんとする工夫を偲ぶべきである。

此の作は後世歌舞伎に幾多の影響を與へてゐるが、山廻りの段は所作事として舞踊に取扱はれてゐる。一中節には『嫗山姥賴光道行』、常磐津節には『四天王大江山入』『雪振袖山姥』『有則戀重荷』『紅葉袖名殘錦繪』『親子連枝鶯』『極彩色山路曙』『新負雪間の市川』、富本節には

近松巣林子は此の好題目を美化して、『封印切』は永く歌舞伎の見せ所となつた。本曲下之巻は例の名文にて婉曲自在の妙を極め、「借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明し、二十日餘りに四十兩、遣ひ果して二分殘る。」の文句は後世の改作淨瑠璃にも其の儘轉用されて人口に膾炙してゐる。正德三年豐竹座にて再演の折、外題を『傾城三度笠』と改めた。

安永二年十二月、菅專助、若竹笛躬等が改作して、『けいせい戀飛脚』と題し、豐竹座にて上演した。之を添削して歌舞伎にて演出したのが、『戀飛脚大和往來』である。然し現在では近松の原作が其の儘に歌舞伎に脚色されて上演されてゐる。

一中節では『三度笠相合籠道行』、富本節では『道行戀飛脚』、宮薗節では『梅川』などがある。

吉野都女楠

正德元年九月十日より竹本座上演。巣林子五十九歲の作。

『太平記』に依りて、楠、新田、名和等忠臣の事蹟を脚色し、其の間に、大森彥七の惡逆、山田高家の忠節、勾當內侍、高家の妻の情愛を點綴し、後醍醐天皇の吉野潛幸、小楠公母子の守護警衞などありて、末段、新田、足利の和睦、兩皇統の合一にて、「天に二つの日なし、地に二人の王

同じく藤十郎の演じたものである。同三年、近松は操淨瑠璃に書き直して、『遊君三世相』と題した。又の名『夕霧三世相』とも云ふ。『夕霧阿波鳴渡』は、夕霧狂言の大成したものである。此の曲には『相の山』と云ふ美しい、大珠小珠、盤上を旋轉するやうな名文がある。

明和五年六月近松半二、竹田文吉等が改作して、『傾城阿波の鳴門』と題し、竹本座にて上演した。『夕霧篋の袂』『浪花文章夕霧塚』『夕ぎり伊左衛門廓文章』等、種々の夕霧狂言がある。富本節の淨璃瑠では、『春夜障子梅』『道行菜種裳』、宮薗節では、『ゆかりの月見』などがある。

忠兵衛 梅川 冥途の飛脚

正徳元年三月、竹本座にて上演。巣林子五十九歳の時である。

寶永七年十二月、大阪淡路町の飛脚屋龜屋忠兵衛が新町槌屋の遊女梅川にうつゝを抜かした結果、西國方より送り來りたる三百兩の封印金を流用して獄に投ぜられ、久しからずして牢死し、梅川は剃髪して尼となり其の菩提を弔うたと云ふ事實に依りて脚色したものである。此のいきさつは一たび翌寶永八年正月、京都都萬太夫座にて、『けいせい九品淨土』と題して、歌舞伎に上演されたことがある。

寶永七年の作、巣林子五十八歳の時である。同年六月十六日より竹本座にて上演。寶永七年六月一日の朝、曾根崎神明の森にて鍛冶屋平兵衛と北の新地平野屋の小勘とが情死を遂げたのを脚色したものである。

夕霧阿波鳴渡

寶永七年正月竹本座上演と傳へられてゐるが、正德二年の作と覺しい。

大阪新町扇屋四郎兵衛方の抱へ夕霧は名妓の名が高くあつたが、延寶六年正月六日、無常の風に誘はれて、名花一朝にして散り失せたので、浪華の市中では知るも知らぬも惜しまぬものがなかつた。同年二月三日、大阪荒木與次郎座にて、『夕霧名殘の正月』と云ふ追善劇の興行がありて坂田藤十郎が藤屋伊左衛門を勤め、夕霧は霧浪千壽と云ふ女方が勤めた。此の狂言大當り、藤十郎出世の初めで、彼が三十四歳の時である。同年六月、藤十郎は再びこれを演じ、更に十月と十二月これを重演し、其の一生の中に十八回上場したと云ふを見ても、此の狂言の大當りで、藤十郎の妙技であつた事を知るに足りる。『夕霧。』の脚本は近松の作であるかの樣に傳へてゐるが、事實はさうではあるまい。其の後貞享元年に『夕霧七年忌』の作があつて、近松の筆に成つてゐる。

に浮名は辰五郎。』とありて、大當りを取つた。其の他にも改作上演したものは數多い。宮薗節にては、『傾城黃金鷄』がある。

今宮心中　（二郎兵衛・おきさ）

寶永七年正月十二日から竹本座にて上演。巢林子五十八歲の時である。初めは『掛鯛心中』と題したのを、後に改題したのである。其の後、正德二年四月、紀海音が改作して、『今宮心中丸腰連理松』と題し、豐竹座にて上演したが、固より原作に及ばざること遠い。

寶永六年八月四日、大阪本町二丁目菱屋四郎左衛門の手代次郎兵衛が同家のお針おきさと今宮の戎の森で、日野絹一反松の木にかけて、縊首して情死を遂げたのを脚色したものである。其の相抱いて縊死を遂げた樣を美しく、正月の儀式に門松に掛けた雙對の干鯛に見立てたのである。

歌舞伎に上演されたものには、享保五年三月大阪角座にて、『この頃噂の今宮心中』と云ふのがある。

心中刃は氷の朔日

背笠紐』等がある。歌舞伎にては、いろ〳〵と改作して上演されてゐる。

淀鯉出世瀧德（よどごひしゆつせのたきのぼり）

『外題年鑑』に、元祿十三年四月上演とあるは誤りで、寶永六年の作であらう。大阪の豪商淀屋辰五郎の末路を脚色した者で、八幡の富豪江戸屋勝二郎と替名して、茨木屋吾妻に耽溺した擧句其の身受の金に困じ、惡手代の謀判に坐して闕所追放となつた顚末、其の間に處する忠僕新七夫婦の苦節を巧みに敍述した者である。淀屋家の闕所となつたのは寶永三年十一月の事で、其の闕所目錄中には、「有金八萬五千貫目、家屋敷大阪表一町四方の家十二箇所、八幡知行二百石、田地十町、淀に家五箇所、田地十二町、伏見に家三箇所、田地七町、京に家五箇所、大和に田地十二町、堺に家二軒、泉州に田地八町、河内に田地五町、阿波に田地四十八町、大名貸金壹億程。」抔ありて、其の他の家寶は無數であつた。辰五郎が奈良に逼迫して後、手代等八幡の田地頂戴を歎願せんが爲に江戸に下つた事實により淀川の名物鯉の瀧上りに擬して命題したと云ふ事である。

　歌舞伎にては、享保十七年春江戸中村座にて、『大竈商曾我』が上演され、河東節の淨瑠璃『神樂獅子』にて、「是で寶の山崎や、淀の渡りに名も高き、淀屋こあんが獨子に撞木島原新町の、色

清十郎五十年忌歌念佛

寶永六年正月二日より竹本座にて上演、巣林子五十七歳の時である。

寛文二年の頃、播州姫路の旅籠屋但馬屋の手代清十郎が主人の娘お夏と密通し、露顯して暇を出されたので、お夏と共に大阪に出奔しようとして捕へられ、主人の娘を誘拐した罪に依りて、同年五月清十郎は刑に處せられた。お夏は一時發狂したが其の後快復し、同國片上に茶店を出して七十餘歳まで生存したと云ふ事である。此のことは西澤一風の、『亂脛三本槍』に見えてゐる。「向ひ通るは清十郎ぢやないかいの、ヨイ／＼笠がよく似た菅の小笠が、さりとはえいやらえいそりや、サアえいやらえい、笠が似たとてな、清十郎であろわいの、ヨイ／＼お伊勢參りはの、清十郎か、さりとはえいやらえい。」とはお夏の狂亂をよんだ流行歌であつた。西鶴も、『五人女』に其の顚末を例の妙筆で敍述してゐる。『外題年鑑』に依ると、寶永二年十一月竹本座にて『清十郎笠物狂』を上演したとあるが明らかでない。此の篇の笠物狂の段は、凄艶比なしと稱すべき名文である。

一中節に『清十郎笠物狂ひ道行』、豐後節に『ひめぢ笠』、富本節に『道行比翼の蘭蝶』『清十郎家名所妹

云。」の唄である。關の小萬も巷說で名高かつた。延寶五年十一月、初代嵐三右衛門は京都四條北側の芝居にて『丹波與作』と題して演出してゐる。又元祿三年京都村山座にて富永平兵衛作の『丹波與作手綱帶』が演ぜられた。巣林子はこれ等を粉本として、この出色の名作を作り上げたのである。正德二年三月、再演の折には、『丹波與作』と改題し、更に享保十七年六月竹本座で演じた時は『伊達染手綱』と改題してゐる。其の後、寶曆元年二月、吉田冠子、三好松洛との合作で改修して竹本座で上演したものを『戀女房染分手綱』と題した。此の年秋、江戸中村座で、二代目中村七三郎が與作となりて、此の改作を歌舞伎で演じてゐる。

猶歌舞伎で書替へたものには、寛政五年四月大阪中座に於ける辰岡萬作作の『東海道戀關札』、寛政七年十一月、京都南側芝居に於ける奈河篤助作の『新改版道中雙六』、文化二年八月、江戸市村座に於ける竝木五瓶作の『小室節錦江戸入』等がある。

他の淨瑠璃への影響としては、一中節に『丹波與作ゆめぢのこま』、豐後節に『丹波與作道行』、宮薗節に『三吉うれひの段』等があり、長唄に『與作』がある。

危急を遁れたが、女人堂で果敢ない浮世を觀じて情死を遂げる。國許から尋ねて來た粂之助の姉が其の折女人堂にゐて、「お山の萬年草を水に浸して人の生死を占ふとわかるとの事で、今日も谷川の水につけると、半時許りで次第に枯れて凋んだ。」と、現在弟の粂之助とは知らず、其の物語をする條があるので、此の篇の名としたのである。此の情死は寶永五年三月十八日のことなりとも傳へられてゐる。

明和八年五月、豐竹和歌三座で、竹本三郎兵衛作の『お梅粂之助角額嫉蛇柳』と題して上演せられたのは、此の篇と蛇柳傳説とを取り合はせたものである。歌舞伎では、寛保元年二月江戸市村座にて初代佐野川市松が粂之助を勤めた事があり、寶暦四年四月同じく市村座で、『我衣手蓮曙』と題し、明和七年春中村座で、『鏡池俤曾我』の二番目にこれを仕組んで上演した。豐後節の淨瑠璃には、『高野萬年草』がある。

丹波與作待夜の小室節

寶永五年の作。『外題年鑑』に、寶永四年六月上演とあるは誤りであらう。丹波與作ははやくから俗謠にて知られてゐた。「與作丹波の馬追なれど、今はお江戸の刀差ぢや、しやんとさせ與作云

永三年八月板）を綴つてゐる。巣林子は此の醜き事件を巧みに美しく人情の機微に觸れて描き出したのである。

心中(あとおひ)　卯月の潤色(いろあけ)

寶永四年の上演。巣林子五十五歳のときである。『卯月艶』の後篇で、三卷のうち、上卷は『卯月艶』のをはりの方、「此の世からなる地獄かや、あはれ果敢なき有樣なり。」より以下を改作し、中下二卷を新作して、與兵衛（剃髮して助給）がお龜のあとを慕ひ、自害することを脚色したのである。「昨日の旦那今朝の幻、夢の浮橋一つ橋跨げぢや、合點ぢや跨げぢや合點ぢや、手にも取れぬ朧駕籠。」より文情到れり盡せる感がある。

高野山女人堂　心中萬年草

寶永五年四月十六日より竹本座にて上演。巣林子五十六歳の時である。

高野山吉祥院の寺小性成田粂之助と紙谷宿の雜賀屋お梅と契りを結んだが、粂之助は戒を破つたが爲に山を追はれ、お梅は他の人との結婚を強ひられたので、二人はお梅の母の計策に依りて

ると云ふ筋である。此の上演の歳月に就いては、『外題年鑑』の寶永四年說は誤つてゐるやうで、寶永三年夏と見るのが至當らしい。

堀河波鼓

寶永四年二月十五日から、竹本座上演。再演した時には、『堀江川波鼓』と改題して、多少の添削が施されてゐる。此の作の基づく事實は次の如きものである。

因州鳥取殿松平右衞門殿に、大藏彥八郞と申、臺所役人相勤罷在候處、去酉六月、主人參府に付、供仕り、江戶へ罷下り、當五月十五日鳥取へ下著仕候、留守之內女房たね、宮井傳右衞門と申者と密通仕候由、家中にて風聞仕、其上私妹くら並たね妹ふう兩人相知候に付早速吟味仕候へば、不義之段委細白狀仕候故、五月廿七日女房儀指殺、同廿九日組頭迄書置暇乞托仕罷上り、同四日京著仕候而、右之趣昨日御斷申上候、右傳右衞門下立賣通堀川東へ入角に住居仕候を見付、今朝五日過打留申候、私父子儀、去る六月より江戶に罷在先月中旬に歸國仕、外に親類ども無御座候故、留守之內右くらふう度々異見仕候へども、承引不仕候旨申候、私義傳右衞門を見知り不申候に付、兩人の女を召連罷上り申候。

此の女敵討は京都の出來事であつただけ、當時は盛んに取囃され、錦文流は『熊谷女編笠』(寶

寶永三年、巣林子五十四歳の作。其の年三月二十七日から竹本座にて上演せられた。前年（寶永二年）十一月十二日、『曾根崎心中』のお初を出した同じ北の新地天滿屋のお島と、長柄村の豪農の養子である市郞右衞門と、女は天滿屋の二階、男は長柄堤で、場所を換へて合意の情死を遂げたのを脚色したものである。然し當時は男が死んだとも、まだ生きてゐるとも巷說とりどりであつたから、生死二枚繪草紙と云ふ意味から二枚の名が冠せられてゐる。卽ち、「弟善次は川端に、捨てし衣裳と書置を、拾ひ驚き驅けつけて、見れば敢なく事切れたり。南無三寶と歎けども、詮なし甲斐なし面目なし、せめては兄の報恩と、恥も骸（からだ）も衣裳に包み、負うて一先づ立退きける。扨てこそ世上に此の男死んだ風說、死なぬ沙汰、しやうじ二枚の繪雙紙に、戀路の廻向を受けにける。」とあるが如くである。『知死後の道行』は、『誠の形、影の人』を描いて、作者苦心の處が偲ばれる。

緋縮緬卯月紅葉　與兵衞（おかめ）

寶永三年の作と思はれる。大阪北久太郞町道具商笠屋の一人娘お龜と養子長兵衞との夫婦仲は至つて睦ましかつたが、儘ならぬ浮世の風波の爲に梅田堤で情死を遂げ、女は絕命し、男は助か

傾城反魂香

寶永二年の作と云はれてゐるが、同五年のものらしい。繪畫史を取扱つたもので、狩野元信が土佐光信の聟となり、和漢の畫風を調和して、こゝに狩野派を現出し、繪所預となりし事蹟に本づき、これに吃の又平、不破名古屋等をあしらつたものである。岩佐又兵衛と大津繪の又平と稱するものとは、此の時代頃にも既に混じてゐたものと見える。此の一篇は變化に富み、結構巧妙で、出色の作である。

これを改作したものに、享保十七年五月七日から豐竹座で上演せられた『今様傾城反魂香』があり、吉田冠子、三好松洛の合作で、寶曆二年三月二十三日から竹本座で上演せられた『名筆傾城鑑』があるが、いづれも原作に及ばないこと遠い。

これを歌舞伎に演じたものも種々あるが、其のうち安永六年九月、江戸中村座に於ける『反魂香名殘錦繪』、享和元年九月同座の『けいせい反魂香』など當り作であつた。

心中二枚繪草紙

二上り　藤内次郎殿わいの、笛吹のや役で、紫竹漢竹のやつこのほこりをさ、さつ〳〵とも拂うての、とらいの〳〵笛人の物はとらいの、我物はやらいのと、合せ吹いたるは、さつても吹いた笛吹と、どつと褒めて通しただんじり打つて囃した、だんじり打つた見さいな、藤内三郎殿は小鼓の名人であらうの、胴に加賀革、くれなゐの調緒、ちん鳥がけにかけさせ、ちゝつち、ちゝつぽ〳〵、たつぽゝつたつた〳〵〳〵、合せ打つたるは、さつても打つた小鼓と、わつと褒めて通した、だんじり打つた見さいな、藤内四郎殿わいの、大鼓の役でしつたんに、しつたん〳〵〳〵しつたん作る御百姓、明年は八反ぢや、さ明年は十六たん〳〵、丹波の國のお百姓とあはせ打つたるは白癩(びやくらい)上の町下の町、どつと褒めて通した、藤内五郎殿わいな、太鼓打の役で、大まいの太鼓を、あそこもとに置かせて、金の撥を手に持ち、つく〳〵〳〵つてん〳〵てれつくには、づんでんどん、てれつく〳〵つゝてん〳〵、とんからつとんとうつぼれた、なるかならぬか戀の中の町、中の〳〵の中の町を通りたうはなけれど、生蛸(なまだこ)つかんだ天窗を見たか、熊野小比丘にんが、ちとくわん〳〵〳〵、くわんとも鳴るは夜明の鐘は、つん〳〵つらいか、づんでんとうから、櫓太鼓の音に寄り來る。

本篇の趣向は赤松滿祐が將軍義敎を己が邸に招き、能樂『鵜羽』を上覽に入れて、遂にこれを殺した史實に據り、管領斯波氏の家臣藤内兄弟五人が各其の得意の技藝を見せての働きは甚だ賑やかなものである。

雪女五枚羽子板

寳永二年の刊行。但し其の上演を七月十四日よりとするに就ては異說がある。目先の變化多い操向きの作で、古來『國性爺合戰』『曾我會稽山』と合はせて、近松の時代物三傑作と云はれてゐる。上中下三卷で、其の冒頭はいづれも名優嵐三右衛門の、『藤内太郎だんじり出端』の文句を以て始めてゐるが、其の舞臺姿を人形ぶりで見せようとする所が、其の身上である。『藤内太郎だんじり』は嵐家の六法で、初代三右衛門の工夫になつてゐる。從來行はれた六法に新しい試みをしたもので、「羽織に色ある袴を著し、股立高く取りなし、袴の腰は、羽織の馬乘を括り、袴の腰紋は金の燒付、大小も生の金拵へ、本身の容らぬばかり、六法のうち皆所作事に仕立て、出端も神樂つしま、三味線も手替りを彈きかけ、鳴物に出づれば。」(『棠大門屋敷』)と云ふ出で立ちと、演じ方とであつた。初代は寛永十二年から元祿三年まで、二代は寛文元年より元祿十四年まで、三代は元祿十年から寳曆四年まで在世した人で、家の藝として此の六法を演じてゐた。此のだんじり出端の本歌は『松の落葉』卷三に出てゐるから、こゝに抄出する。

藤内だんじり出端

林子はおまん源五兵衛に配するに、小萬三五兵衛を以てして敵討の趣向を一寸織り込んでゐる。後に薩摩の侍早田八右衛門が大阪北の新地櫻風呂の菊野殺しの一件を附會して、別殊の源五兵衛が出來上つた事は、『脚本集』の『五大力戀緘』の解題に說いて置いた。宮薗節にては、『二世の縷絲』がある。

此の曲中には、『諸國槍じるし』と、『源五兵衛おまん夢分船』とがあつて、作者の詞藻が美しく輝いてゐる。

心中重井筒

寶永元年の作と云はれてゐるが、同四年の作らしい。すると作者が五十五歲の折の作である。大阪六軒町重井筒屋の抱へお房と、上町紺屋德兵衛と、高津大佛の勸進所で相對死をした事件を美化したものであるが、此の事實は寶永元年三月二十九日のことと云ひ、又十二月十五日の事とも云はれて確かでない。

此の作は歌舞伎となり、享保五年四月、お房德兵衛の十七回忌に江戸三座にてこれを演出し、其の後又種々に書き替へて、興行されてゐる。常磐津節にては、『夢結塒野蝶』がある。

年九月、江戸市村座では、『露時雨曾根崎心中』などを初めとして、數多くある。豐後節にては、『曾根崎追善』がある。

節も單純で、短篇ではあるが、其の文章の精彩あり、婉曲自在、淸艷玉を轉ずるが如くあるので殊に有名である。其の道行に至りては、荻生徂徠が案を拍つて絶賞したと云はれる程名高い。

此の心中は四月二十三日のことなりとも云ひ、又四月七日の出來事なりとも云はれてゐるが、後說がよささうである。曾根崎天神は此のためにお初天神と呼ばれることになつた。

源五兵衞おまん　薩摩歌

寶永元年正月十五日より竹本座にて上演。巣林子五十二歲の時である。其の題名に薩摩歌と云つた如く、「源五兵衞どこへ行く云々。」の流行唄から著想したもので、源五兵衞おまんの心中はいつの頃か確かでないが、西澤一風の『傳奇作書』に寬文三年とあり、此の曲のはじめにも、「流行小唄も時につれ、時の昔とどこへ行く、寬文年の頃かとよ。」とあれば、寬文年間のことと見える。西鶴の『好色五人女』にも、『世にはやり歌源五兵衞』と云ひ、「源五兵衞どこへ行く、さつまの山へ云々。」の歌を載せてゐるから、此の「源五兵衞どこへ行く」の唄は流行したものであつたのだ。巣

以て突如としての出現と見なすべきものではない。此の年五月、竹本座にて上演。享保二年、同座にて再演の時は増補し、享保十八年二月、豐竹座にて三度目の上演には、『お初天神記』と改題した。

大阪の本町醬油屋平野屋忠右衞門の手代德兵衞が、北の新地天滿屋のお初に馴染んで、深く契つてゐたので、主人の妻の姪と結婚するを厭ひ、惡友油屋九平次に金子を欺き取られて、遂に曾根崎の森で心中した其の際物を取扱つたものである。作曲は近松巢林子、語手は竹本筑後掾、お初の人形は人形使ひの名人辰松八郎兵衞が遣つて、人形に珍らしい世話物であつたから、滿市の好評を博したのは云ふまでもない。

これの改作を試みこれが飜案を企てた淨瑠璃は、其の後に少なくない。『德兵衞(おはつ)曾根崎模樣』(若竹笛躬、淺田一鳥等作、寶曆十一年五月豐竹座上演)だの、『きのふのお初けふの德兵衞よみ賣三巴』(近松半二等作。明和五年七月竹本座上演)だの、『往古(むかし)曾根崎噂』(近松半二等作。安永七年九月、竹本染太夫座上演)だの、いろ〳〵あり、又歌舞伎にも作りなされて、享保四年四月には、江戸中村座で、二代目團十郎が德兵衞の役を勤め、寶曆十年八月には、大阪中山文七座で、『女夫星浮名天神』と云ふ題で上演せられ、寛政九年九月、江戸河原崎座では、『とく樣參お初天神』、天保七

と呼びつ。而るに今夜既に死しぬ、嫗年老いて年來の夫に今別れて泣き悲しむなり、亦この侍る童は教信が子なりと、勝鑒これを聞いて返り至りて勝如上人に此の事を委しく語る。勝如上人これを聞いて涙を流し悲しび貴んで、忽ちに教信が所に行きて泣く／＼念佛を唱へてぞ本の庵に返りにける。其の後勝如愈心を至して日夜に念佛を唱へて怠る事なし。而る間彼の教信が告げし年の月日に至りて終に終り貴くて失せにけり。（此の前に教信の靈が勝尾寺の門を叩いて上人に其の死期を告げ知らせた事がある。）これを聞く人皆必ず極樂に往生せる人なりと知りて貴びけり。彼の教信妻子を具したりといへども、年來念佛を唱へて往生するなり。然れば往生は偏に念佛の力なりとなむ、語り傳へたるとや。」とある。此の念佛往生の古人の名を假りて、奇々怪々の趣向を立て、操らしい場面の變化を構へ、上方の風習なる盂蘭盆會にて墓廻りをすると云ふ、極めて抹香臭い作品をこしらへたのである。

曾根崎心中

元祿十六年、巣林子五十一歲の作。世話物の初作とされてゐるが、延寶六年、『助六心中蟬のぬけがら』は世話物であるし、時代物の中にも世話に碎けた所がすくなからねば、必ずしもこれを

元祿十四年、巢林子が四十九歲の作。竹本義太夫が筑後掾藤原博敎を受領した時の祝ひに作り與へたものであることは前に述べた如くである。蟬丸を環りての四角關係で、情人直姬や、乳人淸貫、芭蕉の前の兄千手太郎の忠節を點綴し、北の方、情人芭蕉の前の嫉妬の炎で失明した蟬丸の眼が佛力の爲に開くに至る始末を敍述したものである。道行の文章は、まことに典雅淸麗を極めてゐる。西澤一風、竝木千柳の『女蟬丸』（享保九年十一月豐竹座上演）は摸倣したばかりか、本曲に比して、遙かに劣つてゐる。

賀古教信七墓廻

元祿十五年の作。賀古教信のことは、古くは、『今昔物語』卷十五の「播磨國賀古驛教信往生語」に見えてゐる。「彼の驛（賀古驛）の北の方に小さき庵あり、其の庵の前に一の死人あり、狗烏集りて其の身を競ひ噉ふ、庵内に一人の嫗、一人の童あり、共に泣き悲しむ事限なし。勝鑒（勝尾寺勝如上人の弟子）これを見て庵の口に立寄りて、こは如何なる人のいかなる事ありて泣くぞと問ふに、嫗答へて云はく、彼の死人はこれ我が年來の夫なり、名をば沙彌教信と云ふ、一生の間、彌陀の念佛を唱へて、晝夜寤寐に怠る事なかりつ、然れば鄰り里の人皆教信を名づけて阿彌陀丸

『團扇曾我』の作られた年代はあきらかでないが、元祿十年、巣林子が四十五歳の時これを添削して『百日曾我』と改題したのである。もとは宇治加賀掾の爲に作つたものであるが、大入りにて百日餘も上演したので、此の名に改めたと云ふことである。勸進帳に擬へた、五郎時致が高らかに讀み上げる傾城請狀なるものは、當時特に囃されて有名なものであつた。『傾城請狀』(元祿十四年七月、正本屋九兵衞板、三卷物)の各卷々のはじめには、京の卷に、「團扇曾我けいせい請狀、宇治嘉太夫正本」、大阪の卷に、「百日曾我けいせい請狀、竹本義太夫正本」、江戸の卷に、「關東曾我けいせい請狀、林和宗太夫正本」とあるほどに此の作は評判であつた。

當流小栗判官

元祿十一年二月、竹本座上演の作。小栗判官の事は鎌倉大草紙に見えてより、種々の傳説がありて、古淨瑠璃にも取扱つたものであらう。猶小栗判官を題材とした歌舞伎も此の後にあり、稗史にもこれを取扱つたものが少なくない。

蟬丸

形光琳も、洒脫の畫を以て世態風俗を畫いた英一蝶も、皆法華信者であつて、それ〴〵に淸新の氣を藝術界に鼓吹してるのは、流石に宗敎界の偉人日蓮上人の感化を受けてると云はねばならない。元祿四年十一月十三日、京都の妙顯寺にて日像上人三百五十囘忌の大法會があつたので、これを機として、此の年に此の作が新作せられたのであらう。大覺大僧正（前攝政近衞經忠の子月光君）と其の妹雨夜の前の艱苦を經とし、其の師日像上人の德法を緯として大僧正の傳記を作り上げたのである。『本化別頭佛祖統記』の日像上人傳を按ずるに、「正和二年癸丑の春、師（日像）北野の傍にして說法すること七日、西山大覺寺主、洛に入るの次で、路法筵に臨み、欣然として聽受し、密乘を棄てて、吾が宗（日蓮宗）に歸す。」「滅後大僧正大覺以聞して敕賜菩薩號を拜す。」などとありて、其の關係は甚だ密接であつた。此の日像上人は三たび京より放逐せられ、折伏の結果として、屢々迫害を受けた。巢林子はこれ等の事實に依りて西海の波濤に漂ひながら、奇特の助けを得たことを結構してゐる。雨夜の前が龍女となりて日像上人の祈雨を助けたのは、高祖日蓮上人の女人成佛の敎理が自づとそこに現はれてゐる。

百日曾我

國の一所もあらばこそ、平家一味の者とては、夫の景清許りなり、包むとするも、此の事遂には漏れて討たれうず、景清討たれて、其の後に不慮に思ひをせんよりも、九年連れたる情には、二人の若のあるなれば此の事敵に知らせつゝ、景清を討取らせ、二人の若を世に立てて、あとの榮華に誇らんと思ひすましたあこわうが心の中ぞ恐ろしき。』(舞の本『景清』)とある自我に囚はれたあこわうを、巣林子は女の嫉妬とかへ、景清が二人の子を刺殺すのを、阿古屋が先非を悔いて我と我が子を刺殺して自刃する事に替へた處に、自然の人情味が横溢してゐる。末段五段目の八島軍物語は、謠曲『景清』から出てゐる、三段目に小野姫を梶原が水責火責で拷問するところは、後の『壇浦兜軍記』に於ける阿古屋琴責と變化したのである。猶古淨瑠璃『かげきよ』も此の作に影響してゐると云ふことである。

大覺大僧正御傳記

法華經の功徳の有難きを本として、其の間に家庭の風波、義理人情のいきさつを織り成してゐる。巣林子は日蓮宗徒だけに、妙法の廣大無邊の徳を說いたものだ。幕府の御用繪師の狩野氏と云ひ、裝飾畫、蒔繪、陶器、書法に新機軸を出して藝術界に革命の波を揚げた本阿彌光悅も、尾

我が生涯は五十兩づゝにて足りぬ、死後に及びて、其のまし金を倅（倅は醫師にて馬鹿なり、名不知）へ合力して給はるべしと云ひける故約束の如く、歿して後、竹本座より倅へ一年五十兩づゝ送りしは、又巣林子の餘澤なりと、吉田鬼眼語りき。」と萬象亭の『反故籠』に見えてゐるが、これも果して事實であらうかどうか。これを要するに斯の大天才の一生は混沌として今も猶不明であるが、今後果して其の雲霧を開き得る時代が來るであらうか。恐らくは永久の謎ではあるまいか。

出世景清

貞享二年、巣林子三十四歳の作で、前にも述べた通り、竹本義太夫の爲に、新作したものである。同年二月より竹本座にて上演した。初段、東大寺大佛供養のをり、景清が源賴朝を刺さんとしたところは、謠曲『大佛供養』に據り、四段目、景清の愛妾阿古屋が景清を訴人するくだりは、幸若舞の『景清』を粉本に取つてゐる。「かかりけるところに淸水坂のかたはらに、あこわうと申す女、北野詣でをしけるが、京白川の辻々に立てたる札を讀んで見るに、九年つれたる我が夫の惡七兵衞景淸を討たんと書いてたててあり。あこわう餘りの物憂さに此の札を盜み取り、加茂川桂川へも流さばやと思ひしが中にて心を引返し、待て暫し我が日本六十六箇國に平家の知行とて、

年には『本朝三國志』『平家女護島』『傾城島原蛙合戰』、同五年には『井筒業平河内通』『雙生隅田川』『日本武尊吾妻鑑』『心中天網島』、同六年には『津國女夫池』『女殺油地獄』『信州川中島合戰』同七年には『唐船噺今國性爺』『心中宵庚申』を新作した。彼の傑作の大部分は此の頃に述作されてゐる。

然し寄る年波には敵し難く、享保九年、『關八州繋馬』を其の絶筆として、其の歳十一月二十二日(法妙寺の墓石には二十一日とあるが、廣濟寺の墓石にあるを正しとすべきであらう)、七十二歳を以て其の一生を終つた。其の歿したのは或は大阪寺島の船問屋尼崎屋吉右衞門方なりと云ひ又は大阪南堀江鑄物師山城屋宗左衞門方なりと云ひ、一説には、廣濟寺なりと云つて、定まらない。其の墓として傳ふるものは、(一)肥前唐津の近松寺にあるもの、其の墓碑には、「遺言を以て當寺の墓地に歸葬す。」とあり、(二)大阪東區谷町八丁目本覺山法妙寺にあるもの、(三)兵庫縣川邊郡小田村字久々知の廣濟寺にあるもの、以上三箇處にある。其のうち最も信用すべきものは、廣濟寺のものらしい。其の妻は山城屋宗左衞門の娘であつたと云ふ說もあるが、これも明かでない。其の子には多門、由泉、女子等があつたと云はれてゐるが、共に詳かでない。「西の座(竹本座を云ふ)より一年の給金五十兩なり。增して百兩にせん事をいひければ、(巢林子)辭して曰く、

負せ、若竹政太夫と號し、始めて豐竹座を二年勤めらるゝ内、ふしはかせに心をつけて、工夫せられ、段々と淨瑠璃に實り、三年目に竹本座へ住んで立物となり、筑後掾の跡替りを勤めらるゝは、かねて心がけの深き故と衆人の稱美淺からず。」と稱し、猶此の人の藝風を評して「竹本政太夫は歌仙第三文屋康秀の歌の意に同じ、淨瑠璃は巧者にして其の體俗に近し、譬へば商人の能き衣著たるが如し。」と云つてゐるが、一體に、小音で、節廻しが細かであつたらしい。筑後掾の跡を襲いだ時には、まだ二十四歳の若年者であつた爲に、世間の氣受けもよろしからず、先輩大和太夫等の憤然として退座するありて、さしも由緒ある竹本座も一時危急に瀕したが、巢林子は斯道の爲に、將た故友の爲に、此の年少聲樂家を助けて、正徳五年には、『大經師昔暦』『持統天皇歌軍法』『生玉心中』『國性爺合戰』を新作してこれに與へた。中にも、『國性爺合戰』は作意の妙と舞臺裝置の奇と相待ちて、未曾有の好評を博し、其の興行十七箇月の久しきに渉り、空前の大入り大當りを取つた。こゝに於て政太夫の聲名は頓に擧り、一たび退轉したる大和太夫等も復歸して、竹本座の基礎はまた動かずなつた。

享保二年には『國性爺後日合戰』『槍權三重帷子』『聖徳太子繪傳記』、同三年には『山崎與次兵衞壽門松』『日本振袖始』『曾我會稽山』『傾城酒呑童子』(『酒呑童子枕言葉』の改作)、『博多小女郎波枕』、同四

殿鵜羽産家』『嫗山姥』『長町女腹切』『傾城吉岡染』、同三年には『天神記』『燦靜胎内捃』『同四年には、『相模入道千疋犬』『娥歌加留多』『嵯峨天皇甘露雨』が作られた。此の年九月十日、筑後掾は六十四歳を一期として、身まかつたのである。『娥歌加留多』は其の最後の語物であつた。巣林子は其の多年の同心異體を失つて、嘸かし痛嘆したことであらう。

これより先、寶永六年十一月一日、坂田藤十郎は六十五歳を以て歿した。巣林子の狂言本は此の頃から跡を絶つて、其の後は淨瑠璃のみを創作してゐる。狂言本の重なるものには、前に擧げたものの外に、『一心二河白道』（元祿十一年）『阿彌陀池新寺町』（元祿十二年）『傾城富士見里』（元祿十四年）『辛崎八景屛風』（元祿十五年）『傾城三の車』（元祿十六年）『吉祥天女安產玉』（寶永元年）『傾城金龍橋』（寶永五年）『御曹司初寅詣』（寶永六年）等がある。

筑後掾の歿後には、其の門人に陸奥茂太夫、竹本大和太夫、竹本幾世太夫、竹本萬太夫、竹本賴母、内匠理太夫、竹本浪花、竹本文太夫、多川源太夫等幾多の語り手があつたが、筑後掾の遺言に從ひて、竹本政太夫が其の跡を承ける事になつた。政太夫は其の後二代目竹本義太夫となり又受領して播磨掾藤原喜敎と稱した。『竹豐故事』に此の人のことを敍して、「大阪の出產、中紅屋長四郎とて、いまだ前髪立の比より淨瑠璃を好み、竹本豐竹の流義に執心厚く、まんまと藝に仕

所に思ひよらぬ引込思案、二三年勤めて給はらば、拙者座元仕り、萬事の世話を引受け、貴殿内證入用銀御用次第つゞけ、不自由させまじと、同行衆を以て賴みしかば、下地は好きなり御意は面白し、いか樣ともの詞をきはめ、杯すんで、其の暮、顏見世淨瑠璃といふを初め『用明天皇職人鑑』作者近松門左衛門をかゝへ、太夫竹本筑後掾、座元竹田出雲と看板竝べ、三段目かね入の出語り、涙川戀の氷に閉されて、身を切りくだくおもひより、浮川竹のながれの身、辰松八郞兵衛(人形遣ひの名人)出づかひ身ぶりよく、見物の氣を取つてのかね入藏入。」とある。此の年には『雪女五枚羽子板』『傾城反魂香』(寶永五年の作と云ふ說がよからう)、同三年には、『源義經將碁經』『本領曾我』『心中二枚繪草紙』『兼好法師物見車』『碁盤太平記』『卯月の枪』『曾我扇八景』『加增曾我』(此の年の作であらう)等、多くの作品を出してゐる。同四年には、『吉野忠信』『堀川波鼓』『今川了俊』(此の年舊作を再演す)、『卯月の潤色』『酒呑童子枕言葉』をいだし、同五年には、『心中萬年草』『丹波與作待夜の小室節』、同六年には、『五十年忌歌念佛』『艷狩劒本地』『淀鯉出世瀧德』、同七年には、『曾我虎が磨』『今宮の心中』(『掛鯛心中』の改題)『大原問答青葉笛』(『念佛往生記』の改作)『百合若大臣野守鏡』『心中刃は氷の朔日』『孕常磐』『源氏冷泉節』『夕霧阿波鳴渡』、正德元年には『冥途の飛脚』『吉野都女楠』『大職冠』、正德二年には、『傾城懸物揃』『弘徽

を加へて敬意を拂つてゐる。斯くの如く淨瑠璃作者としても、將た狂言作者としても、他に比肩するものなく、元祿時代の斯壇を獨占してゐたのであつた。然も操に歌舞伎の結構を輸入し、歌舞伎に操の趣向を加味し、兩者をして倶に向上せしめたのは、巣林子絕大の力の致す所で、又彼の天才の然らしめた所以である。筑後掾と藤十郎との天才は又巣林子をして思ふやうに其の筆力と著想とを自由に發揮せしめ、巣林子の天才は、筑後掾と藤十郎とをして縱横に其の技巧を發揚せしめたのである。

『曾根崎心中』の新作せられたる元祿十六年には、『最明寺殿百人上臈』の刊行あり、寶永元年には『薩摩歌』の作あり、『心中重井筒』は、『外題年鑑』に依ると、此の年の事としてあるが、多分は寶永四年の作であらう。同二年には竹田出雲掾が筑後掾に代りて、竹本座の座元となつた。巣林子は『用明天皇職人鑑』を作り、「時にあふみや世に出雲。」の文句をさしはさんで、其の前程の洋々たるを祝した。『今昔操年代記』に、前に抄記せる『曾根崎心中』にて、竹本座が福々となつた其の後を承けて、「此の上に望もなしと、後生心になり、奇妙無量壽如來に身を任せ、芝居も是切に安樂國土きはめんと、明幕御堂に參り、あさじ日中お八つをかかさず、一心不亂に正信偈、御和讃の節猶殊勝に聞えぬ、折ふし竹田氏(出雲掾)參會し、未だ老木と云ふにあらず、今町中賞美する

根崎心中』を稿した。これ彼が心中物の初物である。如何に其の大當りで市民の大喝采を博したかは、竹本座が負債を償還して、富裕となつたと云ふにても知られる。『今昔操年代記』に、前の抄記についで、「藝者の譽四方に輝くといへども、ほつこりした藏入なく、三八の十八にて合はぬ算盤、胸算用合うて合はぬは世間並、次の替りの談合、一杯庄兵のばゝさまさしあひ、刺身は鱧にこせう、當り淨瑠璃何をかするめといふ所へ、やれ曾根崎の天神が、見事な心中、有馬藥師、藥がまはつた、是れを一段淨瑠璃にあしらへ、曾根崎心中と外題を出しければ、町中悦び、入るほどにけるほどに、木戸も芝居もえいたう／＼こしらへに物は入らず、世話事の初と云ひ、淨瑠璃は面白し、少しの間に餘程の金を儲け、諸方のとゞけも笑ひ顔見てすましぬ。」とあるほどの大入りを占めたのである。

一方に名聲樂家竹本筑後掾を助けて、幾多の金玉の什篇を提供した近松巣林子は、又他方に名優坂田藤十郎と提携して、之が爲に狂言脚本を創作した。元祿九年の『傾城阿波鳴渡』、元祿十二年の『傾城佛の原』、元祿十五年の『傾城壬生念佛』の如きは、其の一例である。又元祿三年には、名優水木辰之助の爲に『水木辰之助餞(たち)振舞』を作つた。元祿十二年の評判記『役者姿記評判』には巣林子を賛して、「花に醉へり其の近松の門の海老。」と云ひ、『耳塵集』には、彼だけに特に氏の字

作し、若しくは上演してゐる。

元祿十四年、義太夫は受領して筑後掾藤原博敎となつた。近松は其の名弘めの爲に音曲家の祖神と仰ぎまつる『蟬丸』を創作して、これを祝した。『今昔操年代記』に、「剩へ筑後掾藤原博敎と、受領まで申し請け、西國おもて、山路ふみわけ木こる杣人、海邊に迷ふ海士の子も、御痛はしや蟬丸といへば、又常闇の雲晴れて、日月かゝり輝けりと、吉野忠信のさいもん、何所からどこまでいかぬものなく、筑後掾の威勢、夜まし日增の繁榮。」と云つてゐるほどに、筑後掾はもてはやされたが、其の近松に負ふ所の多大であつたことは云ふまでもない。猶此の歲には、『天鼓』『大掛物十幅一對』(『賴義北國落』の改作)『曾我五人兄弟』の作があり、同十五年には、『大磯虎稚物語』『賀古敎信七墓廻』の著があつた。

翌十六年には、生後久しく住み馴れたる京都を去りて、大阪に移る事となつた。筑後掾や其の他環境の人達が彼を慫慂した結果であらう。當年取つて五十一歲、押しも押されぬ淨瑠璃作者、狂言作者の巨擘であつたから、萬人の尊重を受けて、大阪の新居に身を置くことになつたのである。時候は恰度春逝いて、初夏の風がそよ〳〵と淀川の上を渡る四月であつた。偶曾根崎天神の境内でおはつ德兵衛なるものの心中があつたから、近松は取り敢へず際物の新事實を捉へて、『曾

し、やかましく候、是れも鯛青鷺二色にお申付け、煮さまし眞竹一種しやれてよく候、割海老青豆のあへ物、吸物鱸雲わた引、肴小鯵の隨煮、たいらげの田樂、又吸物燕巣にきんかん麩、いづれも味噌汁の吸物無用に候、酒三獻で膳はお取なされ、後段に寒曝のひやし餅、又吸物きすごの細作り、酒一つ飲まれて後、早鮨、蓼はたべられず候、山椒はじかみ置きあはせてお出し、その跡に日野眞桑瓜に砂糖かけ出し、御茶は菓子なしに一ぷくづゝたて切りになさるべし。とても御馳走にちひさき御座舟に湯殿をしかけ、暮方に行水いたされ候やうに御用意、これまでにて夜の仕立一色も御無用に候、はや太夫元へ十九日の事、旦那申し遣はされ候、日くれがたよりあがり申候。」とあるほどに、町人は食道樂となつてゐたのである。町人本位の歌舞伎や操の盛んになつたことは云ふまでもなく、義太夫節の流行したのも當然である。

元祿元年には『本朝用文章』、同二年には、『天智天皇』『津戸三郎』(『門出八島』の改作)、同三年には『十二段』、同四年には『大覺大僧正御傳記』、同五年には『日本西王母』(『南大門秋彼岸』の改題)、同六年には『佛母摩耶山開帳』、同七年には『松風村雨束帶鑑』、同八年には『釋迦如來誕生會』『鎌田兵衛名所盃』、同十年には『頼朝伊豆日記』『百日曾我』(『團扇曾我』の改作)、同十一年には『當流小栗判官』、同十二年には『源氏烏帽子折』(舊作の再演)、同十三年には、『浦島年代記』を創

した。實に貞享三年二月の事で、近松は三十四歳、義太夫は三十六歳であつた。これよりして此の二天才は互に結託して關西の淨瑠璃界を風靡したのである。『今昔操年代記』に、「是れより義太夫節とて持囃しぬ。其の上に近松門左衞門つゞいて新作をこしらへ、追て面白き趣向に、かはり文句はたらき、義太夫の語り盛り、日々夜々音聲に實りふし詞に花を咲かせば、聞く人見る人此の太夫ならではと持囃しぬ。」とあるが如く、義太夫は近松を得て雲蒸龍變するの勢ひとなつた。

貞享五年は元祿と改元して、世は泥々として太平の春を樂しんだ。西鶴の『世間胸算用』(元祿五年板)に「殊に近年はいづ方も女房ぬし奢りて、衣類に事もかかぬ身の、其の時の浮世模樣の正月小袖をたゝみ、羽二重半疋四十五匁の地絹よりは、千種の細染百色がはりの染賃は高く、金子一兩宛出して、是れさのみ人の目立たぬ事に、あたら金銀を捨てける。帶とても古渡の本繻子、一幅に一丈二尺、一筋につき銀二枚が物を腰に纏ひ、小判二兩のさし櫛、今の直段の米にしては本俵三石、天窗に戴き、湯具も本紅の二枚襲ね、白ぬめの足袋はくなど、昔は大名の御前方にもあそばさぬ事、思へば町人の女房の分として、冥加恐しき事ぞかし。」とある程に、町人の女房が衣服に、憂き身を窶した時代であつた。『萬の文反古』(元祿九年板)に、「旦那も此の程は病後故、美食好み申されず候、無用と存じ候分に點かけ申候、大汁の集め雜喉一段竹輪皮鰒おのけあるべ

が、いつしか此の兩者の間は水火相容れざるものとなつた。竹庄は當時の淨瑠璃界を物色して、理太夫に著目し、こゝに二人者の提携となり、一まづ京都を離れて西國に下つた。洛の天地に雄視した嘉太夫は受領して加賀掾宇治好澄となりて、其の勢ひは斯壇の霸者たるを以て任じ、「名人は播磨、上手は嘉太夫。」と稱せられた。斯くて理太夫の五郎兵衞は數年の練磨を經、竹庄と共に西國より大阪に歸り、名を竹本義太夫と改め、貞享二年、竹本座に於て勇ましく旗揚した。淨瑠璃は嘉太夫が語りて好評を博したる近松の作『世繼曾我』を出し、續いて『藍染川』、『以呂波物語』を出したが、いづれも滿都の好評を博し、其の年の暮は泉州堺にて興行し、いよ〳〵評判好く、播磨以來の名人との賞讃を得た。『今昔操年代記』に、「是れ義太夫大音にて萬揃ひたる上に、理兵衞嘉太夫を呑込み、面白き節をつけて語らるゝは、鬼にかなさい棒。」と云つてゐる。

翌年早春宇治加賀掾は、これに挑戰せんがために大阪に下り、井原西鶴の作なる『曆』を語つたが、義太夫はこれに對して近松の『賢女手習並新曆』を出して應戰した。義太夫の聲譽は加賀掾を壓したので、加賀掾は『曆』を中止して、近松の『凱陣八島』を以てこれに代へて其の勢ひを挽回したが、偶興行中失火したので、加賀掾は退いて京に歸つた。こゝに於て義太夫は近松に新作を乞ひ、近松も其の前途を壽ぎて、『出世景清』を作つて之に與へた。乃ちこれを二の替りとして出演

夫の出づるありて、好漢は好漢を知り、惺々は惺々を惜しむの緣を結んだのである。

竹本義太夫は通稱を五郎兵衞と云ひ、攝津東生郡天王寺村の人である。天性音曲を善くし、淨瑠璃を好んで、淸水理兵衞の門に遊びて、其の脇を勤め、京都四條の芝居に出演し、遂に宇治嘉太夫の知る所となりて其の一座に加はつた。『今昔操年代記』に當時の事を記して、「三年めの正月より天王寺五郎兵衞をワキにかゝへ、西行物語といふ淨瑠璃の二段目、藤澤入道夜盜の修羅を、五郎兵衞語られしが、もとより大音にて、甲乙(かんおつ)ともにそろひ、まないたに釘かすがひを打ちたる如く、何程の大入にても屆かぬといふ事なし。字どめ字頭の文字消えず、文のあやよく聞えければ、見物悅ぶ事限りなし。嘉太夫、五郎兵衞淨瑠璃には心置き、後に我ほこさきのかひになるべきは此の男と云はれしは、流石の嘉太夫と、後にぞ思ひ知られぬ。」とある。斯くて彼は淸水理太夫と號し、獨立して『日本王代記』『松浦五郎』など云へる淨瑠璃を語つたが、此の人大音聲なれども、優婉で老巧なる嘉太夫には敵せず、特に淸雅典麗で節廻し細かき語口を悅ぶ京都士女の歡迎する所とはならなかつたと見え、『今昔操年代記』に云ふ如く、「出たり引込んだり、半年つゞかぬ芝居、見るに氣のどくの天窗をかきぬ。」と云ふ體たらくであつた。

嘉太夫は、京都の興行界に於ける大立物竹屋庄兵衞と結託して其の地位を獲得したのであつた

曰、此の人作られける近代の上るり、詞花言葉にして、内典外典、軍書等に通達したる廣才のほど明けし、其の德惜しむべきは此の人と、はうび餘つて今こゝに云々。」と評してゐる。富永平兵衞が番附に狂言作者として署名してゐたので、憎まれたと云ふ話は、『耳塵集』にも見えてゐる時代であるから、近松も亦狂言作者として名を署したのを攻擊されたのである。然し、「内典外典軍書等に通達したる廣才のほど明けし。」と賞讃されたほどに既に高名であつたのである。殊に評判記では役者を評して作者に及ぼすのを例とするが、近松に對しては特に斯かる評を加へたのを見ても、當時近松が盛んに賣出してゐたのを知るに足るべく、又相當に多くの作を世に出してゐたことをも推察されるのである

作者となりて一生身を立てんとした彼の勇猛心は、此の間に於て、其の學殖を深くし、其の詞采を練り、心織筆耕して已まなかつたので、三十歲を越えた頃には次第に油が乘つて來たのである。和漢の書は固より、名僧知識に就いて佛典の研究をも敢てしたのであつた。淨嚴和尙との相識はいつの頃であるか明らかでないが、彼は佛書に目をさらし、佛教の知識を會得するにも努めたのであつた。必ずしも近松寺の門に入りて佛弟子となつたとするにも當るまい。彼の知識慾は儒道、歌書、物語、軍記のみならず、更に佛書にまで及んだのである。偶音曲界の天才竹本義太

貞享元年の作としては『甲子祭』『夕霧七年忌』『百夜小町』『以呂波物語』、同二年の作としては、『一心五戒魂』『賢女手習幷新暦』が傳へられ、此の他にもまた種々ある。然し近年の傾向としては、其の著作の數が次第に增し行くことである。云ひ換へると推定の範圍が擴大されるのであるが、やがては研究の結果、其の推定が又次第に減少されて、其の範圍が狹まるのではあるまいかと思はれる。偉才近松の研究、談容易ならんや。

近松門左衞門の聲名は、竹本義太夫と握手する頃に於て、既に嘖々として聞えてゐた。貞享四年板の評判記『野郎立役舞臺大鏡』に、「おかしたいものは、南京のあやつり、近松が役者附。」とありて、猶其の次に、「又ある人の曰、よい事がましう上るり本に、作者書くさへ、ほめられぬ事ぢやに、此の頃は狂言までに作者を書く、剩へ芝居の看板、辻々の札にも、作者近松と書きしるす、いかい自慢と見えたり、此の人歌書か、物語を作らば、外題を近松作者物語となん書き玉ふべきや。答に曰、御不審尤もには候へども、とかく身すぎが大事にて候、古ならば何とて、あさあさしく作者近松などと書き玉ふべきや、時ぎやうに及びたる故、芝居事で朽ち果つべき覺悟の上なり。然らばとてもの事に、人に知られたがよい筈ぢや。それ故おしだしも萬太夫座の道具直しにも出玉ひ、堺の夷島で榮宅とくんで、つれ〴〵の講釋もいたされけるなり。雙方和睦の評に

作者であつた彼は、又他方に於て狂言作者であつたので、此の點に於て彼は、歌舞伎と操との津梁であつた。

貞享三年、門左衛門が竹本義太夫と初めて提携して、義太夫のために『出世景清』を作つたまでは、播磨掾の爲に、將た加賀掾の爲に淨瑠璃を作り、又都萬太夫座の狂言作者として、幾多の脚本をものした。延寶六年、坂田藤十郎が伊左衛門に扮したる『夕霧名殘の正月』は、門左衛門の作の如く云ひ傳へらるゝが、まことは門左衛門の作でなささうである。此の狂言は大阪の荒木與次兵衛座で上演されたもので、都萬太夫座附の狂言作者たる彼が、當時大阪まで手を延ばしたとは思はれない。後年近松は藤十郎と意氣投合して、彼の爲に幾多の脚本を作つたから、猶遡つて推測したものでもあらうか。獨り此の狂言のみならず、加賀掾の正本や、狂言本やの中には近松作として推定されるものが近來多々あるやうであるが、果して其の推定が當を得てゐるか否やは疑はしい。既に淨瑠璃作者となり、狂言作者となつた彼であるから、此の頃にも幾多の述作があつたことは事實である。現に延寶六年の作としては、『助六心中蟬のぬけがら』『三社託宣由來』、同七年の作としては『牛若千人切』、同八年の作としては『赤染衛門榮花物語』、天和元年の作としては『つれ〴〵草』『東山殿子日遊』『戀塚物語』、同三年の作としては『龜谷物語』『世繼曾我』、

傳記と著作

近松門左衞門は姓を杉森、名を信盛、通稱を平馬と云ひ、巣林子、不移山人、散人不移子、平安堂等の號があり、作者名を近松門左衞門と稱した。京都に生まれて、京都に育つたと云ふのがどうも確からしい。承應二年を以て生まれた。堂上家に仕へたと云ふことではあるが、其の年限は決して長くはなかつたらう。彼が作家生活に第一歩を踏み入つたのは、延寶四年の事で、彼の二十四歳の時である。卽ち宇治嘉太夫の爲に同年五月、『源氏供養』を作り、山本角太夫の爲に同年十二月、『瀧口横笛』を作つたのである。嘉太夫は後の加賀掾で、角太夫は後の相模掾である。嘉太夫の語口については、『今昔操年代記』に、「播磨風を表とし、ふしくばりこまかに、よわ〳〵たよ〳〵美しく。」とあれば、播磨風に加味するに優婉淸麗を以てし、節細かく語り出したのである。角太夫も亦哀艶を以て其の特色としてゐたやうである。

これより後、門左衞門は、如賀掾のために屢筆を執つた。延寶五年には、都萬太夫座の爲に藤壺の怨靈が藤の花から大蛇に變ずる趣向を作つて、好評嘖々たるものがあつた。卽ち彼の脚本として最も古いものである。此の頃よりして彼は都萬太夫座の狂言作者となつた。一方には淨瑠璃

して置かねばなるまい。廣濟寺の近松の墓表に、其の法諡と相竝んで刻んである一珠院妙中日事信女とは、其の妻の法名であらうが、其の俗名は傳はつてゐない。其の子に梅信多門ありとのことであるが、これも亦確かでない。

自像畫讃に、「三槐九卿に咫尺して。」とあるのが、從一位正親町殿に仕へたとも云ひ、又阿野家の雜掌であつたと云ふ說も傳はつてゐるが、其のいづれが眞で、どのくらゐの地位を得てゐたかは更に知れてゐない。要するに、彼は其の著作以外に何等の明確なる傳記を殘してゐないのである。彼ほど有名な人であるのに、彼の傳記は今日なほ五里霧中に彷徨してゐる。偶語り傳へらるものは、云はば雲間の片鱗に過ぎない。なほ其の著作にしても、彼の作であるか否やに就いては、議論の餘地のあるものが少なからずある。

異說の多い近松の傳記中、最近に發表された、父の名が信義で、其の遠祖は江州に住し、後に淺井氏及び豐臣氏に仕へたる淀藩士の杉森氏の分家で、一たび越前家に仕へたが、後に浪人して京都に歿し、其の二男であつた信盛は、一條禪閤惠觀公に仕へたと云ふ說は、從來の諸說に比して、自像畫讃を說明するに足りる確實性を帶びてゐる。然しまだ／＼研究すべき點は多々あり、疑ふべき餘地は多く存してゐる。

は大阪谷町八丁目の法妙寺にある。法妙寺の過去帳には、父の法諡を智妙院道喜日歡信士・母の法諡を芳淨院妙閑日桂信女と云ひ、廣濟寺の過去帳には父の法諡がなくして、母の法諡を智法院貞松日喜信女と云つてある。これを確實なものとして考へて見ると、法妙寺の父の法諡に對しては、廣濟寺にあるのが、母の法諡であらう。法妙寺の母の法諡と稱するものは、正保二年四月十八日歿とあるに依りて見ても、近松末生の前であるから、これは他人(或は祖母)の法諡とおもはれる。父母の法諡はこれなりとするも、其の在世の俗名は明らかでない。

山岡元鄰の著にかゝる寛文十一年板の俳書『寶藏追加』(もと酒竹文庫藏、東京帝國大學國文學研究室現在)に杉森信盛の名で、「しら雲やはななき山の恥かくし。」と云ふ句が載つてゐる。猶此の他に杉森氏の信親、信義、信秀、喜里の四人の句も見えてゐるが、此等の人々と近松との關係は詳かでない。多分は其の一家の人達であらうと推定されるのみである。『攝津名所圖繪』には、近松の同胞について、「近松門左衛門の兄は相國寺の宗長老、弟は岡本一抱子と云ふ名醫なり、妹を錦江といふ、俳諧師にて、大阪に住す、兄弟みな世に名高し。」と云つてあるが、容易に信を措き難い。岡本一抱のことに關しては、近松の逸話をも傳へてゐるが、これにもまだ疑はしい個處が少なからずある。父母同胞については今日までの研究では詳かでないと云ふのを以て、穩當と

それより辭世さてもそののち數々に
殘す櫻のはなしにほはば

近松門左衞門杉森姓信盛
號平安堂巢林子
阿耨院穆矣日一具足居士

此の二つの者に就いて、若し何れを取るべきかと云ふと、松山氏藏の方が一體に調つてゐると思ふ。殊に辭世の如きは、「さるほどにさてもそののちに。」とある方が面白い。猶、「のこれとは。」の一首が添へてあるので、餘計に興味がある。これを近松の自像畫讃なりとして考へて見ると、「甲冑の家に生まれて。」と云ひ、「三槐九卿に咫尺しつかへて。」とあるが、桑門に入つたとも、緇衣となつたとも見えない。して見ると、唐津の近松寺に居たとか、近江の近松寺に居たとか云ふ說は殆んど成り立たないやうに思はれる。畢竟するに、其の著作中に佛理を說き佛語に明らかなところが多いから、近松の名と結びついて、此等の說が行はれたのではあるまいか。

近松の父は梠杜圭殿助廣品と云つたなどと、まことしやかに傳へてゐるものもあるが、甚だ當にならない。近松の墓は二つありて、其の一つは攝津國川邊郡久々智の廣濟寺にあり、他の一つ

もし辭世はと問ふ人あらば
それぞ辭世去ほどに扨もそののちに
殘る櫻が花しにほはば
享保九年中冬上旬
入寂名　阿耨院穆矣日一具足居士
不俟終焉豫自記春秋七十二歳　印印
のこれとはおもふもおろかうづみ火の
けぬまあだなるくち木かきして

今一つは曲亭馬琴が其の著『壬戌羈旅漫錄』中に、摸寫して置いたもので、大阪金屋橋熊野屋彦九郎の所藏とある。これを前者に比すると、其の文章も辭世も體裁も幾分づゝ違つてゐる。

甲冑の家に生まれて、武林をはなれ、三槐九卿に咫尺しつかへて寸爵なく、市中にさまよひて商賣しらず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢ならず、世のまがひもの、神釋儒道和歌有職弓馬鄙曲歌舞滑稽まで事しり顏に一生をいひちらし、今はの際のいふべき眞の一大事、半言もなき倒惑、至愚の甚しき、心に心の恥おもへば、あぶなき我が世經ぬらし

あらう。大阪は船舶の輻湊する所で、取分け西國者の集まる所であつた。近松の丹念なる、必ず此等の徒に接して、或は地理を聞き或は風俗を問ひ、其の方言を穿鑿したことであらう。東國人に接する機會の少なかつた彼は、おのづから東國に就いての知識を缺いてゐたかの如く察せられる。猶彼は旅行家でなかつた。恐らくは足近畿地方を出でなかつたのではあるまいか。井原西鶴が南船北馬したのとは異なつてゐる。近松に至りては、江戸にすら往かなかつたのである。

近松は武門に生まれ、桑門に入り、公家衆に仕へたと云はれてゐる。此のうち、武門に生まれ公家衆に仕へたと云ふのは其の自像の畫讃に依るのであるが、此の肖像畫も二種傳はりて、其のいづれが眞か、二つとも眞か、將た又其の或ものは否か、確かでないのである。其の一は卷頭に掲げた松山氏藏の畫幅で、

代々甲冑の家に生まれながら、武林を離れ、三槐九卿に仕へ咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂て商賣しらず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢にあらず、ものしりに似て何もしらず、世のまがひもの、からの大和の教ある道々、伎能雜藝滑稽の類までしらぬ事なげに、口にまかせ筆にはしらせ、一生を囀りちらし、今はの際にいふべくおもふべき眞の一大事は、一字半言もなき倒惑、こゝろに心の恥をおほひて、七十あまりの光陰、おもへばおぼつかなき我が世經畢。

を名乘る者は、元祿の初から十年頃までに近松梅之助、近松勘之介、近松京之介などがある。近松門左衞門と云へる名も、近松門流の左衞門語り(祭文語り)と云ふやうな意味で附けた一種の雅號であらう。然し近松も役者としては先輩を凌ぐ事難く、都萬太夫の部屬下でも、ほんの祭文語りより出來ないので、役者としても、將た狂言作者としても、餘りに成功されぬと思ひ諦めて、此に別方面を開拓せんと、淨瑠璃に向つて修練を積んだのではあるまいかとのことであつた。

これは一說として確かに傾聽すべきものである。然し臆測すれば、都萬太夫座附の役者で近松氏を名乘つたのは、或は近江の近松寺と何等か緣故があつたかも知れぬ。門左衞門と近松寺と緣故はなくても、氏名と近松寺との間には關係のあつたのではあるまいか。間接の關係が後世では直接の關係あるかの如くに囃し立てられるに至つたのかも知れない。近松寺は蟬丸宮の別當であつて、蟬丸は琵琶に緣故が深い故、琵琶法師等はこれを尊崇し、延いて音曲家の祖と崇められ、說經節の口宣の如きは其の別當なる近松寺から出たのである。都萬太夫座の役者が近松を名乘つた其の淵源は近松寺と緣故があつたらうと思はれる。

近松門左衞門の著作中、西國に關する地理や其の方言が正確に記されてゐるので、其の生國若しくは少年時代を西國と指定するものが多いが、單に此の事實だけでしかく斷定するのは早計で

のと、長門大津郡深川村の人だと云ふ二說がある。同じ長門產の說にしても深川以外に萩の出生だと云ふ說もあるし、鄰國周防の產と說くものもあるが、深川說の方がやゝ合理的である。然し近江說も長門說も決して確證のあるわけではなく、共に傳說に止まるのである。然し此等の說よりも、むしろ京都生まれと云ふのが、どうやら眞實らしい。彼が平安堂と名乘つたのも、其の消息を漏らすものではあるまいか。彼の作なる『國性爺後日合戰』中の道行に、「柳が浦のいと長く、何處(いづく)に露をくりためて、所も萩の唐錦、故鄉の空に飜す袂の色。」とあるに依りて、萩、若しくは其の附近を故鄉ではあるまいかと推測するのは、附會の說である。

彼は其の少年時代を肥前唐津の近松寺に過したと云ふ說と、江州近松寺にゐたと云ふ二說があるが、此等は何れも近松門左衞門と云ふ雅號から出た臆測說と思はれる。果して近松寺なるものと雅號とが緣故ありやと反問せねばならぬ。此の事に關しては、久しく疑問を抱いてゐたから、近松研究の權威者なる樋口慶千代氏に尋ねた所、氏は實に近松寺關係の否定論者であつた。氏の說に依れば、近松が少時狂言作者であり、舞臺へも出たことは、元祿時代に近松の作と推定される狂言の多きと、評判記に、「萬太夫の道具直しにも出でられし。」「若き時は都萬太夫座の拍子木も打ち給ひ。」とあるにて推察される。近松は都萬太夫座に屬してゐたが、此の座の役者に近松氏

南に住所を構へ、浪花の腹ふくれ衆を集め、碁、將碁、茶の湯、連俳の座敷なれども、あるじ播磨風を語り出せしより、皆音曲稽古場となれり。」とあるは、大阪町人が泰平の春を樂んだを見るに足りる。播磨掾について、宇治加賀掾があつた。「幼少より音曲に妙備はり、第一謠をよく鍛錬し、鳴物一通り疏からず。」(『今昔操年代記』)遂に一流を語り出した。之と殆んど時を同じうして出で、上方の淨瑠璃を集大成したものは、實に竹本義太夫であつた。義太夫の天才はさる事ながら、作者近松門左衞門と相提携するに至りて、彼の妙技は光輝を放つたのである。

門左衞門は淨瑠璃作家として古今獨歩である。彼の前に彼なく、彼の後に彼はない。我が邦が出した文學者として、彼ほどの偉才は殆んど他に匹儔稀なりと云ふも、誰か抗言する者があらうか。輓近に至りて、彼の研究は相當に微細に入つたが、餘地は猶多々に存するのである。往年丸善書店にて『近松著作全書』を出し、其の後、武藏屋にて一篇づゝの出板あり、近年に至りては、數種の近松全集を出し、諸家の研鑽は日に進んだものの、近松には猶未知の境地が少なからずある。第一に彼の傳記は依然として茫漠の裏に殘つてゐる。

先づ彼の生地はいづくであるか。これに就いては、幾多の異説がありて、今に定まる所を知らない。此のうち最も有力なものは、近江の國大津に近き高觀音と稱する近松寺に生まれたと云ふ

河原にして、鎌田の政清が事を語りて、人形を操り、其の後がうの姫、阿彌陀の胸割など云ふことを語りける。次に河内左内といふもの出でたり、女にも南無右衞門、左門、よしたか、などとて、淨瑠璃を語りけるを、歌舞伎と一同に、女はとゞめられぬ。近き頃に、江戸より宮内といふ者上りて左内とせり合ひ、いろ〱珍らしき操を致しける。程なく宮内は死せり。左内もなくなり、今は其の子ども打ちつゞきて、操をいたし、めん〱受領して、がだらつく中に、喜太夫といふ者、上總の掾になりて、太平記を語る。其の曲節、平家とも、舞とも、謠とも知れぬ島者なり。」と。西宮の夷かきは手使ひ人形師であつたが、支那舶載の絲操も同時に行はれたから、一般にこれを操と稱した。然し絲操の方は衰へて、手使ひの方が進歩して行はれることとなつた。

淨瑠璃の一派は東下したが、一派は上方に殘りて發達した。卽ち町人全盛の大阪を中心として四代將軍家綱の頃から頓に刮目すべき時代に入つたのである。卽ち井上播磨掾出づるに及んで淨瑠璃界は目覺しきものとなつた。『今昔操年代記』に評して、「播磨太夫少年の頃より音曲を好み、フシ、チクリ、三重、チン、フシチクリ、ハル、ギン、此の類に心を配り、就中愁ひ、修羅を第一にかたられしかば、云々。」とありて、天性の高聲なる上に、節細かに愁嘆、修羅を語るに長じてるたのである。播磨の門人に淸水理兵衞があつた。おなじ『今昔操年代記』に、「此の安居天神の

ある。柴屋軒宗長の『宗長日記』に、「小座頭あるに、淨瑠璃を唄はせ興じて一杯に及ぶ。」とあるを見ても、足利季世頃は、淨瑠璃は盲法師の歌ふものであつた。然るに門閥階級の打破せられて、平民級が活躍を初めた時代であるから、久しからぬうちに盲法師等專門家の手を離れて、民間に流通したのである。

平家が琵琶を彈ずると異なりて、淨瑠璃節では三味線を用ゐた。三味線は琉球傳來の蛇皮線を改造したものである。淨瑠璃が民間に流通すると共に、これに操人形を合はせて興行する事を初めたのである。人形使ひの事は、古く大江匡房の『傀儡子記』に見えて、「傀儡子は定居なく、當家なく、穹廬氈帳、水草を逐ひて以て移徙し、頗る北狄の俗に類す。」と云ひ、「夜は則ち百神を祭り鼓舞喧嘩、もつて福助を祈り、東國にては美濃、參河、遠州等の黨を豪貴となし、山陽にては播州、山陰にては馬州土黨これに次ぎ、西海の黨を下となす。」とあるが如く、もと一定の住所なく諸國を巡遊して生計を營んだので、朝鮮より渡來したものらしい。後世攝津の西宮に多く住し、惠比壽神像に形つた人形を使ひて、諸方を歴遊してゐたのである。此に著目した興行師は、淨瑠璃節と人形との握手を計つた。淺井了意の作と云はれる『東海道名所記』に云ふ、「また淨瑠璃は、其の頃、京の次郎兵衛とかや云ふ者、後に淡路丞と受領せし、西の宮の夷かきをかたらひ、四條

なるべし。」(『堂島舊記』)とあるのが、當時の大阪であつた。幕府にても地子銀を除いて之が恢復をはかり、寛永二年には、北組、南組、天滿組、三鄕の人數は二十七萬九千六百十人となり、寛文九年には、四十萬七千三百四人となつた。

元和五年に堺の町人が二百五十五石積の商船に積荷して、江戸に輸送してから、關西と關東との間に通運は開かれ、大阪は之に倣つて、江戸積の問屋を設けて、廻船を送つた。即ち云ふところの菱垣船である。一方には海運業が盛んになると共に、他方には諸大名の囘漕米を糶賣する市場が、初めは淀屋橋附近に設けられ、後には堂島に移り、延米賣買をも始めて、大阪の商業は俄然として、隆昌に趣き、町人の富裕なるものは數多くなつた。町人文化は從つて振興せねばならなかつた。

京都四條河原に始めて興行せられた歌舞伎と操（あやつり）とは、江戸にも大阪にも流行して、民衆の歡樂に供せられた。操は淨瑠璃節と相待ちて、民衆の耳目を喜ばせたのである。淨瑠璃の名稱は、淨瑠璃物語に出たのであらう。よし淨瑠璃物語は淨瑠璃節の最も古き唯一の語物ではなかつたにせよ、最も古きものの一には相違なかつたと思はれる。其の段數に依りて、世に之を十二段草子と云ふのである。淨瑠璃節は平家から起つて、新しい創意が加へられた、極めて民衆的な音曲で

解題

疑問のかずく

文學博士　笹　川　種　郎

泉州堺に於て町人全盛の曙光を開き、金權萬能の力を發揮し、町人文化の端緒を創めたが、やがて其の商權は大阪に移ることとなつた。政權に於ては豐臣氏の勢力が長からぬために失敗したが、久しからぬうちに財界に於て次第に其の地歩を確保することとなつた。

夏冬二役後に於ける大阪は暫く荒廢の狀であつた。天滿、船場、上町の離散した町人をひき戻し、荒地損じ家を引渡して建築させたが、表通りは僅かに藁葺の家屋で、伏見から二百餘町が引移りて、漸くこれを補足したほどの、慘めな狀況であつたのである。「御陣鎭まり、立戻り候町人共、誠に手と身とに相成候事故、建家藁葺竹垣、裏は畑にて作り物致し、水道石垣もこれなく、井路同然、今の天下茶屋村邊の姿なり、家買人これなく、銘々持ちあぐみ、町人に金銀甚だ拂底

目次終

近代日本文學大系　第六卷目次

享保九年 中冬上旬

法名 阿彌陀院

不佞欽書朝孫自記 春秋七十二歳

近松門左衛門集

上